九州横断自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査報告書(14)

都谷遺跡

1991年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書　第104集
九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書　(14)

都谷遺跡（みやこだに）

都谷遺跡（みやこだに）
宮西遺跡（みやにし）
山浦西北方遺跡（やまうらせいほくほう）
山浦新田遺跡（やまうらしんでん）
荻野遺跡（おぎの）
日岸田遺跡（ひがんだ）
東田遺跡（ひがしだ）
本川原遺跡（ほんごうら）

１９９１年3月

佐賀県教育委員会

序

この報告書は佐賀県教育委員会が日本道路公団の委託により、昭和58・59・63年度に実施した九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告であります。

今回の報告は、鳥栖市所在の都谷遺跡・宮西遺跡・山浦西北方遺跡・山浦新田遺跡・荻野遺跡・日岸田遺跡・東田遺跡・本川原遺跡に関するものであります。これらは古墳時代後期の群集墳をはじめとし、弥生・古代・中世と各時代にわたる集落跡・墓跡などその内容も豊富です。

発掘調査の記録としては満足ゆくものではありませんが、本報告書を通して埋蔵文化財に対するなお一層のご理解をいただくとともに、今後の学術文化向上に少しでも役立てば幸いと思います。

発刊にあたり、長期にわたる多難な発掘調査を通して多大な御協力をいただいた地元の方々並びに日本道路公団に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成３年３月30日

佐賀県教育委員会

教育長　志岐常文

例　　言

1．本書は九州横断自動車道建設に伴い、昭和58・59年度並びに昭和63年度に実施した鳥栖市所在の都谷遺跡・宮西遺跡・山浦西北方遺跡・山浦新田遺跡・荻野遺跡・日岸田遺跡・東田遺跡・本川原遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は日本道路公団の委託を受け、佐賀県教育委員会が実施した。

3．古墳出土の耳環および金属器については佐賀県工業試験場機械金属部臼井一郎氏に成分分析をお願いし、玉稿を賜った。

3．本書の執筆分担は次のとおりである。

第1章　調査の概要　　小松　譲

第2章　地理的・歴史的環境　　久山高史

第3章　遺跡各説

都谷遺跡	小松　譲	宮西遺跡	小松　譲
山浦西北方遺跡	小松　譲	山浦新田遺跡	小松　譲
荻野遺跡	陣内康光・宮武正登	日岸田遺跡	田平徳栄
東田遺跡	高瀬哲郎	本川原遺跡	家田淳一・高瀬哲郎

第4章　1．都谷遺跡における古墳群形成過程について　小松　譲

2．調査区外の古墳群について　小松　譲

3．石室形態について　小松　譲

付　論　鳥栖市都谷遺跡出土の耳環成分分析について　臼井一郎

本川原遺跡出土試料分析結果　臼井一郎

本書の編集は小松譲が担当し、百崎正子が協力した。

4．図面・写真等の記録類および出土遺物の整理分担は次のとおりである。

遺物復元　瀬山由規子・宮崎明子・井原美江・岩下洋子・石井羊子・馬場洋子・西　孝子

遺物実測　徳永貞紹・神田浩子・岩井祥子・松尾京子・馬場美奈子・兵動美紀
吉田雅子・末吉由紀子

製　　図　吉田雅子・末吉由紀子・幸尾由紀子・谷沢裕美・村里育子・兵動律子
江副朋子・野田美恵子・嬉野みつ代

写真撮影　久山高史・山田　親　　現像焼付　古賀栄子

5．遺構・遺物図面・写真等の調査記録類並びに出土遺物は佐賀県教育委員会が保管する。

6．発掘調査にあたっては全般にわたり地元の方々からなにかと御協力・御便宜を得た。また、本書の作成にあたっては奈良大学教授水野正好氏・識者各位・鳥栖市教育委員会・同僚ほかから資料提供や貴重な御教示をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。

凡　　例

1．遺跡の略号は次のとおりである。

・都谷遺跡 MKD　・宮西遺跡 MYN　・山浦西北方遺跡 YUH　・山浦新田遺跡 YUS

・荻野遺跡 OGN　・日岸田遺跡 HIG　・東田遺跡 HGA　・本川原遺跡 HGR

2．遺構の種別に応じた分類記号は既刊の九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書に従い次のとおり標記する。

ＳＢ：竪穴住居跡・掘立柱建物跡　ＳＫ：土壙　ＳＤ：溝　ＳＪ：甕棺墓　ＳＴ：古墳

ＳＣ：石棺墓・石蓋土壙墓　ＳＰ：土壙墓・木棺墓　ＳＥ：井戸跡　ＳＸ：不明遺構

3．各遺跡の遺構番号は発掘調査時の番号をそのまま用いた。

4．本報告書中の遺物図番号は各遺跡ごとに、土器や石器等の種別に関係なく一連番号とし、また図版の遺物番号と共通する。

5．本報告書に登載した遺物実測図は実測原図、写真ネガの検索および現物との照合に便を期すため遺物実測番号（佐賀県教育委員会）を表あるいは図中に付記した。

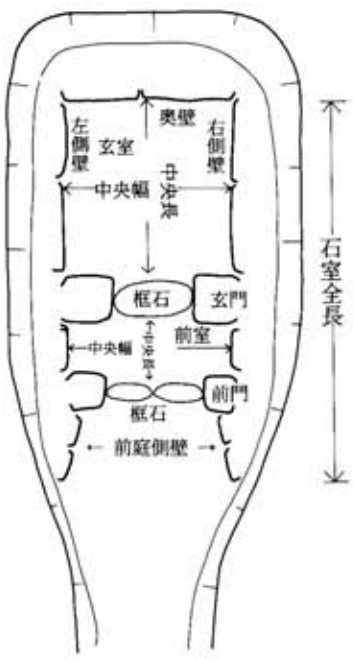
6．遺構図の中で、出土状況が明らかな遺物については必要に応じて遺物図番号を付記した。

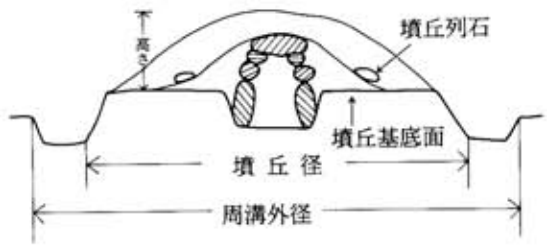
7．遺構図に用いた方位は都谷遺跡、宮西遺跡、山浦西北方遺跡、山浦新田遺跡は磁北で、荻野遺跡、日岸田遺跡、東田遺跡、本川原遺跡は真北（座標北）である。

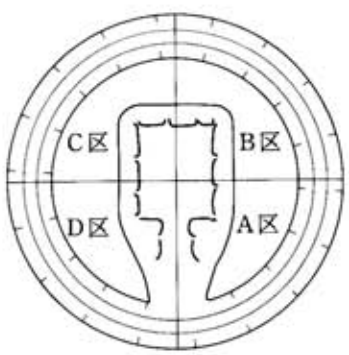
8．遺構の計測方法、その他。

竪穴住居・土壙・土壙墓などの規模は検出面で、原則として縦横それぞれ中央で測る。

9．古墳の各部名称と計測法については、次のとおりである。







目　　次

第１章　調査の概要 …… 1
１．調査の経過 …… 2
２．調査組織 …… 8

第２章　地理的・歴史的環境 …… 9

第３章　遺跡各説 …… 19

都谷遺跡

Ⅰ．遺跡の概要 …… 22
Ⅱ．古墳時代の遺構と遺物 …… 31
〈A地区の調査〉 …… 31
１．ＳＴ001古墳 …… 31
〈B地区の調査〉 …… 37
１．ＳＴ001古墳 …… 38
２．ＳＴ002古墳 …… 51
３．ＳＴ003古墳 …… 65
４．ＳＴ004古墳 …… 68
５．ＳＴ005古墳 …… 84
６．ＳＴ006古墳 …… 85
７．ＳＴ007古墳 …… 87
８．ＳＴ008古墳 …… 93
９．ＳＸ009配石 …… 107
10．ＳＴ010古墳 …… 108
11．ＳＴ011古墳 …… 112
12．ＳＴ012古墳 …… 118
13．ＳＴ013古墳 …… 125
14．ＳＴ014古墳 …… 128
15．ＳＴ015古墳 …… 141
16．ＳＴ016古墳 …… 154
17．ＳＴ017古墳 …… 159

18．ＳＴ018古墳 …… 175
19．ＳＴ019古墳 …… 177
〈Ｃ地区の調査〉 …… 179
1．ＳＴ001古墳 …… 180
2．ＳＴ002古墳 …… 187
3．ＳＫ003土壙 …… 191
〈Ｄ地区の調査〉 …… 193
1．ＳＴ001古墳 …… 195
2．ＳＫ002土壙 …… 200
Ⅲ．小結 …… 213

宮西遺跡

Ⅰ．遺跡の概要 …… 220
Ⅱ．古墳時代の遺構と遺物 …… 222
1．ＳＴ01古墳 …… 222
2．ＳＴ02古墳 …… 233
Ⅲ．歴史時代の遺構と遺物 …… 248
1．ＳＸ04火葬墓 …… 248
2．その他の土器 …… 249
Ⅳ．小結 …… 249

山浦西北方遺跡

Ⅰ．遺跡の概要 …… 256
Ⅱ．縄文時代の遺構と遺物 …… 258
Ⅲ．古墳時代の遺構と遺物 …… 259
1．ＳＴ01古墳 …… 259
2．ＳＴ02古墳 …… 264
3．ＳＸ03列石、ＳＤ04溝 …… 265
Ⅳ．小結 …… 268

山浦新田遺跡

Ⅰ．遺跡の概要 …… 272
Ⅱ．古墳時代の遺構と遺物 …… 274

1．ＳＴ01古墳 …… 274
III．歴史時代の遺構と遺物 …… 276
1．ＳＸ02集石土壙 …… 277
2．ＳＰ03土壙墓 …… 277
3．その他の土器 …… 278
IV．小結 …… 279

荻野遺跡

Ⅰ．遺跡の概要 …… 282
1．遺跡の立地 …… 282
2．各時代の遺構と遺物 …… 283
II．弥生時代の遺構と遺物 …… 286
1．住居跡 …… 286
2．甕棺墓 …… 289
3．遺構外の出土遺物 …… 293
III．古墳及び飛鳥・奈良時代の遺構と遺物 …… 294
1．住居跡 …… 294
2．古墳 …… 300
3．石棺墓 …… 304
4．土壙墓 …… 304
5．土壙 …… 308
6．溝 …… 310
7．不明遺構 …… 312
8．遺構外の出土遺物 …… 315
IV．時期不明の遺構 …… 315
V．小結 …… 315

日岸田遺跡

Ⅰ．遺跡の概要 …… 328
II．遺構 …… 335
1．弥生時代 …… 335
(1)　土壙 …… 335
(2)　石棺墓・甕棺墓 …… 336

2．古墳時代前期 …… 340
(1) 方形周溝墓 …… 340
(2) 溝 …… 342
3．古墳時代末期および奈良・平安時代 …… 342
(1) 竪穴住居跡・掘立柱建物跡 …… 342
(2) 土壙 …… 351
(3) その他の遺構 …… 356
III．遺物 …… 357
1．縄文時代 …… 357
2．弥生時代 …… 357
(1) 甕棺墓 …… 357
3．古墳時代前期 …… 361
(1) 土師器 …… 361
4．古墳時代末期および奈良・平安時代 …… 368
(1) 土師器・須恵器 …… 368
(2) 鉄器 …… 377
5．中世 …… 377
(1) 土器類 …… 377

東田遺跡

I．遺跡の概要 …… 382
II．遺構 …… 385
1．弥生時代 …… 385
(1) 甕棺墓 …… 385
2．古墳時代 …… 387
(1) 古墳 …… 387
(2) 溝跡 …… 389
III．遺物 …… 390
1．弥生土器 …… 390
2．土師器 …… 391
3．須恵器 …… 392
4．土師質土器 …… 395
IV．小結 …… 395

本川原遺跡

Ⅰ．遺跡の概要 …… 398
1．過去の調査 …… 398
2．今回の調査 …… 400
3．調査区の概要 …… 401
Ⅱ．遺構 …… 406
1．竪穴住居跡 …… 406
2．掘立柱建物跡 …… 416
3．埋置土器遺構 …… 425
4．土壙 …… 425
5．不明遺構 …… 429
Ⅲ．遺物 …… 431
1．竪穴住居跡出土遺物 …… 431
2．掘立柱建物跡出土遺物 …… 439
3．埋置土器遺構出土遺物 …… 440
4．土壙出土遺物 …… 441
5．溝跡出土遺物 …… 443
6．不明遺構出土遺物 …… 443
7．小穴出土遺物 …… 446
8．包含層出土および表採遺物 …… 448
Ⅳ．小結 …… 457

第4章　各　論

1．都谷遺跡における古墳群形成過程について …… 464
2．調査区外の古墳群について …… 472
3．石室形態について …… 473
〈付論〉　鳥栖市都谷遺跡出土の耳環成分分析について …… 479
本川原遺跡出土試料分析結果 …… 484

挿 図 目 次

調査の概要	Fig. 1	鳥栖地区調査区位置図	4
地理的・歴史的環境	Fig. 2	鳥栖市位置図	10
	〃 3	周辺地形図	11
	〃 4	鳥栖市域遺跡分布図	13
都谷遺跡	Fig. 5	周辺地形図	24
	〃 6	調査区位置図	25
	〃 7	杯蓋・身分類図	27
	〃 8	鉄鏃分類、名称図	29
	〃 9	ＳＴ001古墳墳丘	32
	〃 10	ＳＴ001古墳石室	33
	〃 11	ＳＴ001古墳出土須恵器	34
	〃 12	ＳＴ001古墳出土鉄鏃	35
	〃 13	ＳＴ001古墳出土鉄器・装身具	36
	〃 14	ＳＴ001・003～006古墳墳丘	37
	〃 15	ＳＴ001古墳石室閉塞状況	38
	〃 16	Ｂ地区調査前地形測量図	39
	〃 17	Ｂ地区調査後地形測量図	41
	〃 18	ＳＴ001古墳天井石	43
	〃 19	ＳＴ001古墳墳丘土層図	44
	〃 20	ＳＴ001古墳石室	45
	〃 21	ＳＴ001古墳出土須恵器	49
	〃 22	ＳＴ001古墳出土土器	50
	〃 23	ＳＴ001古墳出土鉄器・装身具	51
	〃 24	ＳＴ002古墳墳丘	52
	〃 25	ＳＴ002古墳墳丘土層図	53
	〃 26	ＳＴ002古墳天井石	54
	〃 27	ＳＴ002古墳石室	55
	〃 28	ＳＴ002古墳前庭部遺物出土状況	56
	〃 29	ＳＴ002古墳墳丘列石	57
	〃 30	ＳＴ002古墳出土須恵器１	58
	〃 31	ＳＴ002古墳出土須恵器２	59
	〃 32	ＳＴ002古墳出土鉄器	60
	〃 33	ＳＴ003古墳石室	66
	〃 34	ＳＴ003古墳出土土器	67
	〃 35	ＳＴ003古墳出土鉄器	67

都　谷　遺　跡　Fig.36　ＳＴ004古墳羨道部遺物出土状況 …… 70
〃 37　ＳＴ004古墳石室 …… 71
〃 38　ＳＴ004古墳出土須恵器１ …… 73
〃 39　ＳＴ004古墳出土須恵器２ …… 74
〃 40　ＳＴ004古墳出土須恵器３ …… 75
〃 41　ＳＴ004古墳出土須恵器４ …… 76
〃 42　ＳＴ004古墳出土土器 …… 77
〃 43　ＳＴ004古墳出土鉄器 …… 78
〃 44　ＳＴ004古墳出土馬具１ …… 79
〃 45　ＳＴ004古墳出土馬具２ …… 80
〃 46　ＳＴ004古墳出土装身具 …… 81
〃 47　ＳＴ005古墳石室 …… 84
〃 48　ＳＴ006古墳石室 …… 85
〃 49　ＳＴ006古墳出土土師器 …… 86
〃 50　ＳＴ007・008古墳墳丘 …… 86
〃 51　ＳＴ007古墳石室 …… 88
〃 52　ＳＴ007古墳墳丘土層図 …… 89
〃 53　ＳＴ007古墳出土土器 …… 90
〃 54　ＳＴ007古墳出土鉄器 …… 91
〃 55　ＳＴ007古墳出土装身具 …… 92
〃 56　ＳＴ008古墳前庭部遺物出土状況 …… 93
〃 57　ＳＴ008古墳石室閉塞状況 …… 94
〃 58　ＳＴ008古墳石室 …… 95
〃 59　ＳＴ008古墳出土須恵器１ …… 97
〃 60　ＳＴ008古墳出土須恵器２ …… 98
〃 61　ＳＴ008古墳出土須恵器３ …… 99
〃 62　ＳＴ008古墳出土土師器 …… 100
〃 63　ＳＴ008古墳出土鉄器 …… 101
〃 64　ＳＴ008古墳出土鉄器・装身具 …… 102
〃 65　ＳＸ009・ＳＴ010・011・012古墳墳丘 …… 106
〃 66　ＳＸ009配石出土須恵器 …… 107
〃 67　ＳＴ010古墳墳丘土層図 …… 108
〃 68　ＳＴ010古墳石室閉塞状況 …… 109
〃 69　ＳＴ010古墳出土須恵器 …… 109
〃 70　ＳＴ010古墳石室 …… 110
〃 71　ＳＴ010古墳墳丘列石 …… 111
〃 72　ＳＴ011古墳石室閉塞状況 …… 113
〃 73　ＳＴ011古墳石室 …… 114
〃 74　ＳＴ011古墳出土須恵器 …… 115
〃 75　ＳＴ011古墳出土土器 …… 116

都　谷　遺　跡　Fig.76　ＳＴ011古墳出土石製品 …… 116
〃 77　ＳＴ012古墳石室閉塞状況 …… 119
〃 78　ＳＴ012古墳石室 …… 120
〃 79　ＳＴ012古墳墳丘土層図 …… 121
〃 80　ＳＴ012古墳出土須恵器 …… 122
〃 81　ＳＴ012古墳出土装身具 …… 122
〃 82　ＳＴ012古墳出土鉄器 …… 123
〃 83　ＳＴ013～019古墳墳丘図 …… 126
〃 84　ＳＴ013古墳石室 …… 127
〃 85　ＳＴ013古墳出土須恵器 …… 128
〃 86　ＳＴ014古墳墳丘盛土内遺物出土状況 …… 129
〃 87　ＳＴ014古墳墳丘土層図 …… 129
〃 88　ＳＴ014古墳石室内遺物出土状況 …… 130
〃 89　ＳＴ014古墳墳丘列石 …… 131
〃 90　ＳＴ014古墳石室 …… 132
〃 91　ＳＴ014古墳出土須恵器１ …… 133
〃 92　ＳＴ014古墳出土須恵器２ …… 134
〃 93　ＳＴ014古墳出土土器 …… 135
〃 94　ＳＴ014古墳出土鉄器 …… 136
〃 95　ＳＴ014古墳出土装身具類 …… 137
〃 96　ＳＴ015古墳墳丘列石 …… 141
〃 97　ＳＴ015古墳石室閉塞状況 …… 142
〃 98　ＳＴ015古墳石室 …… 143
〃 99　ＳＴ015古墳墳丘土層図 …… 144
〃 100　ＳＴ015古墳出土須恵器１ …… 145
〃 101　ＳＴ015古墳出土須恵器２ …… 146
〃 102　ＳＴ015古墳出土須恵器３ …… 147
〃 103　ＳＴ015古墳出土土器 …… 148
〃 104　ＳＴ015古墳出土鉄器・装身具 …… 149
〃 105　ＳＴ016古墳墳丘土層図 …… 154
〃 106　ＳＴ016古墳石室内遺物出土状況 …… 155
〃 107　ＳＴ016古墳石室閉塞状況 …… 155
〃 108　ＳＴ016古墳石室 …… 156
〃 109　ＳＴ016古墳出土須恵器 …… 157
〃 110　ＳＴ016古墳出土鉄器・装身具 …… 158
〃 111　ＳＴ017古墳墳丘盛土内遺物出土状況 …… 159
〃 112　ＳＴ017古墳石室閉塞状況 …… 160
〃 113　ＳＴ017古墳墳丘土層図 …… 160
〃 114　ＳＴ017古墳石室 …… 161
〃 115　ＳＴ017古墳石室内遺物出土状況 …… 162

都　谷　遺　跡　Fig.116　ＳＴ017古墳出土須恵器１ …… 163
〃　117　ＳＴ017古墳出土須恵器２ …… 164
〃　118　ＳＴ017古墳出土須恵器３ …… 165
〃　119　ＳＴ017古墳出土須恵器４ …… 166
〃　120　ＳＴ017古墳出土須恵器５ …… 167
〃　121　ＳＴ017古墳出土土器 …… 168
〃　122　ＳＴ017古墳出土鉄器 …… 169
〃　123　ＳＴ017古墳出土装身具 …… 169
〃　124　ＳＴ018古墳石室 …… 176
〃　125　ＳＴ018古墳出土土師器・鉄器 …… 177
〃　126　ＳＴ019古墳石室 …… 178
〃　127　ＳＴ019古墳出土土器 …… 178
〃　128　Ｃ地区遺構配置図 …… 179
〃　129　ＳＴ001古墳石室 …… 181
〃　130　ＳＴ001古墳出土須恵器 …… 182
〃　131　ＳＴ001古墳出土土器 …… 183
〃　132　ＳＴ001古墳出土鉄器・装身具 …… 184
〃　133　ＳＴ002古墳石室 …… 187
〃　134　ＳＴ002古墳出土土器 …… 188
〃　135　ＳＴ002古墳出土鉄器 …… 189
〃　136　ＳＴ002古墳出土装身具 …… 190
〃　137　ＳＫ003土壙 …… 192
〃　138　Ｄ地区調査前地形測量図 …… 193
〃　139　Ｄ地区調査後地形測量図 …… 194
〃　140　ＳＴ001古墳墳丘土層図 …… 196
〃　141　ＳＴ001古墳石室 …… 197
〃　142　ＳＴ001古墳出土須恵器 …… 198
〃　143　ＳＴ001古墳出土鉄器・装身具 …… 199
〃　144　ＳＫ002土壙 …… 201
〃　145　ＳＫ002土壙出土土器 …… 201
〃　146　ヘラ記号一覧１ …… 202
〃　147　ヘラ記号一覧２ …… 203
〃　148　地山整形・周溝類型 …… 213
〃　149　玄室法量図 …… 215
〃　150　玄室プラン分類図１ …… 216
〃　151　玄室プラン分類図２ …… 217
宮　西　遺　跡　Fig.152　遺構配置図 …… 221
〃　153　ＳＴ01古墳墳丘 …… 222
〃　154　ＳＴ01古墳羨道部西側遺物出土状況 …… 223
〃　155　ＳＴ01古墳石室閉塞状況 …… 224

宮　西　遺　跡　Fig.156　ＳＴ01古墳石室平面 …… 224
〃 157　ＳＴ01古墳石室 …… 225
〃 158　ＳＴ01古墳墳丘土層図 …… 226
〃 159　ＳＴ01古墳出土須恵器１ …… 228
〃 160　ＳＴ01古墳出土須恵器、ヘラ記号 …… 229
〃 161　ＳＴ01古墳出土土師器 …… 230
〃 162　ＳＴ01古墳出土鉄器 …… 230
〃 163　ＳＴ01古墳出土馬具１ …… 231
〃 164　ＳＴ01古墳出土馬具２ …… 232
〃 165　ＳＴ02古墳墳丘 …… 233
〃 166　ＳＴ02古墳石室内遺物出土状況 …… 234
〃 167　ＳＴ02古墳前庭部遺物出土状況 …… 234
〃 168　ＳＴ02古墳墳丘土層図 …… 235
〃 169　ＳＴ02古墳石室平面 …… 236
〃 170　ＳＴ02古墳石室 …… 237
〃 171　ＳＴ02古墳出土土器 …… 239
〃 172　ＳＴ02古墳前室左右壁出土須恵器 …… 241
〃 173　ＳＴ02古墳前室左壁出土須恵器 …… 242
〃 174　ＳＴ02古墳出土須恵器ヘラ記号 …… 243
〃 175　ＳＴ02古墳出土鉄鏃 …… 244
〃 176　ＳＴ02古墳出土鉄器 …… 245
〃 177　ＳＴ02古墳出土馬具 …… 246
〃 178　ＳＴ02古墳出土胡籙金具 …… 247
〃 179　ＳＴ02古墳出土装身具類 …… 247
〃 180　ＳＸ04火葬墓 …… 248
〃 181　ＳＸ04火葬墓出土土器・その他の土器 …… 249
山浦西北方遺跡　Fig.182　周辺地形図 …… 256
〃 183　遺構配置図 …… 257
〃 184　縄文土器 …… 258
〃 185　ＳＴ01古墳前庭列石 …… 259
〃 186　ＳＴ01古墳墳丘土層図 …… 261
〃 187　ＳＴ01古墳石室 …… 262
〃 188　ＳＴ01古墳出土土器・装身具 …… 263
〃 189　ＳＴ02古墳墓道、ＳＸ03列石、ＳＤ04溝 …… 264
〃 190　ＳＴ02古墳墓道出土須恵器 …… 266
〃 191　ＳＴ02古墳墓道、ＳＤ04溝出土土器・装身具 …… 267
〃 192　ヘラ記号一覧 …… 267
山浦新田遺跡　Fig.193　周辺地形図 …… 272
〃 194　遺構配置図 …… 273
〃 195　ＳＴ01古墳出土土器 …… 274

山浦新田遺跡 Fig.196 ＳＴ01古墳石室 …… 275
〃 197 ＳＸ02集石土壙 …… 276
〃 198 ＳＰ03土壙墓 …… 277
〃 199 歴史時代の土器 …… 278
荻野遺跡 Fig.200 周辺地形図 …… 282
〃 201 Ａ－Ⅰ区遺構配置図 …… 283
〃 202 Ａ－Ⅱ区遺構配置図 …… 284
〃 203 Ｂ－Ⅰ・Ⅱ区遺構配置図 …… 285
〃 204 Ｂ－Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区遺構配置図 …… 286
〃 205 ＳＢ002住居跡 …… 287
〃 206 ＳＢ002住居跡出土土器 …… 288
〃 207 ＳＢ010住居跡出土土器 …… 290
〃 208 ＳＪ006・007・010・011甕棺墓 …… 291
〃 209 ＳＪ006・007・010・011甕棺 …… 292
〃 210 遺構外出土土器 …… 293
〃 211 ＳＢ001住居跡、出土須恵器 …… 295
〃 212 ＳＢ003住居跡、出土須恵器・土師器 …… 296
〃 213 ＳＢ004住居跡、出土須恵器・鉄器 …… 297
〃 214 ＳＢ005住居跡、出土須恵器・土師器・鉄器 …… 298
〃 215 ＳＢ006住居跡・ＳＤ007溝 …… 299
〃 216 ＳＢ014住居跡、出土須恵器・土師器 …… 300
〃 217 ＳＴ016古墳石室 …… 301
〃 218 ＳＴ016古墳出土須恵器・土師器・鉄器・装身具 …… 302
〃 219 ＳＴ017古墳、出土装身具 …… 303
〃 220 ＳＣ020石棺墓、出土装身具・鉄器 …… 304
〃 221 ＳＰ001土壙墓、出土鉄器 …… 305
〃 222 ＳＰ009土壙墓、出土須恵器 …… 306
〃 223 ＳＰ009土壙墓出土鉄器 …… 307
〃 224 ＳＫ004・012土壙、ＳＫ012土壙出土須恵器・土師器 …… 309
〃 225 ＳＫ021土壙、出土須恵器・土師器・鉄器 …… 310
〃 226 ＳＤ003・012・013溝・ＳＤ015溝、ＳＤ013溝出土須恵器
・土師器・ＳＤ015溝出土土器 …… 311
〃 227 不明遺構ＳＸ005・011・016、出土須恵器・土師器 …… 313
〃 228 遺構外出土須恵器・土師器 …… 314
日岸田遺跡 Fig.229 発掘区位置図 …… 328
〃 230 Ⅰ区遺構分布図 …… 329
〃 231 Ⅱ区・Ⅲ区遺構分布図 …… 331
〃 232 ＳＫ073土壙 …… 335
〃 233 ＳＣ033石棺墓 …… 336
〃 234 ＳＪ066・ＳＪ067甕棺墓 …… 337

日岸田遺跡 Fig.235 ＳＪ068・ＳＪ069甕棺墓 …… 338
〃 236 ＳＪ070・ＳＪ071甕棺墓 …… 339
〃 237 ＳＪ072甕棺墓 …… 340
〃 238 ＳＴ002方形周溝墓 …… 341
〃 239 ＳＢ064・ＳＢ011・ＳＢ015・ＳＢ016竪穴住居跡 …… 343
〃 240 ＳＢ014・ＳＢ017竪穴住居跡 …… 344
〃 241 ＳＢ018・ＳＢ031竪穴住居跡 …… 345
〃 242 ＳＢ032・ＳＢ040竪穴住居跡 …… 346
〃 243 ＳＢ037・ＳＢ042・ＳＢ043竪穴住居跡 …… 347
〃 244 ＳＢ044・ＳＢ047・ＳＢ048竪穴住居跡 …… 348
〃 245 ＳＢ049・ＳＢ054・ＳＢ055竪穴住居跡 …… 349
〃 246 ＳＢ007・ＳＢ008掘立柱建物跡 …… 350
〃 247 ＳＫ005・ＳＫ009・ＳＫ010土壙 …… 351
〃 248 ＳＫ065・ＳＫ034土壙 …… 352
〃 249 ＳＫ035・ＳＫ045土壙 …… 353
〃 250 ＳＫ036・ＳＫ046・ＳＫ050土壙 …… 354
〃 251 ＳＫ052・ＳＫ053・ＳＫ058・ＳＫ019土壙 …… 355
〃 252 ＳＸ039遺構 …… 356
〃 253 ＳＪ066・ＳＪ068・ＳＪ070・ＳＪ072甕棺 …… 358
〃 254 ＳＪ067・ＳＪ069甕棺 …… 359
〃 255 ＳＪ071甕棺 …… 360
〃 256 ＳＴ002方形周溝墓出土土師器 …… 362
〃 257 ＳＤ041溝出土土師器１ …… 363
〃 258 ＳＤ041溝出土土師器２ …… 364
〃 259 ＳＢ037竪穴住居跡出土土器１ …… 369
〃 260 ＳＢ037竪穴住居跡出土土器２ …… 370
〃 261 その他の竪穴住居跡・土壙出土土器１ …… 371
〃 262 その他の竪穴住居跡・土壙出土土器２ …… 372
〃 263 鉄製紡錘車 …… 377
〃 264 ＳＤ001溝出土土器 …… 379
東田遺跡 Fig.265 調査区位置図 …… 383
〃 266 遺構配置図 …… 384
〃 267 ＳＪ01・02甕棺墓 …… 385
〃 268 ＳＪ03・04甕棺墓 …… 386
〃 269 ＳＴ01古墳 …… 388
〃 270 ＳＴ01古墳墳丘土層図 …… 389
〃 271 ＳＤ01溝跡 …… 389
〃 272 弥生土器１ …… 390
〃 273 弥生土器２ …… 391
〃 274 土師器・土師質土器 …… 392

東　田　遺　跡　Fig.275　須恵器 …… 394
本　川　原　遺　跡　Fig.276　遺跡周辺状況図 …… 399
〃 277　遺跡周辺地形図 …… 400
〃 278　A・B地区遺構配置図 …… 401
〃 279　C地区遺構配置図 …… 402
〃 280　SB17住居跡 …… 406
〃 281　SB72住居跡 …… 407
〃 282　SB27住居跡カマド …… 407
〃 283　SB27・49住居跡 …… 408
〃 284　SB26住居跡 …… 410
〃 285　SB28・29住居跡 …… 411
〃 286　SB35住居跡 …… 412
〃 287　SB39住居跡 …… 413
〃 288　SB40住居跡 …… 414
〃 289　SB42住居跡 …… 415
〃 290　SB43住居跡 …… 415
〃 291　SB06掘立柱建物跡 …… 416
〃 292　SB07掘立柱建物跡 …… 417
〃 293　SB20掘立柱建物跡 …… 418
〃 294　SB21掘立柱建物跡 …… 419
〃 295　SB22掘立柱建物跡 …… 420
〃 296　SB23掘立柱建物跡 …… 421
〃 297　SB24掘立柱建物跡 …… 422
〃 298　SB25掘立柱建物跡 …… 423
〃 299　SB44掘立柱建物跡 …… 424
〃 300　埋置土器遺構 …… 425
〃 301　SK45、46・47土壙 …… 426
〃 302　SK52・53、77、78土壙 …… 427
〃 303　SK50土壙 …… 428
〃 304　SB17住居跡出土遺物 …… 431
〃 305　SB27・49住居跡出土遺物 …… 433
〃 306　SB26住居跡出土遺物 …… 434
〃 307　SB28・29住居跡出土遺物 …… 436
〃 308　SB35住居跡出土遺物 …… 437
〃 309　SB39・40・42・43住居跡出土遺物 …… 438
〃 310　SB06・20・21掘立柱建物跡出土遺物 …… 439
〃 311　埋置土器遺構出土土器 …… 440
〃 312　SK03・04土壙出土遺物 …… 441
〃 313　SK09・10土壙出土遺物 …… 442
〃 314　SK50土壙出土遺物 …… 442

本川原遺跡 Fig.315 ＳＫ67土壙出土遺物 …… 443
〃 316 ＳＤ33溝跡出土遺物 …… 443
〃 317 ＳＸ02不明遺構出土遺物 …… 444
〃 318 ＳＸ34・60・74不明遺構出土遺物 …… 445
〃 319 小穴出土遺物１ …… 447
〃 320 小穴出土遺物２ …… 448
〃 321 包含層出土遺物 …… 449
〃 322 竪穴住居跡の規模 …… 458
〃 323 ２次調査検出「貯蔵穴」 …… 459
〃 324 掘立柱建物跡・竪穴住居跡の方位 …… 460
各論 Fig.325 石室主軸方位、築造段階図 …… 467
〃 326 古墳群形成過程図 …… 469
〃 327 都谷古墳群分布図 …… 472
〃 328 石室形態分類図 …… 473
〃 329 Ⅱ－Ｂ類石室 …… 476

表　目　次

調査の概要 Tab.1 調査経過一覧 …… 3
都谷遺跡 Tab.2 遺構一覧表 …… 23
〃 3 土器分類表 …… 28
〃 4 ＳＴ001古墳出土土器一覧表 …… 34
〃 5 ＳＴ001古墳出土土器一覧表 …… 47
〃 6 ＳＴ002古墳出土土器一覧表 …… 62
〃 7 ＳＴ003古墳出土土器一覧表 …… 68
〃 8 ＳＴ004古墳出土土器一覧表 …… 81
〃 9 ＳＴ006・007古墳出土土器一覧表 …… 92
〃 10 ＳＴ008古墳出土土器一覧表 …… 102
〃 11 ＳＸ009・ＳＴ010古墳出土土器一覧表 …… 112
〃 12 ＳＴ011古墳出土土器一覧表 …… 117
〃 13 ＳＴ012・013古墳出土土器一覧表 …… 124
〃 14 ＳＴ014古墳出土土器一覧表 …… 138
〃 15 ＳＴ015古墳出土土器一覧表 …… 150
〃 16 ＳＴ016古墳出土土器一覧表 …… 158
〃 17 ＳＴ017・018・019古墳出土土器一覧表 …… 170
〃 18 ＳＴ001古墳出土土器一覧表 …… 185
〃 19 ＳＴ002古墳出土土器一覧表 …… 191
〃 20 ＳＴ001古墳、ＳＫ002土壙出土土器一覧表 …… 199

都谷遺跡 Tab.21 馬具一覧表 …… 203
〃 22 鉄器一覧表 …… 204
〃 23 鉄鏃一覧表 …… 205
〃 24 紡錘車一覧表 …… 207
〃 25 装身具一覧表 …… 208
宮西遺跡 Tab.26 土器一覧表 …… 251
山浦西北方遺跡 Tab.27 縄文土器一覧表 …… 258
〃 28 土器一覧表 …… 269
山浦新田遺跡 Tab.29 土器一覧表 …… 279
荻野遺跡 Tab.30 遺構一覧表 …… 283
〃 31 甕棺墓一覧表 …… 291
〃 32 土器一覧表 …… 317
〃 33 古墳時代装身具一覧表 …… 325
〃 34 鉄器一覧表 …… 325
〃 35 住居跡一覧表 …… 326
日岸田遺跡 Tab.36 遺構一覧表 …… 333
〃 37 古墳前期土師器観察表 …… 365
〃 38 古墳時代末期および奈良・平安時代の土器観察表 …… 373
〃 39 ＳＤ001溝出土土器観察表 …… 377
本川原遺跡 Tab.40 遺構一覧表 …… 403
〃 41 土器観察表 …… 450
〃 42 竪穴住居跡一覧表 …… 457
〃 43 掘立柱建物跡一覧表 …… 458
各論 Tab.44 古墳別土器分類表 …… 465
〃 45 古墳群築造・追葬過程表 …… 470

図版目次

都谷遺跡 PL. 1 鳥栖地区航空写真大木川以西
〃 2 鳥栖地区航空写真大木川以東
〃 3 遺跡全景、Ａ地区全景
〃 4 Ａ地区ＳＴ001古墳全景、同古墳閉塞状況、同古墳遺物出土状況
〃 5 Ｂ地区原景、ＳＴ001～006古墳遠景
〃 6 Ｂ地区ＳＴ001古墳原景、同古墳土層、同古墳羨門
〃 7 Ｂ地区ＳＴ001古墳奥壁、同古墳羨道部、同古墳楯石、同古墳墓道遺物出土状況
〃 8 Ｂ地区ＳＴ002古墳原景、同古墳墳丘列石
〃 9 Ｂ地区ＳＴ002古墳土層、同古墳周溝、同古墳墳丘列石

都　谷　遺　跡　PL.10　B地区ＳＴ002古墳羨道部、同古墳奥壁、前庭側壁内遺物出土状況

〃 11　B地区ＳＴ003古墳石室

〃 12　B地区ＳＴ004古墳石室、同古墳遺物出土状況、同古墳奥壁、同古墳羨道遺物出土状況

〃 13　B地区ＳＴ005古墳石室、ＳＴ006古墳石室

〃 14　B地区ＳＴ002、007、008、古墳遠景、ＳＴ007古墳石室、同古墳羨道

〃 15　B地区ＳＴ007古墳土層、同古墳玄室内遺物出土状況

〃 16　B地区ＳＴ008古墳石室

〃 17　B地区ＳＴ008古墳前門左袖石付近遺物出土状況、同古墳墓道遺物出土状況

〃 18　B地区ＳＸ009配石、ＳＴ010古墳全景

〃 19　B地区ＳＴ010、011、012古墳遠景

〃 20　B地区ＳＴ010古墳閉塞状況、同古墳閉塞石除去後、同古墳奥壁

〃 21　B地区ＳＴ011古墳石室、同古墳閉塞状況

〃 22　B地区ＳＴ012古墳石室閉塞状況、同古墳石室羨道入口、同古墳天井石

〃 23　B地区ＳＴ012古墳土層、同古墳前室遺物出土状況

〃 24　B地区ＳＴ013～019古墳遠景

〃 25　B地区ＳＴ013～019古墳遠景、ＳＴ013古墳全景

〃 26　B地区ＳＴ013古墳全景、同古墳遺物出土状況

〃 27　B地区ＳＴ014古墳全景

〃 28　B地区ＳＴ014古墳全景、同古墳盛土内遺物出土状況、同古墳前室遺物出土状況

〃 29　B地区ＳＴ014古墳玄室内遺物出土状況

〃 30　B地区ＳＴ015・017古墳遠景、ＳＴ015・014古墳遠景、ＳＴ015古墳全景

〃 31　B地区ＳＴ015古墳石室、同古墳墳丘列石、同古墳周溝内出土遺物

〃 32　B地区ＳＴ016古墳全景、同古墳石室

〃 33　B地区ＳＴ016古墳閉塞状況、同古墳奥壁

〃 34　B地区ＳＴ017古墳原景、同古墳全景

〃 35　B地区ＳＴ017古墳玄室出土装身具類、同古墳羨道外側出土土器群、同古墳墳丘列石出土土器群、同古墳石室閉塞状況

〃 36　B地区ＳＴ018古墳全景、同古墳石室

〃 37　B地区ＳＴ019古墳全景、同古墳石室、同古墳土器出土状況

〃 38　C地区遠景、ＳＴ001古墳石室、同古墳前室遺物出土状況、同古墳墓道遺物出土状況

〃 39　C地区遠景、ＳＫ003土壙、ＳＴ002古墳全景、同古墳石室

〃 40　D地区ＳＴ001古墳全景、同古墳石室、同古墳前室左壁

〃 41　D地区ＳＴ001古墳西側土層、ＳＴ002土壙

〃 42　A地区ＳＴ001古墳出土須恵器・鉄器・装身具

〃 43　B地区ＳＴ001古墳出土須恵器

〃 44　B地区ＳＴ001古墳出土土器・鉄器・装身具

都　谷　遺　跡　PL.45　B地区ＳＴ002古墳出土須恵器
〃 46　B地区ＳＴ002古墳出土須恵器・鉄器
〃 47　B地区ＳＴ012古墳出土須恵器、ＳＴ003古墳出土土器・鉄器
〃 48　B地区ＳＴ004古墳出土須恵器
〃 49　B地区ＳＴ004古墳出土須恵器
〃 50　B地区ＳＴ004古墳出土鉄器・装身具
〃 51　B地区ＳＴ006古墳出土土師器、ＳＴ007古墳出土土器・鉄器・装身具
〃 52　B地区ＳＴ008古墳出土須恵器
〃 53　B地区ＳＴ008古墳出土須恵器
〃 54　B地区ＳＴ008古墳出土土師器・鉄器
〃 55　B地区ＳＴ008古墳出土鉄器・装身具、ＳＸ009配石出土土器、ＳＴ010古墳出土土器
〃 56　B地区ＳＴ011古墳出土須恵器、ＳＴ012古墳出土須恵器
〃 57　B地区ＳＴ012古墳出土須恵器、同古墳出土鉄器・装身具
〃 58　B地区ＳＴ013古墳出土須恵器、ＳＴ014古墳出土須恵器
〃 59　B地区ＳＴ014古墳出土須恵器・鉄器
〃 60　B地区ＳＴ014古墳出土装身具・石製品
〃 61　B地区ＳＴ015古墳出土須恵器
〃 62　B地区ＳＴ015古墳出土土器・鉄器・装身具
〃 63　B地区ＳＴ016古墳出土須恵器・鉄器・装身具
〃 64　B地区ＳＴ017古墳出土須恵器
〃 65　B地区ＳＴ017古墳出土須恵器
〃 66　B地区ＳＴ017古墳出土須恵器
〃 67　B地区ＳＴ017古墳出土須恵器
〃 68　B地区ＳＴ017古墳出土須恵器
〃 69　B地区ＳＴ017古墳出土土師器
〃 70　B地区ＳＴ017古墳出土鉄器・石製品、ＳＴ018古墳出土土器・鉄器、ＳＴ019古墳出土土器
〃 71　C地区ＳＴ001古墳出土須恵器
〃 72　C地区ＳＴ001古墳出土土器・鉄器・装身具他
〃 73　D地区ＳＴ001古墳出土須恵器
〃 74　D地区ＳＴ001古墳出土鉄器・装身具、ＳＫ002古墳出土須恵器
宮　西　遺　跡　PL.75　遺跡遠景
〃 76　ＳＴ01古墳原景、同古墳墳丘
〃 77　ＳＴ01古墳墳丘西側、東側、北側土層
〃 78　ＳＴ01古墳石室、同古墳閉塞状況
〃 79　ＳＴ01古墳奥壁、同古墳右壁、同古墳左壁
〃 80　ＳＴ01古墳墳丘盛土内遺物出土状況、同古墳羨道西側遺物出土状況
〃 81　ＳＴ01古墳玄室前壁右隅遺物出土状況、同古墳玄室前壁左隅遺物出土状況

宮西遺跡 PL.82 ＳＴ01古墳出土須恵器
〃 83 ＳＴ01古墳出土土器
〃 84 ＳＴ01古墳出土鉄器
〃 85 ＳＴ01古墳出土鉄器
〃 86 ＳＴ02古墳原景、同古墳石室
〃 87 ＳＴ02古墳墳丘南側、北側、西側土層
〃 88 ＳＴ02古墳石室、同古墳閉塞状況、同古墳奥壁、同古墳玄室右壁
〃 89 ＳＴ02古墳石室、同古墳羨道部
〃 90 ＳＴ02古墳前室左壁遺物出土状況、同古墳前室右壁遺物出土状況
〃 91 ＳＴ02古墳墳丘盛土内遺物出土状況、同古墳前庭部遺物出土状況、同古墳玄室内遺物出土状況
〃 92 ＳＴ02古墳出土須恵器
〃 93 ＳＴ02古墳出土須恵器
〃 94 ＳＴ02古墳出土鉄器
〃 95 ＳＴ02古墳出土鉄器
〃 96 ＳＴ02古墳出土装身具・石製品
〃 97 ＳＸ04火葬墓、ＳＸ04火葬墓出土土器他
山浦西北方遺跡 PL.98 遺跡遠景、ＳＴ01古墳原景、同古墳全景
〃 99 ＳＴ01古墳全景、同古墳閉塞石、同古墳周溝
〃 100 ＳＴ01古墳全景、ＳＸ03列石・ＳＤ04溝
〃 101 縄文土器、ＳＴ01古墳出土須恵器
〃 102 ＳＴ01古墳出土土器、ＳＴ02古墳墓道出土須恵器
〃 103 ＳＴ02古墳墓道出土須恵器、ＳＴ01・02古墳出土耳環
山浦新田遺跡 PL.104 遺跡全景、ＳＴ01古墳原景
〃 105 ＳＴ01古墳全景、同古墳奥壁裏込め石
〃 106 ＳＸ02集石土壙・ＳＰ03土壙墓遠景、ＳＸ02集石土壙、ＳＸ02集石土壙掘り方、ＳＰ03土壙墓
〃 107 ＳＴ01古墳出土須恵器、歴史時代の土器
荻野遺跡 PL.108 Ａ－Ⅱ区・Ｂ－Ⅰ区・Ｂ－Ⅳ区全景
〃 109 ＳＪ006・007・010甕棺墓
〃 110 ＳＪ011甕棺墓、ＳＢ002住居跡遺物出土状況、ＳＢ002住居跡内土壙
〃 111 ＳＢ001・002・003住居跡
〃 112 ＳＢ004・005住居跡、ＳＢ005住居跡内土壙
〃 113 ＳＢ006・010住居跡、ＳＢ008掘立柱建物跡
〃 114 ＳＰ001土壙墓、ＳＴ016古墳耳環出土状況、ＳＴ016古墳石室（奥壁）裏込め
〃 115 ＳＴ016古墳
〃 116 ＳＴ017古墳、ＳＣ020石棺墓、ＳＴ017古墳管玉出土状況、ＳＰ009土壙墓・ＳＸ011
〃 117 ＳＰ009土壙墓・ＳＸ011、ＳＫ004土壙

荻　野　遺　跡　PL.118　ＳＫ021土壙、ＳＤ003・Ｂ溝、ＳＸ016、ＳＤ015溝
〃　119　ＳＢ002・010出土弥生土器、ＳＪ006・007甕棺
〃　120　ＳＪ011・010甕棺、ＳＢ003出土土器
〃　121　ＳＢ001・014住居跡、ＳＴ016古墳、ＳＰ009土壙墓、ＳＫ012・021土壙他出土土器
〃　122　ＳＢ014住居跡、ＳＤ005溝、ＳＸ016土壙墓他出土土器
〃　123　ＳＴ016・017古墳、ＳＣ020石棺墓、ＳＢ005・004住居跡、ＳＫ021土壙、ＳＰ001土壙墓出土鉄器・装身具
〃　124　ＳＰ009土壙墓、ＳＣ020石棺墓出土鉄器
日　岸　田　遺　跡　PL.125　Ⅲ区全景、Ⅰ区
〃　126　Ⅰ区甕棺墓群、Ⅰ区ＳＪ067～071甕棺墓
〃　127　Ⅰ区ＳＪ067甕棺墓、Ⅰ区ＳＪ069甕棺墓
〃　128　Ⅰ区ＳＪ066甕棺墓、Ⅰ区ＳＪ072甕棺墓、Ⅰ区ＳＪ070甕棺墓
〃　129　Ⅰ区ＳＪ071甕棺墓、Ⅲ区ＳＣ033石棺墓
〃　130　Ⅱ区ＳＴ002方形周溝墓全景、同南東隅
〃　131　Ⅱ区ＳＴ002方形周溝墓北隅、同南西隅
〃　132　Ⅱ区ＳＴ002方形周溝墓北西溝断面、同　北東溝断面、同　南東溝断面、同　東南隅土器出土状況
〃　133　Ⅱ区ＳＤ001溝北辺中央断面、同　東辺南側断面、同　東辺北側断面
〃　134　Ⅰ区北側、Ⅰ区ＳＢ002竪穴住居跡
〃　135　Ⅱ区ＳＢ003竪穴住居跡、Ⅱ区ＳＢ008掘立柱建物跡、Ⅱ区ＳＢ007掘立柱建物跡
〃　136　Ⅲ区北東部、Ⅲ区北西部
〃　137　Ⅲ区ＳＢ044竪穴住居跡、Ⅲ区ＳＢ047竪穴住居跡、Ⅲ区ＳＢ040竪穴住居跡
〃　138　Ⅲ区ＳＢ043竪穴住居跡、Ⅲ区ＳＢ037竪穴住居跡、Ⅲ区ＳＫ050土壙
〃　139　Ⅲ区ＳＢ031竪穴住居跡、Ⅲ区ＳＢ032竪穴住居跡焼土、Ⅲ区ＳＢ032竪穴住居跡
〃　140　Ⅰ区ＳＫ001土壙、Ⅱ区ＳＫ005土壙、Ⅰ区ＳＫ014土壙
〃　141　Ⅲ区ＳＸ039遺構
〃　142　ＳＪ066・ＳＪ068・ＳＪ070甕棺
〃　143　ＳＪ067・ＳＪ069甕棺
〃　144　ＳＪ071・ＳＪ072甕棺
〃　145　ＳＤ041溝・ＳＴ002方形周溝墓出土土師器
〃　146　ＳＢ037竪穴住居跡出土土師器
〃　147　ＳＢ037竪穴住居跡出土須恵器
〃　148　その他の竪穴住居跡・土壙出土土師器
〃　149　ＳＤ001溝出土陶磁器・土師器
東　田　遺　跡　PL.150　遺跡遠景、同全景
〃　151　ＳＤ01溝跡、ＳＪ01～04甕棺墓群全景

東　田　遺　跡　PL.152　ＳＪ01甕棺墓、ＳＪ03甕棺墓、ＳＪ04甕棺墓
〃 153　ＳＴ01古墳全景
〃 154　ＳＴ01古墳石室全景
〃 155　ＳＴ01古墳玄門、同古墳南側壁、同古墳北側壁
〃 156　ＳＴ01古墳墳丘盛土状況、同古墳南側墳丘盛土状況、同古墳石室裏込め状況
〃 157　ＳＴ01古墳北側墳丘盛土状況、同古墳東側墳丘盛土状況、ＳＤ01溝跡
〃 158　石器、土師器、須恵器
本　川　原　遺　跡　PL.159　遺跡遠景
〃 160　遺跡全景、Ａ・Ｂ地区遠景
〃 161　Ａ地区全景、Ｂ地区全景、Ｃ地区全景
〃 162　Ｃ地区竪穴住居跡群、ＳＢ72住居跡、ＳＢ35住居跡
〃 163　ＳＢ26・27・49住居跡、ＳＢ27住居カマド、ＳＢ28・29・35住居跡
〃 164　ＳＢ28・29・35住居跡、ＳＢ39・40・42住居跡、ＳＸ41不明遺構
〃 165　Ｃ地区南部掘立柱建物跡群、ＳＢ07建物跡
〃 166　ＳＢ20建物跡、ＳＢ21建物跡、ＳＢ22建物跡
〃 167　ＳＢ23建物跡、ＳＢ25建物跡、ＳＢ44建物跡
〃 168　埋置土器、ＳＫ45・46・47・52・53土壙
〃 169　ＳＫ45土壙、ＳＫ46・47土壙、ＳＫ52・53土壙、ＳＫ77土壙
〃 170　ＳＫ78土壙、ＳＫ77土壙土層断面、ＳＫ45土壙土層断面
〃 171　ＳＢ27・49・26住居跡出土遺物
〃 172　ＳＢ26・29住居跡出土遺物
〃 173　ＳＢ29住居跡出土遺物
〃 174　ＳＢ35住居跡出土遺物
〃 175　ＳＢ39・40・42住居跡、埋置土器遺構、ＳＫ09・50土壙出土遺物
〃 176　ＳＫ50・67土壙、ＳＸ02不明遺構、小穴出土および表面採集遺物

第1章　調査の概要

1．調査の経過

九州横断自動車道建設に伴う文化財調査は、昭和44年6月に九州地方建設局の委託を受けての路線予定地域全域（含む周辺地域）の遺跡分布調査に始まる。その後、昭和48年9月の日本道路公団による路線発表を受けて、昭和51年12月までにさらに詳細な分布調査を実施した。

発掘調査は昭和52年1月から開始され、平成元年3月の全調査終了まで13年を要した。調査は工事計画に合わせて、まず鳥栖一佐賀大和間、次いで佐賀大和一武雄間、武雄一嬉野間と続き、最終年度に佐賀ＩＣ・鳥栖ＩＣの調査を行い全発掘調査を終了した。

今回報告する鳥栖地区の調査は昭和57・58年度に確認調査を行い、翌年58、59年度、および63年度に本調査を実施したものである。57年度に確認調査を実施した遺跡のうち都谷遺跡・山浦新田遺跡・山浦西北方遺跡・宮西遺跡・日岸田遺跡・荻野遺跡・東田遺跡・七浦遺跡・畑ケ田遺跡・山都町古墳群・山田遺跡は58・59年度に本調査を行った。立石遺跡・鬼迫遺跡・一ノ坪遺跡・中ノ原遺跡は57年度に、萱方浦田遺跡・割石古墳群は58年度に確認調査を行ったが特に遺構は検出できず、本調査は行っていない。

調査体制は、57年度の確認調査を当時神埼地区で本調査を行っていた坂井健二・西田和己が担当した。58・59年度の本調査の担当は大きく大木川以西と以東でそれぞれ分担し大木川以西の山浦新田遺跡、山浦西北方遺跡、宮西遺跡、都谷遺跡を東中川忠美・一ノ瀬憲昭が担当し都谷遺跡については59年度から副島正道が加わった。大木川以東の日岸田遺跡、荻野遺跡、七浦遺跡、畑ケ田遺跡を坂井健二・松尾法博が、東田遺跡を坂井健二・本田秀樹が調査した。63年度の本川原遺跡の担当は家田淳一、中島恒次郎、中摩浩太郎である。

大木川以西の本調査で山浦新田遺跡は昭和58年5月17日～6月8日にかけて330㎡を調査したが、現状は水田で古墳らしき盛土がみられ調査の結果、東側半分を削平された石室を検出した。山浦西北方遺跡は南方にのびる舌状丘陵に盛土を残す古墳4基が並び、そのうちの1基を調査した。調査期間は昭和58年5月30日～7月7日で調査面積は730㎡である。この山浦西北方遺跡の調査の後半から宮西遺跡の表土はぎを始め2遺跡の調査を同時進行する。宮西遺跡は昭和58年6月14日～9月30日にかけて880㎡を調査したが、調査途中、蒲原宏行の応援をうけた。本遺跡も丘陵尾根上に盛土をもつ古墳3基が並びそのうち路線内にかかる2基を調査した。都谷遺跡は昭和58年8月24日～59年7月20日にかけて4120㎡を調査した。都谷遺跡はＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄの4地区があり、Ａ地区の調査から始めた。Ａ地区では古墳1基を検出したが8月24日～9月7日で掘り方はほぼ終了し、実測は10月以降Ｃ、Ｄ地区の調査と並行して行った。その間、9月は宮西遺跡、日岸田遺跡の調査に回った。Ｃ、Ｄ地区は10月から11月かけて調査し、11月14日からＢ地区の伐採を開始した。Ｂ地区は最も古墳が密集していた地区で、現状は雑木林で盛土を残す2基の古墳が確認できたが調査の結果18基の古墳と不明遺構1基を検出した。Ｂ区は

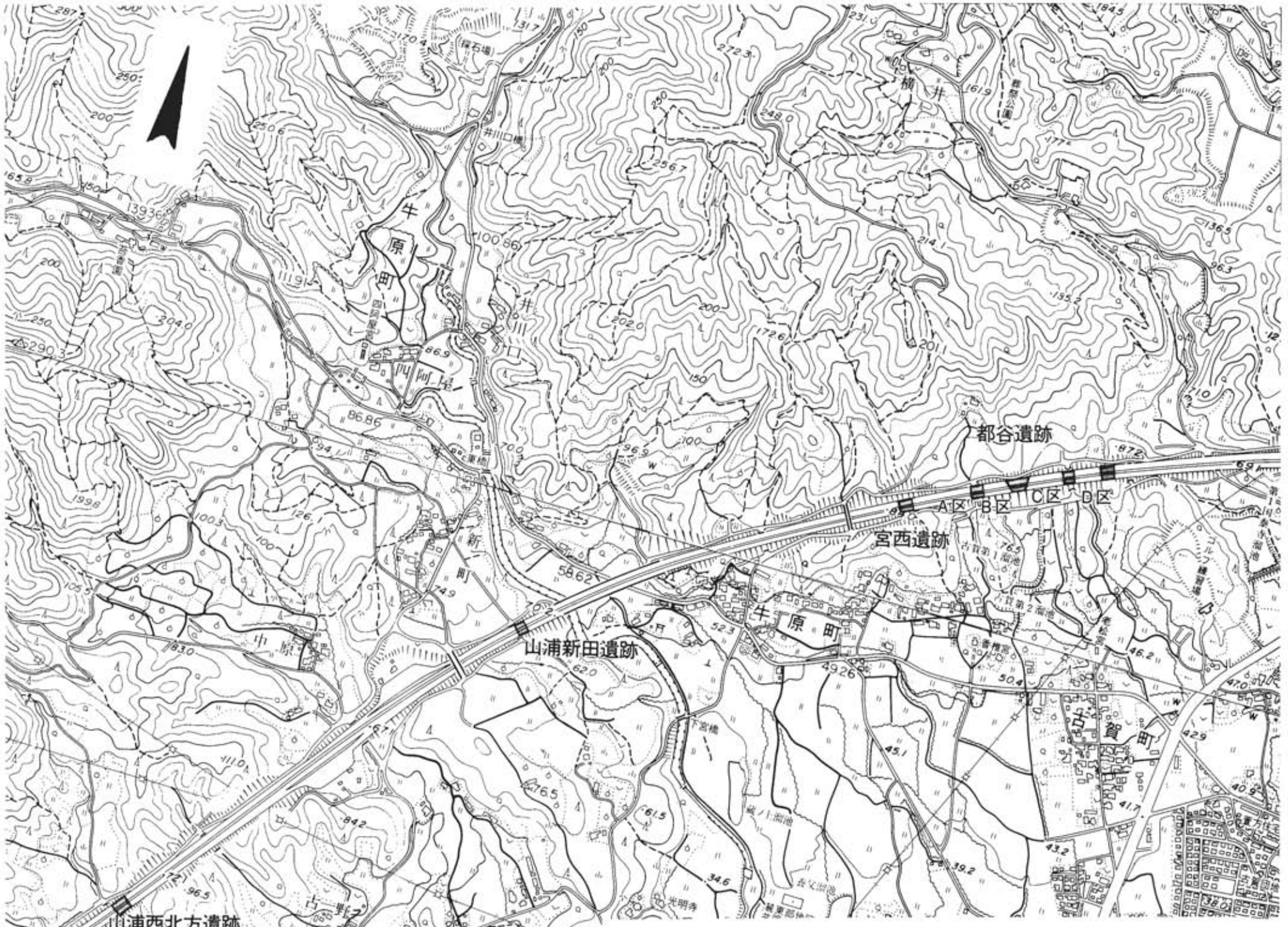
公団側の工事と競合せざるをえなく地区内を東西に３分割し南側から調査を始め、調査終了した区域から公団に渡していくという状況であった。そのためＢ地区全景の空中写真なども撮影することもできなかった。

大木川以東の調査は日岸田遺跡から始まるが、58年９月７日～59年２月10日まで20350㎡を調査した。日岸田遺跡の調査の後半から荻野遺跡の調査が始まる。荻野遺跡は58年12月１日～59年２月10日にかけて8620㎡を調査した。本遺跡は市道をはさんで西側をＡ区、東側をＢ区としてＢ区から遺構検出を始めた。また七浦遺跡の調査を58年２月20日～３月31日まで行った。59年度になり畑ケ田遺跡を59年４月３日～５月25日にかけて、東田遺跡を59年５月15日～10月22日にかけて調査した。なお、東田遺跡は古墳墳丘上に墓地がありその移転の交渉で、調査が本格的に始まったのは10月にはいってからであった。この東田遺跡の調査をもって58年、59年度の鳥栖地区の一連の調査が終了した。

本川原遺跡は横断道本線からの迂回道路建設によるものでそれから３年後の63年12月14日～３月30日にかけて3000㎡を調査した。

Tab.１　調査経過一覧

遺跡名	調査担当者	57年 4月 6月 8月 10月 12月	58年 2月 4月 6月 8月 10月 12月	59年 2月 4月 6月 8月 10月 12月	63年 10月 12月	平成元年 2月 4月 6月
山浦新田遺跡	東中川 一ノ瀬	―	5/17―6/8			
山浦西北方	東中川 一ノ瀬	―	5/30―7/7			
宮西遺跡	東中川 一ノ瀬		6/14―9/30			
都谷遺跡	東中川 一ノ瀬、副島		8/24―7/20			
日岸田遺跡	坂井 松尾		9/7―2/10			
荻野遺跡	坂井 松尾		12/1―2/10			
七浦遺跡	坂井 松尾			2/20―3/31		
畑ヶ田遺跡	坂井 松尾			4/3―5/25		
東田遺跡	坂井 本田			5/15―10/22		
本川原遺跡	家田、中摩 中島				12/14―3/30	
立石、鬼迫 一ノ坪、中ノ原	坂井 西田	―				
山田遺跡	1次、坂井、西田 2次、東中川 一ノ瀬		2/22―3/17	11/29―12/16		
山都町古墳群	1次、坂井、西田 2次、東中川 一ノ瀬	―	5/25―6/9			
割石古墳群	東中川 一ノ瀬		6/9―6/14			
豊方浦田	東中川 一ノ瀬		7/4―7/6			



山浦西北方遺跡（ＹＵＨ）

所在地	鳥栖市山浦町字谷頭
調査面積	730㎡
調査期間	昭和58年５月30日～昭和58年７月７日
調査担当者	東中川忠美・一ノ瀬憲昭
調査遺構	古墳 １基、古墳の墓道

東田遺跡（ＨＧＡ）

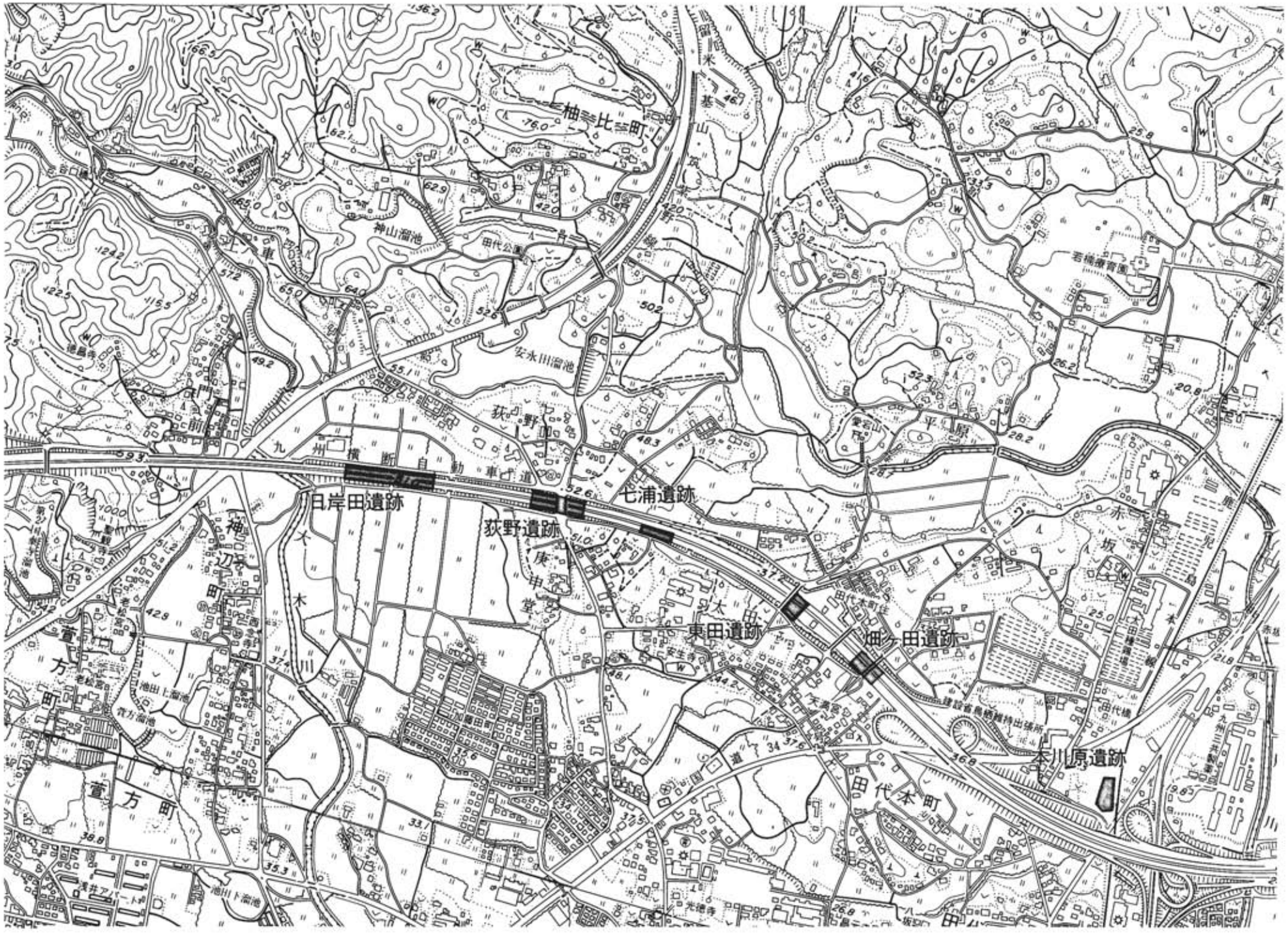
所在地	鳥栖市田代本町字東田
調査面積	1,520㎡
調査期間	昭和59年５月15日～昭和59年10月22日
調査担当者	坂井健二・本田秀樹
調査遺構	
弥生期	甕棺墓 ４基　古墳 １基、溝 １条

山浦新田遺跡（ＹＵＳ）

所在地	鳥栖市山浦町字新田
調査面積	330㎡
調査期間	昭和58年５月17日～昭和58年６月８日
調査担当者	東中川忠美・一ノ瀬憲昭
調査遺構	古墳 １基

本川原遺跡

所在地	鳥栖市永吉町字本川原
調査面積	3,000㎡
調査期間	昭和63年12月14日～平成元年３月30日
調査担当者	家田淳一・中島恒次郎・中摩浩太郎
調査遺構	古墳期、住居跡11軒、掘立柱建物跡９棟 奈良期、住居跡１軒



宮西遺跡（ＭＹＮ）
所在地　鳥栖市中原町宮西
調査面積　880㎡
調査期間　昭和58年６月14日～昭和58年９月30日
調査担当者　東中川忠美・一ノ瀬憲昭
調査遺構　古墳　２基

七浦遺跡（ＮＮＵ）未報告
所在地　鳥栖市柚比町字七浦
調査面積　2,270㎡
調査期間　昭和59年２月20日～昭和59年３月31日
調査担当者　坂井健二・松尾法博
調査遺構　古墳　２基、土壙　６基

都谷遺跡（ＭＫＤ　Ａ～Ｄ区）
所在地　鳥栖市宝方町都谷
調査面積　4,120㎡
調査期間　昭和58年８月24日～昭和59年７月20日
調査担当者　東中川忠美・一ノ瀬憲昭・副島正道
調査遺構　古墳　22基、土壙　２基、不明遺構　１基

畑ヶ田遺跡（ＨＡＴ）未報告
所在地　鳥栖市田代本町字畑ヶ田
調査面積　2,650㎡
調査期間　昭和59年４月３日～昭和59年５月25日
調査担当者　坂井健二・本田秀樹
調査遺構　甕棺墓　２基、住居跡、土壙

日岸田遺跡（ＨＩＧ）
所在地　鳥栖市神辺町日岸田
調査面積　20,350㎡
調査期間　昭和58年９月７日～昭和59年２月10日
調査担当者　坂井健二・松尾法博
調査遺構
弥生期　甕棺墓　７基、石棺墓　１基、土壙　１基
古墳期　住居跡　８棟、土壙　６基、溝　１条
方形周溝墓　１基
奈良・平安期
住居跡　２棟、掘立柱建物跡　２棟
土壙　６基、性格不明遺構　１基

萩野遺跡（ＯＧＮ）
所在地　鳥栖市柚比町字萩野
調査面積　8,620㎡
調査期間　昭和58年12月１日
～昭和59年２月10日
調査担当者　坂井健二・松尾法博
調査遺構
弥生期　住居跡　２軒、甕棺墓　４基
古墳期　住居跡　２軒、土壙　１基
石棺墓　１基、土壙墓　２基
奈良・平安期
住居跡　３軒、土壙　１基

Fig.1　鳥栖地区調査区位置図（１/10000）

2．調　査　組　織

都谷遺跡、宮西遺跡、山浦西北方遺跡、山浦新田遺跡、荻野遺跡、日岸田遺跡、東田遺跡、本川原遺跡の調査は九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査として昭和58・59・63年度に実施した。発掘調査および整理の組織は下記のとおりである。

総括　教育長　古藤浩(58年度)　志岐常文(59・63年度)
　　教育次長　大塚正道・高橋一之(58年度)　高橋一之・釈憲正(59年度)
　　水野豊・久間三郎(63年度)
　　文化課課長　中島信行(58年度)　北村一義(59年度)　武藤佐久二(63年度)
　　文化課参事　高島忠平(63年度)
　　文化課課長補佐　山田陸三・高島忠平(58年度)　高島忠平(59年度)　大坪英樹(63年度)
庶務　文化課庶務係長　中野安正(58年度)　菊池文夫(59年度)　稲富安徳(63年度)
　　文化課主査　山下行夫(58・59年度)
　　文化課主事　山口勝・東英明・井原裕子(58年度)　東英明・井原裕子(59年度)
　　鶴田明美・本山恵悟・直塚清純(63年度)
発掘調査　文化課調査第一係長　中牟田賢治
　●都谷遺跡　東中川忠美(文化財保護主事)　一ノ瀬憲昭・副島正道(文化課指導主事)
　●宮西遺跡　東中川忠美(文化財保護主事)　一ノ瀬憲昭(文化課指導主事)
　●山浦西北方遺跡　東中川忠美(文化財保護主事)　一ノ瀬憲昭(文化課指導主事)
　●山浦新田遺跡　東中川忠美(文化財保護主事)　一ノ瀬憲昭(文化課指導主事)
　●荻野遺跡　坂井健二(文化課指導主事)　松尾法博(文化課嘱託)
　●日岸田遺跡　坂井健二(文化課指導主事)　松尾法博(文化課嘱託)
　●東田遺跡　坂井健二(文化課指導主事)　本田秀樹(文化課嘱託)
　●本川原遺跡　家田淳一(文化財保護主事)　中島恒次郎・中摩浩太郎(文化課嘱託)
　調査補助員　北浦(山口大学生)　田代成澄　深町佐千子

整理　昭和60・61年度　東中川忠美(文化財保護主事)
　平成2年度　高瀬哲郎(調査係長)　家田淳一(文化財保護主事)
　小松譲(文化財課指導主事)　宮武正登(文化財保護主事)
　百崎正子(文化財課嘱託)　陣内康光(文化財課嘱託、現鳥栖市教育委員会)
　久山高史(文化財課嘱託、現鳥栖市教育委員会)

第2章　地理的・歴史的環境

１．地理的環境

佐賀県東部の鳥栖市は、筑後川流域に展開する広義の筑紫平野の一角をなすとともに、狭義の筑後平野の西北部を占める位置にある。北部は筑紫山地に限られ、南部は筑後川を境として福岡県久留米市と相対する。東部は福岡県小郡市から甘木・朝倉方面へと広がる平野に連続し、さらに東北部は三養基郡基山町から福岡県筑紫野市方面一帯の地峡を経て福岡平野へ通じる。そして西部は筑紫山地より派生した丘陵地を介して佐賀平野と接している。

Fig. 2　鳥栖市位置図

地勢は、脊振山塊の九千部山（847.5m）を主峰として三カ所認められる支嶺から、それぞれ東南ないしは南方向に丘陵地（洪積段丘）が伸び、ついで平坦部となって筑後川の旧流路（現新宝満川）に至る。山々は幾重にも重なり合い、各支嶺間は断層によって生じた裂け目（構造谷）を流下する河川が山地を浸蝕して、山麓に扇状の堆積地を形成している。

地形を東から詳述すると、権現山より杓子ヶ峰に連なる支嶺は、柚比・今町の高位段丘に通じている。大木川はこの支嶺と、九千部山の南側より起こって城山・群石山に終わる支嶺との間の断層線に沿って流下し、山麓に神辺扇状地を形成する。大木川左岸は柚比丘陵群から曽根崎方面へ連続する標高15～80m の低～高位洪積段丘となり、右岸は現市街地を載せて拡がる標高15～25m の独立低位段丘となる。一方、九千部山の西南側より起った支嶺は、石谷山・雲野尾峠・笛吹山へと低下し、三養基郡北茂安町千栗一帯まで連続する丘陵となっている。九千部山を水源とする四阿屋川は、この東山麓に養父扇状地を形成して安良川となる。安良川と、石谷山を水源とする沼川の間は、標高15～80m の低～高位の洪積段丘となり、朝日山によって北の麓地区・南の旭地区に二分される。河川はいずれも南流し筑後川へ注ぐが、下流域は標高10m 以下の沖積低地の広大な平坦部となっている。

鳥栖市域の遺跡の分布、とくに集落遺跡の立地は、土地の自然環境と密接に関わっている。旧石器・縄文時代はもちろんのこと、遺跡が顕著となる弥生時代以降、初め生活の場は多くが中・高位洪積段丘上に営まれてきた。とりわけ遺跡の分布密度が高い大木川左岸と安良川・沼川右岸は、それぞれ弥生前期末まで遡る固有の遺跡群が形成・継続している。これに対し、部分的な例外があり一概に言えないが、全体的な傾向として、鳥栖市街地の載る低位段丘は弥生中期末以降に、神辺・養父の両扇状地は弥生後期以降、とくに古代から中世にかけて遺跡が増

Fig. 3　周 辺 地 形 図

大するようである。また、条里制の痕跡が僅かに残る南部の低地は、最近まで河川の氾濫・耐水の常襲地であったが、こうした治水の困難な沖積低地や地盤の軟弱な扇状地は、生活領域としての進出が遅れる傾向を見せている。

鳥栖市域はとくに古代以降、律令制下の筑前・筑後・肥前三国の接点であり、太宰府・筑後国府・肥前国府を連絡するそれぞれの官道（城の山道・筑後路・肥前路）が通過する交通の要衝であった。この重要性は、高速道路時代の現代においても変わりはない。

2．歴史的環境

本書に収録した遺跡を取り巻く個々の歴史的背景については各説に譲り、ここでは原始・古代より近世に至る鳥栖市域全体の歴史的環境を、主として現在までの調査成果の知見を踏まえた考古学的側面から、時代を追って概観したい。

鳥栖地域の旧石器文化は現状では十分にその実態が把握できていない。過去に柚比町、今町をはじめとする北部の丘陵群一帯で、ナイフ形石器を主体とする相当数の石器類の散布が報告されており[1]、また永吉町長ノ原遺跡[2]ではナイフ形石器や細石器類などの包含が若干みられたほか、最近の高位段丘上での遺跡調査の際に、後期旧石器時代に属する可能性がある石器類が採集されることがある。ただ、いずれもこの時期の明確な遺構を伴うものでなく、遺物の判断についてもまだ多くの検討の余地を残している。

縄文時代になると、大部分が包含層ながら、遺跡を少なからず見い出せるようになる。山浦町西田遺跡[3]は早期の明確な遺構を検出した唯一の遺跡で、住居跡は発見されなかったものの、押型文土器に伴って種々のタイプの集石遺構が多数検出されたほか、抱石を伴う集石土壙墓や東西に連なる帯状配石が検出された。また数千点に及ぶ剝片を含む石器類に交じって、手向山式土器や平栫式土器も出土している。そのほか早期の遺物を包含する遺跡は、柚比町安永田遺跡[4]・柚比梅坂遺跡[5]、真木町宮の前遺跡[6]、立石町山田遺跡[3]などがあげられる。前期～後期にかけては包含層および散布地から採集される例が若干知られるのみである。古賀町古賀遺跡[7]からは前期の轟式土器が出土しており、柚比梅坂遺跡からは前期の曽畑系土器や晩期の御領式土器が出土している。また、西田遺跡からは中期の船元式土器をはじめ前期から晩期にかけての土器が散発的に出土している。立石町笛吹山遺跡からは中期の阿高系土器が出土したと過去に報告されているが[8]、山田遺跡の包含層からは早期から晩期にいたるバラエティーに富んだ土器片が石器類とともに多数出土している。ここからは支石墓も検出されているが、この遺跡は以前に早期の集石遺構や晩期末の支石墓等が検出された三養基郡中原町簀原の香田遺跡[9]とは東西1kmほどの距離にあり、西田遺跡ともあわせて脊振山地南麓の高位段丘上に縄文時代以降この地域最初の定住拠点が散在するようである。これ以外に蔵上町桑ノ木添遺跡[10]からは後期の鐘崎系土器と北久根山式土器が出土している。

縄文時代も晩期になると遺構を伴う例が増加すると共に、遺跡の立地が中～低位段丘の縁辺にまで広がる傾向が窺える。前述の山田遺跡のほか、永吉町本川原遺跡からは黒川式土器に伴う袋状貯蔵穴や、夜臼式土器を伴う住居跡が検出されている[11]。また永吉町永吉遺跡では墓の副葬品と思われる夜臼式の小壺と有柄石剣が出土し[12]、村田町村田三本松遺跡からは山ノ寺～夜臼式期の丹塗り磨研の壺棺片が出土している[13]。

弥生時代にはいると、前期末以降、鳥栖地域の遺跡は飛躍的な増加を見せ始める。その分布

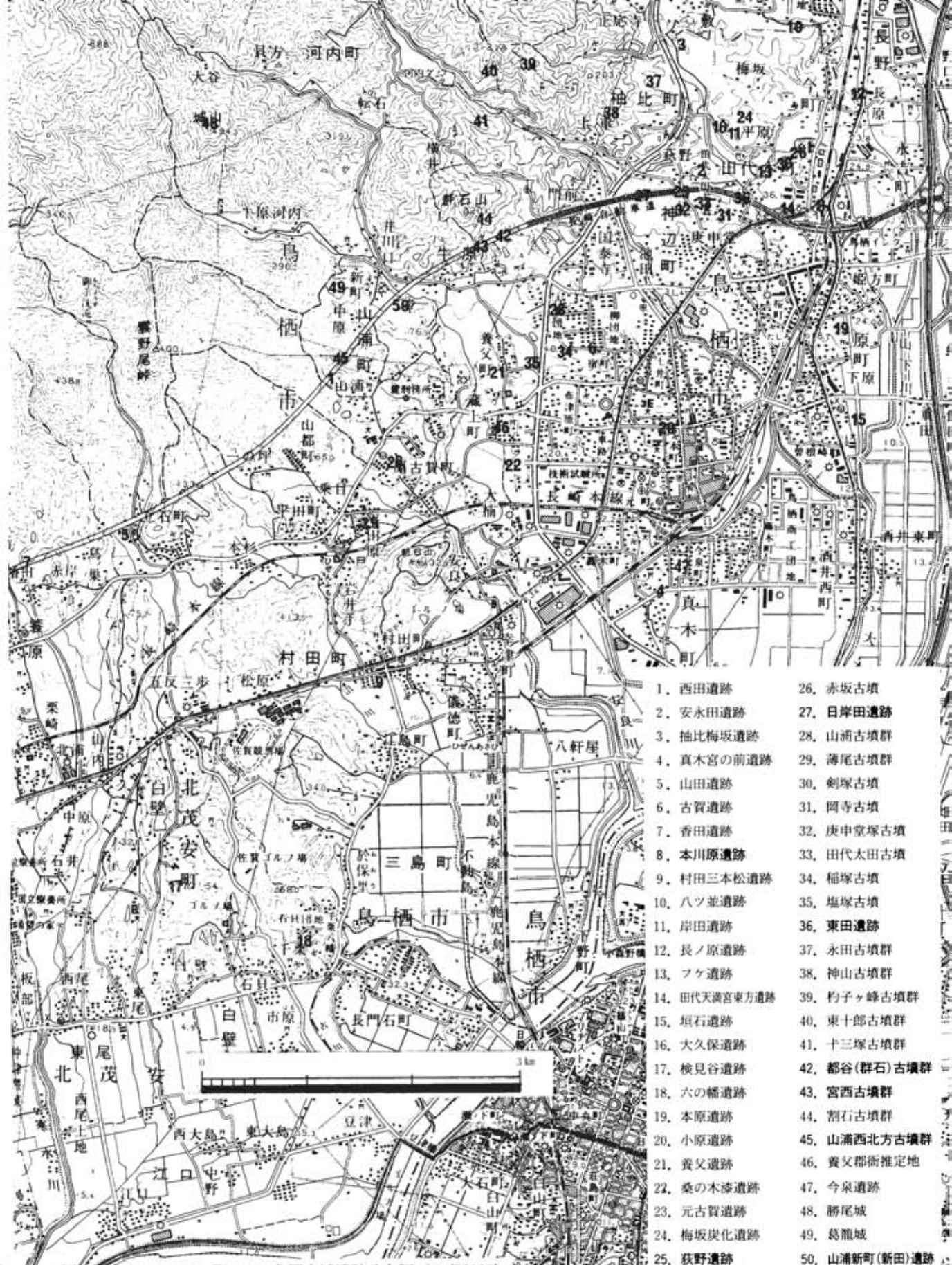


Fig. 4　鳥栖市域遺跡分布図（1/50000）

は大きく二つのグループに分かれるが、一つは「柚比遺跡群」と総称される北東部の柚比・今町地区周辺の丘陵に所在する遺跡群、および曽根崎町方面まで伸びる丘陵地一帯をも加えた、大木川左岸地帯で、もう１つのグループは南西部の朝日山南麓に広がる丘陵群一帯、安良川右岸の村田・江島町周辺に分布する遺跡群である。いずれも段丘と谷とが複雑に入り組んだ地形に立地している。

柚比遺跡群は昭和52年度より10ヶ年計画で範囲確認調査が実施された結果、前期後半から後期にかけて集落・墳墓遺跡がほぼ途切れることなく分布することが明らかとなった。遺跡群周辺も含めて、初期に成立した集落遺跡には今町八ツ並遺跡[14]・共同山遺跡・岸田遺跡[15]・永吉町長ノ原遺跡などがあるが、このうち八ツ並遺跡では前期後半、長ノ原遺跡では中期初頭の環濠の一部が確認されている。また併行する墓地には柚比町安永田遺跡[4][10]、田代本町フケ遺跡[17]・田代天満宮東方遺跡[18]、長ノ原遺跡、曽根崎町垣石遺跡[8]などがあげられる。中期初頭～前半以降、遺跡群としての集中・展開が顕著となり、この地域固有の地縁的共同体の発展過程が見えてくる。中期の前半から後半にかけての甕棺墓群が検出された柚比町大久保遺跡[19]・安永田遺跡・柚比梅坂遺跡[5][20]、田代本町フケ遺跡などにみられるように、一定期間継続して営まれる共同墓地が広く分布しており、フケ遺跡や安永田遺跡では鳥栖地方特有の長脚高坏をはじめとする祭祀土器群による墓前祭祀の遺構が検出されている[21]。中期後半～末になると、銅戈や鉄剣を副葬する甕棺墓も現れてくる[8]。そして、この時期安永田遺跡では銅鐸や銅矛の鋳造が行われている[16]。

朝日山南麓から村田・江島町にかけての丘陵上に分布する南西部の遺跡群は、柚比遺跡群ほどには解明が進んでいないものの、同時期同規模の集団関係の形成が展開していたことは間違いない。この遺跡群を考える場合、三養基郡北茂安町の白壁地区周辺の丘陵群をも包括する注意が必要である。この地区からは中広銅矛が12本一括埋納されていた検見谷遺跡[22]をはじめ、細形銅戈を副葬する甕棺墓など、過去に青銅器が多数発見されているが[23]、中でも六の幡遺跡[24]からは特定有力者集団中の個人墓というべき前漢鏡を副葬した中期末の甕棺墓が検出されている。鳥栖市域側では、村田町村田三本松遺跡[13]で前期末～中期後半にかけての甕棺墓群が祭祀土壙を伴って検出されたほか、付近では確認調査において同時期の溝状遺構が検出されており、比較的規模の大きな集落の存在が想定される。これ以外にも村田町安良遺跡・江島町相模遺跡・天神記遺跡など、甕棺墓を主体とする共同墓地の存在が多く知られるが、これらは過去のみかん園造成時、あるいはゴルフ場建設の際に相当数が未調査のまま破壊されている。なお江島町からは広形銅戈の鋳型が発見されており[25]、青銅器工房の存在の可能性も考えられる。

以上のように北東部と南西部の弥生遺跡集中地帯は、中期後半～後期にかけてのクニとしての集団関係の成立過程を考える場合、それぞれが地縁的共同体を背景として別個に発展していったものであり、後の基肄・養父両郡形成の経緯にも直接の関わりが想定されるが、この中期末～後期初頭以降、中～高位段丘上で営まれてきた遺跡が減少する一方で、低位段丘縁辺の

遺跡が活発化し、鳥栖地域の遺跡立地傾向に大きな変化を読み取れる。柚比遺跡群周辺の場合、前時期まで遺跡が集中していた柚比・今町一帯では、八ツ並遺跡(14)、平原遺跡(26)が存続するのみで、新たに永良町本川原遺跡(27)(28)・長ノ原遺跡・原町本原遺跡(29)など低位に臨む低位段丘上に遺跡が成立している。八ツ並遺跡や本原遺跡では環濠や条溝が確認されており、また長ノ原遺跡では後期前半の住居跡から後漢鏡片が出土している(30)。遺跡群の再構成ともいうべき遺跡の低地への進出は、そのほか中期末～後期の過渡的な様相を示す大正町小原遺跡(31)をはじめ、原町下原遺跡、姫方町姫方遺跡、幡崎町幡崎遺跡、曽根崎町四ツ木遺跡、藤木町藤木遺跡、今泉町今泉遺跡、元町内畑遺跡(32)、真木町宮の前遺跡(6)など、終末～古墳時代初頭期にかけて継続して認められる。一方、安良川流域では養父町養父遺跡(3)、蔵上町桑ノ木添遺跡(10)などにこの傾向が認められ、また右岸域の幸津町や村田町周辺の遺跡群もこの時期に最盛期を迎えるものと思われる。

古墳時代前期初頭になると、弥生後期以降の遺跡立地を踏襲して、中～低位段丘先端や扇状地上に古墳が出現する。現在のところ定型化以前の古墳の所在が確認されるのは大木川流域においてのみで、安良川や沼川流域に古墳が見い出せるのは1時期遅れた4世紀後半～5世紀代にかけてである。しかしこれが弥生時代以来の、鳥栖地域における大木川流域の優位・先進性を示し得るかについては、南西部の丘陵地帯の多くが未調査の現状で(33)断言はできない。

古墳時代の集落遺跡については、弥生時代後期終末～古墳時代前期にかけては先述の養父遺跡、桑ノ木添遺跡や古賀町元古賀遺跡(34)、中期では古賀町花ノ木遺跡、後期では今町岸田遺跡(15)、柚比町梅坂炭化米遺跡(25)、**荻野遺跡**、永吉町**本川原遺跡**(1)(27)(28)、原町本原遺跡(30)などで部分的に知られるのみである。古墳立地との相関など、未だ鳥栖地域全体の様相として把握するには至っていない現状では、古墳の成立と展開の状況からこの時代を読み取るほかない。

大木川流域の5世紀後半代までの古墳の編年は、田代本町赤坂前方後方墳(36)・永吉町本川原方形周溝墓群(1)(27)・原町下原方形周溝墓・今泉町今泉方形周溝墓群(37)→神辺町**日岸田方形周溝墓**→柚比町平原古墳・**荻野箱式石棺墓**→田代本町太田東方古墳(38)となる。赤坂前方後方墳は全長24m の出現期古墳で、以降の方形周溝墓群と同じく出土土器は畿内系古式土師器で占められている。平原古墳は荻野と同様に箱式石棺を内部主体とし、太田東方古墳は竪穴系横口式石室である。

安良川・沼川流域の中位段丘上に分布する4世紀後半～5世紀代の古墳には幸津町幸津箱式石棺墓、村田町安良箱式石棺墓、山浦町山浦古墳群(39)、平田町薄尾古墳群(40)などがある。隣接する山浦・薄尾両古墳群はともに継続して形成されており、一部を除いて径10m 前後の小円墳で構成されている。内部主体は、粘土槨・箱式石棺→小竪穴式石室→初期横穴式石室と、この時期の変遷の典型を窺うことができる。

古墳時代前半期の鳥栖地方においては、以上のような古墳の立地、分布、規模、あるいは副葬品の内容などから考えて、突出した大首長層の存在というものを肯定しにくい。むしろ在地の小豪族層、つまり弥生後期以来の小地域を単位とする有力家父長クラスの、一部外部からの

影響も含めた自立強化、そしてこれを背景とする造墓集団の展開が想定できる。

しかし6世紀代に入ると、こうした様相は一変する。大木川左岸の中位段丘上に田代本町剣塚古墳（80m）[41]・岡寺古墳（70m）[42]・庚申堂塚古墳（60m）[43]の3基の大型前方後円墳、さらに大型円墳（42m）の田代本町田代太田装飾古墳[44]が築造されるとともに、これら大型古墳の周辺では柚比町梅坂6号墳[45]・ヒャーガンサン古墳、また安良川流域では古賀町稲塚古墳、養父町塩塚古墳など、径30m前後の中型円墳が展開する[46]。剣塚・岡寺・庚申堂塚の3基の前方後円墳は国造クラスの首長墓と考えられるが、先述のとおり、このなかで最も古い6世紀前半に比定される剣塚古墳築造以前の有力首長墓の系譜が鳥栖地域では辿れないことから、これら大型前方後円墳築造の背景には、継体朝による527～528年の筑紫国造磐井の乱平定後の筑後平野の政治的情勢が直接関わることは疑いをいれない。また、6世紀後半の壁画系装飾古墳の盛行と軌を一にする田代太田古墳の築造も、鳥栖地域が6世紀代以降いわば「外来系」の大首長層により支配されていたことを窺わせるとともに、要衝の地としてのこの地域の重要性がこの頃より認識され始めたようである。

杓子が峰から群石山、雲野尾峠の山麓一帯には、本書にもその一端が紹介されるが、6世紀後半から7世紀代を中心とする群集墳が大量に造営される。東方より列記すると、杓子が峰山麓には梅坂・永田[47]・太平・神山・杓子が峰・東十郎古墳群[48]が、大木川右岸の山麓には十三塚・横井古墳群が、群石山山麓には都谷（群石）・牛原・宮西・割石古墳群が、安良川右岸の山麓一帯には山浦・立石古墳群ならびに朝日山山麓の朝日山・村田古墳群が分布しており、鳥栖市地域の脊振山地南麓はまさに群集墳の密集地域としての状況を呈している。これら群集墳の成立時期は現在のところ6世紀前半まで遡るものは見られず、また、最も新しいものは東十郎古墳群にみられるように、双耳壺の骨蔵器を用いた8世紀前半の古墳終末期まで築造されるものがある。鳥栖地域の群集墳の性格は通常考えられる有力家父長層の一族墓であるとともに、立地や規模などその様相に一定の規律が認められることから、ある時期並存する大・中首長墓の被葬者層との間に階級差、言い換えれば支配・被支配関係の存在を想定できる。しかし、7世紀後半以降、この地域が基肄・養父郡に二分される背景を考えると、こうした外来系大豪族による在地小豪族の支配体制は一時期のものではなかったかとも考えられる。また、終末期群集墳については、665年の基肄城造営と軍団設置を背景として考慮に入れる必要がある。

古代律令国家体制の下、鳥栖地域は肥前国に属し、東部は基肄郡、西部は養父郡に分けられるが、この二郡は大木川を境界としたと考えられ、基本的には近世まで続く。基肄郡は「肥前国風土記」に「郷陸（六）所、里十七」とあり、「和名類聚抄」には姫社・山田・基肄・川上・長谷の五郷を挙げているが、欠落の一郷として永吉郷が推定されている。養父郡は風土記に「郷肆（四）所、里十二」とあり、和名抄は狭山・屋田（日理）・養父・鳥栖の四郷を挙げている[50]。郡衙はそれぞれ基肄郷、養父郷に設置されていたと推定されている。基肄郡衙の位置は現在の

ところ不明であるが、養父郡衙については、明治期の地割図などから、現在の蔵上町の集落に所在したと考えられている。最近の確認調査では周辺の山浦町から養父・牛原町一帯において奈良時代の掘立柱建物群や住居跡の所在が数ケ所で確認されており、郡衙との関連が今後の調査に期待できる。また基肄郡域の古代の集落跡は、今町岸田遺跡、柚比町**荻野遺跡**、永吉町**本川原遺跡**、神田町**日岸田遺跡**、原町本原遺跡などで確認されている。なお風土記の養父郡「烽壱所」は、朝日山に比定されている。そのほか東部と南部の扇状地や沖積平野には条里の遺構が認められ、市内各所で条里制の坪名を示す字名が若干みられる。

律令体制が衰退する平安時代後期以降、鳥栖地域においても荘園が形成されるようになり、国衙領（公田）を圧迫するようになる。鎌倉時代の正安５（1292）年の記録[49]によると、荘園は基肄・養父両郡のほぼ半数の耕地を占めるに至っている。この大部分は太宰府天満宮安楽寺領で、あとは宇佐八幡宮弥勒寺領となっているが、実質的にはこれらの荘園は、曽禰崎氏・土々呂木氏・藤木氏・山浦氏・神辺氏などの御家人地頭によって支配された。今泉町今泉遺跡[50]ではこのうちの藤木氏との関連が想定できる、濠を巡らした城館跡と思われる13世紀前半頃の遺構が検出されている。また大正町小原遺跡では中世後期の掘立柱建物群が検出されている。[51]

南北朝時代から戦国時代にかけての戦乱期、この地域は少弐氏・一色氏・今川氏・渋川氏・菊池氏など、支配者の交替が頻繁にみられたが、この時期、村田町や牛原町周辺には山城が築かれるようになる。この一帯は明応６（1497）年に筑紫氏が鳥栖地域を押さえて以降、天正14（1586）年に島津氏に攻略されるまでの約90年間、勝尾城を本城に、鷹取城、葛籠城、鏡城ならびに旭山城、所隈城などの支城群が構成され、さらに城下町も形成された。なおこれらの城郭群の一部は島津氏侵攻の直前に当時最新の畿内型プランによる改修が施されていることが確認されている。[52][53]また山浦町山浦新町遺跡[53]ではこの時期の城下町の遺構が検出され、その具体像が解明されつつある。調査地域は谷を仕切る大規模な空堀と土塁により４地区に区分されており、とくに総構内側の木戸口に至る区域は、短冊型の地割上に町屋遺構の柱穴群が並び、中央を開市スペースの配慮が想定できる幅11m もの広い道路が貫いていた。

近世以降、基肄郡と養父群の東半は対馬藩領に、養父群西半は佐賀鍋島藩領となる。また長崎街道が整備されると共に、両藩領域にはそれぞれ田代宿、轟木宿が設けられ、番所も同時に置かれた。なお田代宿には対馬藩肥前田代領（１万６千余石）の統治機関として代官所が設置されている。

註

1．木原武雄「新鳥栖市史」　1969
2．藤瀬禎博編「長ノ原遺跡調査概報」鳥栖市文化財調査報告書第５集　1979
3．1990～91年に県営圃場整備事業に係る緊急発掘調査を鳥栖市教育委員会が実施した。
4．藤瀬禎博編「安永田遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第16集　1983

５．藤瀬禎博編「柚比遺跡群範囲確認調査第６年次概要報告書」鳥栖市文化財調査報告書第18集　1984
６．石橋新次「鳥栖市南部団地建設に伴う埋蔵文化財調査報告書」鳥栖市文化財調査報告書第26集　1986
７．藤瀬禎博編「古賀遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第２集　1978
８．松尾禎作「東肥前の先史遺跡」　1935
９．高瀬哲郎他「香田遺跡」佐賀県教育委員会　1981
10．1982～83年に鳥栖市教育委員会が調査。
11．杠一義編「本川原遺跡ー第３次調査ー」佐賀県教育委員会　1979
12．小田富士雄「佐賀田代発見の石剣と土器」『九州考古学』　1959
13．藤瀬禎博編「村田・三本松遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第17集　1983
14．藤瀬禎博編「八ツ並遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第28集　1986
15．藤瀬禎博「岸田遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第34集　1987
16．藤瀬禎博編「安永田遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第25集　1985
17．石橋新次「フケ遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第20集　1984
18．木下　巧「田代天満宮東方遺跡」佐賀県教育委員会　1973
19．藤瀬禎博他「大久保遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第６集　1980
20．藤瀬禎博編「今町・梅坂遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第33集　1987
21．石橋新次「佐賀県鳥栖市フケ遺跡出土の祭祀遺構」『古文化談叢』　10　1982
22．七田忠昭「検見谷遺跡」北茂安町教育委員会　1986
23．佐賀県教育委員会編「佐賀県の遺跡」　1963
24．1990年に北茂安町教育委員会が調査。
25．1987年発見。江島町の旧家の庭先に弁才天としてまつられていた。
26．石橋新次編「平原遺跡・平原古墳」鳥栖市文化財調査報告書第11集　1982
27．木下　巧「本川原遺跡」佐賀県教育委員会　1974
28．木下　巧「本川原遺跡ー第２次調査ー」佐賀県教育委員会　1975
29．石橋新次「本原遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第36集　1988
30．1986年に鳥栖市教育委員会が調査。
31．藤瀬禎博編「小原遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第９集　1981
32．1989～90年に鳥栖市教育委員会が調査。
33．1989年に鳥栖市教育委員会が調査した平田町一の坪遺跡から、方形周溝墓の可能性がある遺構が検出されている。（石橋新次「一の坪遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第41集　1990）
34．1989年に鳥栖市教育委員会が調査。
35．藤瀬禎博編「梅坂炭化米遺跡」鳥栖市文化財調査報告書第10集　1982
36．藤瀬禎博編「赤坂古墳」鳥栖市文化財調査報告書第32集　1987
37．埋蔵文化財研究会編『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第II分冊　1989
38．木下之治「古代」『鳥栖市史』　1973
39．木下　巧「鳥栖市山浦古墳群」佐賀県教育委員会　1973
40．松尾禎作「薄尾古墳群について」『鳥栖史談』　2　鳥栖史談会　1958
41．石橋新次「剣塚前方後円墳」鳥栖市文化財調査報告書第22集　1984
42．藤瀬禎博編「岡寺前方後円墳」鳥栖市文化財調査報告書第21集　1984
43．志佐　彦編「庚申堂塚調査報告書」『佐賀県立博物館調査研究』　4　佐賀県立博物館　1978
44．保存科学研究会編「田代太田古墳」鳥栖市文化財調査報告書第１集　1976
45．藤瀬禎博編「梅坂古墳群」鳥栖市文化財調査報告書第27集　1986
46．松尾禎作「原始時代の鳥栖」『鳥栖史談』　2　鳥栖史談会　1958
47．石橋新次「永田古墳群」鳥栖市文化財調査報告書第32集　1986
48．木下　巧「東十郎古墳群」佐賀県教育委員会　1966
49．「川上神社文書」『佐賀県史料集成』第１巻　1955
50．1985年に鳥栖市教育委員会が調査。
51．鳥栖市教育委員会編『筑紫氏と鳥栖の山城』　1990
52．千田嘉博「肥前勝尾城」『別冊歴史読本』　1990
53．1989～90年に県営圃場整備事業に係る緊急発掘調査を鳥栖市教育委員会が実施した。

第3章　遺　跡　各　説

都谷（みやこだに）遺跡

遺跡名：都谷遺跡（略号ＭＫＤ）
所在地：鳥栖市萱方町字都谷

都　谷　遺　跡

Ⅰ．遺跡の概要

脊振山系東端の九千部山（標高847.5m）から南東にのびる尾根の一支嶺である群石山（標高201m）の山麓部に遺跡は位置する。群石山を支嶺とするこの尾根は東は大木川、西は安良川によって深く開析されており、また、山麓部はやせ尾根が南方に幾筋ものびており、これらの尾根、あるいは谷を支群にして古墳群が形成される。本遺跡もそのなかの4つの支群となる。

本遺跡周辺にも濃密な古墳群の分布が見られる。まず、鳥栖市東部を流れる大木川の東岸に東十郎古墳がある。これは杓子ケ峰から南下する舌状の六つの小丘陵を支群として古墳群が形成され、1つの支群には3基から20基の古墳が築造される。このほか古墳時代後期の群集墳として大木川西岸に、十三塚古墳群、横井古墳群、門前古墳群などがある。大木川東岸の荻野丘陵には壁画系装飾画をもつ田代太田古墳をはじめとしてとして岡寺前方後円墳・庚申堂塚前方後円墳・剣塚前方後円墳などが築成され、6世紀代のこの地域の首長墓群を形成するがこれらの首長墓群と山麓部の群集墳は何らかのかかわりをもつと考えられる。とくに、多くの古墳群が丘陵尾根上に直線的に並んで築造されるのに対して、都谷遺跡B地区や東十郎古墳群の第2区や第4・5区のように密集型の群集墳が形成されることは政治動向と無関係ではあるまい。

本遺跡はA、B、C、D地区の4地区からなるが、それぞれこれらは尾根上あるいは谷部に立地する。その中でもやせ尾根裾部のB地区に最も古墳が密集する。この尾根は裾部で幅約90m、中腹で幅約50mを測り東西両側は急斜面となる。B地区上方の尾根上にも古墳は現存するが、調査区のものとあわせると30数基にもなる密集型の群集墳を形成する。B地区から谷をはさんで南西250mには宮西遺跡があり調査の結果古墳2基を検出した。B地区と宮西遺跡の間の谷部がA地区で調査の結果古墳1基を検出した。A地区の南には、南方にのびる細長い独立丘陵、標高77mがあるが、ここにも数基の古墳が現存する。D地区はB地区から谷をはさんで東方200mの尾根頂部に位置し、B地区とD地区の間の谷部がC地区である。尾根上に立地するのが西から宮西遺跡、B地区、D地区でその谷部にA地区、C地区が位置する。

各地区で検出した遺構についてはTab.2の遺構一覧表に示す。古墳の内部主体の内訳は複室両袖型横穴式石室が11基、単室両袖型横穴式石室が9基、小石室が2基である。これらの中で天井部まで遺存していたのは2基で、そのほとんどが腰石およびその上方の壁石数段が残存するのみである。出土遺物については、それが全くなかったのは小石室のＳＴ005だけで比較的多くの遺物を検出できた。ただ、横穴式石室でも新時期に築造されるＳＴ013、ＳＴ018、ＳＴ019古墳などは副葬品が少なくなる傾向が看取できた。装身具ではＳＴ014古墳で水晶製切子玉など多くの玉類が、また、ＳＴ002、004、008、012、015古墳で馬具が出土した。

Tab. 2　遺構一覧表

A地区

遺構名	石室形式	規模(m) (玄室)中央長×中央幅	時期(小田編年) 築造～追葬	備考
ST001	複室両袖型	2.55×2.30	Ⅳ期～Ⅴ期	

B地区

遺構名	石室形式	規模(m) (玄室)中央長×中央幅	時期(小田編年) 築造～追葬	備考
ST001	複室両袖型	2.40×1.95	Ⅳ期～Ⅴ期	天井部まで遺存
ST002	複室両袖型	2.40×2.05	Ⅳ期～Ⅵ(新)期	天井部まで遺存
ST003	複室両袖型	1.90×2.25	Ⅳ期～Ⅵ(新)期	
ST004	複室両袖型	2.25×2.10	Ⅳ期～Ⅵ(古)期	
ST005	小石室	1.75×0.80	Ⅵ(新)期	出土遺物なし
ST006	小石室	0.85×0.80	Ⅵ(新)期	
ST007	単室両袖型	2.70×2.25	Ⅳ期～？	追葬土器なし
ST008	複室両袖型	2.85×2.15	ⅢB(新)期～Ⅳ期	
SX009			Ⅳ期	個別図なし
ST010	単室両袖型	2.0 ×2.0	Ⅳ期～Ⅵ(古)期	
ST011	複室両袖型	2.75×2.15	ⅢB(新)期～Ⅵ(新)期	
ST012	複室両袖型	1.80×1.90	ⅢB(新)期～Ⅵ(新)期	
ST013	単室両袖型	1.90×2.10	Ⅵ(新)期	
ST014	単室両袖型	2.05×1.95	ⅢB(古)期～Ⅴ期	
ST015	複室両袖型	2.75×2.90	ⅢB(新)期～Ⅴ期	
ST016	単室両袖型	2.10×1.90	ⅢB(新)期～Ⅵ(新)期	
ST017	単室両袖型	2.30×2.50	ⅢB(新)期～Ⅵ(古)期	
ST018	単室両袖型	1.65×1.70	Ⅵ(新)期	時期決定遺物なし
ST019	単室両袖型	1.75×1.50	～Ⅵ(新)期	

C地区

遺構名	石室形式	規模(m) (玄室)中央長×中央幅	時期(小田編年) 築造～追葬	備考
ST001	複室両袖型	2.20×1.95	Ⅳ期～Ⅴ期	
ST002	単室両袖型	2.60×2.10		時期決定遺物なし
SK003	円形土壙	1.50×1.25	中世？	

D地区

遺構名	石室形式	規模(m) (玄室)中央長×中央幅	時期(小田編年) 築造～追葬	備考
ST001	複室両袖型	2.50×2.40	Ⅳ期～Ⅵ期	
SK002	不整楕円形土壙	1.75×0.60		

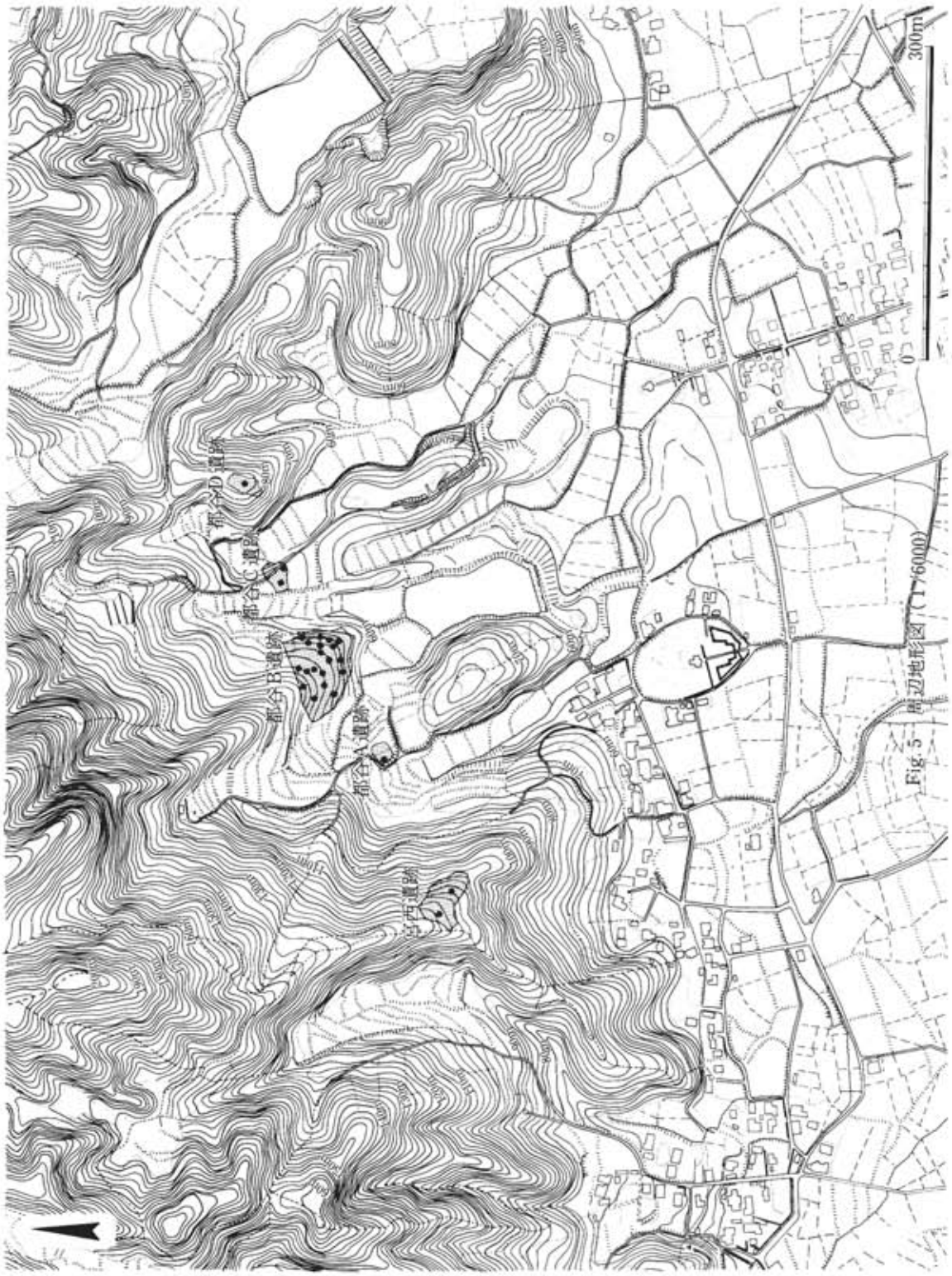


Fig. 5 周辺地形図 (1/6000)

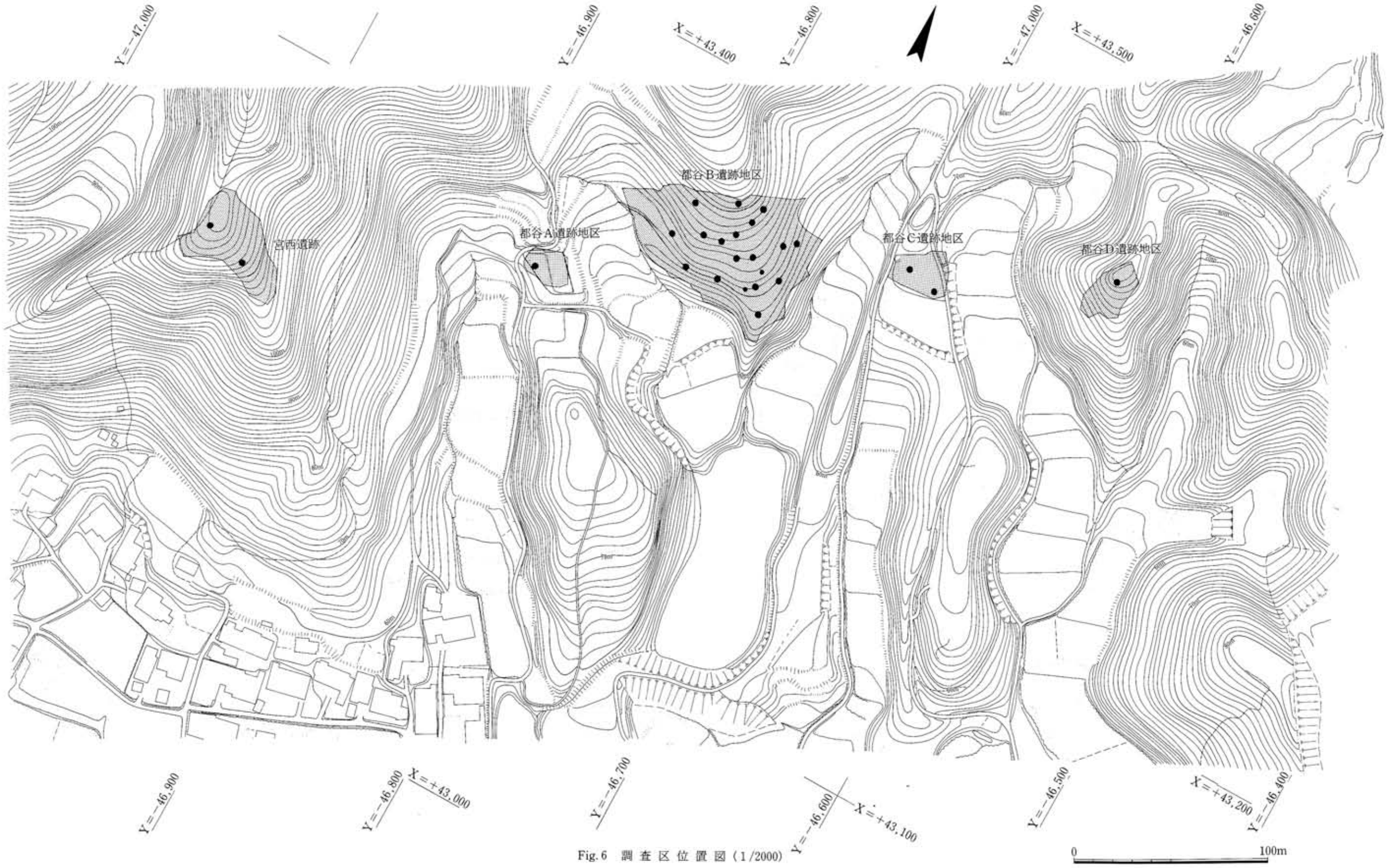


Fig. 6　調 査 区 位 置 図（1/2000）

土器の分類について

古墳群の形成過程を論ずる場合や群集墳研究を進めるためにはどうしても古墳おのおのの築造時期および追葬期間を特定していかねばならない。その基礎的作業は古墳出土の遺物、なかでも須恵器の編年研究によるものであろう。現在、須恵器編年は田辺あるいは中村の陶邑編年、北部九州では小田編年などを用いたりしている。群集墳が出現する６Ｃ後半以降は各地方での築窯がさかんになりそれぞれの窯で生産される須恵器にも地方色がみられるようになる。そのような中で、そのまま陶邑編年、小田編年を適用して古墳の築造時期、追葬期間を特定するには無理があると思われる。密集する古墳群の古墳個々の相対的な築造、追葬期間を明確にするためには既存の陶邑編年や小田編年をもってするよりも古墳群出土の須恵器を分類して相対的な編年を組みたてることがより有効な方法であると思われる。

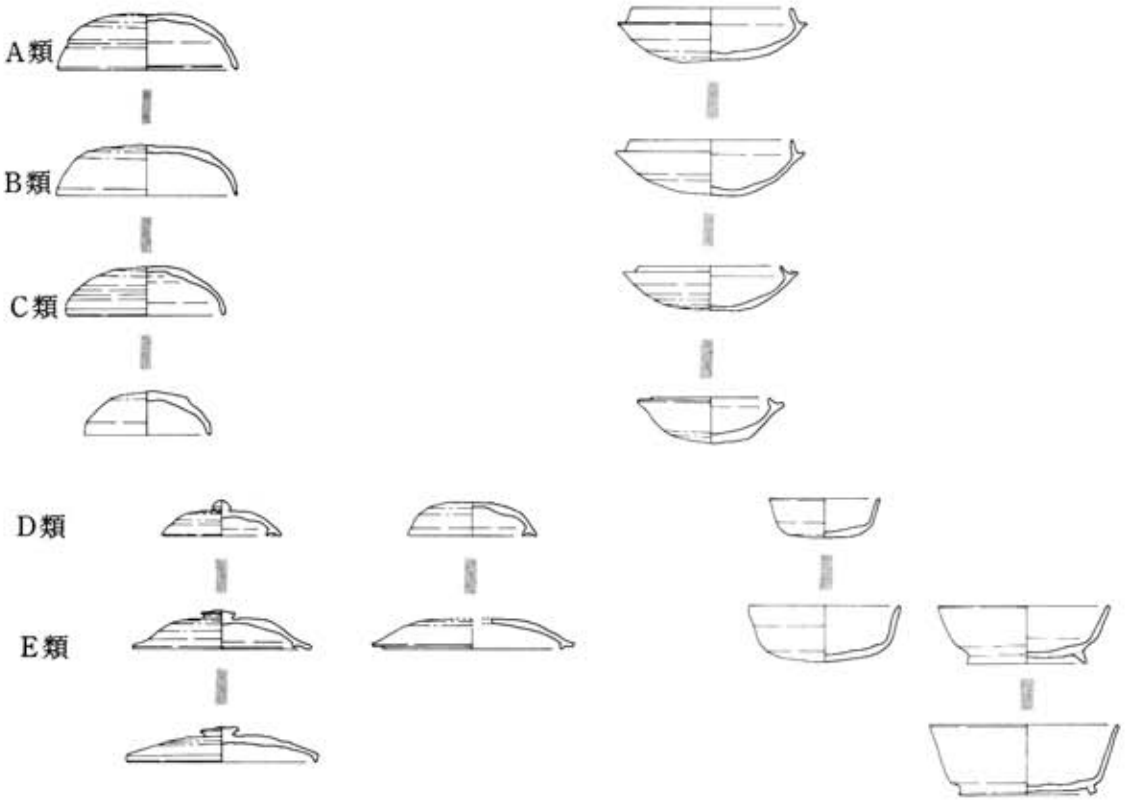


Fig. 7　杯蓋・身分類図

筆者はかつて石動二本松遺跡の4基の古墳出土の須恵器杯蓋をA～E類に分類して古墳相互の築造、追葬期間を考えてみた。本遺跡の所在する鳥栖市は石動二本松遺跡と同じく佐賀平野東部に位置し、その分類は若干の修正はあるものの適用できた。そこで本書に掲載する都谷遺跡、宮西遺跡、山浦西北方遺跡、山浦新田遺跡についてもこの分類を用いた。

杯蓋・身は法量差が時期差となってあらわれることは従来からいわれている。そこでこのA～E類の分類基準の第一の属性に法量をあげ、その他に杯蓋は稜、沈線、宝珠つまみ、かえりの有無など杯身ではたちあがりの傾き、高台の有無といった形態の他、底部・天井部に施される回転ヘラケズリ、不定方向ヘラケズリ、ヘラ切り未調整といった調整などにより分類してみた。その分類表をTab.3に示す。A～E類を小田編年に対応させるとA、B類をIIIB期、C類をIV期、D類をV期、E類をVI期と考えてみた。問題点としてC類とD類は部分的に併行関係にあることが牛頸小田浦窯などで確認されている。また、A類はIIIA期にすべきものかもしれない。いずれにせよそれぞれの古墳でどのような杯蓋・身が出土しているかを客観的にしめすデーターとしての分類である。

Tab.3　土器分類表

分類	小田編年	実年代	法量(cm) 杯蓋	法量(cm) 杯身	形態・調整の特徴
A類	IIIB古段階期	6C第3四半期	口径 14～15 器高 4～5	口径 11.5～12.5 器高 4～5 たちあがり高 1.5	蓋の天井部および身の底部は入念な回転ヘラケズリを施す。蓋の天井部と口縁部の境に稜、または沈線。口唇部内面に沈線を有す。当て道具痕を有す。
B類	IIIB新段階期	6C第4四半期	口径 13.5～14.5 器高 3.5～4.5	口径 10.5～11.5 器高 3.5～4.5 たちあがり高 1.0	蓋の天井部、身の底部は雑な回転ヘラケズリと不定方向ヘラケズリを施す。 蓋の体部の稜や口唇部内面の沈線は消失する。
C類	IV期	7C第1四半期	口径 11.5～12.5 器高 3～4	口径 10～11 器高 3～4 たちあがり高 0.8	蓋の天井部、身底部は、平坦なものがみられ、不定方向ヘラケズリのほか、ヘラ切り痕が残る。蓋と身が逆転する。
D類	V期	7C第2四半期	口径 9～10 器高 3～4	口径 7.5～8.5 器高 2～3	最も小形化が進行する。杯の蓋に宝珠つまみと、かえりが出現する。杯の蓋にはつまみなしもある。杯身の底部はヘラ切り未調整。
E類	VI古段階期	7C第3四半期	口径 11～12.5 器高 2～3.5	口径 13～14.5 器高 4～6	杯蓋にはつまみが付くものと付かないものの2タイプがあり、いづれもかえりはつく。 杯身はハの字形に開く高台が付く。
	VI新段階期	7C第4四半期			杯蓋のかえりは消失する。口縁端部は、下方にのびる。

鉄鏃の分類について

後藤守一の分類をもとに鏃身形態により下記のように分類した。

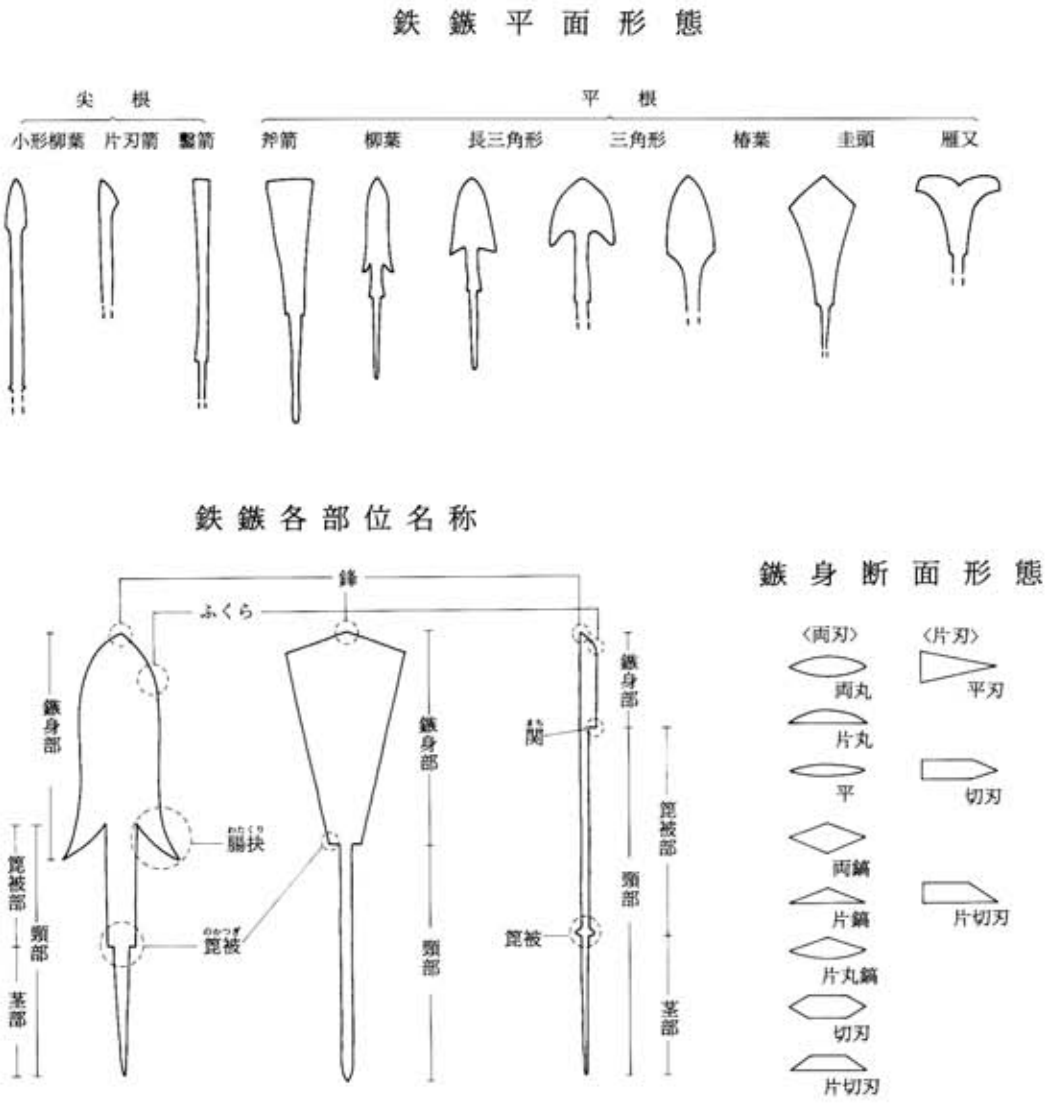


Fig. 8　鉄鏃分類、名称図

〈参考文献〉

小田富士雄「九州の須恵器序説」　『九州考古学』22　1964
小田富士雄「八女古窯跡群調査報告」　1969
船山良一「須恵器の編年　九州」　『古墳時代の研究』6　1991
後藤守一「上古時代鉄鏃の研究」『人類学雑誌』54－4　1939
飯塚武司「後期古墳出土の鉄鏃について」『研究論集』Ⅴ　東京都埋蔵文化財センター　1987
田中正夫・瀧瀬芳之「埼玉県における古墳出土遺物の研究Ⅰ」『研究紀要』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983
小松　譲「石動二本松遺跡」『西石動遺跡』　佐賀県教育委員会　1990

II．古墳時代の遺構と遺物

〈A地区の調査〉

本調査区で検出した遺構は複室両袖型横穴式古墳１基である。

１．ＳＴ001古墳

(1) 概　要

本調査区は宮西遺跡と都谷Ｂ遺跡の間で谷部に位置する。南には南方に細長くのびる丘陵があり数基の古墳が尾根上に築造される。墳丘、石室上半分は欠失し、前門部に閉塞施設が遺存する。玄室左側壁腰石の上端面には箭の跡が残る。内部主体は複室両袖型横穴式石室で前室から土器、鉄鏃、刀子などが出土した。築造時期を示す土器の出土が１点と資料不足であるが、築造は小田編年IV期で、追葬はVI期までなされる。

(2) 内部主体

複室両袖型の横穴式石室である。南側の緩斜面に向かって開口し、主軸をＮ10°Ｅにとる。前庭部は開墾により削平される。石室上部はすでになく腰石のみの残存である。玄室平面形態は長方形、前室は幅広の長方形で前庭側壁がハの字状に開く。石室掘り方は隅丸長方形で、旧表土から約１～1.5m 程掘り込む。規模は石室全長6.4m、玄室は中央長2.55m、中央幅2.30m、前室は中央長1.1m、中央幅1.55m を測る。奥壁腰石は2.2×1.3m 程の扁平石材１石を横位に配する。奥壁裏込めに青色粘土を用いて腰石を固定する。壁面は整う。右側壁腰石は２石からなるが奥壁腰石に接して、２×1.2m 程の厚めの横長石材を横位に、0.9×0.6m の石材を縦位に配する。左側壁腰石も２石からなる。奥壁腰石に接して1.8×0.9m 程の扁平な割り石と0.9×0.9m の方形石材を配する。この扁平割り石には小口面上端に計８つの箭の跡がつく。他の石材は付近から採れる花崗岩を用いるのに対して、加工した石材を腰石に用いるのは興味深い。箭の跡は上端に７つ、小口面に１つある。この加工は腰石として配置した後行ったのかそれとも石材調達時に箭をいれたのだろうか。小口面に１つ入る箭の跡にはひびが入るが、腰石配置後にここに箭を入れたとするとその理由が説明ができないし、小口面上端から箭を打ち込みわざわざ壁面を加工する意味もなさそうである。ならばこの加工は石材調達時に行ったと考えるのが自然であろう。そして腰石に使うことを目的としてではなく石棺などの板状石材の加工を意図していたと思われ、それがうまくいかず途中でやめ、それを腰石として使ったのではなかろうか。

玄門部は右袖石に1.1×0.8m、左袖石に1.1×0.9m 程の方形状石を配する。框石は扁平石３石を重ねる。玄門幅0.65m を測る。前室の左右側壁腰石は0.9×0.5m 程の横長石材を横位に配する。右側壁では腰石の上に同大の石材を横位に重ね、さらにその上に径0.5m 程の石材を積

む。前門袖石は玄門のそれよりやや小ぶりの石材を立てる。前室床面を検出する中で、床面から40cm浮いた状態で多くの小石が配されていた。初めこれを追葬面かとも考えていたがこの下から最終追葬時の須恵器、鉄鏃が出土したことなどから、この面は後世のものと考えた。

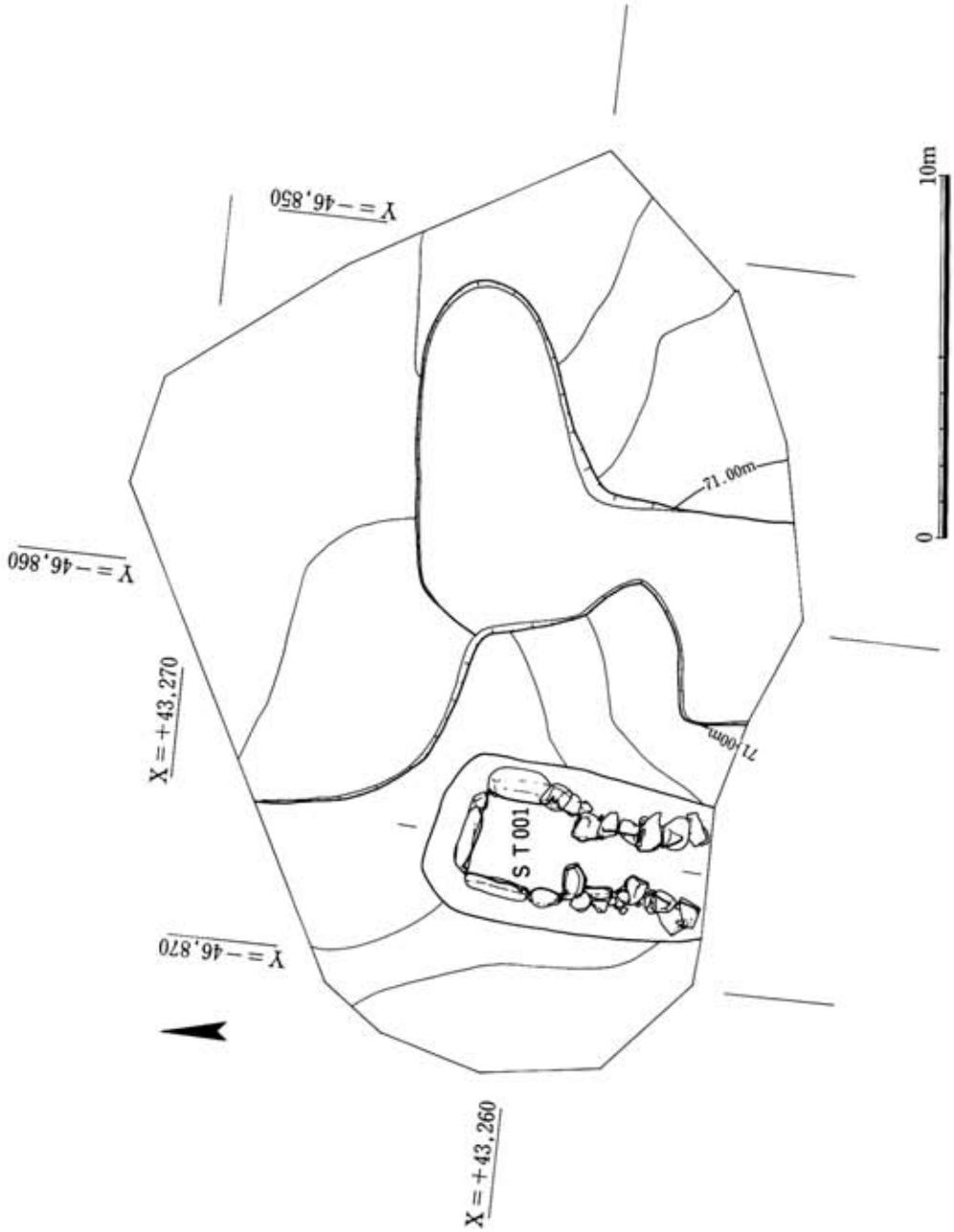


Fig. 9　ST001古墳墳丘（1/200）

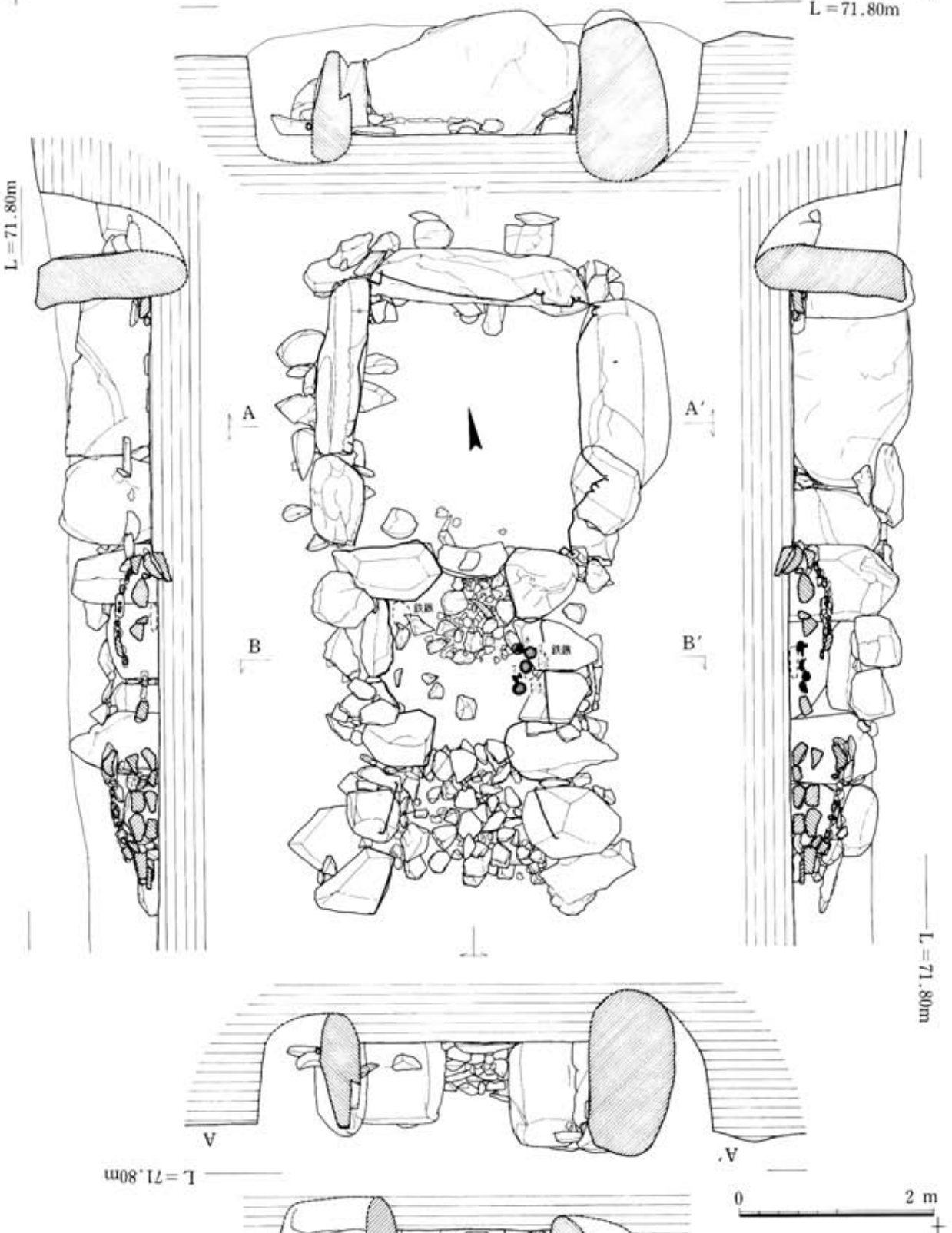


Fig.10　ＳＴ001古墳石室（1/60）

前庭側壁は平面ハの字状に開き、腰石に0.6×0.3m程の横長石材を横位に配する。天井部は前門袖石に架構する楣石までで前庭側壁には天井石を架構してないのだろう。

閉塞施設は前門部にあり、径0.3～0.2mの転石を積み上げる。

遺物は前室右側壁付近から最終追葬時の須恵器が7点、またその下と左側壁隅から鉄鏃、刀子が出土した。

Tab.4　ST001古墳出土土器一覧表

（　）は推定

Fig.図番号 (PL番号)	出土地点	器種	法量cm	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
11－1	ST01 石室埋土	杯蓋 (須恵器)	口径 (13.4)	体部から口縁部にかけて屈曲する。天井部は雑な回転ヘラケズリ。	灰色	普通	85-3613
－2 (PL.42)	ST01 前室左壁	杯蓋 (須恵器)	口径 11.4 器高 3.6	宝珠つまみ付き。若干、楕円形気味である。体部にヘラ記号あり。	黄褐色	普通	85-3611 900279
－3 (〃)	ST01 前室左壁	杯蓋 (須恵器)	口径 11.5 器高 3.2	宝珠つまみ付き。体部から口縁部にかけて一部黄褐色。	灰白色	普通	85-3609 900277
－4 (〃)	ST01 前室左壁	杯身 (須恵器)	口径 12.0 器高 5.5	底部ヘラ切り離し。未調整。底部にヘラ記号有り。	灰白色	普通	85-3606 900275
－5 (〃)	ST01 前室左壁	杯身 (須恵器)	口径 12.8 器高 4.6	高台付き。高台は外側に開き断面は三角形。	灰白色	不良	85-3610 900278
－6 (〃)	ST01 前室左壁	杯身 (須恵器)	口径 13.5 器高 4.4	高台付き。高台は外側に開き断面は三角形。	灰白色	不良	85-3607 900276
－7	ST01 前室左壁	高杯 (須恵器)	口径 9.0 器高 7.7	杯部は内湾しながらたちあがる。脚裾部は外側に広がる。硬質。	灰黒色	良好	85-3608 900270
－8 (〃)	ST01 前室左壁	平瓶 (須恵器)	口径 6.0 器高 10.9 胴径 12.0	肩がやや張る。径1～2㎜の砂粒を含む。底部回転ヘラケズリ。	灰色	普通	85-3612 900280

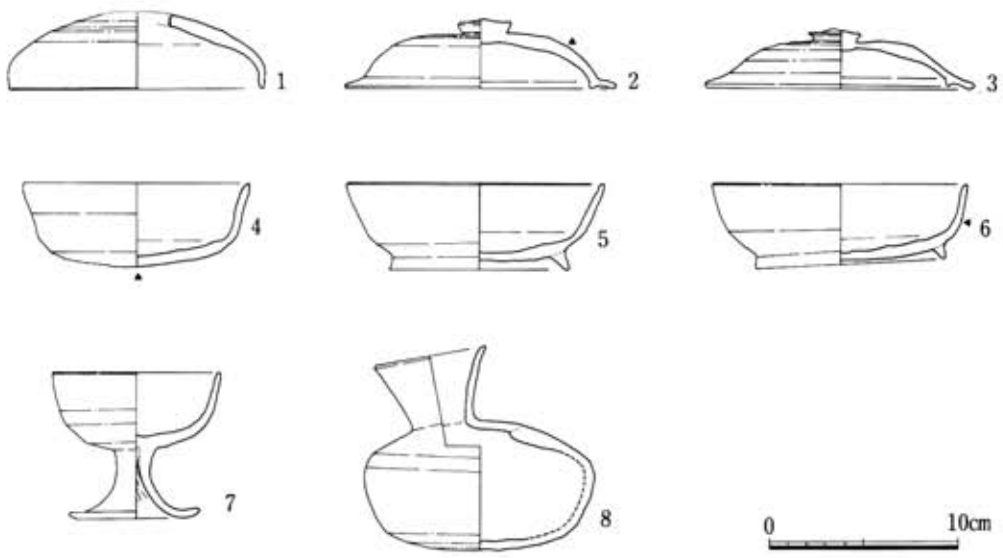


Fig.11　ST001古墳出土須恵器（1/4）

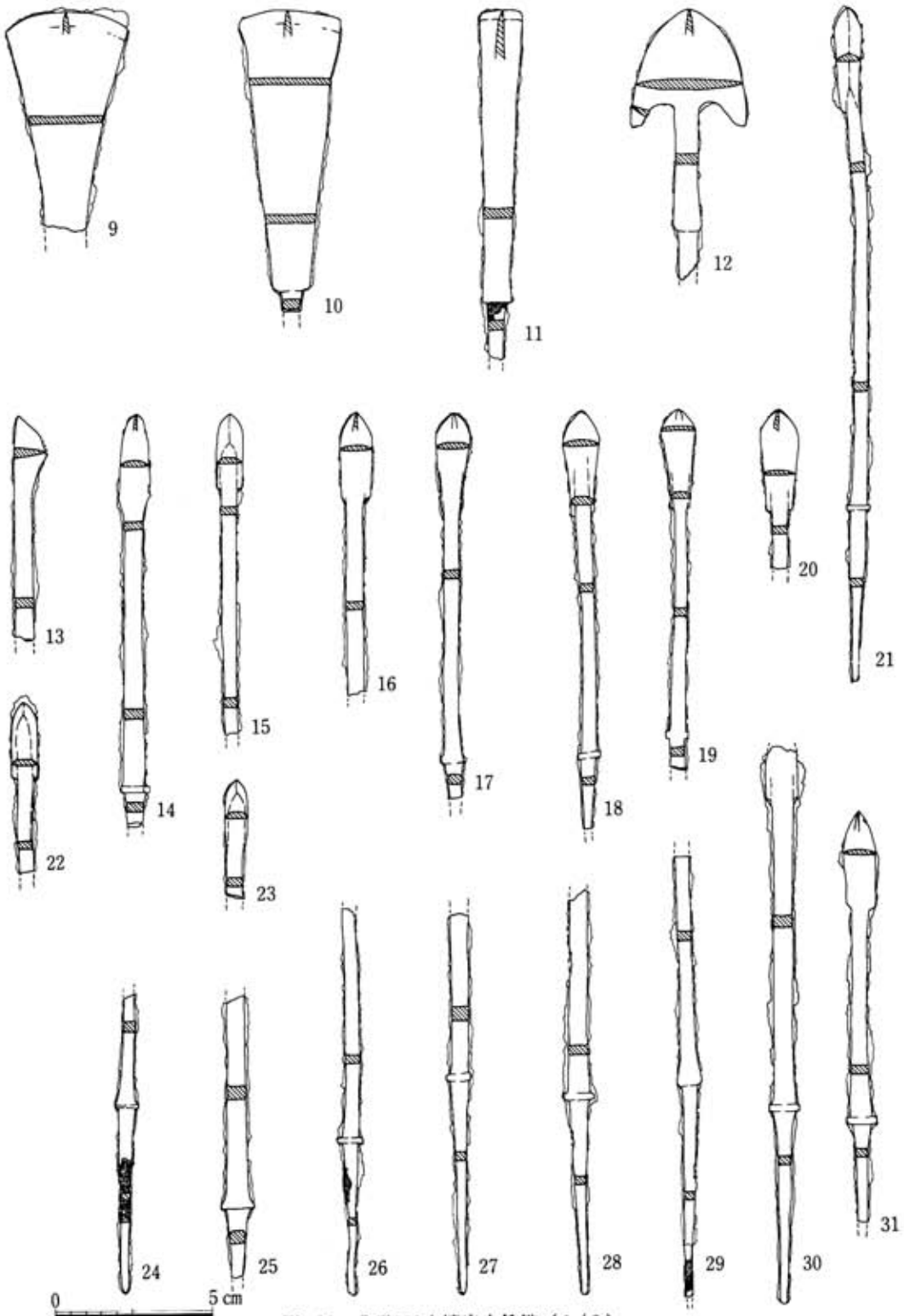


Fig.12　ＳＴ001古墳出土鉄鏃（1／2）

(3) 出土遺物

須恵器

杯蓋はC類(1)・E類(2、3)、杯身はE類(4、5、6)がある。1は石室内出土、天井部から口縁部にかけて約1/3残存する。2、3は杯蓋。宝珠つまみ付きで内側にかえりが付く。出土状況から3と5はセットであろう。4、5、6は杯身、4は底部ヘラ切り未調整。5、6は高台付き。

7は高杯、8は平瓶。7は口径9.0cmと小形化が進んでおり杯D類の時期であろう。1以外はすべて前室左壁付近から出土。4と6は4が上で、3と5は3が上にそれぞれ重なった状態で出土している。

鉄　器

鉄鏃(9～31)すべて前室内出土で、右壁隅と左壁で須恵器の下からまとまって出土した。平根式(9～12)と尖根式(13～23、30、31)がある。9、10、11は斧箭式、9、10の鉾先は丸みをもつ。鏃身縦断面両丸造。11は鏃身部幅が狭い。鏃身縦断面片切刃。12は両丸造腸抉三角形式、篦被不明瞭。13は片刃箭式。14～31は後藤分類では鏨箭式である。身平面形態は肩が張るもの(17、18、19、20)と身側縁部から丸みをもち鋒先にのびるもの(14、15、16、21、22、23、31)がある。身断面形態は片丸造(14、16、17、18、19、20、23、31)片切刃造(15、22)片鎬造(21)がある。14、17は関部が不明瞭で、21は片側のみ関部がある。全長21cm。14、17、18、19、21、24、25、26、27、28、30、31は棘篦被をもつ。

刀子(34～37)すべて前室左壁出土である。34は刃部を一部欠くものほぼ完存する。全長15.7cm、茎部長5.5cm、身長10.2cm、両角関である。35は身のみ残存。36、37は関部から茎部にかけて残る。36は茎部長5.0cm、両角関である。37は縁金具を残す。両削関である。

不明鉄器(32、33)32は全長4.3cm、断面円形である。形態的には引手壺あるいは鉸具に近いがそれにしては小さすぎるし他に馬具も出土していない。33は平面半円形で側円部はいきている。

装身具

耳環(38)銅地銀張り。緑青がふき内面は漆黒色。成分分析結果では金銀ともに含まれていることが判明した。金より銀の量が多い。

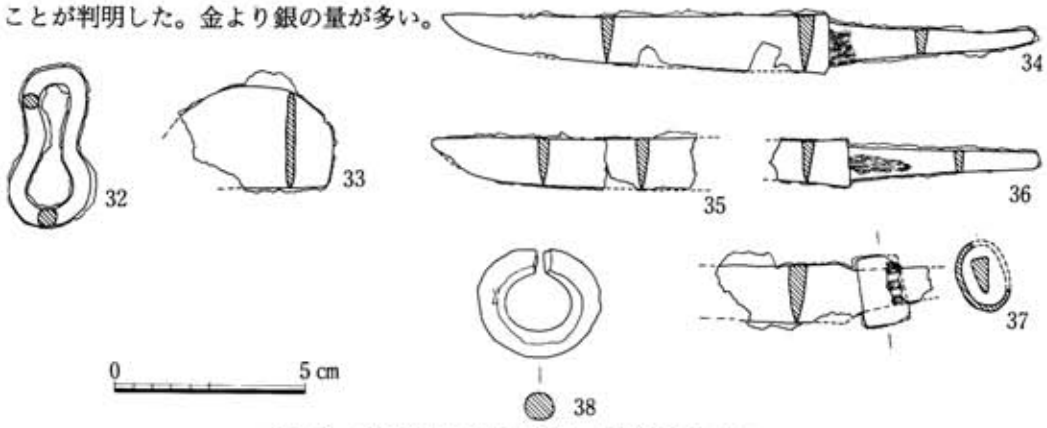


Fig.13　ST001古墳出土鉄器・装身具（1/2）

〈B地区の調査〉

本調査区で検出した遺構は複室両袖型横穴式古墳８基、単室両袖型横穴式石室８基、小石室２基、不明遺構１基である。東西両側はやせ尾根という極めて制約された地形に古墳を築造し、密集型の群集墳を形成する。調査区中央には大規模に地山を掘削し、墓域の再編を想定できる。

Fig.14　S T001・003～006古墳墳丘（1/250）

1．ＳＴ001古墳

(1) 概　要

調査区の南で本古墳群の中では最も低位置に築造される。北には隣接してＳＴ004古墳が北西には本墳周溝と切り合うＳＴ003古墳がある。墳丘、石室とも遺存状態は良好で調査時にはすでに開口していた。前門部に閉塞施設が残存する。内部主体は南に開口する複室両袖型の横穴式石室で、玄室平面形態は長方形で前室は幅広の長方形である。墓道出土の土器は上下２面をもっており、土器に型式差はないものの２回の追葬を想定できる。出土遺物から築造は小田編年Ⅳ期で、追葬はⅤ期まで。

(2) 墳丘・周溝

周溝外径約20m の円墳である。周溝の北側および東側など部分的に削平を受ける。周溝幅は約3m で深さ40～50cm、断面は浅い三角形である。平面形で玄室中心が墳丘の中心となるよう設計される。石室掘り方は羨門部でくびれる平面羽子板形である。

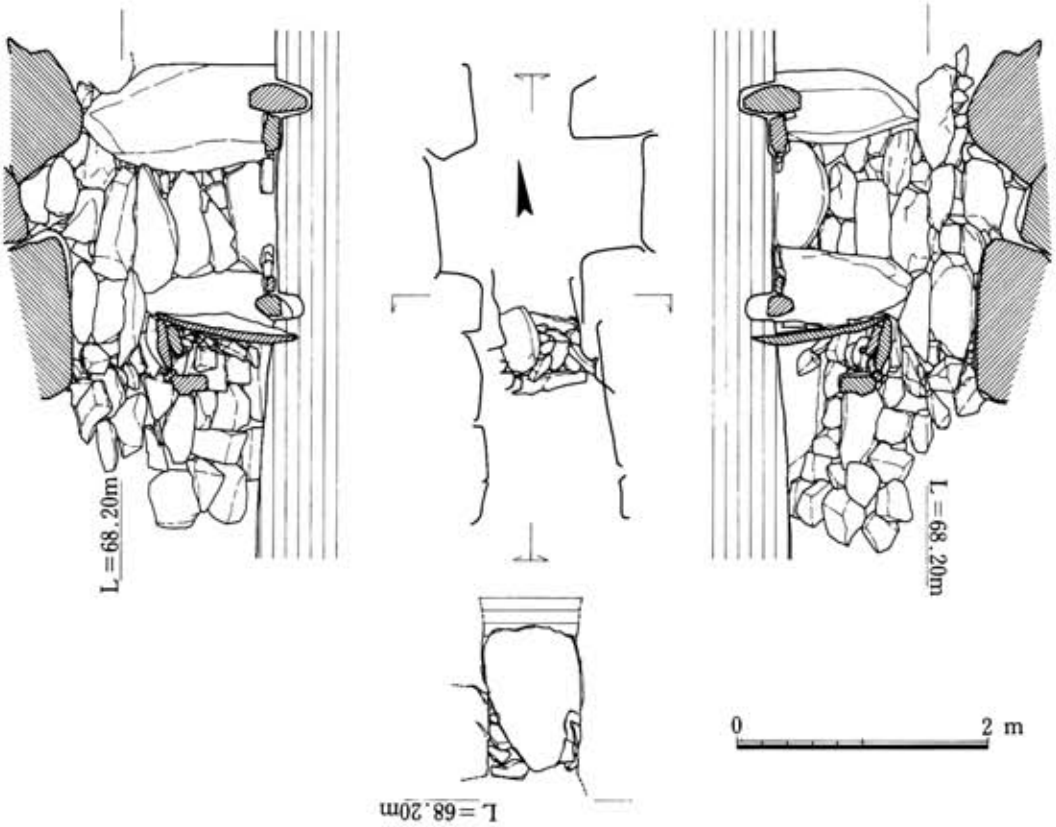


Fig.15　ＳＴ001古墳石室閉塞状況（１/60）

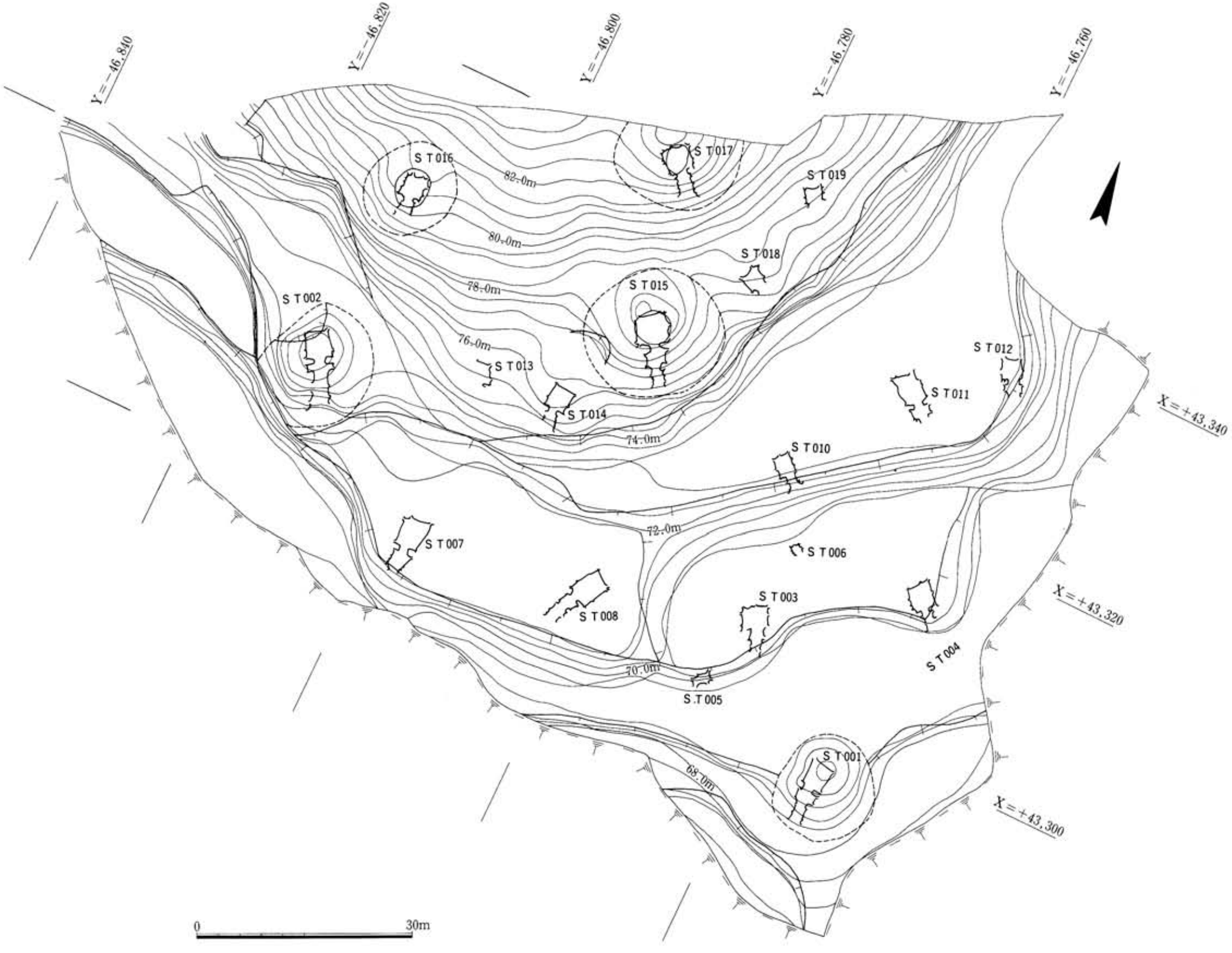


Fig.16　B地区調査前地形測量図（1/600）

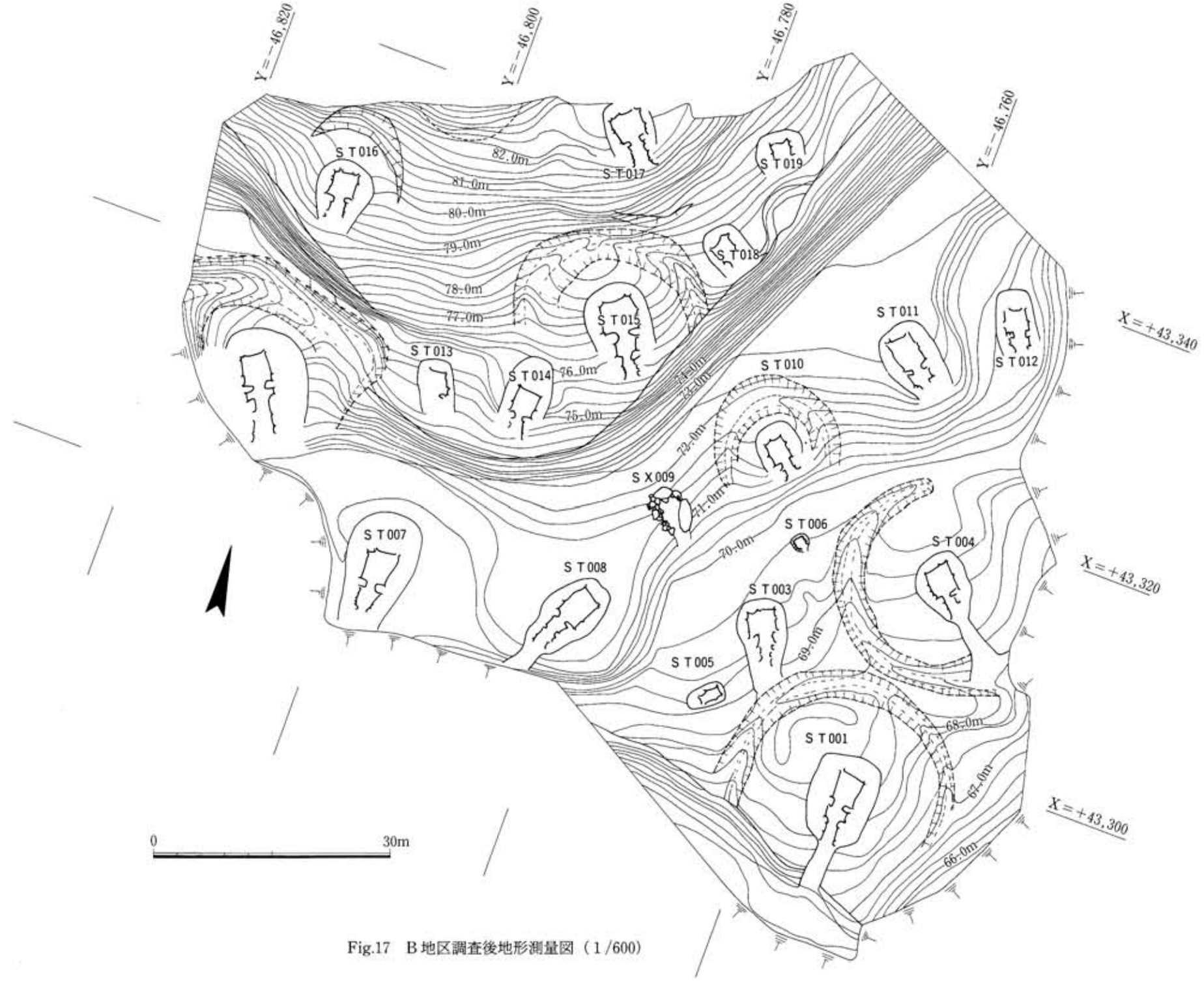


Fig.17　B地区調査後地形測量図（1/600）

墳丘の盛土はほぼ完存し墳丘基底面からの高さ約1.7～2.8m を測る。丘陵斜面に対して石室主軸が約45°傾くため墳丘基底面も左側壁側が高くなる。右側壁側の墳丘基底面は掘り下げすぎか地山状の黄白色土を盛り上げる。旧表土は黄褐色土でこの40～50cm下には黒褐色土が堆積する。石室掘り方の裏込め土はこれら黒褐色土と黒褐色土混入黄褐色土を交互に版築状につき固める。石室掘り方内の裏込め土は奥壁側と右側壁側では、腰石とその上方１～２段石積みまで水平に堆積するが、左側壁側では石室床面に向かって斜方に堆積する。その上方の盛土は褐色土を多用し、その単位も比較的細かい。これは石室側壁に小形の石材を用いることに起因するのであろう。

(3) 内部主体

複室両袖型の横穴式石室である。南側の斜面に向かって開口し、主軸をＮ７°Ｅにとる。墳丘、石室ともに遺存状態は良好で石室は天井部まで完存し、調査時にはすでに開口していた。

玄室平面形態は選定した石材のため前壁側がやや狭くなるが長方形を意図しており、前室は幅広の長方形で、羨道部を連接する。

規模は石室全長6.0m、玄室は中央長2.4m、中央幅1.95m、天井高2.5m、前室中央長1.05m、中央幅1.60m、天井高2.0m を測る。奥壁は腰石に1.8×1.4m 程の石材１石を横位に配し、その上に長さ50～70cmの柱状石材を３段から４段横積みする。左右側壁の石積みは類似するが、腰石に2.3×1.0m 程の横長石材を１石横位に配し、その上に奥壁と同大の柱状石材あるいは方形石材を５～６段積む。奥壁、両側壁の石材とも大きさはそろっ

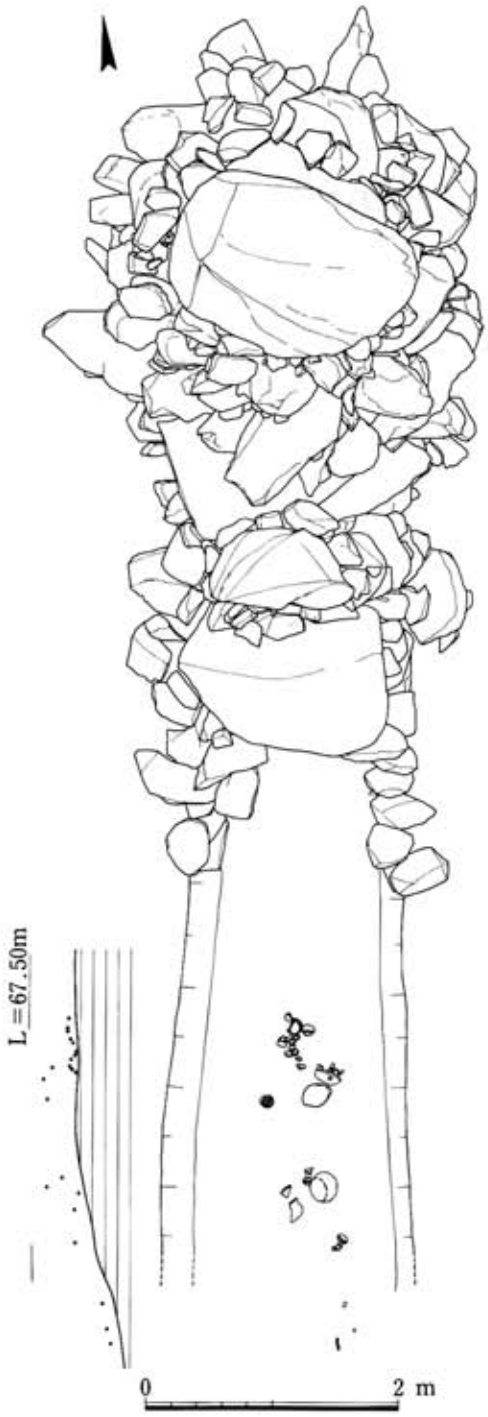


Fig.18　ＳＴ001古墳天井石（１/60）

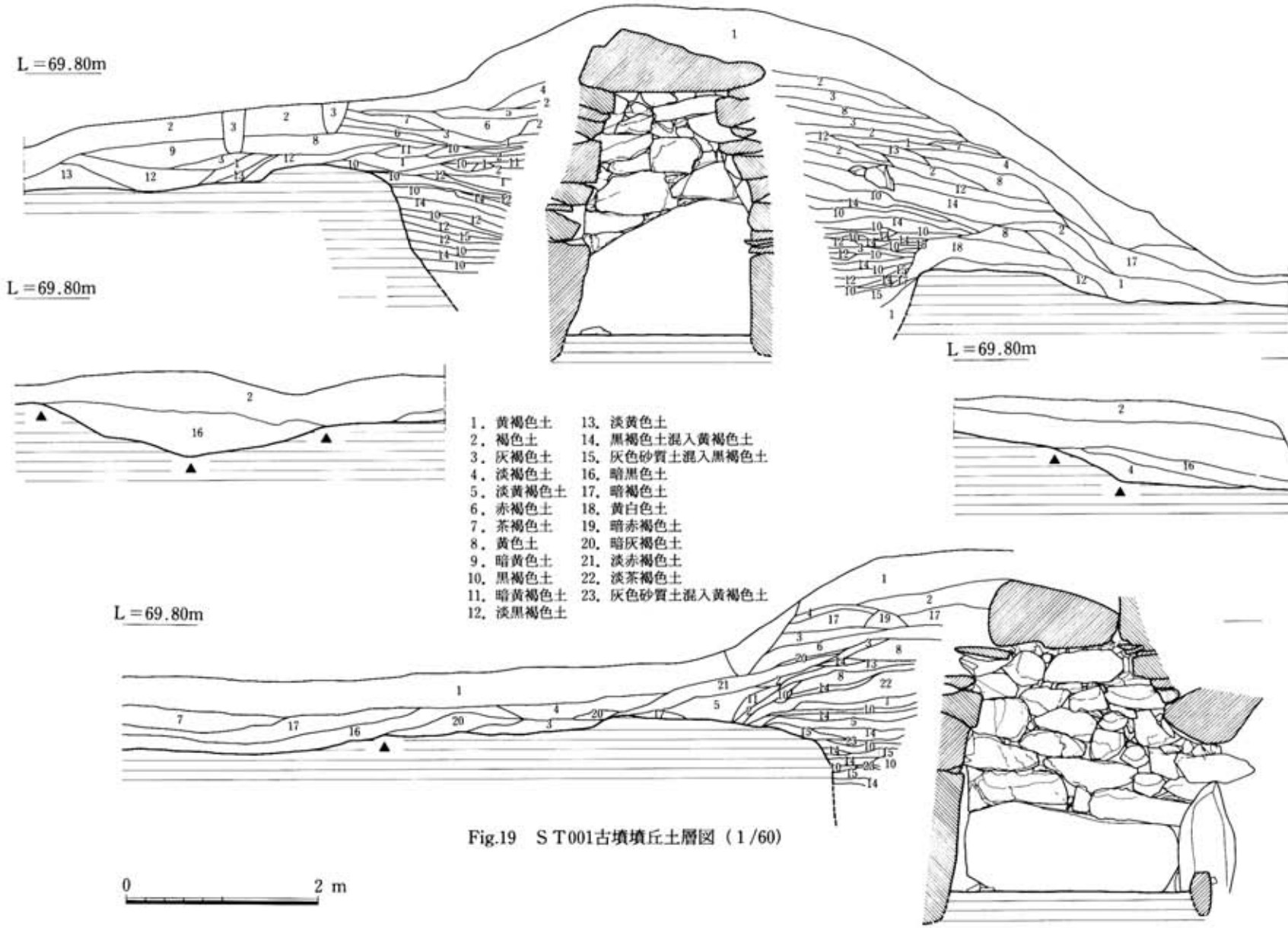


Fig.19　ＳＴ001古墳墳丘土層図（1/60）

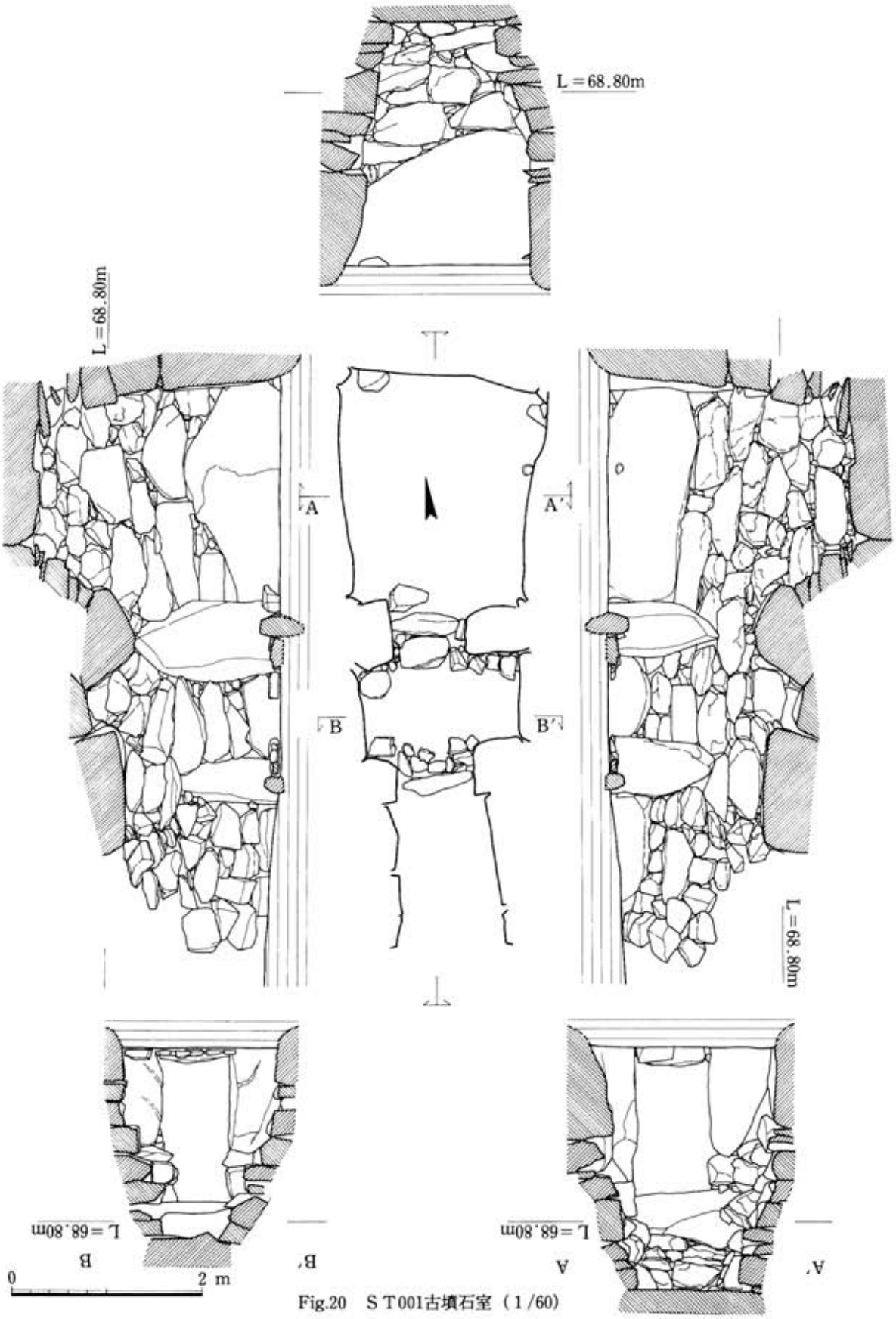


Fig.20　ＳＴ001古墳石室（1/60）

ておらず、隙間に小石を詰め込むなど目地も通らない。奥壁、左側壁の腰石は内傾しており上方の石積みも腰石の傾斜に沿って持ち送られている。右側壁腰石は垂直に立っており3段目から持ち送られている。玄室天井石は2×1.4mの扁平楕円状石1石を架構する。

玄門部は右袖石に1.2×0.5m、左袖石に1.5×0.8m程の石材を立てる。左袖石は面とりされ、角ばる。左袖石はその上から右袖石はその上に1段積んで楣石を架構する。床面には框石を配する。玄門幅0.75mを測る。

前室左右側壁は腰石およびその上方の石積み共に横長石材を横位に積み上げている。前門袖石は玄門袖石よりやや小ぶりで1×0.5m程の柱状石材を立てる。この左右袖石の上に2～3段積んで径1.6m程の楣石を架ける。これら玄門楣石と前門楣石に前室天井石を架構する。そのため前室天井部は玄門、前門より高くなる。前門幅0.8mを測る。

羨道部はとくに大きな石を用いず、乱雑に積み上げ、羨道天井部は前門楣石が兼ねる。

閉塞施設は前門框石を根石として、板状石で前門に蓋をしたような形となる。この板石と羨道天井部の間は70cm程空くが、本来密封されていたのだろう。

(4) 出土遺物

須恵器・土師器・鉄器・装身具などが出土しているが須恵器・土師器はそのほとんどが墓道から、鉄器・装身具は前室および墓道からの出土で玄室内出土は杯蓋1点のみである。墓道からの遺物出土状況をみると地山面直上出土の土器群とそれから約10～15cm浮いて須恵器壺、甕、転石2石とその上から耳環が出土しており、これら2つの出土面を追葬面とするならば2回の追葬を想定できる。しかし甕を見る限り型式差がなく2回の追葬はさほどの時期差を示さないと考えられる。

須恵器

杯蓋はC類(39、40)・D類(41)、杯身もC類(44、45、46、47、48)・D類(49)がある。D類は杯蓋・身とも1点づつと少ない。44、45は器壁が厚く底部調整も雑である。41、49はヘラ切り未調整。42、43は宝珠つまみ付き蓋で有蓋高杯の蓋とおもわれるがセットになるような高杯は出土していない。50、51、64は高杯で50が長脚高杯の杯部で櫛描き波状文の下方に櫛描き列点文を施文する。51は短脚高杯の脚部。64は赤焼きの須恵器。52、53、54、55、56、57は甕。52、54はとくに形態、施文が類似、ともに胴部内に穿孔時の粘土塊を残す。胴部の施文が52は櫛描き列点文で53はヘラ描き斜行文という違いがあるのみである。53は肩部がはる。52、53、54、55とも胴径が8.2～8.4cmとほぼ同じである。56、57は甕の口縁部。58、59、60、61は壺。58、61は口縁部を一部欠くもののほぼ完形である。どちらも形態は似ており、丸底で最大径が上位にある胴部に外反する口頸部がつく。58の器高22.0cm、61の器高25.6cm。60は広口壺の口縁部。62、63は提瓶。62は胴径26.4cmと大形である。どちらも肩部に把手を付けるが欠損しておりその跡から62は二重に環状把手

Tab.5　ST001古墳出土土器一覧表

（　）は推定

Fig-図番号 (PL番号)	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
21—39 (PL.43)	ST01 墓道床面	杯蓋 (須恵器)	口径 (12.2) 器高 3.8	天井部約2/3回転ヘラケズリ。	灰黒色	普　通	85-3843 900380
—40	ST01 墓道床面	杯蓋 (須恵器)	口径 (13.0)	口縁部約1/4残存。	灰　色	やや良	85-3844
—41 (〃)	ST01 玄室床面	杯蓋 (須恵器)	口径 9.6 器高 1.9	天井部ヘラ切り離し未調整。天井部にヘラ記号あり。赤焼き。	赤橙色	普　通	85-3852 910417
—42 (〃)	ST01 墓道床面	蓋 (須恵器)	口径 13.5 器高 4.0	宝珠つまみ付き。天井部約3/4回転ヘラケズリ。	灰黒色	良　好	85-3848 900381
—43	ST01 墓道床面	蓋 (須恵器)	——	宝珠つまみ付き。天井部回転ヘラケズリ。砂粒を含む。	灰　色	普　通	85-3847
—44 (〃)	ST01 墓道床面	杯身 (須恵器)	口径 (12.0) 器高 3.8 たちあがり高0.9	底部は雑なヘラケズリ。器壁は厚い。	灰白色	不　良	85-3845 901273
—45 (〃)	ST01 墓道床面	杯身 (須恵器)	口径 (10.8) 器高 3.8 たちあがり高1.2	底部は平坦。調整不明瞭。器壁は厚く砂粒を含む。	灰白色	不　良	85-3835 901274
—46 (〃)	ST01 墓道床面	杯身 (須恵器)	口径 10.4 器高 4.2 たちあがり高0.8	底部約2/3回転ヘラケズリ。	灰黒色	普　通	85-3834 900375
—47	ST01 墓道床面	杯身 (須恵器)	口径 (11.4) たちあがり高0.9	口縁部約1/5残存。体部にヘラ記号あり。	灰　色	普　通	85-3846
—48	ST01 墓道床面	杯身 (須恵器)	口径 (11.0) たちあがり高1.3	受部とたちあがりの境に沈線あり。受部は上方にのびる。	灰黄色	普　通	85-3849
—49	ST01 前室埋土	杯身 (須恵器)	口径 (10.0) 器高 4.0	底部ヘラ切り未調整。	橙褐色	普　通	85-3853
—50	ST01 墓道床面	高杯 (須恵器)	口径 (12.8)	高杯杯部、体部に櫛描波状文と櫛描列点文を施文。	灰　色	普　通	85-3842
—51	ST01 墳丘盛土	高杯 (須恵器)	底径 (10.8)	短脚高杯脚部。	灰色	普　通	85-3856
—52 (〃)	ST01 墓道床面	壺 (須恵器)	口径 (11.2) 器高 14.2 胴径 8.2	頸部に二条の沈線、胴部に二条の沈線、その間に櫛描列点文を施す。胴部内に穿孔時の粘土塊残存。	灰　色	普　通	85-3837 900407
—53 (〃)	ST01 墓道床面	壺 (須恵器)	胴径 8.4	頸部にヘラ描き連続斜行文を二段に、胴肩部に二条の沈線間にヘラ描き連続斜行文を施す。	灰白色	普　通	85-3838 900377

（ ）は推定

Fig.図番号 (PL番号)	出土地点	器種	法量cm	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
21—54 (PL.43)	ST01 墓道床面	甕 (須恵器)	口径 12.1 器高 13.8 胴径 8.2	形態は52に類似。胴部にヘラ描き斜行文施文。胴部内に穿孔時の粘土塊残存。	灰色	普通	85-3839 900378
—55 (〃)	ST01 墳丘盛土	甕 (須恵器)	胴径 8.4	底部は平坦、胴部中位に二条の沈線間に櫛描列点文を施文。	灰白色	普通	85-3858 900383
—56	ST01 墓道床面	甕 (須恵器)	口径 11.0	頸部に櫛描波状文を施文。	灰色	普通	85-3841
—57	ST01 墓道床面	甕 (須恵器)	口径 (12.0)	口縁部で屈曲する。	灰色	普通	85-3840
—58 (〃)	ST01 墓道床面	壺 (須恵器)	口径 (13.2) 器高 22.0 胴径 11.8	胴部最大径は上位にあり丸底である。胴部内面に同心円文タタキあり。	灰白色	不良	86-4744 900596
—59	ST01 墳丘盛土	壺 (須恵器)	口径 (18.8)	口縁端部は、断面台形状におさめる。	灰色	普通	85-3855
—60	ST01 墳丘盛土	壺 (須恵器)	口径 (29.1)	口縁端部は面取りされる。	灰色	普通	85-3857
22—61 (〃)	ST01 墓道床面	壺 (須恵器)	口径 (18.2) 器高 25.6 胴径 23.8	胴部最大径は上位にあり丸底である。胴部上半部カキ目、下半部格子目状タタキ。胴部内面同心円文タタキ。	灰色	やや良	85-3836 901270
—62 (PL.44)	ST01 墓道床面	提瓶 (須恵器)	胴径 26.4	肩部に二重の把手がつく。胴部前面に5条の沈線、その間に、ヘラ描き斜行文、櫛描波状文、櫛描列点文を施文。胴部背面はカキ目のちヘラ描き文。	灰色	やや良	85-3876 901271 901272
—63 (〃)	ST01 周溝埋土	提瓶 (須恵器)	胴径 13.8	肩部に角状把手がつく。胴部側面にカキ目。	灰色	普通	85-3877 900387 900388
—64	ST01 墓道床面	高杯 (須恵器)	——	高杯脚部。脚部内面にしぼり痕あり。赤焼き。	赤橙色	普通	85-3874
—65 (〃)	ST01 墓道床面	高杯 (土師器)	——	高杯脚部。脚裾部は外に大きく広がる。脚部タテ方向ヘラミガキ。	赤橙色	普通	85-3875 900386
—66 (〃)	ST01 周溝埋土	高杯 (土師器)	口径 20.4	高杯杯部。杯部下半は内湾、中位で屈曲し外反しつつたちあがる。内外面ヘラミガキ。丹塗り。	赤橙色	普通	85-3878 900389
—67 (〃)	ST01 墓道床面	高杯 (土師器)	口径 17.4	高杯杯部。杯部中位で屈曲し外反しつつたちあがる。内外面ヘラミガキ。	赤橙色	普通	85-3873 900385
—68	ST01 墓道床面	高杯 (土師器)	口径 13.8	高杯杯部。杯体部で屈曲し、口縁部は外上方にむかって直線的にたちあがる。	赤橙色	普通	85-3879

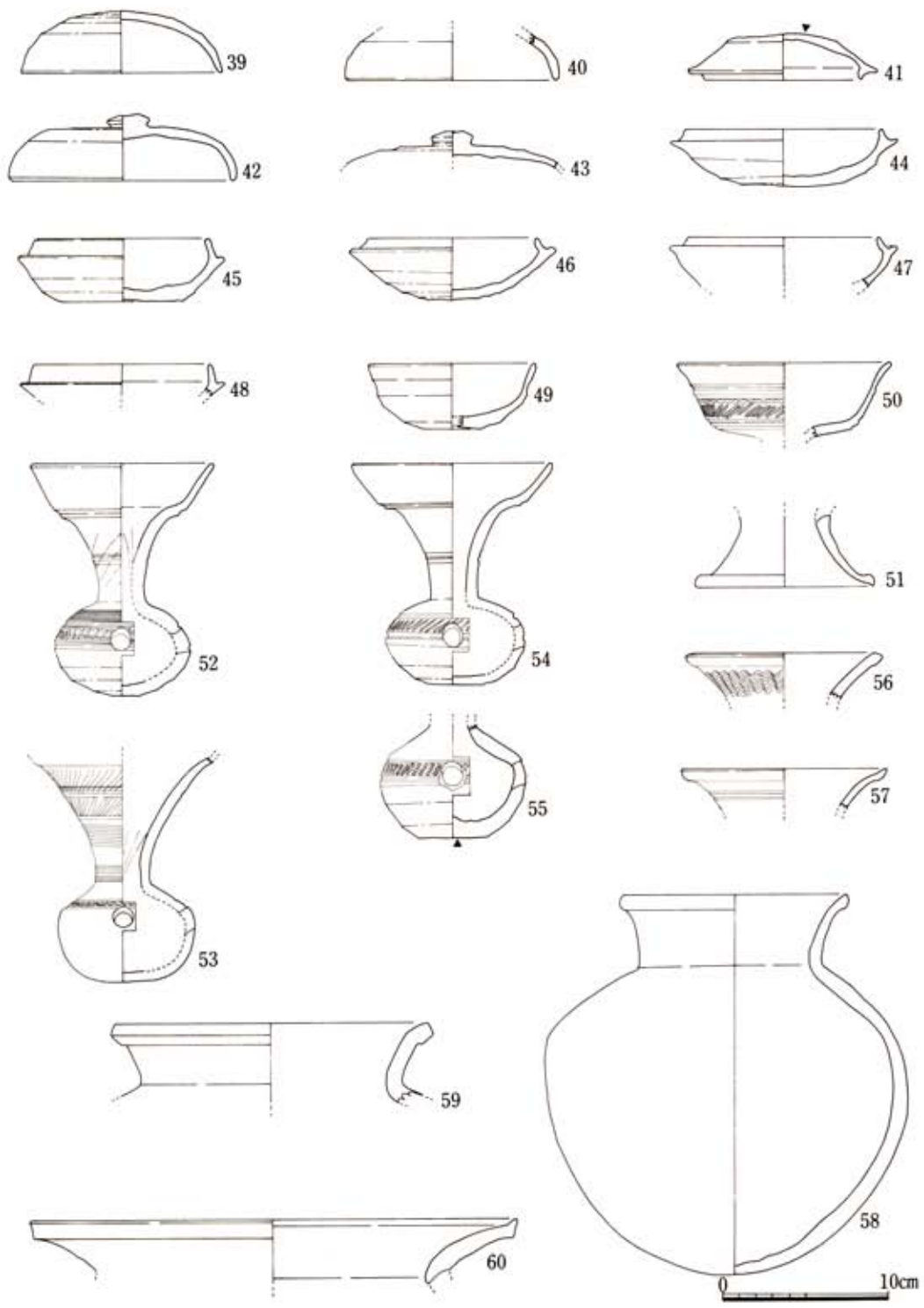


Fig.21　ＳＴ001古墳出土　須恵器（１/４）

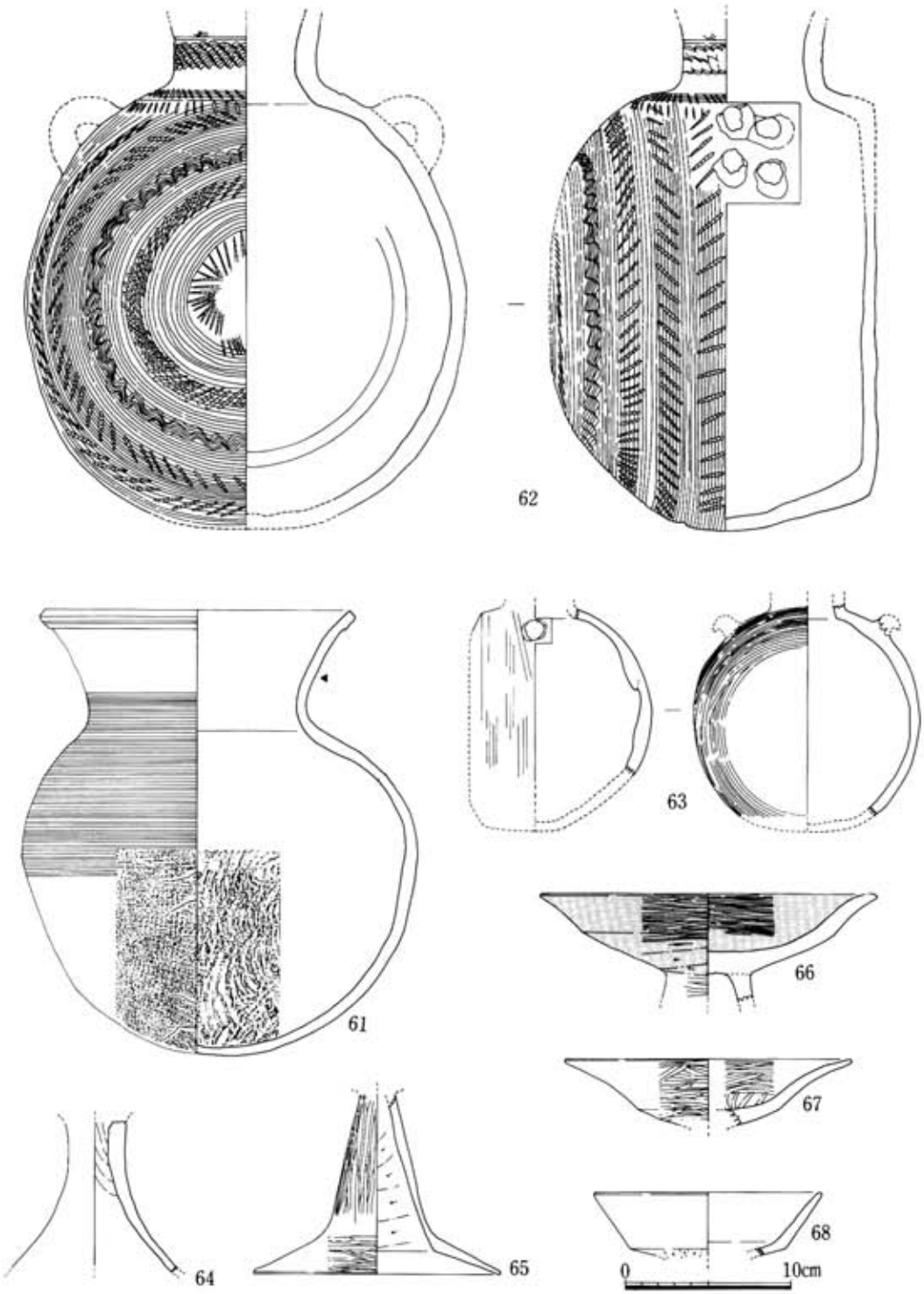


Fig.22　ＳＴ001古墳出土土器（1/4）

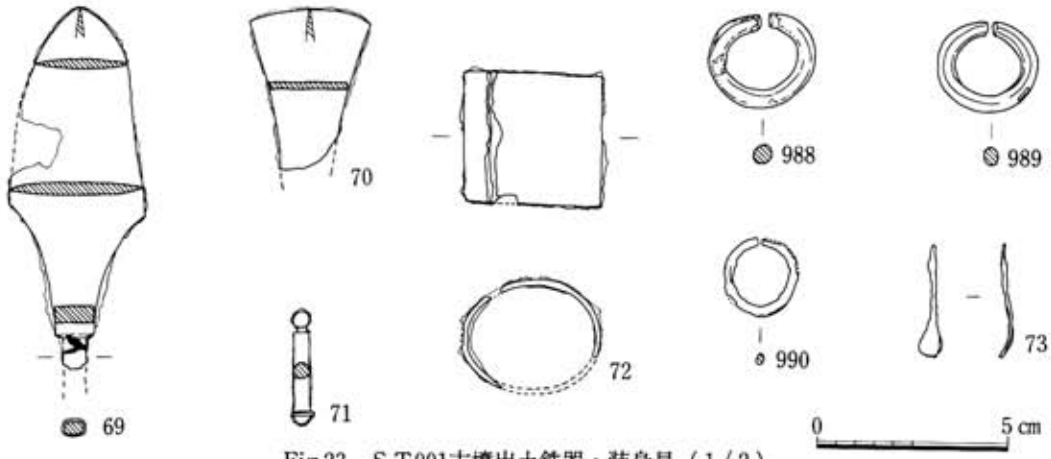


Fig.23　ＳＴ001古墳出土鉄器・装身具（1/2）

を、63は角状把手をつける。62は胴部に5条の沈線、その間にヘラ描き斜行文、櫛描波状文、櫛描列点文を施文。胴部背面はヘラ描き文を3重に施す。63は胴部背面を欠損、特に施文はなく側面から前面にかけてカキ目調整を施す。

土師器

すべて高杯。65は脚部、66、67、68は杯部、65は脚裾部で、68は杯体部で屈曲するなど古式の形態を残す。66、67は口径の差こそあれ形態は類似する。66は内外面丹塗り。

鉄　器

鉄鏃(69、70)69は玄室埋土と前室埋土出土のものが接合、圭頭式で両丸造。70は斧箭式、鉾先はやや丸みをもつ。

弓付属金具(71)片方の頭は球状であと一方の片頭は半球状。全長3.0cm。

把元金具(72)内面に木質残存、刀身は出土していない。宮西ＳＴ02古墳に類例あり。

不明鉄器(73)前庭部黒色土から出土、スプーン形で表面は銹化し緑青がふく。全長3.0cm。

装身具

耳環(988、989、990)988、989は前室、990は墓道出土。988、989は鉄地銅張り、990は成分分析結果は銅。

2．ＳＴ002古墳

(1) 概　要

調査区の西側に位置し、本墳から北へ約15mで標高7ｍ上にＳＴ016古墳が、西へ約15mでほぼ同じ標高にＳＴ007古墳が、南東約20mで標高2ｍ下にＳＴ007古墳がある。墳丘、石室とも遺存状態は良好で調査時にはすでに開口していた。内部主体は南東に開口する複室両袖型の横穴式石室で、玄室平面形態は長方形、前室は幅広の長方形でハの字状に連接する羨道部を連接する。出土遺物から築造は小田編年IV期で、追葬はVI期までである。

(2) 墳丘・周溝

墳丘径約10.6mの円墳である。墳丘盛土はほぼ完存し墳丘基底面からの高さ約2mを測る。石室崩壊の恐れのため石室掘り方、墳丘基底面の検出作業は部分的にしか行っていない。古墳構築に先行しての地山整形は本墳を区画するように地山を削り出すが、これはより平坦な墳丘基底面を作出するためのものである。この地山削り出しの下端にそって馬蹄形溝を掘削する。この馬蹄形溝は墳丘基底面を全周せず、傾斜面からの流水を上方から下方に送り出すものと考えられる施設で、断面台形で周溝幅約4.5m、墳丘基底面からの深さ50cmを測る。

墳丘列石は玄室を中心として半径約4mで、奥壁側に半周巡らすが、これは墳丘基底面上ではなく盛土上に配している。列石は径20～30cmの転石を4、5段積み上げるものであるが、部分的に大形石材も配している。

(3) 内部主体

複室両袖型の横穴式石室である。南側の斜面に向かって開口し、主軸をN25°Eにとる。墳丘石室ともに遺存状態は良好で石室は天井部まで完存し、調査時にはすでに開口していた。

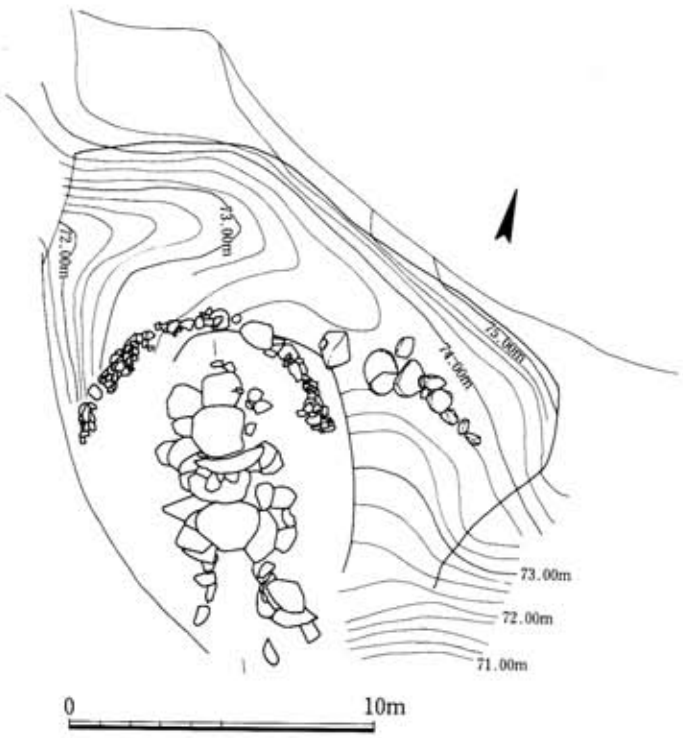


Fig.24　ST002古墳墳丘（1/250）

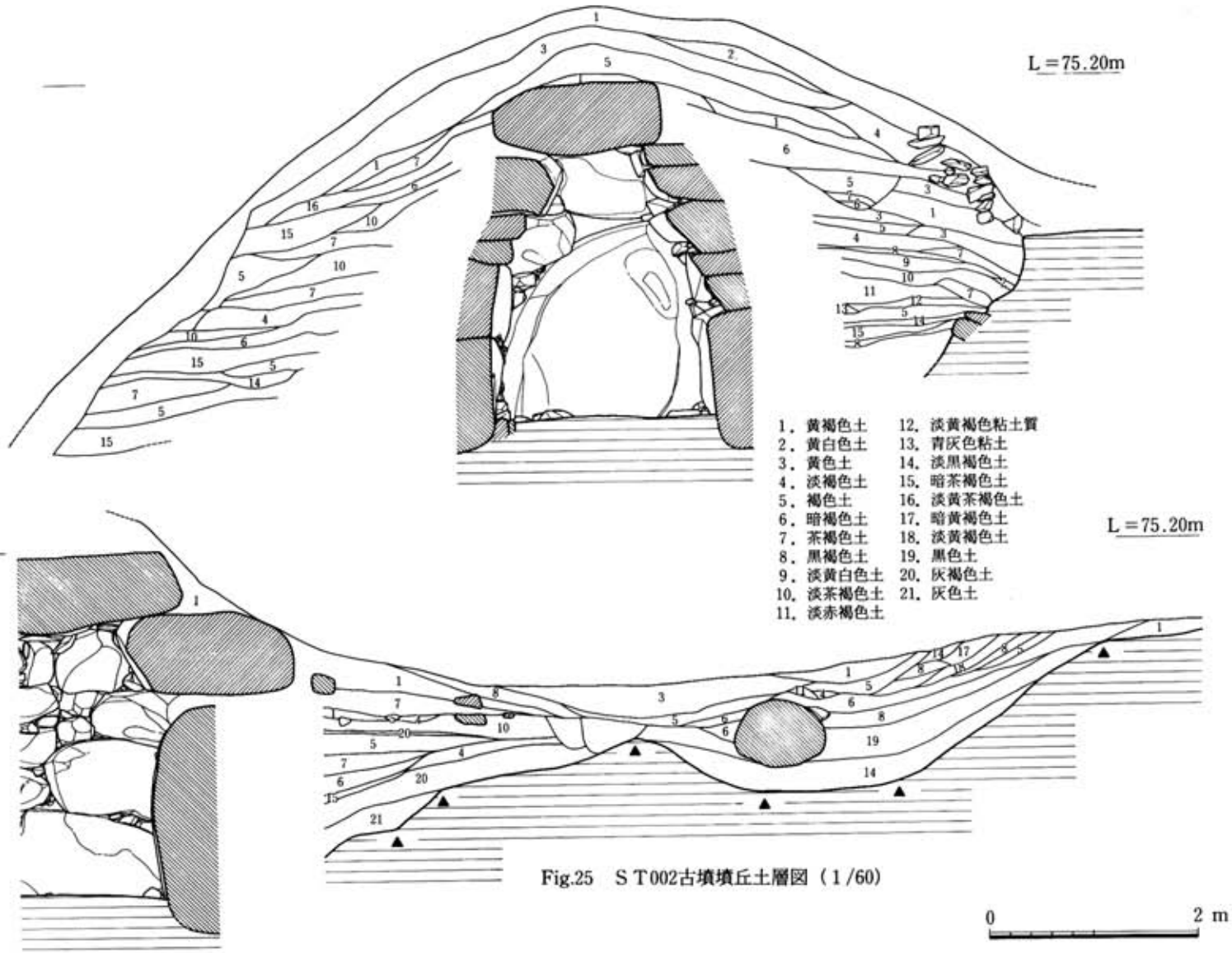


Fig.25　ＳＴ002古墳墳丘土層図（1/60）

玄室平面形態は前壁側がやや広くなるが長方形で、前室も幅広の長方形で羨門にむかって平面ハの字状に開く羨道部を連接する。規模は石室全長6.55m、玄室中央長2.4m、中央幅2.05m、天井高2.5m、前室中央長0.6m、中央幅2.4m、天井高1.7m を測る。

本墳は東十郎古墳群に特徴的にみられる複室両袖型横穴式石室と石室平面形態、企画などが類似する。それは、他の複室両袖型横穴式石室の前室平面形態が正方形、あるいは長方形であるのに対して、本石室の前室は平面幅広の長方形であることなどが特徴的である。また、平面ハの字に開く前庭部、前庭側壁をもち墳丘も比較的大形であるという点も特徴としてあげられよう。東十郎古墳群と大木川をはさんで対岸にある深底古墳群（「新農業構造改善事業関係埋蔵文化財報告書II」鳥栖市教育委員会1984）にも東十郎タイプの石室がみられ本墳を含めて複室両袖型横穴式石室のなかで一つの型式設定ができると考えられる。

奥壁は腰石に1.9×2.0m 程の巨石一石を配し、その上に径0.7～1.0m 程の横長石材を２段積み上げる。左右側壁の石積みは類似しており、腰石に1.5～1.0m 程とやや小ぶりの石材２石を配し

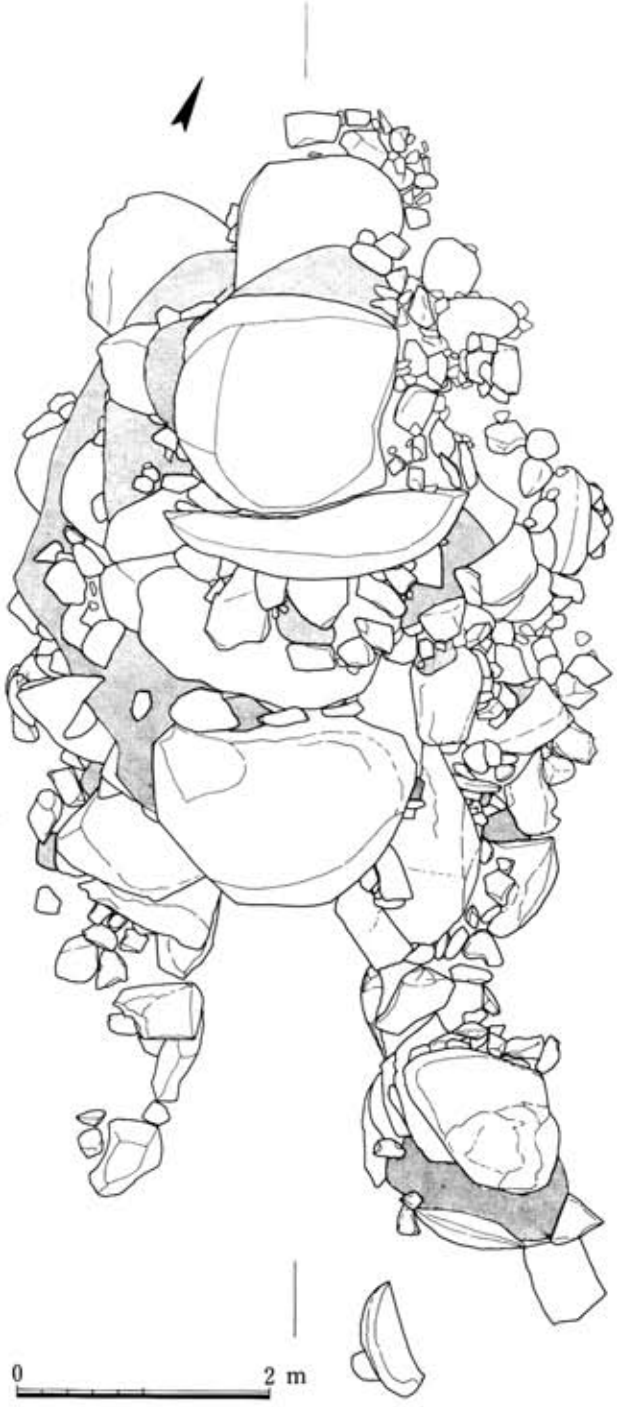


Fig.26　ＳＴ002古墳天井石（１/60）

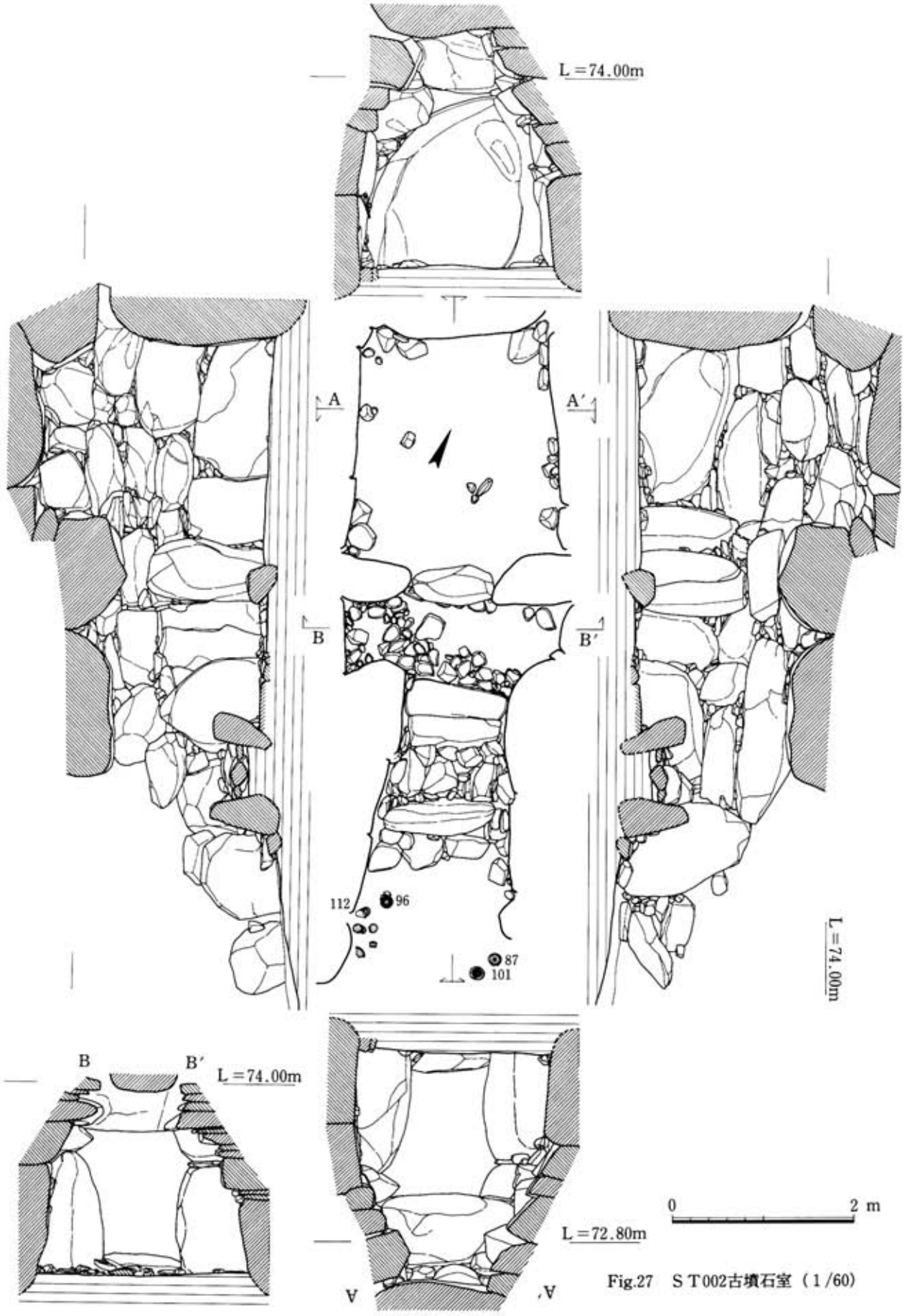


Fig.27　ST002古墳石室（1/60）

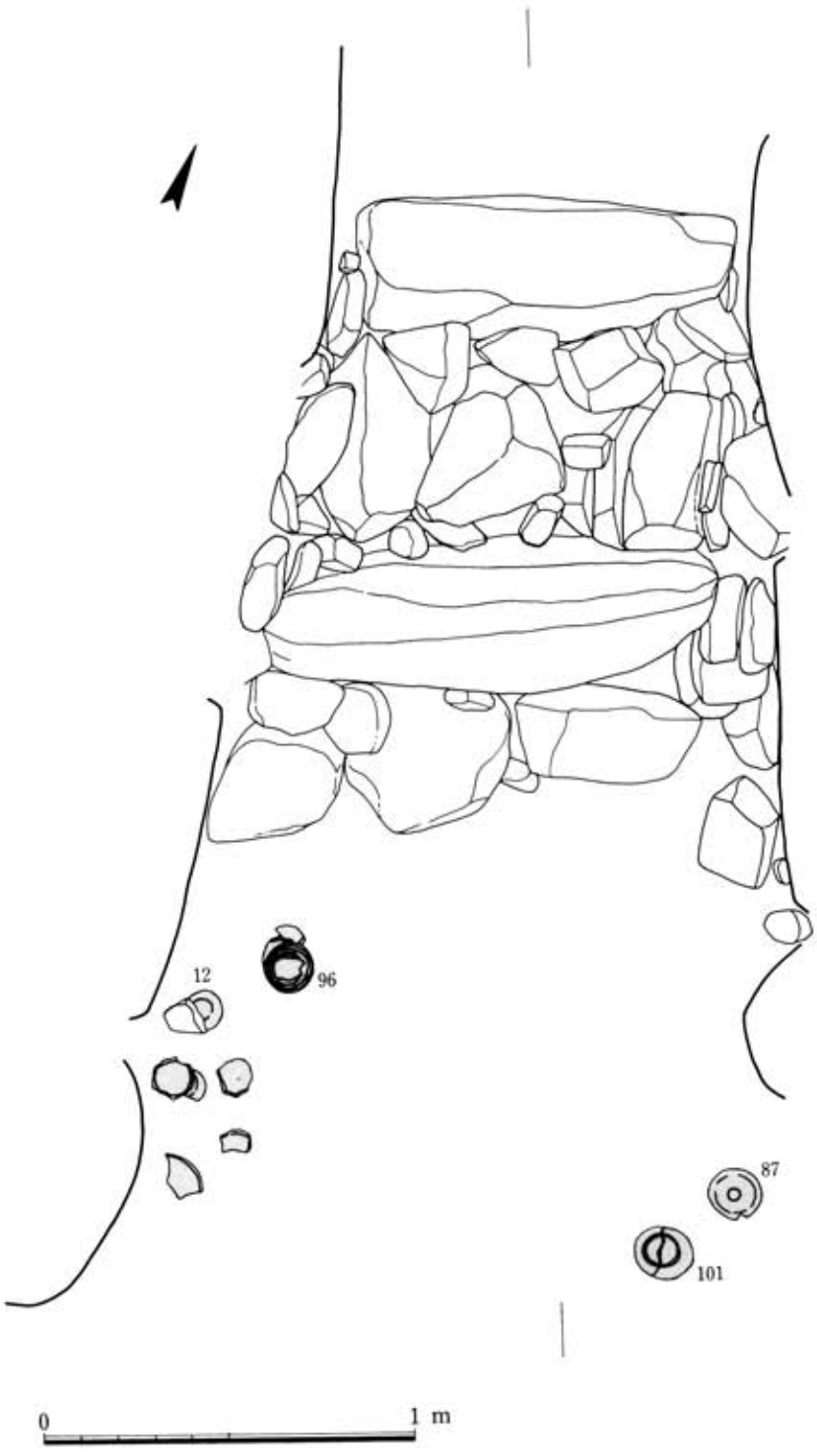


Fig.28　ＳＴ002古墳前庭部遺物出土状況（1/20）

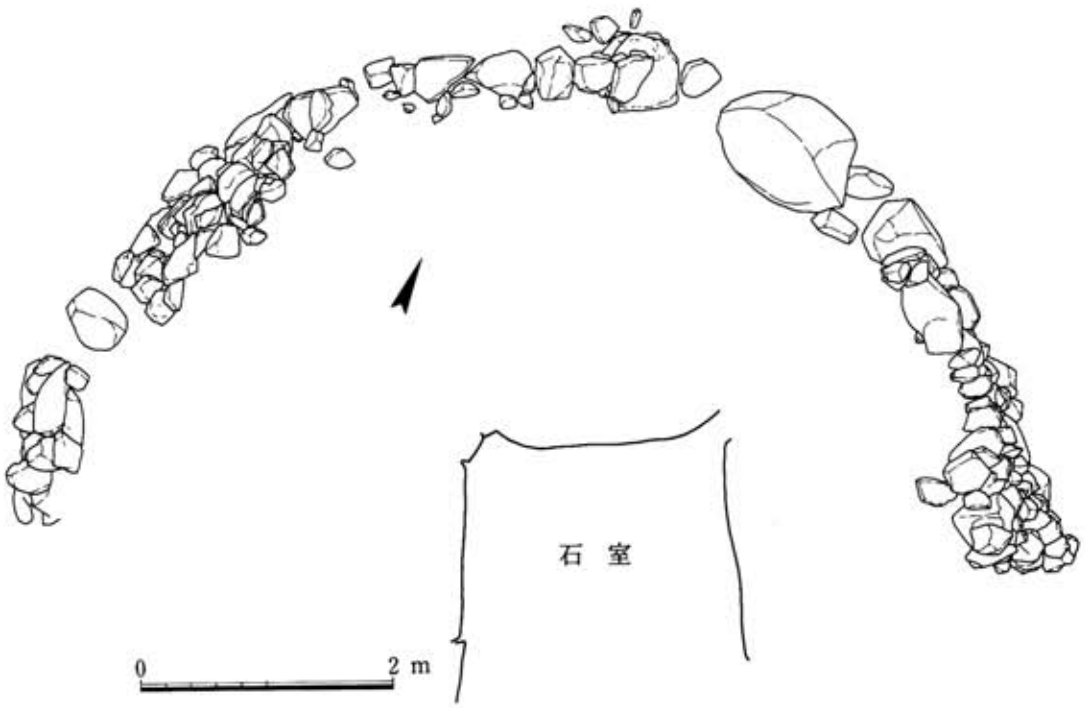


Fig.29　ＳＴ002古墳墳丘列石（１/60）

その上に横長石材を４～５段積み上げる。奥壁腰石は巨石であることからも床面に対して垂直に立てその上方石積みから持ち送る。左右側壁の腰石はやや内傾化しその上段石積みからさらに内傾化し持ちおくる。玄室天井石は径1.7m の平面円形の扁平石１石と2.4×0.7m 程の横長石材を架構する。

玄門部は左右袖石に1.2×0.7m 程の柱状石材をたてその上に横長石材を１段積み、さらにその上に楣石を架構する。この楣石は大形石材であるため前室の天井部も一部兼ねている。床面には框石を配する。玄門幅0.9m を測る。

前室左右側壁は腰石に1.1×0.6m、0.9×0.5m 程の柱状石材を縦位に立て、その上に径0.7m 程の横長石材を横位に積みさらにその上に小ぶりの転石を積み上げ天井石を架構する。この天井石は径1.7m ほどの大形石材で羨道部天井石も兼ねている。前門左右袖石は羨道部左右側壁を一部兼ねており、その上方に１～２段横長に積み上げる。

羨門右袖石は1.4×1.0m、左袖石は0.9×0.9m ほどの不整石材をたて、羨道部床面には羨道部中位と羨門部に１×0.5m 程の框石をたてる。前室床面には径20cmほどの転石を部分的に敷くのに対して、この羨道部内の２つの框石の間には40～50cmの石材を配する。これらは閉塞石にあたり羨道部中位の框石を根石として閉塞施設があったと思われる。

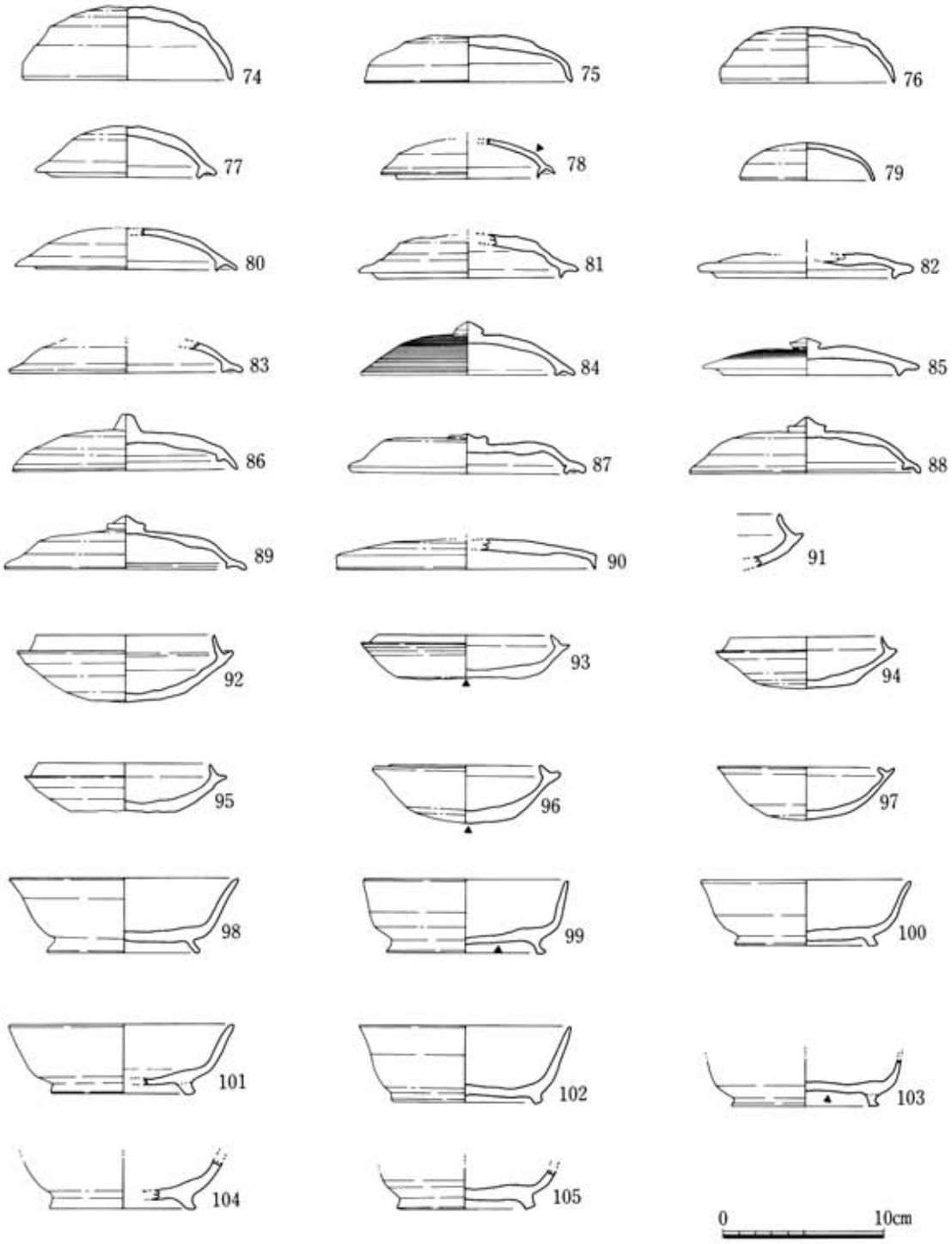


Fig.30　ＳＴ002古墳出土須恵器１（１/４）

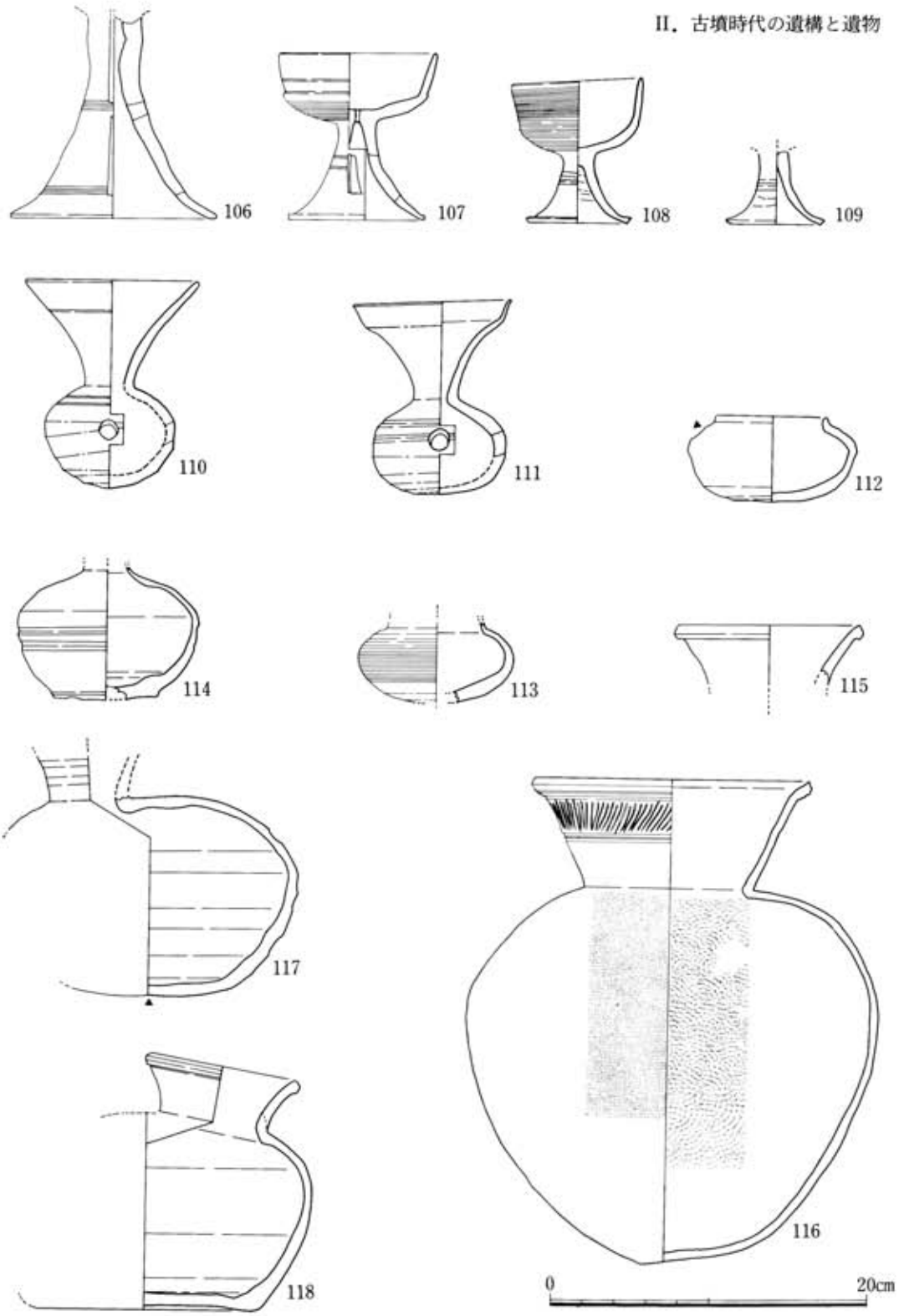


Fig.31　ＳＴ002古墳出土須恵器２（１／４　116は１／８）

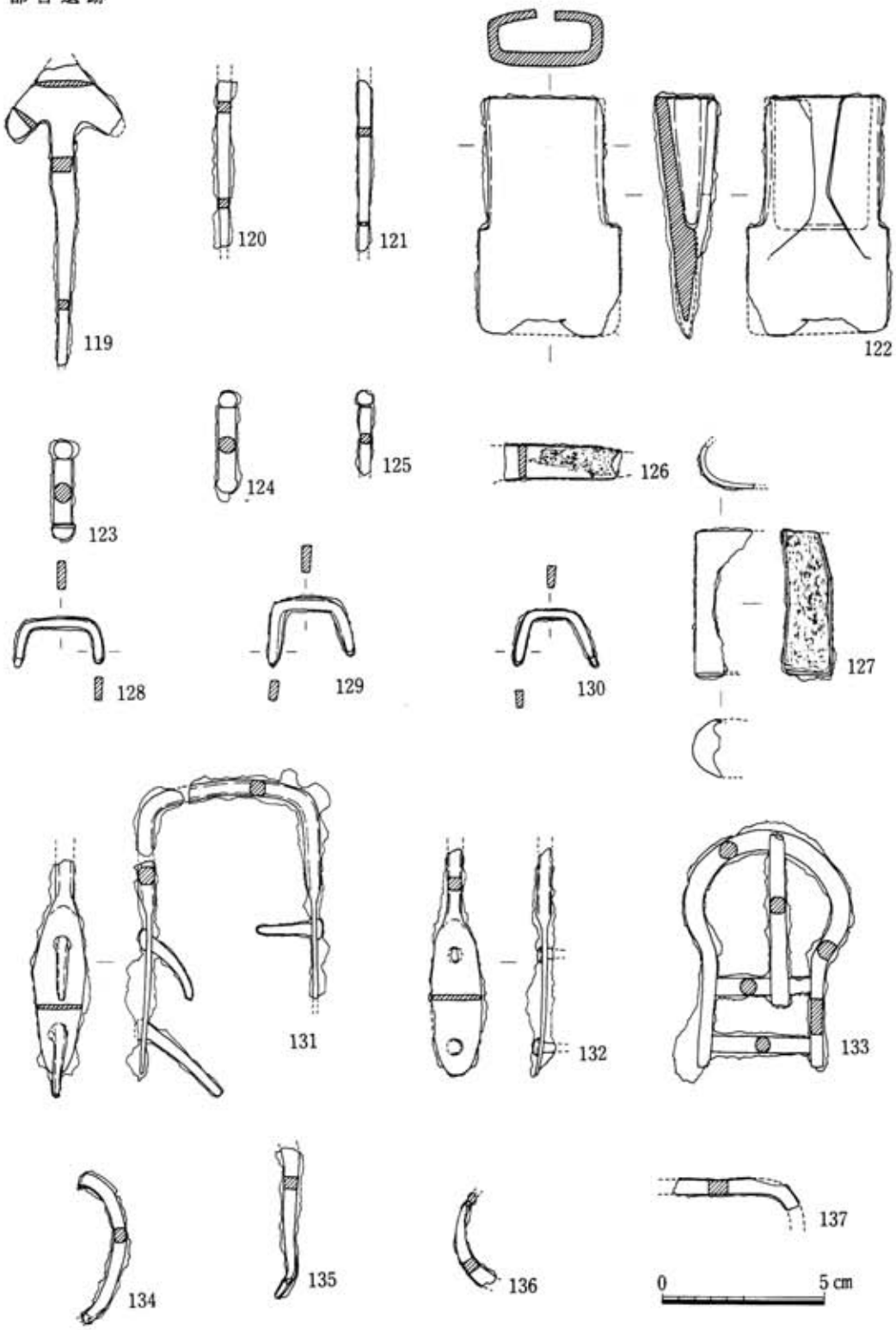


Fig.32　ＳＴ002古墳出土鉄器（１/２）

(4) 出土遺物

須恵器

杯蓋はC類(74、75)・D類(76、77、78)・E類(80、81、83、84、85、86、87、88、89)、杯身もC類(91、92、93)・D類(94、95、96、97)・E類(98、99、100、101、102、103、104、105)がある。杯蓋・身ともE類がもっとも多く小田編年VI期の追葬時に多くの土器が副葬されたことが窺える。

74は器高4.4cm、75は器高2.8cmと違いがあるが復元口径は12.4、12.8cmとほぼ同じである。76は赤焼き、97も同様赤焼きで口径もほぼ同じで、76、97はセットであろう。77、78は杯蓋としたがセットになるような杯身が出土していないし逆にほぼ口径が同値である杯身94、95、96、97のセットとなるような杯蓋も出土していないことから77、78は杯身の可能性もある。79は短頸壺の蓋。80、81、82、83、84、85、86、87、88、89は杯蓋でかえりがつき口径11～12cm内外である。86は乳頭状つまみ、87、88、89は宝珠つまみが付く。90はかえりがなくなり口縁端部を垂直に屈曲する。杯蓋の中ではもっとも新時期であるがこれをもって最終追葬時期とするには1点のみの出土であり資料不足である。羨道出土。91～105は杯身。92、93では器高に違いがあるが口径はほぼ同じ。94、95、96、97は口径9～10cm。98～105は高台付き杯身。

D類は最も小形化が進行した時期のもので蓋にはかえりがつき、杯身は底部が平坦でたちあがりがないものとしたが、本墳のD類のように小形化が進行している一方で杯身のたちあがりが残存する形式もありD類には2形式の杯蓋・身を考えなければならない。

106は高杯、長脚二段三方透かし、脚部中位と裾部に2条の沈線を施す。107、108は高杯、107は長方形の透かしを一方にいれ、脚部中部から杯部に径5㎜ほどの孔が貫通する。110、111は𤭯、112、113は短頸壺。114は壺で口頸部を欠き本来の器形は不明。115は壺の口縁部。116は甕、頸部に櫛描き斜行文を施文。墳丘出土。この他に図示していないがほぼ完形の甕1個(器高48.5cm、口径22.5cm)が墳丘内から出土している。遺物を早く取り上げたため出土状況など分からなくなったが墳丘祭祀にかかわる供献土器の可能性が強い。117、118は平瓶。

土師器

109の高杯1点のみ。脚部中位に2条の沈線を施す。須恵器模倣。

鉄　器

鉄鏃(119、120、121)119は腸抉三角形式で120、121は頸部。すべて玄室出土。

鉄斧(122)袋部を有し肩がつく。全長7.3cm、刃部幅4.4cm、袋部内径2.9×1.0cmの長方形。玄室出土。

弓付属金具(123、124、125)123は全長3.0cm、断面径5㎜、124は全長3.1cm、断面径5㎜、125はやや小形で断面径3㎜。玄室出土。

鞘尻金具(127)全長4.5cm、断面楕円形で内側に木質付着。玄室出土。

鎹(128、129、130)いずれも断面長方形、玄室出土。

刀子(126)茎部で木質付着。玄室出土。

不明鉄器(134、135、136、137)このほか寛永通宝5枚が出土。

馬　具

131、132は鐙本体。側板は菱形で2ケ所に鋲を打つ。全長9.1cm、幅5.7cm。133は鉸具、全長7.3cm、最大幅5.1cm。側板に2本の横棒を連結する。

Tab.6　ST002古墳出土土器一覧表

（　）は推定

Fig-図番号 (PL番号)	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
30—74 (PL.45)	ST002 墳丘表土	杯蓋 (須恵器)	口径 (12.4) 器高 4.4	天井部約2/3回転ヘラケズリ。砂粒含む。	灰　色	普　通	86-707 900485
—75	ST002 周溝埋土	杯蓋 (須恵器)	口径 (12.8) 器高 2.8	天井部約2/3回転ヘラケズリ。	灰　色	普　通	86-710
—76 (〃)	ST002 羨道黒色土	杯蓋 (須恵器)	口径 (10.8) 器高 3.4	天井部ヘラ切り離し、未調整。赤焼き。97とセット。	赤褐色	普　通	86-717 900490
—77 (〃)	ST002 羨道黒色土	杯蓋 (須恵器)	口径 9.0 器高 3.0	天井部ヘラ切り離し、未調整。杯身の可能性あり。	灰白色	普　通	85-3696 900317
—78	ST002 周　辺	杯蓋 (須恵器)	口径 (8.8)	逆転蓋、かえりは短く直立する。天井部は、カキ目状調整が施される。	灰白色	普　通	86-705
—79	ST002 羨道埋土	蓋 (須恵器)	口径 (8.2) 器高 2.3	天井部調整不明瞭、天井部は平坦で、内湾しながら口縁部へつづく。	灰黒色	やや良	86-708
—80 (〃)	ST002 前室埋土	杯蓋 (須恵器)	口径 10.9 器高 (2.6)	天井部カキ目調整。かえりは短く太い。	灰黒色	普　通	86-716 900489
—81	ST002 玄室埋土	杯蓋 (須恵器)	口径 (11.2)	天井部ヘラ切り離し未調整。かえりは短く太い。	灰褐色	普　通	85-3694
—82	ST002 石室内埋土	杯蓋 (須恵器)	口径 (11.2)	天井部約2/3回転ヘラケズリ。かえりは短く太い。	灰白色	普　通	85-3695
—83	ST002 石室内埋土	杯蓋 (須恵器)	口径 (12.0)	かえりは短く太い。赤焼き。	橙褐色	普　通	85-3690
—84	ST002 玄室埋土	杯蓋 (須恵器)	口径 (11.2) 器高 3.2	宝珠つまみ付き。天井部から体部にかけてカキ目調整を施す。	暗灰色	やや良	85-3697
—85	ST002 玄室埋土	杯蓋 (須恵器)	口径 (11.0) 器高 2.3	宝珠つまみ付き。天井部カキ目調整。赤焼き。	赤橙色	普　通	85-3693
—86 (〃)	ST002 前室埋土	杯蓋 (須恵器)	口径 11.2 器高 3.4	乳頭状つまみ付き。静止ヘラケズリ。かえりは退化して断面三角形。	灰　色	普　通	86-713 900486

（ ）は推定

Fig-図番号（PL番号）	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
30—87（PL.45）	ST002 羨道右壁 No.2	杯蓋（須恵器）	口径　12.2 器高　2.4	宝珠つまみ付き。かえりは短く太い。	灰黄色	普　通	85-3817 900272
—88（〃）	ST002 羨道黒色土	杯蓋（須恵器）	口径（12.4） 器高　3.4	宝珠つまみ付き。天井部約2/3回転ヘラケズリ。	灰　色	普　通	86-714 900487
—89（〃）	ST002 羨道埋土	杯蓋（須恵器）	口径（12.4） 器高　3.2	宝珠つまみ付き。かえりは短く太い。	灰黄色	普　通	86-715 900488
—90	ST002 羨道黒色土	杯蓋（須恵器）	口径（16.0） 器高　2.0	かえりはなく、口縁端部は垂直に屈曲する。砂粒を多く含む。	灰　色	普　通	86-712
—91	ST002 周溝付近	杯身（須恵器）	たちあがり高1.6	たちあがりは内傾し、端部は丸い。	灰　色	普　通	86-706
—92（〃）	ST002 墳丘表土	杯身（須恵器）	口径　11.0 器高　4.2 たちあがり高1.2	底部約2/3回転ヘラケズリ。	灰褐色	普　通	86-701 900483
—93（〃）	ST002 墳丘表土	杯身（須恵器）	口径　10.7 器高　2.6 たちあがり高0.9	底部は平坦。回転ヘラケズリ。底部にヘラ記号あり。	灰黄色	普　通	86-702 900484
—94	ST002 墳丘表土	杯身（須恵器）	口径（9.4） 器高（3.0） たちあがり高0.9	底部ヘラケズリ。	灰　色	普　通	86-703
—95	ST002 墳丘表土	杯身（須恵器）	口径　10.6 器高　3.0 たちあがり高0.8	底部ヘラ切り離し未調整。	灰　色	普　通	86-704
—96（〃）	ST002 羨道左壁 No.4	杯身（須恵器）	口径　9.2 器高　3.6 たちあがり高0.7	底部ヘラ切り痕残る。ヘラ記号あり。	灰　色	普　通	85-3820 900368
—97（〃）	ST002 羨道黒色土	杯身（須恵器）	口径　9.3 器高　3.2 たちあがり高0.5	底部調整不明瞭。たちあがりは低く内傾する。赤焼き。砂粒含む。76とセット	赤橙色	不　良	86-718 900491
—98（〃）	ST002 羨道黒色土	杯身（須恵器）	口径　13.5 器高　4.6	高台付き。高台は裾広がり。	灰　色	普　通	86-720 900493
—99	ST002 羨道埋土	杯身（須恵器）	口径　12.4 器高　4.4	高台付き。高台は裾広がり。ヘラ記号あり。	灰　色	普　通	86-722
-100（〃）	ST002 前室埋土	杯身（須恵器）	口径　13.0 器高　4.0	高台付き。高台端部は面とりされる。赤焼き。	赤褐色	普　通	86-721 900494
-101（PL.46）	ST002 羨道右壁 No.2	杯身（須恵器）	口径　13.9 器高　4.3	高台付き。	灰白色	普　通	85-3818 900366
-102（〃）	ST002 前室埋土	杯身（須恵器）	口径　13.0 器高　4.3	高台付き。高台部は短く直立気味。	灰黒色	やや良	86-719 900492

（ ）は推定

FIG-図番号（PL番号）	出土地点	器種	法量cm	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
30-103	ST002 墳丘表土	杯身（須恵器）	——	高台付き。高台部は直立し、端部は外にはねる。ヘラ記号あり。	灰色	やや良	86-723
-104	ST002 玄室表土	杯身（須恵器）	——	高台付き。高台は裾広がりで、端部は面とりされる。	灰色	やや良	85-3698 900318
-105	ST002 玄室埋土	杯身（須恵器）	——	高台付き。高台端部は面とりされる。赤焼き。	赤橙色	普通	85-3689
31-106	ST002 周溝埋土	高杯（須恵器）	底径（13.0）	長脚二段三方透かし。脚部中位と裾部に二条の沈線はいる。	灰黒色	普通	86-1028
-107（PL.46）	ST002 墳丘表土	高杯（須恵器）	口径（10.0）器高 10.6	長方形の透かしが一方のみ入り、脚部中から杯部に径4mmの穴があく。脚部中位に2条の沈線。	灰黄色	普通	86-1030 900504
-108（〃）	ST002 墳丘表土	高杯（須恵器）	口径 8.2 器高 9.0	杯部に3条、脚部中位に2条の沈線がはいる。	灰色	普通	86-1029 900503
-109	ST002 墳丘表土	高杯（土師器）	——	脚部中位に2条の沈線がはいる。	赤褐色	不良	86-1027
-110（〃）	ST002 墳丘表土	鼈（須恵器）	口径（11.0）器高 13.2	口頸部は、外反しつつラッパ状に開く。胴下半部ヘラケズリ。	灰色	やや良	86-1031 900505
-111（〃）	ST002 墳丘表土	鼈（須恵器）	口径（10.0）器高 12.0	頸部は、外反しつつ口縁部で屈曲し内湾する。	灰色	普通	86-1032 900506
-112（PL.47）	ST002 羨道左壁 No.3	短頸壺（須恵器）	口径 7.0 器高 5.4	最大径が上位にある胴部に短い口縁部がつく。肩部にヘラ記号あり。	灰色	普通	85-3819 900367
-113（〃）	ST002 周辺	短頸壺（須恵器）	——	口縁部を欠失する。胴下半部はヘラケズリ。上半部はカキ目調整。	灰色	普通	86-1034 900507
-114（〃）	ST002 前室埋土	壺（須恵器）	——	口頸部を欠失、底部はヘラ切り離し。	灰黒色	不良	86-1035 900508
-115	ST002 墳丘表土	壺（須恵器）	口径（11.6）	口縁端部は丸くおさめる。	灰黒色	普通	86-1033
-116	ST002 墳丘表土	甕（須恵器）	口径 34.8 器高 61.6	口頸部はラッパ状に開き、頸部にヘラ描き斜行文を施文、外面、格子目ふう。内面同心円文タタキ。	灰黒色	良好	86-1006
-117（〃）	ST002 前室埋土	平瓶（須恵器）	——	胴部最大径は中位にあり、底部は回転ヘラケズリ。底部にヘラ記号あり。	灰色	普通	86-1038 900509
-118	ST002 墳丘表土	平瓶（須恵器）	口径（17.4）器高（16.3）	胴上半部はカキ目調整。	灰色	普通	86-1037

3．ＳＴ003古墳

(1) 概　要

調査区の南側に位置し、ＳＴ001古墳周溝と切り合う。東方15m にはほぼ主軸を同じくするＳＴ004古墳が、北方７ｍにはＳＴ006古墳が、南方７ｍにはＳＴ005古墳がある。墳丘、石室上半部は削平を受ける。内部主体は複室両袖型の横穴式石室で、玄室平面形態は正方形である。出土遺物は少ない。築造は小田編年IV期で、追葬はVI期まで。

(2) 内部主体

複室両袖型の横穴式石室である。墓道は南側に築造されるＳＴ001古墳周溝と切り合う。主軸はN22°E。墳丘および石室上部構造を欠失する。

玄室平面形態はほぼ正方形で、前室はとくに左袖石がしっかりしていないため形が整わないが長方形を意識している。羨道はとくに連接せず前門袖石の横に羨門袖石をたてる。

規模は石室全長4.2m、玄室中央長1.9m、中央幅2.25m、前室中央長0.65m、中央幅1.4mを測る。

奥壁は腰石に1.1×1.2m、1.0×0.7m 程の割石２石を配し、その上に１～２段、径70cm程の転石、割石と隙間に礫を詰め込む。左右側壁石積みは類似しているが、右側壁腰石は２石、左側壁腰石に３石横長石材を横位に配し、その上方に2～3段の石積みが残る。選択した石材が不定形ということもあって目地も通らない。玄門部は左右袖石に1.0×0.5m 程の柱状石材を縦位に立てる。玄門幅は1.1m を測る。前室左右側壁はさほど大きな腰石を使用してなく0.7～0.4m 程の横長石材を乱雑に横位に積み上げる。

前門左右袖石も玄門袖石と同大の石材を立てる。前室は側壁石積みが雑で玄門、前門袖石を立てることでつくられる。羨門部は前門袖石の横に0.9×0.7m 程の不整石材を立てる。

石室床面の床石は撹乱をうけ残存しない。框石もない。

(3) 出土遺物

須恵器

杯蓋はＥ類（138、139、141）・杯身はＣ類(142)がある。Ｅ類、Ｃ類ともそれぞれセットになる蓋・身が出土していなくＤ類もみられないのは後世の撹乱などによるものであろう。138、139は杯蓋、宝珠つまみ付きでかえりもつく。141は宝珠つまみはなくかえりはつく。140は宝珠つまみはつくがかえりは完全に退化している。140と同形式の杯蓋がＳＴ002古墳(90)で出土しているがこれらはＥ類より一段階新時期に位置づけられるもので田辺編年ＴＫ48～ＭＴ21に対応でき、７Ｃ末～８Ｃ初の年代を与えられるであろう。140は羨道埋土出土であるがこれをもって本墳の最終追葬とするには１点のみの出土で資料不足であるがＳＴ002古墳とあわせ考えて少

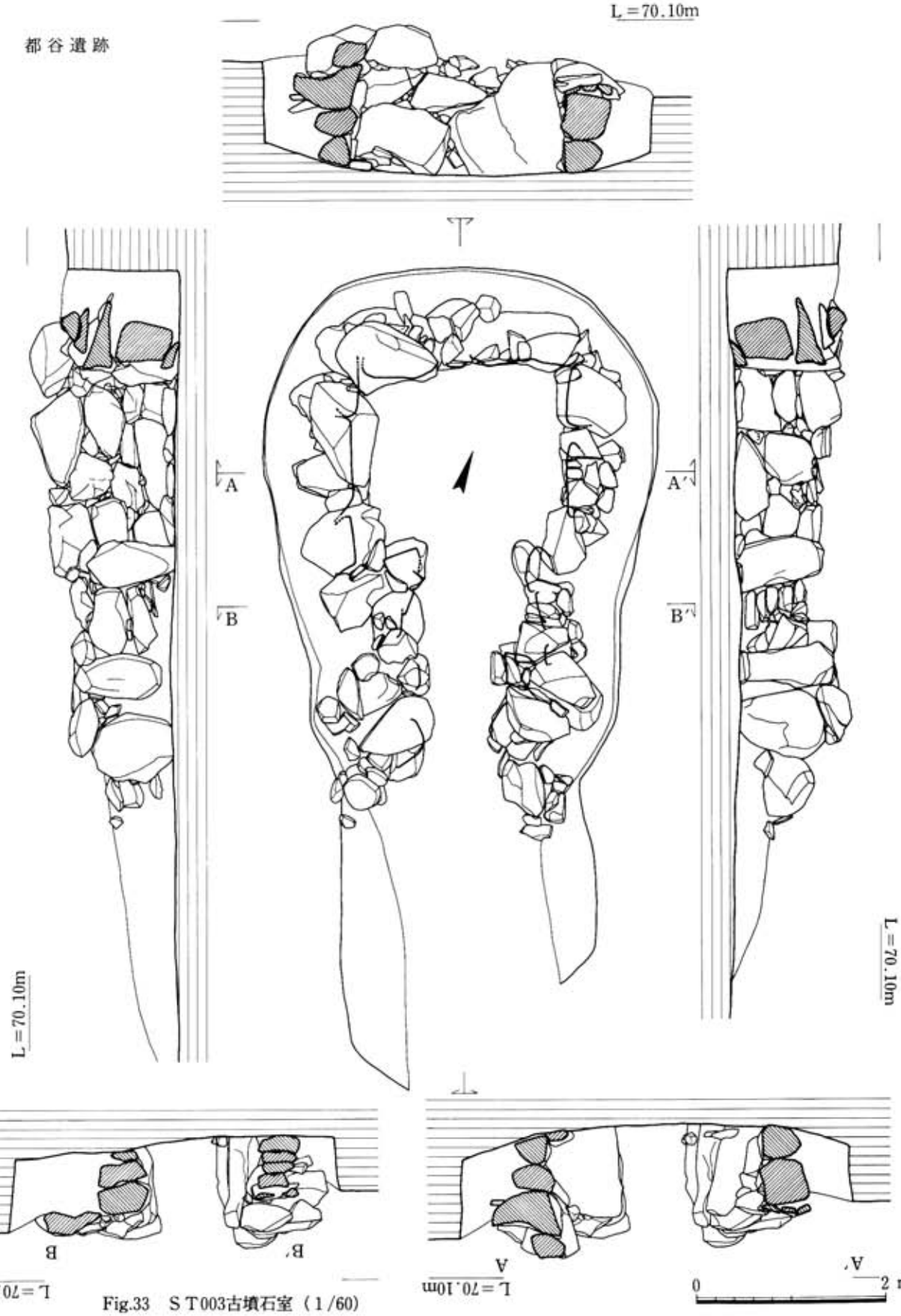


Fig.33　ＳＴ003古墳石室（1/60）

なくともこれらの古墳にたいして墓前祭祀なり何らかの働きかけがあったことは間違いないだろう。142は杯身、玄室出土。口縁部約1/6の残存でたちあがり高が1.5cmで他のC類杯身のたちあがり高が1cm内外なのに対してやや高めである。この142が本墳の中ではもっとも古い時期の土器であり、築造時期を示す土器となろう。143は平瓶、口縁部は玄室出土で、羨道埋土出土の胴部と接合した。144、145は平瓶か横瓶かの口縁部と考えられる。

土師器

146の小壺1点のみ、石室、墓道などからでなくST003古墳周辺の地山からの出土である。やや大形であるがST006古墳で類似した土器が出土している。手づくね。胴部は卵形で外にラッパ状に広がる口頸部がつく。胴部外面ヘラ削り。

鉄　器

鉄鏃(147～153)147は斧箭式か圭頭式の鏃身部。148は関部は明確につくりださず鋒先は尖る。149～153は小形柳葉式か鏨箭式の頸部、茎部。

刀子(154)刀身のみ、玄室出土。刀身幅1.0cm。

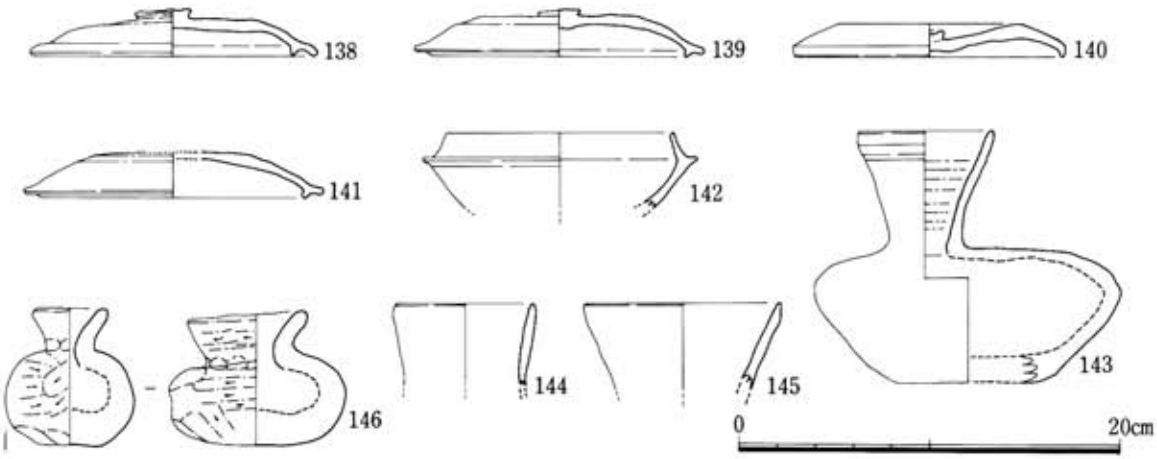


Fig.34　ST003古墳出土土器（1/4）

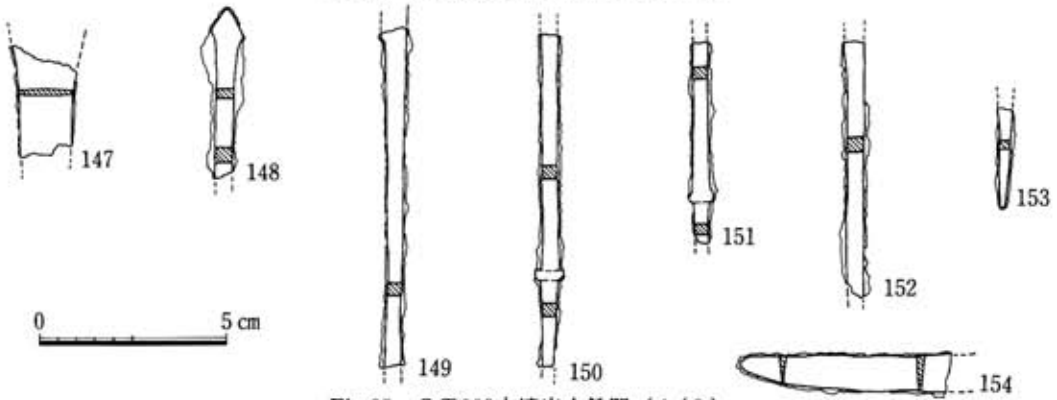


Fig.35　ST003古墳出土鉄器（1/2）

Tab. 7　ＳＴ003古墳出土土器一覧表

（　）は推定

Fig.-図番号 (PL番号)	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
34-138	ＳＴ003 羨道埋土	杯蓋 (須恵器)	口径　12.9 器高　2.6	宝珠つまみ付き。かえりは短く口縁部下端より内側。天井部回転ヘラケズリ。	灰　色	普　通	86-1007 900500
-139	ＳＴ003 玄室埋土	杯蓋 (須恵器)	口径 (13.6) 器高　2.5	宝珠つまみ付き。天井部約3/4回転ヘラケズリ。	灰白色	普　通	86-1011
-140	ＳＴ003 羨道埋土	杯蓋 (須恵器)	口径 (14.0) 器高　1.8	宝珠つまみ付き。天井部は窪み体部中位で屈曲する。かえりなし。	灰黒色	普　通	86-1009 901275
-141	ＳＴ003 羨道埋土	杯蓋 (須恵器)	口径 (14.0)	口縁部約1/4残存。かえりは、口縁端部より外側にでる。	灰白色	普　通	86-1008
-142	ＳＴ003 玄室埋土	杯身 (須恵器)	口径 (12.0) たちあがり高1.5	たちあがりは内傾し、受部はやや外上方にのびる。	灰　色	普　通	86-1012
-143	ＳＴ003 玄室埋土	平瓶 (須恵器)	口径 (6.7) 器高　12.9	口頸部は、ラッパ状に開き、胴部は肩がはる。口縁部内面ヘラケズリ。	灰黒色	普　通	86-1010 900501
-144	ＳＴ003 羨道部	平瓶 (須恵器)	口径 (7.2)	平瓶の口縁部と思われる。口縁端部は内湾気味。	灰　色	普　通	86-1016
-145	ＳＴ003 玄室埋土	平瓶 (須恵器)	口径 (10.2)	平瓶の口縁部と思われる。口縁端部は内湾気味。	灰白色	普　通	86-1014
-146	ＳＴ003 周辺旧表土	壺 (土師器)	口径　6.0 器高　6.8	手づくね、卵形の胴部に外反する頸部がつく。	褐　色	普　通	86-1019 900502

4．ＳＴ004古墳

(1) 概　要

調査区の南東部で丘陵の東端に位置する。本墳の東は急斜面になり一部削平を受ける。西方15mにはＳＴ003古墳がある。墳丘盛土、石室上半部は削平を受ける。内部主体は複室両袖型の横穴式石室で前室を明確に作り出さない。前室、羨道にかけて鉄器、馬具が墓道、周溝から多くの土器が出土した。築造は小田編年IV期で、最終追葬を示す土器は１点と資料不足であるがVI期までか。

(2) 墳丘、周溝

周溝外径約18mの円墳である。周溝の東側半分および墳丘盛土は削平を受ける。周溝断面は浅い逆台形で、周溝幅は約2.5mを測る。石室掘り方は羨門側がすぼまる楕円形で、細長い墓道を連接する。

(3) 内部主体

複室両袖型の横穴式石室である。南側の緩斜面に向かって開口し、主軸をＮ40°Ｅにとる。墳丘、および石室上部構造を欠失する。

玄室平面形態は長方形。前室は左側壁石積みがないこともあっていびつな形である。石室プラン図のみを見ると一見して単室両袖型にみえるが、玄門袖石となりには前門袖石を意識したような縦長石材を立て床面には框石を配しており、右側壁側では玄門と前門の間に僅かに石を挟んでおり複室を意図して構築したことが伺える。

規模は石室全長4.3m、玄室中央長2.25m、中央幅2.1m、前室中央長0.55m、中央幅0.9mを測る。

奥壁は腰石に1.6×1.0m、0.5×0.6m程の壁面を整え、互いの目地を合わせた2石を配する。その上には1～2段の石積みが残るが大きい方の腰石の上端にあわせて横目地が通る。右側壁は腰石に1.2×0.7m、1.0×0.4m程の横長石材2石を横位に配し、その上に径50～80cmの柱状石材を2～3段積み上げる。左側壁の腰石は3石それぞれ形状、大きさの違う石材を配しその上に柱状石材を横位に積み上げる。

玄門部は左右袖石とも1.0×0.5m程の角張った柱状石材を立て、床面には框石を配する。玄門幅0.5mを測る。

玄門右袖石の横には石を挟んで同規模の柱状石材を立て前門右袖石とする。前室左側壁の石積みはなく玄門袖石と同規模の角張った石を立て側壁と前門を兼ねる。前門床面には框石を配する。前室床面には径20cm程の礫を敷く。

羨門は意識した石材を置かず左側壁側には横長石材を2段積む。右側壁も同様である。

前室、羨道にかけて鉄器、馬具、土器などが出土した。

(4) 出土遺物

多くの須恵器が出土しているがそのほとんどが墓道、周溝から検出したものである。周溝からはほぼ完形の壺、甕が5個体出土している。鉄鏃は前室から、馬具は前室および羨道右側壁側からの出土である。前室からも馬具が出土していることから羨道出土の馬具は本来、前室に副葬されたものであり追葬行為などにより羨道にかきだされたと推定出来る。

須恵器

杯蓋はC類(155、156、157、158、159、160、161、162)、杯身はC類(163、164、165、166、167、168)・E類(169)がある。C類は杯蓋・身ともまとまった数量出土しているが、D類は杯蓋・身ともまったく出土していなくE類は杯身1点のみの出土である。

155～162は杯蓋、口径は12cm前後、器高は4cm前後である。すべて天井部は回転ヘラケズリで同じく天井部にヘラ記号がつく。157と160の胎土、焼成、色調は類似し他の須恵器と異なる。163～168はたちあがりのある杯身。167の口径が10.2cmと小さいが、他は大概11cm前後である。器高は3.5～4.0cm、たちあがり高は0.8cm前後である。底部調整は164、167、168は回転ヘラケズリ、163、165は不定方向ヘラケズリ。163、164、166、167、168はヘラ記号有り。169は高台付き杯身、底部にヘラ切り痕が一部残りあとはナデ仕上げ。170～173は高杯。170は二段三方透かしで

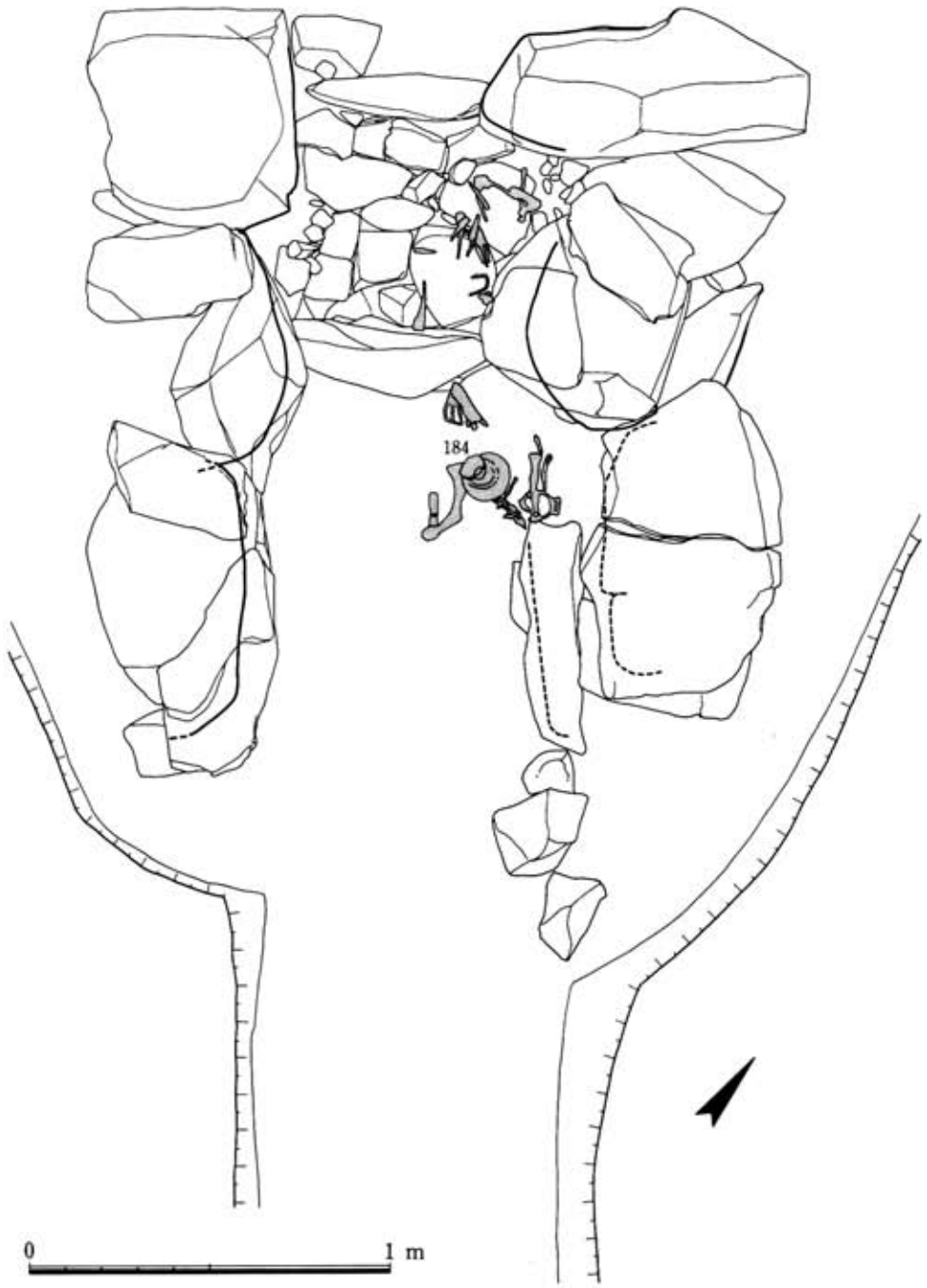


Fig.36　ＳＴ004古墳羨道部遺物出土状況（1/20）

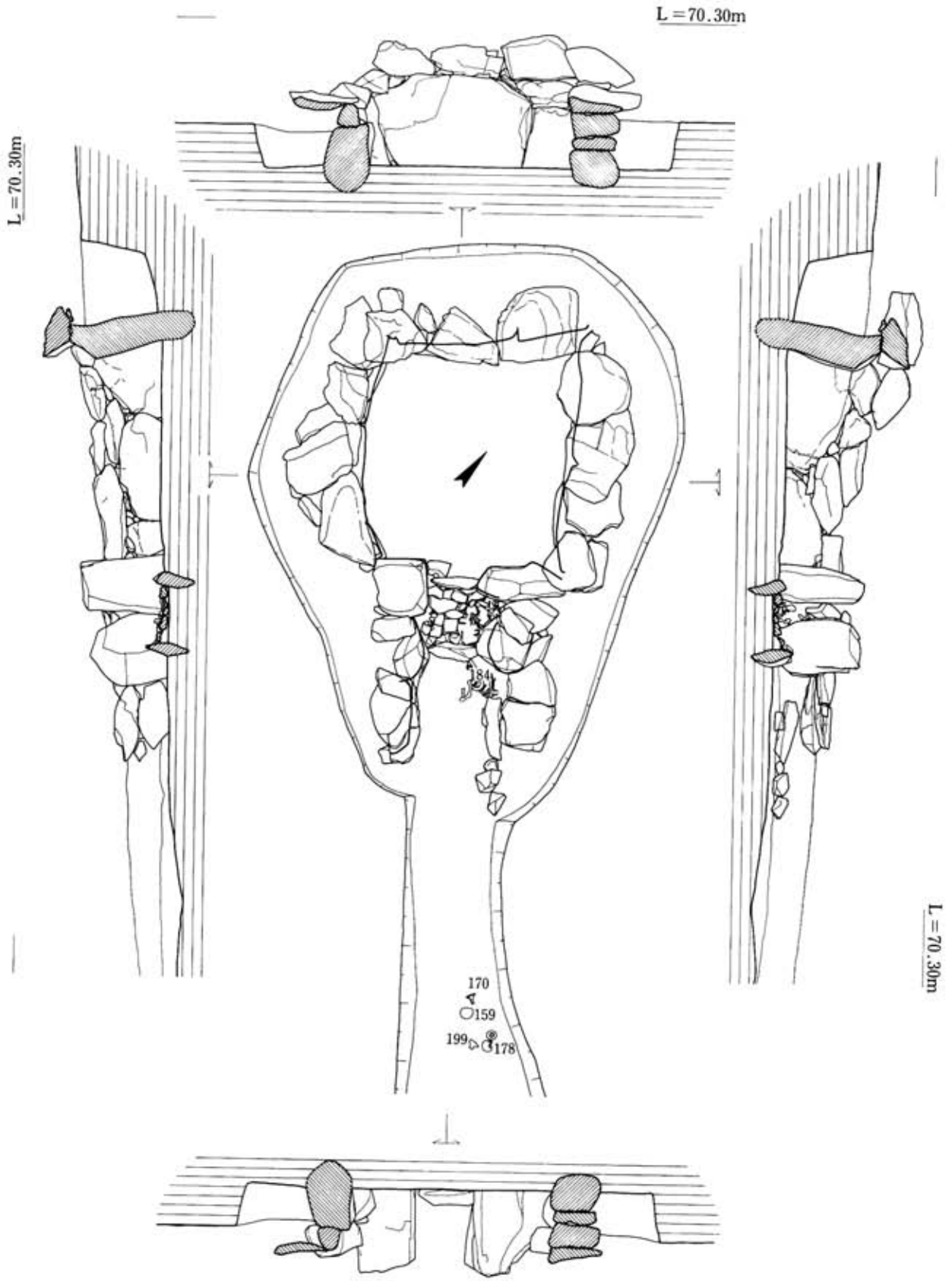


Fig.37　ST004古墳石室（1/60）

0　2 m

杯部中位に凸線を一条施す。口唇部内面に沈線をもち古式の特徴を残す。171は杯部中位、脚部中位にそれぞれ二条の沈線を有す。174～179は甕。177、178はほぼ同じ大きさで179は小形である。180と181は台付き椀の蓋と身のセットである。180の蓋には宝珠つまみとかえりがつき体部には二条の稜を有す。181の台付き椀の体部は蓋とよく似た二条の稜をもつ。182も台付き椀。183、184は平瓶。184は羨道部から馬具とともに出土、小形で天井部に二条の沈線をもち体部は全面カキ目調整を施す。185、186、187、189、190、191は壺でそれぞれ形態は変化に富む。185は平瓶か提瓶の胴部に外に広がる口頸部をつけ壺としている。186は底部平坦で胴部は円筒形、肩部は丸味をもつ。190は底部欠失し、胴下半部に格子目ふうタタキを残す。器形は186に類似すると思われる。187、191の胴部は球形。187は胴下半部にタタキ痕を残す。189は最大径が上位にある胴部に外反気味の口頸部をつける。胴部全面に格子目ふうタタキ痕あり。188、197は横瓶。192、193、194、195、196、198は甕。192は口縁部が直立し頸部に一条の沈線を有す。胎土、色調とも他の甕とは異なる。193～196、198の甕は口径22～23cm、器高45～46cmで口縁部形態はそれぞれ違うものの胴部形態は類似。

土師器

199、200は高杯の脚部と杯部である。それぞれ内外面丹塗り。

鉄　器

鉄鏃(201～218)すべて前室と羨道から出土した。201は斧箭式。鏑先は丸みをもつ。202～207は両丸造柳葉腸抉式。規格化されているようで形態および大きさは鏃身長５cm前後、幅1.3cmとほとんど同じである。202は全長10.6cm、203、204の全長は11.4cmと同じである。211は同形式の頸部。208～210は小形柳葉式。片鎬造りで棘篦被、関部は鈍角である。212～218は鉄鏃頸部で棘篦被をもつ。

刀子(219～221)219は片関で関部は直角、全長13.6cm、身幅９㎜を測る。220は刀身、221は茎部から刀身にかけて残存する。茎部長4.6cm。

飾り金具(223)十字架形の金具の中央部に球状のつまみ、裏面には釘部がつく。鉄地金銅張り。裏面には革か樹皮痕あり。木棺などの飾り金具か。

馬　具

224、225は轡。224は二連式銜と引手金具からなる。銜、引手金具とも断面円形の鉄棒の両端を環状に回す。銜の全長8.7cmと9.4cm、引手金具の全長13.6cmと14.1cm。225は板状立聞素環鏡板付轡。鏡板の環径7.9cm、立聞の長さ4.0cmで立聞長／環径比＝0.50となる。坂本美夫編年(1985)では7C第一半期。銜の全長は9cmと10cm、引手金具の全長16.2cmと14.9cm。引手金具は先端の円環部がやや曲がる。226、227は鐙鞍。2連の兵庫鎖と鉸具を連結する。兵庫鎖の全長9.5cm。鉸具の全長7.2cm、幅4.8cm。228～230は鉸具。231、232は刺し金か。233、234、235は鐙本体。234と235が同一個体の可能性がある。側板は長方形で３ケ所に鋲を打つ。全長11cm、側板幅2.0cm。

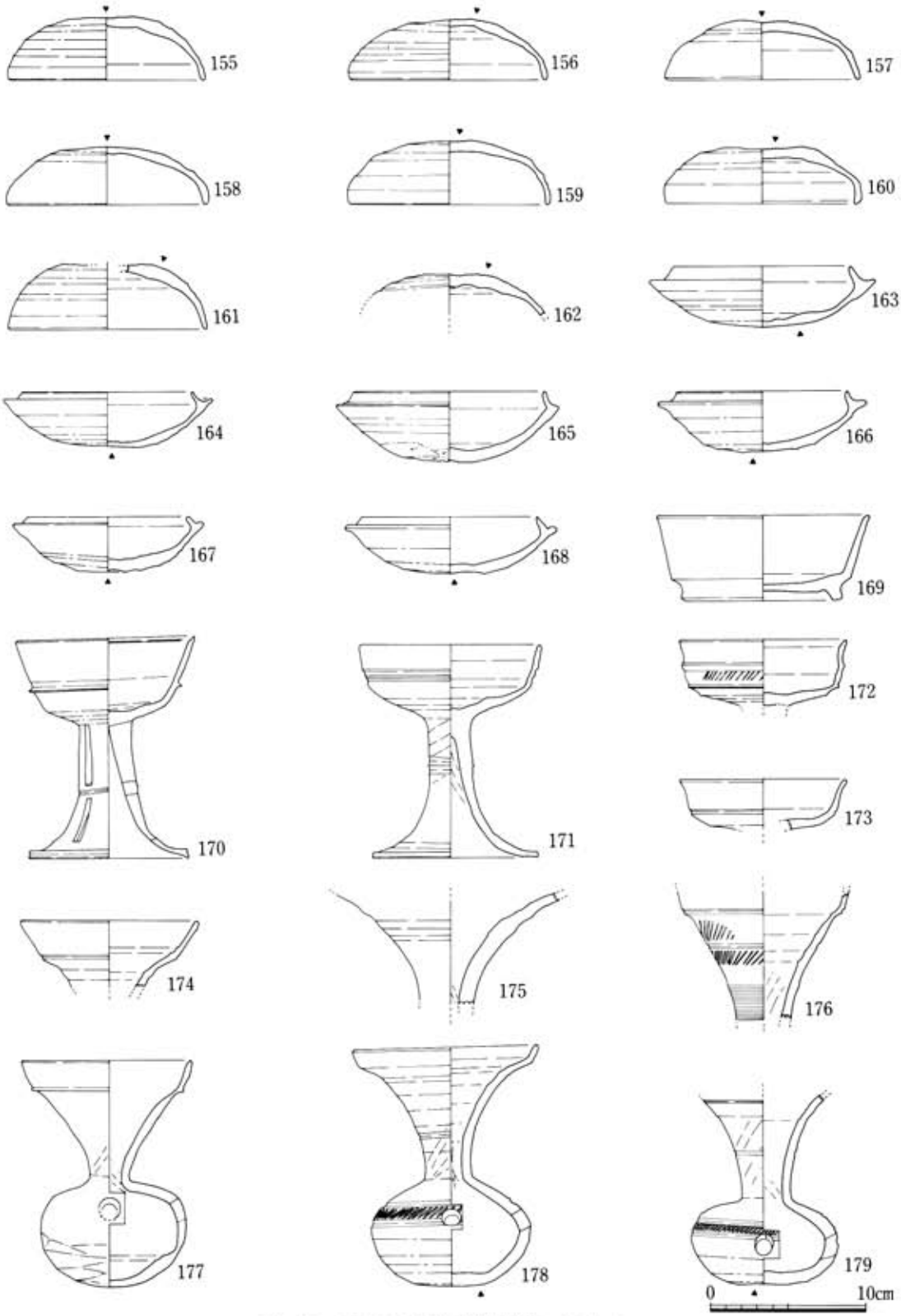


Fig.38　ＳＴ004古墳出土須恵器１（１／４）

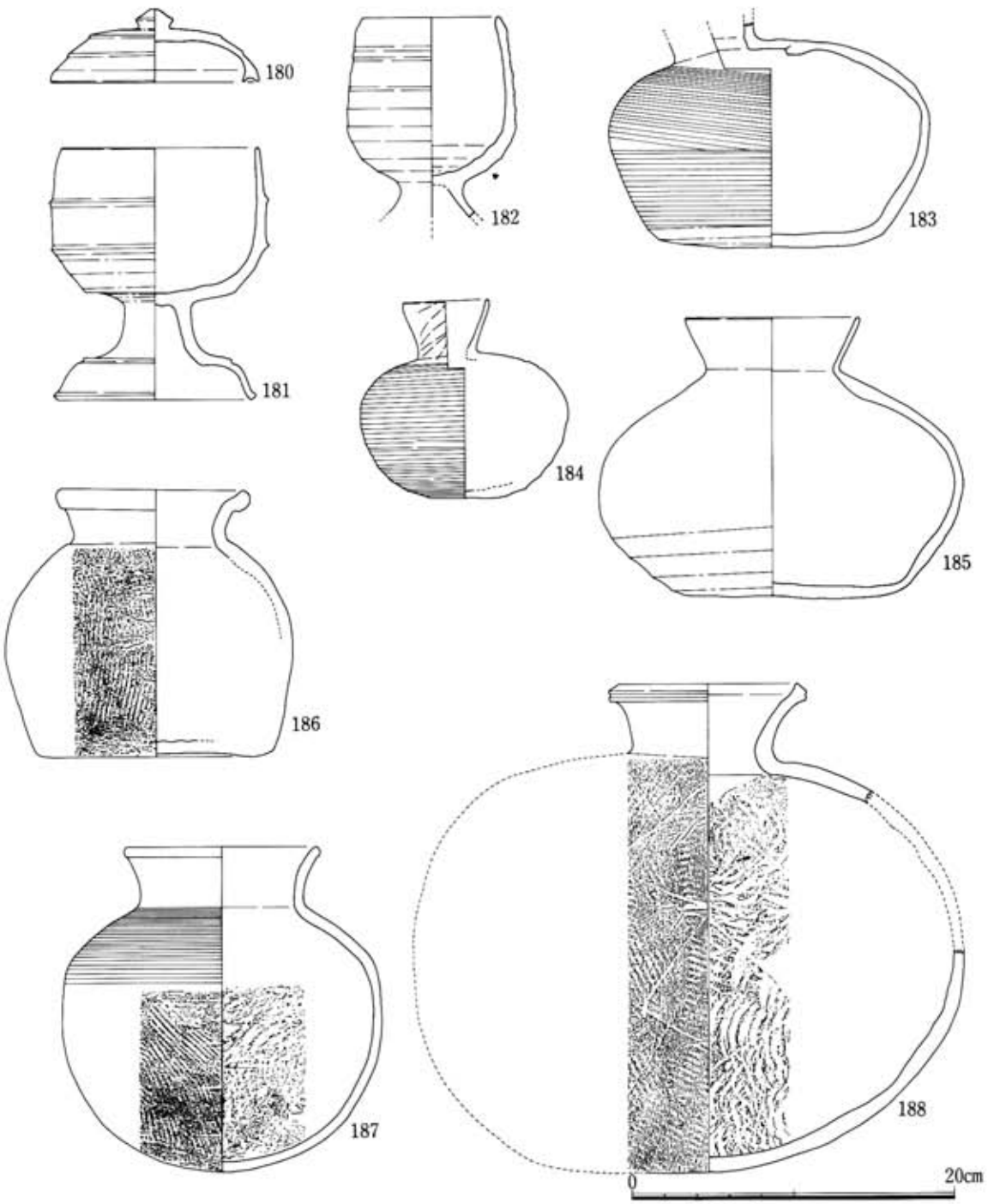


Fig.39　ＳＴ004古墳出土須恵器２（１/４）

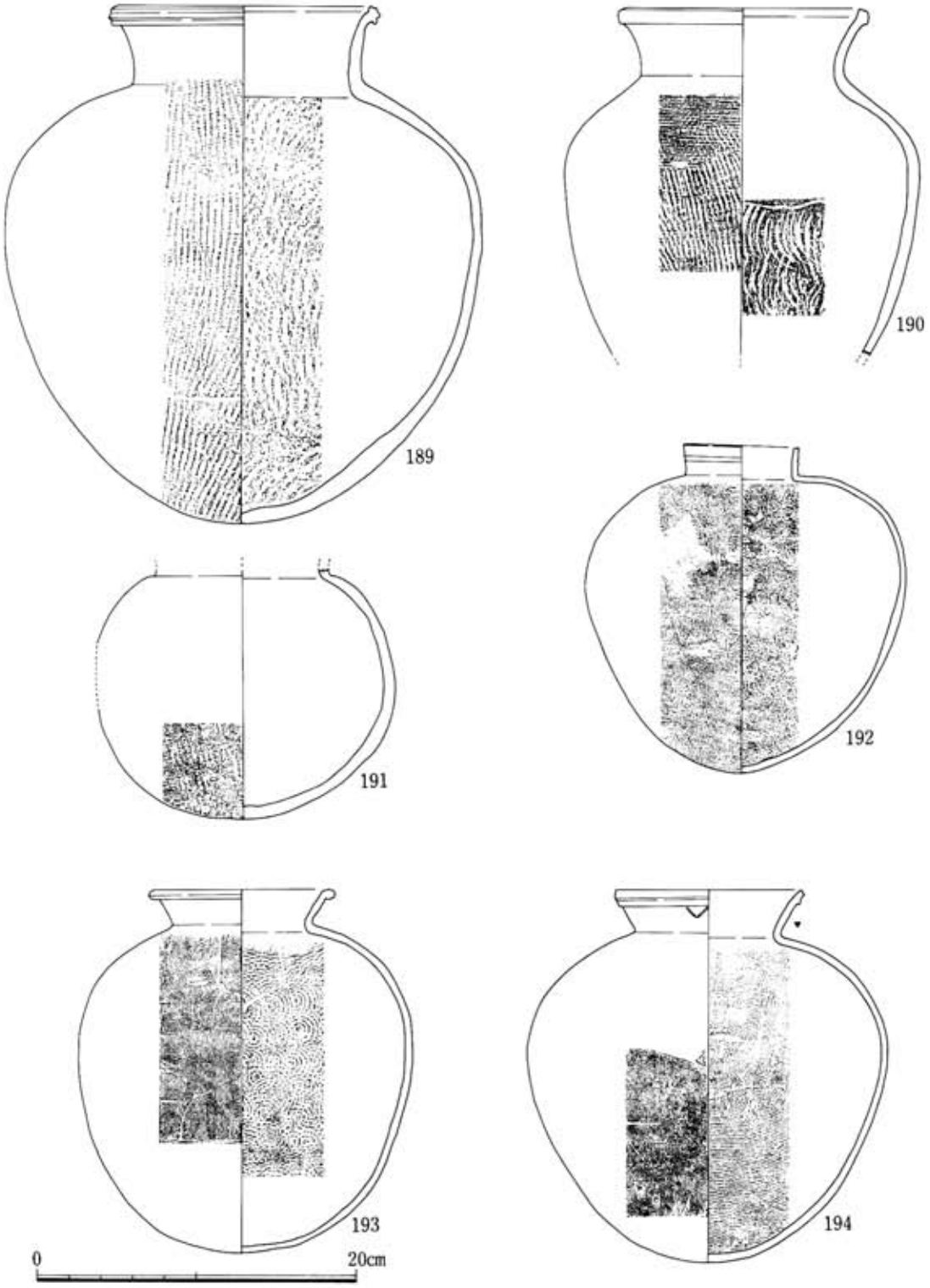


Fig.40　ＳＴ004古墳出土須恵器３（１／４　192～194は１／８）

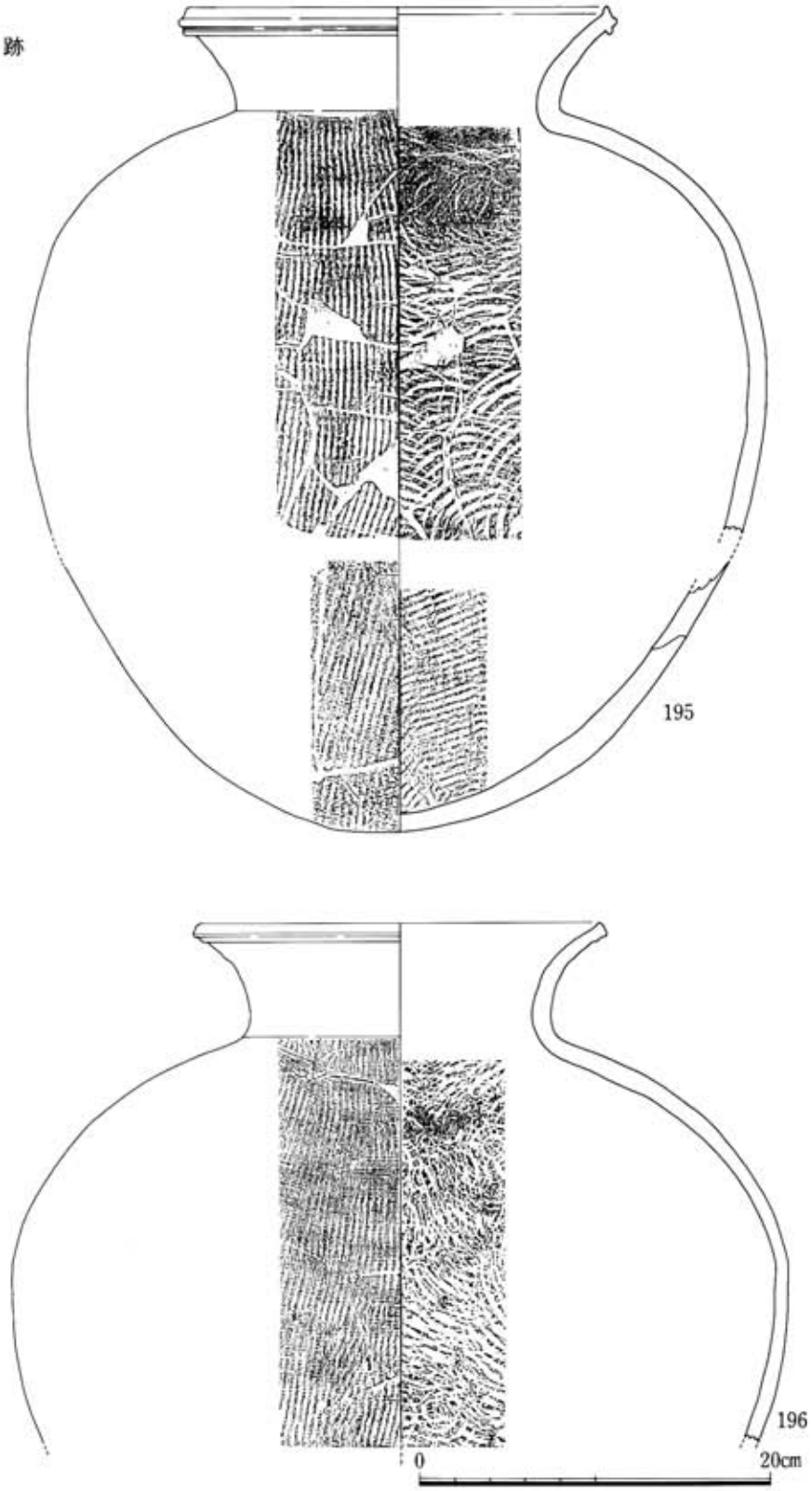


Fig.41　ＳＴ004古墳出土須恵器４（１/４）

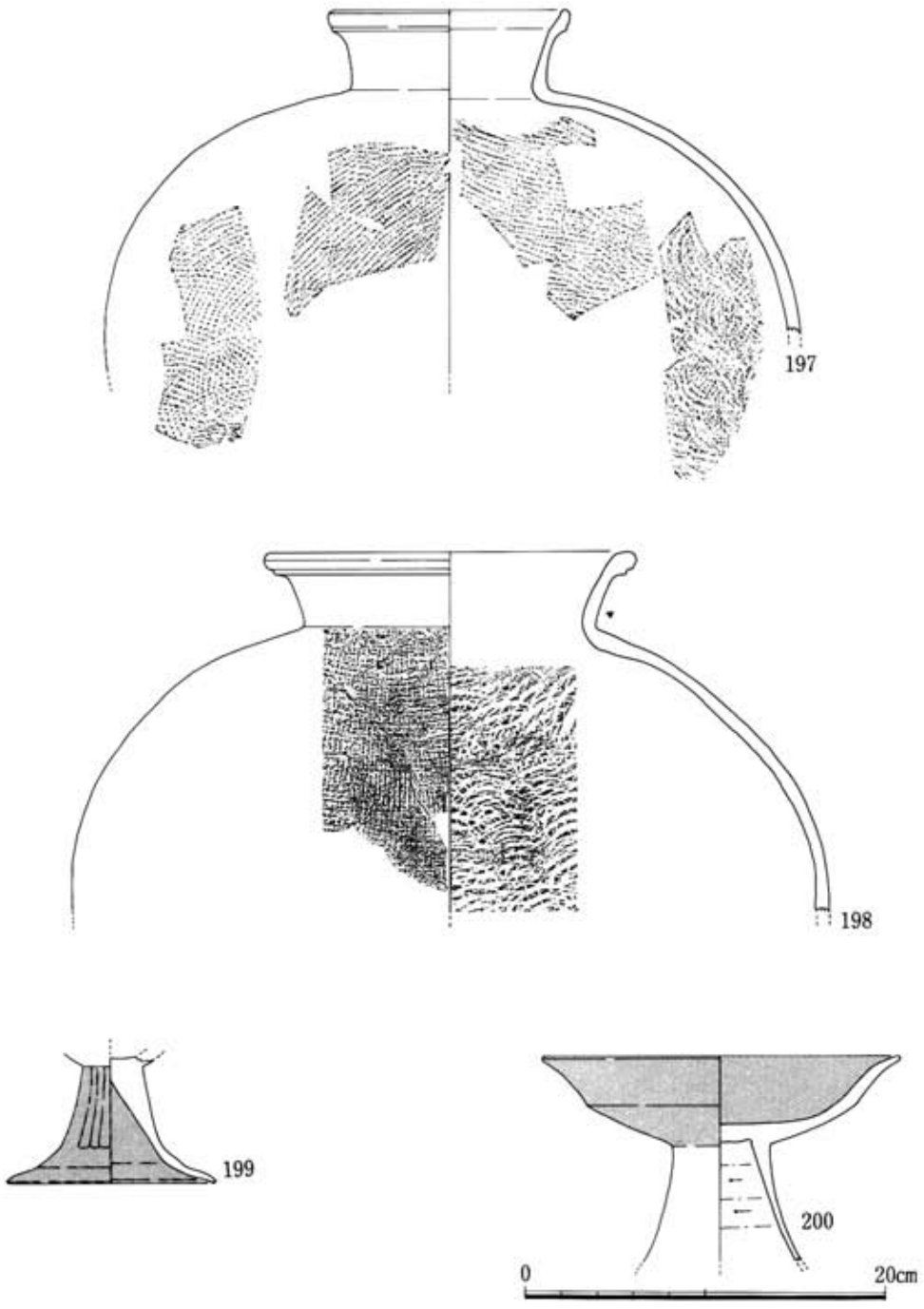


Fig.42　ＳＴ004古墳出土土器（1／4）

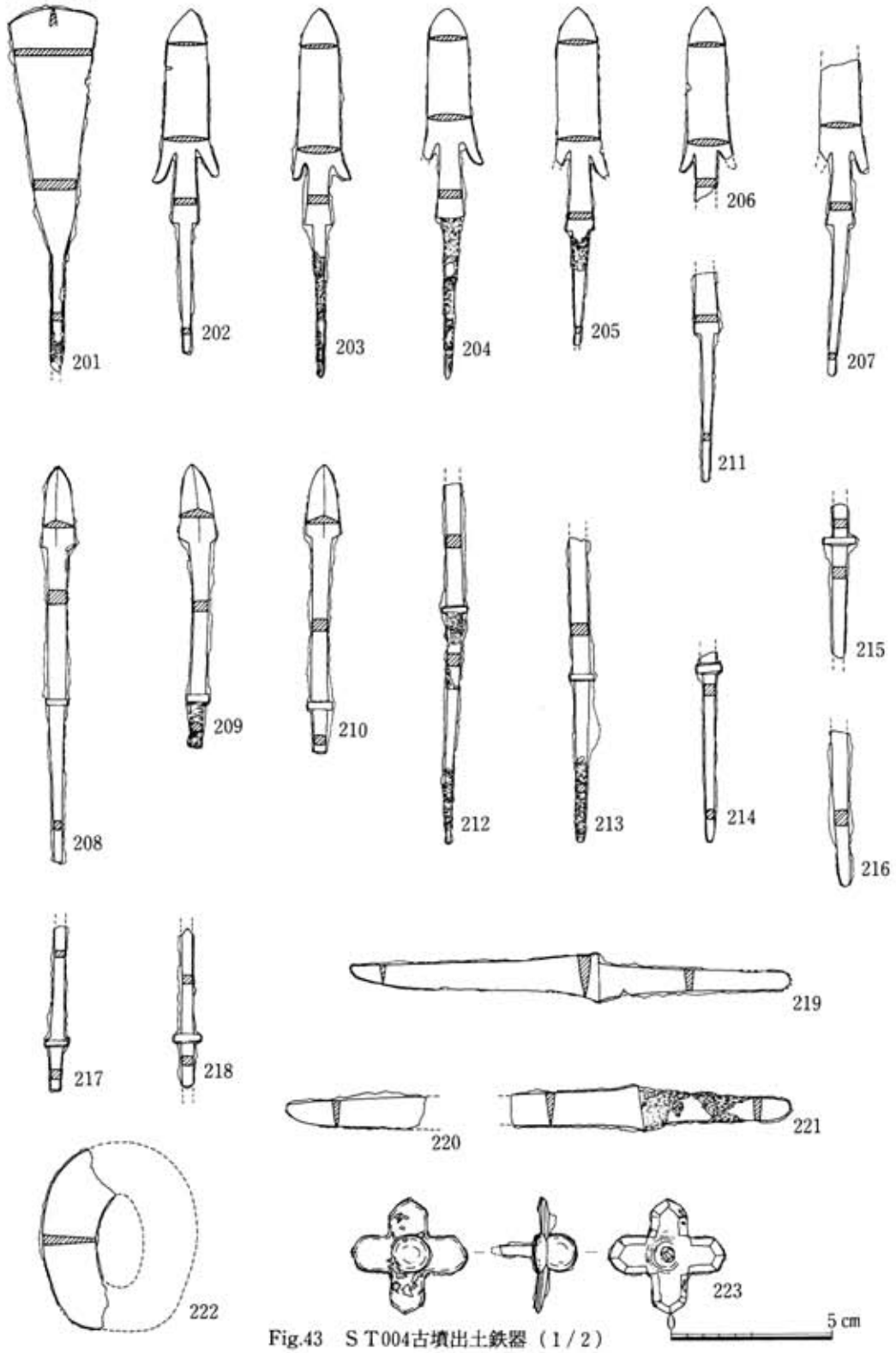
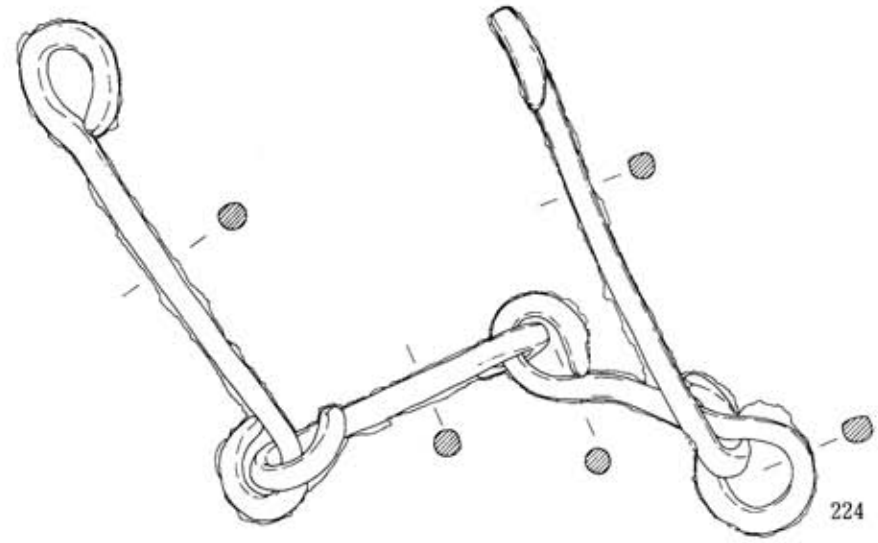


Fig.43　ＳＴ004古墳出土鉄器（１/２）



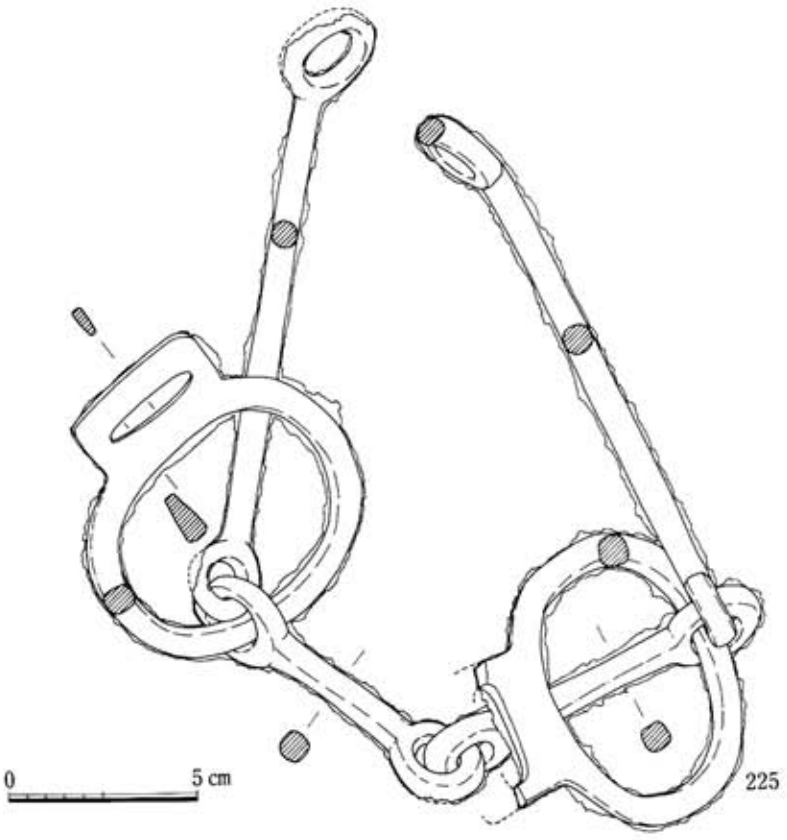


Fig.44　ＳＴ004古墳出土馬具１（１/２）

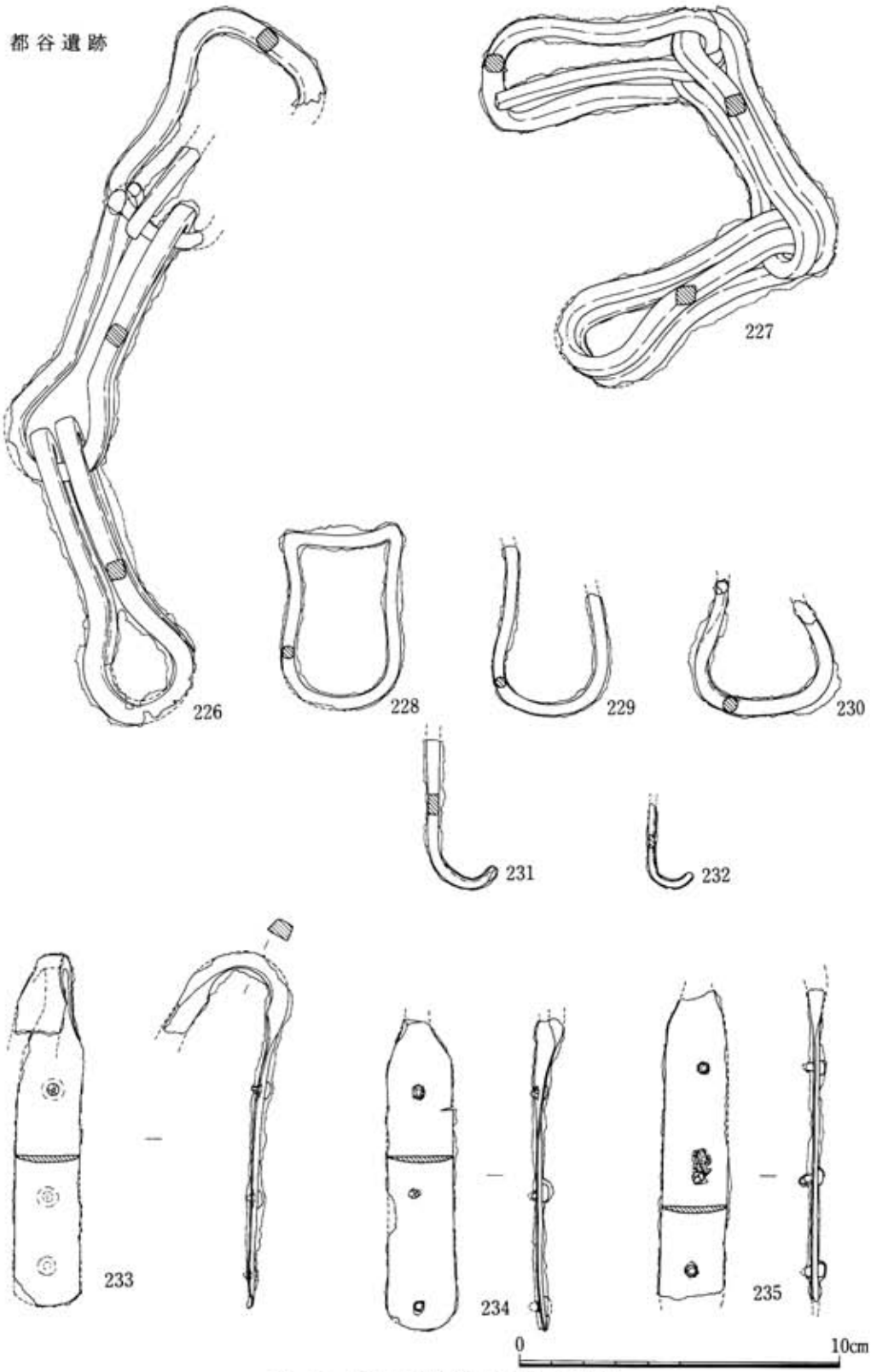


Fig.45　ＳＴ004古墳出土馬具２（１/２）

Fig.46　ＳＴ004古墳出土装身具(1/2)

装身具

236、237、238は耳環。すべて成分分析をしている。その結果、236は銀と銅、237は金主体に銀混入、238は銀という結果がでている。肉眼観察では236は緑青と漆黒色部があり鉄地銀銅張り。237は全面金張り。238は径1.3cmと小形で耳環以外の可能性がある。漆黒色である。

Tab.8　ＳＴ004古墳出土土器一覧表

（　）は推定

Fig-図番号 (PL番号)	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
38-155 (PL.48)	ＳＴ004 墓道埋土	杯蓋 (須恵器)	口径　12.4 器高　4.0	天井部約2/3回転ヘラケズリ。天井部ヘラ記号あり。	灰　色	やや良	85-3884 900395
-156 (　〃　)	ＳＴ004 墓道埋土	杯蓋 (須恵器)	口径　12.0 器高　3.9	天井部約3/4回転ヘラケズリ。天井部ヘラ記号あり。	灰黒色	やや良	85-3782 900355
-157 (　〃　)	ＳＴ004 墓道埋土	杯蓋 (須恵器)	口径　(12.0) 器高　3.8	天井部約2/3回転ヘラケズリ。天井部ヘラ記号あり。	橙褐色	普　通	85-3790 900361
-158 (　〃　)	ＳＴ004 墓道埋土	杯蓋 (須恵器)	口径　12.3 器高　3.8	天井部約2/3入念な回転ヘラケズリ。天井部ヘラ記号あり。	灰　色	普　通	85-3883 900394
-159 (　〃　)	ＳＴ004 墓道埋土	杯蓋 (須恵器)	口径　12.2 器高　4.1	天井部約2/3回転ヘラケズリ。天井部ヘラ記号あり。	灰　色	良　好	85-3774 900345
-160 (　〃　)	ＳＴ004 周　溝	杯蓋 (須恵器)	口径　11.7 器高　3.6	天井部約3/4回転ヘラケズリ。天井部は平坦、ヘラ記号あり。	暗灰色	普　通	85-3791 900362
-161 (　〃　)	ＳＴ004 墓道埋土	杯蓋 (須恵器)	口径　(12.4) 器高　4.2	天井部約2/3回転ヘラケズリ。天井部にヘラ記号あり。	灰　色	普　通	85-3775 900353
-162	ＳＴ004 墓道埋土	杯蓋 (須恵器)	——	天井部約2/3回転ヘラケズリ。天井部にヘラ記号あり。	暗灰色	普　通	85-3776
-163 (　〃　)	ＳＴ004 墓道埋土	杯身 (須恵器)	口径　11.1 器高　4.0 たちあがり高1.1	底部不定方向ヘラケズリ、ヘラ記号あり。	灰　色	普　通	85-3784 900357
-164 (　〃　)	ＳＴ004 墓道埋土	杯身 (須恵器)	口径　11.0 器高　3.4 たちあがり高0.8	底部約2/3回転ヘラケズリ。底部にヘラ記号あり。	灰　色	普　通	85-3785 900358
-165 (　〃　)	ＳＴ004 墓道埋土	杯身 (須恵器)	口径　12.0 器高　4.6 たちあがり高0.9	底部不定方向ヘラケズリ。たちあがりは内傾し受部は水平にのびる。	灰黒色	普　通	85-3783 900356
-166 (　〃　)	ＳＴ004 墓道埋土	杯身 (須恵器)	口径　10.8 器高　4.0 たちあがり高0.8	たちあがりは直立気味で、受部は水平にのびる。底部にヘラ記号あり。調整不明瞭。	灰　色	普　通	85-3886 900397

（ ）は推定

Fig.図番号 (PL番号)	出土地点	器種	法量cm	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
38-167 (PL.48)	ST004 墓道埋土	杯身 (須恵器)	口径 10.2 器高 3.6 たちあがり高0.6	たちあがりは短く内傾する。底部約2/3回転ヘラケズリ。ヘラ記号あり。	灰白色	普通	85-3885 900396
-168 (〃)	ST004 墓道埋土	杯身 (須恵器)	口径 11.2 器高 3.6 たちあがり高0.8	底部回転ヘラケズリ、ヘラ記号あり。	灰色	普通	85-3887 900398
-169 (〃)	ST004 周溝	杯身 (須恵器)	口径 13.0 器高 5.6	高台付き、底部にヘラ切り痕残る。	灰白色	普通	85-3888 900399
-170 (PL.49)	ST004 墓道埋土	高杯 (須恵器)	口径 (11.2) 器高 14.2	二段三方透かし、口唇部内面に沈線あり、杯部中位に一条の凸線あり。	灰色	普通	85-3789 900360
-171 (〃)	ST004 墓道埋土	高杯 (須恵器)	口径 (11.2) 器高 13.8	杯部中位と脚部中位に二条の沈線あり。	灰色	普通	85-3781 900359
-172	ST004 墓道埋土	高杯 (須恵器)	口径 (10.3)	杯部中位に二条の凸線あり。その間にヘラ描き斜行文あり。	灰黄色	普通	85-3796
-173	ST004 墓道埋土	高杯 (須恵器)	口径 (10.2)	口縁部は外反、杯部中位に二条の沈線あり。	灰色	普通	85-3794
-174	ST004 墓道埋土	甕 (須恵器)	口径 (11.2)	頸部は外反し、口縁部近くで屈曲する。	灰色	普通	85-3786
-175	ST004	甕 (須恵器)	——	口頸部はラッパ状に外反する。赤焼き。	橙褐色	普通	85-3778
-176	ST004 周溝	甕 (須恵器)	——	口縁部近くで屈曲する。ヘラ描き斜行文を二段に施文。	灰白色	普通	85-3787
-177 (〃)	ST004 墓道埋土	甕 (須恵器)	口径 (10.9) 器高 14.2	胴中位から下半部は不定方向ヘラケズリ、口縁部に一条の凸線を有す。砂粒多く含む。	暗灰色	普通	85-3798 900271
-178 (〃)	ST004 墓道埋土	甕 (須恵器)	口径 11.4 器高 15.4	胴肩部に二条の沈線あり。その間にヘラ描き斜行文を施文。ヘラ記号あり。	灰色	やや良	85-3777 900354
-179	ST004 周溝	甕 (須恵器)	胴径 9.4	胴部中位に二条の沈線あり。その間にヘラ描き斜行文を施文。底部回転ヘラケズリ。	灰色	普通	85-3788
39-180 (〃)	ST004 墓道	蓋 (須恵器)	口径 10.7 器高 4.5	つまみ、かえり付き。体部に二条の稜がつく。181とセット。	灰黒色	普通	85-3880 900390
-181 (〃)	ST004 墓道	台付椀 (須恵器)	口径 12.0 器高 15.6	体部に二条の稜、台部に一条の沈線が施される。180とセット。	灰黒色	普通	85-3881 900391
-182	ST004 羨道埋土	台付椀 (須恵器)	口径 8.4	最大径が下位にある体部に外に広がる脚部がつく。ヘラ記号あり。	暗灰色	良好	85-3797
-183	ST004 墓道	平瓶 (須恵器)	胴径 20.0	胴部はカキ目調整、底部は回転ヘラケズリ。	灰白色	普通	85-3897

（ ）は推定

Fig-図番号 (PL番号)	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
39-184 (PL.49)	ST004 羨道部	平瓶 (須恵器)	口径　5.0 器高　12.2	胴部から底部までカキ目調整、肩部に二条の沈線が施される。	暗灰色	良　好	85-3882 900393
-185 (〃)	ST004	壺 (須恵器)	口径 (10.2) 器高　9.2	最大径は中位にある胴部に外に広がる口頸部がつく。底部カキ目状の調整。	灰　色	普　通	85-3896 900405
-186 (〃)	ST004 墓　道	壺 (須恵器)	口径　10.8 器高　16.6	平底で肩部は丸味をもつ。内面同心円文、外面平行タタキ。	灰白色	普　通	85-3893 900403
-187 (〃)	ST004 周　溝	壺 (須恵器)	口径 (11.4) 器高　20.0	丸底で胴上半部はカキ目、下半部は平行タタキ、内面はタタキ後、ナデ消し。	灰　色	やや良	85-3894 900404
-188 (〃)	ST004 墓　道	横瓶 (須恵器)	口径　10.8 器高　30.1	胴部外面平行タタキのちカキ目、内面円心円文タタキ。	灰白色	普　通	85-3890 900400
40-189 (〃)	ST004 周　溝	壺 (須恵器)	口径　15.8 器高　32.8	口縁部は焼けひずむ。胴部外面格子目ふうタタキ後、カキ目調整内面同心円文タタキ。	灰白色	普　通	85-3900 900406
-190 (〃)	ST004 墓道埋土	壺 (須恵器)	口径 (14.2)	胴部外面格子目ふうタタキ後、胴上半部はカキ目、胴部内面は円心円文タタキ。	灰白色	普　通	85-3891 900401
-191	ST004 周　溝	壺 (須恵器)	胴径 (19.8)	丸底で胴部最大径は中位にある。胴部外面タタキのちカキ目ふうのナデ。	橙褐色	普　通	85-3892 900402
-192	ST004 墓　道	甕 (須恵器)	口径　13.6 器高　41.2	口頸部は直立し、一条の沈線が入る。胴部外面、格子目ふう叩き。内面は同心円文叩きのちナデ消し。	橙褐色	普　通	86-1006
-193	ST004 周　溝	甕 (須恵器)	口径　22.0 器高　45.6	胴部外面はタタキ後カキ目調整、内面は同心円文タタキ。肩部に自然釉が垂下。	灰　色	やや良	86-1005
-194	ST004 墓道埋土	甕 (須恵器)	口径　22.8 器高　46.8	胴部外面のタタキ痕は下半部に若干残り、カキ目でナデ消す。底面内面は、平行叩き。上半部は同心円文叩き。胴部外面全体に自然釉がかかる。	灰黒色	やや良	86-1004
41-195	ST004	甕 (須恵器)	口径　23.5 器高 (46.6)	胴部外面は平行叩きのちカキ目調整、内面は同心円文叩き。	灰褐色	普　通	85-3899 901538 901537
-196	ST004 周　溝	甕 (須恵器)	口径 (22.4)	胴部外面タタキ後カキ目調整。内面は同心円文タタキ。	灰　色	良　好	86-1001 901485
42-197	ST004 墓道埋土	横　瓶 (須恵器)	口径 (12.9)	胴部外面格子目ふうタタキのちナデ消し、胴部内面格子目ふうタタキ。部分的には、同心円文タタキあり。	灰黒色	良　好	85-3889
-198	ST004 墓　道	甕 (須恵器)	口径　19.8	胴部外面は叩きのちカキ目調整、内面は同心円文叩き。	灰黄色	普　通	86-1002
-199	ST004 墓　道	高杯 (土師器)	底径　11.6	脚裾部は外に広がる。内外面丹塗り。	赤橙色	普　通	85-3779 901276
-200	ST004	高杯 (土師器)	口径　19.4	杯部中位で弱く屈曲し、口縁部にかけて外反する。内外面丹塗り。	赤橙色	普　通	85-3795 901277

5．ＳＴ005古墳

(1) 概　要

調査区の南側に位置し、北７ｍにはＳＴ003古墳が、東14mにＳＴ001古墳が、西13mにＳＴ008古墳がある。墳丘、石室上半部は削平を受け腰石のみ残存する。内部主体は平面縦長方形の横口式小石室である。出土遺物はない。従って築造時期も特定できないが、小石室であることなどからＳＴ006古墳などと伴に本古墳群最終の築造で小田編年Ⅵ期を想定できる。

(2) 内部主体

小石室である。主軸をＮ27°Ｅにとり丘陵南西側に向かって開口し、等高線に平行して築造される。横口式か竪穴式か判断しにくいが、南小口面に配する石を仕切り石としその外側に横たわる石を閉塞石とし横口式小石室と考えた。

石室平面形態は縦長方形で規模は中央長1.75m、中央幅0.8mを測る。石室掘り方は南側がすぼまる隅丸長方形である。

奥壁は0.7×0.3m程の壁面を整えた横長石材を横位に配する。左右側壁は0.9×0.5m程の横長石材を２石づつ横位に配する。袖石はなく南小口面に0.5×0.3m程の仕切り石を置く。その外側には径0.5m程の扁平状石が横たわり、人頭大の石もあるがこれらは閉塞石であろう。

床面は水平で南側半分に径20cm程の転石を敷き詰める。北側半分はすでに抜かれており、本来は床全面に敷き詰めていたのであろう。

(3) 出土遺物

出土遺物なし。

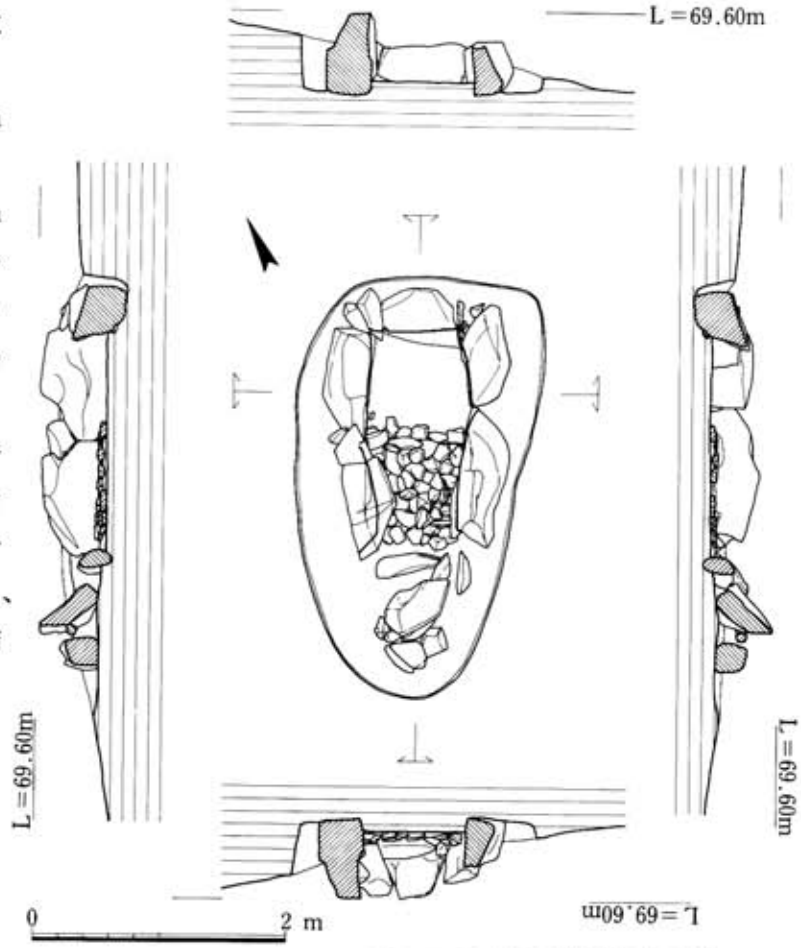


Fig.47　ＳＴ005古墳石室（1/60）

6．ＳＴ006古墳

(1) 概　要

調査区のほぼ中央に位置し、北西８ｍにＳＴ010古墳が、東方12mにＳＴ004古墳が、南方７ｍにＳＴ003古墳がある。内部主体は平面方形の横口式の小石室である。出土遺物は土師器の壺１点のみで築造時期も特定できないが、小石室であることなどからＳＴ005古墳などとともに本古墳群最終の築造で小田編年VI期を想定できる。

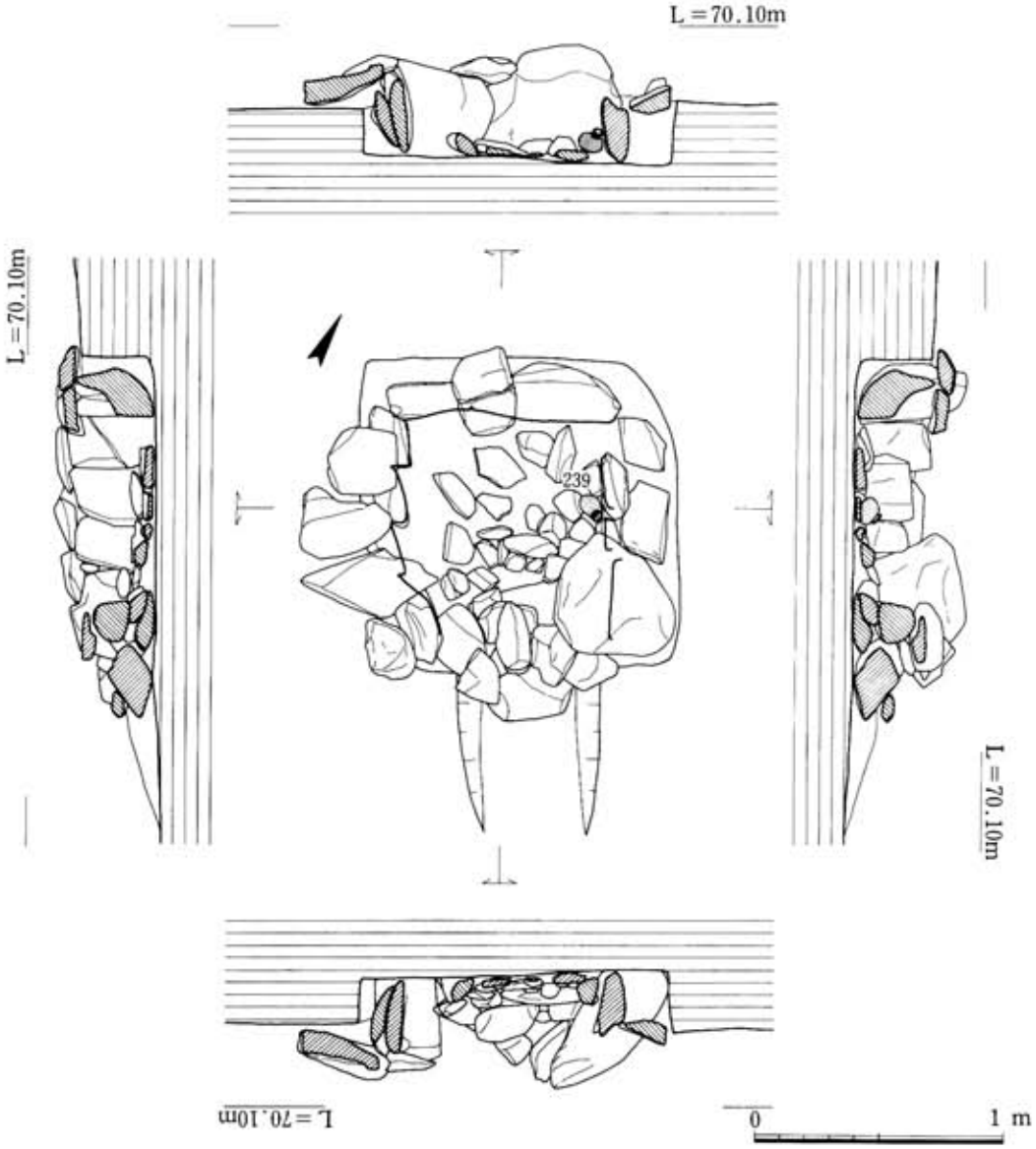


Fig.48　ＳＴ006古墳石室（1/30）

(2) 内部主体

横口式の小石室である。主軸をN30°Wにとり、等高線に直交して築造される。石室平面形態は方形で、規模は中央長85cm、中央幅80cmを測る。石室掘り方は石室プランをひと回り大きくした方形で玄門部に僅かに掘りくぼめられた墓道状の掘り方を連接する。

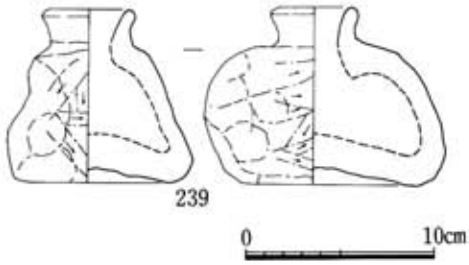


Fig.49　ＳＴ006古墳出土土師器(１/４)

奥壁は60×50、30×35cm程の方形石材２石を立てる。左右側壁は径30cm程の石材３石をそれぞれ縦位に立てる。左側壁側には袖部を意識したように石材を平積みしている。右側壁側にも袖石はあったと考えられるが欠失する。玄門部には径20～30cmの石材を積み閉塞施設とする。

床面には径20cm程の転石をまばらに敷く。

(3) 出土遺物

右側壁側から土師器の壺１個(239)のみの出土である。239はてづくねで横瓶を模倣したミニチュア形土器である。ＳＴ003古墳からひと回り小形であるが類似した土師器(146)が出土している。

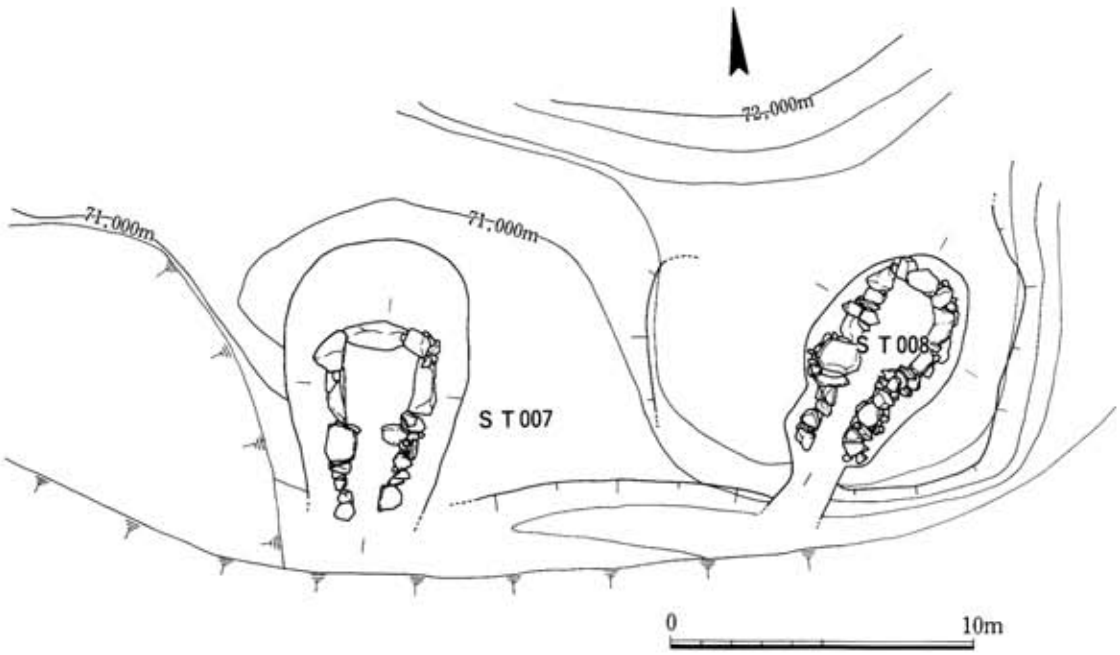


Fig.50　ＳＴ007・008古墳墳丘（１/250)

7．ＳＴ007古墳

(1) 概　要

調査区西側で丘陵の西端に位置する。東方16mにはＳＴ008古墳が北へ約16m、標高４ｍ上にはＳＴ013、014古墳がある。墳丘盛土、石室上半部は削平を受ける。墳丘東側に幅６ｍ程の浅い落ち込みがみられるが周溝ではない。石室掘り方は隅丸長方形である。内部主体は単室両袖型の横穴式石室で、土器の出土は少ないが玄室から鍔、把元金具、鉄鏃などが出土している。築造時期を示す土器は杯蓋・身１点ずつと少ないが、これらは小田編年IV期のものである。追葬を示す土器は出土していない。

(2) 内部主体

単室両袖型の横穴式石室である。主軸をN11°Eにとり、ほぼ南に開口する。墳丘は既になく石室も天井部を欠失する。

石室平面形態は玄室は選択した腰石のためややいびつな長方形で、羨門にむかって平面ハの字状にすぼまる羨道を連接する。規模は石室全長5.0m、玄室中央長2.7m、中央幅2.25mを測る。

玄室の奥壁、左右側壁の腰石は大形の石材を用いそれぞれ１石からなる。奥壁は腰石に２×２ｍ程の角のとれた平面方形の扁平石１石を立て、隅に転石を詰める。腰石上方の石積みはすでにない。左右側壁は似たような石材を選択しているため石積みも類似する。腰石に2.5×1.5ｍ程の台形状石を横位に配する。この腰石上端は玄門にむかって斜め下方にはしるが、これにあわせて目地が通るよう径1.5m程の横長石材を上に積む。

玄門部は左右袖石とも1.5×0.6m程の柱状石材を立てる。玄門幅は0.7mを測る。

羨道部床面には径40～50cmの石が多量に無造作にあり、閉塞石かとも考えたが羨道の空間がないほどにあり、それにしては羨道部の役割がなくなることなどから平面ハの字状にすぼまる羨門部に閉塞施設があったとしてこれらの石は後世の撹乱によるものと考えた。

羨道左右側壁とも腰石に1.2×0.8m程の長方形石材を横位に配する。その上には径30～50cm程の石を積むが石が小形ということもあって目地も通らない。羨門には0.8×0.5m程の縦長石材を立てその上に楣石を架構する。羨門幅は70cmを測る。

(3) 出土遺物

土器、とくに時期決定できる杯蓋・身は１個ずつと少ない。玄室内から鉄鏃、鍔、把元金具などが出土した。

須恵器

杯蓋はＣ類(240)杯身はＣ類（241）がある。240は口縁部約1/5の残存で復元口径12.2cm。241

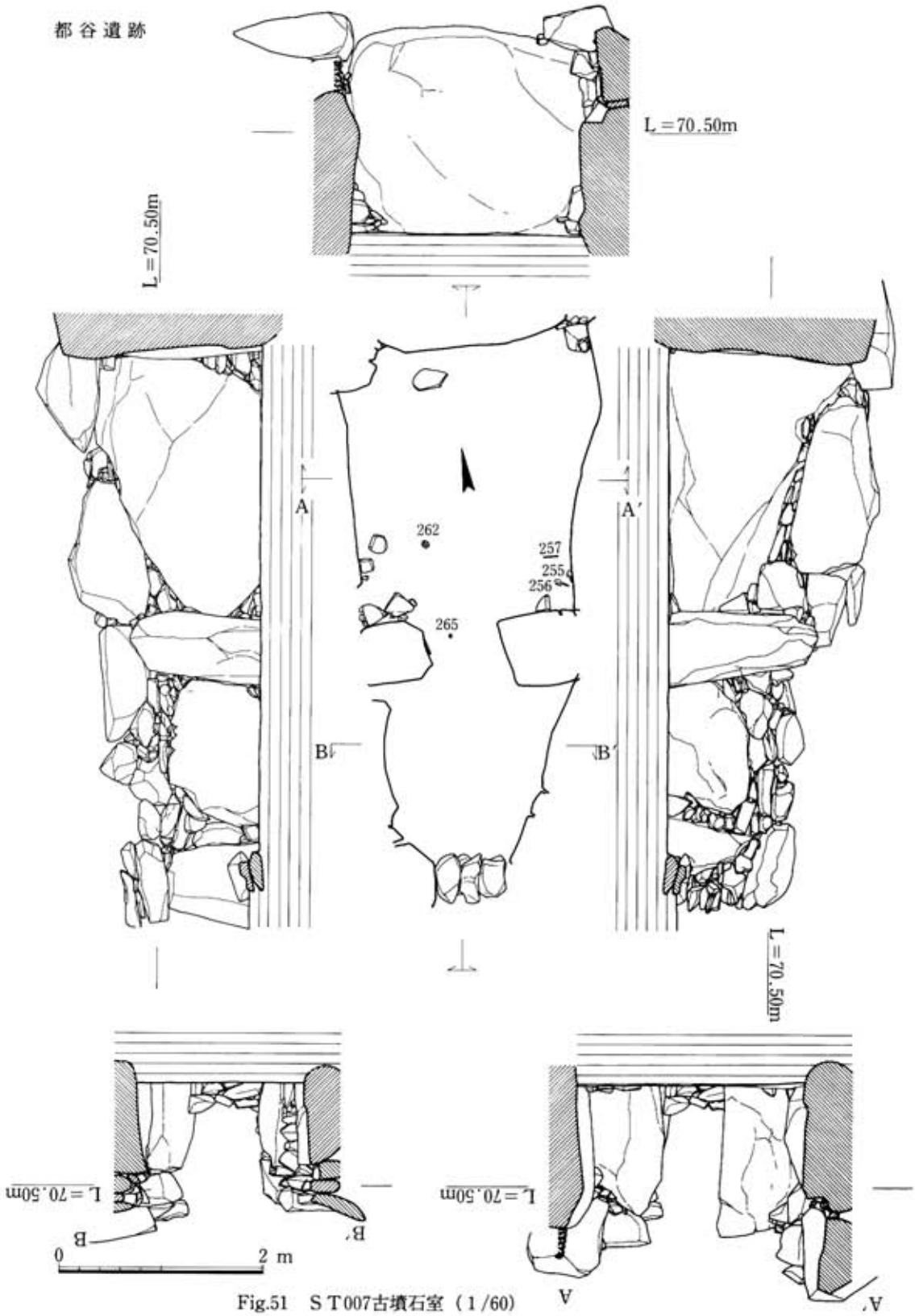
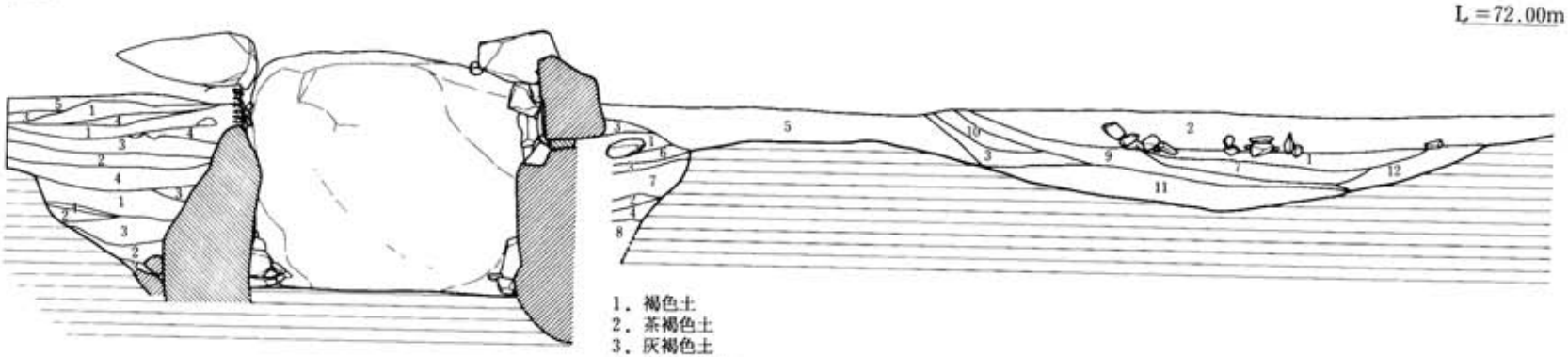


Fig.51　ＳＴ007古墳石室（1/60）



1．褐色土
2．茶褐色土
3．灰褐色土
4．暗灰褐色土
5．黄褐色土
6．暗褐色土
7．黒色土
8．礫混入赤褐色土
9．暗茶褐色土
10．淡褐色土
11．淡黄褐色土
12．暗黄褐色土
13．黒褐色土
14．淡灰褐色土
15．灰色土

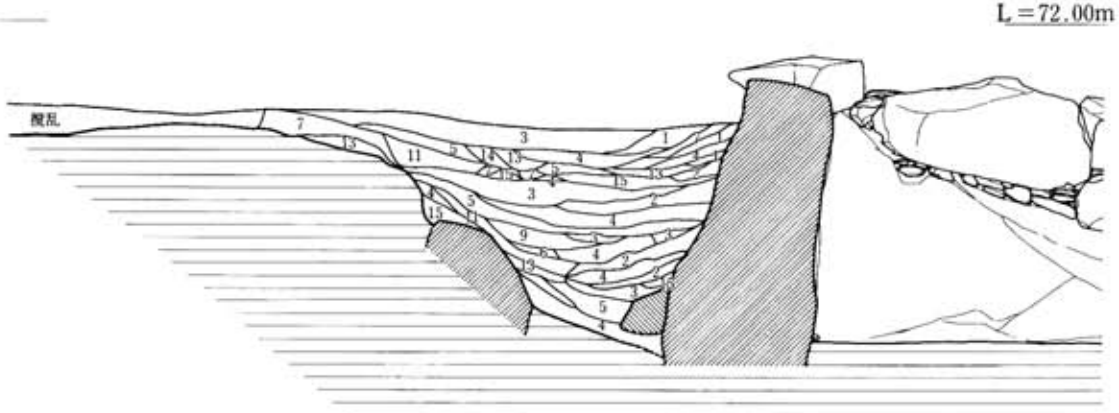


Fig.52　ＳＴ007古墳墳丘土層図（1/60）

は口縁部約1/6の残存でたちあがり高0.8cmを測る。242はつまみ付き蓋。244、245、247は甕。口縁部のみの残存で244、245は胴部外面平行タタキのちカキ目調整、内面同心円文タタキ。247は頸部に櫛描波状文施文。246は広口壺。頸部に櫛描波状文施文。242、244、248は石室外東側の黒色土層中から出土。

土師器

248は杯身、249は高杯脚部。

鉄　器

鉄鏃(250～260)すべて玄室内出土である。250、255、257、258は右袖石近くからまとまって出土した。250は圭頭式、251、252は椿葉式。251は鉾先を欠く。251は篦被有り。252は篦被無し。253は鉾先は丸みをもち側縁部は内反り。254は腸抉柳葉式。255、256は腸抉長三角形式。三角形の透かしが左右対称に入る。257～260は小形柳葉式。257、258は棘篦被で260は鏃身長4.2cmと長い。

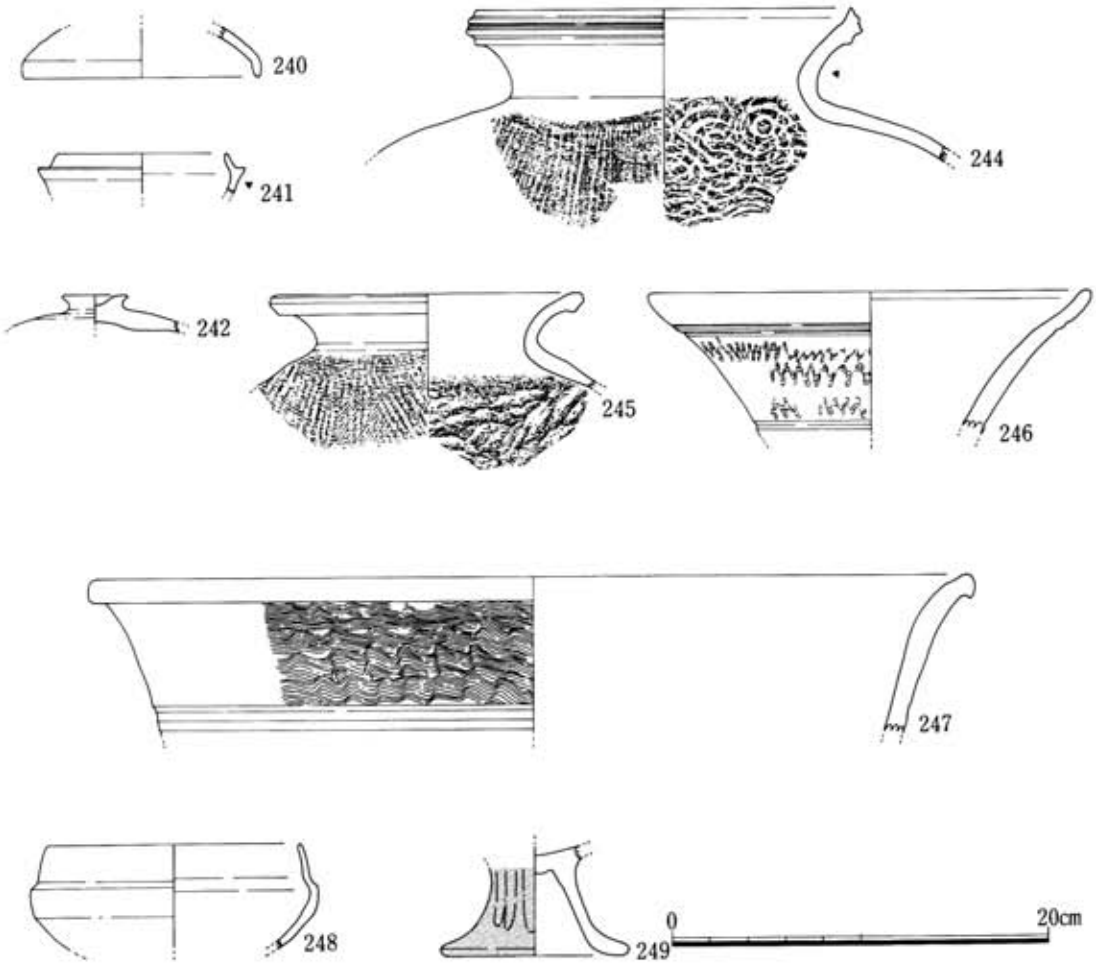


Fig.53　ＳＴ007古墳出土土器（１/４）　243は欠番

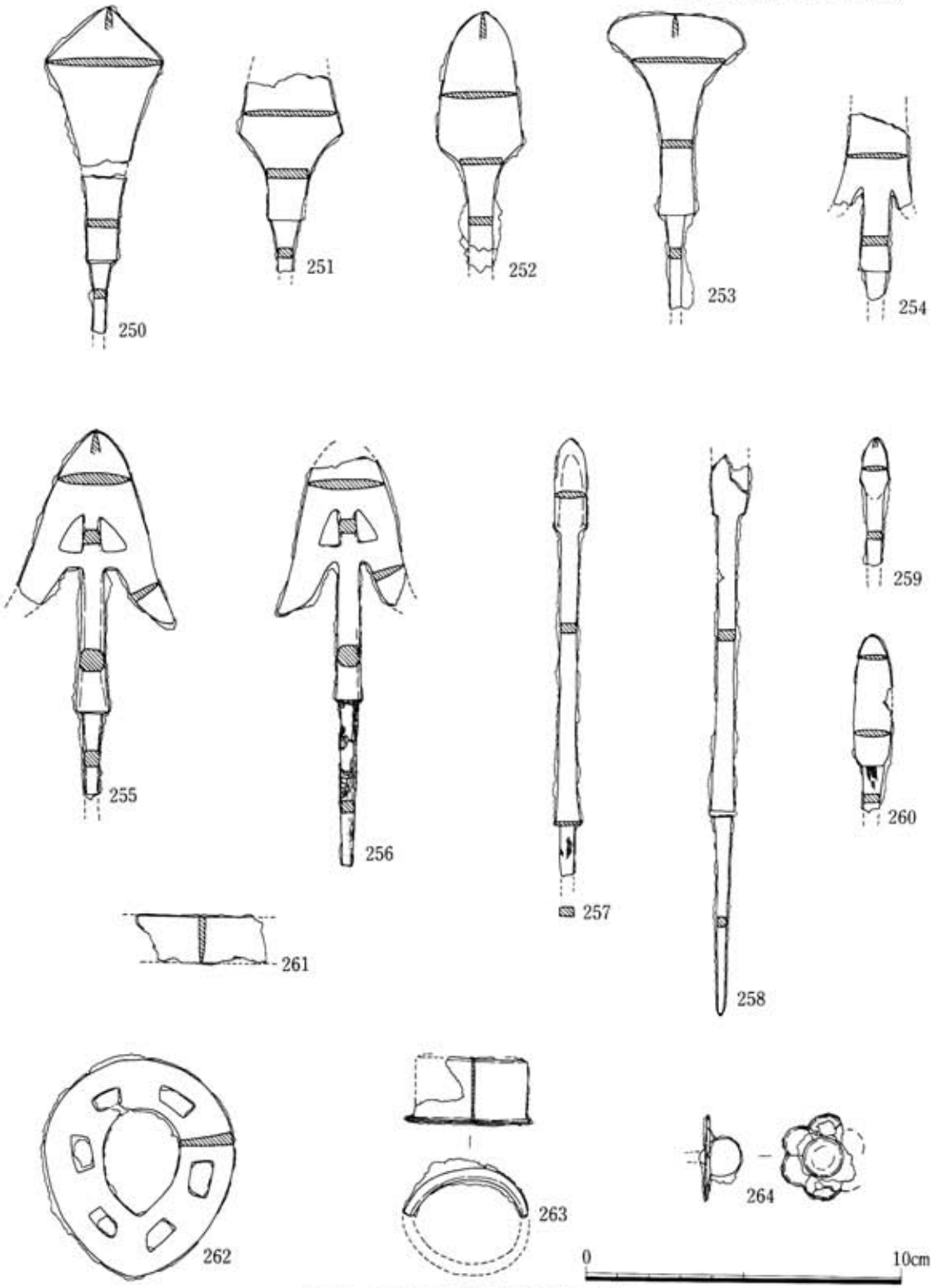


Fig.54　ＳＴ007古墳出土鉄器（１/２）

鍔(262)長軸の片方がやや尖る平面楕円形で長方形の透かしが6つ入る。長軸外径7.0cm、短軸外径6.0cm。

把元金具(263)262の鍔とセットになる。

飾り金具(264)六花弁形の中央に球形のつまみがつく。鉄地金銅張り。ＳＴ004古墳でも飾り金具出土(223)

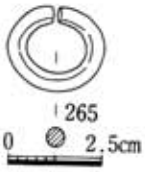


Fig.55 ＳＴ007古墳出土装身具(1/2)

装身具

耳環(265)鉄地銅張り。外径2.3×2.6cm。

Tab.9　ＳＴ006・007古墳出土土器一覧表

（　）に推定

Fig-図番号(PL番号)	出土地点	器種	法量cm	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
49-239 (PL.51)	ＳＸ006 玄室床面	壺 (土師器)	口径 4.0 器高 9.4	手づくね。胴部は横長の長方体で、短い口頸部がつく。底部上げ底。胴部不定方向ヘラケズリ。	黄褐色	普通	85-3816 900365
53-240	ＳＴ007 墳丘	杯蓋 (須恵器)	口径 (12.2)	口縁部約1/5残存。	灰色	やや良	86-963
-241	ＳＴ007 墳丘	杯身 (須恵器)	たちあがり高0.8	口縁部約1/6残存。体部にヘラ記号あり。	灰色	普通	86-964
-242	ＳＴ007 東側黒色土層内	蓋 (須恵器)	——	つまみ付き。天井部回転ヘラケズリ。	灰色	普通	86-956
-244	ＳＴ007 東側黒色土層内	甕 (須恵器)	口径 (20.0)	胴部外面平行タタキのち、カキ目調整内面同心円文タタキ。	灰色	普通	86-954
-245	ＳＴ007 表土	甕 (須恵器)	口径 (14.6)	胴部外面格子目ふうタタキ、内面同心円文タタキあり。	橙褐色	普通	86-965
-246	ＳＴ007 墳丘	壺 (須恵器)	口径 (23.0)	頸部に櫛描波状文を三段、その上下に二条、一条の沈線を施す。	灰白色	普通	86-962
-247	ＳＴ007 墳丘	甕 (須恵器)	口径 (22.6)	頸部に櫛描波状文を施文。	灰黒色	やや良	86-961
-248	ＳＴ007 東側黒色土層内	杯身 (土師器)	口径 (13.0) たちあがり高2.0	たちあがりは、やや内傾する。ナデ仕上げ。	黄褐色	普通	86-956
-249	ＳＴ007 玄室	高杯 (土師器)	脚高 5.0	短脚高杯脚部外面丹塗り。	赤褐色	やや良	86-955 900496

243は欠番

8．ＳＴ008古墳

(1) 概　要

調査区の西側でＳＴ007古墳と同様、丘陵の西端に位置する。西方16m には主軸を同じくするＳＴ007古墳がある。墳丘盛土、石室上半部は削平を受ける。内部主体は複室両袖型の横穴石室で墓道から追葬面をなして多くの土器が出土している。築造時期は小田編年III Ｂ新段階期で追葬はIV期までなされる。

(2) 内部主体

複室両袖型の横穴式石室である。主軸をＮ32°Ｅにとり南西の緩斜面に向かって開口する。墳丘はすでになく石室も天井部を欠失する。

石室平面形態は玄室は長方形、前室はやや幅広の長方形で羨道部を連接する。規模は石室全長6.25m、玄室中央長2.85m、中央幅2.15m、前室中央長0.9m、中央幅1.25m を測る。

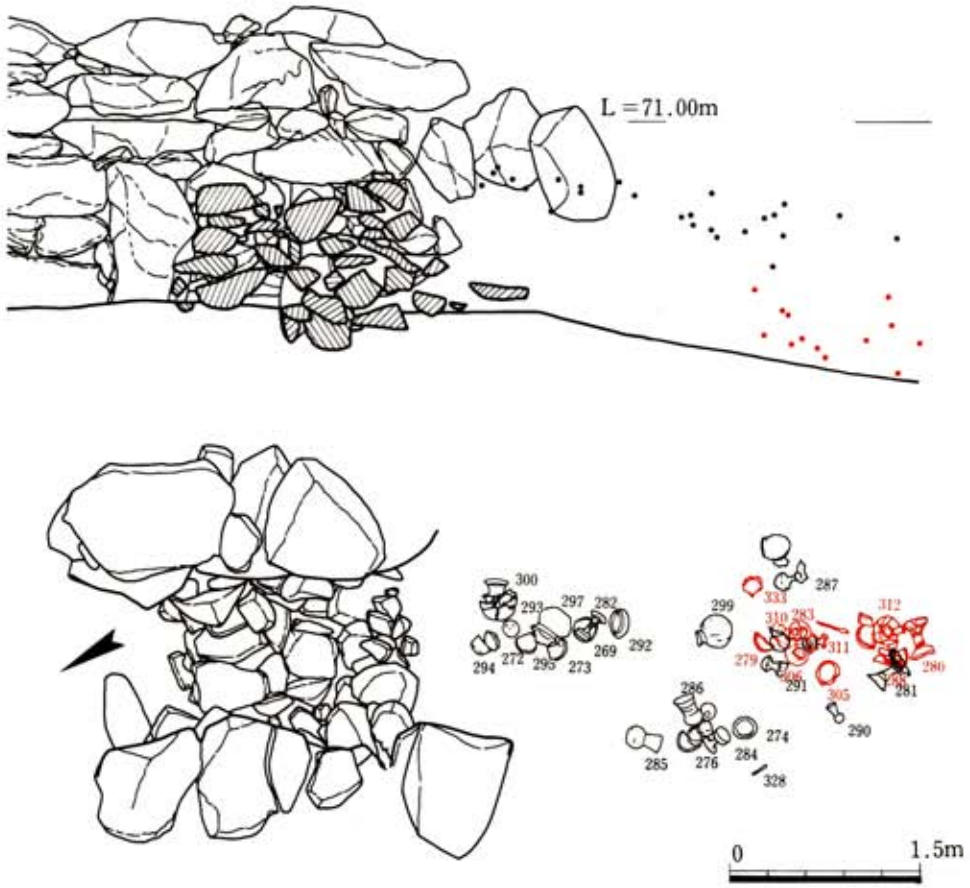


Fig.56　ＳＴ008古墳前庭部遺物出土状況（１/60）

奥壁腰石には2×1.2mほどの壁面の整った大形石1石を配する。その上方の石積みは腰石上端に合うような石材を2～3段横積みする。左右側壁は腰石に似た石材を用いていることなどから石積みも類似する。両側壁の腰石は1.9×1.1m、0.8×0.8m程の大小石材を2石づつ、大形石を奥壁側に小形石を玄門側に横位に配する。腰石上方は長さ0.7～1mの横長石材を横位に積み上げる。奥壁と側壁の隅角は腰石部で奥壁を挟み込むよう配置されている。奥壁、左壁の腰石は内傾し、その上部の石積みも腰石の傾斜に沿って持ち送られている。

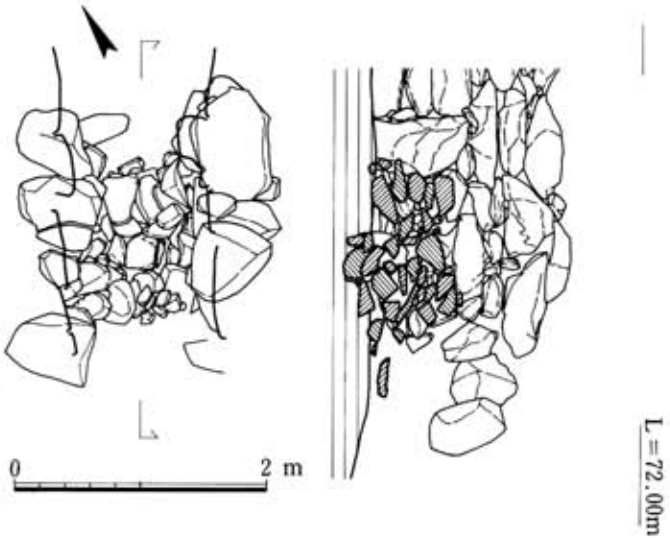


Fig.57　ST008古墳石室閉塞状況（1/60）

玄門部は左右袖石とも1.3×0.6m程の柱状石材を立てる。とくに右袖石は幅広で羨道部内側に突出したかんじを受ける。床面には框石を配する。玄門幅は0.7mを測る。

前室左右側壁は腰石にさほど大形石を用いず長さ50～90cm程の横長石材を4～6段横積みする。前門袖石は0.8×0.4m程の柱状石材を立てその上に横長石材を1、2段積む。前門幅は0.8mを測る。前門床面には框石を配さず、前門から約50cm羨門寄りの位置に2石からなる框石を配する。

閉塞施設は前門部にあり径30～40cmの転石を羨門近くまで積み上げる。この閉塞石のすぐ外側の墓道から多くの土器が出土している。これらは完形品が多く、しかも面をもって出土しており、その面は上下2面はある。これは追葬回数に起因するものと考えられる。ただ、出土した土器が石室内に副葬され、追葬時にかきだされたものか、それとも石室外に供献されたのかは明確にはできない。

(3) 出土遺物

墓道から多くの土器が出土している。これらは上下2つの面をもっており追葬面に相当すると思われる。上面から杯蓋(269、272)、杯身(273、274、276)、高杯(281、282、284、321)、長頸壺(285、286)、短頸壺(292)、壺(297)、蓋(293、294、295)、鼈(287、290、291)、提瓶(299、300、302)、鉄鏃(328)がある。下面から高杯(279、280、283、310、311、312)、鼈(288)、土師器の杯身(305、306)が出土している。

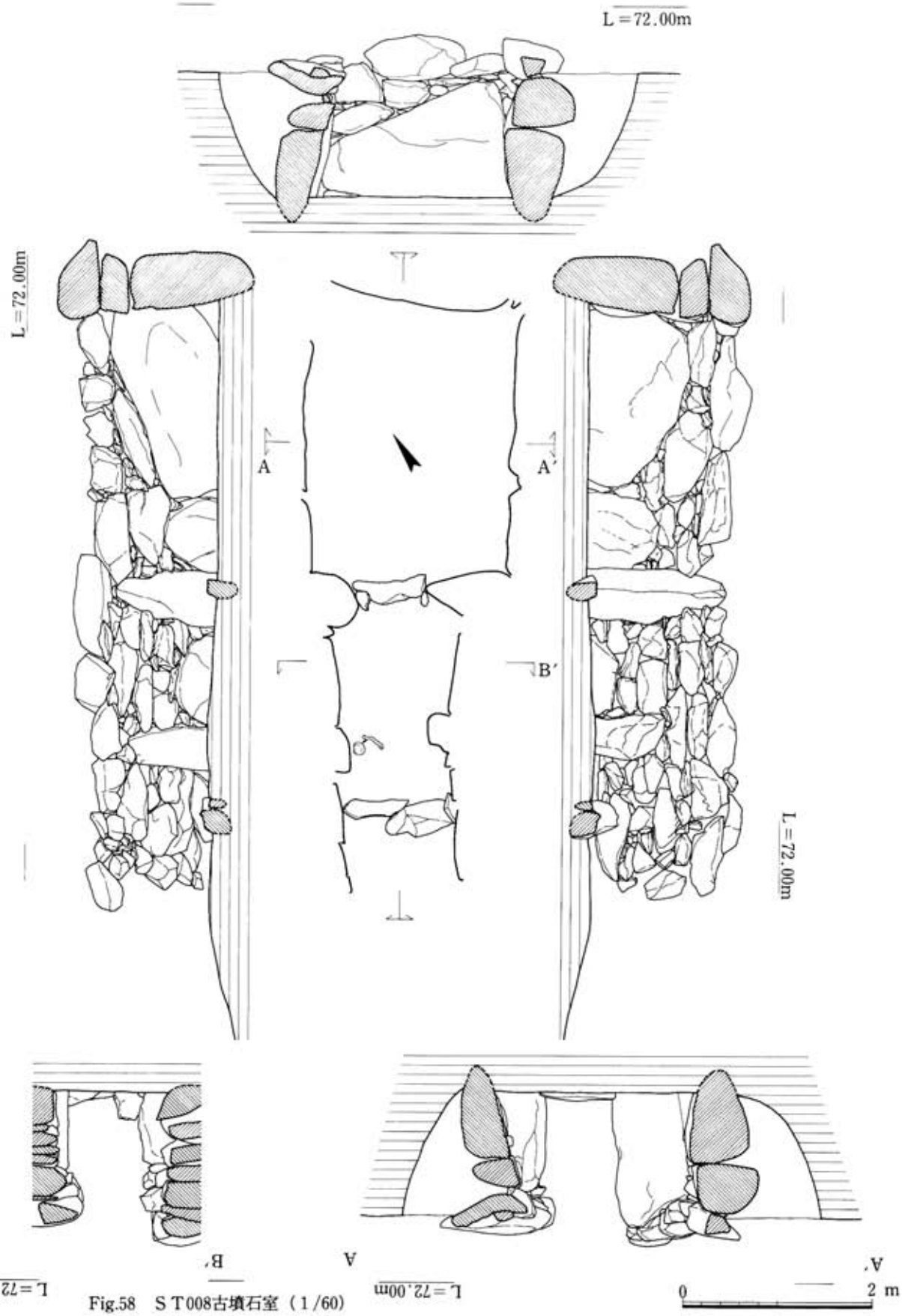


Fig.58　ＳＴ008古墳石室（1/60）

須恵器

杯蓋はB類(266、267、268)・C類(269、270、271)、杯身はB類(273、274、275)・C類(276)がある。266、267は口唇部が面取りされ、268は口唇部内面に沈線を施す。口唇部内面の沈線はA類の特徴であるが杯身にA類がないことなどから268もB類にした。269は口径に対して器高が高い。269、270とも天井部にヘラ記号有り。271の口径9.8cm、272の口径9.1cmとC類にしては小さい。271は逆転身の272は他器種の蓋の可能性有り。273、274、275は口径11cm内外。273がたちあがり高1.2cmとやや長めである。

277は蓋、つまみ付きで有蓋高杯の蓋であろう。278～284は高杯。278は杯部に2条の稜をもつ。279、280は有蓋高杯。279は長脚二段三方透かし、280は透かしなし。279、280の口径は12.5cm前後と杯部口径のみをみるとA類並行期になるが、出土状況、セット関係から見ても杯蓋・身より高杯は一型式遅れるのかもしれない。281は杯体部に2条の稜をもつ。282は長脚二段三方透かしで杯体部に一条の稜をもつ。283、284は杯体部と脚部中位に沈線をもつ。285、286、287は長頸壺。

285、286は球形の胴部にラッパ状に広がる頸部をつける。286は胴部に櫛描列点文、ヘラ描連続斜行文を施す。285は灰白色で286は赤焼きの須恵器。286は器形は甕だが穿孔がない。288～291は甕。291は色調橙褐色で胴部内に穿孔時の粘土塊を残す。292は短頸壺。底部回転ヘラケズリ、胴部カキ目調整。293、294、295は蓋。293、294の器形は類似する。293は天井部カキ目調整、294は不定方向ヘラケズリ。295は口唇部内面に沈線をもち天井部は回転ヘラケズリ。296、297は壺。297はやや肩のはる胴部に外反する頸部がつく。外面格子目ふうタタキのちカキ目調整を施す。内面同心円文タタキ。298は平瓶。把手が2ケ所につく。299～303は提瓶。299は赤焼きの須恵器、胴部前面に櫛描列点文を二重に施す。300は肩部2ケ所にボタン状のつまみを張り付ける。胴部全面にカキ目調整を施す。301は側面部のみ残存、肩部に角状把手の痕跡あり。302は胴部球形で櫛描列点文施文。肩部に把手がつく。303は把手なし。

土師器

304は杯蓋、両面黒塗り。305～309は杯身。305と309はたちあがり高が2cm前後と長く直立気味である。それに対して307、308のたちあがり高は1cm前後と短く、内外面黒塗りである。306は体部と底部の境で強く屈曲する。310～323は高杯。杯部が丁度、306のごとく底部と体部の境で強く屈曲するタイプと内湾するタイプがある。前者が310、311、313、314、315、316で後者が312、317、318である。312、317、318は丹塗りで、概して杯部内湾タイプに丹塗りが多いようである。

鉄　器

鉄鏃(324～329)324は腸抉三角形式。茎部に木質残存。325は柳葉式で関部は直角である。326は小形柳葉式で腸抉気味、断面片切刃造。327は小形柳葉式。鏃身長3.0cmで片丸造。328、329は頸部。

弓付属金具(330)片頭は半球状で座金具をつけ、もう一方の頭は円球状である。全長3.3cm。

留金具(331、332)鉄地金銅張り。平面方形で中央２ケ所に鋲を有する。

馬　具

333、335、336は杏葉。３つとも長方形孔を有する立聞がつく。333は身が１枚造り。335、336は透かしが入る。長径8.5cm、短径7.6cm。334は鐙鞍、３連の兵庫鎖に鉸具と鐙本体をつける。

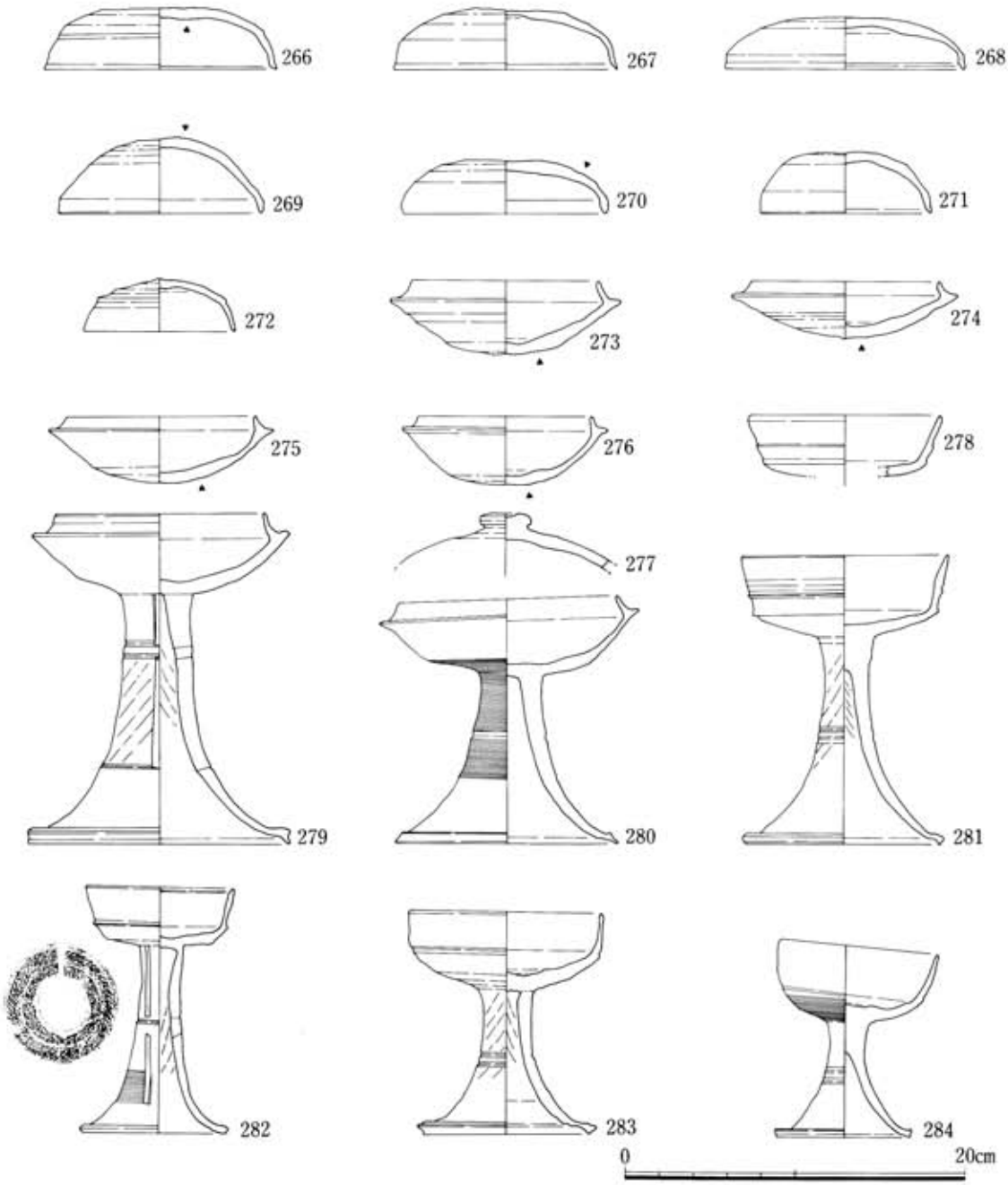


Fig.59　ＳＴ008古墳出土須恵器１（１／４）

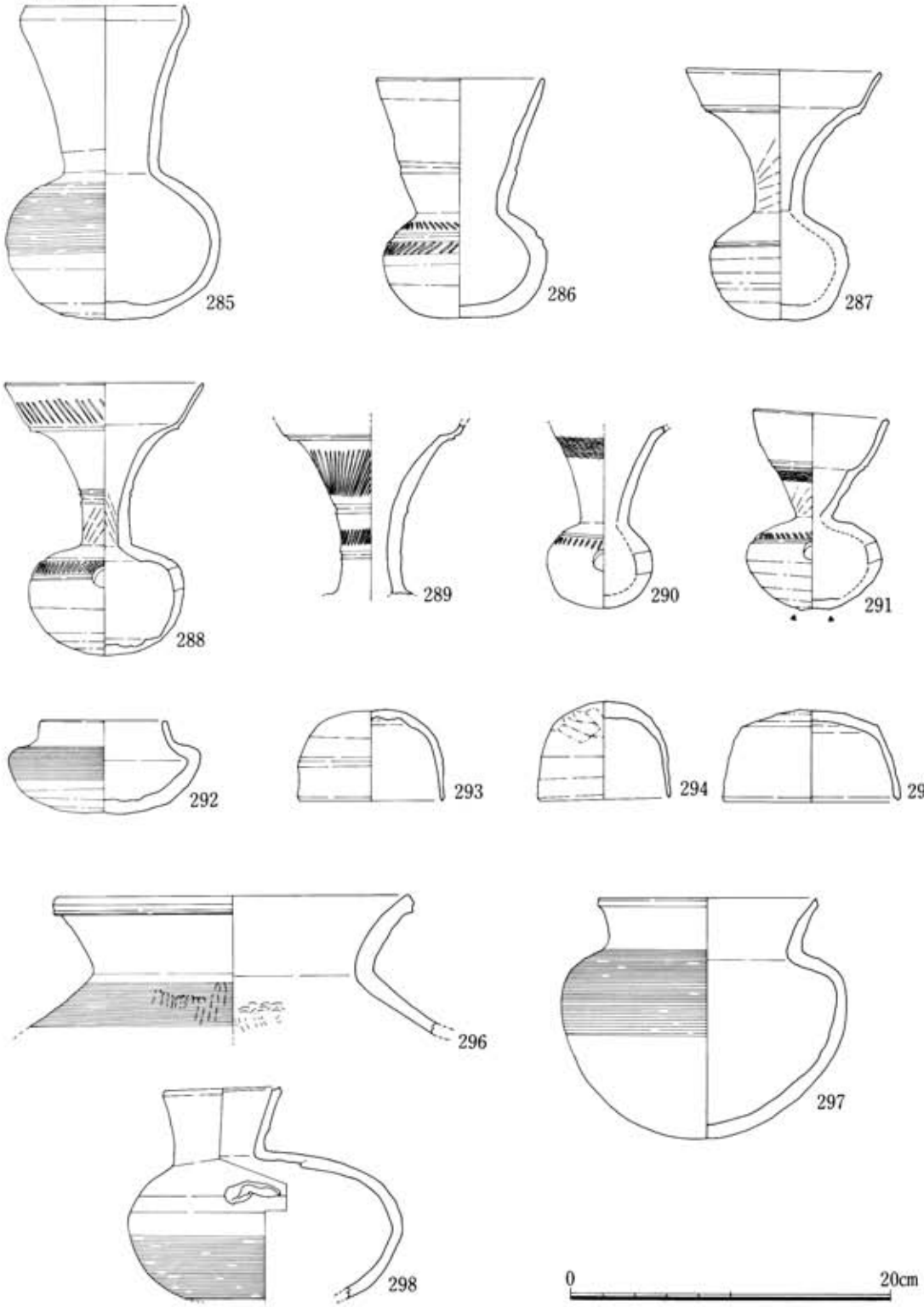


Fig.60　ＳＴ008古墳出土須恵器２（１/４）

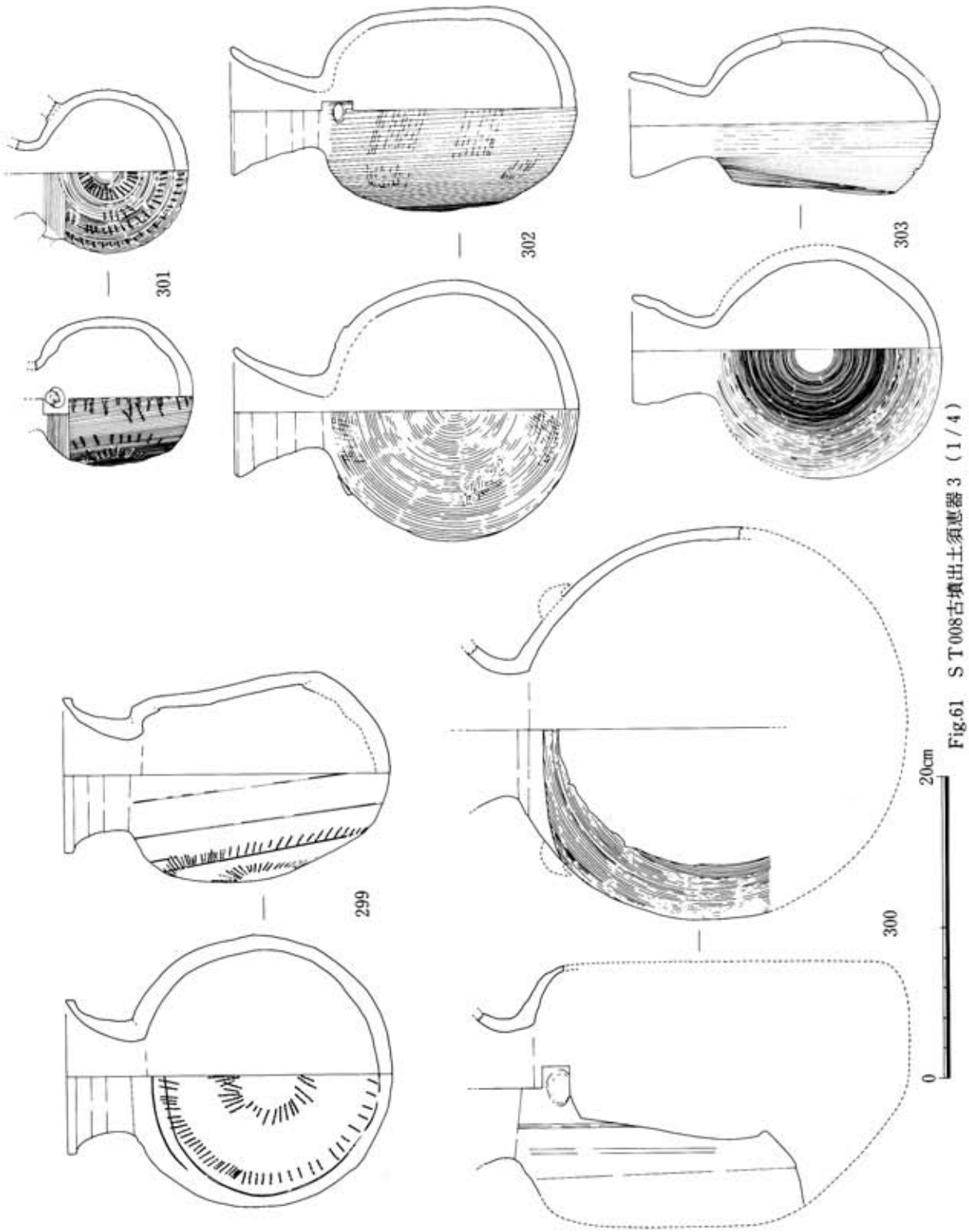


Fig.61　ＳＴ008古墳出土須恵器３（１/４）

鐙本体の側板は長方形で3ケ所に鋲を打ち込む。鐙本体の全長9.3cm。兵庫鎖の全長7.0cm。鉸具の全長7.2cm。

装身具

337～339は土玉。径0.5～0.8cm。340～345はガラス小玉。径0.3～0.5cm。346～348は管玉。346、347は碧玉製。348は土製。

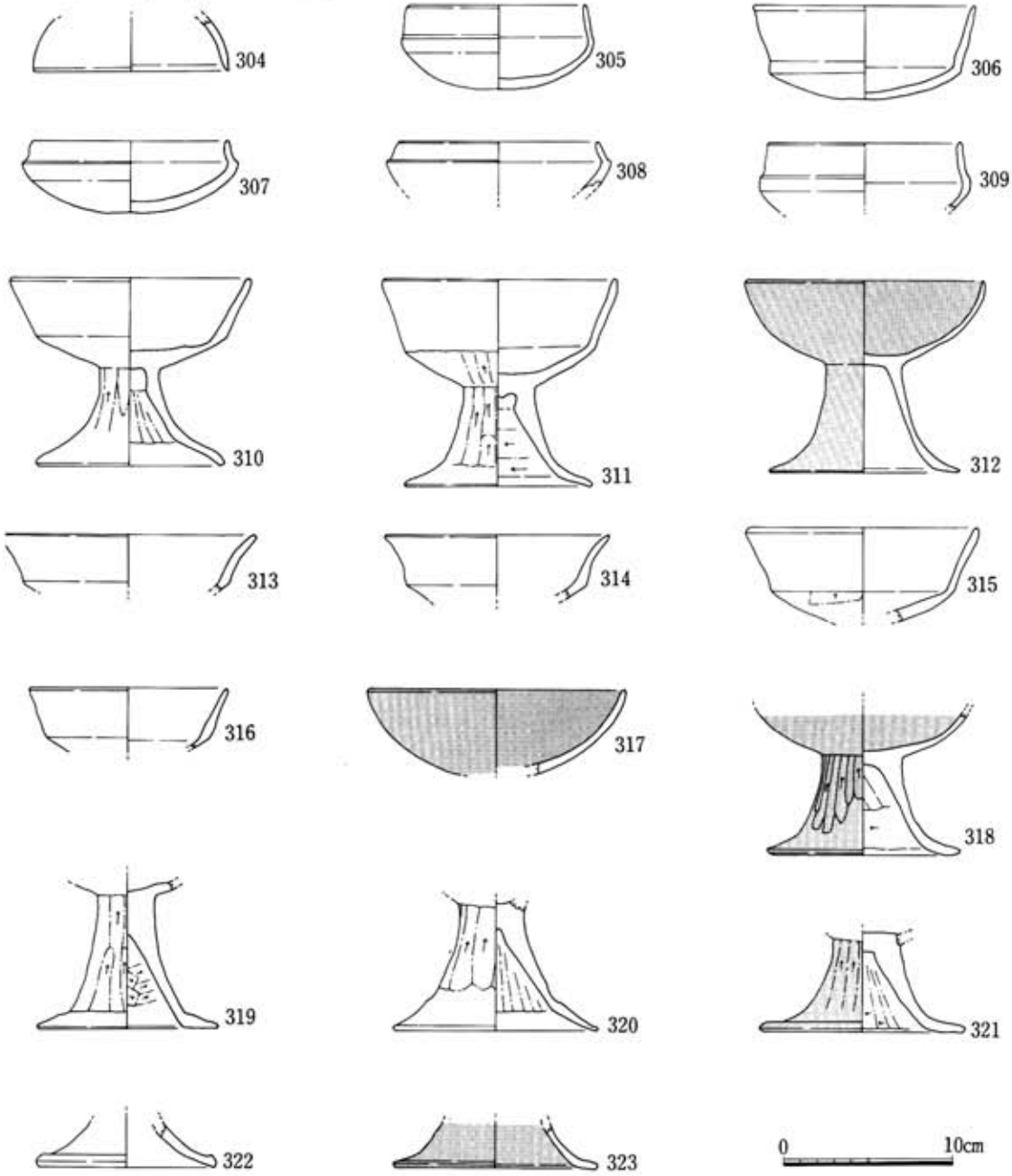


Fig.62　ST008古墳出土土師器（1/4）

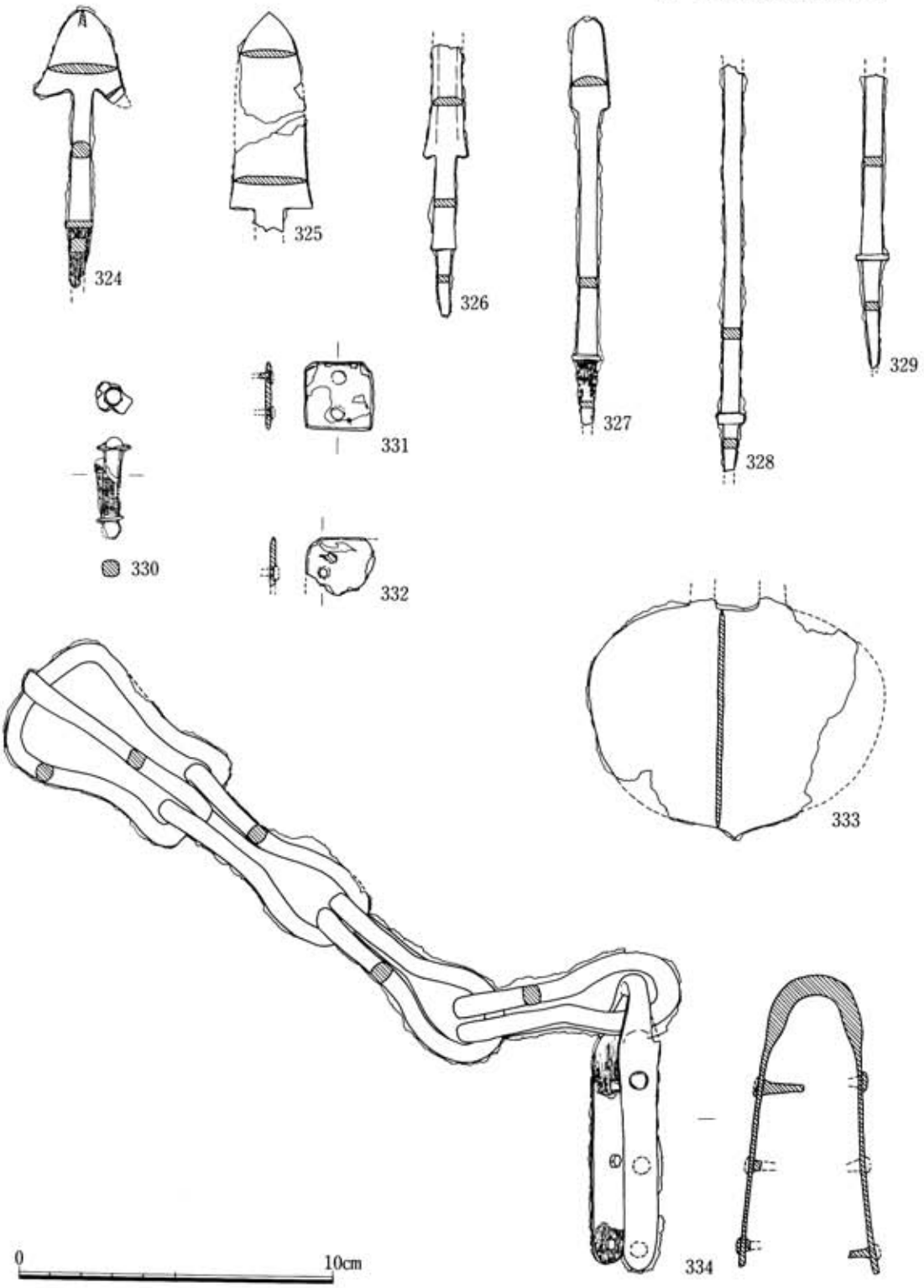


Fig.63　ＳＴ008古墳出土鉄器（１/２）

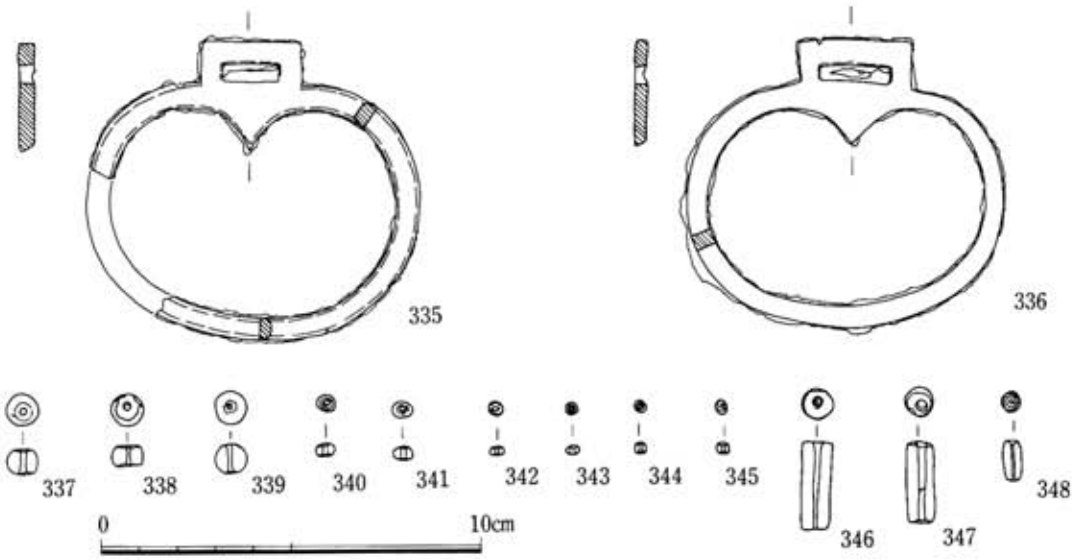


Fig.64　ＳＴ008古墳出土鉄器・装身具（1/2）

Tab.10　ＳＴ008古墳出土土器一覧表

（　）は推定

Fig.図番号 (PL番号)	出土地点	器種	法量cm	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
59-266 (PL.52)	ＳＴ008 玄室埋土	杯蓋 (須恵器)	口径 13.6 器高 3.6	体部と口縁部の境に沈線有り、口唇部は面とりされる。	橙褐色	やや良	85-3745 900346
-267	ＳＴ008 羨道埋土	杯蓋 (須恵器)	口径 (13.1) 器高 3.6	口唇部内面にわずかに沈線有り。天井部約2/3回転ヘラケズリ。	灰色	普通	85-3752
-268	ＳＴ008 前室埋土	杯蓋 (須恵器)	口径 (13.6) 器高 3.0	口唇部内面に沈線有り。天井部調整不明瞭、砂粒多量に含む。	灰色	普通	85-3746
-269 (〃)	ＳＴ008 羨道入口一括	杯蓋 (須恵器)	口径 11.7 器高 4.4	天井部約2/3回転ヘラケズリ、天井部にヘラ記号あり。	灰色	普通	85-3711 900326
-270 (〃)	ＳＴ008 前室部分床面	杯蓋 (須恵器)	口径 11.6 器高 3.2	器壁は厚い、天井部約2/3回転ヘラケズリ。体部にヘラ記号有り。	灰色	やや良	85-3733 900342
-271 (〃)	ＳＴ008 羨道埋土	杯蓋 (須恵器)	口径 9.8 器高 3.6	口唇部内面にかすかに稜をもつ。天井部約3/4回転ヘラケズリ。	灰黄色	やや良	85-3748 900348
-272 (〃)	ＳＴ008 羨道入口	蓋 (須恵器)	口径 9.1 器高 3.0	体部と口縁部の境に沈線あり。天井部約2/3回転ヘラケズリ。	灰色	良好	85-3705 900320
-273 (〃)	ＳＴ008 羨道入口	杯身 (須恵器)	口径 (11.0) 器高 4.2 たちあがり高1.2	底部は平坦、ヘラ切りのち回転ヘラケズリ。砂粒多量に含む。ヘラ記号あり。	灰色	不良	85-3709 900324
-274 (〃)	ＳＴ008 羨道入口一括	杯身 (須恵器)	口径 10.9 器高 3.4 たちあがり高1.0	底部約3/4回転ヘラケズリ、ヘラ記号あり。	灰色	普通	85-3717 900332
-275 (〃)	ＳＴ008 羨道入口	杯身 (須恵器)	口径 11.2 器高 4.0 たちあがり高0.9	底部約3/4回転ヘラケズリ、ヘラ記号あり。	橙褐色	普通	85-3734 901284

（ ）は推定

FiR-図番号（PL番号）	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
59-276	ST008 羨道入口一括	杯身（須恵器）	口径　10.0 器高　4.0 たちあがり高0.6	底部約2/3回転ヘラケズリ、ヘラ記号あり。	灰色	やや良	85-3723 901280
-277	ST008 羨道埋土	蓋（須恵器）	——	つまみ付き。天井部回転ヘラケズリのちヨコナデ。	灰色	普　通	85-3750
-278	ST008 玄室埋土	高杯（須恵器）	口径（11.0）	高杯杯部。体部に二条の稜あり。	灰色	普　通	85-3744
-279 （PL.52）	ST008 羨道入口	高杯（須恵器）	口径　12.4 器高　19.6	長脚二段三方透かし。脚部中位に二条、下位に一条の沈線あり。	灰色	普　通	85-3725 900337
-280 （　〃　）	ST008 羨道入口	高杯（須恵器）	口径　12.5 器高　14.4	脚部中位に二条の沈線あり。脚部カキ目調整。脚部外面は黒色。	灰黒色	普　通	85-3728 900339
-281 （　〃　）	ST008 羨道一括	高杯（須恵器）	口径　11.6 器高　17.2	杯体部に二条の稜、脚部中位に二条の沈線あり。	灰色	普　通	85-3720 900335
-282 （　〃　）	ST008 羨道入口一括	高杯（須恵器）	口径　8.6 器高　14.6	長脚二段三方透かし、杯底部に、櫛描列点文、杯部中位に一条の稜、脚部中位に一条の沈線あり。	灰色	普　通	85-3710 900325
-283 （　〃　）	ST008 羨道入口	高杯（須恵器）	口径　11.0 器高　13.2	杯体部に一条、脚部中位に二条の沈線あり。	灰色	普　通	85-3732 900341
-284 （　〃　）	ST008 羨道入口一括	高杯（須恵器）	口径　9.0 器高　11.4	杯体部に一条、脚部中位に二条の沈線あり。	灰色	普　通	85-3715 900330
60-285 （PL.53）	ST008 羨道入口	長頸壺（須恵器）	口径　10.0 器高　19.6	胴上半部カキ目、下半部はヘラケズリ。口縁部内湾。	灰白色	不　良	85-3713 900328
-286 （　〃　）	ST008 羨道入口一括	長頸壺（須恵器）	口径　10.3 器高　15.0	胴肩部に櫛描列点文、ヘラ描連続斜行文を施文。赤焼き。	赤橙色	不　良	85-3714 900329
-287 （　〃　）	ST008 羨道入口	長頸壺（須恵器）	口径（11.8） 器高　15.8	胴部に穿孔なし。胴部下半部は回転ヘラケズリ。	灰白色	普　通	85-3722 901279
-288 （　〃　）	ST008 羨道入口	𤭯（須恵器）	口径　12.0 器高　17.0	口縁部、胴部にヘラ描斜行文を施文、頸部中位に二条の沈線あり。	灰色	普　通	85-3727 901281
-289	ST008 羨道埋土	𤭯（須恵器）	——	頸部にヘラ描斜行文と櫛描列点文を施文。	灰色	普　通	85-3766
-290 （　〃　）	ST008 羨道入口一括	𤭯（須恵器）	胴径　6.6	胴部に櫛描列点文、口頸部に櫛描波状文を施文。	灰白色	不　良	85-3718 900333
-291 （　〃　）	ST008 羨道入口	𤭯（須恵器）	口径　8.1 器高　12.2	胴部に櫛描列点文、頸部に櫛描波状文を施文、胴部内に穿孔時の粘土塊残る。	橙褐色	やや良	85-3724 900336

（ ）は推定

Fig-図番号 (PL番号)	出土地点	器種	法量cm	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
60-292	ST008 羨道入口	短頸壺 (須恵器)	口径 7.6 器高 5.8	底部回転ヘラケズリ、胴部カキ目調整。	灰色	やや良	85-3712 900327
-293 (PL.53)	ST008 羨道入口	蓋 (須恵器)	口径 8.8 器高 5.6	天井部カキ目状調整。	橙褐色	やや良	85-3706 910416
-294 (〃)	ST008 羨道入口一括	蓋 (須恵器)	口径 8.0 器高 6.1	天井部不定方向ヘラケズリ。	橙褐色	やや良	85-3704 900418
-295 (〃)	ST008 羨道入口一括	蓋 (須恵器)	口径 10.8 器高 5.8	口唇部内面に沈線あり。天井部回転ヘラケズリ。	灰色	普通	85-3707 900415
-296	ST008 羨道埋土	壺 (須恵器)	口径 (21.4)	胴部外面平行タタキのちカキ目調整、内面同心円文タタキ。	灰黒色	やや良	85-3758
-297 (〃)	ST008 羨道入口一括	壺 (須恵器)	口径 13.4 器高 15.0	胴部外面格子目ふうタタキのちカキ目調整、内面、同心円文タタキのちナデ消し。	灰黒色	やや良	85-3708 900323
-298 (〃)	ST008 羨道埋土	平瓶 (須恵器)	口径 7.0	胴部2ヶ所に把手有り。	灰色	普通	85-3765 901289 901290
61-299 (〃)	ST008 羨道入口	提瓶 (須恵器)	口径 (10.0) 器高 21.6	胴部前面に二重に櫛描列点文。赤焼き。	赤橙色	普通	85-3741 900343
-300	ST008 羨道№1	提瓶 (須恵器)	口径 (8.2) 器高 22.8	肩部にボタン状のつまみ貼付け。胴部全面カキ目調整。	灰色	普通	85-3770
-301 (〃)	ST008 羨道入口	提瓶 (須恵器)	——	胴部側面のみ残存。肩部に把手がつく。	灰色	普通	85-3719 900334
-302 (〃)	ST008 羨道入口一括	提瓶 (須恵器)	胴径 11.0	胴部全面にカキ目調整のち前面、背面とも、櫛描列点文施文。	橙褐色	普通	85-3760 900351
-303 (〃)	ST008 羨道埋土	提瓶 (須恵器)	口径 (13.0) 器高 20.0	把手なし、背面カキ目調整、前面調整不明瞭。	灰黒色	不良	85-3767 901288
62-304	ST008 羨道入口	杯蓋 (土師器)	口径 (11.4)	内外面ヘラミガキ、黒塗り。	黒色	普通	85-3740
-305 (PL.54)	ST008 羨道入口	杯身 (土師器)	口径 10.2 器高 5.0 たちあがり高2.0	底部不定方向ヘラケズリ、他ヨコナデ。	赤橙色	普通	85-3730 900340
-306 (〃)	ST008 羨道入口	杯身 (土師器)	口径 12.8 器高 5.4	体部と底部の境で屈曲する。底部ヨコ方向ヘラケズリ。	赤橙色	普通	86-1118 900517
-307	ST008 羨道入口	杯身 (土師器)	口径 (11.2) 器高 4.2 たちあがり高1.1	内外面黒塗り。	黒色	普通	85-3743

（　）は推定

Fig-図番号（PL番号）	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
62-308	ST008 羨道入口	杯身（土師器）	口径（11.6） たちあがり高1.2	内外面黒塗り。	赤褐色	普　通	85-3739
-309	ST008 羨道入口	杯身（土師器）	口径（11.2） たちあがり高1.8	たちあがりは直立気味。ヨコナデ。	赤橙色	普　通	85-3737
-310（PL.54）	ST008 羨道入口	高杯（土師器）	口径　13.6 器高　11.2	杯体部と底部の境で屈曲、摩耗の為調整不明瞭。	赤橙色	普　通	85-3726 900338
-311（〃）	ST008 羨道入口	高杯（土師器）	口径　13.4 器高　12.2	杯体部と底部の境で屈曲、杯底部、脚部タテ方向ヘラケズリ。	赤橙色	普　通	85-3731 901283
-312（〃）	ST008 羨道入口	高杯（土師器）	口径　13.8 器高　11.2	杯部は内湾しながらたちあがる。内外面丹塗り。	赤褐色	普　通	85-3729 901282
-313	ST008 羨道入口	高杯（土師器）	口径（14.6）	口縁部は外反、ヨコナデ。	赤褐色	普　通	85-3768
-314	ST008 羨道入口	高杯（土師器）	口径（12.6）	杯体部と底部の境で屈曲し、口縁部は外反する。	赤橙色	普　通	85-3738
-315	ST008 羨道埋土	高杯（土師器）	口径　13.1	杯体部と底部の境で屈曲する。	赤橙色	普　通	85-3762 901286
-316	ST008 羨道入口	高杯（土師器）	口径（11.4）	杯体部と底部の境で屈曲する。ヨコナデ。	赤橙色	普　通	85-3736
-317	ST008 羨道埋土	高杯（土師器）	口径（15.0）	杯部は椀形、内外面丹塗り。	橙褐色	普　通	85-3764
-318	ST008 羨道埋土	高杯（土師器）	底径　10.4	脚部タテ方向ヘラケズリ、内外面丹塗り。	橙褐色	普　通	85-3761 900352
-319	ST008 羨道入口	高杯（土師器）	底径（10.6）	脚裾部は水平に外に広がる。脚部タテ方向ヘラケズリ。	赤褐色	やや良	85-3735 901285
-320	ST008 羨道埋土	高杯（土師器）	底径（11.8）	脚部タテ方向ヘラケズリ。	赤橙色	やや良	85-3763 901287
-321	ST008 羨道入口一括	高杯（土師器）	底径　12.1	短脚。脚部タテ方向ヘラケズリ。鉄塊付着。外面丹塗り。	赤褐色	普　通	85-3716 900331
-322	ST008 羨道埋土	高杯（土師器）	底径（10.0）	脚裾部ヨコナデ。	赤橙色	普　通	85-3771
-323	ST008 羨道埋土	高杯（土師器）	底径（11.9）	内外面丹塗り。	赤褐色	普　通	85-3772

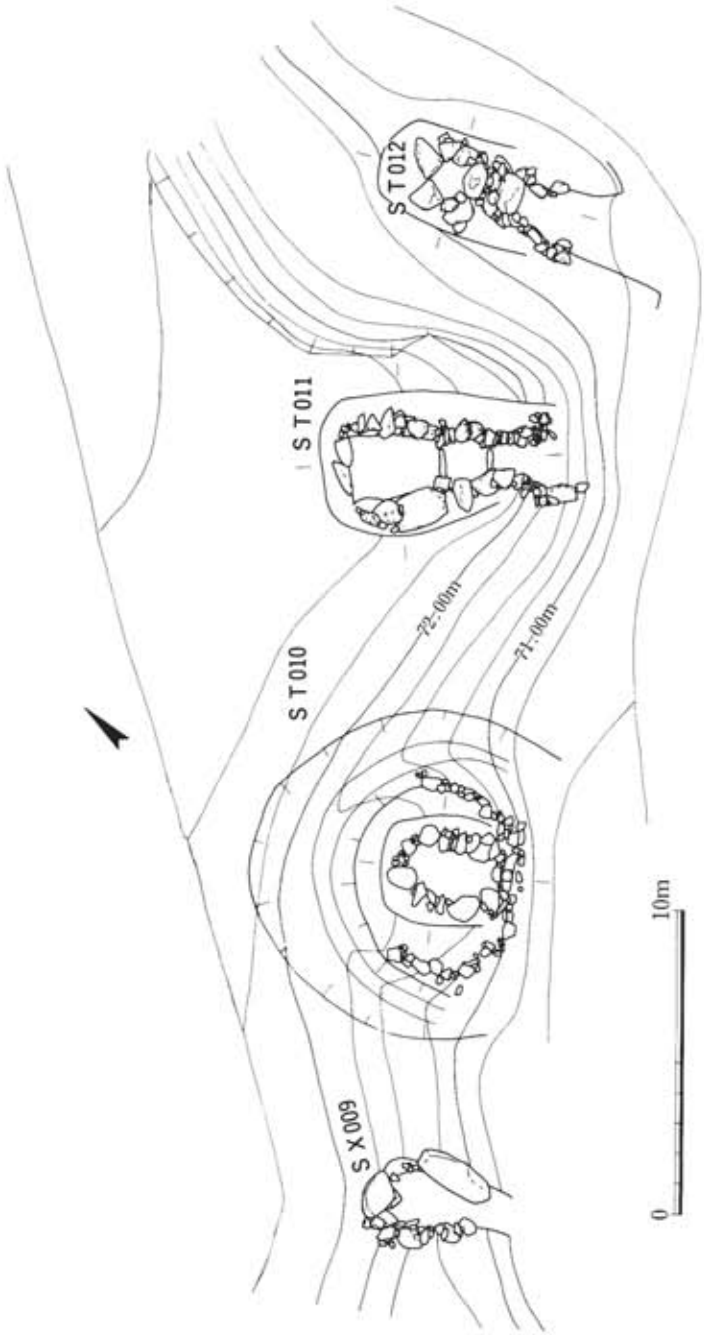


Fig.65　S X 009・S T 010・011・012古墳墳丘（1/250）

9．ＳＸ009配石

(1) 概　要

調査区の中央に位置し、北東10m には主軸をほぼ同じにしたＳＴ10古墳、南西11m には主軸を62°異にしたＳＴ008古墳がありこれらは標高をほぼ同じにする。また北西16m で丘陵の上方で約5.5m 高位置にはＳＴ015古墳が、南東12m で丘陵の下方で約２ｍ低位置にはＳＴ003古墳がある。当初、古墳と考え調査していたが、そうではないことが判明したので個別実測図も作成していない。遺構の性格も特定できず不明遺構とした。平面Ｕ字状の掘り方の西側に径50～80cmの転石を配する。主軸はＮ30°Ｗで、規模は中央長が約４ｍ、中央幅約３ｍ(石材も含めての長さ)を測る。床面に敷石などはなく地山中の自然石が部分的にむきだす。東側の径2.6m 程の扁平状石は自然石か意識して配したのか不明である。

本遺構は古墳群の中央に位置し近接して主軸を同じにした古墳があること、遺構内および周辺から須恵器が出土していることなどから考えて横穴式石室を築造している途中で放棄した可能性も考えられる。

(2) 出土遺物

遺構内埋土から須恵器片が１点、この他には周辺表土から同じく須恵器片、および東側黒色土からほぼ完形の甕が出土している。

須恵器

杯蓋・身ともＣ類である。349は杯蓋。350、351は杯身。いずれも口縁部のみの残存である。352は短頸壺の蓋か。天井部にヘラ記号有り。353は短脚高杯。354は甕、ほぼ完形である。最大径が上位にある胴部に外反する頸部がつく。底部をのぞいて胴部外全面に平行タタキを、胴部内面上半分には同心円文タタキを施す。

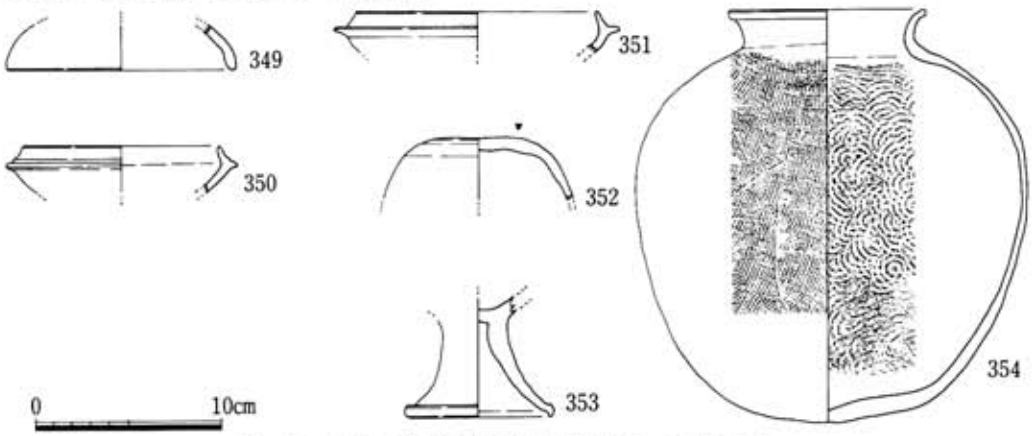


Fig.66　ＳＸ009配石出土須恵器（１/４　354は１/８）

10. ＳＴ010古墳

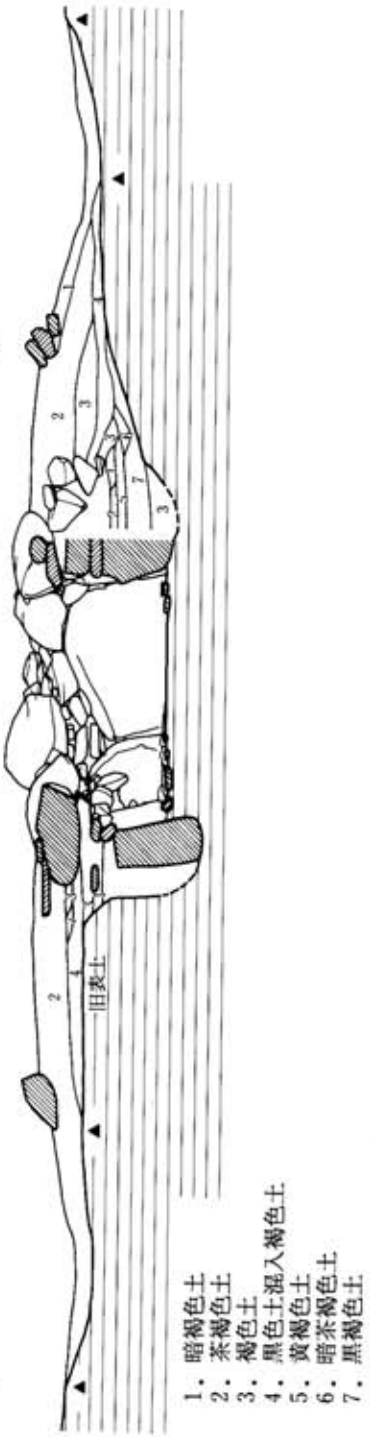
(1) 概　要

調査区のほぼ中央に位置し、南西10mには主軸をほぼ同じにしたＳＸ009配石、北東13mにはＳＴ011古墳がある。墳丘、石室上半部は削平を受けるが、墳丘の盛土内に列石が遺存し、また玄門部には閉塞施設が残る。内部主体は単室両袖型の横穴式石室で、出土遺物は須恵器の２点のみである。従って出土土器からの築造時期比定は出来ない。追葬は小田編年VI期まで。築造時期は大方IIIＢ新段階～IV期にかけてであろう。

(2) 墳丘・周溝

周溝外径11mの円墳である。周溝は奥壁側を中心として半周するが、この周溝は古墳の区画溝というより傾斜面からの流水を下方に送り出す機能をもつものであろう。周溝幅は2.5m～3m、深さ0.4mを測る。周溝は古墳構築にあたっての地山整形段階でとくに掘削することなくわずかに掘りくぼめるだけで、元来の傾斜地と列石をめぐらすことで周溝をつくり出している。

外護列石は周溝内側にそって、石室両側壁側から玄門にかけ、



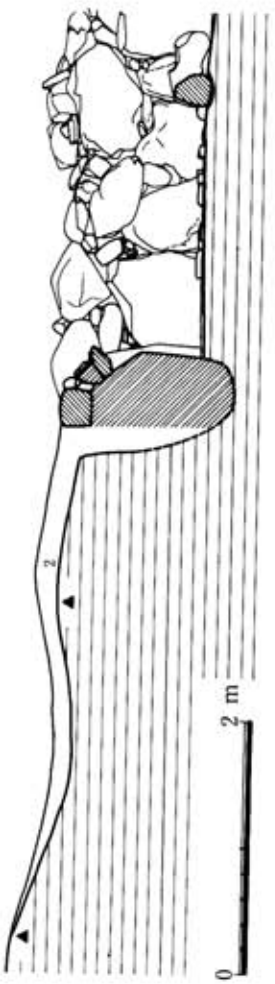


Fig.67　ＳＴ010古墳墳丘土層図（1/60）

径30～50cm程の石材を１、２段積み約半周、環状に回るものである。奥壁側の周溝内に石が散在しているが、これらは列石の一部であり本来列石は周溝内側を全周するものであったろう。この列石は地山上におかれたものではなく盛土の途中でおかれている。そのため列石下のレベルが周溝内側の上端となっており、墳丘があった時点では周溝の深さは結構あったのだろう。

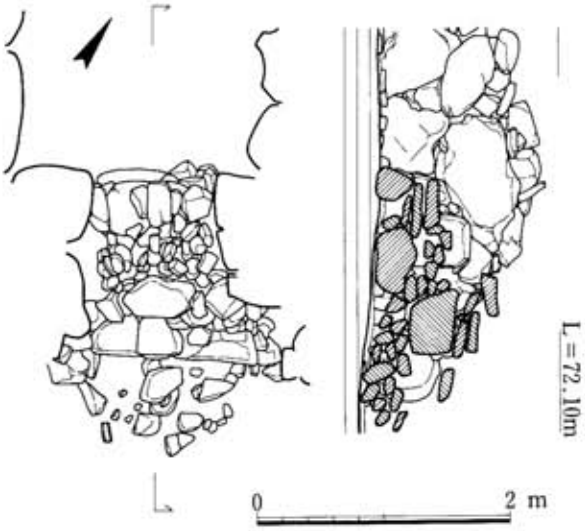


Fig.68　ＳＴ010古墳石室閉塞状況（１/60）

(3)　内部主体

単室両袖型の横穴式石室である。主軸をＮ36°Ｗにとり南西の斜面に向かって開口する。墳丘は削平を受け、石室も天井部を欠失する。

石室平面形態は玄室は方形で、羨道部は連接しなく前庭側壁をつくる。玄門閉塞である。規模は石室全長3.5m、玄室中央長2.0m、中央幅2.0m を測る。

奥壁は腰石に1.3×0.8m、0.6×0.6m 程の石材２石を横位に配する。上方には径50～70cm程の扁平石材を小口積みし隙間には小礫を詰め込む。右側壁は腰石に0.7×0.7m、0.6×0.5m、0.5×0.5m 程の石材３石を縦位に立て、その上方は腰石よりこぶりの石を乱雑に積む。左側壁は腰石２石を横位に配する。その上方は径50cm程の横長石材を横位に積み上げる。左右側壁とも目地は通らない。玄室床面には部分的に小礫を敷く。

玄門部は左右袖石に0.8×0.4m 程の柱状石材をたて、床面には２石からなる框石を配する。玄門幅は0.95m を測る。玄門袖石から約１ m 前庭側壁がのびる。左前庭側壁は0.8×0.7m の方形石材１石からなり、右前庭側壁は小振りな石材を雑に積む。閉塞施設は玄門框石を根石として前庭側壁いっぱいに礫を積み上げる。閉塞石の残存高は１ m を測る。

(4)　出土遺物

須恵器

２点の出土のみである。いずれも玄室出土。**355**は短頸壺。頸部を欠き、底部は不定方向ナデ。**356**は杯身Ｅ類。高台付き杯身で高台部は外側にハの字に開く。

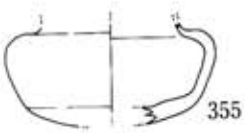


Fig.69　ＳＴ010古墳出土須恵器(1/4)

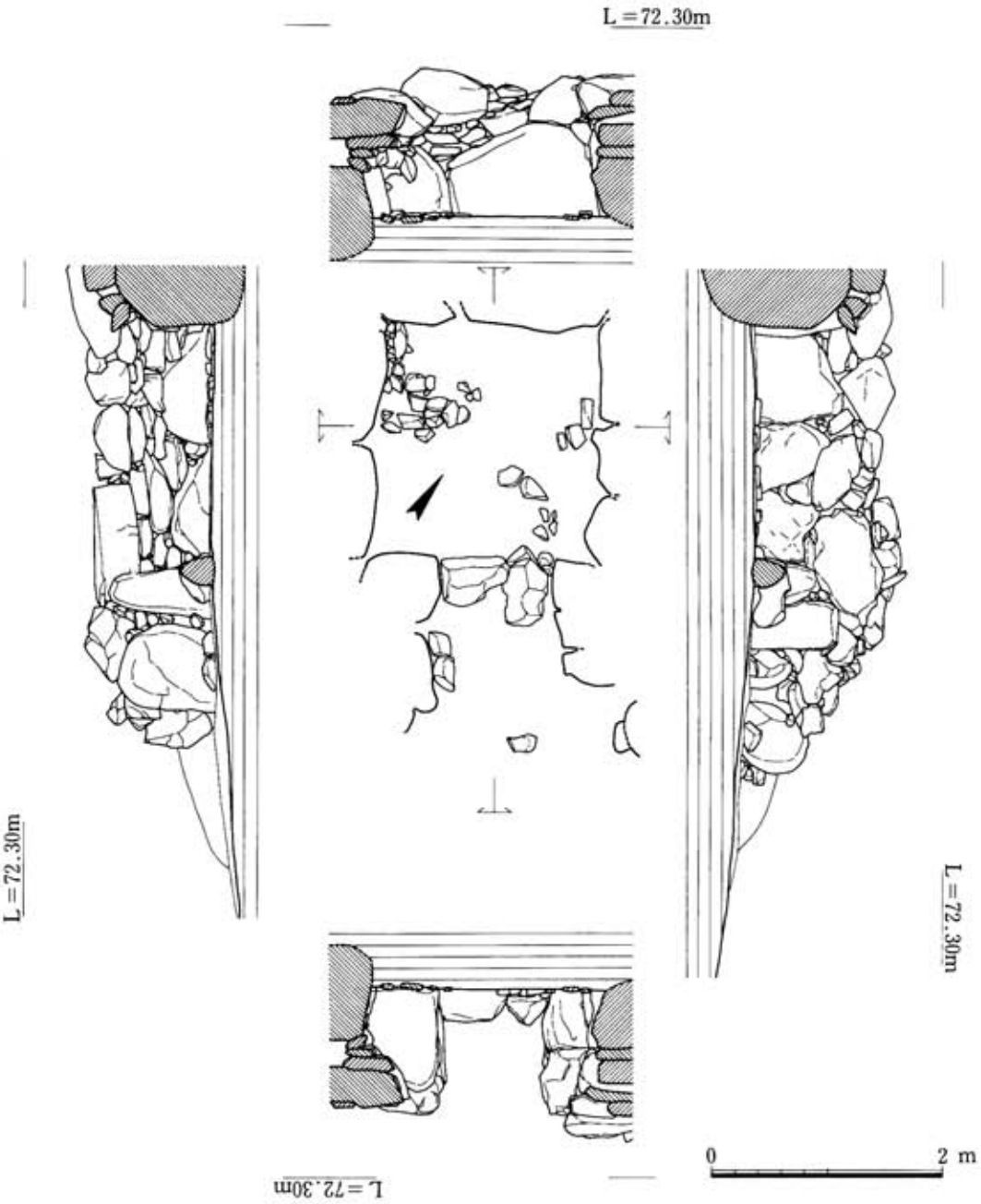


Fig.70　ST010古墳石室（1/60）

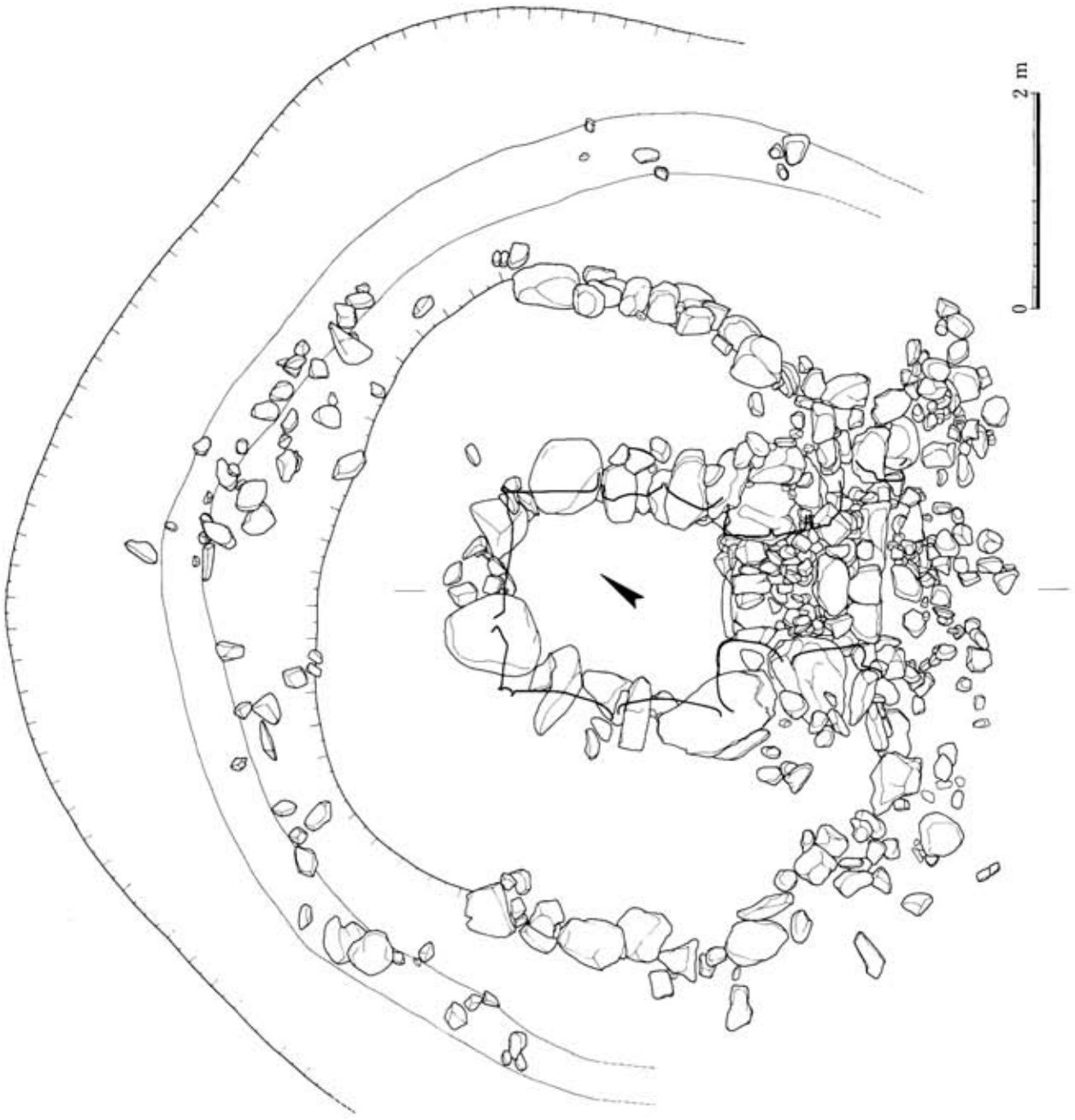


Fig.71　ＳＴ010古墳墳丘列石（１/60）

Tab.11　ＳＸ009・ＳＴ010古墳出土土器一覧表

（　）は推定

Fig.-図番号 (PL番号)	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
66-349	ＳＸ009 周辺表土	杯蓋 (須恵器)	口径 (12.0)	口縁部約1/6残存。口縁端部を丸く仕上げる。	灰　色	普　通	86-1022
-350	ＳＸ009 周辺表土	杯身 (須恵器)	口径 (10.2) たちあがり高1.0	口縁部約1/4残存。受部は丸く仕上げる。	灰　色	普　通	86-1023
-351	ＳＸ009 埋土内	杯身 (須恵器)	口径 (12.4) たちあがり高0.9	口縁部約1/4残存。たちあがりは内傾し、受部は水平にのびる。	灰　色	普　通	86-1020
-352	ＳＸ009 周辺表土	蓋 (須恵器)	——	天井部回転ヘラケズリ。	灰黒色	普　通	86-1021
-353	ＳＸ009 周辺表土	高杯 (須恵器)	脚高　5.1 底径 (7.4)	脚端部は下方にのびる。	灰　色	普　通	86-1024
-354 (PL.55)	ＳＸ009 東側黒色土	甕 (須恵器)	口径　20.0 器高　47.6	胴部外面平行タタキ、内面同心円文タタキ、底部に他の破片軸着。	灰　色	普　通	86-992 90-1533
69-355 (〃)	ＳＴ010 玄室埋土	短頸壺 (須恵器)	胴径　11.0	頸部を欠損する。底部不定方向ナデ。砂粒多量に含む。	灰　色	普　通	86-1025 900521
-356	ＳＴ010 玄室埋土	杯身 (須恵器)	底径 (9.0)	高台付き杯身。高台部は外側にハの字に開く。	灰　色	普　通	86-1026

11. ＳＴ011古墳

(1) 概　要

調査区の東側に位置し南西13m には主軸をほぼ同じにしたＳＴ010古墳が、東10m にはＳＴ012古墳がある。墳丘、石室上半部は削平をうけ前門部に閉塞施設が残存する。内部主体は複室袖型の横穴式石室で、石室西側の墳丘盛土内から遺物が出土している。築造時期は小田編年III Ｂ新段階期で追葬はVI期までなされる。

(2) 内部主体

複室両袖型の横穴式石室である。主軸をＮ45°Ｗにとり南東の斜面に向かって開口する。墳丘はすでになく石室も天井部を欠失する。前門部に閉塞施設が残存する。

石室平面形態は玄室は長方形、前室はやや幅広の長方形で、天井石を架構する羨道は連接しなく前庭側壁をつくる。規模は石室全長4.5m、玄室中央長2.75m、中央幅2.15m、前室中央長1.0m、中央幅1.75m を測る。

奥壁は腰石に1.5×1.2m 程の割石とその西側に0.5×0.6m 程の石２石を配する。西側の小形

の腰石の上方には横長石材を3段横積みする。左右側壁の石積みは類似する。腰石に1.4×1m、1.3×0.6m 程の方形、横長石材を両壁とも同じように配する。その上方石積みは左側壁では隙間に土を詰めており、石積みは横目地も通らなく雑である。

玄門部は左右袖石に1.1×0.6m 程の柱状石材を縦位に立て、床面には框石1石を配する。玄門幅は0.8m を測る。

前室左右側壁は腰石に0.9×0.6m 程の長方形石材を横位に配する。上方は径30～40cmの石材を小口積みする。前門部は袖石に玄門袖石よりひとまわり小さい柱状石材を立てる。前門幅は0.75m を測る。床面には框石を配するがこれを根石として閉塞施設をつくる。0.6×0.8m の板状石を前門に蓋をするように立て、その外側に径20～30cmの転石を前庭側壁いっぱいに積み上げる。残存高は約1 m を測る。

(3) 出土遺物

左前庭側壁西側の墳丘盛土内から359、367、374、384、385が出土、367が古墳築造時期を示す土器である。他は前庭側壁部や墳丘表土からの出土が多い。鉄器は出土していない。

須恵器

杯蓋はC類（357、358）E類（360、361、362、364）杯身はB類（365、366、367）E類（368、370、371、372）がある。B類は杯身、C類は杯蓋のみとセットにかたよりがある。またD類は杯蓋・身とも出土していない。357、358は杯蓋、359は蓋、器壁が厚く口唇部内面に沈線を有する。杯ではなく他器種の蓋であろう。360、361は逆転蓋でかえりがつき、つまみなし。362、364は宝珠つまみ付き蓋、かえりがつく。363は本墳出土遺物のなかでは最も新時期のものである。かえ

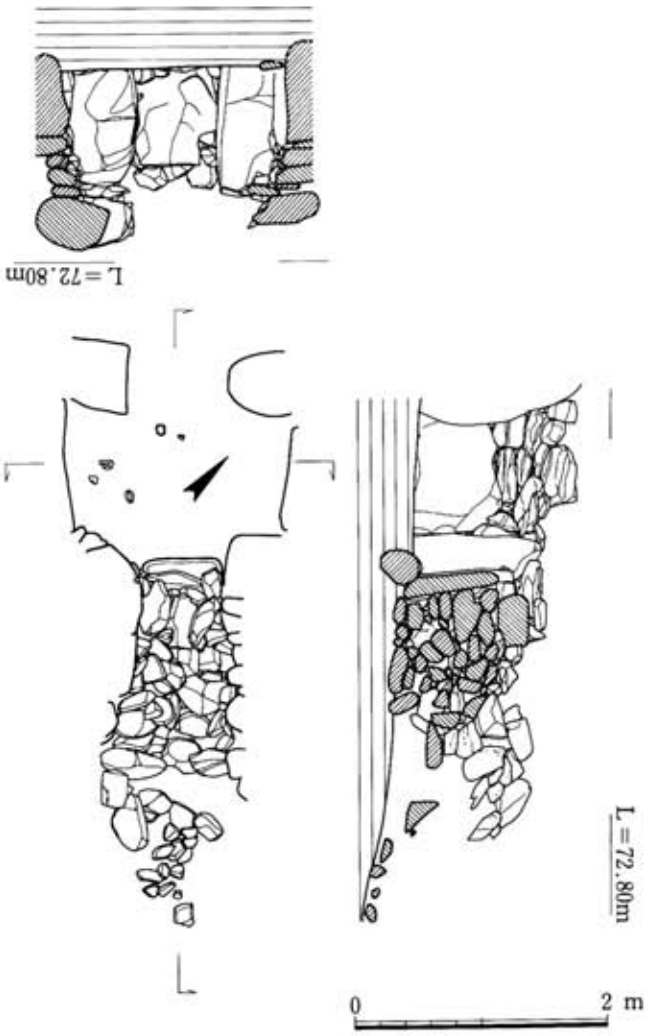


Fig.72　S T011古墳石室閉塞状況（1/60）

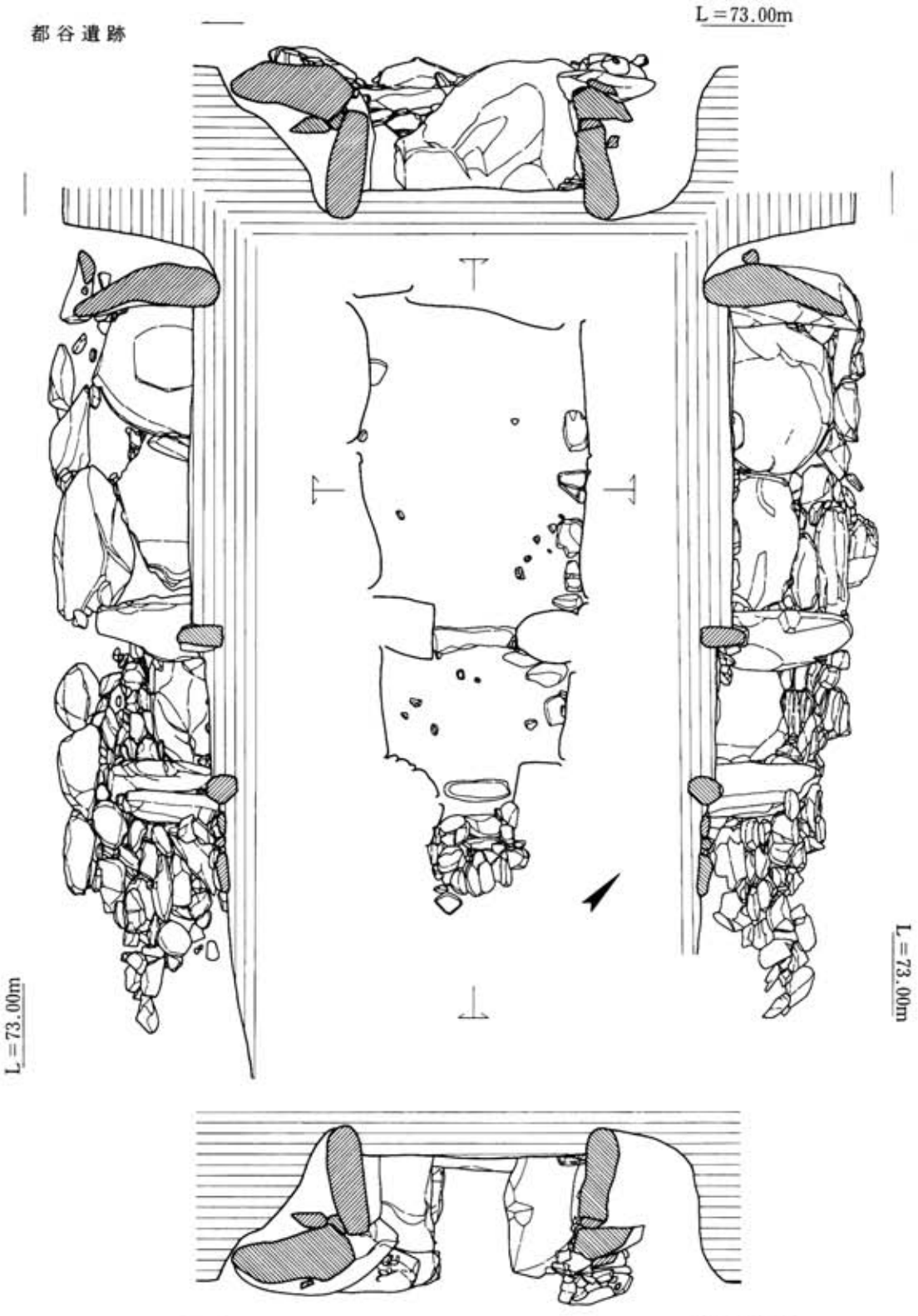


Fig.73　S T011古墳石室（1/60）

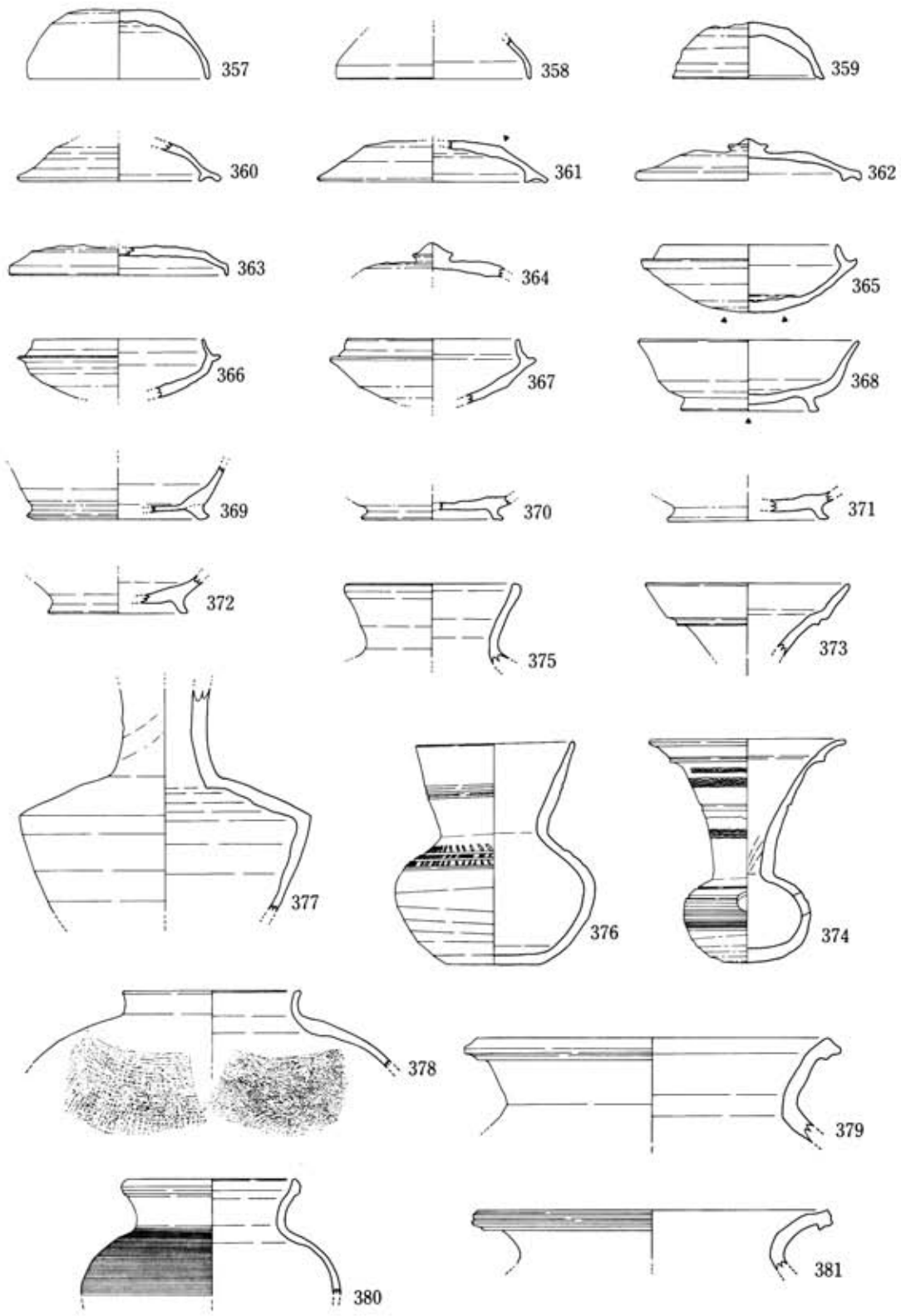


Fig.74　ＳＴ011古墳出土須恵器（１／４）

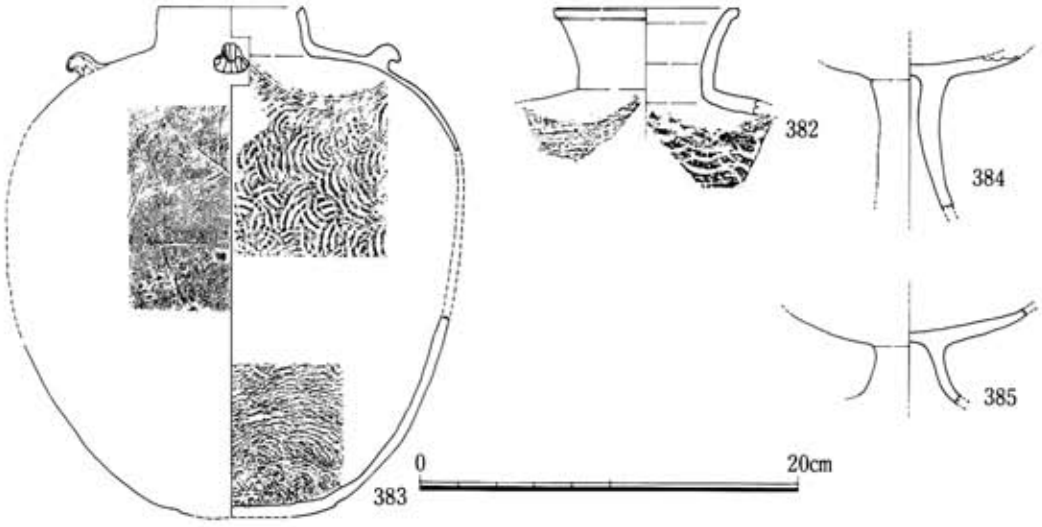


Fig.75　ＳＴ011古墳出土土器（１／４　383は１／８）

りもなく口唇部は下方にのびる。つまみが付いていた痕跡有り。365、366、367は杯身。口径は11cm前後でたちあがり高は1.1～1.3cmを測る。368～372は高台付き杯身、ただし369は377と胎土、調整が似ており長頸壺の底部となる可能性あり。373、374は蓋。375、378、379、380、381、382は壺、器形は変化に富む。375、382は口頸部の形、胎土など似る。378は口縁部が直立する。376、377は長頸壺、377は底部高台となり肩部がはる。新時期のものであろう。383は甕、肩部の４ケ所に角状把手が付く。胴部外面平行タタキ、内面同心円文タタキを施す。肩部内面に２条の沈線を有す。底部は内側にへこみ、円盤状に器壁が剝離する。甕の製作工程上胴部中位から粘土紐をまき、最後に底部に蓋をするような感である。横瓶の製作工程と似る。

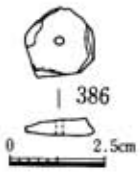


Fig.76　ＳＴ011古墳出土石製品(1/2)

土師器

384、385は高杯。384は長脚で385は短脚。

石製品

386は有孔石製品。前室右壁床面出土、滑石製。

Tab.12　ＳＴ011古墳出土土器一覧表

（　）は推定

Fig-図番号（PL番号）	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
74-357（PL.56）	ＳＴ011 墳丘表土	杯蓋（須恵器）	口径　11.3 器高　4.4	天井部は平坦で雑な回転ヘラケズリ。	灰白色	普　通	86-1121 901291
-358	ＳＴ011 墳丘表土	杯蓋（須恵器）	口径（12.0）	口縁部約1/6残存。	灰白色	普　通	86-1127
-359（　〃　）	ＳＴ011 墳丘盛土内	蓋（須恵器）	口径　9.4 器高　3.6	器壁は厚く、口唇部内面に沈線を有す。	灰黄色	やや良	86-1114 900516
-360	ＳＴ011 周辺表土	杯蓋（須恵器）	口径（10.4）	口縁部約1/6残存。かえりは下方にのびる。	灰　色	普　通	86-1140
-361（　〃　）	ＳＴ011 羨道埋土	杯蓋（須恵器）	口径（12.0）	天井部は平坦で、回転ヘラケズリ。かえりは短い。	灰黒色	やや良	86-1132 900519
-362（　〃　）	ＳＴ011 羨道埋土	杯蓋（須恵器）	口径（12.0） 器高　2.8	宝珠つまみ付き。かえりは短く、断面三角形。砂粒を多く含む。	灰　色	普　通	86-1135 900520
-363	ＳＴ011 羨道埋土	杯蓋（須恵器）	口径（13.8）	天井部は若干窪む。かえりはなく、口縁端部は下方にのびる。	灰黒色	普　通	86-1134
-364	ＳＴ011 羨道埋土	杯蓋（須恵器）	——	宝珠つまみ付き。	灰黒色	普　通	86-1131
-365（　〃　）	ＳＴ011 墳丘表土	杯身（須恵器）	口径　10.7 器高　4.4 たちあがり高1.3	底部約2/3回転ヘラケズリ。受部はやや外上方にのびる。ヘラ記号２ヶ所に有り。	灰褐色	普　通	86-1129 901292
-366	ＳＴ011 墳丘表土	杯身（須恵器）	口径（11.0） たちあがり高1.1	たちあがりは内傾し、受部は水平にのびる。	灰　色	普　通	86-1124
-367	ＳＴ011 墳丘盛土内	杯身（須恵器）	口径（10.8） たちあがり高1.2	たちあがりは内傾し、受部は水平にのびる。	灰　色	普　通	86-1115
-368（　〃　）	ＳＴ011 羨道埋土	杯身（須恵器）	口径（13.8） 器高　4.6	高台付き。底部にヘラ記号有り。	灰黒色	普　通	86-1130 900518
-369	ＳＴ011 羨道埋土	杯身（須恵器）	——	高台付き。底部約1/3残存。	灰　色	普　通	86-1136
-370	ＳＴ011 羨道埋土	杯身（須恵器）	——	高台付き。底部約1/5残存。	灰　色	普　通	86-1133
-371	ＳＴ011 周辺表土	杯身（須恵器）	——	高台付き。砂粒を多く含む。底部約1/3残存。	灰　色	普　通	86-1142
-372	ＳＴ011 周辺表土	杯身（須恵器）	——	高台付き。底部約1/5残存。	灰　色	普　通	86-1141
-373	ＳＴ011 墳丘表土	甕（須恵器）	口径（12.6）	口縁部約1/3残存。口縁部と頸部の境で屈曲する。	灰　色	普　通	86-1120
-374	ＳＴ011 墳丘盛土	甕（須恵器）	口径（12.2） 器高　14.2	頸部に櫛描波状文。胴部に二条の沈線を施す。砂粒を多く含む。	灰　色	普　通	86-1113

（ ）は推定

Fig.図番号 (PL番号)	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
74-375	ST011 羨道埋土	壺 (須恵器)	口径 (10.2)	口頸部約1/3残存。頸部は外反する。	乳白色	不　良	86-1145
-376	ST011 羨道埋土	長頸壺 (須恵器)	口径 (10.0) 器高 14.1	肩部に櫛描列点文を三段施す。頸部に二条の沈線を施す。	灰　色	普　通	86-1117
-377	ST011 羨道埋土	長頸壺 (須恵器)	胴径 (18.6)	肩部がはり、外反する頸部がつく。底部は高台か？	灰黒色	良　好	86-1139
-378	ST011 墳丘表土	壺 (須恵器)	口径 (11.2)	口縁部は短く直立する。胴部外面タタキのちヨコナデ。内面同心円文タタキ。	灰　色	普　通	86-1123
-379	ST011 墳丘表土	壺 (須恵器)	口径 (22.2)	口縁端部を断面台形状におさめる。	灰　色	普　通	86-1122
-380	ST011 墳丘表土	壺 (須恵器)	口径 (10.6)	胴部外面カキ目調整、内面ヨコナデ。	褐　色	やや良	86-1126
-381	ST011 墳丘表土	壺 (須恵器)	口径 (22.2)	口縁端部は断面方形におさめ、沈線を施す。	赤橙色	普　通	86-1128
75-382	ST011 周辺表土	壺 (須恵器)	口径 (9.0)	口頸部約1/3残存。口頸部は外反する。	乳白色	不　良	86-1144
-383 (PL.56)	ST011 墳丘表土	甕 (須恵器)	口径 15.2 器高 54.0	口頸部は直立し、肩部の4ヶ所に角状把手がつく。胴部外面平行タタキ、内面同心円文タタキを施す。	灰黒色	普　通	86-994 90-1534
-384	ST011 墳丘盛土	高杯 (土師器)	——	長脚高杯の脚部から杯部にかけて残存。調整不明瞭。	赤褐色	普　通	86-1116
-385	ST011 墳丘盛土	高杯 (土師器)	——	短脚高杯の脚部から杯部にかけて残存。調整不明瞭。	赤褐色	普　通	86-1119

12. ST012古墳

(1) 概　要

調査区の西側で丘陵の西端に位置する。西10m には主軸をほぼ同じくしたST011古墳がある。ST002古墳と同様に本墳構築に先行して、L字形に本墳を区画するような地山掘削を行っている。内部主体は複室両袖型の横穴式石室で、前室は天井石まで残る。前室から最終追葬時の杯蓋・身とその直下から鉄鏃、刀子、鉸具が出土しており2つの追葬面を確認できた。築造は小田編年IIIB古段階期で追葬はVI期までなされる。

(2) 墳丘・周溝

墳丘盛土上半部は削平を受け周溝もつくらない。残存する墳丘盛土から墳丘径約12m と推定される。古墳構築に先行しての地山整形は、丘陵西端に本墳を区画するような平坦な墳丘基底面を掘削するもので、ST011古墳より約1.5m 低位置に築造する。現状ではこの区画内の墳丘

盛土は埋没していた。断面で盛土が墳丘基底面から高さ約１ｍ残存しており、とくに奥壁側では褐色土を多用し盛土単位も細かいことが観察できた。また、墳丘西側断面では盛土内に落ち込みがみられ周溝かとも考えたが地山面に掘削がみられないし、墳丘盛土上に上方から土が流れ込んだ結果と推定した。

(3) 内部主体

複室両袖型の横穴式石室である。主軸をN22°Wにとり南東の斜面に向かって開口する。墳丘頂部は削平を受け、玄室天井石は欠失するものの玄門楣石、前室天井石は残存する。

石室平面形態は玄室は正方形、前室はやや幅広の長方形で前門部に閉塞施設が残存する。規模は石室全長4.2m、玄室中央長1.8m、中央幅1.9m、前室中央長0.85m、中央幅1.6m を測る。

奥壁は腰石に1.5×1m 程の角のとれた長方形石材１石を横位に配し、その上に２段積み上げる。左右側壁は腰石に1.1×1m、0.6×0.6m 程の石材を２石ずつ大形石を奥壁側に小形石を前門側に配する。その上方は横長石材を横位に３～４段積み上げるが、その石材は大小さまざまで石組みも雑で横目地も通らない。腰石は垂直にたてその上から持ち送る。側壁残存高は1.7mで、この上に１、２段積み上げ天井石を架構したのであろう。推定天井高2.0m。

玄門部は袖石に1.1×0.6m 程の石材を縦位に立てるが、両袖石とも土圧のため内に傾く。床面には框石を配し、袖石上には楣石を架構する。玄門幅1.0m、玄門高1.2m を測る。

前室は左側壁１石、右側壁は２石の石材からなる。前門袖石は玄門のそれと同大の石材を立て、横長の転石を楣石として架構する。この前門楣石と玄門楣石の間に小形石材を乗せて前室天井石とする。前門床面には２石からなる框石を配する。前門幅1.0m、前門高1.0m を測る。

前門框石を根石として閉塞施設が残存する。これは径30～40cmの転石を雑に積み上げるもので、残存高0.6m を測る。

前室右側壁側から高台付き杯と蓋のセット３組が出土している。最終追葬時の供献土器であろう。この他には鉄鏃、馬具、耳環なども出土している。

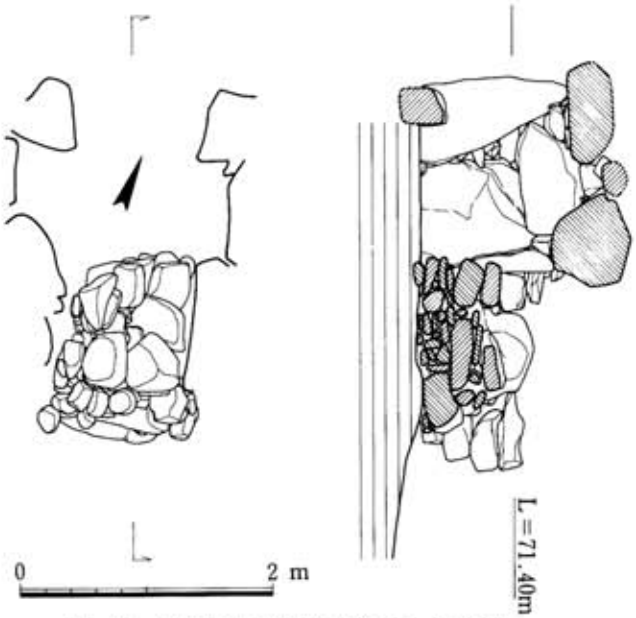


Fig.77　ＳＴ012古墳石室閉塞状況（１/60）

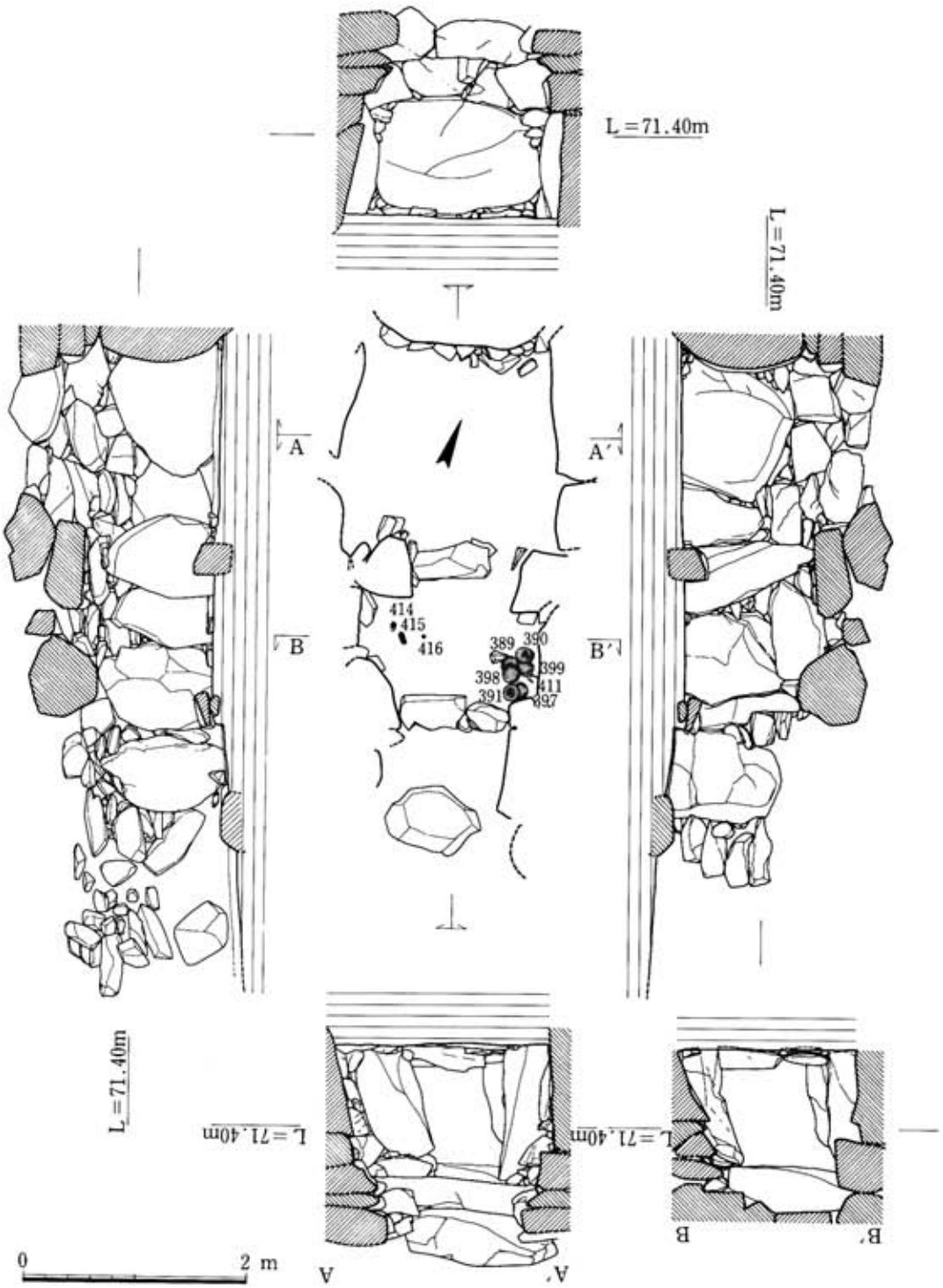


Fig.78　S T012古墳石室（1/60）

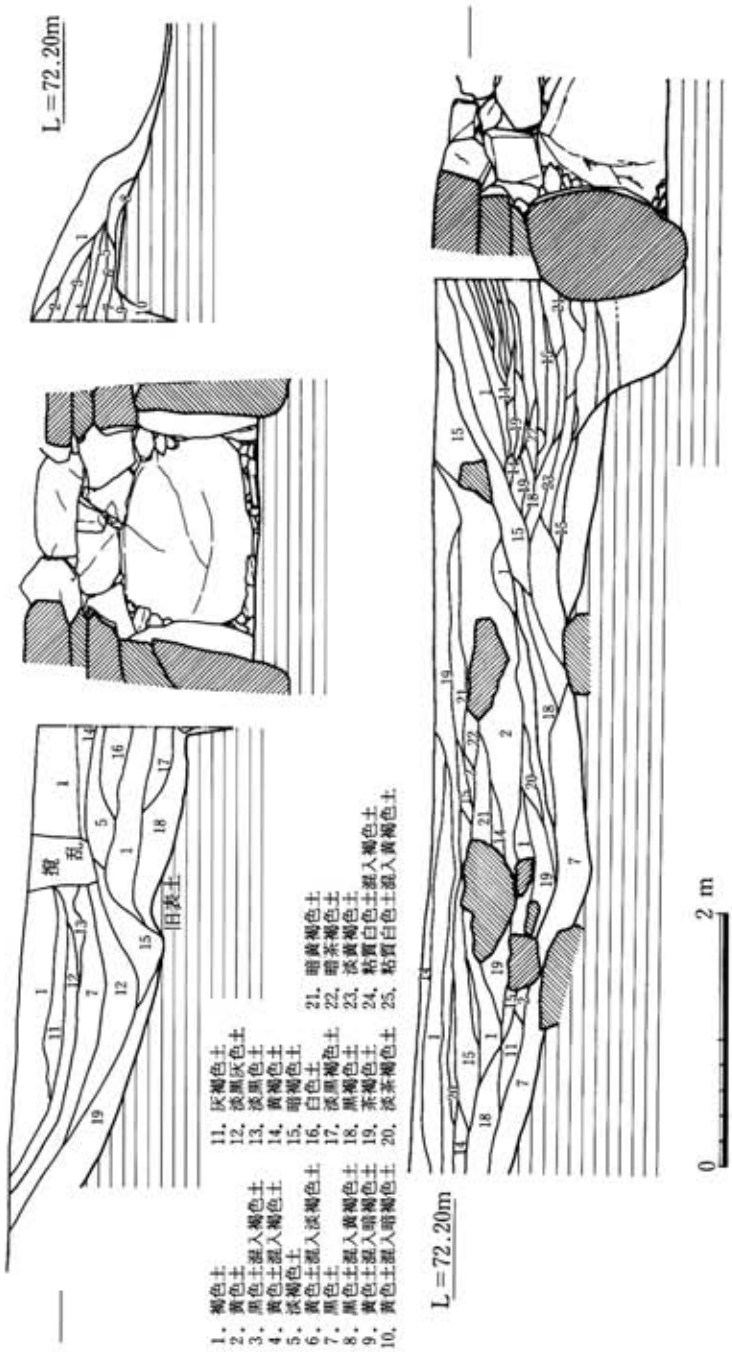


Fig.79　ST012古墳墳丘土層図（1/60）

(4)　出土遺物

前室から須恵器杯蓋・身や鉄鏃、馬具、耳環などが出土している。前室において少なくとも追葬面2面を確認できた。鉄鏃、刀子、鉸具(403、404、408、414、415、416)が出土した面と杯蓋・身、鐙(389、390、391、397、398、399、411)が出土した面が上下の関係をもつ。

杯蓋・身では出土状況から391と397、389と398、390と399がそれぞれセットである。387、388は

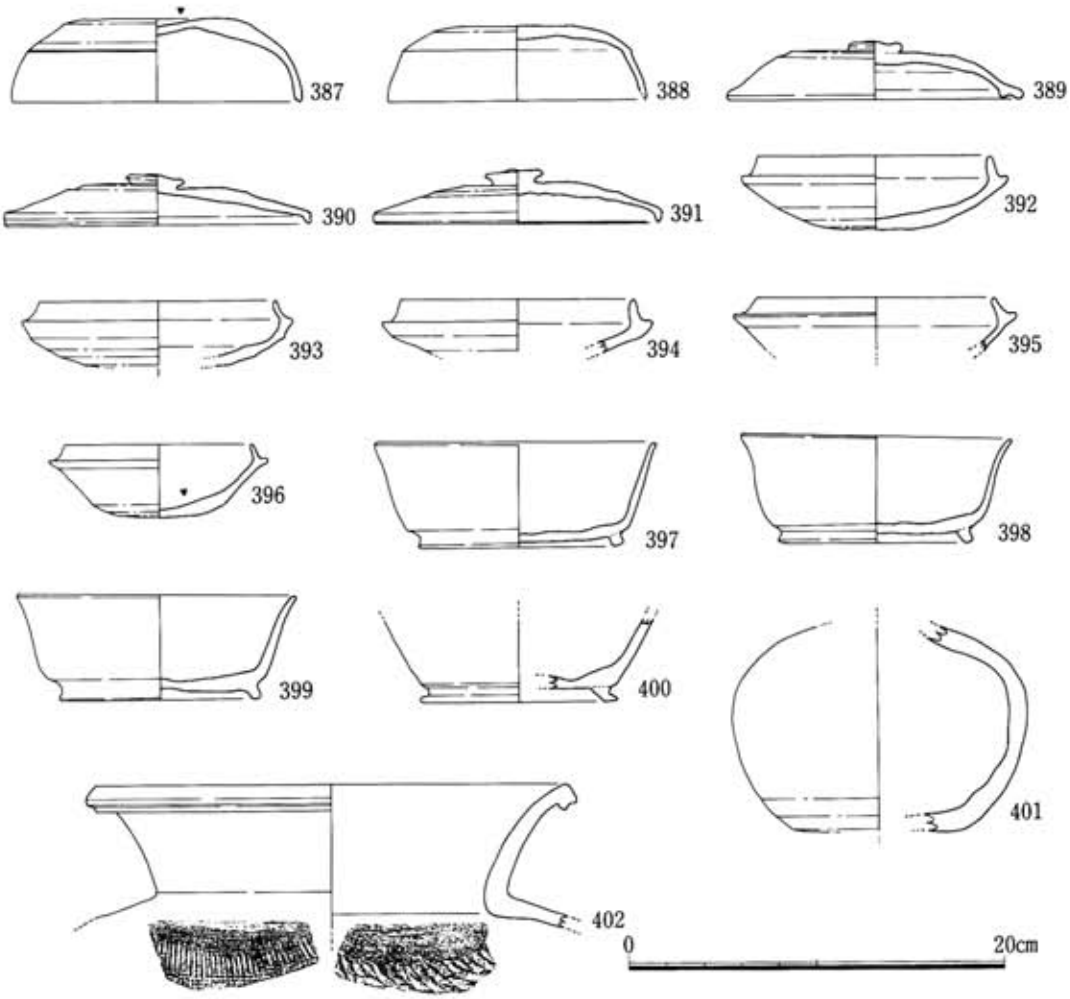


Fig.80　ＳＴ012古墳出土須恵器（１/４）

Fig.81 ＳＴ012古墳出土装身具(1/2)

墳丘を掘り下げていく段階で出土したものだが本墳の築造時期を示す土器であろう。

須恵器

杯蓋はＡ類(387、388)・Ｅ類(389)、杯身はＢ類(392、393、394、395)・Ｃ類(396)・Ｅ類(397、398、399)がある。**387～391**は杯蓋。**387、388**は体部と口縁部の境に沈線を有し、**387**は天井部内面に当て道具痕有り。**389**は宝珠つまみ付きで短いかえりが付く。**390、391**は宝珠つまみ付きでかえりなし、口唇端部は下方にのびる。この形式はＥ類の範疇にはいれてなかったが本墳の出土状況からＥ類の時期には確実に出現していることがいえよう。ＳＴ002の**90**、ＳＴ0003の**140**、ＳＴ011の**363**なども同形式である。**392～399**は杯身。**392～395**は口径が12.2～12.4cmでたちあがり高は1.1～1.3cm。**397～399**は高台付き杯身。**400**は長頸壺の底部。**401**は壺の胴部。**402**は壺口縁部。

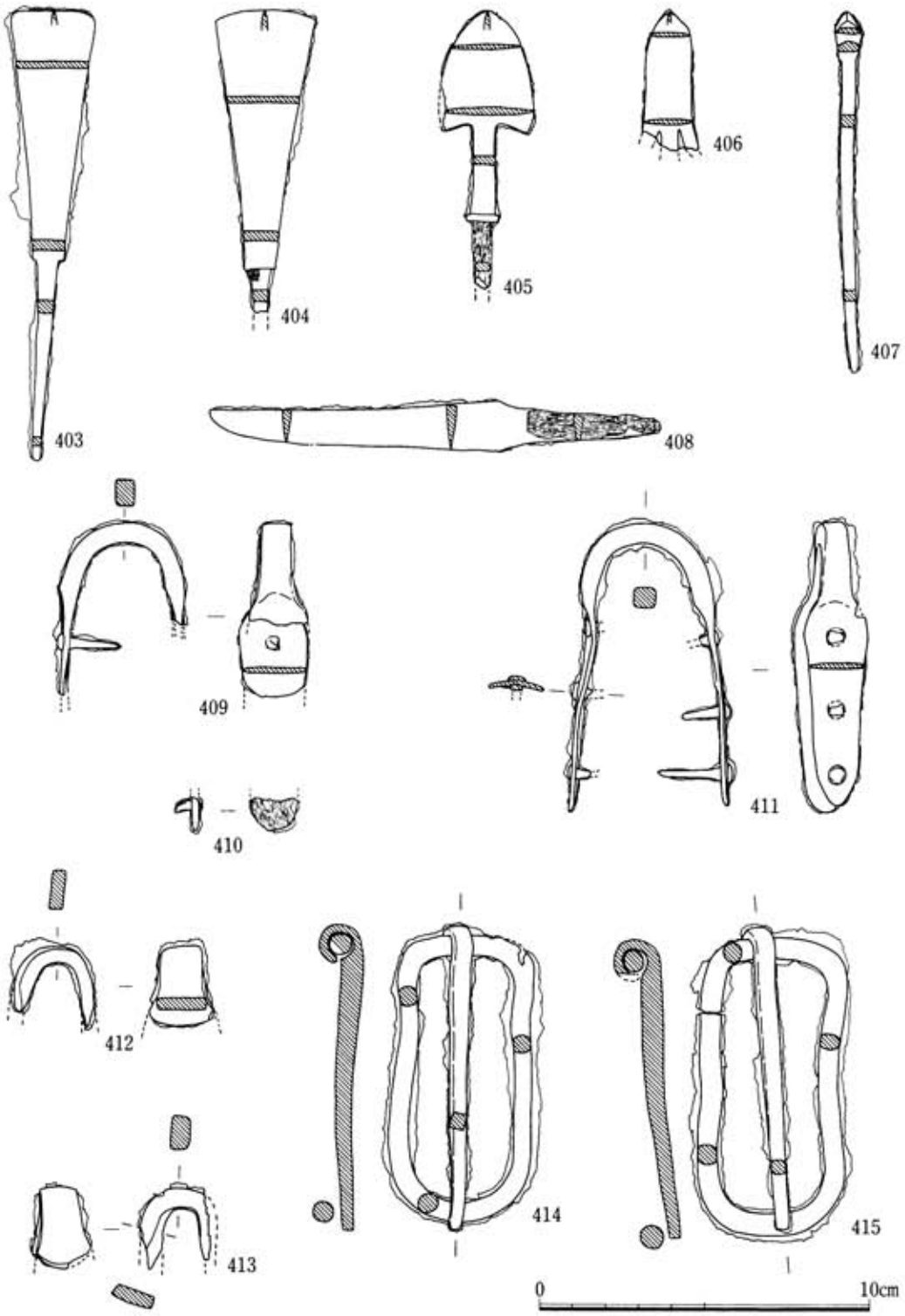


Fig.82　ＳＴ012古墳出土鉄器（１/２）

鉄　器

403、404、408は最終追葬時の供献土器の直下から出土しており時期をおさえられる資料である。B類の時期（6C第4四半期）に副葬されたのではなかろうか。

鉄鏃(403～407)403、404は斧箭式。404は鉾先が丸みをもつ。403の全長13.7cm。405は三角形式。腸抉で棘篦被を有す。406は腸抉柳葉式。407は小形柳葉式。篦被なし。全長11.0cm。

刀子(408)関部は両削りで茎部には木質残存。全長13.7cm、身長8.8cm。

馬　具

すべて前室出土。鐙(411)は最終追葬を示す杯蓋・身のすぐ隣で、同一面で出土している。時期をおさえられる好資料である。鉸具(414、415)は鉄鏃、刀子(403、404、408)と同一面で出土。

409～413は鐙本体。409と411、412と413がそれぞれ組みとなるのだろう。411は側板柳葉形で3ケ所に鋲を打つ。全長8.8cm、側板幅1.5cm。414、415は鉸具、鉄棒を楕円形にまわし刺金をつける。

414、415ともほぼ同じ大きさで全長9.3cm、幅4.2cm。

装身具　耳環(416)緑青がふき内側は金張りが残る。鉄地金銅張り。

Tab.13　ST012・013古墳出土土器一覧表

（　）は推定

Fig.図番号 (PL番号)	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
80-387 (PL.56)	ST012 表土	杯蓋 (須恵器)	口径 (15.0) 器高 4.4	天井部約3/4回転ヘラケズリ。体部と口縁部の境に沈線を有し、内面に同心円文の当て道具痕有り。	灰黄色	普　通	86-979 901293
-388	ST012 表土	杯蓋 (須恵器)	口径 (13.6) 器高 4.0	天井部不定方向ヘラケズリ。体部と口縁部の境に沈線を有す。	灰色	普　通	86-980
-389 (〃)	ST012 前室右壁	杯蓋 (須恵器)	口径 13.8 器高 3.2	宝珠つまみ付き。かえりは短く断面三角形。	灰色	普　通	85-3832 900373
-390 (〃)	ST012 前室右壁	杯蓋 (須恵器)	口径 15.8 器高 2.8	宝珠つまみ付き。口縁端部は下方にのびる。	灰色	普　通	85-3833 900374
-391 (〃)	ST012 前室右壁	杯蓋 (須恵器)	口径 15.0 器高 2.8	宝珠つまみ付き。口縁端部は下方にのびる。	灰色	普　通	85-3828 900369
-392 (PL.57)	ST012 墳丘表土	杯身 (須恵器)	口径 (12.2) 器高 3.9 たちあがり高1.3	底部約2/3回転ヘラケズリ。	灰色	普　通	86-984 901294
-393	ST012 墳丘盛土	杯身 (須恵器)	口径 (12.3) たちあがり高1.1	底部約3/4回転ヘラケズリ。	橙褐色	普　通	86-983
-394	ST012 墳丘盛土	杯身 (須恵器)	口径 (12.2) たちあがり高1.2	たちあがりは直立し、受部は水平にのびる。	灰色	普　通	86-985
-395	ST012 墳丘表土	杯身 (須恵器)	口径 12.4 たちあがり高1.1	たちあがりは内傾し、受部は水平にのびる。	灰色	普　通	86-978
-396	ST012 墳丘表土	杯身 (須恵器)	口径 9.9 器高 4.0 たちあがり高0.9	底部ヘラ切り離し後不定方向ナデ。	暗灰色	普　通	86-977

（ ）は推定

Fig-図番号（PL番号）	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
80-397（PL.57）	ST012 前室右壁	杯身（須恵器）	口径 14.6 器高 5.6	高台付き。高台部は短い。	明灰色	良　好	85-3829 900370
-398（〃）	ST012 前室右壁	杯身（須恵器）	口径 14.2 器高 5.7	高台付き。高台部は短く、口縁部は外反する。	明灰色	良　好	85-3830 900371
-399（〃）	ST012 前室右壁	杯身（須恵器）	口径 14.4 器高 5.6	高台付き。高台部は短い。	明灰色	良　好	85-3831 900372
-400	ST012 前室埋土	長頸壺（須恵器）	——	長頸壺の底部。高台端部が外にはねる。	灰黒色	良　好	86-981
-401	ST012 墳丘盛土	壺（須恵器）	胴径（15.6）	胴部最大径は上位にあり、底部は平坦。	橙褐色	不　良	86-987
-402	ST012 墳丘盛土	壺（須恵器）	口径（24.8）	口縁端部は方形におさめる。	灰色	良　好	86-986
85-417（PL.58）	ST013 玄室床面	杯身（須恵器）	口径 10.2 器高 3.4	高台付き。高台部は短く下方にのびる。	暗灰色	良　好	86-988 900498
-418	ST013 玄室埋土	杯身（須恵器）	——	高台部は断面三角形。軟質で、瓦器椀か？	灰黄色	不　良	86-990
-419	ST013 周辺表土	平瓶（須恵器）	口径（ 8.6）	平瓶か提瓶の口頸部。口縁部で内側に少し屈曲する。	橙褐色	普　通	86-991
-420（〃）	ST013 玄室埋土	長頸壺（須恵器）	口径（10.9）	頸部は外反し、口縁端部は水平に外に広がる。	灰黒色	普　通	86-989 900499

13．ST013古墳

(1) 概　要

調査区の北西部に位置し東方約7 mにはST014古墳が、西方約15mにはST002古墳がある。墳丘はすでになく、石室左側壁もすでに抜き取られる。内部主体は単室両袖型の横穴式石室である。出土遺物は少なく、築造時期を示す土器はない。追葬は小田編年VI期までか。

(2) 内部主体

単室両袖型の横穴式石室である。墳丘は既になく左側壁も抜き取られており、部分的に腰石が残るだけである。

主軸をN20°Wにとり南東の斜面に向かって開口する。玄門から南へ4 mいくと急斜面となる。左側壁が抜き取られており石室平面形態および規模は床面にのこる根石から推定した。玄室平面形は方形で羨道部は連接しない。玄門閉塞であろう。規模は玄室中央長1.9m、中央幅2.1 mを測る。残存壁石は奥壁腰石に1.4×0.8mの横長石材を横位に配する。右側壁は1.3×0.9 m、0.5×1mの石材2石を配し、その上に1段のみ石積みが残る。玄門右袖石か右前壁になるか不明であるが1.2×0.4mの柱状石材を立てる。床面には径50cm程の扁平石を部分的に敷く。

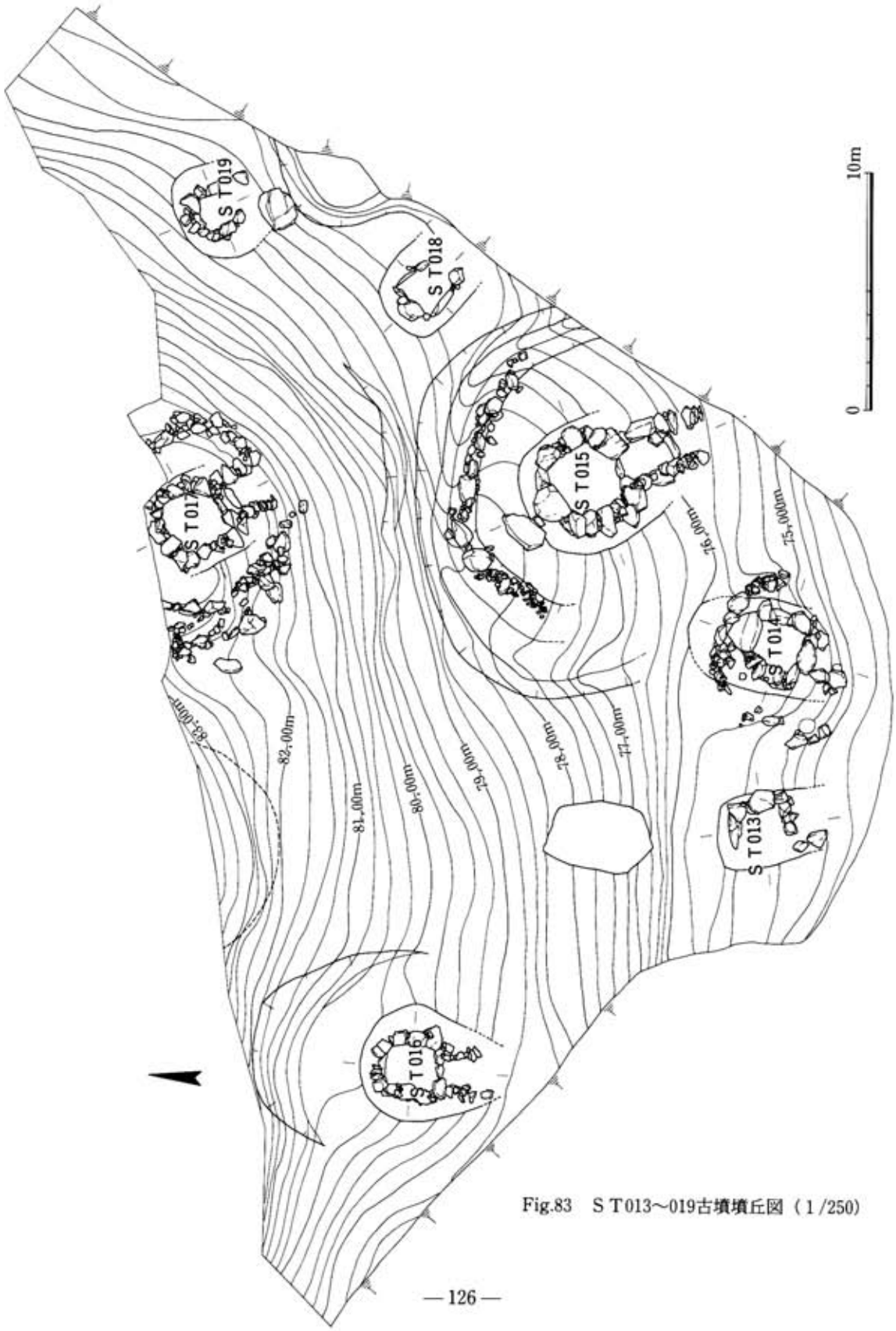


Fig.83　S T013～019古墳墳丘図（1/250）

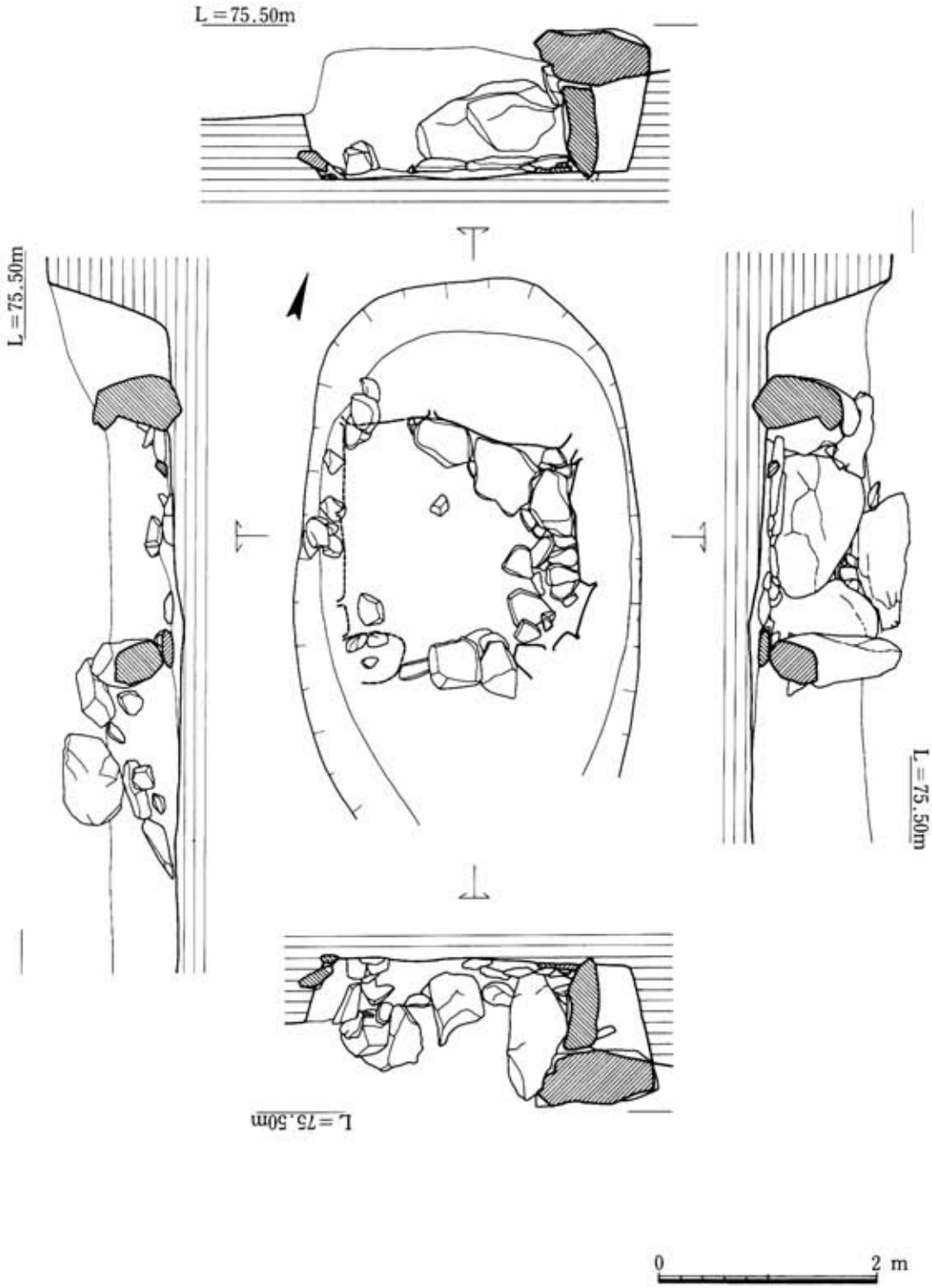


Fig.84　ＳＴ013古墳石室（1/60）

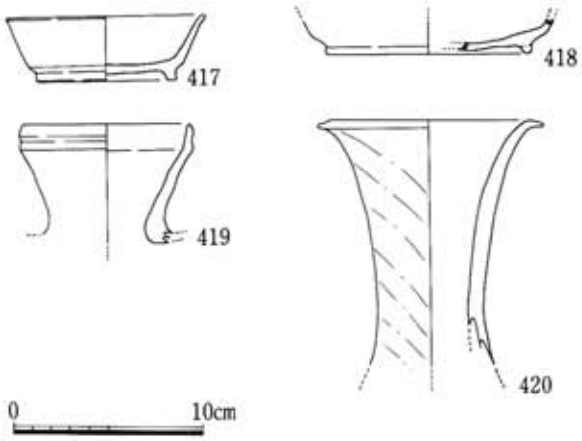


Fig.85　ＳＴ013古墳出土須恵器（1/4）

(3) 出土遺物

須恵器

417は杯身、高台付き。口径10.2cmでＥ類より新時期のものであろう。石室内で玄門近くから伏せた状態で出土している。418は焼成は須恵器であるが器形は瓦器椀である。419は平瓶か提瓶の口縁部。420は長頸壺の口頸部。

14. ＳＴ014古墳

(1) 概　要

調査区のほぼ中央に位置し、西方約７ｍにはＳＴ013古墳が、北東約11ｍにはＳＴ015古墳がある。墳丘、石室上半部は削平をうけるが、墳丘盛土内に列石を配する。内部主体は単室両袖型の横穴式石室で玄室内から多くの装身具類が、羨道左側壁や墳丘南西部から多くの土器が出土している。築造時期は小田編年ⅢＢ古段階期で追葬はⅤ期までなされる。

(2) 墳丘・周溝

墳丘盛土および石室上半部は削平をうけ、周溝もつくらない。墳丘盛土上に列石を配する。石室掘り方は隅丸長方形で、奥壁側は腰石が大形であることもあって掘り方も広く、緩やかに掘り込む。古墳構築に先行しての地山整形は墳丘東側や北側で平坦な墳丘基底面および墳丘裾部を削り出し、この墳丘基底面に褐色土を50～60cm盛り上げ列石を配する。列石は玄室中心から半径約2.5ｍで奥壁側に半周巡らす。石材は大小さまざまで配し方も雑然としている。また、列石南西部で墳丘祭祀であろう供献土器が出土している。

(3) 内部主体

単室両袖型の横穴式石室である。主軸をN7°Eにとりほぼ南に向かって開口する。墳丘、石室上半部は削平を受ける。玄門から南へ約6 mいくと急斜面になる。

石室平面形態は玄室が正方形で、主軸がやや東にふれる平面長方形の羨道を連接する。規模は石室全長3.55m、玄室中央長2.05m、中央幅1.95m を測る。

奥壁は腰石に2.0×1.1m 程の厚みのある巨石1石を横位に配する。左側壁は腰石に1.4×0.4m、0.8×0.3m 程の横長石材2石を横位に配し、その上方は腰石と同大かやや小ぶりの横長石材を3～4段横積みする。右側壁は腰石に1.2×0.8m、0.7×0.4m 程の石材を横位に配する。奥壁と側壁の隅角は腰石部で側壁を挟み込むように配置されており、腰石の上からは互いに重なる三角持ち送り法を用いている。玄室床面は径20～30cmの礫を敷き詰める。

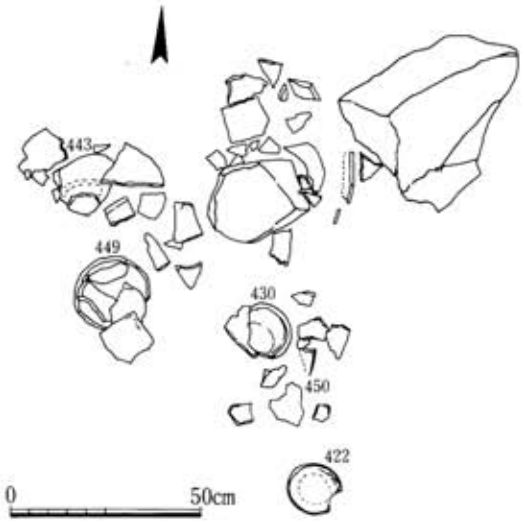


Fig.86　ST014古墳墳丘盛土内遺物出土状況(1/20)

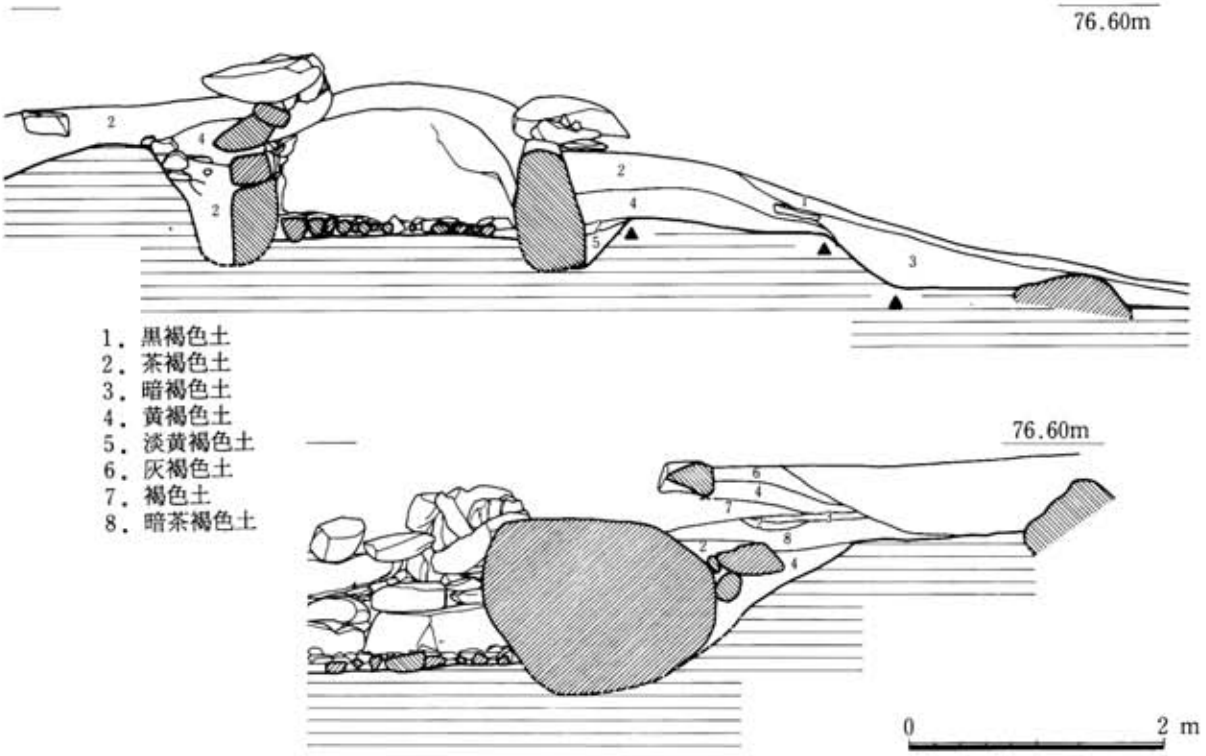


Fig.87　ST014古墳墳丘土層図（1/60）

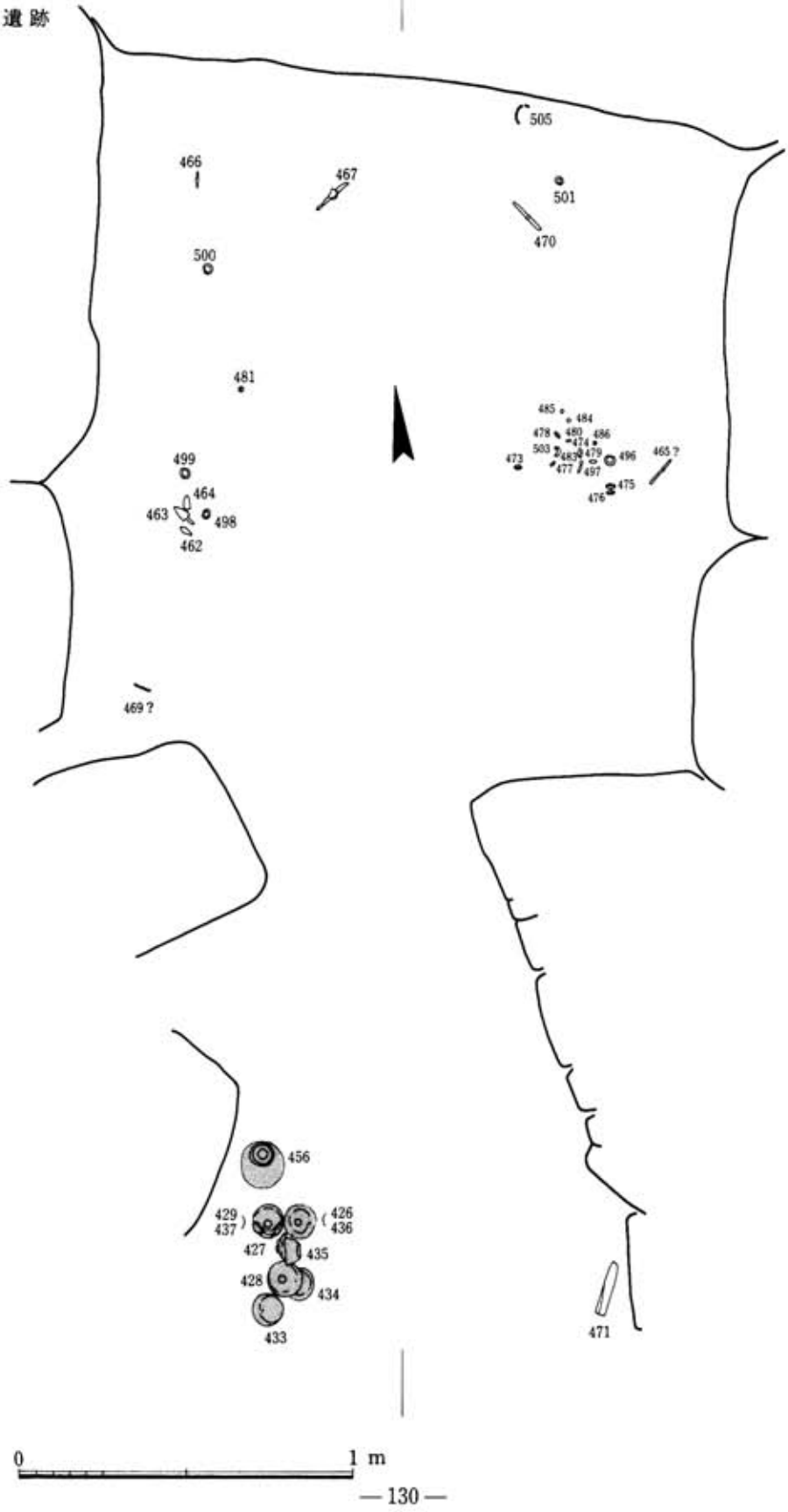


Fig.88　ST014古墳石室内遺物出土状況（1/20）

Fig.89　ＳＴ014古墳墳丘列石（１/60）

玄門部は角ばった直方体形の石材を横位に配して袖石としそれぞれの面を玄室前壁と羨道内面とする。この袖石の上に不整形の扁平石材を１段積み、その上に楣石を架構する。玄門幅は0.6m、玄門高は0.7m を測る。玄門床面には長さ50cm程の石材を２石横位に配して框石とする。

羨道左側壁腰石に0.7×0.7m 程の方形状石材２石を配するが南側の腰石は内側に倒れる。右側側壁は削平をうけて腰石も残らない。現状では羨道部のどこまで天井石が架構していたか不明であるが左側壁下から須恵器が、右側壁側からは鉄鎌が出土していることから側壁腰石が配されるところまでは天井石はあったのではなかろうか。

玄室内から多くの装身具類が出土している。

(4)　出土遺物

玄室内からは多くの装身具類および鉄器が、羨道左側壁からは須恵器の杯蓋・身、平瓶(424、425、426、427、428、429、433、434、435、436、437、456)、墳丘南西部の盛土内からは須恵器(422、430、443、449、450)が出土している。玄室内出土の装身具で切子玉、管玉、角玉、丸玉、耳環、勾玉(473、474、475、476、477、478、479、480、483、484、485、486、496、497、503)は一ケ所からまとまって出土している。

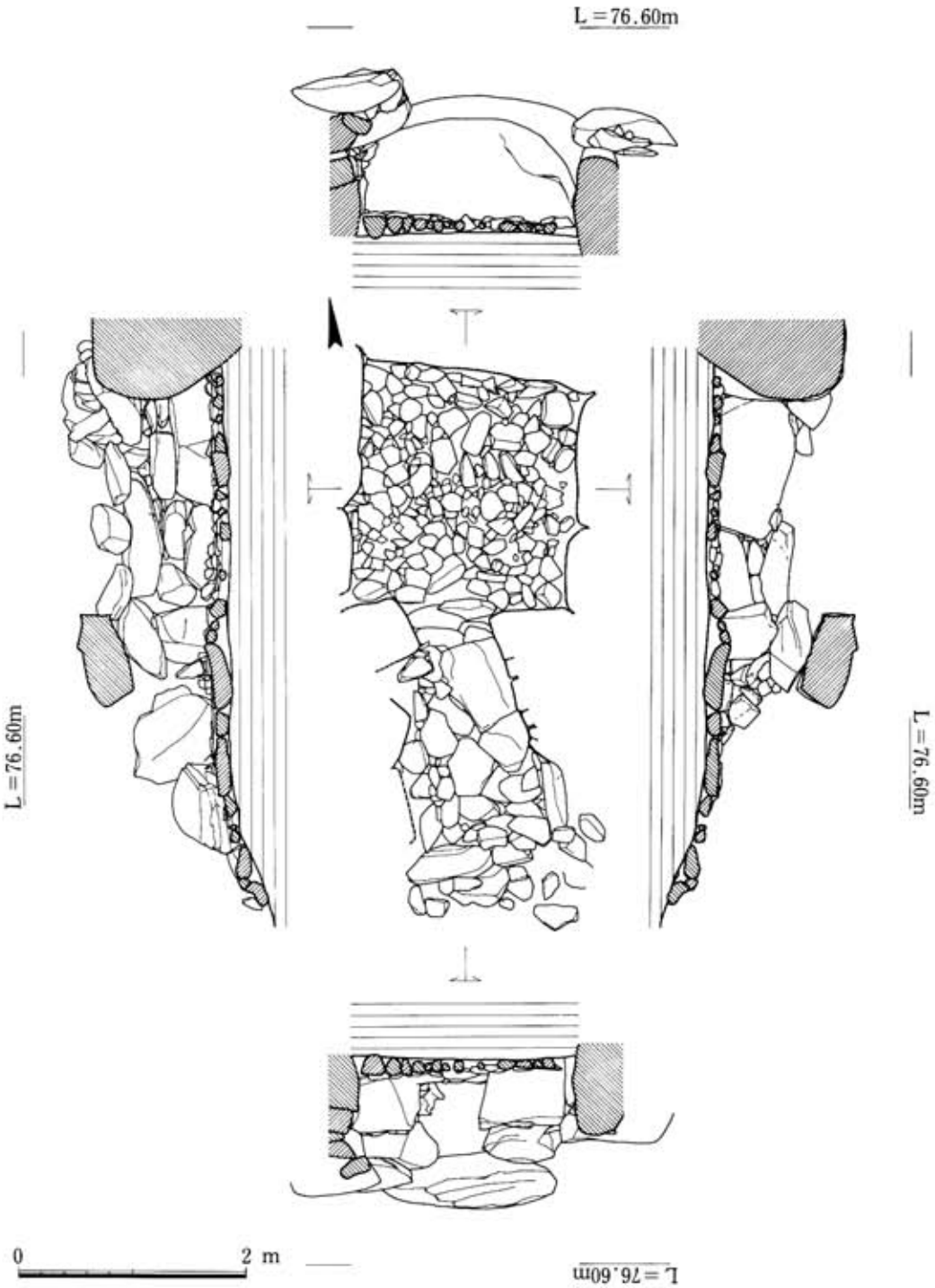


Fig.90　ＳＴ014古墳石室（１/60）

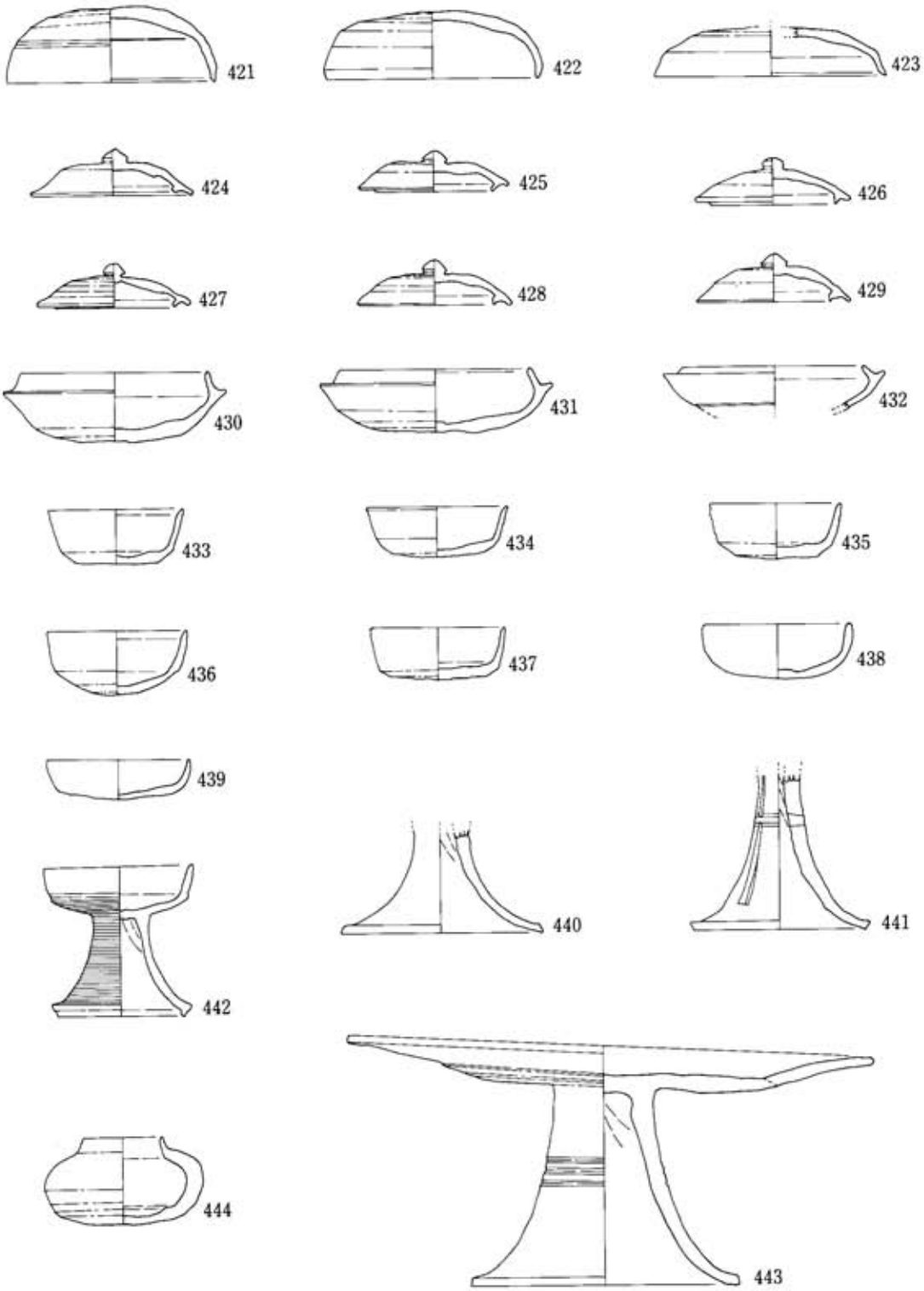


Fig.91　ＳＴ014古墳出土須恵器１（１／４）

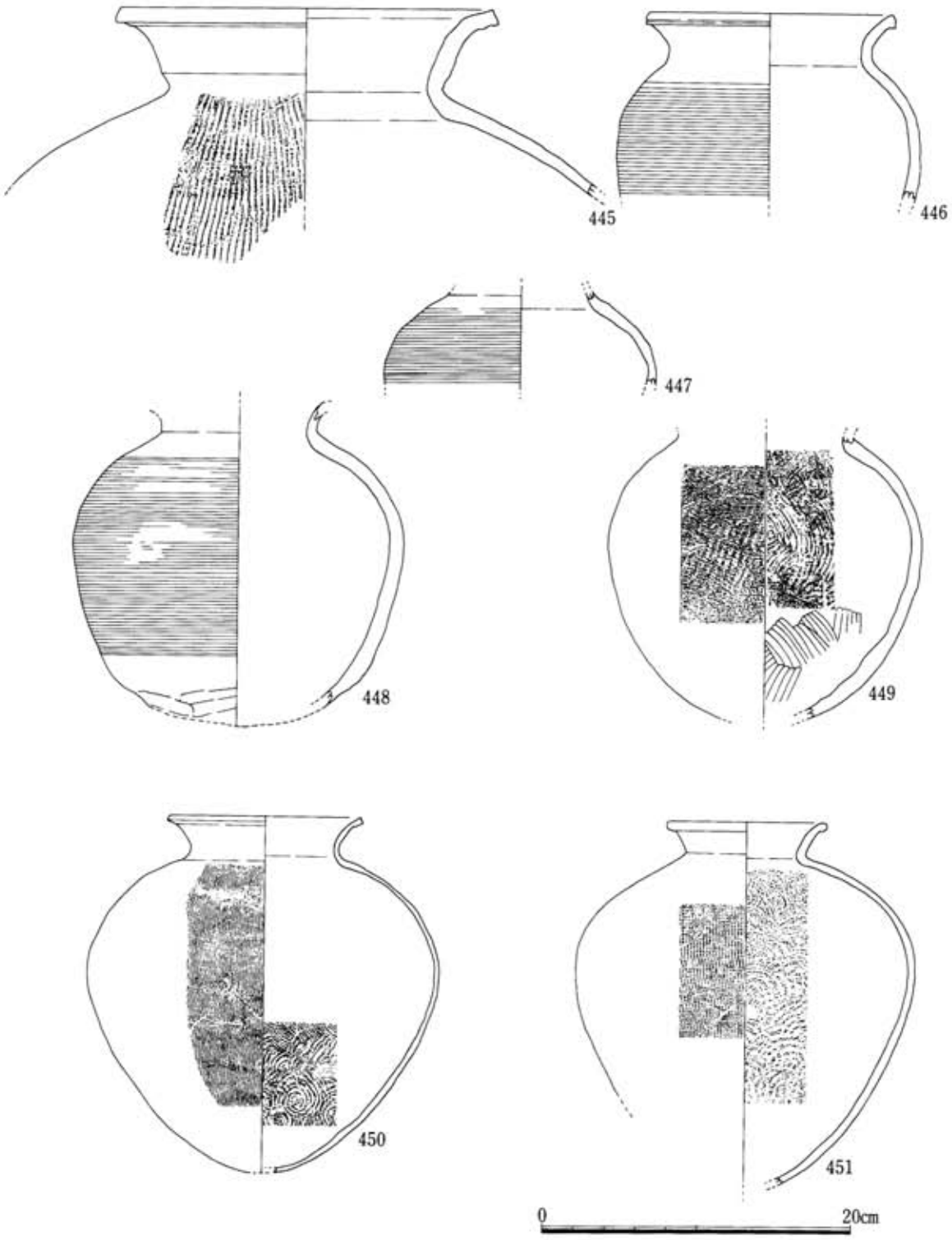


Fig.92　ＳＴ014古墳出土須恵器２（１／４　450,451は１／８）

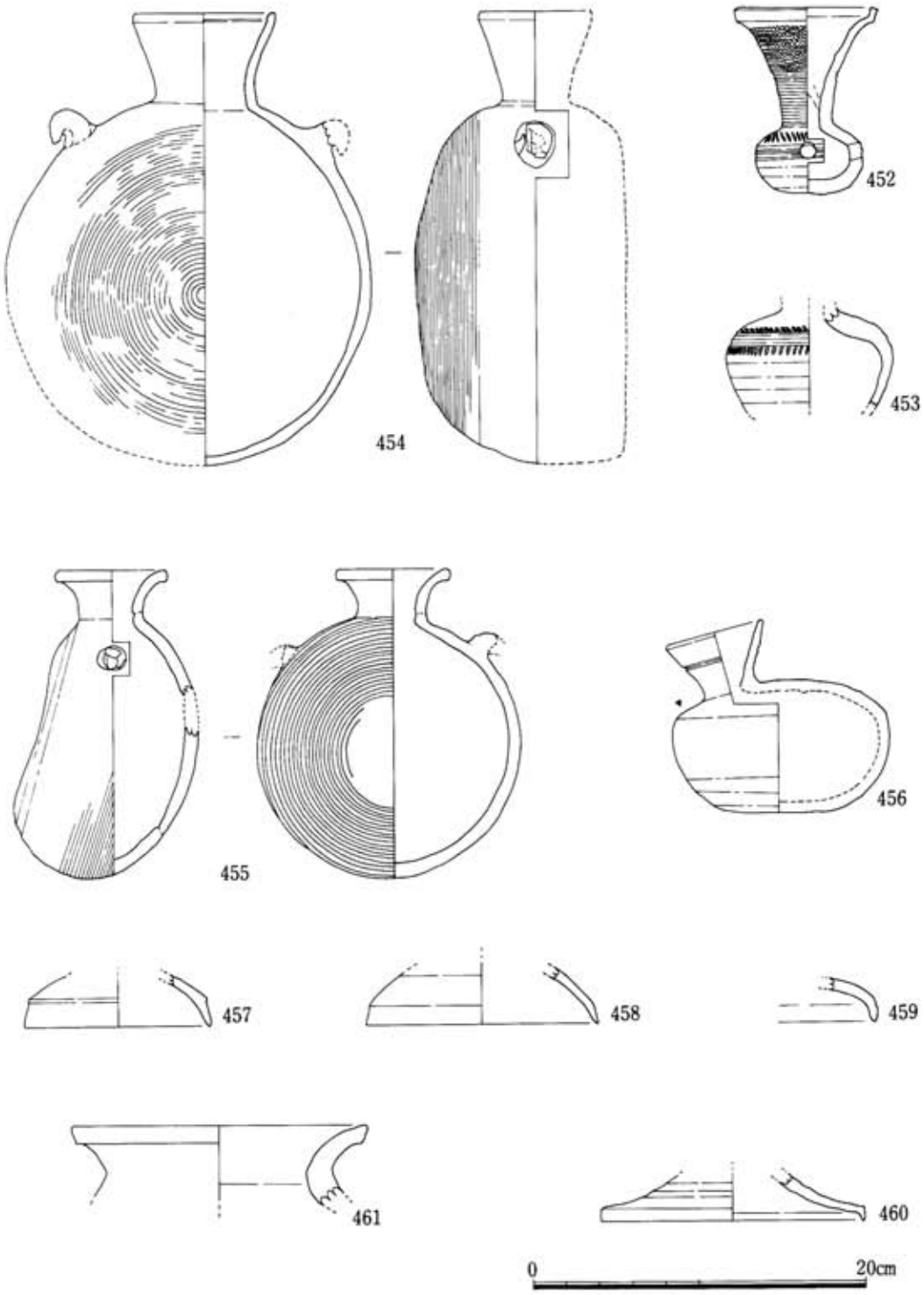


Fig.93　ＳＴ014古墳出土土器（１／４）

須恵器

杯蓋はA類(421、422)・B類(423)・D類(424、425、426、427、428、429)、杯身はA類(430、431)・B類(432)・D類(433、434、435、436、437、438、439)がある。C類は杯蓋・身とも出土していない。421～429は杯蓋。421、422は口径12.8cm、器高4.2～4.6cmでA類の法量としては若干小形であるが421は口唇部内面、体部と口縁部の境に沈線を有することなどからA類とした。423は約1/2残存し、焼け歪む。424～429は宝珠つまみとかえりが付く。口径7.6～7.0cm、器高2.6～3.0cm。器形、法量とも類似する。424、425、429は天井部に自然釉付着。430～439は杯身。430、431は口径11.9cm、器高3.9～4.3cm、たちあがり高1.2～1.3cm。431は底部内面に当て道具痕有り。432は口縁部約1/3残存、たちあがり高0.9cmを測る。433～439は逆転杯身、口径8.0～9.0cm、器高2.5～4.0cm。434、439は底部回転ヘラケズリ。433、435、437は底部ヘラ切り未調整。439は底部丸みをもちナデ仕上げ。出土状況から426と436、427と435、428と434、429と437がそれぞれセットとなる。

440～443は高杯。441は長脚二段三方透かしを施す。442は体部に一条の沈線を有し、脚裾部は断面三角形におさめる。443は杯部口径32.4cmと大きく開き杯体部で弱く屈曲する。444は短頸壺、

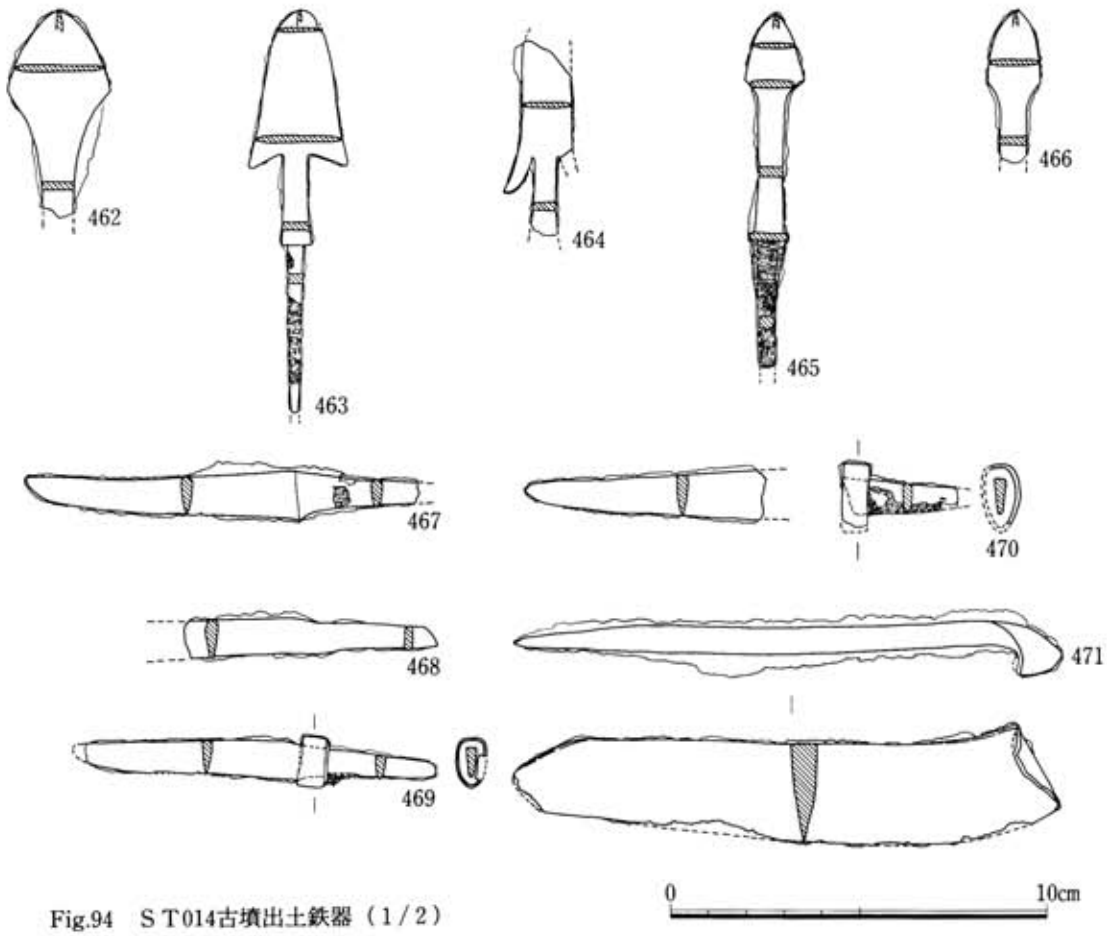


Fig.94　ST014古墳出土鉄器（1/2）

口頸部はやや内傾する。445、450、451は甕。445は口縁部約1/3残存する。450と451は器形が類似し胴部外全面および内面全面にタタキ痕有り。446～449は壺。448は胴部円筒形でカキ目調整を施す。底部不定方向へラケズリ、他器種の可能性あり。449は底部内面に特に強くタタキを施し器壁がへこむ。452、453は鉢、454、455は提瓶、どちらも肩部２ケ所に把手を付け、胴部前面はカキ目調整を施す。456は平瓶、頸部に一条の沈線を施し、肩部は丸みをもつ。自然釉がかかる。

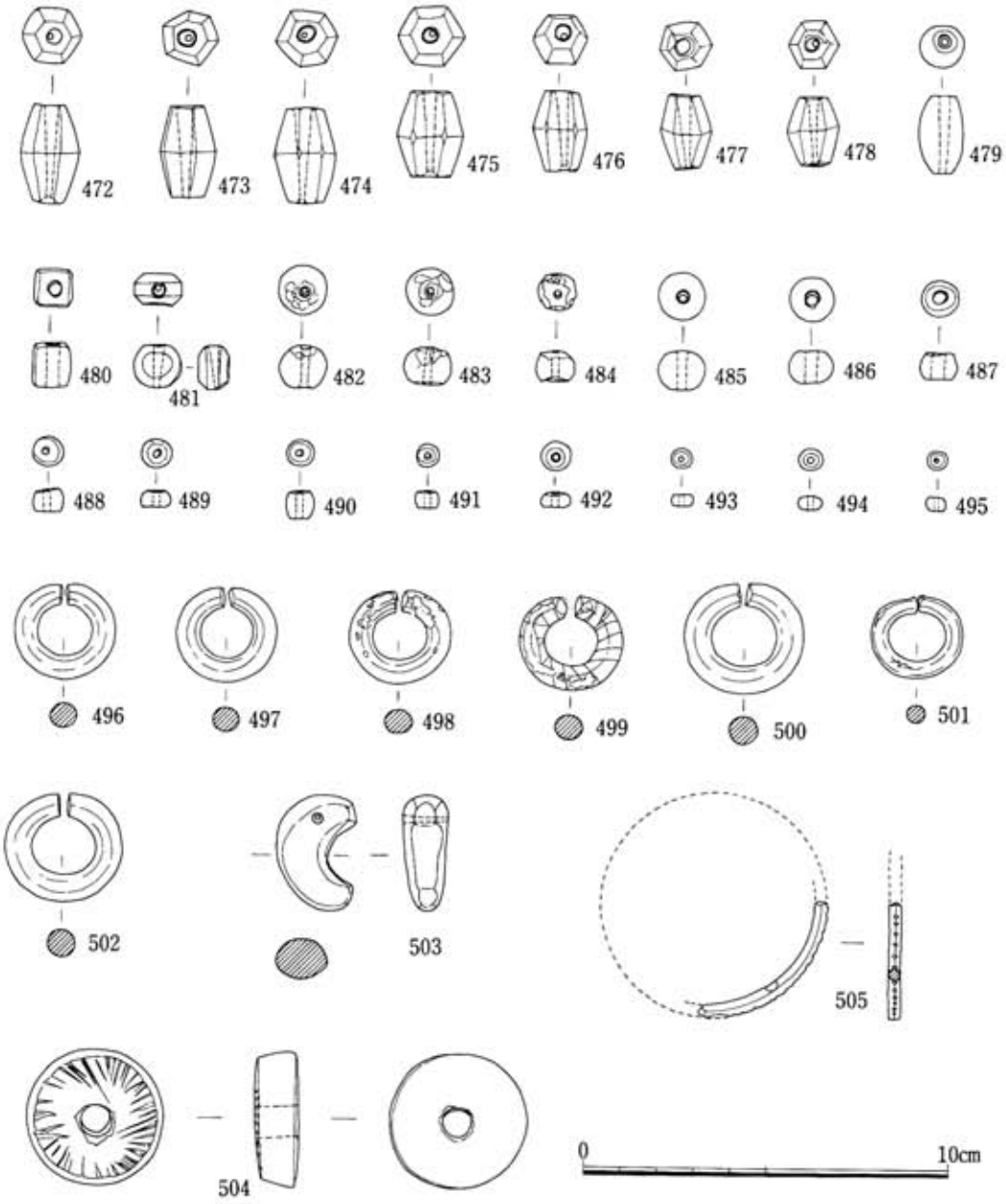


Fig.95　ＳＴ014古墳出土装身具類（１/２）

土師器

457、458、459は杯蓋。457、458は口縁部で屈曲する。457は内面黒塗り。458は赤焼きの須恵器か。459は口縁部外面に沈線を施す。内外面黒塗り。460は高杯脚裾部。赤焼きの須恵器か。461は甕、口縁部約1/3残存。

鉄　器

鉄鏃(462～466)462は圭頭式、鏃身基部以下を欠損する。463は腸抉長三角形式、全長10.7cm。464は腸抉柳葉式。465は三角形式、関部不明瞭。466は柳葉式。

刀子(467～470)467、469は把元金具が残る。どれも関部は不明瞭。469は全長9.2cm、身幅0.9cm。

鉄鎌(471)羨道右側壁出土。基部を折り返す。全長14.5cm、身幅2.7cm。

装身具

472～478は水晶製切子玉。側面12面体で表面は摩耗しており中央の稜は不明瞭。長さ1.9～2.7cm、幅1.4～1.8cm。479は管玉、黄土色で材質不明。480は角玉、直方体で薄緑色。ガラス製か。481は扁平玉、算盤玉形で水晶製である。482～486は丸玉、482～484はメノウ製。485、486はガラス製か。緑色である。487～495はガラス小玉。487～490、492は群青色。491は青色。493～495は青緑色。496～502は耳環、499は幅3㎜の金の帯を巻き付ける。部分的に緑青がふく。他は漆黒色で498、501は部分的に緑青がふく。503は勾玉、緑色で硬玉製。504は有孔石製品、滑石製で表面に刻み目を入れる。505は青銅釧、推定径6.2cm。外縁に刻み目を入れる。

Tab.14　ＳＴ014古墳出土土器一覧表

（　）は推定

Fig-図番号 (PL番号)	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
91-421 (PL.58)	ＳＴ014 墳丘盛土	杯蓋 (須恵器)	口径 12.8 器高 4.6	体部と口縁部の境に沈線。口唇部内面に部分的に沈線を有す。	灰色	良　好	85-3685 900315
-422 (　〃　)	ＳＴ014 墳丘一括	杯蓋 (須恵器)	口径 12.8 器高 4.2	天井部は平坦で回転ヘラケズリを施す。砂粒を多く含む。	灰白色	普　通	85-3670 900297
-423	ＳＴ014 墳丘列石	杯蓋 (須恵器)	口径 (14.0) 器高 (3.2)	天井部回転ヘラケズリ。焼け歪み大。	灰黒色	不　良	85-3654
-424 (　〃　)	ＳＴ014 羨道壁面	杯蓋 (須恵器)	口径 7.3 器高 2.9	宝珠つまみ付き。かえりは短い。天井部に自然釉と他破片付着。	灰褐色	普　通	85-3674 900301
-425 (　〃　)	ＳＴ014 羨道壁面	杯蓋 (須恵器)	口径 7.1 器高 2.6	宝珠つまみ付き。かえりは短く内傾する。天井部に自然釉付着。	灰褐色	普　通	85-3672 900299
-426 (　〃　)	ＳＴ014 羨道左側壁	杯蓋 (須恵器)	口径 7.6 器高 3.0	宝珠つまみ付き。かえりは鋭く下方にのびる。	灰色	良　好	85-3676 900303 900304
-427 (　〃　)	ＳＴ014 羨道左側壁	杯蓋 (須恵器)	口径 7.4 器高 2.8	宝珠つまみ付き。かえりは短く内傾する。	灰色	良　好	85-3680 900308 900309

（ ）は推定

Fig-図番号（PL番号）	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
91-428（PL.58）	ST014 羨道左側壁	杯蓋（須恵器）	口径　7.4 器高　2.8	宝珠つまみ付き。かえりは短く内傾する。	灰褐色	普　通	85-3682 900311 900312
-429（〃）	ST014 羨道左側壁	杯蓋（須恵器）	口径　7.0 器高　3.0	宝珠つまみ付き。かえりは短く内傾し、天井部に自然釉付着。	灰褐色	普　通	85-3678 900306
-430（〃）	ST014 墳丘一括	杯身（須恵器）	口径　11.9 器高　4.3 たちあがり高1.3	底部約3/4回転ヘラケズリ。砂粒を多く含む。	灰色	普　通	85-3671 900298
-431（〃）	ST014 墳丘盛土	杯身（須恵器）	口径　11.9 器高　3.9 たちあがり高1.2	底部約3/4回転ヘラケズリ。内面当て道具痕あり。	灰色	良　好	85-3684 900314
-432	ST014 墳丘盛土	杯身（須恵器）	口径　11.1 たちあがり高0.9	口縁部約1/3残存。たちあがりは強く内傾する。	灰色	普　通	85-3647
-433（〃）	ST014 羨道壁面	杯身（須恵器）	口径　8.2 器高　3.4	底部ヘラ切り未調整。	灰褐色	良　好	85-3673 900300
-434（〃）	ST014 羨道左側壁	杯身（須恵器）	口径　8.4 器高　3.1	底部平坦で回転ヘラケズリ。	灰色	良　好	85-3683 900313
-435（〃）	ST014 羨道左側壁	杯身（須恵器）	口径　8.0 器高　3.5	底部ヘラ切り未調整。	灰褐色	普　通	85-3681 900310
-436（〃）	ST014 羨道左側壁	杯身（須恵器）	口径　8.5 器高　4.0	底部は丸味をもちナデ仕上げ。	灰色	良　好	85-3677 900305
-437（〃）	ST014 羨道左側壁	杯身（須恵器）	口径　8.2 器高　3.2	底部ヘラ切り離し未調整。底部に他破片付着。	灰褐色	普　通	85-3679 900307
-438（〃）	ST014 墳丘列石	杯身（須恵器）	口径　9.0 器高　3.4	底部静止ヘラケズリ。	黄灰色	普　通	85-3649 900287
-439	ST014 墳丘列石	杯身（須恵器）	口径　8.9 器高　2.5	底部ヘラケズリ。	明灰色	普　通	85-3648 900273
-440	ST014 墳丘盛土	高杯（須恵器）	底径（6.4）	高杯脚部。外反しながら裾部につづく。ナデ調整。	灰色	良　好	85-3652 900290
-441	ST014 墳丘表土	高杯（須恵器）	底径（10.4）	長脚二段三方透かし。自然釉が部分的に垂下。	灰白色	普　通	85-3651 900289
-442（PL.59）	ST014 墳丘列石	高杯（須恵器）	口径　9.2 器高　9.3	体部に一条の沈線を施し、脚裾端部は断面三角形におさめる。	灰色	普　通	85-3686 900316
-443（〃）	ST014 墳丘一括	高杯（須恵器）	口径　32.4 器高　15.0	杯体部で弱く屈曲し、口縁部へ大きく広がる。砂粒多く含む。	灰色	普　通	86-966 900497
-444	ST014 墳丘列石	短頸壺（須恵器）	口径　2.8 器高　5.3	頸部は短く内傾する。底部回転ヘラケズリ。	灰黒色	良　好	85-3650 900288

（ ）は推定

Fig-図番号 (PL番号)	出土地点	器種	法量cm	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
92-445	ST014 墳丘	甕 (須恵器)	口径 (23.8)	肩部外面平行タタキ。内面同心円文タタキのちナデ消し。	灰色	普通	85-3659
-446	ST014 墳丘	壺 (須恵器)	口径 15.6	肩部は丸味をもち外反する頸部がつく。外面カキ目調整。	灰白色	不良	85-3665
-447	ST014 墳丘表土	壺 (須恵器)	——	肩部約1/5残存。外面カキ目調整。	灰色	普通	85-3655
-448	ST014 羨道	壺 (須恵器)	胴径 21.2	胴部円筒形で、外面カキ目調整。底部不定方ヘラケズリ。	灰白色	普通	85-3669
-449	ST014 墳丘一括	壺 (須恵器)	胴径 20.2	丸底で球形の胴部。外面平行タタキのちカキ目調整。底部内面に同心円文タタキ。上半部はナデ消し。	橙褐色	普通	85-3667
-450	ST014 墳丘一括	甕 (須恵器)	口径 (24.4) 器高 46.0	外面全面平行タタキ。内面全面同心円文タタキ。	灰色	普通	86-996
-451 (PL.59)	ST014 墳丘	甕 (須恵器)	口径 20.4 器高 (48.0)	胴部最大径は上位にあり、外面全面格子目ふうタタキのちヨコナデ。内面全面同心円文タタキ。	灰色	普通	86-997 90-1535
93-452 (〃)	ST014 墳丘列石	鉢 (須恵器)	口径 8.0 器高 11.2	口唇部は面とりされる。頸部に櫛描波状文。胴部に櫛描列点文を施す。	灰黒色	良好	85-3687 901295
-453	ST014 墳丘盛土	鉢 (須恵器)	——	胴部約1/3残存。二条の沈線と櫛描列点文施文。	灰黒色	普通	85-3656 900292
-454	ST014 墳丘列石	提瓶 (須恵器)	口径 (8.2) 器高 26.4	肩部2ヶ所に把手がつく。胴部カキ明調整。	灰白色	不良	85-3668
-455 (〃)	ST014 墳丘列石	提瓶 (須恵器)	口径 (6.4) 器高 18.6	胴部背面は窪み、焼成時の窯壁付着。肩部2ヶ所に角状把手がつく。	灰黄色	不良	85-3688 901296
-456 (〃)	ST014 羨道左側壁	平瓶 (須恵器)	口径 5.6 器高 12.6	肩部は丸みをもち、口頸部に一条の沈線を有す。自然釉付着。	灰黄色	良好	85-3675 900302
-457	ST014 墳丘列石	蓋 (土師器)	口径 (11.2)	体部で屈曲する。内面黒塗り。	褐色	普通	85-3658
-458	ST014 墳丘表土	蓋 (土師器)	口径 (14.0)	口縁部で弱く屈曲する。	赤褐色	やや良	85-3657
-459	ST014 墳丘列石	蓋 (土師器)	——	口縁部に沈線を有す。内外面黒塗り。	黒色	普通	85-3662
-460	ST014 墳丘表土	高杯 (土師器)	——	裾端部は下方にのびる。	赤褐色	普通	85-3661 900294
-461	ST014 墳丘盛土	壺 (土師器)	口径 (17.7)	口縁部約1/3残存。	赤褐色	不良	85-3660 900293

15．ＳＴ015古墳

(1) 概　要

調査区の中央に位置し、北東10m にＳＴ018古墳が南西10m にＳＴ014古墳が北方16m にＳＴ017古墳がある。石室上半部は欠失するが周溝、墳丘列石を有する。内部主体は南東に開口する複室両袖型の横穴式石室で玄室平面形態は正方形である。墳丘盛土内、墳裾などから多くの土器が、玄室からガラス玉、鉄器が前室から鉄鏃、鞘尻金具が出土している。出土遺物から築造時期は小田編年ⅢＢ新段階期で、追葬はⅤ期まで。

(2) 墳丘・周溝

周溝外径約16m の円墳である。墳丘盛土は墳丘基底面から高さ1.3m 残存する。平面形で玄室中心が墳丘中心となるように設計されている。旧表土には花崗岩の自然石が多く露頭しており、墳丘西側は周溝が掘削しづらかったのか、あるいは削平を受けたためか周溝は消失する。周溝幅は２～2.5m で、深さ0.4m、断面は浅い三角形である。奥壁側の周溝はとくに掘削することなく平坦な墳丘基底面を作出するための地山整形にとどまる。墳丘列石は周溝の内側に沿って墳丘基底面上に奥壁側に約1/3周巡らす。石材は径10cm程の小石を根石としてその上に径0.5～１ｍ程の転石を配する。盛土の単位は細かく茶褐色土、黄褐色土を多用する。

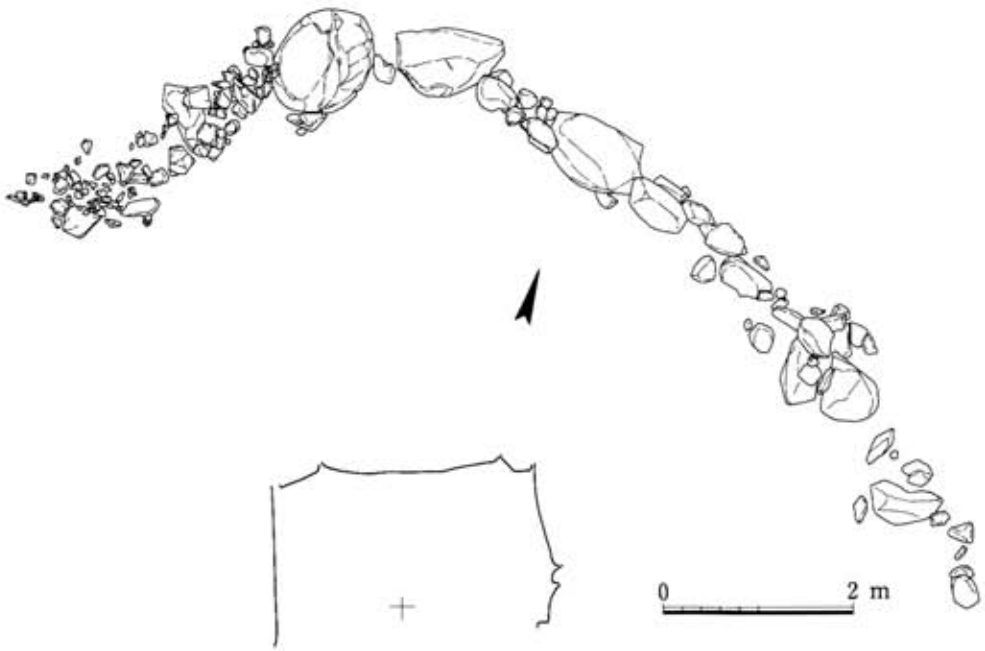


Fig.96　ＳＴ015古墳墳丘列石（１/80）

(3) 内部主体

複室両袖型の横穴式石室である。主軸をN29°Wにとり南東に開口する。墳丘、石室上半部は削平を受ける。墳丘の奥壁、側壁側には列石を配する。玄室から南へ約2 mで急斜面になる。

石室平面形態は玄室が正方形、前室がやや幅広の長方形で前庭側壁を連接する。規模は石室全長6.3m、玄室中央長2.75m、中央幅2.9m、前室中央長1.2m、中央幅1.7mを測る。

奥壁は腰石に2.4×1.8m程の巨石1石を配する。奥壁と側壁の隙間には小礫、横長石材を横積みする。腰石上方には1.5×0.8m程の石材を横積みする。右側壁は腰石に1.1×1.0m、1.2×0.9m程の石材2石を横位に配し、その上に長さ1m程の石材を横積みする。左側壁は腰石に2.3×1.1m程の巨石1石を横位に配しその上に径50cm程の方形状石材を積む。それぞれ腰石壁面は整う。

玄門部は右袖石に1.2×0.7m、左袖石に1.5×1.0m程の柱状石材を縦位に立て、床面には框石を配する。玄門幅85cmを測る。前室左右側壁腰石はそれぞれ1石からなりその上に横長石材を横位に配する。前門部は袖石に1×0.7m程の三角形状石材を立て、床面には框石を配する。前門幅0.7mを測る。前庭側壁は径50cm程の石材を左右側壁に2～3石配するだけで特に積み上げることはしない。

前室内部を掘り進める過程で腰石の上端、床面上約60cmから径20cm程の礫がほぼ水平に面をもって検出された。閉塞施設はすでに撹乱され、前門部框石付近には閉塞石が残存する。

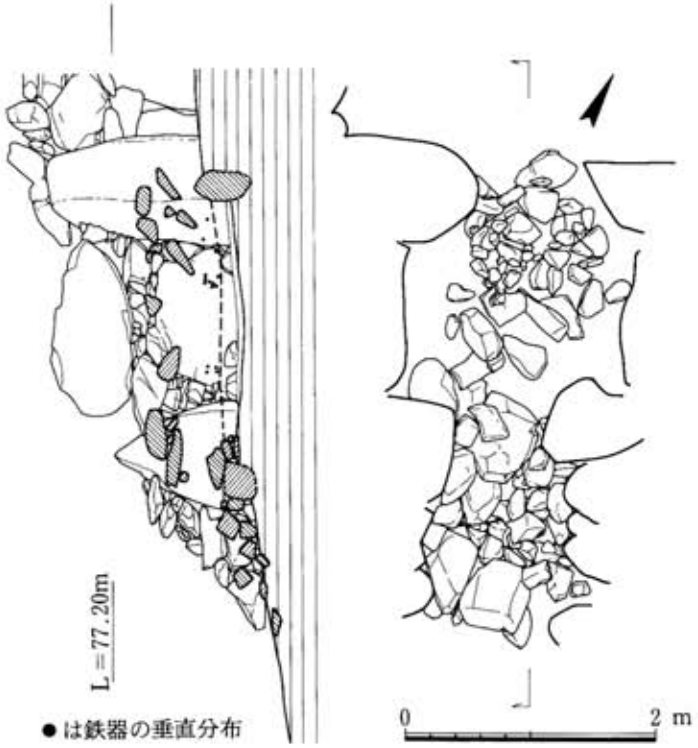


Fig.97 ＳＴ015古墳石室閉塞状況（1/60）

(4) 出土遺物

石室内では土器の出土はほとんどなく玄室からガラス小玉・鉄器が、前室からは鉄鏃・把頭金具が出土している。墳丘盛土内、墳裾など石室外から多くの土器が出土している。

須恵器

杯蓋はB類(506、507、508、509、510)・D類(512)、杯身はB類(515、516、517)・

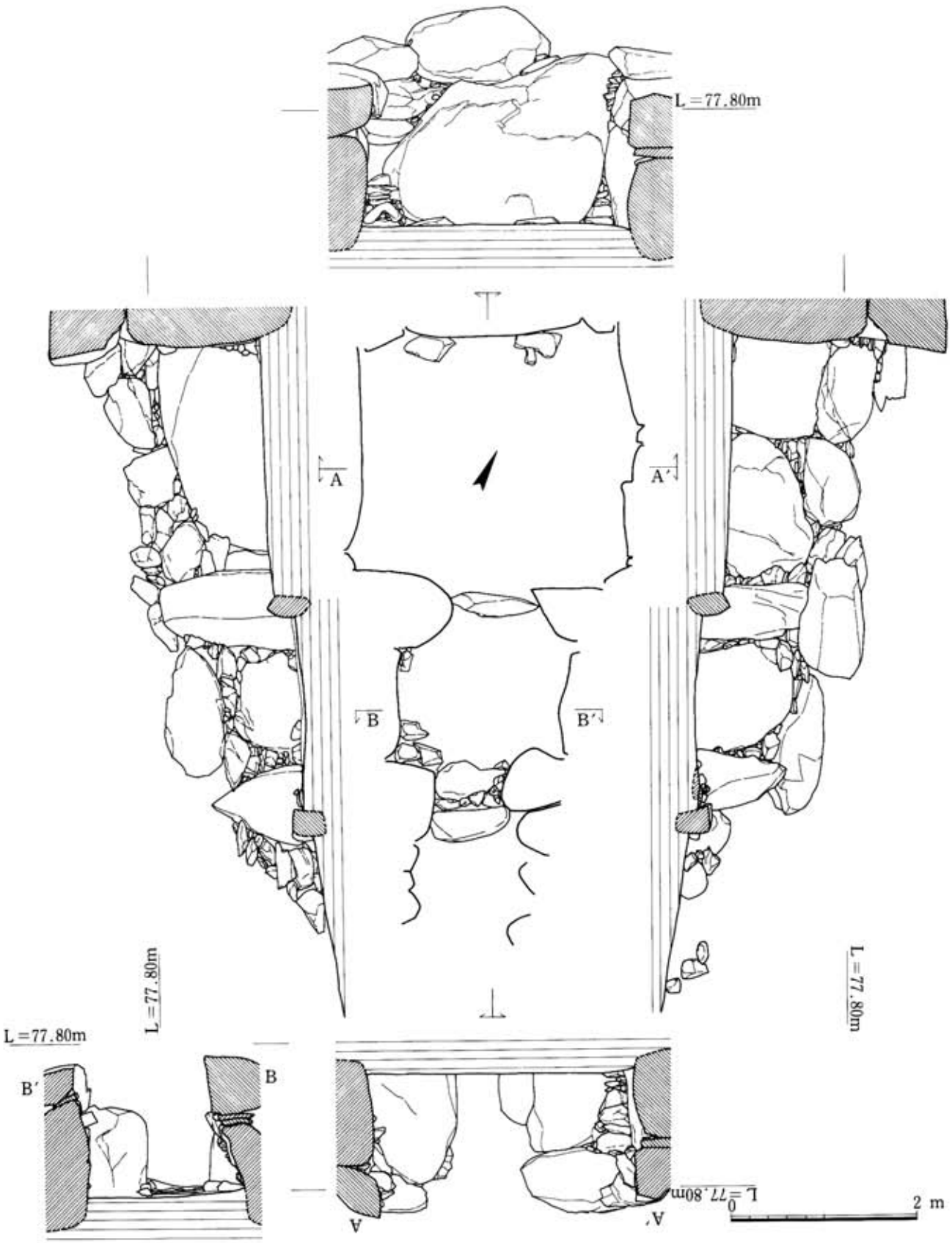
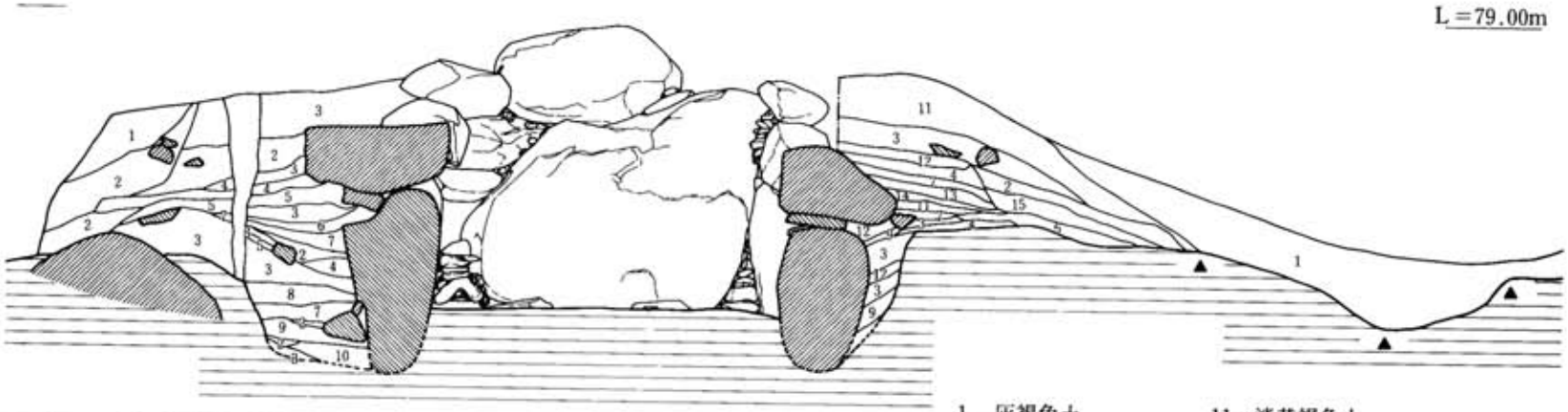
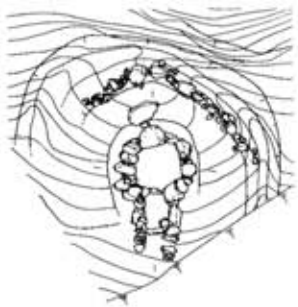


Fig.98　ＳＴ015古墳石室（1/60）





1．灰褐色土
2．黄褐色土
3．茶褐色土
4．淡茶褐色土
5．粘土混入淡黄褐色土
6．淡褐色土
7．褐色土
8．暗茶褐色土
9．黄色土
10．粘土混入黄褐色土
11．淡黄褐色土
12．黄色土混入茶褐色土
13．暗褐色土
14．粘土混入灰褐色土
15．暗黄褐色土
16．黒褐色土
17．淡灰褐色土

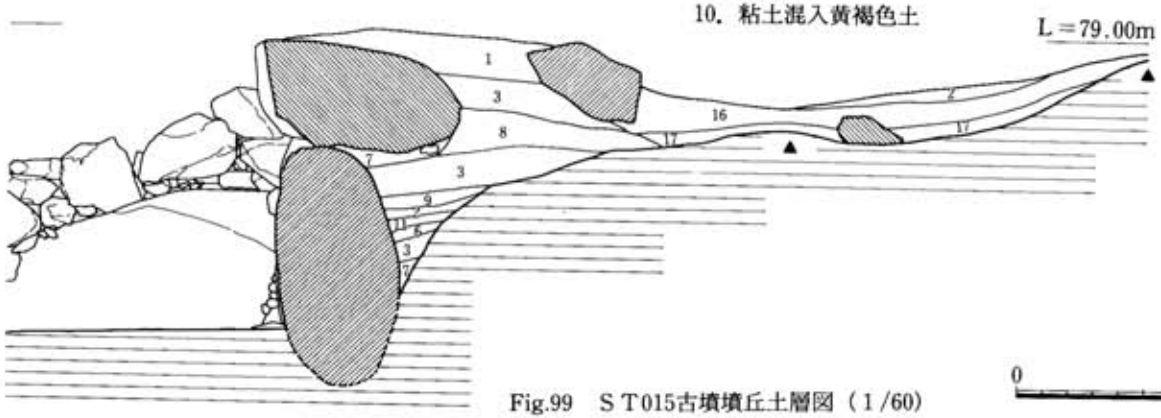


Fig.99　ＳＴ015古墳墳丘土層図（1/60）

0　2 m

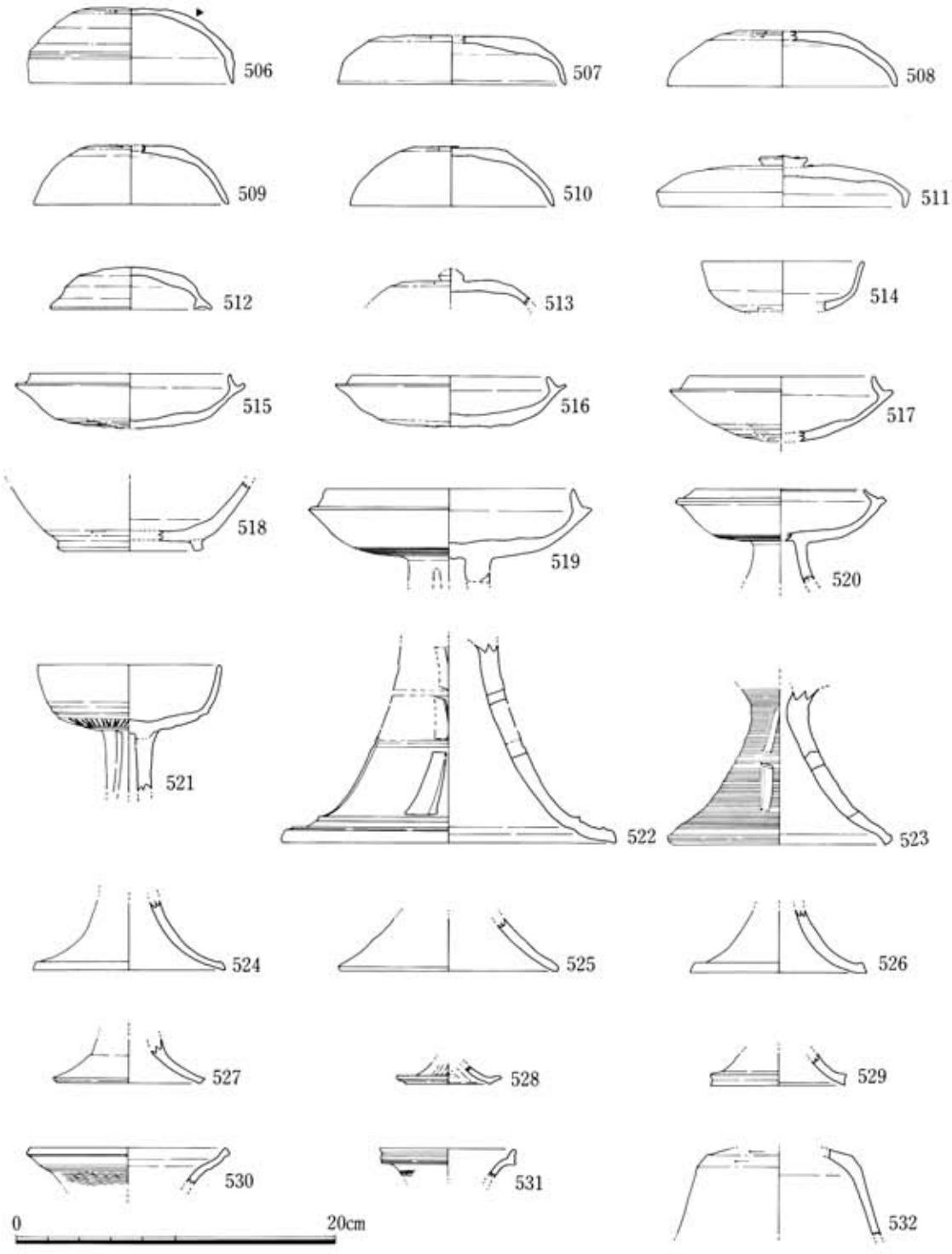


Fig.100　ＳＴ015古墳出土須恵器１（１/４）

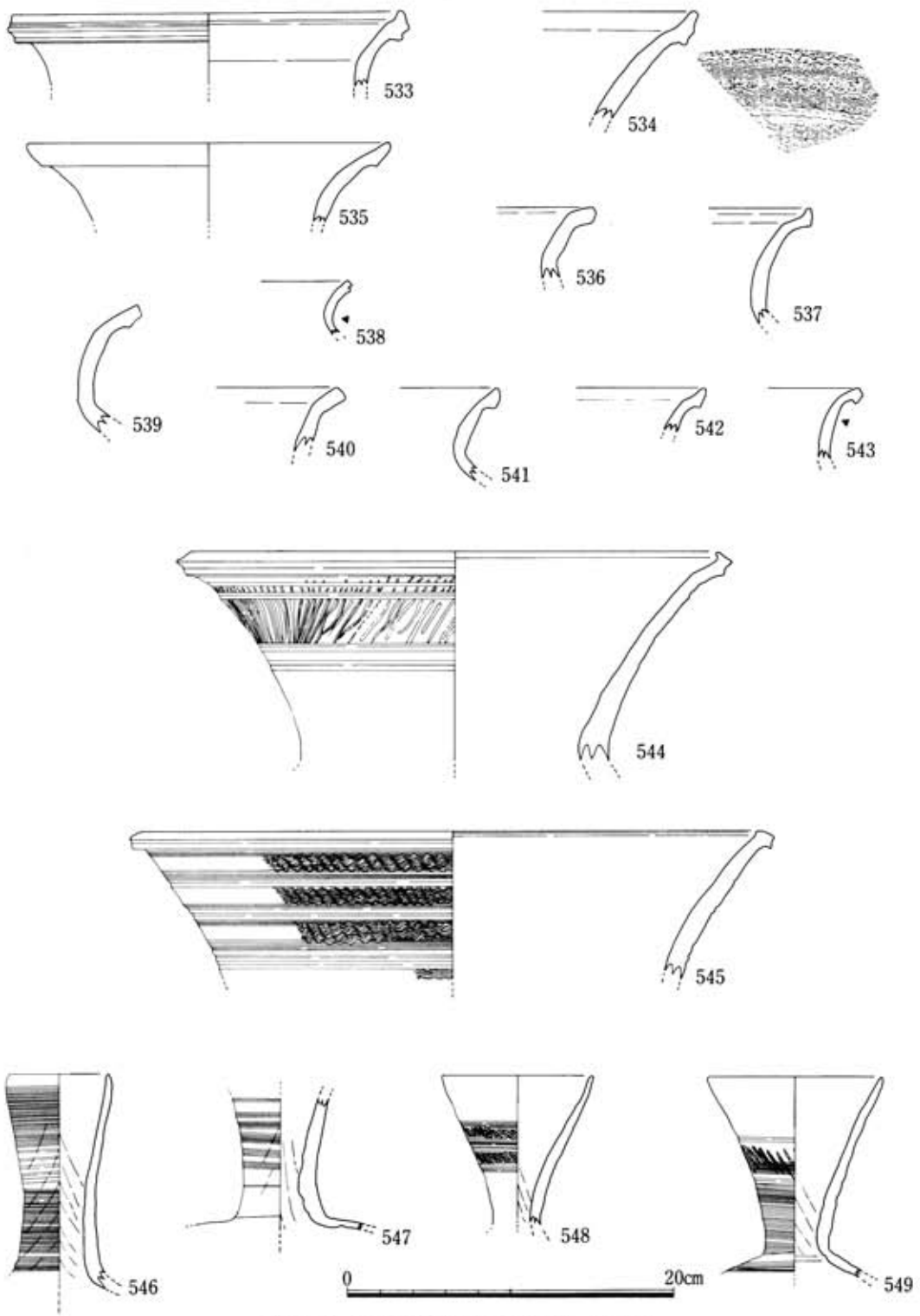


Fig.101　ＳＴ015古墳出土須恵器２（１/４）

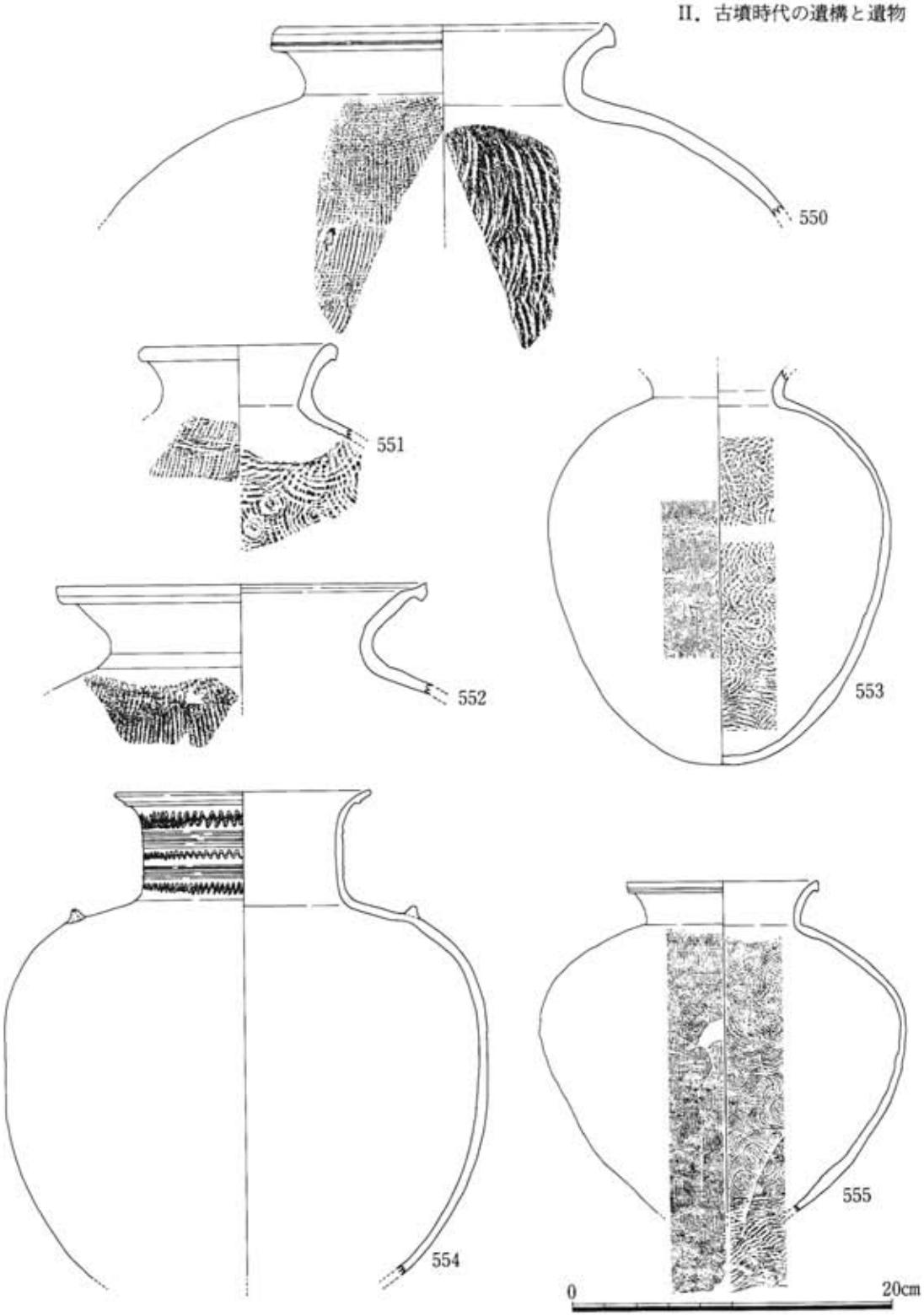


Fig.102　ＳＴ015古墳出土須恵器３（１／４　554は１／８）

D類(514)がある。506～513は蓋。506は口縁部と体部の境に沈線を有す。507は口唇部内面に沈線、天井部内面に当て道具痕あり。506、507ともA類の特徴を残すが法量および杯身にA類が出土していないことなどからB類とした。508は天井部は丁寧な回転ヘラケズリ。509、510はヘラ切り離し痕が部分的に残り、C類の可能性有り。512は逆転蓋でかえりがつき、天井部はヘラ切り離し未調整。511、513は天井部につまみがつく。511は有蓋高杯の蓋。514～517は杯身。515、517は底部回転ヘラケズリ、516は底部不定方向ヘラケズリ。514は逆転身。518は長頸壺の底部。519～529は高杯。519、520は有蓋高杯の杯部。521は長脚で三方透かしが入る。底部にヘラ描き連続斜行文施文。522～529は高杯脚部。522は長方形の透かしが三段四方に入り脚裾部に二条の

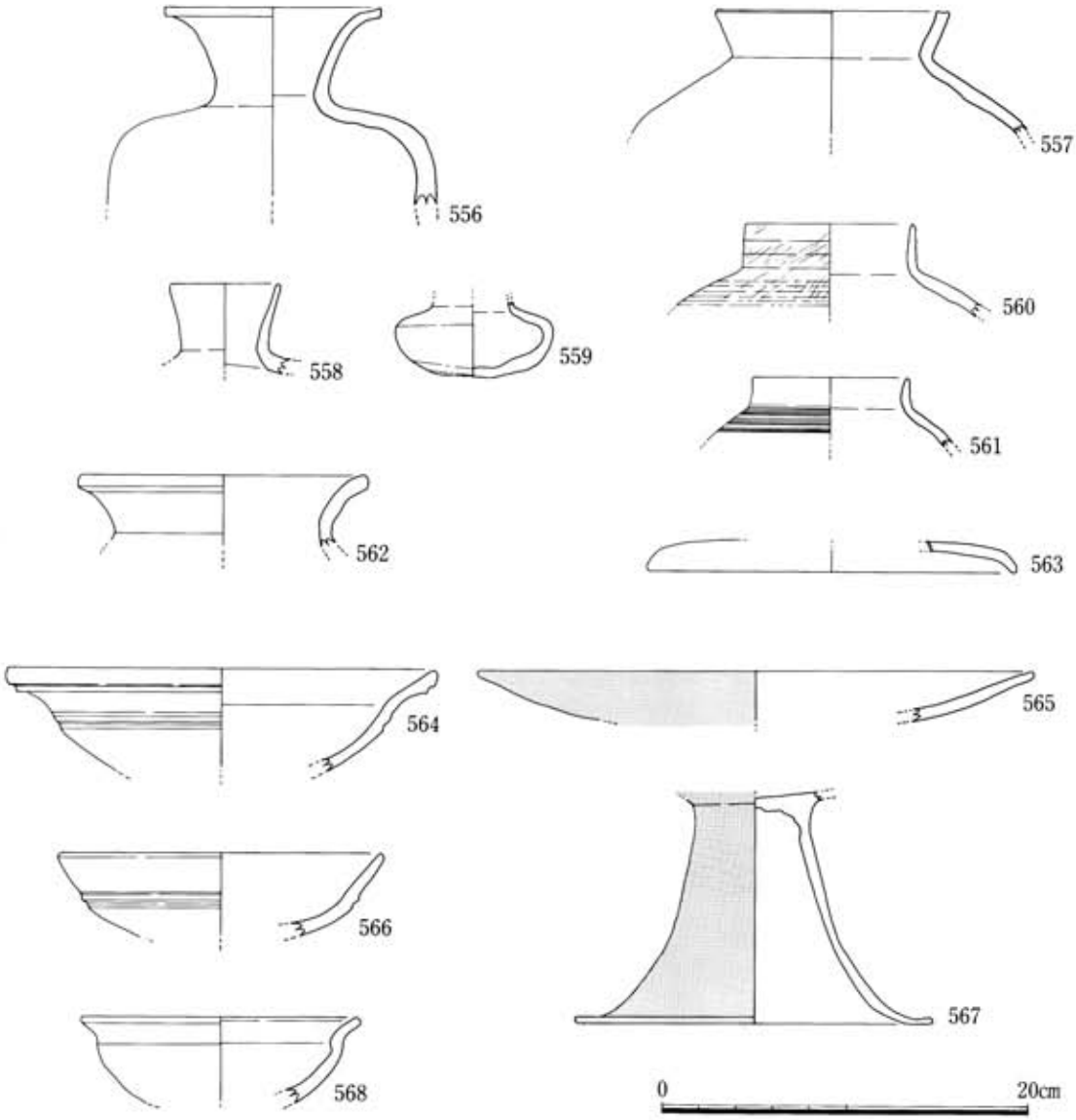


Fig.103　ST015古墳出土土器（1/4）

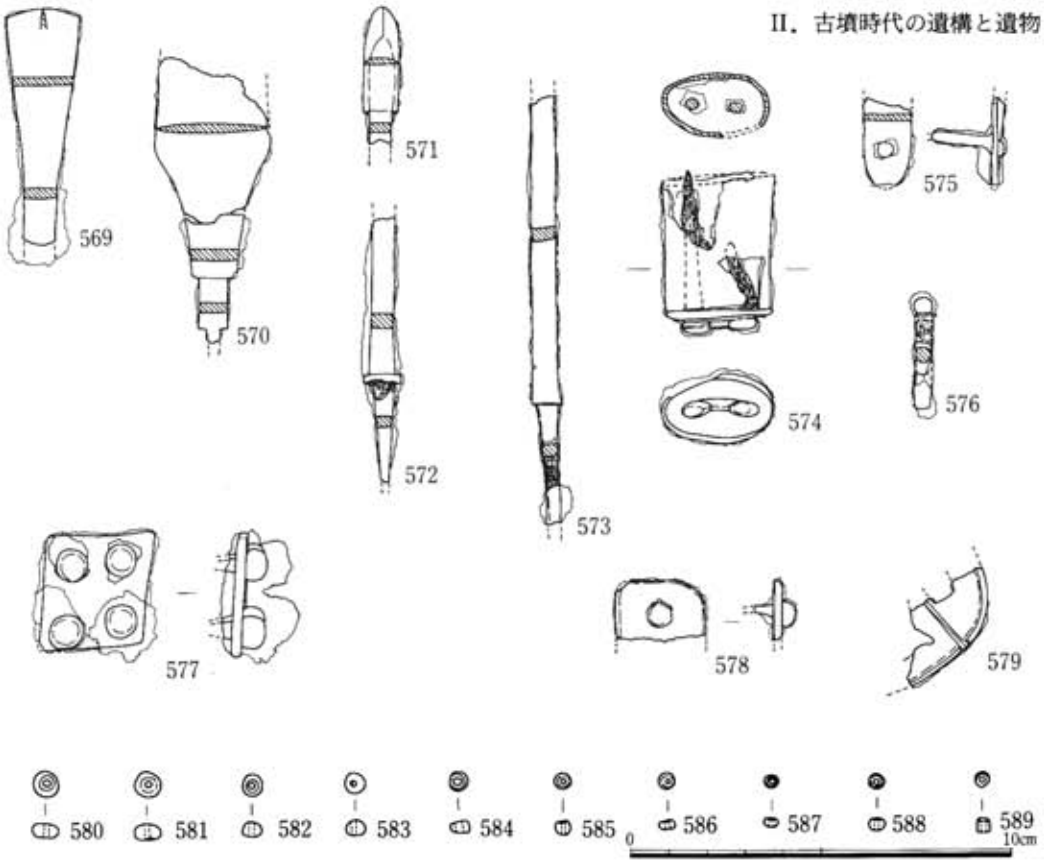


Fig.104　ＳＴ015古墳出土鉄器・装身具（１/２）

突帯を施す。底径21.0cmと大形である。523は長方形の透かしが二段三方に入りカキ目調整を施す。524と526は形態が類似する。526は外面黒色。530、531は鼈の口縁部。532は壺の蓋。533～537、539～545、550、552～555は甕。538、551、557、560、561、562は壺。甕、壺とも口縁部が多くその区別がつかないものがある。口縁部形態にはいくつかのタイプがあり、535と542、536と540、539と541がそれぞれ似る。534、544、545は広口甕で外面にヘラ描き連続斜行文、櫛描波状文を施す。554は胴部形態、調整が他の甕とは異なる。肩がはり肩部２ケ所につまみがつく。頸部は直立し口縁部は外反する。頸部には櫛描波状文を三段に施文する。胴部内外面はタタキ痕が残らずナデ消す。色調黄灰色。546は長頸壺、547～549は鼈。548、549は基部から口縁部にかけてラッパ状に開く。558は平瓶、559は短頸壺。

土師器

563は蓋。天井部は平坦でナデ調整を施す。564～567は高杯。564は杯体部は内湾し口縁部にかけて外反する。565は杯部は浅く大きく広がる。566は杯部中位に一条の突帯がはしる。567は外面丹塗り。

568は縄文土器。浅鉢、口縁部で屈曲する。盛土内出土。

鉄　器

鉄鏃(569～573)569は斧箭式、鉾先は丸みをもち無篦被である。570は圭頭式、571は小形柳葉式で片丸造。572、573は頸部。

鞘尻金具(574)釘二本を打ち込み木質部が残存する。全長4.0cm、幅2.8cm。

留金具(577、578)577は正方形で鋲を4本有す。長さ3.0cm、幅2.8cm。578は長方形で半分欠損する。577、578は鋲頭部は半球状。576は弓付属金具、579は不明鉄器、透かし孔を有す。

装身具

すべてガラス玉、589は管玉ふうである。580～583、589は深緑色、584、586は青色、585、588は薄緑色。

Tab.15　ST015古墳出土土器一覧表

（　）は推定

Fig.図番号 (PL番号)	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
100-506 (PL.61)	ST015 墳丘表土	杯蓋 (須恵器)	口径 (12.6) 器高 4.6	体部と口縁部の境に沈線を有す。天井部回転ヘラケズリ。天井部にヘラ記号有り。	灰　色	普　通	86-908 901299
-507	ST015 墳丘	杯蓋 (須恵器)	口径 (14.0) 器高 3.0	天井部回転ヘラケズリ。口唇部内面に沈線あり。天井部内面当て道具痕あり。	灰　色	普　通	86-910
-508	ST015 墳丘表土	杯蓋 (須恵器)	口径 (14.0) 器高 3.4	天井部は丁寧な回転ヘラケズリ。	灰黒色	やや良	86-911
-509	ST015 墳丘盛土内	杯蓋 (須恵器)	口径 (12.0) 器高 3.7	天井部はヘラ切り離しのち回転ヘラケズリ。	灰　色	普　通	86-912
-510	ST015 盛土内 羨道西側	杯蓋 (須恵器)	口径 12.4 器高 3.6	天井部はヘラ切り離しのち回転ヘラケズリ。	黄灰色	普　通	86-909
-511	ST015 墳丘盛土内	蓋 (須恵器)	口径 14.8 器高 3.2	宝珠つまみ付き。口縁端部は下方にのびる。	灰　色	普　通	86-907
-512	ST015 墳丘表土	杯蓋 (須恵器)	口径 (8.0) 器高 2.6	天井部ヘラ切り離し未調整。かえりは短く下方にのびる。	灰　色	普　通	86-906
-513	ST015 墳丘盛土	蓋 (須恵器)	——	つまみ付き。	灰黒色	普　通	86-914
-514	ST015 墳丘盛土内	杯身 (須恵器)	口径 (9.8) 器高 (3.2)	口縁部約1/5残存。口縁部は直立気味で体部で屈曲する。	灰　色	普　通	86-913
-515 (〃)	ST015 墳丘盛土内	杯身 (須恵器)	口径 (12.6) 器高 3.6 たちあがり高0.8	たちあがりは直立気味。底部約2/3回転ヘラケズリ。	灰　色	普　通	86-902 901297
-516 (〃)	ST015 墳丘表土	杯身 (須恵器)	口径 12.2 器高 3.2 たちあがり高0.8	底部不定方向ヘラケズリ。	灰黒色	普　通	86-904 901298
-517	ST015 墳丘盛土内	杯身 (須恵器)	口径 11.4 器高 4.0 たちあがり高1.2	底部回転ヘラケズリ。	灰　色	やや良	86-903

（ ）は推定

Fig-図番号（PL番号）	出土地点	器種	法量cm	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
100-518	ST015 C区周溝	壺（須恵器）	底径（8.4）	長頸壺の底部。高台付き。	灰色	不良	86-915 901046
-519	ST015 D区墳裾	有蓋高杯（須恵器）	口径 14.4 たちあがり高1.3	杯底部カキ目調整。脚部透かしが入る。	灰白色	普通	86-928
-520 （PL.61）	ST015 盛土内 羨道西側	有蓋高杯（須恵器）	口径 10.4 たちあがり高1.0	たちあがりは強く内傾し、杯底部にカキ目調整を施す。	灰白色	普通	86-924 901300
-521 （〃）	ST015 墳丘D区 盛土内	高杯（須恵器）	口径 11.2	脚部三方透かし入りで、杯底部にヘラ描きの連続斜行文施文。	黄灰色	普通	86-939 901304
-522 （〃）	ST015 墳丘D区 盛土内	高杯（須恵器）	底径（21.0）	脚部三段四方透かし。脚部中位に一条の沈線。裾部に二条の突帯を施す。	黄灰色	不良	86-930 901301
-523	ST015 墳丘表土	高杯（須恵器）	底径（13.0）	脚部二段三方透かし。脚部中位に二条の沈線。カキ目調整を施す。	灰色	普通	86-929 901048
-524	ST015 墳丘表土	高杯（須恵器）	底径 12.0	脚裾部は、外反しながら広がり、裾端部は丸くおさめる。	灰色	やや良	86-4738 900595
-525	ST015 D区墳裾	高杯（須恵器）	底径（13.4）	脚裾部はゆるやかに広がる。	灰色	普通	86-917
-526	ST015 墳丘A区盛土	高杯（須恵器）	底径 11.0	脚裾部は外反しながら広がる。外面黒色の顔料塗布か。	黒色	普通	85-3653 900291
-527	ST015 墳丘表土	高杯（須恵器）	底径（9.0）	脚裾部は外反し広がり、端部は面とりされる。	灰黒色	やや良	86-921 901047
-528	ST015 墳丘表土	高杯（須恵器）	底径（5.2）	脚裾部は外上方にのびる。	灰白色	普通	86-919
-529	ST015 D区墳裾	高杯（須恵器）	底径（8.3）	脚裾端部は浅く窪む。	灰色	普通	86-918
-530	ST015 墳丘D区 盛土内	鉢（須恵器）	口径（12.2）	口縁部でゆるやかに屈曲する。外面櫛描波状文を施す。	灰褐色	やや良	86-927
-531	ST015 盛土内	鉢（須恵器）	口径（8.2）	口縁端部は直立し、外面に二条の沈線を施す。	灰黒色	普通	86-4740
-532	ST015 墳丘D区 盛土内	蓋（須恵器）	——	体部約1/5残存。天井部回転ヘラケズリ。	明灰色	普通	86-923
101-533	ST015 B区周溝	甕（須恵器）	——	口縁部は外側に肥厚し、端部外面に二条の沈線を施す。	灰白色	不良	86-940
-534	ST015 盛土内 羨道西側	甕（須恵器）	——	口縁部外面櫛描波状文施文。	灰色	やや良	86-968

（ ）は推定

Fig-図番号 (PL番号)	出土地点	器種	法量cm	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
101-535	ST015 B区周溝埋土	甕 (須恵器)	——	口縁端部は断面三角形状におさめる。	灰色	普通	86-941
-536	ST015 B区周溝埋土	甕 (須恵器)	——	口縁端部は外上方に屈曲する。	灰色	普通	86-944
-537	ST015 墳丘D区表土	甕 (須恵器)	——	口頸部は外反する。口縁端部は沈線を施す。	灰色	良好	86-945
-538	ST015 墳丘表土(南)	壺 (須恵器)	——	口頸部は外反し、口縁端部外面に一条の沈線を施す。	黒色	普通	86-970
-539	ST015 渓道西側	甕 (須恵器)	——	口縁端部を断面方形におさめる。	黒色	普通	86-946
-540	ST015 D区墳裾	甕 (須恵器)	——	口縁部で外上方に屈曲する。外面黒色、内面黄灰色。	黒色	普通	86-943
-541	ST015 C区周溝	甕 (須恵器)	——	口縁端部を断面台形状におさめる。砂粒を多く含む。	黒色	普通	86-947
-542	ST015 墳丘表土	甕 (須恵器)	——	口縁端部を断面三角形におさめる。	明灰色	普通	86-4742
-543	ST015 D区墳裾	甕 (須恵器)	——	口縁端部を断面方形におさめる。	黒色	普通	86-969
-544	ST015 墳丘B区墳裾	甕 (須恵器)	口径 (16.0)	頸部外面に連続ヘラ描斜行文、その上下に沈線を施す。	灰黒色	やや良	86-967
-545	ST015 A区墳裾	甕 (須恵器)	口径 18.6	頸部外面に三段に櫛描波状文を施す。	灰褐色	普通	86-951
-546 (PL.61)	ST015 B区周溝埋土	長頸壺 (須恵器)	口径 6.0	頸部にカキ目調整のち中位に五条の沈線を施す。	明灰色	普通	86-936 901050
-547	ST015 B区周溝埋土	鉢 (須恵器)	——	頸部のみ残存。外面カキ目調整。	灰色	普通	86-926
-548 (〃)	ST015 墳丘D区表土	鉢 (須恵器)	口径 9.0	カキ目調整のち櫛描列点文を二段に施文。	灰色	やや良	86-938 900495
-549 (〃)	ST015	鉢 (須恵器)	口径 10.6	頸部下半にカキ目調整。中位に櫛描列点文を施文。	灰色	普通	86-937 901303
102-550	ST015 墳丘表土	甕 (須恵器)	口径 (20.6)	口縁端部を上方にはね上げる。胴部外面平行タタキ。内面同心円文タタキ。	灰色	普通	86-971
-551	ST015 C区周溝	壺 (須恵器)	口径 11.6	胴部外面格子目ふうタタキ。内面同心円文タタキ。口縁端部は外側に肥厚する。	灰白色	やや良	86-4743

（ ）は推定

FiR-図番号（PL番号）	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
102-552	ST015 C区周溝	甕（須恵器）	口径（23.0）	胴部外面平行タタキ。口縁端部は断面台形。	灰黒色	普　通	86-973
-553（PL.61）	ST015 B区周溝	甕（須恵器）	胴径　45.6	胴部外面格子目ふうタタキのち部分的にカキ目調整を施す。	灰　色	普　通	86-3726 901489 901490
-554（PL.62）	ST015 B区周溝	甕（須恵器）	口径（31.6）	胴部内外面ナデ消し。頸部三段に櫛描波状文を施文。肩部につまみを有す。	黄灰色	やや良	86-999
-555（PL.61）	ST015 C区周溝黒色埋土	甕（須恵器）	口径　23.0	胴部外面格子目ふうタタキのちカキ目調整。口縁端部外面に二条の沈線を有す。	灰　色	やや良	86-901 901591
103-556	ST015 C区周溝埋土	提瓶（須恵器）	口径（11.6）	口縁部から胴部にかけて約1/3残存。胴部カキ目調整。	灰黒色	普　通	86-975
-557	ST015 墳丘表土	壺（須恵器）	口径（12.0）	口縁部はくの字形に屈曲する。	黄灰色	普　通	86-942
-558	ST015 墳丘D区盛土内	平瓶（須恵器）	口径（ 5.7）	胴部欠損。	灰白色	普　通	86-950
-559	ST015 B区周溝	短頸壺（須恵器）	胴径　8.6	口頸部を欠損する。肩がはり、底部は丸みをもつ。	灰　色	普　通	86-948 900482
-560	ST015 墳丘表土	壺（須恵器）	口径（ 9.0）	口縁部は直立する。頸部にハケ目調整。	橙褐色	普　通	86-4739
-561	ST015 B区周溝	壺（須恵器）	口径（ 8.4）	口縁部は直立気味。肩部カキ目調整。	明灰色	普　通	86-949
-562	ST015 盛土内	壺（須恵器）	口径（15.0）	口頸部は外反し、端部を丸くおさめる。	乳灰色	不　良	86-4741
-563	ST015 墳丘表土	蓋（土師器）	口径（20.0）	天井部は平坦。ナデ調整。	明褐色	普　通	86-933
-564（PL.62）	ST015 墳丘盛土	高杯（土師器）	口径（22.8）	杯体部と口縁部に一条の沈線が入る。	赤橙色	普　通	86-4732 901051
-565	ST015 墳裾	高杯（土師器）	口径（30.0）	杯部は浅く、大きく広がる。外面丹塗り。	赤褐色	普　通	86-934
-566	ST015 墳丘表土	高杯（土師器）	口径（17.2）	杯体部に一条の突帯が入る。	明褐色	普　通	86-932
-567（〃）	ST015 墳裾	高杯（土師器）	底径　19.0	杯裾部は、ほぼ水平に広がる。外面丹塗り。	灰白色	普　通	86-935 901302
-568	ST015 盛土内	浅鉢（縄文土器）	口径　14.6	口縁部で屈曲する。	褐　色	普　通	86-931 901049

16. ＳＴ016古墳

(1) 概　要

調査区の北西に位置し、南方15m、標高7m下にはＳＴ002古墳がある。墳丘、石室上半部は削平をうけ、石室構築に先行して奥壁後方に地山整形を行う。内部主体は南方に開口する単室両袖型の横穴式石室である。出土遺物は羨道入口右側の墳裾などから須恵器が、玄室内から鉄器、装身具が出土している。築造時期は小田編年IV期で追葬はVI期まで。

(2) 墳丘・周溝

墳丘盛土は削平をうけ、周溝も掘削しない。従って墳径もわからないが大方9～10m と推定する。石室掘り方は玄門側がすぼまる楕円形で、墳丘東側では２ｍちかく掘り込む。石室構築に先行して平坦な墳丘基底面を作出するため奥壁側の地山を大きく掘削する。

(3) 内部主体

単室両袖型の横穴式石室である。主軸をＮ３°Ｗにとり南方に開口する。墳丘、石室上半部は削平を受ける。現状では玄門楣石が架構していたが危険のためとりはずした。玄門から南へ５ｍで急斜面になる。

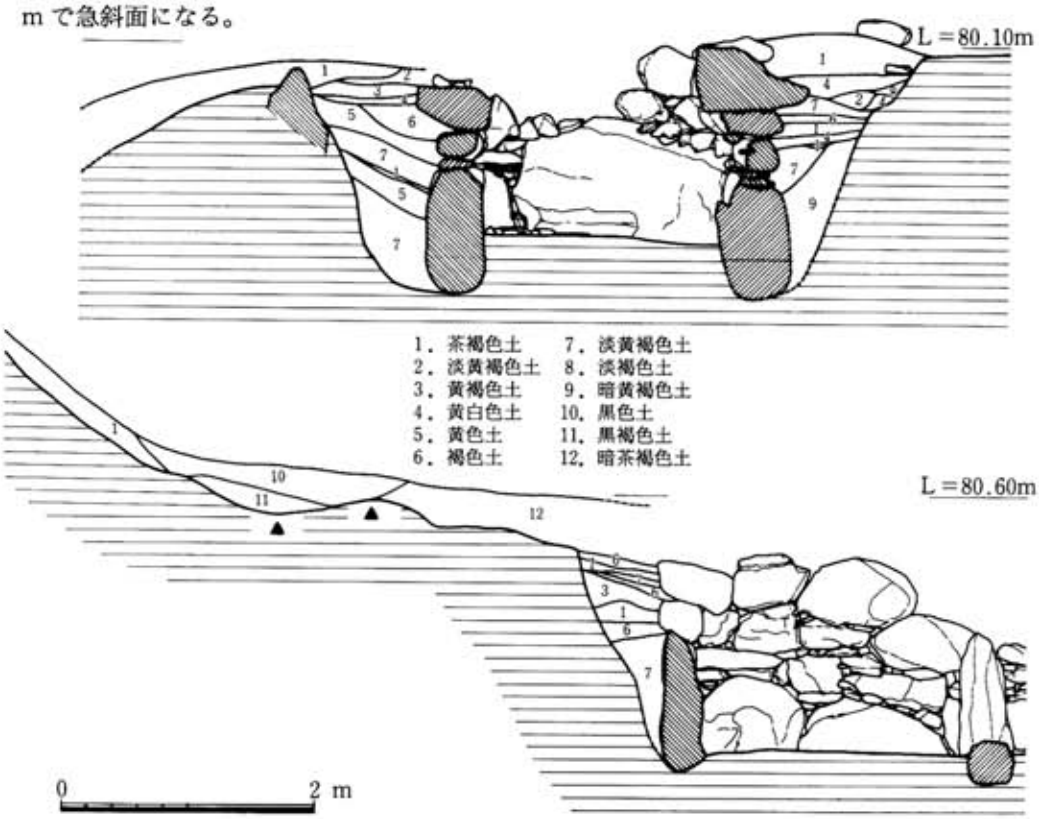


Fig.105　ＳＴ016古墳墳丘土層図（1/60）

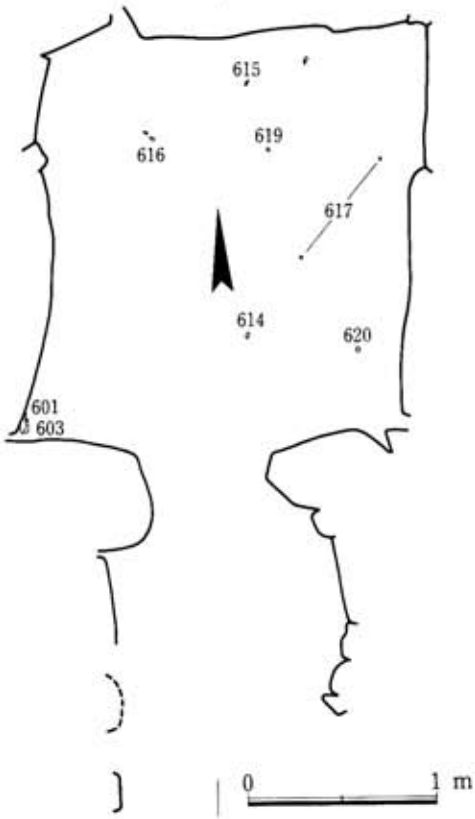


Fig.106　S T016古墳石室内遺物出土状況(1/40)

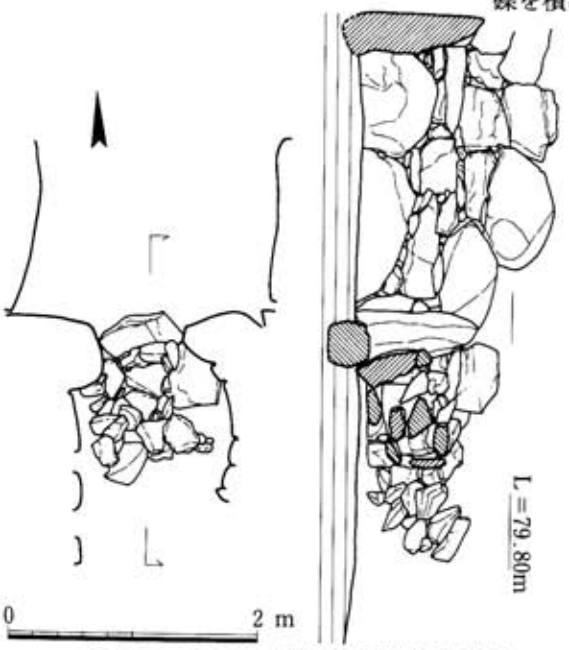


Fig.107　S T016古墳石室閉塞状況(1/60)

石室平面形態は玄室が長方形で、同じく長方形の前庭側壁を連接する。規模は石室全長3.5m、玄室中央長2.1m、中央幅1.9m を測る。

奥壁は腰石に1.7×0.9m の横長石材と左側壁よりに0.4×0.5m 程の小形の石材２石を配する。右側壁は腰石に0.8×0.6m、1.1×0.5m 程の石材２石を横位に配する。その上方に長さ0.5～0.8m 程の横長石材を２～３段横積みする。左側壁は腰石に1.6×0.5m と奥壁よりに径0.4m 程の石材を配し腰石上方は右側壁と同大の横長石材を積み上げる。左右側壁の腰石は垂直に立て、その上方の石積みから持ち送る。

玄門部は右袖石に１×0.7m、左袖石に1.5×0.8m 程と高さの違う柱状石材を縦位に立て、床面には框石を配する。玄門幅は65cmを測る。

この玄門框石を根石として閉塞施設が遺存する。これは玄門に蓋をするように0.5×0.5m 程の扁平石をたてかけたものでその背後に径20～30cmの礫を積み上げる。遺存高は80cmを測る。

天井石を架構するような羨道は連接せず、径30～50cmの石材を乱雑に積み上げた前庭側壁をつくる。高さ0.9m を測る。

遺物は玄室内から鉄器、装身具類が出土した。

(4)　出土遺物

須恵器

杯蓋はＣ類(590)杯身はＣ類(593、594)Ｅ類(595、596)がある。590～592は蓋。590は天井部回転ヘラケズリで一部ヘラ切り痕が残る。591、592は宝珠つまみ付きで口縁端部を下方にのばす。591、592の口径16.0cm。これらはＥ類並行期のものであ

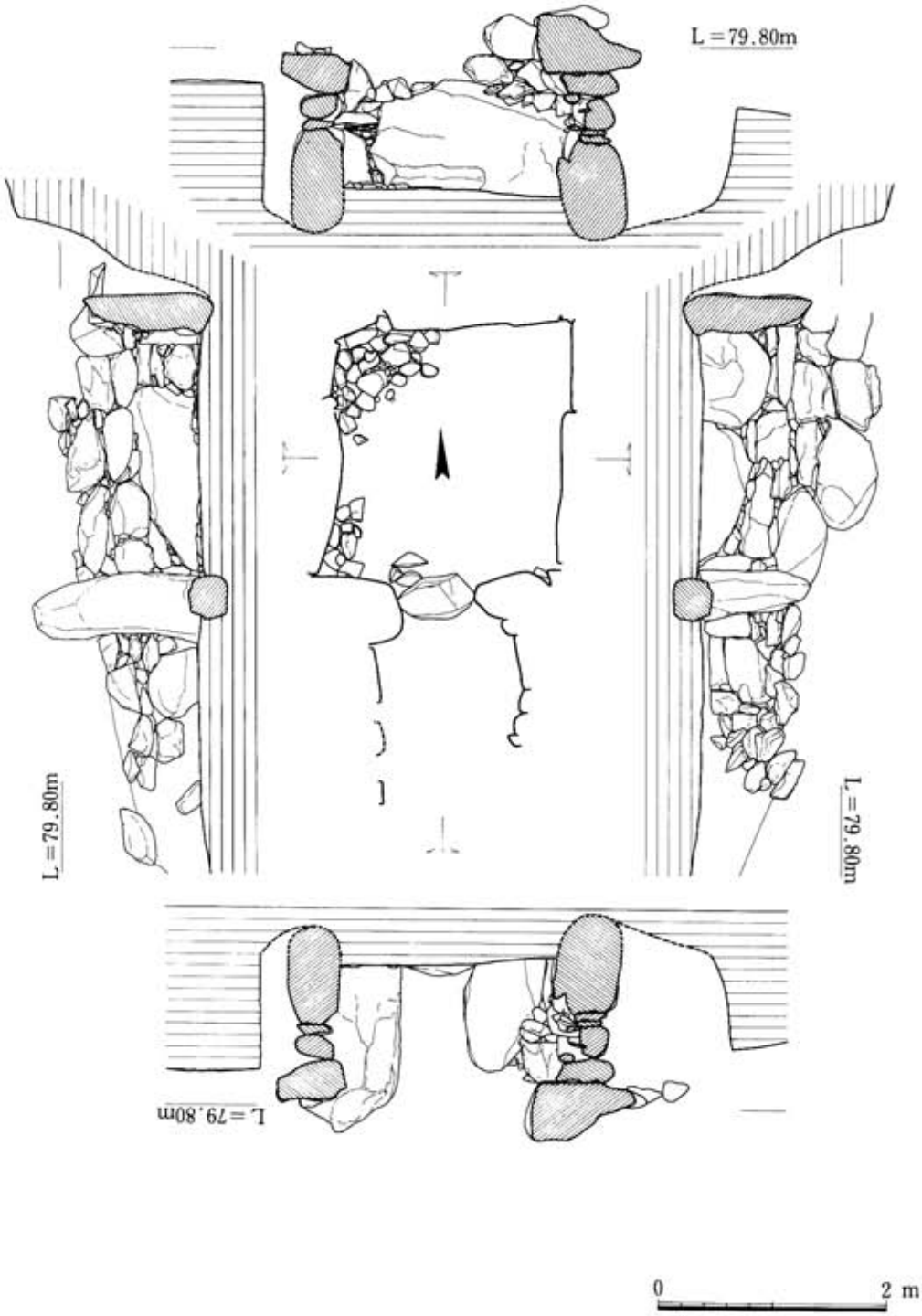


Fig.108　S T016古墳石室（1/60）

ろう。593～596は杯身、593は底部調整不明瞭、594は底部雑な回転ヘラケズリ。595は高台付き、高台部は直立気味。596は杯底部、高台付き。597は平瓶、598は短頸壺、底部から胴部にかけて約1/6残存。599は平瓶か提瓶の口頸部、中位に三条の沈線を有す。600は甕の口縁部、頸部外面にカキ目状の波状文有り。

鉄　器

鉄鏃(601～606)601は両丸造椿葉式、茎部先端を欠損する。茎部に木質残存。602は両丸造椿葉式、鏃身基部から頸部にかけて欠損する。603は斧箭式、茎部先端を欠損する。茎部に木質残存。604、605は長三角形式、どちらも逆刺なし。606は小形柳葉式、片丸造。

刀子(607)両関で身、茎の先端を欠損する。身幅1.5cm。

装身具

すべて玄室出土である。609～610は土玉、611～613はガラス玉。614～619は管玉。614～616は碧玉製、617～619は石質不明。617は軟質、618、619は硬質。620は耳環。断面径２㎜と細い。色調は漆黒色で、成分分析結果は銀。

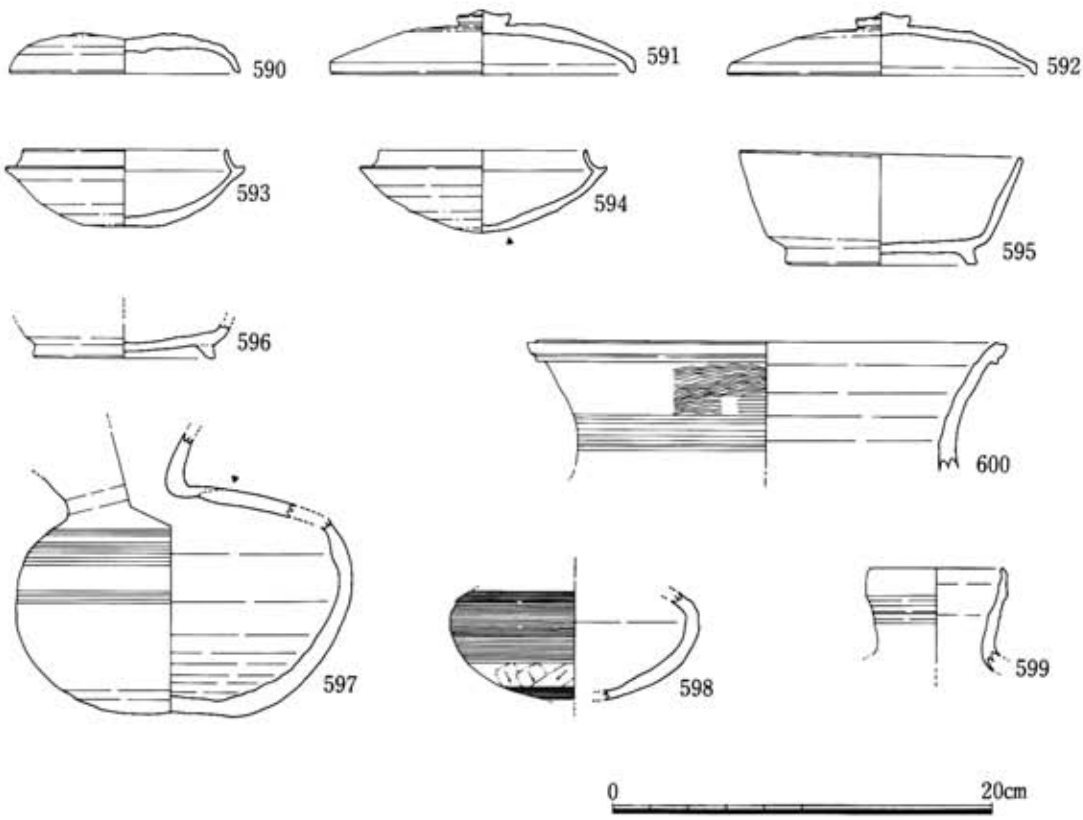


Fig.109　ＳＴ016古墳出土須恵器（１／４）

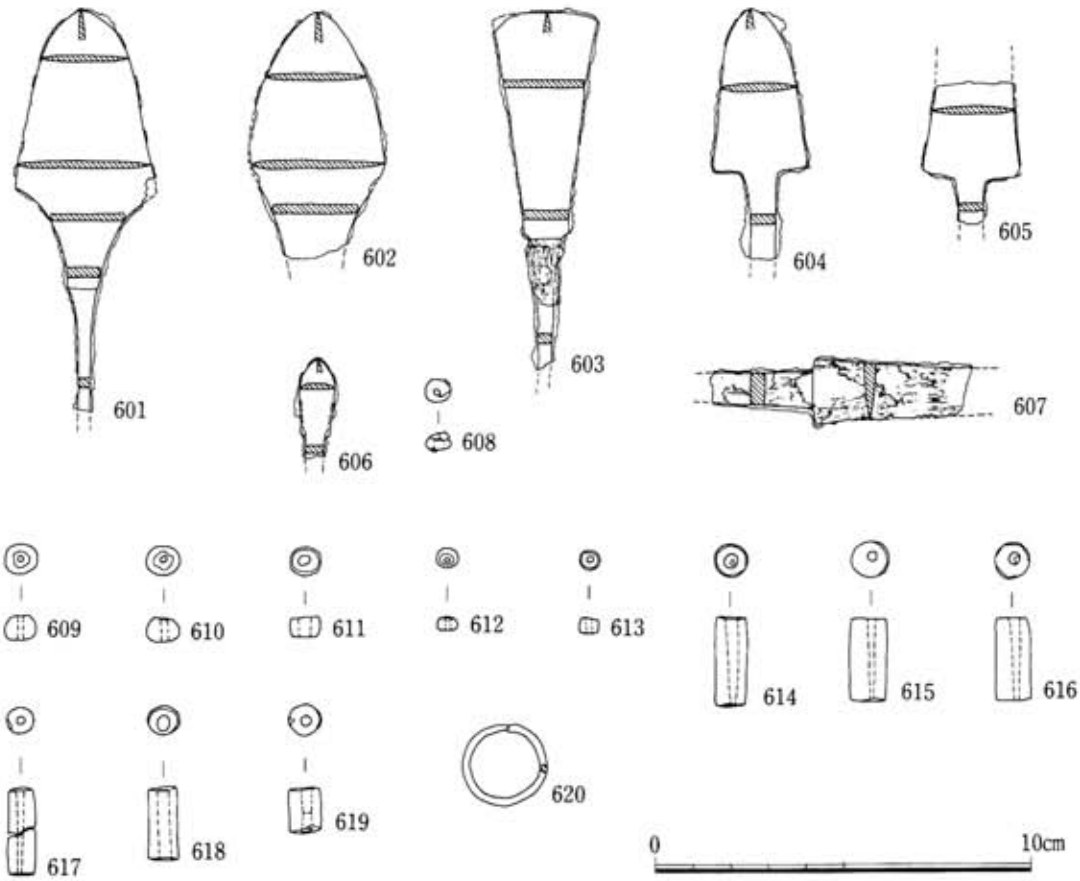


Fig.110　ＳＴ016古墳出土鉄器・装身具（１/２）

Tab.16　ＳＴ016古墳出土土器一覧表

（　）は推定

Fig-図番号 (PL番号)	出土地点	器種	法量cm	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
109-590	ＳＴ016 羨道入口左側墳裾付近	杯蓋 (須恵器)	口径 12.0 器高 1.8	天井部回転ヘラケズリ。一部ヘラ切り離し痕が残る。	灰色	普通	86-1108
-591 (PL.63)	ＳＴ016 南東部表土	杯蓋 (須恵器)	口径 16.0 器高 3.4	宝珠つまみ付き。口縁端部は下方にのびる。かえりなし。	灰色	普通	86-1102 900511
-592 (〃)	ＳＴ016 南東部表土	杯蓋 (須恵器)	口径 16.0 器高 3.2	宝珠つまみ付き。口縁端部は下方にのびる。かえりなし。	灰色	普通	86-1103 900512
-593 (〃)	ＳＴ016 羨道入口右側の墳裾付近	杯身 (須恵器)	口径 10.8 器高 4.0 たちあがり高1.0	底部調整不明瞭。	灰黒色	不良	86-1105 900513
-594 (〃)	ＳＴ016 羨道入口右側の墳裾付近	杯身 (須恵器)	口径 10.6 器高 4.4 たちあがり高1.1	底部は雑な回転ヘラケズリ。底部にヘラ記号有り。	灰黒色	普通	86-1106 900514
-595 (〃)	ＳＴ016 南東部表土	杯身 (須恵器)	口径 14.4 器高 6.0	高台付き杯身。高台部は直立気味なハの字形。	灰色	普通	86-1101 900510
-596	ＳＴ016 南東部表土	杯身 (須恵器)	底径 (4.9)	高台付き杯身。高台部は直立気味なハの字形。	灰白色	普通	86-1104
-597	ＳＴ016 南東部表土	平瓶 (須恵器)	胴径 (17.8)	胴上半部はカキ目調整を施す。	灰黒色	不良	86-1110
-598	ＳＴ016 羨道入口右側の墳裾付近	短頸壺 (須恵器)	胴径 13.2	胴上半部はカキ目調整。不定方向ヘラケズリ。	灰白色	普通	86-1111
-599	ＳＴ016 羨道入口右側の墳裾付近	平瓶 (須恵器)	口径 (6.8)	平瓶の口頸部。中位に三条の沈線あり。	灰白色	普通	86-1109
-600	ＳＴ016 羨道入口右側の墳裾付近	甕 (須恵器)	口径 (24.0)	頸部にカキ目状の波状文あり。	灰黒色	普通	86-1107

17．ＳＴ017古墳

(1) 概　要

調査区の北端で調査区内では最も高位置で標高82m に築造される。墳丘盛土はやや残り墳丘北側は調査区外になる。墳丘列石をめぐらし、墳丘南西部からおおくの土器が出土した。内部主体は南東に開口する単室両袖型の横穴式石室で玄室平面形態は正方形である。玄室内から鉄器、装身具が出土した。出土遺物から築造時期は小田編年III B新段階期で追葬はVI期までか。

(2) 墳　丘

現状では墳丘盛土は若干残り墳丘頂部は窪んでいた。墳丘盛土は墳丘基底面から約１ｍ遺存する。墳丘北側は調査区外になるため墳丘土層図は東西セクションのみである。周溝はとくに掘削せず墳丘基底面上に墳丘列石を配するが、これは直径８ｍの環状に大小の石材を雑然と巡らすものである。墳丘西側の盛土単位は比較的細かく褐色土を多用する。墳丘南西部の列石付近から多くの土器が出土している。

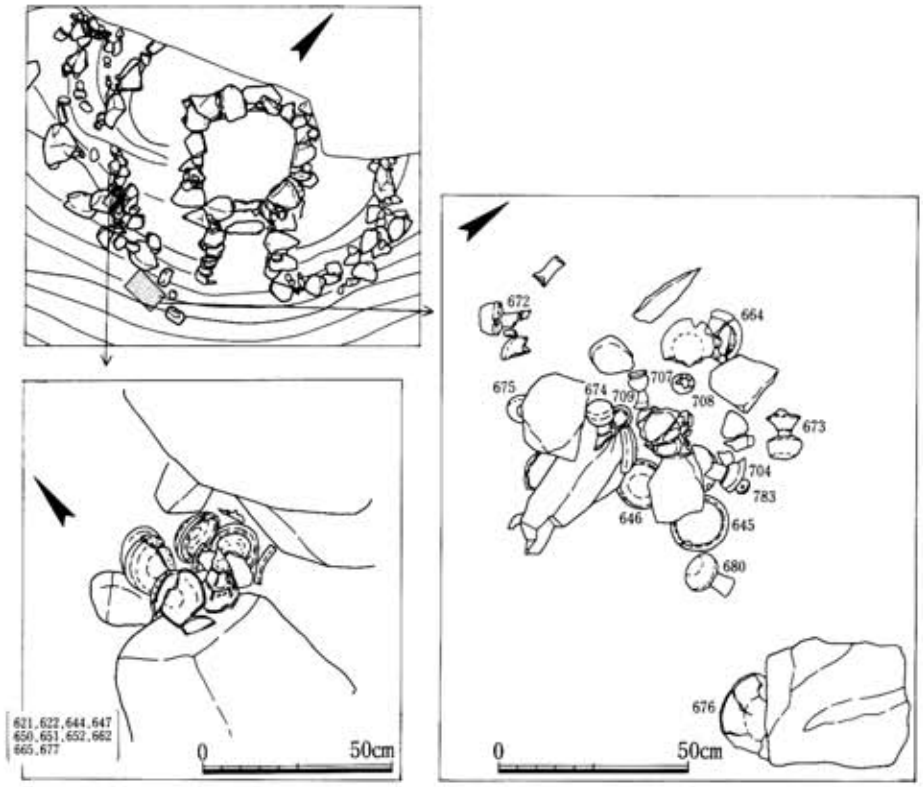


Fig.111　ＳＴ017古墳墳丘盛土内遺物出土状況（１/20）

(3) 内部主体

単室両袖型の横穴式石室である。主軸をN33°Wにとり南東の急斜面に向かって開口する。墳丘、石室上半部は削平をうける。墳丘には列石を配する。

石室平面形態は玄室が正方形で、平面長方形の前庭側壁を連接する。規模は石室全長4.4m、玄室中央長2.3m、中央幅2.5mを測る。

奥壁は腰石に1.2×1.0m程の壁面を整えた方形石材を2石配し、左側壁よりには径40cm程の石材を横積みする。左側壁は腰石に1.2×0.6m、1.0×0.5m程の横長石材2石を横位に配し、その上方は石材を乱雑に積む。右側壁は腰石に0.9×0.6m、1.1×0.8m程の石材を配し、その上方には長さ30～70cm程の横長石材を3～4段積み上げる。奥壁と側壁の隅角は腰石部で奥壁を挟み込むように配置されている。

玄門部は右袖石に0.7×0.5m、左袖石に1.1×0.5m程と高さの違う柱状石材を縦位に立てる。右袖石の上に一石のせる。床面には框石を配し、玄門幅は0.8mを測る。前庭側壁は右側壁に長さ1mの横長石材を横位に配しその上に1×0.7m程の石材をたてる。この石材の両側にはこぶりの石材を乱雑に積み上げる。左側壁には横長石材2石を積む。前庭側壁長1.7mを測る。

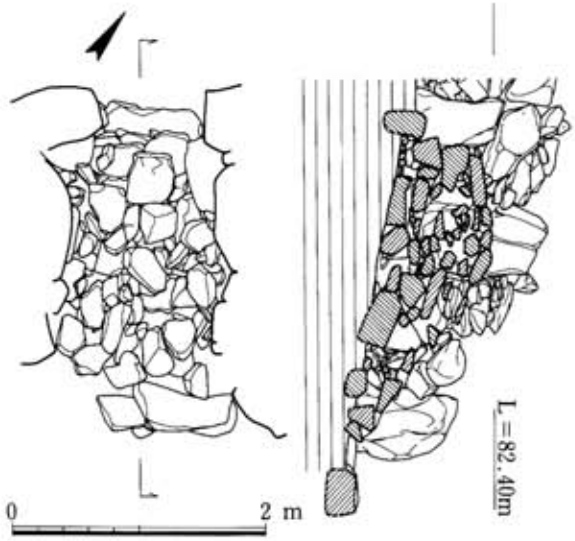


Fig.112　ST017古墳石室閉塞状況(1/60)

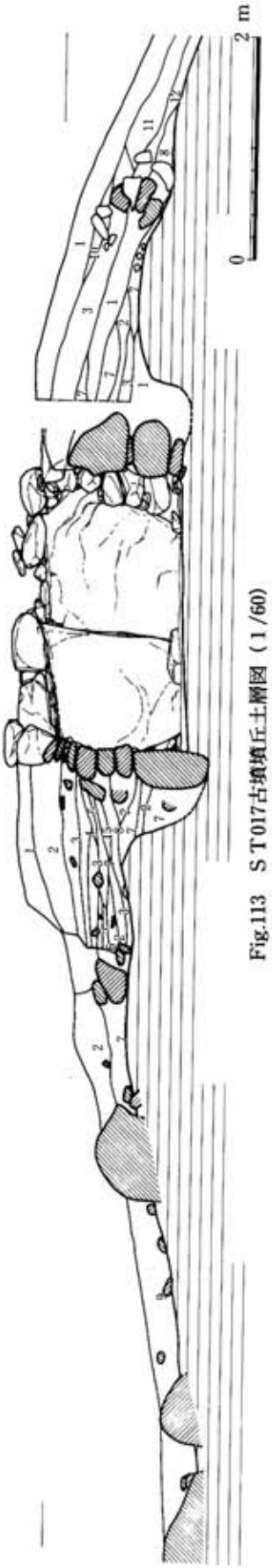


Fig.113　ST017古墳墳丘土層図(1/60)

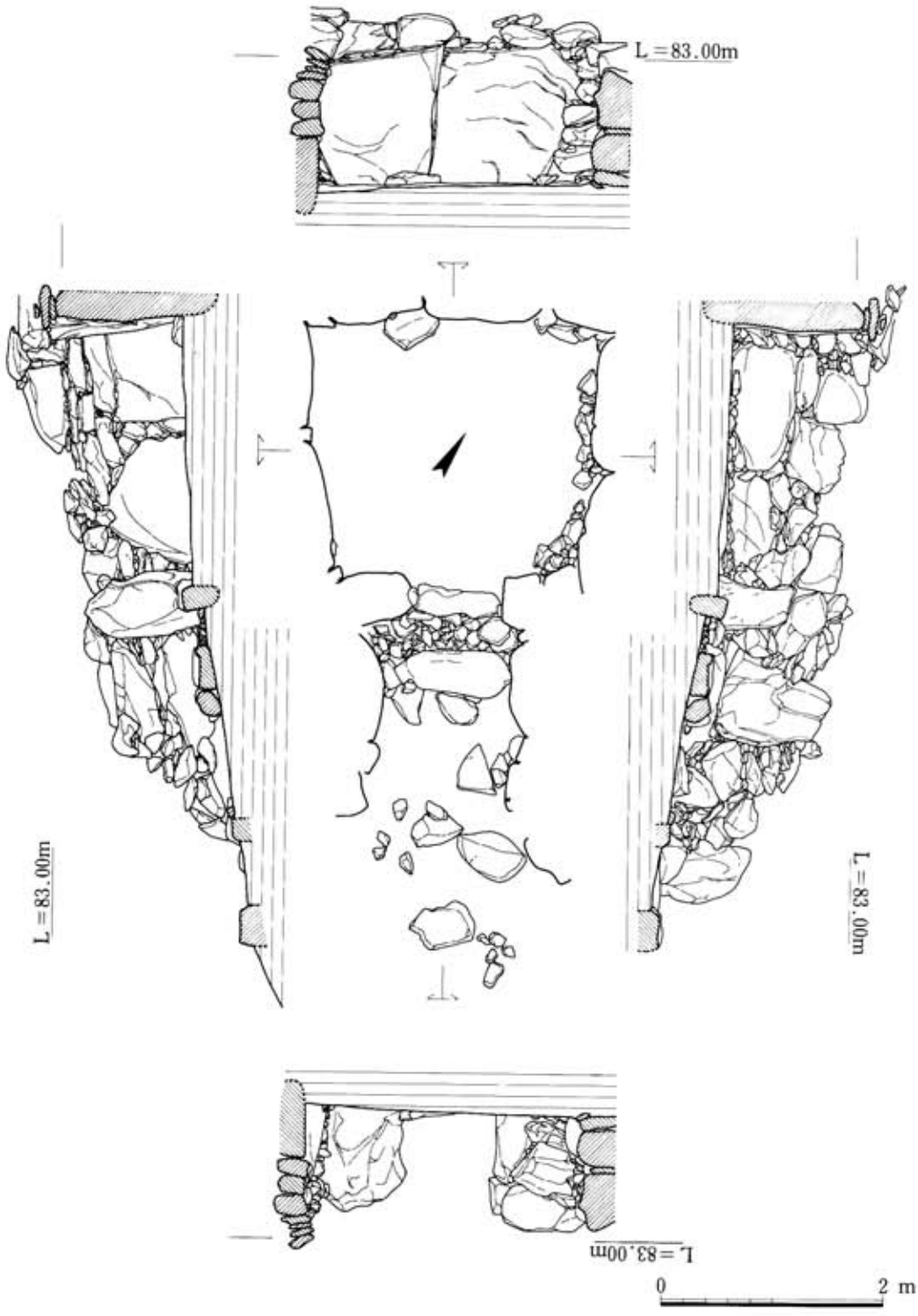


Fig.114　ＳＴ017古墳石室（１/60）

閉塞施設は玄門部にあり框石を根石として径30～50cm程の石材を積み上げる。遺存高は0.7m を測る。石室内からは土器はほとんど出土しておらず玄室内から鉄器、装身具が出土しているのみである。

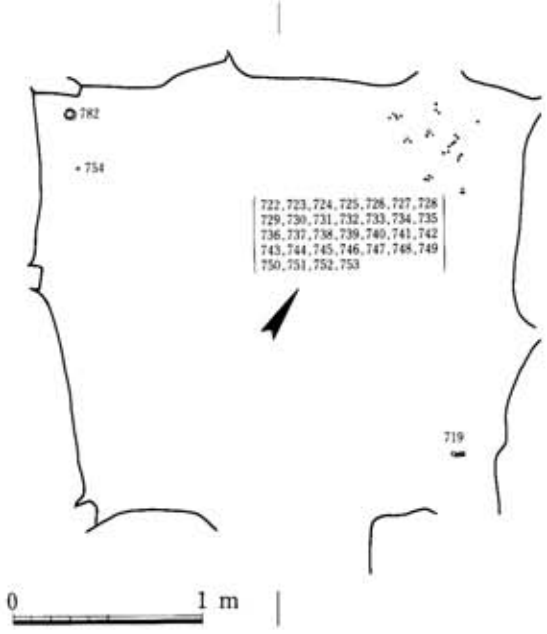


Fig.115　ＳＴ017古墳石室内遺物出土状況(1/40)

(4)　出土遺物

多くの須恵器を検出したが、墳丘２ケ所からの出土である。それは羨門から西側にまわる墳丘列石付近からの出土である。羨門左側の外側からは須恵器の杯蓋(625、626、627)蓋(632)杯身(642、643、645、646)高杯(664)鼓(672、673、674、675)壺(676)提瓶(680、681)椀(685)短頸壺(692)土師器の高杯(699、704)脚付壺(707、708、709)が出土しており、「墳丘Ｄ区羨道外側土器群」として取り上げた。ここから北西２ｍの墳丘列石外側下端から須恵器の杯蓋(621、622)杯身(644、647、650、651、652)蓋(662)高杯(665)長頸壺(677)が出土している。これらの杯蓋身はＢ類で築造時期を示す土器群である。ところが出土地点は明確にできないものの上述２地点付近の墳丘からも土器が出土しており、「墳丘Ｄ区盛土内南側一括」として取り上げた。これは杯蓋身はＣ類がある。

須恵器

杯蓋はＢ類(621～630)、Ｄ類(633～639)、杯身はＢ類(640～655)、Ｄ類(657～660)、Ｅ類(661)がある。杯蓋Ｂ類の口径約14cm、器高約４cm、杯身Ｂ類の口径11～13.5cm、器高3.5～4.5cm、たちあがり高約１cmである。杯蓋・身ともＢ類としてはやや大きめであるが天井部および底部は不定方向ヘラケズリが多い割合で入っていることなどからＢ類とした。杯蓋・身とも当て道具痕は見られない。

621～639は杯蓋である。ただ632は他器種の蓋と思われる。天井部ヘラ切り離し後不定方向ヘラケズリ。口唇部内面は斜方に面とりされる。621、622は体部と口縁部の境に沈線を有す。天井部不定方向ヘラケズリ。623、625、630は口唇部内面は斜方に面とりされる。623、624、625、626、627、628、630、631は天井部回転ヘラケズリ。629は不定方向ヘラケズリ。633～639は逆転蓋。内側に短いかえりがつき、天井部ヘラ切り離し。633～636はつまみなし。634、635は天井部から体部にかけて内湾し口縁端部とかえり高はほぼ同じである。杯身の可能性もある。637～639は乳頭状のつまみが付く。

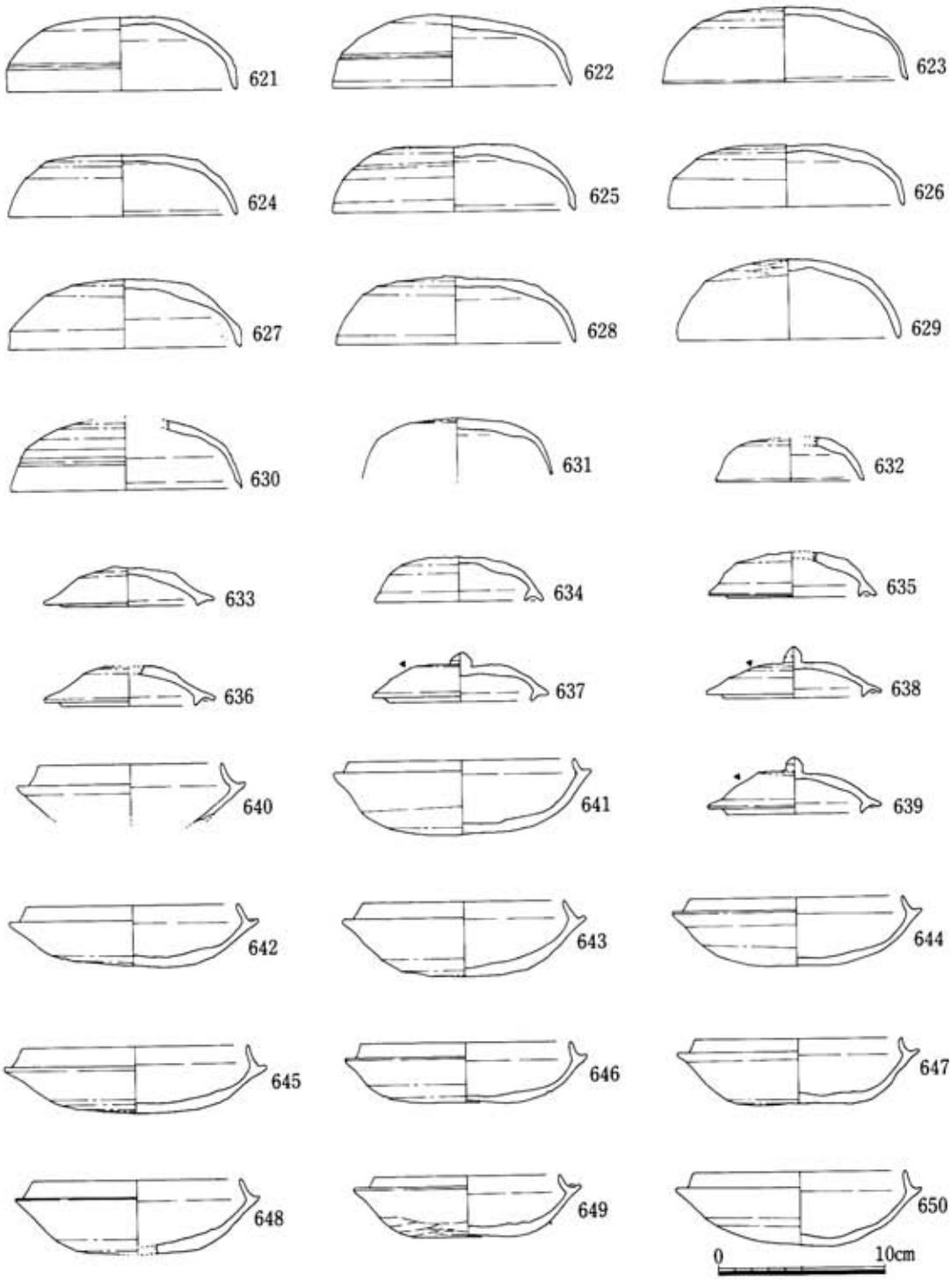


Fig.116　ＳＴ017古墳出土須恵器１（１/４）

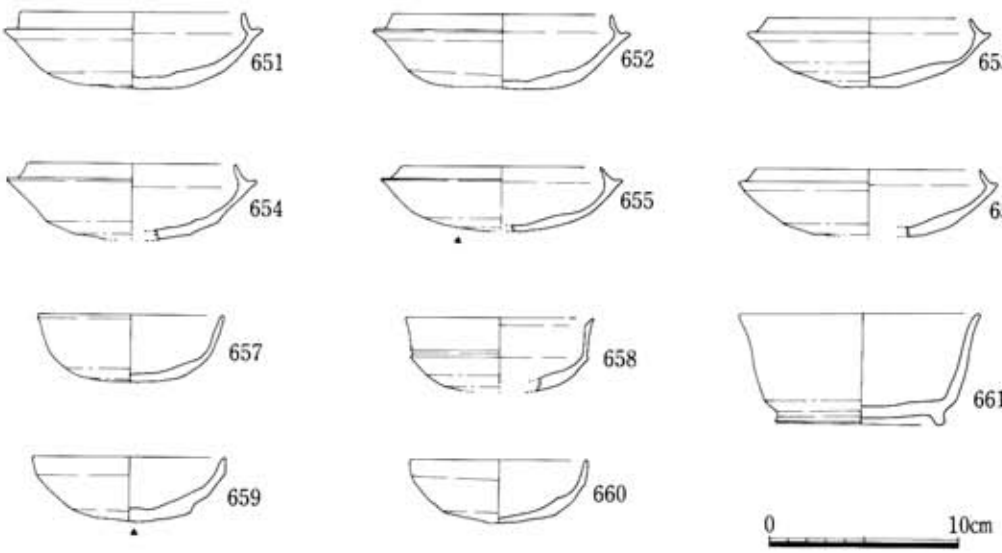


Fig.117　ＳＴ017古墳出土須恵器２（１/４）

640～661は杯身である。642、643、645、646、648、653、654、656は底部回転ヘラケズリ。641、644、649、650、651、652は底部不定方向ヘラケズリ。640、641は赤焼き。657、659、660は逆転身。これらは634、635とセットとなって蓋になるのかもしれない。いずれも体部は内湾気味にたちあがる。659、660は底部ヘラ切り離し未調整。657は赤焼き。658は体部に稜をもち、口唇部内面は斜方に面とりされる。高杯の杯部の可能性あり。661は高台付き杯身、墳裾出土であり本墳のなかでは最も新時期を示す土器である。

662、663は有蓋高杯の蓋。どちらも形態、調整が類似している。頂部が窪むつまみを有し天井部から体部にかけてカキ目調整のち櫛描列点文を施す。664～670は高杯。664は杯体部に深めの沈線を有す。665、666は有蓋高杯。長方形の透かしが二段三方に入る。668～670は高杯脚部。668は長方形の透かしが二段三方に入る。669、670は赤焼きの須恵器。669は脚部中位に二条の沈線を有す。671～675、678、679は甕。671は口頸基部幅が広く胴部最大径は中位にある。それに対して672、673は口頸基部幅が狭く、従って穿孔時の粘土塊が胴部内に残る。また口縁部で大きく屈曲する。678は頸部から胴部にかけて一部残存する。長頸壺の可能性あり。679は大形の甕で、同時期の甕と比べて形態も異なる。球状の胴部に大きく外方に広がる口頸部がつく。口縁下部に一条の沈線を有し、ゆるやかに屈曲する。胴肩部に櫛描列点文、頸部に櫛描波状文を施文。676、677は長頸壺。677は高台付きで肩部に櫛描列点文、頸部に二条の沈線を有す。

680～684は提瓶。680は胴部側面から前面にかけてカキ目調整を施す。681、682はミニチュア形の提瓶。胎土は精選される。683は胴部全面にカキ目調整を施す。684は算盤形の胴部にラッパ状に開く口頸部をつける。685～687、691は椀。685は赤焼きで底部不定方向ヘラケズリ。686は底部平坦でヘラ切り離し未調整。687は赤焼き、底部回転ヘラケズリ。691は底部回転ヘラケ

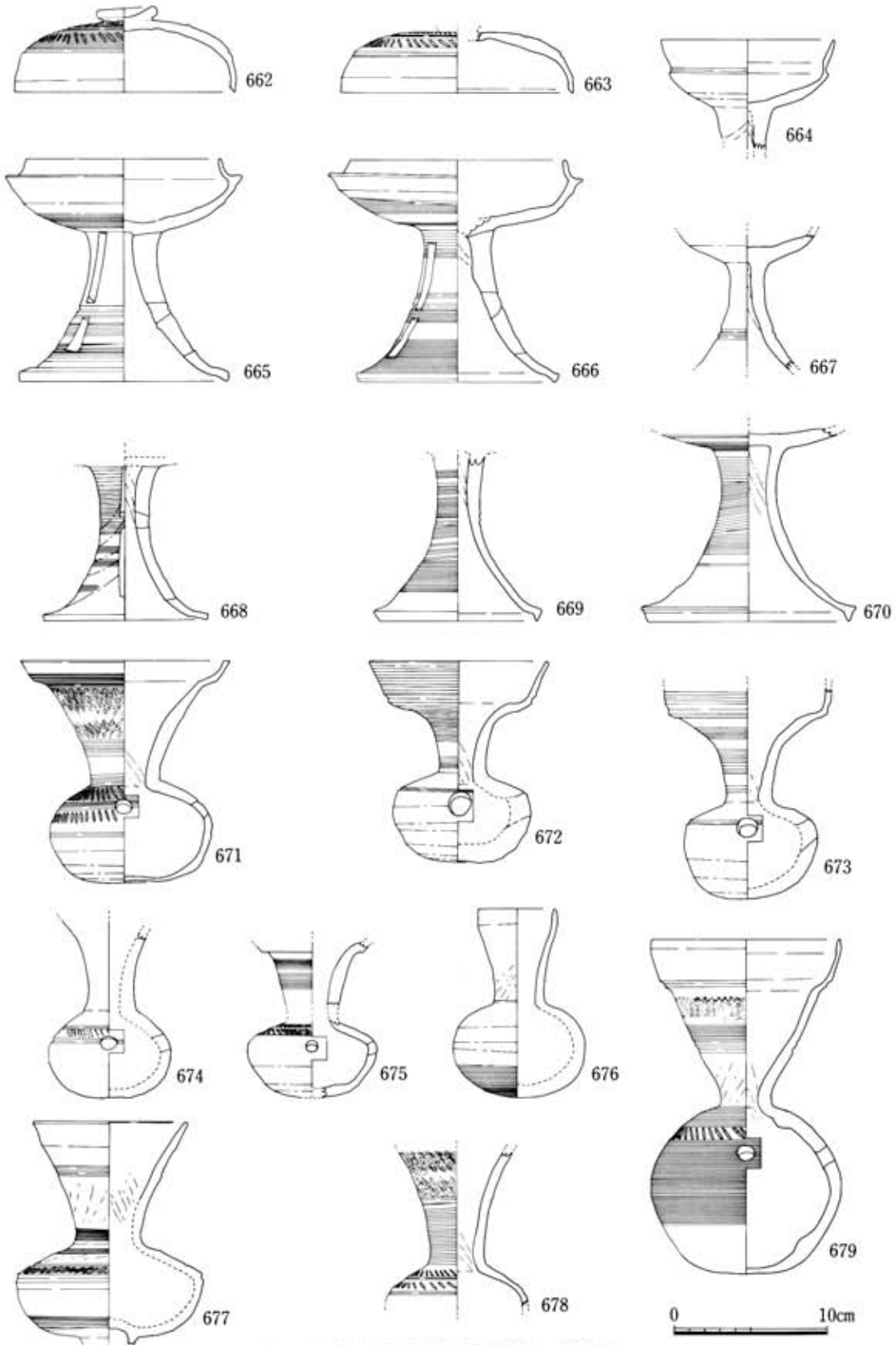


Fig.118　ＳＴ017古墳出土須恵器３（１/４）

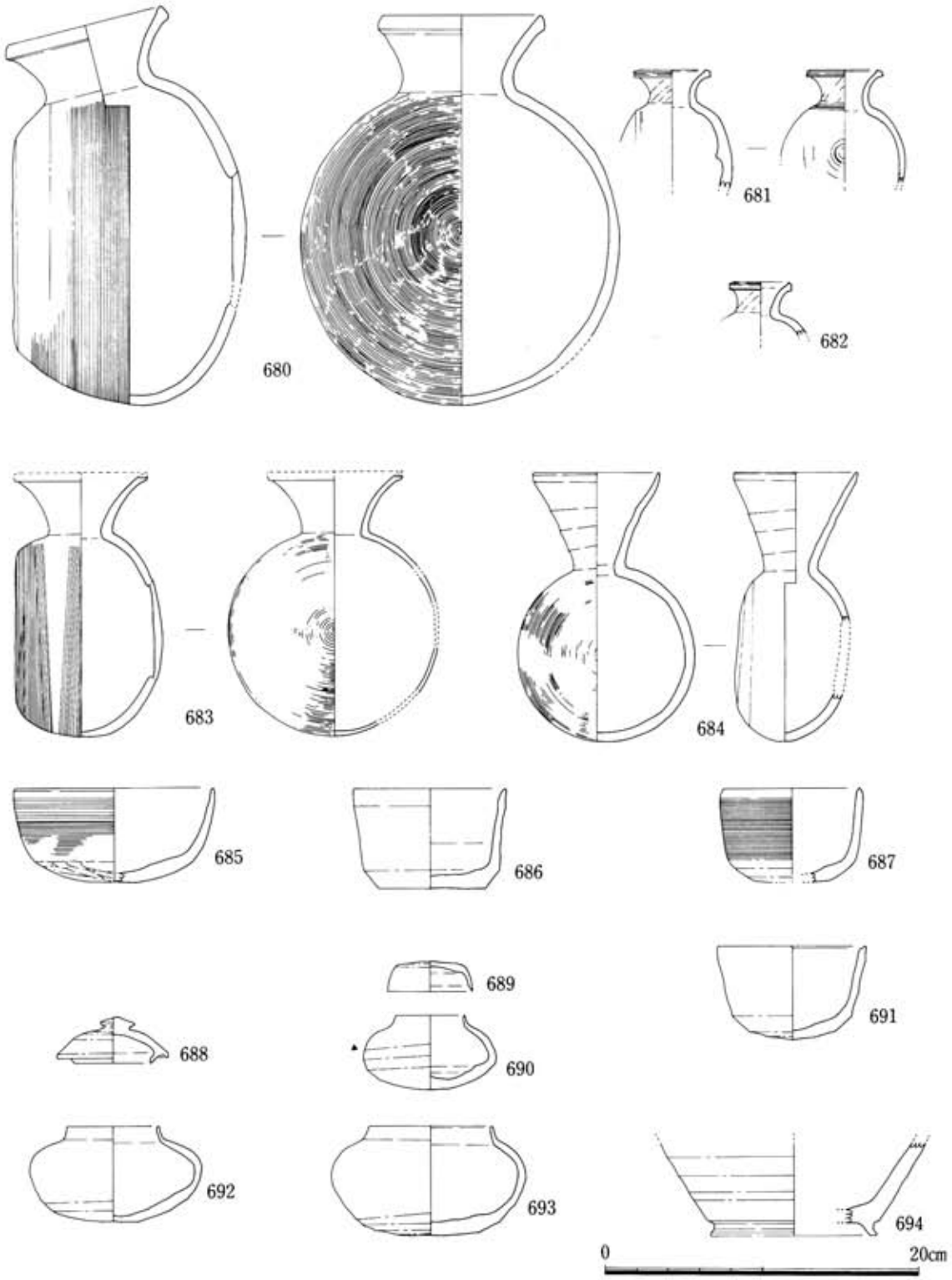


Fig.119　ＳＴ017古墳出土須恵器４（１/４）

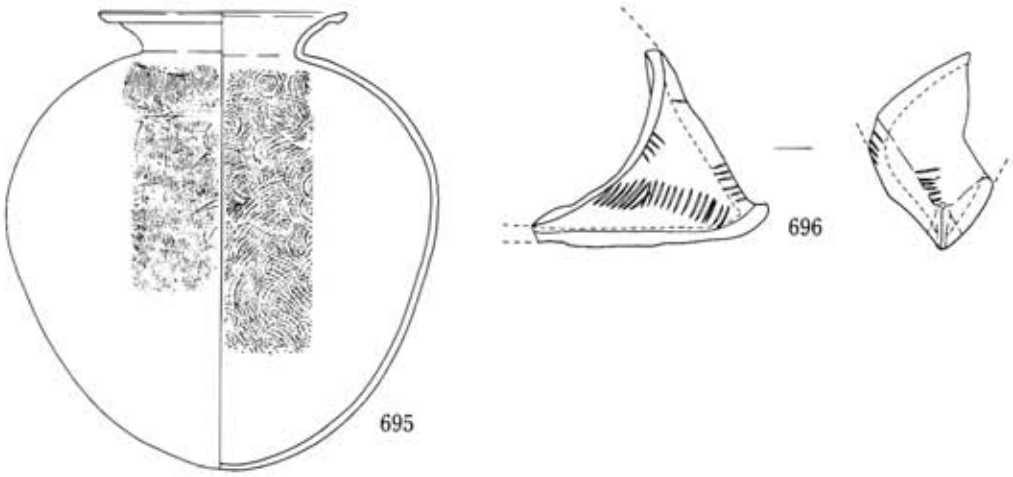


Fig.120　ＳＴ017古墳出土須恵器５（ 695は１/８、696は１/２）

ズリ。689は短頸壺の蓋。688は宝珠つまみ、かえりがつく。690、692、693は短頸壺。694は高台付き長頸壺の底部。661と同様、新時期を示す土器であるがこれは本墳とＳＴ016の間の表土からの出土で本墳に伴うものではない。695、697、698は甕。695、697はほぼ完形で大きさも類似する。どちらも墳丘盛土内出土である。696は皮袋形土器。底部片側のみ残存する。連続ヘラ描き文を施文。

土師器

699～706は高杯。杯部形態が内湾するもの(699、700、701、705)と杯体部で屈曲するもの(702、704)と杯部が大きく広がるもの(703、706)の３つのタイプがある。699、701、706は外面および杯部内面丹塗り。707～710は脚付壺。

鉄　器

鉄鏃(711～719)玄室、羨道部出土。711、712は斧箭式、どちらも篦被は直角で、712は鉾先と茎先端部を欠損する。711は全長11.7cm。713、714は圭頭式。どちらも両丸造。713は鏃身中間部を714は鏃身基部を欠損する。715は鏃身基部のみ残存で鏃身形態不明。716、717は鑿箭式で鏃身部と頸部の境は不明瞭。718、719は鏃身形態は小形柳葉形で棘篦被を有す。関部は直角にちかく片切刃造である。

刀子(720、721)720は玄室出土、721は墳丘列石出土。どちらも関部は鈍角である。

装身具

玄室出土である。722～725、755～757は土玉。726～754、758～779はガラス玉。ガラス玉の色調は群青色が最も多く、他に水色、深緑色などがある。径３～５㎜の小玉や径６～８㎜で両端を切断した管玉状のものがある。780、781は管玉、碧玉製。782は耳環、白金色で成分分析結果は金と銀が混合。783は石製紡錘車、墳丘出土。

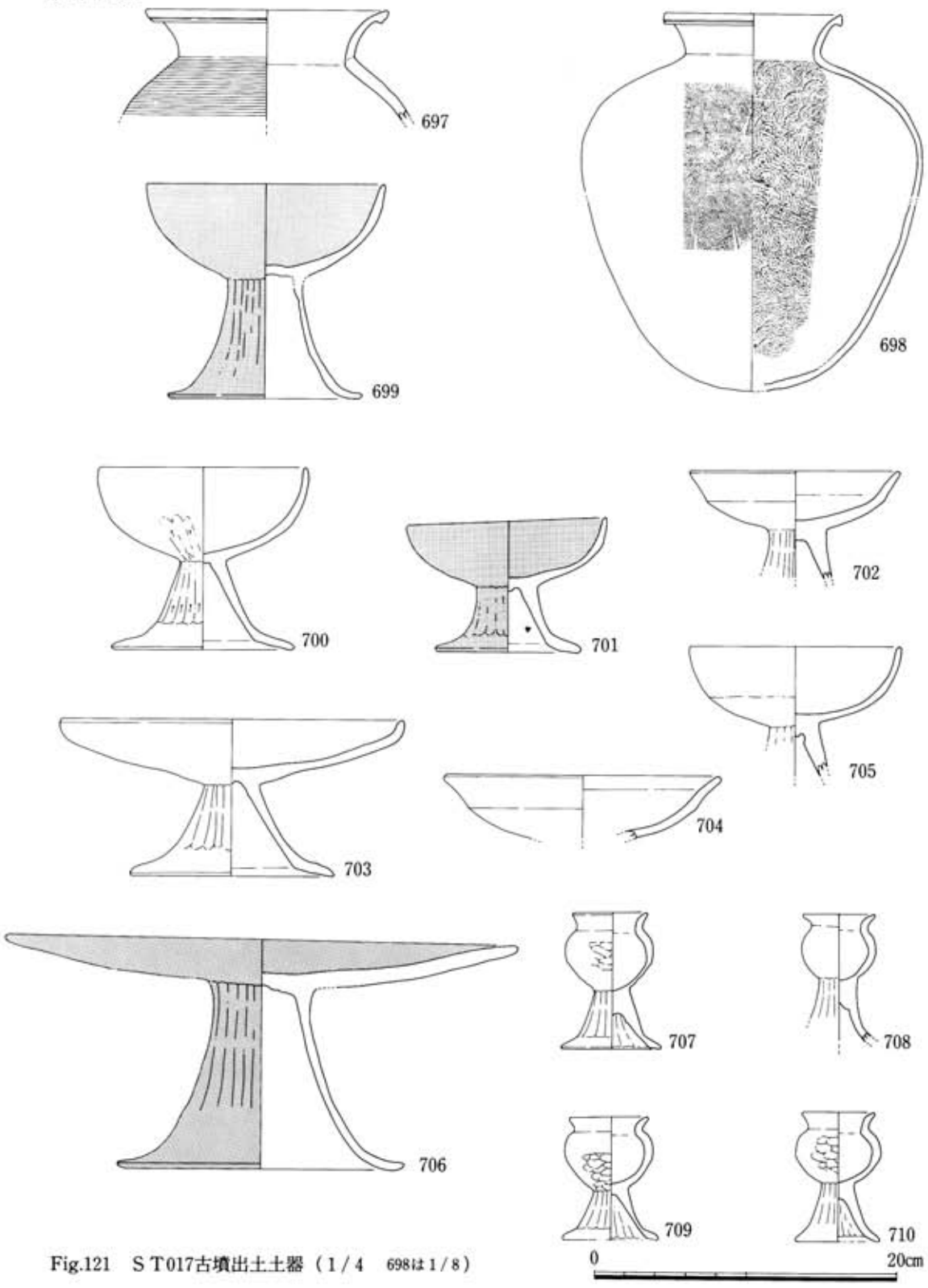


Fig.121　ＳＴ017古墳出土土器（1/4　698は1/8）

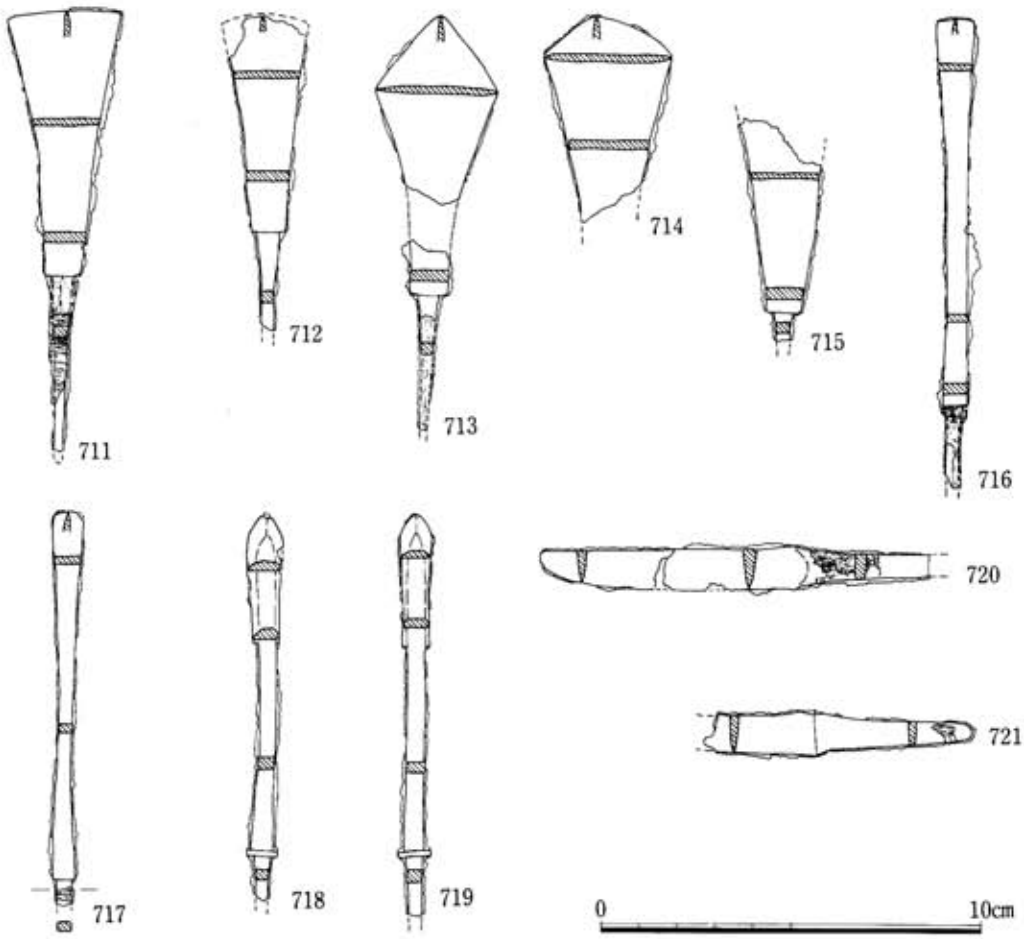


Fig.122　S T017古墳出土鉄器（1 / 2）

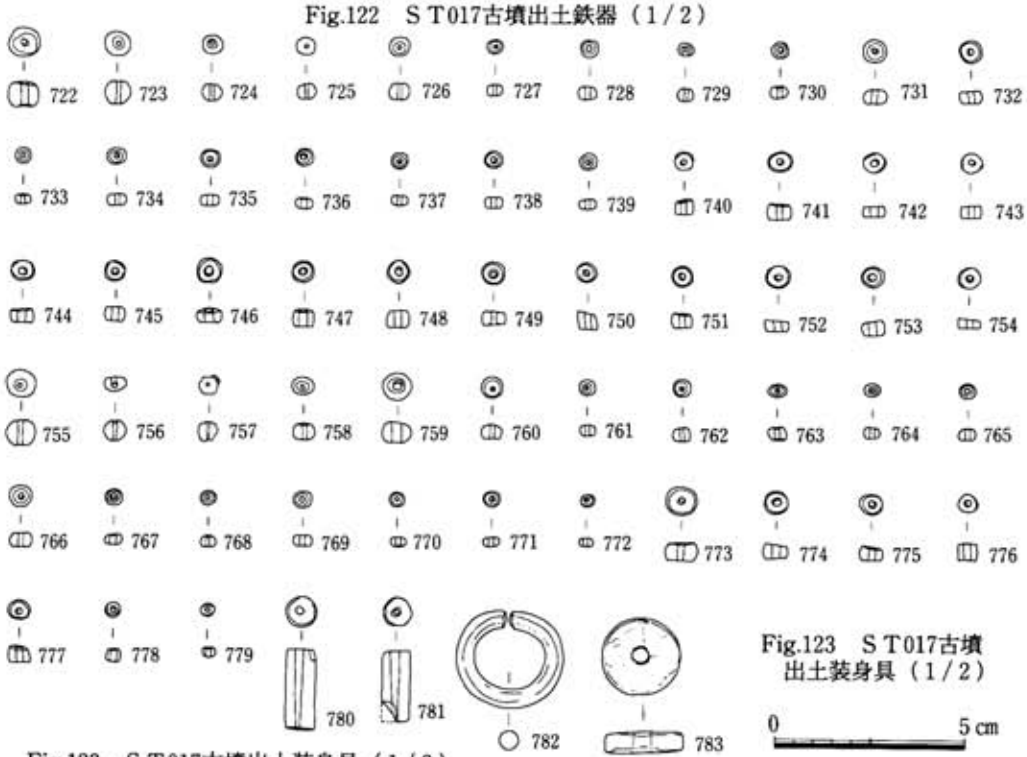


Fig.123　S T017古墳出土装身具（1 / 2）

Fig.123　S T017古墳出土装身具（1 / 2）

0　5 cm

Tab.17　ST017・018・019古墳出土土器一覧表

（　）は推定

Fig-図番号（PL番号）	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
116-621（PL.64）	ST017 墳丘D区列石外下端一括	杯蓋（須恵器）	口径　13.9 器高　4.4	体部と口縁部の境に沈線を有す。天井部不定方向ヘラケズリ。砂粒を多く含む。やや焼け歪む。	橙褐色	普　通	86-3729 900525
-622（〃）	ST017 墳丘D区列石外下端一括	杯蓋（須恵器）	口径　14.2 器高　4.2	体部と口縁部の境に沈線を有す。天井部不定方向ヘラケズリ。644とセット。	赤橙色	普　通	86-3728 900524
-623（〃）	ST017 墳丘D区土器群盛土内南側一括	杯蓋（須恵器）	口径　(14.8) 器高　4.4	天井部は粗い回転ヘラケズリ。	橙褐色	普　通	86-3751 900546
-624	ST017 墳丘D区盛土内南側一括遺物	杯蓋（須恵器）	口径　(13.8) 器高　3.6	天井部は回転ヘラケズリ。口唇部両側は斜方に面とりされる。	暗灰色	普　通	86-3762
-625（〃）	ST017 墳丘D区羨道外側土器群	杯蓋（須恵器）	口径　14.3 器高　3.9	口唇部内面に稜をもつ。天井部約3/4回転ヘラケズリ。砂粒を多く含む。	灰褐色	普　通	86-3797 900571
-626（〃）	ST017 墳丘D区羨道外側土器群	杯蓋（須恵器）	口径　14.1 器高　3.8	天井部約3/4回転ヘラケズリ。	灰　色	普　通	86-3798 900572
-627（〃）	ST017 墳丘D区羨道外側土器群	杯蓋（須恵器）	口径　14.0 器高　4.2	天井部約2/3回転ヘラケズリ。	灰　色	普　通	86-3748 900543
-628（〃）	ST017 墳丘D区盛土内南側一括遺物	杯蓋（須恵器）	口径　14.3 器高　4.1	天井部は約2/3回転ヘラケズリ。天井部中央にヘラ切り痕が残る。赤焼き。	赤橙色	普　通	86-3746 900541
-629（〃）	ST017 玄室埋土床面近く	杯蓋（須恵器）	口径　(13.6) 器高　4.8	天井部は不定方向ヘラケズリ。	乳灰色	不　良	86-3757 900551
-630（〃）	ST017 墳丘D区盛土内	杯蓋（須恵器）	口径　(14.0) 器高　(4.4)	天井部は入念な回転ヘラケズリ。胎土は精選されており、器壁は薄い。	赤褐色	やや良	86-3758 900552
-631	ST017 墳丘D区盛土内南側一括遺物	杯蓋（須恵器）	——	天井部は入念な回転ヘラケズリ。胎土は精選されている。	明灰色	やや良	86-4708
-632（〃）	ST017 墳丘D区羨道外側土器群	蓋（須恵器）	口径　8.8 器高　(2.8)	天井部ヘラ切り離しのち不定方向ヘラケズリ。口唇部内面は斜方に面とりされる。	灰　色	普　通	86-3772 900559
-633（〃）	ST017 墳丘D区盛土内南側一括遺物	杯蓋（須恵器）	口径　8.2 器高　2.3	天井部ヘラ切り離し。器面摩耗のため調整不明瞭。かえりは短く断面三角形。赤焼き。	赤褐色	不　良	86-3800 900574
-634（〃）	ST017 墳丘D区盛土内南側一括遺物	杯蓋（須恵器）	口径　8.2 器高　2.8	天井部ヘラ切り離しのちヨコナデか。自然釉がかかる。かえりは、口縁端部と同じか、やや短かめである。	黄灰色	普　通	86-3750 900545
-635（〃）	ST017 墳丘D区盛土内南側一括遺物	杯蓋（須恵器）	口径　8.0 器高　2.8	天井部ヘラ切り離し。かえりは低く内傾し、口縁端部の下端とほぼ同じ高さである。	灰　色	普　通	86-3754 900549
-636（〃）	ST017 墳丘D区盛土内南側一括遺物	杯蓋（須恵器）	口径　(7.9) 器高　2.4	天井部回転ヘラケズリ。かえりは断面三角形で内傾する。	灰　色	普　通	86-3766 900555

（ ）は推定

Fig-図番号（PL番号）	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
116-637（PL.65）	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括遺物	杯蓋（須恵器）	口径（8.6） 器高　3.0	乳頭状のつまみ付き。天井部は雑な回転ヘラケズリ。体部にヘラ記号あり。	灰　色	普　通	86-3768 900556
-638（〃）	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括遺物	杯蓋（須恵器）	口径　8.0 器高　3.0	乳頭状のつまみ付き。かえりは内傾する。体部にヘラ記号あり。	明灰色	普　通	86-3769 900557
-639（〃）	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括遺物	杯蓋（須恵器）	口径　8.2 器高　3.4	乳頭状のつまみ付き。天井部は回転ヘラケズリ。体部にヘラ記号あり。	明灰色	普　通	86-3770 900558
-640	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括遺物	杯身（須恵器）	口径（11.2） たちあがり高1.1	たちあがりは内傾し、受部は外上方にのびる。赤焼き。	赤褐色	普　通	86-3760
-641（〃）	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括遺物	杯身（須恵器）	口径　13.4 器高　4.6 たちあがり高0.9	底部不定方向ヘラケズリ。たちあがりは短い。赤焼き。	赤褐色	普　通	86-4716 900582
-642（〃）	ST017 墳丘D区裏道 外側土器群	杯身（須恵器）	口径　12.8 器高　3.6 たちあがり高1.3	底部約2/3回転ヘラケズリ。受部はやや上方にのびる。	赤橙色	普　通	86-3749 900544
-643（〃）	ST017 墳丘D区裏道 外側土器群	杯身（須恵器）	口径　12.0 器高　4.5 たちあがり高1.4	底部約3/4回転ヘラケズリ。砂粒を多く含む。焼け歪む。	灰褐色	普　通	86-3747 900542
-644（〃）	ST017 墳丘D区列石 外下端一括	杯身（須恵器）	口径　12.8 器高　4.2 たちあがり高1.0	底部不定方向ヘラケズリ。622とセット。	赤橙色	普　通	86-3730 900526
-645（〃）	ST017 墳丘D区裏道 外側土器群	杯身（須恵器）	口径　13.5 器高　4.0 たちあがり高1.4	底部約3/4回転ヘラケズリ。砂粒を多く含む。	赤橙色	普　通	86-3774 900561
-646（〃）	ST017 墳丘D区裏道 外側土器群	杯身（須恵器）	口径　12.5 器高　3.6 たちあがり高1.0	底部約3/4回転ヘラケズリ。	灰白色	普　通	86-3773 900560
-647（〃）	ST017 墳丘D区列石 外下端一括	杯身（須恵器）	口径　12.5 器高　4.0 たちあがり高1.0	底部ヘラ切り離し未調整。底部は平坦。	灰　色	普　通	86-3733 900529
-648（〃）	ST017 墳丘D区盛土内	杯身（須恵器）	口径（12.6） 器高（4.0） たちあがり高1.1	底部回転ヘラケズリ。砂粒を多く含む。	灰褐色	普　通	86-3755 900550
-649（〃）	ST017 墳　丘	杯身（須恵器）	口径（11.1） 器高　3.6 たちあがり高0.9	底部は平坦で不定方向ヘラケズリ。	灰白色	普　通	86-3761 900554
-650（〃）	ST017 墳丘D区列石 外下端一括	杯身（須恵器）	口径　12.5 器高　4.4 たちあがり高1.2	底部不定方向ヘラケズリ。たちあがりは直立気味。	赤橙色	普　通	86-3745 900540
117-651（〃）	ST017 墳丘D区列石 外下端一括	杯身（須恵器）	口径　11.6 器高　4.2 たちあがり高1.0	底部不定方向ヘラケズリ。たちあがりは直立する。	灰白色	普　通	86-3731 900527
-652（PL.66）	ST017 墳丘D区列石 外下端一括	杯身（須恵器）	口径　11.5 器高　4.0 たちあがり高1.1	底部は平坦で不定方向ヘラケズリ。	灰　色	普　通	86-3732 900528

（ ）は推定

Fig-図番号 (PL番号)	出土地点	器種	法量cm	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
117-653 (PL.66)	ST017 墳丘D区 盛土内一括	杯身 (須恵器)	口径 (10.8) 器高 3.8 たちあがり高1.0	底部約2/3回転ヘラケズリ。	灰黒色	不良	86-3734 900530
-654	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括	杯身 (須恵器)	口径 (10.8) 器高 4.2 たちあがり高1.0	底部回転ヘラケズリ。	灰色	普通	86-3765
-655	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括	杯身 (須恵器)	口径 (10.4) 器高 3.4 たちあがり高0.9	たちあがりは内傾し、受部は水平にのびる。底部調整不明瞭。	灰色	普通	86-3767
-656	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括	杯身 (須恵器)	口径 (12.0) 器高 (3.7) たちあがり高0.9	底部回転ヘラケズリ。砂粒を多く含む。	灰褐色	普通	86-3764
-657 (〃)	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括	杯身 (須恵器)	口径 (9.8) 器高 3.6	底部ヘラ切り離しのちナデ。赤焼き。	赤褐色	普通	86-4719 910413
-658	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括	杯身 (須恵器)	口径 (10.0) 器高 (4.0)	体部に稜をもち、口唇部内面は斜方に面とりされる。高杯杯部か。	灰白色	不良	86-3756
-659 (〃)	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括	杯身 (須恵器)	口径 (10.0) 器高 3.4	底部ヘラ切り離し。	灰褐色	普通	86-3753 9000548
-660 (〃)	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括	杯身 (須恵器)	口径 9.4 器高 3.3	底部ヘラ切り離し未調整。	灰色	普通	86-3752 910414
-661 (〃)	ST017 墳丘C区 墳裾付近	杯身 (須恵器)	口径 12.8 器高 6.0	高台付き。	暗灰色	普通	86-3735 900531
118-662 (〃)	ST017 墳丘D区列石 外下端一括	蓋 (須恵器)	口径 14.8 器高 5.5	つまみ付き。天井部から体部にかけて、カキ目調整のち櫛描列点文を施す。口唇部内面は斜方に面とりする。	暗灰色	やや良	86-3744 900539
-663	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括	蓋 (須恵器)	口径 15.0	つまみ部を欠損する。天井部から体部にかけて2条の沈線を有す。カキ目調整のち、櫛描列点文を施文。口唇部内面に沈線を有す。	灰色	普通	86-3763
-664 (〃)	ST017 墳丘D区農道 外側土器群	高杯 (須恵器)	口径 11.2	体部と口縁部の境に深めの沈線を有す。杯内部に茶色の付着物あり。	灰黒色	普通	86-3794 900568
-665 (〃)	ST017 墳丘D区列石 外下端一括	高杯 (須恵器)	口径 (12.8) 器高 14.6	有蓋高杯。脚部に長方形の二段三方透かしが入る。脚部から杯体部にかけてカキ目調整を施す。	灰色	やや良	86-3739 900535
-666 (〃)	ST017 墳丘D区盛土 南側一括遺物	高杯 (須恵器)	口径 14.0 器高 14.6	有蓋高杯。脚部に長方形の二段三方透かしが入る。脚部から杯体部にかけてカキ目調整。杯体部には櫛描列点文を施文。	灰色	やや良	86-4709 900580
-667	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括遺物	高杯 (須恵器)	——	脚部から杯部にかけて残存。脚部中位に二条の沈線を有す。赤褐色。	赤褐色	不良	86-4724
-668	ST017 墳丘D区盛土内 一括遺物	高杯 (須恵器)	底径 10.7	長脚二段三方透かしが入る。絞り痕が入る。脚部カキ目調整。	灰色	普通	86-3740 900536

（ ）は推定

Fig-図番号（PL番号）	出土地点	器種	法量cm	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
118-669	ST017 墳丘D区墳土内 南側一括遺物	高杯（須恵器）	底径 10.3	脚部中位に二条の沈線を有し、裾端部は下方にのびる。カキ目調整。赤焼き。	赤褐色	普通	86-4723 900589
-670	ST017 墳丘D区墳土内 南側一括遺物	高杯（須恵器）	底径 13.0	裾端部は下方にのびる。脚上半部はカキ目調整を施す。赤焼き。	赤褐色	普通	86-4722 900588
-671（PL.66）	ST017 墳丘表土	甕（須恵器）	口径 (13.2) 器高 14.8	最大径が中位にある胴部に、基部幅の広い口頸部がつく。胴肩部に櫛描列点文。頸部に櫛描波状文を施文。	灰色	やや良	86-4703 900576
-672（〃）	ST017 墳丘D区裏道 外側土器群	甕（須恵器）	口径 (11.4) 器高 13.2	肩がはり、肩部と頸部に沈線を有す。胴下半部はヘラケズリ。胴部に穿孔時の粘土塊を残す。	灰黒色	普通	86-3791 900565
-673（PL.67）	ST017 墳丘D区裏道 外側土器群	甕（須恵器）	胴径 8.7	胴部は肩がはり、頸部で屈曲する。胴下半部はヘラケズリ。胴部に穿孔時の粘土痕を残す。	灰色	普通	86-3792 900566
-674（〃）	ST017 墳丘D区裏道 外側土器群	甕（須恵器）	胴径 8.2	最大径が下位にある胴部に、ラッパ状に開く口頸部がつく。胴肩部に櫛描列点文を施文。	乳灰色	不良	86-4704 900577
-675	ST017 墳丘D区裏道 外側土器群	甕（須恵器）	胴径 8.6	頸部と胴部の一部残存。肩部に櫛描列点文を有す。	灰色	普通	86-3789 900563
-676（〃）	ST017 墳丘D区裏道 外側土器群	長頸壺（須恵器）	口径 4.9 器高 12.4	最大径が中位にある胴部に細長い頸部がつく。胴下半部はカキ目調整を施す。	灰色	普通	86-3790 900564
-677（〃）	ST017 墳丘D区列石 外下端一括	長頸壺（須恵器）	口径 10.0 器高 14.6	高台付き。胴部は肩がはり、肩部に櫛描列点文、頸部に二条の沈線を施す。	暗灰色	やや良	86-3741 900537
-678	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括遺物	甕（須恵器）	——	頸部から胴肩部にかけて一部残存。頸部に櫛描波状文、肩部に櫛描列点文施文。	暗灰色	やや良	86-4702
-679（〃）	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括遺物	甕（須恵器）	口径 12.1 器高 22.0	球形の胴部に外に広がる頸部がつく。肩部に櫛描列点文、頸部に櫛描波状文を有す。	暗灰色	普通	86-3743 900538
119-680（〃）	ST017 墳丘D区裏道 外側土器群	提瓶（須恵器）	口径 9.8 器高 24.8	胴部前面から背面にかけてカキ目調整を施す。口縁端部は外側に肥厚する。	灰褐色	普通	86-3795 900597
-681（〃）	ST017 墳丘D区裏道 外側土器群	提瓶（須恵器）	口径 (4.2)	球形の胴部に外反する頸部がつく。ミニチュア形か。胎土は精選される。	明灰色	やや良	86-4705 900578
-682	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括遺物	提瓶（須恵器）	口径 3.5	口頸部のみ残存。681と類似する。胎土は精選される。	明灰色	やや良	86-4707
-683（〃）	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括遺物	提瓶（須恵器）	口径 (8.4) 器高 16.8	胴部全面にカキ目調整。口縁部を欠損する。	灰色	普通	86-3793 900567
-684（〃）	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括遺物	提瓶（須恵器）	口径 8.0 器高 16.5	算盤形の胴部に外に広がる頸部がつく。器面摩耗のため調整不明瞭。	乳灰色	不良	86-4706 900579

（　）は推定

Fig-図番号 (PL番号)	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
119-685 (PL.67)	ST017 墳丘D区裾道 外側土器群	椀 (須恵器)	口径 (12.4) 器高 (6.0)	底部不定方向ヘラケズリ。体部はカキ目調整を施す。赤焼き。	赤褐色	普　通	86-4717 900583
-686 (　〃　)	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括遺物	椀 (須恵器)	口径 (9.4) 器高　6.3	底部は平坦で、ヘラ切り離し未調整。肩部ヘラケズリ。	灰　色	普　通	86-4701 900575
-687	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括遺物	椀 (須恵器)	口径 (8.3) 器高 (6.0)	底部回転ヘラケズリ。体部はカキ目調整。	橙褐色	普　通	86-4715
-688 (PL.68)	ST017 墳丘D区盛土内 一括遺物	蓋 (須恵器)	口径　4.8 器高　3.0	宝珠つまみ付き。かえりは内側にのびる。	灰　色	普　通	86-3736 900532
-689 (　〃　)	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括遺物	蓋 (須恵器)	口径　5.3 器高　1.9	天井部不定方向ヘラケズリ。口唇部内面は斜方に面とりされる。	暗灰色	普　通	86-3775 900562
-690 (　〃　)	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括遺物	短頸壺 (須恵器)	口径　4.2 器高　4.8	最大径は中位にある胴部に直立気味の頸部がつく。底部不定方向ヘラケズリ。	灰　色	やや良	86-3799 900573
-691 (　〃　)	ST017 墳丘D区盛土内	椀 (須恵器)	口径 (5.4) 器高　6.0	底部は回転ヘラケズリ。口唇部内面に沈線を有す。砂粒を多く含む。	灰黒色	普　通	86-3727 900523
-692 (　〃　)	ST017 墳丘D区裾道 外側土器群	短頸壺 (須恵器)	口径　5.6 器高　6.0	最大径が上位にある胴部に、直立気味の頸部がつく。底部不定方向ヘラケズリ。	灰　色	普　通	86-3737 900533
-693 (　〃　)	ST017 墳丘盛土内 南側一括遺物	短頸壺 (須恵器)	口径　7.6 器高　7.0	最大径が上位にある胴部に、やや内傾する短い頸部がつく。底部回転ヘラケズリ。	灰　色	普　通	86-3738 900534
-694	ST017 表　土	長頸壺 (須恵器)	——	高台付き。高台部は外側にハの字形に開く。	橙褐色	普　通	86-3771
120-695 (　〃　)	ST017 墳丘C区盛土	甕 (須恵器)	口径 (26.0) 器高　48.4	胴部外全面に格子目ふうタタキのち部分的にカキ目状調整。内面は同心円文タタキ。	灰黄色	普　通	86-998 90-1536
-696 (　〃　)	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括	皮袋形土器	——	底部片側のみ残存。連続ヘラ描き文を施文。	灰褐色	普　通	86-468 910195
121-697	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括遺物	甕 (須恵器)	口径 (15.8)	口縁端部は断面三角形におさめる。口唇端部外面に沈線を施す。赤焼き。	赤褐色	普　通	86-4714 900581
-698 (　〃　)	ST017 墳丘C区盛土内	甕 (須恵器)	口径　22.8 器高　49.6	胴部外全面に平行タタキのち部分的にカキ目状調整、内面は同心円文タタキ。口唇部外面に二条の沈線を有す。	灰　色	普　通	86-995 901592
-699 (PL.69)	ST017 墳丘D区裾道 外側土器群	高杯 (土師器)	口径　15.4	杯部は椀形で、裾広がりの脚部がつく。外面および杯部内面丹塗り。	赤褐色	普　通	86-4729 900593
-700 (　〃　)	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括遺物	高杯 (土師器)	口径 (13.2) 器高　12.0	杯部は椀形で、脚裾部で屈曲し外側に開く。脚部はタテ方向ヘラケズリ。	赤褐色	普　通	86-4710 901305

（ ）は推定

Fig-図番号 (PL番号)	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
121-701 (PL.69)	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括遺物	高杯 (土師器)	口径 13.0 器高 8.6	杯部は椀形で、脚裾部でゆるやかに屈曲する。脚部はタテ方向のヘラケズリ。外面および杯部内面丹塗り。	赤褐色	普　通	86-4712 901307
-702 (〃)	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括遺物	高杯 (土師器)	口径 (13.7)	脚下半部を欠損する。杯体部でゆるやかに屈曲する。	赤褐色	普　通	86-4711 901306
-703 (〃)	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括遺物	高杯 (土師器)	口径 (22.2) 器高 10.4	杯部は大きく広がり、杯端部で屈曲し、上方にのびる。脚部はタテ方向ヘラケズリ。	赤褐色	普　通	86-4721 900587
-704	ST017 墳丘D区裾道 外側土器群	高杯 (土師器)	口径 (17.8)	脚部を欠損する。杯体部でゆるやかに屈曲する。	赤褐色	普　通	86-4730 901309
-705 (〃)	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括遺物	高杯 (土師器)	口径 (13.7)	脚下半部を欠損する。杯部は椀形で、脚部はタテ方向ヘラケズリ。	明褐色	普　通	86-4713 901308
-706 (〃)	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括遺物	高杯 (土師器)	口径 (33.0) 器高 15.2	杯部は浅く、大きく外に広がる。外面および杯部内面丹塗り。	赤褐色	普　通	86-4731 900594
-707 (〃)	ST017 墳丘D区裾道 外側土器群	脚付壺 (土師器)	口径 4.8 器高 9.0	最大径が上位にある胴部に外反する頸部と、裾部で屈曲する脚部がつく。脚部タテ方向ヘラケズリ。	明褐色	普　通	86-4725 900590
-708 (〃)	ST017 墳丘D区裾道 外側土器群	脚付壺 (土師器)	口径 4.8	脚裾部欠損する。球形の胴部に外反する頸部がつく。	明褐色	普　通	86-4727 900598
-709 (〃)	ST017 墳丘D区裾道 外側土器群	脚付壺 (土師器)	口径 5.0 器高 8.0	最大径が上位にある胴部に外反する頸部と裾部で屈曲する脚部がつく。脚部タテ方向ヘラケズリ。	明褐色	普　通	86-4726 900591
-710 (〃)	ST017 墳丘D区盛土内 南側一括	脚付壺 (土師器)	口径 4.6 器高 8.5	球形の胴部に外反する頸部と脚部がつく。	明褐色	普　通	86-4728 900592
125-784 (PL.70)	ST018 石室床面	把手付椀 (土師器)	口径 4.0 器高 3.0	底部は平坦で体部は内湾気味にたちあがる。体部中位一ヶ所に角状の把手をつける。	明褐色	普　通	86-1112
127-786 (〃)	ST019 石室床面	杯蓋 (須恵器)	口径 11.2 器高 2.0	逆転蓋。天井部、回転ヘラケズリ。かえりはなく、口縁端部は下方にのびる。赤焼き。	橙褐色	普　通	85-3799 900363
-787 (〃)	ST019 石室床面	杯 (土師器)	口径 13.0 器高 3.0	底部回転糸切り離し。	明褐色	普　通	85-3800 900364

18．ＳＴ018古墳

(1) 概　要

調査区の北側に位置し、北東10m にはＳＴ019古墳が南西10m にはＳＴ015古墳がある。墳丘は削平を受け、石室も腰石を残すのみである。内部主体は南東に開口する単室両袖型の横穴式石室で、玄室平面形態は正方形である。出土遺物は玄室内から土師器椀と刀子が１点ずつ出土したのみで築造時期なども特定できない。

(2) 内部主体

単室両袖型の横穴式石室である。南東の斜面に向かって開口し主軸をN51°Wにとる。玄門から1.5m で急斜面になる。墳丘は完全に削平を受け、石室も腰石を残すのみである。左袖石は外方に倒れ、右袖石は抜き取られているためか無い。従って片袖の可能性も考えられる。

玄室平面形態は正方形で、規模は中央長1.65m、中央幅1.7m を測る。

奥壁は腰石に1.2×0.8m、0.6×0.8m の石材２石を配する。左側壁腰石は1.5×0.7m 程の扁平石材１石を横位に配する。左側壁腰石は1.1×0.2m 程の扁平石材と0.5×0.6m 程の方形石材２石を配する。扁平石材の上には大形石材一石を積んでいたが倒れてきたので取り上げた。

玄門部は左袖石は外方に倒れるが、0.7×0.4m 程の柱状石材を立てる。右袖石は欠失する。

玄室床面には左側壁側から玄門側にかけて径20cm程の転石を敷き詰める。

出土遺物は玄室北西隅から土師器椀、および刀子が出土しているのみである。

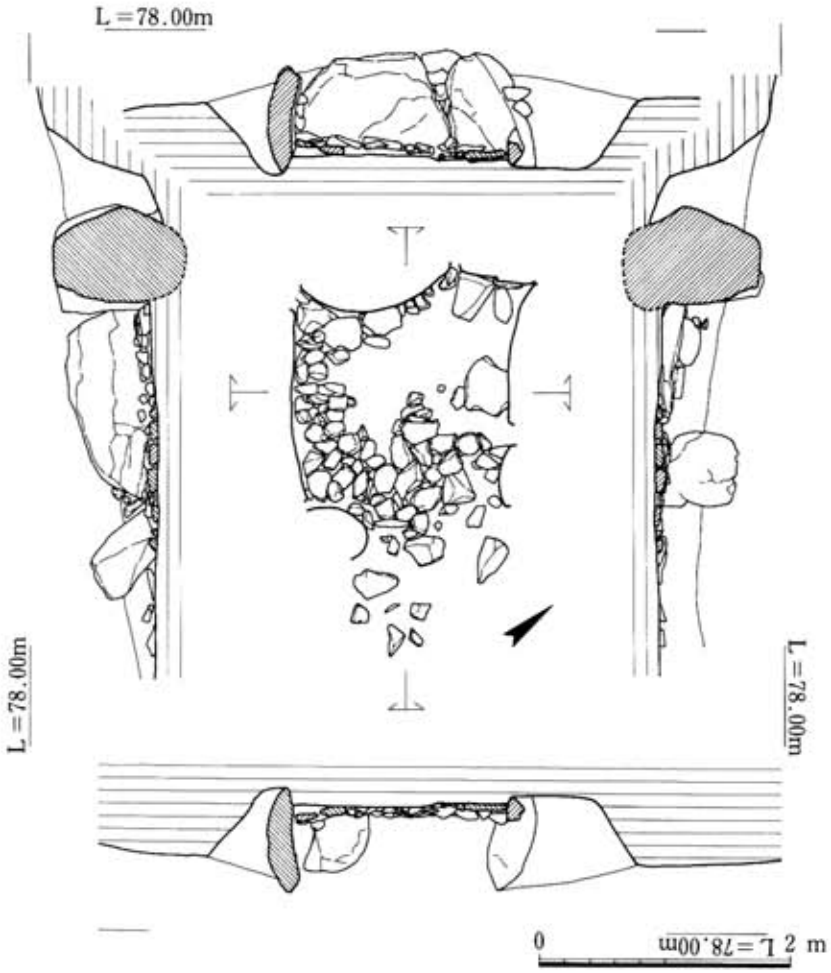


Fig.124　ＳＴ018古墳石室（１/60）

(3) 出土遺物

土師器

784は把手付椀、玄室床面出土で口縁部の一部および把手先端部を欠損するもののほぼ完形である。底部は平坦で体部は内湾気味に立ち上がる。体部中位に角状の把手を付ける。

鉄　器

刀子(785)棟側が角関で、茎端部と身先端部を欠損する。刃部幅1.4cm。

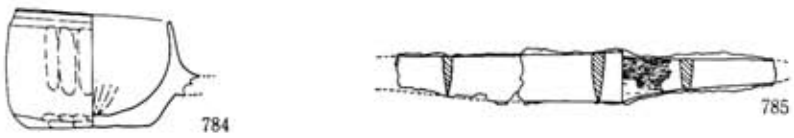


Fig.125　ＳＴ018古墳出土土師器・鉄器　(784は1/4、785は1/2)

19．ＳＴ019古墳

(1) 概　要

調査区の北側に位置し、南方10mにはＳＴ018古墳が西方13mにはＳＴ017古墳がある。玄門から南方3mで急斜面になる。墳丘は削平をうけ、石室も腰石のみを残す。内部主体は南東に開口する単室無袖型の横穴式石室である。玄室平面形態は長方形。出土遺物は玄室内から須恵器杯蓋1点と中世の杯1点のみである。従って築造時期は特定できず少なくとも小田編年VI～VI新段階期までは追葬され、さらに13C代に再利用されたと考えられる。

(2) 内部主体

単室無袖型の横穴式石室である。主軸をN30°Wにとり南方の斜面に向かって開口する。墳丘は既になく石室も腰石のみ残す。袖石に相当するものは見られなくまた抜き跡も検出できなかったため無袖型と考えた。

石室平面形態は玄室が玄門に向かってややすぼまる平面長方形で、規模は中央長1.75m、中央幅1.5mを測る。

奥壁は腰石に1.4×0.7m程の横長石材1石を横位に配す。左側壁は腰石に長さ0.5～0.8m程の石材3石を縦位に立てる。中央の腰石は左右のそれに比べやや小形であるがその上に扁平石材を1石小口積みする。右側壁腰石は0.6×0.5m程の石材2石を縦位に立てるが本来は3石を配していたと思われ、玄門よりの腰石1石は抜き取られる。

玄室床面は左側壁側半分に径20～30cmの転石を配する。玄室内から杯蓋、中世の杯が出土している。

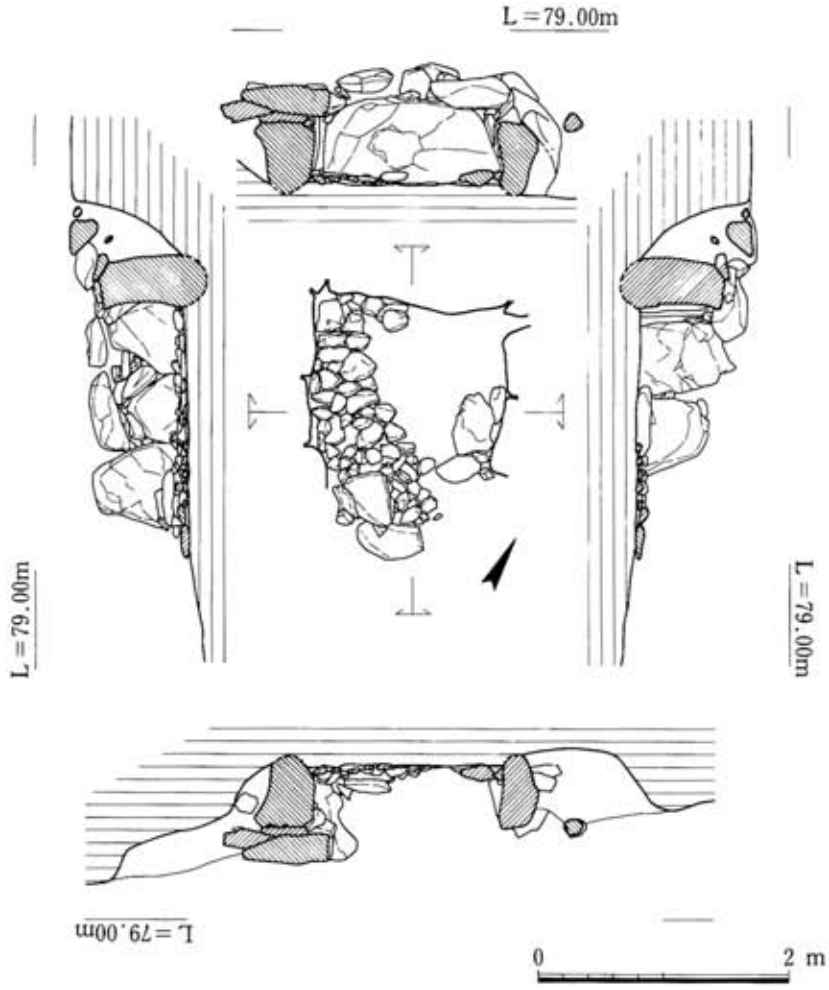


Fig.126　ＳＴ019古墳石室（１/60）

(3)　出土遺物

須恵器

786は杯蓋、玄門左側付近から出土。逆転蓋でつまみ、かえりはなく天井部は回転ヘラケズリ。口縁端部は下方にのびる。Ｅ類よりさらに新段階の要素をもつ。ＳＴ013古墳出土の高台付杯身(417)の口径が10.2cmと本墳出土の786と同時期のものと思われる。

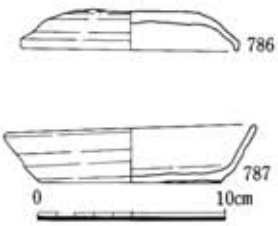


Fig.127 ＳＴ019古墳出土土器(1/4)

土師器

787は杯。底部回転糸切り離し。口径13.0cm。時期は13Ｃ代。

〈C地区の調査〉

本調査区で検出した遺構は横穴式古墳２基、土壙１基である。

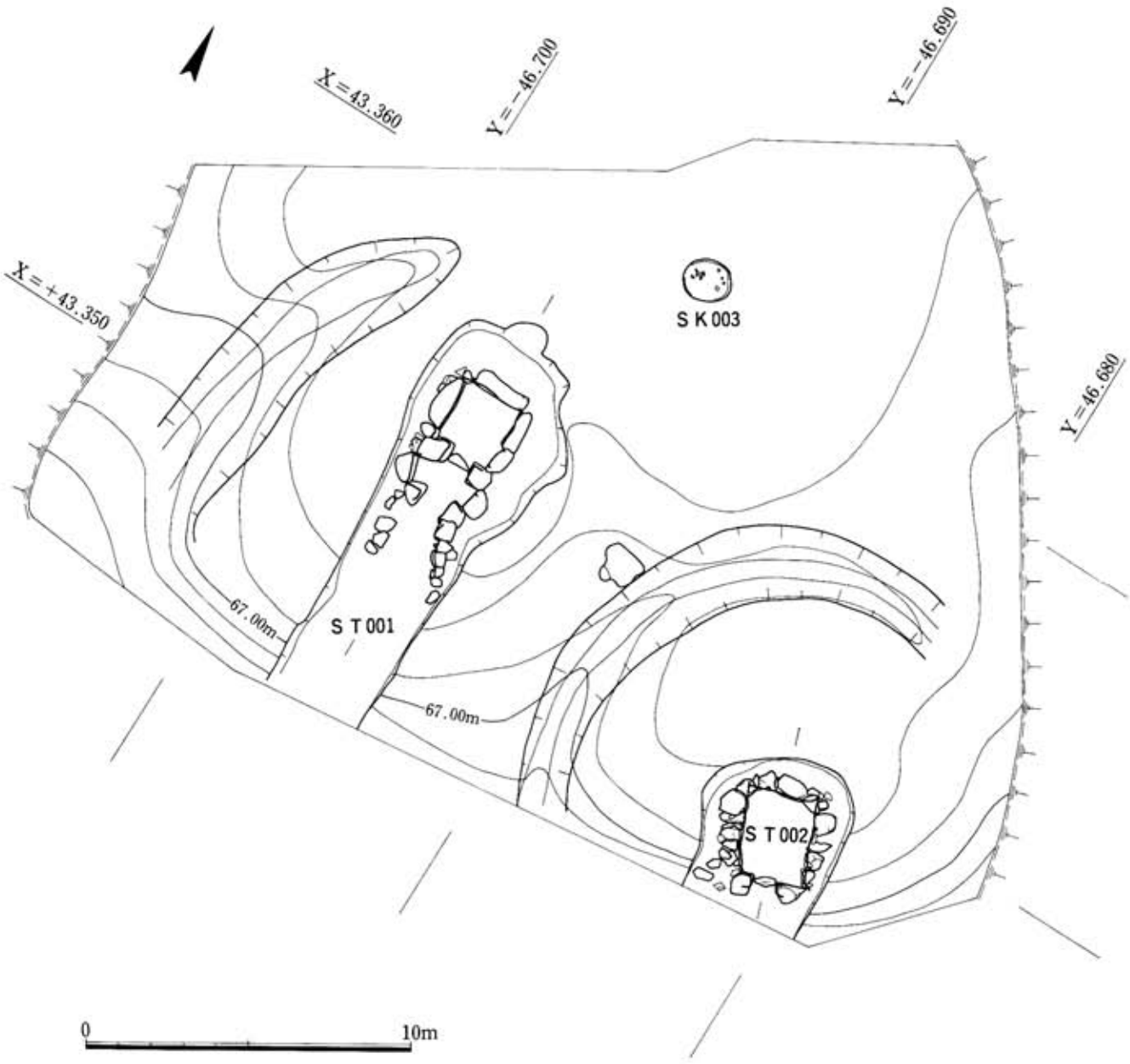


Fig.128　C地区遺構配置図（１/200）

1．ＳＴ001古墳

(1) 概　要

調査区のほぼ中央に位置し、南西16m にはＳＴ002古墳がある。墳丘盛土は削平を受け、石室も腰石のみを残す。調査時、墳丘西側に南北にはしる溝は本墳の周溝かどうか判断に苦しんだが周溝埋土からの出土遺物などから周溝と考えた。内部主体は複室両袖型横穴式石室で、玄室平面形態は長方形である。玄室床面は上下２面を確認できた。出土遺物は墓道、羨道などから土器が石室内から鉄器が出土した。築造時期は小田編年IV期で追葬はＶ期まで。

(2) 内部主体

複室両袖型の横穴式石室である。南側の緩斜面に向かって開口し、主軸をＮ３°Ｅにとる。墳丘盛土はすでに削平を受け、石室も腰石のみを残す。玄室平面形態は長方形、前室は幅広の長方形で前庭側壁が平面ハの字に開く。規模は石室全長5.9m、玄室中央長2.2m、中央幅1.95m、前室中央長0.75m、中央幅2.05m を測る。石室掘り方は長方形で奥壁側と右側壁側が撹乱をうける。

奥壁は腰石に1.7×0.8m 程の壁面の整った横長石材を横位に配する。右側壁腰石は1.3×1.2、0.7×1m 程の石材2石を、左側壁腰石は1.7×0.9m、0.4×0.4m 程の石材をそれぞれ配する。

玄門部は右袖石に0.6×0.7m 程の割石を、左袖石に0.9×0.9m ほどの角ばった石材を立てる。床面には框石を配し、玄門幅は0.95m を測る。前室側壁は0.7×１ｍ程の石材を１石づつ配し、前門左右袖石は0.8×１ｍほどの角ばった石材を立てる。前門幅は0.95m を測る。

前庭側壁の右側壁には前門右袖石に接してそれと同大の石材をたてさらに径0.7～0.4m 程の石材を配する。左側壁の石材の配し方は右側壁と似ているが、前門左袖石隣の石材は抜き取られる。前庭側壁長1.8m を測る。

玄室床面は上下2面を確認できた。Fig.129は上面を図示している。上面は玄室、前室に径10～20cm程の小礫を敷き、前室左側壁側から壺(802)が出土した。下面は玄室奥壁側と前室に径20～50cmの石材を敷き詰める。前室左側壁側から短頸壺が出土した。

(3) 出土遺物

土器が墓道、羨道から、鉄器、装身具が石室内から出土している。また周溝埋土から杯身、杯蓋、鉄鏃頸部、刀子が出土しているが図示していない。

須恵器

杯蓋はＣ類(793) Ｄ類(788～792)、杯身はＣ類(795、796、798) Ｄ類(797、799、800)がある。Ｄ類はもっとも小形化の進行した逆転蓋・身としていたが、Ｂ地区ＳＴ002古墳のＤ類と同様本墳のものも杯蓋の口径10～10.8cm、杯身の口径8.5～9.4cmと逆転しないまま小形化が進行するもの

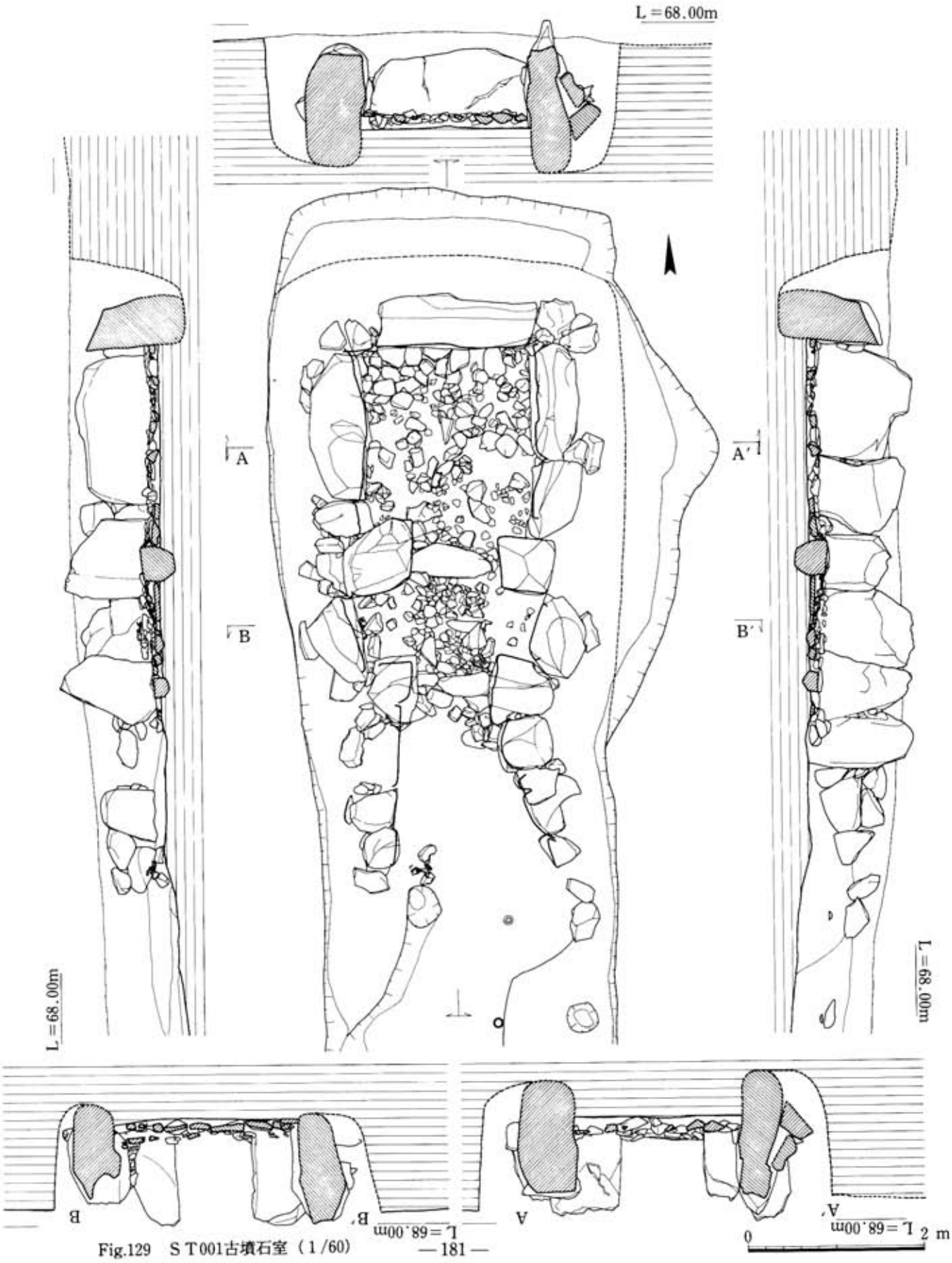


Fig.129　S T001古墳石室（1/60）

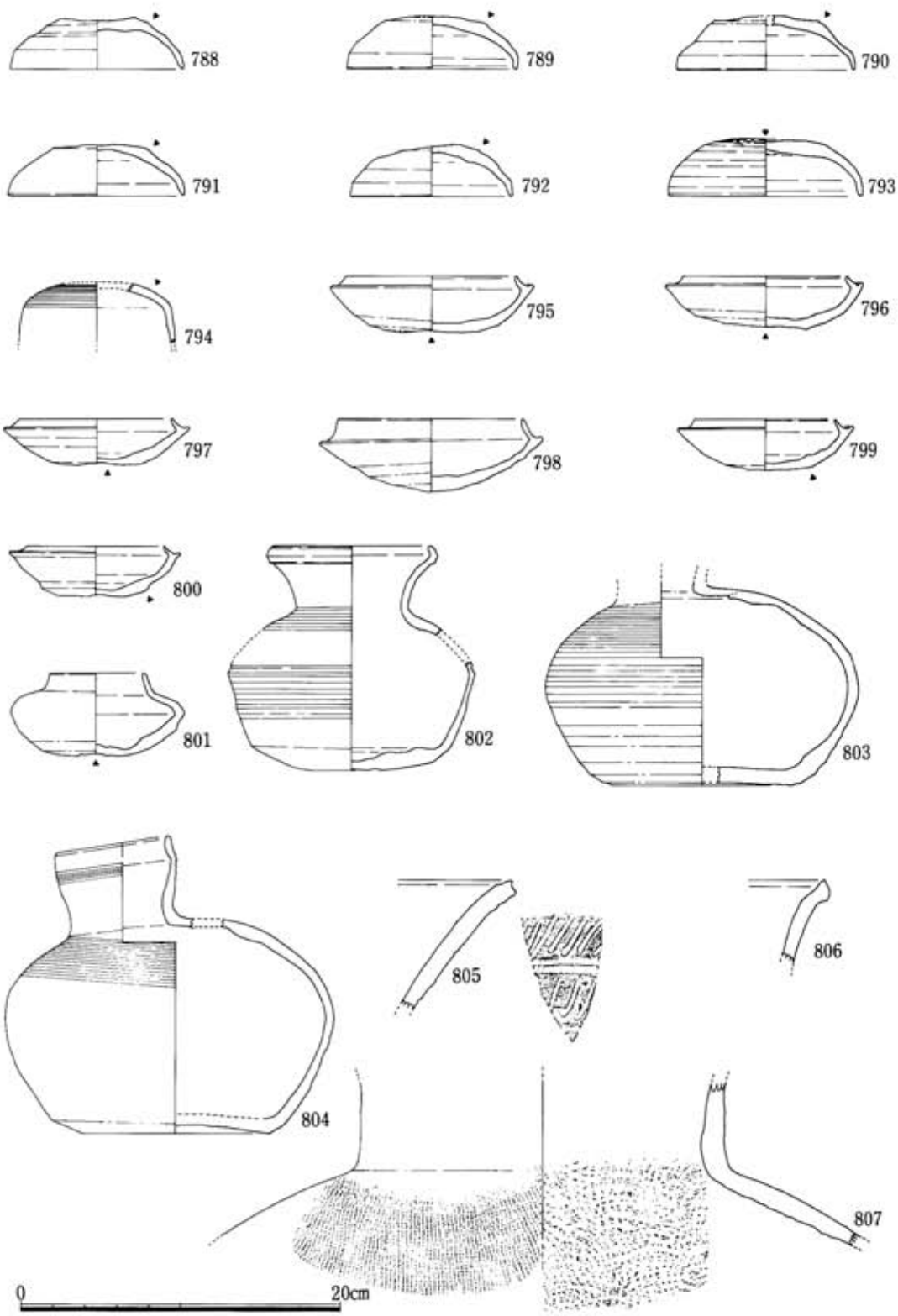


Fig.130　ＳＴ001古墳出土須恵器（1/4）

である。788～793は杯蓋、788～792は天井部ヘラ切り離し未調整。793は天井中央部にヘラ切り痕が残り、その周囲は回転ヘラケズリ。794は他器種の蓋、天井部カキ目調整。795～800は杯身、795、796、798は底部回転ヘラケズリ。797、799、800は底部ヘラ切り離し未調整。792、799、800のヘラ記号は同じ。

801は短頸壺、前室左側壁側床面から出土。802は壺、底部は平坦で肩部を欠損する。801と同じく前室床面から出土しているが、802は床上面からの出土である。803、804は平瓶。805～807は甕。

土師器

808～810は椀。底部は丸みをもち体部は内湾しながら立ち上がる。811は杯身。812～816は高杯、812～814、816は脚部のみ残存し、815はほぼ完形。杯部は椀形で脚部タテ方向ヘラケズリ。813、815は外面、杯部内面丹塗り。817は杯、底部回転糸切り離し。818は瓦器椀。

鉄　器

鉄鏃(819～826)819は斧箭式で身に三角形の透かしが入る。鋒先は丸みをもつ。全長10.7cm。820は斧箭式で819と同じく身に三角形の透かしが入る。821は長三角形式で腸抉気味、全長10.4cm。822は圭頭式、茎部を欠損する。823～826は頸部。

刀子(828～831)828は刃部、刃部幅1.5cm。829、830は茎部、830は縁金具をつける。831は刃部先端を欠損する。関部に縁金具が残る。刃部幅1.4cm。827は不明鉄器、平面長方形でゆるやかに曲がる。

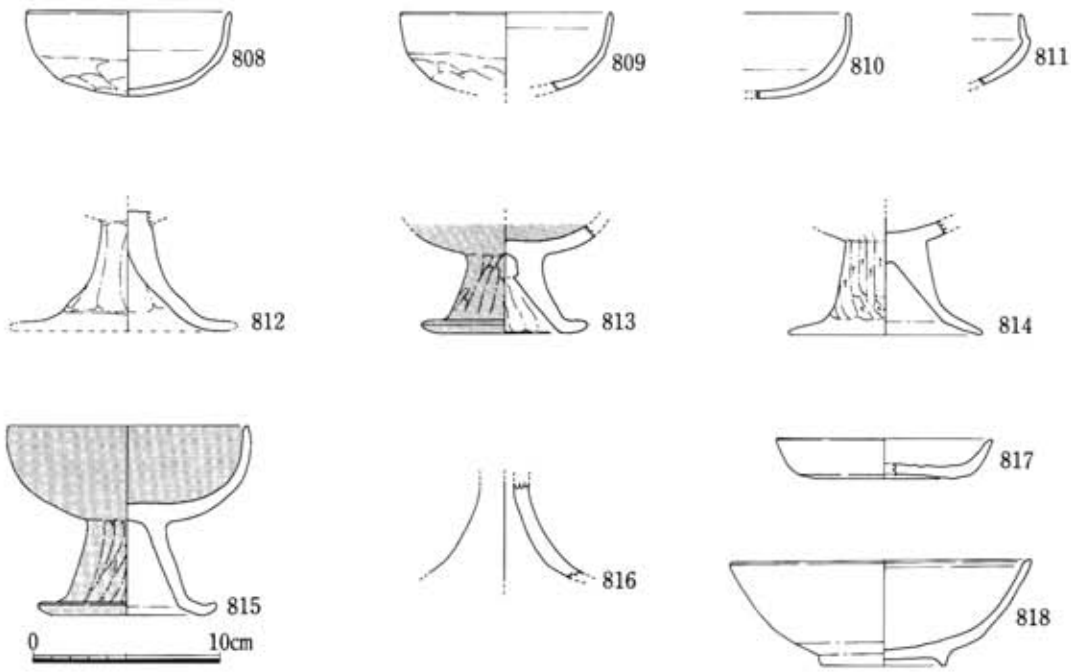


Fig.131　ＳＴ001古墳出土土器（１/４）

装身具

832は耳環、緑青がふき内面に金張りが残る。

石製品

833は紡錘車。外径4.6×4.6cm。

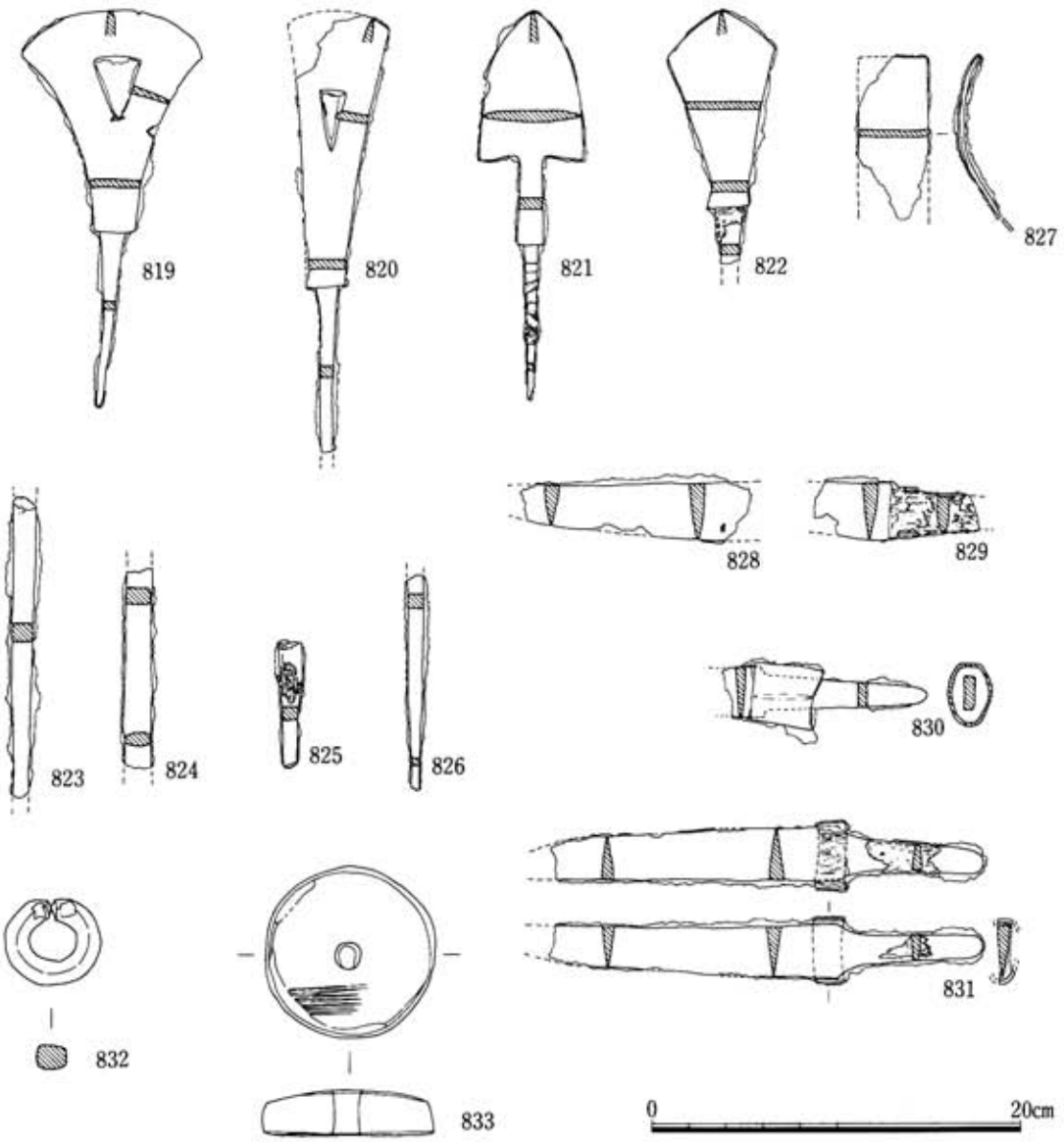


Fig.132　ＳＴ001古墳出土鉄器・装身具（1/4）

Tab.18　ＳＴ001古墳出土土器一覧表

（　）は推定

Fig-図番号（PL番号）	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
130-788（PL.71）	ＳＴ001 羨　道	杯蓋（須恵器）	口径　10.4 器高　3.0	天井部ヘラ切り離し未調整。天井部にヘラ記号あり。	暗灰色	普　通	86-429 900472
-789（〃）	ＳＴ001 墓　道	杯蓋（須恵器）	口径　10.4 器高　3.7	天井部ヘラ切り離し未調整。	暗灰色	普　通	86-430 900473
-790	ＳＴ001 墓　道	杯蓋（須恵器）	口径（11.0） 器高　3.4	天井部ヘラ切り離し未調整。天井部にヘラ記号あり。	暗灰色	普　通	86-432
-791（〃）	ＳＴ001 墓　道	杯蓋（須恵器）	口径　10.8 器高　3.2	天井部ヘラ切り離し未調整。	暗灰色	普　通	86-433 900475
-792（〃）	ＳＴ001 墓　道	杯蓋（須恵器）	口径　10.0 器高　3.2	天井部ヘラ切り離し未調整。体部に799と同じヘラ記号あり。	暗灰色	普　通	86-431 900474
-793（〃）	ＳＴ001 墓　道	杯蓋（須恵器）	口径（12.8） 器高　3.3	天井部中央はヘラ切り離し未調整。天井部にヘラ記号あり。	灰　色	普　通	85-3641 901269
-794	ＳＴ001 玄室埋土	蓋（須恵器）	——	天井部カキ目調整。天井部にヘラ記号あり。	暗灰色	普　通	85-3642
-795（〃）	ＳＴ001 墓　道	杯身（須恵器）	口径　10.6 器高　3.4 たちあがり高0.9	底部約3/4回転ヘラケズリ。	灰　色		86-426 900469
-796（〃）	ＳＴ001 羨　道	杯身（須恵器）	口径　10.3 器高　3.2 たちあがり高0.9	底部約3/4回転ヘラケズリ。底部にヘラ記号あり。	灰　色	普　通	86-427 900470
-797（〃）	ＳＴ001 羨　道	杯身（須恵器）	口径（9.4） 器高　2.8 たちあがり高0.8	底部ヘラ切り離し未調整。底部にヘラ記号あり。	灰褐色	普　通	86-423 900466
-798（〃）	ＳＴ001 周溝埋土	杯身（須恵器）	口径　11.4 器高　4.6 たちあがり高1.3	底部約3/4入念な回転ヘラケズリ。	灰黒色	やや良	86-428 900471
-799（〃）	ＳＴ001 羨　道	杯身（須恵器）	口径　8.9 器高　3.2 たちあがり高0.7	底部ヘラ切り離し未調整。体部に792と同じヘラ記号あり。	灰　色	普　通	86-425 900468
-800（〃）	ＳＴ001 羨　道	杯身（須恵器）	口径　8.5 器高　3.2 たちあがり高0.7	底部ヘラ切り離し未調整。体部に792と同じヘラ記号あり。	灰　色	普　通	86-424 900467
-801（〃）	ＳＴ001 前室床面	短頸壺（須恵器）	口径　5.7 器高　5.2	肩がはり、頸部は内傾する。底部不定方向ヘラケズリ。底部にヘラ記号あり。	灰　色	やや良	86-446 900480
-802	ＳＴ001 前室埋土	壺（須恵器）	口径（9.8） 器高　14.2	肩部を欠損する。平底で底部不定方向ヘラケズリ。	灰黒色	普　通	86-445
-803（PL.72）	ＳＴ001 羨　道	平瓶（須恵器）	胴径　19.8	肩部は丸みをもち胴部上半はカキ目調整、下半はヘラケズリ。	灰　色	普　通	86-434 900476

（ ）は推定

Fig-図番号 (PL番号)	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
130-804 (PL.72)	ST001 羨　道	平瓶 (須恵器)	口径　7.0 器高　18.8	肩部は丸みをもち胴部上半はカキ目調整。	灰白色	不　良	86-435 900481
-805	ST001 墓　道	甕 (須恵器)	——	口縁部約1/8残存。頸部外面に連続ヘラ描き斜行文を二段に施文。	暗灰色	普　通	85-3637
-806	ST001 墓　道	甕 (須恵器)	——	口縁部約1/8残存。口縁端部は外側に肥厚する。	暗灰色	普　通	85-3638
-807	ST001 墓　道	甕 (須恵器)	——	肩部から頸部にかけて一部残存。内面同心円文タタキ、外面平行タタキ。	灰　色	普　通	85-3639
131-808	ST001 羨　道	椀 (土師器)	口径　10.6 器高　4.6	底部は丸味をもち体部は内湾しながら立ち上がる。底部不定方向ヘラケズリ。	明褐色	普　通	86-436
-809	ST001 羨　道	椀 (土師器)	口径　(10.8)	体部から口縁部にかけて約1/3残存する。体部は内湾しながら立ち上がる。底部不定方向ヘラケズリ	明褐色	普　通	86-437
-810	ST001 羨　道	椀 (土師器)	器高　4.6	底部から口縁部にかけて約1/3残存。底部不定方向ヘラケズリ。	明褐色	普　通	86-441
-811	ST001 羨　道	杯身 (土師器)	たちあがり高1.1	口縁部約1/6残存。	明褐色	普　通	86-442
-812	ST001 羨　道	高杯 (土師器)	脚高　5.8	脚部タテ方向ヘラケズリ。裾部ヨコナデ。	明赤褐色	普　通	86-440
-813 (〃)	ST001 墓　道	高杯 (土師器)	脚高　4.2	脚裾部は外方に広がる。外面および杯部内面丹塗り。	赤褐色	普　通	86-439 900478
-814	ST001 周溝埋土	高杯 (土師器)	脚高　5.0	脚部タテ方向ヘラケズリ。	明褐色	普　通	85-3644
-815 (〃)	ST001 墓　道	高杯 (土師器)	口径　12.2 器高　10.1	杯部は椀形で、脚裾部は外方に広がる。外面および杯部内面丹塗り。	赤褐色	普　通	86-438 900477
-816	ST001 周溝埋土	高杯 (土師器)	——	脚部のみ残存。調整不明瞭。	明褐色	不　良	85-3643
-817	ST001 玄室埋土	杯 (土師器)	口径　(11.2) 器高　2.2	底部回転糸切り離し。	明褐色	普　通	86-444
-818 (〃)	ST001 玄室埋土	椀 (瓦器)	口径　(15.4) 器高　5.6	高台部断面三角形で体部は内湾しながら立ちあがる。	灰　色	普　通	86-443 900479

2．ＳＴ002古墳

(1) 概　要

調査区の南東部に位置し、北西16m にはＳＴ001古墳がある。墳丘盛土は削平をうけ、墳丘南側は調査区外となる。石室上半部も欠失する。周溝が墳丘北西部に1/4周しており、それから推定して周溝外径16m の円墳となる。周溝幅は1.5～２ m を測る。内部主体は単室両袖型の横穴式石室で石室内から鉄器、装身具が出土した。

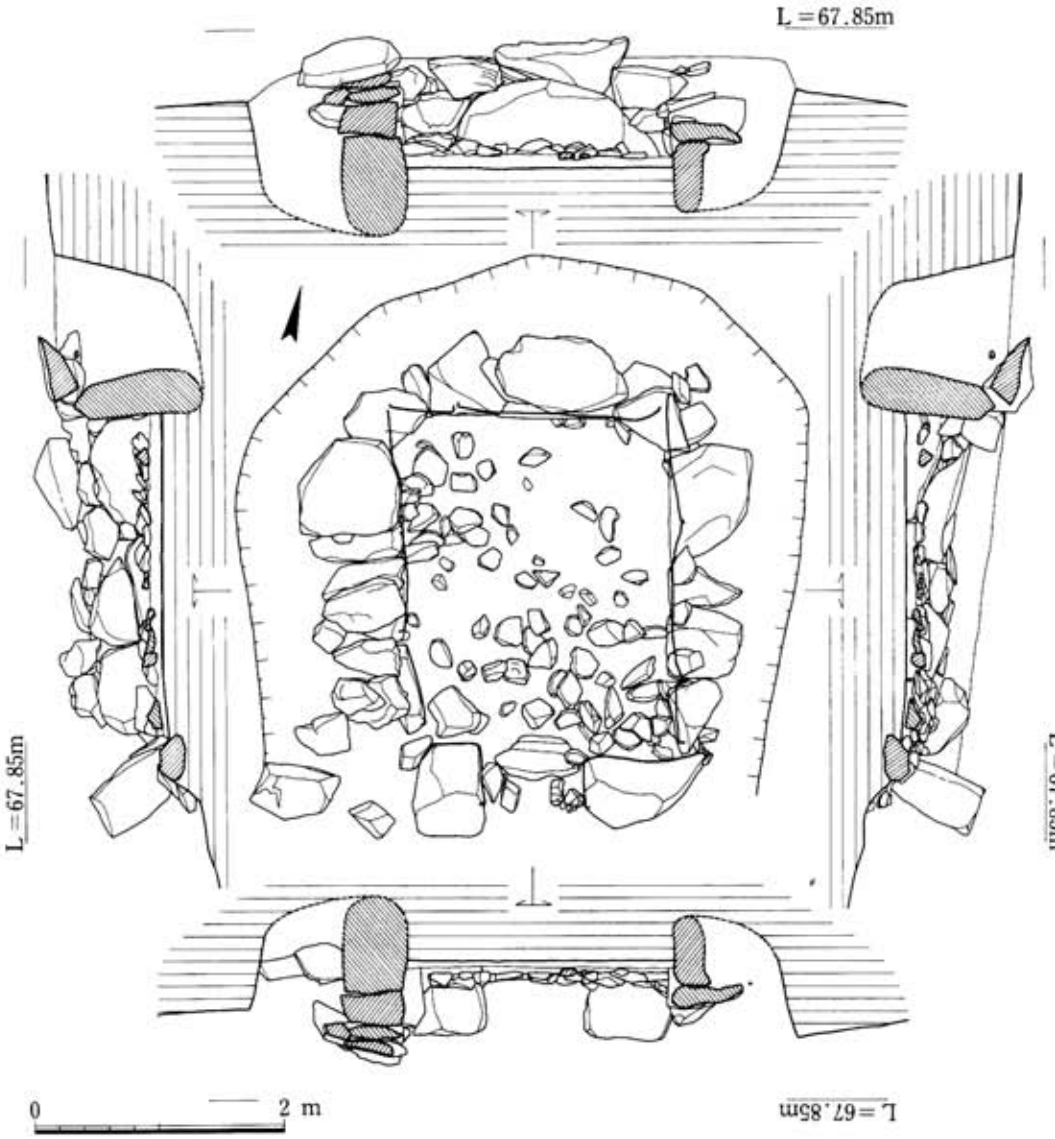


Fig.133　ＳＴ002古墳石室（１/60）

(2) 内部主体

単室両袖型の横穴式石室である。南側の緩斜面に向かって開口し、主軸をN12°Wにとる。墳丘盛土は削平を受け、石室も上半部を欠失する。玄室平面形態は長方形で規模は中央長2.6m、中央幅2.1m を測る。奥壁は腰石に1.6×0.6m 程の横長石材と長さ0.5m 程の石材 2 石を配する。その上方に1～2段横長石材を積む。左右側壁腰石は大形石材を用いず、長さ0.5～0.7m 程の横長石材を右壁腰石に 4 石、左壁腰石に 3 石を配する。左側壁は腰石上に径0.3～0.7m 程の石材を小口積みする。

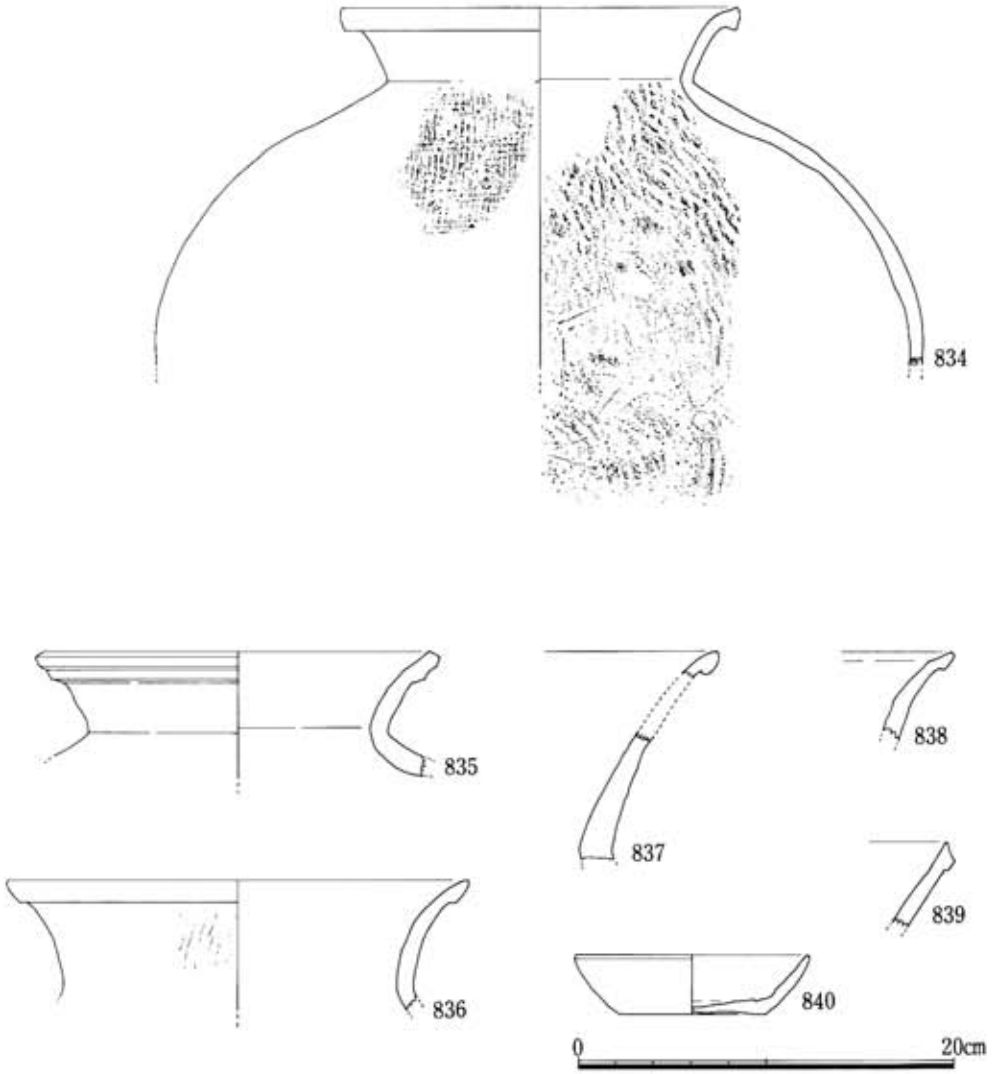


Fig.134　ＳＴ002古墳出土土器（1／4）

玄門部は両袖石とも外方に倒れかけており、右袖石に1×0.5m、左袖石に0.5×0.5m 程の石材を立てる。床面には框石を配する。玄門幅は0.8m を測る。羨道はとくに連接せず、玄門部框石を根石として閉塞施設があったと推定される。玄室床面には径20～30cmの転石が散在しており、敷石と考えられるが、この下から耳環、玉類を検出した。従って床面は上下２面を確認できた。

(3) 出土遺物

土器が周溝から、鉄器が玄室から、装身具が床面敷石の下から出土した。

須恵器

834～839は甕。 837は広口の甕、他は頸部が比較的短く外反する。834、836、837、838は口縁端部は外側に肥厚し丸くおさめる。

土師器

840は杯、底部回転糸切り離し。口径12.2cm。混入によるものである。

鉄　器

鉄鏃(841～851)841、842は椿葉式、841は頸部を、842は鏃身左下半部を欠損する。843は圭頭式、鏃身上半部を残す。844は柳葉式の鏃身上半部で、845は腸抉柳葉式の鏃身下半部。846～851は頸部。852、853は同一個体か、断面三角形で茎部に木質残存する。

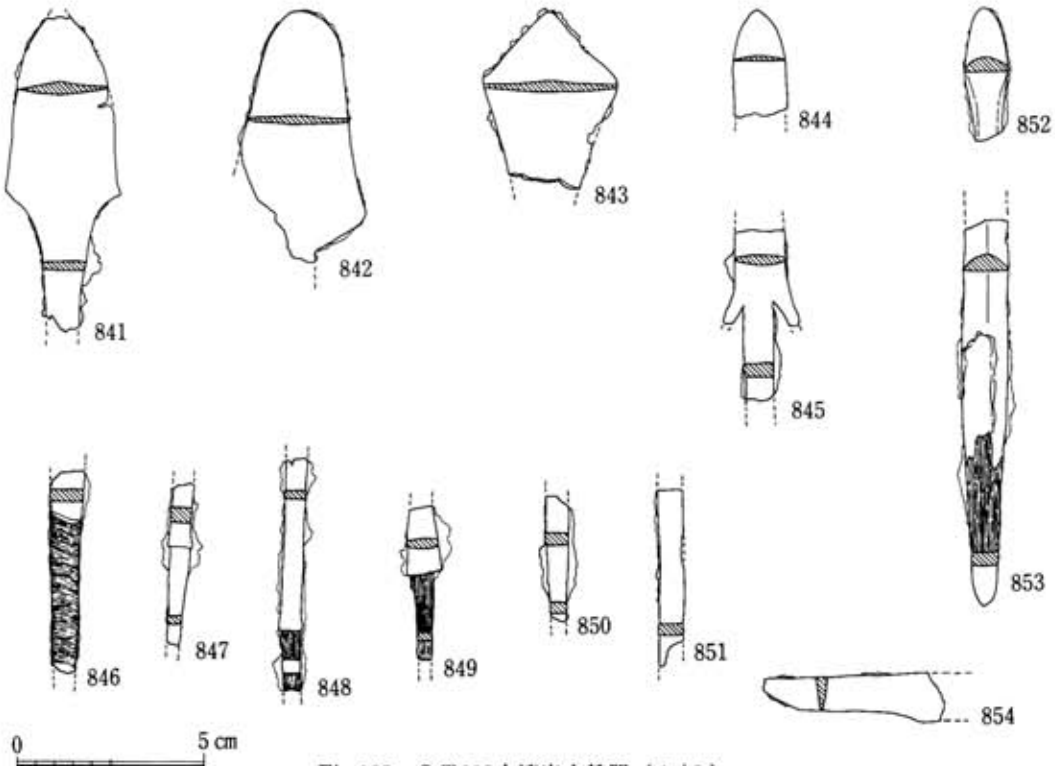


Fig.135　ＳＴ002古墳出土鉄器（１/２）

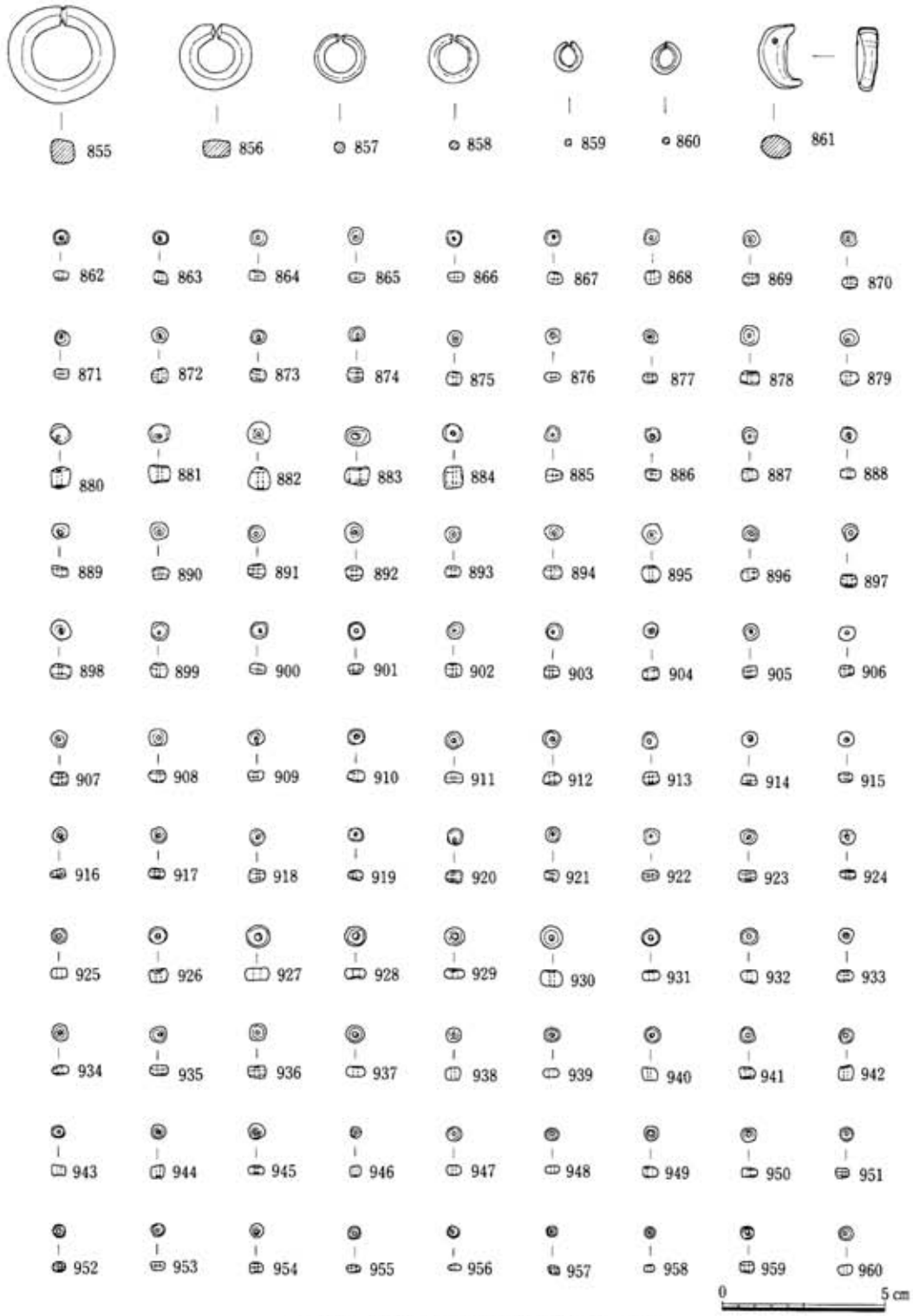


Fig.136　ＳＴ002古墳出土装身具（1/2）

Tab.19　ＳＴ002古墳出土土器一覧表

（　）は推定

Fig-図番号（PL番号）	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
134-834	ＳＴ002 周　溝	甕（須恵器）	口径（20.6）	口縁端部は外側に肥厚する。胴部内面は同心円文タタキ、外面は平行タタキのちカキ目。	暗灰色	普　通	86-993
-835	ＳＴ002 周　溝	甕（須恵器）	口径　20.2	口縁端部外面に一条の沈線を有す。	暗灰色	普　通	86-876
-836	ＳＴ002 周　溝	甕（須恵器）	口径　24.2	口縁端部は外側に肥厚し、丸くおさめる。頸部外面に平行タタキを施す。	灰白色	不　良	86-877
-837	ＳＴ002 周　溝	甕（須恵器）	——	口縁端部は外側に肥厚し、丸くおさめる。頸部外面カキ目調整。	灰黒色	普　通	85-3635
-838	ＳＴ002 周　溝	甕（須恵器）	——	口縁端部は外側に肥厚し、丸くおさめる。頸部外面に平行タタキを施す。	灰黒色	普　通	85-3400
-839	ＳＴ002 周　溝	甕（須恵器）	——	口縁端部は断面三角形におさめる。頸部外面はカキ目調整のち櫛描列点文を施す。	灰黒色	普　通	85-3399
-840	ＳＴ002 周　溝	杯（土師器）	口径　12.2	底部回転糸切り離し。	明褐色	普　通	85-3398

3．ＳＫ003土壙

調査区の北側に位置し南西8.5m にＳＴ001古墳が、南東17.5m にＳＴ002古墳がある。平面円形で規模は長径1.5m、短径1.25m、深さ0.22m を測る。壙底は平坦で、径10～20cm程の転石が10個ほど散在する。周壁は緩やかに掘り込む。埋土は黒色土。出土遺物は土師器杯２点があるが、紛失してしまい図示していない。中世のものと記憶している。

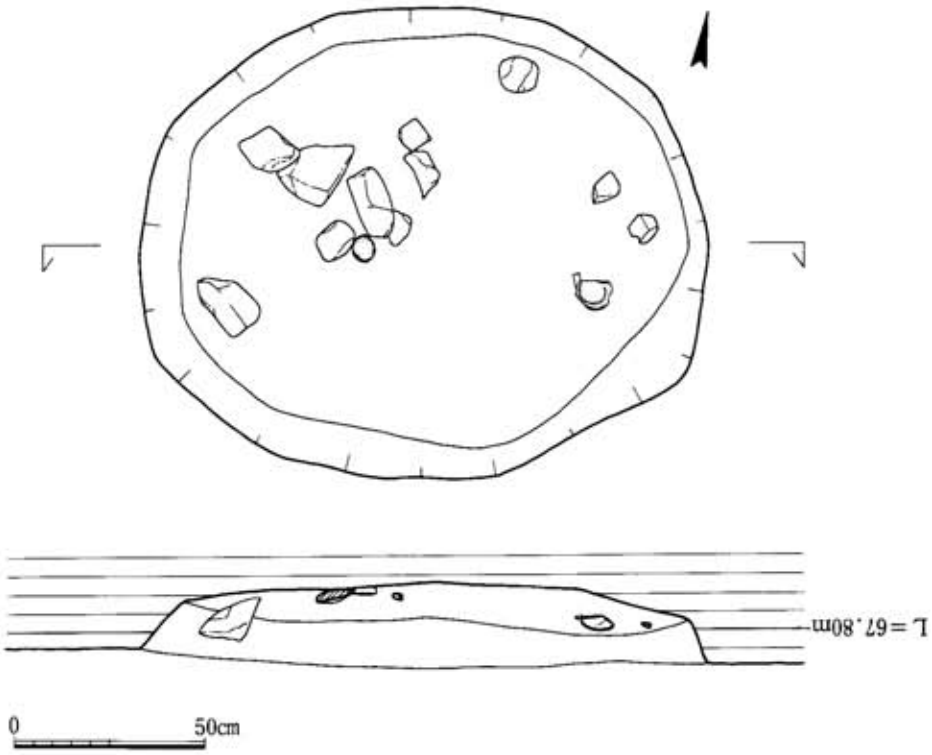


Fig.137　SK003土壙（1/20）

〈D地区の調査〉

本調査区で検出した遺構は横穴式古墳１基と土壙１基である。

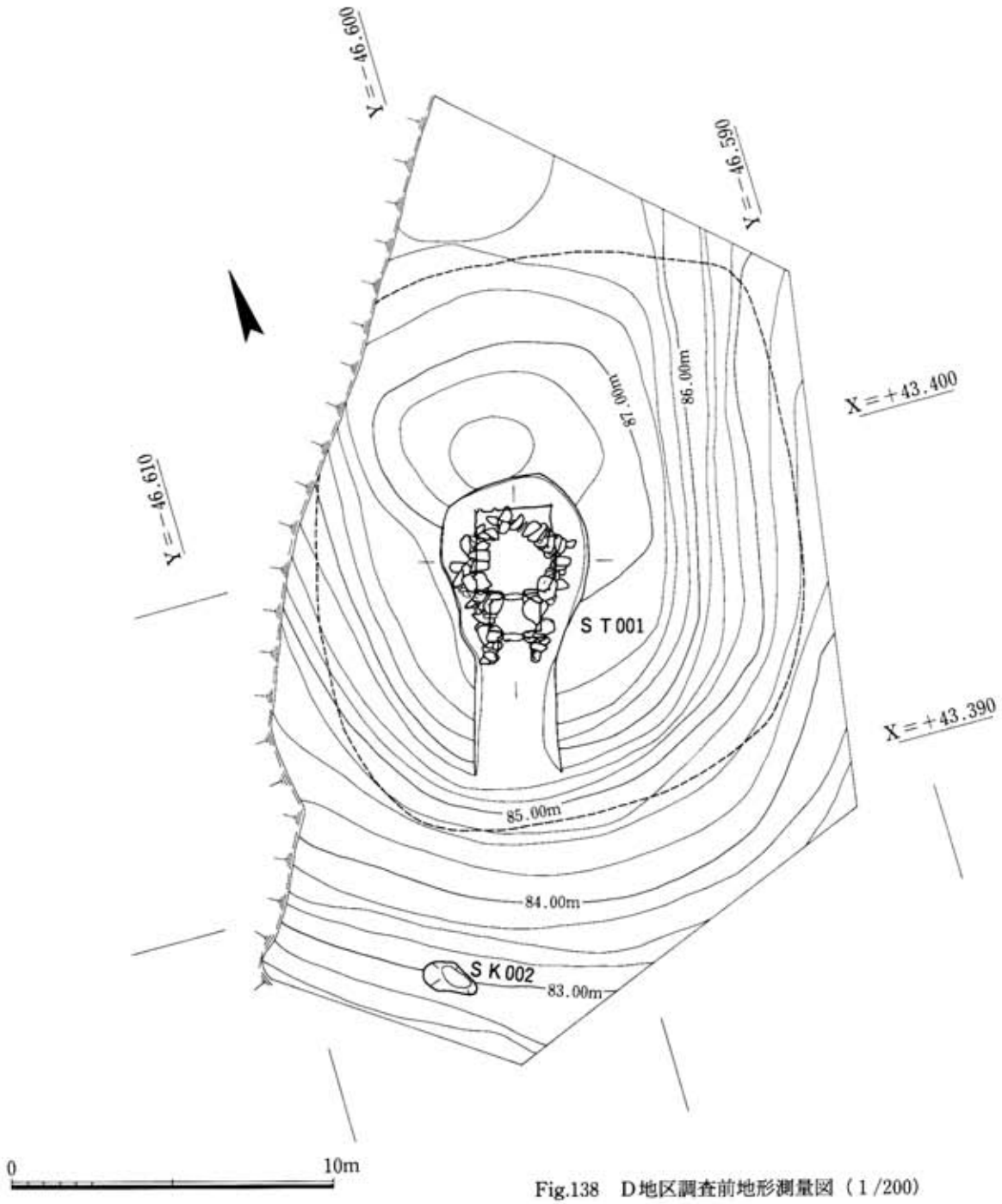


Fig.138　D地区調査前地形測量図（１/200）

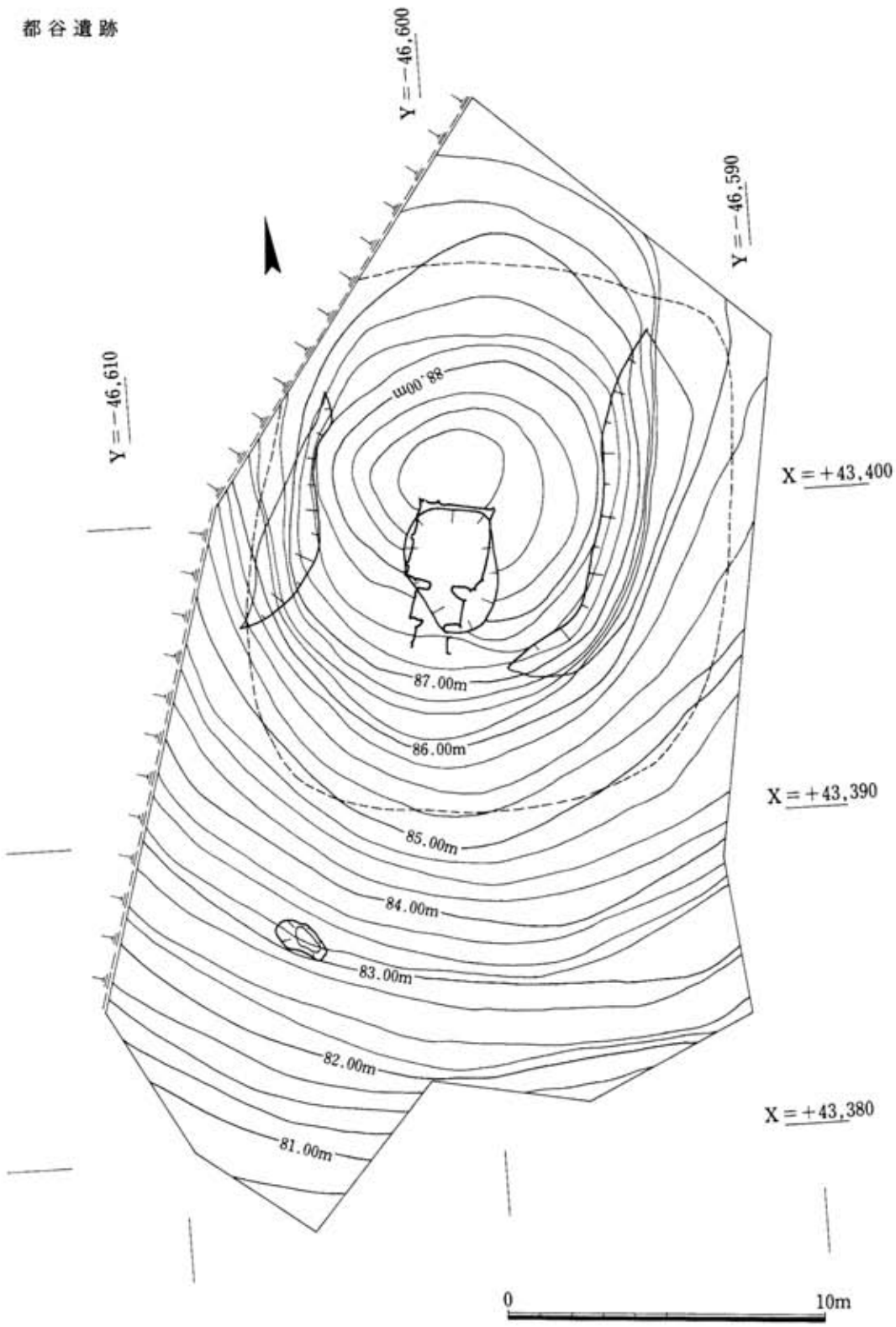


Fig.139　D地区調査後地形測量図（1/200）

1．ＳＴ001古墳

(1) 概　要

南にのびる丘陵の頂部に築造され、南方13m にはＳＫ002土壙がある。墳丘盛土は高さ約1.5m 遺存し、石室天井石は欠失する。内部主体は複室両袖型横穴式石室で玄室平面形態は長方形、石室掘り方は不整楕円形である。築造時期は小田編年IV期で追葬はVI期まで。

(2) 墳丘・周溝

墳丘盛土は墳丘基底面から高さ約1.5m 遺存し、墳丘裾部東西両側は削平を受ける。従って墳丘径は不明であるが大方11～12m と推定する。本墳は南方にのびる丘陵の頂部に築造されているため、丘陵上方からの流水を下方に流すための馬蹄形溝を掘削する必要もなく、また周溝もない。石室構築に先行しての地山整形は墳丘裾部を削り出し、また平坦な墳丘基底面を作出する。墳丘裾部の削り出しは墳丘西側でそれを確認でき、北側、東側では撹乱、削平により不明。墳丘盛土の単位は細かく褐色土と地山土の黄白色土を版築状に盛り上げる。

(3) 内部主体

複室両袖型の横穴式石室である。南側の斜面に向かって開口し、主軸をN22°Eにとる。墳丘は比較的遺存しており、石室は天井石を欠失する。

玄室平面形態は右側壁側がやや胴張り気味の長方形で前室は横長の長方形である。規模は石室全長4.75m、玄室中央長2.5m、中央幅2.4m、前室中央長0.95m、中央幅1.55m を測る。

奥壁は腰石に1.8×0.8m 程の横長石材と径0.4m 程の方形石材を配し、その上方は長さ50cm 程の横長石材を４～５段積み上げる。横目地は通らず、遺存高は２ m を測る。右側壁は腰石に1.1×0.6、1.1×0.4、0.4×0.5m 程の石材３石を横位に配し、その上方は奥壁と同大の石材を２～４段横積みする。左側壁は1.2×0.7、0.8×0.5、0.4×0.7m 程の石材３石を横位に配し、その上方は右側壁と同大の石材を横積みするが、左右側壁とも石材を雑然と積み上げており横目地は通らない。奥壁、左右側壁の腰石は若干内傾しており、その上部の石積みの持ち送りは上方にしたがってきつくなる。奥壁上部石積みの内傾化角度は35°である。

玄門部は左右袖石に0.5×0.5m 程の角ばった石材をたて、床面には框石をたてる。玄門幅は0.65m を測る。

前室右側壁は長さ0.5～0.8m 程の横長石材を横積みする。左側壁腰石は0.8×0.4m 程の横長石材を配し、その上は径30cm程の小形の石材を積み上げる。前門袖石は玄門のそれよりやや小形で、床面には框石を配する。前門幅は0.7mを測る。この前門に短い羨道を連接するがこれは横長石材を積み上げたもので、羨道長0.7mを測る。羨門前の窪みは木の根の撹乱によるものである。

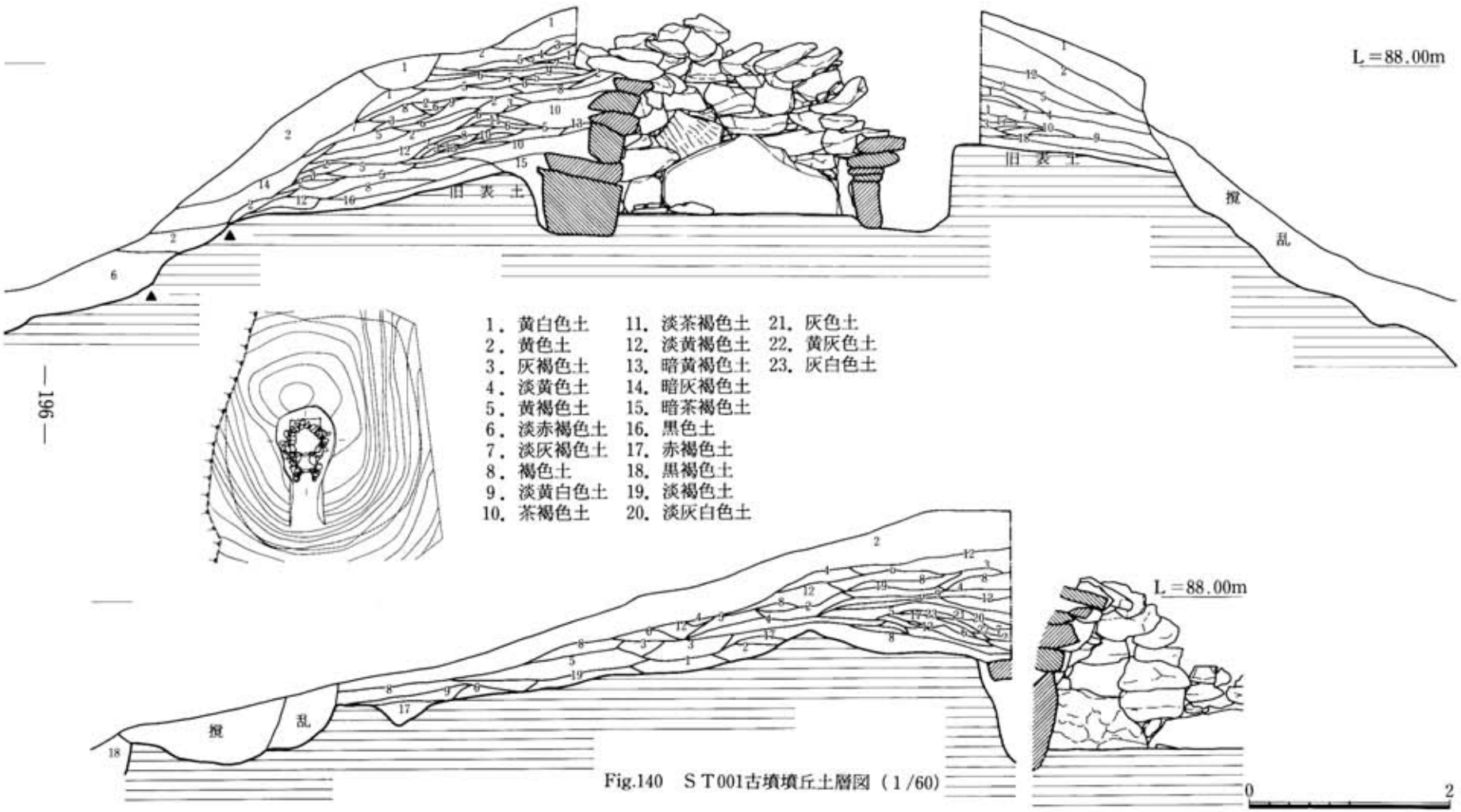


Fig.140　ＳＴ001古墳墳丘土層図（1/60）

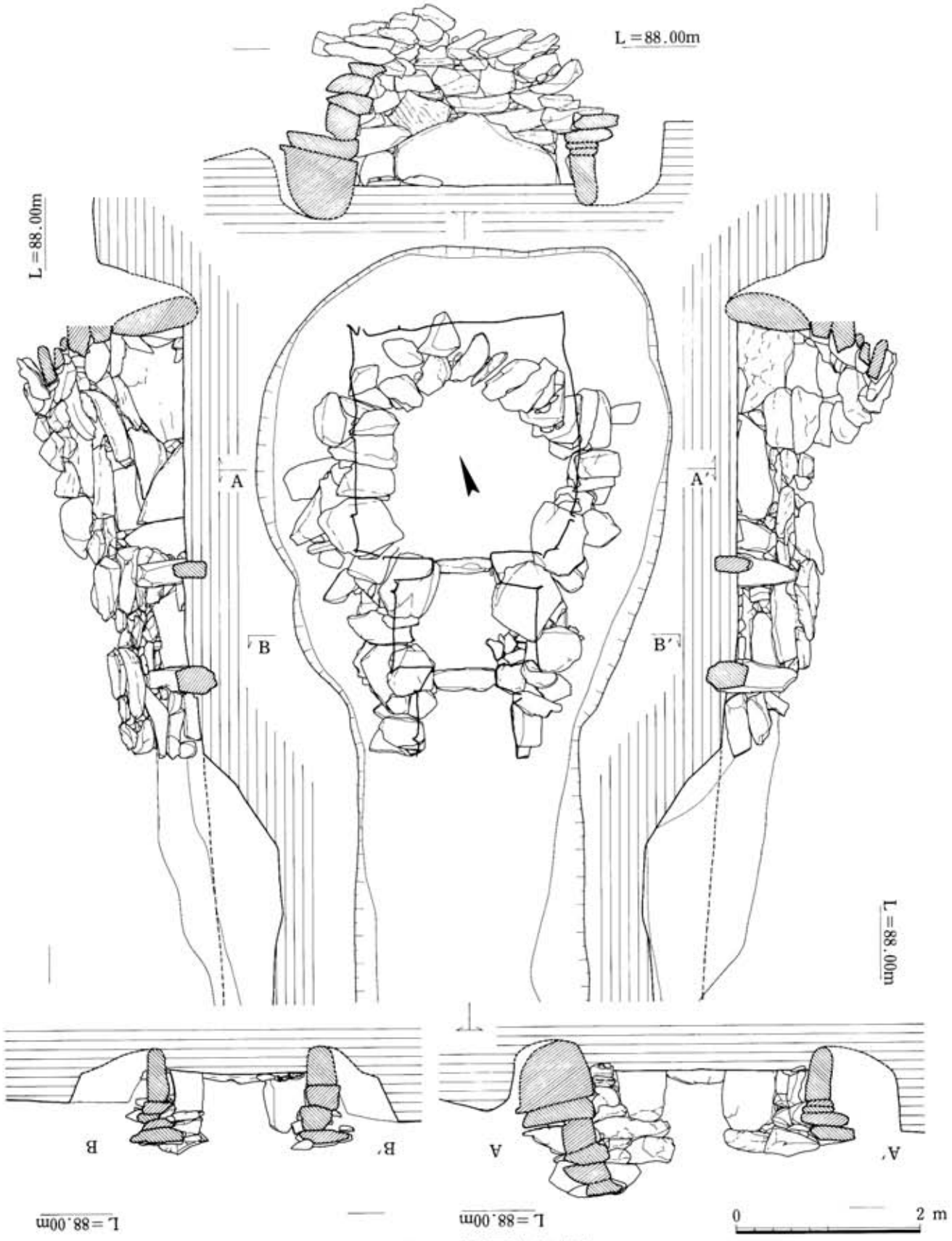


Fig.141　ＳＴ001古墳石室（1/60）

(4) 出土遺物

須恵器

杯蓋はC類(963、964) E類(961)杯身はC類(965、966、967) E類(968、969)がある。961、963、964は杯蓋、961はつまみはなくかえりは短く断面三角形、963は口縁部約1/5残存する。964は天井部回転ヘラケズリ。962は短頸壺の蓋、体部で大きく屈曲し、天井部は回転ヘラケズリ。965～969は杯身、965～967は口縁部のみ残存。たちあがり高は0.9～1.1cm。968、969は底部平坦でヘラ切り未調整。口径11.6cm、器高3.6cm。970は甕の底部。971は短頸壺、肩がはり肩部にカキ目調整を施す。972は平瓶の口縁部。973～975は甕の口縁部。

鉄　器

鉄鏃(976)椿葉式で鏃身基部を欠損する。

刀子(977)棟側が角関となる。全長11.3cm、刃部幅1.1cm。

装身具

978は勾玉。片側穿孔で石質は緑色凝灰岩。979～982は耳環、すべて緑青がふく。980は約1/2金張りが残る。

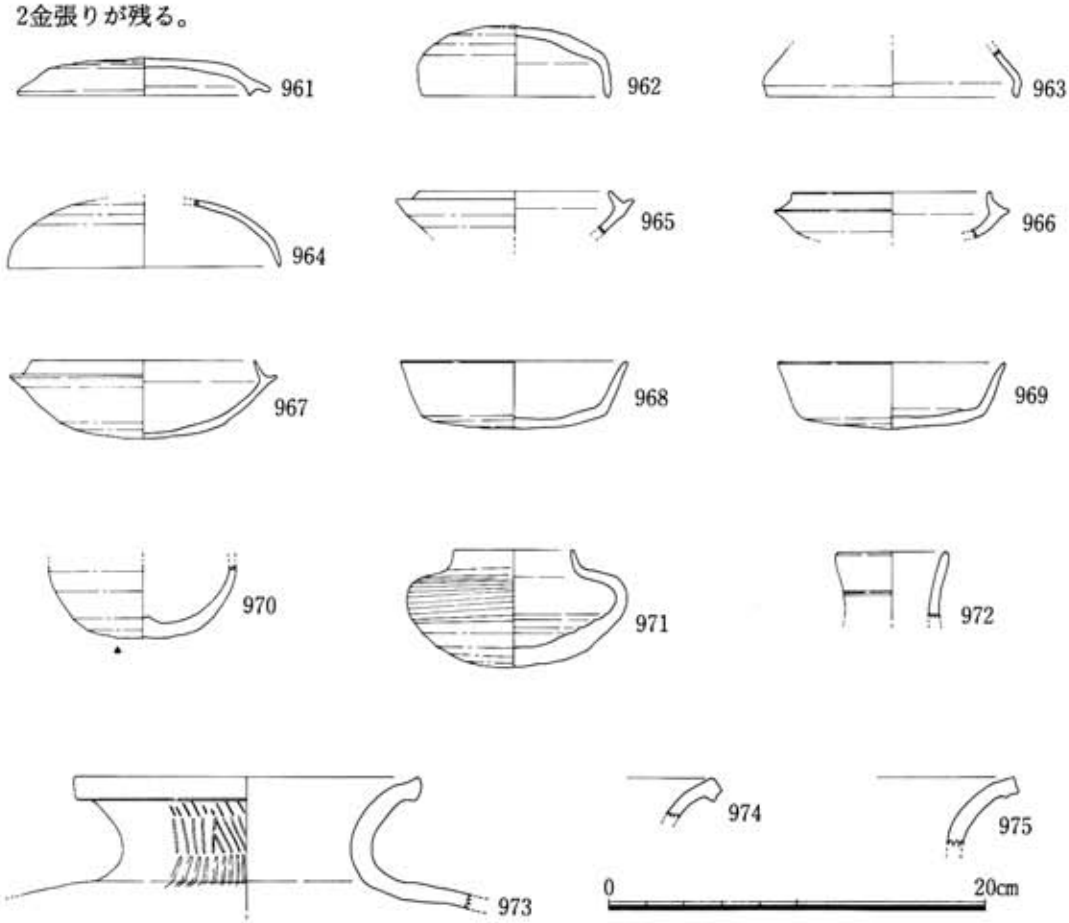


Fig.142　ST001古墳出土須恵器（1/4）

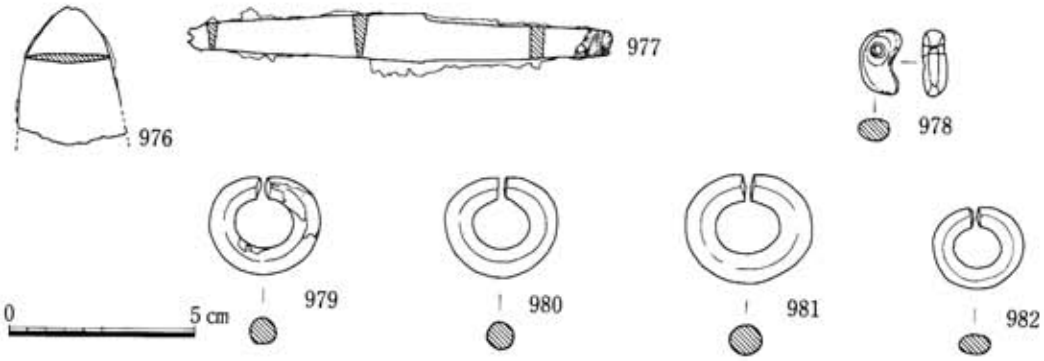


Fig.143　ＳＴ001古墳出土鉄器・装身具（１/２）

Tab.20　ＳＴ001古墳、ＳＫ002土壙出土土器一覧表

（　）は推定

Fig-図番号 (PL番号)	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
142-961 (PL.73)	ＳＴ001 石室内	杯蓋 (須恵器)	口径　11.2 器高　2.0	かえりは断面三角形で、天井部は調整不明瞭。	橙褐色	不　良	85-3615 900282
-962 (　〃　)	ＳＴ001 墳丘盛土	蓋 (須恵器)	口径　4.8 器高　3.8	体部で大きく屈曲する。天井部は回転ヘラケズリ。砂粒を多く含む。	灰　色	普　通	85-3626 900285
-963	ＳＴ001 墳丘盛土	杯蓋 (須恵器)	口径　(13.0)	口縁部約1/5残存。口縁端部で屈曲する。	灰　色	普　通	85-3624
-964 (　〃　)	ＳＴ001 石室内	杯蓋 (須恵器)	口径　(14.2)	天井部は回転ヘラケズリ。	灰黒色	普　通	85-3617 901267
-965	ＳＴ001 墳丘盛土	杯身 (須恵器)	口径　(10.0) たちあがり高0.9	たちあがりは内傾し、受部は外上方にのびる。	灰　色	普　通	85-3623
-966	ＳＴ001 墳丘盛土	杯身 (須恵器)	口径　10.4 たちあがり高1.1	たちあがりは直立気味。受部は水平にのびる。	灰　色	普　通	85-3622
-967 (　〃　)	ＳＴ001 羨道付近盛土	杯身 (須恵器)	口径　11.6 器高　4.2 たちあがり高1.0	たちあがりは、やや内傾する。底部回転ヘラケズリ。	灰白色	普　通	85-3619 901268
-968 (　〃　)	ＳＴ001 石　室	杯身 (須恵器)	口径　11.6 器高　3.6	底部ヘラ切り未調整。底部は平坦で、口縁部にかけて外上方に直線的にのびる。	橙褐色	普　通	85-3616 900283
-969 (　〃　)	ＳＴ001 石　室	杯身 (須恵器)	口径　11.8 器高　3.6	底部ヘラ切り未調整。底部は平坦で、口縁部にかけて外上方に直線的にのびる。	橙褐色	普　通	85-3614 900281

（ ）は推定

Fig.図番号 (PL番号)	出土地点	器種	法量cm	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
142-970 (PL.73)	ST001 墳丘盛土	甕 (須恵器)	——	胴下半部残存。底部回転ヘラケズリ。	灰黒色	普通	85-3625
-971	ST001 前室床面	短頸壺 (須恵器)	口径 6.0 器高 6.2	肩がはり、カキ目調整を施す。底部不定方向ヘラケズリ後ナデ。砂粒を多く含む。	灰色	普通	85-3618 900284
-972	ST001 墳丘盛土	平瓶 (須恵器)	口径 5.6	口頸部約1/3残存。頸部中位に一条の沈線が入る。	灰黒色	普通	85-3621
-973	ST001 墳丘盛土	甕 (須恵器)	口径 18.0	口縁端部は丸くおさめる。	灰色	普通	85-3629
-974	ST001 墳丘盛土	甕 (須恵器)	——	口縁端部は外側に肥厚し、断面方形におさめる。頸部外面に櫛描波状文を施す。	灰色	普通	85-3631
-975	ST001 表採	甕 (須恵器)	——	口縁端部は外側に肥厚し、端部外面に一条の沈線を施す。	灰黄色	普通	85-3620
145-983	SK002	高杯 (須恵器)	脚高 2.5	脚部中位に二条の沈線あり、杯底部はカキ目調整を施す。	灰色	普通	85-3628
-984	SK002	甕 (須恵器)	——	口縁端部は外側に肥厚し、稜を有す。	橙褐色	普通	85-3627
-985 (PL.74)	SK002	甕 (須恵器)	胴径 (21.6)	胴外全面に平行タタキ、内全面に同心円文タタキを施す。肩部内面はナデ消す。	灰色	普通	86-1000 901483 901484
-986 (〃)	SK002	壺 (須恵器)	胴径 18.6	頸部を欠損する。胴部最大径は上位にある。外面摩耗のため調整不明瞭。	灰白色	不良	85-3632 900286
-987	SK002	高杯 (須恵器)	——	脚部のみ残存。摩耗のため調整不明瞭。赤焼き。	赤褐色	不良	85-3630

2．SK002土壙

調査区の南端に位置し、北方13m、標高4 m上にはST001古墳が築造される。出土遺物から時期はST001古墳と並行するが、その関係は不明。平面不整楕円形で、長径1.75m、短径0.8 m、深さ0.6m を測る。壙底は平坦で直上から壺(986)が若干浮いた状態で甕(985)などが出土している。

(1) 出土遺物

すべて埋土中より出土している。983、987は高杯、脚部のみを残存する。984は甕の口縁部。985は甕、口頸部と胴部1/2を欠失する。986は壺、口頸部を欠失する。

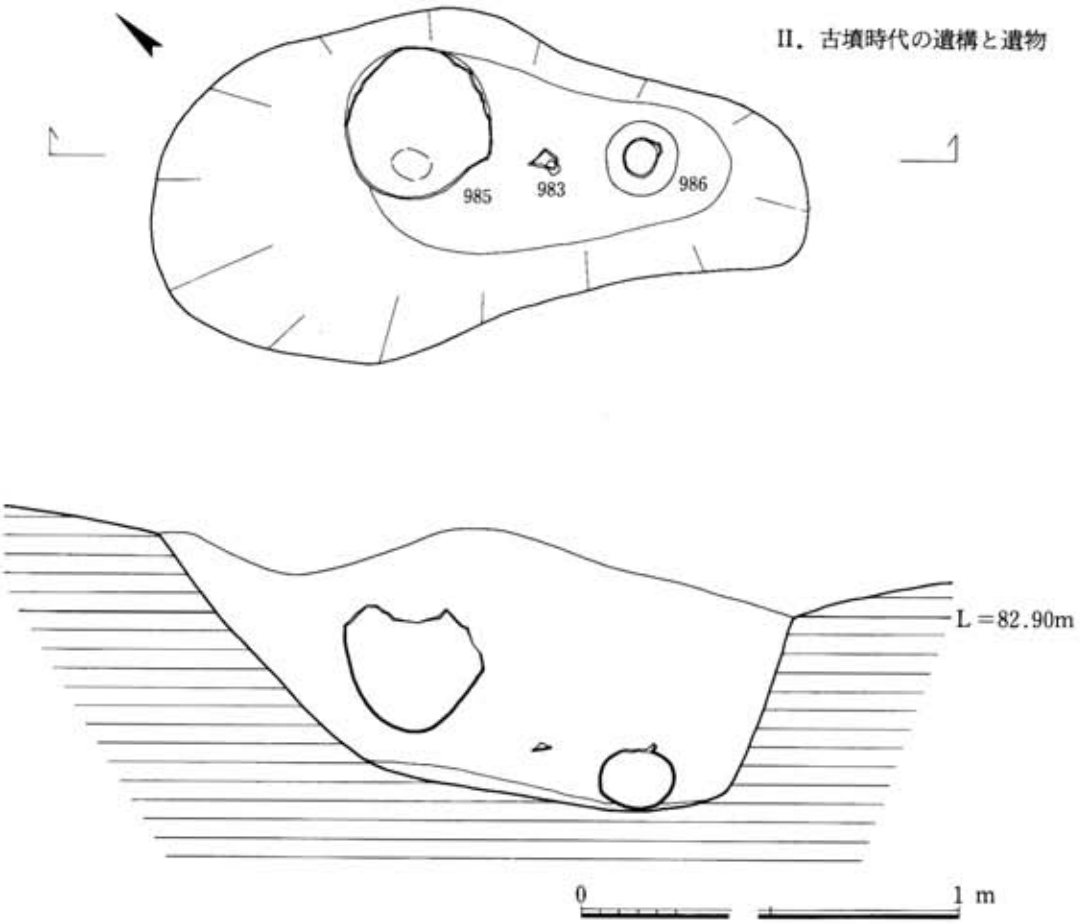


Fig.144　SK002土壙（1/20）

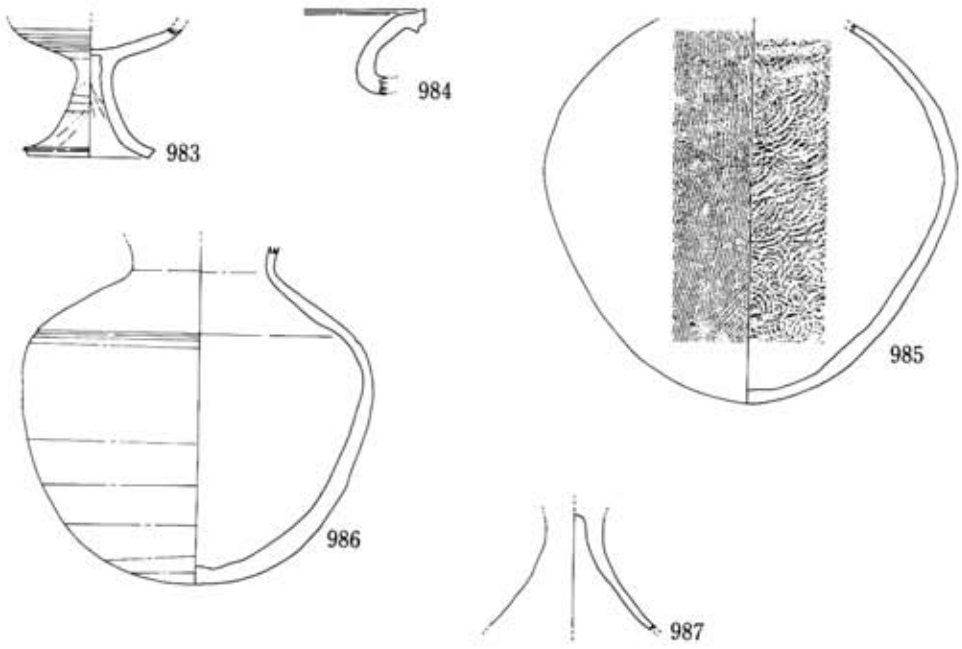


Fig.145　SK002土壙出土土器（1/4　985は1/8）

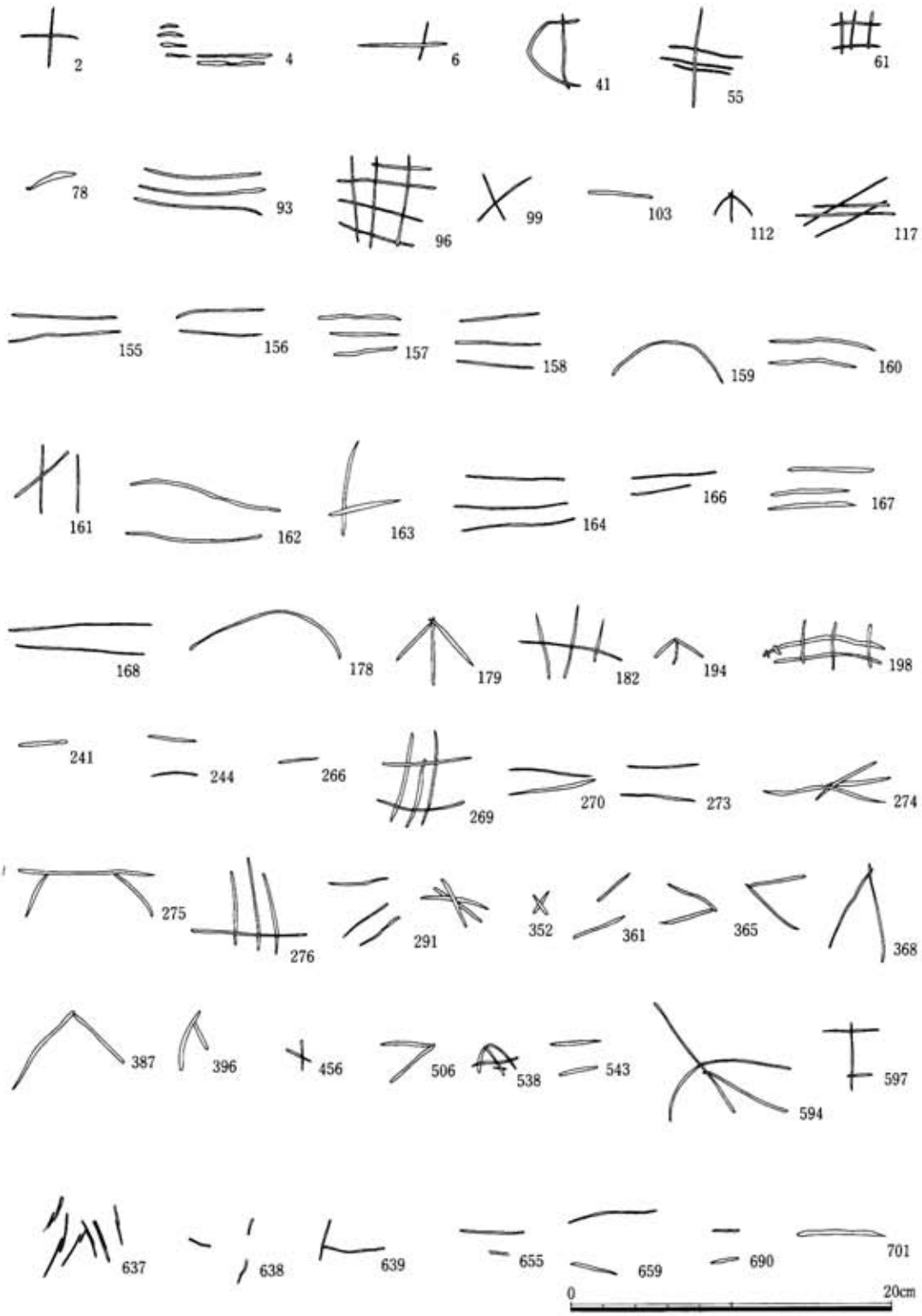


Fig.146　ヘラ記号一覧1（1/4）

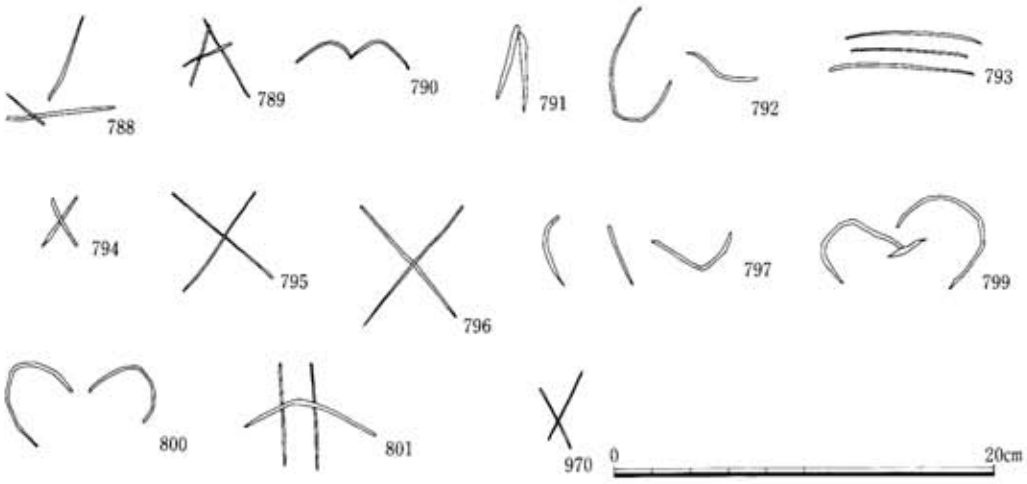


Fig.147　ヘラ記号一覧２（１/４）

Tab.21　馬具一覧表

地区	Fig.-図番号	出土地点	器　種	県遺物登録番号	地区	Fig.-図番号	出土地点	器　種	県遺物登録番号
B地区	32-131	ＳＴ002 羨道埋土	鐙	87-5128	B地区	45-235	ＳＴ004 羨道部	鐙	87-1720
	-132	ＳＴ002 羨道埋土	鐙	87-5130		63-333	ＳＴ008 羨道入口	杏　葉	87-5143
	-133	ＳＴ002 玄室埋土	鉸　具	87-5115		-334	ＳＴ008 前室部分床面	鐙（ハイ）　靼（ガ）	87-12076
	44-224	ＳＴ004 羨道部	轡	87-5132		64-335	ＳＴ008 前室部分床面	杏　葉	87-12075
	-225	ＳＴ004 羨道部	轡	87-5131		-336	ＳＴ008 前室部分床面	杏　葉	87-12074
	45-226	ＳＴ004 羨道部	鐙（ハイ）　靼（ガ）	87-5110		82-409	ＳＴ012 前室埋土	鐙	87-5160
	-227	ＳＴ004 羨道部	鐙（ハイ）　靼（ガ）	87-5109		-410	ＳＴ012 前室埋土	鐙	87-5162
	-228	ＳＴ004 羨道部	鉸　具	87-5181		-411	ＳＴ012 前室床面	鐙	87-5158
	-229	ＳＴ004 羨道部	鉸　具	87-5182		-412	ＳＴ012 前室埋土	鐙	87-5161
	-230	ＳＴ004 羨道部	鉸　具	87-5183		-413	ＳＴ012 前室右壁	鐙	87-5159
	-231	ＳＴ004 羨道部	不　明	87-5184		-414	ＳＴ012 前室床面	鉸　具	87-5169
	-232	ＳＴ004 羨道部	不　明	87-5185		-415	ＳＴ012 前室床面	鉸　具	87-5168
	-233	ＳＴ004 羨道部	鐙	87-1719		104-575	ＳＴ015 前室埋土	鐙	87-12048
	-234	ＳＴ004 羨道部	鐙	87-1721					

Tab.22　鉄器一覧表

地区	Fig.-図番号	出土地点	器種	県遺物登録番号	地区	Fig.-図番号	出土地点	器種	県遺物登録番号
A地区	13—32	ST001 前室右壁	不明	87-12305	B地区	43-220	ST004 羨道部	刀子	87-1717
	—33	ST001 前室右壁	不明	87-12306		-221	ST004 羨道部	刀子	87-1716
	—34	ST001 前室左壁	刀子	87-12094		-222	ST004 羨道部	鍔？	87-1718
	—35	ST001 前室左壁	刀子	87-12091		-223	ST004 羨道部	飾り金具	87-1722
	—36	ST001 前室左壁	刀子	87-12092		54-261	ST007 玄室床面	不明	87-5139
	—37	ST001 前室左壁	刀子	87-12093		-262	ST007 玄室床面	鍔	87-5142
B地区	23—71	ST001 墓道床面	弓付属金具	87-5108		-263	ST007 玄室床面	把元金具	87-5138
	—72	ST001 墓道床面	把元金具	87-5111		-264	ST007 玄室埋土	飾り金具	87-5149
	—73	ST001 前庭部	不明	86-463		63-330	ST008 羨道入口	弓付属金具	87-5155
	32-122	ST002 玄室埋土	鉄斧	87-5127		-331	ST008 羨道入口	留金具	87-5156
	-123	ST002 玄室埋土	弓付属金具	87-5122		-332	ST008 羨道埋土	留金具	87-5157
	-124	ST002 玄室埋土	弓付属金具	87-5121		82-408	ST012 前室右壁	刀子	87-5167
	-125	ST002 玄室埋土	弓付属金具	87-5123		94-467	ST014 玄室床面	刀子	87-5178
	-126	ST002 玄室埋土	刀子	87-5117		-468	ST014 墳丘表土	刀子	86-4032
	-127	ST002 玄室埋土	鞘尻金具	87-5116		-469	ST014 石室内	刀子	87-5179
	-128	ST002 玄室埋土	鎹（かすがい）	87-5125		-470	ST014 玄室床面	刀子	87-5177
	-129	ST002 玄室埋土	鎹（かすがい）	87-5124		-471	ST014 前室床面	鎌	87-5176
	-130	ST002 玄室埋土	鎹（かすがい）	87-5126		104-574	ST015 前室	鞘尻金具	87-12051
	-134	ST002 玄室埋土	不明	87-5118		-576	ST015 玄門部	弓付属金具	87-12047
	-135	ST002 玄室埋土	不明	87-5119		-577	ST015 前室	留金具	87-12049
	-136	ST002 玄室埋土	不明	87-5120		-578	ST015 前室埋土	留金具	87-12050
	-137	ST002 羨道埋土	不明	87-5129		-579	ST015 前室	不明	87-12046
	35-154	ST003 玄室埋土	刀子	87-5107		110-607	ST016 玄室埋土	刀子	87-12039
	43-219	ST004 羨道部	刀子	87-1715		-608	ST016 玄室床面	不明	86-4057

地区	Fig.-図番号	出土地点	器種	県遺物登録番号	地区	Fig.-図番号	出土地点	器種	県遺物登録番号
B地区	122-720	ST017 玄室埋土	刀子	87-12071	C地区	132-829	ST001 石室床面	刀子	87-12313
	-721	ST017 墳丘列石外	刀子	87-12072		-830	ST001 羨道埋土	刀子	86-790
	125-785	ST018	刀子	87-12073		-831	ST001 石室床面	刀子	87-12312
C地区	132-827	ST001 玄室床面	不明	87-12317		135-854	ST002 石室埋土	刀子	86-4979
	-828	ST001 石室床面	刀子	87-12314	D地区	143-977	ST001 前室埋土	刀子	86-4922

Tab.23　鉄鏃一覧表

（　）は推定

地区	Fig.-図番号	出土地点	形態	計測値(cm) 鏃身長	計測値(cm) 鏃身幅	県遺物登録番号	地区	Fig.-図番号	出土地点	形態	計測値(cm) 鏃身長	計測値(cm) 鏃身幅	県遺物登録番号
A地区	12－ 9	ST01 前室右壁	斧箭	——	4.05	87-12097	A地区	12－26	ST01 前室左壁	頸部	——	——	87-12078
	－10	ST01 前室右壁	斧箭	8.75	3.15	87-12095		－27	ST01 前室右壁	頸部	——	——	87-12304
	－11	ST01 前室左壁	斧箭	9.1	1.35	87-12090		－28	ST01 前室左壁	頸部	——	——	87-12087
	－12	ST01 前室埋土	三角形	2.95	3.6	87-12096		－29	ST01 前室右壁	頸部	——	——	87-12303
	－13	ST01 前室左壁	片刃箭	1.7	1.1	87-12081		－30	ST01 前室左壁	小形柳葉	——	——	87-12082
	－14	ST01 前室左壁	小形柳葉	3.0	1.05	87-12088		－31	ST01 前室左壁	小形柳葉	3.05	1.0	87-12080
	－15	ST01 前室右壁	小形柳葉	2.4	0.8	87-12099	B地区	23－69	ST001 前室埋土	主頭	8.8	3.6	87-1725
	－16	ST01 前室左壁	小形柳葉	2.8	1.0	87-12083		－70	ST001 前室埋土	斧箭	——	3.2	87-1723
	－17	ST01 前室右壁	小形柳葉	3.3	1.05	87-12302		32-119	ST002 玄室埋土	三角形	(2.3)	(3.6)	87-5114
	－18	ST01 前室右壁	小形柳葉	3.2	1.15	87-12079		-120	ST002 玄室埋土	頸部	——	——	87-5112
	－19	ST01 前室右壁	小形柳葉	3.15	1.1	87-12098		-121	ST002 玄室埋土	頸部	——	——	87-5113
	－20	ST01 前室左壁	小形柳葉	3.15	1.2	87-12084		35-147	ST003 石室埋土	不明	——	——	87-1724
	－21	ST01 前室右壁	小形柳葉	3.3	0.85	87-12301		-148	ST003 玄室埋土	小形柳葉	1.0	0.9	87-5103
	－22	ST01 前室左壁	小形柳葉	2.4	0.85	87-12085		-149	ST003 玄室埋土	頸部	——	——	87-5105
	－23	ST01 前室右壁	小形柳葉	2.15	0.7	87-12100		-150	ST003 玄室埋土	頸部	——	——	87-5101
	－24	ST01 前室左壁	頸部	——	——	87-12089		-151	ST003 玄室埋土	頸部	——	——	87-5102
	－25	ST01 前室左壁	頸部	——	——	87-12086		-152	ST003 玄室埋土	頸部	——	——	87-5104

（　）は推定

地区	Fig.-図番号	出土地点	形態	計測値(cm) 鏃身長	計測値(cm) 鏃身幅	県遺物登録番号
B地区	35-153	ST003 玄室埋土	茎部	——	——	87-5106
	43-201	ST004 羨道部	斧箭	7.6	2.7	86-3973
	-202	ST004 前室	柳葉	5.4	1.3	86-3968
	-203	ST004 前室	柳葉	5.3	1.3	86-3966
	-204	ST004 前室	柳葉	4.8	1.3	86-3970
	-205	ST004 前室	柳葉	5.3	1.3	86-3971
	-206	ST004 前室	柳葉	5.1	1.3	86-3967
	-207	ST004 前室	柳葉	——	1.3	86-3969
	-208	ST004 羨道部	小形柳葉	2.6	1.0	86-3960
	-209	ST004 羨道部	小形柳葉	2.5	1.2	86-3959
	-210	ST004 羨道部	小形柳葉	2.3	1.1	86-3961
	-211	ST004 羨道部	頸部	——	——	86-3972
	-212	ST004 羨道部	頸部	——	——	86-3958
	-213	ST004 羨道部	頸部	——	——	86-3957
	-214	ST004 羨道部	茎部	——	——	86-3965
	-215	ST004 羨道部	茎部	——	——	86-3963
	-216	ST004 羨道部	茎部	——	——	86-3974
	-217	ST004 羨道部	頸部	——	——	86-3962
	-218	ST004 羨道部	頸部	——	——	86-3964
	54-250	ST007 玄室床面	主頭	——	3.8	87-5137
	-251	ST007 玄室埋土	柳葉	——	3.3	87-5140
	-252	ST007 玄室埋土	柳葉	5.4	2.6	87-5145
	-253	ST007 玄室埋土	斧箭	6.4	4.4	87-5144
	-254	ST007 玄室埋土	柳葉	——	1.9	87-5146
	54-255	ST007 玄室床面	長三角形	6.3	(5.5)	87-5134
	-256	ST007 玄室床面	長三角形	——	——	87-5133
	-257	ST007 玄室床面	小形柳葉	3.1	1.0	87-5136
	-258	ST007 玄室床面	小形柳葉	——	1.1	87-5135
	-259	ST007 玄室埋土	小形柳葉	1.8	0.9	87-5148
	-260	ST007 玄室埋土	小形柳葉	4.2	1.3	87-5147
	63-324	ST008 前室埋土	三角形	3.1	3.1	87-5150
	-325	ST008 羨道入口	柳葉	(6.2)	2.3	87-5154
	-326	ST008 羨道入口	小形柳葉	——	1.0	87-5153
	-327	ST008 羨道入口	小形柳葉	3.0	1.2	87-5152
	-328	ST008 羨道入口	頸部	——	——	87-5151
	-329	ST008 玄室埋土	頸部	——	——	87-5141
	82-403	ST012 前室右壁	斧箭	7.6	2.6	87-5163
	-404	ST012 前室右壁	斧箭	7.9	3.0	87-5165
	-405	ST012 前室埋土	三角形	3.7	2.8	87-5166
	-406	ST012 玄室床面	柳葉	——	1.5	87-5171
	-407	ST012 前室床面	小形柳葉	1.5	0.9	87-5164
	94-462	ST014 玄室床面	主頭	——	2.7	87-5172
	-463	ST014 玄室床面	長三角形	4.2	2.7	87-5175
	-464	ST014 玄室床面	柳葉	——	1.3	87-5170
	-465	ST014 玄室床面	三角形	2.1	1.6	87-5174
	-466	ST014 玄室床面	柳葉	2.5	1.4	87-5173
	104-569	ST015 前室	斧箭	5.0	2.0	87-12041
	-570	ST015 前室	主頭	——	3.1	87-12044

（　）は推定

地区	Fig.-図番号	出土地点	形態	計測値(cm) 鏃身長	計測値(cm) 鏃身幅	県遺物登録番号
B地区	104-571	ST015 前室	小形柳葉	2.9	1.0	87-12042
	-572	ST015 前室	頸部	——	——	87-12045
	-573	ST015 玄室床面	頸部	——	——	87-12040
	110-601	ST016 玄室床面	柳葉	7.1	3.7	87-12033
	-602	ST016 玄室埋土	柳葉	——	3.6	87-12034
	-603	ST016 玄室床面	斧箭	6.0	(2.7)	87-12035
	-604	ST016 玄室埋土	長三角形	4.2	2.5	87-12037
	-605	ST016 玄室埋土	長三角形	——	2.7	87-12036
	-606	ST016 玄室埋土	小形柳葉	2.1	0.9	87-12038
	122-711	ST017 羨道部	斧箭	7.0	3.1	87-12063
	-712	ST017 玄室埋土	斧箭	5.7	(2.3)	87-12067
	-713	ST017 玄室埋土	圭頭	——	3.2	87-12065
	-714	ST017 羨道部	圭頭	——	3.4	87-12069
	-715	ST017 羨道入口	——	——	——	87-12070
	-716	ST017 玄室床面	鏨箭	——	1.0	87-12061
	-717	ST017 玄室入口	鏨箭	——	0.9	87-12068
	-718	ST017 玄室埋土	小形柳葉	3.5	0.9	87-12064
	-719	ST017 玄室床面	小形柳葉	3.5	0.9	87-12062
C区	132-819	ST001 前室床面	斧箭	6.0	4.9	87-12307
	-820	ST001 床面直上	斧箭	(7.4)	(2.8)	87-12309
C地区	132-821	ST001 床面直上	長三角形	4.0	2.8	87-12308
	-822	ST001 周溝	圭頭	5.3	2.9	87-12318
	-823	ST001 床面直上	頸部	——	——	87-12311
	-824	ST001 前室埋土	頸部	——	——	87-12316
	-825	ST001 前室埋土	頸部	——	——	87-12315
	-826	ST001 前室直上	頸部	——	——	87-12310
	135-841	ST002 石室埋土	柳葉	——	3.1	86-4976
	-842	ST002 石室埋土	柳葉	——	——	86-4977
	-843	ST002 石室埋土	圭頭	——	3.6	86-4975
	-844	ST002 石室埋土	柳葉	——	1.4	86-4978
	-845	ST002 石室埋土	柳葉	——	1.3	86-800
	-846	ST002 石室埋土	頸部	——	——	86-4801
	-847	ST002 石室埋土	頸部	——	——	86-799
	-848	ST002 石室埋土	頸部	——	——	86-798
	-849	ST002 石室埋土	頸部	——	——	86-796
	-850	ST002 石室埋土	頸部	——	——	86-797
	-851	ST002 石室埋土	頸部	——	——	86-795
	-852	ST002 玄室埋土	小形柳葉	——	1.7	86-4973
	-853	ST002 玄室埋土	頸部	——	1.2	86-4974
D区	143-976	ST001 玄室埋土	柳葉	——	——	86-4924

Tab.24　紡錘車一覧表

地区	Fig.-図番号	出土地点	種別	径	色調	県遺物登録番号
B区	76-386	ST011 前室	紡錘車？	1.8×1.9	灰褐色	86-481
C区	95-504	ST014 墳丘表土	紡錘車	3.7×3.8	灰色	86-4033
B区	123-783	ST017 墳丘D区羨道外傾土器群	紡錘車	——	緑灰色	86-3796
C区	132-833	ST001 羨道埋土	紡錘車	——	灰白色	86-788

Tab.25　装身具一覧表

（　）は推定

地区	Fig.-図番号	出土地点	種別	外径(cm) タテ×ヨコ	色調	県遺物登録番号
A地区	13-38	ST01 前室	耳環	2.9×3.2	漆黒色	86-459
B地区	23-988	ST001 前室埋土	耳環	2.5×2.8	青緑色	86-460
	-989	ST001 前室埋土	耳環	2.5×2.7	青緑色	86-461
	-990	ST001 墓道床面	耳環	2.1×2.0	青緑色	86-462
	46-236	ST004 石室埋土	耳環	2.8×3.0	青緑色	86-464
	-237	ST004 石室埋土	耳環	2.2×2.2	金色	86-465
	-238	ST004 石室埋土	耳環？	1.1×1.3	漆黒色	86-466
	55-265	ST007 玄門床面	耳環	2.3×2.6	青緑色	86-467
	64-337	ST008 羨道入口	土玉	0.7×0.8	黒色	86-469
	-338	ST008 羨道入口	土玉	0.5×0.8	黒色	86-470
	-339	ST008 羨道入口	土玉	0.8×0.8	黒色	86-471
	-340	ST008 羨道入口	ガラス玉	0.3×0.5	群青色	86-474
	-341	ST008 羨道入口	ガラス玉	0.3×0.5	青緑色	86-472
	-342	ST008 羨道入口	ガラス玉	0.2×0.4	青緑色	86-473
	-343	ST008 羨道入口	ガラス玉	0.2×0.4	青緑色	86-477
	-344	ST008 羨道入口	ガラス玉	0.3×0.3	群青色	86-476
	-345	ST008 羨道入口	ガラス玉	0.3×0.4	群青色	86-475
	-346	ST008 羨道入口	管玉	2.3×0.8	暗緑色	86-480
	-347	ST008 羨道入口	管玉	2.0×0.8	暗緑色	86-479
	-348	ST008 羨道入口	管玉	1.1×0.5	褐色	86-478
	81-416	ST012 前室床面	耳環	2.2×2.4	青緑色	86-482
	95-472	ST014 石室内	切子玉	2.7×1.7	透明	86-4004
	-473	ST014 玄室床面	切子玉	2.5×1.5	透明	86-484
	-474	ST014 玄室床面	切子玉	2.6×1.7	透明	86-494
	-475	ST014 玄室床面	切子玉	2.4×1.8	透明	86-496
B地区	95-476	ST014 玄室床面	切子玉	2.2×1.5	透明	86-495
	-477	ST014 玄室床面	切子玉	2.1×1.4	透明	86-493
	-478	ST014 玄室床面	切子玉	1.9×1.4	透明	86-492
	-479	ST014 玄室床面	管玉	2.2×1.2	黄土色	86-497
	-480	ST014 玄室床面	角玉	1.3×1.1	薄緑色	86-498
	-481	ST014 玄室床面	扁平玉	1.2×0.9	透明	86-4296
	-482	ST014 玄室床石の下土中	丸玉	1.2×1.3	朱色	86-4030
	-483	ST014 玄室床面	丸玉	1.1×1.3	朱色	86-499
	-484	ST014 玄室床面	丸玉	0.9×1.0	赤色	86-500
	-485	ST014 玄室床面	丸玉	1.3×1.1	緑色	86-4294
	-486	ST014 玄室床面	丸玉	0.9×1.2	緑色	86-4295
	-487	ST014 玄室内	ガラス玉	0.7×1.0	群青色	86-4021
	-488	ST014 玄室内	ガラス玉	0.6×0.8	群青色	86-4023
	-489	ST014 玄室内	ガラス玉	0.5×0.9	群青色	86-4024
	-490	ST014 玄室内	ガラス玉	0.8×0.8	群青色	86-4022
	-491	ST014 玄室内	ガラス玉	0.5×0.7	青色	86-4029
	-492	ST014 玄室内	ガラス玉	0.4×0.8	群青色	86-4025
	-493	ST014 玄室内	ガラス玉	0.3×0.6	青緑色	86-4027
	-494	ST014 玄室内	ガラス玉	0.4×0.7	青緑色	86-4026
	-495	ST014 玄室内	ガラス玉	0.4×0.5	青緑色	86-4028
	-496	ST014 玄室床面	耳環	2.7×2.8	漆黒色	86-4297
	-497	ST014 玄室床面	耳環	2.7×2.8	漆黒色	86-4298
	-498	ST014 玄室床面	耳環	2.6×2.8	漆黒色	86-4299
	-499	ST014 玄室床面	耳環	2.6×2.9	金色	86-4300
	-500	ST014 玄室床面	耳環	3.1×3.3	漆黒色	86-4001

（　）は推定

地区	Fig.-図番号	出土地点	種　別	外径(cm) タテ×ヨコ	色　調	県遺物登録番号	地区	Fig.-図番号	出土地点	種　別	外径(cm) タテ×ヨコ	色　調	県遺物登録番号
B地区	95-501	ST014 玄室床面	耳　環	2.3×2.5	漆黒色	86-4002	B地区	110-620	ST016 玄室床面	耳　環	2.2×2.3	漆黒色	86-4044
	-502	ST014 墳丘表土	耳　環	3.0×3.3	漆黒色	86-4031		123-722	ST017 玄室床面	土　玉	0.7×0.8	黒　色	86-4085
	-503	ST014 玄室床面	勾　玉	3.2×1.2	緑　色	86-483		-723	ST017 玄室床面	土　玉	0.6×0.7	黒　色	86-4086
	-505	ST014 玄室床面	青銅鋲	(6.2)×(6.2)	青緑色	86-4003		-724	ST017 玄室床面	土　玉	0.5×0.6	黒　色	86-4087
	104-580	ST015 玄　室	ガラス玉	0.4×0.7	深緑色	86-4043		-725	ST017 玄室床面	土　玉	0.4×0.5	黒　色	86-4088
	-581	ST015 玄　室	ガラス玉	0.4×0.7	深緑色	86-4042		-726	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.4×0.6	水　色	86-4906
	-582	ST015 玄　室	ガラス玉	0.4×0.5	深緑色	86-4041		-727	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.3×0.4	水　色	86-4914
	-583	ST015 玄　室	ガラス玉	0.4×0.6	深緑色	86-4040		-728	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.4×0.5	水　色	86-4912
	-584	ST015 玄　室	ガラス玉	0.3×0.6	青　色	86-4036		-729	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.3×0.4	水　色	86-4913
	-585	ST015 玄　室	ガラス玉	0.3×0.4	薄緑色	86-4039		-730	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.3×0.5	深緑色	86-4916
	-586	ST015 玄　室	ガラス玉	0.2×0.4	青　色	86-4035		-731	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.4×0.6	青　色	86-4905
	-587	ST015 玄　室	ガラス玉	0.3×0.4	青緑色	86-4037		-732	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.3×0.6	群青色	86-4100
	-588	ST015 玄　室	ガラス玉	0.3×0.4	薄緑色	86-4038		-733	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.3×0.4	薄緑色	86-4915
	-589	ST015 玄　室	ガラス玉	0.4×0.4	深緑色	86-4034		-734	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.3×0.5	水　色	86-4909
	110-609	ST016 玄室床面	土　玉	0.7×0.9	黒　色	86-4053		-735	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.3×0.5	青　色	86-4904
	-610	ST016 玄室床面	土　玉	0.6×0.9	黒　色	86-4052		-736	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.3×0.5	水　色	86-4908
	-611	ST016 玄室床面	ガラス玉	0.5×0.8	群青色	86-4054		-737	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.3×0.4	水　色	86-4911
	-612	ST016 玄室床面	ガラス玉	0.3×0.6	青　色	86-4055		-738	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.3×0.5	水　色	86-4907
	-613	ST016 玄室床面	ガラス玉	0.4×0.5	青　色	86-4056		-739	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.3×0.5	水　色	86-4910
	-614	ST016 玄室床面	管　玉	2.4×0.9	暗緑色	86-4045		-740	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.4×0.5	群青色	86-4903
	-615	ST016 玄室床面	管　玉	2.2×1.0	暗緑色	86-4049		-741	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.4×0.6	群青色	86-4092
	-616	ST016 玄室床面	管　玉	2.2×1.0	暗緑色	86-4050		-742	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.3×0.6	群青色	86-4097
	-617	ST016 玄室床面	管　玉	2.4×0.8	薄緑色	86-4046		-743	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.3×0.6	群青色	86-4098
	-618	ST016 玄室床面	管　玉	1.9×0.8	淡緑色	86-4051		-744	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.4×0.6	群青色	86-4902
	-619	ST016 玄室床面	管　玉	1.2×0.9	灰白色	86-4048		-745	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.4×0.6	群青色	86-4095

（　）は推定

地区	Fig.-図番号	出土地点	種　別	外径(cm) タテ×ヨコ	色　調	県遺物登録番号	地区	Fig.-図番号	出土地点	種　別	外径(cm) タテ×ヨコ	色　調	県遺物登録番号
B地区	123-746	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.4×0.7	群青色	86-4090	B地区	123-771	ST017 玄室内	ガラス玉	0.3×0.4	水　色	86-4064
	-747	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.5×0.6	群青色	86-4091		-772	ST017 玄室内	ガラス玉	0.2×0.4	深緑色	86-4073
	-748	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.5×0.6	群青色	86-4093		-773	ST017 玄室内	ガラス玉	0.5×0.9	群青色	86-4059
	-749	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.4×0.7	群青色	86-4089		-774	ST017 玄室内	ガラス玉	0.4×0.7	群青色	86-4061
	-750	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.4×0.5	群青色	86-4901		-775	ST017 玄室埋土	ガラス玉	0.4×0.7	群青色	86-4078
	-751	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.4×0.6	群青色	86-4099		-776	ST017 玄室内	ガラス玉	0.5×0.5	青　色	86-4068
	-752	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.3×0.6	群青色	86-4096		-777	ST017 玄室内	ガラス玉	0.4×0.6	群青色	86-4062
	-753	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.4×0.6	群青色	86-4094		-778	ST017 玄室内	ガラス玉	0.3×0.4	水　色	86-4067
	-754	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.3×0.6	青緑色	86-4917		-779	ST017 玄室内	ガラス玉	0.3×0.4	灰緑色	86-4066
	-755	ST017 玄室埋土	土　玉	0.7×0.8	黒　色	86-4080		-780	ST017 玄室埋土	管　玉	2.2×0.8	暗緑色	86-4077
	-756	ST017 玄室床面	土　玉	0.6×0.7	黒　色	86-4081		-781	ST017 玄室内	管　玉	1.9×0.8	暗緑色	86-4058
	-757	ST017 玄室床面	土　玉	0.5×0.6	黒　色	86-4082		-782	ST017 玄室床面	耳　環	2.6×2.9	白金色	86-0048
	-758	ST017 玄室内	ガラス玉	0.5×0.6	薄緑色	86-4076	C地区	132-832	ST001 羨道埋土	耳　環	2.3×2.6	青緑色	86-789
	-759	ST017 玄室内	ガラス玉	0.6×0.8	群青色	86-4060		136-855	ST002 玄室床面	耳　環	3.0×3.2	青緑色	86-791
	-760	ST017 玄室埋土	ガラス玉	0.4×0.6	水　色	86-4079		-856	ST002 断面層	耳　環	2.0×2.2	青緑色	86-792
	-761	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.3×0.4	水　色	86-4083		-857	ST002 玄室床面	耳　環	1.5×1.6	青緑色	86-793
	-762	ST017 玄室内	ガラス玉	0.4×0.5	水　色	86-4063		-858	ST002 玄室床面	耳　環	1.5×1.5	青緑色	86-794
	-763	ST017 玄室内	ガラス玉	0.3×0.5	水　色	86-4071		-859	ST002 石室床面	耳環？	0.9×0.8	漆黒色	86-4803
	-764	ST017 玄室床面	ガラス玉	0.3×0.4	水　色	86-4084		-860	ST002 石室床面	耳環？	1.0×0.9	漆黒色	86-4802
	-765	ST017 玄室内	ガラス玉	0.3×0.5	水　色	86-4070		-861	ST002 石室床面	勾　玉	1.9×0.7	黒　色	86-4900
	-766	ST017 玄室内	ガラス玉	0.4×0.6	水　色	86-4065		-862	ST002 石室床面	土　玉	0.3×0.5	黒　色	86-4806
	-767	ST017 玄室内	ガラス玉	0.3×0.5	水　色	86-4072		-863	ST002 石室床面	土　玉	0.4×0.4	黒　色	86-4807
	-768	ST017 玄室内	ガラス玉	0.3×0.4	深緑色	86-4075		-864	ST002 石室床面	土　玉	0.3×0.5	黒　色	86-4808
	-769	ST017 玄室内	ガラス玉	0.3×0.5	水　色	86-4069		-865	ST002 石室床面	土　玉	0.3×0.5	黒　色	86-4809
	-770	ST017 玄室内	ガラス玉	0.3×0.4	深緑色	86-4074		-866	ST002 石室床面	土　玉	0.3×0.5	黒　色	86-4810

（ ）は推定

地区	Fig.-図番号	出土地点	種別	外径(cm) タテ×ヨコ	色調	出遺物登録番号	地区	Fig.-図番号	出土地点	種別	外径(cm) タテ×ヨコ	色調	出遺物登録番号
C地区	136-867	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.5	黒色	86-4811	C地区	136-892	ST002 石室床面	土玉	0.5×0.6	黒色	86-4867
	-868	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.5	黒色	86-4842		-893	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.5	黒色	86-4859
	-869	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.5	黒色	86-4841		-894	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.6	黒色	86-4861
	-870	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.5	黒色	86-4840		-895	ST002 石室床面	土玉	0.5×0.6	黒色	86-4838
	-871	ST002 石室床面	土玉	0.3×0.5	黒色	86-4839		-896	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.5	黒色	86-4862
	-872	ST002 石室床面	土玉	0.5×0.5	黒色	86-4850		-897	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.5	黒色	86-4845
	-873	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.5	黒色	86-4851		-898	ST002 石室床面	土玉	0.5×0.6	黒色	86-4844
	-874	ST002 石室床面	土玉	0.5×0.4	黒色	86-4853		-899	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.6	黒色	86-4812
	-875	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.5	黒色	86-4832		-900	ST002 石室床面	土玉	0.3×0.5	黒色	86-4805
	-876	ST002 石室床面	土玉	0.3×0.5	黒色	86-4865		-901	ST002 石室床面	土玉	0.3×0.5	黒色	86-4804
	-877	ST002 石室床面	土玉	0.3×0.5	黒色	86-4869		-902	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.5	黒色	86-4830
	-878	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.7	黒色	86-4831		-903	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.5	黒色	86-4843
	-879	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.6	黒色	86-4863		-904	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.5	黒色	86-4846
	-880	ST002 石室床面	土玉	0.7×0.6	黒色	86-4882		-905	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.5	黒色	86-4835
	-881	ST002 石室床面	土玉	0.6×0.7	黒色	86-4811		-906	ST002 石室床面	土玉	0.3×0.5	黒色	86-4877
	-882	ST002 石室床面	土玉	0.7×0.7	黒色	86-4880		-907	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.5	黒色	86-4837
	-883	ST002 石室床面	土玉	0.5×0.8	黒色	86-4879		-908	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.6	黒色	86-4833
	-884	ST002 石室床面	土玉	0.7×0.6	黒色	86-4883		-909	ST002 石室床面	土玉	0.3×0.5	黒色	86-4847
	-885	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.5	黒色	86-4834		-910	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.6	黒色	86-4848
	-886	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.5	黒色	86-4855		-911	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.6	黒色	86-4836
	-887	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.5	黒色	86-4856		-912	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.6	黒色	86-4849
	-888	ST002 石室床面	土玉	0.3×0.5	黒色	86-4857		-913	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.5	黒色	86-4852
	-889	ST002 石室床面	土玉	0.3×0.5	黒色	86-4858		-914	ST002 石室床面	土玉	0.3×0.4	黒色	86-4854
	-890	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.5	黒色	86-4864		-915	ST002 石室床面	土玉	0.3×0.4	黒色	86-4860
	-891	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.6	黒色	86-4866		-916	ST002	土玉	0.3×0.5	黒色	86-4868

（ ）は推定

地区	Fig.-図番号	出土地点	種別	外径(cm) タテ×ヨコ	色調	県遺物登録番号
C地区	136-917	ST002 石室床面	土玉	0.3×0.5	黒色	86-4873
	-918	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.5	黒色	86-4870
	-919	ST002 石室床面	土玉	0.3×0.5	黒色	86-4874
	-920	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.5	黒色	86-4878
	-921	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.5	黒色	86-4872
	-922	ST002 石室床面	土玉	0.3×0.5	黒色	86-4871
	-923	ST002 石室床面	土玉	0.4×0.6	黒色	86-4875
	-924	ST002 石室床面	土玉	0.3×0.5	黒色	86-4876
	-925	ST002 石室床面	ガラス玉	0.3×0.5	深緑色	86-4981
	-926	ST002 石室床面	ガラス玉	0.4×0.6	群青色	86-4998
	-927	ST002 石室床面	ガラス玉	0.4×0.7	群青色	86-4999
	-928	ST002 石室床面	ガラス玉	0.3×0.6	青色	86-4983
	-929	ST002 石室床面	ガラス玉	0.3×0.6	水色	86-4992
	-930	ST002 石室床面	ガラス玉	0.5×0.7	水色	86-4991
	-931	ST002 石室床面	ガラス玉	0.3×0.6	群青色	86-4997
	-932	ST002 石室床面	ガラス玉	0.4×0.5	群青色	86-4889
	-933	ST002 石室床面	ガラス玉	0.4×0.5	群青色	86-4884
	-934	ST002 石室床面	ガラス玉	0.3×0.5	群青色	86-4885
	-935	ST002 石室床面	ガラス玉	0.3×0.6	群青色	86-4893
	-936	ST002 石室床面	ガラス玉	0.4×0.6	群青色	86-4897
	-937	ST002 玄室床面	ガラス玉	0.3×0.6	水色	86-4984
	-938	ST002 石室床面	ガラス玉	0.4×0.5	水色	86-4995
	-939	ST002 石室床面	ガラス玉	0.3×0.5	水色	86-4986
	-940	ST002 石室床面	ガラス玉	0.4×0.5	水色	86-4994
	-941	ST002 石室床面	ガラス玉	0.4×0.5	群青色	86-4887
C地区	136-942	ST002 石室床面	ガラス玉	0.5×0.5	深緑色	86-4982
	-943	ST002 石室床面	ガラス玉	0.3×0.4	群青色	86-4996
	-944	ST002 石室床面	ガラス玉	0.4×0.4	水色	86-4985
	-945	ST002 石室床面	ガラス玉	0.3×0.5	薄緑色	86-4988
	-946	ST002 石室床面	ガラス玉	0.3×0.3	薄緑色	86-4989
	-947	ST002 石室床面	ガラス玉	0.3×0.5	水色	86-4993
	-948	ST002 石室床面	ガラス玉	0.2×0.5	薄緑色	86-4990
	-949	ST002 石室床面	ガラス玉	0.3×0.5	群青色	86-4886
	-950	ST002 石室床面	ガラス玉	0.3×0.5	群青色	86-4888
	-951	ST002 石室床面	ガラス玉	0.3×0.4	群青色	86-4890
	-952	ST002 石室床面	ガラス玉	0.3×0.4	群青色	86-4891
	-953	ST002 石室床面	ガラス玉	0.3×0.4	群青色	86-4892
	-954	ST002 石室床面	ガラス玉	0.3×0.4	群青色	86-4894
	-955	ST002 石室床面	ガラス玉	0.2×0.4	群青色	86-4895
	-956	ST002 石室床面	ガラス玉	0.2×0.4	群青色	86-4896
	-957	ST002 石室床面	ガラス玉	0.3×0.3	群青色	86-4899
	-958	ST002 石室床面	ガラス玉	0.2×0.3	水色	86-4987
	-959	ST002 石室床面	ガラス玉	0.4×0.5	群青色	86-4898
	-960	ST002 石室床面	ガラス玉	0.3×0.4	黄色	86-4980
D地区	143-978	ST001 羨道埋土	勾玉	1.8×0.7	淡緑色	86-4925
	-979	ST001 前室埋土	耳環	2.6×3.0	青緑色	86-4921
	-980	ST001 前室埋土	耳環	2.7×3.0	金色	86-4920
	-981	ST001 玄室埋土	耳環	2.9×3.3	青緑色	86-4923
	-982	ST001 前室埋土	耳環	2.2×2.4	青緑色	86-4919

III 小　結

調査した遺構は、古墳22基と土壙２基、不明遺構1基である。古墳はすべて古墳時代後期のもので内部主体は横穴式石室が20基、小石室が２基である。以下、これらの古墳の特徴的な事項をいくつかまとめて整理してみたい。

１．墳丘と地山整形

各古墳の墳丘盛土は、田畑による削平、あるいは丘陵斜面に立地していることから流失しており遺存するのが少ない。墳丘盛土が完存し、調査時にすでに開口していたのはＢ区のＳＴ001、ＳＴ002古墳がある。この2基の墳丘高は２～2.8m を測る。この他に比較的墳丘が残存す

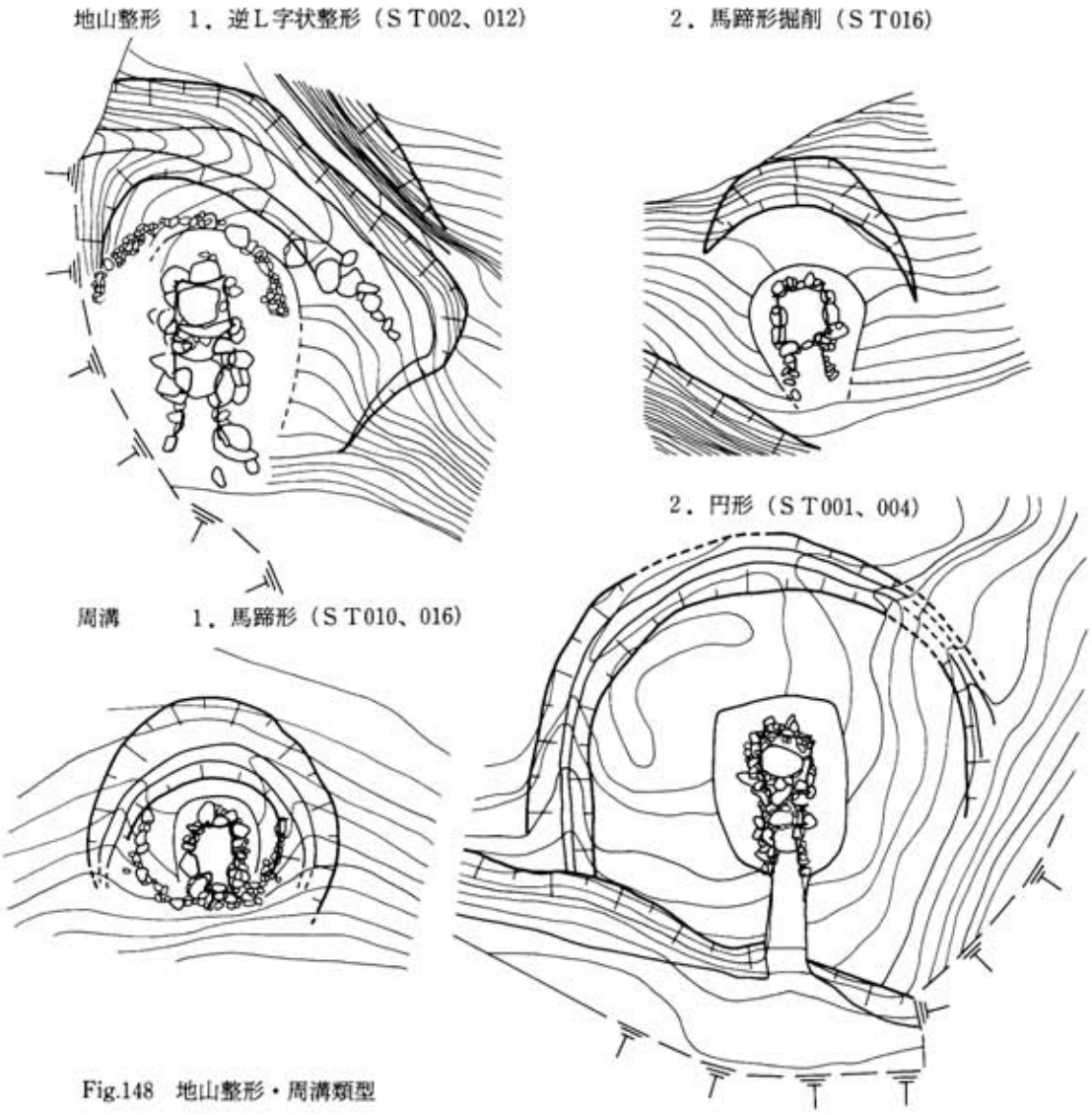


Fig.148　地山整形・周溝類型

るのが、ＳＴ012、015、017古墳、Ｄ地区ＳＴ001古墳で残存高は１～1.5m を測る。斜面上に築造するため広い墳丘基底面を作出することもできず、従って高い墳丘を盛り上げることもできない。結果的にそれがＳＴ001、002古墳のように玄室天井高2.5m を測るような石室をつくるためにはより深く石室掘り方を掘削しなければならなくなり、ＳＴ001、002、007、016古墳などのように1.5～２ｍ近く墳丘基底面から掘り込むことになる。ただ、全体的に斜面上に、コンタに直交して石室をつくるため、奥壁側石室掘り方が深くなる傾向がみられる。

石室構築に先行する地山整形には１.墳丘基底面の作出、２.石室掘り方の掘削、３.周溝の掘削などがある。こうした地山整形の中でも、尾根の東西両側端に占地するＳＴ002、012古墳にみられるように、逆Ｌ字状に大きく地山を掘削して、より平坦な墳丘基底面を作出する例もある。これはやせ尾根という限られた墓域の中でもさらに古墳築造に適さない場所でそれを試みたための地山整形ではなかろうか。また、丘陵斜面（傾斜角度16度）に占地したＳＴ016古墳は奥壁背後の地山を大きく馬蹄形に掘削している。

周溝にはＳＴ001、004古墳のように全周するタイプとＳＴ010、016古墳のように奥壁背後に馬蹄形溝を掘削するタイプがあるがこの違いは古墳立地によるものであろう。尾根裾部で平坦な墳丘基底面をえられる場合全周する周溝を掘削するが、一方尾根中腹など傾斜がきつい斜面の場合斜面上方からの流水を下方に送り出す機能をもつ馬蹄形溝を掘削することになる。

墳丘径の最大のものはＳＴ001古墳で約16m を測る。ＳＴ002、007、012、015、017,Ｄ地区ＳＴ001古墳は径約10.5～12m、ＳＴ010、014、016古墳は7.5～９ｍを測り、概して小形である。

２．墳丘列石

墳丘列石には、墳丘土層断面観察から墳丘基底面直上にのるものと、基底面から20～50cmの盛土の上に配するものがある。直上にのるものがＳＴ015古墳でその他のＳＴ002、010、014、017古墳は盛土上に巡らす。列石は径30～50cmの転石を環状に配するが削平のためか２段、３段と積み上げるものは少ない。わずかＳＴ002古墳のみ部分的に６～７段の列石の積み上げが残る。

列石平面形態にはＳＴ002、014、015古墳のように石室後側に半周するものと、ＳＴ010、017古墳のように羨道部先端から連接して全周するものがある。この墳丘列石は、墳丘築造にあたっての盛土流失防止用、そして墳丘を少しでも高く盛り上げるための施設であろう。

また、ＳＴ014、017古墳では列石直上から築造時期の土器群を検出した。石室構築に伴う墳丘祭祀土器によるものと考えられる。

３．閉塞施設

閉塞施設が残存する古墳は８基あった。閉塞箇所は前門部と玄門部閉塞があり、複室は前門

閉塞で単室は玄門閉塞となる。単室両袖型横穴式石室は天井石を架構する羨道部を連接することはなく、玄門から前庭側壁を連接しているため玄門閉塞となる。また、玄門あるいは前門床面の1、2石からなる框石を根石として閉塞石を積み上げる。単室で玄門閉塞が残存するものとしてＳＴ010、016、017古墳が、複室で前門閉塞のものにＳＴ001、008、011、012、Ａ地区ＳＴ001古墳がある。閉塞施設には前門に蓋をするように板状石材をたてかけその背後に径20～30cmの転石を積み上げるタイプと、框石を根石として転石を積み上げるタイプがある。前者にＳＴ001、011古墳が後者にＳＴ008、012、Ａ地区ＳＴ001古墳がある。遺存高は大方60cm～1ｍを測る。

4．石室形態

内部主体は横穴式石室で複室両袖型が11基、単室両袖型が9基、ほかに小石室が2基ある。横穴式石室の石室平面プランは大きく3つのタイプに分かれる。

複室両袖型　玄室平面長方形　ＳＴ001、002、008、011、Ａ地区ＳＴ001、Ｃ地区ＳＴ001、Ｄ地区ＳＴ001

前室が発達して幅広の平面長方形になるタイプにＳＴ001、002、011、Ｃ地区ＳＴ001があるが、これらは玄室中央幅と前室中央幅がほぼ同じになる。それに対してＳＴ008のように前室平面正方形気味で前室は発達せず柱状の前門袖石をたてることで前室をつくりだすタイプがある。玄室比は1.3～1.1.

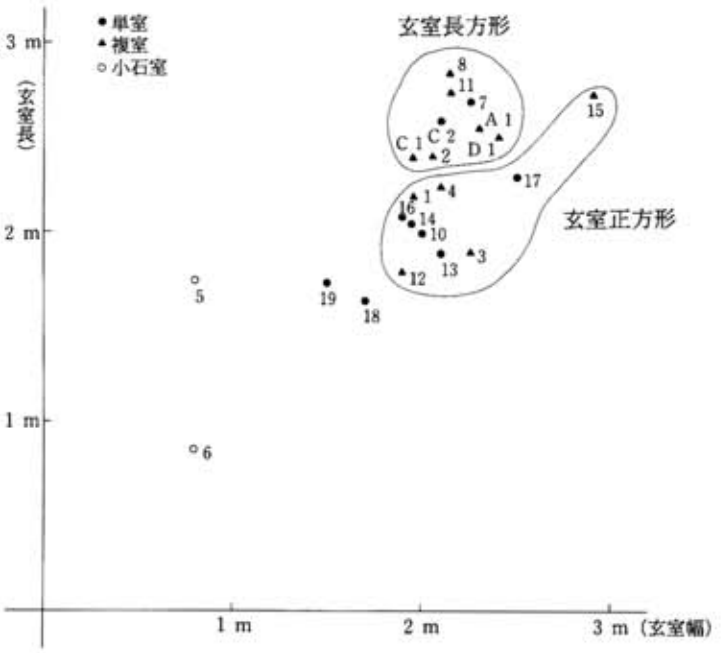
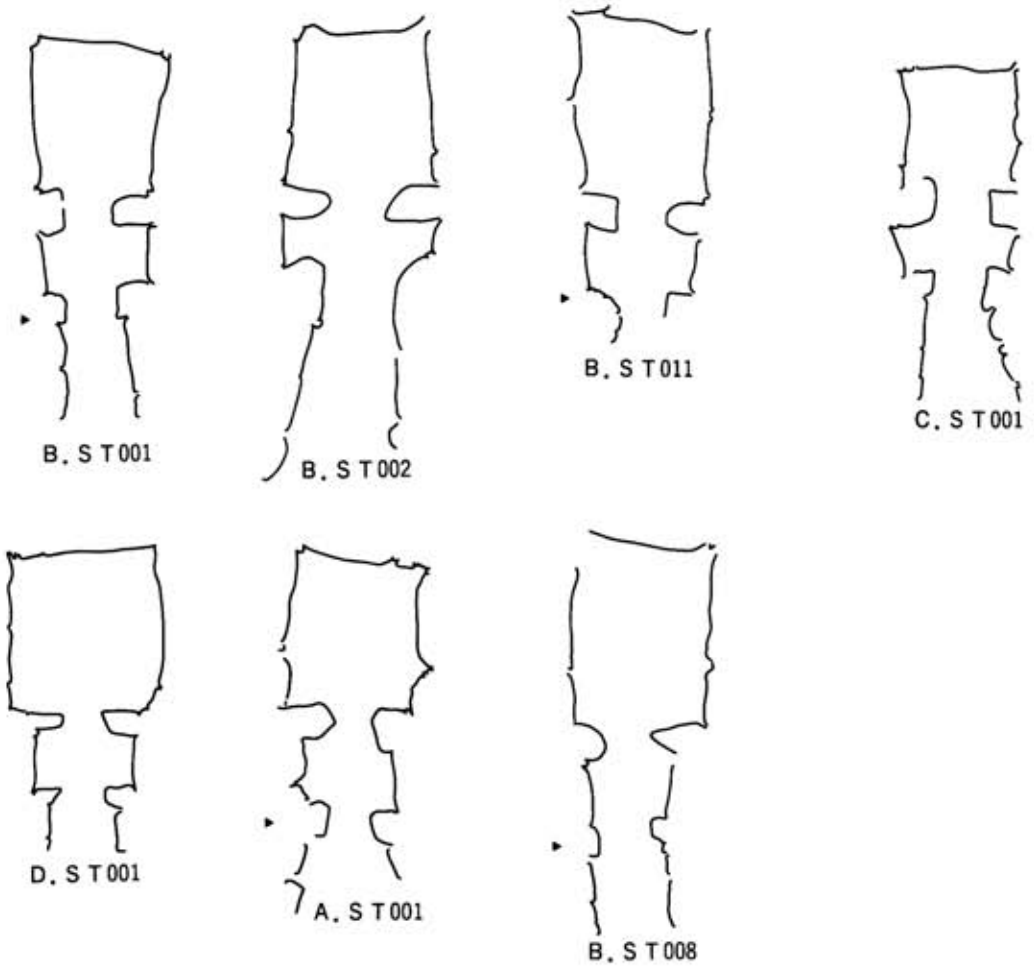


Fig.149　玄室法量図

1．複室両袖型、玄室平面長方形



2．複室両袖型、玄室平面正方形

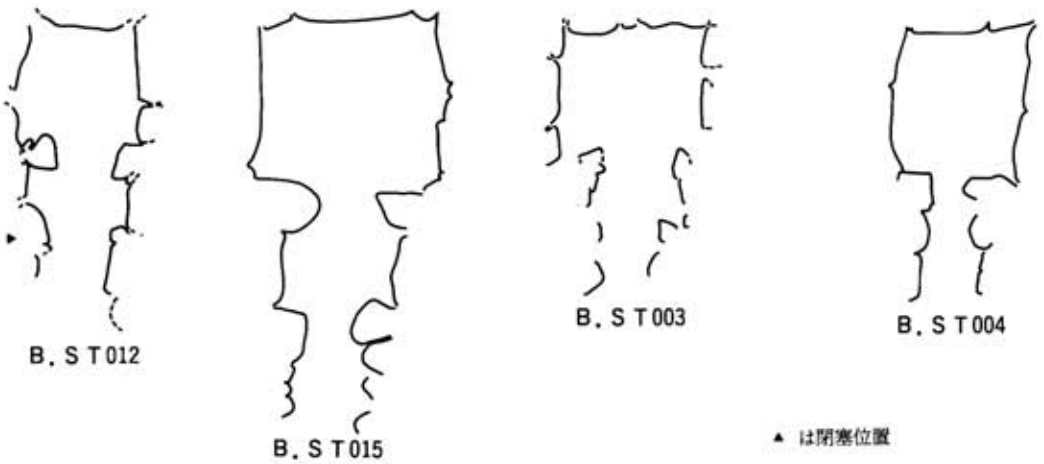


Fig.150　玄室プラン分類図 1

3．単室両袖型、玄室平面正方形

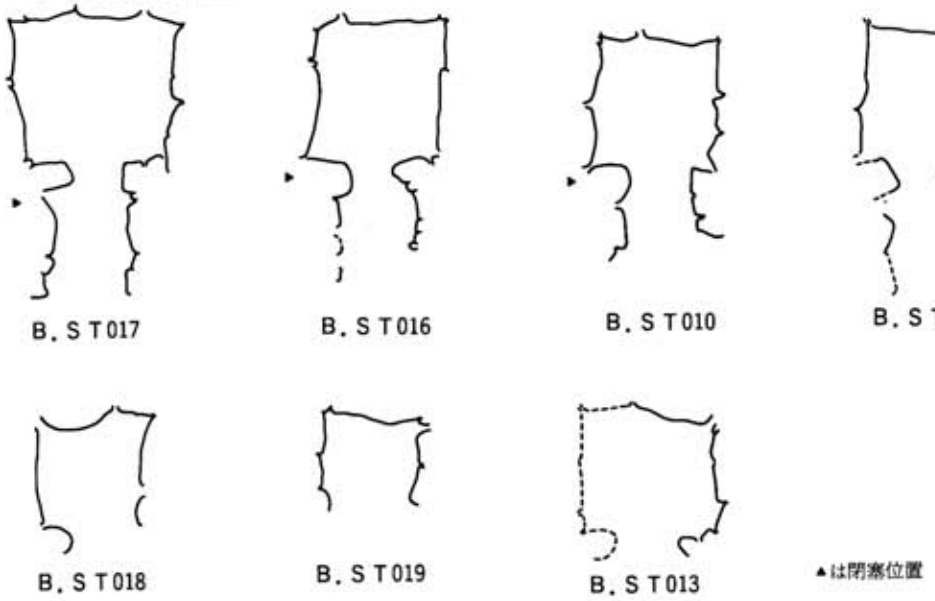


Fig.151　玄室プラン分類図 2

複室両袖型　玄室平面方形　　S T003、004、012、015

同じ複室でも玄室平面長方形タイプは前室が発達し平面横長長方形の前室を作り出すのに対して概してこの玄室平面正方形タイプは前室を明確につくりだすことをしなくなる。S T012は玄室中央幅と前室中央幅が同じで横長の前室を付設する。それに対してS T003、004は前室が未発達で平面的には明確な複室とならないが、前門に相当する部分に方柱状の石材をたてることで前室をつくる。玄室規模はS T012が1.8×1.9m と小形であるが、S T003、004は約 2 × 2 m、S T015は約2.7×2.7m と大形である。

単室両袖型　玄室平面方形　　S T010、014、016、017、013、018、019

平面方形の玄室に前庭側壁を連接するが前庭両側壁は平面平行である。玄室規模はS T010、014、016が約 2 × 2 m でS T017は2.4×2.4m とやや大形である。それに対してS T013、018、019は前庭側壁を連接することなく、玄門袖石も柱状石材などを選択し、立てることがなくなる。また、無袖化の傾向が伺え、玄室規模も約1.8×1.8m と縮小化していく。全体としてS T010、014、016、017タイプの石室から013、018、019タイプの石室への変遷が看取できよう。

5．副葬品

副葬品は土器、鉄器（鉄鏃、馬具、工具）装身具類が出土した。S T005古墳を除いてすべての古墳から遺物は出土している。一般的に新時期の横穴式石室や小石室は副葬品が少なくなる傾向が認められているが、本古墳群でも石室形態上新時期に位置づけられるS T013、018、019古墳では土器のみ数点出土しただけである。また、小石室であるS T005、006古墳も同様

ＳＴ006古墳で土器1点出土したのみである。逆にとくに土器の出土量の多い古墳としてＳＴ002、004、008、014、015、017古墳がある。馬具はＳＴ002、004、008、012、015古墳から鐙、轡、杏葉などが出土している。ＳＴ004古墳からは馬具の他、鍔・鉄鏃など武器類において卓越している。装身具においてはＳＴ014古墳から切子玉、丸玉、ガラス玉など多くのものが出土している。このＳＴ014古墳は出土土器から見る限り本調査区内において築造時期が最も早く、装身具など副葬品も優位であり被葬者の階層差を伺える。

宮西遺跡（みやにし）

遺跡名：宮西遺跡（略号ＭＹＮ）
所在地：鳥栖市中原町字宮西

宮　西　遺　跡

Ⅰ．遺跡の概要

脊振山系東端の九千部山から南東にのびる尾根の一支嶺である群石山（標高201m）の山麓部に遺跡は位置する。山麓部はやせ尾根が南方に幾筋ものびており、これらの尾根を支群として古墳群が形成される。尾根の標高は大方80m～100mであるが、本遺跡の立地する尾根はこれらのなかでもやや大きめのものであり、南にのびる尾根が南西と南東に分岐するが、その南東にのびる尾根上に3基の古墳が並ぶ。調査区外の尾根下方に古墳1基がある。また丘陵裾部に数基の古墳がある。本遺跡の立地する丘陵を1つの古墳群と把握するならば、本遺跡の古墳2基と調査区外1基はそのなかの1つの単位であろう。

周辺遺跡では、鳥栖市東部を流れる大木川の東岸に東十郎古墳群がある。また、大木川東岸の荻野丘陵には壁画系装飾画をもつ田代太田古墳をはじめとして岡寺前方後円墳・庚申堂塚前方後円墳・剣塚前方後円墳などがあり6世紀代のこの地域の首長墓群を形成する。

本遺跡から谷をはさんで北東250mの舌状丘陵先端には都谷B遺跡があり、発掘調査の結果古墳18基を検出した。この丘陵の上方にも古墳が現存し調査区のものとあわせると30数基にもなる密集型の群集墳を形成する。本遺跡と都谷B遺跡の間の谷部が都谷A遺跡で調査の結果古墳1基を検出した。A遺跡の南方には細長い丘陵があるが、ここにも数基の古墳が現存する。

本遺跡から見下ろせる水田部には百度塚古墳がある。これは水田に1基のみ、墳丘を流失し石室がむきだしになっているもので、内部主体は複室両袖型横穴式石室で、大形の石材を用いて石室を構築している。水田部周辺には古墳は現存せず、この百度塚古墳1基のみ築造されたのかもしれない。このように本遺跡周辺には多くの古墳がつくられ、佐賀平野東部地域の古墳群密集地となっている。

今回の発掘調査で検出した遺構は古墳2基と火葬墓1基である。ＳＴ01古墳のすぐ北に、墳丘らしきものがみられ当初これをＳＴ03としトレンチをいれた結果、これが遺構でないことが判明しＳＴ03は欠番となった。古墳は2基とも古墳時代後期に築造されており、内部主体は横穴式石室である。ＳＴ02古墳は斜面に立地するため石室構築前に馬蹄形溝の掘削や墳丘基底面の地山整形される。前室からは須恵器・馬具出土。ＳＸ04火葬墓は蔵骨器を有する。

ＳＴ01古墳　円墳、墳丘径19.8m。単室両袖型横穴式石室で主軸をＮ6°Ｗにとる。玄室規模は2.2(長)×2.0(幅)m。築造時期は小田編年ⅢＢ古段階期でⅢＢ新段階期まで追葬される。

ＳＴ02古墳　円墳、墳丘径17m。複室両袖型横穴式石室で主軸をN52°Eにとる。玄室規模は2(長)×2(幅)m。築造時期は小田編年ⅢＢ古段階期で追葬はⅣ期まで。前室から完形の須恵器16点出土。

ＳＸ04火葬墓　蔵骨器出土。時期は9Ｃ代。

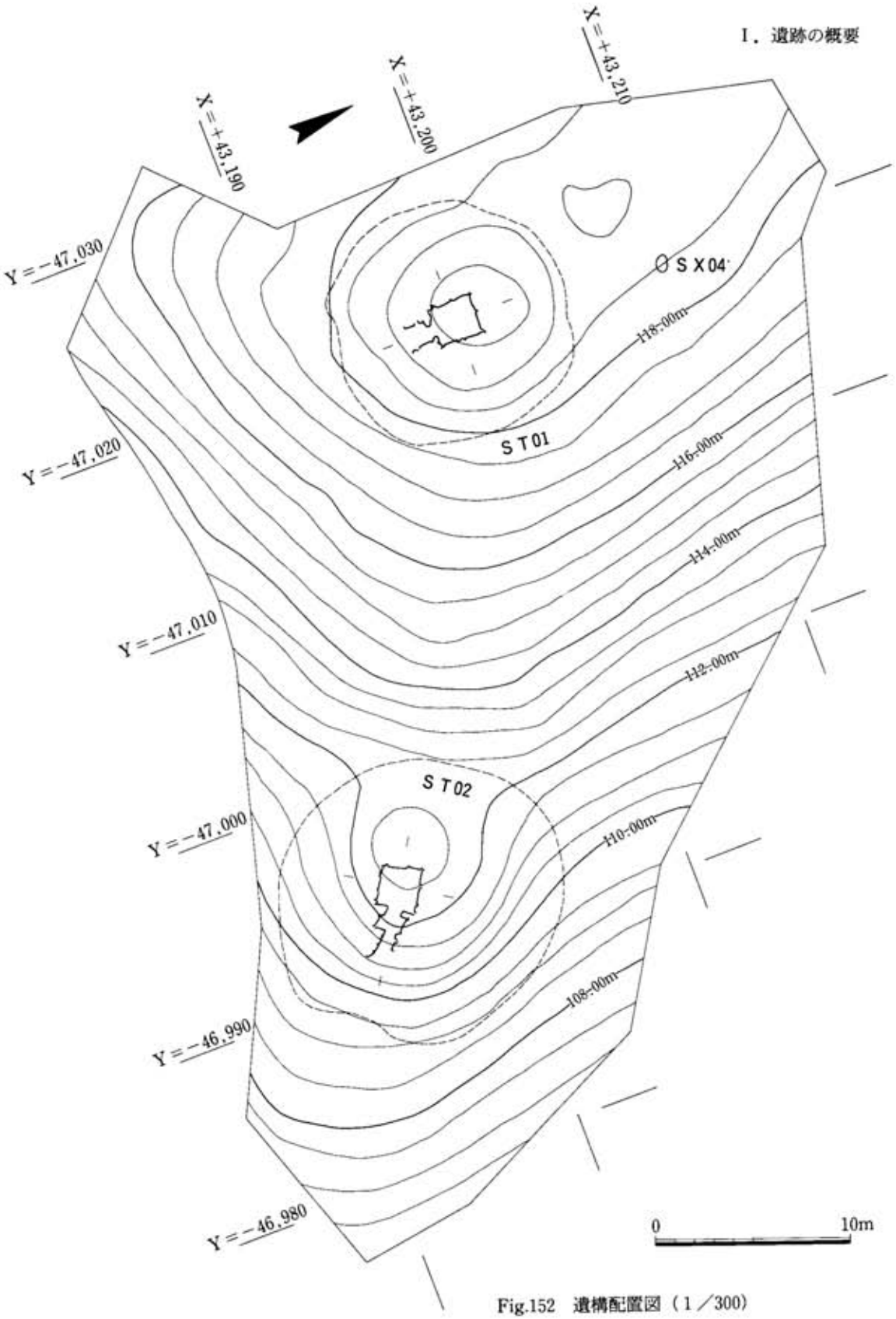


Fig.152　遺構配置図（1／300）

II．古墳時代の遺構と遺物

1．ＳＴ01古墳

(1) 概　要

調査区西側に位置し、尾根の下方約30mにＳＴ02古墳が築造される。墳丘も削平をうけ石室上半分を欠失する。南側斜面にむかって開口する。内部主体は単室両袖型横穴式石室で玄室は平面方形である。墳丘盛土内から杯蓋、身、甕が、玄室内から提瓶、直口壺、馬具（轡、鐙）が出土した。築造は小田編年III Ｂ古段階期で追葬はIII Ｂ新段階期まで。

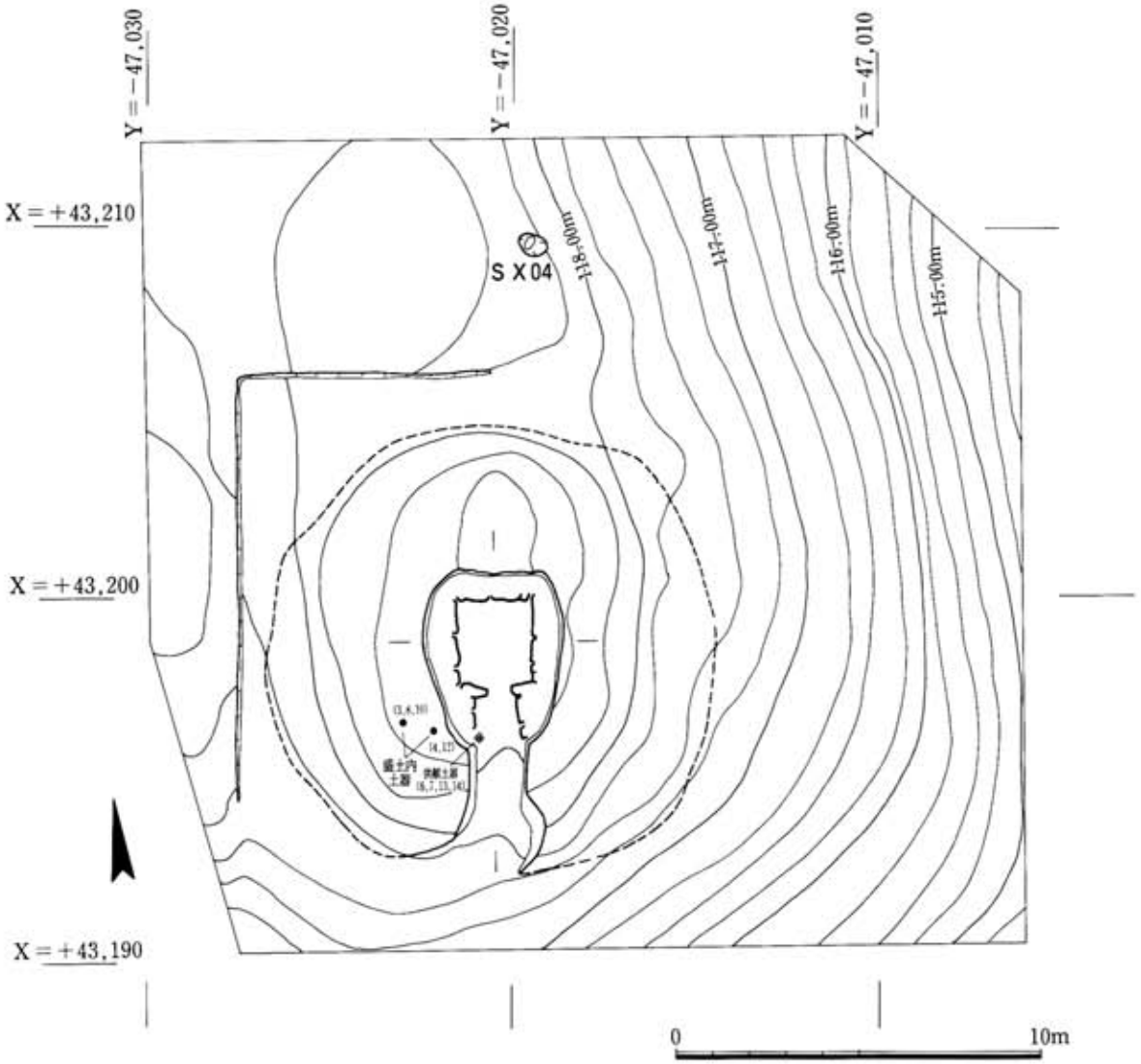


Fig.153　ＳＴ01古墳墳丘（１／200）

(2) 墳丘・周溝

墳丘径約19.8m の円墳である。周溝は墳丘北側から東側にかけてそれらしきものがみられるが特に意識して作らない。墳丘盛土前の地山整形は、奥壁後方と東側の裾部を削り出しておりこの裾部をもって墳丘径とした。本墳は南東にのびる尾根のテラス上に占地しているため古墳構築にあたって斜面にみられるような地山整形等もとくに必要としなく、より高い墳丘を確保するための墳丘裾部の削り出しのみにとどめたと考えられる。また、墳丘基底面に平坦面がみられるがこれも盛土の前段階の地山整形であろう。

墳丘盛土は墳丘基底面から約80cm残存する。墳丘形成過程は遺存状態が悪いため明確にはわからないが大きく２段階に分けられると推定できる。第１段階は石室構築の壁石の裏込め的なものであり、第２段階は石室天井部の被覆と墳形の整形にかかわるものである。第１段階は墓壙内の腰石配置後、壁石積み上げに平行して一段づつ叩きしめながら裏込めしていく。裏込め土は腰石上方２段目で墳丘基底面とほぼ同じ高さとなり、その上方の盛土から第２段階となる。その盛土は石室を構築する石材が小形ということもあって単位も細かいし、また墳丘基底面が平坦であるため盛土も水平に堆積している。大形石材を石室に用いて構築していく場合足場固めの目的もあって石材積み上げに対応して盛土の段階が分かれるが、本墳の場合石材が小型ということもあり特にそのような形成過程もみられないし、第２段階盛土で突き固めるといったこともない。

盛土は茶褐色土を主体としているが、部分的に砂質土も混ざる。これは地山整形および墓壙掘り方段階ででた土を盛土として使用したためであろう。

墳丘盛土内から出土した土器として、杯蓋・身・甕などがあるが、墳丘祭祀として捉えられるであろうし、築造時期をしめす遺物ともなろう。また、これらの土器群からややはなれた場所から杯蓋・身がセットで出土している。ただ、この杯蓋・身は先述した墳丘盛土内土器よりやや新しい時期のものであることから、同時期の墳丘祭祀として考えてよいかは疑問である。

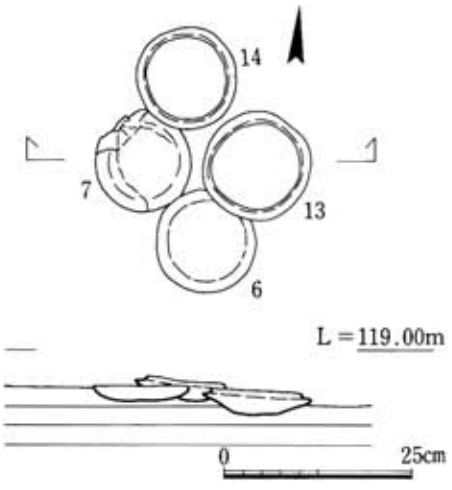


Fig.154　ST01古墳羨道部西側遺物出土状況(1/10)

(3) 内部主体

単室両袖型の横穴式石室である。南側の斜面に向かって開口し、主軸をＮ６°Ｗにとる。平面形で玄室中心が墳丘の中心となるよう設計されたと推定される。玄室平面形態は若干、羨道部側が狭くなる長方形で、天井石を一石のせる羨道部を連接する。玄室天井部はすでになく腰石とその上方数

段の側壁が残存する。石室掘り方は平面羽子板形で、旧表土から約60cmほど掘り込み腰石をおく。

規模は石室全長3.25m、玄室は中央長2.2m、中央幅2.0m、奥壁幅2.1m、前壁幅1.95m、右壁長2.35m、左壁長2.2m を測る。

奥壁は、腰石に1.0×0.5m 程の横長の2石をそれぞれ横位に配し腰石とする。腰石の上には3～5段の石積みが残り、残存高は1.3m を測る。この石積みは0.5×0.2m の横長の転石を乱雑に積み上げたもので横目地も通らない。従って隙間も相当みられ、部分的に小礫を詰めている。

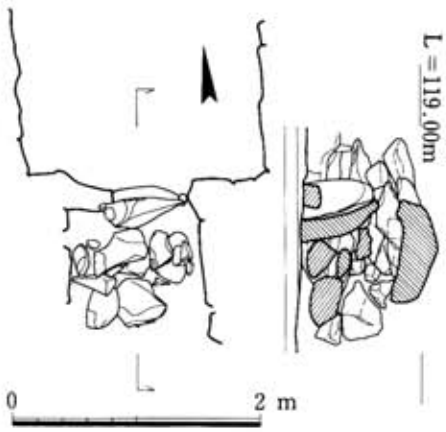


Fig.155　ST01古墳石室閉塞状況(1/60)

右側壁の腰石も1.0×0.5m の横長の2石を両側に横位に配し、その間に0.4×0.2m 程の割石を挟む。左側壁の腰石は、奥壁側から0.8×0.4m、1.0×0.4m、0.3×0.3m の石材をそれぞれ3石横位に配す。腰石上方の石積みは、両側壁とも奥壁と同大の石材を雑に積み上げる。奥壁は第4段から石材を持ち送りに積み上げているのに対し、両側壁は残存する4～5段目まで垂直に積み上げる。

奥壁と側壁の隅角は腰石の上から互いに重なる三角持ち送り法を用いている。

玄門部は右袖石に0.6×0.4m の柱状石材を立て左袖石には0.4×0.7m 程の割石を横位に配し、その上に同大の石材を積み上げこれらの袖石上に楣石を架構する。この石は1.3×0.9m の扁平石で羨道部の天井石も兼ねる。玄門

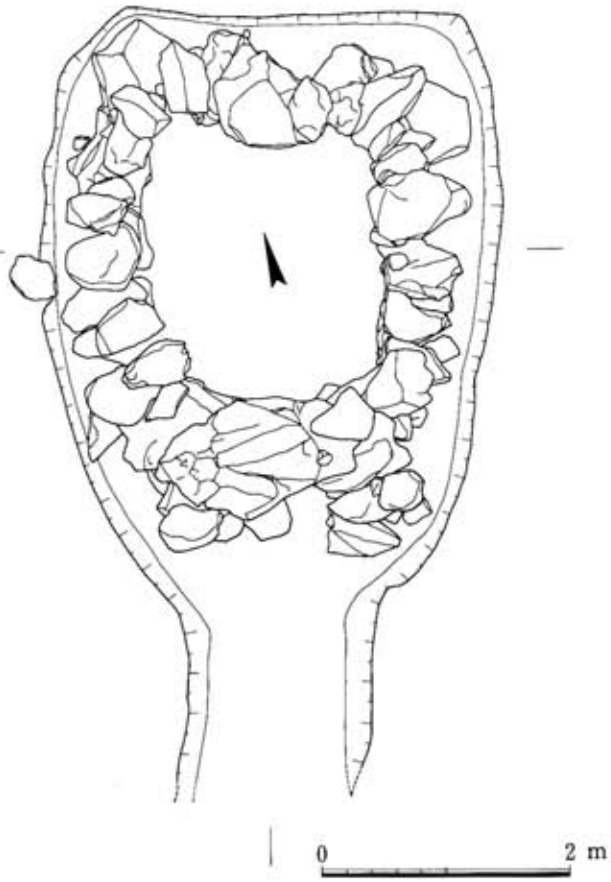


Fig.156　ST01古墳石室平面（1/60）

床面に框石を置き玄門幅は0.6m を測る。また、玄室床面には径0.2m 程の扁平石をまんべんなくしきつめている。

羨道部は長さ約１ m で右側壁にやや大きめの腰石を置くが、左側壁は小ぶりの石材を雑に積み上げる。羨道部高は0.8m、羨道部幅1.0m を測る。羨門部はとくに意識してつくらない。

閉塞施設は玄門部にあり、いわゆる板石閉塞である。すなわち框石を根石としその羨門側に0.6×0.6m の扁平石をたて、その背後に人頭大の石を積む。

玄室内の遺物出土状況は、前壁左隅から提瓶が直立状態で、また前壁右隅からは、同じく提瓶と土師器の直口壺、その他に馬具が出土した。

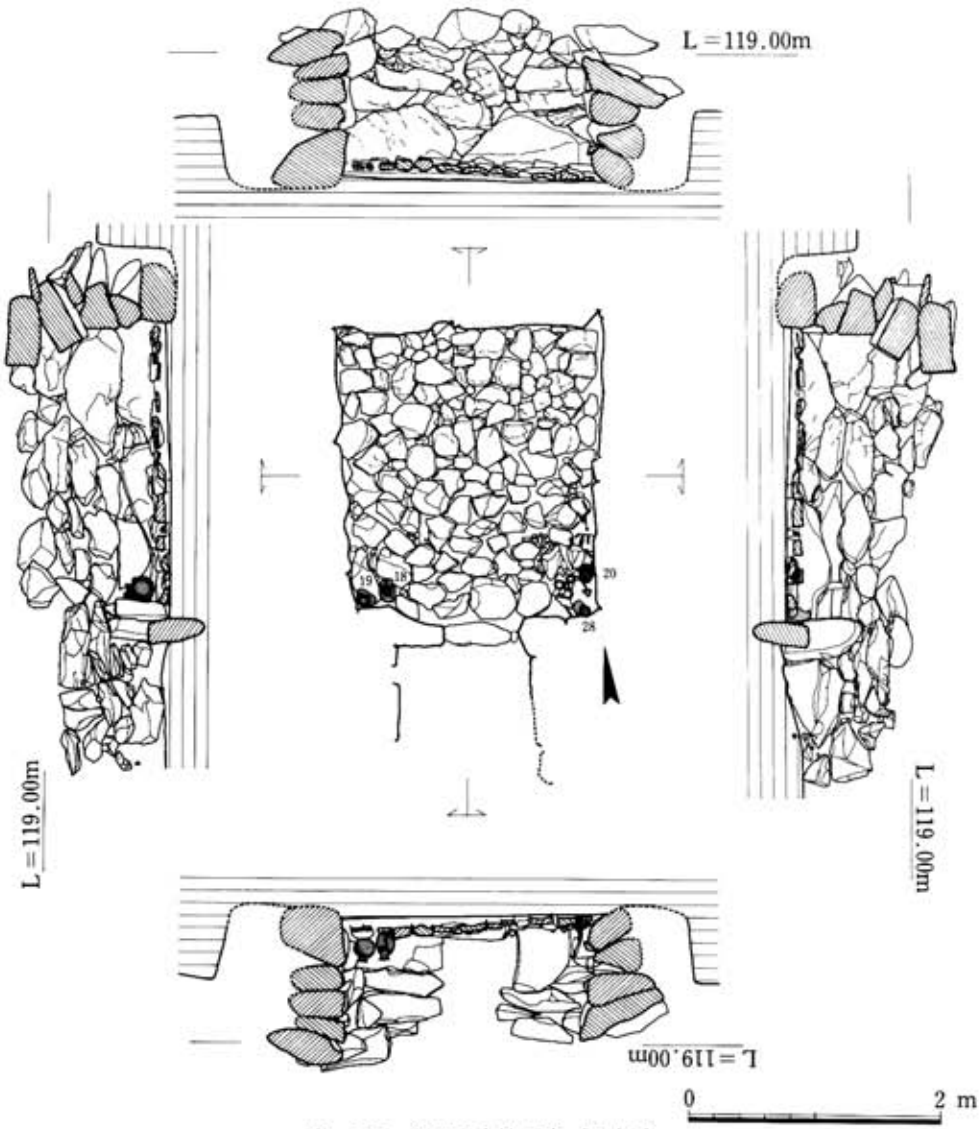


Fig.157　ＳＴ01古墳石室（１/60）

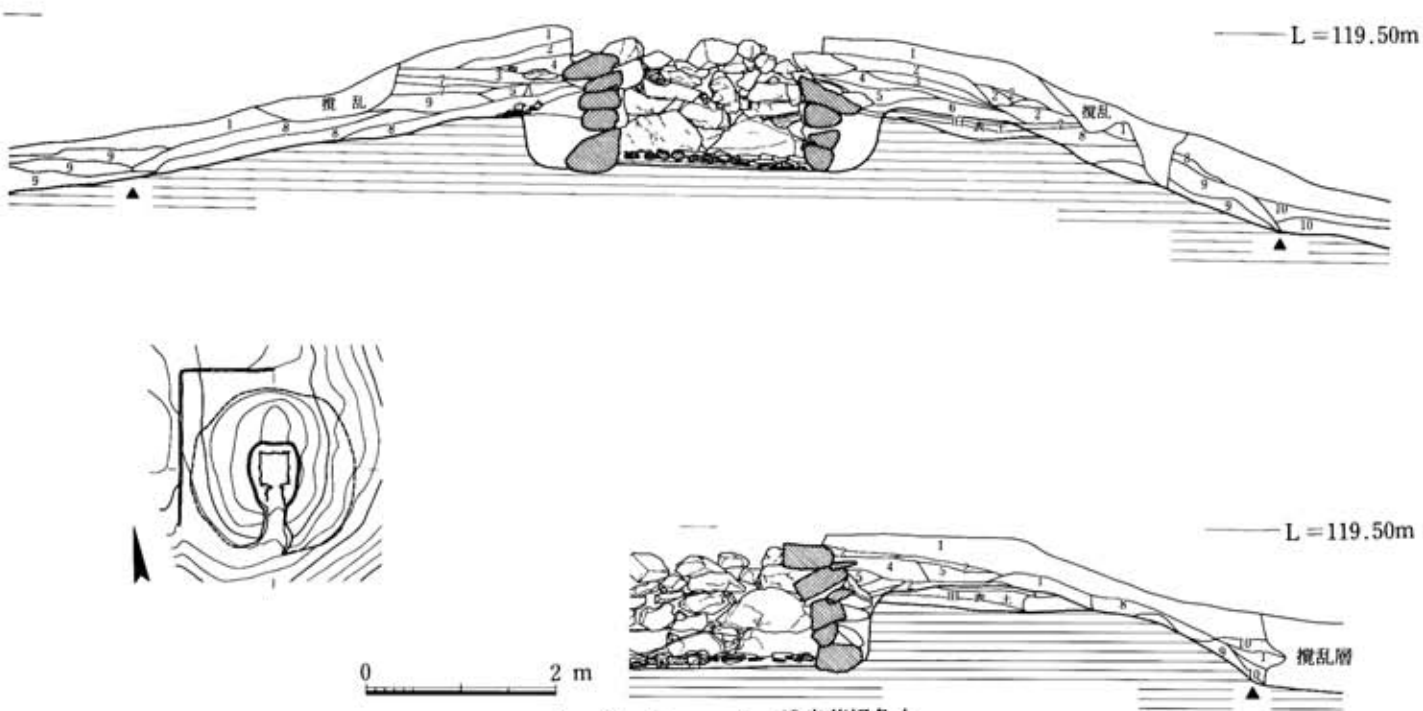


Fig.158　ＳＴ01古墳墳丘土層図（1/80）

(4) 出土遺物

須恵器

杯蓋はA類（1、2、3）B類（4、5、6、7）がある。1、2、3、5はいずれも口唇部内面に沈線をもち1、3は体部と口縁部の境に稜をもつ。B類は口唇部内面の沈線の消失を指標としていたが、5は小形化ということでB類とした。4は天井部不定方向ヘラケズリ、他はすべて回転ヘラケズリ。

杯身はA類（8、9、10、11）、B類（12、13、14）がある。8は底部内面に当て道具痕有り。12は不定方向ヘラケズリ、他はすべて回転ヘラケズリ。A類は口径11.6～12.4cm、立ち上がり高1.4～1.6cmとA類かB類にかけて小形化が進む。3、8、10、12は墳丘盛土内から出土。古墳築造時期をおさえる資料である。4と12はセットでやはり盛土内から出土、6、7、13、14は玄門左袖石付近から出土。墓前祭祀に伴う供献土器であろう。15は高杯脚部、二段三方透かしが入る。16、17は横瓶。16はほぼ胴部全面にカキ目調整が入るが17は調整不明瞭。18、19、20は提瓶、いずれも完形である。18、19は玄室前壁左隅から20は同じく右隅から直立状態で出土。18は胴部の施文、調整なし。19は胴部前面に二条の櫛描波状文、20は櫛描列点文を施す。21は甕。

土師器

22は杯身、たちあがり一部黒斑状、内外面黒塗りか？23は杯蓋、外面黒塗りか？24、25、26、27は高杯。24、25は長脚で24は杯部に稜をもつ。26、27は短脚で脚部のみ残存する。26は内外面丹塗り、27は外面丹塗り。28は直口壺、玄室前壁右隅から出土。外面ヘラミガキで器壁は薄い。外面および頸部内面丹塗り。29は無頸壺、口縁部のみ残存するため器形もよくわからない。肩部内面に輪積み痕が残る。

鉄　器

鉄鏃（30～42）30、31は平造腸抉（わたくり）柳葉式で30は鏃身長6.1cm、幅1.9cmを測る。32は圭頭（けいとう）式で鋒先は丸みをもつ。鏃身基部の断面は長方形、鏃身長5.2cmを測る。33は片刃箭（かたはや）式で鏃身部断面は三角形となる。34～42は鑿箭（のみや）式で34、35、38は片丸造、36は両丸造、37は平造である。鏃身長はそれぞれ34が2.6cm、35が2.2cm、36が2.7cmを測る。39～42は頸部のみ残存しすべて棘篦被（きょくのかつぎ）で茎部に木質を残す。42は樺巻。

刀子（43、44）43は棟側が角関となり頸部には木質、樹皮が残存する。全長10cm、刃部長6cm、44は刃部のみ残存、中位で曲がる。

弓付属金具（45、46）45は片頭を欠損する。46は全長2.3cm、どちらも中央部には樹皮らしきものを巻く。

47は不明鉄器、先端部を直角に曲げる。

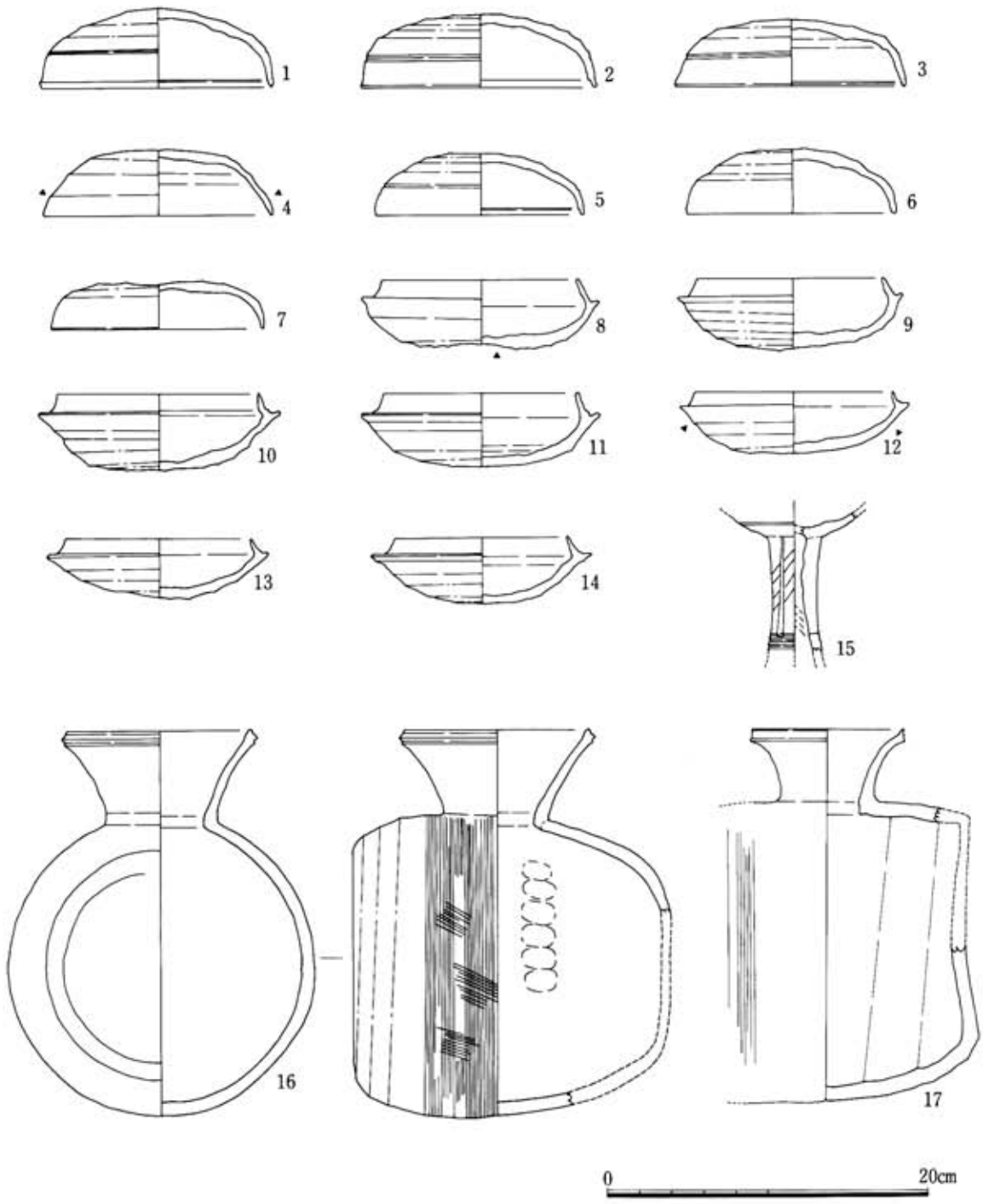


Fig.159　ＳＴ01古墳出土須恵器１（１/４）

馬　具

轡（48～53）48、49は素環鏡板である。48と49で対になる。48の環径5.6cm、49は6.1cm、銜を連結する。銜の全長11.3cm。50は銜か？両端が環状となり全長8.0cmを測る。48、49と対になるのか、とすれば三連式銜となる。51は銜の環状部か？52、53は引手金具、全長約16.0cmで大環部は約40°曲がる。

鞍（54、55）全長約7.0cm、最大幅4.5cmを測る。座金具がつく。

杏葉（56、57）平面環状で切り込みが入る。断面は外側がやや広がる長方形で環径7.5cm、内径4.2cmを測る。２つ対で出土しているため杏葉と考えた。雲珠の可能性有り。

鐙（58～62）58、59は鉸具と兵庫鎖からなる鐙鞋で58は兵庫鎖を図上復元している。鉸具全長5.8cm最大幅4.2cm、兵庫鎖は全長7.6cmを測る。60、61、62は鐙本体である。全長10cmを測

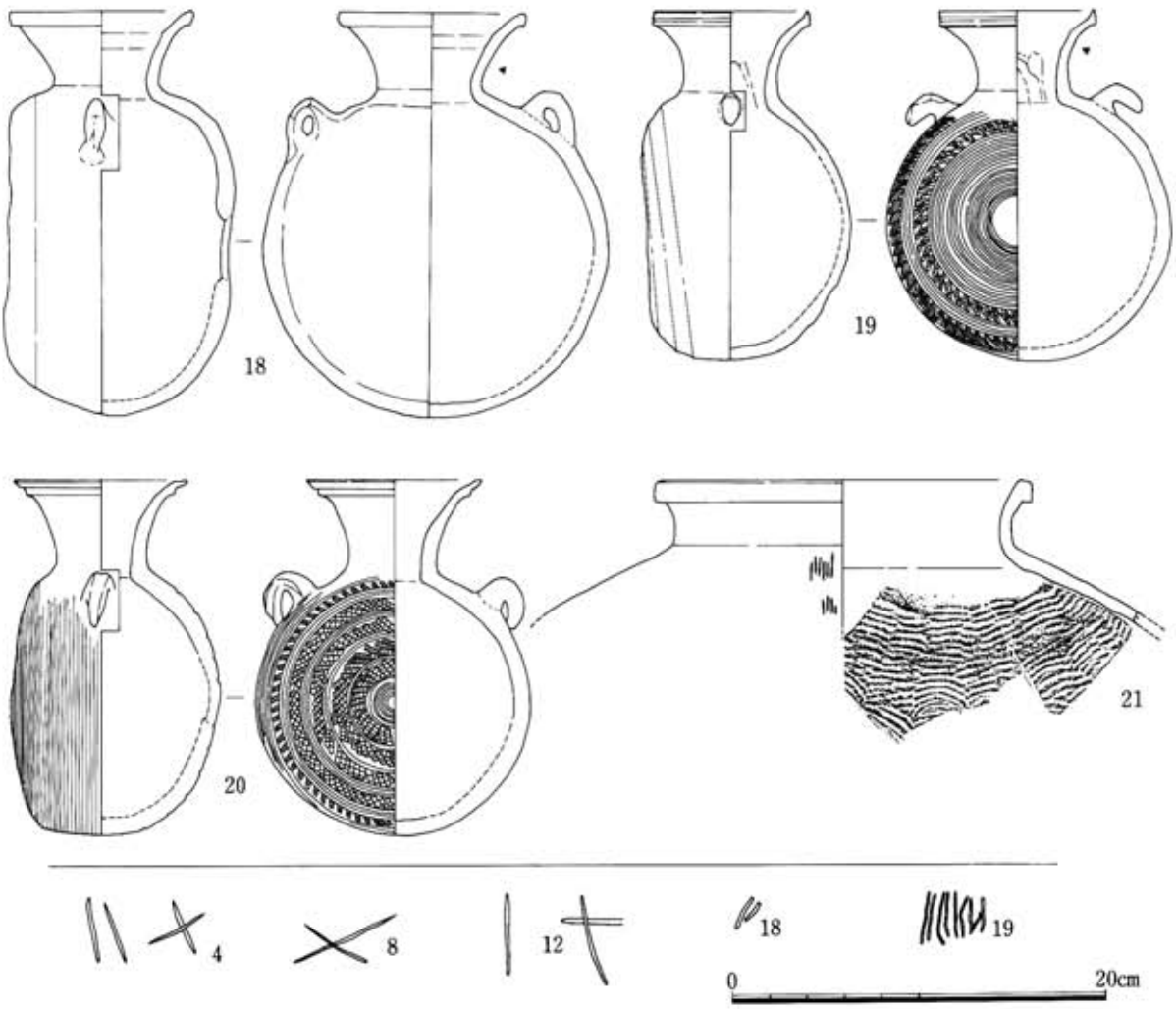


Fig.160　ＳＴ01古墳出土須恵器、ヘラ記号

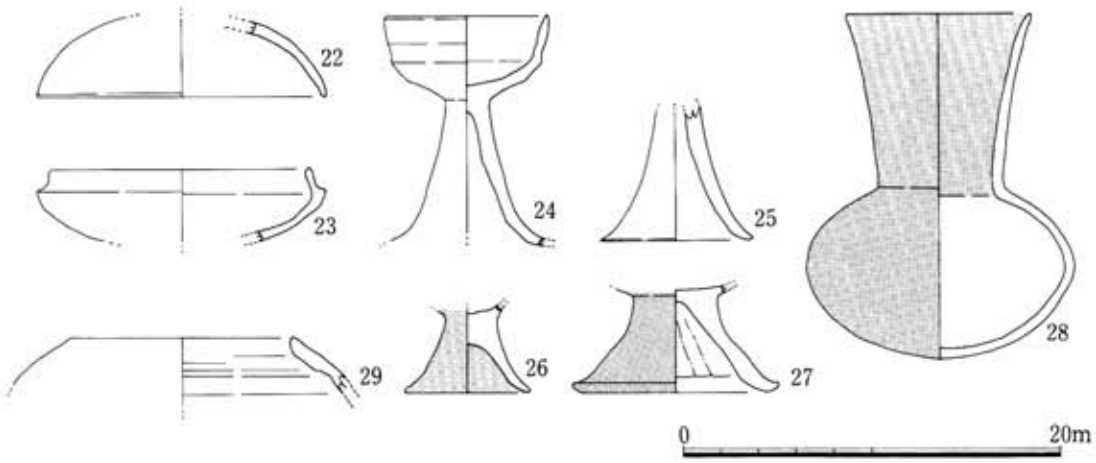


Fig.161　ＳＴ01古墳出土土師器（１/４）

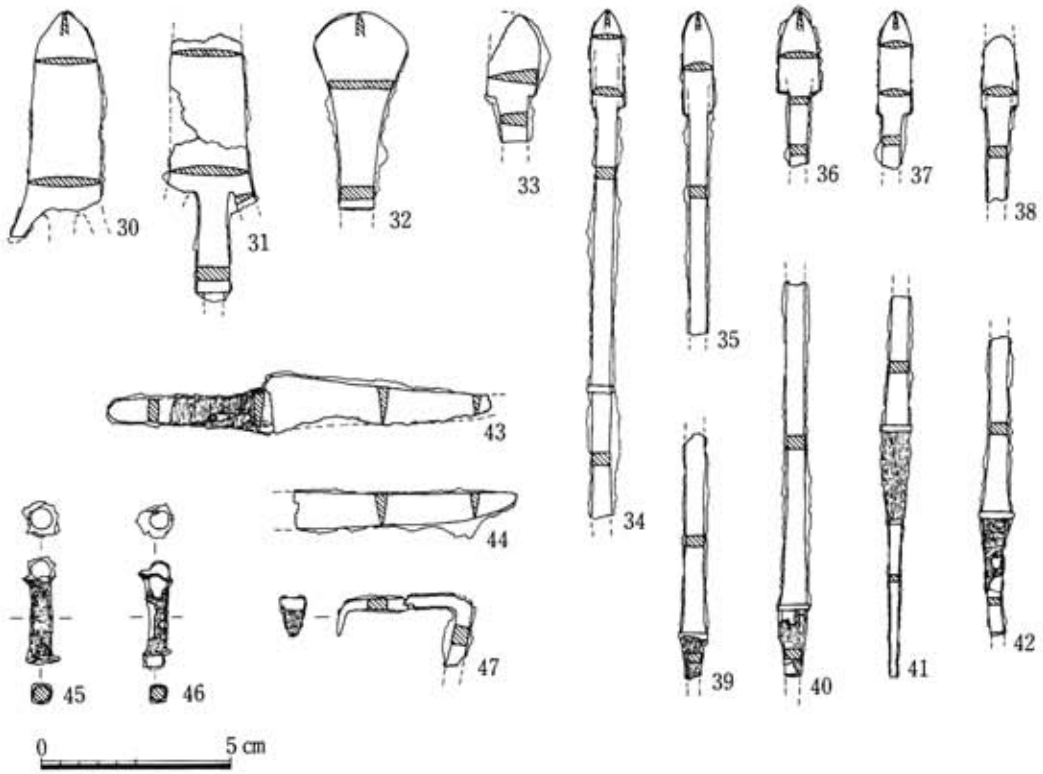


Fig.162　ＳＴ01古墳出土鉄器（１/２）

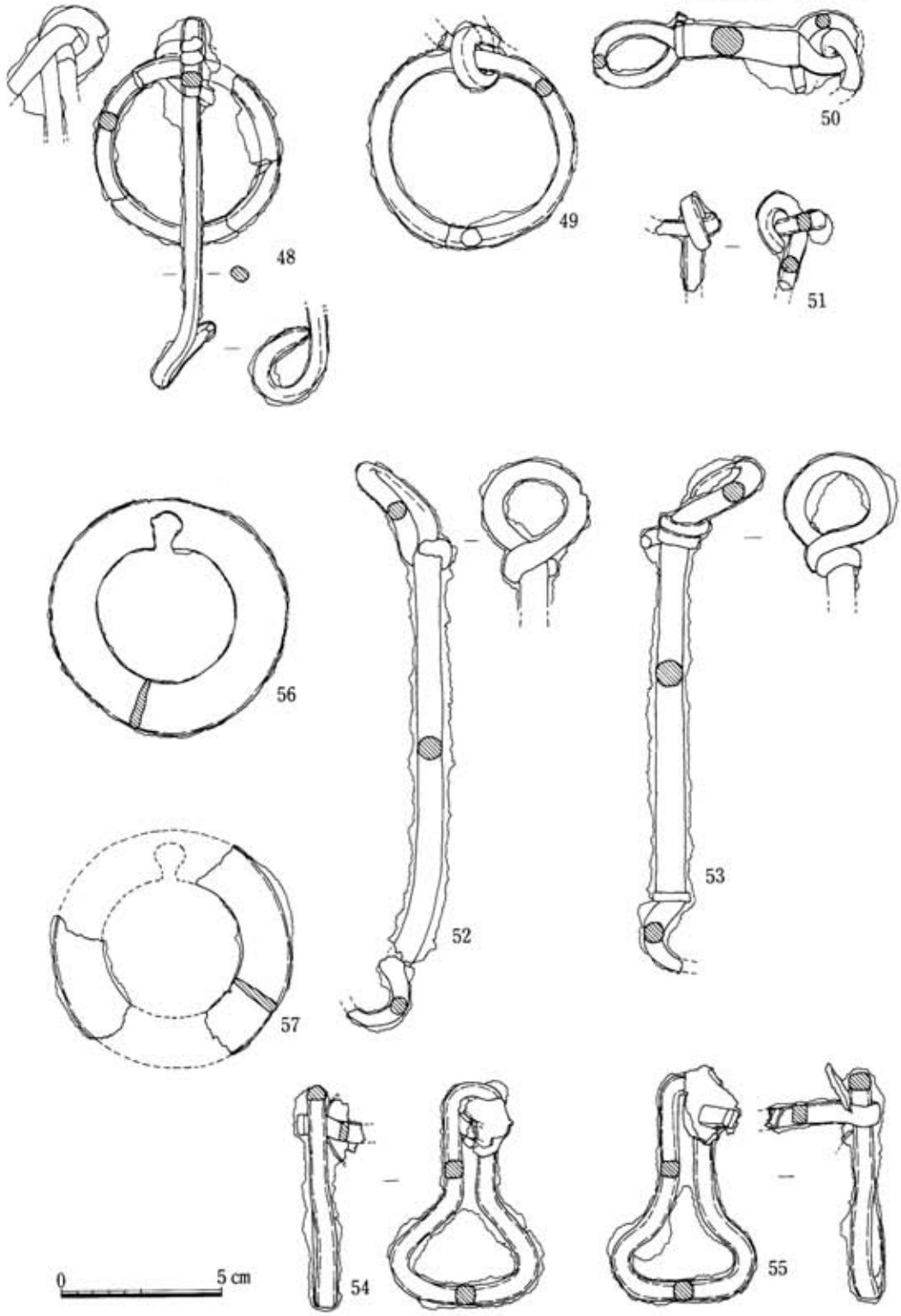


Fig.163　ＳＴ01古墳出土馬具１（１/２）

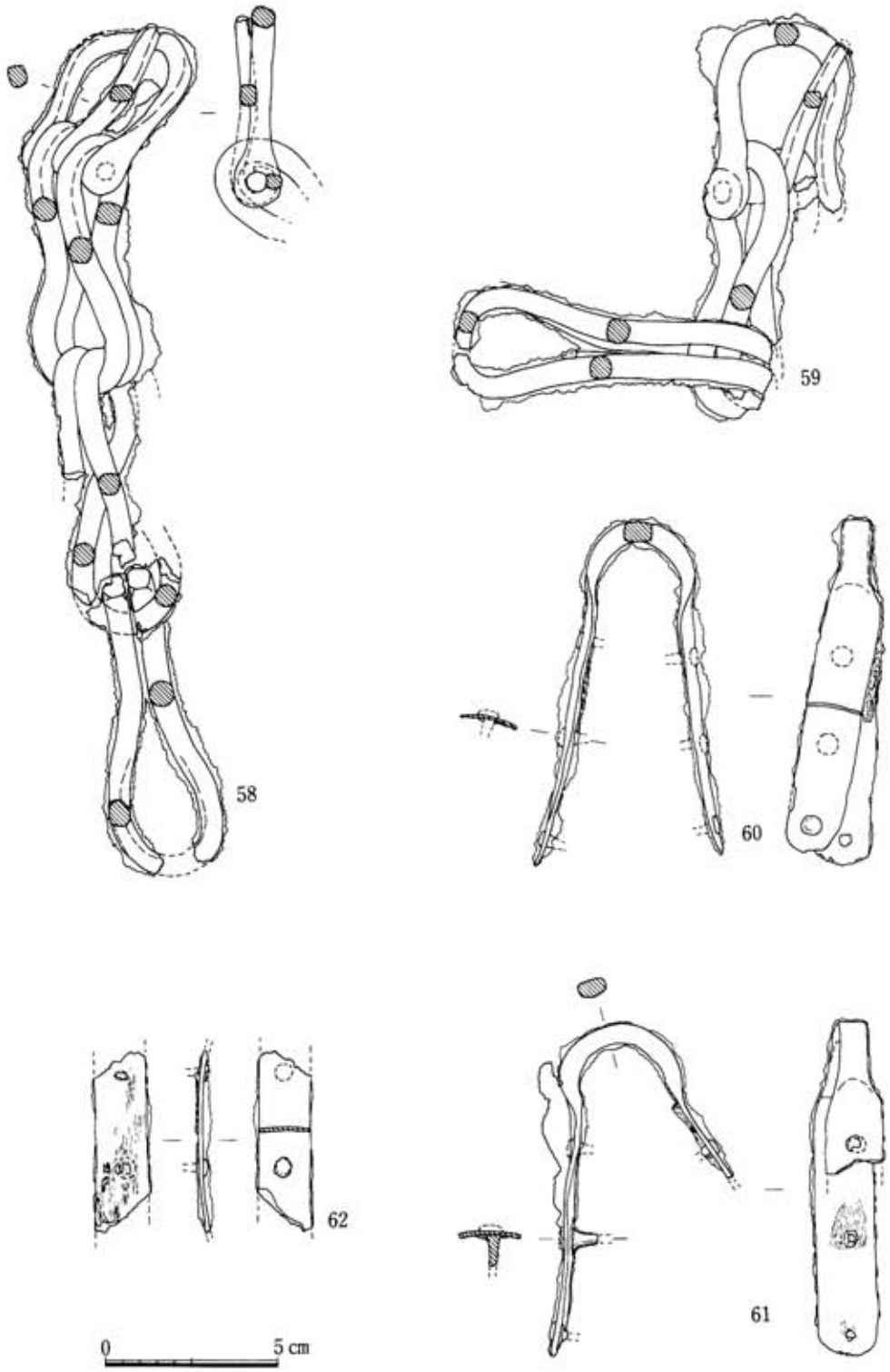


Fig.164　ＳＴ01古墳出土馬具２（１/２）

2．ＳＴ02古墳

(1) 概　　要

調査区東側に位置し、尾根上方約30m にＳＴ01古墳が築造される。玄室天井石を欠失し、南東斜面に向かって開口する。馬蹄形溝の掘削、墳丘基底面の整地、墳丘裾部の削り出しなどの地山整形がなされる。内部主体は複室両袖型横穴式石室で玄室は平面方形。ＳＴ02古墳と玄室の企画を同じくする。墳丘盛土内から杯蓋、身が、前室から鼈、提瓶、平瓶など完形の須恵器のほか馬具（轡・鐙）が、玄室から鉄刀、刀子、鉄鏃などが出土した。築造は小田編年ⅢＢ古段階期で追葬はⅣ期まで。ＳＴ01古墳との築造順は古墳占地からＳＴ01→ＳＴ02と考える。

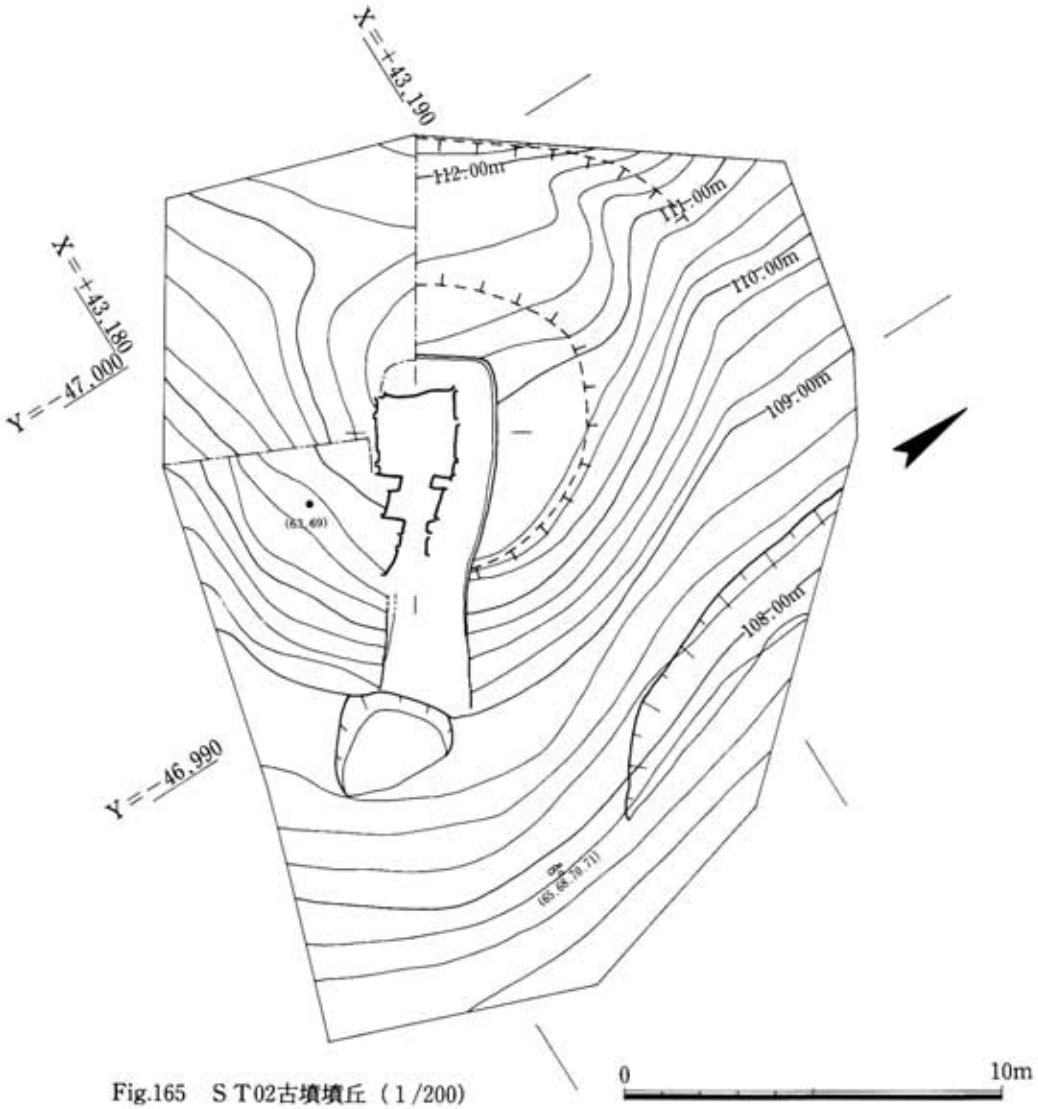


Fig.165　ＳＴ02古墳墳丘（1/200）

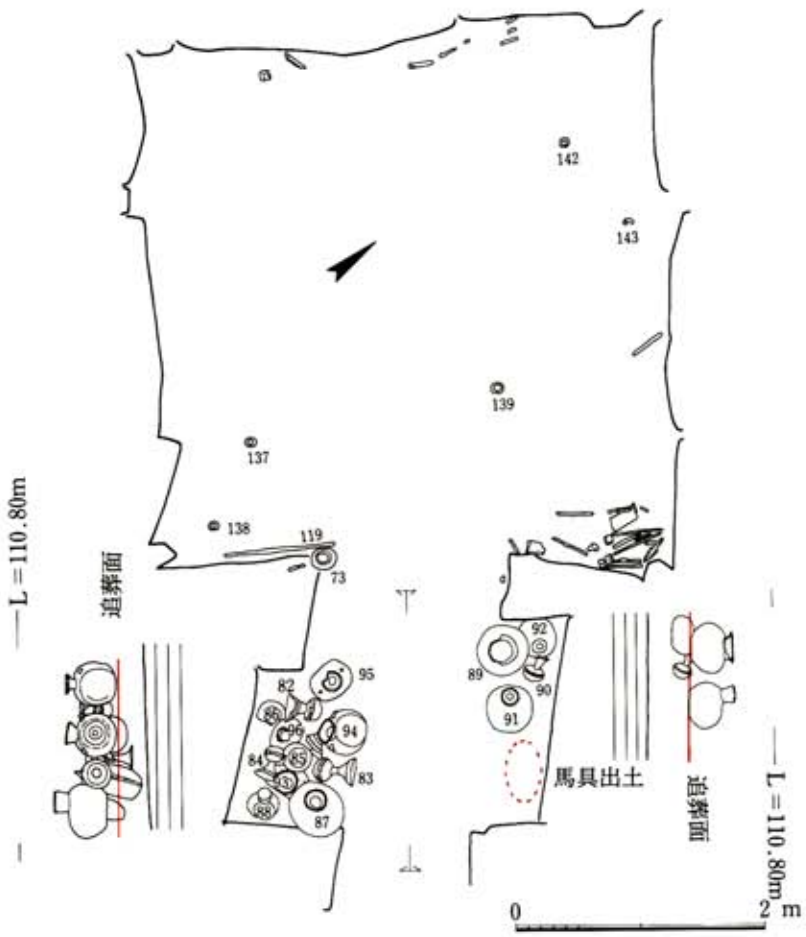


Fig.166　ＳＴ02古墳石室内遺物出土状況（１/60）

(2)　墳丘・周溝

墳丘径約17m の円墳である。石室崩壊の危険のため墳丘の北西部約１/４は地山整形面までの掘り下げを行っていない。

本墳は南東にのびる尾根の斜面上に等高線に直交させて石室を構築している。このような古墳占地のため地山整形などでＳＴ01古墳とは違うものがみられる。古墳構築にあたっての地山整形は石室後方の傾斜面を約半周する馬蹄形溝の掘削とその内側の墳丘基底面の整地および墳丘裾部の削り出しの３つの作業がある。

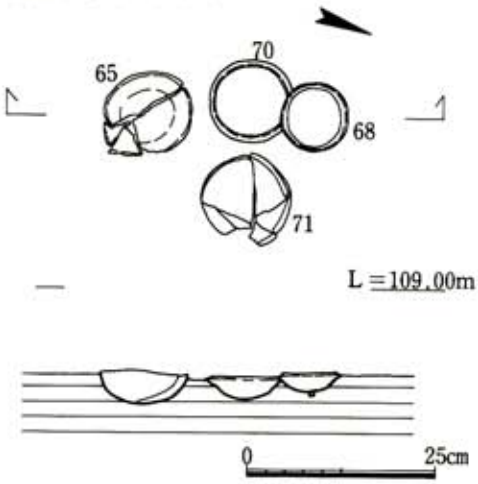


Fig.167　ＳＴ02古墳前庭部遺物出土状況(1/10)

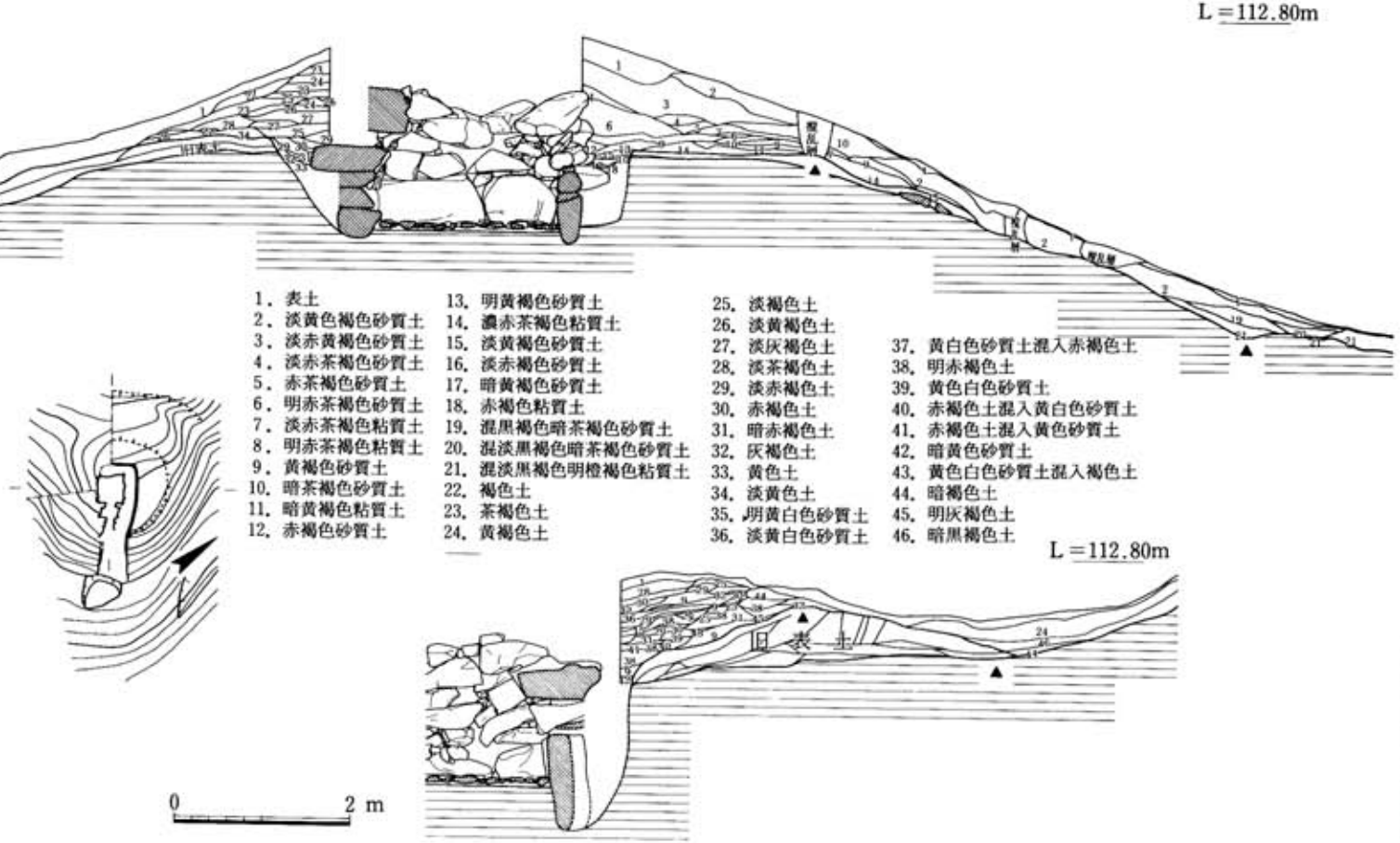


Fig.168　ＳＴ02古墳墳丘土層図（1/80）

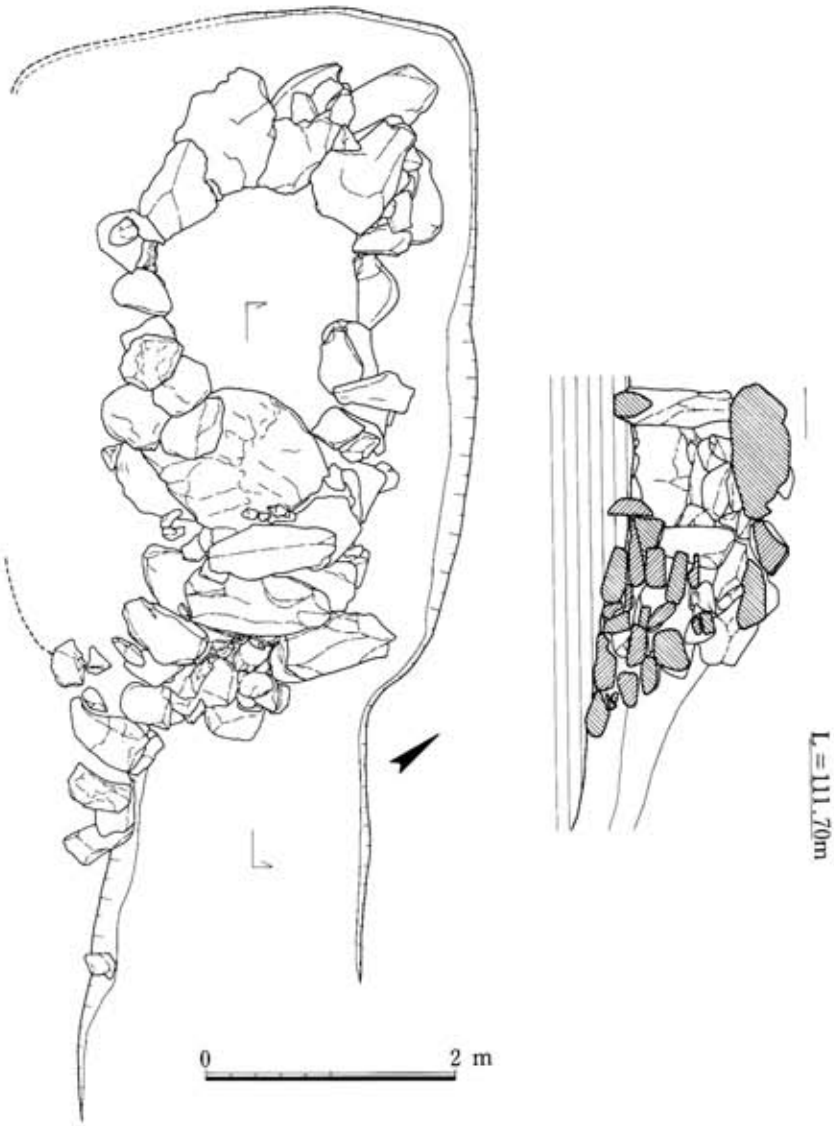


Fig.169　ＳＴ02古墳石室平面（1/60）

馬蹄形溝は傾斜面からの流水を下方に送り出す機能をもち、幅約4.0m、深さ約0.5m を測る。断面三角形で玄室中心から溝の奥壁側上端まで4.0m、下端まで6.4m ありそれぞれ傾斜変換点となる。

また石室右方で玄室中心から約4 m、平坦面がみられるが、これも盛土前段階の地山整形である。この傾斜変換点から裾部に向かって玄室中心から約8.8m に変換点があり墳丘裾部をテラス状に削り出している。

墳丘盛土は墳丘基底面から約1.3m 残存する。盛土の堆積状態が奥壁側と側壁側で異なる。奥壁側では石室に向かって傾いて堆積する。また右側壁側の盛土単位が粗く、左側壁側が細かい

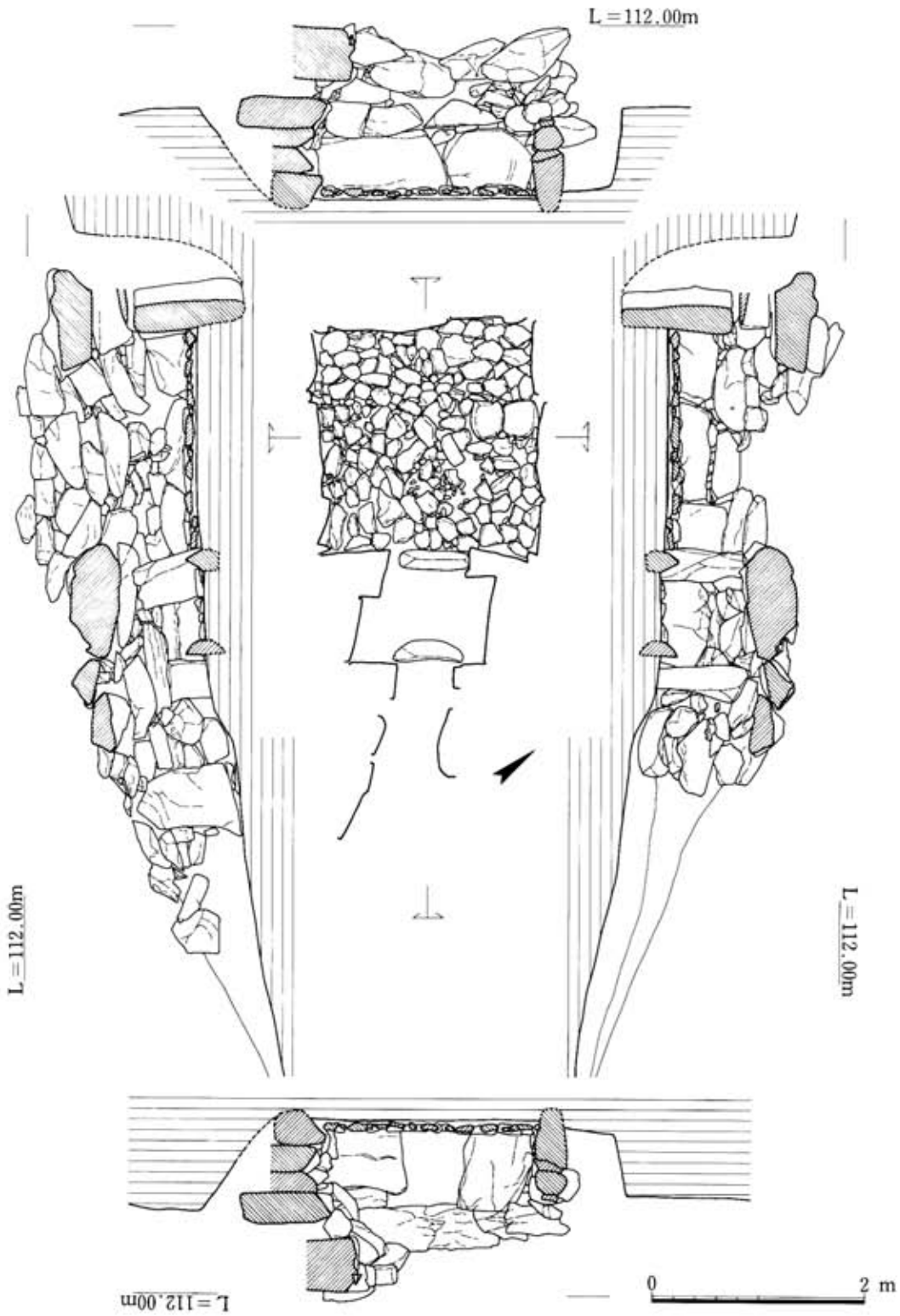


Fig.170　ＳＴ02古墳石室（1/60）

がこれはそれぞれの側壁に使う石材の大きさに起因していよう。

墳丘盛土内から出土した土器として、杯蓋１、身１がある。玄門から南東約８ｍから杯蓋２、杯身２が出土。これは墓前祭祀による供献土器であろう。

(3) 内部主体

複室両袖型の横穴式石室である。南東側の斜面に向かって開口し、主軸をN52°Eにとる。玄室平面形態は正方形、前室平面形態は幅広の長方形で短い羨道部を連結する。玄室から前室までの主軸は同一だが羨道部主軸はやや西寄りに曲がる。玄室天井部はすでになく、腰石とその上方数段の側壁が残存する。前室から羨道部にかけては天井部が残り閉塞施設もほぼ完存している。石室崩壊の危険のため石室西側の掘り方を地山まで検出していない。

規模は石室全長4.8m、玄室は中央長2.05m、中央幅2.05m、奥壁幅2.08m、前壁幅2.08m、右壁長2.2m、左壁長2.1m を測る。

奥壁は腰石に1.2×0.5m、0.8×0.5m 程の石材をそれぞれ横位に配している。腰石の上には３～４段の石積みが残り、残存高は1.2～1.5m を測る。腰石上方の石組みは横長の石材を乱雑に積み上げており隙間も相当ある。この隙間には小礫を詰める。

右側壁の腰石は奥壁側から0.7×0.4m、0.9×0.3m、0.4×0.4m の３石の石材をそれぞれ横位に配する。２段目は腰石よりやや小さめの長方形石材を目地が通るように積む。左側壁は高さ約1.5m 残存するが、石積みは奥壁、右側壁に比べさらに雑である。腰石は奥壁側から３石、0.5×0.4m、0.8×0.3m、0.7×0.3m の長方形石材を横位に配している。腰石上方の石積みは腰石と同大かさらに小ぶりの石を無造作に積み上げる。奥壁、側壁とも３段目から持ち送りしている。奥壁と側壁の隅角は腰石部で奥壁を挟み込むよう配置されており腰石の上からは互いに重なる三角持ち送り法を用いている。玄室床面には径0.2m 程の転石を敷き詰める。

前室は中央長0.8m、中央幅1.2m を測る。右壁が左壁より0.2m 長く、それぞれ１石の腰石を配す。従って腰石も左壁のそれより大形である。前室の天井石は1.4×1.2m の扁平石１石からなり、玄室楣石と前門の天井石を兼ねている。前室から羨道部にかけて３石の天井石を架けるがほぼ水平で高さを変えることはない。天井部高は0.8～1.0m を測る。前室右壁隅から、鼈、平瓶２、壺が前室左壁隅から高杯２、鼈４、平瓶１、提瓶５が出土した。追葬行為に伴う供献土器と考えられる。

玄門部は右袖石に0.8×0.3m の柱状石材を縦位に、左袖石に0.6×0.4m の長方形石材を立てる。玄門幅は0.75m を測り、玄門床面には框石を配する。前門は玄門と同様、柱状石材と方形石材を立て床面には框石を配する。この第１框石を根石として閉塞施設がほぼ完存する。閉塞石は径0.3m の転石を積み上げたもので玄門天井部付近までぎっしり詰まっている。

羨門は左袖石に0.9×0.5m の長方形石材を立てる。右袖石は後世の撹乱によるものか、破壊

されている。左袖石と同様な石材を配していたのだろう。

玄室内の遺物出土状況は前壁右隅から鉄鏃、留金具他が、左隅から鉄刀、須恵器壺が出土。この他に耳環、勾玉、小玉等も出土している。

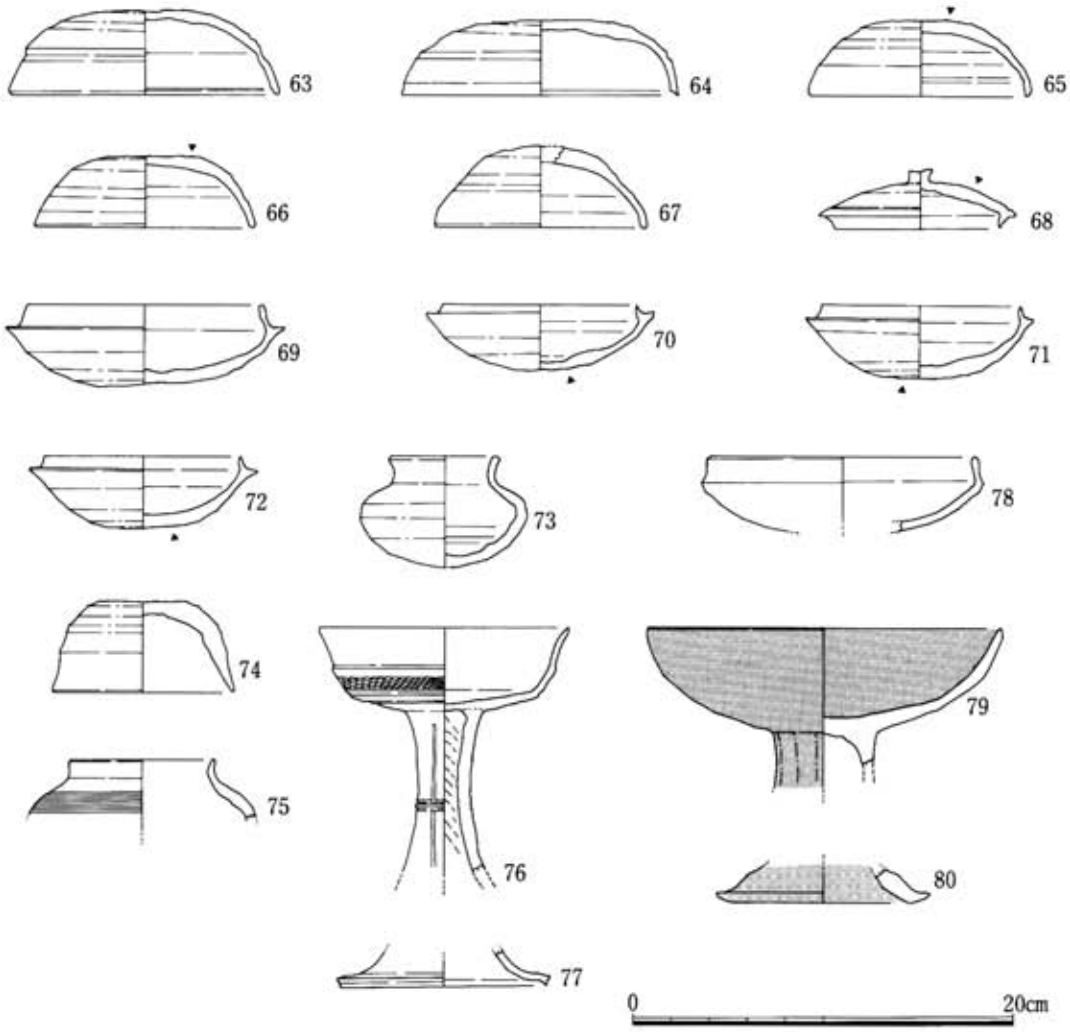


Fig.171　ＳＴ02古墳出土土器（１/４）

(4) 出土遺物

須恵器

杯蓋はA類（63、64）、C類（65、66、67）がある。63、64とも体部と口縁部の境に稜をもち、63は口唇部内面に沈線を施す。63は逆さまの状態で69と並んで墳丘盛土内から出土した。石室構築時の儀礼で使用されたのだろう。68は宝珠つまみ付き蓋でC類とした。宝珠つまみ付き蓋はD類の範疇に入れるべきであるが65、68、70、71がセットで出土しており65、70、71などの共伴資料からC類と考えた。これらは玄門から南東約8 m離れた地点で出土しており墓前祭祀による供献土器と考えられる。

杯身はA類（69）、C類（70、71、72）がある。出土状況は前述のとおりである。73、75は短頸壺。73は玄室内左袖石右隅から並んで鉄刀（119）、耳環（138）も出土しており床面直上であることからも被葬者の頭位方向を窺うことができる。76、77は高杯、76は長脚二段三方透かし。墳丘盛土内から出土、77は脚裾部のみの残存で前庭部からの出土である。74は蓋、器高は4.6cmで杯蓋とは異なる。壺などの蓋であろう。

前室の両壁から須恵器がまとまって出土している。前室左壁からは甕4（81、82、83、84）、高杯2（85、86）、提瓶5（88、93、94、95）、前室右壁からは甕1（90）、平瓶2（91、92）、壺1（89）が床面から3～17cm浮いた状態で出土している。Fig.172の前室遺物出土状況をみると約11～17cm浮いた土器群(81、82、83、84、86、87、89、91、92、94、95、96)とそれ以下の土器群（85、88、90、92、93）に分かれることがわかり、これが追葬回数に起因するのであろう。11～17cm以下出土の土器群は型式上より新しい要素をもっておりこれが前室左右壁際で出土している。これは後の追葬の際に前回の土器をかき出すことなく、より奥の方へ埋める状態で供献したことを示すのであろう。この他、前室右壁から馬具も出土している。

甕は81、82、83、84、90の5点ある。（81、82、83）→（84、90）の変遷が考えられそうであるが84は81、82、83と同じレベルで出土している。高杯は85、86の2点、両方とも長脚二段三方透かしが入り、型式上同一時期でよいと思うが85が11～17cm以下で出土している。平瓶は87、91、92（87、91）→（92）の変遷が考えられ出土状態からもそのことがいえる。壺は89の1点のみ。提瓶は88、93、94、95、96の4点ある。（93、94、95、96）→（88）の変遷が考えられるが93、96が11～17cm以下で出土している。以上のように土器型式上と追葬回数を対応させるのは追葬時の攪乱もあろうから困難であるが大方2回の追葬は想定できよう。

土師器

すべて墳丘盛土内出土である。78は杯身、79は高杯、杯部内外面丹塗り、脚部外面丹塗り、80は高杯脚部、内外面丹塗り。

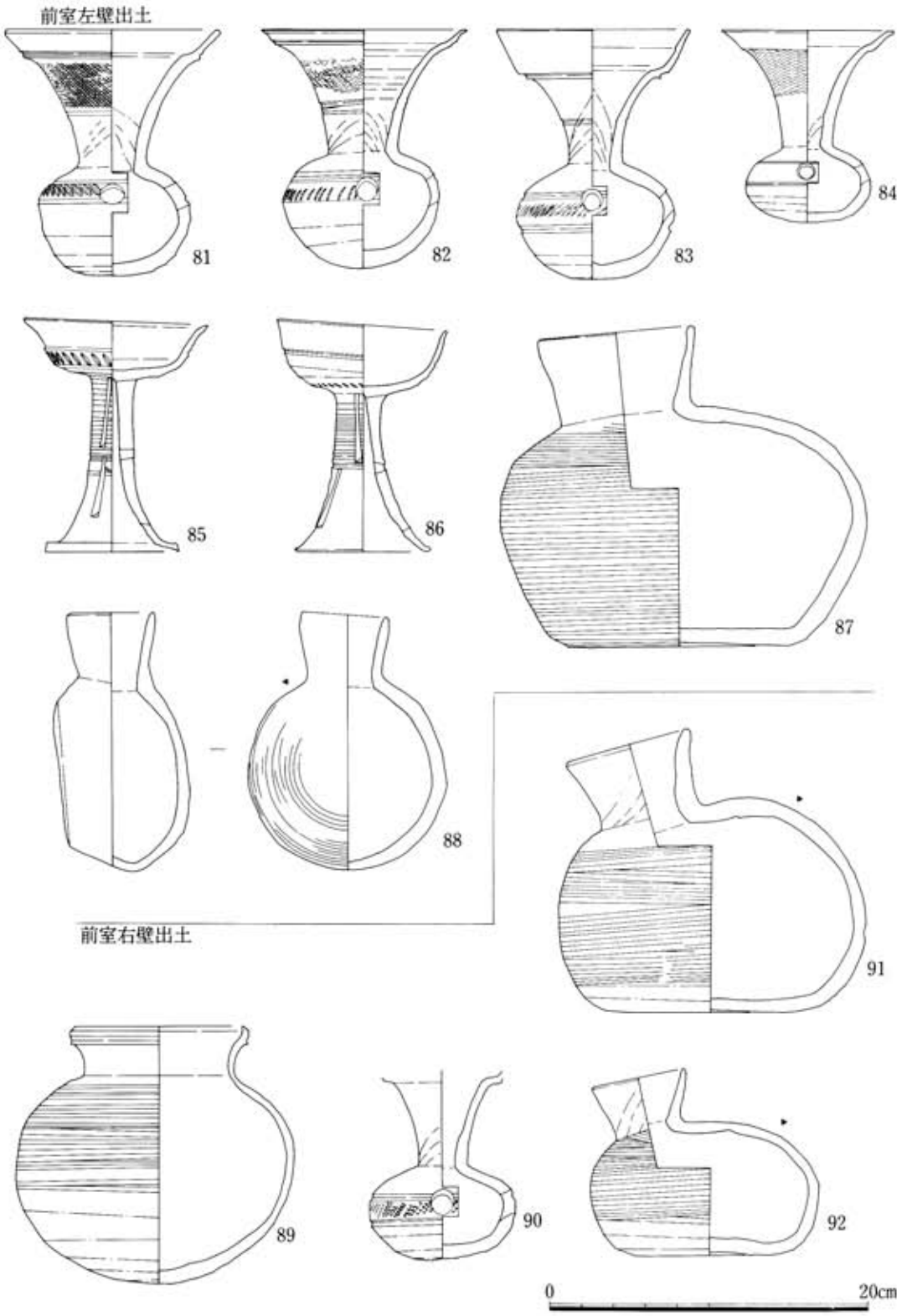


Fig.172　ＳＴ02古墳前室左右壁出土須恵器（1／4）

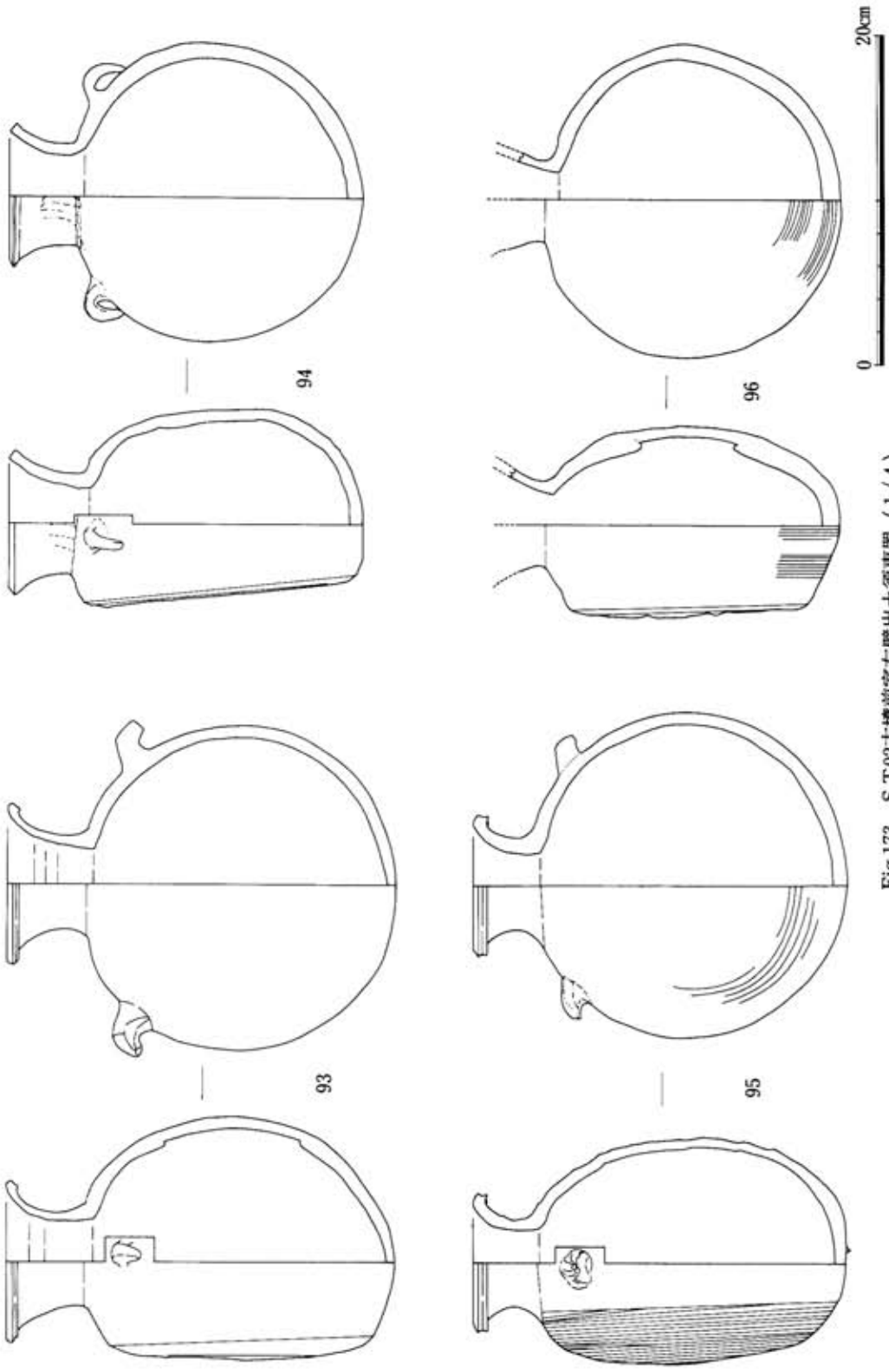


Fig.173　ST02古墳前室左壁出土須恵器（1/4）

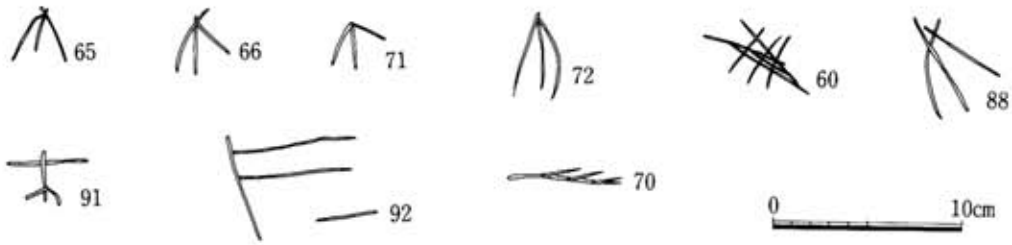


Fig.174　ＳＴ02古墳出土須恵器ヘラ記号（１/４）

鉄　器

鉄鏃(97～118)平根式(97、98、99)と尖根式(100～115)がある。**97**は圭頭式で鏃身長6.3cm、幅4.1cmを測る。**98**は柳葉式でやや腸抉気味になる。茎には木質が残りその周りに樺巻を施す。鏃身長5.3cm、幅2.1cm。**99**は斧箭式で鏃身長6.4cm、最大幅2.0cmを測る。尖根式は鏃身部形態が鑿箭形(100、101)、片刃箭形(102)、小形柳葉形(103～115)がある。**105**、**107**、**114**は鏃身最大幅が上位にあり平面五角形である。**115**は鏃身長4.0cmと長い。**103**～**107**、**109**、**111**、**112**、**115**は片丸造。**102**、**111**、**114**、**116**は前室床面から出土。他は玄室床面などからの出土である。

鉄刀（119）玄室前壁左隅出土である。切先と茎端部を欠くがほぼ完形である。茎部に目釘穴１ヶ所施す。把元金具も残る。鉄刀全長42.7cmを測る。

刀子（120、121、122、123）すべて玄室内出土である。**122**、**123**は刃部幅が８㎜と細い。関部がいずれも三角形でＳＴ01古墳出土の**43**と異なる。

弓付属金具（124）全長3.0cm、中央部には樹皮をまく。

鉄斧（125）刃部幅5.0cm、袋部を有し肩がつく。袋部内径は2.8cmで楕円形である。**124**、**125**とも玄室出土。

胡簶金具（135、136）**135**、**136**は接合しないが同一固体と考えられる。幅2.5cm。玄室前壁右隅で鉄鏃の下から出土。鐙金具の可能性もあるが馬具は前室に供献しており、鉄鏃が直上から出土していることから胡簶金具と推定した。鉄地金銅装で表面には緑青がふく。鋲を２ヶ所並列して打ちその間の中央部に一ヶ所留める。表面に皮革？付着。

馬　具

すべて前室右壁側の床直上出土である。

鐙（130、131）本体である。全長14.2cmを測る。側板は細長い柳葉形で下方は打ち広げられる。３ヶ所鋲を打ち込む。

鉸具（132、133）**132**は全長8.2cm、最大幅4.6cmを測る。**133**は刺金。

兵庫鎖（126、127、128、129）鉄環を折り曲げたもので全長7.8cmを測る。

轡（134）鏡板は板状立聞素環式で環径8.1cm、立聞幅4.1cmを測る。立聞／環径比＝0.56で坂本美夫編年（1985）では７Ｃ第２四半期となる。銜は二連式で全長9.2cm、引手金具は全長16.5cm、引手壺は右側のみ残る。

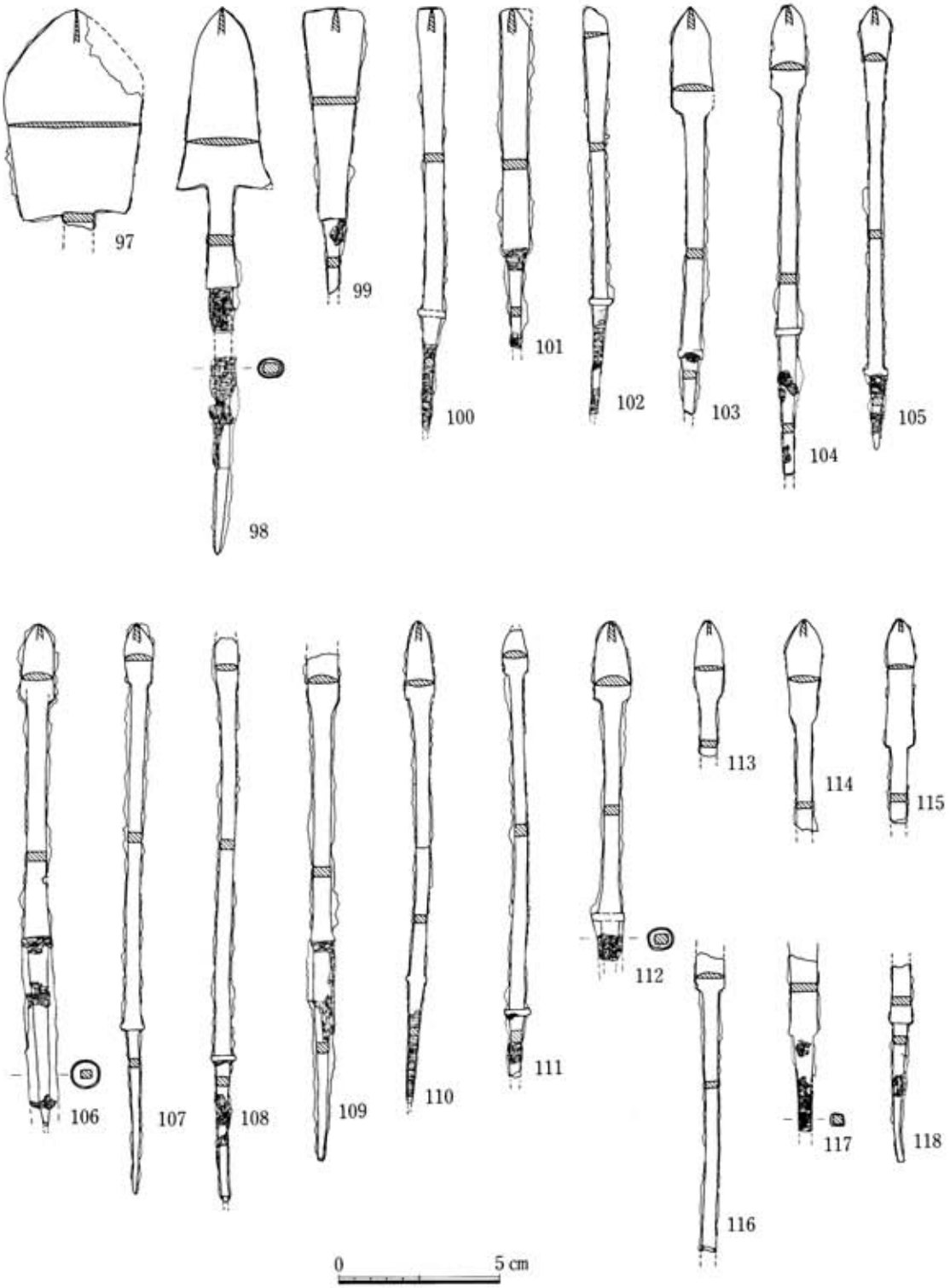


Fig.175　ＳＴ02古墳出土鉄鏃（１/２）

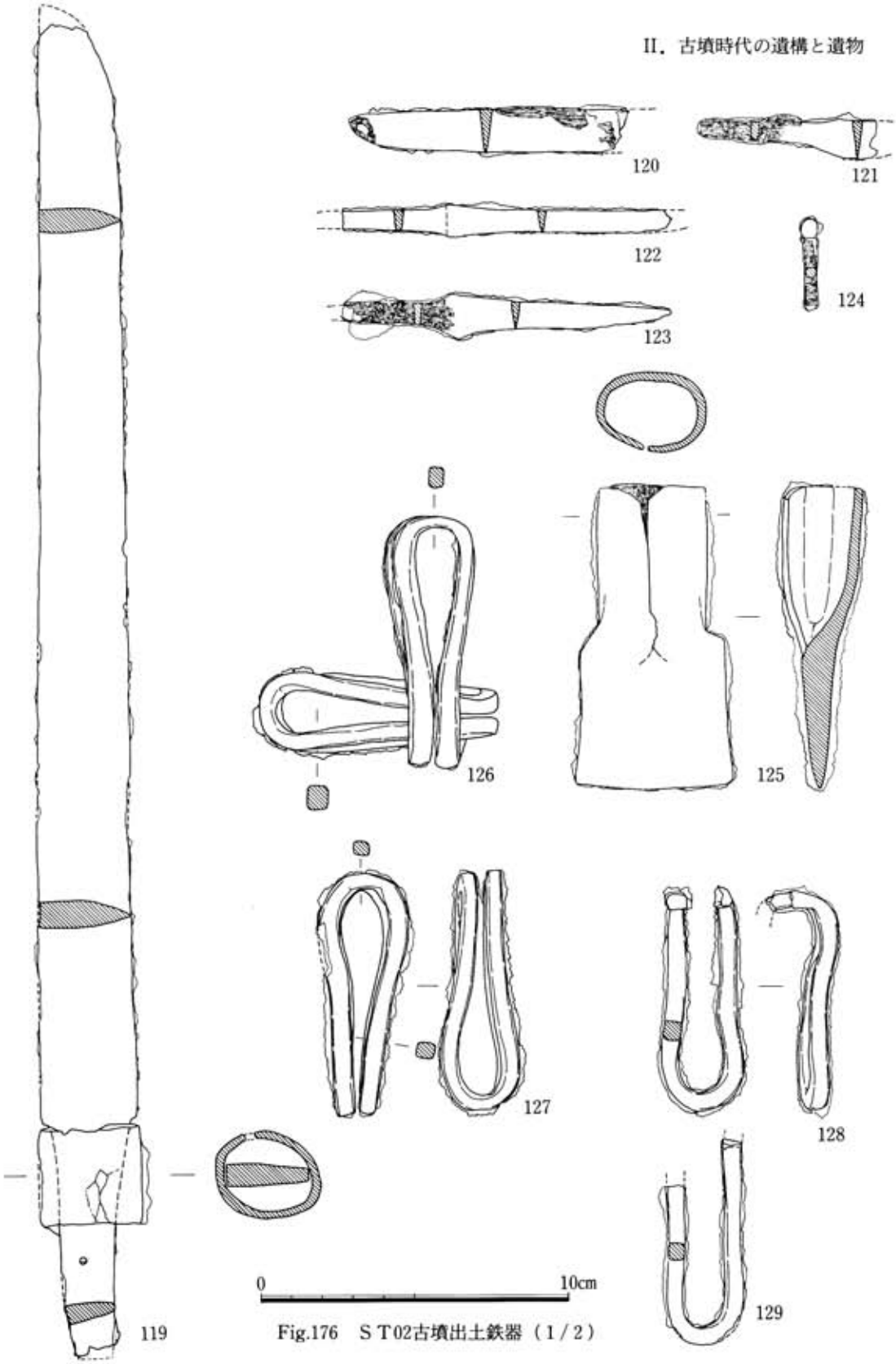


Fig.176　ＳＴ02古墳出土鉄器（１／２）

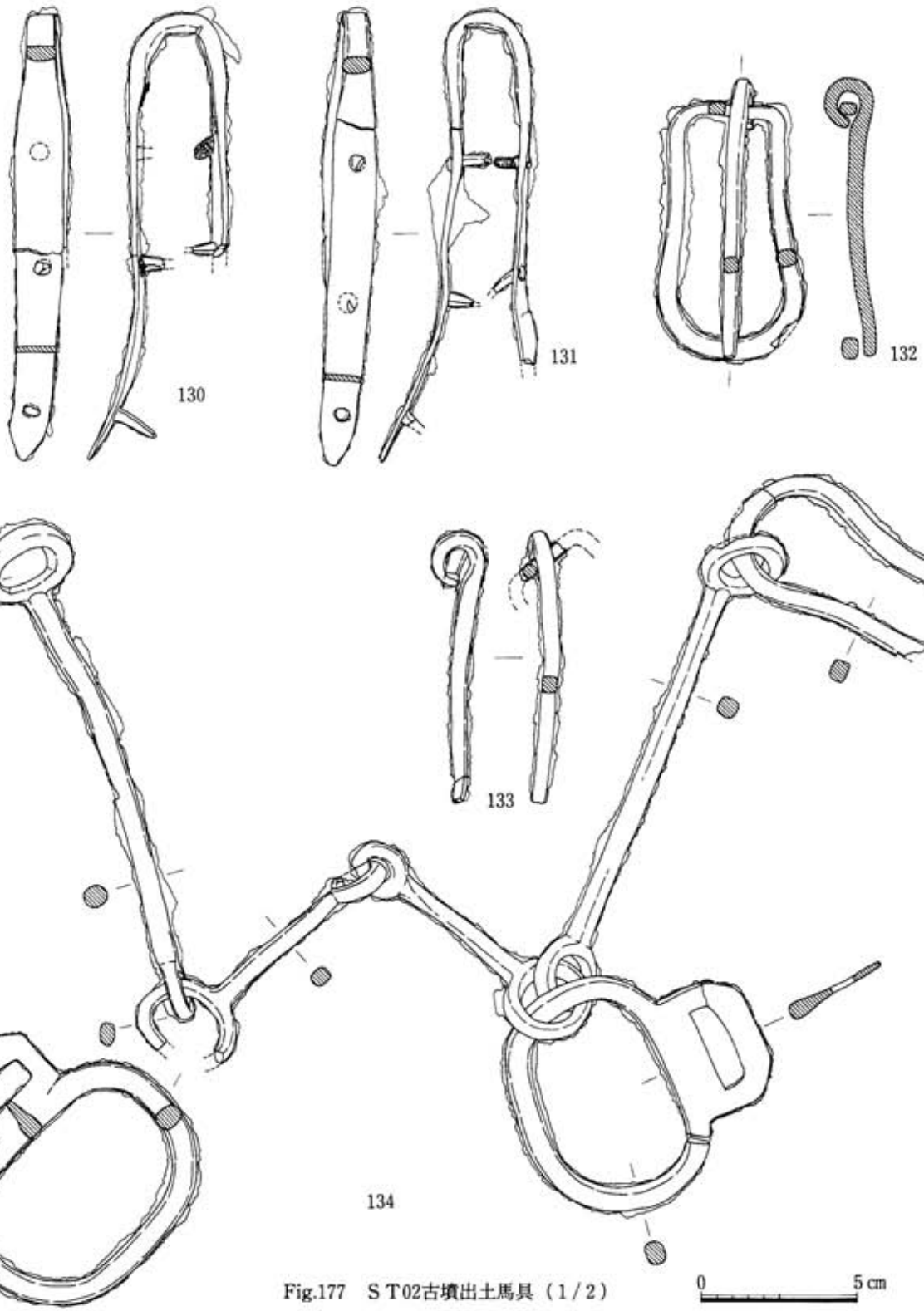


Fig.177　ＳＴ02古墳出土馬具（1/2）

装身具

耳環（137～142）と勾玉（143）とガラス小玉（144～174）がある。耳環は141が前室出土、他は玄室出土である。137、138、141は銅地金張り。139、140は銅地で全体に緑青が覆い腐蝕がはげしい。142は断面径2.5cmと細かい。錆の下は漆黒色で地金不明、銀の可能性がある。143は水色でガラス質の石である。孔の横、内側など数ヶ所に穿孔を試みた痕跡がある。ガラス小玉の162～164、166～171が水色、他は群青色である。

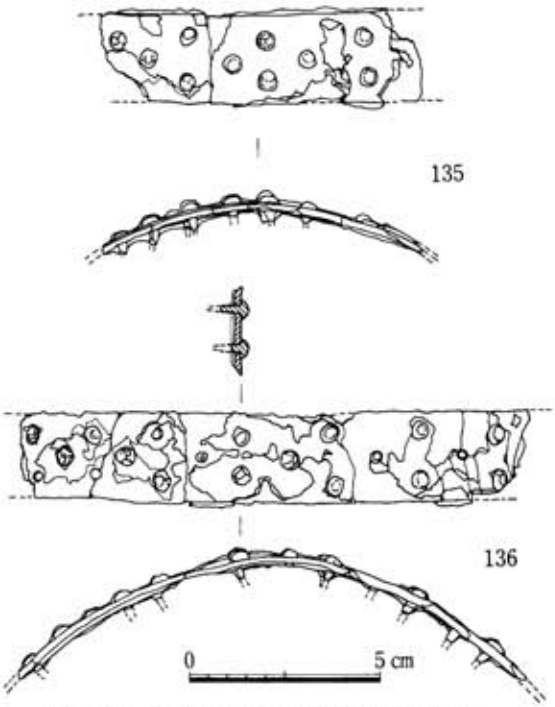


Fig.178　ＳＴ02古墳出土胡籙金具（１／２）

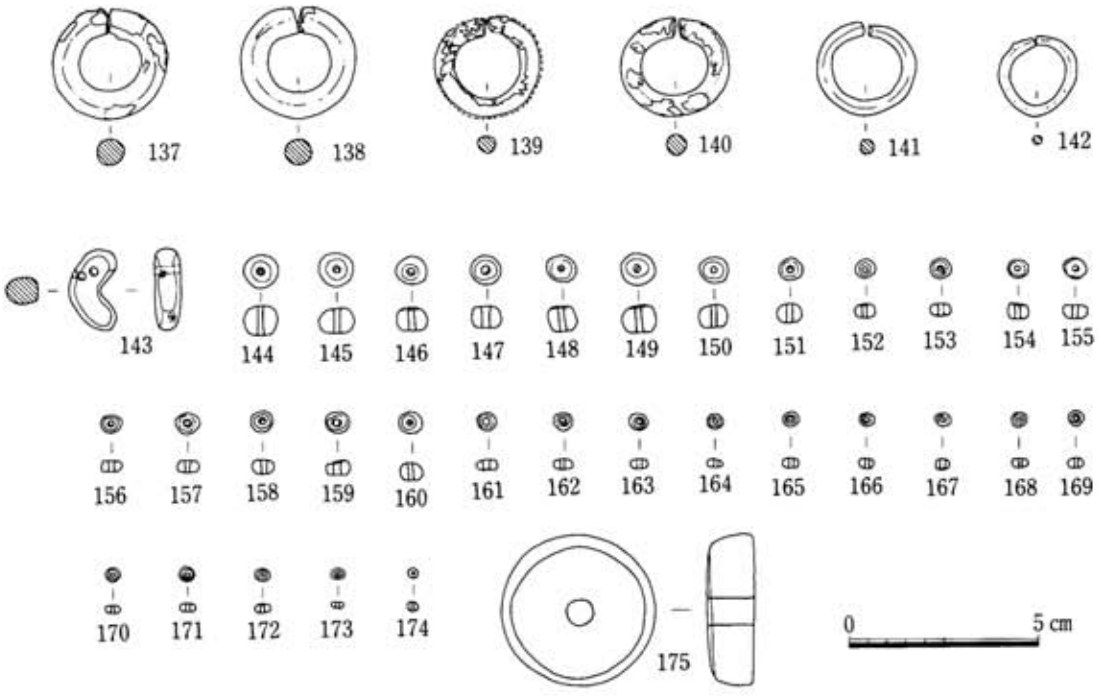


Fig.179　ＳＴ02古墳出土装身具類（１／２）

III. 歴史時代の遺構と遺物

1. SX04火葬墓

調査区の北西に位置し、南方10mにはST01古墳がある。墓壙検出面で、壺上半分が出土しており墓壙上部は削平をうけている。墓壙は平面不整円形で二段の掘り込みをもつ。規模は長軸70cm・短軸60cm・深さ27cmを測り、壙底は平坦にちかい。埋土は黒褐色で炭、人骨細片を含む。

壺の中には人骨片が入っており、まさしく蔵骨器である。また北西約10mの地点で、重機による表土はぎ、木の根抜き作業中、壺（175）が出土した。これも蔵骨器と思われる。

(1) 出土遺物

蔵骨器（176）器高22.4cm、口径9.6cm。須恵器である。胴部円筒形で肩がはり頸部は細く短い。口縁部でくの字に屈曲する。胴部は平行タタキで、下位部はヨコナデでタタキ文を消す。底部は同心円タタキ、肩部から口縁部にかけてヨコナデを施す。鳥栖市笛吹山古墳群や北茂安白石で類例が出土している（松尾禎作「奈良時代乃至平安初期の蔵骨器について」）。時期は9C代。

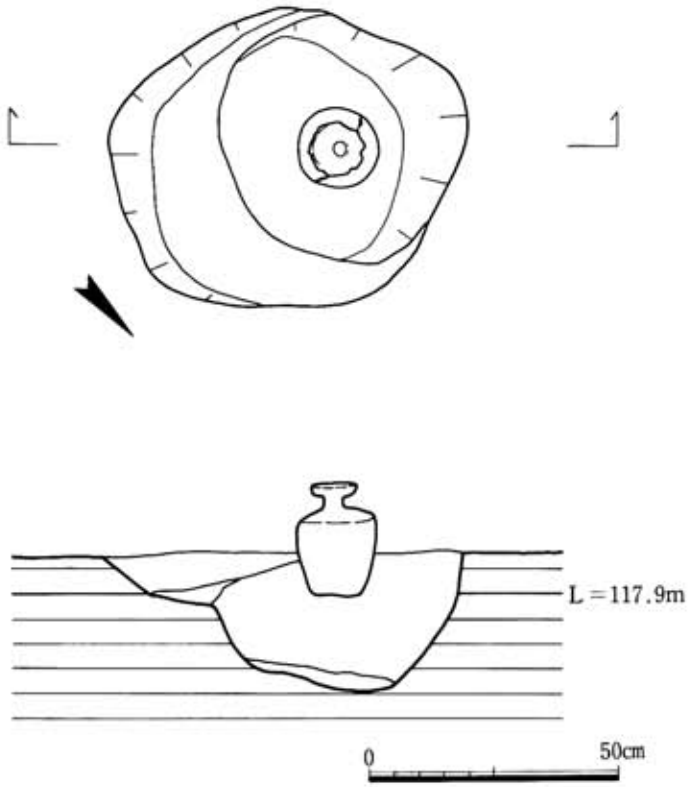


Fig.180　SX04火葬墓（1/15）

2．その他の土器

175は短頸壺でＳＸ04火葬墓北西約10m の位置から出土している。器高22.5cm、口径10.4cm。赤焼きの須恵器である。胴部最大径が上位にあり、肩ははらずに肩部から頸部にかけて内湾する。頸部は短く直立する。丸底である。胴部外面格子目タタキで下位部をナデ消す。肩部外面は摩滅により調整不明瞭。時期は９Ｃ代。

177は長頸壺。表土から出土、頸部を欠損する。高台付きで肩がはる。肩部から頸部にかけて内湾気味。胴下半部へラケズリ、他ヨコナデ。

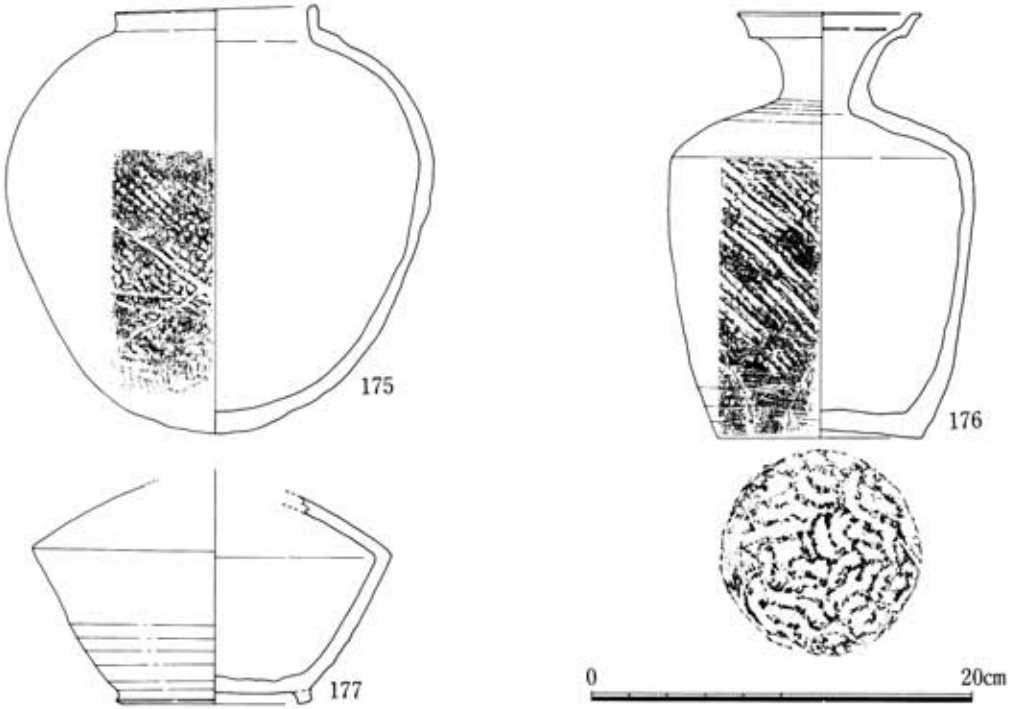


Fig.181　ＳＸ04火葬墓出土土器・その他の土器（１/４）

IV. 小　結

調査した遺構は、古墳２基と火葬墓１基である。古墳２基はいずれも横穴式石室で古墳時代後期に属する。火葬墓は蔵骨器を有するものである。

古墳築造時期は、墳丘盛土内出土遺物をもってその根拠とした。ＳＴ01古墳では盛土内の２ヶ所から土器群が出土した。どちらも墳丘南西部からで、それぞれ時期が違う土器群であるため古い時期をもって築造時期とした。玄門部左袖石前からは杯蓋が２個、杯身が２個出土しており最後の追葬を示す土器となる。これらから築造時期を小田編年ⅢＢ古段階期（６世紀第３四半期）、追葬をⅢＢ新段階期（６世紀第４四半期）と考えた。

ＳＴ02古墳も盛土内から須恵器、土師器の杯蓋・身・高杯などが出土しているが、これらもＳＴ01古墳と同じ時期を示す土器である。玄門から南東約８ m の位置から杯蓋が２個、身が２

個出土している。前庭部というには少し離れた位置からの出土であるが下方に古墳もないことからＳＴ02古墳の最後の追葬を示す供献土器と考えた。これらから築造時期をⅢＢ古段階期（6世紀第3四半期）、追葬をⅣ期までとした。

ＳＴ01古墳、ＳＴ02古墳はほぼ同時期に築造され、ＳＴ01古墳の最後の追葬が終わった後もＳＴ02古墳は次の時期まで追葬されている。築造順はＳＴ01古墳がより優位な古墳占地であることなどからＳＴ01→ＳＴ02であろう。

ＳＴ01、ＳＴ02古墳では古墳築造にあたっての占地の違いから、周溝の有無など地山整形方法にも違いがある。ＳＴ01古墳は尾根上でもテラス部に占地しＳＴ02古墳は尾根の斜面上に築造する。したがってＳＴ01古墳は斜面上方からの流水による墳丘の侵食の心配はないがＳＴ02古墳は斜面からの流水を下方に送り出す機能が必要になる。そこでＳＴ02古墳は奥壁後方に馬蹄形溝を掘削することになるし、ＳＴ01古墳はとくに周溝を意識してつくる必要もない。地山整形ではこの周溝の掘削の有無のほか、墳丘裾部や墳丘基底面を平坦に削り出し整地するという点では共通している。

石室形態についてであるが、まずＳＴ01古墳は単室両袖型なのに対してＳＴ02古墳は複室両袖型という違いがある。複室両袖型石室の形成について小田富士雄[1]は唐津市島田塚古墳にその原初的形態を見いだし肥前地域における複室構造の形成を6世紀前半代と推察した。それに対して蒲原宏行[2]は「島田塚古墳の羨道後半部に前室的要素を見いだす事は難しく（中略）現状では6世紀中頃に比定し得る可能性のある鳥栖市田代太田古墳石室が古いものと目される」としている。筆者も蒲原に同意し、複室構造は少なくともⅢＢ古段階期には鳥栖市において登場していると考える。

次に石室企画についてであるが、ＳＴ01、ＳＴ02古墳は玄室平面方形で玄室企画が2ｍ×2ｍと同じであることに注目したい。この2×2ｍの玄室企画は本遺跡のほか都谷Ｂ遺跡のＳＴ004、010、016古墳などにみられ、石室設計にあたってあらかじめ企画を設定していたことが窺える。かつて蒲原[2]は金立開拓遺跡の横穴式石室の形態分類を行っているが本遺跡ＳＴ02古墳は、そのＤⅡ類に相当する。また、金立開拓遺跡のＤⅡ類のＳＴ013、016、011も玄室企画が2×2ｍである。蒲原はＤⅡ類の出現を6世紀末から7世紀初頭としているが少なくとも佐賀平野東部地域において6世紀第3四半世紀まで溯らせる必要があろう。一般的に石室の変遷について玄室平面長方形から方形へ、石室の小形化が言われている。この平面方形で2×2ｍの玄室企画をこの変遷の中でどう位置づけるか今後の課題である。

註

1．小田富士雄「横穴式石室古墳における複室構造の形成」『史淵100』1968
2．蒲原宏行『金立開拓遺跡』佐賀県教育委員会1984

Tab.26 土 器 一 覧 表

（ ）は推定

Fig.図番号（PL番号）	出土地点	器 種	法 量cm	形態・調整の特徴	色 調	焼 成	県遺物登録番号 写真登録番号
159-1（PL.82）	ST01 墳丘	杯蓋（須恵器）	口径 14.4 器高 4.9	体部と口縁部の境に沈線、口唇部内面にも沈線を有す。天井部回転ヘラケズリ。	黄灰色	不 良	85-1790 91006
-2（〃）	ST01 墳丘	杯蓋（須恵器）	口径 14.5 器高 4.6	口唇部内面に沈線、天井部約3/4回転ヘラケズリ。	灰 色	普 通	85-1789 901080
-3（〃）	ST01 墳丘	杯蓋（須恵器）	口径 14.3 器高 4.2	体部と口縁部の境に稜、口唇部内面に沈線を有す。天井部約2/3回転ヘラケズリ。	灰 色	普 通	86-3455 910007
-4（〃）	ST01 墳丘	杯蓋（須恵器）	口径 14.0 器高 4.1	天井部不定方向ヘラケズリ。体部にヘラ記号有り。12とセット。	黄灰色	不 良	85-1783 901074
-5	ST01 墳丘	杯蓋（須恵器）	口径 12.8 器高 3.9	体部と口縁部の境及び口唇部内面に沈線あり。天井部約3/4回転ヘラケズリ。	灰黒色	普 通	85-3456
-6（〃）	ST01 墳丘	杯蓋（須恵器）	口径 13.0 器高 4.0	天井部約2/3雑な回転ヘラケズリ。	外面 灰 色 内面 橙褐色	普 通	85-1787 901078
-7（〃）	ST01 墓道3	杯蓋（須恵器）	口径 13.0 器高 3.0	天井部は平坦、約3/4回転ヘラケズリ。	灰黒色	普 通	85-1786 901077
-8（〃）	ST01 墳丘土器群	杯身（須恵器）	口径 12.1 器高 4.3 たちあがり高1.5	底部内面に当て道具痕有り。約2/3回転ヘラケズリ、ヘラ記号有り。	灰 色	良 好	85-1781 901072
-9（〃）	ST01 墳丘表土	杯身（須恵器）	口径 11.6 器高 4.5 たちあがり高1.4	底部約3/4回転ヘラケズリ。	灰 色	普 通	86-3454 910002
-10（〃）	ST01 墳丘土器群	杯身（須恵器）	口径 12.4 器高 4.8 たちあがり高1.4	たちあがりと受部の境が浅く窪む。底部約2/3回転ヘラケズリ。	外面 灰 色 内面 黄灰色	普 通	85-1780 901071
-11（〃）	ST01 墳丘表土	杯身（須恵器）	口径 12.1 器高 4.6 たちあがり高1.6	たちあがりと受部の境が窪む。底部約2/3回転ヘラケズリ。	灰 色	普 通	85-1788 901079
-12（〃）	ST01 墳丘盛土	杯身（須恵器）	口径 12.4 器高 3.8 たちあがり高0.9	底部不定方向ヘラケズリ。ヘラ記号3ヶ所有り。13とセット。	黄灰色	不 良	85-1782 901073
-13（〃）	ST01 墓道2	杯身（須恵器）	口径 11.4 器高 3.8 たちあがり高1.1	底部約2/3回転ヘラケズリ。	灰黒色	普 通	85-1785 901076
-14（〃）	ST01 墓道1	杯身（須恵器）	口径 10.7 器高 4.0 たちあがり高1.3	底部約2/3回転ヘラケズリ。	灰 色	普 通	85-1784 901075
-15	ST01 表土	高杯（須恵器）	——	長脚二段三方透かし、脚部中位に三条の沈線有り。	灰 色	普 通	86-408
-16（PL.83）	ST01 墳丘表土	横瓶（須恵器）	口径 (11.2) 器高 24.0 胴径 (19.8)	胴部外面タタキのちカキ目。胴部背面ヘラケズリ、内面に指頭痕有り。	灰 色	普 通	86-3458 910004
-17（〃）	ST01 墳丘盛土	横瓶（須恵器）	口径（ 9.4） 器高 22.9	胴部背面ヘラケズリ、前面にかけてカキ目。	灰白色	不 良	86-3459 910003

（　）は推定

Fig-図番号（PL番号）	出土地点	器種	法量cm	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
160-18（PL.83）	ST01 玄室左隅	提瓶（須恵器）	口径（9.9） 器高 21.7	肩部に環状の把手がつく。胴部前面はカキ目および施文なし。頸部にヘラ記号あり。	灰黒色	普通	86-411 901107
-19（〃）	ST01 玄室左隅	提瓶（須恵器）	口径 8.2 器高 18.8	肩部に角状の把手がつく。側面から前面にかけてカキ目、前面に二条の櫛描波状文を施す。頸部にヘラ記号あり。	灰色	普通	86-412 901108
-20（〃）	ST01 玄室右隅	提瓶（須恵器）	口径（9.4） 器高 19.1	肩部に環状把手がつく。胴部前面にカキ目、前面に六条の沈線と櫛描列点文、背面にも櫛描列点文を施す。	灰色	良好	86-413 901109
-21（〃）	ST01 墳丘外の東南部	甕（須恵器）	口径（19.0）	口縁端部は外側に肥厚し、断面台形を呈する。内面同心円文叩き目。	黄灰色	普通	86-409 901105
161-22（〃）	ST01 表土	杯蓋（土師器）	口径（13.4） 器高（3.8）	外面黒塗り？	黄褐色	普通	86-405 901103
-23	ST01 表土	杯身（土師器）	口径（15.0） 器高（4.0）	たちあがりは若干内傾し、受部はなだらからにつくりだす。	黄褐色	普通	85-1800
-24（〃）	ST01 表土	高杯（土師器）	口径（8.9） 器高（12.2）	杯体部に稜をもち、脚部は長め。	赤褐色	普通	86-403 901102
-25（〃）	ST01 表土	高杯（土師器）	底径 7.8	脚部は部分的にタテ方向のヘラケズリ。裾端部は外にはねる。	赤褐色	普通	86-402 901101
-26（〃）	ST01 表土	高杯（土師器）	底径 6.4	短脚で、裾部は外に広がる。脚部内外面丹塗り。	赤褐色	普通	86-401 901100
-27	ST01 表土	高杯（土師器）	底径（9.8）	短脚で、裾端部は外にはねる。脚部外面丹塗り。	赤褐色	普通	86-407
-28（〃）	ST01 玄室右隅	直口壺（土師器）	口径 9.8 器高 18.2	胴部最大径は中位にあり、外反気味の頸部がつく。器壁はうすい。外面、頸部内面丹塗り。	赤褐色	良好	86-410 901106
-29	ST01 表土	無頸壺（土師器）	口径（11.6）	頸部内面に輪積み痕が明確に残る。	黄褐色	普通	86-406 901104
171-63（PL.92）	ST02 墳丘盛土	杯蓋（須恵器）	口径 14.3 器高 4.5	体部と口縁部の境に稜、口唇部内面に沈線を有す。天井部約2/3回転ヘラケズリ。	灰黒色	良好	85-3380 901091
-64（〃）	ST02 墳丘盛土	杯蓋（須恵器）	口径 14.5 器高 3.9	体部と口縁部の境に稜をもち、口唇部は面取りされる。天井部約2/3回転ヘラケズリ。	灰色	普通	86-416 901111
-65（〃）	ST02 前庭部	杯蓋（須恵器）	口径 11.6 器高 4.0	天井部約2/3回転ヘラケズリ。天井部にヘラ記号あり。	灰色	普通	85-3360 901082
-66（〃）	ST02 前庭部付近	杯蓋（須恵器）	口径 11.8 器高 3.9	天井部約2/3回転ヘラケズリ。天井部にヘラ記号あり。	灰黄色	普通	85-3361 901083
-67	ST02 羨道閉塞部	杯蓋（須恵器）	口径（11.2） 器高（4.3）	天井部約2/3回転ヘラケズリ。	外面 灰黒色 内面 灰色	普通	85-3362

（ ）は推定

Fig-図番号（PL番号）	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
171-68（PL.92）	ST02 前庭部	杯蓋（須恵器）	口径　8.6 器高　3.1	宝珠つまみがつく。口縁部外面は浅く窪み受部は水平にのびる。たちあがりは内傾化する。体部にヘラ記号あり。	灰褐色	普　通	85-3359 901081
-69（〃）	ST02 墳丘盛土	杯身（須恵器）	口径　12.4 器高　4.4 たちあがり高1.3	底部約2/3回転ヘラケズリ。63とセット。	灰　色	普　通	85-3381 901092
-70（〃）	ST02 前庭部	杯身（須恵器）	口径　10.0 器高　3.4 たちあがり高0.8	底部は粗いヘラケズリ痕が残り、とくに調整はない。ヘラ記号あり。	外面 灰黄色 内面 灰　色	普　通	85-3364 901084
-71（〃）	ST02 前庭部	杯身（須恵器）	口径　10.4 器高　3.8 たちあがり高0.7	底部約2/3回転ヘラケズリ。底部にヘラ記号あり。	外面 灰黄色 内面 灰　色	普　通	85-3365 901085
-72	ST02 羨道閉塞部	杯身（須恵器）	口径　10.4 器高　3.9 たちあがり高0.7	底部は粗いヘラケズリ痕が残り、とくに調整はない。底部にヘラ記号あり。	灰　色	普　通	85-3363 910017
-73（〃）	ST02 玄室床面	短頸壺（須恵器）	口径　5.8 器高　5.9 胴径　8.8	最大径が上位にある胴部に外反する短い頸部がつく。	灰　色	普　通	85-3366 901086
-74	ST02 墳丘盛土	蓋（須恵器）	口径（9.6） 器高　4.7	天井部は平坦で、口縁部はわずかに外反する。天井部回転ヘラケズリ。	外面 灰黒色 内面 灰　色	普　通	86-415
-75	ST02 墳丘盛土	短頸壺（須恵器）	口径（7.7）	口縁部は直立し、肩部はカキ目を施す。	灰　色	普　通	85-3373
-76	ST02 墳丘盛土	高杯（須恵器）	口径（12.4）	長脚二段三方透かし、杯体部に二条の稜をもち、櫛描列点文を施す。	灰黒色	普　通	86-417
-77	ST02 前庭部付近	高杯（須恵器）	底径（10.9）	脚端部は面取りされ、下方にはねる。	灰　色	普　通	85-3370
-78	ST02 墳丘盛土内	杯身（土師器）	口径（14.3） たちあがり高1.0	たちあがりは内傾し、受部はつくりださない。	黄褐色	普　通	85-3377
-79（〃）	ST02 墳丘内	高杯（土師器）	口径（18.6）	脚部は内湾しながら立ち上がる。外面、杯部内面丹塗り。	黄褐色	普　通	85-3378 910008
-80	ST02 墳丘盛土内	高杯（土師器）	底径（9.4）	短脚で、裾端部は外方にはねる。内外面丹塗り。	黄褐色	普　通	85-3376
172-81（PL.93）	ST02 前室左壁5	甕（須恵器）	口径　13.6 器高　15.5	最大径がやや上位にある胴部に外反する頸部がつく。頸部に櫛描波状文、胴部に櫛描列点文を施す。	灰　色	良　好	86-420 910010
-82（〃）	ST02 前室左壁4	甕（須恵器）	口径　13.0 器高　15.0	胴部中位に櫛描列点文を施すが、下半部は回転ヘラケズリにより消される。頸部に櫛描波状文を施す。	灰　色	良　好	85-3368 901088
-83（〃）	ST02 前室左壁2	甕（須恵器）	口径　12.2 器高　15.7	胴部中位にヘラ描連続斜行文あり。頸部と口縁部の境に稜をもつ。	灰　色	良　好	85-3382 910009
-84（〃）	ST02 前室左壁9	甕（須恵器）	口径　10.8 器高　12.1	最大径が中位にある胴部に外反する頸部がつく。口縁部境で弱く屈曲する。頸部に櫛描波状文を施す。	灰　色	良　好	85-3367 901087

（ ）は推定

Fig-図番号 (PL番号)	出土地点	器種	法量cm	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
172-85 (PL.93)	ST02 前室左壁8	高杯 (須恵器)	口径 11.4 器高 14.4 底径 8.6	長脚二段三方透かし、杯体部に櫛描列点文を施す。	灰白色	普通	86-418 910011
-86 (〃)	ST02 前室左壁12	高杯 (須恵器)	口径 11.0 器高 14.2 底径 8.4	長脚二段三方透かしが段違いにはいる。杯底部に櫛描列点文を施す。	灰色	良好	86-419 910015
-87 (〃)	ST02 前室左壁6	平瓶 (須恵器)	口径 9.9 器高 20.2 胴径 23.0	体部は肩がはらず円味をもつ。体部全面にカキ目を施す。	灰色	良好	85-3384 901095
-88 (〃)	ST02 前室左壁7	提瓶 (須恵器)	口径 5.3 器高 16.3	体部は小さく、前面、頸部に指頭圧痕がつく。	灰白色	良好	86-422 910012
-89 (PL.92)	ST02 前室右壁13	壺 (須恵器)	口径 10.7 器高 16.2 胴径 17.6	胴部は球状で、ほぼ全面にカキ目を施し、下半部はカキ目のちヘラケズリか？頸部は短く外反する。	灰白色	良好	85-3369 901089
-90 (〃)	ST02 前室右壁16	甕 (須恵器)	胴径 18.2	胴部最大径が中位にあり、二条の沈線間に櫛描列点文を施す。胴部内に粘土塊を残す。	灰黄色	普通	85-3385 901096
-91 (〃)	ST02 前室右壁14	平瓶 (須恵器)	口径 8.0 器高 17.9 胴径 19.2	体部は肩がはらず丸味をもつ。体部にカキ目を施す。	灰色	良好	85-3379 901090
-92 (〃)	ST02 前室右壁15	平瓶 (須恵器)	口径 5.9 器高 11.7 胴径 14.4	体部は小さく、カキ目を施す。	灰黒色	良好	85-3383 901093
173-93 (PL.93)	ST02 前室左壁10	提瓶 (須恵器)	口径 9.3 器高 23.6 胴径 19.8	肩部に角状の把手がつく。 胴部前面は丸味をもつ。施文なし。	灰色	良好	86-421 910005
-94 (〃)	ST02 前室左壁1	提瓶 (須恵器)	口径 7.9 器高 21.5 胴径 18.2	肩部に環状把手がつく。胴部前面は丸味をもち、背面は平坦、施文なし。	灰色	良好	85-3386 901097
-95 (〃)	ST02 前室左壁3	提瓶 (須恵器)	口径 7.5 器高 22.8 胴径 19.8	肩部に角状把手がつく。焼成時の窯壁粘土が胴部前面に付着。	灰黄色	不良	85-3387 901098
-96 (〃)	ST02 前室左壁11	提瓶 (須恵器)	胴径 19.1	把手はつかない。自然釉が流れ、他の破片が釉着する。	灰黄色	不良	86-414 901110
181-175 (PL.97)	表土	短頸壺 (須恵器)	口径 10.4 器高 22.5 胴径 22.7	赤焼き。頸部は短く直立し、底部は丸い。胴部外面格子目タタキ、下半部をナデ消す。	赤橙色	不良	86-3461 910412
-176 (〃)	SX04	壺	口径 9.6 器高 22.4 底径 10.6	胴部円筒形で頸部は細く短い。外面平行タタキ。	灰色	普通	85-3388 901099
-177 (〃)	表土	長頸壺	胴径 19.0 底径 10.4	高台付きで肩がはる。頸部を欠損する。	灰色	普通	86-3460 910411

山浦西北方遺跡（やまうらせいほくほう）

遺跡名：山浦西北方遺跡（略号ＹＵＨ）
所在地：鳥 栖 市 山 浦 町 字 谷 頭

山浦西北方遺跡

Ⅰ．遺跡の概要

遺跡は雲野尾峠（標高400m）から西方にのびる尾根の裾部で、南方に向きをかえた舌状丘陵上に位置する。丘陵の西側には安良川へとつづく小川が流れる。この舌状丘陵の幅は約45m を測り、現況は雑木林である。丘陵西端に直線上に３基、南東端に１基の古墳が現存しており、古墳群を形成している。

周辺遺跡は本遺跡の位置する丘陵から東方に分岐する丘陵上に中ノ原古墳群が、南東の独立丘陵には古野古墳群が、さらにその南東の舌状丘陵には山浦古墳群、麓遺跡がある。山浦古墳群は1970年に県教育委員会が調査しており、その結果10基の古墳を検出した。この古墳群は横穴式石室４基、箱式石棺３基、粘土槨２基、土壙１基からなるものである（「鳥栖市山浦古墳群」佐賀県教育委員会1973）。また本遺跡西側の丘陵下谷部は西田遺跡で平成２年に鳥栖市教育委員会が調査しており縄文時代の集石遺構などを検出している。

今回の発掘調査で検出した遺構は古墳１基と調査範囲外からのびる墓道および溝、列石がある。ＳＴ01古墳の内部主体は単室両袖型横穴式石室で玄門部左右には列石をめぐらす。築造時期は小田編年Ⅳ期で追葬はⅥ期まで。ＳＴ02古墳墓道からは多くの須恵器が出土しておりこれらは小田編年Ⅳ期のものである。

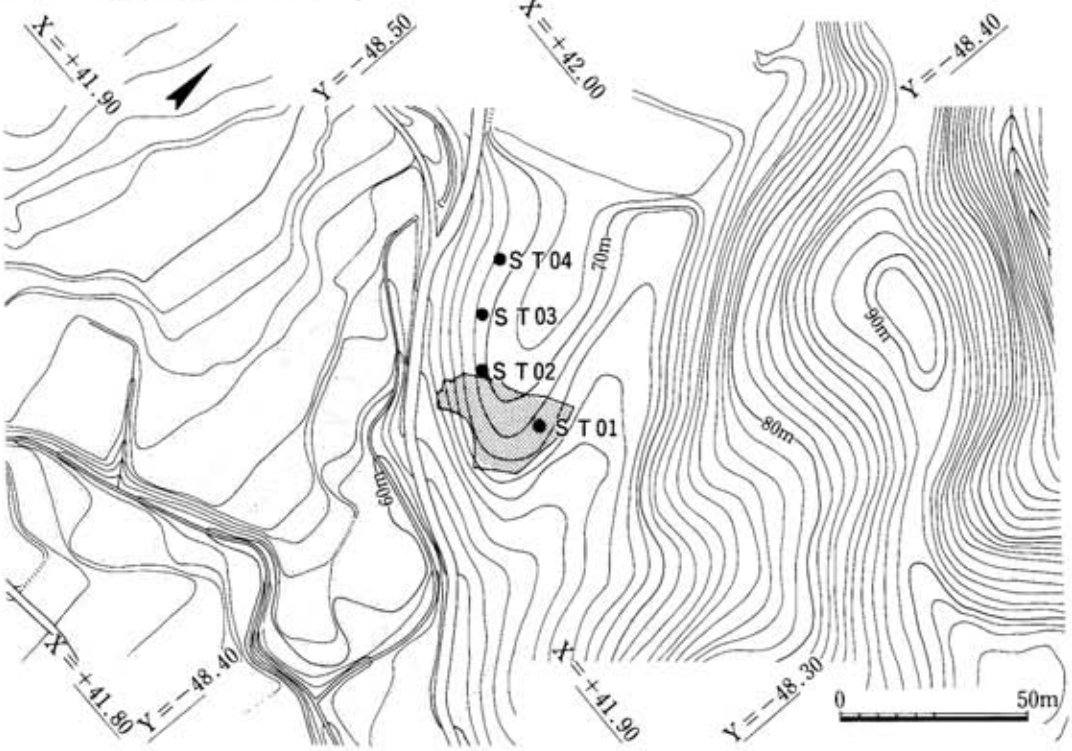


Fig.182　周辺地形図（1/2000）

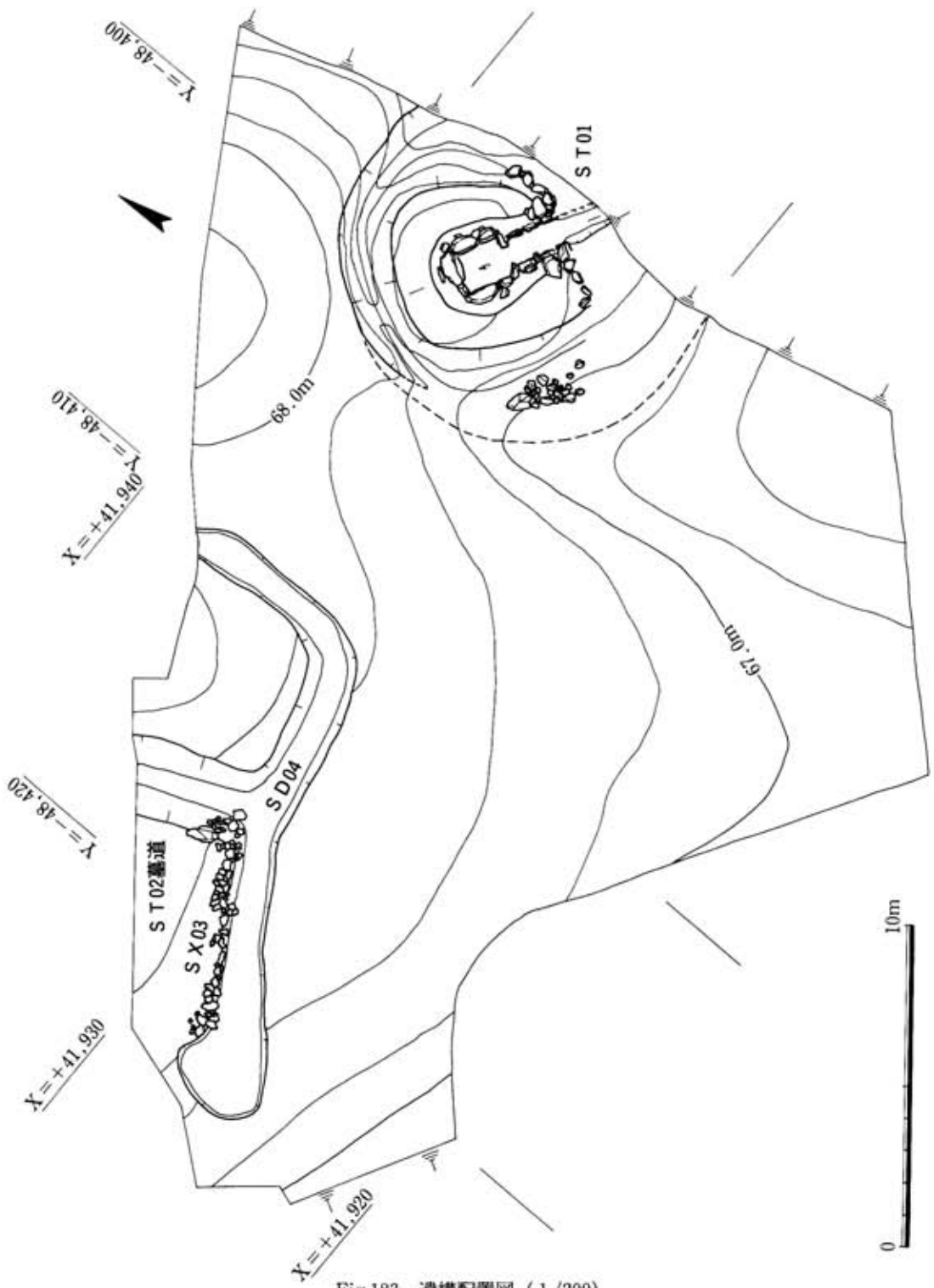


Fig.183　遺構配置図（1/200）

II．縄文時代の遺構と遺物

本調査区の西側谷部を平成２年度に鳥栖市教委が調査した結果、早期の集石遺構、石組み炉を検出したが本調査ではとくに遺構は検出していない。出土した土器は大きく早期と前期と晩期の三時期の土器群がある。すべてＳＴ01古墳の表土剝ぎ段階で出土したもので早期の土器（１～５）は押型文土器で楕円文と山形文がある。前期の土器（６～８）は曽畑式土器で施文は刺突沈線文である。晩期の土器（９、10、11）はとくに施文はなく、ヘラ磨きで仕上げる。

Tab.27　縄文土器一覧表

Fig.図番号 (PL番号)	器種	形態・調整の特徴	色調	県遺物登録番号 写真登録番号
184-1 (PL.101)	深鉢 胴部	外面３×５㎜、内面３×７㎜の楕円文が横走する。内面下半部はナデ仕上げ。	黄褐色	85-3484
-2 (〃)	深鉢 胴部	外面５×10㎜前後の楕円文が横走する。内面ナデ仕上げで指頭圧痕が残る。	乳褐色	85-3485
-3 (〃)	深鉢 胴部	外面８×11㎜前後の楕円文が横走する。内面ナデ仕上げ。微砂粒を多く含む。	明褐色	85-3487
-4 (〃)	深鉢 胴部	外面３×５㎜前後の楕円文が横走する。２㎜前後の砂粒を含む。	乳褐色	85-3488
-5 (〃)	深鉢 胴部	外面一単位７㎜前後の山形文が横走する。内面に指頭圧痕が残る。	黄褐色	85-3486
-6 (〃)	深鉢 口縁部	外面連続刺突文、内面に短い沈線文が横位に、口唇部上面にはキザミを施す。滑石混入。	外面 黒褐色 内面 乳褐色	85-3481
-7 (〃)	深鉢 胴部	外面連続刺突文と横位と斜位の沈線を組み合わせた文様が施される。滑石混入。	外面 黒褐色 内面 乳褐色	85-3482
-8 (〃)	深鉢 胴部	外面縦位に沈線を施文。滑石は混入しない。	黄褐色	85-3483
-9 (〃)	浅鉢 口縁部	口唇部に一条の沈線を施す。外面ヘラ磨き、内面ナデ。	明褐色	85-3480
-10 (〃)	浅鉢 口縁部	外面ヨコナデ、断面に接合痕が見られる。	褐色	85-3489
-11 (〃)	深鉢 底部	裾部が弱く張り出し、外面ナデ仕上げ。	黄褐色	85-3479

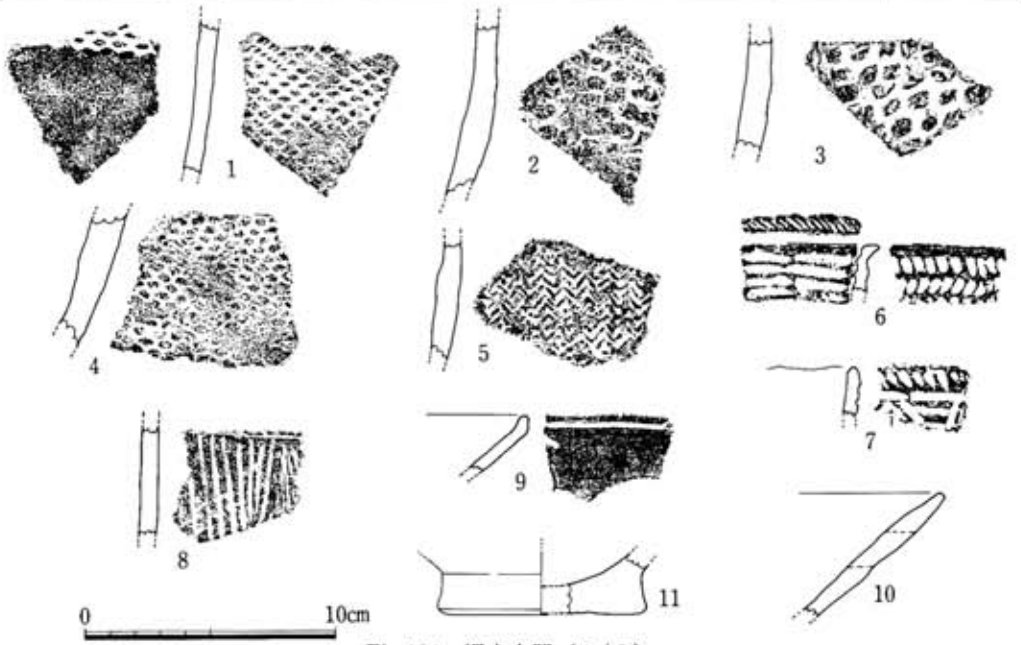


Fig.184　縄文土器（1/3）

III．古墳時代の遺構と遺物

1．ＳＴ01古墳

(1) 概　要

調査区の西端に位置し、南東側の緩斜面に向かって開口する。前庭部付近は大きく削平される。周溝あり、円墳である。内部主体は単室両袖型横穴式石室で玄室平面形は長方形である。

羨道部中程から玄門にかけて閉塞施設が残り、閉塞石に混じって遺物が出土している。玄門部の左右には地山整形面、墳丘面にそって列石をめぐらす。築造時期は小田編年IV期で追葬はVI期まで。

(2) 墳　丘

墳丘径８～９ｍの円墳である。現状では墳丘頂部が若干窪み、表土除去後、盛土上に径30～40cmの礫が散在していた。この礫は墳丘基底面（地山整形面）から約30cmの盛土の上に、石室の周りを同心円上に配してあり、玄門部左右石へとつづく。初めこの礫を墳丘葺石とも考えてい

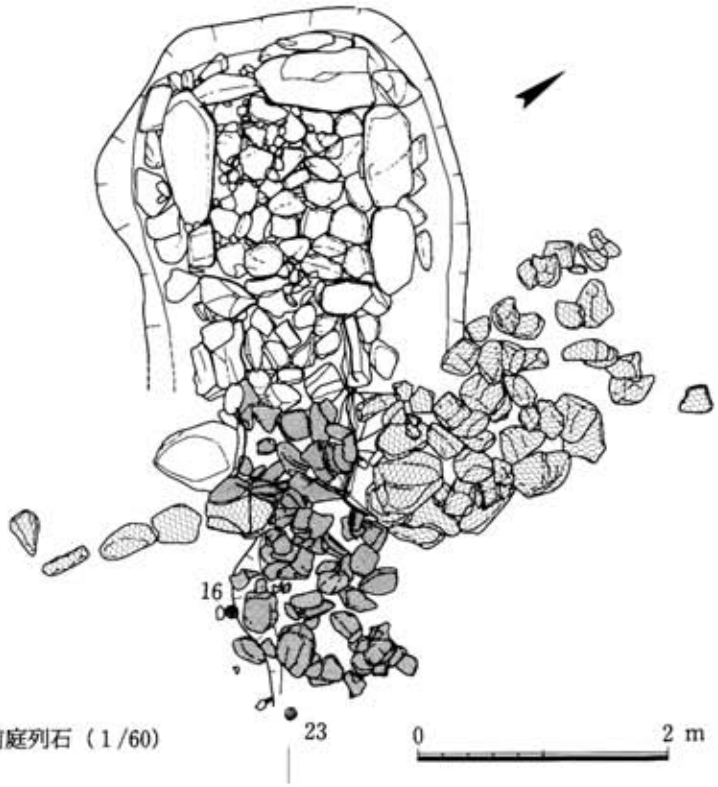


Fig.185　ＳＴ01古墳前庭列石（１/60）

たが、それならば石室床面から墳丘頂上までの高さが約1 mとあまりにも低すぎることになる。そこでこれらを墳丘盛土の流失を防ぐための内護列石と考えた。盛土は褐色土。

周溝は石室後方付近を約半周する。幅1.3m、深さ0.5mで断面三角形である。石室中心から周溝上端まで4.1mを測る。埋土は黒色土。石室掘り方は地山整形面からの深さ1～0.8m。

石室左側の墳丘基底面には断面U字形の掘り込み、上端幅4 mがあるが埋土から縄文土器が出土しておりこれは古墳築造前のものと考えられる。また本墳地山土は全体的にしまっておらず再堆積土と思われる。

(3) 内部主体

単室両袖型の横穴式石室である。南東側の緩斜面にむかって開口し、主軸をN55°Wにとる。平面形で玄室中心が墳丘の中心となるよう設計されたと推定される。石室上部はすでになく、玄室、羨道部の腰石が残るのみである。石室掘り方は隅丸長方形であり、玄室平面形は長方形。

規模は石室全長3.45m、玄室は中央長1.4m、中央幅1.3m、奥壁幅1.2m、前壁幅1.3m、右壁長1.4m、左壁長1.4mを測る。

奥壁腰石には1.0×0.7、0.5×0.5mの大小の扁平状石材を配する。左右側壁腰石も奥壁腰石と同大の横長石材を2石づつ横位に配している。また奥壁腰石は左右腰石に挟まれる。

玄門部は0.4×0.7mほどの縦長扁平石をたて左右袖石とする。玄室床面は框石を配し、玄門幅は0.5mを測る。

玄室床面は径20～30cmの転石をまんべんなく敷き詰めその間には小さな河原石を詰める。

羨道左右側壁は0.5×0.6mほどのさらに扁平な石材をたてる。構築時、容易に立たなかったらしく内外に根石をすえる。羨道部床面にも玄室同様、敷石を配する。羨道部長2.0m。

羨門部は右袖石に接して転石を小口積みしさらにそれが盛土中の内護列石につながる。羨門左袖石に接して地山直上に4石配している。したがって古墳築造後の玄門正面観は石垣にちかいものではなかったろうか。

閉塞施設は羨道部中位から玄門にかけて残る。径20～30cmの転石を乱雑に積み上げており、後世の撹乱も見られる。この閉塞石の中から須恵器、土師器が出土している。石室内に供献された土器が追葬行為によりかきだされたものであろう。

(4) 出土遺物

須恵器

杯蓋はC類（12）D類（13、14、15、16）E類（17）がある。12は赤焼きの須恵器である。13、14、15は逆転蓋で14の口径がやや大きい。15は天井部ヘラ切り離し未調整であるが13、14は天井部回転ヘラケズリを施す。16は宝珠つまみ付きで天井部はカキ目状の調整を施す。

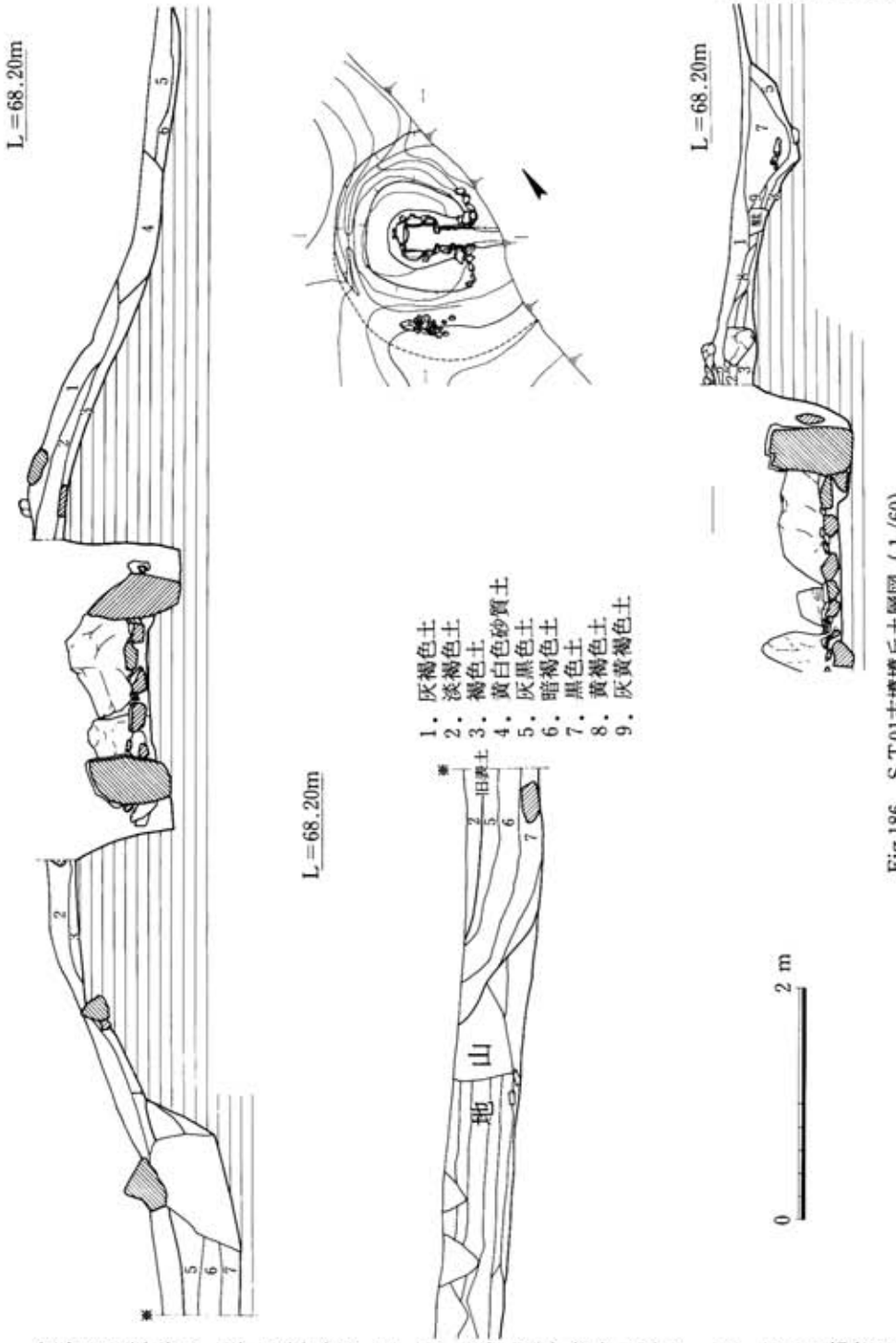


Fig.186　ST01古墳墳丘土層図（1/60）

杯身はC類（18、19）D類（20、21、22、23）E類（24）がある。18、19は口縁部のみの残存で口径も復元径である。18のたちあがりをみるとB類としてもよいかもしれないが他にB類がないことからC類とした。20、21、22は口径、器高ともほぼ同じで、いずれも体部から口縁

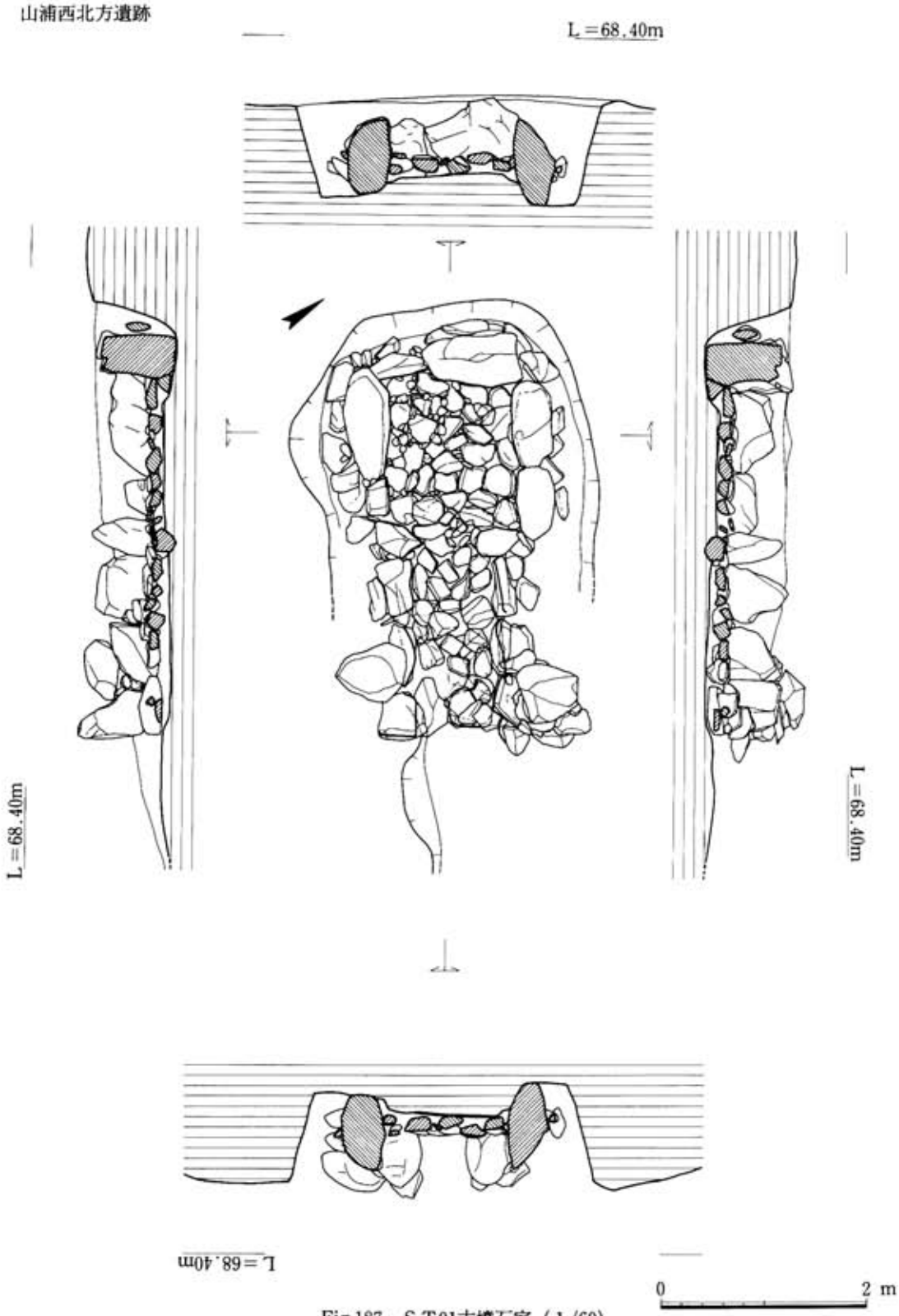


Fig.187　ＳＴ01古墳石室（1/60）

部にかけてカキ目状の調整を施す。底部に環状のヘラ記号が入る。23は20～22に比べやや小形である。底部ヘラ切り未調整。24は高台付杯で高台部のみの残存で口径不明。高台部は外側に開く。

25、26は高杯、脚部のみ残存する。26はD類の時期であろう。27は平瓶。

土師器

28は杯蓋、29、30は高杯脚部。

装身具

耳環1点のみ石室からの出土である。鉄地金銅張り。

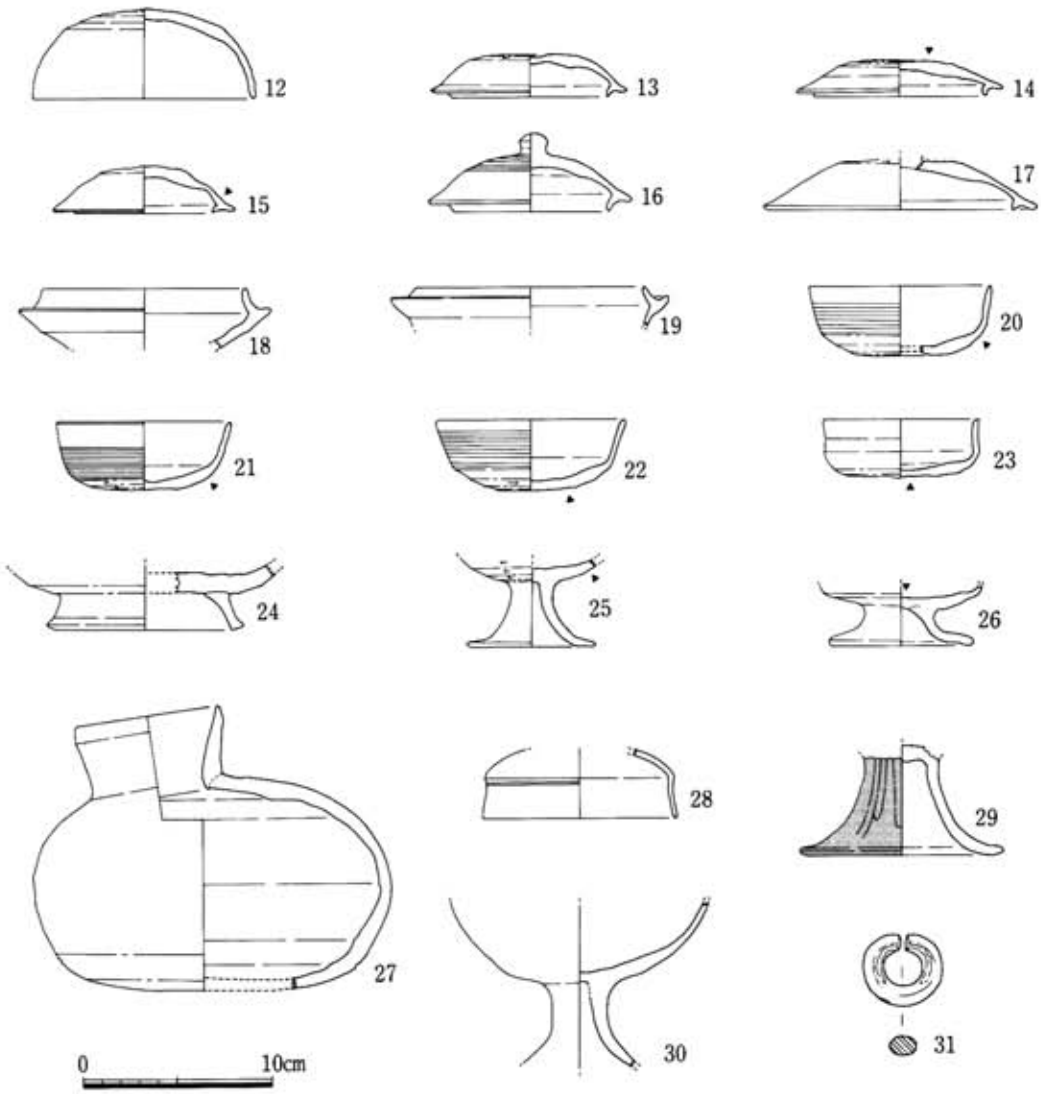


Fig.188　ST01古墳出土土器・装身具（1/4）

2．ＳＴ02古墳

(1) 概　要

ＳＴ02古墳の主体部は調査範囲外であるが、南に開口しそれから延びる墓道を調査した。南東約20m にはＳＴ01古墳が位置し、丘陵上方にも古墳が現存する。

墓道は南に約５ｍ延びるがそのうち３ｍが調査範囲内である。この墓道の南端はＳＤ04溝にきられる。墓道は幅2.2～2.5m、深さ0.5m を測り、断面は浅いＵ字形である。埋土中より須

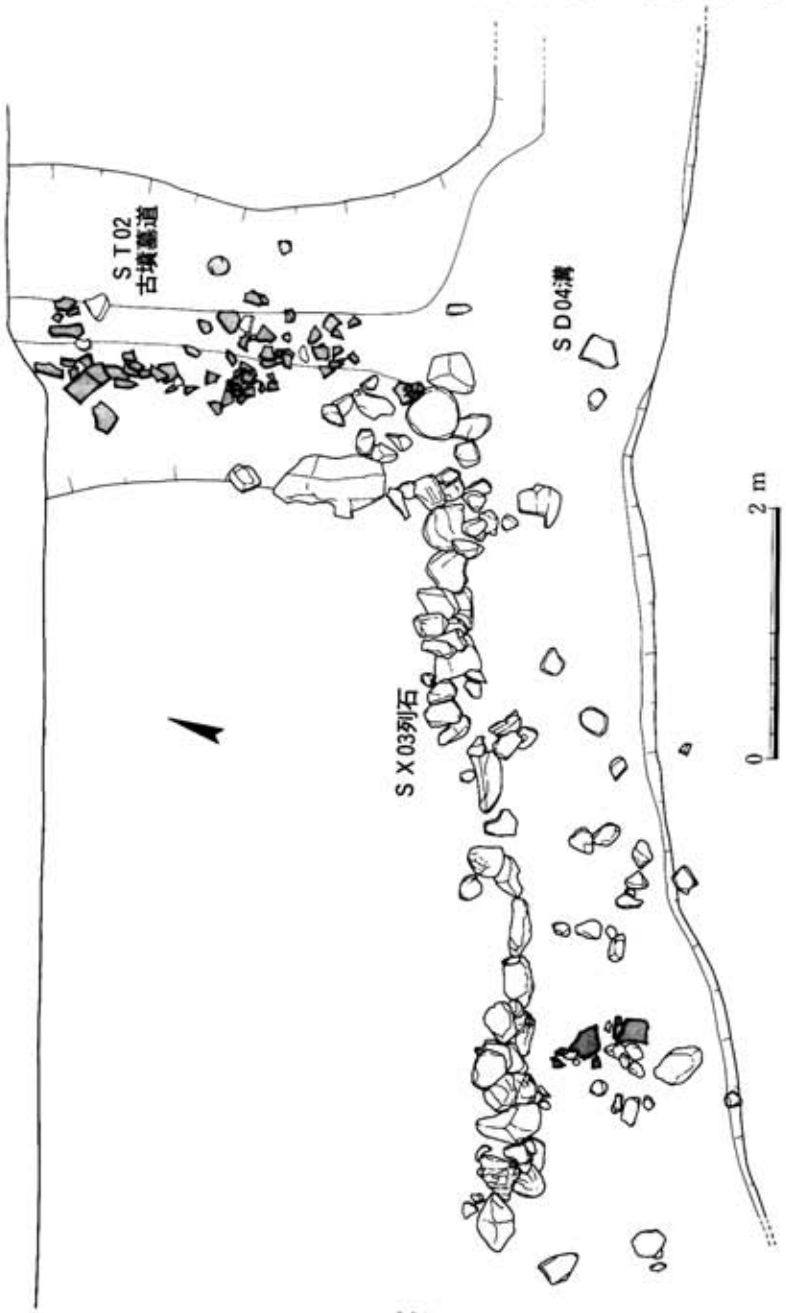


Fig.189　ＳＴ02古墳墓道、ＳＸ03列石、ＳＤ04溝（1/60）

恵器、土師器、耳環が出土した。埋土は黒色土。墓道のみの本調査でＳＴ02古墳の築造時期および追葬期間の詳細はわからないが墓道埋土出土遺物をみる限り小田編年Ⅳ期を想定できる。

(2) 出土遺物

すべて墓道埋土からの出土である。

須恵器

杯蓋（32、33、34）・杯身（35、36、37、38、39）ともＣ類のみである。32、34は天井部ヘラ切り離し未調整、ヘラ切り痕が同心円状に残る。33は天井部回転ヘラケズリ。35、36、37は口径は約10cm、たちあがり高は約１cmを測る。38、39は口縁部のみ残存。

40、43は高杯、40は長脚のタイプである。43は台形状の透かしが三方に入る。脚部中位に二状の沈線が入る。41、42は甕、41は胴部1/2の残存で、孔がなく短頸壺の可能性もある。44は平瓶、底部を一部破損するがほぼ完形。ＳＴ01古墳出土の27に比べると肩がはる。45は横瓶、胴部のみ残存する。46は甕、口縁部から肩にかけ残存する。

土師器

47、48は高杯、47は内湾する杯部。48は脚部タテ方向ヘラケズリ。47、48とも外面丹塗り。

装身具

耳環１点のみ、腐食が激しく緑青がふく。

3．ＳＸ03列石、ＳＤ04溝

(1) 概　要

南に延びるＳＴ02古墳墓道に直交して東西方向にＳＤ04溝がはしる。ＳＴ02古墳墓道との直交地点から西へは9.5m、東へは５ｍ先から方向を北に変え、調査範囲外まで延びている。溝幅1.6m、深さ約15cmを測る。溝底から須恵器・甕の口縁部が数点出土。ＳＴ02古墳墓道の埋土とは状況が違うため須恵器も後世の混入と考えられる。また、西に延びる方の北側のたちあがりに沿って直径20～40cm程の石が１～２段、列石状に積まれるがこれをＳＸ03列石とした。東西方向に６ｍの長さをもつ。ＳＴ02古墳との関係はなさそうであり後世の開墾などで築かれたものと考えられる。同様、ＳＤ04溝もＳＴ02古墳と直接関係なさそうである。ただＳＸ03列石、ＳＤ04溝とも時期の特定はできない。

(2) 出土遺物

須恵器２点のみの出土。49、50は甕、50は櫛描列点文を二段に施す。

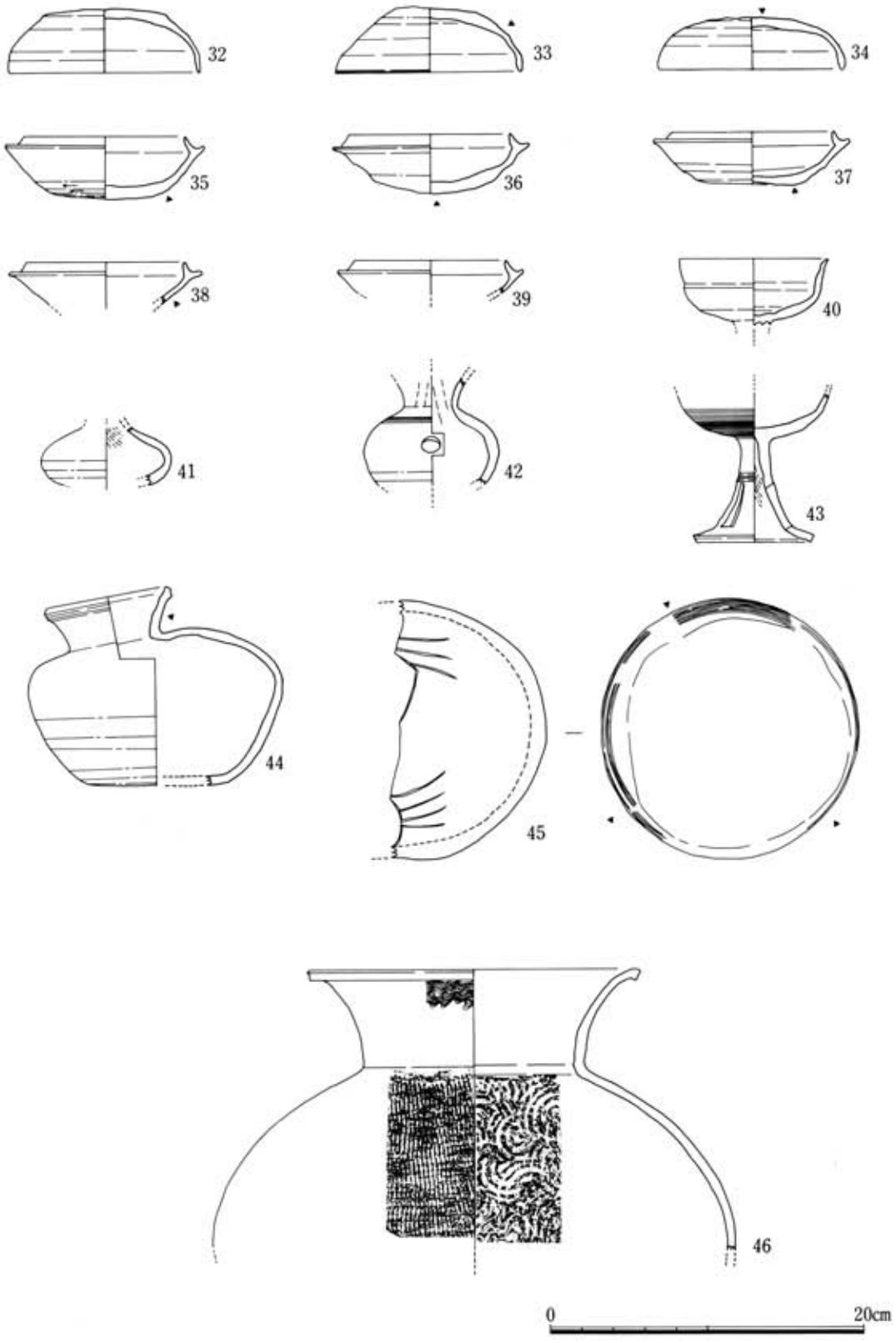


Fig.190　ＳＴ02古墳墓道出土須恵器（１/４）

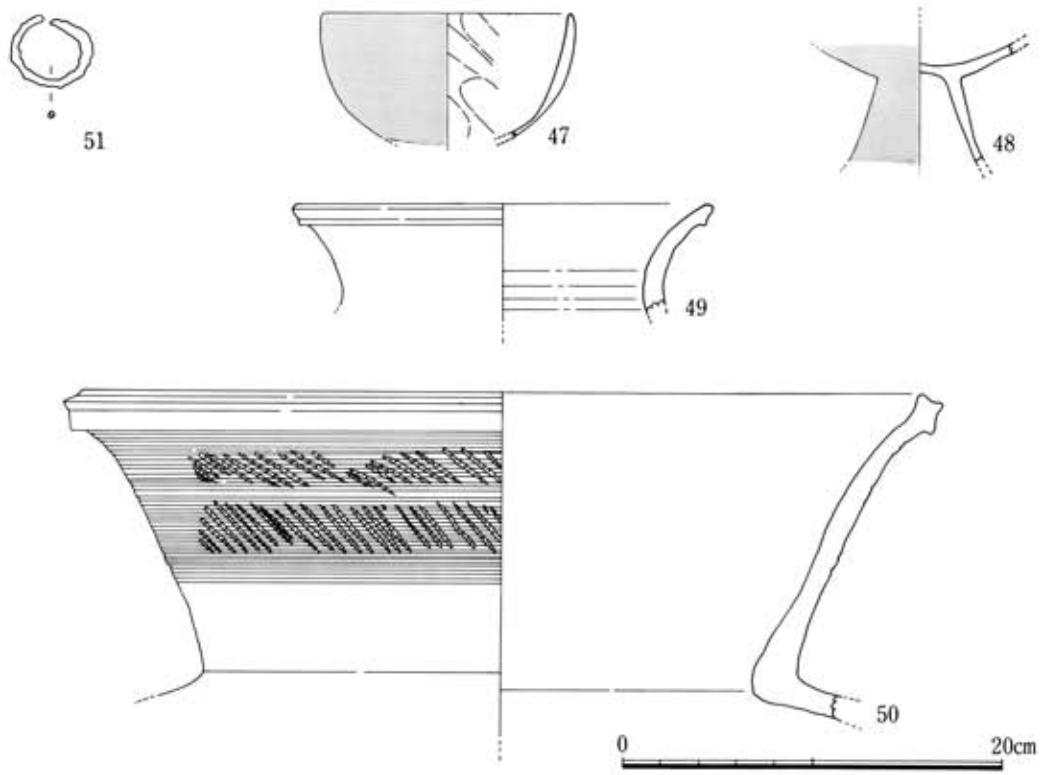


Fig.191　ＳＴ02古墳墓道、ＳＤ04溝出土土器・装身具（１/４）51は１/２

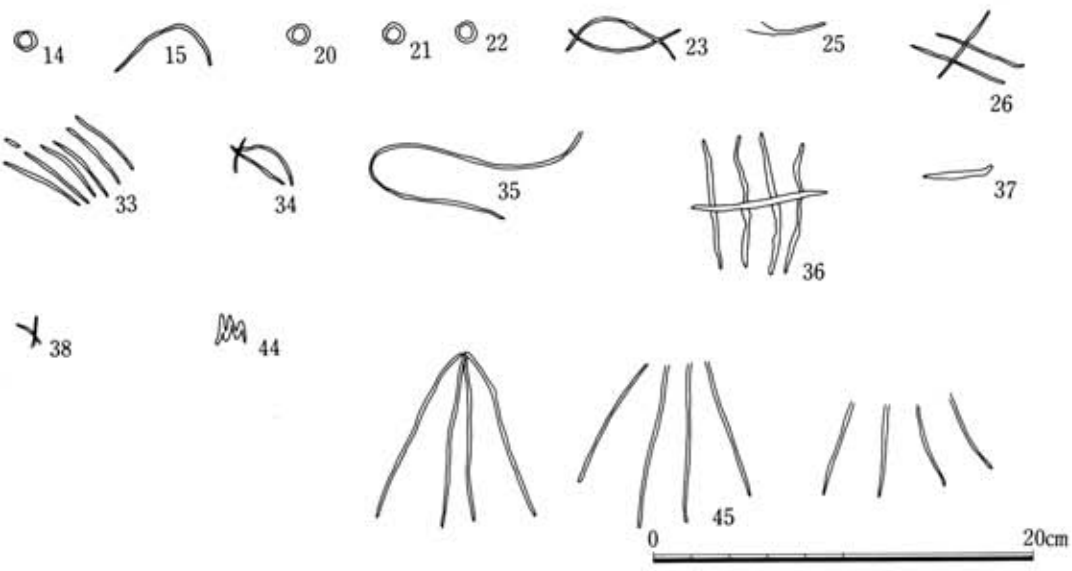


Fig.192　ヘラ記号一覧（１/４）

IV. 小　結

調査した遺構は古墳1基と調査範囲外からのびる古墳の墓道および溝、列石と、遺構は検出できなかったものの縄文土器が出土している。ＳＸ03列石、ＳＤ04溝の時期は特定できなく性格などについても明確ではない。その時期はＳＴ02古墳墓道を切っていることから少なくともＳＴ02古墳築造以降であり山林の開墾などで築かれたものであろう。

縄文土器は早期、前期、晩期の三時期の土器群があり本調査区西側の谷部を鳥栖市教育委員会が調査した結果、早期の集石遺構や石組み炉が検出されていることなどから本遺跡およびその周辺は縄文人の生活圏であったことは間違いないであろう。

本遺跡の立地する舌状丘陵には４基の古墳が築造され、これがひとつの古墳群を形成している。内部主体はすべて横穴式石室で南から順にＳＴ01、02、03、04古墳としたが、このうちＳＴ01古墳とＳＴ02古墳墓道の調査を行った。

築造時期はＳＴ01古墳は削平のためか墳丘盛土内出土遺物がなく石室内に副葬された土器がかきだされ羨門閉塞部、前庭部から出土した最古式土器をもってその根拠とし最新式土器をもって最終追葬時期とした。築造は小田編年IV期で追葬はVI期まで。ＳＴ02古墳は墓道のみの調査で墓道埋土出土遺物で築造、追葬時期をいうには資料不足であるが単一時期の遺物であることからも築造されて後、追葬期間は長くはなかったと考えられる。墓道埋土出土遺物は小田編年IV期である。これらのことからＳＴ01古墳、ＳＴ02古墳はほぼ同時期に築造されＳＴ02古墳はその後さほど追葬されることはなかったもののＳＴ01古墳は小田編年VI期まで追葬されることがわかった。

４基の古墳の内部主体はＳＴ01・02・03古墳が単室両袖型、ＳＴ04古墳が複室両袖型で玄室規模はＳＴ01古墳は1.4×1.3m、ＳＴ02古墳は２×２ｍ、ＳＴ03古墳は２×２ｍ、ＳＴ04古墳は玄室が２×２ｍで前室は1.5×0.9m である。ＳＴ02、03、04古墳は丘陵西端に直線上に並びかつ石室規模もさほどかわらないが、ＳＴ01古墳のみ他の３基と占地を異にし、石室規模も違うことなどからも４基の古墳形成過程のなかではＳＴ01古墳が最後に築造されたことがいえよう。宮西遺跡のＳＴ01・02古墳玄室規模は２×２ｍでその築造時期は小田編年IIIＢ古段階であるが、本遺跡ＳＴ02・03・04古墳玄室規模が宮西ＳＴ01・02古墳と同じであることをもってこれらの築造時期をIIIＢ段階と推定してよいのではなかろうか。

調査区外の３基の古墳を含めて古墳築造順など述べてきたがＳＴ01古墳石室のような小形の石室を時間軸においてのみとらえるにはまだ資料不足であろうし、いわゆる小石室との関係などについても今後論及すべき課題であろう。

Tab.28　土器一覧表

（　）は推定

Fig-図番号（PL番号）	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
188-12 (PL.101)	ST01 羨道閉塞	杯　蓋 (須恵器)	口径 (11.8) 器高　4.7	赤焼きの須恵器の天井部、回転ヘラケズリによる砂粒痕が同心円状に残る。	黄褐色	生焼け	85-3473 910105
-13 (〃)	ST01 墳丘表土	杯　蓋 (須恵器)	口径 (8.2) 器高　2.2	1/2残存する。天井部回転ヘラケズリ。	灰　色	良　好	85-3468 910100
-14 (〃)	ST01 羨門閉塞	杯蓋 (須恵器)	口径　9.2 器高　2.0	焼け歪み大。天井部に環状のヘラ記号有り。天井部回転ヘラケズリ。	灰黒色	普　通	85-3467 910099
-15 (〃)	ST01 羨門閉塞	杯蓋 (須恵器)	口径　7.2 器高　2.4	天井部ヘラ切り離し未調整。体部にヘラ記号有り。	灰　色	良　好	85-3463 910097
-16 (〃)	ST01 前庭部	杯蓋 (須恵器)	口径　8.1 器高　4.2	宝珠つまみ付き、天井部にヘラケズリ痕がカキ目状につく。	外面 灰黄色 内面 橙褐色	良　好	85-3464 910098
-17 (〃)	ST01 羨門閉塞	杯蓋 (須恵器)	口径 (12.2) 器高　2.6	天井部回転ヘラケズリ。約1/4残存する。	外面 暗灰色 内面 赤橙色	普　通	85-3462 910096
-18	ST01 羨門閉塞	杯身 (須恵器)	口径 (10.8) たちあがり高1.2	口縁部のみ残存。器壁が比較的厚い。	灰　色	普　通	85-3461 910159
-19 (〃)	ST01 羨門閉塞	杯身 (須恵器)	口径 (12.0) たちあがり高1.0	口縁部のみ残存。	灰　色	普　通	85-3460 910179
-20 (〃)	ST01 羨門閉塞	杯身 (須恵器)	口径　9.5 器高　3.8	体部から口縁部にかけてカキ目状調整を施す。底部に環状のヘラ記号有り。	灰　色	普　通	85-3459 910113
-21 (PL.102)	ST01 羨門閉塞	杯身 (須恵器)	口径　9.2 器高　3.8	体部から口縁部にかけてカキ目状調整を施す。底部に環状のヘラ記号有り。	灰　色	普　通	85-3458 910110
-22 (〃)	ST01 羨門閉塞	杯身 (須恵器)	口径 10.1 器高　3.8	体部の調整は19、20と同じ。底部ヘラ切り離し後ヘラケズリ。底部に環状ヘラ記号有り。	灰黒色	普　通	85-3466 910180
-23 (〃)	ST01 前庭部	杯身 (須恵器)	口径　8.4 器高　3.1	底部ヘラ切り離し未調整。底部にヘラ記号有り。	灰色	普　通	85-3465 910114
-24	ST01 墳丘表土	高台付杯身 (須恵器)	高台高 1.8	高台付き。高台は八の字状に外側に開く。	灰　色	普　通	85-3471 910103
-25 (〃)	ST01 墳丘表土	高杯 (須恵器)	脚部高 2.4	短脚、杯部を欠損する。杯底部にヘラ記号有り。	灰黄色	不　良	85-3470 910102
-26 (〃)	ST01 墳丘表土	高杯 (須恵器)	脚部高 2.1	短脚、脚裾部は外側に水平に開く。	灰黒色	普　通	85-3469 910101
-27	ST01 墳丘表土	平瓶 (須恵器)	口径　7.6 器高 15.0	胴部最大径は中位にある。肩ははらずに丸味をもつ。底部ヘラケズリ。	灰　色	普　通	86-3463
-28	ST01 羨道閉塞	杯蓋 (土師器)	口径 (10.3)	体部と口縁部の境で屈曲し沈線一条を施す。	橙褐色	普　通	85-3474
-29 (〃)	ST01 墳丘表土	高杯 (土師器)	脚部高 5.1	脚部タテ方向ヘラケズリ、外面丹塗り。	赤褐色	普　通	85-3472 910104
-30	ST01 羨道閉塞	高杯 (土師器)	残高　8.6	杯部は内湾しながら立ち上がる。摩耗の為調整不明瞭。	橙褐色	不　良	85-3475

（ ）は推定

Fig-図番号 (PL番号)	出土地点	器種	法量cm	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
190-32	ST02 墓道埋土	杯蓋 (須恵器)	口径 (12.0) 器高 (4.0)	天井部ヘラ切り離し未調整。	灰白色	普通	85-3450 910091
-33 (PL.102)	ST02 墓道埋土	杯蓋 (須恵器)	口径 (10.8) 器高 4.0	天井部回転ヘラケズリ。体部にヘラ記号有り。	灰黒色	普通	85-3442
-34 (〃)	ST02 墓道埋土	杯蓋 (須恵器)	口径 (11.7) 器高 3.2	天井部ヘラ切り離し未調整。天井部にヘラ記号有り。	灰色	普通	85-3449
-35 (〃)	ST02 墓道埋土	杯身 (須恵器)	口径 10.1 器高 4.0 たちあがり高1.0	底部粗いヘラケズリ。ヘラ記号有り。	灰色	普通	85-3441 910111
-36 (〃)	ST02 墓道埋土	杯身 (須恵器)	口径 10.2 器高 3.9 たちあがり高1.0	底部にヘラ記号有り。2㎜程の砂粒を多く含む。	灰黒色	不良	85-3451 910092
-37 (〃)	ST02 墓道埋土	杯身 (須恵器)	口径 10.2 器高 3.4 たちあがり高0.8	底部は平坦でヘラ切り痕が同心円状に残る。ヘラ記号有り。	灰色	普通	85-3440 910086
-38 (〃)	ST02 墓道埋土	杯身 (須恵器)	口径 (10.1) たちあがり高0.8	口縁部のみ一部残存、体部にヘラ記号有り。	灰色	普通	85-3444 910089
-39 (〃)	ST02 墓道埋土	杯身 (須恵器)	口径 (10.0) たちあがり高1.0	口縁部のみ一部残存。	灰色	普通	85-3443 910088
-40 (〃)	ST02 墓道埋土	高杯 (須恵器)	口径 8.6	杯部のみ残存、長脚高杯か。体部と口縁部の境に稜をもつ。	灰色	普通	85-3452 910176
-41 (PL.103)	ST02 墓道埋土	甕 (須恵器)	胴径 (8.2)	胴部最大径は中位にある。頸部内面にしぼり痕あり。	灰色	普通	85-3447 910175
-42 (〃)	ST02 墓道埋土	甕 (須恵器)	胴径 (8.6)	胴部最大径は中位にある。カキ目調整。	灰褐色	普通	85-3448 910090
-43 (〃)	ST02 墓道埋土	高杯 (須恵器)	脚部高 6.6 底部径 7.2	一段三方透かし脚部中位に二条の沈線有り。杯底部にカキ目調整。	灰色	良好	85-3453 910177
-44 (〃)	ST02 墓道埋土	平瓶 (須恵器)	口径 6.6 器高 12.6 胴径 16.0	肩がはり胴部最大径は上位にある。肩部にカキ目調整。微砂粒を多く含む。頸部にヘラ記号有り。	明灰色	普通	85-3454 910093
-45 (〃)	ST02 墓道埋土	横瓶 (須恵器)	胴高 16.6	胴部の3ヶ所にヘラ記号有り。	灰色	普通	85-3456 910095
-46 (〃)	ST02 墓道埋土	甕 (須恵器)	口径 (20.8)	頸部に櫛描波状文有り。同部外面平行叩き、内面同心円文叩き。	灰色	普通	90-3527 910229
191-47	ST02 墓道埋土	高杯 (土師器)	口径 (13.4)	杯部のみ残存、外面丹塗り。	赤橙色	普通	85-3445
-48	ST02 墓道埋土	高杯 (土師器)	残高 (6.4)	脚部タテ方向ヘラケズリ、外面丹塗り。	赤橙色	普通	85-3446
-49 (〃)	SD04	甕 (須恵器)	口径 (22.0)	口縁端部中位はくぼみ、下端に稜をもつ。	灰色	普通	85-3455 910094
-50 (〃)	SD04	甕 (須恵器)	口径(44.4)	頸部に櫛描列点文を二段、二条の沈線を三段施す。	灰白色	普通	85-3457 910178

山浦新田遺跡（やまうらしんでん）

遺跡名：山浦新田遺跡（略号ＹＵＳ）
所在地：鳥栖市山浦町字新町

山浦新田遺跡

Ⅰ．遺跡の概要

遺跡は安良川上流の西岸にそって南北に舌状にのびる標高70m ほどの段丘上に位置する。現況は水田である。谷をはさんで西の丘陵には中ノ原古墳群がある。本遺跡から安良川をはさんで東の丘陵部には割石古墳群があるが、横断道路線内を調査した結果、遺構は検出されなかった。北西約500m の山麓部には中世城郭跡の葛籠(つづら)城がある。

本遺跡の南北両側を平成元年度に鳥栖市教育委員会が調査しており、南側では中世城郭群に伴う空掘や、城下町に伴う町屋遺構を検出している。空堀は深さ約５～６ m で、東西に延長約500～600m におよぶものであり、そのほか柱穴、土壙から土師器、瓦質土器、陶器、土鈴、火縄銃の鉛玉などが出土した。北側では古墳１基、集石２基、中世の土壙2基、柱穴などを検出している。

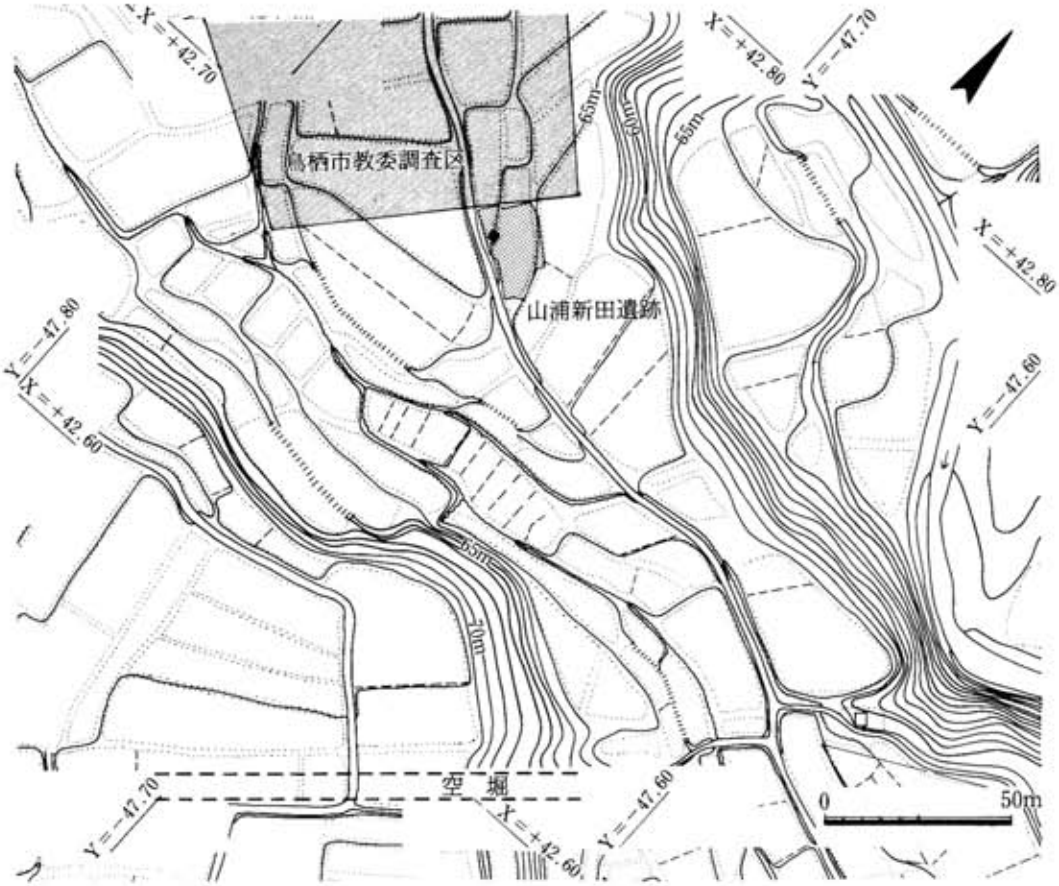


Fig.193　周辺地形図（１/2000）

今回の発掘調査で検出した遺構は古墳１基、集石土壙１基、土壙墓１基である。ＳＴ01古墳の内部主体は複室両袖型横穴式石室であり東半分は削平をうける。鳥栖市教委調査の古墳と時期もほぼ同じで同一古墳群の同一単位になると思われる。集石土壙、土壙墓からは出土遺物なし。また、表土から15Ｃ～16Ｃ代の瓦質土器等が出土しており中世城郭とほぼ同時期のものと思われる。

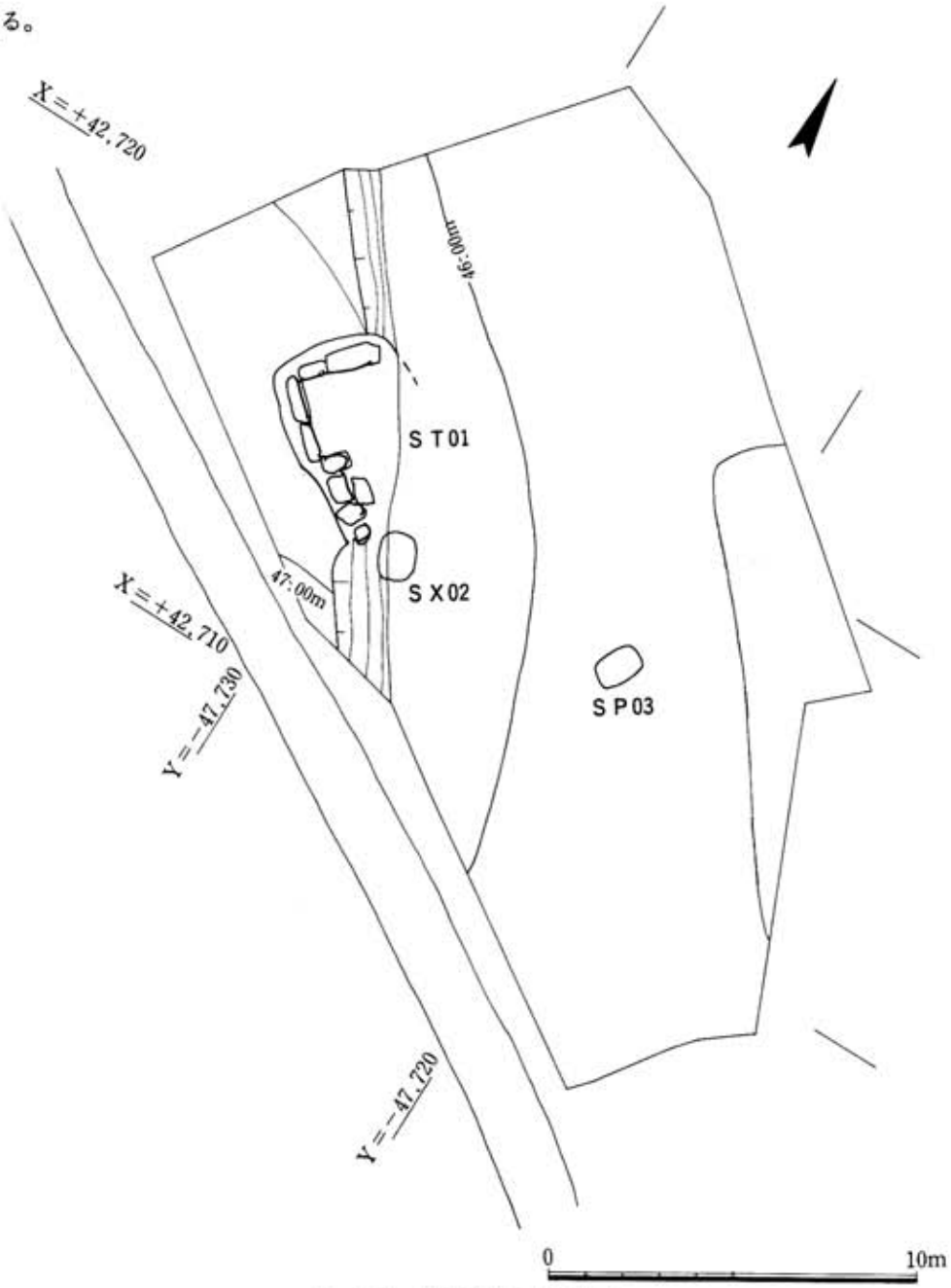


Fig.194　遺構配置図（１/200）

II．古墳時代の遺構と遺物

1．ＳＴ01古墳

(1) 概　要

調査区の北西に位置する。羨道部はＳＸ02集石土壙にきられ、南東約７ｍにはＳＰ03土壙墓がある。現状では水田の中に石材がむきだしになっている墳丘が見られた。水田などの耕作により消滅したのかもしれない。東半分は削平を受け、盛土も流失し、墳丘径は不明。内部主体は複室両袖型横穴式石室である。羨道部左側壁の中央の腰石がやや内側に出ており前門左袖石となる。出土遺物は石室、表土から須恵器、土師器が各１点づつ出土したのみで築造期を明確にはできないが、石室形態から６世紀後半の築造で７世紀後半まで追葬されるのだろう。

(2) 内部主体

複室両袖型の横穴式石室である。古墳の東半分が削平をうけ、玄室および羨道部の右側壁はない。玄室奥壁・左側壁・羨道部左側壁の腰石のみ残存する。主軸はN42°Wo。石室掘り方は羨道部付近で漸意的に屈曲する羽子板形である。

規模は石室全長4.6m、玄室は中央長2.1m、中央幅は削平のため推定で2.1m を測る。奥壁は腰石に0.8×0.9m、1.6×1.1m 程の扁平石２石を配す。石材が扁平のため奥壁壁面はそろう。左側壁腰石は1.3×0.9m、1.0×0.9m 程の石材を横位に配する。奥壁腰石は側壁腰石に挟まれる。玄門部は左袖石に0.6×1.2m の柱状石材を立てる。玄門部床面にも柱状石材を配し框石とする。

羨道部は長さ約2.5m で、玄室腰石は横位に配するのに対して羨道部腰石は縦位に配す。玄門右袖石側から0.9×1.0m、0.5×1.1m、0.4×1.0m の縦長石材３石を立てる。中央の腰石は左右腰石の壁面がそろうのに対しやや内側にでている。また、扁平石材の立て方からも前門袖石を意識しており複室と考えた。

玄室床面は河原石を敷き詰めており、部分的に径0.3m 程の礫も混ざる。この床石の違いは追葬によるものかもしれない。

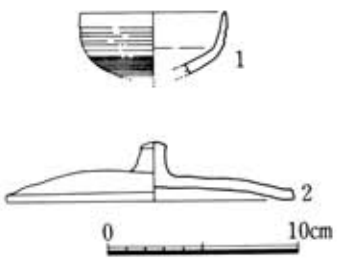


Fig.195 ＳＴ01古墳出土土器(1/4)

(3) 出土遺物

２点出土している。１は表土から、２は石室内からである。

１は高杯、口縁部が一部残存する。復元口径7.6cm、杯部下位にカキ目を施す。

２は土師器蓋、宝珠つまみ付き。口径15cm、つまみ部は縦に細長く、口縁部にかえりなし。調整不明瞭。

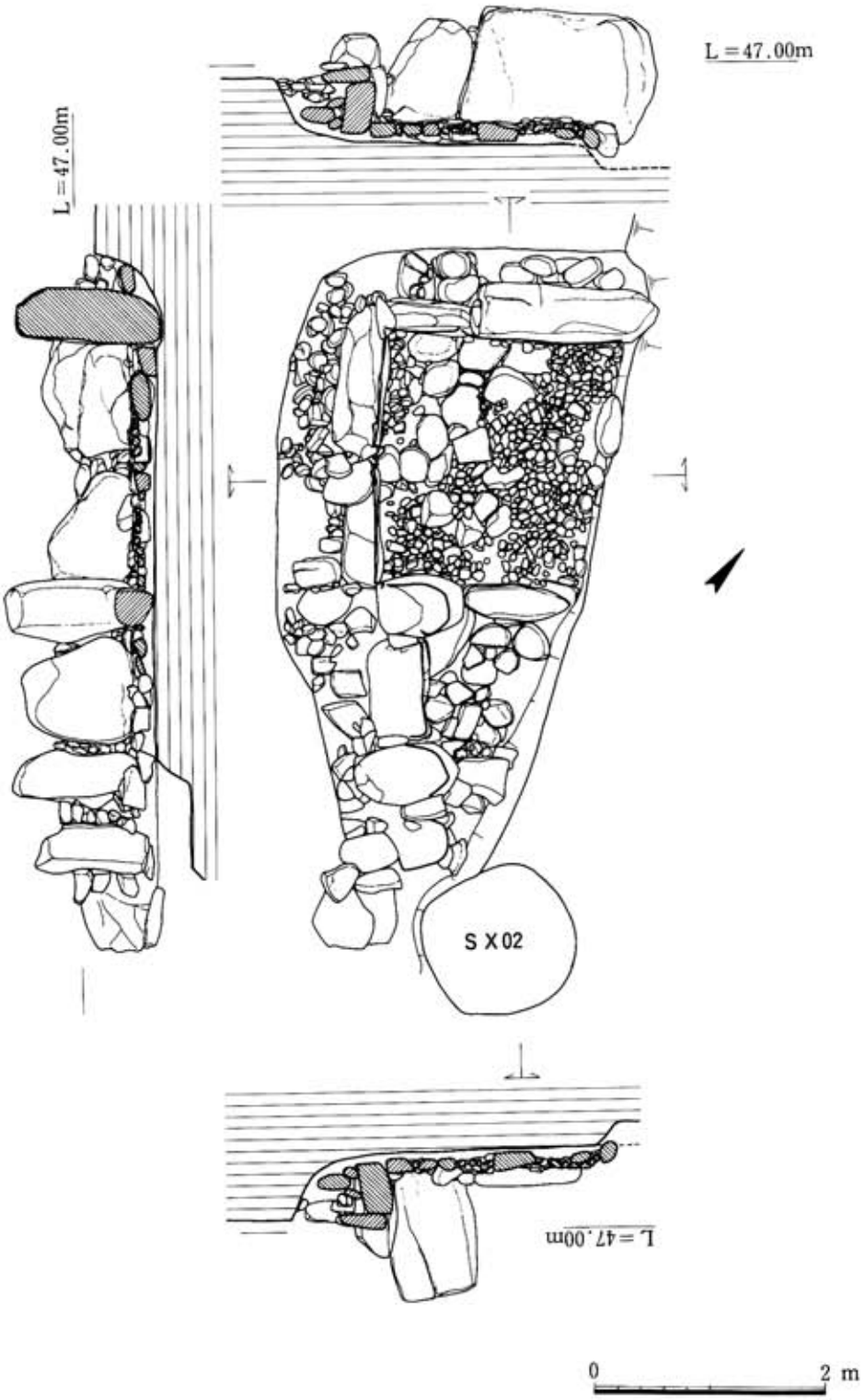


Fig.196　S T01古墳石室（1/60）

III. 歴史時代の遺構と遺物

ＳＸ02集石土壙とＳＰ03土壙墓がある。ＳＰ02集石土壙はＳＴ01古墳の羨道をきってつくられる。ＳＰ03土壙墓は調査区のほぼ中央に位置し北西約６ｍにはＳＸ02集石土壙がある。ＳＸ02集石土壙は上部を削平されるものの、埋土上層には礫が詰まっている。

ＳＰ03土壙墓は平面隅丸長方形で墓壙上部では径20～30cmの礫を検出した。どちらの遺構からも遺物は出土していないため時期を特定することはできないが、東脊振村石動二本松遺跡などからＳＰ03土壙墓と同様の遺構を検出しており、その時期が13Ｃ代であるため本遺構も13～14Ｃ代と考える。

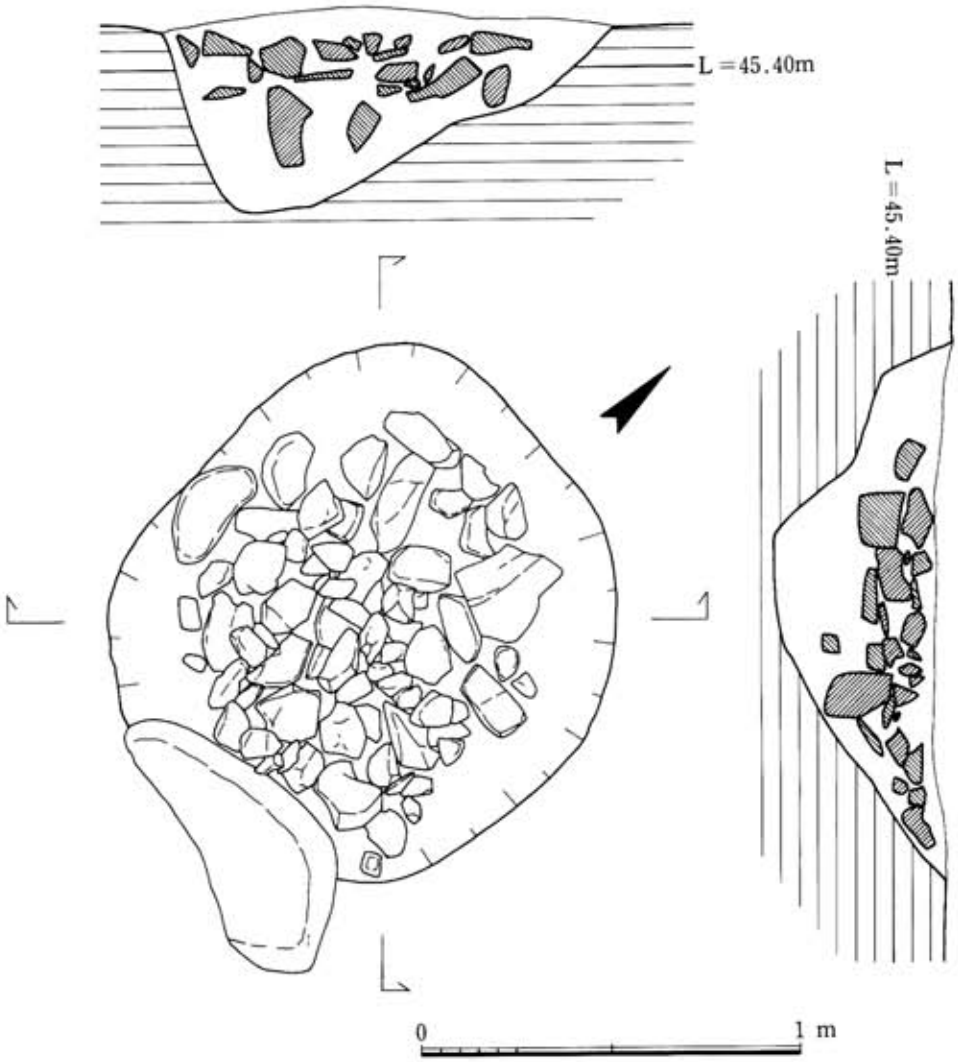


Fig.197　ＳＸ02集石土壙（１/20）

1．ＳＸ02集石土壙

ＳＴ01古墳羨道部をきる。南東約７ｍにはＳＰ03土壙墓がある。墓壙は平面不整円形で規模は長軸1.4m、短軸1.35m、深さは45cm前後である。壁はスリ鉢状にゆるやかに掘り込まれ壙底は平坦な部分を残す。遺構検出面では径10～20cmの転石、割石がぎっしり詰まった状態であったが、土壙下部は礫は詰まっていない。出土遺物なし。本調査区の南北両側を鳥栖市教委が調査した結果、同様の遺構が検出されている。

2．ＳＰ03土壙墓

調査区のほぼ中央に位置し、北西約６ｍにはＳＸ02集石土壙がある。墓壙は平面隅丸長方形で規模は長軸1.35m、短軸0.85m、深さは30cmを測る。壙底は平坦で四壁を直にちかく掘り込む。形態から木棺墓の可能性も十分考えられる。墓壙検出面では径10～30cmの転石、割石がほぼ水平に配してある。墓の地上標識か木棺上蓋のおさえ石のどちらかであろう。出土遺物なし。東脊振村石動二本松遺跡に類例がある。時期を13Ｃ～14Ｃ代と推定する。

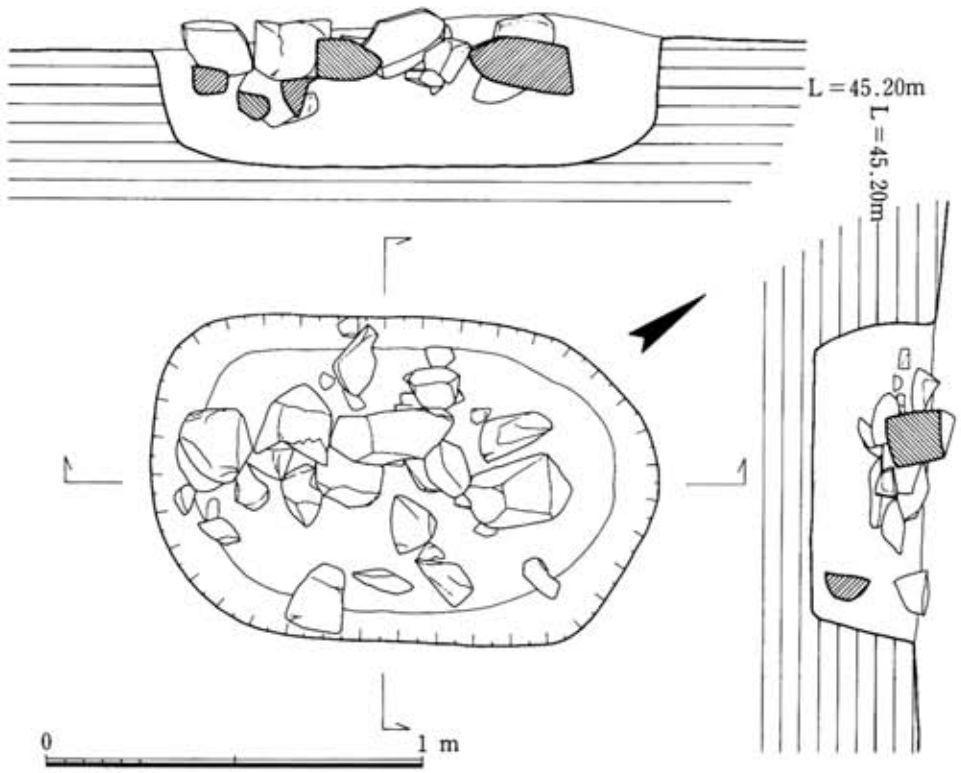


Fig.198　ＳＰ03土壙墓（1/20）

3．その他の土器

すべてＳＴ01古墳の表土剝ぎの段階で出土したものである。これらの遺物に関連する遺構は検出していないが本調査区の南北両側を平成元年度に鳥栖市教育委員会が調査しており同様の遺物と遺構を検出している。これは本遺跡北西500m にある中世城郭、葛籠城関連の空堀や城下町に伴う町屋遺構である。本遺跡出土の遺物もこれらに関連するものであろう。すべてほぼ同時期のもので８などから16Ｃ代と考える。

瓦質土器

摺鉢（３）復元口径21.4cm、器高9.2cm、スリ目は４条。底部器壁は薄く内湾しながら立ち上がる。口縁部付近で内側に屈曲する。

釜（５、６）５は復元口径14.4cm、肩部に環状の耳を貼付し、耳の上位に一条の沈線を巡らす。その間に菊花文を押捺する。頸部には斜位の連続ヘラ描き文を施す。内面は粘土紐成形の際生じた指頭痕が残る。６は復元口径14.8cm、肩が張り肩部にハケ目を施す。外面黒褐色。

火鉢（７）16弁の菊花文を押捺する。その上に二条の突線を巡らす。

土師質土器

摺鉢（４）復元口径24cm、体部タテ方向、口縁部ヨコ方向ハケ目。口唇部ヨコナデ。

磁　器

８は白磁皿、畳み付け部露胎。明代(16Ｃ代)。９は香炉、色調青緑色。10は皿か碗の口縁部。

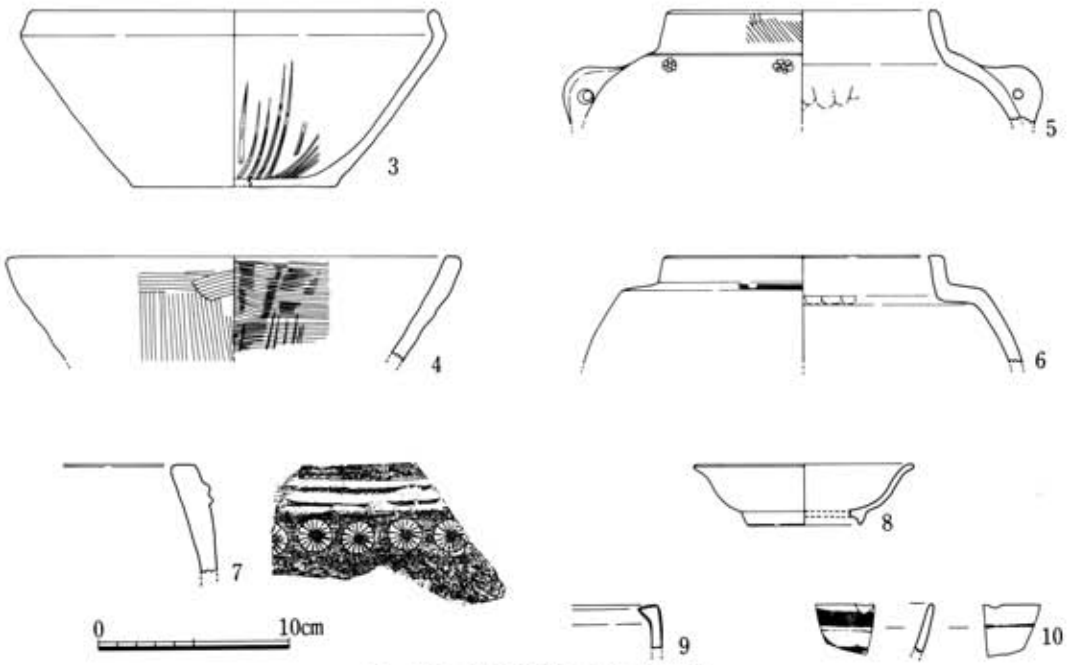


Fig.199　歴史時代の土器（１/４）

Tab.29　土器一覧表

（　）は推定

Fig-図番号 (PL番号)	出土地点	器　種	法　量cm	形態・調整の特徴	色　調	焼　成	県遺物登録番号 写真登録番号
195-1	ST01 墳丘表土	高杯 (須恵器)	口径 (7.6)	脚部を欠損。口縁部は直立する。杯部下位にカキ目を施す。	灰黒色	普　通	85-3477
-2 (PL.107)	ST01 石室内	蓋 (土師器)	口径　15.0	宝珠つまみ付き。つまみ部は縦に細長く、口縁部にかえりなし。	橙褐色	普　通	85-3476 910106
199-3 (〃)	ST01 表土	摺鉢 (瓦質土器)	口径 (21.4) 器高　9.2	底部器壁は薄く内湾しながら立ち上がる。口縁部付近で内側に屈曲する。スリ目4条。	灰褐色	普　通	85-3495 910135
-4 (〃)	ST01 表土	摺鉢 (土師質土器)	口径 (24.0)	体部タテ方向、口縁部ヨコ方向ハケ目、口唇部ヨコナデ。	乳褐色	普　通	85-3494 910135
-5 (〃)	ST01 表土	釜 (瓦質土器)	口径 (14.4)	肩部に環状の耳を貼付し、菊花文を押捺する。	灰褐色	普　通	85-3497 910135
-6 (〃)	ST01 表土	釜 (瓦質土器)	口径 (14.8)	肩が張り肩部にハケ目を施す。	黒褐色	普　通	85-3493 910135
-7 (〃)	ST01 表土	火鉢 (瓦質土器)	——	頸部に菊花文を押捺する。	灰褐色	普　通	85-3496 910135
-8 (〃)	ST01 表土	皿 (白磁)	口径 (11.6) 器高　3.2	高台付皿、畳付け部露胎。	白色	普　通	85-3490 910197
-9 (〃)	ST01 表土	香炉 (磁器)	——	口唇部は内面に突出する。胎土は白褐色で精砂粒を多く含む。	青緑色	普　通	85-3491 910197
-10 (〃)	ST01 表土	皿 (磁器)	——	内外面染付、胎土は白褐色で精砂粒を多く含む。	青白色	普　通	85-3492 910197

IV. 小　結

調査した遺構は古墳1基、集石土壙1基、土壙1基である。古墳は複室両袖型横穴式石室である。石室東半分は削平をうけ出土遺物は土器2点のみである。従って築造時期など特定できないが大方6世紀後半の築造で追葬は7世紀後半までであろう。SX02集石土壙とSP03土壙も出土遺物がなく、他遺跡の同類遺構から13～14C代と推定した。

本遺跡の性格などについては調査区南北両側を平成元年度に鳥栖市教育委員会が調査しており、その報告をまちたい。

ここではST001古墳にみられる複室両袖型石室についてふれたい。

石室形態分類・変遷については蒲原が金立開拓遺跡[(1)]のなかでおこなっている。その中で複室両袖型で、平面が方形の玄室を有するものをD類として、さらにDI類を前室が未発達で、平面的には明確な複室とならないもの、DII類を定形化した複室両袖型の石室で平面形の玄室に

横長の前室を付設するもの、DIII類を矮小化した複室両袖型石室とした。その変遷についてD類は「玄室方形のものばかりで、いずれもこの種の石室としては後出的なもの」でDI・DII類を6Cと7Cの交点に出現しDIII類に型式変化するとしている。

本遺跡ST01古墳は蒲原DII類に相当し、石室規模も近似値をとる。本墳では出土遺物から築造時期をしめすことはできないが、同型式の宮西ST002古墳の築造時期は6C第3四半期であり、蒲原DII類が6C後半まで溯る可能性がでてきた。玄室が方形で複室両袖型石室は他遺跡でも普遍的にみられ、しかも玄室規模は2×2mに近似値をとっている。蒲原D類は規格をもった石室として型式設定ができるのでなかろうか。

鳥栖市田代太田古墳は複室両袖型石室でも6C中頃と古い段階に位置づけられているが、これは玄室長方形である。出現期の複室両袖型石室は玄室長方形であり、玄室が長方形から方形へと変化する石室共通の変遷とともに蒲原D類も成立したと思われる。その成立時期を6C後半と考える。

金立開拓遺跡複室両袖型石室計測表　（ ）は推定

遺構名	蒲原分類	玄室規模(長×幅m)	前室規模(長×幅m)
ST009	DI	2.1×2.3	1.0×1.5
ST007	DII	(2.4)×(2.2)	(1.5)×(1.5)
ST011	DII	(2.4)×(2.4)	(1.0)×(1.8)
ST013	DII	(2.2)×(2.2)	1.2×(2)
ST016	DII	2.2×(2.0)	(1.1)×?
ST020	DII	不　明	0.8×(1.5)
ST006	DIII	1.6×1.7	0.7×1.3

註

1．蒲原宏行編　『金立開拓遺跡』佐賀県教育委員会　1984

荻野遺跡（おぎの）

遺跡名：荻野遺跡（略号ＯＧＮ）
所在地：鳥栖市柚比町字荻野

荻　野　遺　跡

Ⅰ．遺跡の概要

1．遺跡の立地

荻野遺跡は九千部山系の一支峰である杓子ヶ峰（標高312m）から東南へ派生する中位段丘上（標高50～55m）にあり、鳥栖市柚比町字荻野に所在する。周辺には弥生時代、古墳時代の遺跡が密集しており、東隣には銅鐸鋳型の出土で著名な安永田遺跡が、西隣に日岸田遺跡、河原田

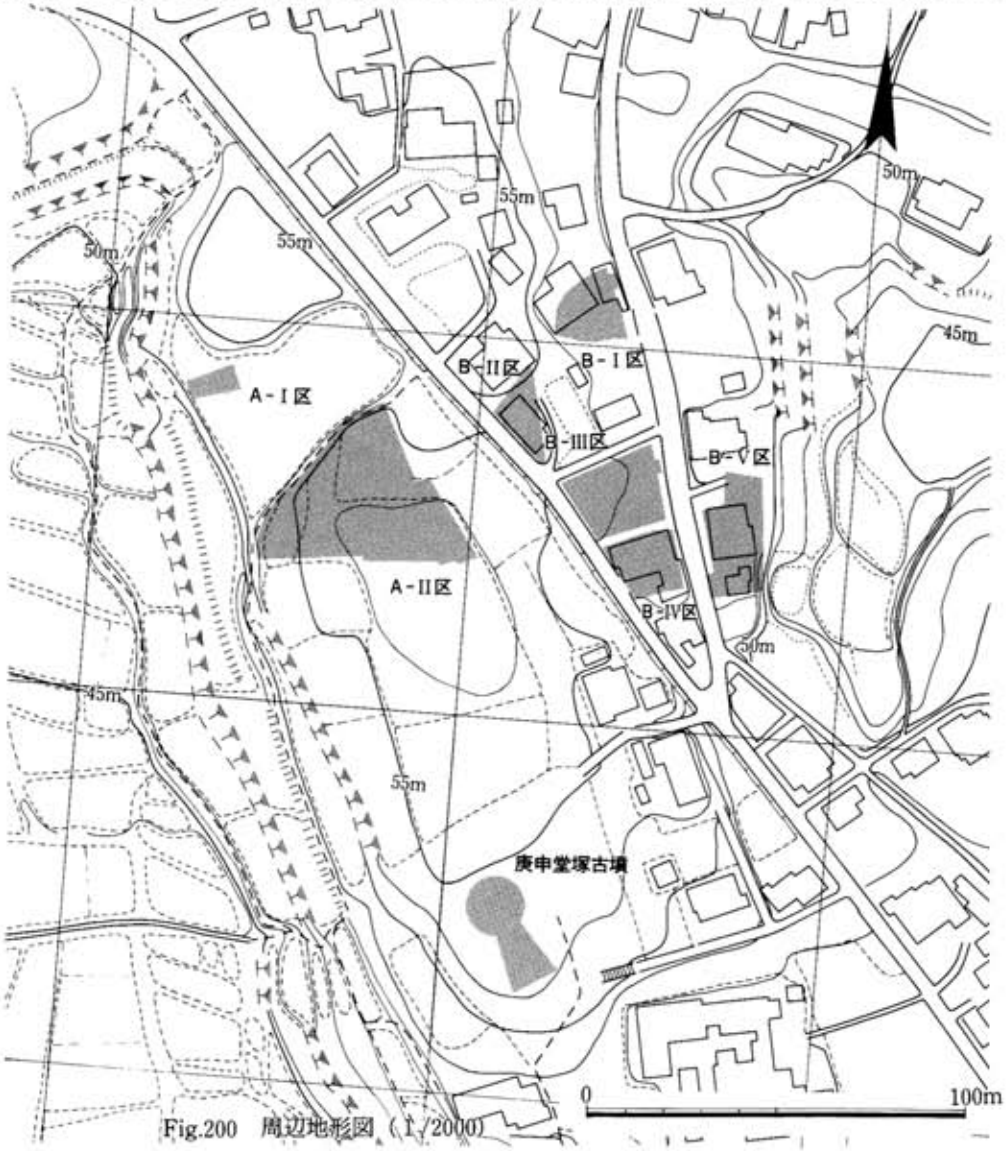


Fig.200　周辺地形図（1/2000）

北遺跡、河原田南遺跡が分布し、北側丘陵上には田代公園遺跡が位置する。また、南側の中位段丘上には、この地域の首長クラスの古墳と考えられる庚申堂塚古墳、田代太田古墳、岡寺古墳があり、中でも6世紀中葉の前方後円墳である庚申堂塚古墳との距離は約80mと近く、本遺跡との関連を想像せしめるような近接した位置関係にある。

遺跡は市道によってA地点とB地点に分けられ、さらに前者がⅠ区とⅡ区、後者がⅠ区からⅤ区に細分される。それぞれの調査区における遺構とその位置はTab.30とFig.200～204を参照されたい。

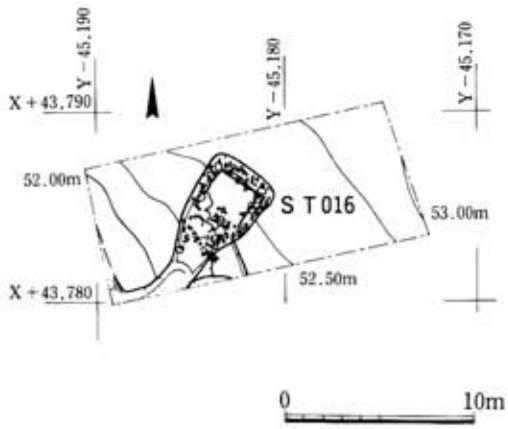


Fig.201　A－Ⅰ区遺構配置図（1/400）

地　点	地区	遺構番号	時　代	備　考
A地点	Ⅰ区	S T016	古墳後期	
	Ⅱ区	S P001	古墳後期？	
		S D003	飛鳥・奈良？	A・Bの2条
		S K004		
		S X005	飛鳥・奈良？	
		S J006	弥生前期末	
		S J007	弥生前期後半	
		S X008	飛鳥・奈良？	
		S X009		
		S J010	弥生前期末	
		S J011	弥生前期末	
		S D012	飛鳥・奈良？	
		S K013		
		S K014		
		S K015	飛鳥・奈良？	
		S C020	古墳後期？	
B地点	Ⅰ区	S B001	飛鳥・奈良	
		S B002	弥生中期後半	
		S B010	弥生中期後半	
	Ⅱ区	S T017	古墳後期？	
	Ⅲ区	S B003	飛鳥・奈良	
		S B004	飛鳥・奈良	
		S B005	飛鳥・奈良	
		S B006	飛鳥・奈良？	S D007より古
		S D007	飛鳥・奈良？	
		S B008		掘立柱建物跡
		S P009	古墳後期	
		S X011	飛鳥・奈良？	S P009より新
		S K012	飛鳥・奈良	
		S D013	飛鳥・奈良	
	Ⅳ区	S B021	飛鳥・奈良	
		S K022		
		S X023		
	Ⅴ区	S B014	飛鳥・奈良	
		S D015		
		S X016	飛鳥・奈良？	

Tab.30　遺構一覧表

2．各時代の遺構と遺物

今回の調査では弥生時代と古墳時代の後期から飛鳥・奈良時代にかけての遺構と遺物が出土した。

(1)　弥生時代

弥生時代中期後半の竪穴式住居2軒と前期後半から末にかけての甕棺墓が4基検出されている。本遺跡の竪穴式住居は隅丸方形プランを持つが、隣接する安永田遺跡でも同時期で同プランの住居址が多数発掘されている。

(2)　古墳時代後期～飛鳥・奈良時代

本調査区は、古墳時代後期には墓域として機能しており、古墳2基、石棺墓1基、土壙墓2基が築かれている。7世紀の後半になると集落が営まれるようになり、7軒の竪穴式住居と数条の溝、鍛冶関連と思われる特殊遺構などが残されている。鍛冶関連の遺物としては、フイゴの羽口と多数の鉄滓がある。鉄滓は住居址や溝、特殊遺構から数多く検出され、この内S B005出土の物は鍛冶滓と鑑定されている。

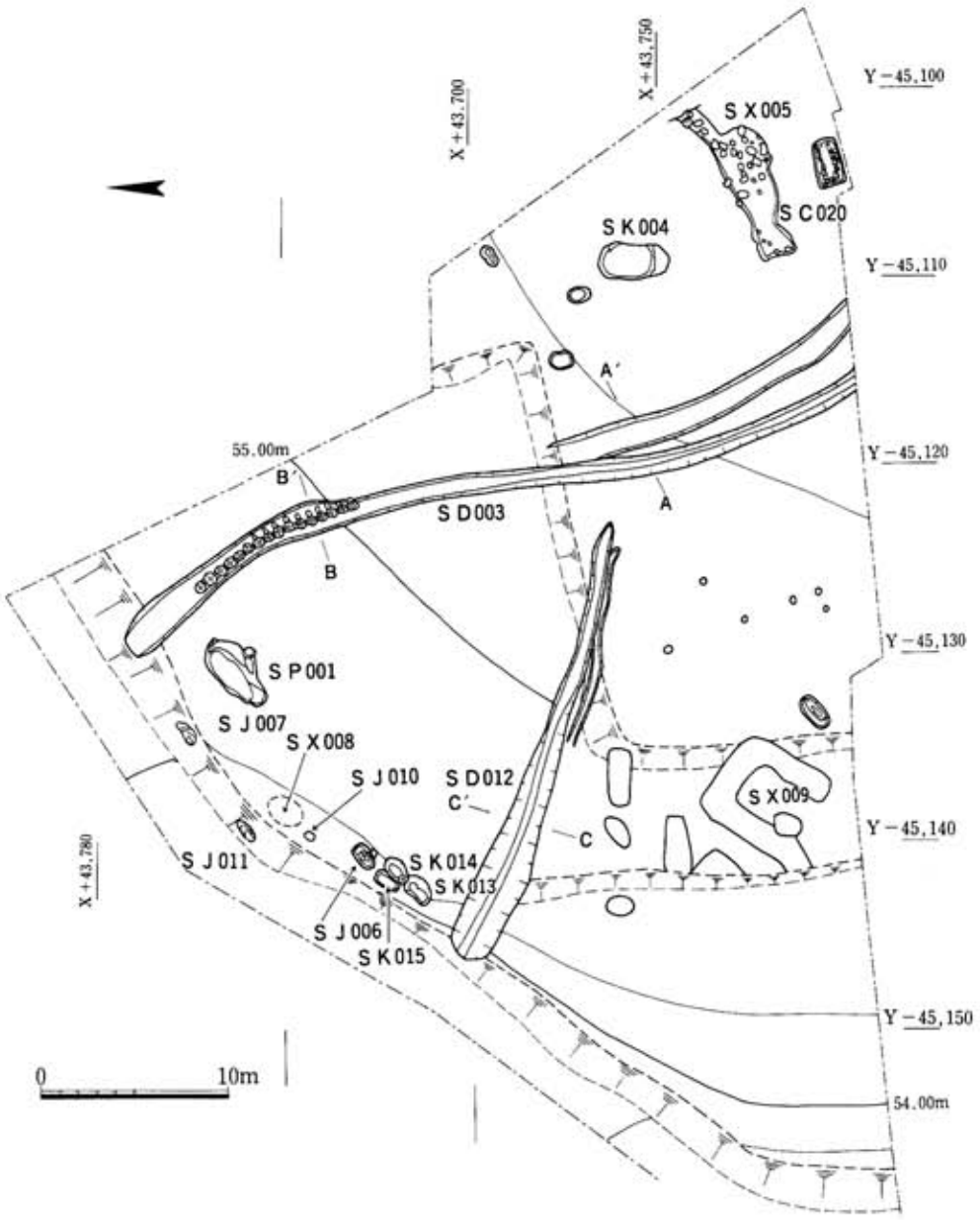


Fig.202　A－II区遺構配置図（1/400）

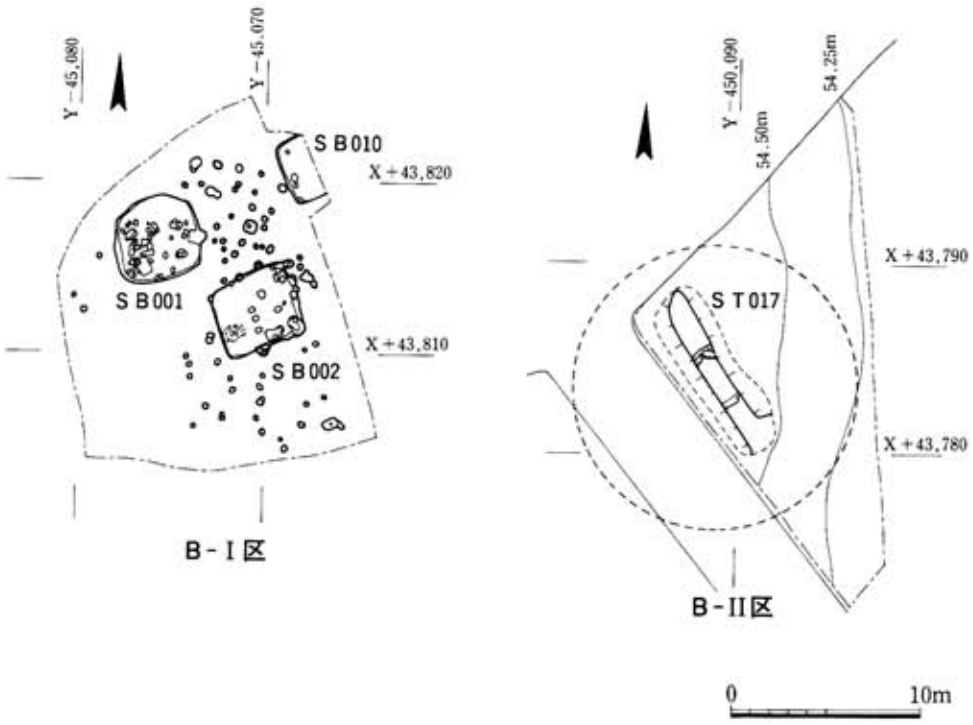


Fig.203　B－Ⅰ・Ⅱ区遺構配置図（1/400）

〈参考文献〉

1．志佐惲彦他「庚申堂塚調査報告書」
（佐賀県立博物館『佐賀県立博物館調査研究書』第4集）1978．3
2．藤瀬禎博、石橋新次他「柚比遺跡群範囲確認調査第2年次概要報告書」
（鳥栖市教育委員会『鳥栖市文化財調査報告書』第4集）1979．3
3．大澤正巳「伊良尾遺跡出土鉄、砂鉄の金属学的調査」
（相知町教育委員会『伊岐佐遺跡群』）1986．3

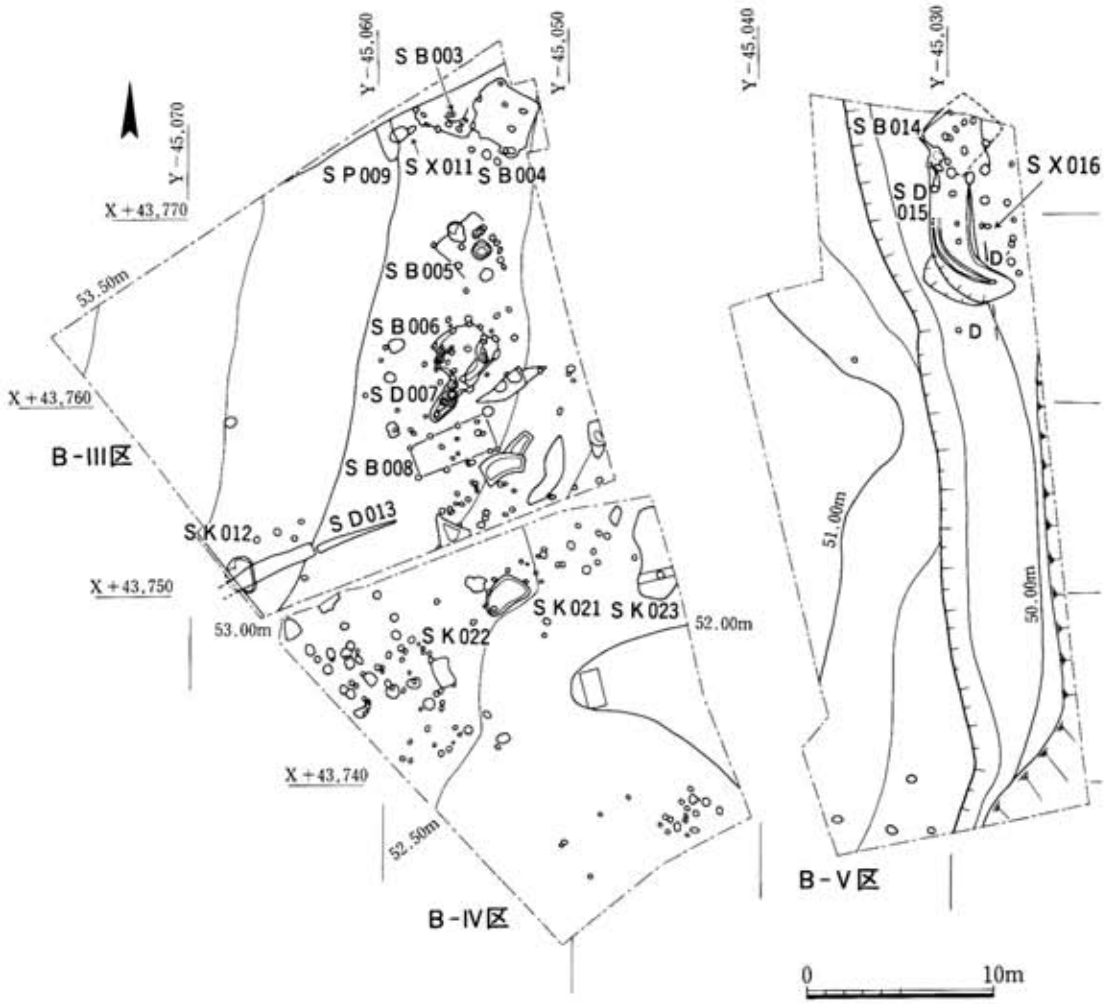


Fig.204　B—III・IV・V区遺構配置図（1/400）

II．弥生時代の遺構と遺物

1．住居跡

(1)　S B002住居跡

遺構　本住居跡は、B地点I区の中央やや東寄りに位置する。主軸方位はN76.7°Eを示し、長軸4.86m、短軸4.08mを測る長方形プランの竪穴住居跡である。柱穴には住居跡中央のP—1が考えられるが、同一軸線上のP—2も柱穴となる可能性がある。また西壁際には、住居跡の床面下に長軸1.10m、短軸0.85m深さ0.50mの規模を測り、中央部に小ピットを持つ土壙が存在する。しかし、遺物が出土していないため時期は限定できない。

東壁のやや北寄りには幅50cm、高さ20cm程の焼土塊が存在するが、カマドのように焚口を持

つものではない。構造から言うとこの焼土塊は、「炉」に近似するが、壁際に造られていることから、張り出し部等、何らかの施設が上屋に設けられていたことが推測される。土層はレンズ状の自然堆積を示す。

遺物の出土状況　床面直上から埋土の中層までに散布するが、その分布は住居跡の南側に濃い。本住居跡に一括して伴うと言うよりも、住居廃絶後に投棄された状況を示す。

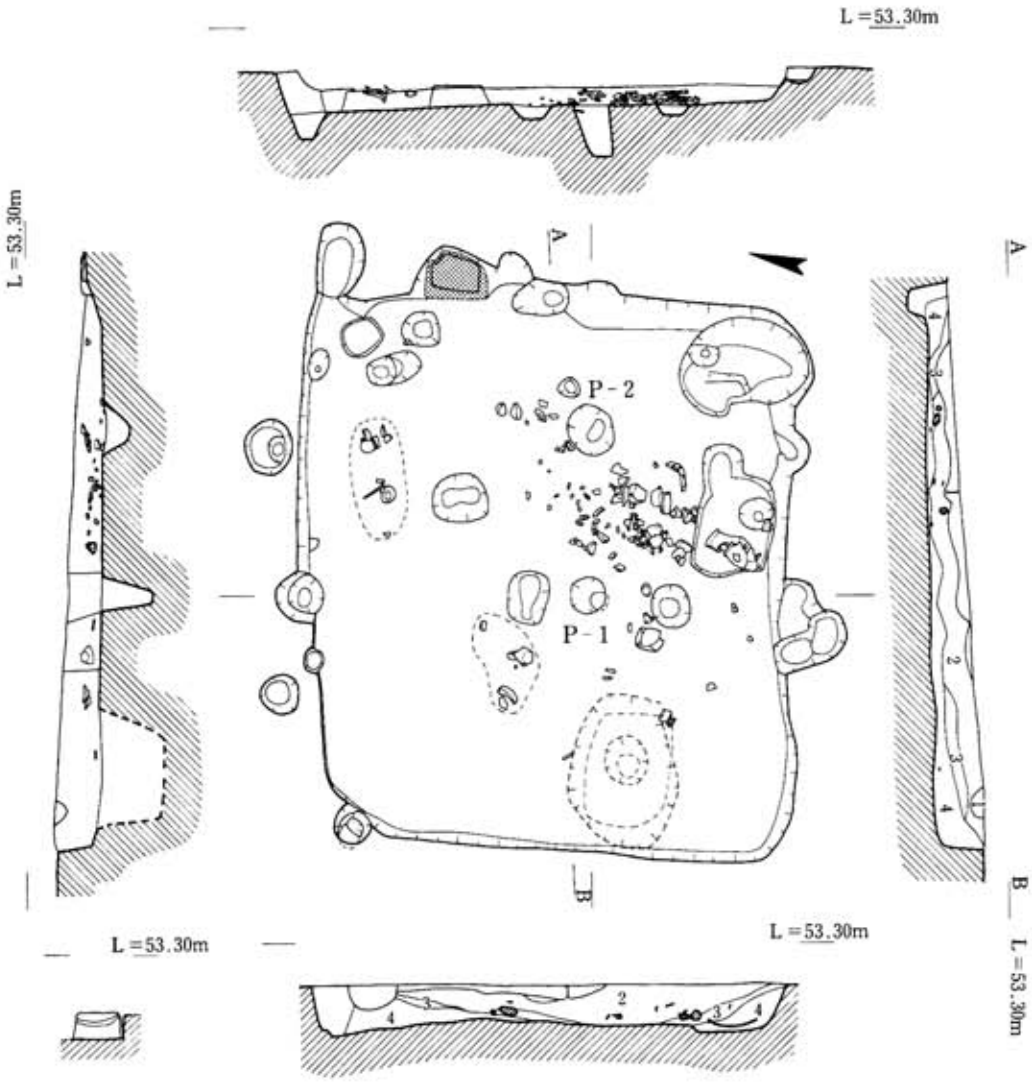


Fig.205　ＳＢ002住居跡（1/60）

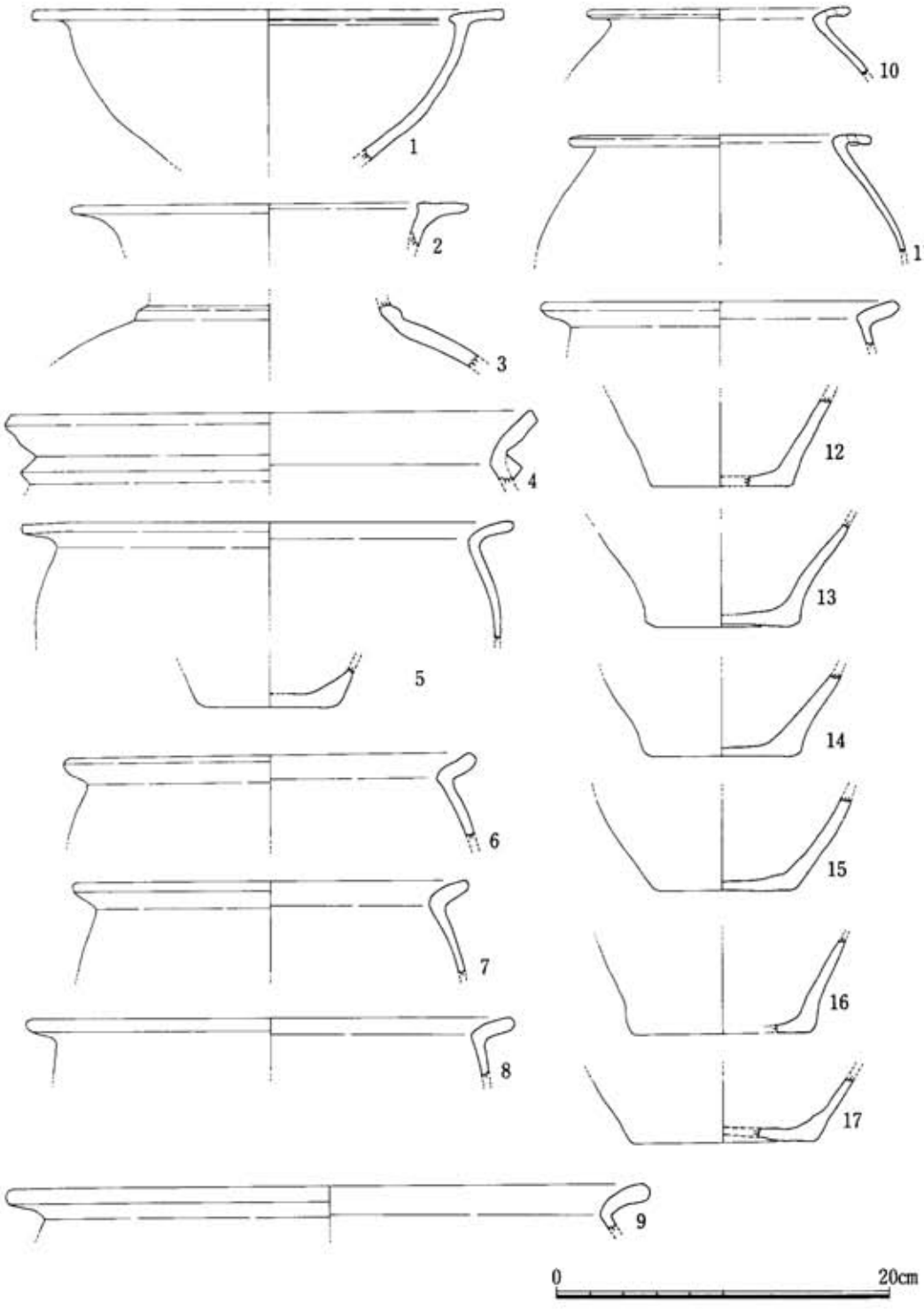


Fig.206　ＳＢ002住居跡出土土器（1／4）

遺物　1はT字状の平坦口縁を呈する高杯で、内外面とも朱彩をほどこしている。2・3は壺の破片資料で、2はT字状の平坦口縁部、3は頸部に断面三角の貼付け突帯を持つ。4から9は甕の口縁部で、4は頸部に断面三角形の貼付け突帯を持ち、5～9は頸部が「く」の字に屈曲し口縁は外側へ短く立ち上がる。10・11は短い平坦口縁の無頸壺で、口縁部に穿孔が有る。12から17は底部の資料である。本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と考えられる。

(2)　SB010住居跡

遺構　本住居跡はB地点I区の東北端に位置し、その東側は市道によって削平されている。主軸方位はN15°Wを示し、南北軸3.50m、深さ60cmの規模を有する、隅丸方形プランの竪穴住居跡である。床面には4個のピットが存在するが、この内P－1とP－2が約35cmと比較的深く、柱穴となる可能性がある。土層はレンズ状の自然堆積を示す。

遺物の出土状況　床面直上から検出されており、本住居跡に伴う土器であろう。

遺物　18は中型の、19は小型の無頸壺で、18には内外面ともに朱彩を施している。20・21は頸部が「く」の字状に屈曲する甕で、21の口縁はほぼ水平に開く。22は土製の支脚で、中央で緩く括れ、裾部が若干広がる。本住居跡の時期は弥生時代中期後半と考えられる。

2．甕棺墓

(1)　SJ006甕棺墓

A地点II区の東端に位置する成人用の複式棺である。墓壙は短辺が湾曲する隅丸長方形で、長辺1.42m、短辺0.83m、深さ0.57mを測る。墓壙内の掘り込みは無く、甕棺をそのまま床面に設置している。下甕の胴部には焼成後の穿孔があり、上甕の口縁内面が下甕の口縁外面に接するようにして両者を合わせている。副葬品、人骨等は出土していない。本遺構の時期は弥生時代前期末と考えられる。

(2)　SJ007甕棺墓

A地点II区の東北端に位置する成人用の複式棺である。墓壙は短辺が湾曲する隅丸長方形で、長辺1.56m、短辺(0.52)m、深さ0.78mを測る。墓壙の西南から斜めに掘り込み、+25°の角度で甕棺を設置している。上甕の頸部内面が下甕の口縁外面に接するようにして両者を合わせている。副葬品、人骨等は出土していない。本遺構の時期は弥生時代前期後半と考えられる。

(3)　SJ010甕棺墓

A地点II区の東北端、SJ006の北に位置する小児用の複式棺である。墓壙は楕円形で、長辺0.52m、短辺0.36m、深さ(0.20)mを測る。墓壙内の掘り込みは無く、甕棺をそのまま床面に設置している。下甕の胴部には焼成後の穿孔がある。上甕と下甕の接合型式は不明である。副葬品、人骨等は出土していない。本遺構の時期は弥生時代前期末と考えられる。

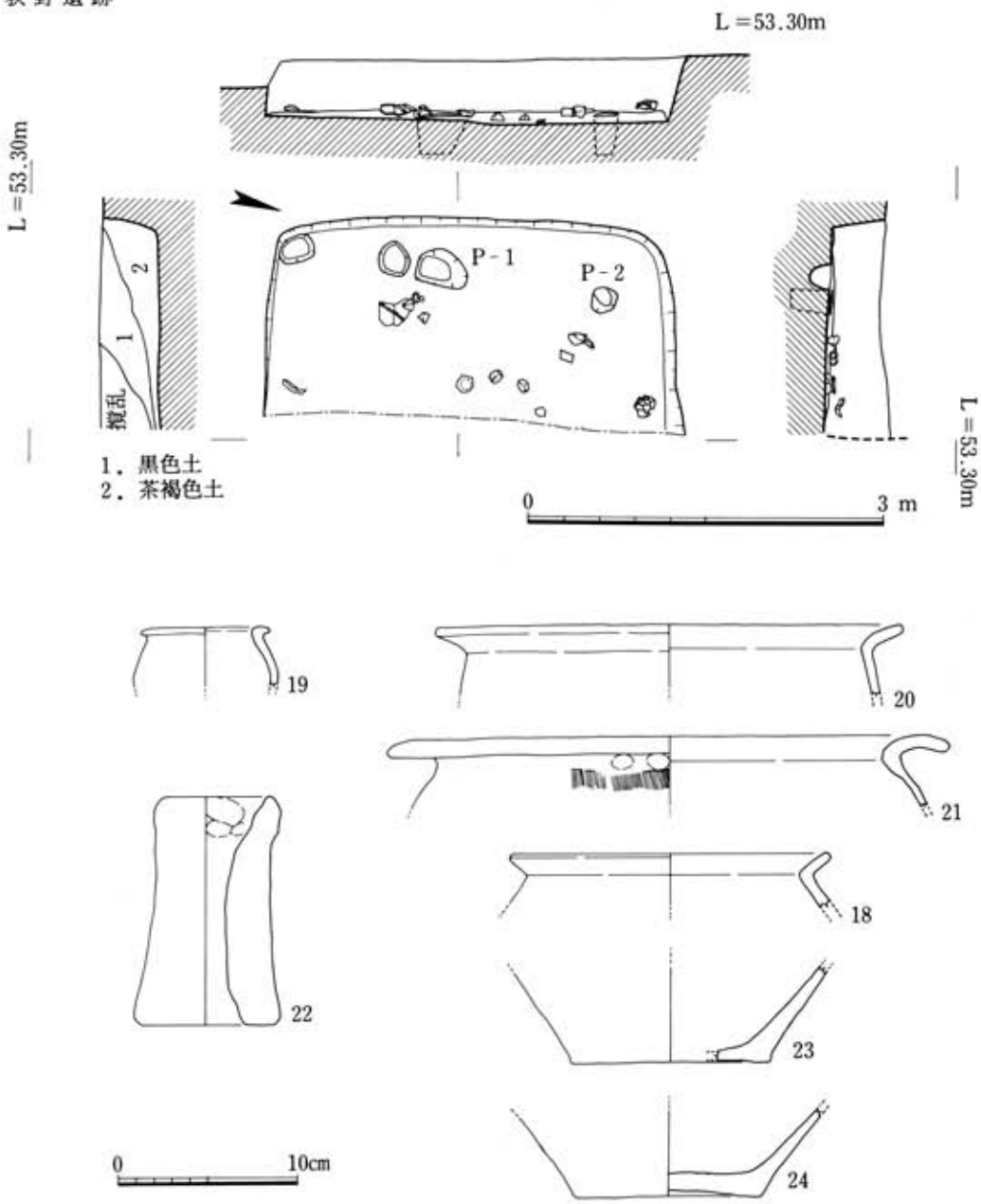


Fig.207　S B010住居跡（1/60）、出土土器（1/4）

(4)　S J011甕棺墓

A地点II区の東北端、S J 007の南に位置する成人用の複式棺である。墓壙は短辺が湾曲する隅丸長方形で、長辺1.48m、短辺(0.43)m、深さ0.67m を測る。墓壙内の掘り込みは無く、甕棺をそのまま床面に設置している。下甕の胴部には焼成後の穿孔がある。下甕の口縁は上甕が接合しやすいように打ち欠かれている。副葬品、人骨等は出土していない。甕棺より、本遺構の時期は弥生時代前期末と考えられる。

Tab.31　甕棺墓一覧表　　単位（m）

遺構番号	型　式	器　形		墓壙法量			方　位	傾　斜	用途	人骨	出土遺物	備　　考
		上	下	長辺	短辺	深さ						
S J 006	接　口	大甕	大甕	1.42	0.83	0.57	N52°E	+18°	成人	無し	無　し	上部は削平を受けている。
S J 007	覆　口	大甕	大甕	1.56	0.52	0.78	N45°E	+25°	成人	無し	無　し	上部及び北に削平を受ける。
S J 010	接口？	甕	甕	0.52	0.36	0.20	S41°W	+12°	小人	無し	無　し	上部及び北に削平を受ける。
S J 011	覆　口	大甕	大甕	1.48	0.43	0.67	N47°E	+38°	成人	無し	無　し	上部に削平を受ける。

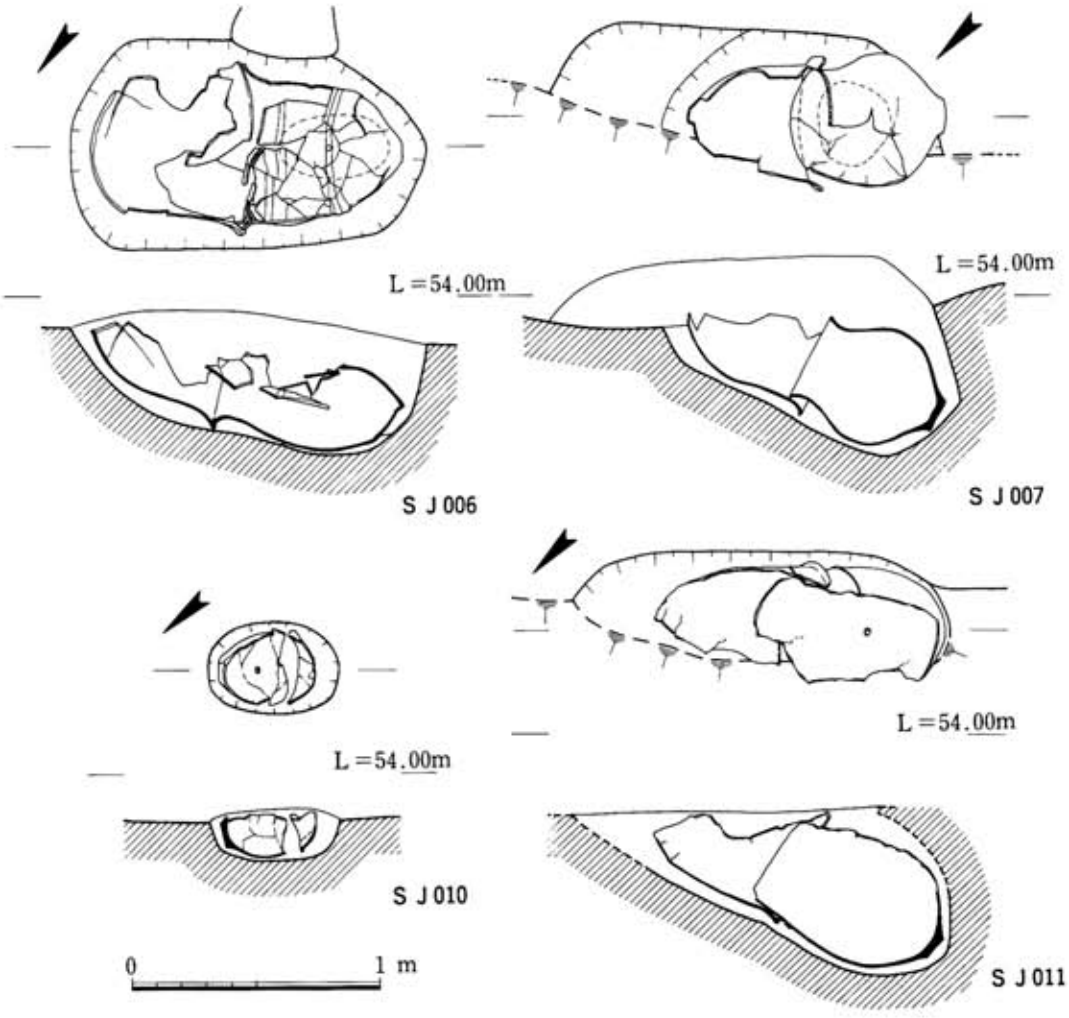


Fig.208　S J 006・007・010・011甕棺墓（1/30）

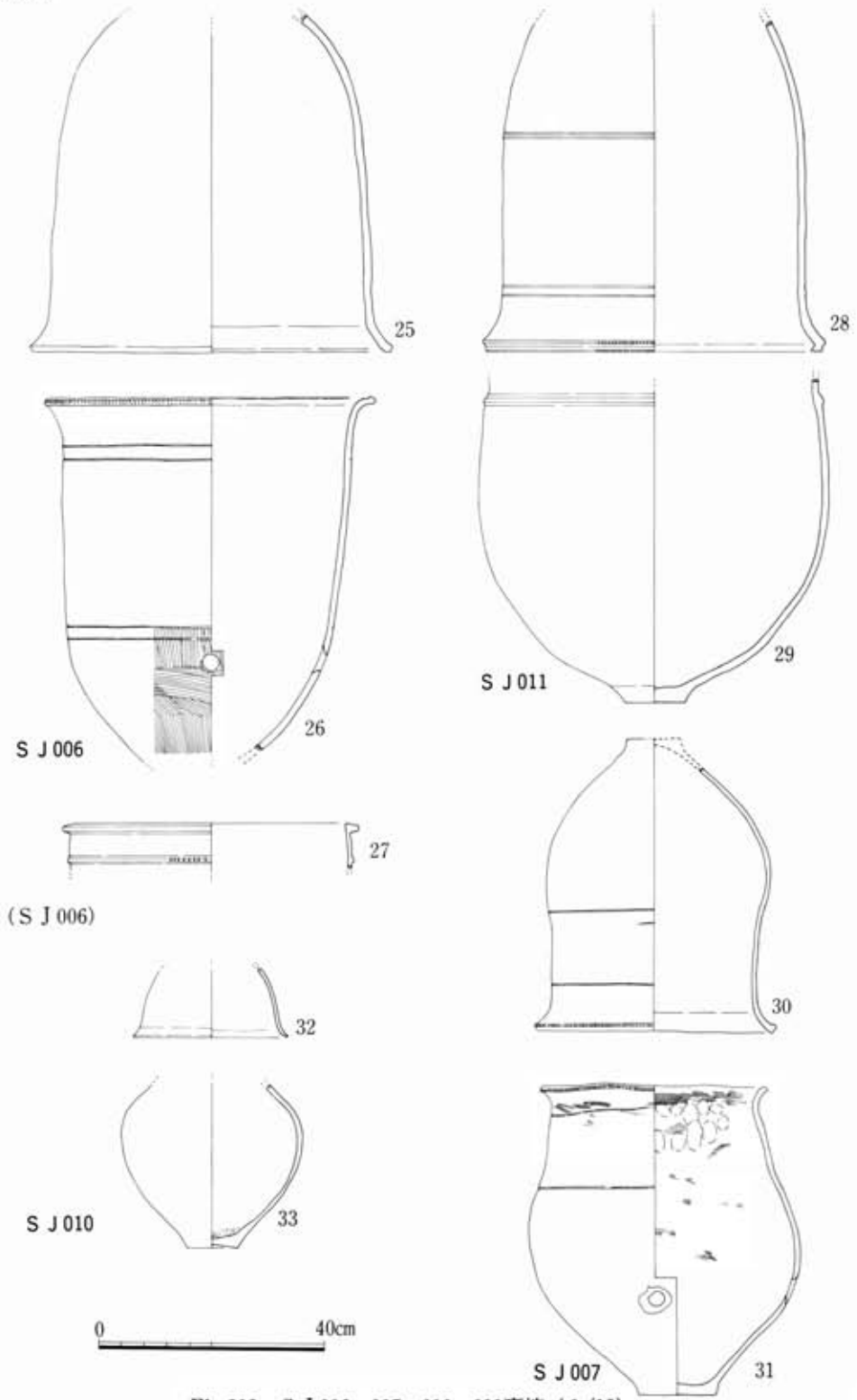


Fig.209　S J 006・007・010・011竪棺（1/12）

3．遺構外の出土遺物

34は壺の肩部で、７本１単位の櫛描直線紋を巡らす。35は高杯で、杯部下半に稜を持つ。胎土は緻密で銀雲母を多く含み、斜方向の刷毛目調整の後に丁寧な縦位のヘラミガキを施している。37は同じく高杯の脚部で胎土は緻密である。斜方向の刷毛目調整の後に縦位のヘラミガキを施している。38・39は甕の口縁であるが、40～44と同様に甕棺となる可能性がある。

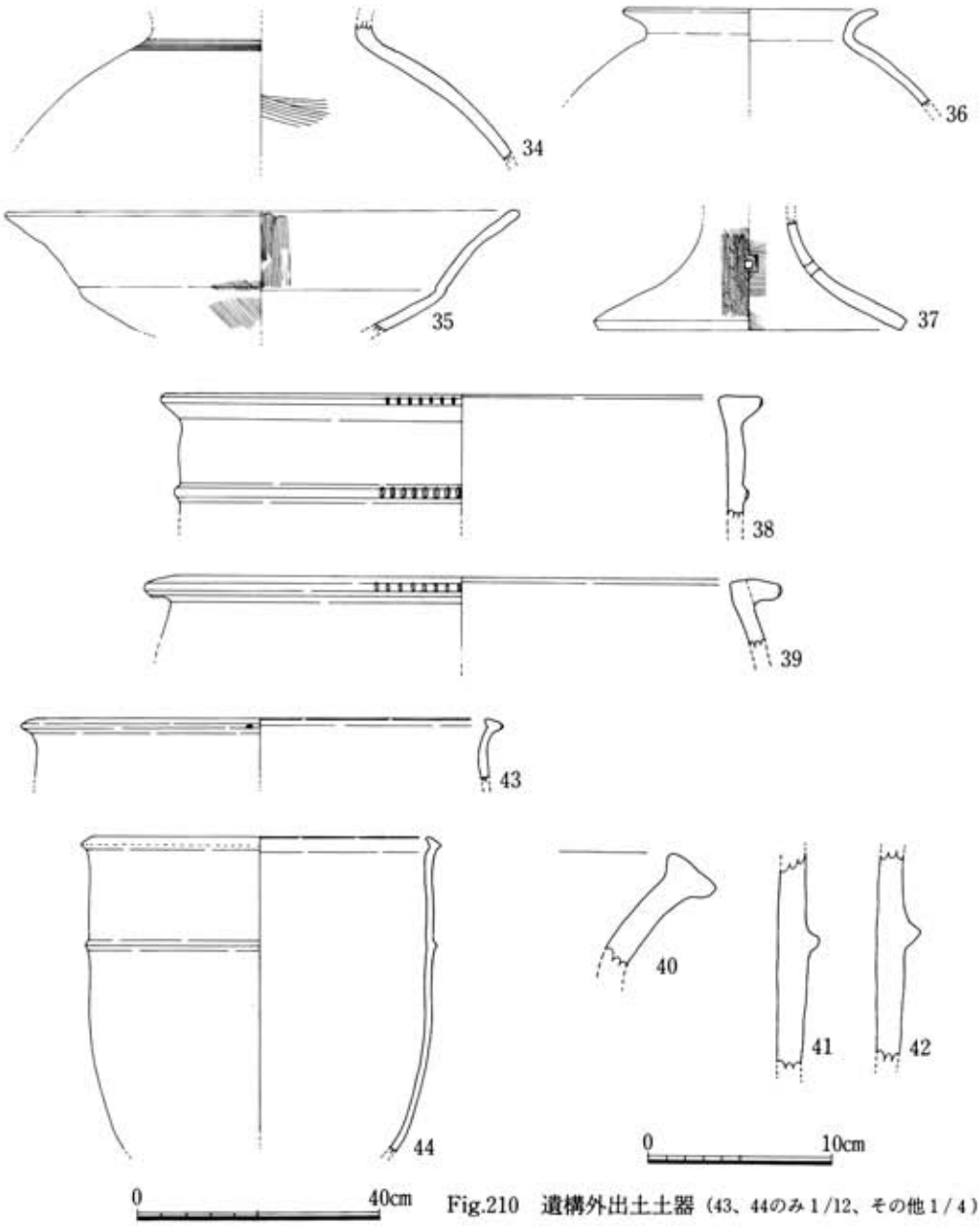


Fig.210　遺構外出土土器（43、44のみ１/12、その他１/４）

III. 古墳及び飛鳥・奈良時代の遺構と遺物

1. 住居跡

(1) SB001住居跡

遺構 本住居跡はB地点I区の北端に位置する。主軸方位はN93.5°Wを示し、長軸4.86m、短軸4.50m、深さ40cmの規模を有する胴張方形プランの竪穴住居跡である。床面には多くのピットが存在するが、この内P－1～4が50～70cmと深く4柱穴となろう。P5～8は入り口部の施設に関連するピットと考えられる。4柱穴、入り口部のピットとも数回の掘り直しが観察され、建て替えが行われたことを示している。入り口に対面する住居の東壁にはカマドが構築されている。床面は荒掘りの後に、暗黄褐色、暗褐色土を用いて約15cm程の厚さで床を貼っている。埋土層は自然堆積を示す。

遺物の出土状況 少量の遺物が埋土中及びカマド上から出土している。

遺物 図示しうる遺物は45の杯身のみである。長く外反する高台は、杯部成形後貼付したもので、体底部との境は明瞭ではない。体部は口縁部に向けて緩くS字状に湾曲する。遺物が少ないので明確ではないが、本住居跡の時期は7世紀の後半であろう。

(2) SB003住居跡

遺構 本住居跡はB地点III区の東北端に位置するが、その北側は撹乱によって、東壁はSB004によって削平されている。主軸方位はN67.5°Wを示し、東西軸3.17m、深さ20cmの規模を有する方形プランの竪穴住居跡である。床面及び壁際には9個のピットが存在するが、柱穴となる可能性があるのは、深さ約30cmを測るP－1である。

遺物の出土状況 遺物は南西コーナーの床面直上から鉢が出土している。

遺物 46は須恵器の杯蓋で、扁平な天井部には宝珠状のつまみが付いていたと考えられる。口縁内面のかえりは消失し、単純に垂下している。47は土師器の鉢で、頸部は緩やかに屈曲しやや肥厚した口縁に至る。本住居跡には7世紀の末から8世紀初頭の時期が与えられよう。

(3) SB004住居跡

遺構 本住居跡はB地点III区の北端に位置し、SB003を切る。主軸方位はN76.5°Wを示し、長軸3.08m、短軸3.01m、深さ30cmの規模を有する、方形プランの竪穴住居跡である。P－1～3は深さ25cmと浅いが、柱穴であろう。住居の西壁にはカマドが構築されており、内部には支柱石が残っていた。埋土層は自然堆積を示す。

遺物の出土状況 床面直上から比較的多くの土器が出土しているが、刀子は埋土中から検出された。

遺物 48から50は土師器の甕で、いずれも頸部が丸く屈曲し、口縁部は外方へ開く。51は頸

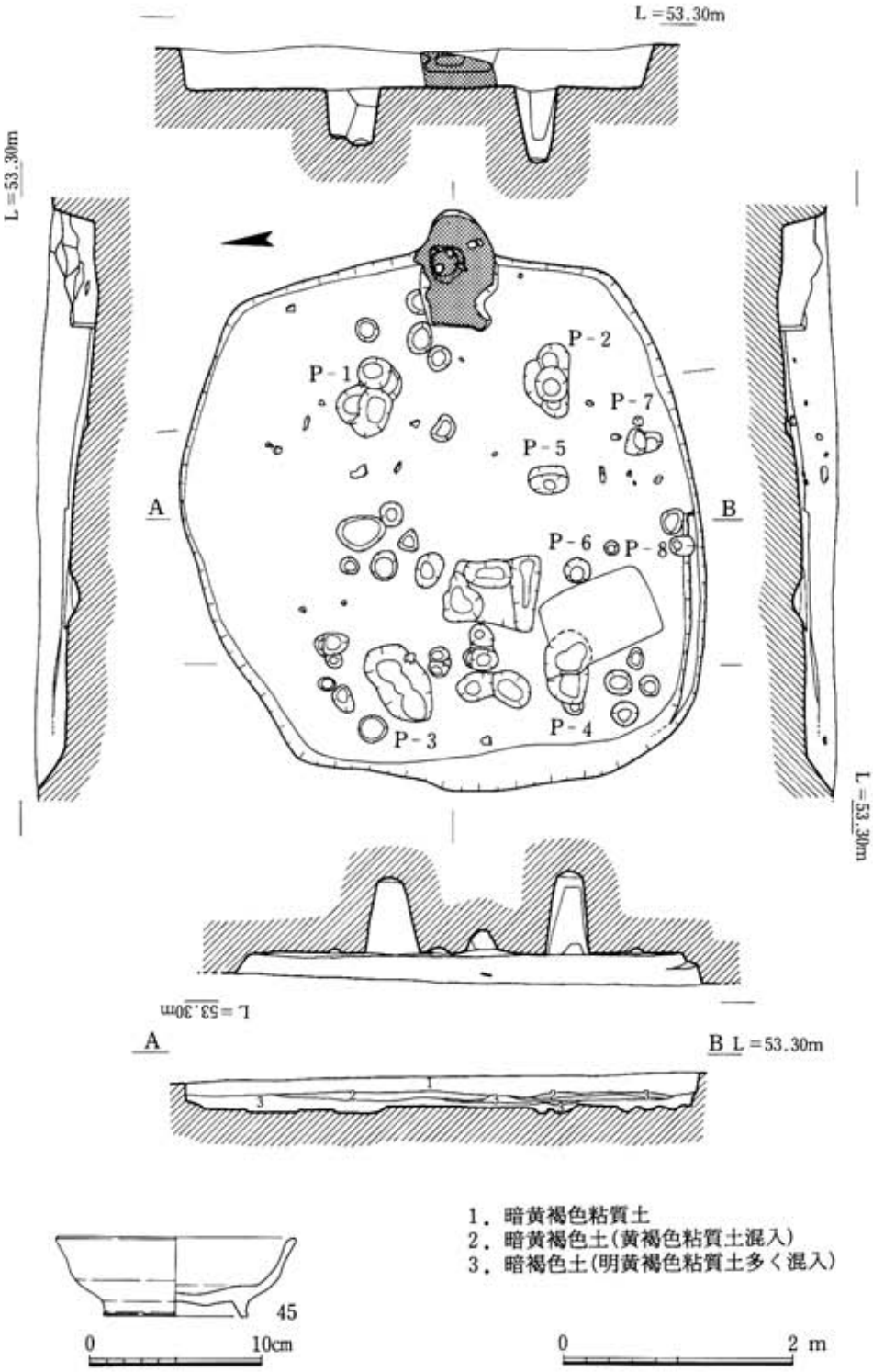


Fig.211　S B001住居跡（1/60)、出土須恵器（1/4）

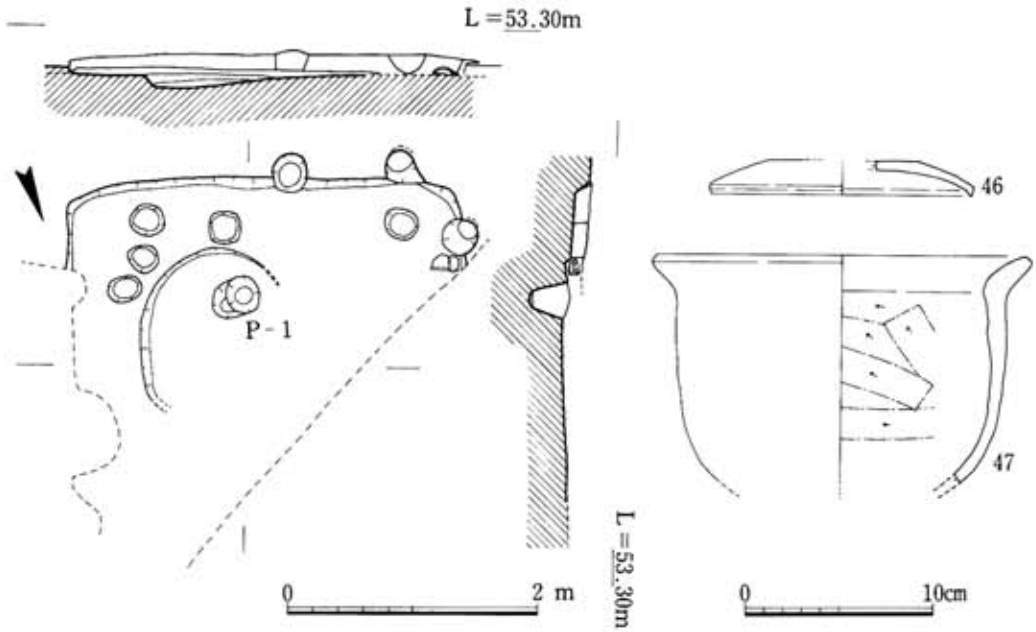


Fig.212　ＳＢ003住居跡（１/60）、出土須恵器・土師器（１/４）

部が緩やかに屈曲する土師器の鉢である。52は関を持つ平造りの刀子であるが、刃部先端の研ぎ減りが激しい。出土遺物より本住居跡の時期は８世紀代と考えられる。

(4)　ＳＢ005住居跡

遺構　本住居跡はＢ地点Ⅲ区の東側に位置する。主軸方位はＮ43.0°Ｗを示し、短軸2.80m、深さ10cmの規模を有する方形プランの竪穴住居跡である。掘り込みが浅いため、住居跡の東半分は削平を受けて明瞭でない。床面には中央のＰ－１を初めとして合計12個のピットが存在するが、この内Ｐ－２～４は柱穴である可能性を有す。Ｐ－１は直径１ｍ深さ27cmを測り、底面には薄く土を貼り、その上に高さ15cm程の炭を置いている。またこの炭に挟まれる様な状態で皿の底部が出土している。同時に検出された鉄滓は、その後の分析で鍛練鍛冶滓であることが判明した。カマドは西北壁のほぼ中央に位置し、支柱石が残っていた。

遺物の出土状況　須恵器の杯がカマドから、土師器の皿と鉄鏃２点、鉄滓及び炭がＰ－１から出土している。

遺物　56・57はともに須恵器の蓋で、口縁内面には短いかえりを持ち、天井部には回転ヘラケズリを施している。59は大型の土師器皿である。内外面とも丁寧に刷毛目調整を施しており、内面には朱彩が残っている。53・54は尖根小形柳葉式の鉄鏃である。55は埋土より出土した青銅製の鋲である。遺物が少ないので確定はできないが、土師器皿（盤）と須恵器蓋から７世紀末頃の時期が与えられよう。

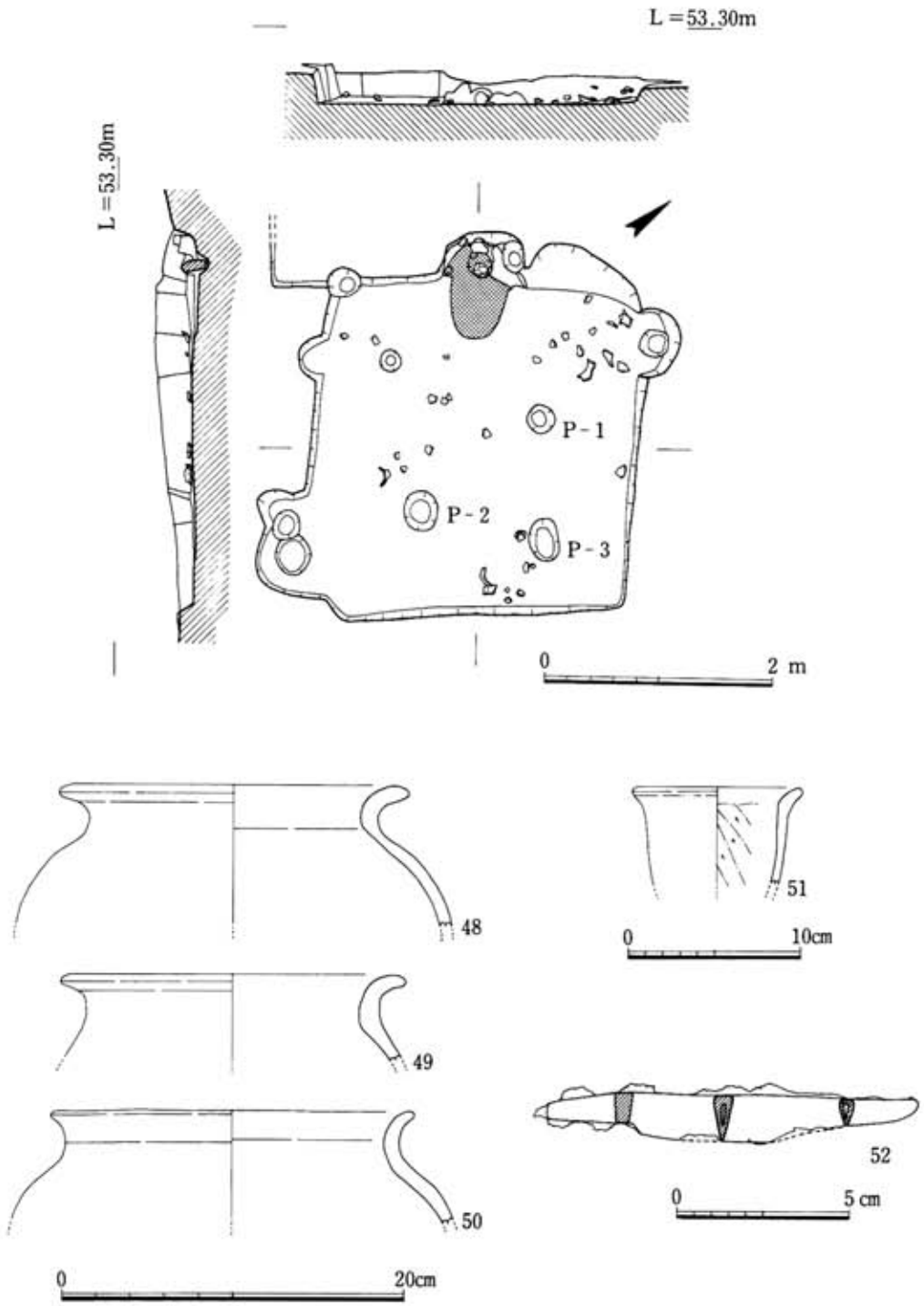


Fig.213　S B004住居跡（1/60）、出土須恵器（1/4）・鉄器（1/2）

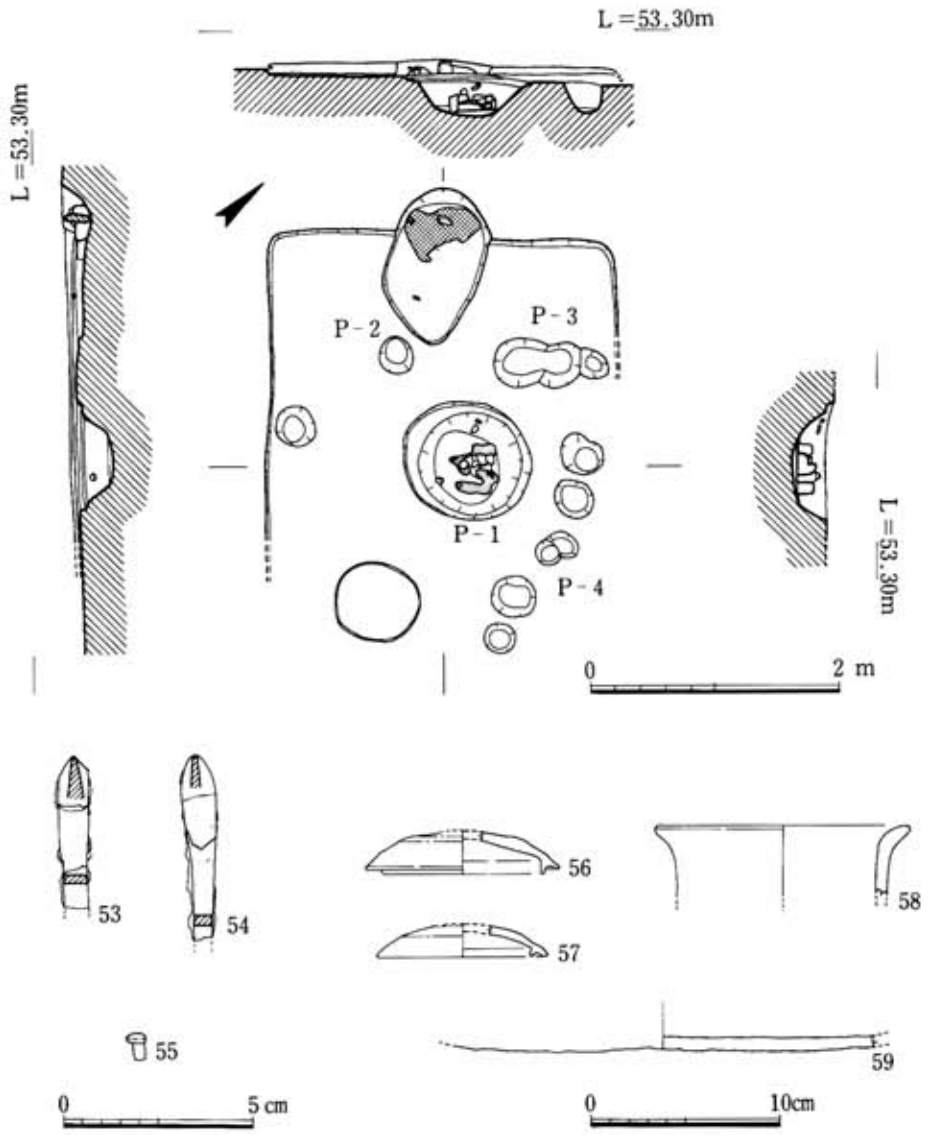


Fig.214　ＳＢ005住居跡（１/60)、出土須恵器・土師器（１/４）・鉄器（１/２）

(5)　ＳＢ006住居跡

遺構　本住居跡はＢ地点Ⅲ区の東側に位置し、その東壁をＳＤ007溝に切られている。主軸方位はＮ127 °Ｗを示し、長軸3.02m、短軸2.46m、深さ10cmの規模を有する方形プランの竪穴住居跡である。床面及び壁際には多くのピットが存在するが、Ｐ－１もしくは－２～５が柱穴となる可能性がある。住居の西壁ほぼ中央にはカマドが構築されているが、遺存状態は良くない。なお時期の確定できる遺物は出土していない。

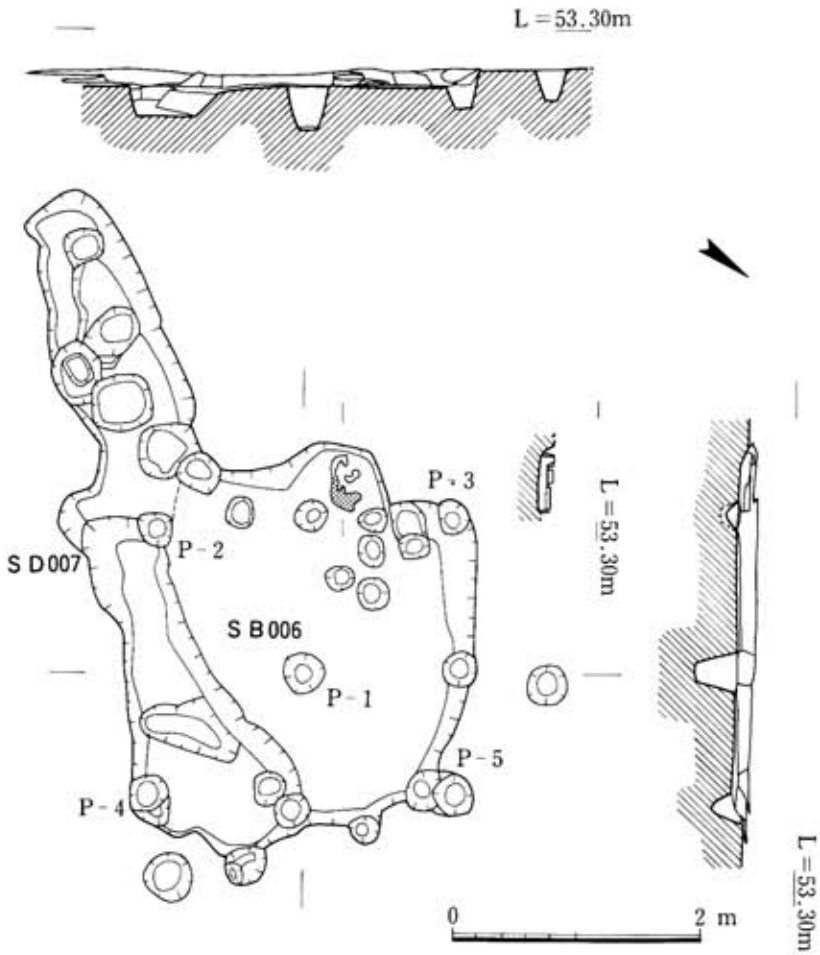


Fig.215　SB006住居跡・SD007溝（1/60）

(6)　SB014住居跡

遺構　本住居跡はB地点V区の北端に位置するが、その北側は攪乱によって、東側はSD015溝によって削平されており、規模は不明である。方形プランの竪穴住居跡と考えられ、主軸方位はN136.5°Wを示し、残存する部分での深さは約20cmである。床面には9個のピットが存在するが、配置が不規則なため柱穴は限定できない。カマドは南西壁に構築されている。

遺物の出土状況　本住居跡に伴う遺物としては、カマド上から検出された土師器の杯が有る。

遺物　60の杯蓋は器高が低く、天井部には扁平な擬宝珠状のつまみを付ける。口縁内面のかえりも消失し、端部が垂下するのみである。61の土師器の杯は胎土も緻密で、内面に丁寧なヘラミガキ調整を施している。出土遺物より本住居跡の時期は7世紀末～8世紀初頭と考えられる。

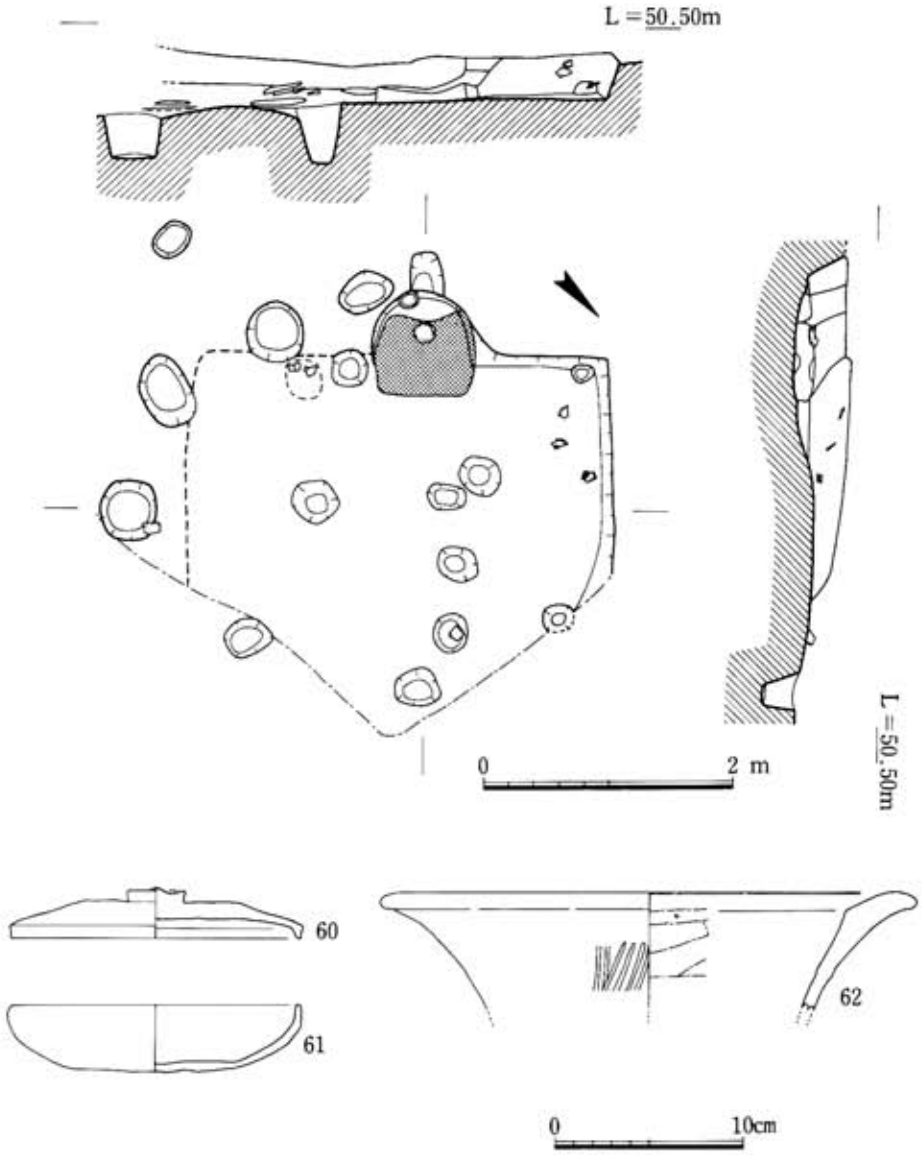


Fig.216　ＳＢ014住居跡（１/60）、出土須恵器・土師器（１/４）

２．古　墳

(1)　ＳＴ016古墳

遺構　Ａ地点のＩ区に位置する。墳丘は田畑造成の際に削平されており、周溝も検出できなかった。石室も腰石及び一部の敷石が残存するのみで、それ以高の石材は持ち去らされていた。本古墳は主軸方位をＮ35°Ｅに取り、南西に向けて開口する複室両袖型の横穴式石室である。石

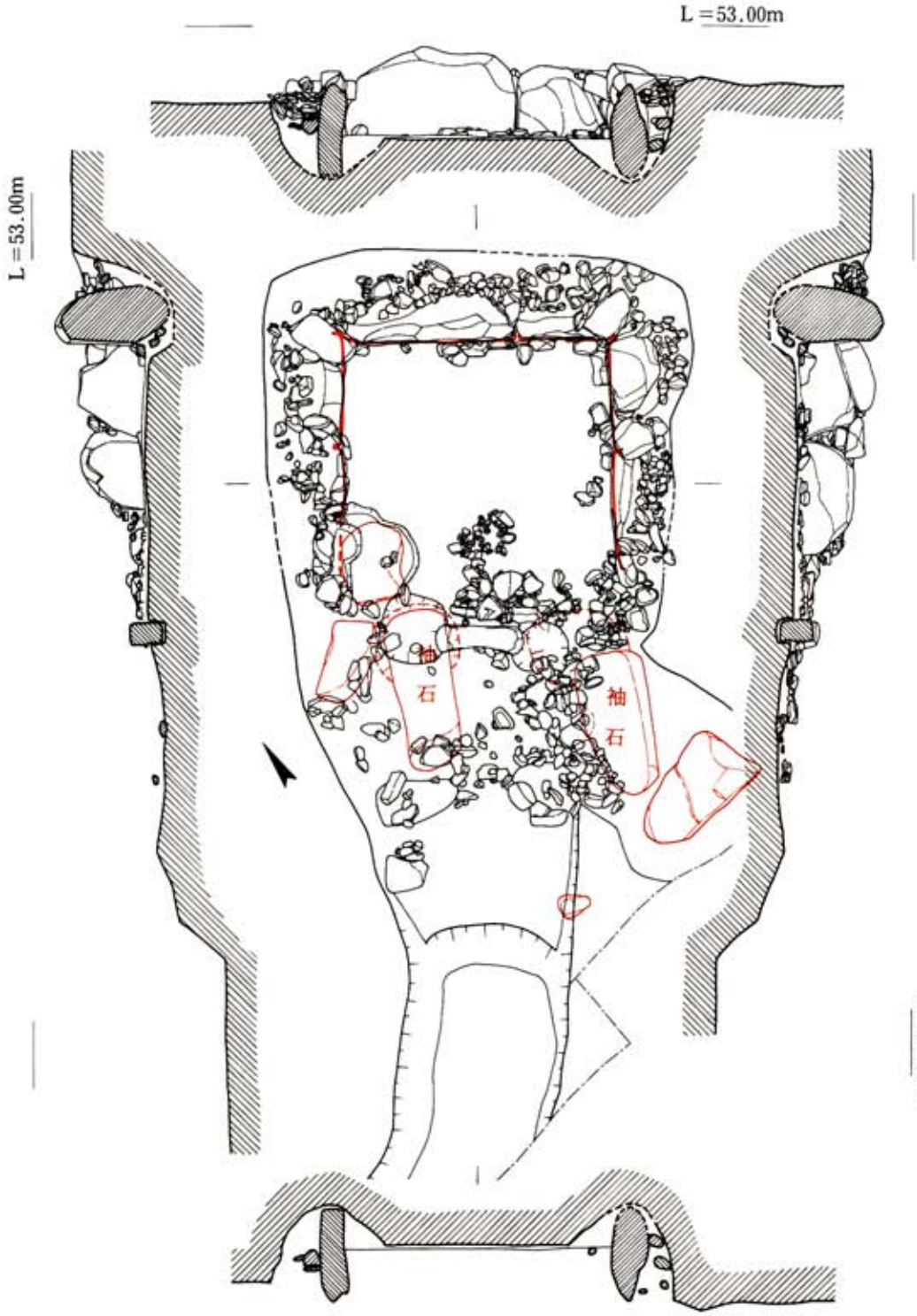


Fig.217　ＳＴ016古墳石室（1/60）

0　2 m

室掘り方は、主軸上で長さ6.00m、奥幅3.80m、中央幅3.60m、前幅1.55mを測り、現状での深さは、奥壁で90cm、中央東側壁付近で70cm、同西側壁で80cmを測り、裏込めには拳大の礫が用いられている。玄室はほぼ正方形で、奥壁と框石間が2.53m、両側壁間が2.40mであり、玄門の幅は框石の寸法から80cm程度と考えられる。前室の規模は、両袖石が移動または抜き取られているため明らかではないが、それらの抜き跡から約1.20m×1.20mと推定される。前門から約1m南西に40cm程の段が有り、これより以北が羨道、以南が墓道となろう。調査区が限られているためはっきりとはしないが、墓道は西へ湾曲するようである。

遺物の出土状況　鉄器、装飾品ともほぼ床面直上より検出された。耳環の84は前室、85は玄室床面から、玉類は切子玉も含めて玄室東側壁付近より一括して出土した。なお、A－I区西

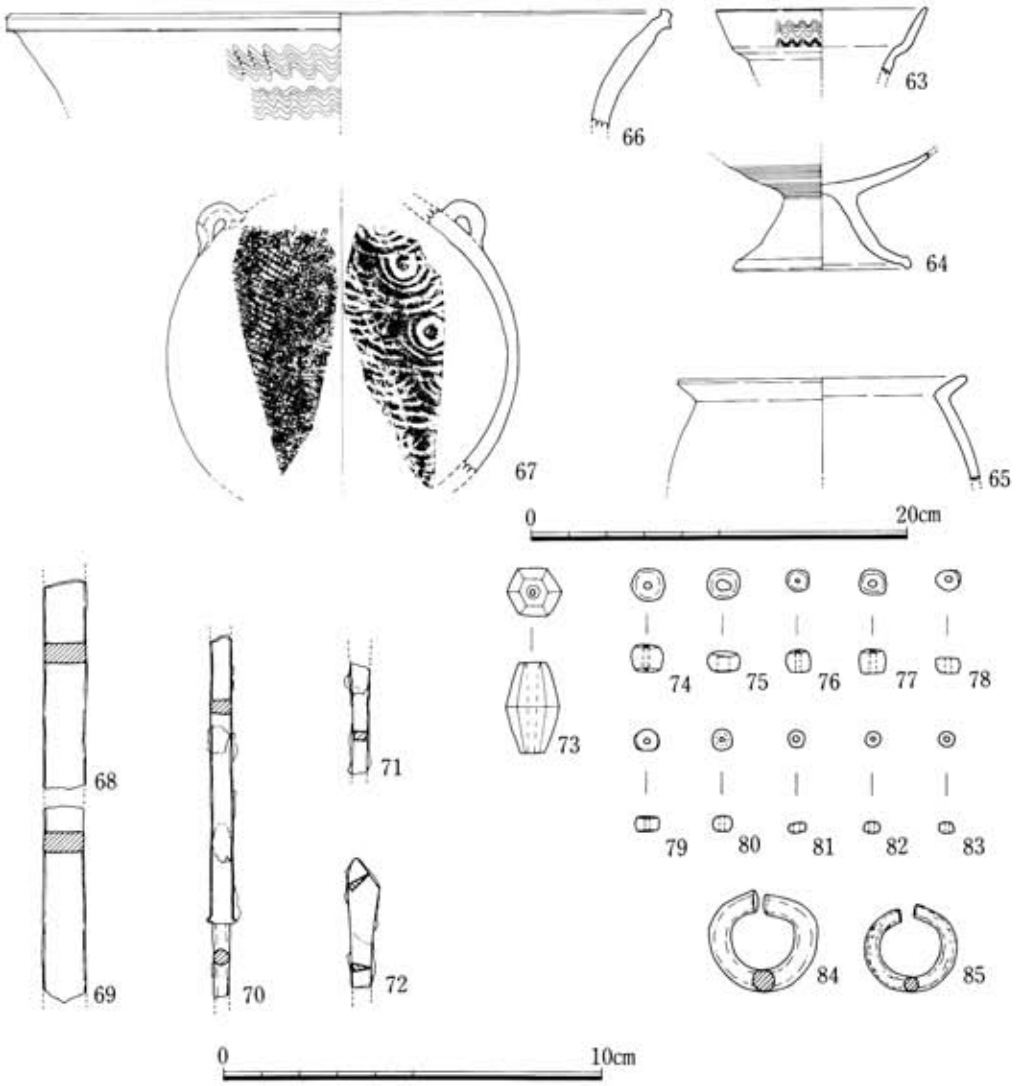


Fig.218 S T016古墳出土須恵器・土師器（1/4）、鉄器・装身具（1/2）

斜面出土の須恵器（Fig.228　145～156）は墓道の西部分に集中しており、本古墳の墓前祭に伴う遺物である可能性が大きい。

遺物　63の甕の胎土は緻密であるが、色調は赤褐色を呈し焼成はあまり良くない。口縁部は2段に屈曲して、外面には櫛描波状紋を施文する。64は短脚の高杯で、杯底部外面にはカキメを施す。67の提瓶の肩部には、輪状をなす把手が付く。68・69は同一個体と思われる棒状の鉄製品であり、鉄鏃はいずれも尖根式で、70は有茎、72は関の無い片刃箭式である。耳環は2個出土し、84は銅芯銀張り、85は鉄芯銅張りである。玉類は水晶製の切子玉(73)、小玉(74 ～83)合わせて11個がまとまって出土した。小玉は全てガラス製で色調は暗青色である。本古墳の所属時期は、6世紀中頃であろう。

(2)　ＳＴ017古墳

遺構　B地点II区に位置する。墳丘・石室等その殆どが破壊されており、石室掘り方の一部と奥壁の石材と思われる石が2個検出されたのみである。掘り方の東西は削平されて不明であるが、南北の長さは3.50m を測り、南東方向に開口する横穴式石室と考えられる。

遺物の出土状況　掘り方の北東床面上に約60cmの距離を置いて、2個の管玉が出土した。

遺物　2つの管玉はいずれも碧玉製で、色調は暗緑色である。本古墳の時期は不明である。

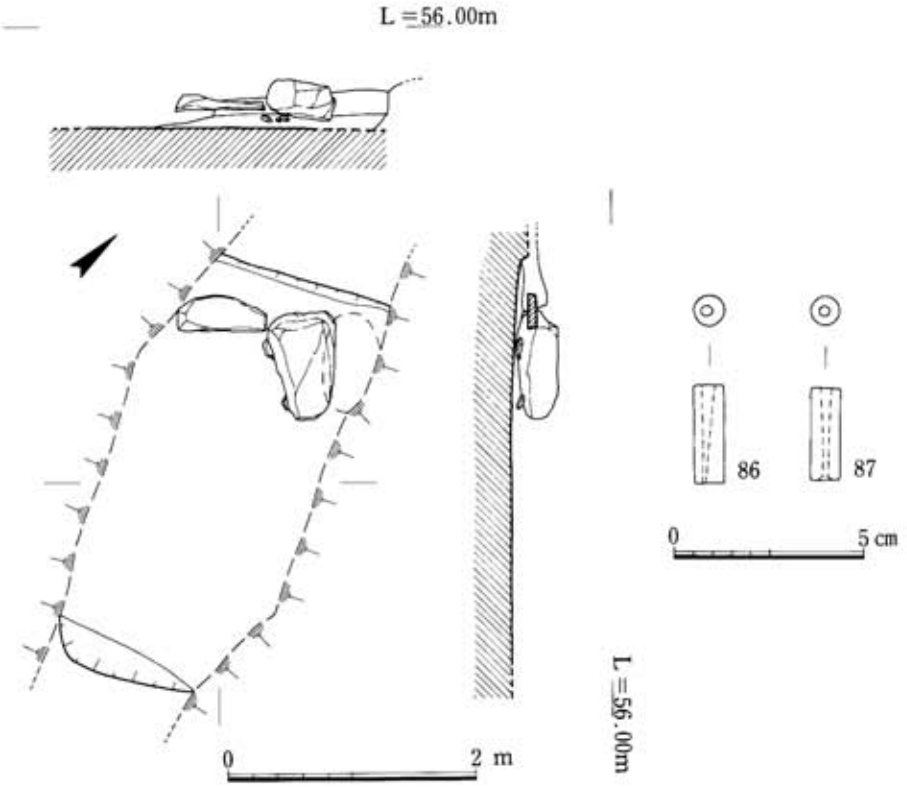


Fig.219　ＳＴ017古墳（1/60）、出土装身具（1/2）

3．石棺墓

(1)　SC020石棺墓

遺構　本遺構はA地点II区の南東端に位置し、主軸方位をN73.0°Eに取る箱式石棺墓である。掘り込みの規模は長さ5.08m、幅2.85m、深さ0.70m を測り、そのプランは長方形であるが、東側部分が若干狭くなる。石棺の内法は長さ3.55m、幅0.93m を測るが、東の小口石は抜き取られている。西の小口及び北側壁は石材を縦に使用しているが、南側壁の中央部分では石材を横に積んでいる。

遺物の出土状況　4個のガラス小玉と3本の鉄鏃が東小口付近より一括して出土している。

遺物　色調は88・89が暗青色、90・91が水色である。92の鉄鏃は平根柳葉式になると考えられる。94は長頸の尖根小形柳葉式、93も同じく長頸鏃であるが茎部に木質と樹皮を残す。

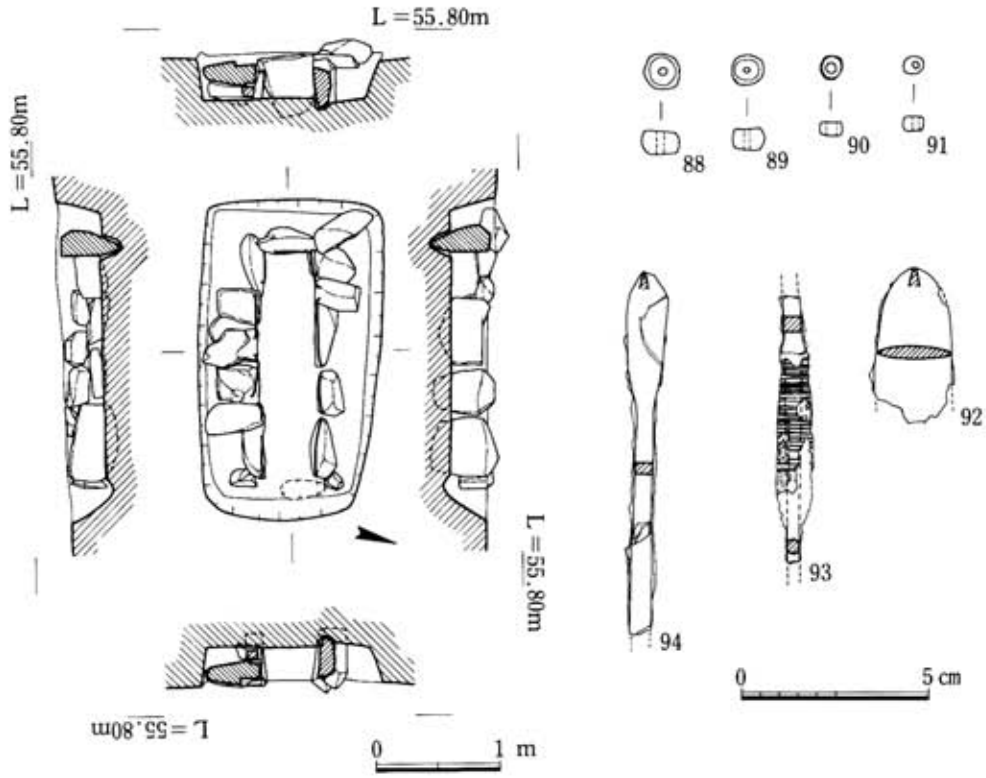


Fig.220　SC020石棺墓（1/60）、出土装身具・鉄器（1/2）

4．土壙墓

(1)　SP001土壙墓

遺構　本遺構はA地点II区の北端に位置し、主軸方位はN49°Eを示す。掘り込みは二段存在

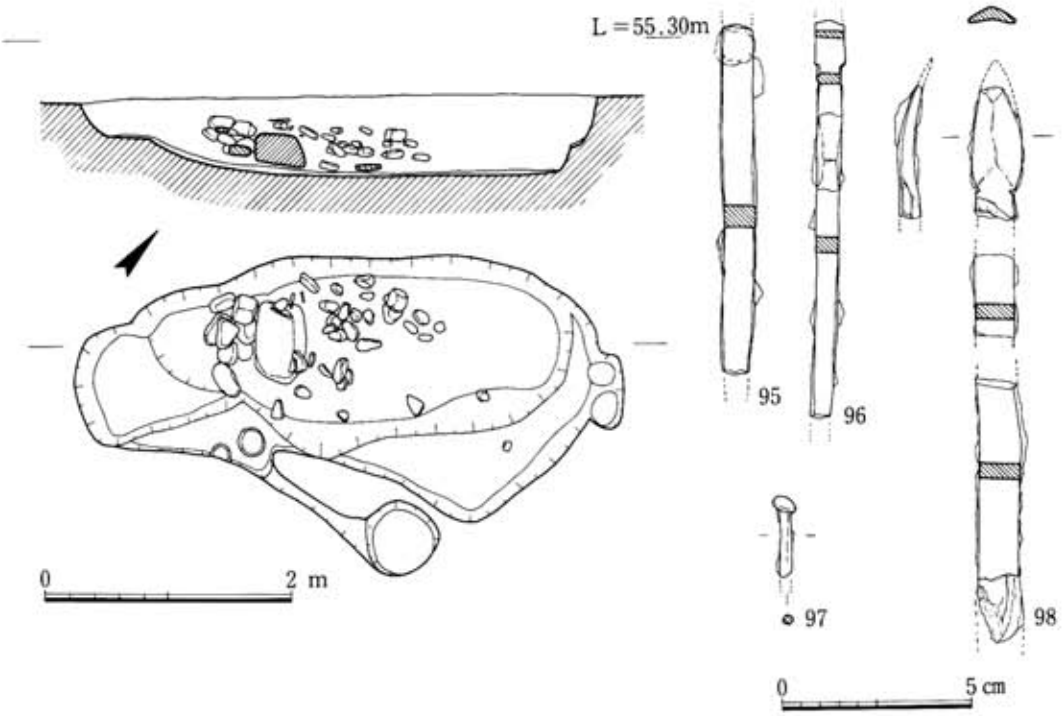


Fig.221　ＳＰ001土壙墓（1/60）、出土鉄器（1/2）

し、外側の掘り込みの規模は長軸4.37m、短軸2.10m、同内側の規模は長軸3.35m、短軸1.43m、深さ0.54m を測る。二段目の掘り込みの西寄りには約60cm程の石が据えられており、周囲には20cm大の礫が約40個ほど散布している。

遺物の出土状況　西側壁付近において浮いた状態で、鉄器が４点出土している。

遺物　96は有茎尖根式の鉄鏃である。97は弓付属金具と考えられる。98は鏡で、身部は緩やかに反り上がり、先端を欠損するものの残存長2.7ｃｍ を測り、上面に鐶を持つ。

(2)　ＳＰ009土壙墓

遺構　本遺構はＢ地点III区の北端に位置し、隅丸長方形のプランを有する土壙墓である。北側半分を削平され、東壁の一部をＳＸ011に切られている。主軸方位はN17.5°Wを示し、その規模は長軸の残存部分2.10m、短軸0.84m、深さ0.43m を測る。

遺物の出土状況　２つの杯身は、床面直上の東壁寄りに据え置かれたような状態で出土したが、それ等とセットとなる杯蓋は、東壁の上部から滑り落ちたような状態で検出された。また鉄器類は108を除いて南西コーナー付近に集中するが、いずれも床面より10cmほど浮いて出土している。

遺物　100と102が須恵器杯身、99と101が須恵器杯蓋である。蓋は天井部から口縁に向けてなだらかなカーブを描き、天井部には約1/2ヘラケズリを施すが、99は手持ち、101は回転と調整に違いが見られる。杯身は口縁内面に、端部の丸く仕上げた短いかえりを持ち、底部には約1/

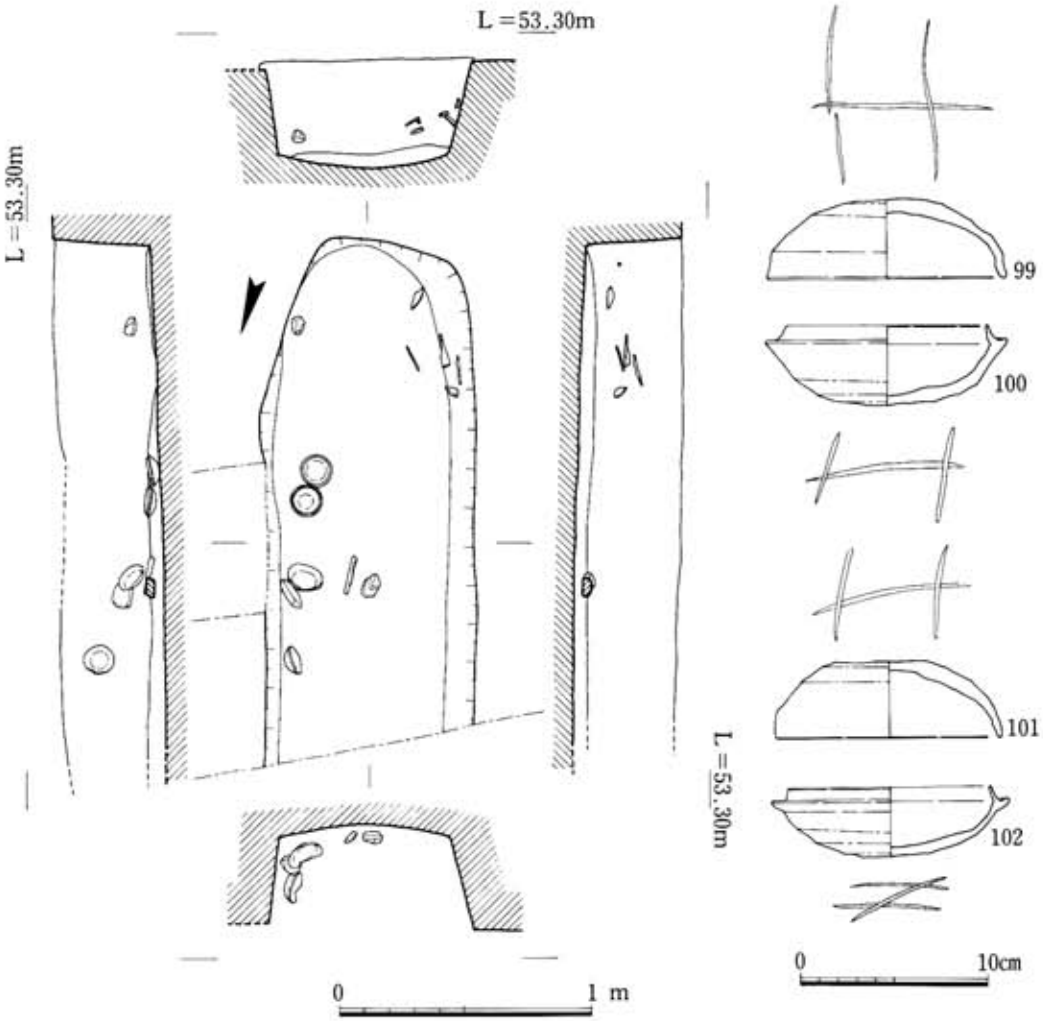


Fig.222　S P009土壙墓（1/30）、出土須恵器（1/4）

2へラケズリを施すが、丸く不安定である。天井部及び底部のへら記号は、102が「≠」である他は、3個体とも「＋」であり、両者の胎土・焼成にも相違が観察できる。

103と104は長頸鏃で、尖根の小形柳葉式であろう。前者の鏃身部断面は片平鏑である。105から107は平根式で、105が斧鑿式、106が椿葉式、107が圭頭式である。

110は全長13.6cmを測る鉇で、茎部に木質部が残存している。身部先端の木質は棺材等が付 着したものであろう。身部と柄は円環状の金具によって固定している。身部は上面に鏑を持ち中頃より緩やかに反り上がる。109も同様に鉇と考えられるが、柄の木質が一部残る。108は、小型有肩式の鉄斧であるが、中空の刃部の中にソケット状の袋部を挿入する特異な構造を持つ。

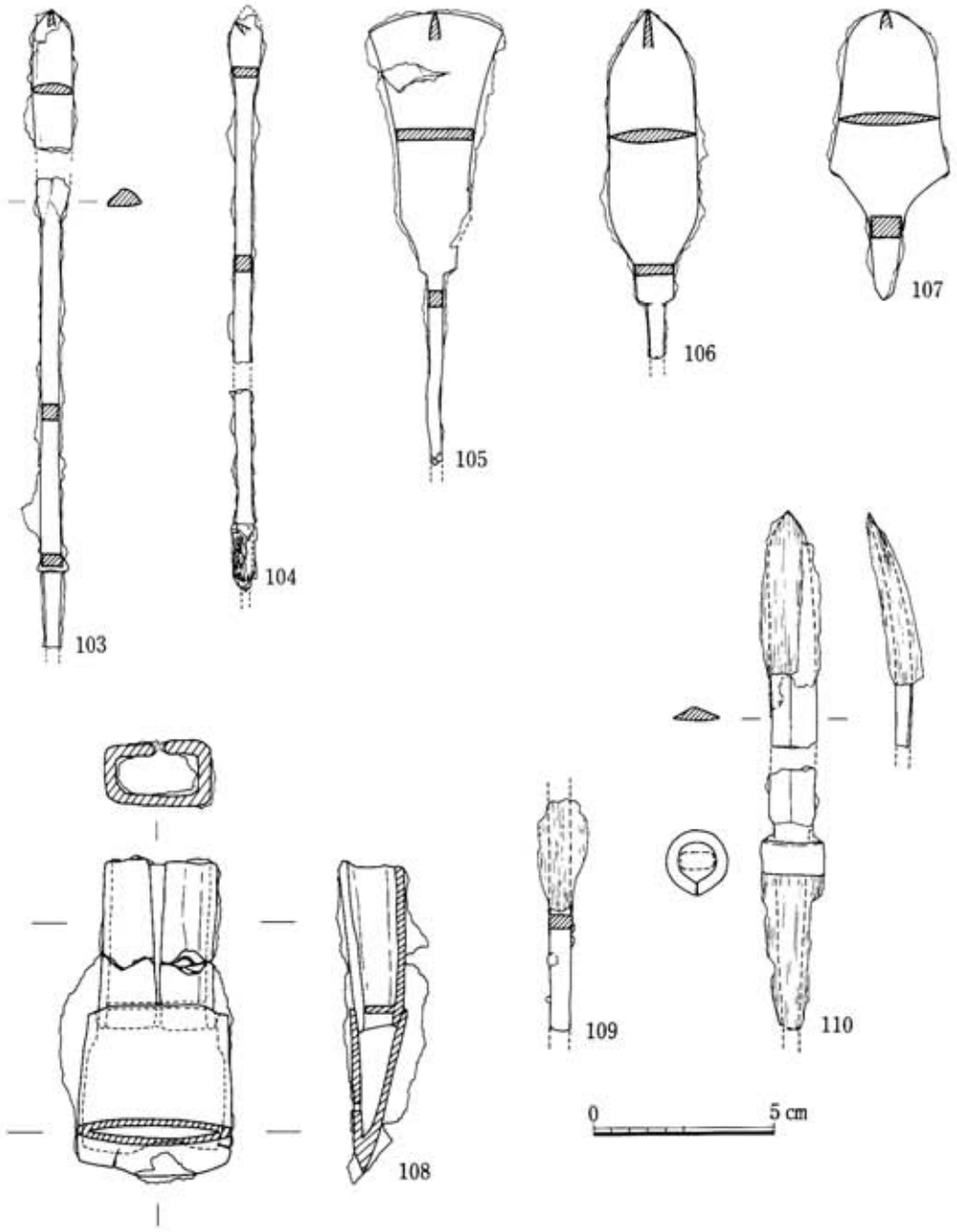


Fig.223　S P009土壙墓出土鉄器（1/2）

袋部は両側から打ち曲げて中央に合わせ目があり、片端(刃部との接合部分)内部に厚さ1.5㎜の中仕切りを有す(図版X線写真参照のこと)。本遺構の時期は、7世紀初頭であろう。

5．土壙

(1) ＳＫ004土壙

遺構 本遺構はＡ地点Ⅱ区の東側に位置し、主軸方位はＮ３°Ｗを示す隅丸長方形の集石土壙である。掘り込みは南側で段を持ち、その規模は長軸3.77m、短軸1.90m、深さ0.49m を測る。集石はその多くが扁平で、埋土の中層に緩やかなカーブをもって船底状に配置されていた。土師器・須恵器の破片が、少量出土している。

(2) ＳＫ012土壙

遺構 本遺構はＢ地点Ⅲ区の南西端に位置し、長軸方位をＮ25.5°Ｗに取る不整円形の土壙である。その中央は東西に通るＳＤ013によって切られるが、規模は長軸2.01m、短軸1.35m、深さ0.27m を測る。

遺物の出土状況 遺物は底面より若干浮いた状態で出土している。

遺物 111と112は、低い高台を貼付した杯身である。111の口縁は直線的に外方へ開くが、112は口唇部が緩やかに外反する。113は須恵器の蓋で、天井部にはヘラケズリ調整を施し、口縁は単純に垂下する。114は、裾部で大きく広がる高杯の脚部。116は土師器の皿で、平坦な底部から口縁が僅かに立ち上がる。117から123は土師器甕の口縁部で、頸部が緩やかに湾曲して口縁部が肥厚するものと、頸部が丸く屈曲するものの２者が存在する。本遺構の時期は、７世紀末～８世紀初頭であろう。

(3) ＳＫ021土壙

遺構 本遺構はＢ地点Ⅳ区の北寄りに位置する、不整円形の土壙である。長軸を北東一南西に取り、その長さは2.45m、短軸は1.60m、深さは0.32m である。西側には２個のピットが存在するが、本土壙に伴うものであるかは不明である。

遺物の出土状況 中央部床面から約10cm浮いた状態で、蓋杯１組と土師器の蓋が出土している。なお、刀子残片は埋土から検出された。

遺物 124は低い円筒状のつまみを有する須恵器の杯蓋で、天井部は丸みを帯び、緩やかに内湾して口縁に至る。口縁内面には短いかえりを持ち、端部は丸く仕上げている。125は高台を貼付する須恵器の杯身で、口縁部がわずかに外反する。底部は回転ヘラケズリの後に回転ナデ調整を施し、高台はやや内側に貼付する。126は須恵器の杯蓋で、天井部は緩やかに内湾し、口縁内面には丸みをおびたかえりを持つ。127の杯蓋は俗に「赤焼き土器」とか「須恵系土師器」と呼ばれるものである。天井部には擬宝珠状のつまみを持ち、丸く内湾して口縁部に至る。口縁内面には端部を丸く仕上げたかえりを有す。なお天井部には、「ㅍ」のヘラ記号が描かれている。128の土師器杯は、丸みを帯びた底部から口縁部に向けて立ち上がる。129は関を持つ平造りの刀子である。本遺構の時期は、７世紀後半と考えられる。

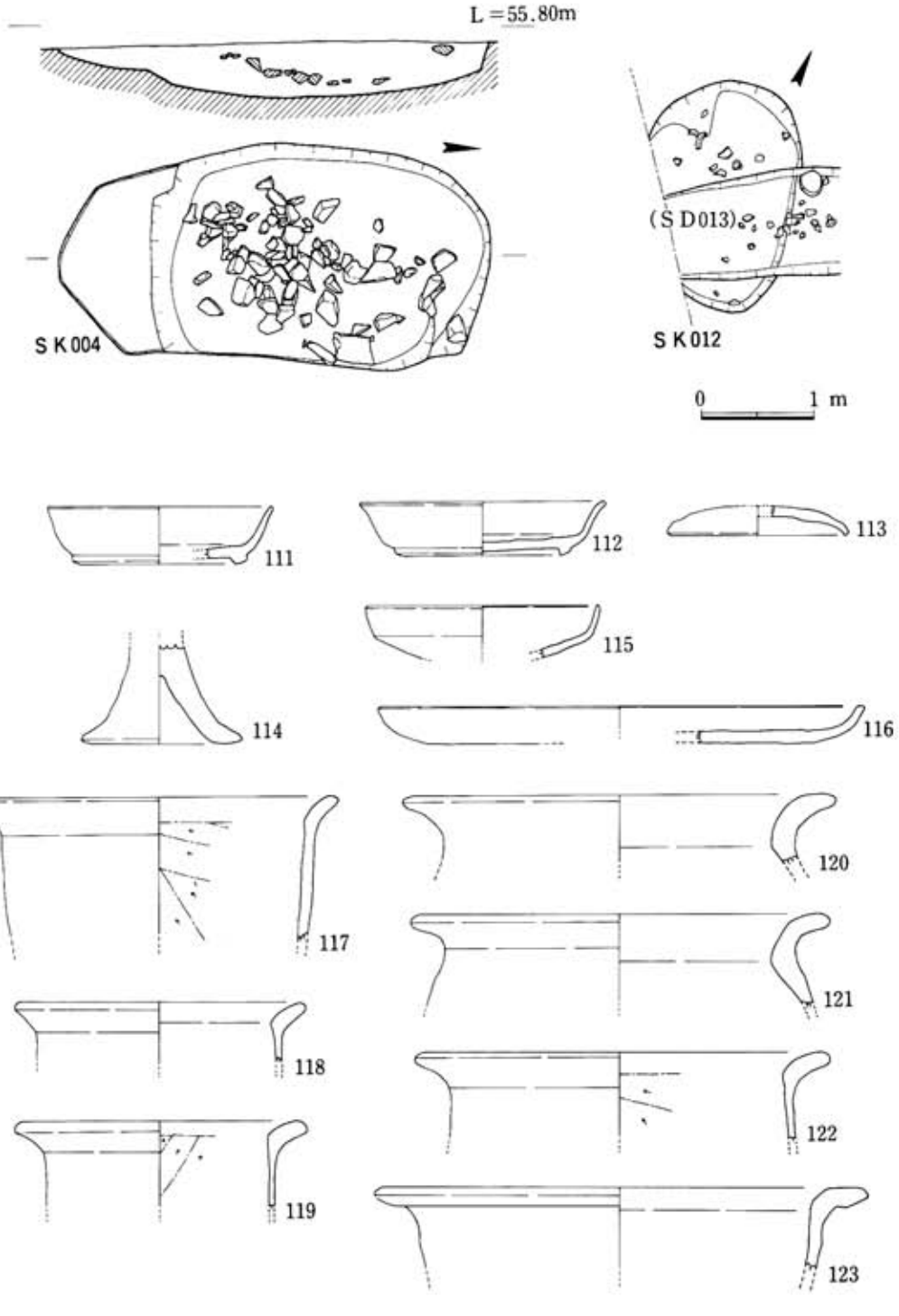


Fig.224　SK004土壙・012土壙（1/60）、
SK012土壙出土須恵器・土師器（1/4）

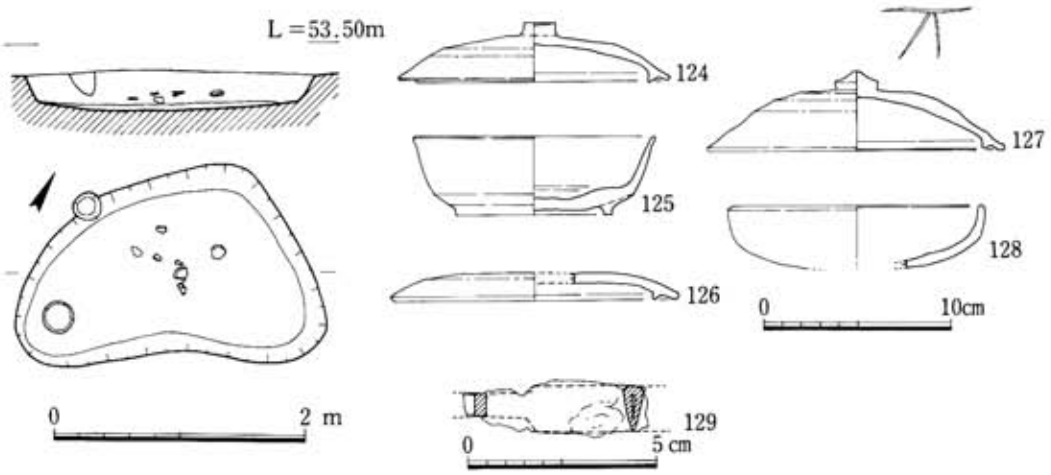


Fig.225　SK021土壙（1/60）、出土須恵器・土師器（1/4）、鉄器（1/2）

6．溝

(1)　SD003A・B溝

遺構　本遺構はA地点II区を南北に縦走する溝跡である。東側のA溝は南境界から約18mの所で消滅するが、西側のB溝は検出距離42.3mを測り、さらに南北へ伸びる。A溝は幅2.20m、深さ0.20m、B溝は幅0.80～2.00m、深さ0.20～0.37mを測り、土層はレンズ状の自然堆積を示す。また、B溝の北端には径約50cm、深さ約15cmの小ピットが約60cmの間隔で16個縦列している。土師器が少量出土したが、図示し得る様な遺物は検出されていない。

(2)　SD007溝

遺構　B地点III区の東寄りに位置し、SB006の南壁を切って北東から南西に伸びる溝状の遺構である。遺構内及び壁際に多くのピットが存在するがその性格は不明である。その規模は長さ5.46m、幅0.50～1.14m、深さ0.24mを測る。土師器が少量出土している。

(3)　SD012溝

遺構　A地点II区のほぼ中央を、東西に走る溝跡である。長さ24.6m、幅0.70～2.70m、深さ約0.30mを測り、土層はレンズ状の自然堆積を示す。土師器が少量出土している。

(4)　SD013溝

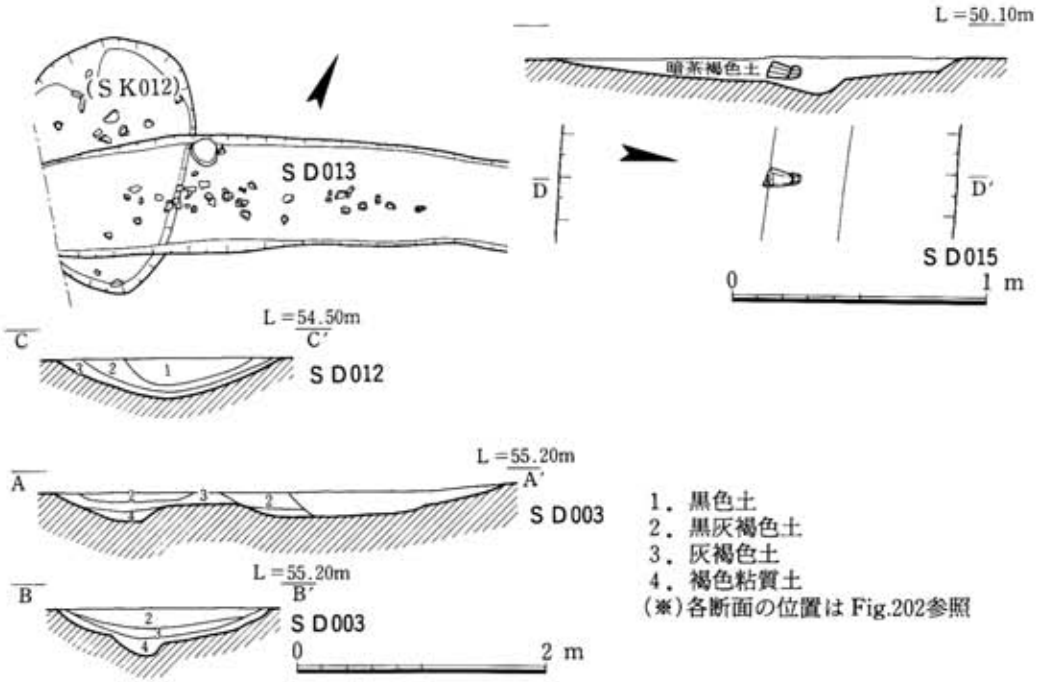
遺構　B地点III区の南端を東西に走る溝跡である。西は調査区外にも伸びると考えられるが、東の延長は削平によって消滅している。現状での規模は長さ4.58m、幅0.69～0.94m、深さ0.21mを測る。

遺物の出土状況　須恵器・土師器片と伴に多数の鉄滓が溝の底面付近において検出された。その総数は141個で総重量は4.6kgである。

遺物　130は須恵器の杯である。高台は、平坦な底部のやや内側に貼付され、体部は外傾して立ち上がり、口唇部を丸く仕上げる。131は内接する高台を持つ須恵器の杯である。132は須恵器の皿で、平坦な底部からわずかに外反する口縁に至る。本遺構の時期はＳＫ012との関係より７世紀末以降である。

(5)　ＳＤ015溝

遺構　Ｂ地点Ｖ区の北端より約８ｍ南下し、東に屈曲する溝状の遺構である。傾斜の緩い外側の掘り込みは、長さ10.5m、幅2.10m を測り、この内部を幅50cm程の小溝が走る。 溝の東側に



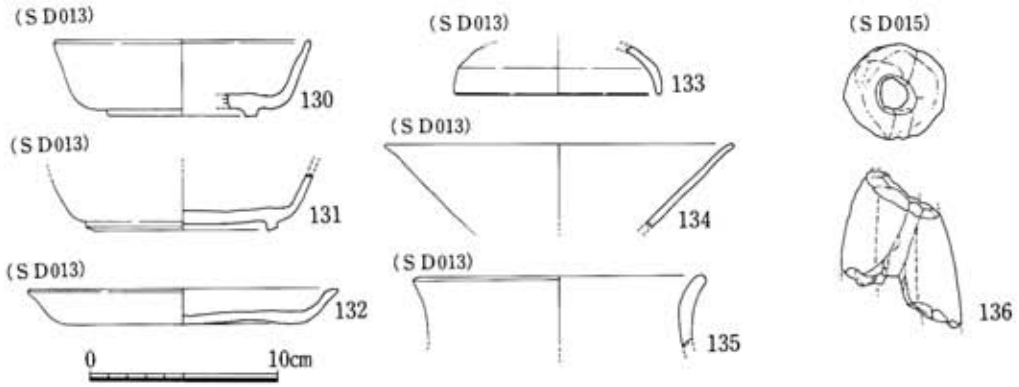


Fig.226　ＳＤ003・012・013溝（1/60）、ＳＤ015溝（１/30）、
ＳＤ013溝出土須恵器・土師器、ＳＤ015溝出土土器（１/４）

は小ピットが分布し、何らかの建物が存在した可能性が有る。なおＳＢ014との前後関係は不明である。

遺物の出土状況　溝の北端の底面よりフイゴ羽口が出土している。

遺物　136は土師質のフイゴ羽口であるが、胎土が粗雑で遺存状態は悪い。遺存する部分の最大幅は8.2cm、孔径は2.1cmを測る。なお鍛冶関連の鉄滓などは古代の遺構に属することから、本遺構もこの時期に含められよう。

7．不明遺構

(1)　ＳＸ005

遺構　本遺構はＡ地点II区の東北端に位置しており。いびつな長方形に張り出しを付けた様なプランを持つ。張り出しの東端が削平されているが、その規模は長さ8.95m、最大幅2.82m、深さ0.29m を測る。遺構の東側に多くのピットが存在するが、組合せは特定できない。

遺物の出土状況　遺構の西端から土師器の破片が出土している。

(2)　ＳＸ008

遺構　本遺構はＡ地点II区の北端に位置する。楕円形のプランを持ち、その規模は長さ2.02m、幅1.45m を測る。

遺物　138は「ハ」字状に開く高足の高台を貼付した須恵器の杯である。

(3)　ＳＸ009

遺構　本遺構は、Ａ地点II区の南端に位置する「コ」の字状の掘り込みである。その規模は南北約5.50m、東西5.00m を測る。

遺物　140は丸底の土師器甕であり、他には尖根の鉄鏃が３点出土している。

(4)　ＳＸ011

遺構　Ｂ地点III区の北端に位置し、ＳＰ009土壙墓の東壁を切って構築されている。東西に連なる２個の土壙状の掘り込みよりなり、東側の掘り込みは径１ m、深さ20cmの円形プラン、西側の掘り込みは長径1.60m、短径60cm、深さ50cmの楕円形プランを持つ。その埋土には焼土、炭、鉄滓を多量に含み、鍛冶に関連する遺構と考えられる。なおこの南側にも径40cm、深さ７cmの小さな焼土ブロックが存在する。

(5)　ＳＸ016

遺構　Ｂ地点Ｖ区の北端、ＳＤ015溝の東側に位置する。直径25cm、深さ25cmのピットの底に小型の土師器甕を据え、土師器の杯で蓋をしている。

遺物　141は丸底の土師器甕である。胴部は半球形を呈し、頸部は緩くくびれ、口縁は外方へ短く開く。なお胴部には黒斑が有る。142は土師器の杯で、平坦な底部から体部は外方へ開きつつ立ち上がる。143は土師器の蓋で、胎土が緻密である。

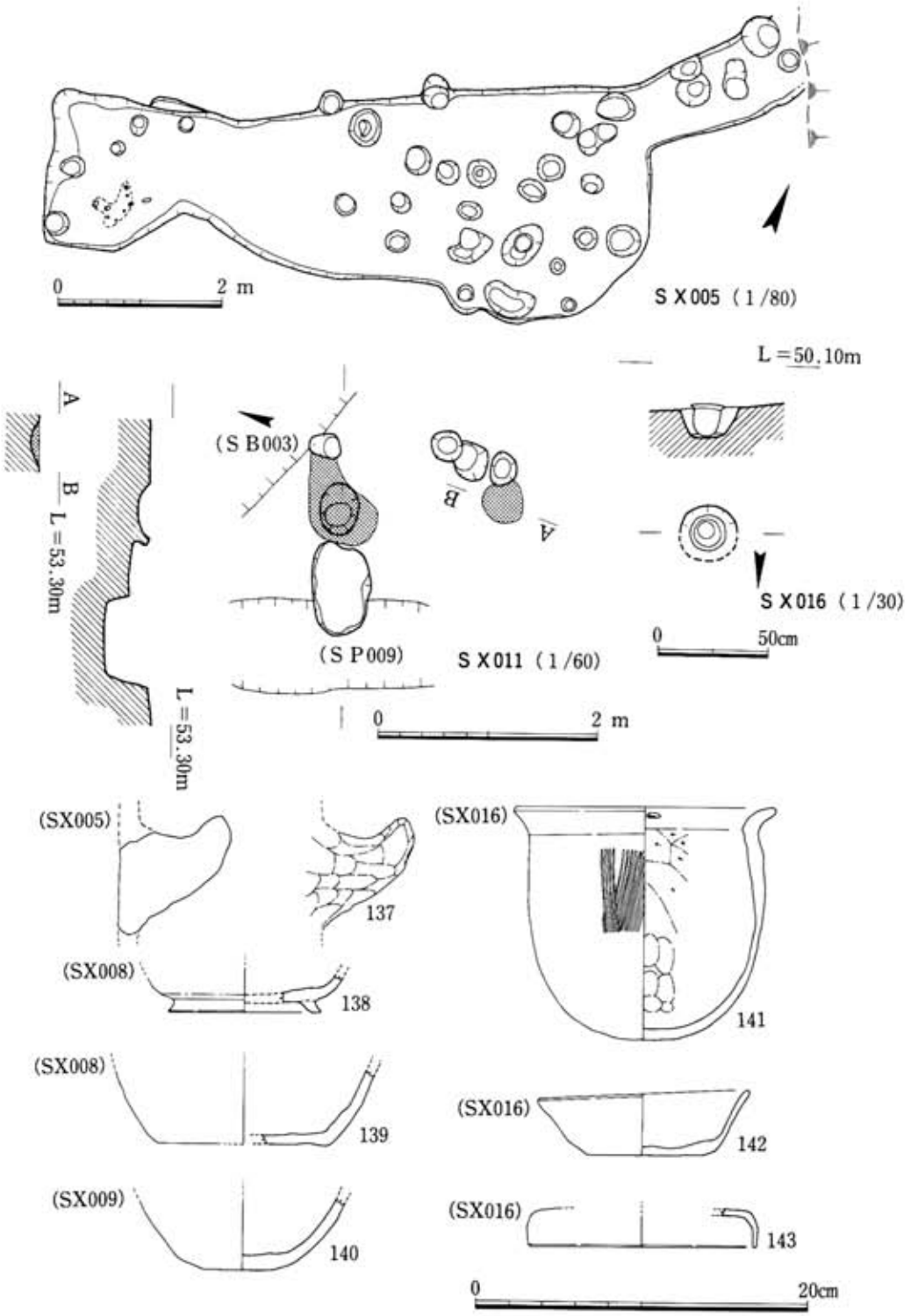


Fig.227　不明遺構S X005(1/80)・011(1/60)・016(1/30)、出土須恵器・土師器(1/4)

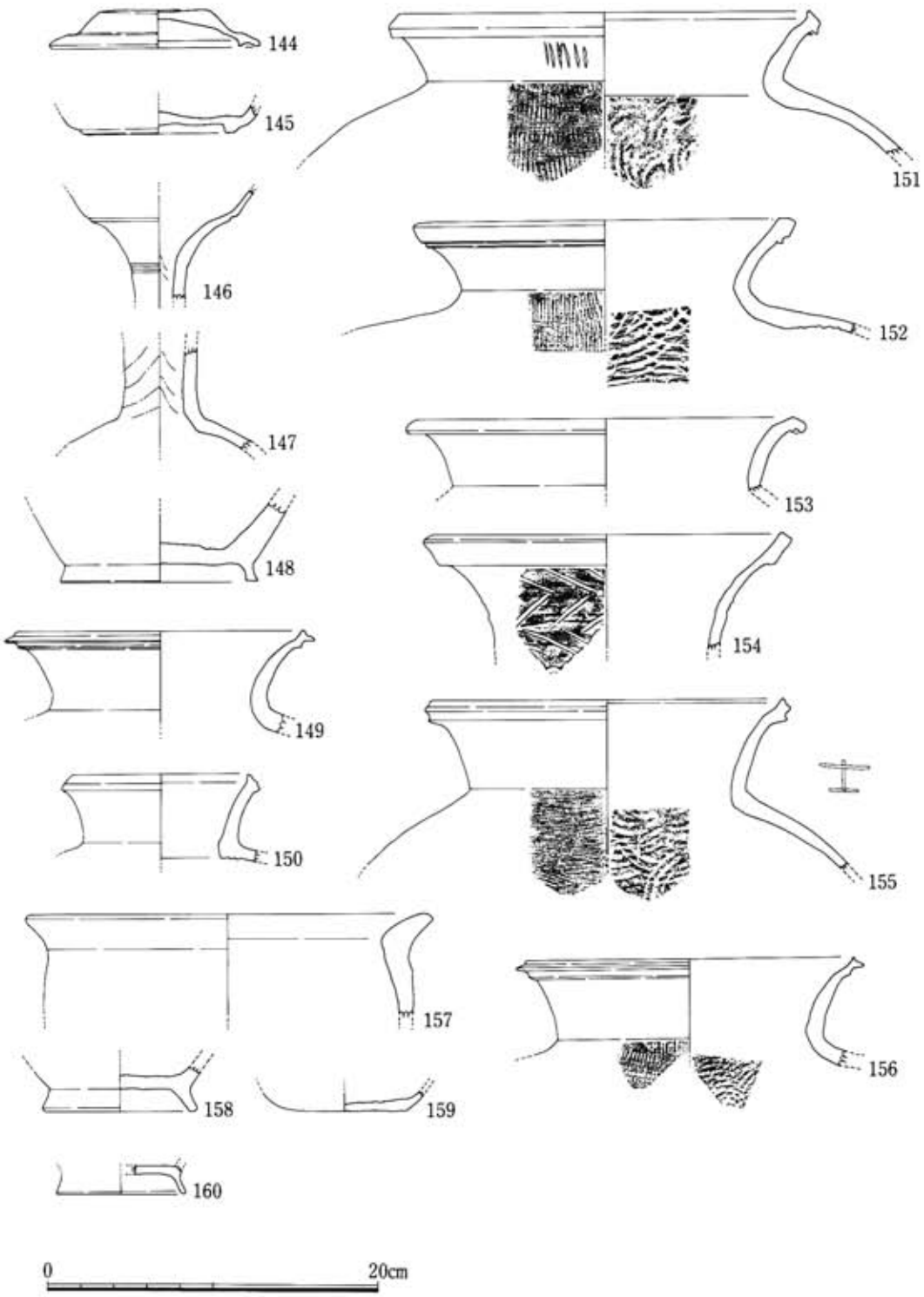


Fig.228　遺構外出土須恵器・土師器（1/4）

8．遺構外の出土遺物

144は須恵器の杯蓋で、平坦な天井部から外方へ屈曲しながら口縁に至る。口縁内面には短いかえりを持つ。145から156はＳＴ016に伴う可能性が高い。145は平坦な底部に低い高台を持つ杯身である。146は須恵器の甕で、頸部は細く締まり口縁は大きく開く。147と148は胎土・焼成から同一個体の長頸瓶と考えられる。肩部は強く張り、底部には「ハ」の字状の高台を貼付する。149・151～156は須恵器甕の口頸部で、頸部は「く」の字状に屈曲して口縁は外方へ開く。またその多くは、口唇部に断面三角形の突帯を持つ。なお、155の頸部外面には「士」のヘラ記号が有る。

IV．時期不明の遺構

(1)　ＳＢ008掘立柱建物跡

遺構　本遺構は、Ｂ地点Ⅲ区の南東に位置する。主軸方位はＮ66°Ｅを示し、長軸2.85m、短軸2.00m を測る１間×３間の掘立柱建物跡と考えられる。遺物は検出されず、所属時期は不明である。

V．小　　結

今回の調査で荻野遺跡が、弥生期から古代(奈良)期までの重複遺跡であることが明確となったわけだが、その立地環境から、周辺の柚比遺跡群との関連性を考えて行かねばなるまい。

弥生時代前期から出発すると見られる本遺跡は、同期後半～末に位置付けられる４基の甕棺墓の検出によって、当初は墓域であったことを知り得た。しかしこれと直接的に関係する生活圏は調査範囲以外に求めねばならず、周辺での当該期集落遺跡としては八ツ並遺跡、岸田遺跡があるものの、ともに本遺跡とは距離・地形的にやや隔絶した位置に存在する。いずれにせよ、弥生前期末から急増するとされる柚比丘陵上の甕棺墓群の中では、比較的早い時期の類例（特にＳＪ007）として把えられよう。

弥生時代中期後半になると、２軒の住居跡の存在によって、集落の発生が想察できる。この際、東接する安永田遺跡との関係を当然考えねばならないが、現時点では時代相と住居規模に共通性を窺い知るのみで、この周辺有数の集落の構成単位にＳＢ002・010が含まれるものかどうか、即断はできない。

古墳期に至って墓域としての性格に再度変化するこの遺跡は、冒頭に触れたように首長層墳墓と見做されている庚申堂塚古墳に近接しており、ほぼ同時期（６世紀中頃）の成立と考えら

れるＳＴ016との間に古代社会下の階層的関係が存在するものか、今後、特に再考を要する課題を残している。

７世紀末～８世紀になると再び村落的景観が形成され、溝・鍛冶関連遺構もこれに付随するものと思われるが、安永田遺跡北西辺で集中して検出された同時期の12軒の住居跡でも、鉄器・鉄滓が多量に出土している。鳥栖市教育委員会の報告では「鉄ならびに鉄器製造に関連する集落」との見解が示されており、これと一連の存在として本遺跡の住居跡を規定できるかどうか。今後、住居跡の集中する丘陵の東・北縁辺（Ｂ－Ⅰ・Ⅲ・Ⅴの各区）から安永田遺跡西辺までの空間での集落の広がりが明瞭とされるまで、結論は保留すべきであろう。

〈参考文献〉

１．藤瀬禎博、石橋新次他

『大久保遺跡 — 柚比遺跡群範囲確認調査第１年次調査報告書』

（鳥栖市教育委員会『鳥栖市文化財調査報告書』第６集）1980．３

２．藤瀬禎博、石橋新次、山田正他

『安永田遺跡 — 佐賀県鳥栖市に所在する安永田遺跡銅鐸鋳型出土地点の調査 —』

（鳥栖市教育委員会『鳥栖市文化財調査報告書』第25集）1985．３

Tab.32　土器一覧表

（　）は推定

Fig-図番号	出土地点	器　種	法量(cm)	色　調	砂粒(mm)	焼成	形態の特徴	調整の特徴	県遺物登録番号	備　考
206-1	OGN-B SB002	高　杯（弥生土器）	口径 (27.6)	褐　色	0.5	良好	T字状の平坦口縁から半球状の杯部にいたる。	内外面とも朱彩を施す。	88010868	1/5残存
-2	OGN-B SB002	壺　？（弥生土器）	口径 (22.2)	明褐色	1～4	不良	やや下方へ垂れ下るT字状の平坦口縁をもつ。	内外面とも朱彩を施す。	89000584	口縁部1/8残存
-3	OGN-B SB002	壺（弥生土器）		褐　色	1	良好	頸部には断面三角形の突帯を持ち、肩部が強く張る。	外面に朱彩を施す。	89000625	肩部1/8残存
-4	OGN-B SB002	甕（弥生土器）	口径 (30.8)	褐　色	1～3	不良	頸部には断面三角形の突帯を持ち。口縁は外側へ短く立ち上がる。	摩滅のため調整不明。	89000583	口縁部1/8残存
-5	OGN-B SB002	甕（弥生土器）	口径 (29.0) 底径 (8.0)	褐　色	2～3	不良	口縁は外傾しつつ、短く立ち上がる。	摩滅のため調整不明。	89000624	口縁部1/8残存
-6	OGN-B SB002	甕（弥生土器）	口径 (23.8)	褐　色	2～3	良好	頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は外側へ短く立ち上がる。	摩滅のため調整不明。	89000620	口縁部1/4残存
-7	OGN-B SB002	甕（弥生土器）	口径 (23.0)	明褐色	1～3	不良	頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は外側へ短く立ち上がる。	摩滅のため調整不明。	89000582	口縁部1/8残存
-8	OGN-B SB002	甕（弥生土器）	口径 (28.2)	明褐色	1～4	不良	頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は外側へ短く立ち上がる。	摩滅のため調整不明。	89000581	口縁部1/8残存
-9	OGN-B SB002	甕（弥生土器）	口径 (37.2)	明褐色	1～3	良好	頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は外側へ短く立ち上がる。また、口唇端部はやや肥厚する。	摩滅のため調整不明。	89000586	口縁部1/4残存
-10	OGN-B SB002	壺（弥生土器）	口径 (15.8)	褐　色	2～3	良好	頸部は緩く「く」の字に屈曲し、口縁部は平坦口縁となり、一孔を有する。	摩滅のため調整不明。	89000622	口縁部1/6残存
-11	OGN-B SB002	壺（弥生土器）	口径 (16.0)	褐　色	2～3	良好	頸部は緩く「く」の字に屈曲し、口縁部は平坦口縁となり、一孔を有する。	摩滅のため調整不明。	89000621	口縁部1/8残存
-12	OGN-B SB002	甕（弥生土器）	口径 (20.7) 底径 (8.2)	褐　色	3～4	良好	頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は外側へ短く立ち上がる。	摩滅のため調整不明。	89000626	口縁部1/2 底部1/5 残存
-13	OGN-B SB002	甕（弥生土器）	底径 (8.0)	褐　色	1～2	不良	平底。	摩滅のため調整不明。	89000618	底部1/2残存
-14	OGN-B SB002	甕（弥生土器）	底径 (8.1)	明褐色	1	良好	平底。	摩滅のため調整不明。	88010866	底部2/3残存
-15	OGN-B SB002	甕　？（弥生土器）	底径 (9.1)	褐　色	0.5	良好	平底。	摩滅のため調整不明。	88010867	底部1/4残存

（ ）は推定

Fig.図番号	出土地点	器種	法量(cm)	色調	砂粒(mm)	焼成	形態の特徴	調整の特徴	県遺物登録番号	備考
206-16	OGN-B SB002	甕(弥生土器)	底径 (10.2)	褐色	1～4	良好	平底。	摩滅のため調整不明。	89000585	底部1/8残存
-17	OGN-B SB002	甕(弥生土器)	底径 (10.8)	褐色	2～3	不良	平底。	摩滅のため調整不明。	89000612	底部1/4残存
-18	OGN-B SB010	壺(弥生土器)	口径 (17.6)	明褐色	0.5	良好	頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は外側へ短く立ち上がる。	内外面とも朱彩を施す。	89000138	口縁部1/8残存
-19	OGN-B SB010	壺(弥生土器)	口径 (6.0)	明褐色	1	良好	外側へ開く水平口縁。	摩滅のため調整不明。	89000592	口縁部1/8残存
-20	OGN-B SB010	甕(弥生土器)	口径 (25.8)	明褐色	1～3	良好	頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は外側へ短く立ち上がる。	摩滅のため調整不明。	89000591	口縁部1/8残存
-21	OGN-B SB010	甕(弥生土器)	口径 (31.6)	暗褐色	1～4	良好	頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部はほぼ水平に開く。	頸部以下は縦位の方向の刷毛目調整。	89000590	口縁部1/4残存
-22	OGN-B SB010	支脚(弥生土器)	口径 (5.5) 器高 (12.7) 底径 7.3	茶褐色	1～3	良好	厚手でやや下方に広がる。	口縁部は指頭で整えている。	89000589	口縁一部欠損
-23	OGN-B SB010	甕(弥生土器)	底径 (11.0)	明褐色	1～3	良好	平底。	摩滅のため調整不明。	89000587	底部1/8残存
-24	OGN-B SB010	甕(弥生土器)	底径 (10.4)	明褐色	1～4	良好	底部中央は、若干上げ底気味になる。	摩滅のため調整不明。	89000588	底部のみ残存
209-25	OGN-B SJ006	甕棺(弥生土器)	口径 (62.0)	褐色	微量	良好	口縁部は緩やかに外反し、口唇端部は狭い平坦部。頸部のくびれは弱く、そのまま胴部へ移行する。	口縁部はヨコナデ、以下はナデ調整。	88005880	口縁～胴部1/3残存
-26	OGN-B SJ006	甕棺(弥生土器)	口径 (54.8)	褐色	1～2	良好	口縁部は緩やかに外反し、口唇は平坦となる。頸部のくびれは弱く、そのまま胴部へ移行する。	口唇に2段の刻み目、頸部と胴下半部に2本1単位の平行沈線。口縁部ヨコナデ、胴下半部刷毛目。	89000327	底部欠損
-27	OGN-B SJ006	甕棺(弥生土器)	口径 (46.4)	茶褐色	微量	良好	口縁部は逆L字形で、外傾する。胴上部に刻み目を施した1条の突帯をめぐらす。	口縁部はヨコナデ、以下はナデ調整。	88005881	口縁1/8残存
-28	OGN-B SJ011	甕棺(弥生土器)	口径 (58.8)	暗褐色	1～2	良好	口縁は緩やかに外反し、口唇は平坦となる。頸部のくびれは弱く、そのまま胴部へ移行する。	口唇はヨコナデ後2段の刻み目、頸部と胴下半部に2本1単位の平行沈線。胴部はナデ調整。	89000711	口縁～胴部1/5残存
-29	OGN-B SJ011	甕棺(弥生土器)	底径 (10.4)	褐色	1～2	良好	胴上部に1段の突帯をめぐらし、以下、やや下膨れのプロポーション。	突帯部はヨコナデ、以下はナデ調整。	89000329	胴部～底部1/3残存
-30	OGN-B SJ007	甕棺(弥生土器)	口径 (44.5)	にぶい黄褐色	1～3	やや軟質	口縁部は緩やかに外反し、外傾する口唇に至る。肩部には張りを持ち、下膨らみのプロポーション。	口唇にはヨコナデ後、刻みを施し、頸部と胴上部に1条ずつ沈線をめぐらす。	88005878	胴部1/2底部欠損

（ ）は推定

Fig-図番号	出土地点	器種	法量(cm)	色調	砂粒(mm)	焼成	形態の特徴	調整の特徴	遺物登録番号	備考
209-31	OGN-B SJ007	甕棺 (弥生土器)	口径 51.0 器高 56.7 底径 14.4	にぶい黄褐色	1～8	やや軟質	肩部以下が強く張り、下膨らみのプロポーション。頸部は内傾して立ち上がり、口縁は緩やかに外反。	口唇部はヨコナデ後刻み目。頸部の上下には沈線がめぐる。胴部は刷毛目後ナデ調整。胴下部に一孔。	89000326	肩部～胴部一部欠損
-32	OGN-B SJ010	甕棺(鉢) (弥生土器)	口径 (28.0)	褐色	1～5	良好	口縁は緩やかに外反し端部は丸くおさまる。	口唇部ヨコナデ、胴部ナデ調整。	89000594	口縁～胴部1/3残存
-33	OGN-B SJ010	甕棺(壺) (弥生土器)	底径 9.0	にぶい黄褐色	4.5	やや軟質	肩部から体部中央にかけて強く張る。ソロバン玉形の器体。底部は上底。	胴部ナデ調整。底部内面に指頭よる圧痕あり。	91000082	口縁部欠損 体部1/2 残存
210-34	OGN-B SB004	壺 (弥生土器)		茶褐色	0.5	良好	肩部は強く張る。	肩部に7本1単位の櫛描横線文をめぐらす。	88010864	胴部1/6 残存
-35	OGN-B SB004	高杯 (弥生土器)	口径 (27.8)	褐色	微量	良好	杯部は下半において稜を持ち、口唇にむけて、外湾しつつ外方へ開く。端部は丸く仕上げる。	稜線以高は緩位のヘラミガキ。	88010870	杯部1/6 残存
-36	OGN-B 黒色土	甕 (弥生土器)	口径 (13.2)	暗茶褐色	3～5	不良	頸部は「く」字に屈曲し、口縁は外方へ短く立ち上がる。	摩滅のため調整不明。	89000623	口縁～肩部1/6残存
-37	OGN-A	高杯 (弥生土器)	底径 (13.2)	褐色	1	良好	「ハ」字状に開く脚部。1孔を有す。	外面は刷毛目調整後ヘラミガキ整形。内面は刷毛目調整。	89000632	脚部1/6 残存
-38	OGN-A SX008	甕 (弥生土器)	口径 (28.6)	明褐色	1～2	良好	口唇部は平坦となり、外面に刻み目を施す。肩部には刻み目を施した突帯をめぐらす。	口唇ヨコナデ、以下は刷毛目調整後ナデ。	89000702	口縁部1/8 残存
-39	OGN-A SX008	甕 (弥生土器)	口径 (30.0)	褐色	1～3	良好	口唇部はやや外傾する平坦面となり、外面に刻み目を施す。	口唇ヨコナデ、以下は刷毛目調整後ナデ。	89000703	口縁部1/8 残存
-40	OGN-A SX008	甕棺 (弥生土器)		褐色	1～2	良好	T字状の口縁。	摩滅のため調整不明。	89000704	破片資料
-41	OGN-A SX008	甕棺 (弥生土器)		褐色	1～3	良好	断面三角形の突帯を持つ。	摩滅のため調整不明。	89000706	破片資料
-42	OGN-A SX008	甕棺 (弥生土器)		褐色	1～3	良好	断面三角形の突帯を持つ。	摩滅のため調整不明。	89000705	破片資料
-43	OGN-A SX008	甕棺 (弥生土器)	口径 75.0	褐色	1	良好	T字状の口縁外面には刻み目を施す。	口縁部ヨコナデ調整。	89000139	口縁部1/8 残存
-44	OGN-B SB003 覆土	甕棺 (弥生土器)	口径 (54.0)	明褐色	1～3	良好	頸部は「く」の字に屈曲し、口縁は外方へ短く立ち上がる。	口縁部ヨコナデ、以下はナデ調整。	89000330	口縁～胴部1/8残存
211-45	OGN-B SB001	杯身 (須恵器)	口径 (13.8) 器高 (4.4) 底径 (8.4)	灰色	0.5	良好	外接する高台を持ち、杯部は口縁付近で緩やかに外反し、口唇端部は丸く仕上げる。	口縁部ヨコナデ、杯内面は不定方向のナデ調整。	91000076	口縁部3/4 欠損

（ ）推定

Fig-図番号	出土地点	器種	法量(cm)	色調	砂粒(mm)	焼成	形態の特徴	調整の特徴	県遺物登録番号	備考
212-46	OGN-B SB003	杯蓋（須恵器）	口径(13.8) 器高(1.8) 天井径(8.2)	明灰色	0.5	良好	水平な天井部から口縁にかけて緩やかに湾曲し、口縁端部は垂直に下にさがる。	天井部は回転ヘラケズリ。口縁付近はヨコナデ調整。	91000077	3/4残存 つまみ欠損
-47	OGN-B SB003	鉢（土師器）	口径 (19.4)	赤褐色	1～2	良好	半球状の胴部から、緩やかに屈曲し外反する短い口縁に至る。口唇は丸く仕上げる。	口縁ヨコナデ、外面ナデ調整、内面ヘラケズリ調整。	88010850	口縁～胴部1/6残存
213-48	OGN-B SB004	甕（土師器）	口径 (18.4)	暗茶褐色	1	良好	頸部は丸く屈曲し外反する口縁に至る。口唇は丸く仕上げる。	口縁ヨコナデ調整。	88010860	口縁～肩部1/6残存
-49	OGN-B SB004	甕（土師器）	口径 (18.9)	明褐色	0.5	良好	頸部は丸く屈曲し外反する口縁に至る。口唇は丸く仕上げる。	口縁ヨコナデ、外面ナデ調整、内面ヘラケズリ調整。	88010859	口縁部1/8残存
-50	OGN-B SB004	甕（土師器）	口径 (20.5)	明茶褐色	1～2	良好	頸部は丸く屈曲し外反する口縁に至る。口唇は丸く仕上げる。	口縁ヨコナデ、内外面ナデ調整。	88010851	口縁～肩部1/6残存
-51	OGN-B SB004	鉢（土師器）	口径 (9.2)	明茶褐色	1	良好	頸部で緩く屈曲し、口唇端部は丸く仕上げる。	口縁ヨコナデ、外面ナデ調整、内面ヘラケズリ調整。	88010858	口縁～胴部1/6残存
-56	OGN-B SB005	蓋（須恵器）	口径 (9.0)	灰色	1	良好	天井部から僅かに内湾しつつ口縁部に至る。口唇には丸みを帯びた短いかえりを持つ。	天井部回転ヘラケズリ。口縁はヨコナデ調整。	88010854	1/5残存
-57	OGN-B SB005	蓋（須恵器）	口径 (8.0)	灰色	0.5	良好	天井部と体部の境に稜を持つ。口唇には丸みを帯びた短いかえりを持つ。	天井部回転ヘラケズリ。口縁はヨコナデ調整。	88010853	1/4残存
-58	OGN-B SB005	鉢（土師器）	口径 (13.3)	茶褐色	0.5	良好	頸部で緩く屈曲し、口唇端部は丸く仕上げる。	口縁ヨコナデ、内外面ナデ調整。	88010852	口縁部1/6残存
-59	OGN-B	皿（土師器）		明茶褐色	微量	良好	扁平な底部。	内外面とも、不定方向の刷毛目調整。	88010869	底部のみ残存
216-60	OGN-B SB014	杯蓋（須恵器）	口径 15.1 器高 2.7 天井径 8.8	灰褐色	0.5	良好	平坦な天井部には擬宝珠の摘みを持ち、体部で屈曲し直線的に口縁に至る。端部は短く垂直に下がる。	天井部は回転ヘラケズリの後ナデ,口縁付近はヨコナデ,体部内面は不定方向のナデ。	88010862	1/3欠損
-61	OGN-B SB014	杯（土師器）	口径 15.0 器高 3.5 底径 8.0	明茶褐色	微量	良好	扁平な器形、底部から緩やかに湾曲し、口縁はほぼ垂直に立ち上がる。口唇は丸く仕上げる。	内面ヘラミガキ調整。外面摩滅のため調整不明。	88010863	口縁一部欠損
-62	OGN-B SB014	鉢（土師器）	口径 (25.8)	茶褐色	1	良好	外湾しつつ口縁に至り、口唇は肥厚する。	口縁ヨコナデ、外面刷毛目調整、内面ヘラケズリ調整。	88010865	口縁部1/6残存
218-63	OGN-A ST016	甕（須恵器）	口径 (11.0)	赤褐色	1	良好	口縁部は二段に屈曲して、口唇にいたる。	口縁外面には櫛描波状文をめぐらす。	89000633	口縁部1/3残存
-64	OGN-A ST016	高杯（須恵器）	底径 (9.3)	暗灰色	1	良好	脚部は短く「ハ」の字状に開き、端部は斜め下方に屈曲する。	杯底部外面にはカキメ。内面は不定方向のナデ調整。	89000627	杯部欠損

（ ）推定

Fig-図番号	出土地点	器種	法量(cm)	色調	砂粒(mm)	焼成	形態の特徴	調整の特徴	県遺物登録番号	備考
218-65	OGN-A ST016	甕（土師器）	口径（15.5）	褐色	1～2	良好	頸部は「く」の字に屈曲し、短く外反する口縁に至る。口唇端部は丸く仕上げる。	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ調整。	89000634	口縁～胴部1/6残存
-66	OGN-A ST016	壺（須恵器）	口径（34.6）	灰褐色	1～2	良好	大きく外反する口縁。口唇外面を肥厚させ稜を造り出す。	口縁外面に2段の櫛描文をめぐらす。	89000631	口縁部1/8残存
-67	OGN-A ST016	提瓶（須恵器）		暗灰色	微量	良好	輪状の把手を胴部に持つ。	内面は同心円文、外面は平行タタキメ。	89000628	胴部1/8残存
222-99	OGN-B SP009	杯蓋（須恵器）	口径（12.6）器高（ 4.1）	灰色	1	良好	天井部から口縁に向けて、なだらかなカーブを描く。口唇部は丸く仕上げる。	天井部手持ちヘラケズリ（約1/2）。天井部内面不定方向のナデ。他はヨコナデ調整。	89000614	口縁部1/4欠損ヘラ記号有
-100	OGN-B SP009	杯身（須恵器）	口径（10.7）器高（ 4.2）	暗灰色	1	良好	たちあがりは短く内傾し、端部は丸く仕上げている。底部は丸く不安定である。	底部外面回転ヘラケズリ（約1/2）。底部内面不定方向のナデ。他はヨコナド調整。	89000616	口縁部1/8欠損ヘラ記号有
-101	OGN-B SP009	杯蓋（須恵器）	口径（11.9）器高（ 4.1）	灰色	1	良好	天井部から口縁に向けて、なだらかなカーブを描く。口唇部は丸く仕上げる。	天井部回転ヘラケズリ（約1/2）。天井部内面不定方向ナデ。他はヨコナデ調整。	89000615	口縁部1/8欠損ヘラ記号有
-102	OGN-B SP009	杯身（須恵器）	口径 10.7 器高 3.7	灰色	1	良好	たちあがりは短く内傾し、端部は丸く仕上げている。底部は丸く不安定である。	底部外面回転ヘラケズリ（約1/2）。底部内面不定方向のナデ。他はヨコナデ調整。	89000617	完形ヘラ記号有
224-111	OGN-B SK012	杯身（須恵器）	口径（13.2）器高（ 3.6）高台径(8.4)	灰色	1	良好	内接する高台を持つ。底部は平坦で、口縁に向けて外傾し、口唇は丸く仕上げる。	ヨコナデ調整。	89000155	1/4残存
-112	OGN-B SK012	杯身（須恵器）	口径（14.0）器高（ 3.2）高台径10.2	灰色	1	良好	内接する高台を持つ。底部は平坦で、口縁端部で僅かに外反する。口唇は丸く仕上げる。	ヨコナデ調整。	89000146	1/2残存
-113	OGN-B SK012	蓋（須恵器）	口径（10.6）器高（ 1.6）	灰色	1	良好	平坦な天井部から緩やかに内湾し、口縁端部は僅かに屈曲し下方へ下がる。	天井部回転ヘラケズリ。他はヨコナデ調整。	89000147	3/8残存
-114	OGN-B SK012	高杯（土師器）	底径（ 9.6）	明褐色	0.5	不良	裾部において外方に広がる「ハ」字状の脚。	ヘラケズリ？	89000148	脚部1/2残存
-115	OGN-B SK012	杯（土師器）	口径（13.5）	明褐色	微量	良好	体部中央で屈曲し口縁に向けて立ち上がる。	ヨコナデ？	89000156	1/8残存
-116	OGN-B SK012	皿（土師器）	口径（27.9）器高（ 2.2）底径（22.0）	明赤褐色	1	良好	平坦な底部から体部は外方に立ち上がり、口縁部において僅かに外反する。口唇は丸く仕上げる。	摩滅のため調整不明。	89000158	1/8残存
-117	OGN-B SK012	甕（土師器）	口径（20.2）	茶褐色	1	良好	ほぼ垂直に立ち上がる胴部から、頸部は緩やかに屈曲し、短い口縁は外方へ開く。	口縁部ヨコナデ胴部内面ヘラケズリ。	89000150	口縁～胴部1/5残存
-118	OGN-B SK012	甕（土師器）	口径（16.6）	茶褐色	0.5	良好	ほぼ垂直に立ち上がる胴部から、頸部は緩やかに屈曲し、短い口縁は外方へ開く。	摩滅のため調整不明。	89000152	口縁部1/6残存

（ ）は推定

Fig-図番号	出土地点	器種	法量(cm)	色調	砂粒(mm)	焼成	形態の特徴	調整の特徴	県遺物登録番号	備考
224-119	OGN-B SK012	甕（土師器）	口径（16.2）	褐色	1	良好	ほぼ垂直に立ち上がる胴部から、頸部は緩やかに屈曲し、短い口縁は外方へ開く。	口縁部ヨコナデ。胴部内面ヘラケズリ。	89000153	口縁部3/8残存
-120	OGN-B SK012	甕（土師器）	口径（23.6）	茶褐色	1～2	良好	頸部は丸く屈曲し、短い口縁は外方へ開く。	口縁部ヨコナデ調整。	89000149	口縁部1/8残存
-121	OGN-B SK012	甕（土師器）	口径（23.0）	褐色	1	良好	頸部は丸く屈曲し、短い口縁は外方へ開く。	口縁部ヨコナデ調整。胴部内面ヘラケズリ調整。	89000151	口縁部1/6残存
-122	OGN-B SK012	甕（土師器）	口径（23.2）	茶褐色	0.5	良好	ほぼ垂直に立ち上がる胴部から頸部は緩やかに屈曲し、短い口縁は外方へ開く。	口縁部ヨコナデ調整。胴部内面ヘラケズリ調整。	89000154	口縁部1/4残存
-123	OGN-B SK012	甕（土師器）	口径（27.6）	明褐色	1	良好	ほぼ垂直に立ち上がる胴部から頸部は緩やかに屈曲し、短い口縁は外方へ開く。	口縁部ヨコナデ調整。胴部内面ヘラケズリ調整。	89000157	口縁部1/8残存
225-124	OGN-B SK021	杯蓋（須恵器）	口径（14.4）器高（3.2）	灰色	0.5	良好	体部から口縁部にかけて僅かに内湾しつつ開き、口縁内面には丸みを帯びた短いかえりを持つ。	天井部回転ヘラケズリの後ナデ、口縁付近はヨコナデ調整。	89000160	1/4残存
-125	OGN-B SK021	杯（須恵器）	口径（12.7）器高 4.2 高台径 8.4	灰色	0.5	良好	全面で接地する高台を持つ。平坦な底部から体部は外傾して立ち上がり、口唇は丸く仕上げる。	底部外面回転ヘラケズリの後ナデ調整。口縁から体部内面ヨコナデ。底部内面不定方向のナデ。	89000161	口縁部3/4欠損
-126	OGN-B SK021	杯蓋（須恵器）	口径（14.9）	灰色	0.5	良好	扁平な天井部から僅かに内湾しつつ開き、口縁内面には丸みを帯びた短いかえりを持つ。	天井部外面（2/3）回転ヘラケズリ。口縁部付近ヨコナデ調整。	89000159	1/4残存
-127	OGN-B SK021	杯蓋（土師器）	口径（15.8）	明褐色	1～2	良好	宝珠つまみを持つ天井部から僅かに内湾しつつ開き、口縁内面には丸みを帯びた短いかえりを持つ。	天井部外面(1/2)回転ヘラケズリ調整。	89000163	1/2残存 ヘラ記号有
-128	OGN-B SK021	杯（土師器）	口径（13.4）	明褐色	微量	不良	丸い底部から、体部は屈曲してほぼ垂直に立ち上がり、口唇部は丸く仕上げる。	摩滅のため調整不明。	89000162	1/4残存
226-130	OGN-A SD013	杯（須恵器）	口径（13.5）器高（4.0）底径（7.8）	灰色	微量	良好	全面で接地する高台を持つ。平坦な底部から体部は外傾して立ち上がり、口唇は丸く仕上げる。	口縁部ヨコナデ。杯部内外面ナデ調整。	89000598	1/8残存
-131	OGN-A SD013	杯（須恵器）	高台径10.2	暗灰色	1～2	良好	内接する高台を持つ。体部は平坦な底部から斜め外方に立ち上がる。	底部外面回転ヘラ切り離し。底部内面不定方向のナデ。	88010885	底部2/3残存
-132	OGN-A SD013	皿（須恵器）	口径（16.0）器高（1.9）底径（13.0）	明灰色	0.5	良好	体部は平坦な底部から斜め外方に立ち上がり、口縁端部で僅かに外反する。	底部外面回転ヘラ切り離し。口縁部ヨコナデ調整。	88010886	1/4残存
-133	OGN-A SD013	蓋（須恵器）	口径（10.6）	明灰色	微量	良好	体部は内湾しつつ開き、口縁部との境で僅かに屈曲する。端部は丸く仕上げる。	口縁付近ヨコナデ調整。	89000597	口縁部1/6残存
-134	OGN-A SD013	高杯（土師器）	口径（18.4）	明褐色	1～2	良好	口縁は広く外反し、端部は丸く仕上げる。	内外面ともヘラミガキ調整。	89000596	1/6残存

（ ）は推定

Fig-図番号	出土地点	器種	法量(cm)	色調	砂粒(mm)	焼成	形態の特徴	調整の特徴	県遺物登録番号	備考
226-135	OGN-A SD013	甕（土師器）	口径（15.0）	暗褐色	1～3	良好	口縁部は僅かに外反する。	口縁部ヨコナデ調整。	89000595	口縁部1/8残存
-136	OGN-A SD015	フイゴ羽口	孔径 2.1	明茶褐色	1	良好	径約2cmの孔を上下に貫通させる。	摩滅のため調整不明。	91000031	一部分残存
227-137	OGN-A SX005	甑（土師器）		明茶褐色	1～2	良好	把手は上方へ反りあがる。	把手部は指で押えて整える。	89000712	把手のみ残存
-138	OGN-A SX008	杯（須恵器）	高台径(9.2)	灰褐色	1～2	良好	高台は外反し、踏みしめるように接地する。	底部内面ナデ調整。	8900701	底部1/2残存
-139	OGN-A SX008	鉢（須恵器）	底径 10.3	灰 色	0.5	良好	体部は、平坦な底部より外傾して立ち上がる。	底部外面回転ヘラケズリ。体部ナデ調整。	89000140	底部1/2残存
-140	OGN-A SX009	甕（土師器）	底径 4.0	茶褐色	1～2	良好	小さな平底の底部より内湾しつつ立ち上がる。	外面ナデ調整。内面ヘラケズリ調整。	89000708	底部残存
-141	OGN-B SX016	甕（土師器）	口径 15.3 器高 14.0	明褐色	1	良好	胴部は丸底から内湾しつつ立ち上がり、頸部において屈曲し、外方へ短く開く口縁に至る。	口縁部ヨコナデ、胴部外面刷毛目調整、内面ヘラケズリ。なお、底部内面には指押さえの痕跡あり。	89000135	完形
-142	OGN-B SX016	杯（土師器）	口径 12.5 器高 4.0 底径 6.8	明褐色	1	良好	平坦な底部から、体部は外方へ開きつつ立ち上がり、端部は僅かに外反する。	体部ヨコナデ調整。底部内面不定方向のナデ調整。	89000136	口縁部1/4欠損
-143	OGN-B SX016	蓋（土師器）	口径（13.4）	明褐色	微量	良好	天井部からほぼ垂直に屈曲し、丸く仕上げた口縁に至る。	ヨコナデ調整。	89000137	口縁部1/8残存
228-144	OGN-B III区	杯蓋（須恵器）	口径（12.2） 器高 2.3 天井径 6.4	灰 色	1	良好	平坦な天井部より外方へ屈曲しつつ開き、丸く短いかえりを持つ口縁に至る。	天井部は外面ナデ調整、内面不定方向のナデ調整。以外はヨコナデ調整。	89000145	3/8残存
-145	OGN-A 1区 西斜面	杯（須恵器）	高台径(8.2)	灰 色	1	良好	平坦な底部に、全接する高台を持つ。	底部外面は回転ヘラ切り離し。内面は一方向のナデ調整。	88003594	底部残存
-146	OGN-A 1区 西斜面	鉢（須恵器）		灰 色	0.5	良好	細い頸部から大きく外反し、口縁部への変換点で内側へ屈曲する。	変換点に1条、頸部に2条の沈線をめぐらす。ヨコナデ調整。	88003598	口頸部2/3残存
-147	OGN-A 1区 西斜面	壺（須恵器）		灰白色	微量	良好	頸部は細くくびれ、垂直に立ち上がる。	頸部内面に絞り痕有り。	88003599	1/3残存
-148	OGN-A 1区 西斜面	壺（須恵器）	高台径10.5	灰白色	微量	良好	平坦な底部に、外傾する高台を付ける。	底部外面回転ヘラ切り離し。他はヨコナデ調整。	88003595	底部1/4残存
-149	OGN-A 1区 西斜面	甕（須恵器）	口径（17.2）	濃灰色	1～2	良好	口縁部は外反し、端部外面には突帯を付ける。	口縁部ヨコナデ調整。	88003597	口頸部1/8残存

（ ）は推定

Fig-図番号	出土地点	器種	法量(cm)	色調	砂粒(mm)	焼成	形態の特徴	調整の特徴	県遺物登録番号	備考
228-150	OGN-A 1区 西斜面	壺 (須恵器)	口径 (10.8)	灰白色	1	良好	口縁部は僅かに外反し、口唇上端には断面三角形の突帯を造り出す。	口縁部ヨコナデ調整。	88003592	口頸部1/4 残存
-151	OGN-A 1区 西斜面	甕 (須恵器)	口径 (24.8)	灰 色	2	良好	頸部は鋭く屈曲し口縁は外方へ開く。口唇の上下には断面三角形の突帯を造り出す。	口縁ヨコナデ調整。胴部外面は平行タタキメ、内面は同心円文のタタキ。	88003591	口頸部1/3 残存
-152	OGN-A 1区 西斜面	甕 (須恵器)	口径 (21.2)	濃灰色	1～2	良好	頸部は鋭く屈曲し口縁は外方へ開く。口唇は丸く肥厚し、外面下端に1条の沈線をめぐらす。	口縁ヨコナデ調整。胴部外面は平行タタキメ、内面は同心内文のタタキ。	88003589	口頸部1/3 残存
-153	OGN-A 1区 西斜面	甕 (須恵器)	口径 (22.7)	灰 色	微量	良好	頸部は「く」字に屈曲し口縁は外方へ開く。口唇は丸く肥厚し、外面下端に1条の沈線をめぐらす。	口縁部ヨコナデ調整。	88003590	口頸部1/6 残存
-154	OGN-A 1区 西斜面	甕 (須恵器)	口径 (21.4)	暗灰色	1～2	良好	口頸部は緩やかに外反し開く。口縁端部は長方形に肥厚する。	口縁部ヨコナデ調整。頸部外面にヘラ描き文様有り。	88003596	口頸部1/2 残存 ヘラ記号有
-155	OGN-A 1区 西斜面	甕 (須恵器)	口径 (21.2)	灰褐色	1～2	良好	頸部は「く」字に屈曲し口縁は外方へ開く。口唇外面下端に断面三角形の突帯を造り出す。	口縁ヨコナデ調整。胴部外面は平行タタキメ、内面は同心円文のタタキ。	89000299	口縁部1/2 残存
-156	OGN-A 1区 西斜面	甕 (須恵器)	口径 (20.0)	暗灰色	1～2	良好	頸部は「く」字に屈曲し口縁は外方へ開く。口唇外面に断面三角形の突帯を造り出す。	口縁ヨコナデ調整。胴部外面は格子目タタキ、内面は同心円文のタタキ。	89000300	口頸部1/8 残存
-157	OGN-B III区	甕 (土師器)	口径 (23.6)	明褐色	1～2	良好	頸部は緩やかにくびれ、肥厚した口縁は短く外反する。	口縁部ヨコナデ調整。胴部内面ヘラケズリ調整。	89000141	口頸部1/8 残存
-158	OGN-B III区	杯 (土師器)	高台径(9.2)	明褐色	0.5	良好	外傾する高足の高台を持つ。	高台部ナデ調整。	89000142	底部1/4 残存
-159	OGN-B V区	杯 (土師器)	高台径(7.5)	明赤褐色	0.5	良好	外傾する高足の高台を持つ。	高台部ナデ調整。	89000593	底部のみ 残存
-160	OGN-B IV区	杯 (土師器)	底径 (9.2)	明褐色	0.5	良好	平坦な底部。	ナデ調整。	89000143	底部4/5 残存

Tab.33　古墳時代装身具一覧表

（単位cm）

Fig-図番号	出土遺構	種別	材質	長さ（高さ）	幅（径）	孔径	色調	出土位置	県登録番号	備考
214-55	OGN-B SB005	鈪	青銅	0.7	0.5	——	緑色	埋土中	91000075	鈪留金具の一部
218-73	OGN-A ST016	切子玉	水晶	2.45	1.4	0.3~0.1	白色	玄室南東床面	91000051	片面穿孔
-74	OGN-A ST016	小玉	ガラス	0.8	0.8	0.15	暗青色	玄室南東床面	91000052	一括出土
-75	OGN-A ST016	小玉	ガラス	0.6	0.9	0.3	暗青色	玄室南東床面	91000053	一括出土
-76	OGN-A ST016	小玉	ガラス	0.6	0.6	0.1	暗青色	玄室南東床面	91000054	一括出土
-77	OGN-A ST016	小玉	ガラス	0.65	0.7	0.18	暗青色	玄室南東床面	91000055	一括出土
-78	OGN-A ST016	小玉	ガラス	0.4	0.65	0.15	暗青色	玄室南東床面	91000056	一括出土
-79	OGN-A ST016	小玉	ガラス	0.4	0.7	0.12	暗青色	玄室南東床面	91000057	一括出土
-80	OGN-A ST016	小玉	ガラス	0.45	0.6	0.12	暗青色	玄室南東床面	91000058	一括出土
-81	OGN-A ST016	小玉	ガラス	0.25	0.4	0.15	暗青色	玄室南東床面	91000059	一括出土
-82	OGN-A ST016	小玉	ガラス	0.3	0.4	0.1	暗青色	玄室南東床面	91000060	一括出土
-83	OGN-A ST016	小玉	ガラス	0.3	0.4	0.1	暗青色	玄室南東床面	91000061	一括出土
-84	OGN-A ST016	耳環	鉄芯銀張	0.6	2.8	——	銀色	倒れた袖石の下	91000062	
-85	OGN-A ST016	耳環	鉄芯銅張	0.4	2.5	——	緑色	框石の東床面	91000063	
219-86	OGN-A ST017	管玉	碧玉	2.5	0.8	0.3~0.1	暗緑色	奥壁付近	91000072	片面穿孔
-87	OGN-A ST017	管玉	碧玉	2.6	0.8	0.3~0.1	暗緑色	奥壁付近	91000071	片面穿孔
220-88	OGN-A SC020	小玉	ガラス	7.0	9.5	0.2	暗青色	東小口付近	91000067	
-89	OGN-A SC020	小玉	ガラス	6.0	8.5	0.12	暗青色	東小口付近	91000068	
-90	OGN-A SC020	小玉	ガラス	4.0	6.0	0.25	水色	東小口付近	91000069	
-91	OGN-A SC020	小玉	ガラス	4.0	5.5	0.15	水色	東小口付近	91000070	

Tab.34　鉄器一覧表

（単位cm）

Fig-図番号	出土遺構	種別	材質	長さ	幅	厚さ	出土位置	県登録番号	備考
213-52	OGN-B SB004	刀子	鉄	11.5	1.3	0.6	埋土	91000080	刃部の研ぎ減りが激しい。
214-53	OGN-B SB005	鉄鏃	鉄	4.0+α	0.8	0.35	P－1	91000098	
-54	OGN-B SB005	鉄鏃	鉄	4.9+α	0.9	0.3	P－1	91000099	
218-68	OGN-A ST016	不明	鉄	5.6+α	1.0	0.5	石室の東床面	91000065	
-69	OGN-A ST016	不明	鉄	5.2+α	1.0	0.5	石室の東床面	91000065	
-70	OGN-A ST016	鉄鏃	鉄	9.6+α	0.6	0.4	石室の東床面	91000064	
-71	OGN-A ST016	鉄鏃	鉄	3.0+α	0.5	0.25	石室内	91000096	
-72	OGN-A ST016	鉄鏃	鉄	3.5+α	0.8	0.2	石室内	91000097	
220-92	OGN-A SC020	鉄鏃	鉄	4.1+α	2.0	0.35	東小口付近	91000090	

Fig-図番号	出土遺構	種別	材質	長さ	幅	厚さ	出土位置	県登録番号	備考
220-93	OGN-A SC020	鉄鏃	鉄	7.0+α	0.5	0.4	東小口付近	91000091	茎部に樹皮及び木質残存
-94	OGN-A SC020	鉄鏃	鉄	9.6+α	1.0	0.3	東小口付近	91000089	
221-95	OGN-A SP001	鉄鏃?	鉄	9.2+α	0.9	0.5	南東壁際	91000073	
-96	OGN-A SP001	鉄鏃	鉄	10.5+α	0.8	0.4	南東壁際	91000074	
-97	OGN-A SP001	不明	鉄	2.1	0.6	0.6	南東壁際	91000066	弓付属金具?
-98	OGN-A SP001	鎧	鉄	12.2+α	1.3	4.5	埋土	91000095	
223-103	OGN-A SP009	鉄鏃	鉄	16.9+α	1.2	0.4	南西壁際	91000087	
-104	OGN-A SP009	鉄鏃	鉄	15.2+α	0.9	0.4	南西壁際	91000086	
-105	OGN-A SP009	鉄鏃	鉄	12.5+α	3.7	0.4	南西壁際	91000085	
-106	OGN-A SP009	鉄鏃	鉄	9.7+α	2.4	0.4	南西壁際	91000084	
-107	OGN-A SP009	鉄鏃	鉄	8.0+α	3.3	0.3	南西壁際	91000083	
-108	OGN-A SP009	鉄斧	鉄	8.7	4.4	1.8	中央床面	91000088	
-109	OGN-B SP009	鎧(?)	鉄	6.7+α	0.6	0.4	埋土	91000079	木質残存。
-110	OGN-B SP009	鎧	鉄	13.6	1.2	0.4	埋土	91000078	刃部片面に棟を持ち先端湾曲。木質残存。
225-129	OGN-B SK021	刀子	鉄	4.8+α	1.2	0.5	埋土	91000081	

Tab.35 住居跡一覧表

遺構番号	時期	平面形	主軸方位	規模(m)			付属施設	出土遺物	備考
				長軸	短軸	深さ			
SB001	飛鳥・奈良	台形方形	N 93.5E	4.64	4.50	0.4	4柱穴、東カマド	土師器、須恵器	
SB002	弥生中期	長方形	N 76.7E	4.86	4.08	0.3		弥生土器、甕棺	西壁際に土壙が存在する。
SB003	飛鳥・奈良	方形	N 67.5W	3.17	—	0.2		土師器	SB004より古い。
SB004	飛鳥・奈良	方形	N 76.5W	3.08	3.01	0.3	北西カマド	土師器、鉄滓、刀子	
SB005	飛鳥・奈良	方形	N 43.0W	—	2.80	0.1	北西カマド、土壙	土師器、須恵器、鉄滓、鋲	中央部に炭を含む土壙が存在する。
SB006	飛鳥・奈良	方形	N127.0W	3.02	2.46	0.1	北西カマド		SD007より古い。
SB008	不明	不明	N 66.0E	2.85	2.00	—			1間×3間の掘立柱建物。
SB010	弥生中期	隅丸方形	N 15.0W	3.50	—	0.6		弥生土器	東側を道で切られる。
SB014	飛鳥・奈良	方形	N 136.5W	—	—	0.3	南西カマド	須恵器、土師器	東側を欠く。

日岸田（ひがんだ）遺跡

遺跡名：日岸田遺跡（略号ＨＩＧ）
所在地：鳥栖市神辺町字日岸田

日岸田遺跡

Ⅰ．遺跡の概要

遺跡は柚比・荻野丘陵の西側にあたり、その西端には現在の川幅約５ｍの小河川、大木川が南方へ流下する。柚比・荻野丘陵は杓子ヶ峰から南に派生した標高約50～60m程の段丘で、日岸田遺跡は、その緩やかな西斜面に位置し、標高約50m前後である。

本遺跡は、弥生期の遺跡が密集するこの地域にあっては特に大規模なものではない。調査は一部に限られたが、弥生中期の埋葬、古墳前期の方形周溝墓と溝、そして主体を占めるのが古墳終末～平安初の竪穴住居を中心とする集落跡である。周囲の地形から推して、おそらく遺跡全体についてみても同様な時期によって特徴づけられるものであろう。柚比・荻野丘陵は古墳時代においては佐賀平野東部の有力な古墳分布地域の一つである。日岸田遺跡の東南方丘陵上には県下でも代表的な前期古墳である赤坂前方後方墳、後期になって剣塚、岡寺、庚申堂塚といった前方後円墳が造られている。また弥生時代に遡っては、本遺跡の東方約0.5kmに銅鐸鋳型の出土で有名な安永田遺跡がある。

今回の調査は工事計画区に沿って幅約50m長さ約240mの範囲について行った。ただし、その間、工事とある程度競合せざるをえなかったため、面的な調査に先立って調査区を南北に通過する導水管埋設部のみの調査を先行するなど、困難な条件下での作業となった。最終的に整図によって遺構の分布状況の全容を知ることになったが、ここでは調査の経過をある程度考慮し、

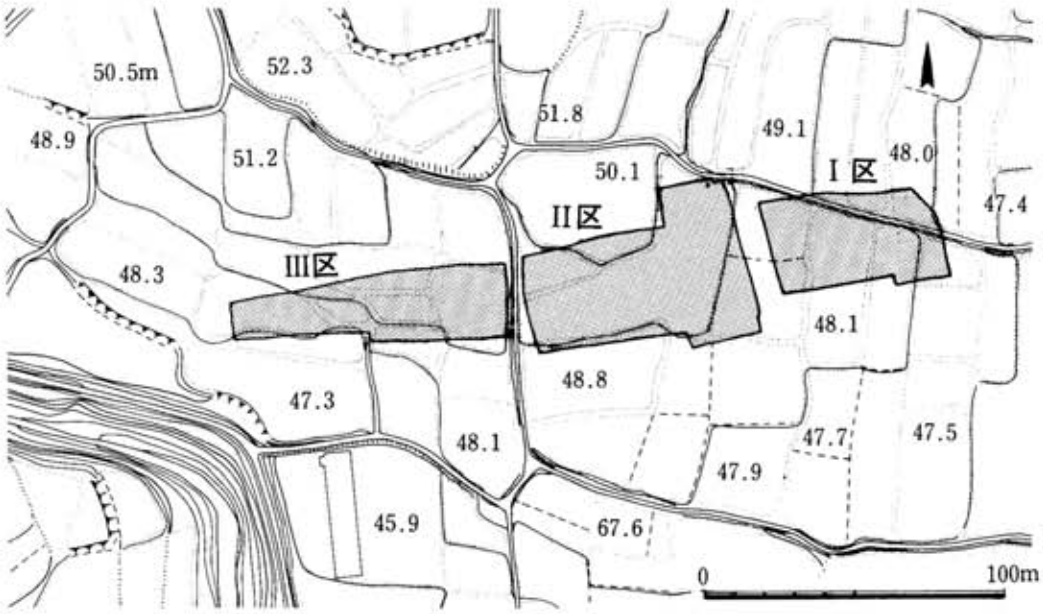


Fig.229　発掘区位置図（1/2500）

便宜上Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅲ区に分けることにする（Fig.229）。

全体の分布を概観すると、まずⅠ区では東南隅で弥生中期の甕棺墓７基を検出した。群としては調査区をこえてさほど拡がるとも思えず、本来小規模なものであろう。近接して祭祀に関係する可能性のある並行時期の土壙１基を検出した。西北部では平安期かとみられる方形竪穴住居跡が１基存在するが、これはⅡ区東北部の住居群と一群をなすものである（Fig.230）。その他、浅く残存する掘込みは多いが、時期、性格とも不明で、遺構と認めがたい。

Ⅱ区では東北隅に古墳時代終末～奈良時代（７世紀後半～８世紀）の竪穴住居跡６棟、掘立柱建物跡２棟が集中しており、その拡がりはさらに調査区の北側に続く様相を示す（Fig.231）。残存が浅いため不明な点が多い。切り合が多く、また方位も一定せず、時期別の配置状況を知りうるものではない。ただ掘立柱建物跡のうちＳＢ008南北棟は５間×４間の大形で、しかも柱穴掘形が方形を基本としている点、鳥栖地区におけるこの種の建物跡としては珍しい。１点のみ布目瓦片が採集されていることから、瓦葺であった可能性がある。このⅡ区東北部では他に並行期の土壙４基を検出した。Ⅱ区西部では古墳時代末期の方形竪穴住居跡２基と土壙１基があるが、先の一群とは約40m 離れており、むしろⅢ区の住居群と一群をなすとみるべき

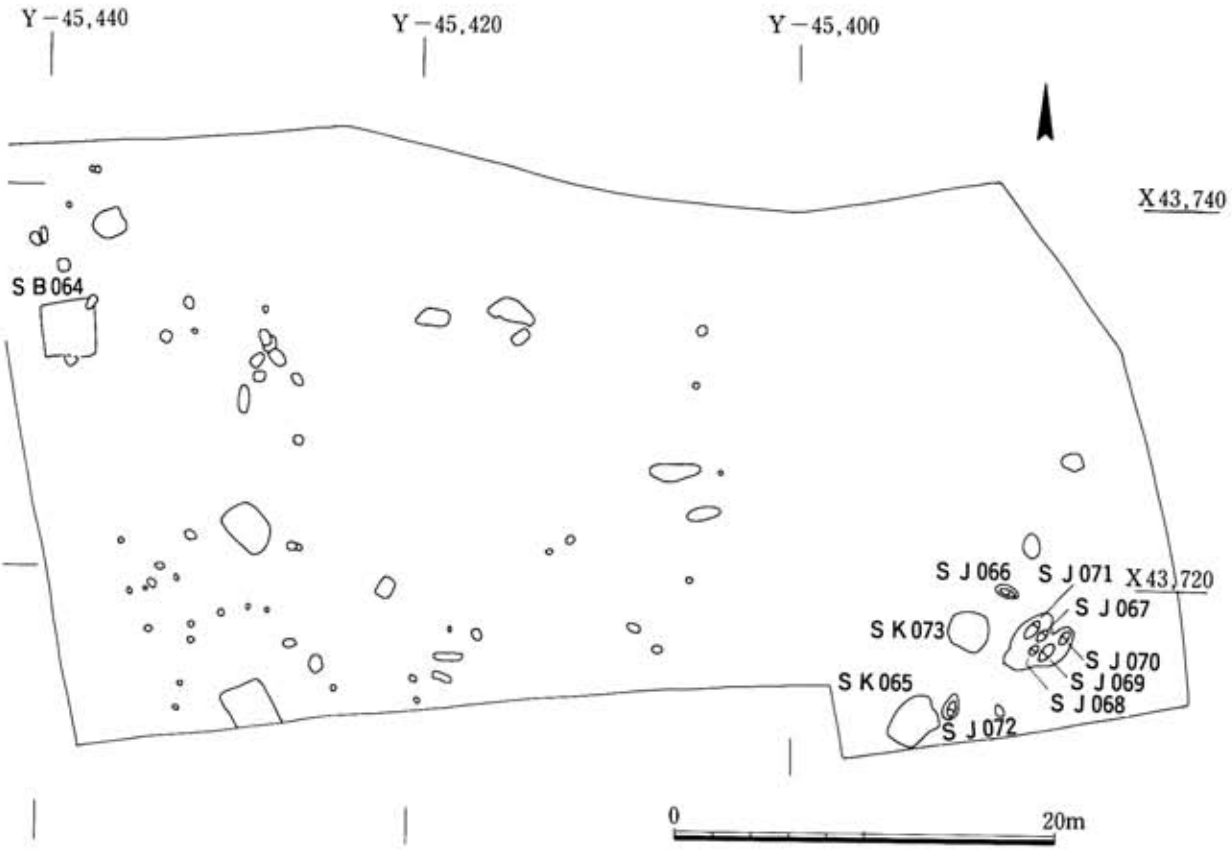


Fig.230　Ⅰ区遺構分布図（1/400）

であろう。II区で最も注目されるのは東南隅で検出したＳＴ002方形周溝墓の存在である。1辺約23m と大形で、鳥栖地域における古墳文化伝播の先触れをなすものとして貴重な資料といえる。時期は4世紀後半と推定される。なお、これを切るＳＤ001は一見方形周溝墓のように見えるが、鎌倉期に降る性格不明の溝である。

III区では竪穴住居跡を中心に最も多くの遺構を検出した(Fig.231)。竪穴住居跡は12棟で、時期の判明する限りでは古墳時代末期～奈良時代（7世紀後半～8世紀）を中心とし、全体としては降っても平安時代初と推定する。いずれも中形あるいは小形の方形で、方位は時期によっても必ずしも一定しないようである。このうち2基が壁際にカマドを付設する。全体として削平により残存状況が悪いため時期不明のものが多く、時期別の集落構成を明らかにしうるものではないが、継続して営まれた集落であろう。集落はなお調査区の南北両側に拡がる様相をみせる。並行する時期とみられる遺構は他に土壙9基がある。それ以外の時期では、弥生後期とみられる箱式石棺墓1基、さらにII区のＳＤ002方形周溝墓と同時期の溝ＳＤ041が古墳前期に掘られている。ＳＤ030溝も古墳前期の可能性がつよい。また、南端のＳＸ039は井戸状にみえるが性格不明の鎌倉期の遺構である。

以上、今回の調査で検出した遺構は、Ｉ区～III区までを通して弥生時代まで甕棺墓7基・箱式石棺墓1基・土壙1基、古墳前期では方形周溝墓1基・溝1条または2条、古墳末期～平安初では推定を含めて竪穴住居跡21棟・掘立柱建物跡2棟・土壙13基、鎌倉期では溝1条・不明遺構1基となり、その主体が古墳末期～平安初の集落であることを知りうる。遺構一覧は Tab. 36に示すとおりである。

関連するであろう近辺の遺跡をみると、日岸田遺跡東方約300m の段丘上には荻野遺跡があり、やはり横断道関連で調査を行った。ここでは弥生前期末～中期初の甕棺墓4基、弥生中期の竪穴住居跡2棟、後期の石棺墓2基、古墳時代末期～奈良時代の竪穴住居跡7棟、横穴式石室古墳2基等を検出しており、すなわち日岸田遺跡と似た様相を示している。おそらく、この地区では、小集団が分散する形で、断続的ながら並行するように集落を営んだことを物語るものであろう。日岸田遺跡の場合も、近接して弥生中期および古墳前期の生活跡が存在するものと予想する。

最も注目されるII区のＳＴ002方形周溝墓に関しては、鳥栖地域では他に本川原方形周溝墓が2基知られる。ただしＳＴ002に比べると1号が1辺約20m と一回り小さく、2号は1辺約8 m にすぎない。この地域における古墳文化初期の様相は必ずしも明らかでないが、これらと近接した時期の赤坂古墳が小形の前方後方墳として始まっている点に注意する必要があろう。なお、佐賀平野の方形周溝墓は、同系統の方形墳まで含めて16基ほど知られるが、その中でもＳＴ002は大形の部類に入る。他の類例からみて主体部は箱式石棺墓であった可能性が高い。

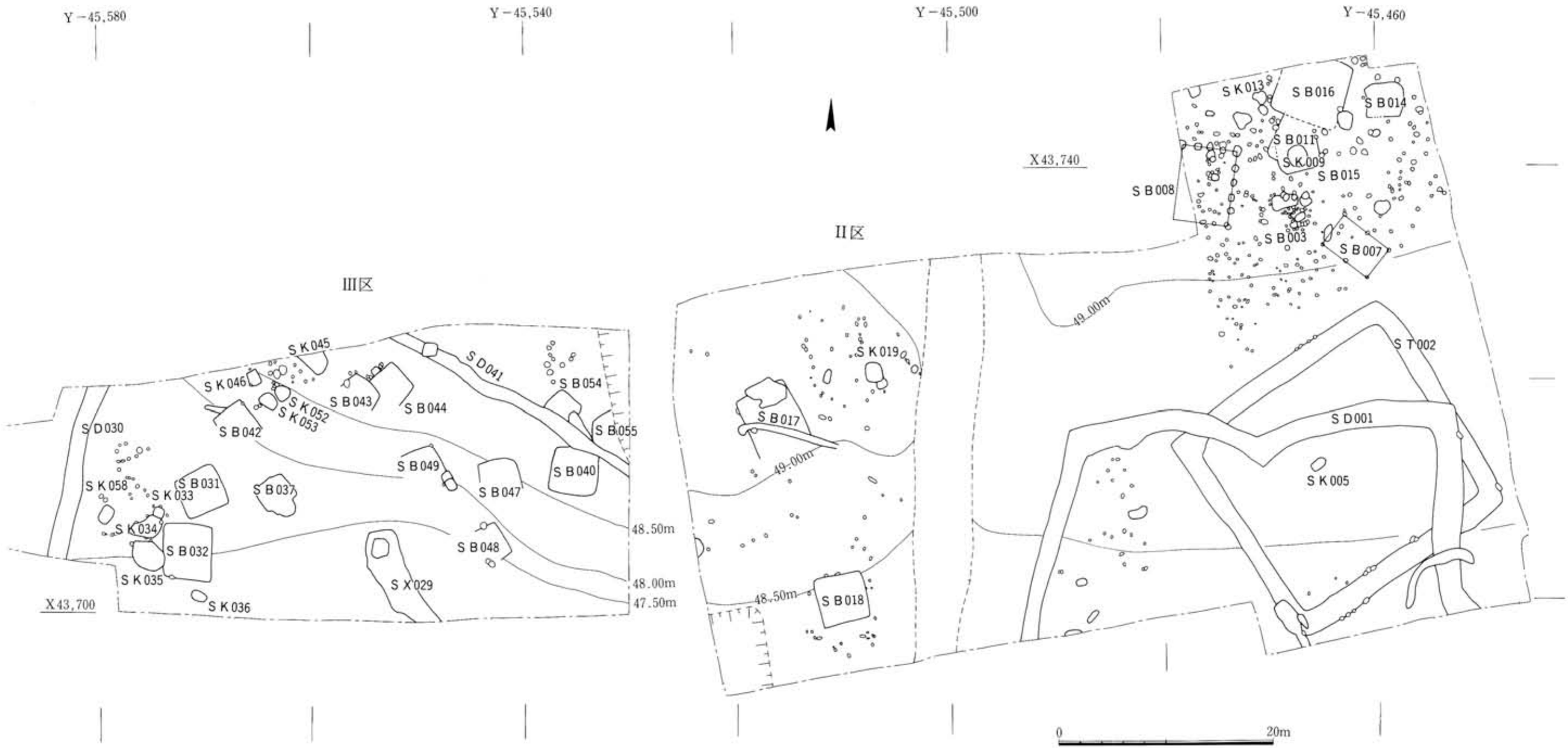


Fig. 231　II区・III区遺構分布図（1/400）

Tab.36　遺構一覧表

発掘区	遺構番号	種　別	形　態	規　模　m	時　期	摘　要
Ⅰ区	ＳＢ064	竪穴住居	方　形	2.9×2.85	平安か	南壁にカマド、北辺やや広い。
	ＳＫ065	土　壙	楕円形	3.1×2.2		壙底中央に礫敷。
	ＳＪ066	甕棺墓	合口式	墓壙1.3×0.7	弥生中期中頃	小児棺、主軸Ｎ70°Ｗ
	ＳＪ067	〃	〃	〃 1.7×1.3（推定）	〃 中期中頃	主軸Ｎ61°Ｅ
	ＳＪ068	〃	〃	〃 1.0×0.5（〃）	〃 中期中頃	小児棺、主軸Ｎ47°Ｅ
	ＳＪ069	〃	〃	〃 2.1×1.1（〃）	〃 中期前半	主軸Ｎ47°Ｅ
	ＳＪ070	〃	〃	〃 1.5×1.1（〃）	〃 中期中頃	主軸Ｎ132°Ｗ
	ＳＪ071	〃	有蓋接口	〃 2.3×1.3（〃）	〃 中期前半	主軸Ｎ50°Ｅ
	ＳＪ072	〃	上下甕接口	〃 1.2×0.7	〃 中期中頃	主軸Ｎ21°Ｅ
	ＳＫ073	土　壙	円　形	径約2.4	〃 中期中頃	祭祀関係遺構か。土器片出土。
Ⅱ区	ＳＤ001	溝	周回か	北辺長36.4、溝幅約2.0	中世	ＳＴ002を切る。南側不明。
	ＳＴ002	方形周溝墓	方　形	24.0×22.5、溝幅約1.9	古墳前期	東北一西南軸Ｎ57°Ｅ
	ＳＢ003	竪穴住居	方形か		古墳末期	主柱４本、壁削平。
	ＳＫ005	土　壙	楕円形	1.6×1.0	奈良	二段掘り。
	ＳＢ007	掘立柱建物	2間×1間	5.24×3.32		柱掘形小円形。
	ＳＢ008	〃	5間×4間	6.93×4.98	奈良	柱掘形不整方形。西側欠失。
	ＳＫ009	土　壙	円　形	2.0×1.8	古墳末期	壙底に小穴。ＳＢ015と切合う。
	ＳＫ010	〃	〃	1.6×1.4	奈良	〃
	ＳＢ011	竪穴住居	方形か			ＳＢ015と切り合う。先後不明。
	ＳＫ013	土　壙	円　形	2.6×2.3	古墳末期	壙底に小土壙。
	ＳＢ014	竪穴住居	方　形	3.3×3.4		床面を他の土壙に荒される。
	ＳＢ015	〃	方形か	α×4.0		ＳＢ011・ＳＫ009と切り合う。先後不明。
	ＳＢ016	〃	〃			ＳＢ011と切り合う。先後不明。
	ＳＢ017	〃	長方形	6.0＋α×5.2	古墳末期	床面北側に一部焼土が乗る。
	ＳＢ018	〃	方　形	4.5×4.7	古墳末期か	主柱４本。東壁際に方形ピット、北壁際に焼土。
	ＳＫ019	土　壙	楕円形	2.0×1.6	古墳末期	壙底に土壙。

発掘区	遺構番号	種別	形態	規模 m	時期	摘要
III区	SD030	溝	南北溝	幅1.7		箱薬研掘り。
	SB031	竪穴住居	方形	4.2×4.1	古墳末期	主柱4本。床面上に部分的に炭化物。
	SB032	〃	〃	5.1×4.5	奈良	主柱4本。北東部に焼土。
	SC033	石棺墓	箱式	長0.6+α、幅0.35	弥生後期か	南半分をSK034に切られる。N18°E
	SK034	土壙	不整楕円形	2.6×2.2	古墳末期	壙底平坦
	SK035	〃	円形	3.1×2.5	古墳末期	壙底凹凸
	SK036	〃	隅丸長方形	1.4×0.95		壙底平坦
	SB037	竪穴住居	〃	2.7×3.3	古墳末期	小型。埋土中に土器片多し。東北壁にカマド。
	SX039	不明	方形	3.3×2.9	平安か	壙底礫敷。南側に通路伸びる。
	SB040	竪穴住居	〃	4.35×4.4	古墳末期	主柱4本。床面上に土器散る。
	SD041	溝	東西斜溝	幅1.2	古墳前期	箱薬研掘り。
	SB042	竪穴住居	方形か	3.4×3.0+α		南隅欠失。
	SB043	〃	〃	α×4.6		壁わずかに一部残存。
	SB044	〃	方形	3.65×α	古墳末期	北壁にカマド。
	SK045	土壙	楕円形		古墳末期	西側に向って深い。
	SK046	〃	長方形	1.5×1.1	奈良か	北壁やや緩く立ち上がる。
	SB047	竪穴住居	方形	α×3.9	古墳末期	東北隅わずかに残る。東壁際に焼土。
	SB048	〃	方形か	3.5×α		西側削平。
	SB049	〃	〃			東北隅のみ残存。
	SK050	土壙	方形	1.9×2.0	平安	SD041を切る。完形土器出土。
	SK052	〃	円形	1.5×1.4	奈良	不整形。鉄製紡錘車出土。
	SK053	〃	楕円形	1.8×1.3	奈良	壙底平坦。
	SB054	竪穴住居	隅丸方形	2.85×2.4+α	古墳末期	小型。SD041を切る。
	SB055	〃	〃	3.3×2.3+α		小型。東側欠失。
	SK058	土壙	長方形	1.7×1.2		壙底平坦。

II. 遺 構

1. 弥生時代

I区の東南隅で甕棺墓7基と土壙1基を検出したほか、III区で石棺墓1基を検出した。検出中に生活土器片も採集しており、他に住居跡等があった可能性はあるが、全体の削平もあって明らかでない。甕棺墓7基は集中しながらも甕本体の切合いはなく、中期中頃を中心に継起的に埋められたものである。群としてはさらに南側にやや拡がるかと思われるが、いずれにせよあまり大きな群を成すことはなかろう。これらの墓群に隣接する土壙1基は祭祀行為に関係する廃棄壙等の可能性が考えられる。またIII区の石棺墓1基は後期と推定され、1基のみ単独で存在しており、他遺構との関係は不明である。

(1) 土 壙

SK073土壙1基がある (Fig.232)。7基の甕棺に囲まれるような位置にあり、墓地に関わる祭祀行為に関係するかと推定する。時期は中期中頃で、甕棺群の主体時期とも並行する。埋土中位から甕3個体分以上と花崗岩礫が投げ込まれたような状態で出土した。

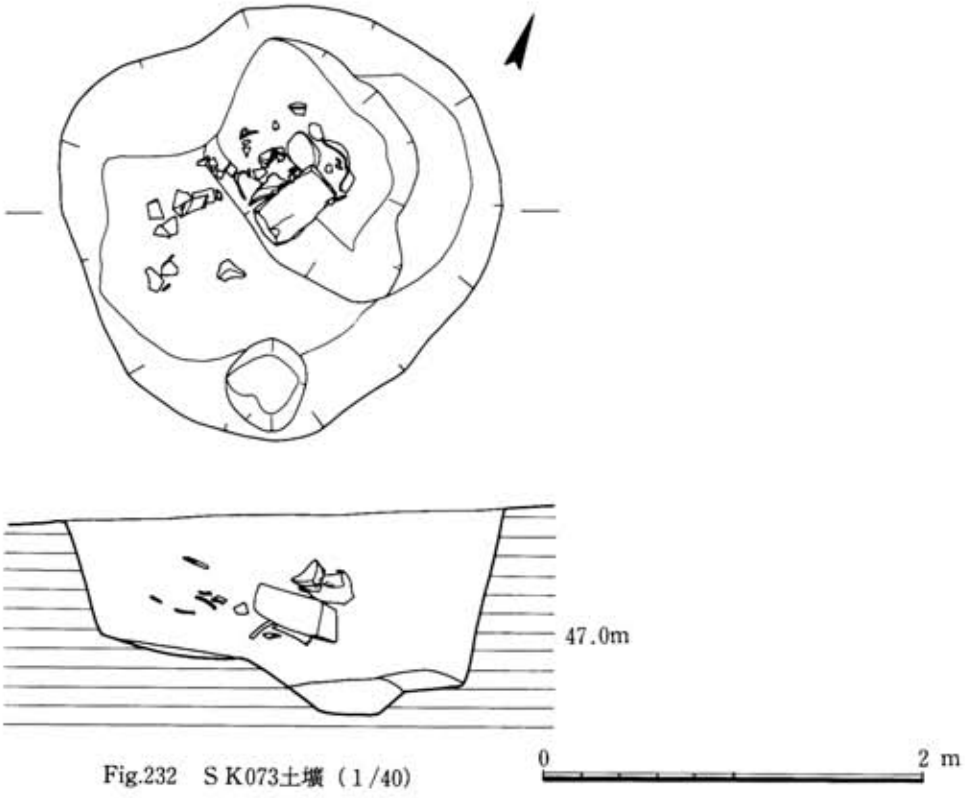


Fig.232 SK073土壙 (1/40)

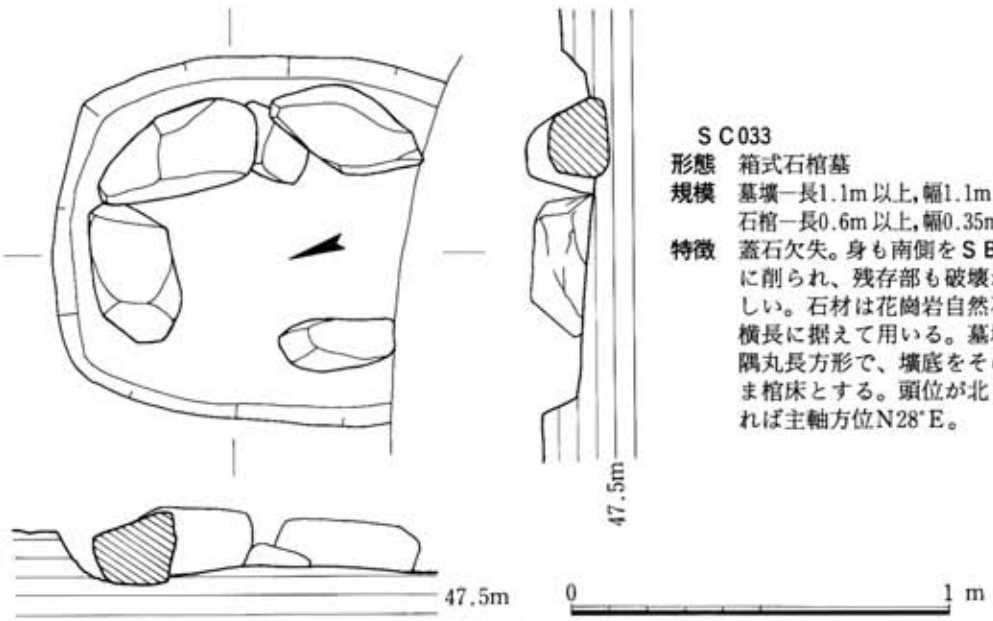
(2) 石棺墓・甕棺墓

III区のＳＣ033石棺墓は１基のみ単独出土である。時期は後期の可能性がつよく、Ｉ区甕棺墓群との関係も考えにくいので、遺跡の中での位置づけは不明である。

Ｉ区の甕棺墓７基の配置をみると（Fig.230）、ＳＪ066のみ主軸が東西方向にあり、南北方向または東北－西南方向にある他の６基と異なる。ただし時期は一群のものであり、また近接しており、同一グループとみてよいであろう。７基のうち、とくにＳＪ067～ＳＪ071の５基は成人棺２基と小児棺３基が甕棺本体が相接するほどに密集して埋められており、密接な血縁関係を推定せしめるものである。しかも墓壙は著しく切合いながらも甕棺本体を傷めることなく埋置されている状況からは、あまり時間を置かず継起的に埋められたことが推定される。

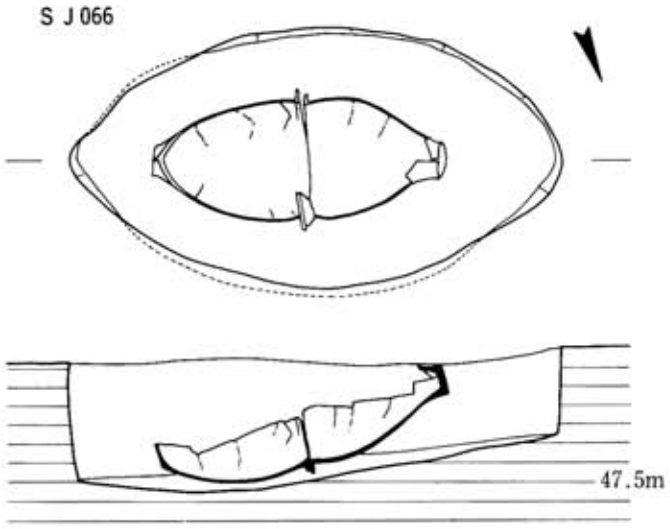
埋置方法は成人棺３基、小児棺４基のいずれも合せ口式で、このうち小児棺ＳＪ066・ＳＪ068・ＳＪ069・ＳＪ070は生活土器を使用、成人棺ＳＪ067は専用棺を下甕にして生活土器を上甕とする点で特異である。また成人棺ＳＪ071は専用上蓋を用い、ＳＪ072のみ大形甕２個を合せている。埋置角度はＳＪ066のみ若干、上甕を高くするが、他は基本的に水平埋置といってよい。墓壙は切り合いにより掘形不詳のものが多いが、小児棺の場合、基本的に平面楕円形で壙底は平坦である。成人棺では平面楕円形または隅丸長方形で、ＳＪ071は壙底やや斜めに、ＳＪ067・ＳＪ070は甕棺部のみ壙底をさらに掘り込んでいる。いずれも直にちかく掘り下げ、横穴部等はみられない。全体に粘土目張りもなく簡素なつくりである。

副葬品は出土しなかった。時期はＳＪ069のみ中期前半、他６基は中期中頃である。

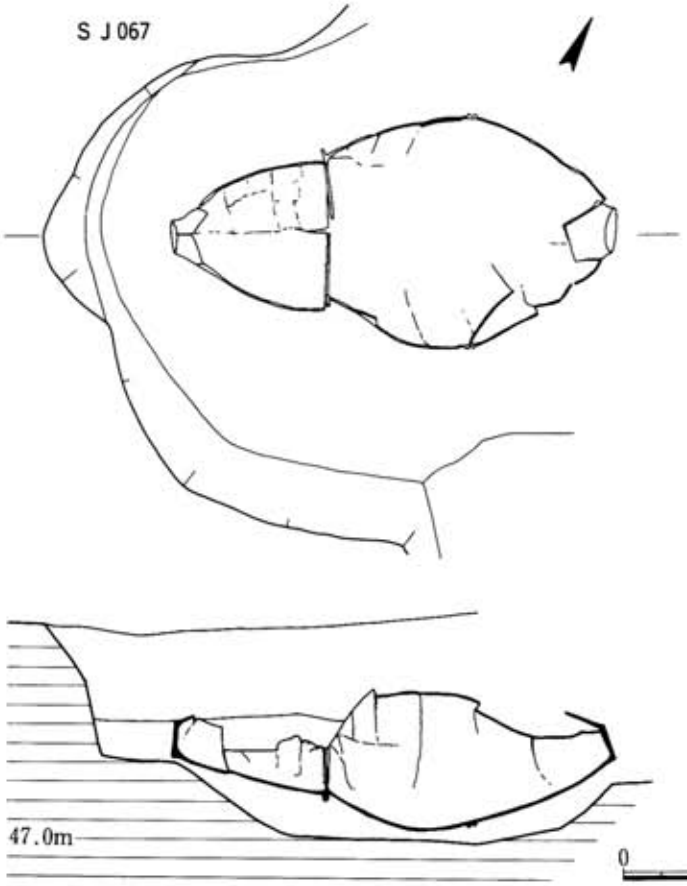


ＳＣ033
形態 箱式石棺墓
規模 墓壙―長1.1m以上，幅1.1m
石棺―長0.6m以上，幅0.35m
特徴 蓋石欠失。身も南側をＳＢ032に削られ、残存部も破壊が著しい。石材は花崗岩自然石を横長に据えて用いる。墓壙は隅丸長方形で、壙底をそのまま棺床とする。頭位が北とすれば主軸方位Ｎ28°Ｅ。

Fig.233　ＳＣ033石棺墓（１/20）

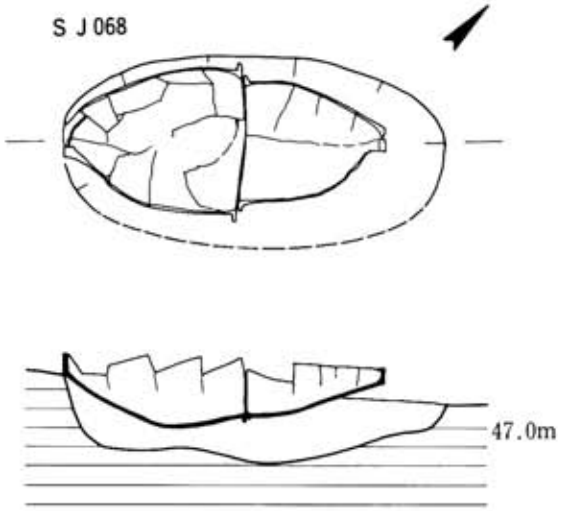


S J 066
形態　合口式（接口）甕棺墓
規模　墓壙　1.3m×0.7m
　　棺長　0.8m
頭位　N70°W　仰角20°
特徴　小児棺。上甕は上面が破壊され、下甕も上面が割れて落ち込んでいた。下甕は壙底に据える。墓壙は楕円形で直に掘り込み、壙底は平坦ながら西側やや上がる。



S J 067
形態　合口式（接口）甕棺墓
規模　墓壙　1.7m×1.3m(推定)
　　棺長　1.2m
頭位　N61°E
特徴　S J 071と並び近接した時期にあるが、先後不明、下甕に専用棺、上甕に小形甕を使用し、ほぼ水平に据えつける。墓壙は大きめの楕円形とみられるが、切り合いにより形状不明確。

Fig.234　S J 066・S J 067甕棺墓（1/20）



ＳＪ068
形態　合口式（接口）甕棺墓
規模　墓壙長　1.0m，棺長　0.85m
頭位　N47°E
特徴　小児棺。棺は壙底からやや浮いて水平埋置。楕円形墓壙でＳＪ069と切り合う。上面破壊。

ＳＪ069
形態　合口式（接口）甕棺墓
規模　墓壙　2.1m×1.1m（推定）
棺長　1.7m
頭位　N47°E
特徴　墓壙は壙底をさらに掘り込み、下甕をやや深く据えつける。上面破壊。

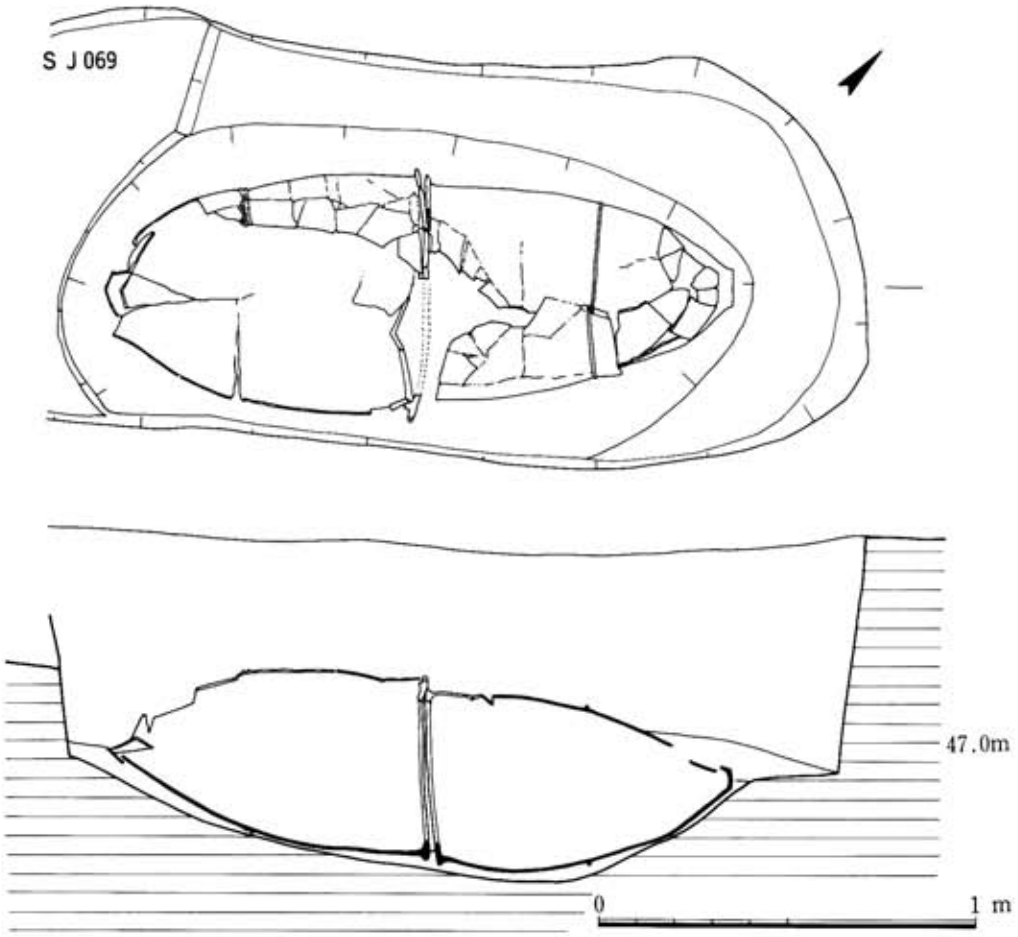
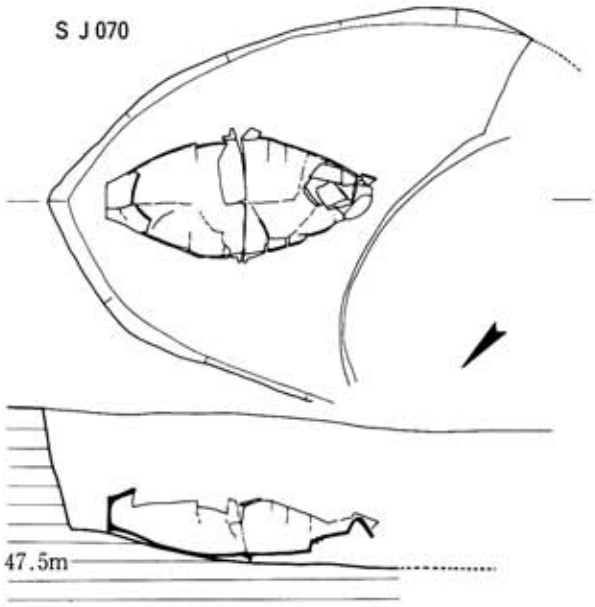


Fig.235　ＳＪ068・ＳＪ069甕棺墓（1/20）



S J 070
形態　合口式（接口）甕棺墓
規模　墓壙幅　1.1m，棺長　0.7m
頭位　N132°W
特徴　小児棺。棺は小形甕を使用し、壙底にほぼ水平に据えつける。楕円形墓壙でS J 069と切り合う。

S J 071
形態　有蓋式（接口）甕棺墓
規模　墓壙　2.3m×1.3m（推定）
棺長　1.45m
頭位　N50°E，仰角5°
特徴　専用蓋使用。墓壙は楕円形とみられるが、切合いのため不明確。壙底は東側やや上がる。

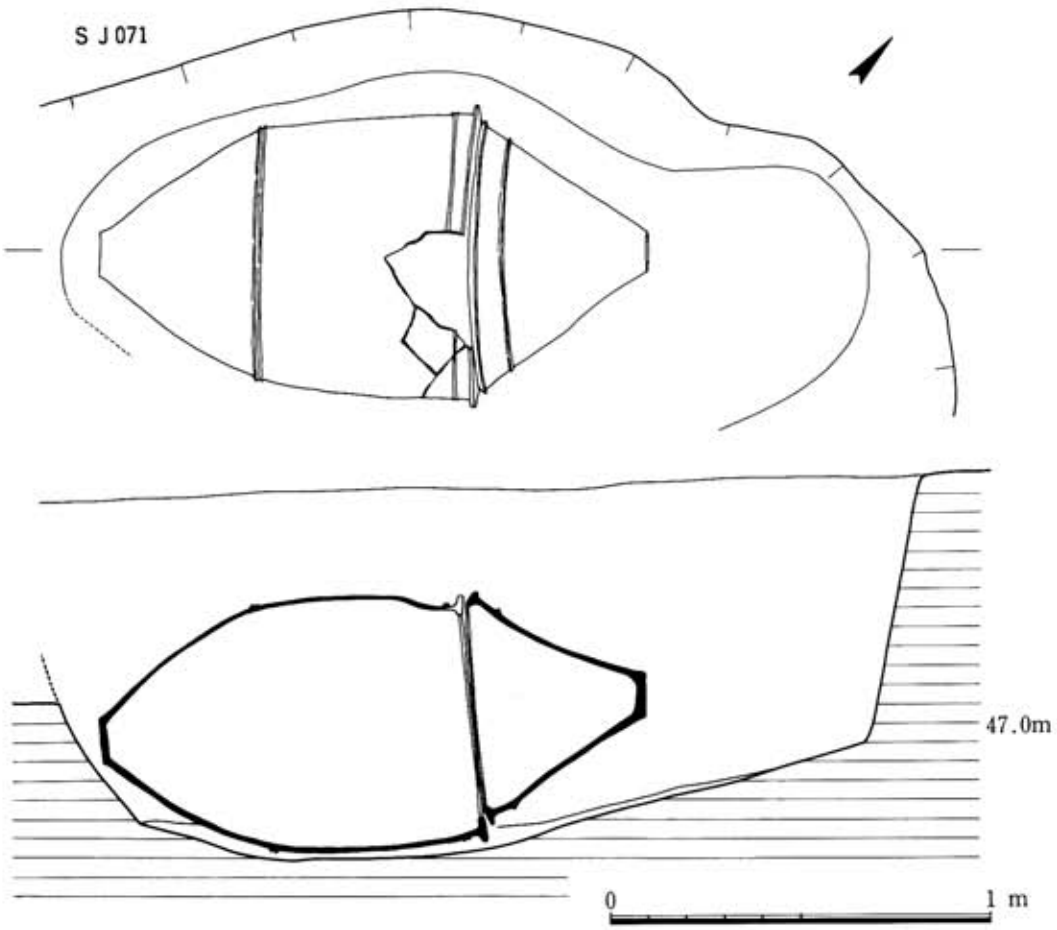


Fig.236　S J 070・S J 071甕棺墓（1/20）

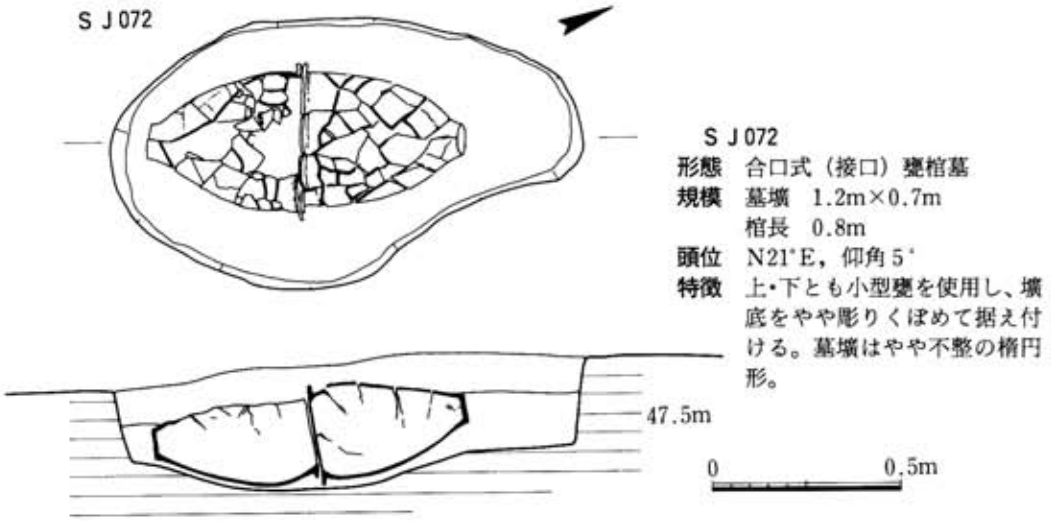


Fig.237　S J 072甕棺墓（1/20）

2．古墳時代前期

古墳時代では竪穴住居跡8棟以上、土壙6基以上、方形周溝墓1基、溝1条を検出した。このうち方形周溝墓1基S T002と溝1条S D041は古墳前期の遺構で、他はすべて古墳時代末期7世紀に降るものである。したがって、その間には相当な時間的空白があり、遺跡としての継続性は考えられない。出土遺物の点においても同様である。7世紀に降る遺構では大部分は竪穴式住居跡であるが、これらは今回検出した遺構の主体を占める奈良・平安時代の住居群にそのまま続くものであるので後に一括し、ここでは古墳前期の遺構のみとりあげる。

(1)　方形周溝墓

II区の東南隅でS T002を1基のみ検出した(Fig.238)。これを切るS D001は鎌倉時代の性格不明な溝であり、両者の直接的な関係はない。S T002方形周溝墓は少なくとも調査区内においては単独で存在しており、南側の調査区外に別の存在が考えられなくもないが、その東西には見つかっていない。また北側には古墳末期以降の遺構群がこれを避けるかのように集中していることからみて、当時まだ前期の墓域が意識されていたとすれば、別の方形周溝墓が北に拡がる可能性は少ないであろう。いずれにせよ、多くが群在するといった状況を窺わせない。

S T002の特徴についてみると、主軸は仮に地形傾斜上方を頭位とすれば北東一西南にあり、N57°Eとなる。規模は各々溝外側の中心線で測って北東一南西24m、北西一南東22.5m、したがって北東一西南方向にやや長い。ただし規模からいえば、ほぼ正方形を意識して造られたものとしてよいであろう。なお、溝の内外で測ると20.3m×18.9mである。溝は断面が箱薬研掘

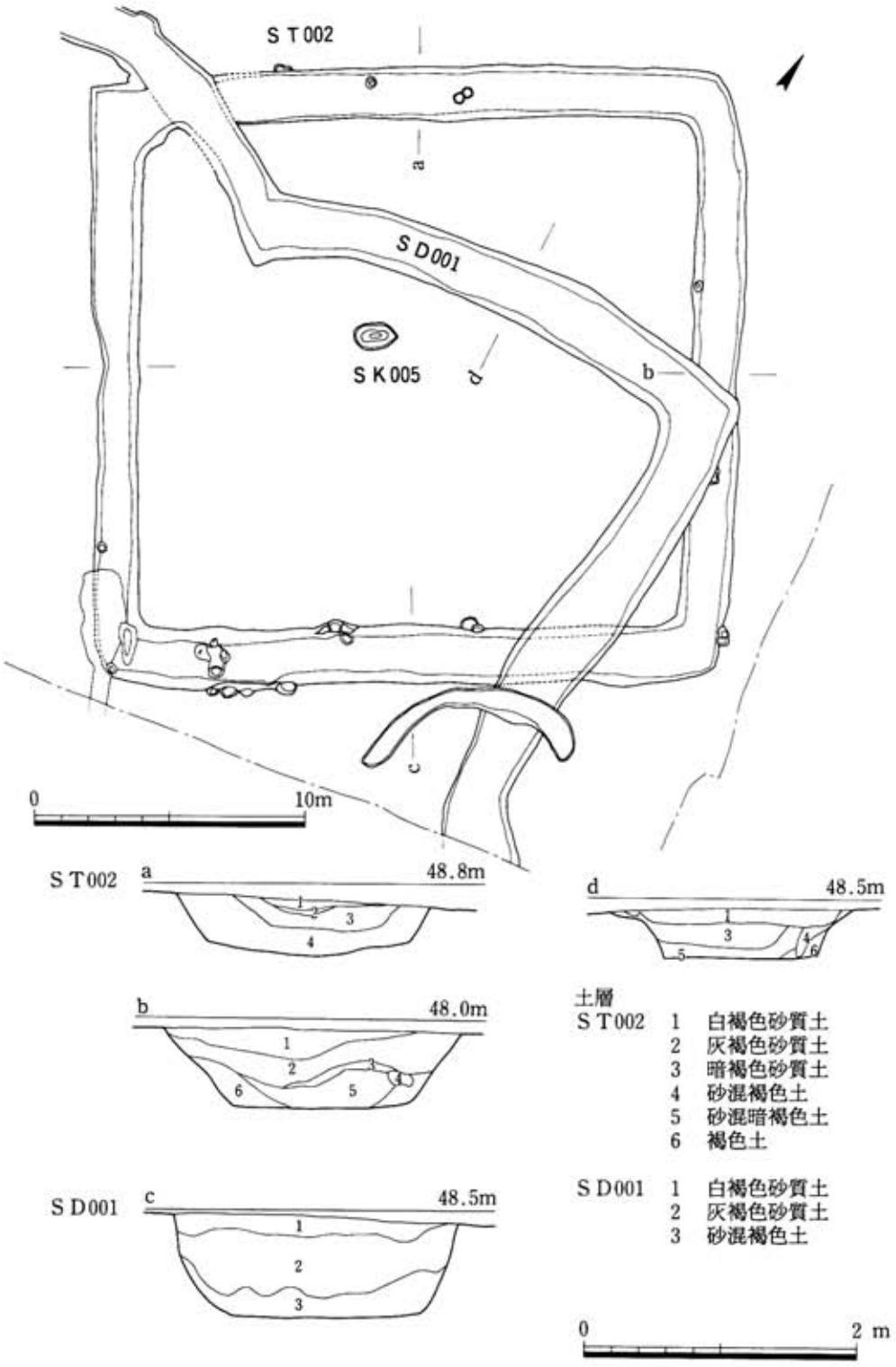


Fig.238 S T002方形周溝墓（1/250・1/50）

りを呈す。検出面で測って幅1.9m～2.2m、平均的には2 m前後、深さは約0.6mである。付近の竪穴住居跡等の削平状況からは、これより0.5m程度は旧地表は高かったであろうと推定されるので、復元すれば幅3 m前後、深さ1 m前後となる。掘形は溝底を平坦にし、両壁は基本的に45°あるいはそれ以上やや急に掘り込んでいる。なお溝底のレベル比較では全体に北隅から南隅に向かって低くなる。埋土は褐色土や砂がレンズ状の自然な堆積を示している。

溝内からは土師器が比較的多く出土した。ただし大部分は埋土中位から、しかも破片での出土であり(PL.132)、溝内に元々置かれてあったとは考えにくい。おそらく溝が埋没してゆく途中で、墓域内に供献されてあった土器が転落したものであろう。出土位置は、とくに部分的な集中をみせるといったほどのものではない。器種には二重口縁壺、甕、鉢、器台、高坏などがみられる。

主体部は残存せず、墳丘があったかどうかについても不明である。

(2) 溝

III区北東隅を斜めに横切ってSD041溝1条がある。幅は検出面で1.2m～1.8m、平均1.5m、深さ約0.5mで、溝底レベルはわずかながら北西方向に下る。II区にその続きがみられないのは削平によるものであろう。掘形断面は箱薬研掘りである。時期はST002方形周溝墓と同時期の古墳前期である。

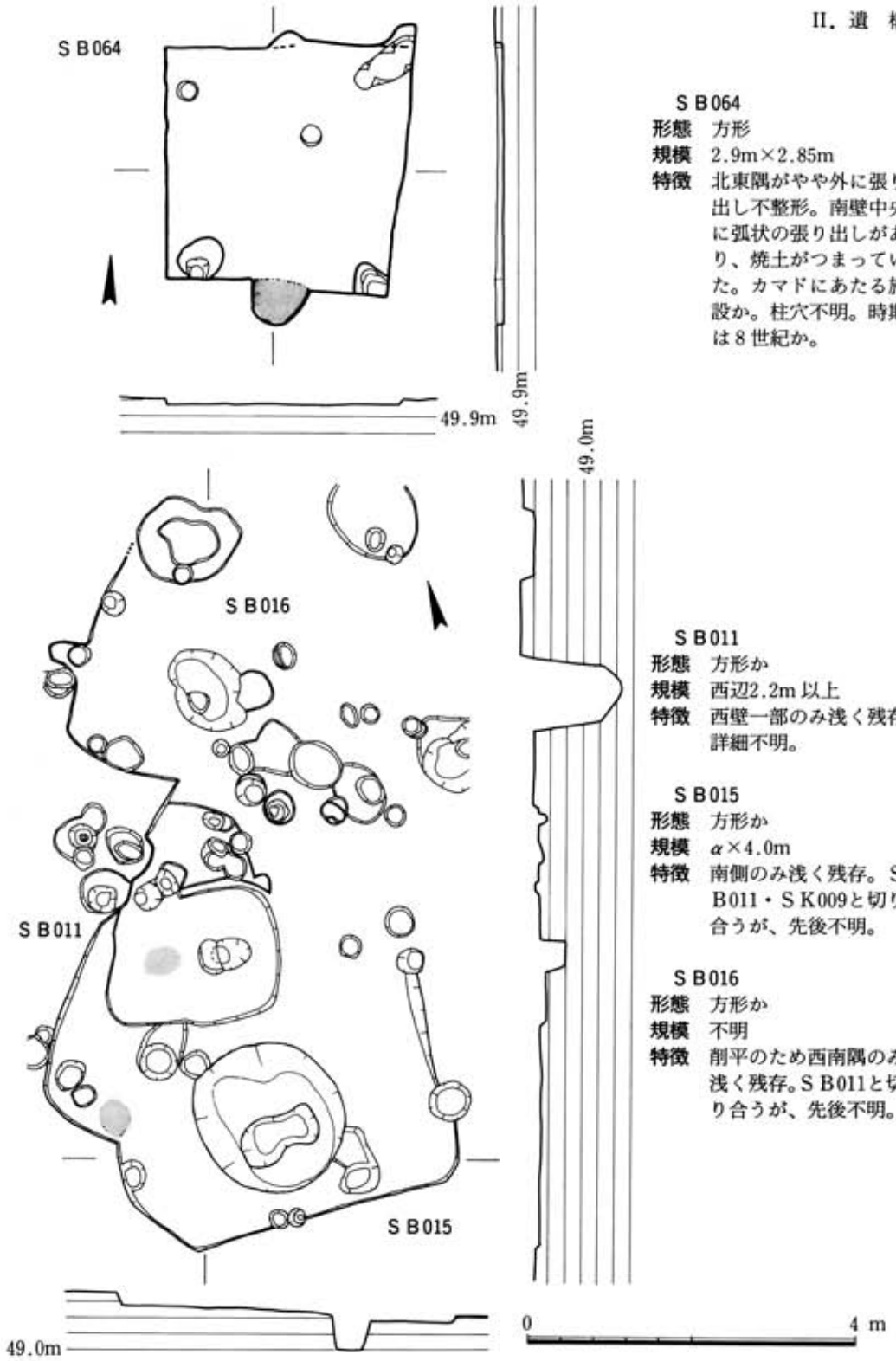
3．古墳時代末期および奈良・平安時代

古墳時代末期とした7世紀の遺構として竪穴住居跡9棟、土壙6基、奈良・平安時代の遺構として竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡2棟、土壙6基、性格不明遺構1基がある。時期不明の竪穴住居跡・土壙も大部分この時期であろう。集落としての継続性から、一括してとりあげる。

(1) 竪穴住居跡・掘立柱建物跡

調査区内では、およそ2群に分かれる。一つはII区北東隅からI区北側にかけて、もう一つはIII区からII区西側にかけてである。前者に含まれる2棟の掘立柱建物のうち、SB008は柱掘形が方形を基本とし比較的大形である。布目瓦片が表採されている点からみて、瓦葺きの可能性がある。後者の群は比較的密集し、なお北側に拡がる様相をみせる。主軸方位は地形傾斜に合わせて北東一西南方向、南一北方向が多く、時期差に関係するとみられる。稀に北西一東南方向のものなどがある。

竪穴住居跡はほとんどが方形で、一辺3 m前後から5 m前後、全体に小形である。削平のため詳細がわかる例は少ない。そのうちカマドを付設するものは3基である。



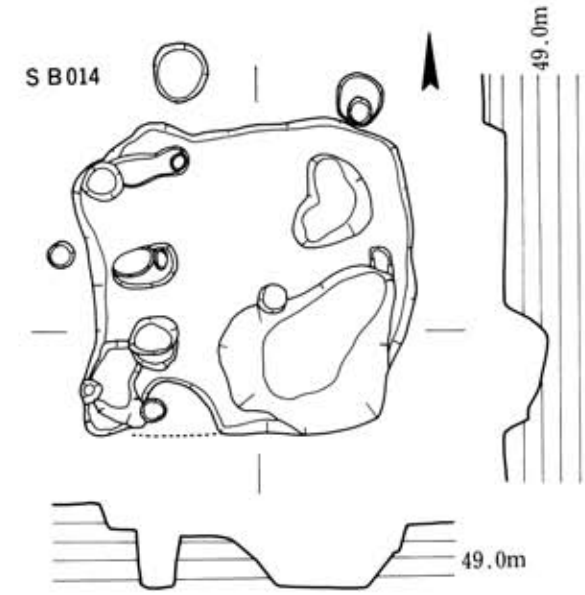
S B064
形態 方形
規模 2.9m×2.85m
特徴 北東隅がやや外に張り出し不整形。南壁中央に弧状の張り出しがあり、焼土がつまっていた。カマドにあたる施設か。柱穴不明。時期は8世紀か。

S B011
形態 方形か
規模 西辺2.2m以上
特徴 西壁一部のみ浅く残存。詳細不明。

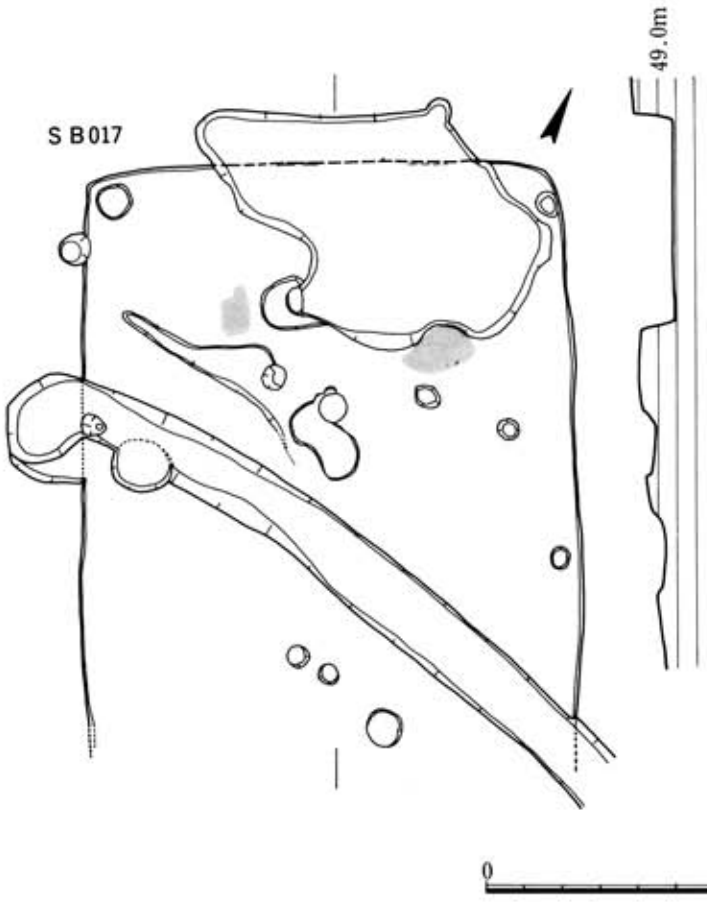
S B015
形態 方形か
規模 α×4.0m
特徴 南側のみ浅く残存。S B011・S K009と切り合うが、先後不明。

S B016
形態 方形か
規模 不明
特徴 削平のため西南隅のみ浅く残存。S B011と切り合うが、先後不明。

Fig.239 S B064・S B011・S B015・S B016竪穴住居跡（1/80）

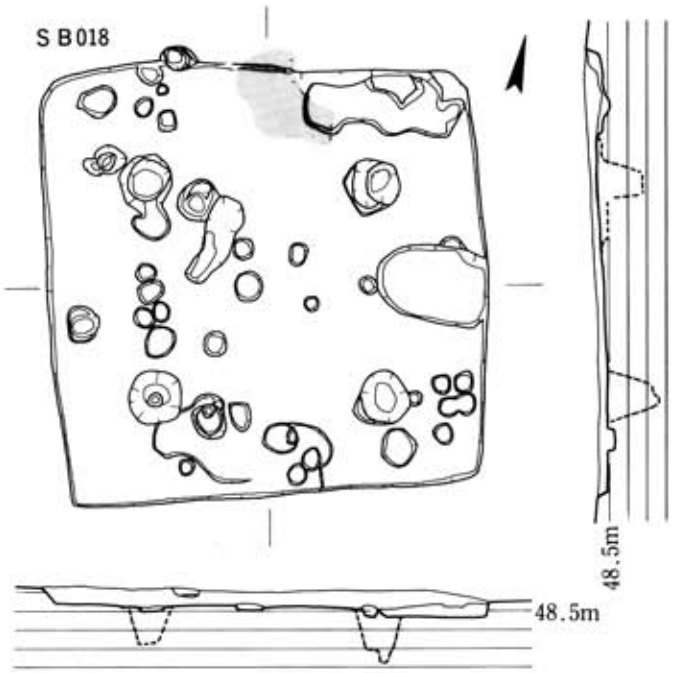


S B014
形態 方形
規模 3.3m×3.4m
特徴 小形竪穴。柱穴不明。東南隅の掘り込みは別遺構とみられる。

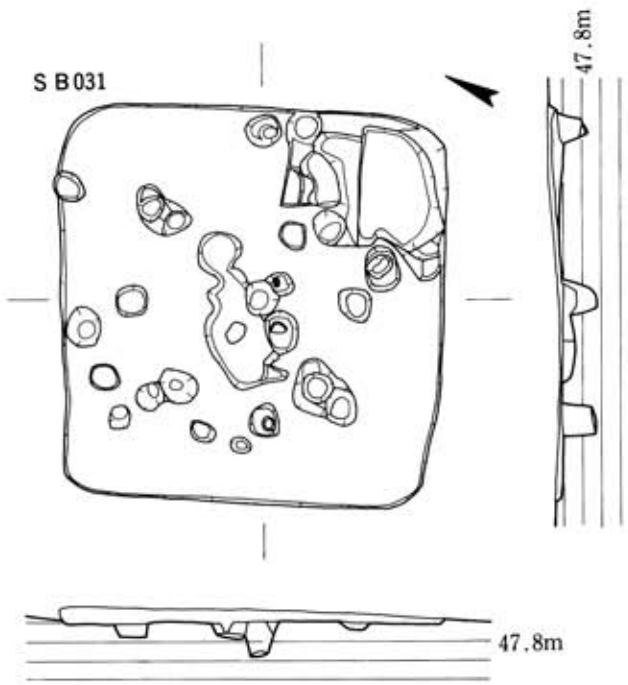


S B017
形態 長方形
規模 5.2m×6.0m 以上
特徴 唯一の長方形住居跡。西側に一部焼土が散る。柱穴、炉等不明。溝、土壙に荒らされている。時期は7世紀。

Fig.240 S B014・S B017竪穴住居跡（1/80）

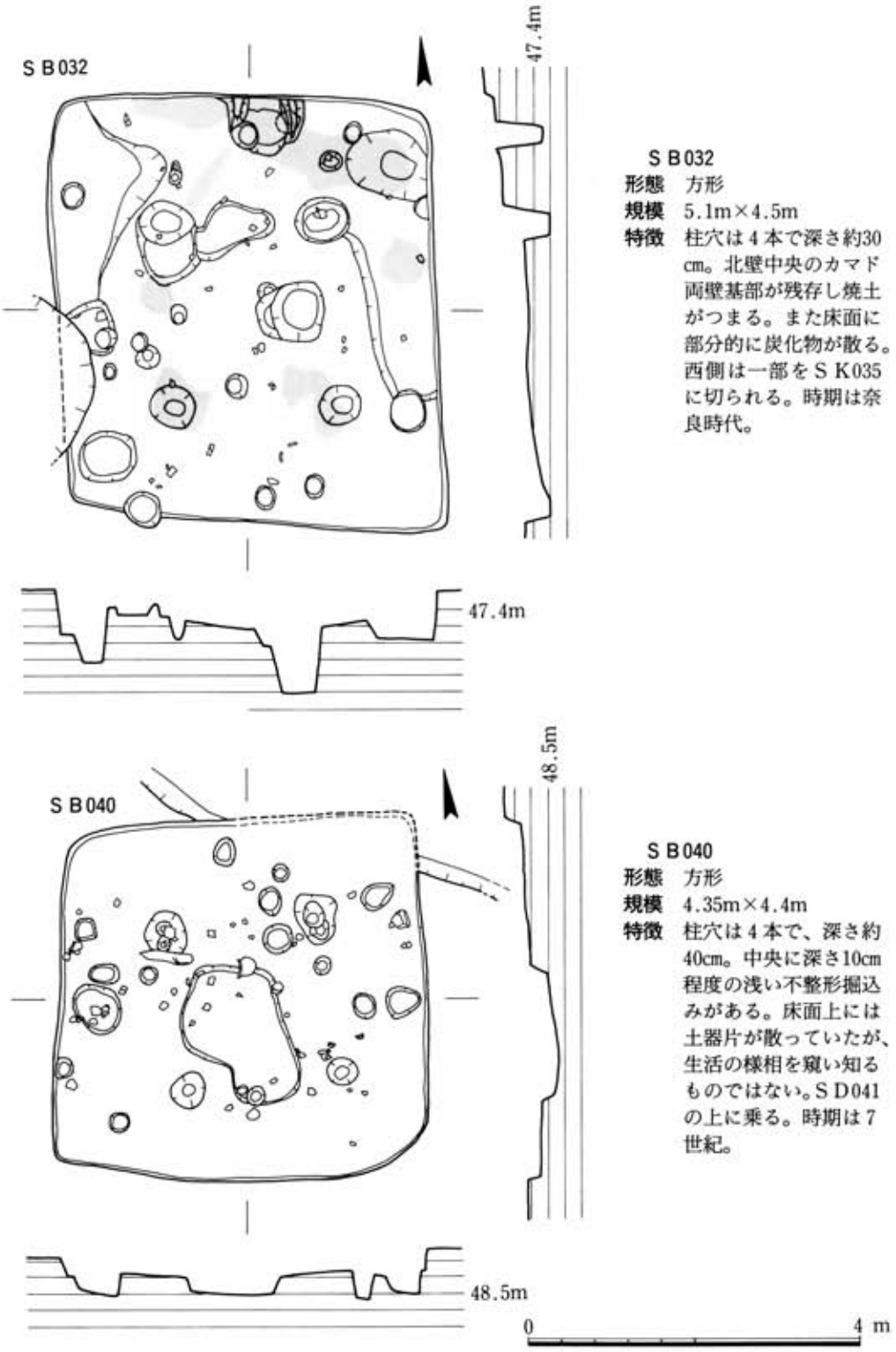


S B018
形態 方形
規模 4.5m×4.7m
特徴 浅く残存。柱穴は4本で深さ約30cm。北壁中央に焼土が残るのはカマドに関係するものか。東壁際に楕円形掘込みあり。時期は7世紀か。



S B031
形態 方形
規模 4.2m×4.1m
特徴 浅く残存。柱穴は4本で深さ約30cm。東南隅の方形掘り込みは付属施設とみられる。中央に楕円形の炉があり焼土がつまり、床面上には部分的に炭化物が散る。時期は7世紀。

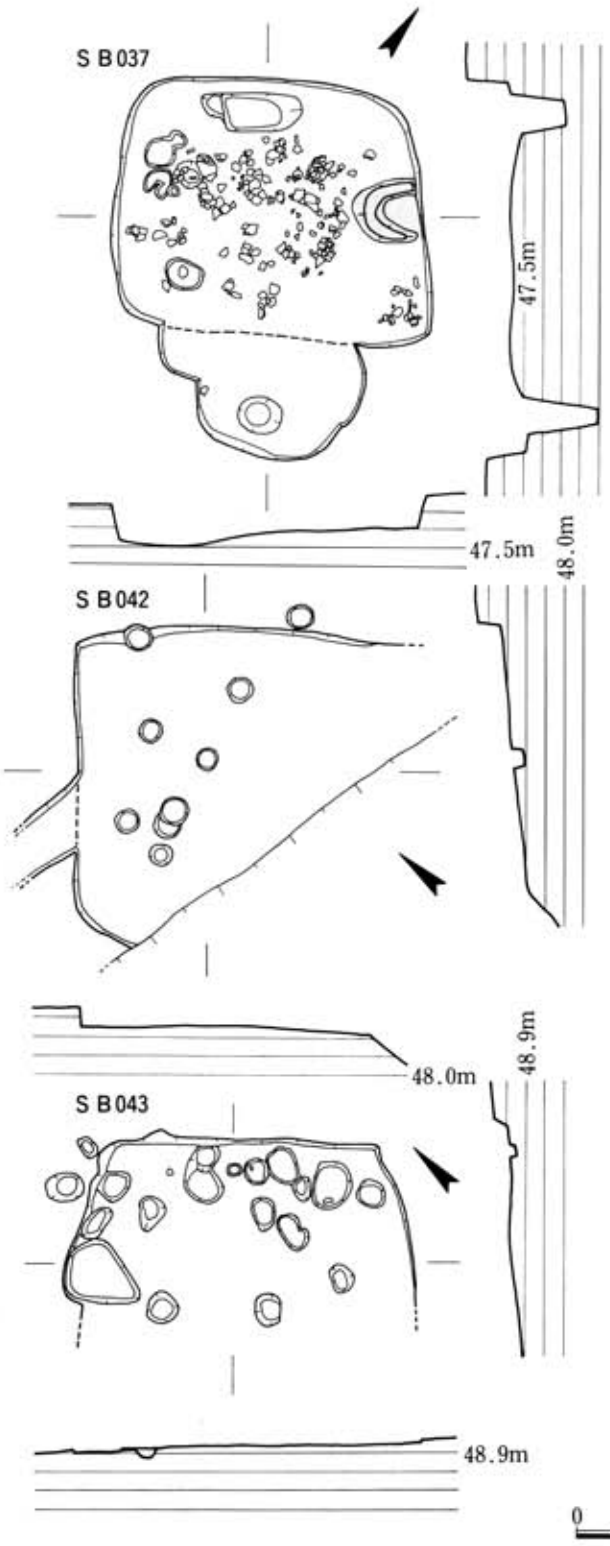
Fig.241 S B018・S B031竪穴住居跡（1/80）



S B032
形態　方形
規模　5.1m×4.5m
特徴　柱穴は4本で深さ約30cm。北壁中央のカマド両壁基部が残存し焼土がつまる。また床面に部分的に炭化物が散る。西側は一部をS K035に切られる。時期は奈良時代。

S B040
形態　方形
規模　4.35m×4.4m
特徴　柱穴は4本で、深さ約40cm。中央に深さ10cm程度の浅い不整形掘込みがある。床面上には土器片が散っていたが、生活の様相を窺い知るものではない。S D041の上に乗る。時期は7世紀。

Fig.242　S B032・S B040竪穴住居跡（1/80）

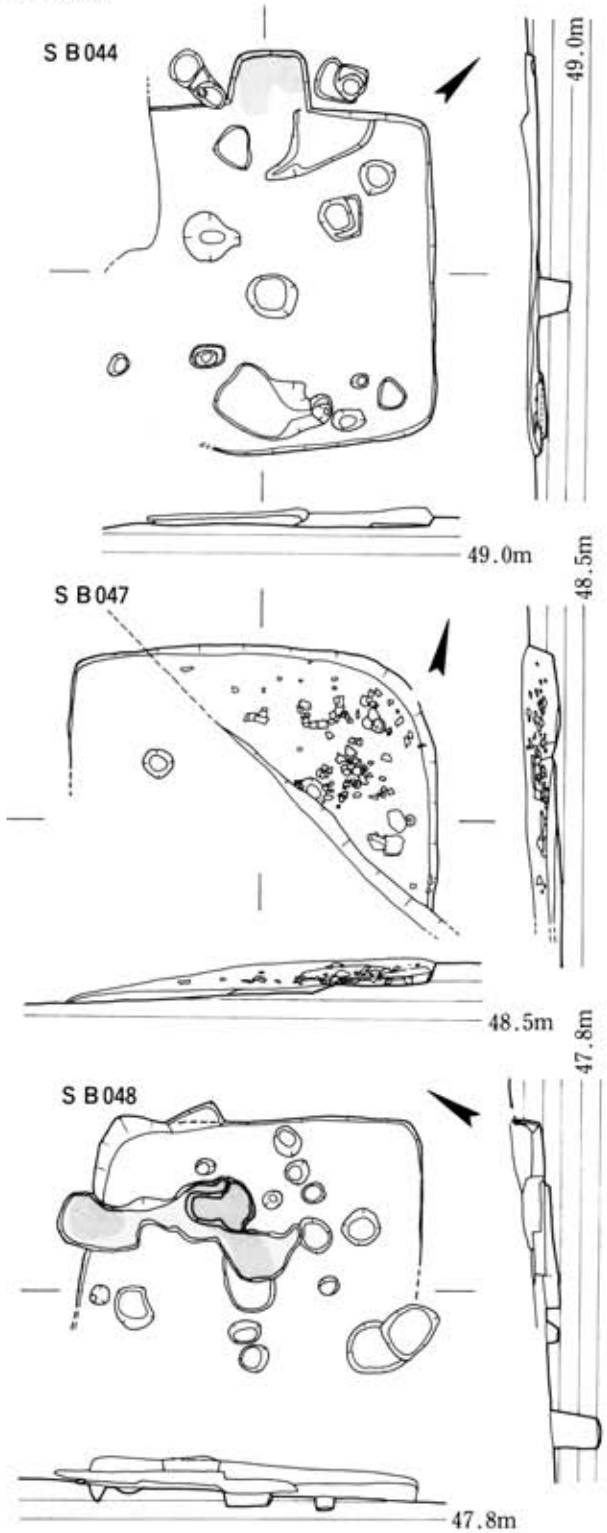


S B037
形態 方形
規模 2.7m×3.3m
特徴 小形竪穴。隅丸で東隅やや張り出す。東北壁際中央にカマド付設。床面から約10cm浮いて土器片多数が出土した。時期は7世紀。

S B042
形態 方形か
規模 3.4m×3.0m(＋α)
特徴 北隅を欠失し、浅く残存する。柱穴不明。

S B043
形態 方形
規模 4.6m×α
特徴 西南側を欠失し、浅く残存する。柱穴不明。

Fig.243　S B037・S B042・S B043竪穴住居跡（1/80）

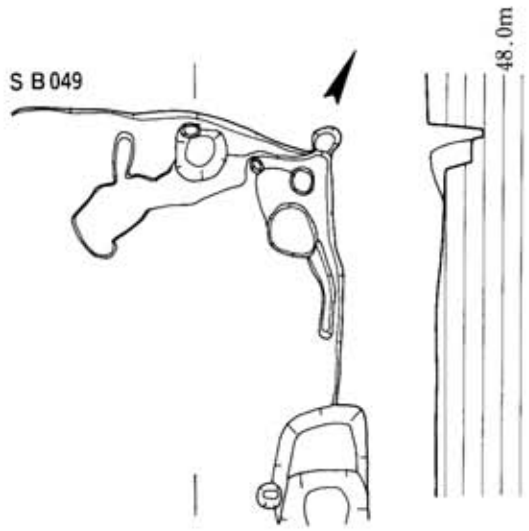


S B044
形態　方形
規模　3.65m×α
特徴　西南壁を欠失する。西北壁に方形の張り出しがあり、焼土がつまっていた。カマドにあたる施設とみられる。時期は8世紀か。

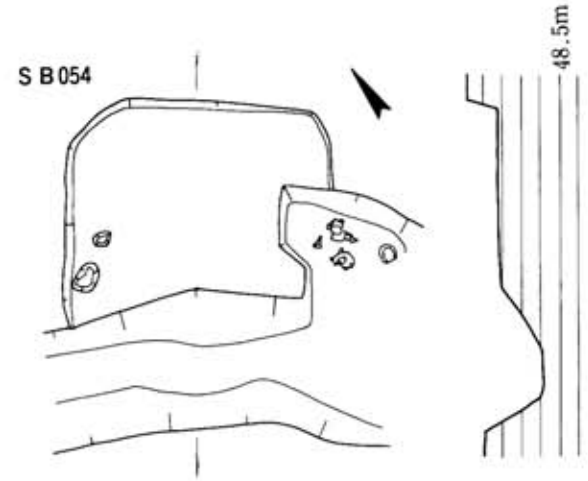
S B047
形態　方形
規模　3.9m×α
特徴　東北隅のみ残存、西北隅は浅くわずかに残る。東北際に一部焼土あり。床面からやや浮いて土器片多く出土。時期は7世紀か。

S B048
形態　方形か
規模　3.5m×α
特徴　西側を欠失する。北壁際に焼土が一部残るが荒らされていて関係不明。

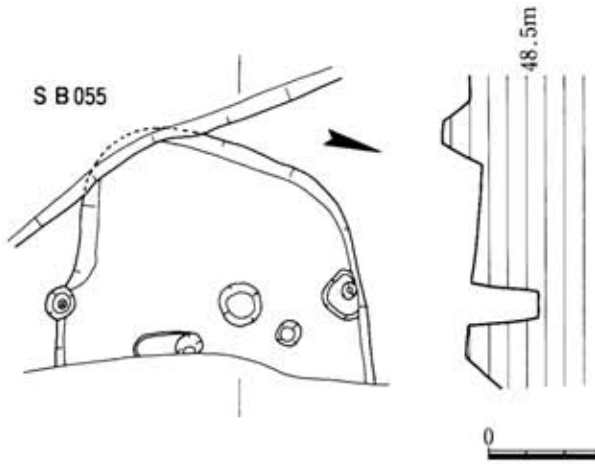
Fig.244　S B044・S B047・S B048竪穴住居跡（1/80）



S B049
形態 方形か
規模 不明
特徴 東辺と北辺の一部が浅く残る。北壁際に一部焼土が散る。



S B054
形態 隅丸方形
規模 2.85m ×2.4m(+α)
特徴 小形竪穴。S D041より後出するが、西南側の検出困難。柱穴等不明。時期は7世紀。



S B055
形態 隅丸方形
規模 3.3m×2.3m(+α)
特徴 不整形な小形竪穴。東側を欠失する。柱穴等不明。

Fig.245 S B049・S B054・S B055竪穴住居跡（1/80）

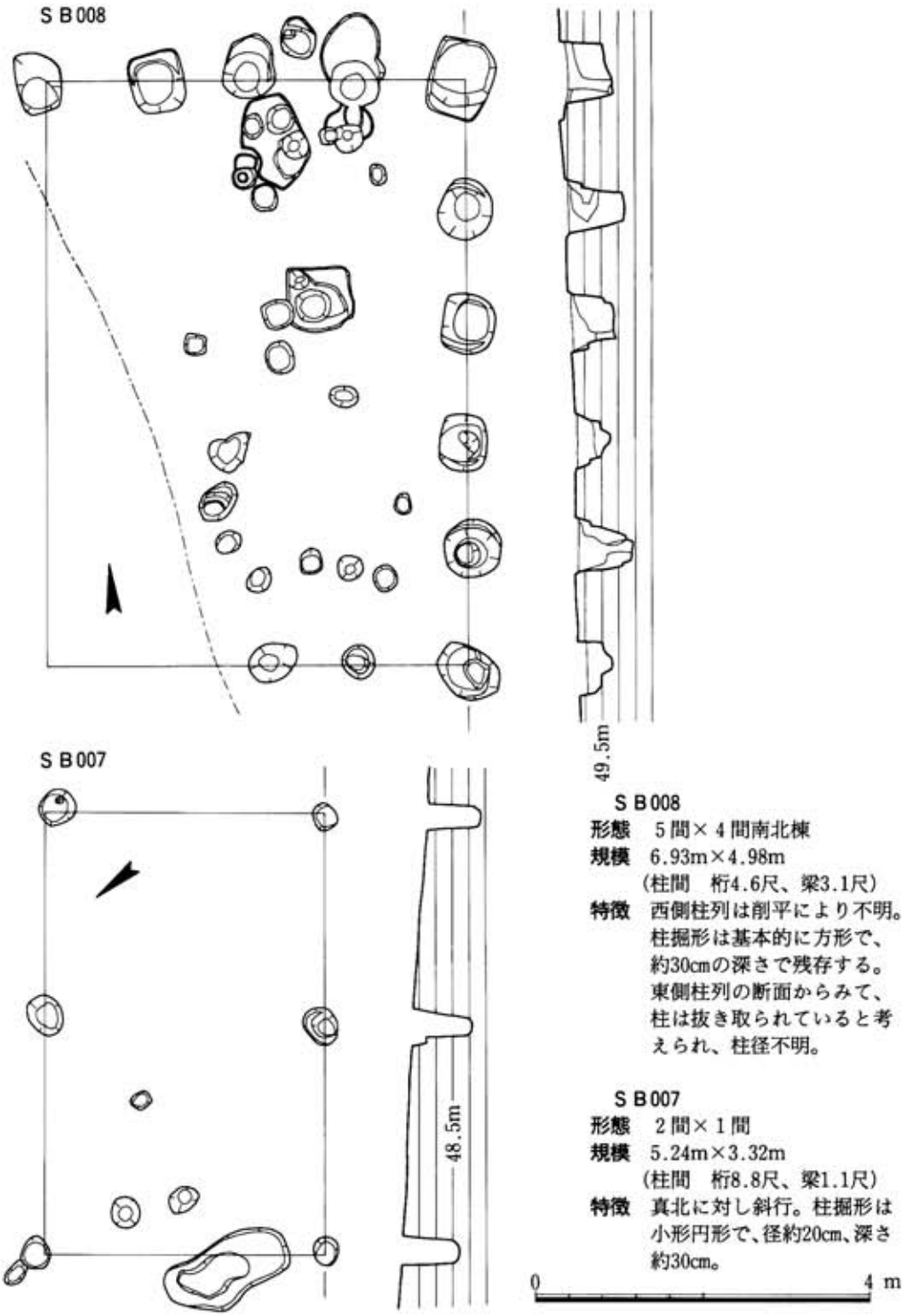
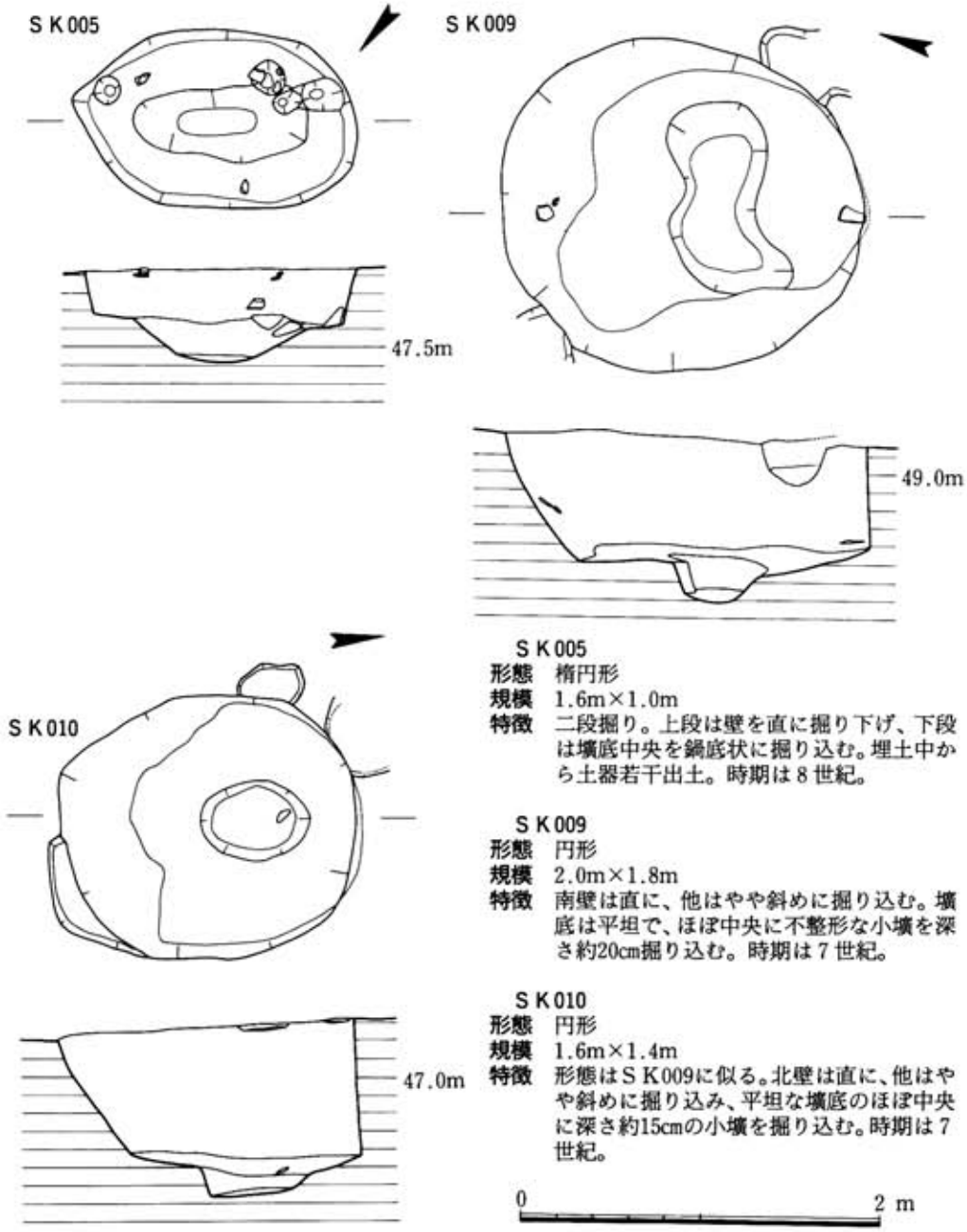


Fig.246　S B007・S B008掘立柱建物跡（1/80）

(2) 土　壙

遺跡全体の削平が著しいため、遺構がどうか判別に苦しむ浅い掘り込みが多い。ここでは掘形が明らかな14基を遺構として図示する（Fig.247～251）。時期は7～8世紀が中心と推定され、形状は方形や円形、楕円形と様々で土壙墓を含むと思われるが、散在しており性格は不明。

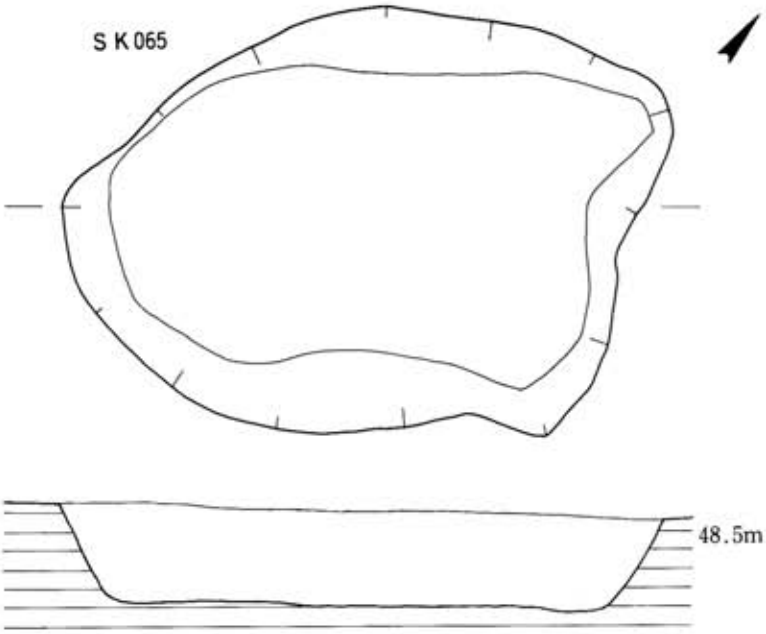


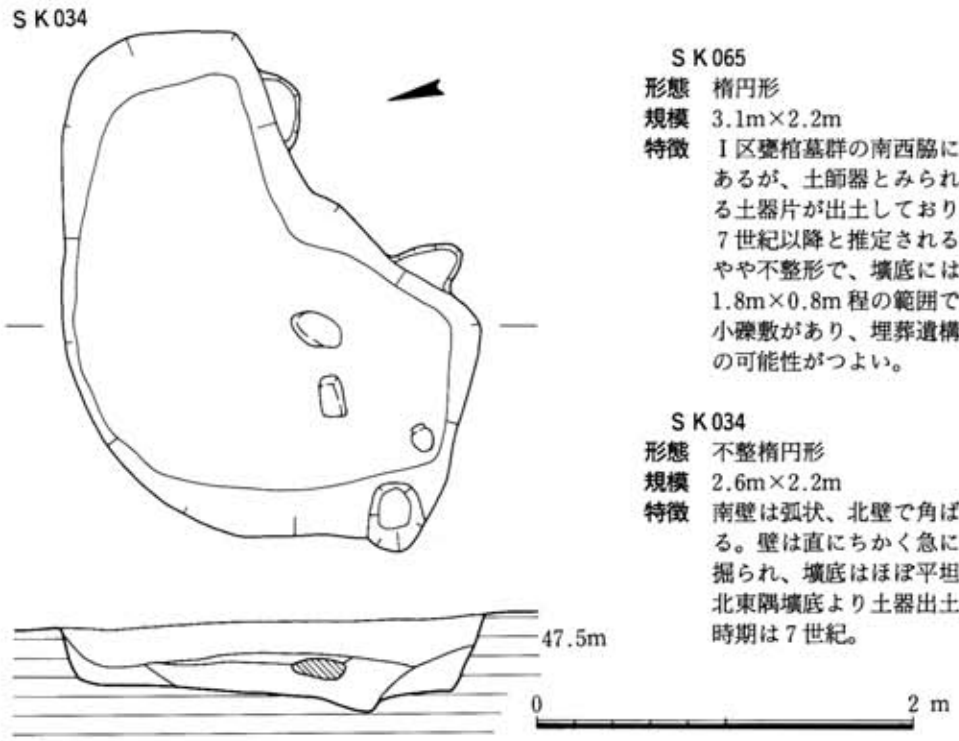
S K005
形態　楕円形
規模　1.6m×1.0m
特徴　二段掘り。上段は壁を直に掘り下げ、下段は壙底中央を鍋底状に掘り込む。埋土中から土器若干出土。時期は8世紀。

S K009
形態　円形
規模　2.0m×1.8m
特徴　南壁は直に、他はやや斜めに掘り込む。壙底は平坦で、ほぼ中央に不整形な小壙を深さ約20cm掘り込む。時期は7世紀。

S K010
形態　円形
規模　1.6m×1.4m
特徴　形態はS K009に似る。北壁は直に、他はやや斜めに掘り込み、平坦な壙底のほぼ中央に深さ約15cmの小壙を掘り込む。時期は7世紀。

Fig.247　S K005・S K009・S K010土壙（1/40）

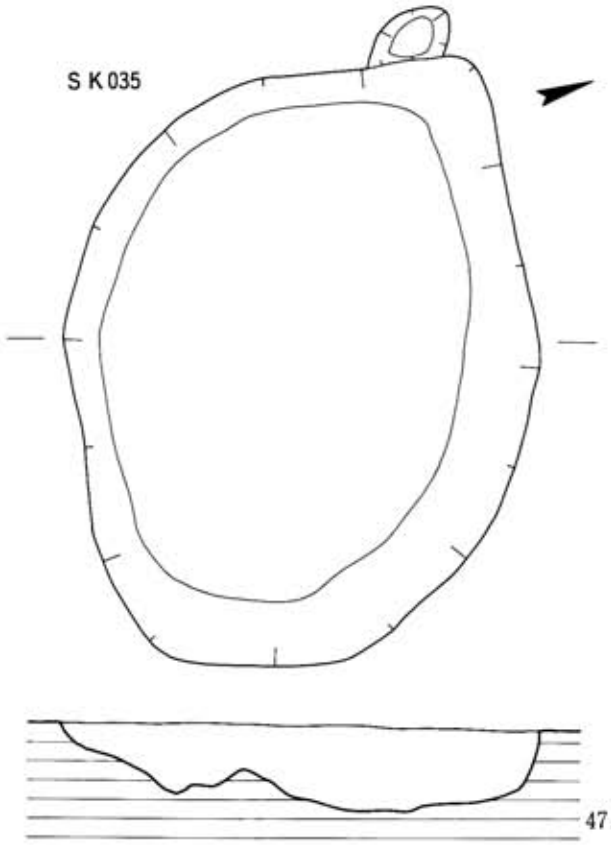




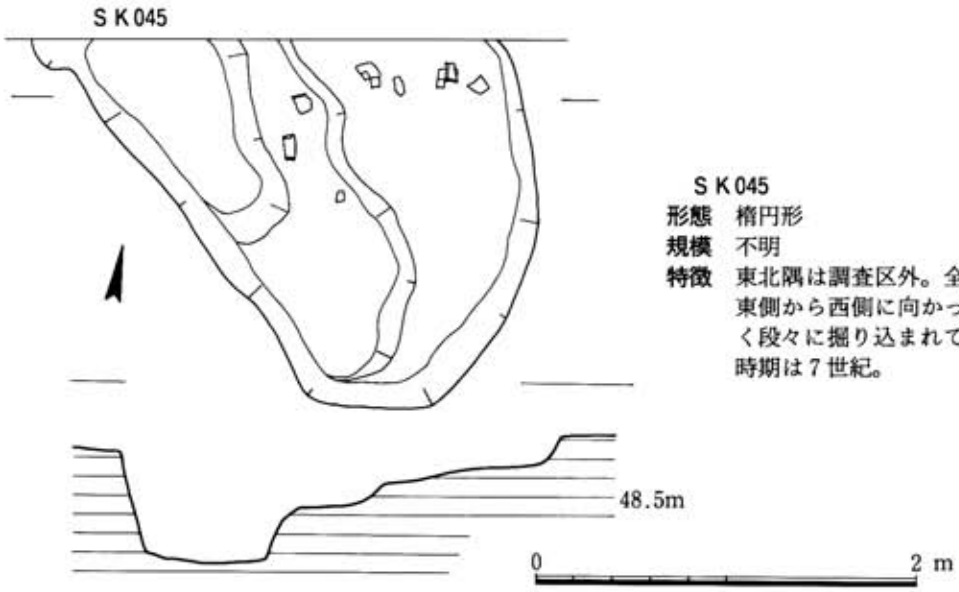
ＳＫ065
形態　楕円形
規模　3.1m×2.2m
特徴　Ⅰ区甕棺墓群の南西脇にあるが、土師器とみられる土器片が出土しており、７世紀以降と推定される。やや不整形で、壙底には、1.8m×0.8m 程の範囲で小礫敷があり、埋葬遺構の可能性がつよい。

ＳＫ034
形態　不整楕円形
規模　2.6m×2.2m
特徴　南壁は弧状、北壁で角ばる。壁は直にちかく急に掘られ、壙底はほぼ平坦。北東隅壙底より土器出土。時期は７世紀。

Fig.248　ＳＫ065・ＳＫ034土壙（１/40）

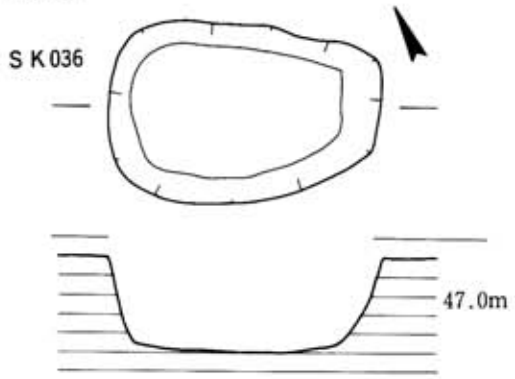


SK035
形態 楕円形
規模 3.1m×2.5m
特徴 全体に整っているが、北側がやや張り出し、壙底は凹凸が著しい。黄褐色土つまる。時期は7世紀。

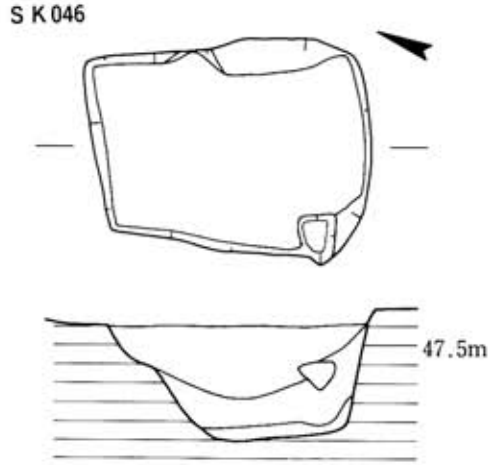


SK045
形態 楕円形
規模 不明
特徴 東北隅は調査区外。全体に東側から西側に向かって深く段々に掘り込まれている。時期は7世紀。

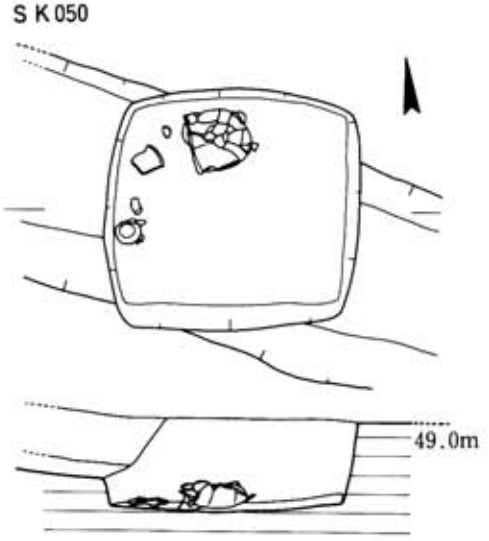
Fig.249 SK035・SK045土壙（1/40）



ＳＫ036
形態　隅丸長方形
規模　1.4m×0.95m
特徴　両短辺のうち西北辺に向けてやや広くなる。壁はやや急に掘り下げ、壙底は平坦。墓壙の可能性がつよいが、時期等不明。

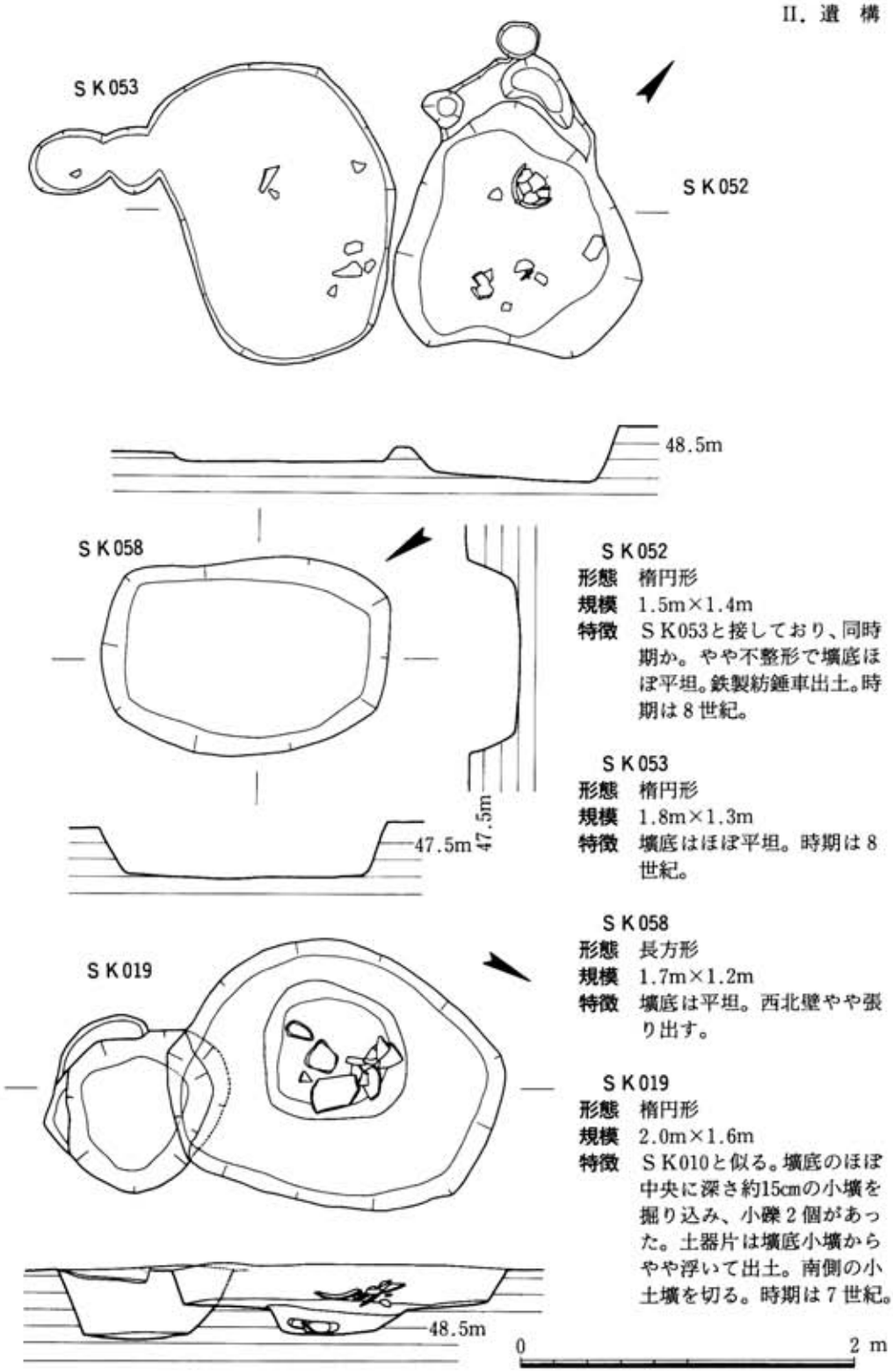


ＳＫ046
形態　長方形
規模　1.5m×1.1m
特徴　両短辺のうち南辺に向ってやや広くなり、かつ深い。埋土は上から黒色土、灰褐色土、真砂土が自然な堆積を示す。時期は奈良時代か。



ＳＫ050
形態　方形
規模　1.9m×2.0m
特徴　ＳＤ041溝（古墳前期）埋土上に掘り込まれている。壁はほぼ直で、壙底は平坦。壙底から甕と坏が出土した。時期は9世紀に下る。

Fig.250　ＳＫ036・ＳＫ046・ＳＫ050土壙（1/40）



SK052
形態 楕円形
規模 1.5m×1.4m
特徴 SK053と接しており、同時期か。やや不整形で壙底ほぼ平坦。鉄製紡錘車出土。時期は8世紀。

SK053
形態 楕円形
規模 1.8m×1.3m
特徴 壙底はほぼ平坦。時期は8世紀。

SK058
形態 長方形
規模 1.7m×1.2m
特徴 壙底は平坦。西北壁やや張り出す。

SK019
形態 楕円形
規模 2.0m×1.6m
特徴 SK010と似る。壙底のほぼ中央に深さ約15cmの小壙を掘り込み、小礫2個があった。土器片は壙底小壙からやや浮いて出土。南側の小土壙を切る。時期は7世紀。

Fig.251 SK052・SK053・SK058・SK019土壙（1/40）

(3) その他の遺構

III区の南辺で大形の方形掘込みに長い通路を付設する遺構を検出した(Fig.252)。時期は埋土中の遺物から平安時代と推定する。方形掘込みは1辺約6 mと大形で残存深約0.6m。2段に掘り込まれ、下段壙底には約0.9m四方で花崗岩礫を方形に敷きつめている。また上段には、図面では示していないが、やはり花崗岩礫を帯状に敷き回してあった(PL.141)。これに続く通路は方形部と上面は同じ幅で下端は狭まって東南方向に曲がりながら6.5m以上伸びるが、底位が南側に向かって上がるため途中から狭くなって調査区外に消える。平面形でみれば井戸を思わせる。しかしながら方形部と通路部との底面のレベルが連続しており、その可能性はなく、性格については不明としておくほかない。

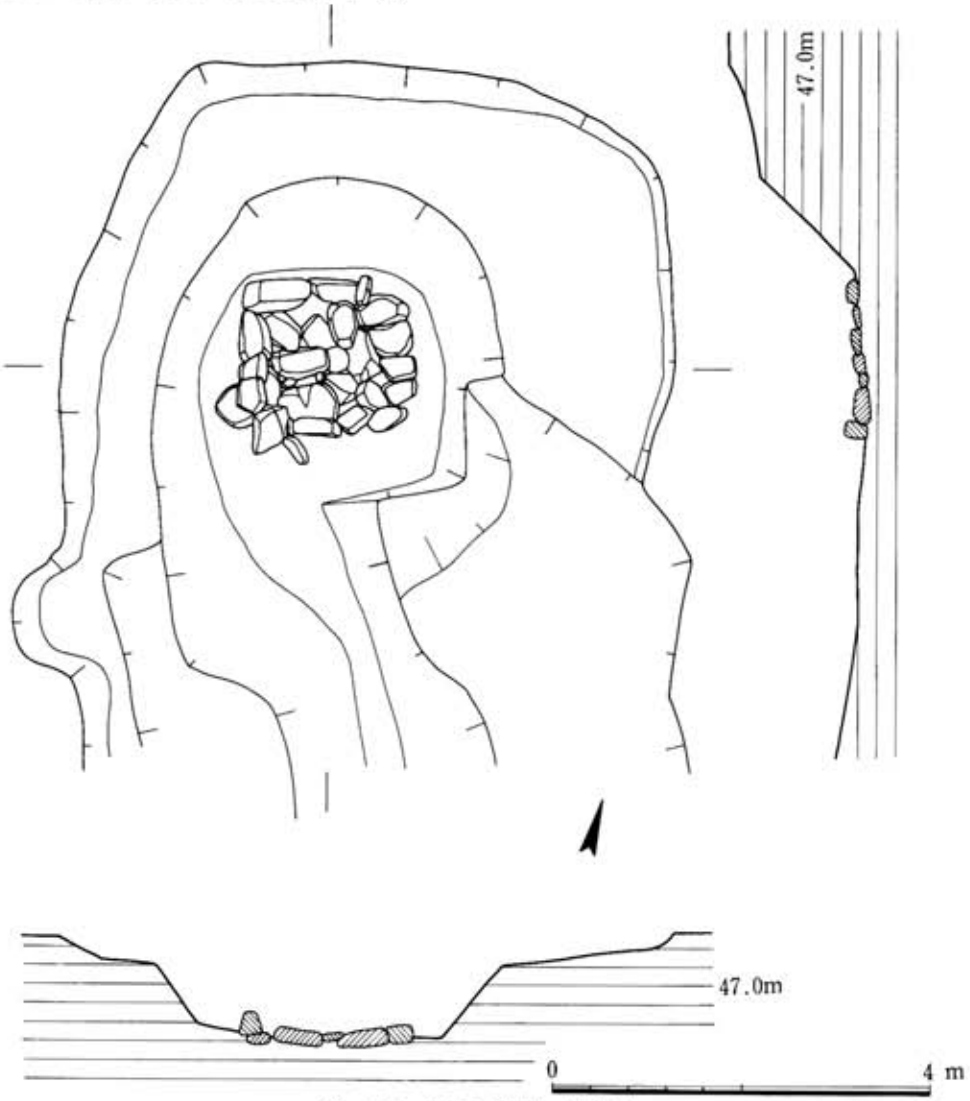


Fig.252 S X039遺構 (1/80)

III. 遺 物

遺構の多寡に応じて、大半は古墳時代末期から奈良・平安期のものである。

縄文時代では石器1点のみ、弥生時代ではI区の甕棺墓7基のほか祭祀土器片等が若干ある。古墳時代に入ると、前期のST002方形周溝墓とSD041溝から土師器がまとまって出土している。今回調査の主体を占める古墳時代末期(7世紀)から奈良・平安時代については継続した集落群を形成するものであることから、出土品も一括して述べることにする。ほとんど土器類である。そのほか、中世鎌倉時代のSD001溝から出土した土器等が若干ある。

1. 縄文時代

サヌカイト製の石匙1点がSK037から出土したほか、早期の押形文土器片を数点採集したにとどまる。点数がごく少なく、また土器片も磨滅した細片であるので、ここではあえて図示しないでおく。

2. 弥生時代

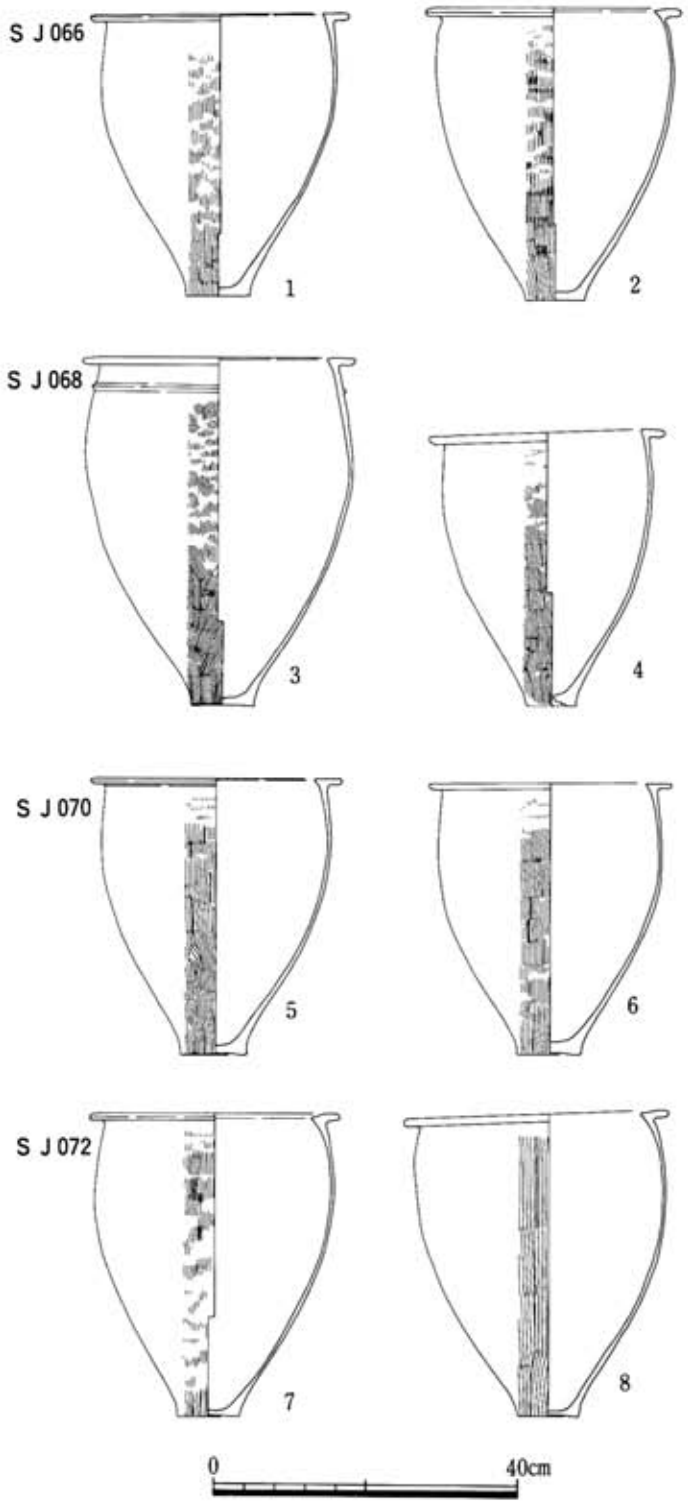
I区南東隅に一群をなす甕棺墓7基のほか、検出面から若干の生活土器破片はあるが住居跡等の帰属遺構の存在は不明である。特殊なものとして、SK073から中器中頃の甕が投棄されたような状態で埋土中から出土しており、精製甕片も含まれることから祭祀行為に関る土器の可能性がある。ただし明確でなく量も少ないので、ここでは甕棺7基のみを図示しておく。時期は弥生中期前半から中期中頃に限られる。

(1) 甕棺墓

SJ066～SJ072の7基が出土した。すべて合せ口式である。

このうちSJ066・SJ068・SJ070・SJ072の4基(Fig.253—1～8)は小児棺で、生活用甕をそれぞれ2個ずつ合わせて使用している。いずれも口縁部は基本的に上面が平坦なL字形をなし、外端は丸味をもち、内端は胴部上位がつよく内傾するのに同調して鋭い稜をもつ。胴部下位は底部付近がつよくしまる。3のみ器高46cmと大形で口縁下に断面三角突帯を廻らすのに対し、他は器高35～40cmで突帯をもたない。4基とも時期は須玖式に属す。

SJ067・SJ069(Fig.254—9～12)とSJ071(Fig.255—13・14)は成人棺。SJ067の場合は生活土器9を上甕に当てる。下甕10は胴部中位がつよく張って2条の三角突帯を廻らせ、上位がつよくしまる。時期は須玖式に置かれよう。SJ069は11・12とも口縁部が内側につよく突出して上面は外側に下がる特徴をもつ。また胴部やや下位に1条または2条の三角突帯を廻らせ、底部付近がしまる。今回検出した7基のうちでは最も古く、唯一汲田式に含められよう。SJ071は鉢形の専用上甕を蓋とし、下甕は器高1mを越す大形甕を使用する。下甕14でみると、口縁部はT字形でその下と胴部に各2条の三角突帯を廻らせ、内外面ともよくナデて仕上げられている。時期は須玖式に属す。



上甕　口外径　33.9cm
1　胴　径　30.8cm
器　高　37.2cm
明茶褐色で黒斑，砂粒多

下甕　口外径　33.7cm
2　胴　径　31.3cm
器　高　38.5cm
明褐色で砂粒多

上甕　口外径　36.0cm
3　胴　径　34.9cm
器　高　46.0cm
明褐色で黒斑，砂粒やや多

下甕　口外径　31.1cm
4　胴　径　27.9cm
器　高　36.1cm
明茶褐色で黒斑，砂粒多

上甕　口外径　33.0cm
5　胴　径　30.1cm
器　高　36.5cm
明茶褐色で砂粒を含む

下甕　口外径　32.0cm
6　胴　径　27.5cm
器　高　35.8cm
明茶褐色で黒斑，砂粒多

上甕　口外径　32.8cm
7　胴　径　31.5cm
器　高　40.2cm
暗茶褐色で黒斑，砂粒多

下甕　口外径　35.0cm
8　胴　径　32.5cm
器　高　40.6cm
淡茶褐色で黒斑，砂粒多

Fig.253　SJ066・SJ068・SJ070・SJ072甕棺（1/10）

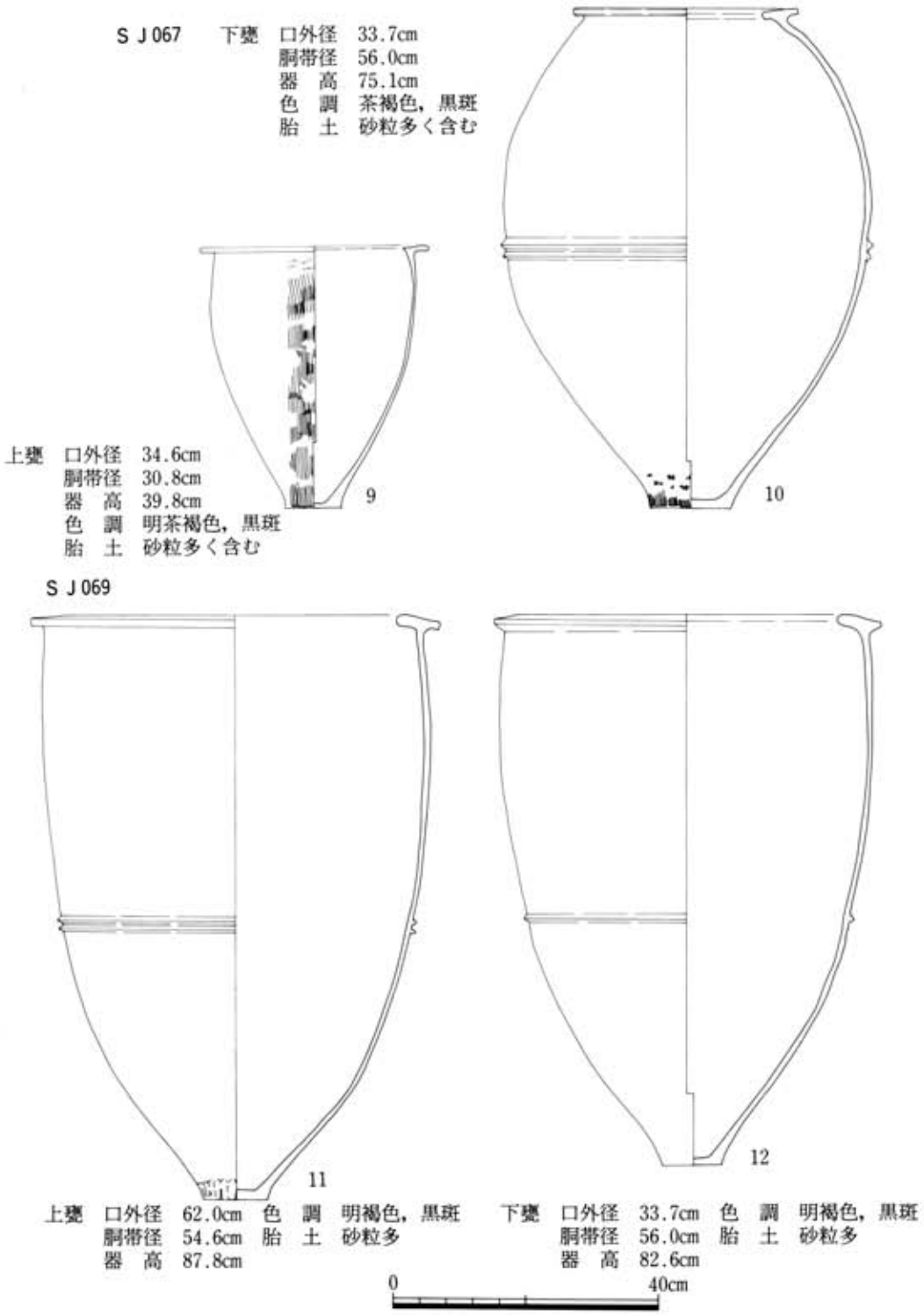


Fig.254 SJ067・SJ069甕棺(1/10)

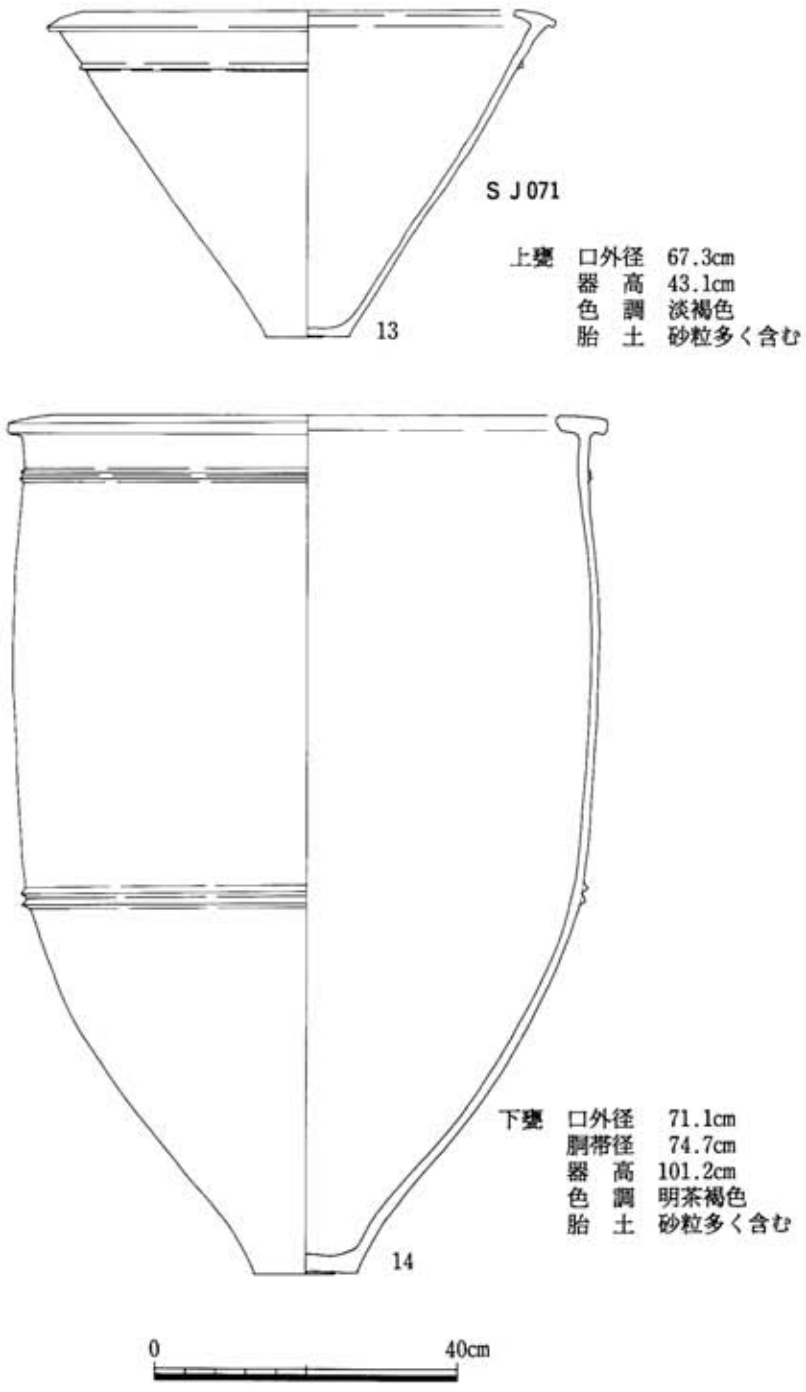


Fig.255　SJ071甕棺(1/10)

3．古墳時代前期

ST002方形周溝墓とSD041溝から、ほぼ同時期といえる土師器が比較的多く出土した。前者は祭祀土器を主体とするが、後者にもそれらが多く含まれる。

(1) 土師器

ST002方形周溝墓出土の土師器は壺・甕・鉢・高坏・器台といった組成をなし、さらにそれぞれの器種に若干のバラエティーがある（Fig.256）。まず壺は大型で口縁がわずかに段をなす15と、頸部が直立して口縁部が2段で急に立つ16、それと小形丸底で頸部が緩く屈曲する18とがある。甕17は口縁部がやや内湾気味に開き胴部が丸底で中位やや上に最大径をおく。鉢には尖底状丸底で口縁部が体部からそのまま続く19と、やや浅く丸底の体部をもち口縁部が屈曲する20～23の二種がある。器台は24の1点のみ。受部は体部が直線的に開き口縁部が薄く短く立つ。高坏25～28のうち、27は大形で筒部が棒状に伸び、弥生終末の特徴を残すものか。29・30は手捏ね風の小鉢である。

SD041溝出土の土師器には壺、甕、鉢、高坏、器台等があり、その内の変化は大きいが、一括してとりあげる（Fig.257・258）。まず甕からみると、31～33は口縁部が屈曲して直線的に開き、口唇内端ややめくれる。胴部は丸底とみられ、33の場合は内面ヘラケズリ、外面は上位ヨコハケから下位タテハケにかわる。34は大形甕。35～38はやや小形の甕で、35～37は口縁部が屈曲して内湾気味あるいは直線的に開き口唇部が内にめくれる。39は小形甕。40は壺底部を思わせるが、小さな平底に焼成前の穿孔を施した甑である。鉢では42・43が浅い丸底体部から口縁部が屈曲して大きく開く薄手の精良品。44～47はそれらよりやや深く、口縁部は屈曲し内湾気味のものが多い。48は二重口縁の特徴を残す。49はいわゆる小形丸底坩の良精品。50～53は台付甕または鉢の底部である。

壺には大形二重口縁54・55、頸部がしまり口縁部は二段に急に立つ56、直立頸部に口縁部が平坦から明瞭な段をなして大きく開く57・58、頸部がしまり口縁部が屈曲して急に立つ59、丸底長頸60・61の5種がみられる。62・63の壺底部はいずれも小さな平底を残す。高坏には3種があり、64は坏部が平たく、65は短かな筒部に裾が大きく開く台部が付き、66・67は台部裾が屈曲して開く。器台68は脚部がストレートに高く開く。

ST002方形周溝墓出土の土師器は佐賀平野東端のこの地域における古墳時代初期の様相をもつものであり、布留2式に対置されよう。近くの遺跡では鳥栖市永吉町の本川原方形周溝墓出土土師器群が布留期でもやや古く、さらに前方後方墳出土土師器の一群は庄内期に遡る。ただ、このうち大形壺15は小児棺の可能性がつよい。SD041溝出土の一群は多彩で、生活土器に祭祀土器等を多く含むものであるが、さほど時期差はないとみられ、ST002方形周溝墓とほぼ同時期としてよいであろう。遺物個々の説明はTab.37による。

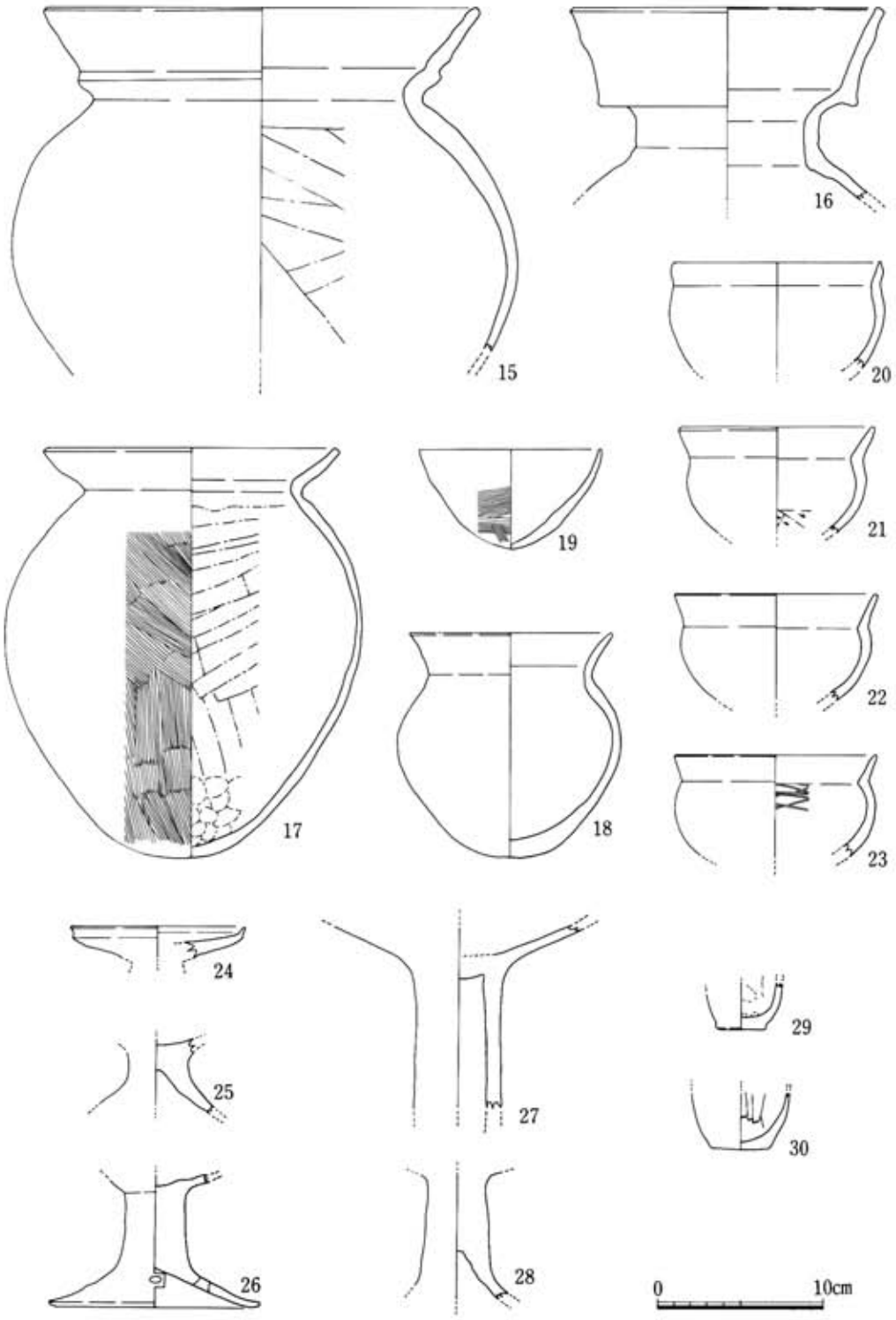


Fig.256　ＳＴ002方形周溝墓出土土師器（１/４）

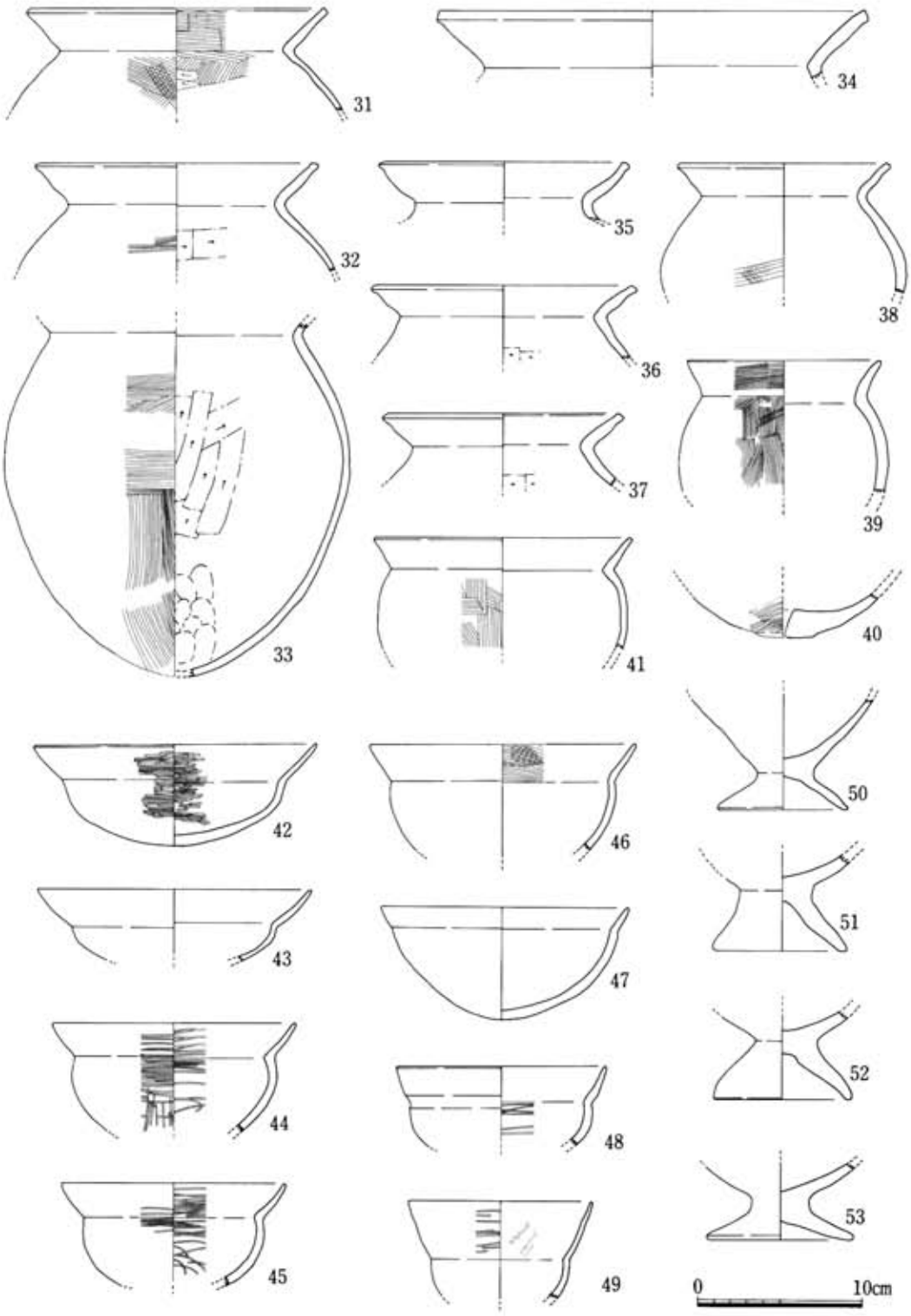


Fig.257　S D041溝出土土師器　1（1/4）

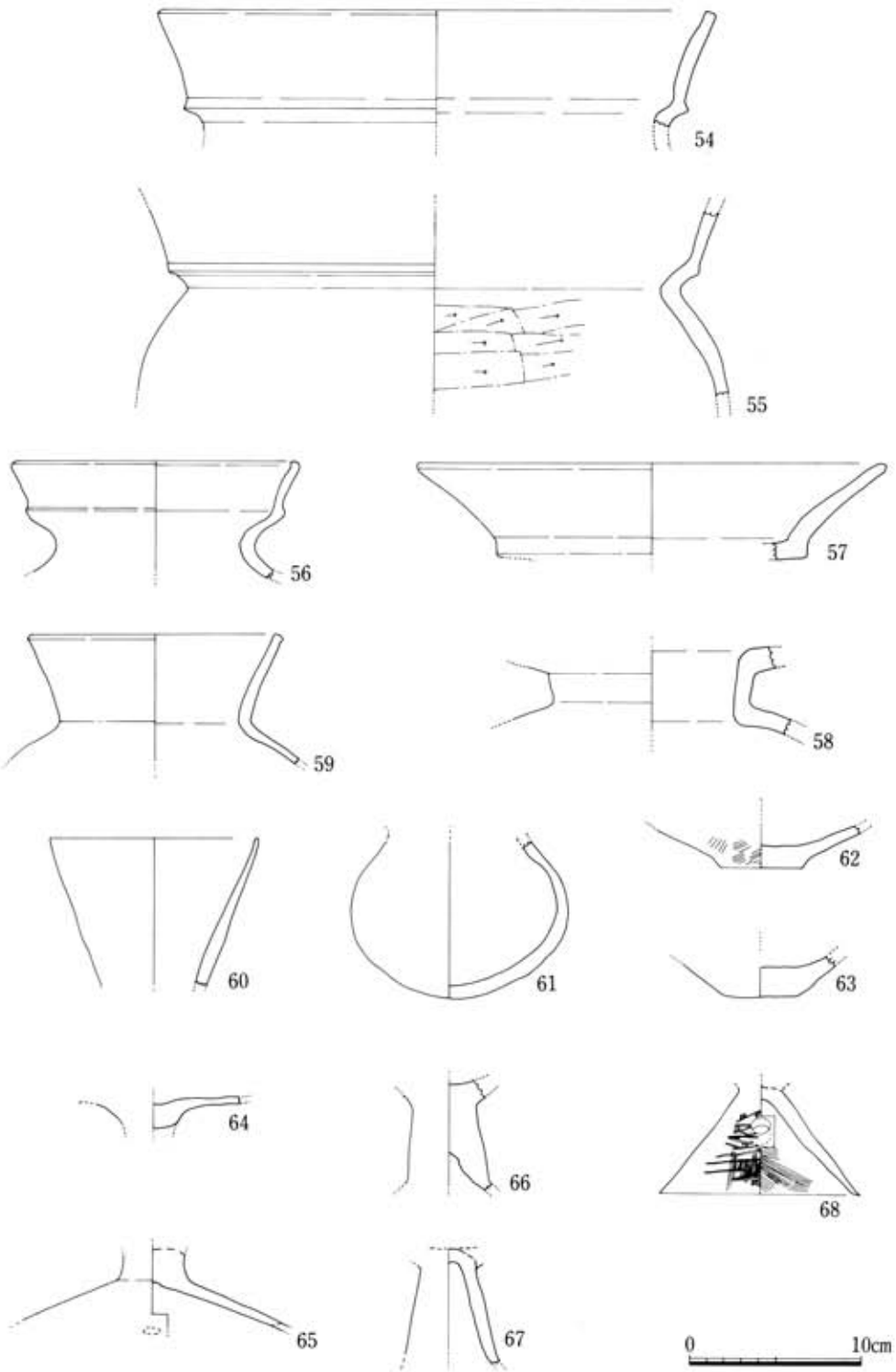


Fig.258　ＳＤ041溝出土土師器　２（１/４）

Tab.37 古墳前期土師器観察表

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器 種	法 量cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
256-15 8900125	SD002	土師器 壺	口径25.6 胴径29.8	二重口縁壺。口縁部は直線的に開き、頸部との境に段をなす。胴部は中位最大径でやや偏球。	口頸部ナデ。胴部は内面ヘラケズリ、外面ハケメ後ナデ。明褐色でやや粗い砂粒含む。
-16 8900557	〃	〃	口径18.3	二重口縁壺。口縁部は急に立ち上がり、頸部との境に明瞭な段。頸部は短く立つ。球状胴部か。	口頸部ナデ。明褐色で砂粒多く含む。
-17 8900003	〃	土師器 甕	口径 8.6 胴径21.3 器高24.5	口縁部は内湾気味に大きく開く。胴部は中位やや上に最大径をおき、丸底倒卵形。	口縁部ナデ。胴部は内面ヘラケズリ、外面ハケメ後肩位ナデ。褐色で砂粒多く含む。
-18 8900007	〃	〃	口径12.0 胴径13.0 器高13.4	口縁部は頸部との境がやや不明瞭のまま外反気味に開く。胴部はやや平底の名残ある厚い丸底。	内外面ともナデ仕上げ。明褐色で粗砂粒多く含む。
-19 89005870	〃	土師器 鉢	口径11.0 器高 6.0	口縁部は体部からそのまま伸びる。尖底状。	内面ナデ、外面ハケメのあと口縁部ナデ。褐色で砂粒少し含む。
-20 8900559	〃	〃	口径12.4 胴径12.4	口縁部は体部から不明瞭に折れて短く立つ。体部は張りがよわく丸底か。	内外面ナデ。明褐色で粗砂粒含む。
-21 8900553	〃	〃	口径11.4 胴径10.8	口縁部は体部から明瞭に折れて直線的に開く。体部は上位でやや張り、丸底か。	体部下半は内外面ともヘラケズリ。他ナデ。褐色で粗砂粒多く含む。
-22 8900554	〃	〃	口径12.0 胴径11.5	〃	内外面ナデ。明茶褐色で、粗砂粒多く含む。
-23 8905866	〃	〃	口径12.2 胴径12.0	〃	体部内面上位に粗いヘラミガキ、他ナデ。明褐色で砂粒含む。
-24 8805869	〃	土師器 器 台	口径10.4	受部は厚い体部から薄い口縁部が短く折れて立ち上がる。	受部が内外面ナデ。茶褐色。
-25 8805873	〃	土師器 高 坏	残高 4.5	脚は短い筒部から裾が大きく開く。	脚部内外面ナデ。明茶褐色。
-26 8900556	〃	〃	底径12.4 脚高6.8	筒部は芯がつまり柱状、裾部は低く大きく開き、透し2孔。	脚部は内外面ナデか。褐色で砂粒多く含む。
-27 8900560	〃	〃	残高11.0	筒部は中空で長く伸び、坏体部は大きく直線的に開く。	脚筒部と坏体部は内外面ナデ。茶褐色で砂粒多く含む。
-28 8900552	〃	〃	残高 7.6	筒部は芯がつまり柱状。	脚部内面ヘラケズリ、外面ヘラナデ。暗褐色で砂粒多く含む。
-29 8900561	〃	土師器 鉢	底径 2.3	手捏小鉢。平底から体部が急に立ち上がる。	内面指押え、外面ナデ。灰褐色で軟質。砂粒含む。
-30 8900551	〃	〃	底径 3.4	小鉢。平底から体部が急に立ち上がる。	内面ヘラナデ、外面ナデ。明褐色で砂粒多く含む。
257-31 8900578	SD041	土師器 甕	口径18.0	口縁部はく字に折れて直線的に開き口唇部はナデてややめくれる。	胴部内面ヘラケズリ、他ハケメ後口縁部外面ナデ。薄手。暗褐色で砂粒含む。
-32 8900577	〃	〃	口径16.6	〃	胴部内面ヘラケズリ、外面ハケメ。薄手。口縁部ナデ。褐色で砂粒含む。

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器　種	法　量cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
257-33 8810849	S D041	土師器 甕	胴径21.3 胴高21.0	く字口縁欠失。胴部はやや尖底気味の丸底で中位やや上が張る。	胴部外面ハケメ、内面ヘラケズリ。薄手。暗褐色で砂粒含む。
-34 8900202	〃	〃	口径25.6	大型甕。口縁部はく字に折れて開く。	口縁部外面ナデ、外面ハケメ。明褐色で砂粒含む。
-35 8900573	〃	〃	口径14.4	口縁部は胴部と明瞭な稜をなさずに折れ、内湾気味に開き、口唇部めくれる。	口縁部内外面ナデ。褐色で砂粒含む。
-36 8900574	〃	〃	口径15.4	口縁部はく字形に折れて直線的に開き口唇部はナデてややめくれる。	口縁部ナデ、胴部内面ヘラケズリ。薄手。褐色で砂粒含む。
-37 8900575	〃	〃	口径14.0	〃	〃
-38 8809695	〃	〃	口径12.4 胴径14.8	口縁部はく字に折れて開き、胴部は中位が張る。	胴部外面ハケメ後ナデ、他ナデ。褐色で砂粒含む。
-39 8900576	〃	〃	口径11.6 胴径13.1	小型甕。口縁部はく字に折れて外反気味に立ち上がる。胴部球状。	外面ハケメ、内面ナデ。褐色で砂粒含む。
-40 8900188	〃	土師器 甑	底径 3.0	鉢形の甑か。底部はぶ厚い小さな平底で、体部は丸く立ち上がる。焼成前穿孔1。	体部外面タタキメ、内面ナデ。淡茶褐色で砂粒含む。
-41 8900134	〃	土師器 鉢	口径15.5 体径15.2	口縁部はく字に折れ、薄く直線的に開く。体部は上位が張る。	口縁部外面ナデ、内面ハケメ後ナデ。体部外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。体部スス付着。褐色で微砂粒含む。薄手。
-42 8900815	〃	〃	口径18.0 器高 6.0	口縁部は体部からやや不明瞭に折れて長伸。体部は浅く丸底。	内外面ヘラミガキ。薄手。褐色で砂粒含む。
-43 8900816	〃	〃	口径16.0	口縁部は内湾気味に長伸。体部は浅い。	体部外面ハケメ後ナデ、他ナデ仕上げ。薄手。褐色で微砂粒含む。
-44 8806468	〃	〃	口径14.9 体径12.3	口縁部は体部からく字に折れ、内湾気味に開く。体部は丸味をもつ。	内外面ヘラミガキ。茶褐色で砂粒含む。
-45 8806464	〃	〃	口径13.8 体径11.0	〃	〃
-46 8900206	〃	〃	口径15.9 体径13.9	口縁部は体部からやや不明瞭に折れて立ち上がる。体部やや深い。	口縁部内面ハケメ、他ナデ。薄手。茶褐色で砂粒含む。
-47 8900317	〃	〃	口径15.0 器高 6.0	口縁部は体部から不明瞭に折れて短く立ち上がる。体部は尖底状。	内外面ナデ。褐色で砂粒含む。
-48 8806433	〃	〃	口径15.8 体径11.1	口体間がくぼみ、二段口縁状に口縁部が立つ。体部は丸味をもち浅い。	内外面ナデ後粗いヘラミガキ。暗褐色で砂粒含む。
-49 8806471	〃	土師器 坩	口径11.2 体径 8.4	小さな丸底の体部から口縁部が折れて直線的に長く伸びる。	外面はナデ後粗いヘラミガキ、内面はハケメ後ナデ、さらに口縁部に粗いヘラミガキ。褐色で砂粒含まず。薄手。
-50 8809692	〃	土師器 台付甕	底径 7.7 台高 4.7	胴部は直線的に立ち上がり、台部はやや内湾気味に低く開く。	内外面ナデ。明褐色で砂粒含む。

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器 種	法 量cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
257-51 8810846	SD041	土師器 台付鉢	底径 5.4 台高 3.8	体部は丸味をもって立ち上がり、台部はぶ厚く、高い。	内外面ナデ。明褐色で砂粒少し含む。
-52 8809694	〃	〃	底径 8.4 台高 3.5	〃	内外面ナデ。明褐色で砂粒含む。
-53 8900580	〃	〃	底径 8.9 台高 2.4	体部は丸味をもち、台部はぶ厚く、低く開く。	内外面ナデ。褐色で砂粒含む。
258-54 8900129	〃	土師器 壺	口径31.1	大型二重口縁壺。口縁部は下端接合部が突起し、外反気味に立ち上がる。	口縁部ナデ。明褐色で細砂粒多く含む。
-55 8900204	〃	〃	頸径28.5	大型二重口縁壺。頸部はく字状にくびれ、口縁部は下端接合部に稜をもって立ち上がる。	口縁部ナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラケズリ。暗褐色で砂粒多く含む。
-56 8900208	〃	〃	口径15.8	二重口縁壺。曲線を描きくびれた頸部から稜をもって口縁部が立ち上がり、口唇部はナデてめくれる。	口頸部ナデ。白褐色で砂粒含む。
-57 8906431	〃	〃	口径27.0	二重口縁壺。口縁部は水平面から稜をなして大きく外反して開く。44と同一個体か。	口縁部外面ナデ、内面ナデ後粗いヘラミガキ。明褐色で砂粒含む。
-58 8900205	〃	〃	頸径10.3	二重口縁壺頸部。球状を思わせる胴部から頸部は直に立ち、口縁部の水平面をのせる。43と同一個体か。	頸部ナデ、胴部外面ハケメ後ナデ、内面ナデ。明茶褐色で砂粒多く含む。
-59 8900314	〃	〃	口径14.0	口縁部は胴部からく字に折れて直線的に長く伸びる。	口縁部ナデ。胴部外面ナデ、内面ヘラケズリ。薄手。褐色で砂粒含む。
-60 8806426	〃	〃	口径12.0	長頸壺口縁部。口頸部は先端を薄く、直線的に長伸。	口頸部内外面ナデ。明茶褐色で砂粒含む。
-61 8806473	〃	〃	胴径12.5 胴高 9.0	長頸壺で46と同一器種か。丸底球状胴部。	胴部内外面ナデ。褐色で粗砂粒含む。
-62 8809698	〃	〃	底径 4.8	胴部は低くつぶれ、小さな平底をつくる。	胴部外面タタキメ、内面ナデ。白褐色で砂粒含む。
-63 8806429	〃	〃	底径 4.0	ぶ厚い小さな平底。	内底部ハケメ、外面ナデ。明褐色で砂粒含む。
-64 8810847	〃	土師器 高 坏	残高 1.8	坏部は水平に開く。	坏部内外面ナデ。明褐色で細砂粒少し含む。
-65 8900819	〃	〃	残高 4.5	脚筒部は芯のつまって短く、裾が低く大きく開く。透し2孔。	脚部内外面ナデ。褐色で砂粒含む。
-66 8909697	〃	〃	残高 5.2	脚筒部。芯がつまる。	筒部ナデ。明褐色で砂粒含む。
-67 8900318	〃	〃	残高 5.5	脚筒部。中空。	筒部内外面ナデ。褐色で砂粒含む。
-68 8900320	〃	土師器 器 台	底径11.6 台高 6.0	台部は直線的に開き、先端を薄くつくる。透し2孔。	台部外面ハケメ後粗いヘラミガキ、内面ハケメ。茶褐色で微砂粒含む。

4．古墳時代末期および奈良・平安時代

集落としての継続性から一括してとりあげる。時期は7世紀後半―9世紀初を主体とする。遺跡の性格上、生活土器の土師器・須恵器が大部分で、特殊なものとして瓦片、石製紡錘車片1点、鉄製紡錘車1点がある。ここでは量は多くないが土師器・須恵器のうち、遺構ごとに比較的まとまって出土したものと、鉄製紡錘車を紹介しておく。

(1) 土師器・須恵器

SB037竪穴住居跡から量も多く出土した（Fig.259・260）。土師器ではカマド・甑・甕・壺・高坏・盤・坏等、須恵器では壺・坏・高坏がみられる。土師器のうち69はカマド片で、下垂した大きな鍔を廻らせ粗い調整を特徴とする。70～72は甑、70の2把手を残すが、口縁部は短く屈曲するものと、体部からそのまま伸びるものとがある。甕のうち大形の73～76は丸底にちかい不安定な平底で、口縁部は外にめくれる傾向がつよく、調整は外面ナデ、内面ヘラケズリで一定している。中・小形の甕のうち、77は胴部上位がしまるのに対し、79・80は直立、78・81は胴部が浅い特徴をもつ。82は盤、高坏83は小さな脚部に体部途中が緩かに屈曲した坏部が付く。須恵器には87～98の坏類、99・100の高坏、101壺がある。これらの時期は7世紀後半を中心とするものといえよう。

一括してFig.261に示したもののうち、SB047竪穴住居跡出土の102は土師器甕、103は須恵器提瓶。SB054竪穴住居跡出土の104・105は須恵器坏類。またSK050土壙からは土師器がまとまって出土しており、甕106は不安定な平底から胴部が直立気味に立ち、広口屈曲口縁、甕107は胴部上位がつよくしまり口縁部がゆるく外反、108は小形甕。坏109・110は体部が底部と稜をなしてやや内湾気味に浅く立ち上がる。SB044竪穴住居跡からは土師器の甕111、高坏112、須恵器の坏類113・114、壺蓋115などがある。SK050の一群は9世紀初に降るか。SB047は7世紀後半、SB044は7世紀前半に溯るものであろう。

Fig.262にあげたもののうち、SB008竪穴住居跡出土の須恵器坏116は8世紀前半。SB032からは土師器の甕119～122、甑123、須恵器坏124のほか、土師質の分胴125と勾玉模造品の破片かと思われる126がある。時期は8世紀前半に含められよう。SX039性格不明遺構からは比較的多くの土師器・須恵器片が出土したが、7世紀後半から9世紀初まで時間幅がみられるが一括してあげておく。

以上のほかの竪穴住居跡、土壙からも土師器・須恵器が出土しているが、全体に遺構の削平が著しいため量は少なく、また器種の組合わせという点でも殆どが破片で内容が不詳であるのでここでは敢えてとり上げない。Tab.36に示した各遺構の時期を判別する資料として用いるにとどめた。

遺物個々の詳細はTab.38による。

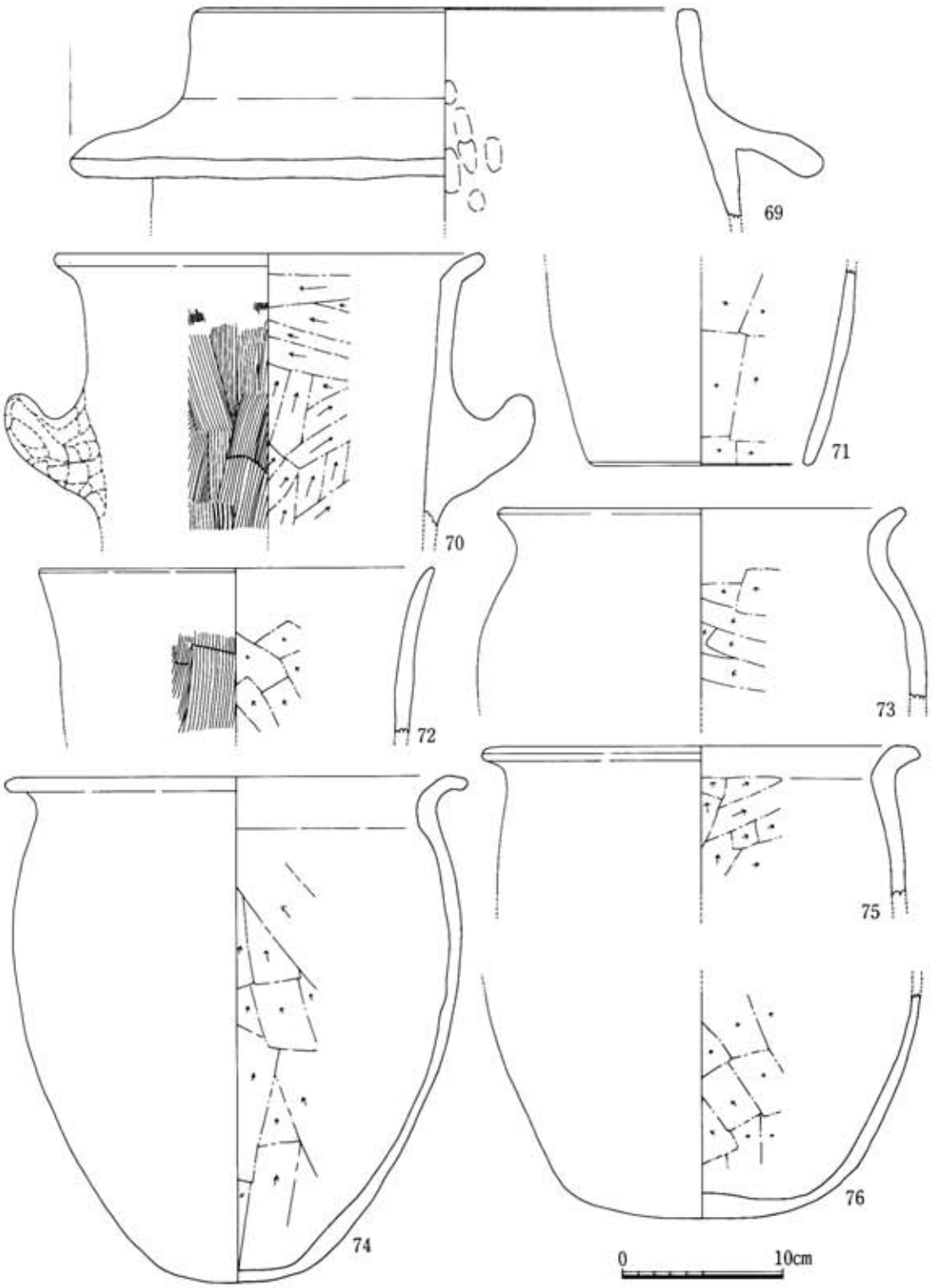


Fig.259　S B037竪穴住居跡出土土器　1（1/4）

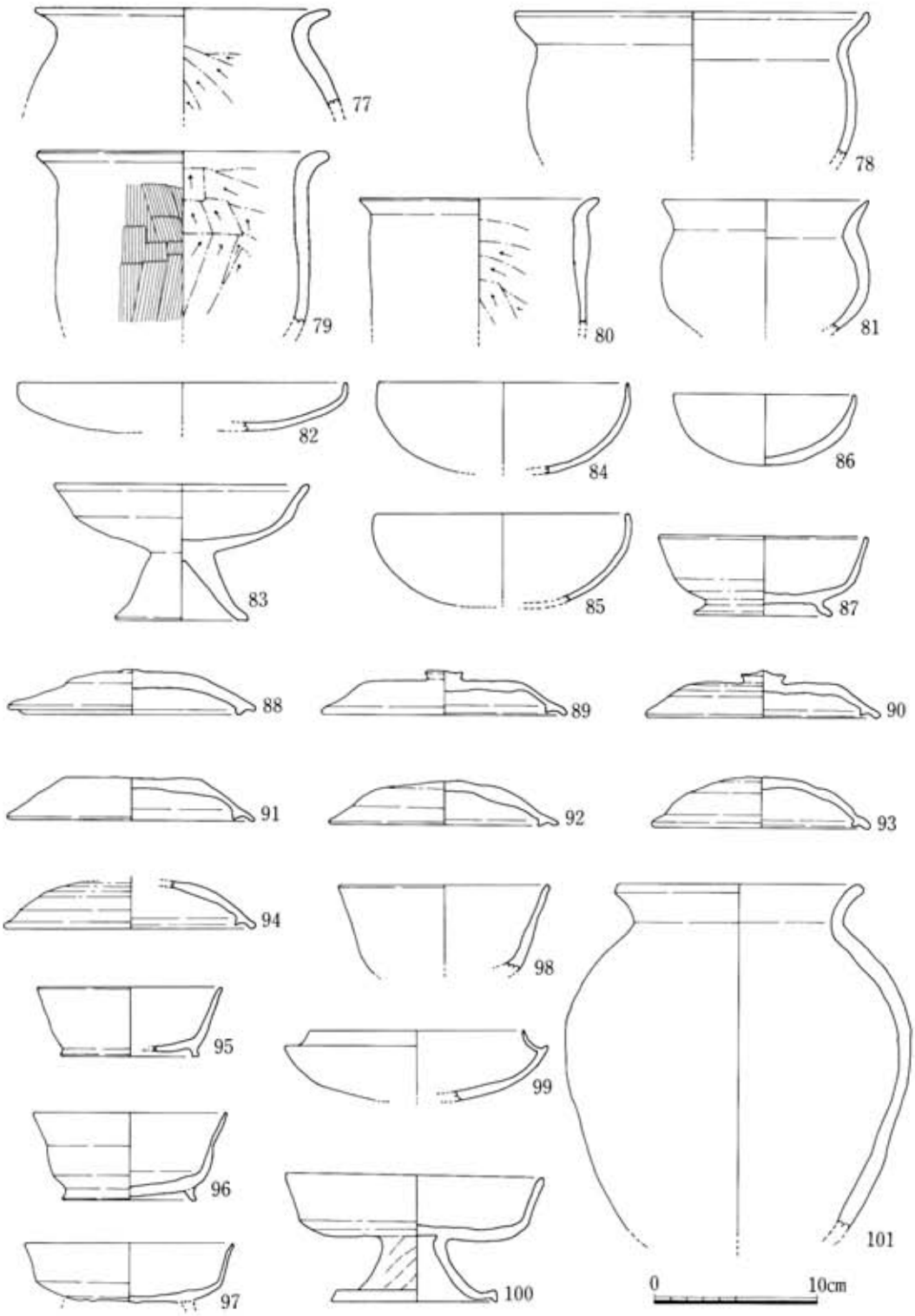


Fig.260　S B037竪穴住居跡出土土器　2（1/4）

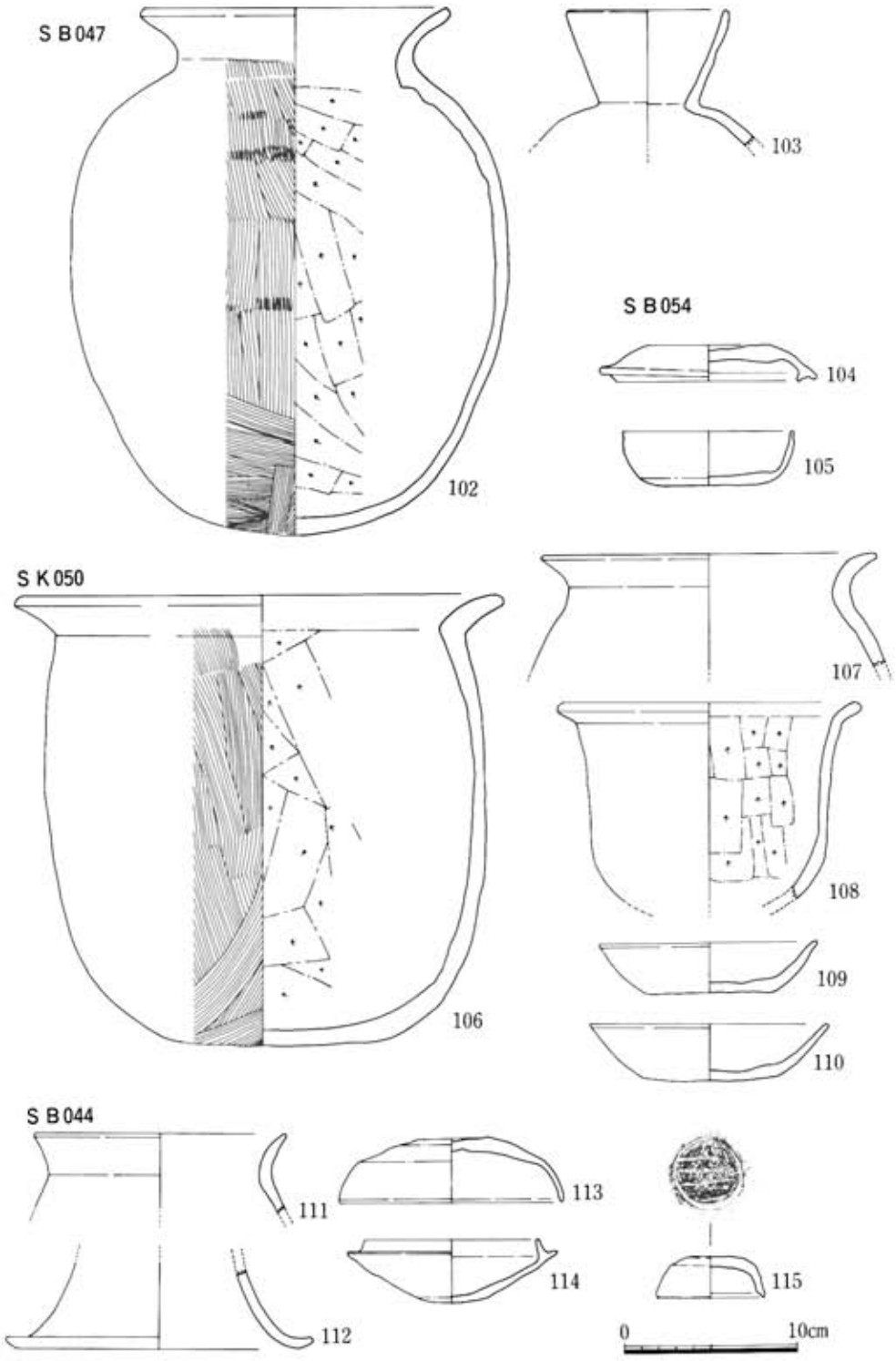


Fig.261　その他の竪穴住居跡・土壙出土土器　1（1/4）

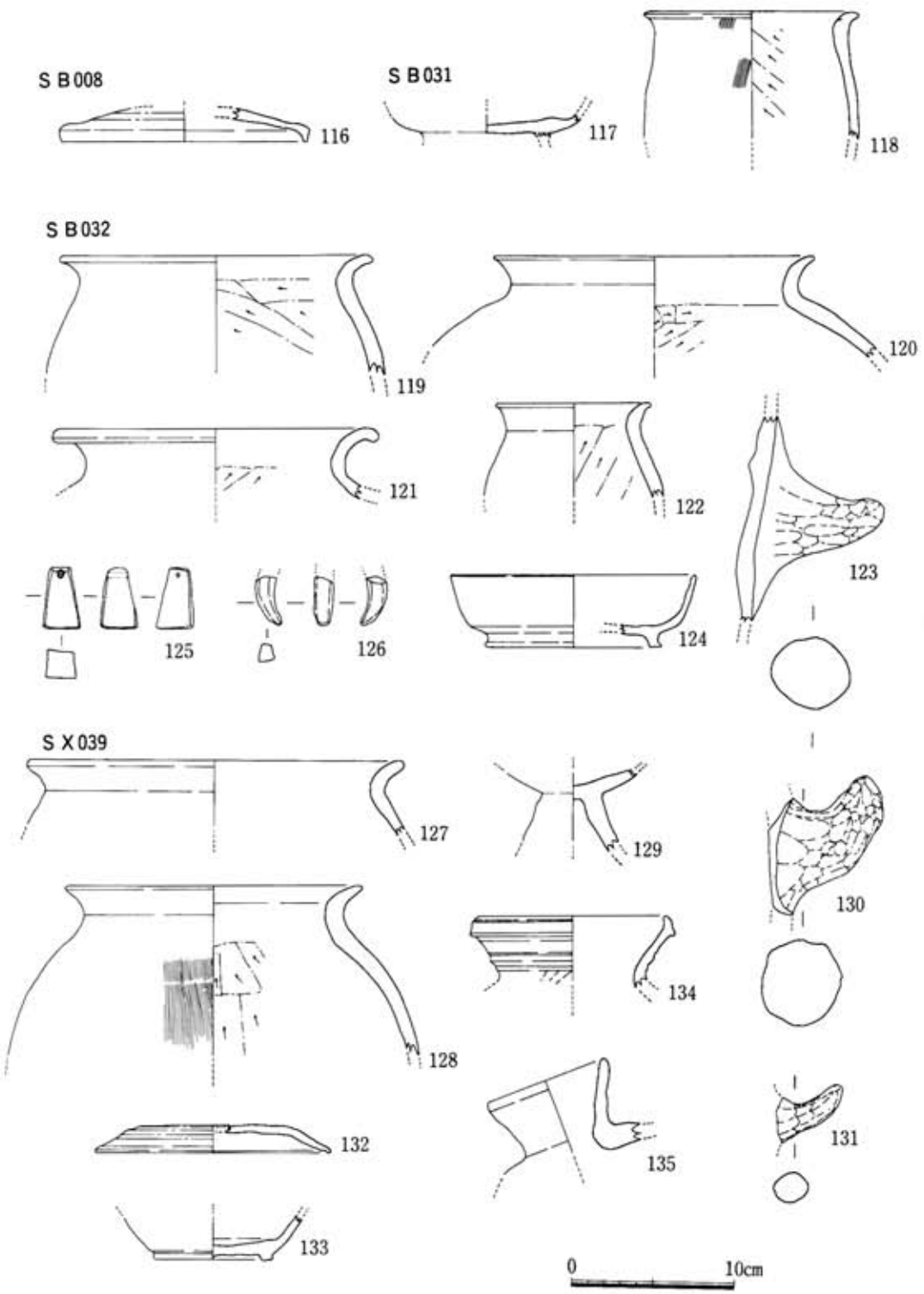


Fig.262　その他の竪穴住居跡・土壙出土土器　2（1/4）

Tab.38　古墳時代末期および奈良・平安時代の土器観察表

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器　種	法　量cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
259-69 8900358	SB037	土師器 かまど	口径30.0	口縁部は体部から直線的に内傾して立ち上がり、幅約7cmのつばが下垂してめぐる。	内外面ともナデまたは指押えで粗く調整。茶褐色で砂粒を含む。
-70 8900209	〃	土師器 甑	口径25.8	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は内面に稜をなして短く開く。	口縁部ナデ。体部は外面ハケメ、内面ナデ。把手指ナデ痕を残す。明茶褐色で粗砂粒多く含む。
-71 8900359	〃	〃	底径13.2	体部下半はわずかにすぼまる。底部切取り。	外面ナデ、内面ヘラケズリ。褐色で砂粒含む。
-72 8803565	〃	〃	口径24.8	口縁部は体部からそのまま緩く外反する。	外面はハケメ後口縁部ナデ。内面は口縁部はナデ、体部ヘラケズリ。
-73 8900357	〃	土師器 甕	口径14.7 胴径27.7	口縁部は体部からS字を描いて短かく外反。胴部は上位でやや張る。	口縁部ナデ。胴部は外面ナデ、内面ヘラケズリ。褐色で砂粒含む。
-74 8810860	〃	〃	口径26.9 胴径28.2 器高30.9	口縁部は内面に稜をもって大きく外反。胴部はあまり張らず最大径を上位におき、不安定な平底をつくる。	口縁部ナデ。胴部は外面ナデ、内面ヘラケズリ。明茶褐色で砂粒多く含む。
-75 8900219	〃	〃	口径24.2	口縁部は内面に稜をもって短く外反し、厚い。胴部はほとんど張らない。	口縁部ナデ。胴部は外面ナデ、内面ヘラケズリ。淡茶褐色で砂粒含む。
-76 8900360	〃	〃	残高14.0	不安定でぶ厚い平底。	外面ナデ。内面は底部ナデ、他ヘラケズリ。茶褐色で砂粒含む。
260-77 8900214	〃	〃	口径16.6	口縁部は上部がつよくしまる胴部から大きく外反する。	口縁部ナデ、胴部は外面ナデ、内面ヘラケズリ。淡茶褐色で砂粒多く含む。
-78 8900218	〃	〃	口径21.2 胴径20.2	胴部は鉢状に浅く、口縁部は明瞭な稜をなさずに外反し、端部内傾。	内外面ナデ。淡茶褐色で砂粒を含む。
-79 8900215	〃	〃	口径16.8 胴径15.5	胴部は上半が直に立ち、口縁部は稜をなさずに緩く外反する。	口縁部ナデ。胴部外面ハケメ、内面ヘラケズリ。淡茶褐色で砂粒含む。
-80 8900212	〃	〃	口径14.4 胴径13.3	小型甕。胴部は上位が直に立ち、口縁部はわずかに稜をもって短く外反。	口縁部ナデ、胴部は外面ナデ、内面ヘラケズリ。淡茶褐色で砂粒含む。
-81 8809689	〃	土師器 鉢	口径12.6 胴径12.0	胴部は中位が張ってつぶれ、口縁部はわずかに稜をなして外反気味に開く。	内外面ナデ。明褐色で砂粒を含む。
-82 8900313	〃	土師器 盤	口径19.9	やや厚い不安定な底部から体部が低く開き、口縁部直立。	内外面ナデ。褐色で砂粒ほとんど含まない。
-83 8900351	〃	土師器 高　坏	口径15.4 器高 7.8 底径 8.0	坏部は体部がかすかに稜をなして立ち上がり、口縁部やや外反。脚部は高く、端部やや外に開く。	脚部外面ヘラケズリ、他ナデ。明褐色で砂粒ほとんど含まない。
-84 8809691	〃	土師器 鉢	口径15.2 器高6.0	底体部は丸味をもち、口縁部は薄く直立気味。	内外面ナデか。明褐色で砂粒含む。
-85 8809691	SB037	〃	口径15.2 器高 5.2	底体部は丸味をもち、口縁部は端部内湾。	内外面ナデか。淡茶褐色で砂粒含む。

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器種	法量cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
260-86 8900312	S B037	土師器 鉢	口径11.1 器高 4.3	底体部から口縁部まで丸味をもつ。	底外面付近ヘラケズリか、他ナデ。褐色で砂粒ほとんど含まず。
-87 8900352	〃	土師器 坏	口径12.8 器高 6.8 底径 8.6	体部は底部から稜をなさずに口縁部まで直線的に立ち上がる。高台は低く外に開く。	底部外面ヘラケズリ、他ナデ。明褐色で微砂粒含む。
-88 8900217	〃	土師器 坏蓋	口径13.0 器高 2.7	やや丸味のある天井部から体部がなだらかに下り、内面に鈍いかえりが付く。	天井部外面ヘラ切り離しのまま、他ナデ。淡茶褐色で砂粒含む。
-89 8900222	〃	〃	口径12.4 器高 2.6	平坦な天井部から体部が急に下り、内面に鋭いかえりが付く。やや偏平なつまみ。	天井部平坦面ヘラケズリ、他ナデ。明茶褐色に酸化し、砂粒含む。
-90 8900305	〃	〃	口径12.0 器高 2.9	〃	天井部平坦面ヘラケズリ、他ナデ。灰色で砂粒含む。
-91 8900311	〃	〃	口径12.4 器高 2.6	天井部は平坦で、体部は稜をなして下り、内面にかえりが付く。	天井部平坦面はヘラ切り離しのまま、他ナデ。茶褐色に酸化し、砂粒少し含む。
-92 8900310	〃	〃	口径11.6 器高 2.7	天井部から体部にかけて丸味をもち、内面にかえりが付く。	天井部ヘラケズリ、他ナデ。灰色で微砂粒含む。
-93 8900309	〃	〃	口径11.2 器高 3.1	天井部は高く、体部にかけて丸味をもち、内面に鈍いかえりが付く。	天井部外面ヘラケズリ、他ナデ。天井部外面に×印ヘラ記号。灰色で砂粒含む。
-94 8900304	〃	〃	口径12.8 残高 2.9	天井部から体部にかけて丸味をもち、内面にかえりが付く。	天井部外面ヘラケズリ、他ナデ。灰色で砂粒含む。
-95 8900354	〃	須恵器 坏身	口径11.0 器高 4.2 底径 8.3	体部は直線的に急に立ち上がる。高台は底体部境にあって立つ。	内外面ナデ。暗灰色で微砂粒含む。
-96 8900303	〃	〃	口径11.9 器高 5.2 底径 8.0	体部は底部と明瞭な稜をなさずに立ち上がり、口縁部外反気味。高台やや高く外に開く。	底外面ヘラケズリ、他ナデ。灰色で微砂粒含む。
-97 8900301	〃	〃	口径12.7 残高 3.4	体部は底部から不明瞭に折れて直立気味、口縁部外反。高台やや内に入る。	底外面にヘラ切り離し痕、他ナデ。灰色で砂粒少し含む。
-98 8900355	〃	〃	口径12.8 残高 5.1	体部は直線的に立ち上がる。	体部ナデ。灰色で砂粒含む。
-99 8900306	〃	須恵器 高坏	口径13.1 残高 4.4	坏部は底体が丸味をもち、口縁立上りは薄く、外反気味につよく内傾する。	坏底部外面にカキメ、他ナデ。灰色で砂粒少し含む。
-100 8900307	〃	〃	口径15.7 器高 7.8 底径10.0	坏部は平坦な底部から体部が外反気味に急に立ち上る。脚部は裾で平坦に開き端部が縁をなして立つ。	坏部外面ヘラケズリ、他ナデ。脚内面茶褐色、外面灰色。砂粒含む。
-101 8900221	〃	須恵器 甕	口径14.8 胴径21.2	胴部は上位で張り、やや長胴気味。口縁部は胴部と不明瞭な稜をなして外反。	胴部外面は下半格子タタキメ後ナデ。他ナデ。明灰色で砂粒少し含む。
261-102 8900004	S B047	土師器 甕	口径17.8 胴径24.5 器高30.3	口縁部は内面に稜をなして外反。胴部は上位に最大径をおき、丸底にちかい不安定な平底。	口縁部ナデ、体部は外面ハケメ、内面ヘラケズリで粘土接合痕あり。明褐色で砂粒含む。

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器 種	法 量cm	形 態 の 特 徴	調整の特徴・その他
261-103 8900308	S B047	須恵器 平 瓶	口径 9.4	口縁部は直線的に開く。	口縁部外面にカキメ、他ナデ。灰色で砂粒を含む。
-104 8900325	S B054	須恵器 坏 蓋	口径10.5 器高 2.2	平坦な天井部から体部は丸味をもって下る。内面にかえりが付く。	天井部内外面不定方向ナデ。灰色でやや軟質。砂粒含む。
-105 8900324	〃	須恵器 坏	口径 9.9 器高 3.1	体部は底部から不明瞭に折れて、内湾気味に立ち上る。	底外面ヘラケズリ他ナデ。灰色で微砂粒含む。
-106 8900126	S K050	土師器 甕	口径28.6 胴径24.8 器高26.0	口縁部はく字に折れてやや外反。胴部は張りが殆どなく、底部は不安定ながら広い。	口縁部ナデ。胴底部は外面ナデ、内面ヘラケズリ後底面ナデ。褐色で微砂粒多く含む。
-107 8803560	〃	〃	口径19.4	口縁部は胴部と不明瞭な稜をなして外反。	胴部内面ヘラケズリ、他ナデ。茶褐色で砂粒含む。
-108 8803559	〃	土師器 鉢	口径15.6 胴径13.8	口縁部は短く折れて開く。体部は張りがなく直線的に立ち上り、丸底。	体部内面ヘラケズリ、他ナデ。明褐色で砂粒含む。
-109 8900380	〃	土師器 坏	口径12.6 器高 2.9	体部は底部とかるい稜をなして内湾気味に開いて立ち上る。	底外面ヘラケズリ、他ナデ。明茶褐色で微砂粒含む。
-110 8900381	〃	〃	口径13.8 器高 3.2	〃	〃
-111 8803564	S B044	土師器 甕	口径14.8	小型甕。口縁部は内面によわい稜をなして外反しながら急に立つ。	胴部内面ヘラケズリか、他ナデ。褐色で砂粒含む。
-112 8900613	〃	土師器 高 坏	底径18.0	脚部は裾端部が反り上る。	脚部内外面ナデ、外面に丹塗痕あり。胎土は褐色で砂粒含む。
-113 8810840	〃	土師器 高 坏	口径12.8 器高3.8	天井部から口体部まで丸みをもつ。	天井部外面ヘラケズリ、他ナデ。明灰色で砂粒ほとんど含まない。
-114 8810841	〃	須恵器 坏 身	口径10.1 器高3.6	底部は尖り気味で体部は直線的に開き、立上りやや急。体外面にヘラ記号一部残る。	底外面にヘラ切り離し痕、他ナデ。灰色で微砂粒含む。
-115 8900395	〃	須恵器 蓋	口径 6.2 器高 2.4	小型の壺蓋。体部はやや急に下り、口唇部はナデて稜をもつ。天井部にヘラ記号。	天井平坦部にヘラケズリ、他ナデ。酸化し褐色。
262-116 8806445	S B008	須恵器 坏 蓋	口径14.9 残高 2.0	平坦な天井部から体部が直線的に下り、口縁部は断面三角形に立つ。体外面にヘラ記号。	外面天井部から体部にかけヘラケズリ、他ナデ。暗灰色で砂粒含む。
-117 8900106	S B031	須恵器 坏	底径11.0	高台は底内側に入る。	底外面ヘラケズリ、他ナデ。灰色で微砂粒多く含む。
-118 8900107	〃	土師器 甕	口径12.4	小型甕。口縁部は内面にかすかに稜をなして短く外反。胴部やや下膨み。	口縁部ナデ。胴部は外面ハケメ後ナデ、内面ヘラケズリ。明茶褐色で砂粒含む。
-119 8900606	S B032	〃	口径18.5	口縁部は明瞭な稜をなさずに短く外反。	口縁部ナデ。胴部は内面ヘラケズリ。褐色で砂粒含む。

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器種	法量cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
262-120 8900603	SB032	土師器 甕	口径19.5	口縁部はつよくしまり、かすかに稜をなして短く外反しながら立ち上がり、端部が薄い。	口縁部ナデ。胴部は外面ナデ、内面ヘラケズリ。明褐色で粗砂粒含む。
-121 8900605	〃	〃	口径19.2	口縁部はつよくしまり、体部から弧を描いて大きく外反。	口縁部ナデ、胴部内面ヘラケズリ。褐色で砂粒含む。
-122 8900601	〃	〃	口径 9.6	小型甕。口縁部は胴部からやや折れて先端が薄く外反。胴部から下膨れか。	口縁部ナデ。胴部は外面ナデ、内面ヘラケズリ。黄褐色で砂粒含む。
-123 8900607	〃	土師器 甑	把長 3.4	把手。	指ナデ、押え。褐色で砂粒含む。
-124 8806444	〃	須恵器 坏	口径15.0 底径 5.7 器高 4.4	体部はわずかに稜をなしてやや浅く立ち上る。高台は内側にやや入り立つ。底外面にヘラ記号一部残。	坏部内外面ナデ。灰黒色で砂粒含む。
-125 8900609	〃	土師器 分銅	上幅 1.2 下幅 2.2 器高 3.8	不整形の方柱で、上端に紐孔1貫通。	全面ナデ。明茶褐色で微砂粒含む。
-126 8900610	〃	土師器 勾玉	残長 3.0	土製勾玉の下端か。断面不整多角形。	ナデ。褐色で微砂粒含む。
-127 8900367	SB039	土師器 甕	口径22.4	口縁部は不明瞭な稜をなして外反。	口縁部内外面ナデ。明褐色で微砂粒含む。
-128 8900362	〃	〃	口径18.0	胴部上位は肩に丸味をもち、口縁部は明瞭な稜をなさずに短く外反。	口縁部ナデ。胴部外面ハケメ、内面ヘラケズリ。褐色で砂粒含む。
-129 8900366	〃	土師器 高坏	残高 4.2	坏部は丸く、脚部は高く開く。	坏部ナデ。脚部は外面ヘラケズリ、内面ナデ。明褐色で砂粒ほとんど含まない。
-130 8900363	〃	土師器 甑	把長 5.0	把手。	把手指ナデ。褐色で砂粒多く含む。
-131 8900373	〃	〃	把長 3.5	小型甑の把手。	把手指ナデ。明褐色で砂粒含む。
-132 8900365	〃	須恵器 坏蓋	口径11.4 器高 1.7	天井部は平坦で全体に低くつぶれ、口縁部内面にかすかにかえりの痕跡。	天井部ヘラケズリ、他ナデ。明灰色で微砂粒含む。
-133 8900371	〃	須恵器 壺	底径 7.1	胴部は直線的に開いて立ち上り、底体の境に低い高台が付く。	内外面ナデ。明灰色で微砂粒含む。
-134 8900369	〃	〃	口径11.5	頸部に沈線2条、口縁部は玉縁状に端部が立つ。	口縁部内外面ナデ。頸部にシボリ痕。灰色で砂粒含む。
-135 8900364	〃	須恵器 平瓶	口径 7.6	口縁部は直線的に伸びる。傾き推定	口縁部内外面ナデ。暗灰色で微砂粒含む。

(2) 鉄　器

ＳＫ057土壙から鉄製紡錘車136が１点のみ出土した(Fig.263)。埋土中からの出土で遺存状態が悪く、全形は知りえない。車輪部は径4.7cm 、厚さ３～４㎜で、周縁部がやや厚い。また周縁２ケ所を欠損する。軸は8.8cm残存するが、両端を欠損している。断面円形の棒状で、径0.8cmはこの種の紡錘車としては太い部類に入る。車輪部に対しては中心部からややズレた位置を貫通する。

佐賀平野での類例は大和町久池井一本松遺跡・同久池井Ｂ遺跡で奈良時代の土壙墓出土２例があり、本例も同時期の類例としてこれに加えられる。

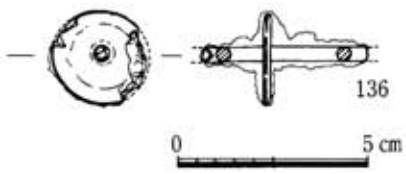


Fig.263　鉄製紡錘車（１/２）

5．中　　世

明確な遺構がＳＤ001溝のみであったため、出土量は少ない。検出面での採集品も少量あるが、ここでは比較的まとまった出土をみたＳＤ001の出土品のみ一括して掲げておく。土師器、瓦器、陶磁器、石鍋といった食品類に限られる。

(1) 土　器　類

ＳＤ001溝から比較的まとまって出土した(Fig.264)。瓦器は坏137・138、土師器には坏139～143と小皿144・145がある。陶磁器は全て輸入品である。褐釉陶器146は口縁部が短く折れ沈線を廻らす古いタイプ、磁器には青磁椀147～138、白磁皿153・154のほか、白磁椀の破片が少量混じる。青磁椀は全体にふっくらとして高台が厚く高く、彫りの深い鏑蓮弁を飾るものと無文とがある。他に155は土師質の大形鉢、156・157は石鍋の小破片であるが便宜上ここに掲げておく。

これらの時期は13世紀を中心とするものであろう。個々の特徴はTab.39観察表による。

Tab.39　ＳＤ001溝出土土器観察表

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器　種	法　量cm	形　態　の　特　徴	調整の特徴・その他
264-137 8900232	ＳＤ001	瓦　器 坏	口径17.4	体部から口縁部にかけ直線的に大きく開く。	内外面ナデ。白褐色で砂粒含む。
-138 8806434	〃	〃	底径 6.7	体底部は丸味をもち、低い高台が立つ。	〃
-139 8900234	〃	土師器 坏	口径11.8 器高 3.2	体部は底部と不明瞭な段をなして立上り、口縁部外反。	外底面に糸切痕、他ナデ。明褐色で砂粒含む。

Fig.図番号 登録番号	出土地点	器種	法量cm	形態の特徴	調整の特徴・その他
264-140 8900232	SD001	土師器 杯	底径 6.0	底部は平坦で、よわい高台が短く立つ。	内外面ナデ。茶褐色で砂粒を含む。
-141 8900228	〃	〃	口径13.8 器高 3.0	体部は底部と稜をなして内湾気味に立ち上がる。	外底面に糸切痕、他ナデ。明褐色で砂粒を含む。
-142 8900229	〃	〃	口径13.0 器高 3.0	体部は底部と稜をなし、直線的に立ち上る。	〃
-143 8900230	〃	土師器 皿	口径 9.0 器高 1.5	口体部は底部と稜をなして短く立つ。	底外面に糸切痕、他ナデ。白褐色で砂粒含む。
-144 8900231	〃	〃	口径 8.6 器高 1.1	〃	底外面に糸切痕、他ナデ。明褐色で砂粒含む。
-145 8900122	〃	〃	口径 9.2 器高 1.5	口体部は底部と稜をなして短く直線的に開く。	底外面に糸切痕、他ナデ。明茶褐色で砂粒含む。
-146 8900292	〃	陶器 壺	口径10.1	口縁部は玉縁状に短く開き、胴部は肩が張らず、上位に沈線を２条巡らす。	回転によるナデ沈線。胎土は灰白色で微砂粒を含み、外面に褐釉がかかる。
-147 8900288	〃	青磁 椀	口径16.8 底径 5.2 器高 6.9	口縁部は直線的に開き、厚い底部に短い高台が立つ。鏑蓮弁文様。	外底面ヘラケズリ、他青緑色釉がかる。
-148 8900242	〃	〃	口径14.4	口縁部は直線的に開く。外面に鏑蓮弁文様、内面にヘラ描文様。	内外面に青緑色釉がかかる。
-149 8900241	〃	〃	口径17.2	口縁端部やや外反。	内外面に暗緑色釉がかかる。
-150 8900286	〃	〃	口径17.1 体高 6.2	〃	〃
-151 8900289	〃	〃	底径 6.1	厚い底部に短い高台が立つ。鏑蓮弁文様。	底外面ヘラケズリ、他暗緑色釉がかかる。
-152 8900285	〃	〃	底径 5.4	体部下位は丸味がつよく、短い高台が立つ。内底面にヘラ描文様。	〃
-153 8900290	〃	白磁 皿	底径 4.8	体部はよわい稜をなして底部から立ち上がる。内底面にヘラ・櫛描文様。	底外面ヘラケズリ、他青白色釉がかかる。
-154 8900244	〃	〃	口径 9.8 底径 6.6 器高 1.7	体部は底部と稜をなして立ち上がる。内面に櫛描文様。	〃
-155 8900233	〃	土師器 鉢	口径38.4	逆Ｌ字形平坦口縁の上面に櫛描文様。	体部内外面に細かいハケメ。口縁部上面櫛描文、他ナデ。明褐色で砂粒含む。
-156 8900295	〃	石鍋	胴径32.8	胴部鍔。	内外面ケズリ痕。鍔下面に煤付着。滑石製。
-157 8900294	〃	〃	底径21.6	底部。	内外面ケズリ痕。体部外面に煤付着。滑石製。

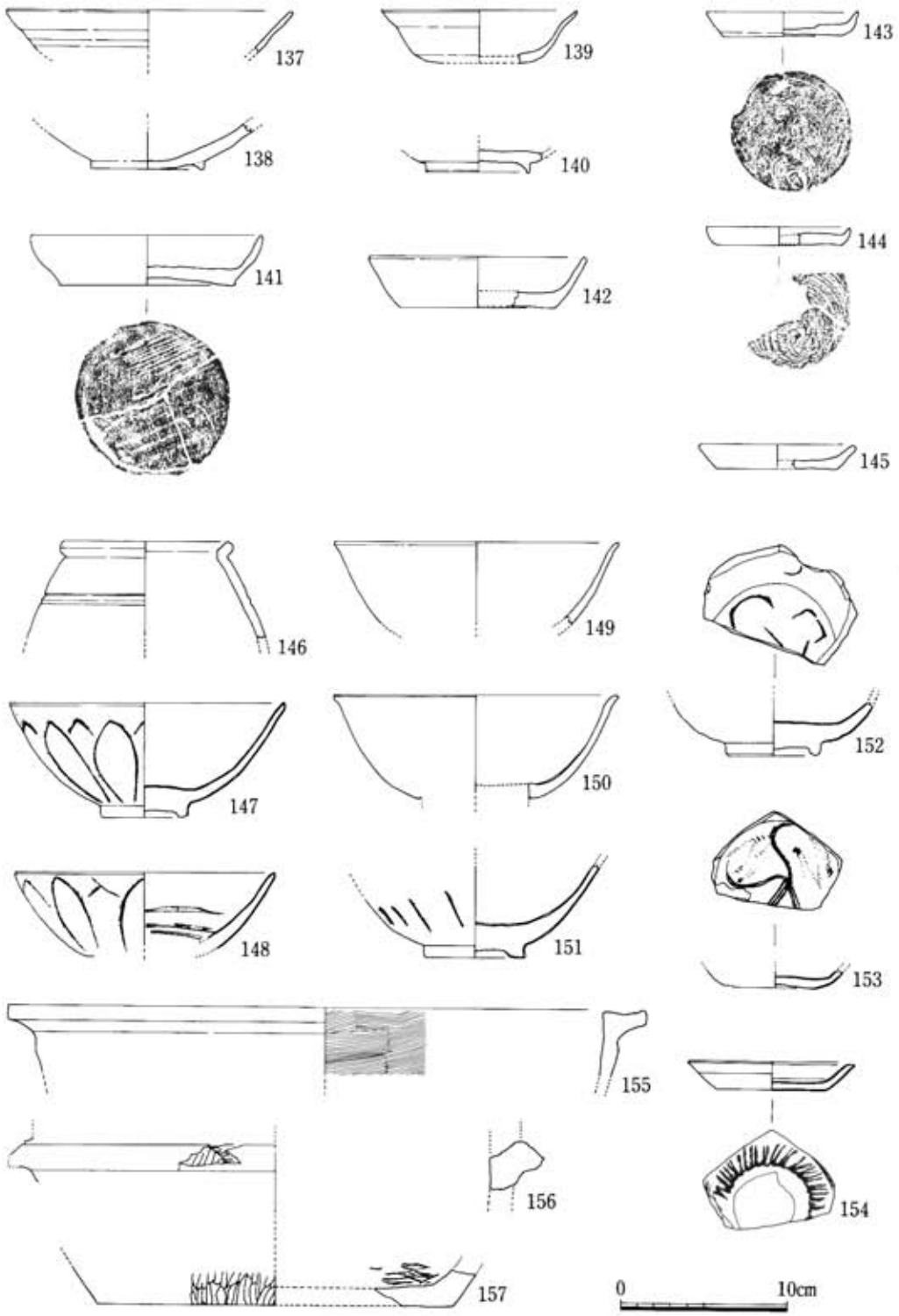


Fig.264　S D001溝出土土器（1 / 4）

東田遺跡（ひがしだ）

遺跡名：東田遺跡（略号ＨＧＡ）
所在地：鳥栖市田代本町字東田

東　田　遺　跡

Ⅰ．遺跡の概要

東田遺跡は、鳥栖市田代本町字東田に所在する。本書に報告した本川原遺跡からは約600m 西方、また荻野遺跡からは約500m 東方のところに位置している。遺跡の立地条件としては、近接するこれら２遺跡とほぼ同様であり、脊振山地の主峰のひとつである権現山（標高626.2m）の、南東方向に長くのびる山麓からさらに平野部に向けて低くつづく台地上に分布している。標高は40～50m であり、北側に位置する通称柚比丘陵、北西方の三国丘陵とともに広大な台地として知られている。これらの丘陵は、古くからその立地条件が良好であったようであり、その平坦地域にはほぼ全域に遺跡の分布がみられる。この丘陵頂部に位置する東田遺跡の周辺においても、安永田遺跡・荻野遺跡・日岸田遺跡・太田遺跡・太田東方遺跡・フケ遺跡、それに庚申堂塚古墳・岡寺前方後円墳・田代太田古墳など、弥生～古墳時代の遺跡が多い。そのなかで特に注目されるのは、銅鐸鋳型が発見された安永田遺跡、鳥栖地域の代表的な前方後円墳である庚申堂塚古墳・岡寺前方後円墳、そして装飾ある古墳として知られる田代太田古墳であろう。

この東田遺跡においても、東田古墳として古くから周知され、あるいは前方後円墳ではないかと考えられていた一基の古墳が存在している。現状の地形をみると、この台地中央付近、小さな谷を挟んで出入りのある小丘陵の平坦地（標高約45m 前後）に、あたかも前方部を北西方へ向けた前方後円墳のごとく、残存している。周囲に広がる平坦地域と比較すると、頂部との比高差もかなり大きく、高い。つまり、この状況を一見すると、前方後円墳としての想定が当然と思えるほどの地形をなしているところである。

そこで、今回の調査は、現在は墓地として土地利用されているこの区域において、前方後円墳としての確認を主目的として実施した。また、この古墳以外の遺構としては、北側の調査区で、弥生時代の甕棺墓４基と古墳時代の溝跡１条も検出している。

なお、本遺跡に関わる地理および歴史的環境の詳細については、本報告書の項（P．10～18）と同様の状況にあるので、それを参照されたい。

Fig.265　調査区位置図（1/2000）

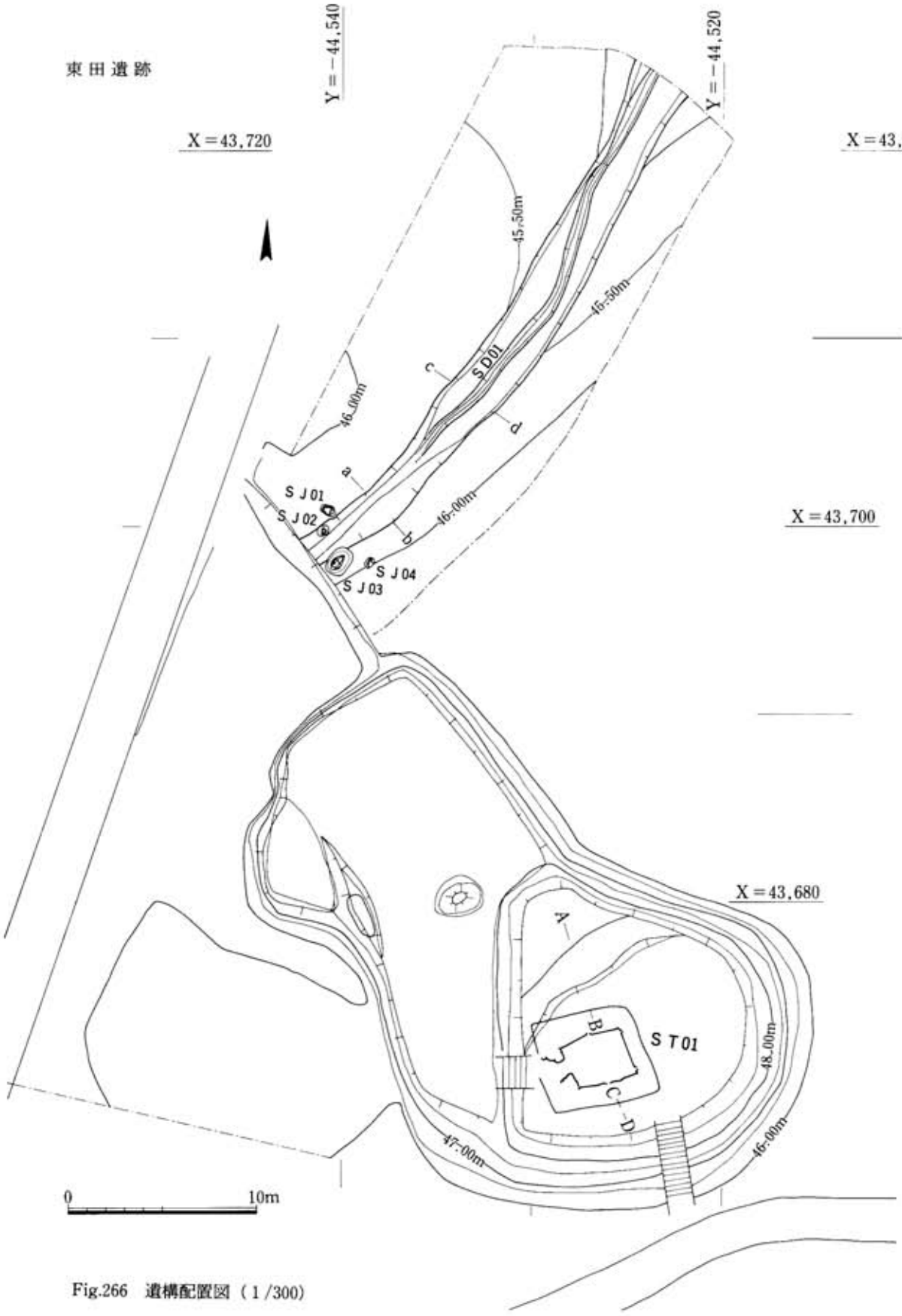


Fig.266　遺構配置図（1/300）

II. 遺 構

調査区においては、最も南側にＳＴ01古墳、その北方約20m のところに４基の甕棺墓（ＳＪ01～04甕棺墓）と１条の溝跡（ＳＤ01溝跡）がそれぞれ位置している。

１．弥生時代

(1) 甕棺墓

ＳＪ01甕棺墓（PL.152）

調査区北側、ＳＤ01溝跡南端部の北側斜面近くに位置している。小甕(上)＋小甕(下)の、接口式の小児用複式棺。西側をＳＤ01溝跡に削平されているが、墓壙の掘方は平面楕円形であろう。長径0.84＋αm・短径0.58m・深さ0.25＋αm。その壙底をさらに0.11m 掘り下げ、棺を据えている。棺はほぼ水平で、傾斜角はわずか＋３°。主軸方位はＮ―Ｗ63°。

ＳＪ02甕棺墓

調査区北側、ＳＪ01甕棺墓の西側に位置しているが、ＳＤ01溝跡によって大きく削平されており、遺構の構造はほとんど不明である。わずかに残存する墓壙とその甕棺の破片の状況から、墓の存在を確認し得るにすぎない。

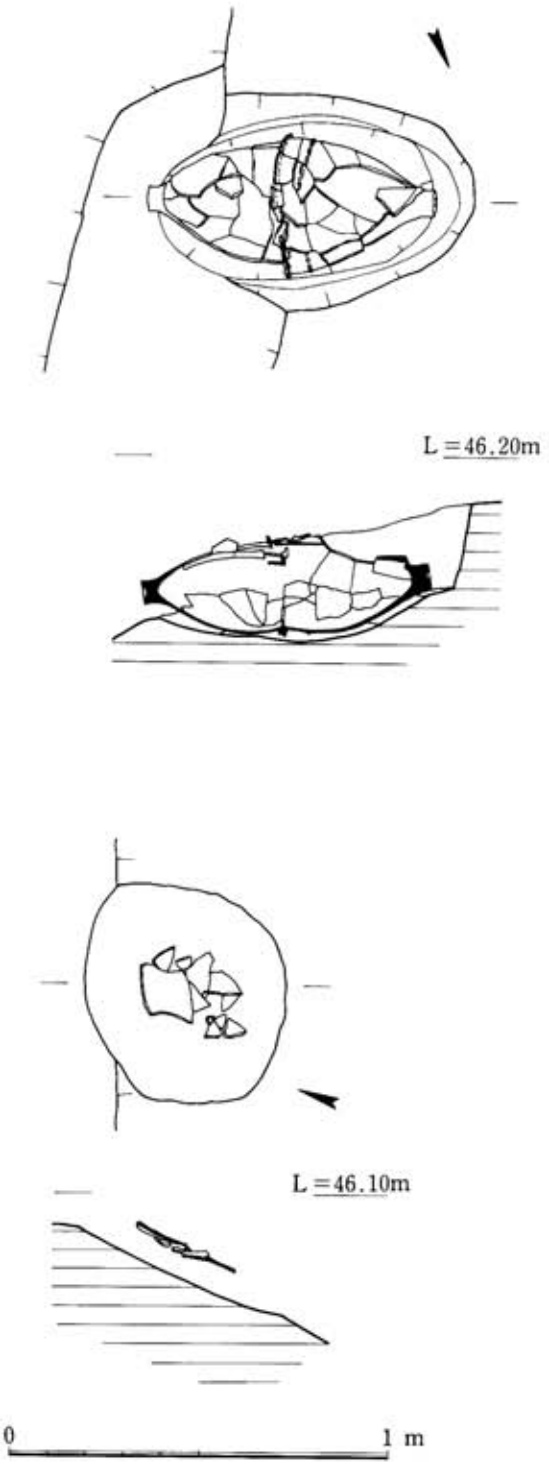


Fig.267　ＳＪ01・02甕棺墓（１/20）

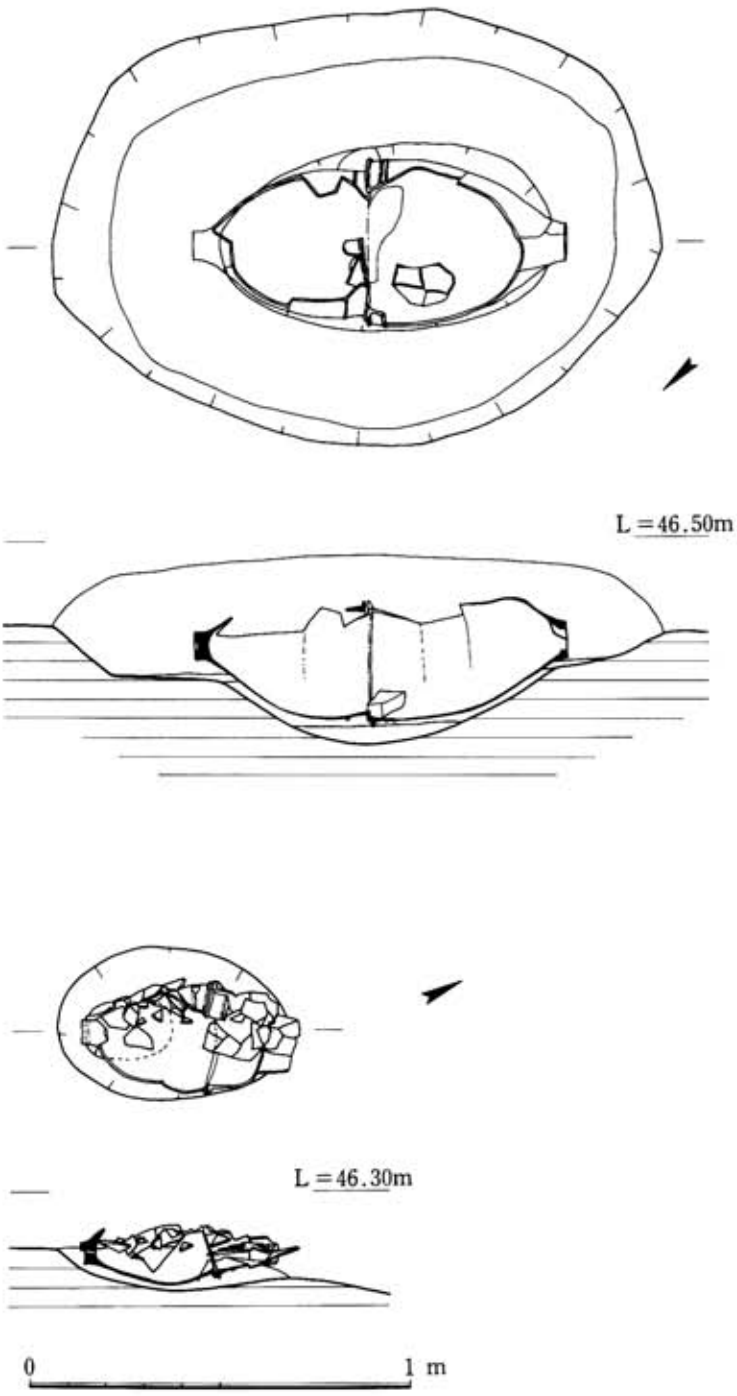


Fig.268　ＳＪ03・04甕棺墓（1/20）

ＳＪ03甕棺墓（PL.152）

調査区北側、ＳＤ01溝跡を挟んでＳＪ02甕棺墓とほぼ対称のところに位置している。小甕(上)＋小甕(下)の、接口式の小児用複式棺。その接合部分には粘土の目張りを施す。墓壙は、上部をやや削平されているが、残存状況としては良好である。掘方は平面楕円形をなす。長径1.62m・短径1.15m・深さ0.15＋αm。その壙底をさらに0.17m掘り下げ、棺を据えている。棺はほとんど水平で、傾斜角はわずか＋1°。主軸方位はＳ—W42°。

ＳＪ04甕棺墓（PL.152）

調査区北側、ＳＤ01溝跡を挟んでＳＪ01甕棺墓とほぼ対称のところに位置している。小甕(上)＋小甕(下)の、接口式の小児用複式棺。墓壙は、上部を大きく削平されており、棺の据え置き部分しか残存していない。残存する墓壙の掘方は、平面楕円形である。長径0.62m・短径0.40m・深さ0.11m。棺の傾斜角は＋15°。主軸方位はＮ—Ｅ26°。

2．古墳時代

(1) 古 墳

ＳＴ01古墳（PL.153～157）

調査区南側に位置する古墳で、石室は横穴式の構造である。この区域は、石室の位置する小丘部とその北西方向へ広がる平坦部を除いて、周囲は2 m前後も削平されており、旧地形をほとんど留めていない。そのために、残存する現地形から前方後円墳の可能性も考えられていたようである。墳丘および石室の大半は破壊されている。

墳丘 残存する区域もかなり削平を受けており、墳形としてはかなり不整形なものとなっている。その墳形確認のために設定したトレンチでは、墳丘構築の盛土は、横穴式石室の周囲で確認しているだけで、北西方の地続きの平坦部では、盛土はまったく検出できていない。この状況から、調査では平坦部を前方部ではないと判断し、石室周囲の盛土部分のみを古墳の区域とした。つまり、石室を中心に置く円墳として墳形を考えると、北側土層断面(Fig.270)の状況からみて、直径19m以上の大型古墳が推定されよう。

また、墳丘の築成についてであるが、残存する墳丘の最下層（旧地表面）から、まず石室部分の掘り込みを行っている。そして、その石室掘方内に腰石を配置し、裏込めを入れた後、ほぼ一定した量の土を運び込み、ブロック状に固めて盛り上げ、墳丘を順次高めている。層序をみると、その盛土作業は石室の構築を主体とし、周囲の墳丘の築造をも併行して進めていたことが推定できる。なお、盛土に使用した土は、大きく分けて黒色土・茶褐色土・黄褐色土の3種類であり、それらを交互に置くことによって、耐水・強度などに配慮も行っているようである。周溝は確認できていない。

内部主体 単室の横穴式石室である。主軸方位はＳ－W72°、東西方向に主軸を置き、西側に開口している。石室の掘方は、平面が長方形で、旧地表面から深さ0.95mほど掘り下げている。

玄室は両袖式で、その平面はやや胴の張る長方形である。長さ3.30m、奥壁側の幅2.45m・中央部の幅2.70m・玄門側の幅2.30m。各壁の基部には、幅1.50～2.10m、厚さ0.40mほどの大きめの石を用い、奥壁に1個、南北の両側壁に各2個ずつの腰石を据えている。その上部に積み上げる壁部の石は、南側壁にわずか2個残っているだけである。玄室床面には、南西部分に小ぶりの平たい敷石がみられる。また、玄室床面は羨道床面より、わずかに低い。玄門は、幅0.65 mの框石を間に、高さ約1 mの同じ位の大きさの袖石を置いている。

羨道は、玄門側からやや開きながらつづくもので、玄門側の幅1.05mから0.6mほど広くなる。長さ1.20m、高さ0.40mで、天井部はない。北側壁に2段、南壁に1段の石積みが残存する。

墓道の有無は不明。

石室の石材には、いずれも花崗岩を用いている。

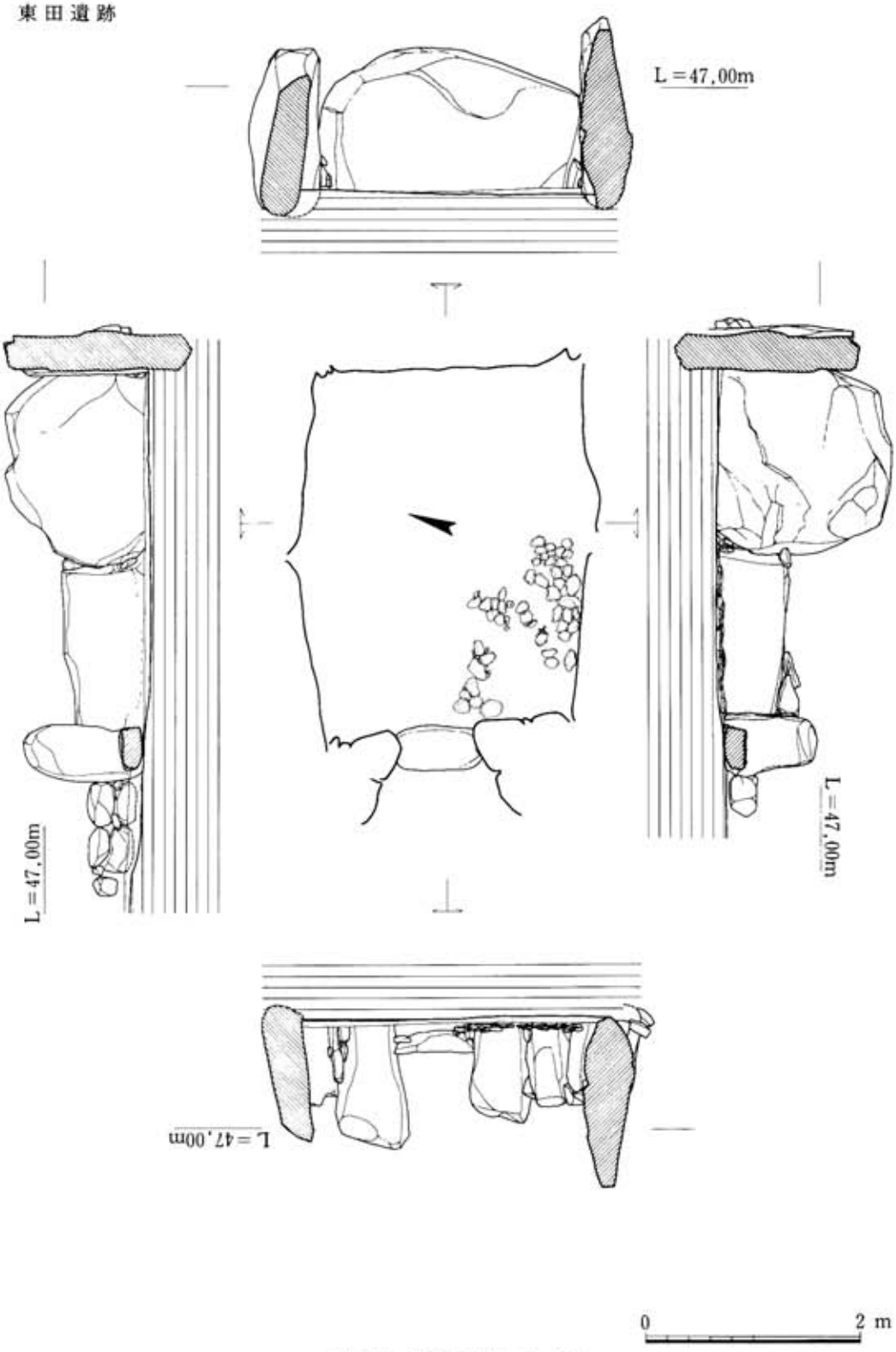


Fig.269　ＳＴ01古墳（1/60）

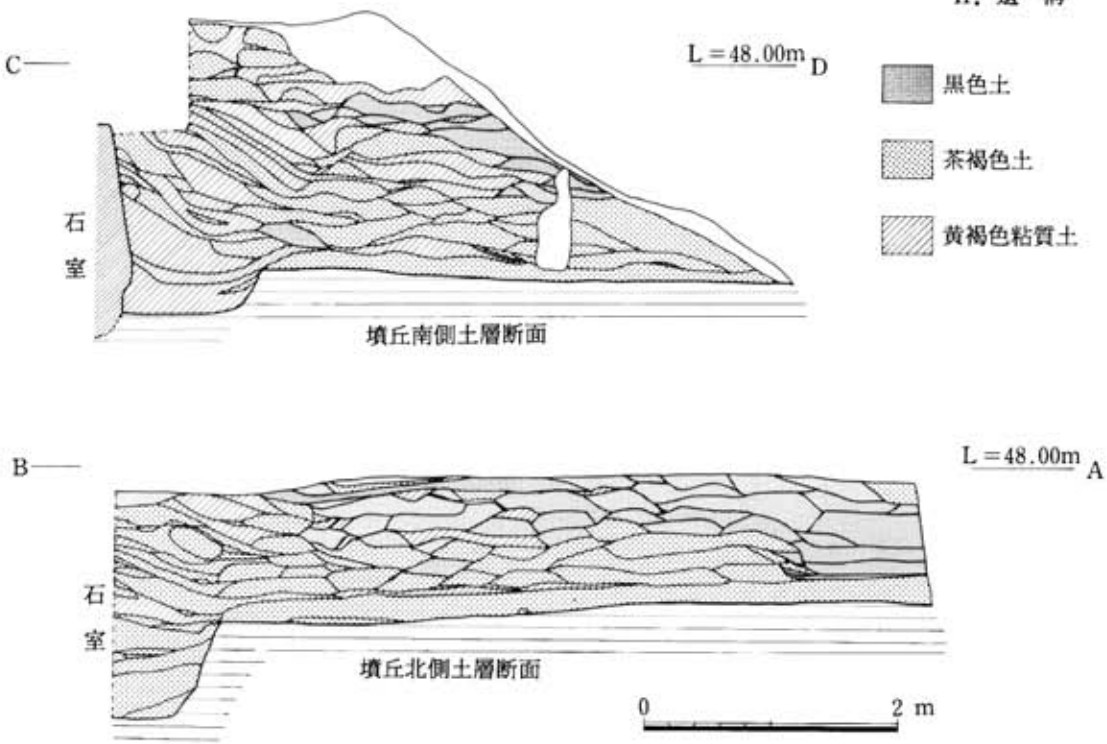


Fig.270　ＳＴ01古墳墳丘土層図（1/60）

なお、框石・玄門側（袖石両側）の両壁部・南北両側壁の西側腰石の各石材には、赤色顔料が明瞭に残存している。除去した積石にも赤色顔料がみられることから、石室全体に塗布していた可能性もある。

遺物は、土師器（壺・杯）と須恵器（甕・杯蓋・杯・鼈・器台）が石室及び墳丘から出土している。

(2) 溝 跡

ＳＤ01溝跡（PL.157）

調査区の北半区域で、南西から北東方向へはしる溝跡を確認している。南西部は、削平のために途切れているが、北東方向へは調査区外へさらにつづく。残存長約31.7m・幅0.17～0.3m。深さは、0.3mほどしかなく、大変浅い。断面は、きわめてゆるやかなU字形をなす。溝埋土中から、土師器（壺）と須恵器（杯蓋）が出土している。

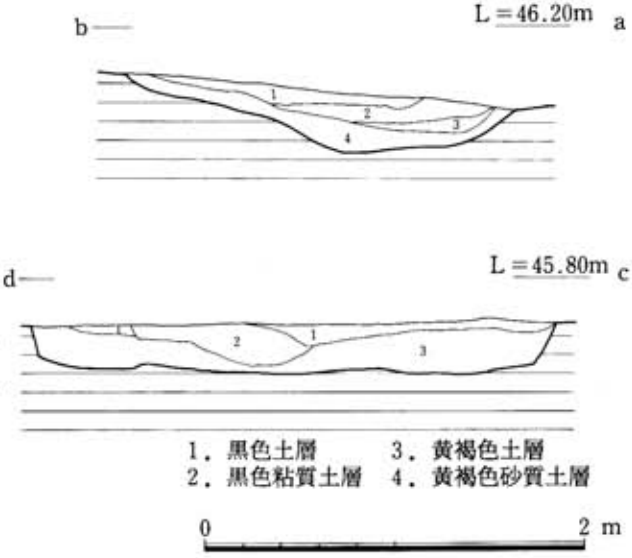


Fig.271　ＳＤ01溝跡（1/40）

III. 遺　物

遺物は、ＳＴ01古墳・ＳＤ01溝跡・ＳＪ01～04甕棺墓の各遺構、それに堆積土中から、弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器などが出土しているが、数量としては少ない。

1．弥生土器（Fig.272・273）

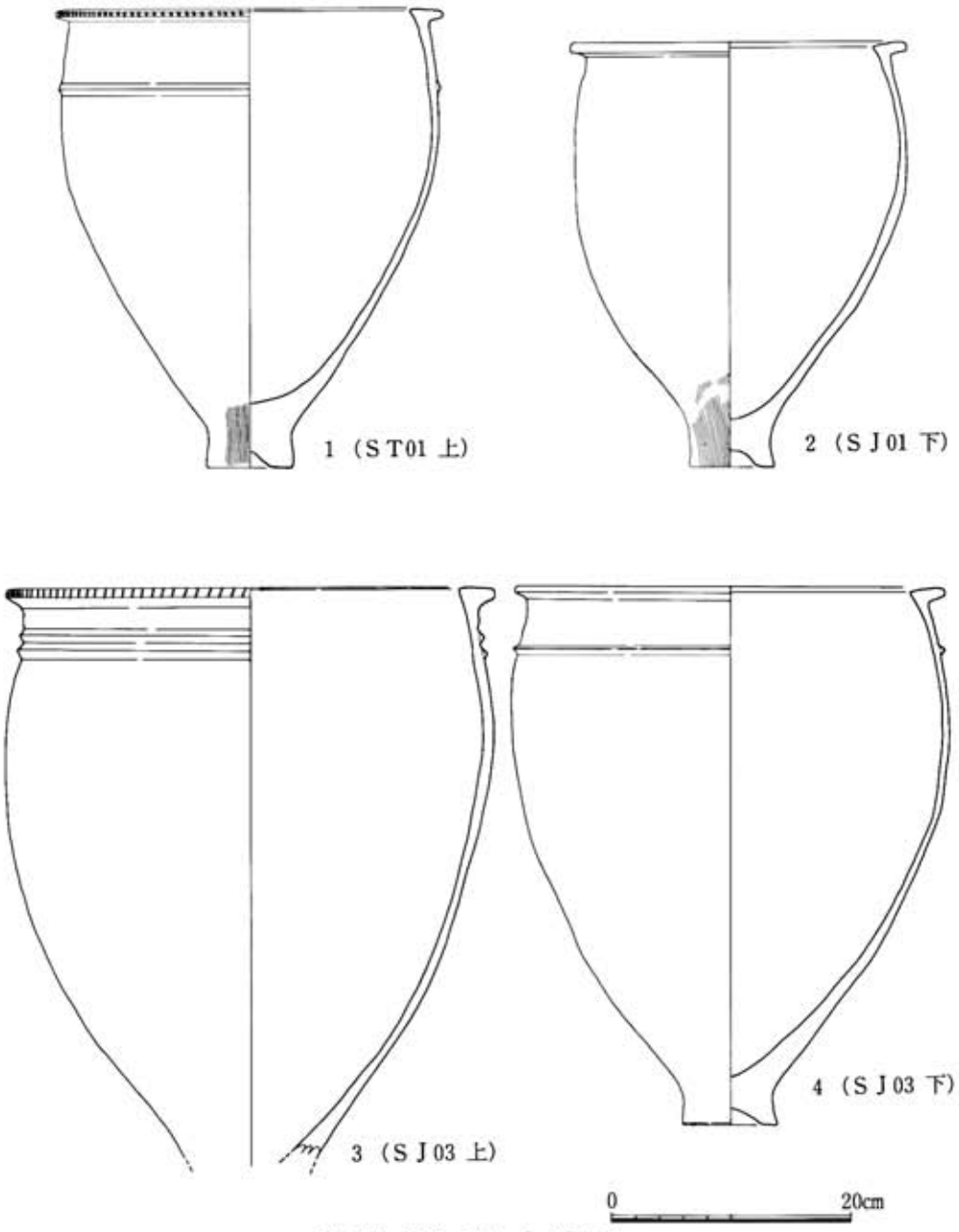


Fig.272　弥生土器　1（1/6）

器種としては甕のみであり、他のものは出土していない。

甕（1～10）6～10は破片であるが、1～5の土器とほぼ同様の形態をとるものと考えられる。つまり、器種としては1形態だけである。やや高い上げ底で、狭い底部から、上外方にゆるやかに内湾しながら長くのびる体部は、その体部中央よりやや上位で、さらに湾曲しながら強く内傾し、いちじく形をなす。口縁部は逆L字形で、水平または口縁端部がやや上方を向く。凸帯は、体部上位に断面三角形のものを0～2条めぐらす。また、1、3のように口縁端部に刻み目を施すものもある。底部は内外面ともナデ、体部は内面ナデ・外面ナデあるいはタテ方向のハケ目、口縁部はヨコナデ。器高32.5～48＋α cm、口径(外)27.6～40.8cm・(内)24.0～34.8 cm。1～6は甕棺墓に使用されたもので、7～10は調査区内の堆積土中から出土したものである。しかし、同一形態をとることから、7～10もやはり埋葬に関わるものかもしれない。

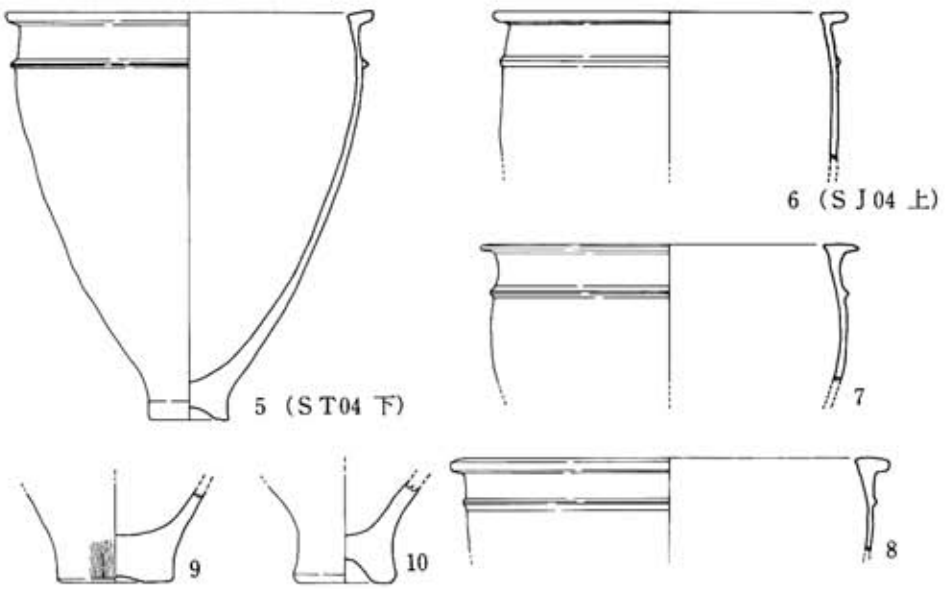


Fig.273　弥生土器　2（1/6）

2．土師器（Fig.274、PL.158）

器種としては、壺・杯・高杯があるが、各々の数量はわずかでしかない。

壺（11）1点のみである。丸い底部に、球形の胴部が付く。底部から、上外方へ強く内湾しながらのびる丸みのある胴部は、そのままさらに内湾しながら、頸部へつづく。頸部のしまりは強く、胴部との境に稜をもつ。口縁部は、胴部からわずかに外反しながら、上外方へやや開く。口縁端部では、逆にやや内湾ぎみにおさまる。丸みをもつ。器壁は、底部が厚いが、他はほぼ同じ厚さである。底部は内外面ともナデ、胴部は内面ヨコ方向のヘラケズリ・外面タテ方向のハケ目、口縁部は内外面ともハケ目後ヨコナデ、口縁端部はヨコナデ。器高14.4cm、口径10.8

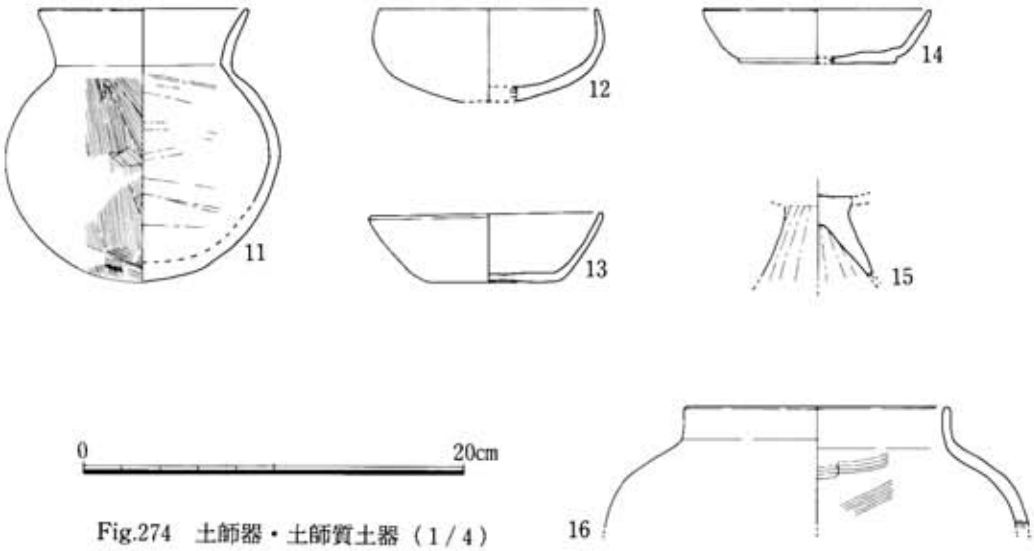


Fig.274　土師器・土師質土器（1/4）

cm。ＳＴ01古墳北方の堆積土より出土。

杯（12～14）３点とも、それぞれの形態あるいは調整の技法が異なる。**12**は、底部から口縁部まで内湾しながら丸くおさまるものである。丸い底部から、上外方へゆるやかに内湾しながらのびる体部は、その中位から強く内湾するとともに内傾してつづく。中位付近の張りは強い。口縁部も、そのまま内湾する。口縁端部は丸くおさまる。体部は内面の下半ナデ・上半ヨコナデ、外面の下半ヘラケズリ・上半ヨコナデ。口縁部は内外面ともヨコナデ。器高4.9cm、口径11.4cm。ＳＤ01溝跡より出土。**13・14**は、底部が平坦なものである。**13**は、平坦でやや広い底部から、体部へは強く折れる。その境は明瞭である。体部はゆるやかに内湾しながら、上外方へ開いていく。口縁部は、体部からわずかに内傾する。口縁端部は丸い。底部は内外面ともナデ、体部から口縁部にかけては内外面ともヨコナデ。器高3.7cm、口径12.4cm、底径7.0cm。調査区北側より出土。**14**は、平坦で広い底部から、体部へは強く折れる。その境は明瞭である。体部はほぼまっすぐに上外方へ開いていく。口縁部は、体部からやや内側へ湾曲する。口縁端部はやや尖りぎみ。底部は内面ナデ・外面糸切り離し、体部から口縁部にかけては内外面ともヨコナデ。器高2.8cm、口径12.1cm、底径8.4cm。ＳＴ01古墳の石室埋土中から出土。

高杯（15）**15**は高杯の脚部片である。脚部は短く、ほぼまっすぐに下外方に開いてのびる。内面はヨコ方向のヘラケズリ・外面はタテ方向のヘラケズリ。残存器高4.3cm。表採。

３．須恵器（Fig.275、PL.158）

器種としては、壺・杯蓋・杯・鉢・器台・甕で、形態の種類は多い。しかし、各器種とも１～３点にすぎない。

壺（17）**17**は体部下半を欠く。丸みのある球形の胴部は、そのまま強く内湾しながら頸部へつ

づく。頸部のしまりも強く、胴部との境に稜をもつ。胴部からは、上外方へやや強く折れて開いていく。口縁部へは、ゆるやかに外反しながらのびる。口縁部は上方へ短く折れ、内湾する。口縁端部はやや尖りぎみ。口縁部に1条、頸部に3条の沈線をそれぞれ廻らす。また、頸部上位には櫛描波状文も施す。体部は内面ヨコナデ・外面タタキ後カキ目、口頸部は内外面ともヨコナデ。残存器高14.5cm、口径18.9cm。ＳＴ01古墳の石室内から出土。

杯蓋（18・26）18は、天井部の一部と口縁部を欠く。天井部はやや広く平坦である。体部は天井部から、下外方に強く内湾しながらつづき、天井部と体部の境には明瞭な段を付ける。体部は開かず、ほぼまっすぐに口縁部へのびる。天井部は内面ヨコナデ・外面の上半へラケズリ・下半ヨコナデ、体部は内外面ともヨコナデ。残存器高3.5cm。ＳＴ01古墳の墳丘周辺から出土。26は、天井部と体部の大半を欠く。口縁部のかえりがなくなり、折れる形態のものである。全体的に偏平で、口縁部の折れもかなり短い。ＳＤ01溝跡の埋土から出土。

杯（19）底部の一部を欠く。底部は広く平坦である。体部は、底部から上外方にやや強く内湾しながら、短くのびる。立ち上がりは、体部から折れて、内傾する。やや長い。端部は丸く、段をもたない。受部はやや短く、上外方へつづく。底部は内面ヨコナデ・外面へラケズリ、体部は内面ヨコナデ・外面の下半へラケズリ・上半ヨコナデ、他はヨコナデ。器高3.5cm、口径13.0cm、受部径15.1cm、立ち上がり高0.9cm。ＳＴ01古墳の石室内から出土。高杯の形態も考えられる。

甕（20）口頸部のみである。体部から上外方へ開きながらのびる頸部は、明瞭な段をつくって口縁部へつづく。口縁部は、頸部から折れてやや内傾するとともに、わずかに内湾しながら、上外方へやや開く。口縁端部は、短く外側へ折れる。口縁端部の内面には、やや不明瞭であるが段を付ける。口頸部は内外面ともヨコナデ。また、外面にはタテ方向の櫛描文を施す。残存器高4.4cm、口径13.2cm。ＳＴ01古墳の墳丘周辺から出土。壺の形態も考えられる。

器台（22）脚部片のみである。脚裾端部は平坦である。脚裾部は、脚裾端部から強く内湾しながら、内傾してつづく。その箇所には、三角形の透し孔を配し、さらに下位に2条の沈線を廻らす。また、櫛描波状文も施す。内外面ともヨコナデ。残存器高3.7cm、口径19.1cm。ＳＴ01古墳の石室内から出土。

甕（23～25）23・24は口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形に近い。25は大甕の頸部片である。23・24は同形態のもので、ほぼ球形をなす体部に、短い口頸部が付く。底部は丸く、強く内湾しながら上外方へのびる。体部はさらに丸く内湾して、頸部へつづく。頸部のしまりは強いが、体部との境はやや明瞭ではない。頸部は、体部から強く外反し、短く開く。口縁部はそのままおさまるが、口縁端部は上方へ短くのびる。23よりも、24の体部の張りが大きい。調整はほぼ同じであり、底部は内外面ともナデ、体部は内面が同心円文のタタキ後ヨコナデ・外面が平行文のタタキ後ヨコナデ、口頸部は内外面ともヨコナデ。23の器高26.7cm、最大体部径26.3cm、口径15.9cm。24の器高24.9cm、最大体部径27.3cm、口径17.1cm。いずれも、ＳＴ01古墳の墳丘上

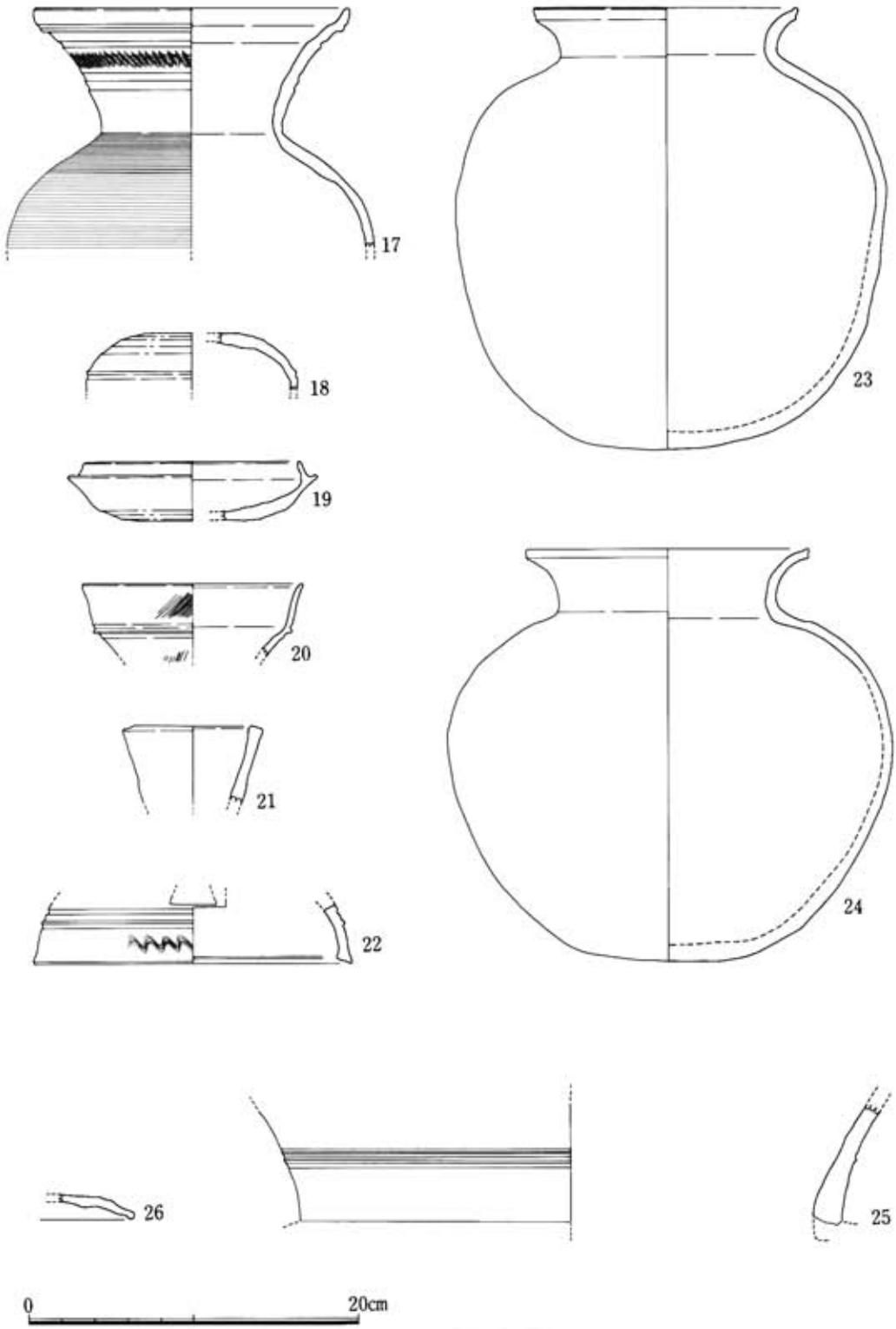


Fig.275　須恵器（1/4）

に造られた墓の、移設の際に発見されている。25は、ゆるやかに外反しながら、上外方へ大きく開いていく頸部である。頸部には2条の沈線を廻らす。また、櫛描波状文も施す。内面ヨコナデ、外面の下半はカキ目。

4．土師質土器（Fig.274）

土器としては1点だけを確認している。器種は壺であろう。

壺（16）体部の下半を欠く。強く内湾する体部は、頸部へ大きく内傾しながらのびる。頸部のしまりはあまり強くなく、体部との境もやや不明瞭である。頸部は、体部から強く折れ、上方へ短くのびる。外側へは開かない。口縁部もそのままつづき、口縁端部は丸くおさまる。体部は内面ハケ目・外面ナデ、口頸部は内外面ともヨコナデ。残存器高6.4cm、口径14.0cm。ＳＴ01古墳墳丘周辺から出土。

Ⅳ．小　結

東田遺跡における今回の調査では、後世の削平を受けた範囲がかなり広いため、検出した各遺構から、この地域の状況を概観し得るまでには至っていない。ひとつの参考資料として、考えておくべき遺跡であろう。以下に、各遺構について少し概略してみる。

まず、甕棺墓群であるが、確認した4基はいずれも小型棺の規模のものでしかない。また、調査区域内で他に採集された弥生土器のなかにも、大甕・大鉢の類はまったく発見されていない。つまり、調査においては、大型棺と考えられるものが無く、ある一定の範囲にのみ集中した小型棺の検出に終っている。この状況が、そのまま地域の墓域形成の特徴として把えられるかどうかは疑問であろうが、ひとつの参考例として掲げておく。時期としては、弥生時代中期前半が考えられる。

次に古墳であるが、ＳＴ01古墳は周溝が確認されていないものの、調査の状況から直径20mほどの、やや大型の円墳を推定できる。また、出土遺物からみて、その築造時期は6世紀前半～中頃が考えられる。この地域においては、6世紀中頃～後半に庚申堂塚・剣塚・岡寺古墳（いずれも前方後円墳）それに田代太田古墳（円墳）など、県下を代表するほどの大型古墳の築造が相次ぐが、以上の調査成果から、ＳＴ01古墳はまさにその前段階に位置付けられるものである。さらに、時期的にはもちろんのことであるが、立地・規模・墳丘構築方法・石室内部の彩色などの諸様相を把えてみても、このＳＴ01古墳はこれら大型古墳へとつながる要素をもっていることが認められる。このようなことから、地域の豪族層が6世紀中頃以降に飛躍的に勢力を強めたとすれば、その前兆は、ＳＴ01古墳に例証されるように、少なくとも6世紀前半にあったとみてよいであろう。そして、その遠因となるのは、ひとつには北部九州全域を巻き込んだ527年の磐井の乱も想定できよう。

本川原遺跡

遺跡名：本川原遺跡（略号ＨＧＲ）
所在地：鳥栖市田代昌町字石町

本川原遺跡

Ⅰ．遺跡の概要

本川原遺跡の所在する鳥栖市は佐賀県の東南端に位置する。佐賀県東南部の神埼郡、三養基郡、および鳥栖市の脊振山系の南麓一帯は標高1000m 前後の山々から派生する砂礫台地が、あるところではさらに細かく派生し、あるところでは島状に発達する地帯である。この砂礫台地の間には大小の河川が貫流するとともに、また谷底平野がよく発達している。

この佐賀平野でも東部に特徴的な地形は古来よりの生活の跡を特によく残している。これまでのところ先土器時代以降の諸遺跡、遺物が発見され調査されてきたことは第１章で述べられている通りであるが、本川原遺跡もまた、このような砂礫台地の一つ、通称柚比丘陵の最南端に残された遺跡の一つである。

古来より交通の要所であった鳥栖市の状況は今日でも変わらずＪＲ線、高速自動車道、国道などの分岐点が本市に集中している。特に本遺跡の中には、南北にＪＲ鹿児島本線と国道３号線、東西に国道34号線が貫通し、南に接して九州横断自動車道、西に接して旧長崎街道が通っているなど新旧の交通網の集中する地点でもある。

１．過去の調査

本川原遺跡は、今回の調査以前に３回の発掘調査が実施されている。第１次調査は九州縦貫・横断道の鳥栖インターチェンジの設置に伴う国道３号線の拡幅工事の事前調査として1973年度に佐賀県教育委員会によって実施された。この調査は鳥栖市永吉町字本川原の国道３号線の沿線の標高26m の段丘末端部に位置する。ここから弥生時代終末の方形周溝墓２基、竪穴住居跡５軒、土壙、溝跡等が検出された。[註1]

第２次調査は翌1974年、国道34号線の改良工事に先立って、１次調査区とは国道３号線を挟んで西隣り、３号線と34号線との間に挟まれた段丘状の約4,500㎡を対象にして佐賀県教育委員会によって実施された。調査の結果、弥生時代終末および７世紀代の竪穴住居４軒、およびこのうちの弥生時代終末の竪穴住居である６号住居に付随すると考えられている小路１、古墳時代後期のものを含む土壙３基、貯蔵穴１基が検出された。このうちの貯蔵穴と報告されている遺構は今回の調査区でも検出された２基連結の土壙と同様の形態をしている。[註2]

第３次調査は、鳥栖市永吉町字本川地内の永吉交差点横断地下道取付け道路工事の事前の発掘調査として佐賀県教育委員会が鳥栖市教育委員会の協力のもとに1978年７月28日から同年９月26日まで実施した。調査地は１、２次調査区の北方約150m の標高22～25m の段丘末端部の緩傾斜面に位置し、面積1,040㎡が対象とされた。調査の結果、縄文時代の袋状竪穴２基、７世紀代と想定される竪穴住居跡３軒、歴史時代の溝跡２条などが検出された。[註3]

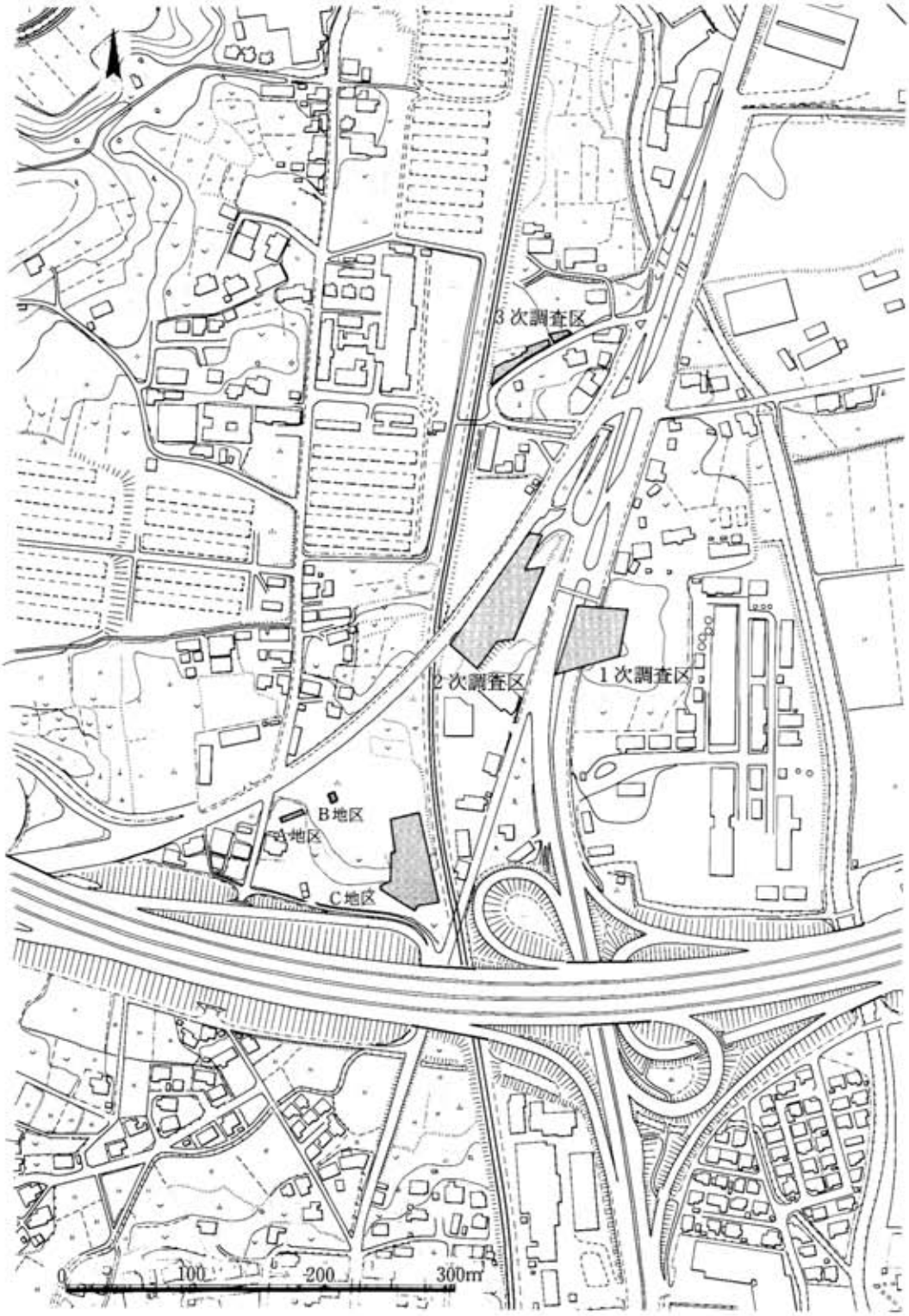


Fig.276　遺跡周辺状況図（1/5000）

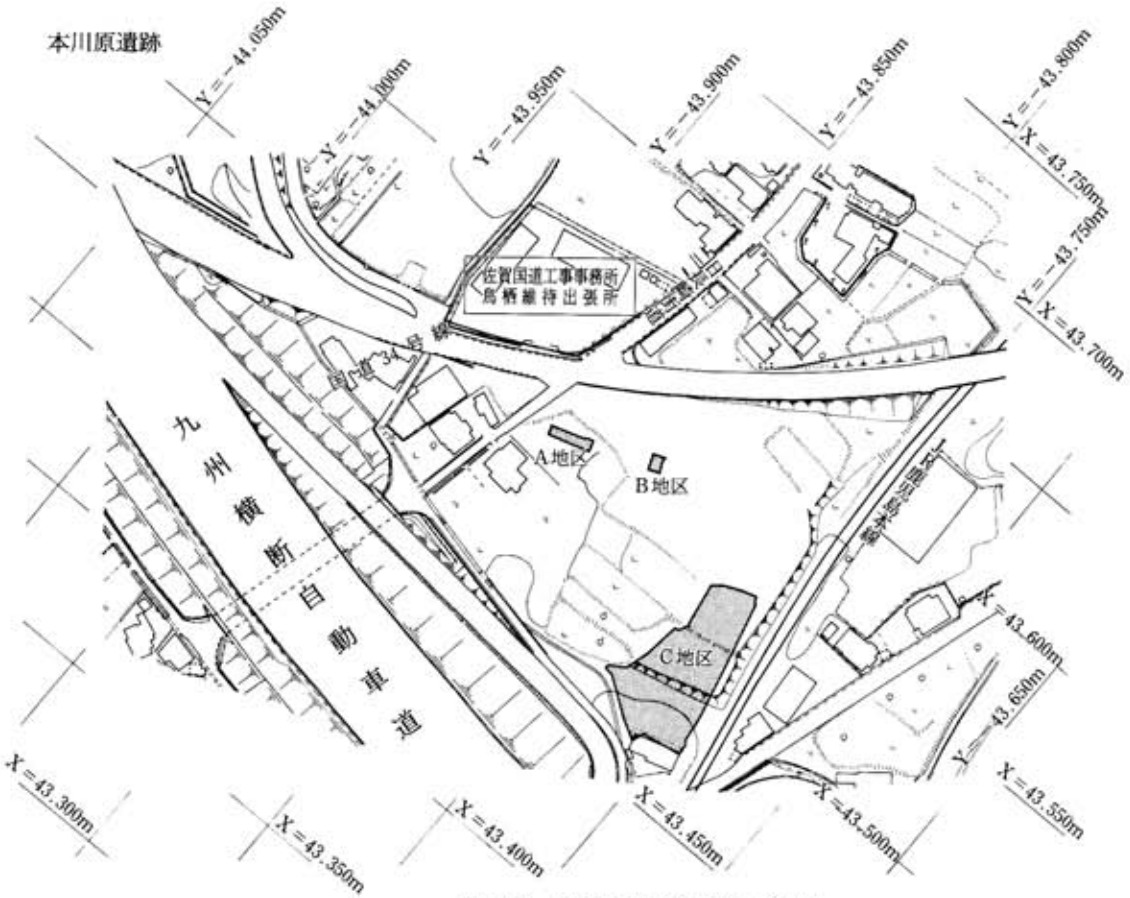


Fig.277　遺跡周辺地形図（1/3000）

2．今回の調査

今回の調査地区は、国道34号線の田代昌町交差点からＪＲ鹿児島線に架かる田代橋間の道路南沿いの標高26～20m の段丘上と傾斜面である。ここは１～３次調査区の南～南西側にあたる。九州横断道から国道34号線への降り口（オフ・ランプ）を付設する工事に先立ち1989年12月に確認調査を実施した結果、丘陵状は大部分が削平されていたが、国道南沿いの丘陵上の一角（Ｂ地区）と一段低くなった部分（Ａ地区）およびＪＲ鹿児島本線に沿った南東斜面畑地（Ｃ地区）については遺構が確認され、合わせて3,000㎡について発掘調査を実施することになった。1989年12月14日にＣ地区南斜面下から掘削機により表土剝ぎを開始し、漸次北側丘陵上へと進行した。Ｃ地区終了後、引き続きＡ・Ｂ地区の表土剝ぎを実施した。表土剝ぎを開始して間もなく、人力により遺構の検出と発掘調査を実施した。調査は調査員３名と男子作業員２名、女子作業員19名によって実施した。Ｃ地区は畑地として造成された際に一部は削平されていたが比較的遺構の残りは良く古墳時代後期～奈良時代の遺構が主として検出された。これに対してＡ地区は若干の小穴・溝跡が検出され、遺物は土師器の小片が出土しただけであった。また、Ｂ地区も土壙２基が検出されたが遺物は出土しなかった。1990年３月30日、Ｃ地区の遺構実測を最後にすべての現場作業を終了し日本道路公団武雄工事事務所に現地を引き渡した。[註4]

3．調査区の概要

今回の調査区は、先述のように柚比丘陵の末端付近に位置するが、国道34号線沿いの標高約27.5m の最高所一帯は削平のため西よりの一角のみを調査対象にした（B地区)。しかしながら､西側のA地区および南側斜面のC地区は遺構遺物が検出され､特にC地区に比較的まとまった遺構群が確認された。

A地区はB地区より一段低くなった標高約24.4m の宅地跡である。国道34号線の拡幅計画部分[註5]との接続部分にあたり4 m×17m の狭長な調査区を設定した。現地表下約90cmが遺構検出面であり、浅い土壙3と溝跡1条を検出した他は小穴のみであった。遺物は遺構内からは出土せず、包含層中に土師器の小片が含まれていただけであった。

B地区はほとんどが削平されているとされた調査対象地最高部の西端である。この部分は西側のA地区方向に向かって低くなっており遺構が削平から免れている可能性があったため設定した4.5m×6.5m の調査区である。ここからはC地区や第2次調査で検出された2個連結乃至これに準じる形態の土壙が2基検出されたが遺物は出土しなかった。

C地区は現況が北から南に下る4段に造成された畑地であった。西側は調査区外、東側はJR鹿児島線によって削平されている。ここからは竪穴住居跡が、6世紀後半～7世紀代のもの7軒、7世紀後半～8世紀代のもの1軒、時期不明のもの2軒の合わせて11軒、概ね8世紀代と想定される掘立柱建物8棟、土壙、溝跡、埋置土器、小穴等の遺構と、先土器時代、古墳時代、奈良時代の遺物が出土した。

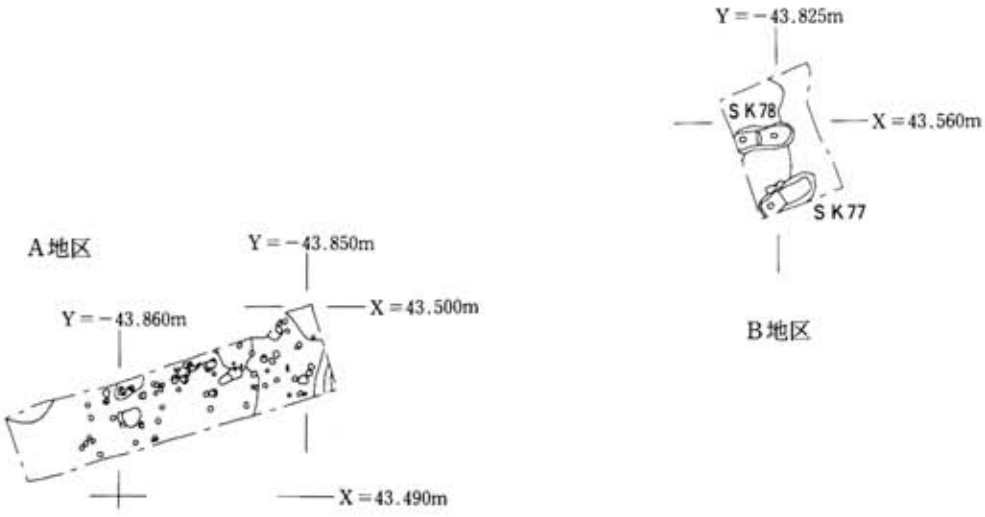


Fig.278　A・B地区遺構配置図（1/400）

Fig.279　C地区遺構配置図（1／400）

註

1．木下之治　木下　巧　天本洋一　「本川原遺跡」　1974年３月
　佐賀県教育委員会　　建設省佐賀国道工事事務所
2．木下之治　木下　巧　天本洋一　「本川原遺跡＝第２次調査＝」　1975年２月
　佐賀県教育委員会　　建設省佐賀国道工事事務所
3．杠　一義　藤瀬禎博　石橋新次　「本川原遺跡　第３次発掘調査報告」　1979年３月
　佐賀県教育委員会
4．家田淳一　中島恒次郎　中摩浩太郎　「本川原遺跡」　九州横断自動車道関係埋蔵文化財
　発掘調査概報　第12集　1990年３月　佐賀県教育委員会
5．調査区と国道34号線との間の幅約10～25m の区間は建設省による拡幅工事計画があり、この部分
　については改めて建設省と協議することになっている。

Tab.40　遺構一覧表

No	地区	遺構番号	遺構種別	形態	規模（m）	出土遺物	時代
1	C	SK01	土壙	隅丸方形	長径(1.8)　短径1.14　深さ0.25	土師１	
2	〃	SX02	不明遺構	不整形	南北(6.0)　東西(3.0)　深さ0.36	布目瓦３　土師カメ片　須恵片	奈良
3	〃	SK03	土壙	〃	長径1.80　短径(0.6)　深さ0.5	布目瓦　須恵杯蓋　身カメ片 土師　カメその他	〃
4	〃	SK04	〃	楕円形	長径1.70　短径(1.10)　深さ0.45	土師杯　カメ	〃
5	〃	SK05	〃	〃	長径1.84　短径1.38　深さ0.66	須恵片　土師カメ片	
6	〃	SB06	掘立柱建物	2間×2間総柱	東西3.00　南北3.80	須恵片、身　高台付杯　土師片 カメ	古墳
7	〃	SB07	〃	〃	東西2.84　南北3.20	須恵杯、高杯脚、蓋、カメ癒着 土師、甑	〃
8	〃	SK08	土壙	隅丸方形	長径2.03　短径1.55　深さ0.33	赤焼　須恵カメ５　土師片　現代 プラスチック	現代
9	〃	SK09	〃	楕円形	長径1.30　短径1.00　深さ0.20	須恵片　石製紡錘車　土師片 杯身片等	古墳
10	〃	SK10	〃	不整形	長径2.7　短径1.20　深さ0.2	須恵杯、蓋、身　土師片21	〃
11	〃	SK11	〃	楕円形	長径1.38　短径0.99　深さ0.42	土師甑　カメ片	〃
12	〃	SK12	〃	隅丸方形	長径2.48　短径1.97　深さ0.25	土師カメ片他　瓦器片２	中世
13	〃	SK13	〃	不整形	長径1.6　短径1.3　深さ0.3	土師カメ片他	古墳？
14	〃	SX14	不明遺構	〃	長径1,24　短径0.88　深さ0.14	土師カメ　小形壺破片　高杯片 須恵片	
15	〃	SK15	土壙	〃	長径2.98　短径1.96　深さ0.35	須恵杯身　蓋　カメ片 土師カメ片他	古墳
16	〃	SX16	不明遺構	〃	長径(1.26)　短径0.74　深さ0.24	土師カメ口縁　須恵杯身高台付	
17	〃	SB17	竪穴住居跡	方形	東西4.23　南北(1.65)　深さ0.28	須恵杯身　高台付　土師カメ口縁	古墳

No	地区	遺構番号	遺構種別	形態	規模(m)	出土遺物	時代
18	〃	SK19	土壙	楕円形	長径1.11×短径0.73×深さ0.19	土師カメ口縁2 土師破片 須恵片	
19	C	SB20	掘立柱建物	2間×2間	東西2.64 南北3.00	須恵杯蓋(P1) 提瓶 須恵杯(P3) その他の土師片	古墳
20	〃	SB21	〃	〃 総柱	東西3.00 南北3.80	土師カメ口縁(P2) 須恵片	〃
21	〃	SB22	〃	〃	東西2.96 南北3.02		〃
22	〃	SB23	〃	〃	東西3.44 南北3.64	土師カメ口縁(P3) 土師片他	〃
23	〃	SB24	〃	〃	東西3.00 南北3.24	土師片	〃
24	〃	SB25	〃	2間×2間+α?	東西(2.70) 南北2.88	須恵杯片(P3) 土師高杯片 須恵片 土師片	〃
25	〃	SB26	竪穴住居跡	方形	東西4.18 南北4.47 深さ0.28	須恵杯身(高台) 高杯(長脚二段スカシ) 土師カメ、杯	〃
26	〃	SB27	〃	〃	東西4.85 南北(1.29) 深さ0.52	須恵杯蓋 土師カメ 砥石	〃
27	〃	SB28	〃	〃	東西5.35 南北4.90 深さ0.54	土師カメ 杯 甕 須恵杯身、蓋 その他破片	〃
28	〃	SB29	〃	〃	東西(2.67) 南北5.10 深さ0.62	土師カメ 須恵杯身蓋 高杯脚	〃
29	〃	SD32	溝	溝状	長さ4.86×幅0.69×深さ0.08	土師片1	
30	〃	SD33	〃	〃	長さ一×幅1.56×深さ0.29	須恵杯身1 土師片(把手片)	古墳
31	〃	SX34	不明遺構	不整形	東西4.0 南北3.0 深さ0.6	須恵高杯蓋 杯身蓋 土師カメ 須恵高杯脚 横瓶片 ナイフ形石器	〃
32	〃	SB35	竪穴住居跡	方形	東西3.58 南北(2.79) 深さ0.33	須恵小片(杯蓋、高杯) 土師カメ小片	〃
33	〃	SX36	不明遺構	L字形	東西2.4 南北2.5 深さ0.05	土師カメ片	
34	〃	SX37	〃	方形	東西4.5 南北4.0 深さ0.05	須恵杯身片 土師カメ他破片	
35	〃	SK38	土壙	楕円形	長径1.64 短径1.10 深さ0.19		
36	〃	SB39	竪穴住居跡	方形	東西(3.54) 南北1.98 深さ0.28	土師カメ 須恵杯蓋片 土師片	古墳
37	〃	SB40	〃	〃	東西2.73 南北2.26 深さ0.15	須恵(赤焼)杯蓋、杯蓋 土師カメ	古墳～奈良
38	〃	SX41	不明遺構	〃	東西2.42 南北2.06 深さ0.40	土師甕(底部) 須恵片	古墳
39	〃	SB42	竪穴住居跡	方形	東西(1.67) 南北(2.48) 深さ0.34	土師片	〃
40	〃	SB43	〃	〃	東西(0.28) 南北(3.07) 深さ0.22	土師片	〃
41	〃	SB44	掘立柱建物	3間×5間	東西4.51 南北5.92	土師カメ口縁(P10) 土師片	〃
42	〃	SK45	土壙	長楕円形	長径3.4 短径1.6 深さ1.2		
43	〃	SK46・47	〃	〃	長径3.36 短径1.1 深さ1.06	土師片	古墳～奈良?

No.	地区	遺構番号	遺構種別	形態	規模(m)	出土遺物	時代
44	〃	SX48	不明遺構	不整方形	東西3.16 南北1.3 深さ0.2	土師カメ口縁 須恵片 土師片 黒燿石	古墳
45	〃	SB49	竪穴住居跡	方形	東西4.93 南北2.30 深さ0.44	須恵杯蓋 土師カメ	〃
46	C	SK50	土壙	長楕円形	長径3.24 短径1.12 深さ0.37	土師カメ 石鏃 須恵杯身	〃
47	〃	SK52・53	土壙	〃	長径3.4 短径1.16 深さ0.94	土師片1	
48	〃	SK54	〃	長楕円形	長径2.08 短径0.91 深さ1.04	須恵杯身 高杯脚 土師カメ	
49	〃	SX55	不明遺構	不整形	長径1.74 短径1.28 深さ0.12	土師高台付碗 カメ片 須恵片	古墳
50	〃	SX56	〃	〃	東西1.7 南北1.8 深さ0.4	土師片 須恵片	〃
51	〃	SX57	〃	長楕円形	長径6.40 短径2.57 深さ0.39	須恵杯身 土師カメ口縁 その他	〃
52	〃	SX58	〃	隅丸方形	長径(0.88) 短径1.0 深さ0.84	伊万里皿片 唐津片 土師片 須恵片	近世
53	〃	SX59	〃	溝状	長さ4.4 幅1.34 深さ0.2	須恵杯片 土師カメ片 その他破片	古墳
54	〃	SX60	〃	〃	長径2.5 短径1.0 深さ0.3	須恵杯蓋 土師カメ片	〃
55	〃	SX61	〃	楕円形	長径1.18 短径0.68 深さ0.63	土師カメ片 須恵片	
56	〃	SX62	〃	〃	長径1.48 短径0.48 深さ0.25	土師片	
57	〃	SX63	〃	溝状	長径1.84 短径0.24 深さ0.30	唐津片 須恵片 土師片	近世
58	〃	SX66	〃	楕円形	長径1.56×短径1.14×深さ0.64		
59	〃	SX67	〃	〃	長径1.26×短径0.74×深さ0.43	須恵杯蓋片(宝珠つまみ) 土師片、石鏃	古墳
60	〃	SX68	〃	溝状	東西5.8 南北3.0 深さ0.1	須恵片 土師片	
61	〃	SD69	溝	〃	長さ3.56×幅0.33×深さ0.26	土師片	
62	〃	SK70	土壙	楕円形	長径1.58×短径1.02×深さ0.56	土師片1	
63	〃	SX71	不明遺構	方形？	長径？×短径(1.03)×深さ0.18	土師片1	
64	〃	SB72	竪穴住居跡	方形	東西(2.05) 南北(1.17) 深さ0.28	土師カメ片	
65	〃	SX74	不明遺構	不整形	長径3 短径2.50 深さ0.20	須恵杯 壺片 土師片 布目瓦(土師質) 石器6	奈良
66	〃	SX75	〃	〃	長径(1.54) 短径1.59 深さ0.11	土師カメ片	
67	〃	SD76	溝	溝状	長さ3.4 幅0.6 深さ0.1		
68	B	SK77	土壙	長楕円形	長径3.38 短径1.5 深さ1.08		
69	〃	SK78	〃	〃	長径3.08 短径1.2 深さ1.28		

II．遺　構

1．竪穴住居跡

ＳＢ17住居跡（PL.162）

Ｃ地区の南側に位置する竪穴住居跡である。南半分が削平されているが、平面は方形あるいは長方形であろう。東西軸4.23m、南北軸1.65＋αm、深さ0.28m。壁は、床面からややゆるやかに立ち上がる。床面にいくつかの小穴を確認できるが、住居跡の柱穴との関係は不明。北壁のほぼ中央に、壁の外側まで掘りくぼめた長径0.95m、短径0.68m の楕円形の掘り込みがみられる。南側に焼土も残存していることから、壁の外まで掘り込む形態のカマドの跡と思われる。遺物は須恵器杯身、短頸壺蓋、土師器甕、甑等の破片が出土した。

ＳＢ72住居跡（PL.162）

中央部に位置する竪穴住居の一群より、やや西側に離れた竪穴住居跡である。ほとんどが削平されており、住居跡の北東隅部分しか残存していない。東西軸2.05＋αm、南北軸1.17m＋

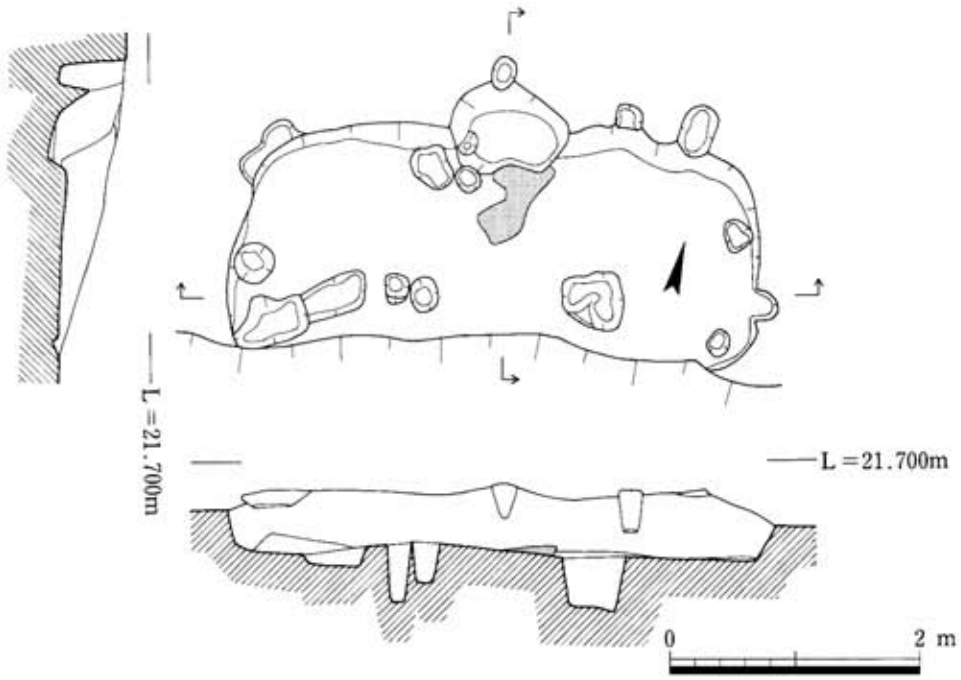


Fig.280　ＳＢ17住居跡（1/60）

αm、深さ0.28m。壁は、床面からほぼ垂直に立ち上がる。北壁に1個の小穴を確認できるが、住居跡との関連は不明である。楕円形で、長径0.41m、短径0.33m、深さ0.15m。また、この小穴から東壁に添って、幅0.10～0.15m、深さ0.01～0.02mのきわめて浅い溝状の遺構が続く。遺物は、土師器甕片が出土した。

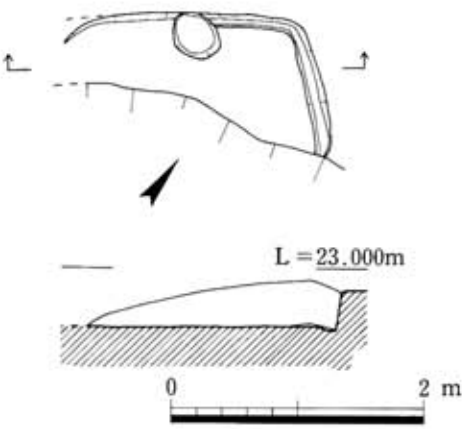


Fig.281 ＳＢ72住居跡（1/60）

ＳＢ27住居跡（PL.163）

調査区中央部に位置する竪穴住居群の1軒である。北西隅をＳＢ26住居跡、また南側をＳＢ49住居跡と、それぞれ切り合う状況にある。いずれも、ＳＢ27住居跡のほうが古い。北側の一部しか確認できないが、平面は方形あるいは長方形であろう。東西軸4.85m、南北軸1.29＋αm。深さ0.52mで壁は床面から垂直気味に立ち上がる。床面に2個の小穴を確認できるが、住居跡との関連は不明である。また、北壁の中央に楕円形の浅い掘り込みを行い、そこに砂質土でカマドを構築している。このカマドは住居壁を掘り込まず、壁の内側に構築される形態のものである。両袖の先端には石を使用している。カマドの東隣には同質の土により幅0.5m、奥行0.8m、高さ0.04～0.05mの低い棚状の構造物が付設してあった。この砂質土で構築された袖部および台状部は検出中の観察では非常に硬質であった。西側には、幅0.2 ～0.5m、深さ0.05m浅い溝状の遺構がつづく。遺物は、須恵器杯蓋、身、土師器甕、砥石等が床面直上や少し浮いた状況で出土した。

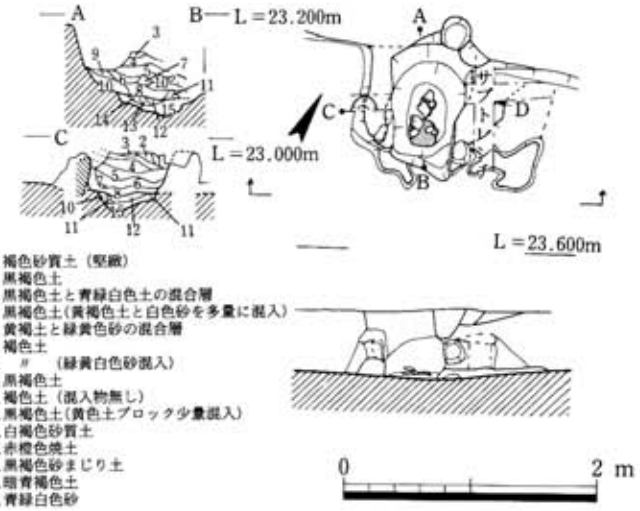


Fig.282 ＳＢ27住居跡カマド（1/60）

ＳＢ49住居跡（PL.163）

中央部に位置する竪穴住居群の一軒である。北側をＳＢ27住居跡と切り合う状況にある。27と接する北壁のラインがやや不明確であったが土層断面の観察等からＳＢ27住居跡のほうが古いと判断された。平面形は北側半分しか確認できないが、方形あるいは長方形であろう。東西

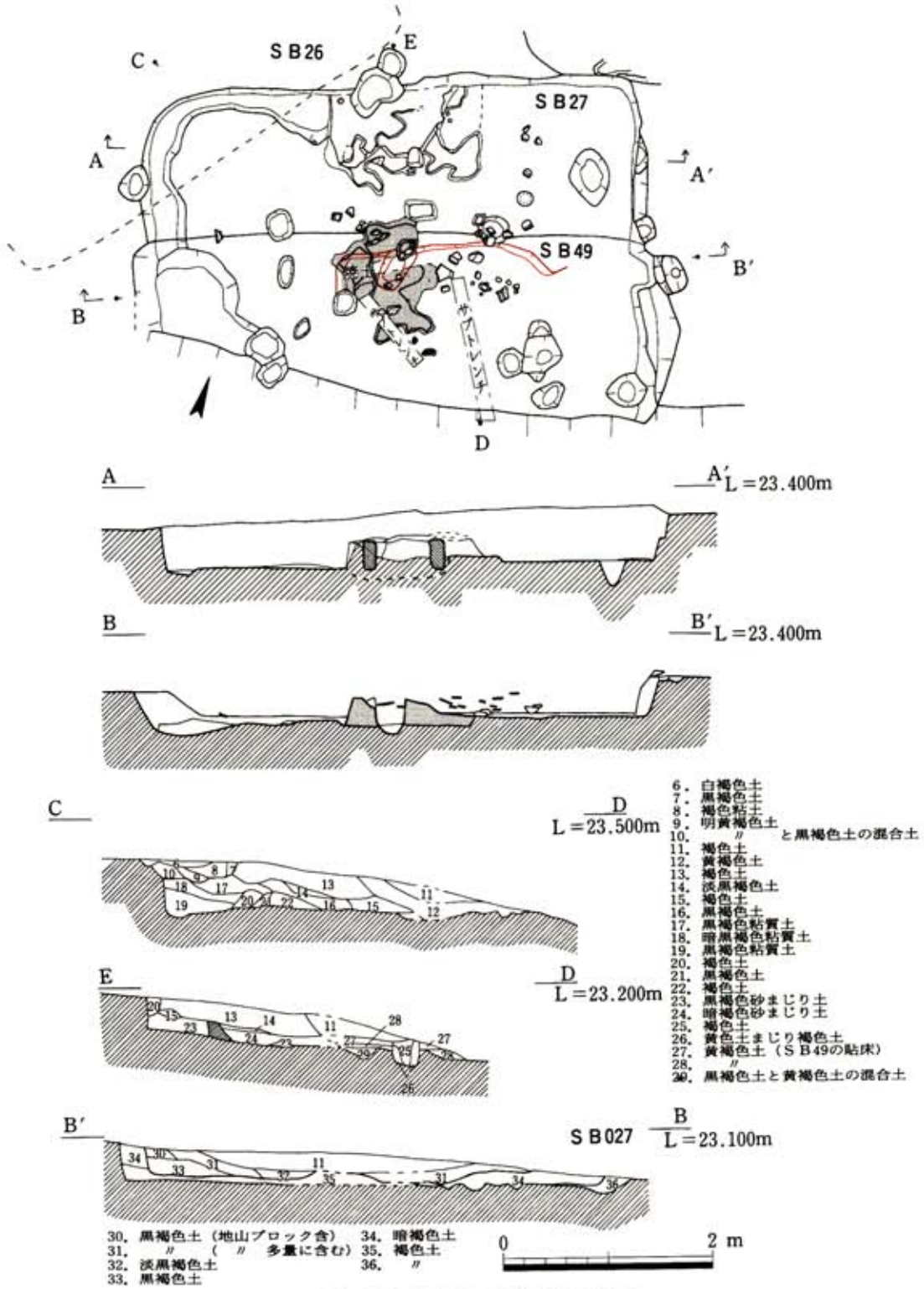


Fig.283　S B27・49住居跡（1/60）

軸4.93m、南北軸2.30＋αm、深さ0.44m。壁は、床面からほぼ垂直に立ち上がる。床面に10個以上の小穴を確認できるが、住居跡との関連は不明である。また、北壁の中央より若干南側にやや浅い掘り込みがありその上面に焼けた粘土が分布していた。明確なプランは把握できなかったがこの部分にカマドを構築していたと考えられる。他に、北西隅に浅い掘り込みがみられる。住居跡との関連は不明である。遺物は、土師器甕等が出土した。

ＳＢ26住居跡（PL.163）

中央部に位置する竪穴住居群の一軒である。東側の一部をＳＢ27住居跡と切り合う状況にある。ＳＢ27住居跡の方が古い。平面は、東西軸4.18m、南北軸4.47m のほぼ方形をなす。深さ0.28m。壁は、床面からほぼ垂直に立ち上がる。床面の小穴のなかで、Ｐ１～Ｐ４の４個はその配置から柱穴と確認できる。柱間は東西1.98m と2.05m、南北2.10m と2.15m。柱穴の掘方はＰ４を除いて円形で、直径0.28～0.34m。深さ0.35～0.51m。柱根は不明。また、北西壁の中央にやや浅い掘り込みを行い、その周囲に粘土を用いてカマドを構築しているが、住居壁に若干の掘り込みを設ける形態のものである。また、この掘り込みの両端にカマドの下部が袖上に残存している。他に、西隅に浅い掘り込みがみられる。住居跡との関連は不明である。遺物は、須恵器杯身片、土師器杯、甕小片等とともに台形石器が出土した。

ＳＢ28住居跡（PL.163）

中央部に位置する竪穴住居群の一棟である。一帯には６軒の竪穴住居跡が密集するが、そのＳＢ29住居跡と切り合う状況にある。ＳＢ29住居跡のほうが古い。平面は、東西の長軸5.35m、南北の短軸4.90m の隅丸方形で、本遺跡で最大規模のものである。深さ0.54m 。壁は、床面から垂直気味に立ち上がる。床面の小穴のなかで、Ｐ１～Ｐ４の４個はその配置から柱穴と確認できる。柱間は東西各2.30m、南北も各2.30m 柱穴の掘方は円形で、直径0.23～0.42m。深さ0.46～0.61m。柱根は不明。西壁と北壁の各々の中央に、浅い掘り込みがみられる。粘土も残存していることから、カマドの跡と思われる。また、住居跡の内部には、他に中央部と西・南側の３箇所に土壙状の掘り込みがみられる。中央部と南側のものは浅いが、西側の隅丸長方形のＳＸ61遺構は0.65m の深さをもつ。しかし、いずれも住居跡との関連は不明である。遺物は、須恵器杯蓋、身、土師器杯、甕、甑等が出土した。

ＳＢ29住居跡（PL.163）

中央部に位置する竪穴住居群の一軒である。西側をＳＢ28住居跡、また南東隅をＳＢ35住居跡と、それぞれ切り合う状況にあったが、28より古く35より新しい。このＳＢ29住居跡のほうが古い。東半分しか確認できないが、平面は方形あるいは長方形であろう。東西軸2.67＋αm、

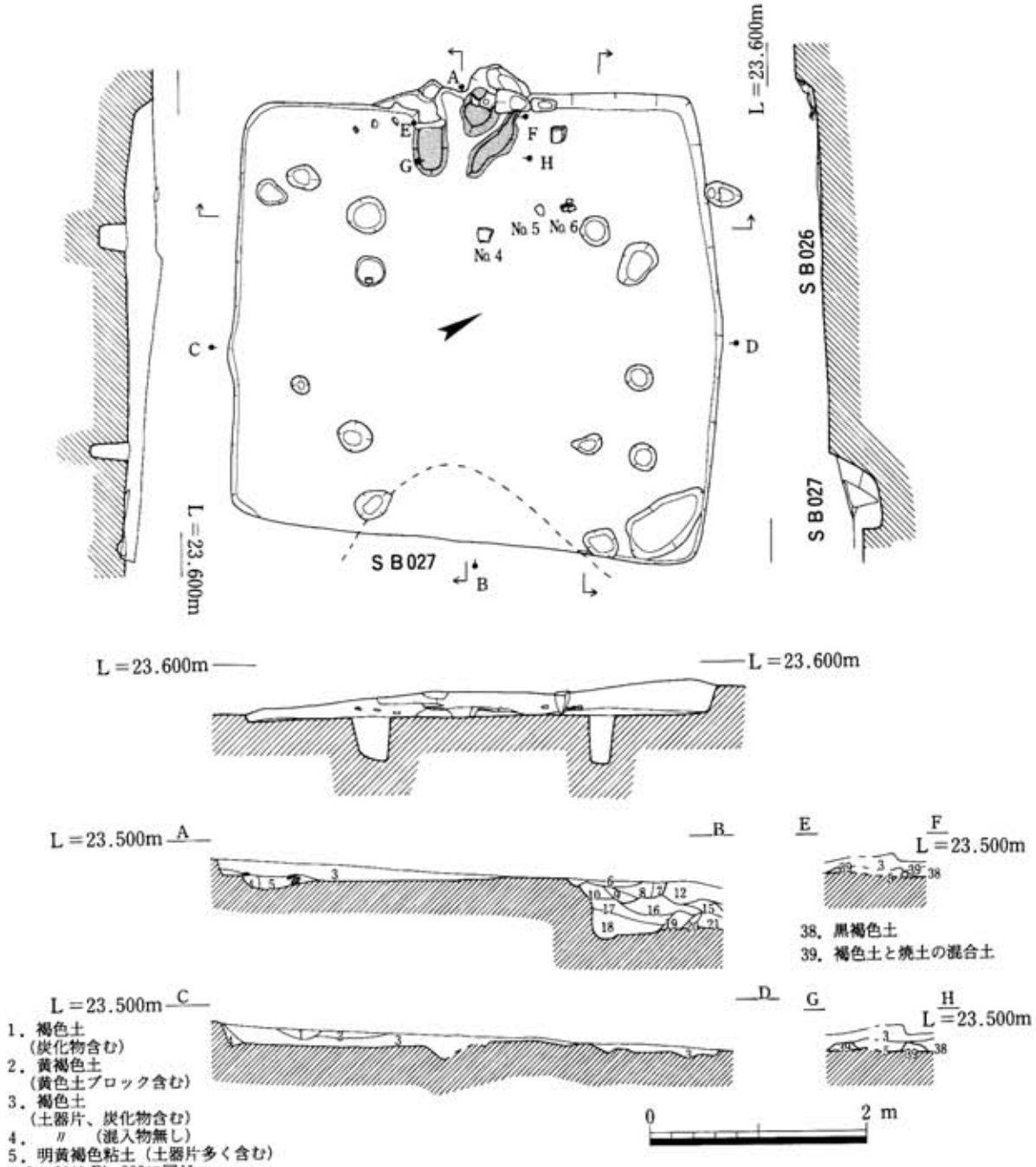


Fig.284　S B26住居跡（1/60）

南北軸5.10m、深さ0.62m。壁は、床面からほぼ垂直に立ち上がる。床面に掘り込まれた小穴と西側のS B28 住居跡の床面下に埋没していた小穴のなかで、P 1～P 4の4箇所はその配置から柱穴と確認できる。柱間は東西2.60m と2.70m、南北2.45m と2.70m。柱穴の掘方は円形で、直径0.35～0.55m。深さ0.31～0.55m。柱根は不明。また、北壁にやや不整形な浅い掘り込

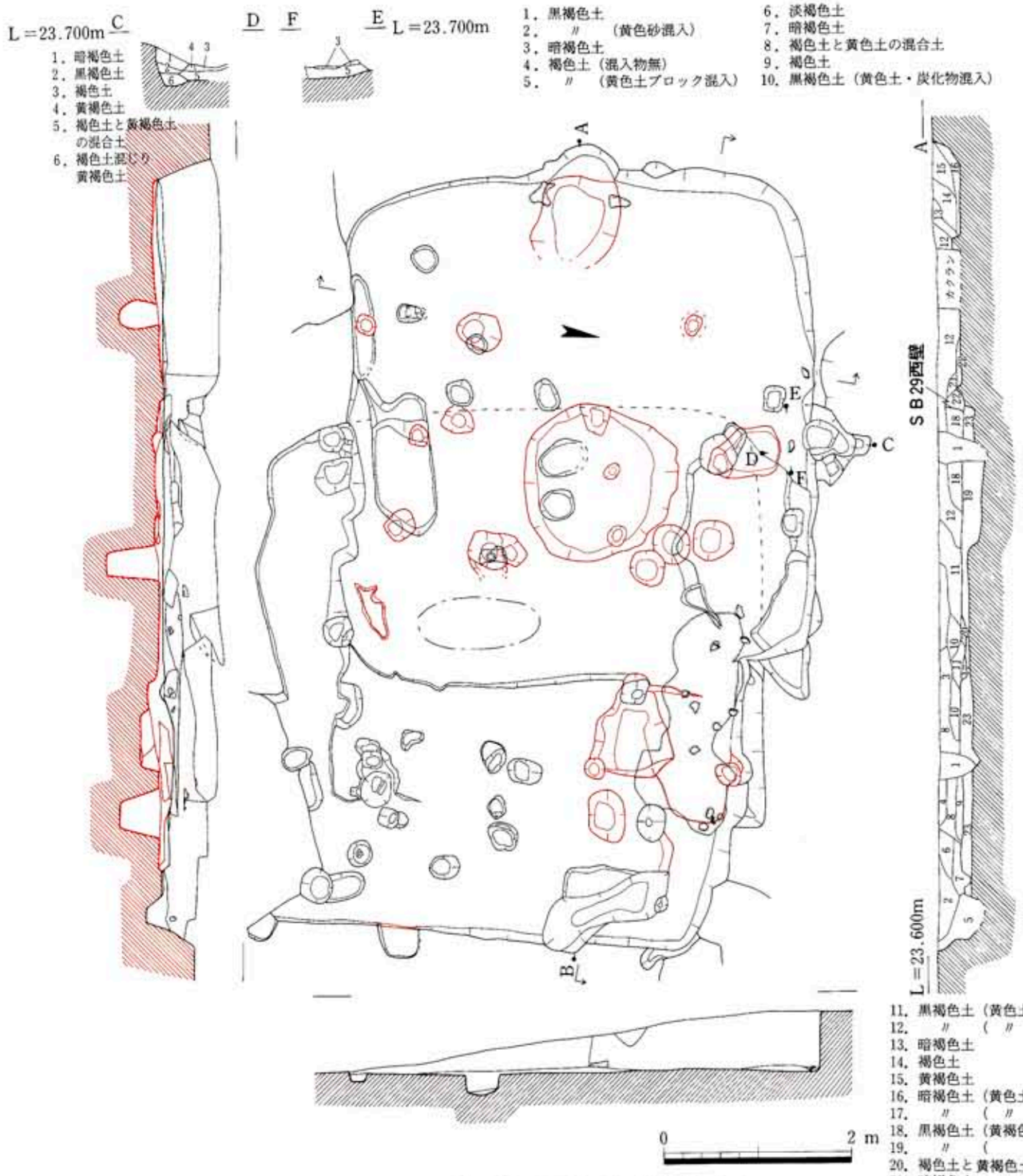


Fig. 285　SB28・29住居跡（1/60）

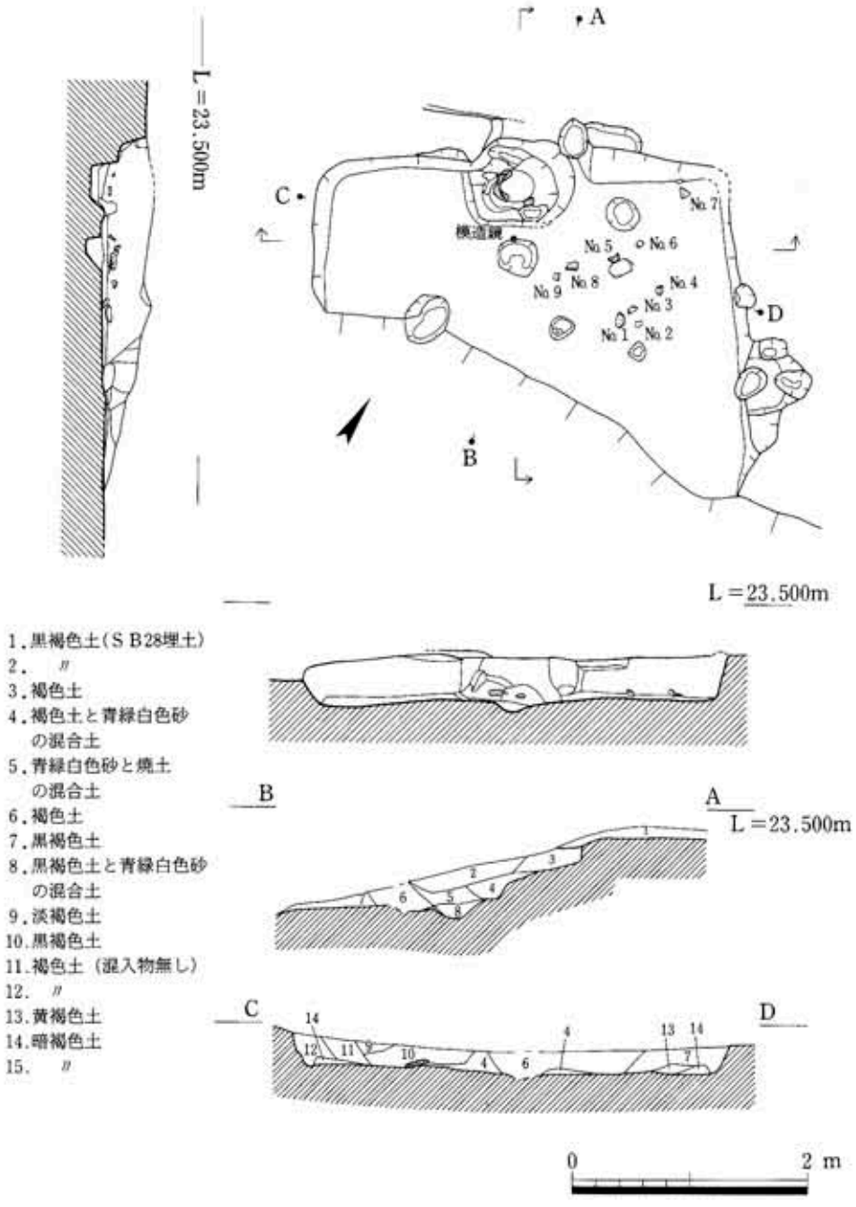


Fig.286　SB35住居跡（1/60）

みがみられ、周辺には粘土も残存し、壁の一部も焼けていることからカマドの跡と思われる。遺物は、須恵器杯身、高杯、土師器杯、甕、甑等が出土した。

S B35住居跡（PL.162、164）

中央部に位置する竪穴住居群の一軒である。北側をS B29住居跡と切り合う状況にある。S B29住居跡のほうが新しい。南半分が削平されているが、平面は方形あるいは長方形であろう。東西軸3.58m、南北軸2.79＋αm。深さ0.33m。壁は、床面からややゆるやかに立ち上がる床面に5個の小穴を確認できるが、住居跡との関連は不明である。また、北壁の中央に長径0.94m、短径0.69mの楕円形の掘り込みがみられる。粘土塊も一部残存していることから、住居壁を掘り込む形態のカマドの跡と思われる。遺物は、須恵器杯身、甕、土師器甕等の他、カマドの前面より模造鏡と考えられる土製品が出土した。

S B39住居跡（PL.164）

中央部のやや北側に位置する竪穴住居跡である。北側にS B40住居跡が近接する。南側が大きく削平されているが、平面は方形あるいは長方形であろう。東西軸3.54＋αm、南北軸1.98m、深さ0.28m。壁は、床面からほぼ垂直に立ち上がる。北壁の中央に、短径0.73m、短径0.61mの楕円形の掘り込みがみられる。掘り込みの東隣にはカマドの下部と考えられる粘土塊も一部袖状に残存していることから、住居の壁を掘り込む形態のカマドの跡と思われる。また、カ

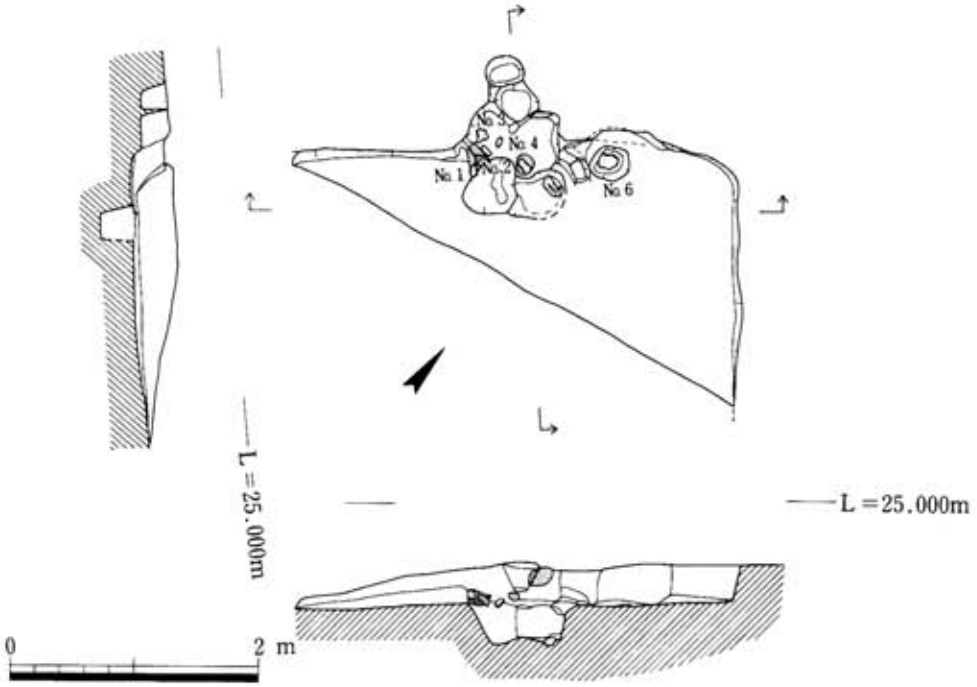


Fig.287　S B39住居跡（1/60）

マドの東には住居壁を横方向に抉り込む穴が検出された。なお、この掘り込みの南側に２個の小穴を確認できるが、カマド等との関連は不明である。遺物は、須恵器杯蓋片、土師器甕等が主にカマド内やカマド周辺の床面直上の高さで破片の状態で出土した。

ＳＢ40住居跡（PL.164）

中央部のやや北側に位置する竪穴住居跡である。北側にＳＢ42住居跡、南側にＳＢ39住居跡がそれぞれ近接する。平面は、東西軸2.73m、南北軸2.26m の隅丸長方形で、小形である。深さ0.15m で壁は、床面からややゆるやかに立ち上がる。床面の小穴のなかで、Ｐ１～Ｐ４の４個は、その配置から柱穴と確認できる。柱間は東西各1.93m、南北1.39m と1.52m 柱穴の掘方は円形。直径0.14～0.21m で、大変小さい。また、掘方は垂直ではなく、中央部へ向けてやや斜めに掘り込まれている。深さは、北東の柱穴が0.13m とかなり浅いが、他は0.26～0.41m である。柱根は不明。また、北壁の中央に楕円形の浅い掘り込みを行い、その周囲に粘土を用いてカマドを構築している。カマド部からは、北側に約0.6m の煙道がのびる。遺物は、須恵器杯

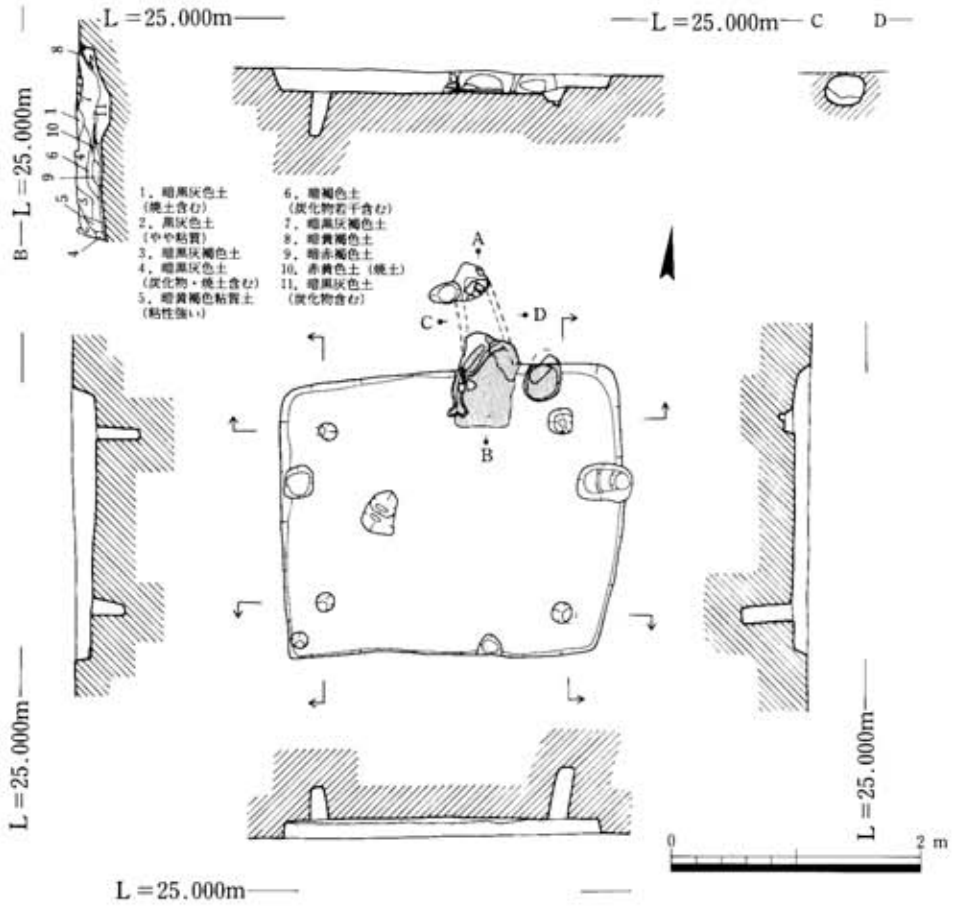


Fig.288　ＳＢ40住居跡（１/60）

蓋、高杯片、土師器甕片等が出土した。

ＳＢ42住居跡（PL.164）

中央部のやや北側に位置する竪穴住居跡である。南側にＳＢ40住居跡が近接する。ほとんどが削平されており、住居跡の北東隅部分しか残存していない。東西軸1.67＋αm、南北軸2.48＋αm。深さ0.34m。壁は、床面からややゆるやかに立ち上がる。床面に５個の小穴を確認できるが、住居跡との関連は不明である。また、東壁から北壁に添って、幅0.17～0.65m、深さ0.05～0.14m の浅い溝状の遺構が続く。遺物は、土師器甕片が出土した。

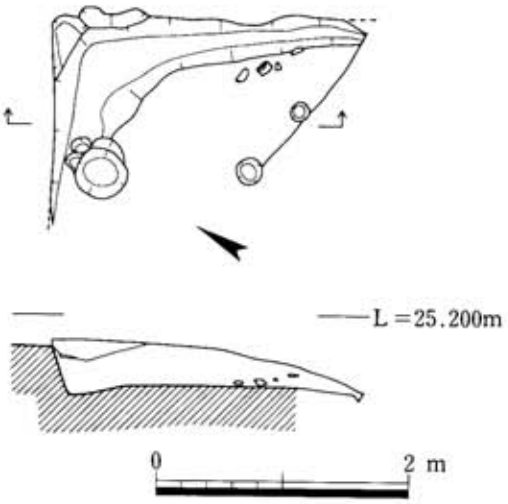


Fig.289　ＳＢ42住居跡（1/60）

ＳＢ43住居跡

もっとも北側に位置する竪穴住居跡である。他の竪穴住居跡とはやや離れる。東側が大きく削平されているが、平面は方形あるいは長方形であろう。東西軸0.28＋αm、南北軸3.07＋αm、深さ0.22m。壁は、床面からほぼ垂直に立ち上がる。床面に10個ほどの小穴を確認できるが、住居跡との関連は不明である。また、北壁に直径1.26m、短径1.02m の楕円形の掘り込みがみられる。深さ0.38m。粘土塊がわずかに残存していることから、カマドの跡と思われる。他に、この掘り込みの西側に２個のやや大きめの穴を確認できるが、カマド等との関連は不明である。西側でＳＫ50土壙と重複するが本住居跡が古い。

遺物は、土師器甕片が出土した。

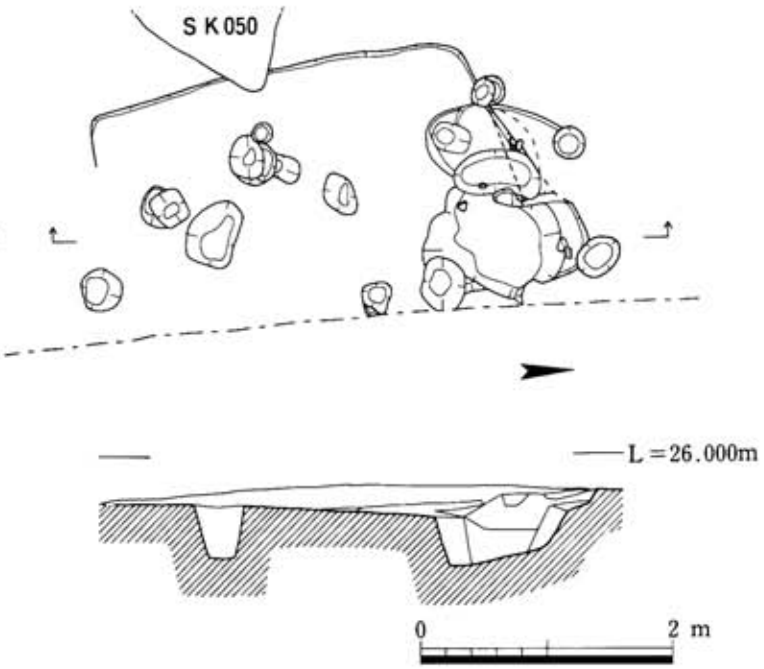


Fig.290　ＳＢ43住居跡（1/60）

2．掘立柱建物跡

ＳＢ06建物跡

調査区南側に集中する掘立柱建物群のなかで、最も北東隅に位置している。他の建物とはやや離れている。

２間×２間（3.00×3.80m）の総柱の南北棟。柱間の寸法は、梁行1.50m、桁行1.90m。柱穴の掘方はほぼ円形をなすが、直径0.34～0.57m であり、規模はやや異なる。深さも0.20～0.53 m で、やはり一定していない。また、柱根も確認できない。建物の南北軸の方向は、真北より西へ５°30′振れる。

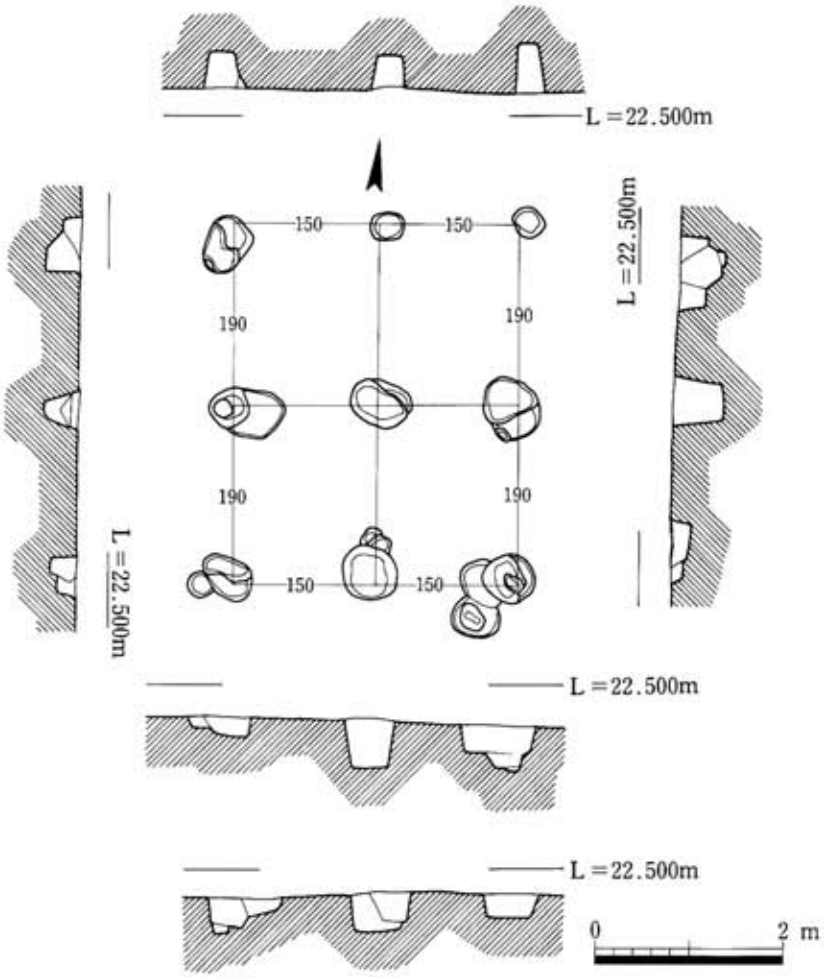


Fig.291　ＳＢ06掘立柱建物跡（１/80）

ＳＢ07建物跡（PL.165）

調査区南側に集中する掘立柱建物群の一棟である。南側に位置するＳＢ24建物跡、また西側に位置するＳＢ20・21建物跡と、それぞれほぼ並ぶ。

２間×２間(2.84×3.20m)の総柱の南北棟。各柱間の寸法はやや異なるが、その平均は梁行1.42m、桁行1.54m。柱穴の掘方はほぼ円形をなすが、直径0.30～0.75m であり、規模は大きく異なる。深さは0.72～1.02m で深めであるが、やはり一定していない。柱穴には２段掘の箇所もみられる。柱根は確認できない。建物の南北軸の方向は、真北より西へ34°30′振れる。

遺物は須恵器片、土師器片が出土した。

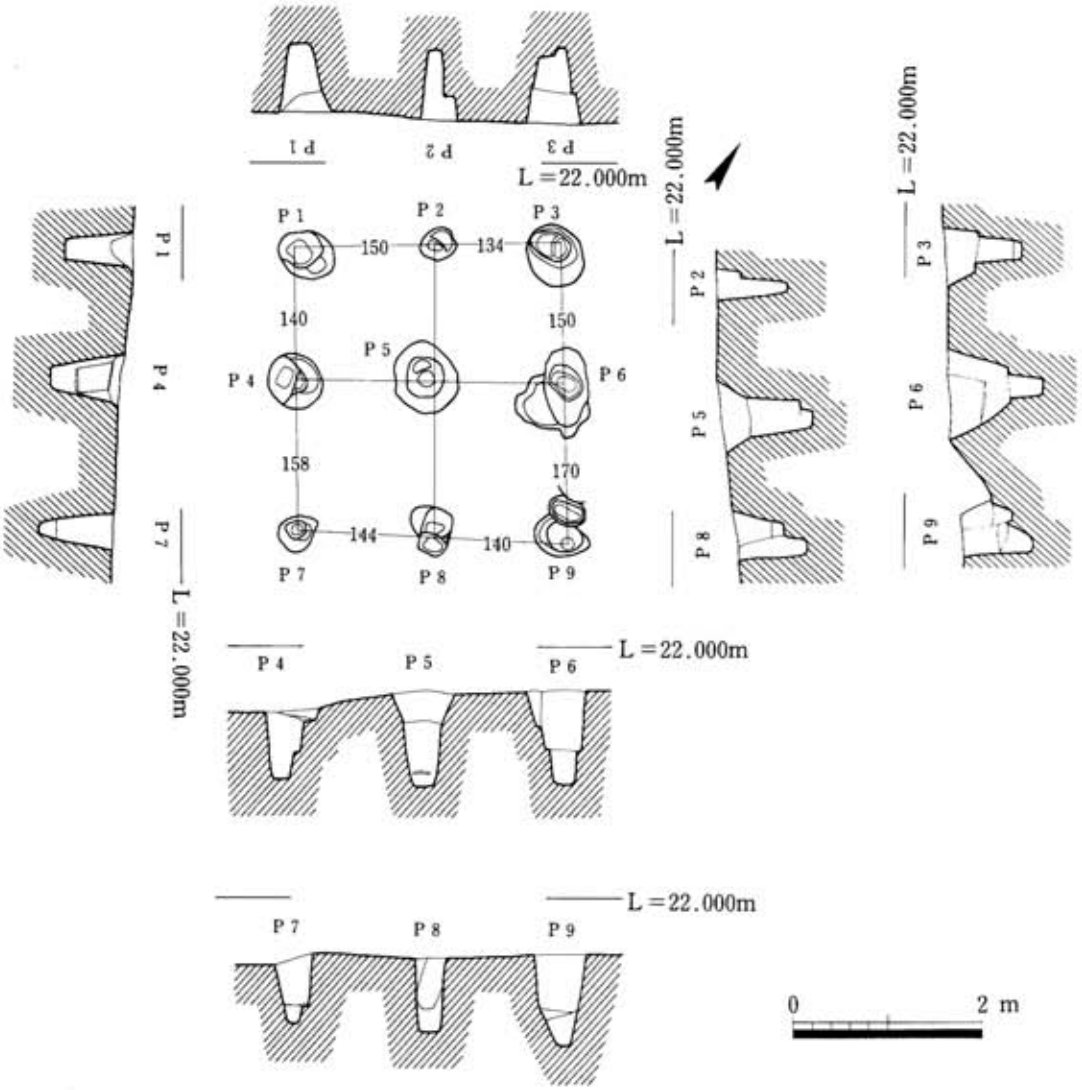


Fig.292　ＳＢ07掘立柱建物跡（1/80）

ＳＢ20建物跡（PL.166）

南側の掘立柱建物群の一棟である。東側に位置するＳＢ07建物跡とほぼ並ぶ。また、やや東側に位置するＳＢ21建物跡とは重複する関係にある。柱穴の掘方の切り合い状況からみると、ＳＢ21建物跡のほうが古い。

２間×２間（2.64×3.00m）の南北棟。各柱間の寸法はやや異なるが、その平均は梁行1.25m、桁行1.45m。柱穴の掘方は円形である。直径0.41～0.58m で、ほぼ同じ大きさである。深さは0.13～0.80m で、一定していない。南隅の柱穴を除いて柱根が確認できる。直径0.2 ～0.28m。建物の南北軸の方向は、真北より西へ35°振れる。

遺物は須恵器杯蓋片、土師器片等が柱穴内から出土した。

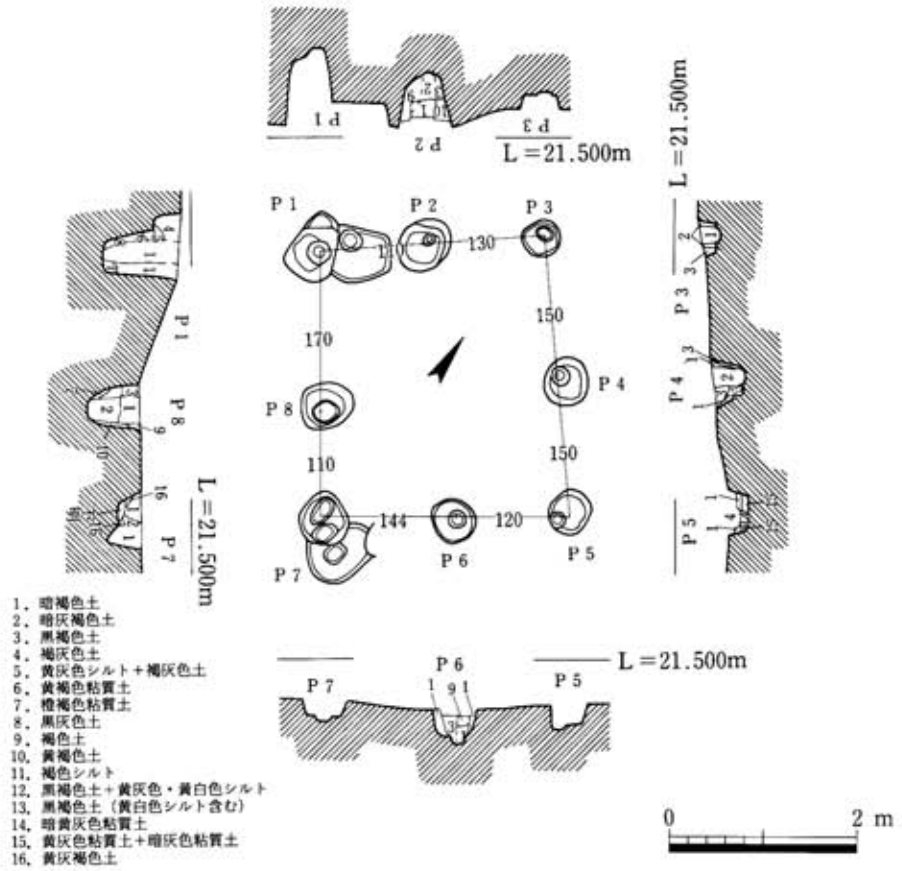


Fig.293　ＳＢ20掘立柱建物跡（１／80）

ＳＢ21建物跡（PL.166）

南側の掘立柱建物群の一棟である。他の建物跡との位置関係は、ＳＢ20建物跡とほぼ並ぶ。また、重複関係にあるＳＢ20建物跡より古い。

２間×２間（3.00×3.80m）の総柱の南北棟。柱間の寸法は、梁行1.50m、桁行1.90m。柱穴の掘方はほぼ円形をなす。直径0.48～0.75mであるが、0.60mほどのものが多い。深さは0.60～0.74mで、一定していない。すべての柱穴で柱根が確認できる。直径0.15～0.22m。建物の南北軸の方向は、真北より西へ39°振れる。

遺物は、須恵器片、土師器甕片等が柱穴内から出土した。

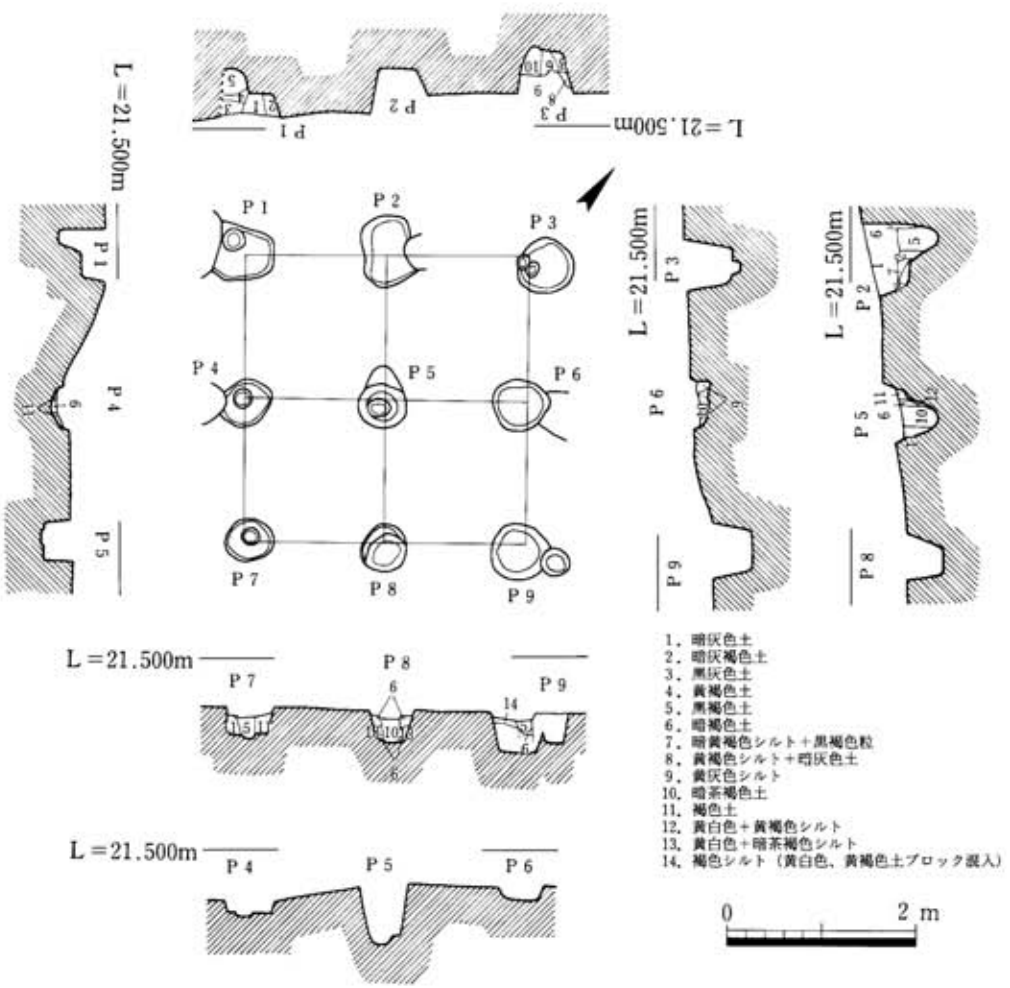


Fig.294　ＳＢ21掘立柱建物跡（1/80）

ＳＢ22建物跡（PL.166）

南側の掘立柱建物群の一棟である。東へわずか１ｍのところにＳＢ24建物跡が位置している。ＳＢ24建物跡が0.35m 南へ下がるが、互いの梁行・桁行の方向がほぼ並行していることから、これら２棟は関連する建物だったことも考えられる。また、東隅部がＳＢ23建物跡と重複しているが、その新旧関係は不明である。

２間×２間(2.96×3.02m)の総柱の東西棟。柱間の寸法は、梁行1.48m、桁行1.51m で、ほぼ同じである。柱穴の掘方はほぼ円形をなす。直径0.28～0.50m であるが、0.30m ほどの小さなものが多い。深さは0.30～0.57m である。柱根は４箇所で確認できる。直径0.10～0.16m で、細い。建物の南北軸の方向は、真北より40°西へ振れる。

遺物は検出されなかった。

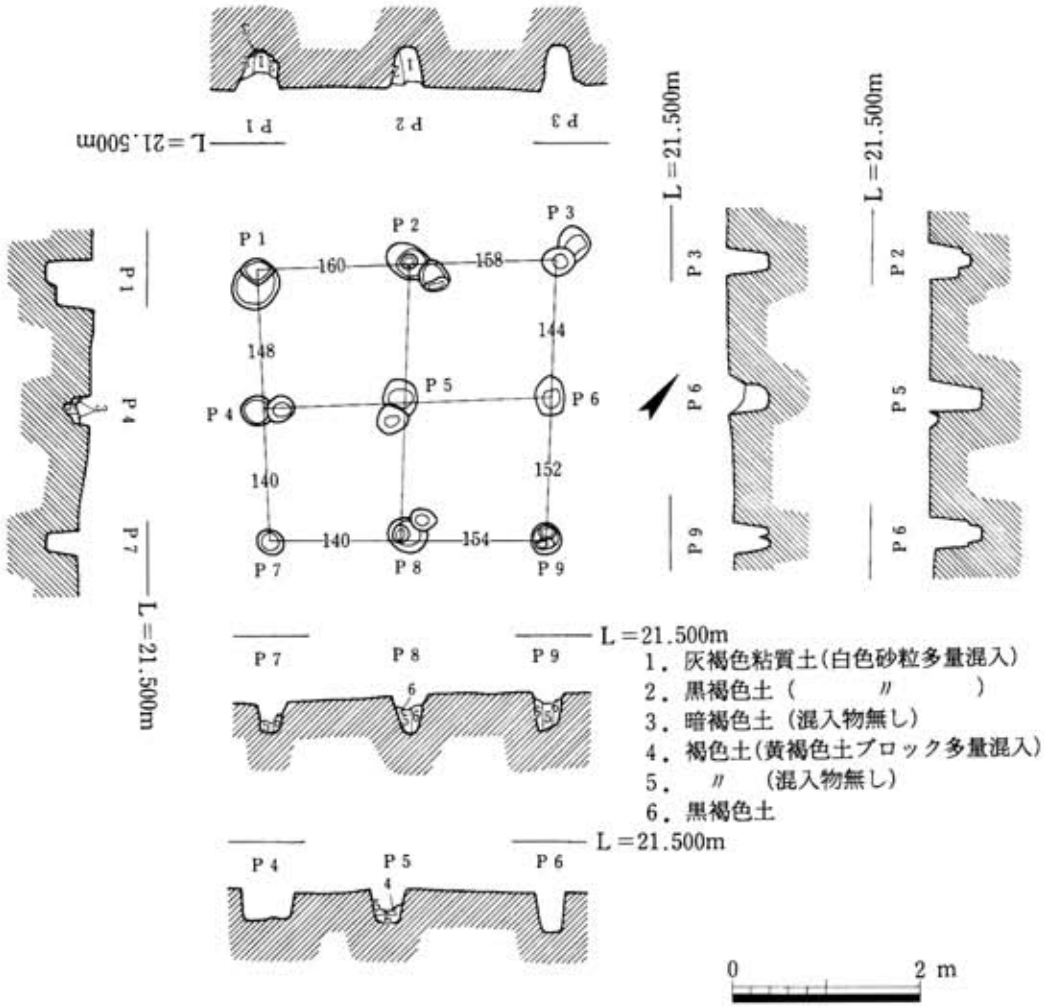


Fig.295　ＳＢ22掘立柱建物跡（１/80）

ＳＢ23建物跡（PL.167）

南側の掘立柱建物群の一棟である。北側に位置するＳＢ22・24建物跡の２棟と重複している。ＳＢ22建物跡とは柱穴の掘方の切り合いがみられないので、その新旧関係は不明であるが、ＳＢ24建物跡の柱穴とはそれを確認することができる。ＳＢ24建物跡が古い。

２間×２間(3.44×3.64m)の総柱の南北棟。柱間の寸法は、梁行1.76m、桁行1.80m で、ほぼ同じである。柱穴の掘方はほぼ円形をなす。直径0.40～0.69m であるが、0.40m 程のものが多い。深さは0.23～0.59m で、一定していない。柱穴には２段掘の箇所もみられる。柱根は６箇所で確認できる。直径0.14～0.20m。また、東側桁行の中央と南隅の柱穴には、底面近くに薄い板石がみられる。柱の根石の用途であろうか。建物の南北軸の方向は、真北より25°45′西へ振れる。遺物は土師器片が柱穴内から出土した。

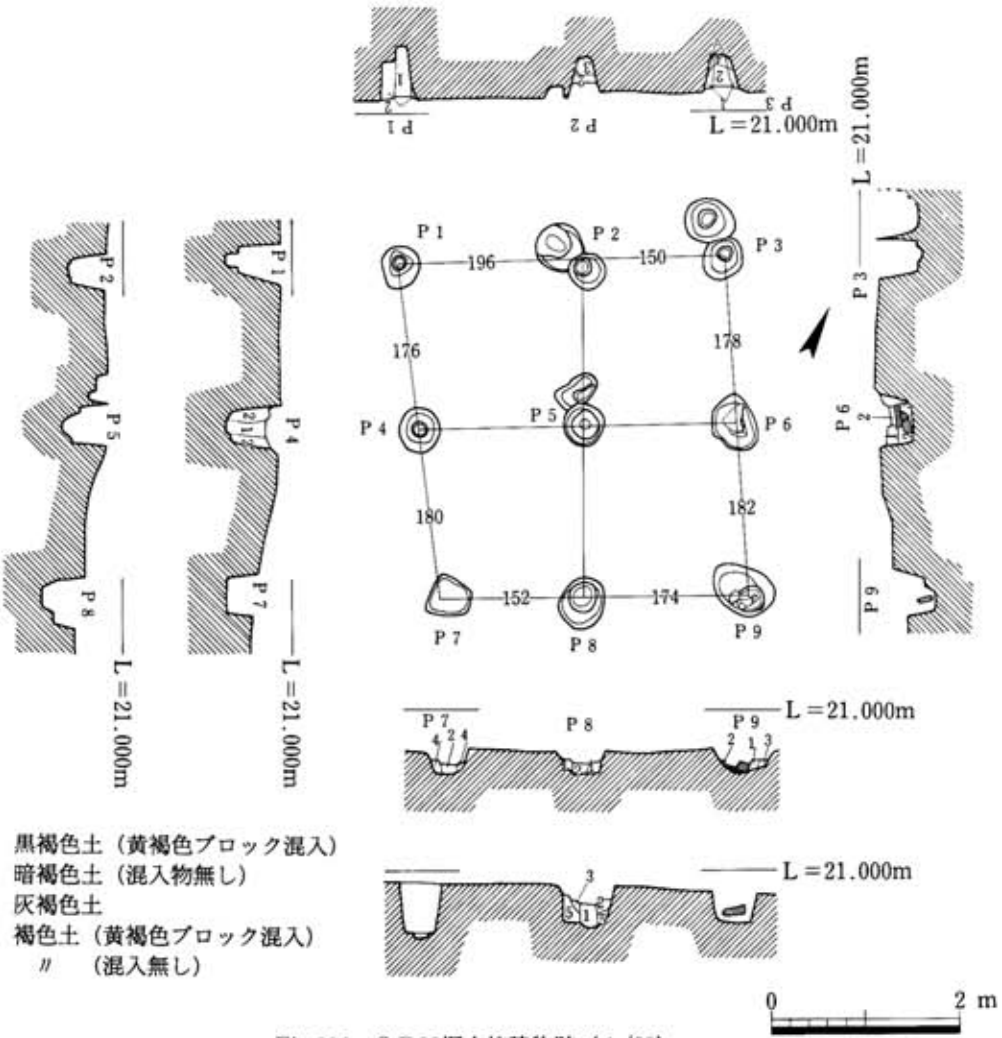


Fig.296　ＳＢ23掘立柱建物跡（１/80）

ＳＢ24建物跡

南側の掘立柱建物群の一棟である。前述のように、西隣りのＳＢ22建物跡、また北側に位置するＳＢ07建物跡と、それぞれほぼ並んでおり、３棟が関連する建物だったことが考えられる。また、南隅部がＳＢ23建物跡と重複している。柱穴の掘方の切り合い状況からみると、ＳＢ23建物跡のほうが新しい。

２間×２間（3.00×3.24m）の総柱の東西棟。柱間の寸法は、梁行1.50m、桁行1.62m。柱穴の掘方は、ややいびつなものもみられるが、ほぼ円形をなす。直径0.42～0.54m であるが、0.50 m ほどのものが多い。削平が大きく、現況の深さ0.25～0.71m で一定していない。柱穴は北側桁行の中央の柱穴を除いて、すべて２段掘である。柱根は確認できていない。建物の南北軸の方向は、真北より38°西へ振れる。遺物は土師器片が出土した。

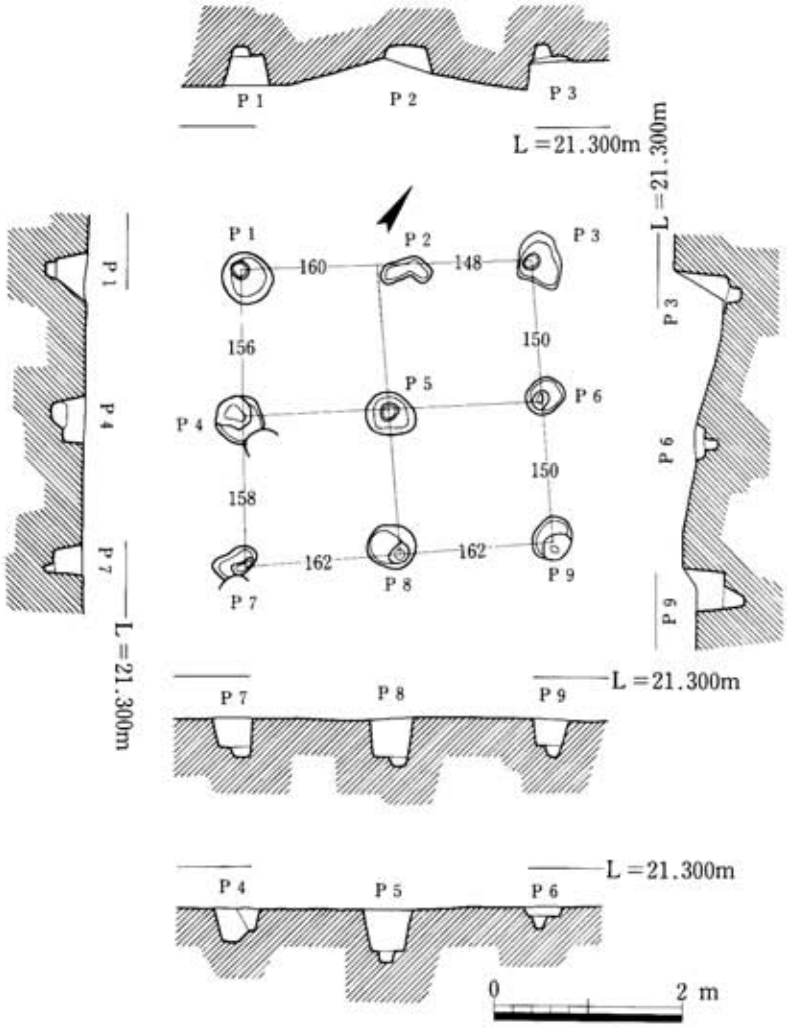


Fig.297　ＳＢ24掘立柱建物跡（１/80）

ＳＢ25建物跡（PL.167）

調査区南側に集中する掘立柱建物群のなかで、最も南西端に位置している。他の建物とはやや離れている。

２間×２間以上（2.88×2.70＋αm）の建物跡。建物跡の東側部分が調査区域外であるため、全体の規模は不明。柱間の寸法は、東側柱列間が1.44m、北側柱列間が1.46m。柱穴の掘方はほぼ円形をなす。東側柱列の中央の小さな柱穴(直径0.20m)を除いて、他は直径0.36～0.45m のものである。深さは0.20～0.53m で、一定していない。柱根は３箇所で確認できる。直径0.14～0.20m。建物の南北軸の方向は、真北より47°西へ振れる。遺物は柱穴内から須恵器片が出土した。

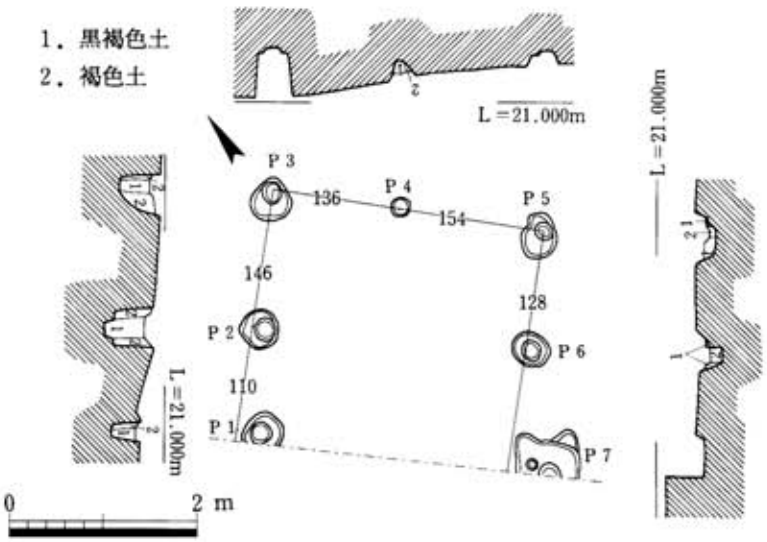


Fig.298　ＳＢ25掘立柱建物跡（1/80）

ＳＢ44建物跡（PL.167）

調査区南側の掘立柱建物群から、約30m 北側に一棟だけ離れて位置している。南側の８棟が小規模で総柱のものが多いのに対し、この建物跡は規模が大きく、やや状況は異なる。また、ＳＫ45と重複しているが、この建物跡が新しい。

３間×５間（4.51×5.92m）の東西棟。柱間の寸法はやや異なるが、その平均は梁行1.50m、桁行1.19m。柱穴の掘方はほぼ円形をなす。直径0.25～0.42m であるが、0.30m ほどのものが多い。深さは0.20～0.69m で、一定していない。柱根は４箇所でしか確認できていない。あまり明瞭ではなく、直径0.20m ほどか。建物の規模から考えると、柱はやや小さいようである。なお、北側桁行の柱穴間にさらに柱穴らしきものがみられる。構造上この建物に関連する可能性があるが、断定はできなかった。建物跡の南北軸の方向は、真北より38°45′西へ振れる。

遺物は、柱穴内より土師器片が出土した。

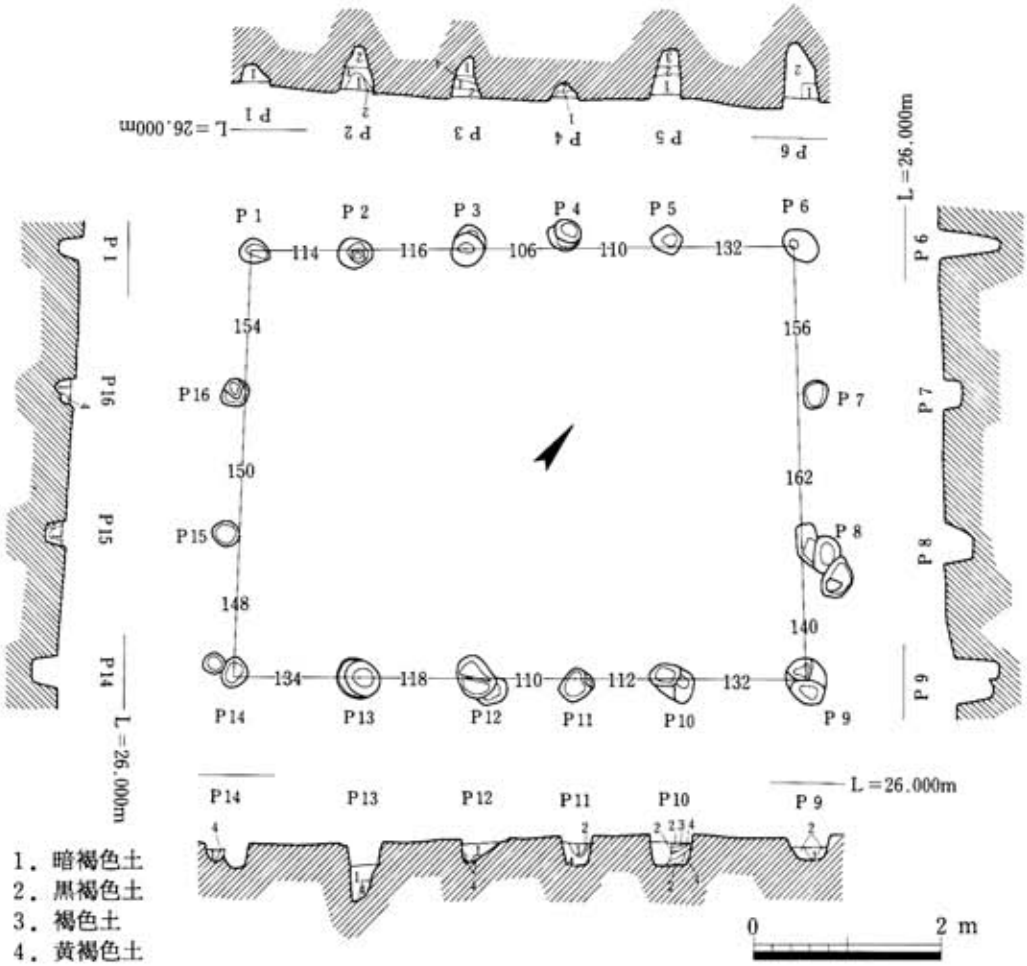


Fig.299　ＳＢ44掘立柱建物跡（１/80）

3．埋置土器遺構（PL.168）

C地区の南西部のＳＢ20掘立柱建物の西約８ｍに位置する。径約0.45m、深さ約0.3mの穴に須恵器の甕が据え置かれた状態で検出された。既に甕の上部約１/４は消失していたがそれより下半は割れないで遺存していた。但し、底部は１箇所穿孔が見られた。内部には土が充満していたが、４層に分離された土層の上層から最下層までこの須恵器の破片が含まれており、この須恵器甕の埋土は破壊されたときの流入土で、当初、内部は空洞乃至それに準じた状況だったと判断される。

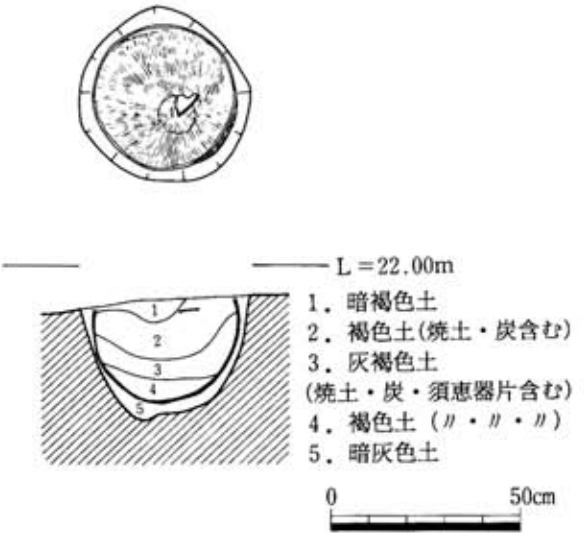


Fig.300　埋置土器遺構（１/20）

4．土壙

ＳＫ03土壙

C地区の南東部に位置し東半分は未調査である。南北幅1.8m、東西幅0.6＋αm、深さは最深部で0.5mを計り、平面形は楕円形に近いと想定される。遺物は須恵器片、土師器片、布目瓦片が出土した。

ＳＫ04土壙

C地区の南西部、ＳＢ20、21 掘立柱建物跡の北西部に位置する。東西幅1.7m、南北幅1.1m、深さ0.45mを計り、平面形は楕円形を呈する。遺物は土師器甕、杯、皿等が出土した。

ＳＫ09土壙

C地区南部、ＳＢ24の北東角の柱穴と重複する。長径1.3m、短径1.0m、深さ0.2mの規模で、隅丸方形状の平面形である。ＳＢ24より新しい。須恵器、土師器、石製紡錘車が出土した。

ＳＫ10土壙

C地区の南部中央に位置する。ＳＢ07と重複し07が新しい。南北幅2.7m、東西幅1.2m、深さ0.1～0.2mを計り平面形は三日月形を呈する。遺物は須恵器杯蓋片が出土した。

ＳＫ45土壙(PL.168、169、170)

調査区の北側に位置し、同様の特徴をもつＳＫ47、ＳＫ52等とほぼ等距離にならんで存在する。長軸の方位はN11° Wである。また、ＳＢ44と重複するが、ＳＢ44が新しい。長径3.4m、短径1.6 ～2.0m の楕円形の平面形を呈し、底面はほぼ平坦だが、中央部に段差があり南側が約８cm低くなっている。深さは北側が1.12m、南側が1.2m を計る。また、底面には４つの小穴がありそれらの深さは底面から0.5～0.6 m を計る。遺物は検出されなかった。

ＳＫ46・47土壙(PL.168、169)

ＳＫ45の西約５ m に位置し、長軸の方向はN17° 30′Wである。２基の土壙が接合した形態の長径3.36m の長方形の平面形を呈する。北側の46が長径1.66m、短径1.1m、深さ1.06 m、南側のＳＫ47が長径1.66m、短径0.9m、深さ1.0m を計る。各々中央に小穴を有し、北側が直径0.26m、深さ0.58m、南側が直径0.24～0.30m、深さ0.54m を計る。遺物は46の小穴内より土師器片が数点出土した。

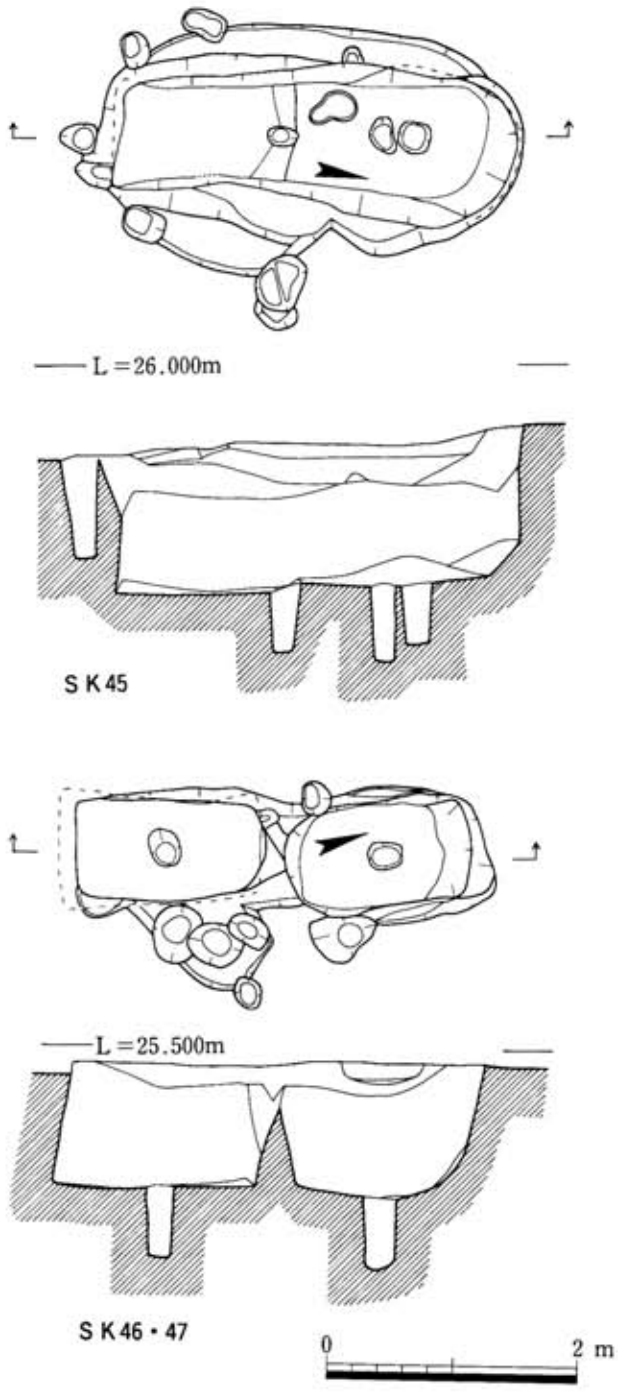
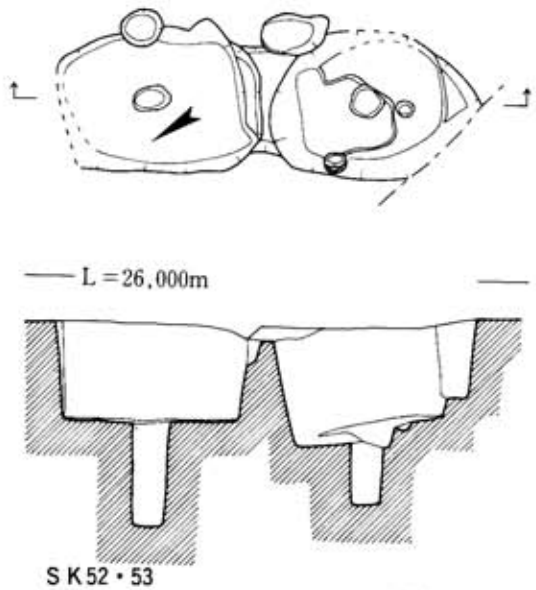
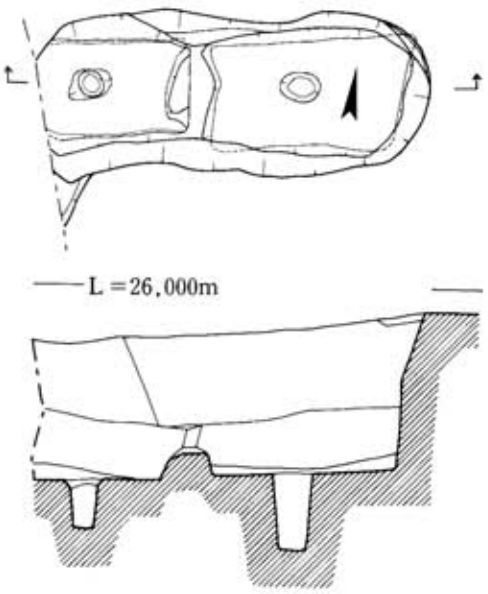


Fig.301　ＳＫ45、ＳＫ46・47 土壙（１/60）



SK52・53

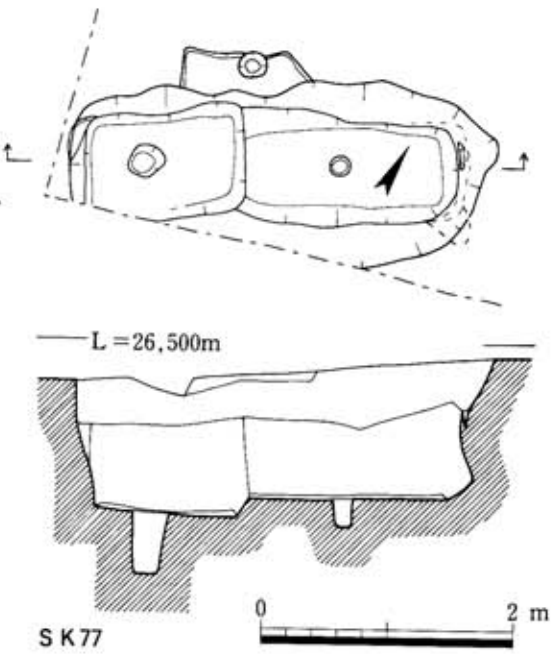


SK78

Fig.302　SK52・53、SK77・78 土壙

SK52・53土壙（PL.168、169）

SK46・47土壙の西北西約4.5m に位置する。46・47と同様二つの土壙が接合した形態の長径3.4m の長方形の平面形を呈する土壙である。北側の53が長径1.64m、短径1.16m、深さ0.78m を計り、南側の52が長径1.68m、短径1.18m、深さ0.94m を計る。また、53の底面中央に直径0.2～0.3m、深さ0.82m の小穴を有する。52も底面中央に直径0.26m、深さ0.49m の小穴が検出された。遺物は土師器片が埋土上部より一片だけ出土した。



SK77

SK77土壙（PL.169、170）

B地区で78と2基並列して検出された土壙である。C地区のSK52・53土壙から約60m 北西にあたる。長径3.38m、短径約1.5m の長楕円形を呈し、長軸の方位はN57° 30′である。また、底面中央付近で段差があり、深さは北東側で1.04m、南西側で1.08m である。底面には2個の小穴が長軸線上に検出されたが、南西側のものは直径0.28m、深さ0.48m を計る。底面は特に北東側が壁面より外側にオーバーハングしている。南西隅が調査区外に入っており一部が未検出である。遺物は検出されなかった。

ＳＫ78土壙（PL.170）

ＳＫ77の北北東約２ｍに77と並行して位置する。西端が調査区外にあたるが、長径約3.08mで、隅丸長方形の平面形を呈する。中央に約25cmの高まりがあり、この土壙を東西に別けている。深さはこの高まりより東が1.28m、西が1.12mである。底面にはそれぞれの中央に小穴が検出されたが、東側のものが直径0.24～0.32m、深さ0.60mで、西側が直径0.24～0.34m、深さ0.38mである。また、77と同様に底面の隅がオーバーハングしている。

ＳＫ50土壙

調査区の北東部、ＳＢ43竪穴住居とＳＢ44掘立柱建物の間に位置する長径3.4m、短径1.12m、深さ0.2～0.5mを計る不整な長方形の平面形を呈する土壙である。また、ＳＢ43と重複し50が新しい。

遺物は須恵器甕片、土師器甕、甑、石鏃等が土壙埋土の比較的上部から出土した。

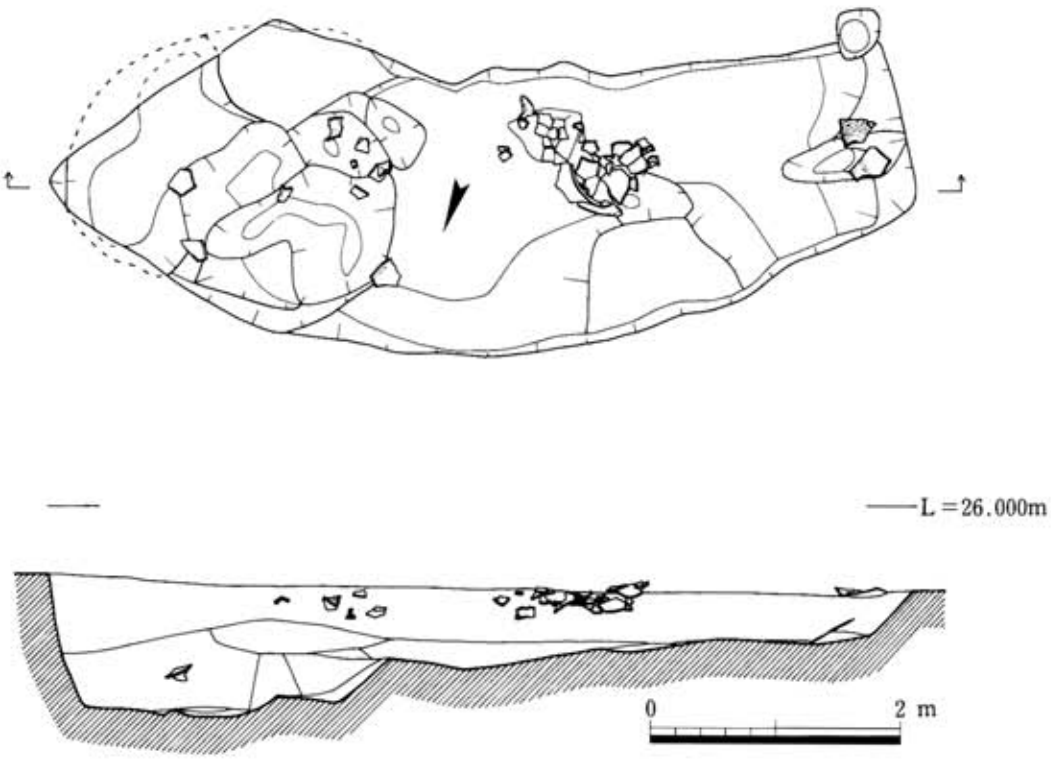


Fig.303　ＳＫ50 土壙（１／60）

5．不明遺構

本遺跡で不明遺構としたものは、20基で全てC地区に所在する。この中には36、37、41等のように竪穴住居の可能性があるものの遺存状況の悪さから断定できなかったものが含まれるが、他は不整形な平面形で床面乃至底面も凹凸が激しく一定の面を有しないものが多い。以下、特徴的なものについて記述する。

ＳＸ02不明遺構

C地区の南東端に位置する。東西幅約３ｍで、南北は６ｍまで検出したがさらに南に関しては遺構の範囲が不明確であった。深さは0.1～0.2mであるが、中央はさらに0.1ｍほど深くなり２段掘になっている。不整形な平面形で調査中の観察では包含層の落ち込みの感が強かった。

遺物は須恵器類の他布目瓦片が数点出土したことが注目された。

ＳＸ34不明遺構

C地区中央部の東端に位置する。ＳＢ29と重複するが本遺構が古い。東西幅約４ｍを計り、北側に一見カマドのような突出部を観察したため、当初住居跡の可能性も考えたが、南側の平面形が明確でなく、内部には床面もなく深さ0.6ｍの落ち込みが検出され住居跡としては不整形であった。

遺物は、須恵器片、土師器片等とともにナイフ形石器が出土した。

ＳＸ36不明遺構

C地区中央部に位置しＳＸ37とともにＳＢ28の北側に接して検出された平面形がＬ字形を呈し、深さ0.05mの規模を計る浅い落ち込みである。竪穴住居跡の隅の可能性も想定されるが残存状況が悪く断定できない。

遺物は土師器片が出土した。

ＳＸ37不明遺構

C地区中央部に位置しＳＸ36の東に検出された東西幅4.5m、南北幅４ｍ、深さ0.05mの平面方形の浅い落ち込みである。但し北西部分は検出面と同レベルであり厳密には方形の平面形ではない。竪穴住居跡の可能性があるがＳＸ36と同様断定できない。

遺物は須恵器片、土師器片が出土した。

ＳＸ41不明遺構

Ｃ地区の中央部のやや北西側、ＳＢ40の北西５ｍに位置する。東西幅2.42m、南北幅2.06mを計る方形の平面形を呈する。南側の東西の隅は内側にややすぼまった平面形に見えるが、南側が削平されたためで、元来はしっかりした方形の平面形だったと考えられる。底面は２段掘になっており、深さは周縁部は0.05mで、中央部はさらに0.1mほど下がる。土層では、２段目のレベルにあわせて中央の低い部分上に貼り床状の層が観察された。柱穴は検出されなかったが竪穴住居跡の可能性もある。

遺物は須恵器片、土師器片等が出土した。

ＳＸ60不明遺構

Ｃ地区の中央部、ＳＢ28、ＳＸ36などの西側に位置する。検出面ではＳＸ59、ＳＸ66などとの平面状の区別が不明確であったが掘り進めるうちに長径2.5m、短径1.0m、深さ0.3m程の不整形な落ち込みになったもの。

遺物は須恵器杯蓋片、土師器甕片等が出土した。

ＳＸ74不明遺構

Ｃ地区の南部、ＳＸ02の西側４ｍに位置する。長径３ｍ、短径2.5m、深さ0.2mの規模で、方形の土壙の南西部が西に突出した平面形を呈する。当初２基の土壙が重複したものと考えて発掘を進めたが、平面や断面で明確な切り合いが観察されなかったため一つの遺構とした。

遺物は須恵器杯身片、壺片、布目瓦片などが出土した。

III. 遺 物

1．竪穴住居跡出土遺物

ＳＢ17住居跡出土遺物

須恵器

1～4は杯身。1は口縁全周の約8分の1を残し復元口径10.4cm、口縁の立ち上がりは0.4cmを計る。2は口縁全集の4分の1を残す破片で復元口径9.7cm、器高2.1cmを計り、外面のヘラケズリはほぼ底面に限られる。いずれも、口縁立ち上がりが矮小化した形態のものである。3は復元口径9.1cm、器高3.65cmを計る。底部にヘラ記号を持つ。ヘラケズリはほぼ底面に限られる。4は復元口径14.6cm、器高4.6 cmを計る。底部は外方にふんばる形態の高台がつき、口縁部は外反する。ヘラケズリはほぼ底面に限られる。

土師器

5～7は口縁部の外反する甕。5は復元口径13.6cm、6は12.0cm、7は14.2cmを計る。5は磨耗のため器面調整不明確。6、7は外面ナデ、内面は口縁直下まで縦方向にヘラケズリを行い口縁部はヨコナデを施す。

8は把手。

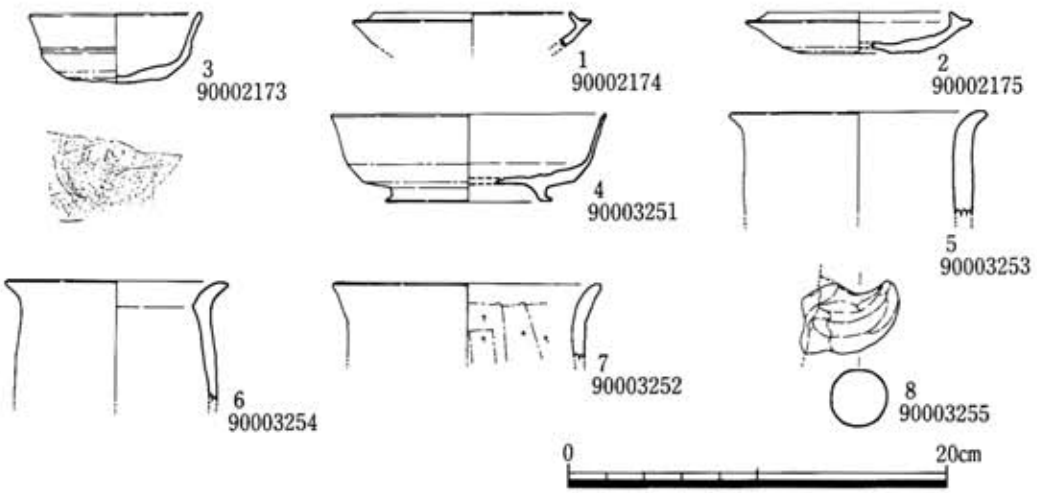


Fig.304　ＳＢ17住居跡出土遺物（1/4）

ＳＢ27住居跡出土遺物

須恵器

9は完形の杯蓋。口径12.4cm、器高3.6cmを計る。口縁端面は丸く、面はつくらない。外面のヘラケズリはほぼ天井部に限られる。天井部にヘラ記号がある。10も杯蓋。全周の約4分の1を残す破片で復元口径11.2cm、器高3.4 cmを計る。外面のヘラケズリはほぼ天井部に限られる。

11、12は杯身。11は復元口径12.5cm、器高3.5cmを計る。立ち上がりの高さは1.0cm、外面ヘラケズリは器高の3分の1弱に施される。12は復元口径12.4cm、器高3.15cm、口縁部の立ち上がりの高さ0.8cmを計る。外面のヘラケズリはほぼ底部に限られる。底部にヘラ記号がある。

このうち9は床面から出土したものである。

土師器

13～20は甕。13は復元口径15.8cm、残存器高16.3cmを計る。外面は縦方向のハケメ、内面はヘラケズリで調整し、口縁部はヨコナデを施す。14は胴部中位以上を残す破片である。復元口径13.1cmを計るが頸部が外側に張り最大径が胴部中位にくるものである。15も同形態のものか。16は復元口径13.1cmを計り最大径が口縁部にあるものである。頸部はほとんど張らずに胴部に移行する。17も同形態だがやや大形のものである。18は最大径が胴部にあるものである。これらは13と同様外面ハケメ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデである。19、20は底部である。

石器

21は砥石である。断面柱状を呈し、一方の端部が細くなり、折れている。4面が使用されている。

ＳＢ49住居跡出土遺物（PL.171）

土師器

22～24は甕。いずれも口縁部のみの破片である。22は復元口径19.6cmで頸部が張る形態のものである。23は復元口径19.0cmで同様の形態のもの。器面調整は外面ハケメ、内面ハケメ、口縁部ヨコナデである。24は復元口径10.5cmで頸部が張らない小形のものである。

ＳＢ26住居跡出土遺物（PL.171、172、173）

須恵器

25は杯身片。高台の付く形態のものである。

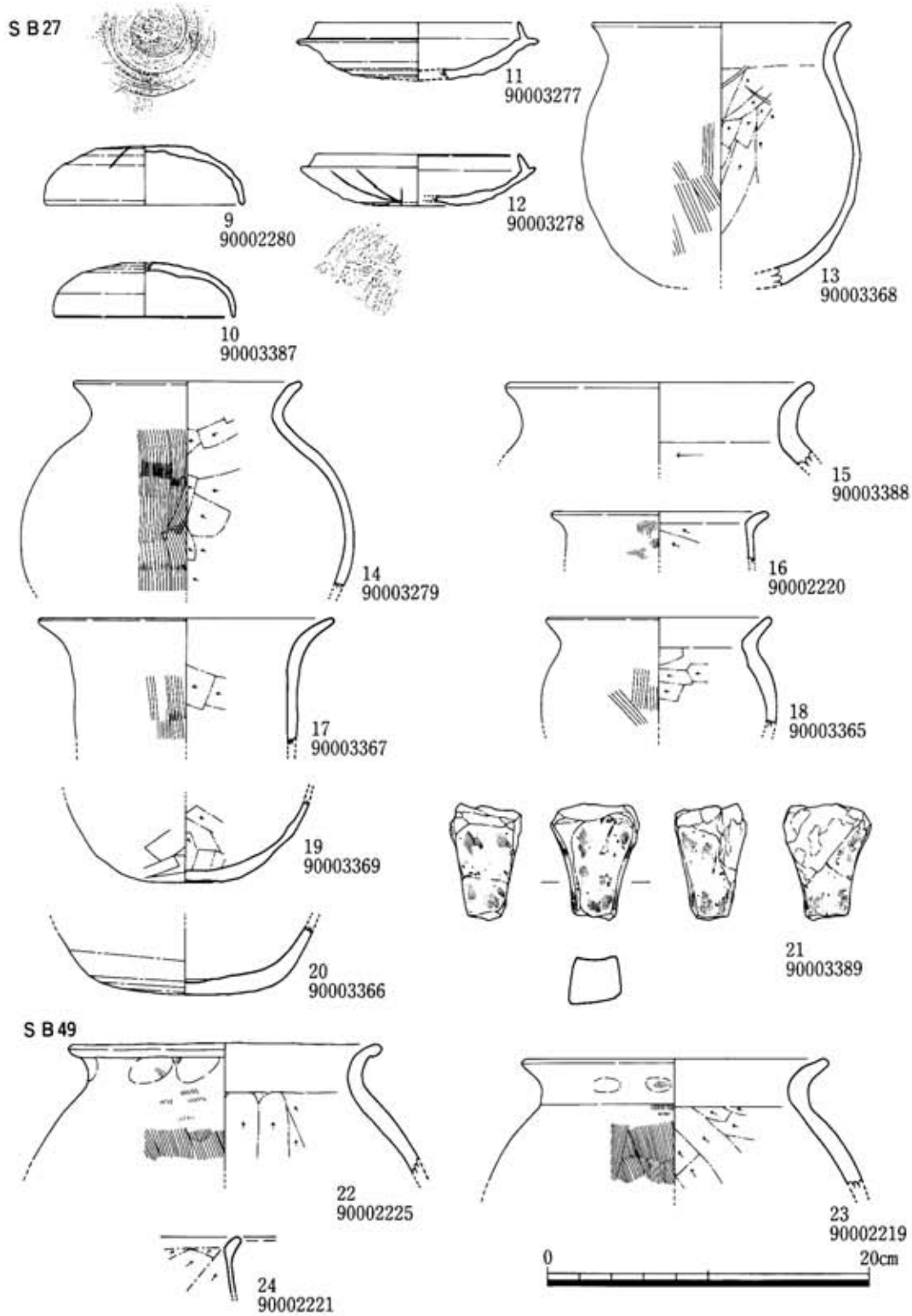


Fig.305　SB27、49 住居跡出土遺物（1/4）

土師器

26～33は甕。26、27は口縁「く」字形を呈する。いずれも頸部が外に張り、最大径が胴部にくる形態のものである。28、29、30は口縁部に最大径があり、胴部が若干張る形態のもの。31、32は同様に最大径が口縁部にあり、頸部が張らずに胴部に移行する形態のものである。33は口縁部が「く」字形で胴部が丸く張る形態のものである。胴部最大径付近に把手の痕跡がある。

34～36は杯。いずれも破片である。34は復元口径12.6cm、器高4.9 cmを計る。

石器

37は台形石器。先端幅は、一端がわずかに新しく欠損しているが1.95cm、基部幅は0.9 cm、長さ1.4 cm、厚さ0.4 cmを計る。両側縁は二次調整剝離を施している。半透明の黒色黒曜石製。

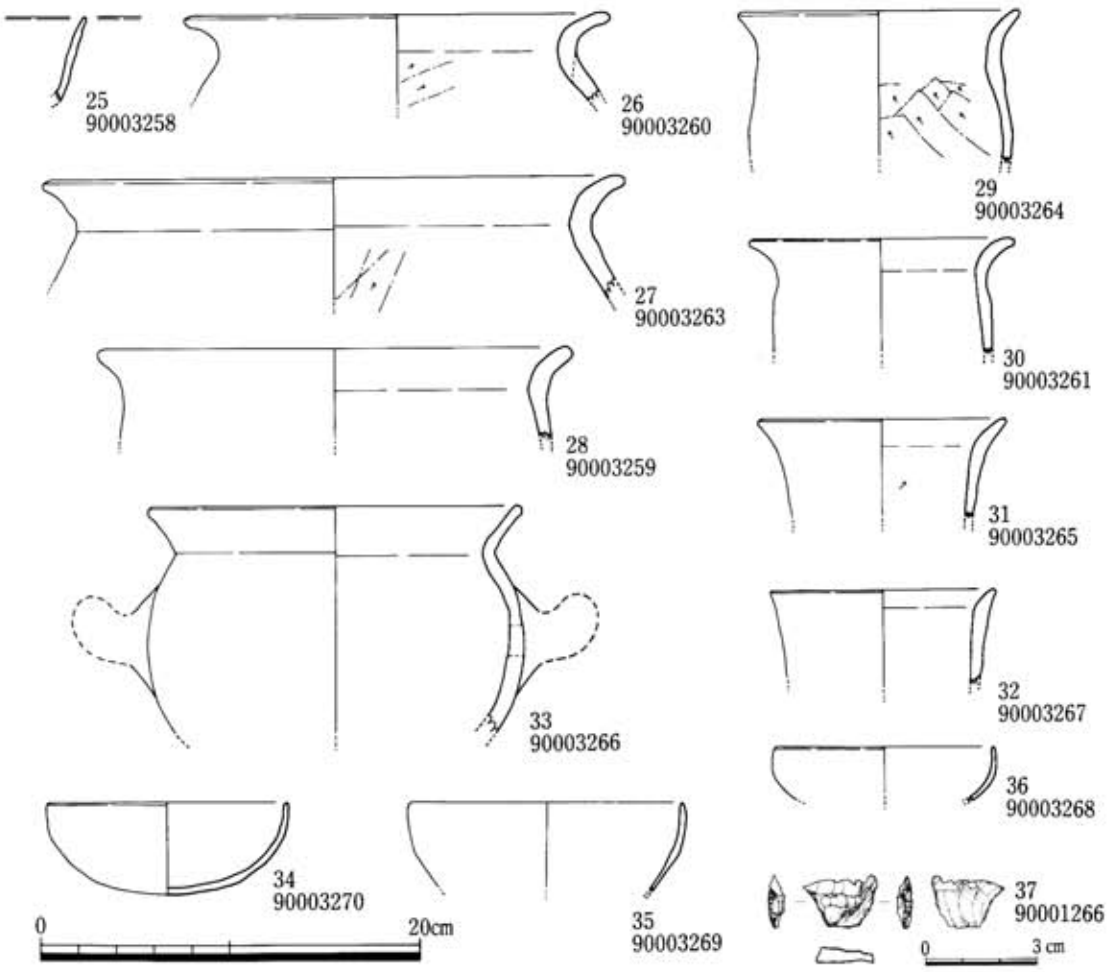


Fig.306　S B26住居跡出土遺物（1/4）

ＳＢ28住居跡出土遺物

須恵器

38～41は杯蓋。いずれも小破片である。38～40 はかえりの付かないもので、41は付くものである。42～44は杯身。42、43は立ち上がりのあるもの。42は復元口径11.6cmを計り立ち上がりは0.7cm、43は立ち上がりは0.4cmを計る。44は高台の付く形態のものと想定される。

土師器

45～48は甕。45、46は小形で最大径が口縁部にある形態のもの。47、48は最大径が胴部にある形態のもの。49は甑の底部破片。50は杯。復元口径13.0cmを計る。

ＳＢ29住居跡出土遺物（PL.172、173）

須恵器

51～54は杯身。いずれも口縁部に受け部がある形態のもの。51は立ち上がりの高さ0.9cm、52は復元口径10.4cm、立ち上がりの高さ0.8 cm、53は復元口径12.6cm、器高3.8cm、立ち上がりの高さ0.8 cmを計る。54は口縁部を欠くが、受け部での復元口径は11.3cmである。

55は高杯の脚部のみの破片である。

土師器

56は杯。復元口径15.7cmを計り、体部は丸く立ち上がる。57～63、65は甕。57は復元口径24.5cmを計る。口縁部は丸く外反し肩部はゆるく外方に張る。58～61は口縁部が外反する形態の小破片。いずれも外面はナデ乃至ハケメ、内面はヘラケズリを行い口縁部はヨコナデする。60は内面の口縁部と体部の境にヘラケズリによる稜線が形成されている。62は復元口径12.2cmを計る。口縁部はゆるく外反する。63は口縁部が「く」字形に短く外反し、肩部、胴部はそれほど外に張らない形態のものである。65は復元口径12.0cmを計る。口縁部は短く外反する。

64は把手。

66は甑の底部付近の破片である。外面ハケメであるが、他の部分は磨耗のため不明確である。

石器

67は出土遺構がＳＢ28か29の区別が付かない遺物である。厚さ0.85cmの偏平な石材が研磨されている。一端が折れており全形は不明である。

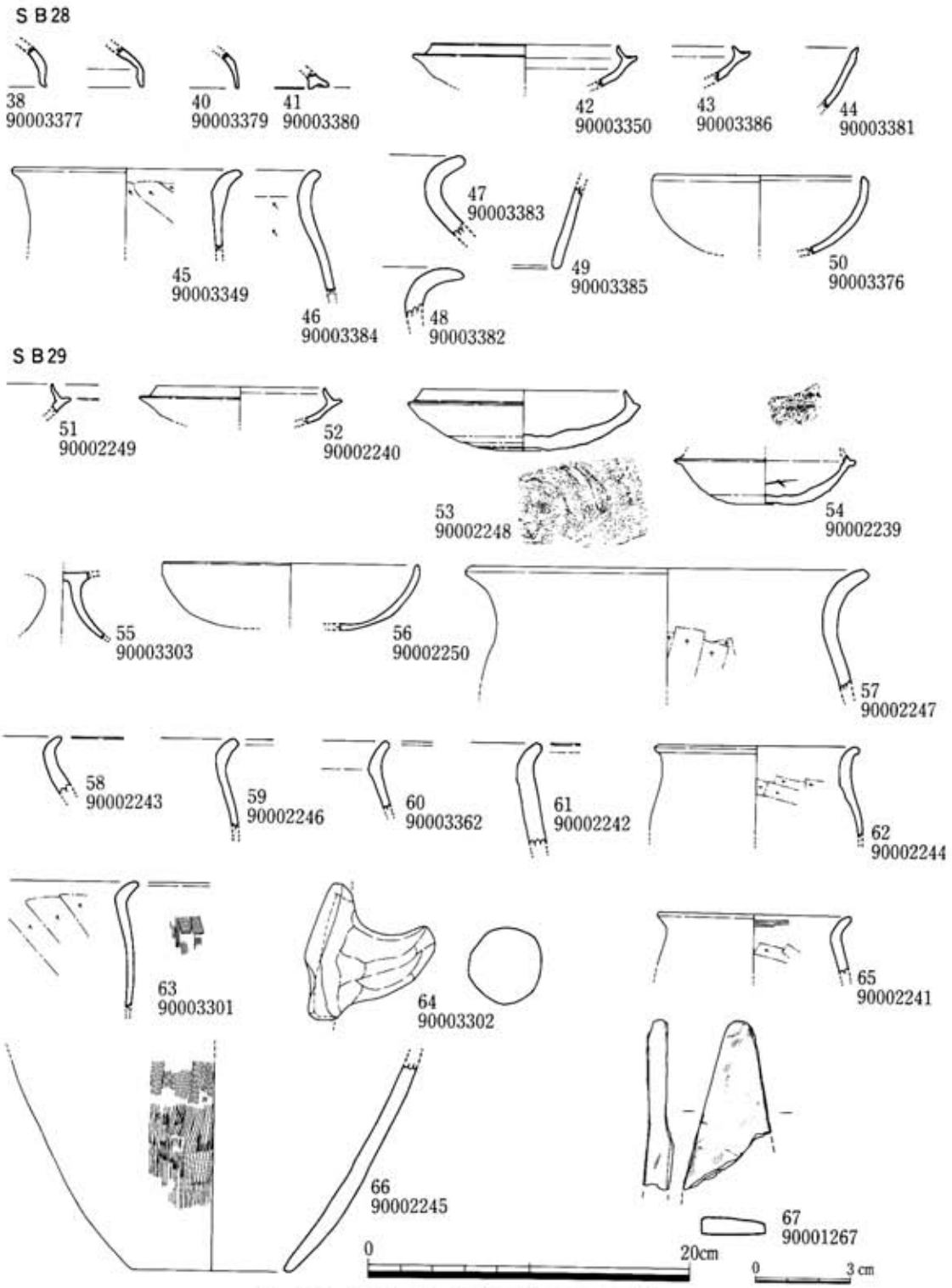


Fig.307　S B28・29 住居跡出土遺物（1 / 4）

ＳＢ35住居跡出土遺物（PL.174）

須恵器

68、69は杯身。68は全形の復元されるもので、復元口径11.2cm、器高3.8cm、立ち上がりの高さ0.9cmを計る。床面出土。69は口縁部のみの小片であるが、立ち上がりの高さは1.0cmを計る。70は筒形の椀。体部に２本単位の沈線が施される。底部は細かな単位の静止ヘラケズリが施され、ヘラ記号がある。71は甕の口縁部片。口縁が外側に肥厚するものである。

土師器

72～75は甕。73は復元口径が15.6cmを計り、口縁部が丸く外反し、最大径が胴部中位にくる形態のもの。74は復元口径14.8cmで、最大径が口縁部にくるものである。75は小形の甕で、短く外反する口縁に肩の張る器形である。最大径は胴部にくる。76は直口形態の口縁部破片。甑か。

土製品

77はカマド前面の床上から検出されたものである。長径4.2cm、短径3.7cm、厚さ1.4cmの平面やや楕円形を呈する円盤状の土製品である。通常の模造鏡とは異なり両面にくぼみを設ける。２本の指先でつまみ出して作っており、両面とも爪跡が残っている。この「鈕」の部分は長くつまみ出すものではない。

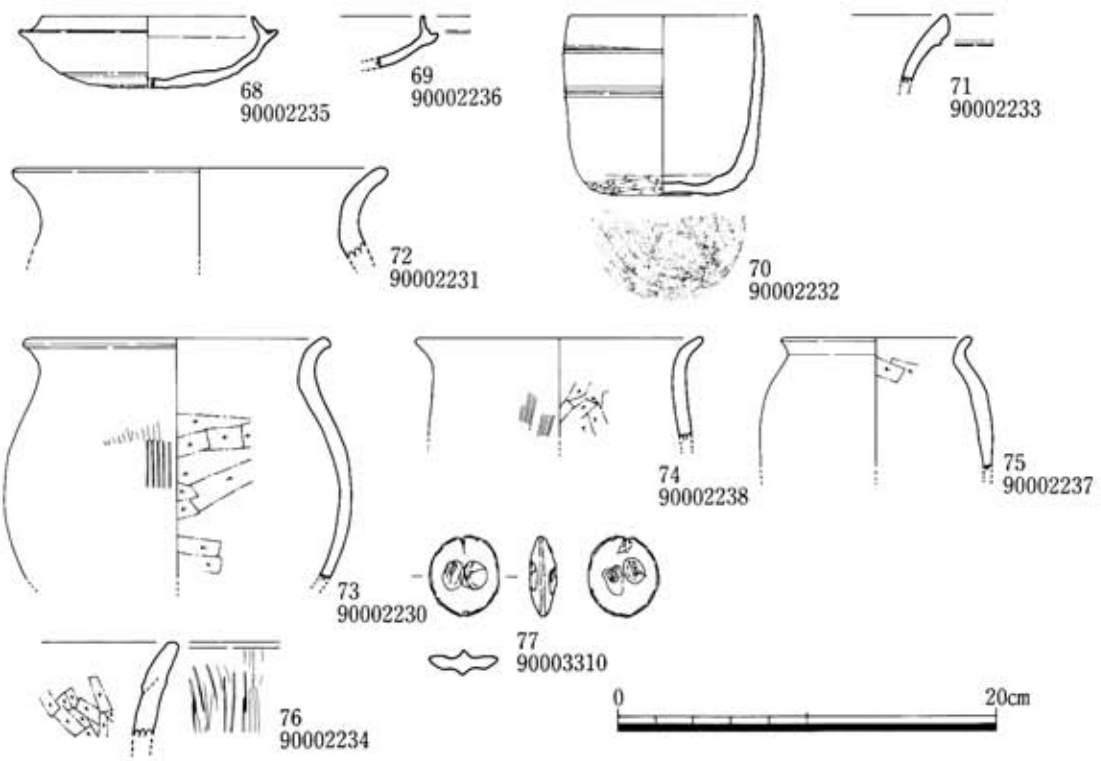


Fig.308　ＳＢ35住居跡出土遺物（１/４）

ＳＢ39住居跡出土遺物（PL.175）

須恵器

78は杯蓋の小片。口縁端部は丸い。

土師器

79、80は甕。79は口縁部が丸く外反し、肩部が外方に張り最大径が胴部にくる大形の甕である。80は口縁部がゆるく外反し口縁径と胴部最大径がほぼ同径になる甕である。

ＳＢ40住居跡出土遺物（PL.175）

須恵器

81、82は須恵器杯蓋。81は口縁部が丸く立ち上がるもの、82は口縁部にかえりのなくなった器高の低いものである。83は高杯の口縁部で、口縁端部が短く垂直気味に立ち上がるもの。

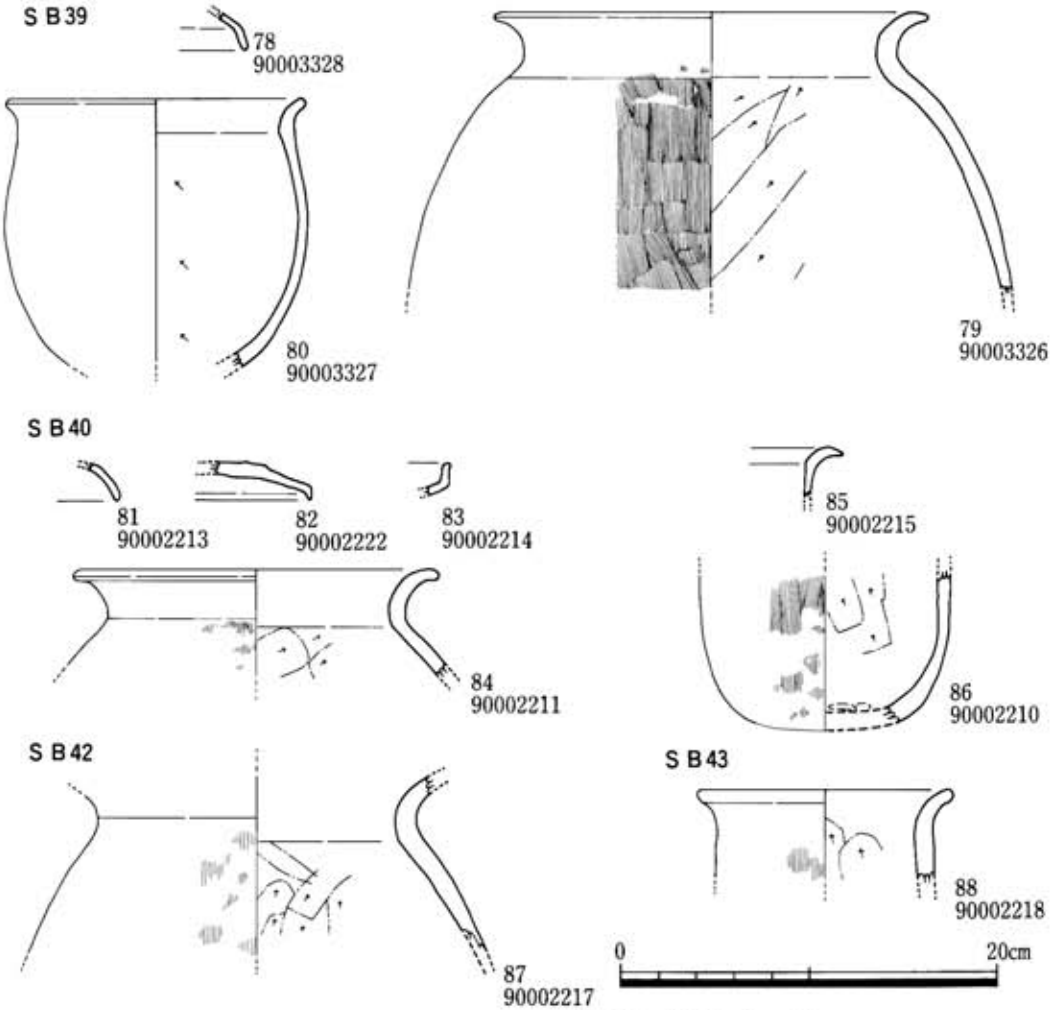


Fig.309　ＳＢ39・40・42・43住居跡出土遺物（1/4）

土師器

84～86は甕。85は最大径が口縁部にあり、胴部は張らないものである。84は口縁部が丸く外反し、胴部が外方に張るものである。86は底部から胴部付近までの破片である。

ＳＢ42住居跡出土遺物（PL.175）

土師器

87は口縁部が欠損した甕。口縁部は丸く外反し肩部が外方に張り、最大径は胴部にあるもの。

ＳＢ43住居跡出土遺物

土師器

88は最大径が口縁部にあり、胴部は張らないものである。

2．掘立柱建物跡出土遺物

掘立柱建物に伴って出土した遺物は極めて少数であり、小破片である。しかも、出土遺構自体も限られている。

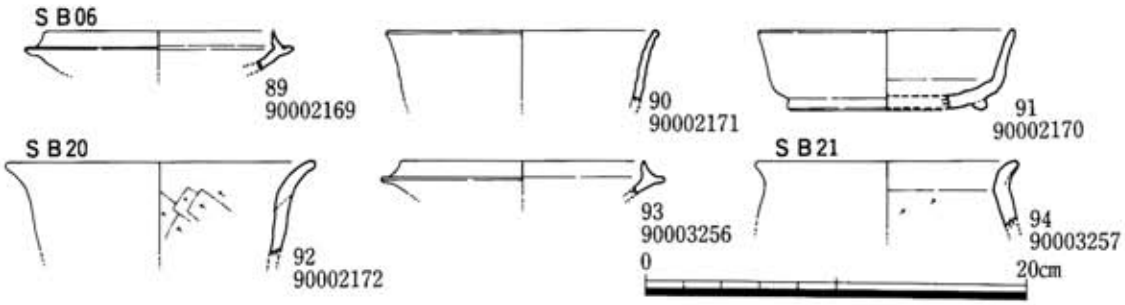


Fig.310　ＳＢ06・20・21掘立柱建物跡出土遺物（1/4）

ＳＢ06掘立柱建物跡出土遺物

須恵器

89～91は杯身。89は受け部のあるもので、復元口径12.1cm、立ち上がりの高さ約1.0cmを計る。90、91は受け部の付かないもので、90は口縁部の破片、91は高台の付くものである。

土師器

92は最大径が口縁部にあり胴部の張らないものである。

ＳＢ20掘立柱建物跡出土遺物

須恵器

93は受け部のある杯身の破片で復元口径12.8cm、立ち上がりの高さ0.8cmを計る。

ＳＢ21掘立柱建物跡出土遺物

土師器

94は復元口径13.9cmを計り、口縁部が短く外反し、体部がゆるく外方に張るもの。

3．埋置土器遺構出土遺物

須恵器

95は甕。頸部以上を欠き丸底。残存器高36.2cm、胴部最大径27.5cmを計る。外面は格子目タタキ、内面上部は同心円タタキ、下部は平行タタキである。底部は穿孔されていた。

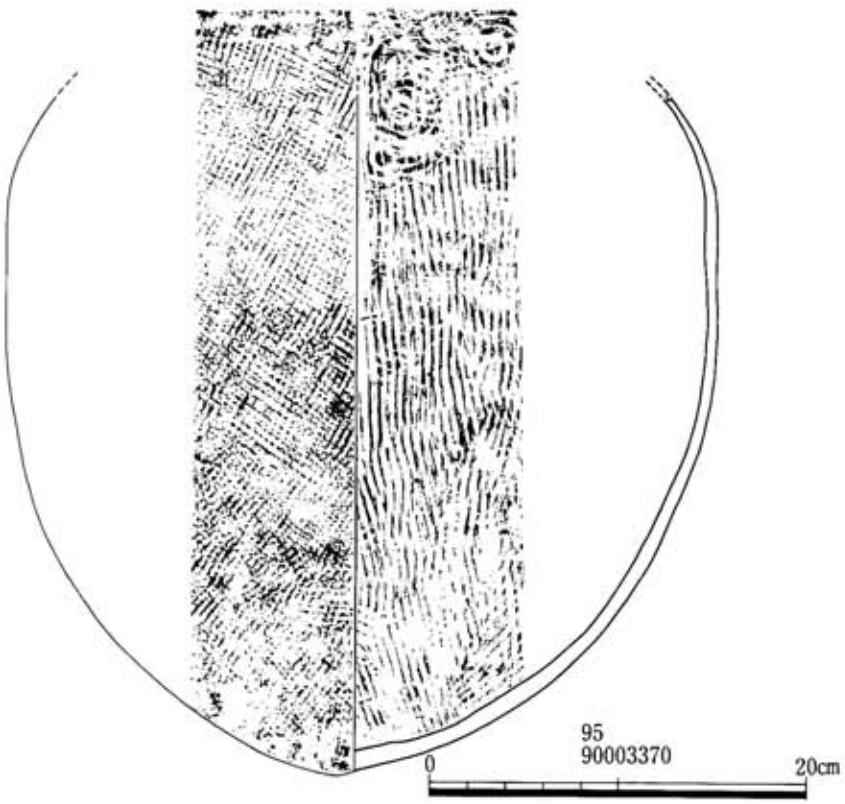


Fig.311　埋置土器遺構出土土器（1/4）

4．土壙出土遺物

ＳＫ03土壙出土遺物

須恵器

96は杯身。受け部のある形態。97は杯蓋。口縁部にかえりはなく、つまみは偏平化している。

土師器

98、99は甕。98は口縁部が「く」字形に外反し肩部が張るもの。99は口縁部が短く外反し肩部が張らないものである。

瓦

100は平瓦と想定される。浅灰白色を呈し、胎土は2.5㎜前後の石英や長石を多量に含んでいる。厚さは2.2㎝を計りわずかに湾曲している。凹面に布目、凸面に縄目の痕跡が見られる。

ＳＫ04土壙出土遺物

土師器

101、102は甕。101は口縁部が「く」字形に外反し胴部が張るもの。102は外反する口縁部にほとんど張らない肩部を持つもの。103は底部から直線的に短く立ち上がる形態の皿である。

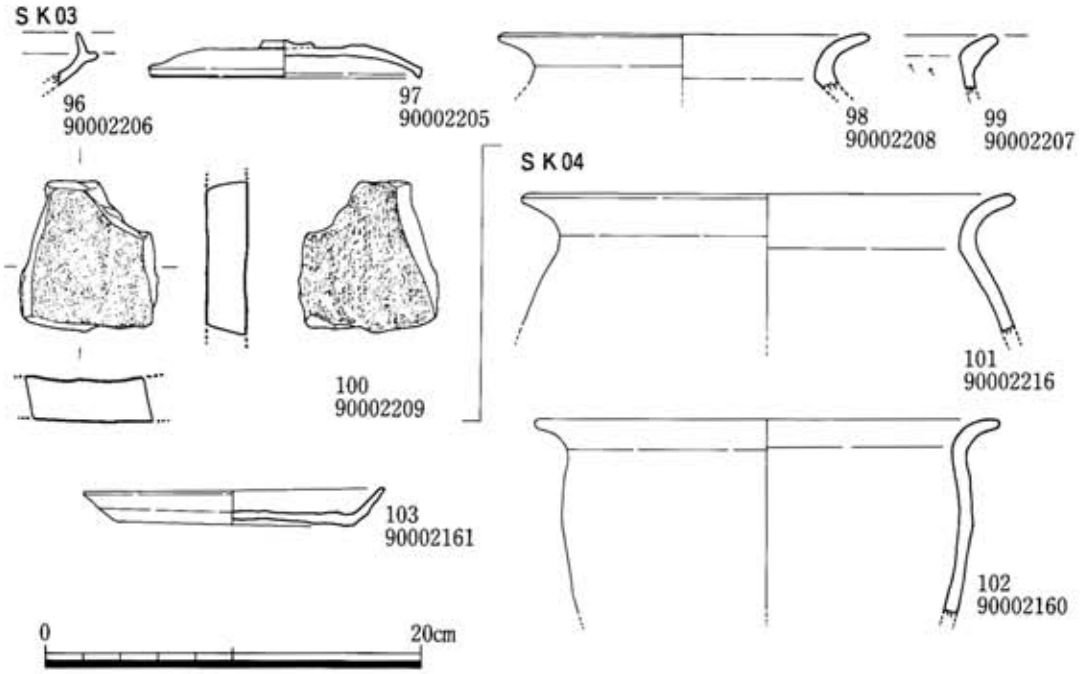


Fig.312　ＳＫ03・04 土壙出土遺物（1／4）

ＳＫ09出土遺物（PL.175）

石器

104は紡錘車。１／３を欠損するが径4.15cm、厚さ1.4cm程の円盤で中心に１孔を穿つ。孔の直径は0.55cmを計る。

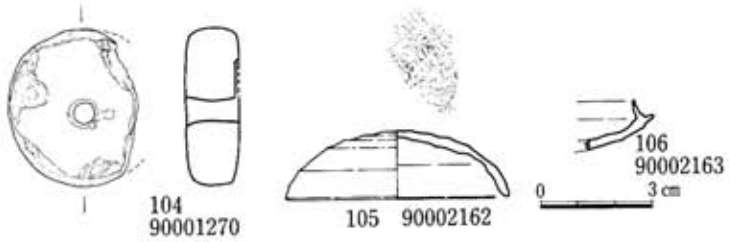


Fig.313　ＳＫ09・10土壙出土遺物（１／４）

ＳＫ10土壙出土遺物(PL.175)

須恵器

105は坏蓋。復元口径11.7cm、器高3.2 cmを計る。口縁端部は丸い。**106**は坏身。小破片であるが、立ち上がりの高さ0.8 cmである。

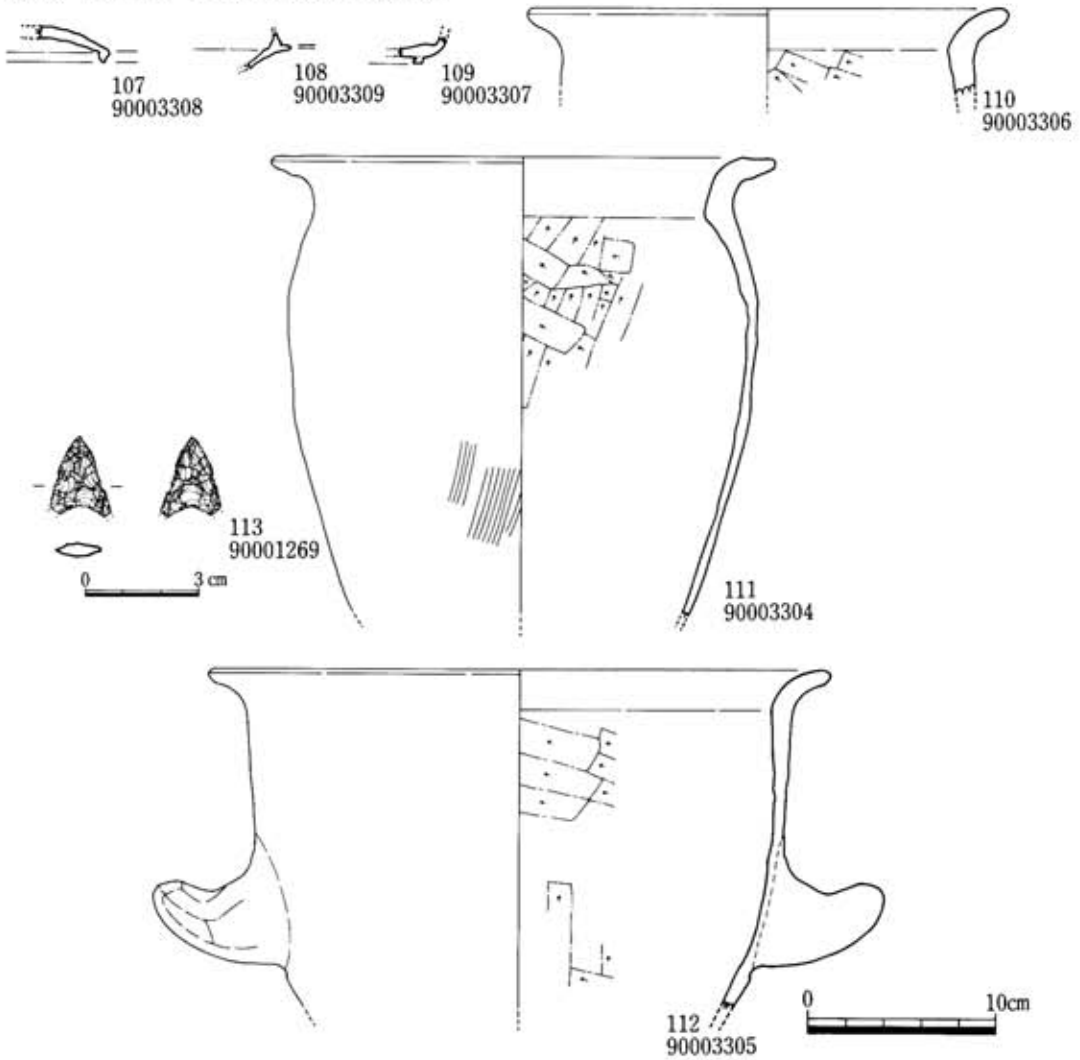


Fig.314　ＳＫ50土壙出土遺物（113は１／２、他は１／４）

ＳＫ50土壙出土遺物（PL.175、176）

須恵器

107は杯蓋。口縁端部を折りまげて成形するもの。108は杯身の口縁部片。109は杯身の高台部分片。

土師器

110、111は甕。110は口縁部の破片。111は胴部下半から口縁部まで復元される甕。復元口径26.7cmで最大径は口縁部にある。胴部最大径は24.8cmで胴部上位にある。口縁部は丸みをもって外反するが、内面の口縁部と胴部の境にはヘラケズリによる稜線ができる。112は外反する口縁部に底部方向にすぼまる形態の鉢。胴部中位に把手が付く。

石器

113は安山岩製の石鏃。凹基式で、長さ2.15cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmを計る。

ＳＫ67土壙出土遺物（PL.176）

石器

114は黒曜石製の石鏃。凹基式で、長さ2.4cm、最大幅1.5cm、厚さ0.4cmを図る。

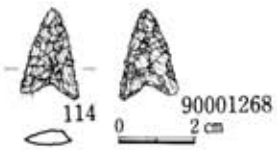


Fig.315 ＳＫ67土壙出土遺物(1/2)

5．溝跡出土遺物

ＳＤ33溝跡出土遺物

須恵器

115は杯身。受け部の付く形態。復元口径10.8cm、器高3.0 cm。

Fig.316 ＳＤ33溝跡出土遺物(1/4)

6．不明遺構出土遺物

ＳＸ02不明遺構出土遺物（PL.176）

須恵器

116～118は杯蓋。いずれも小破片で口縁端部を折れまげる。119は杯身。受け部のある形態で、立ち上がりは矮小化する。120は鉢。復元口径27.0cmを計り直線的な口縁部と体部を持つ。

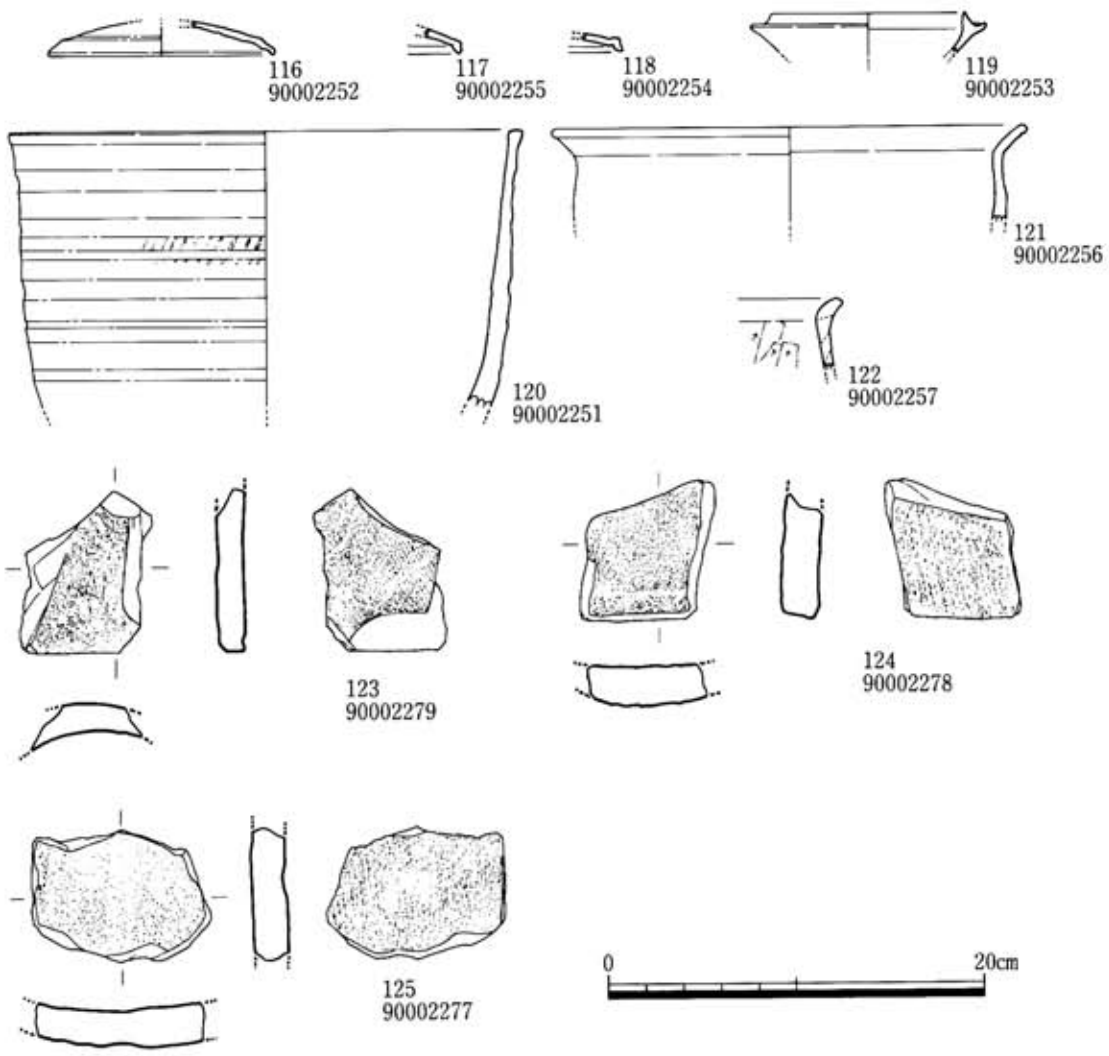


Fig.317　ＳＸ02不明遺構出土遺物（１/４）

土師器

121、122は甕の口縁部破片。外方に張りの弱い体部に外反する口縁が付く形態のもの。117は短く外反する口縁部に直線的な体部が付く。

瓦

123～125は瓦の小破片。123は厚さ1.5cmで、湾曲の度合から丸瓦と考えられる。凹面は布目痕が観察できるが凸面は磨耗している。124、125は平瓦片。124は厚さ2.1cmで凹面は磨耗しているが、凸面は縄目痕がある。125は厚さ2.0cmで凹面は布目痕、凸面は縄目痕がある。

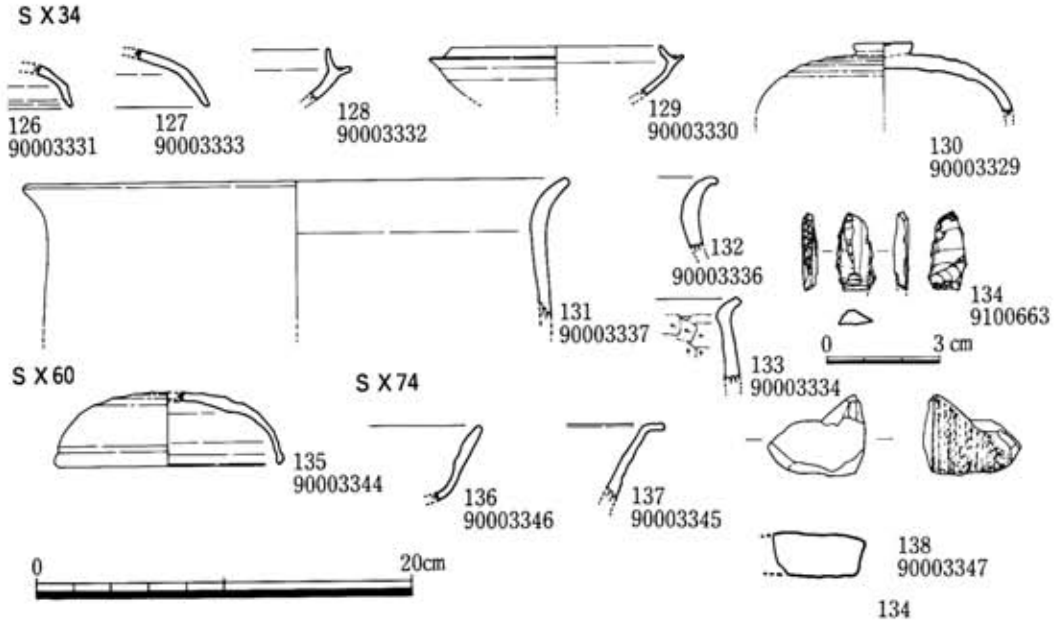


Fig.318　S X34・60・74不明遺構出土遺物（134は1/2、他は1/4）

S X34不明遺構出土遺物

須恵器

126、127は杯蓋。いずれも口縁が立ち上がるものであるが端部は丸く立ち上がりも低い。128、129は杯身。いずれも立ち上がりは低く、129は特に内傾している。130は高杯の蓋。口縁部を欠き、つまみは偏平である。

土師器

131～133は甕の口縁部である。いずれも口縁部が外反し、肩部は張らない。

石器

134はナイフ形石器。先端と基部が折れているが、現存長2.05cm、最大幅1.05cm、厚さ0.4cmを計る。二側縁に刃潰し加工を施している。黒色の黒曜石製である。

S X60不明遺構出土遺物

須恵器

135は坏蓋。復元口径11.8cm、器高3.9cmを計り、口縁端部は丸い。

S X74不明遺構出土遺物

須恵器

136は杯身。口縁から体部までの小破片である。137は壺の口縁部。口縁部を水平に折りまげて外反させている。

瓦

138は側面の一部が残存している瓦の小破片。厚さ3.1cmを計り、器面の状況は、凹面は不明、凸面は縄目痕が残っている。黄橙色を呈し、焼成不良である。

7．小穴出土遺物

須恵器

139、140は須恵器杯蓋。139は体部がやや垂直に立ち上がり、丸味をもって天井部に移行する。P276出土。140は偏平なつまみを持ち器高も低い。口縁端部もそれほど強く折りまげない。P70出土。141～143は杯身。141は受け部のあるものだが、立ち上がりは矮小化している。P147出土。142、143は高台の付くものだが、143が器高が低く比較的偏平になっている。

142はP112、143はP70出土。144は平瓶。口縁部全部と体部の1/2を欠く。P69出土。145は甕。口縁部の破片で撫で肩の肩部に外反する口縁部が付く。口縁内面にヘラ記号が見られる。P280出土。

土師器

146～148は甕。146はほぼ垂直の胴部に外反する口縁部が付く。P99と100出土が接合したもの。147は外傾する胴部に外反する口縁部が付くもの。148はほぼ垂直の胴部に外反する口縁部が付くもの。両者ともP67出土。149は復元口径14.1cm、器高1.8cmを計る皿。150は復元口径11.3cm、器高3.4cmを計る杯。151は高台部分のみが残る椀。3点ともP67出土。

石器

152は黒曜石製の角錐状石器。長さ4.3cm、最大幅1.75cm、最大厚1.0cmを計る。P15出土。153は柱状の砥石。現状では側面は5面あるが1面は破損面である。側面の4面が使用されている。P72出土。

金属塊

154は鉛塊。長径6.5cm、短径2.9cm、厚さ1.05cm、重さ172.8gを計る板状の直方体である。表面は発掘調査後次第に白色化してきた。福岡県海の中道遺跡出土の「錘製作のための原材」と考えられている遺物と類似する。[註1]

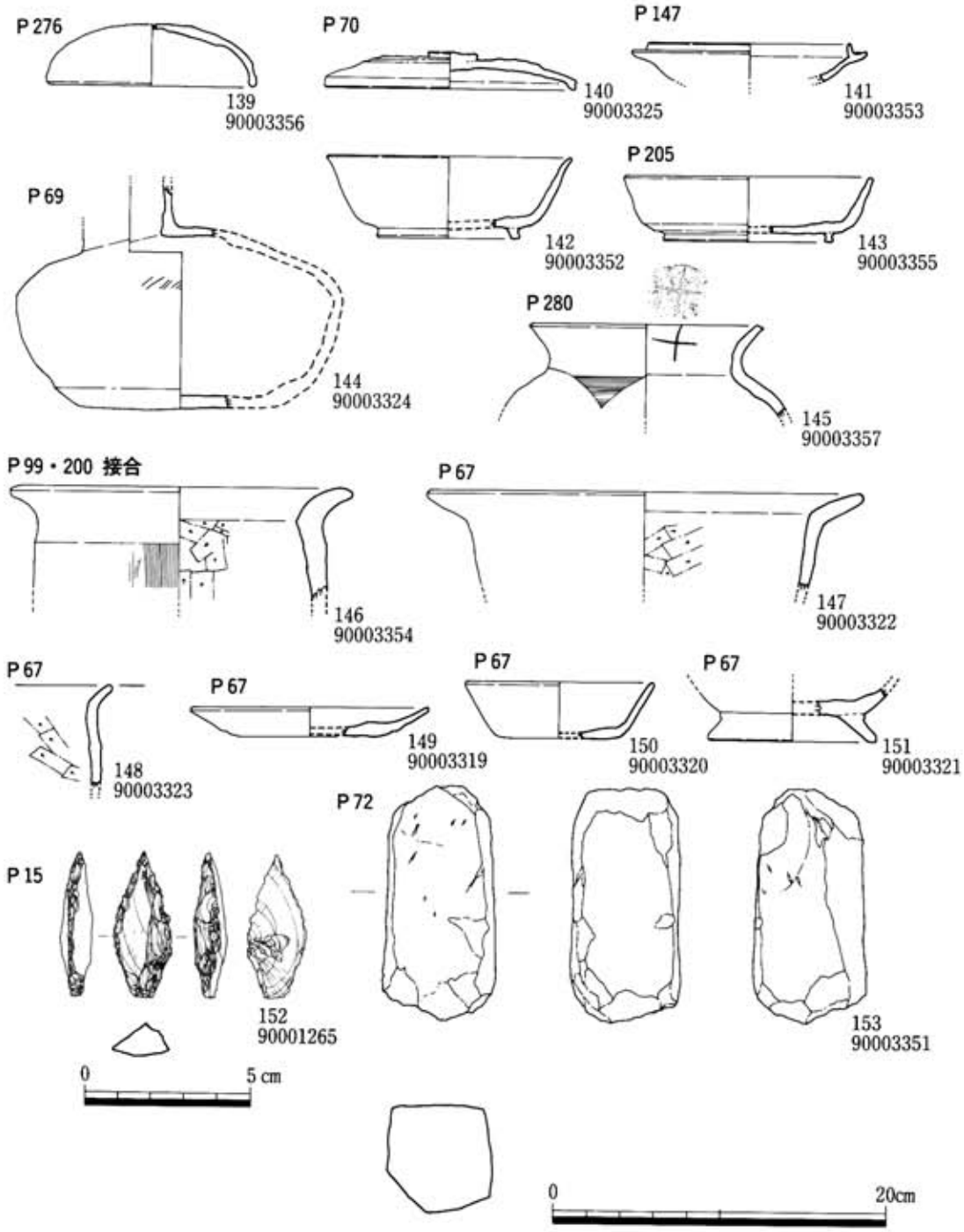


Fig.319 小穴出土遺物 1 (152・153は 1 / 2、他は 1 / 4)

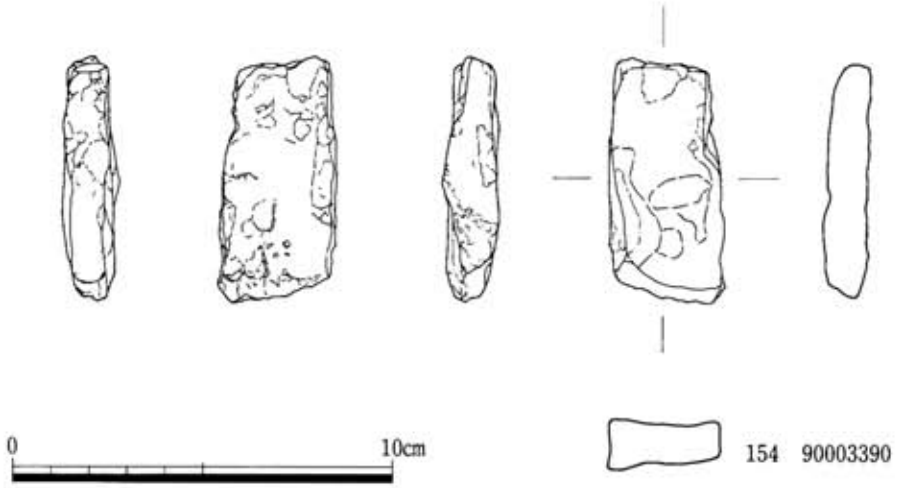


Fig.320 小穴出土遺物２（１/２）

８．包含層出土および表採遺物

須恵器

155～157は杯身。155は受け部のあるもの。底部にヘラ記号がある。156、157は高台の付くものでほぼ同形である。このうち155、156はＣ地区南端東側の包含層出土である。

土師器

158は竈。庇付きの形態で、庇の部分の破片である。Ｃ地区南端東側の包含層出土。

瓦

159～161は平瓦と考えられる。159は灰色を呈し、凹面に布目痕、凸面に縄目痕が観察される。160は黄白色を呈し、凹面に布目痕が残るが凸面は磨耗している。161は白黄色で両面とも磨耗して器面の状況は不明である。162は白黄色で、丸瓦と考えられる。両面とも摩滅しており器面は観察できない。このうち159、160はＣ地区南端東側の包含層出土で161、162はＣ地区北西部の包含層出土である。

石器

163は直径5.9cm、厚さ0.85cmを計る円板状の形態をした石器。いずれの面も研磨されている。

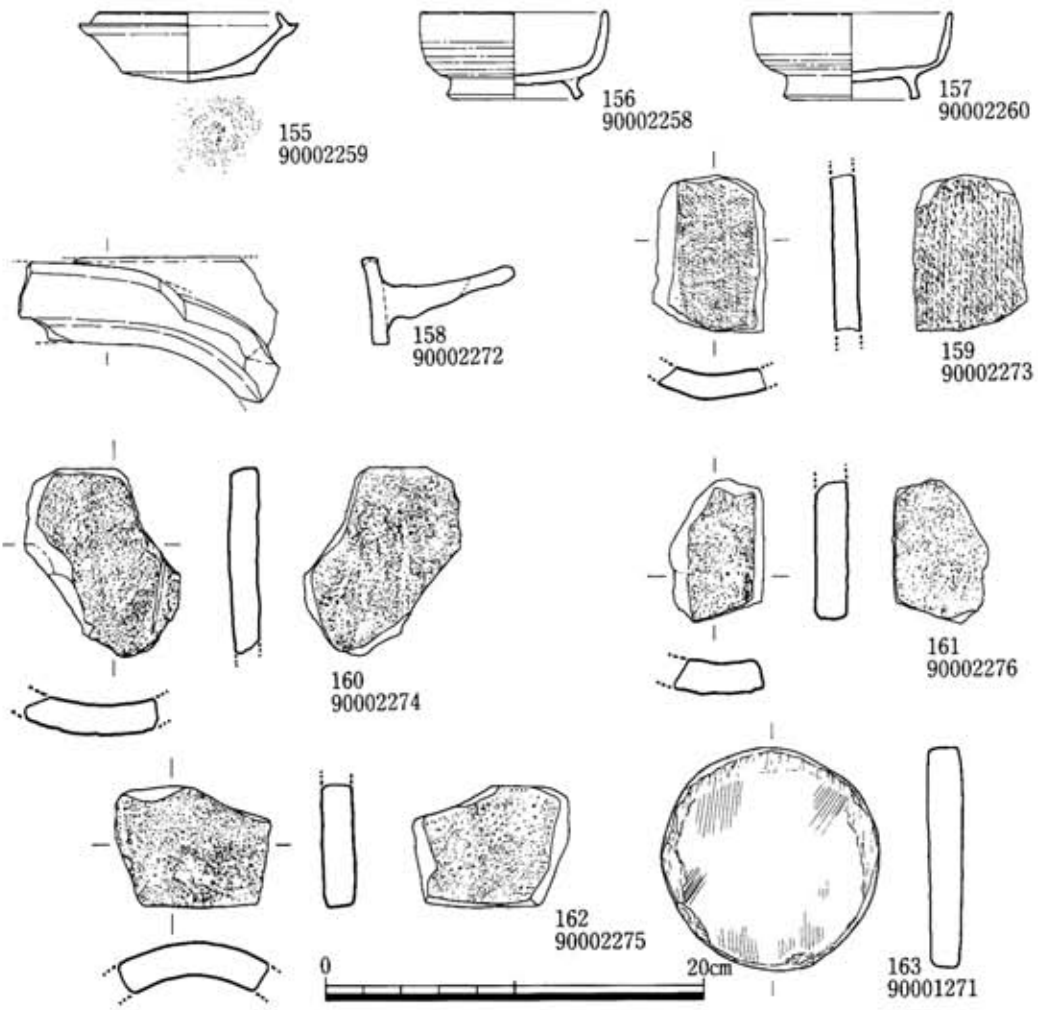


Fig.321 包含層出土遺物（163は1/2、他は1/4）

註

1.「海の中道遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第87集 1982 福岡市教育委員会

Tab.41　土器観察表

出土遺構	出土位置	遺物番号	遺物種別	器種	法量cm	色調	焼成	形態・調整の特徴	県登録番号	備考
SB17	埋土	1	須恵器	杯身	10.4 —	灰色	普通	口縁立ち上がりが矮小化。 口縁部ヨコナデ。	90002174	全周の約1/8残
	埋土	2	須恵器	杯身	9.7 2.2	灰色	普通	口縁立ち上がりが矮小化。 体部と底部の境に回転ヘラケズリ。 底面はヘラ切り離し。	90002175	
	埋土	3	須恵器	杯身	9.1 3.7	灰色	普通	外面底部のみ回転ヘラケズリ。内面見込みはヨコナデ。他は回転ヨコナデ。	90002173	底部にヘラ記号あり。
	埋土	4	須恵器	杯身	14.6 4.6	灰色	やや不良	口縁部が外反し、高台は外にふんばる。 体部と底部の境に回転ヘラケズリ。内面見込みはヨコナデ。他は回転ヨコナデ。	90003251	
	埋土	5	土師器	甕	13.6 —	赤橙色	普通	口縁部が外反し、胴部張らない。 内面ヘラケズリ。	90003253	
	埋土	6	土師器	甕	12.0 —	褐色	普通	口縁部が外反し、胴部張らない。内面ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ	90003254	
	埋土	7	土師器	甕	14.2	赤橙色	普通	外面ナデ。内面ヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。	90003252	
	埋土	8	土師器	(把手)		橙色	普通	ナデ。	90003255	
SB27	床面	9	須恵器	杯蓋	12.4 3.6	灰色	良好	口縁端面は丸く面はつくらない。外面天井部のみ回転ヘラケズリ。内面見込みはヨコナデ。他は回転ヨコナデ。	90002280	完形 天井部にヘラ記号。
	床面	10	須恵器	杯蓋	11.2 3.4	灰色	良好	口縁端面は丸く面はつくらない。 外面底部のみ回転ヘラケズリ。内面見込みはヨコナデ。他は回転ヨコナデ。	90003387	
	埋土	11	須恵器	杯身	12.5 3.5	灰色	普通	口縁立ち上がり1.0cm。 器高の1/3弱の高さ回転ヘラケズリ。	90003277	
	カマド内上部	12	須恵器	杯身	12.5 3.5	灰色	やや不良	口縁立ち上がり0.8cm。 ほぼ底部のみ回転ヘラケズリ。	90003278	底部から体部にかけてヘラ記号。
	カマド内	13	土師器	甕	16.1 (16.3)	橙色	やや不良	最大径胴部中位。口縁部ヨコナデ。外面ハケメ。内面ヘラケズリ。	90003368	
	埋土	14	土師器	甕	14.35	褐色	普通	頸部が外側に張り最大径が胴部中位にくる。外面縦方向のヘラケズリ、内面ヨコ方向のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90003279	
	床面	15	土師器	甕	19.2	明褐色	やや不良	口縁外反。内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、外面不明。	90003388	
	埋土	16	土師器	甕	13.5	浅黄褐色	良好	最大径が口縁部にある。頸部はほとんど張らず胴部に移行。外面ハケメ、内面斜め方向のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90002200	
	床面	17	土師器	甕	18.6	黄橙色	やや良好	最大径が口縁部にある。頸部はほとんど張らず胴部に移行。外面ハケメ、内面斜め方向のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90003367	
	床面	18	土師器	甕	14.0	橙色	やや良好	最大径が胴部にある。外面ハケメ、内面斜め方向のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90003365	
	カマド内	19	土師器	甕	—	明褐色	良好	外面イタナデ、内面ヘラケズリ。	90003369	底部破片。
	埋土	20	土師器	甕	—	淡褐色	良好	底部外面ヘラケズリ、底部内面ナデ。	90003366	〃
SB49	埋土	22	土師器	甕	19.7 —	褐色	良好	頸部が張る。外面ハケメ、内面斜め方向のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90002225	

出土遺構	出土位置	遺物番号	遺物種別	器種	法量cm	色調	焼成	形態・調整の特徴	県登録番号	備考
SB49	焼土直上	23	土師器	甕	19.0 —	明褐色	良好	頸部が張る。外面ハケメ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90002219	
	焼土集中部	24	土師器	甕	11.0 —	褐色	良好	頸部が張らない。外面ハケメ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90002221	全周の1/8残存
SB26	カマド内	25	須恵器	杯身	— —	淡灰褐色	普通	内外ともヨコナデ。	90003258	口縁部の一部残存
	埋土	26	土師器	甕	22.5 —	淡橙色	普通	口縁「く」字形。頸部が外に張り、最大径が胴部にくる。外面不明、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90003260	全周の1/9残存
	埋土	27	土師器	甕	30.6 —	淡橙色	普通	口縁「く」字形。頸部が外に張り、最大径が胴部にくる。外面ハケメ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90003263	全周の1/8残存
	カマド内	28	土師器	甕	25.5 —	赤橙色	普通	口縁部に最大径あり。胴部が若干張る。内面ヘラケズリ、他は摩耗して不明。	90003259	全周の1/12残存
	床面やや上No.6	29	土師器	甕	15.0 —	褐色	普通	口縁部に最大径あり。胴部が若干張る。外面不明確、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90003264	全周の1/12残存
	床面やや上No.6	30	土師器	甕	14.1 —	褐色	普通	口縁部に最大径あり。胴部が若干張る。外面不明確、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90003261	全周の1/4残存
	ピット内	31	土師器	甕	13.2 —	淡褐色	普通	口縁部に最大径あり、頸部が張らずに胴部に移行。外面、口縁部不明確、内面ヘラケズリ。	90003265	全周の1/8残存
	ピット1	32	土師器	甕	12.0 —	赤橙色	普通	口縁部に最大径あり、頸部が張らずに胴部に移行。器面調整不明。	90003267	全周の1/4～1/5残存
	カマド内	33	土師器	甕	19.7 —	赤橙色	普通	口縁部「く」字形。胴部で丸く張る。胴部最大径付近に把手の痕跡。内外面ナデ、口縁部ヨコナデ。	90003266	全周の1/7～1/8残存
	埋土No.3	34	土師器	杯身	12.6 4.9	橙色	普通	口縁部直口で丸底。器面調整不明。	90003270	全周の1/5残存
	埋土	35	土師器	杯身	14.3 —	橙色	普通	口縁部直口で丸底。口縁部ヨコナデ、他は摩耗で不明。	90003269	全周の1/6残存
	カマド内	36	土師器	杯身	11.6 —	淡橙色	普通	口縁部直口で丸底。内外ともヨコナデ。	90003268	全周の1/10残存
SB28	埋土	38	須恵器	杯蓋	— —	青灰色	良好	かえりが付かない。 口縁部ヨコナデ。	90003377	口縁部一部残存
	埋土	39	須恵器	杯蓋	— —	灰色	良好	かえりが付かない。 口縁部ヨコナデ。	90003378	口縁部一部残存
	埋土	40	須恵器	杯蓋	— —	白灰色	不良	かえりが付かない。 口縁部ヨコナデ。	90003379	口縁部一部残存
	埋土	41	須恵器	杯蓋	— —	明褐色	不良	かえりがつく。 口縁部ヨコナデ	90003380	口縁部一部残存
	埋土	42	須恵器	杯身	11.6 —	白灰色	良好	立ち上がりが矮小化。 口縁部ヨコナデ。	90003350	口縁部1/7残存
	埋土	43	須恵器	杯身	— —	白橙色	不良	立ち上がりが矮小化。 器面調整不明。	90003386	口縁部一部残存
	埋土	44	須恵器	杯身	— —	灰色	良好	高台が付く。 口縁部ヨコナデ。	90003381	口縁部一部残存

出土遺構	出土位置	遺物番号	遺物種別	器種	法量cm	色調	焼成	形態・調整の特徴	県登録番号	備考
SB28	カマド埋土	45	土師器	甕	14.3 —	褐色	良好	高台が付く。 外面ナデ内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90003349	全周の約1/8残
	埋土	46	土師器	甕	— —	明褐色	不良	最大径が口縁部にある。 内面ヘラケズリ、他は不明。	90003384	
	埋土	47	土師器	甕	— —	橙色	不良	最大径が口縁部にある。 摩耗のため不明。	90003383	底部にヘラ記号あり。
	埋土	48	土師器	甕	— —	褐色	不良	最大径が胴部にある。 摩耗で不明。	90003382	
	埋土	49	土師器	甑	— —	明褐色	不良	外面ハケメ、他は摩耗で不明。 最大径が胴部にある。	90003385	
	カマド西側	50	土師器	杯身	13.0 —	明橙色	不良	口縁直口、底部摩耗。 摩耗で器面調整不明。	90003376	
SB29	埋土	51	須恵器	杯身	— —	灰色	良好	口縁部ヨコナデ。 口縁部に受け部がある。立ち上り0.9cm。	90003249	小破片
	カマド周辺	52	須恵器	杯身	10.4 —	黄灰色	やや良好	口縁部に受け部がある。立ち上り0.8cm。 口縁部ヨコナデ。	90002240	小破片
	埋土	53	須恵器	杯身	12.6 3.8	灰色	良好	口縁部に受け部がある。立ち上がり0.8cm。外面底部のみ回転ヘラケズリ。内面見込みはヨコナデ。他は回転ヨコナデ。	90002248	小破片
	床面	54	須恵器	杯身	— —	灰色	良好	外面底部のみ回転ヘラケズリ。内面見込みはヨコナデ。他は回転ヨコナデ。口縁部に受け部がある。	90002239	口縁部欠損、全周の1/4残存、内部にヘラ記号あり。
	埋土	55	須恵器	高杯	— —	黄灰色	やや不良	器高の1/3弱の高さ回転ヘラケズリ。	90003303	脚部の一部残存
	埋土	56	土師器	杯身	15.7 4.1	明黄橙色	やや不良	体部は丸く立ち上がる。 摩耗のため不明。	90002250	小破片
	埋土	57	土師器	甕	25.25 7.6	橙色	やや良好	口縁部は丸く外反し肩部はゆるく外方に張る。外面ナデ、内部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90002247	小破片
	カマド周辺	58	土師器	甕	— —	橙色	不良	口縁部が外反する。 外面ハケメ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90002243	小破片
	カマド埋土	59	土師器	甕	— —	褐色	不良	口縁部が外反する。 外面ナデ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90002246	小破片
	カマド埋土	60	土師器	甕	— —	橙色	やや不良	口縁部が外反する。 外面ナデ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90003362	小破片
	カマド周辺	61	土師器	甕	— —	橙色	やや不良	口縁部が外反する。 外面ナデ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90002242	小破片
	カマド埋土カマド周辺	62	土師器	甕	12.85	明褐色	やや不良	口縁部はゆるく外反。 外面ナデ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90002244	全周の1/4残存
	埋土	63	土師器	甕	— —	橙色	やや不良	口縁部が「く」字形に短く外反。外面ハケメ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90003301	小破片
	埋土	64	土師器	(把手)	— —	明橙色	やや不良	外面ナデ。	90003302	小破片
	カマド周辺	65	土師器	甕	12.2 —	橙色	やや不良	口縁部は短く外反 外面ナデ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90002241	小破片

出土遺構	出土位置	遺物番号	遺物種別	器種	法量cm	色調	焼成	形態・調整の特徴	県登録番号	備考
S B29	カマド内埋土	66	土師器	甕	— —	黄橙色	やや不良	外面ハケメ、他は不明。	90002245	小破片
S B35	床面No.1	68	須恵器	杯身	11.2 3.8	黄灰色	良好	立ち上り0.9cm。 器高の1/5弱の高さまで回転ヘラケズリ、他は回転ヨコナデ。	90002235	全周の1/2残存
	埋土	69	須恵器	杯身	— —	灰色	やや良好	立ち上り1.0cm。 口縁部から体部にかけて回転ヨコナデ。	90002236	小破片
	床面No.4,5	70	須恵器	碗	9.8 9.5	灰色	やや良好	体部に2本単位の沈線。ヘラ記号。口縁部から体部は回転ヨコナデ、底部は静止ヘラケズリ。	90002232	全周3/4残存
	床面No.3	71	須恵器	甕	— —	黄灰色	やや不良	口縁外側に肥厚。 口縁部はヨコナデ。	90002233	小破片
	床面No.7	72	土師器	甕	20.0 —	橙色	やや不良	口縁部はヨコナデ。	90002231	小破片
	床面No.8,9	73	土師器	甕	16.5 —	赤橙色	やや良好	口縁部が丸く外反。最大径が胴部中位にくる。外面ハケメ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90002230	全周の1/3残存
	埋土	74	土師器	甕	15.15 —	黄橙色	やや不良	最大径が口縁部にくる。 外面ハケメ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90002238	小破片
	埋土	75	土師器	甕	10.1	橙色	不良	短く外反する口縁に胴の張る器形。最大径が胴部にくる。外面ナデ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90002237	小破片
	床面No.2	76	土師器	甕？	— —	褐色	良好	外面ハケメ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90002234	小破片
S B39	カマド周辺No.6	78	須恵器	杯蓋	— —	褐色	良好	口縁端部が丸い。 口縁部ヨコナデ。	90003328	小破片
	カマド内No.1,4,5	79	土師器	甕	23.1 —	褐色	良好	口縁部が丸く外反。肩部が外方に張り最大径が胴部にくる。外面ハケメ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90003326	全周の約1/4残存
	カマド内周辺No.1,6	80	土師器	甕	15.8 —	褐色	不良	口縁部がゆるく外反。 口縁径と胴部最大径がほぼ同径。 内面ヘラケズリ。他は摩耗で不明。	90003327	全周の約1/6残存
S B40	埋土	81	須恵器	杯蓋	— —	浅灰色	良好	口縁部が丸く立ち上がる。口縁部回転ヨコナデ。	90002213	小破片
	埋土	82	須恵器	杯蓋	— —	褐色	良好	口縁部にかえりなし。天井部回転ヘラケズリ、内面不定方向ナデ、口縁部回転ヨコナデ。	90002222	小破片 赤焼き
	埋土	83	須恵器	高坏	— —	灰色	良好	口縁部回転ヨコナデ。口縁端部が短く垂直気味に、立ち上がる。	90002214	小破片
	埋土	84	土師器	甕	19.3 —	明褐色	良好	最大径が口縁部にあり、胴部は張らない。外面ハケメ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90002211	全周の約1/10残存
	埋土	85	土師器	甕	— —	橙色	不良	摩耗のため不明	90002215	小破片
	埋土	86	土師器	甕	— —	褐色	良好	外面ハケメ、内面ヘラケズリ。	90002210	底部付近全周の約2/3残存。
S B42	床面やや上No.2,3,4	87	土師器	甕	— —	褐色	不良	口縁部は丸く外反し肩部が外方に張る。最大径は胴部にあり。外面ハケメ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90002217	口縁部欠損
S B43	カマド埋土24層	88	土師器	甕	—	褐色	良好	最大径が口縁部にあり、胴部は張らない。外面ハケメ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90002315	全周の約1/6残存

出土遺構	出土位置	遺物番号	遺物種別	器種	法量cm	色調	焼成	形態・調整の特徴	県登録番号	備考
SB06	P9	89	須恵器	杯身	(12.2) —	灰色	普通	立ち上り1.0cm 口縁部回転ヨコナデ。	90002169	口縁全周の1/9残存 口唇部わずかに欠損
	P4	90	須恵器	杯身	14.4 —	黄灰色	普通	受け部が付かない。 口縁部回転ヨコナデ。	90002171	口縁全周の1/12残存
	P8	91	須恵器	杯身	13.4 —	灰色	普通	受け部が付かない。高台が付く。口縁部回転ヨコナデ。	90002170	口縁全周の1/4残存
	P9	92	土師器	甕	16.5	褐色	普通	最大径が口縁部にあり、胴部が張らない。外面体部と底部の境のみ回転ヘラケズリ、内面回転ヨコナデ、口縁部ヨコナデ。	90002172	口縁全周の1/8残存
SB20	P3	93	須恵器	杯身	— —	灰白色	やや不良	立ち上り0.8cm。 口縁部回転ヨコナデ	90003256	口縁全周の1/8残存
SB21	P2	94	土師器	甕	13.85 —	褐色	普通	口縁部が短く外反し体部がゆるく外方に張る。外面ヘラケズリ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90003257	口縁全周の1/6残存
埋置土器		95	須恵器	甕	— —	黄褐色 赤褐色	良好	丸底で底部は穿孔。外面格子目タタキ、内面下部平行タタキ、内面上部同心円タタキ。	90003370	頸部以上欠損、残出器高36.2cm
SK03	埋土	96	須恵器	杯身	— —	黒褐色	良好	立ち上がり1.1cm。 口縁部回転ヨコナデ。	90002206	小破片
	埋土	97	須恵器	杯蓋	14.2 2.0	褐色 褐灰色	良好	口縁部にかえりがなく、つまみは偏平化。外面天井部の一部回転ヘラケズリ、内面不定方向のナデ、口縁部ヨコナデ。	90002205	口縁全周の1/2残存
	埋土	98	土師器	甕	19.15 —	浅黄橙色	不良	口縁部が「く」字形に外反し肩部が張る。摩耗のため不明。	90002208	口縁全周の1/8残存
	埋土	99	土師器	甕	— —	橙色	不良	口縁部が短く外反し肩部が張らない。内面ヘラケズリ。他は摩耗のため不明瞭。	90002207	小破片
SK04	埋土上層(1~3層)	101	土師器	甕	26.1 —	浅黄橙色	不良	口縁部が「く」字形に外反し胴部が張る。摩耗のため不明。	90002216	口縁全周の1/8残存
	埋土下層(5層)	102	土師器	甕	24.6 —	黄褐色	やや不良	口縁部が外反し、肩部はほとんど張らない。口縁部ヨコナデ、他は摩耗のため不明。	90002160	口縁全周の1/4残存
	埋土下層(5層)	103	土師器	皿	16.0 2.0	赤橙色	普通	底部から直線的に短く立ち上がる。内外ともヨコナデ。	90002161	全体の約1/2残存
SK10	埋土	105	須恵器	杯蓋	11.7 3.6	緑灰色	やや不良	口縁端部が丸い。外面天井部回転ヘラケズリ、内面天井部不定方向ナデ、口縁部回転ヨコナデ。	90002162	口縁全周の1/4残存 天井部にヘラ記号
	埋土	106	須恵器	杯身	— —	灰色	やや不良	立ち上がり0.8cm。 外面底部付近回転ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90002163	小破片
SK50	埋土	107	須恵器	杯蓋	— —	黄灰色	良好	口縁端部を折りまげて成形。口縁部の内外回転ヨコナデ。	90003308	小破片
	埋土下層	108	須恵器	杯身	— —	褐色	やや良好	口縁部の内外回転ヨコナデ。	90003309	小破片
	埋土	109	須恵器	杯身	— —	灰色	良好	高台付く。底部の内外の一部回転ヨコナデ。	90003307	小破片
	埋土 №37	110	土師器	甕	25.65 —	橙色	良好	口縁部外反。外部ナデ、内部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90003306	小破片
	埋土	111	土師器	甕	26.7 —	橙色	やや良好	口縁部は丸みをもって外反し、内面の口縁部境にヘラケズリによる稜ができる。外部ハケメ、内部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90003304	全周の1/3残存№2、7~12、18~22

出土遺構	出土位置	遺物番号	遺物種別	器種	法量cm	色調	焼成	形態・調整の特徴	県登録番号	備考
SK50	埋土 No.30	112	土師器	甕	32.95 —	橙色	やや不良	外反する。口縁部底部方向にすぼまる形態。胴部中位に把手が付く。外面ナデ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90003305	胴部全周1/4弱残存
SD33	埋土	115	須恵器	杯身	10.8 3.0	灰色	良好	受け部が付く。立ち上がり0.8cm。器高の1/4回転ヘラケズリ、口縁部回転ヨコナデ。	90003311	口縁全周の1/4残存
SX02	埋土	116	須恵器	杯蓋	11.8 —	灰色	良好	口縁端部を折れまげる。外面体部と口縁部の境回転ヘラケズリ、口縁部、内部回転ヨコナデ。	90002252	小破片
	埋土	117	須恵器	杯蓋	— —	灰色	良好	口縁端部を折れまげる。口縁部回転ヨコナデ。	90002255	小破片
	埋土	118	須恵器	杯蓋	— —	灰色	良好	口縁端部を折れまげる。口縁部回転ヨコナデ。	90002254	小破片
	埋土	119	須恵器	杯身	10.2	灰色	良好	受け部のある形態で立ちあがりは簡小化する。口縁部回転ヨコナデ。	90002253	小破片
	埋土	120	須恵器	鉢	27.0 —	灰色	良好	直線的な口縁部と体部。口縁部、内面回転ヨコナデ、外面回転ヘラケズリ。	90002251	口縁全周の1/5残存
	埋土	121	土師器	甕	25.4 —	橙色	良好	短く外反する口縁部に直線的な体部が付く。内外面ナデ、口縁部ヨコナデ。	90002256	小破片
	埋土	122	土師器	甕	— —	褐色	良好	外方に張りの弱い体部に外反する口縁が付く。外面ナデ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90002257	小破片
SX34	埋土	126	須恵器	杯蓋	— —	緑灰色	良好	口縁が立ち上がる。端部は丸く立ち上がりも低い。口縁部ヨコナデ。	90003331	小破片
	埋土	127	須恵器	杯蓋	— —	黄灰色	不良	口縁が立ち上がる。端部は丸く立ち上がりも低い。摩耗のため不明。	90003333	小破片
	埋土	128	須恵器	杯身	— —	灰色	良好	立ち上がりが低い。口縁部ヨコナデ。	90003332	小破片
	埋土 (2層)	129	須恵器	杯身	— —	黄灰色	やや不良	立ち上りが低く内傾している。口縁部ヨコナデ。	90003330	口縁全周の1/6残存
	埋土 (5層)	130	須恵器	高杯蓋	— —	浅白灰色	不良	偏平で上部がくぼむ、つまみが付く。外面天井部回転ヘラケズリ、内面天井部不定方向のナデ、口縁部回転ヨコナデ。	90003329	口縁部欠損
	埋土 (2層)	131	土師器	甕	28.95 —	暗橙色	不良	口縁部が外反し、胴部は張らない。摩耗のため不明。	90003337	口縁全周の1/6残存
	埋土	132	土師器	甕	— —	暗橙色	不良	口縁部が外反し、胴部は張らない。摩耗のため不明。	90003336	小破片
	埋土	133	土師器	甕	— —	明褐色	やや不良	口縁部が外反し、胴部は張らない。外面摩耗のため不明、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90003334	小破片
SX60	埋土	135	須恵器	杯蓋	11.8 3.9	黄灰色	不良	口縁端部は丸い。外面天井部器高の約1/7回転ヘラケズリ。内面天井部不定方向ナデ。口縁部回転ヨコナデ。	90003344	口縁全周の1/6残存
SX74	埋土	136	須恵器	杯身	— —	白灰色	不良	口縁部回転ヨコナデ。	90003346	小破片
	埋土	137	須恵器	壺	— —	灰色	良好	口縁部を水平に折り曲げて外反。口縁部回転ヨコナデ。	90003345	小破片
P276	埋土	139	須恵器	杯蓋	12.2 3.7	灰白色	不良	体部が垂直に立ち上がり丸味をもって天井部に移行する。摩耗のため不明。	90003356	口縁全周の1/6残存

出土遺構	出土位置	遺物番号	遺物種別	器種	法量cm	色調	焼成	形態・調整の特徴	県登録番号	備考
P147	埋土	141	須恵器	杯身	12.0 —	明黄橙色	やや良好	受け部あり、立ち上がりが矮小化。口縁部ヨコナデ。	90003353	小破片
P69	埋土	144	須恵器	平瓶	— —	灰色	良好	体部～頸部回転ヨコナデ。	90003324	口縁部欠損、底部～体部の1/2残存
P280	埋土	145	須恵器	甕	13.4 —	灰色	良好	撫で肩の肩部に外反する口縁部が付く。口縁内面にヘラ記号。外面カキメ状、口縁部～内面回転ヨコナデ。	90003357	口縁全周の1/4弱残存口縁内部にヘラ記号
P70	埋土	140	須恵器	杯蓋	14.9 2.2	灰色	良好	偏平なつまみを持つ。器高も低い。天井部ヨコナデ、口縁部～内面回転ヨコナデ。	90003325	口縁全周の2/3残存
P112	埋土	142	須恵器	杯身	14.7 4.9	黄灰色	やや不良	内外とも回転ヨコナデ。	90003352	口縁全周の1/5残存
P205	埋土	143	須恵器	杯身	14.7 9.9	灰色	灰色	器高が低く比較的偏平。体部の内外回転ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ、底部内面ナデ。	90003355	口縁全周の1/3残存
P199 P200	埋土	146	土師器	甕	19.3 6.8	橙色	良好	ほぼ垂直の胴部に外反する口縁部が付く。外面ハケメ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90003354	口縁全周の1/6残存
P67	埋土	147	土師器	甕	26.3 —	黄褐色	やや良好	外傾する胴部に外反する口縁部が付く。外面ナデ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90003322	小破片
P67	埋土	148	土師器	甕	— —	赤褐色	やや良好	ほぼ垂直の胴部に外反する口縁部が付く。外面ナデ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90003323	小破片
P67	埋土	149	土師器	皿	14.1 1.8	橙色	良好	外面ハケメ、内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	90003319	口縁部は一部残存
P67	埋土	150	土師器	杯	11.3 3.4	橙色	不良	体部～口縁部ヨコナデ、内面底部ナデ。	90003320	口縁全周の1/4残存
P67	埋土	151	土師器	椀	— —	明褐色	やや不良	高台部ヨコナデ。	90003321	高台部のみ残存
南部包含層		155	須恵器	杯身	9.6 3.7	灰色～灰黒色	良好	受け部がある。立ち上がり内傾し矮小化。底部ヘラキリハナシ、口縁部回転ヨコナデ、内面底部ナデ。	90002259	口縁全周の1/3残存、底部にヘラ記号
南部包含層		156	須恵器	杯身	9.6 4.6	黒灰色	良好	器高の2/3回転ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、内面底部不定方向のナデ。	90002258	口縁全周の1/6残存
表採		157	須恵器	杯身	10.6 4.6	黒灰色	良好	器高の1/2回転ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、内面底部不定方向のナデ。	90002260	口縁全周の1/6残存
南部包含層		158	土師器	甕	— —	褐色	良好	底部分ナデ底付き。	90002272	小破片

IV. 小 結

1. 先土器時代

本遺跡からはＳＢ26住居跡の台形石器、ＳＸ34のナイフ形石器、Ｐ15の角錘状石器などの若干の先土器時代の遺物が出土した。ＳＢ26、ＳＸ34はいずれも６～７世紀代の遺構であり混入したものである。Ｐ15は他に出土遺物はないが、先土器時代の遺構とする積極的な根拠はない。したがって本遺跡は先土器時代の明確な遺構は確認されなかったことになる。しかしこれらの遺物が検出された地点がＣ地区の南東部に集まるため、この地点周辺には曾て先土器時代の包含層や遺構が存在した可能性は考えられる。

2. 竪穴住居跡

本遺跡の住居跡の時期を出土遺物から推定するとＳＢ27、ＳＢ35が６世紀後半代、ＳＢ28、39が６世紀後半～７世紀前半、ＳＢ17、ＳＢ26、ＳＢ29が７世紀前半、そしてＳＢ40が７世紀末～８世紀前半と想定される。このうち、ＳＢ17とＳＢ26では長脚２段透かしの須恵器片どうしが接合したので、少なくとも住居の埋没時には共存していたことがわかる。しかしＳＢ72、49、42、43は出土遺物からは時期比定は困難である。

次にカマドの構造を分類すると、以下の３つに分けることができる。

A　住居壁にそのままカマドを構築するもの。

B　住居壁を掘りくぼめてカマドを構築するもの。

C　住居壁の後方に煙道を延ばすもの。

このうち、ＡはＳＢ27だけに見られ、またＣもＳＢ40のものに限られる。他の６例はＢである。これを住居跡の時期に比較すると、Ａは６世紀後半、Ｂは６世紀後半～７世紀代、Ｃは７

No.	遺構番号	時期	※規模m	方位	カマド 位置	カマド 形態	出土遺物	備考
1	ＳＢ17	７Ｃ前半	$4.23\times1.65+\alpha\times0.28$	Ｎ13°30′Ｗ	北側	Ｂ	須恵器杯身、短頸壺蓋 土師器甕、甑	長脚二段スカシ高杯ＳＢ26出土No.１と接合
2	ＳＢ72	(６Ｃ後半～７Ｃ前半)	$2.05+\alpha\times1.17+\alpha\times0.28$	Ｎ38°Ｗ	不明	?	土師器甕片	
3	ＳＢ27	６Ｃ後半～末	$4.85\times1.29+\alpha\times0.52$	Ｎ22°45′Ｗ	北側	Ａ	須恵器杯蓋身 土師器甕、砥石	26と49に切られる
4	ＳＢ49	(６Ｃ後半～７Ｃ前半)	$4.93\times2.30+\alpha\times0.44$	Ｎ26°30′Ｗ	北側	?	須恵器杯蓋 土師器杯甕	27を切る
5	ＳＢ26	７Ｃ前半	$4.18\times4.47\times0.28$	Ｎ62°45′Ｗ	北側	Ｂ	須恵器杯身 土師器杯甕小片	27を切る
6	ＳＢ28	６Ｃ後半～７Ｃ	$5.35\times4.90\times0.54$	Ｎ15°15′Ｗ	北側	Ｂ Ｂ	須恵器杯蓋・身 土師器杯、甕、甑	29に切られる
7	ＳＢ29	６Ｃ末～７Ｃ前半	$2.67+\alpha\times5.10\times0.62$	Ｎ５°15′Ｗ	北側 東側	?	須恵器杯身、高杯 土師器杯、甕、甑	28・35を切る
8	ＳＢ35	６Ｃ後半～末	$3.58\times2.79+\alpha\times0.33$	Ｎ34°00′Ｗ	北側	Ｂ	須恵器杯身、甕 土師器甕	28に切られる
9	ＳＢ39	６Ｃ後半～７Ｃ前半	$3.54+\alpha\times1.98\times0.28$	Ｎ41°15′Ｗ	北側	Ｂ	須恵器杯蓋片 土師器甕	
10	ＳＢ40	７Ｃ後半～８Ｃ前半	$2.73\times2.26\times0.15$	Ｎ９°30′Ｗ	北側	Ｃ	須恵器杯蓋、高杯片 土師器甕片	
11	ＳＢ42	(６Ｃ後半～７Ｃ前半)	$1.67+\alpha\times2.48+\alpha\times0.34$	Ｎ31°00′Ｗ	不明	?	土師器甕片	
12	ＳＢ43	(　〃　)	$0.28+\alpha\times3.07+\alpha\times0.22$	Ｎ12°30′Ｗ	北側	Ｂ	土師器甕片	ＳＫ50に切られる

Tab.42　竪穴住居跡一覧表　　（　）は方位等による推定
※南北長×東西長×深さ

世紀末から8世紀前半という時期に分けることが可能である。このことより先に保留した住居跡のうちBのカマドを持つSB43を6世紀後半～7世紀代に推定することができる。

以上の12軒の竪穴住居は、SB26、28、40以外は削平のため完全な平面形を知れるものはないが、概ね方形を呈すると考えられる。このことから、住居跡の4辺のうち少なくとも1辺の測定できる5軒も推定復元して本遺跡の竪穴住居の平面規模を考えると、縦×横が5 m×5 m前後がSB27、SB28、SB49の3軒、4.3m×4.3m前後がSB17、SB26の2軒、3.5m×3.5 m前後がSB35の1軒、2.5 m×2.5 m前後がSB40の1軒という分布状況である。

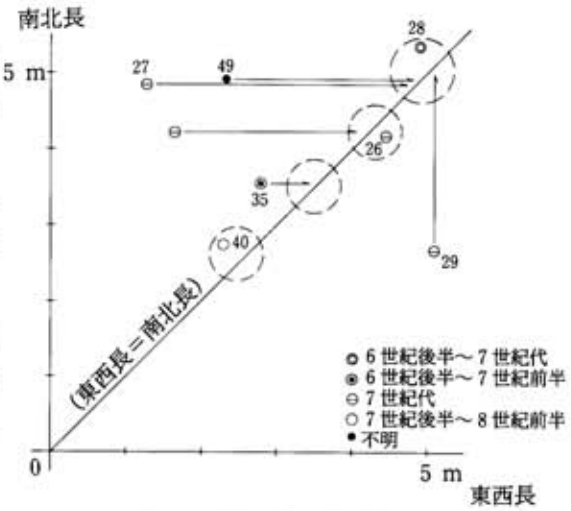


Fig.322 竪穴住居跡の規模（時期は出土遺物による）

3．掘立柱建物跡

掘立柱建物跡9棟のうち8棟は丘陵下端部にあたるC地区南部で検出されたが、SB20、25以外は2間×2間の総柱建物である。また、丘陵上部で検出されたSB44は3間×5間の建物で1棟だけ離れている。これらのうち、南部の丘陵下端部にある建物跡の方位を見ると、SB06以外はN25°45′WからN47°00′Wの間にある。特に、SB07、20、21、22、24の5棟はN34°30′WからN40°00′Wの間に揃っている。5棟のうち、20と21は重複し、20が古い。したがって、これらは4棟1組、乃至もし、22と24が併存するには狭すぎるということであれば3棟1組のセットが想定される。23は22、24と重複しているが24より新しく5棟とは方位も異なる。06も方位が異なっている。これらは併存したものではない可能性がある。また、SB44は立地している場所も構造的にも他とは異なっており21、22、24とほぼ同方位である。

No.	遺構番号	時期	間数	規模m	方位	出土遺物	備考
1	SB06	7C	2間×2間	3.00×3.80	N5°30′W		
2	SB07	6C末～7C前半	2間×2間	2.84×3.20	N34°30′W	須恵器片、土師器片	
3	SB20	〃	2間×2間	2.64×3.00	N35°00′W	須恵器杯蓋片、土師器片	SB21と重複。21より新しい。
4	SB21	（〃）	2間×2間	3.00×3.80	N39°00′W	須恵器片、土師器甕片	SB20と重複。20より古い。
5	SB22	（〃）	2間×2間	2.96×3.02	N40°00′W		SB23と重複。
6	SB23	7C	2間×2間	3.44×3.64	N25°45′W	土師器片	SB22,24と重複24より新しい。
7	SB24	（6C末～7C前半）	2間×2間	3.00×3.24	N38°00′W	土師器片	SB23と重複。23より古い。
8	SB25	7C	2間×2間以上	2.88×2.70+α	N47°00′W	須恵器片	
9	SB44	（6C末～7C前半）	3間×5間	4.51×5.92	N38°45′W	土師器片	

Tab.43 掘立柱建物跡一覧表　　（ ）は方位による推定

以上の建物の時期を決定できるほどの遺物は出土していないが、ＳＢ06の柱穴から出土した土器から概ね上限が７世紀代に想定される。また、ＳＢ07、20からは６世紀末～７世紀前半の須恵器片が出土した。他の掘立柱建物跡からも、少なくとも積極的に８世紀代に建物を位置づける資料は出土していない。

4．土 壙

先に土壙とした遺構のなかで、Ｃ地区ＳＫ45、46・47、52・53、Ｂ地区ＳＫ77、78の５基はいわゆる陥穴状遺構に近い形態と検出状況を示している。また、２次調査においても同様の遺構が１基検出されている。[註1]

これらの６基は、３つの型式に分類される。

Ａ．平面長楕円形で、中央に高さ0.6m程のしきりによって二分されるもの。

ＳＫ46・47、ＳＫ52・53及び２次調査の「貯蔵穴」と報告されたもの

Ｂ．平面長楕円形で、中央に高さ0.2m程のしきりによって二分されるもの。

ＳＫ78

Ｃ．平面長楕円形で、中央に高さ0.1m程の段差があるもの。

ＳＫ45、ＳＫ77

これらはいずれも底面に複数の小穴があり、ＳＫ45が４個、２次調査の「貯蔵穴」が１個であるほかは、長軸に沿って２個検出された。また、ＳＫ45などの埋土は長軸方向の断面では水平堆積の土層が確認されたが、ＳＫ78の埋土の短軸方向の土層は埋没した状況が観察された（PL.170）。配置状況は、Ｃ地区の３基は、標高25.3～25.6mの丘陵縁辺部に約５ｍの間隔で傾斜方向に長軸が平行して並んでいる。また、Ｂ地区の２基も２ｍの間隔で並んでいる。これらは、それぞれ、調査区外に延びる可能性が強い。

以上の特徴を持つ土壙のうち、Ａは２つの土壙を並列させて作ったものである。ただし、もともと中央の仕切り状の高まりは、土壙周囲の上端部より数10cmは低く作られたものであろう。ＳＫ52・53のように高さがほぼ等しいのは遺構検出面が他より深く削平された可能性が強い。Ｂは、Ａほど仕切り状の高まりが高くないものである。これは、当初Ａの形態だったものの高ま

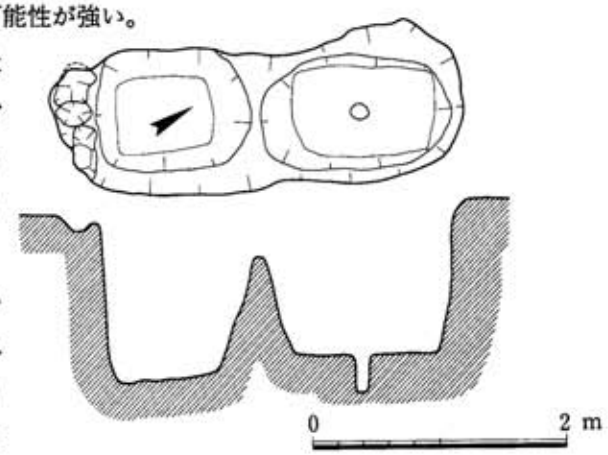


Fig.323　２次調査検出「貯蔵穴」（1/60）〈注１文献より、一部改変〉

りが崩壊したか、元々低く作ったものである。CはAまたはBであったものが中央の高まりが崩壊し、さらに一方の面を掘り下げたか、元々1つの土壙の中の底面レベルを違えて作ったものである。

3つの型式をこのように関係づけると、この土壙は、元々は1つの掘方にほぼ同形の土壙を連結させた形態のものであった、と考えられる。それがある種の目的で使用される過程で中央の高まりが低くなったのであろう。これがさらに進んで、高まりが完全に消失し、逆に一方の面を掘り下げることで2つに分離したと考えられる。底面の小穴は、原則的には2つの土壙に1つずつであったと考えられるが、SK45に複数が検出されたのは使用回数の相違かも知れない。このように、敢えて1つの土壙に2つの空間を意図した理由は、陥穴にしろ他の機能を考えるにしろ1つの重要なポイントになる可能性がある。

5．まとめ

本川原遺跡は以上見てきたように、鳥栖市北東部の柚比丘陵の先端部に立地する6世紀後半から8世紀前半に営まれた集落遺跡である。

12軒の竪穴住居跡は、厳密な時期区分ではないが、6世紀後半～末、6世紀後半～7世紀前半、7世紀代、7世紀後半～8世紀前半の遺物をそれぞれ出土した。また、出土遺物では時期比定を保留したSB43についてはカマドの構造から6世紀後半～7世紀前半に推定した。さらに、同様に出土遺物に乏しいSB42、49、72については住居跡の方位を参考にすると、SB27、35、39などの6世紀後半から7世紀前半の遺物を出土している住居と同方向につくられており、同期のものと想定する。(Fig.324)

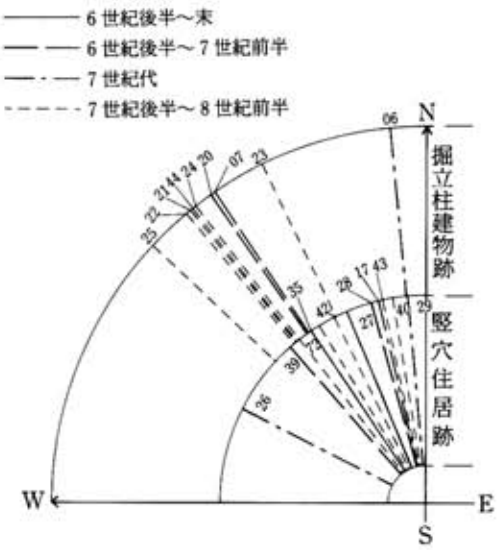


Fig.324　掘立柱建物跡・竪穴住居跡の方位

これらは、C地区の中で見るかぎり、2～4軒ずつの単位で変遷したと想定される。

掘立柱建物跡は方位を検討すると、SB06、23、25をのぞく建物跡はN34°30′WからN40°00′Wの間に集中している。竪穴住居跡との方位関係で見ると、これらは、SB35、39などに近い方位を取っており、同時期に造られていた蓋然性が高い。このことから、C地区の掘立柱建物跡は丘陵下部のSB07、20、21、22、24、44等の2間×2間の総柱の建物と丘陵上部の3間×5間の建物が6世紀後半から7世紀前半の間に、数軒の南向きの竪穴住居を挟んで造営されたと考えられる。そしてその後7世紀代のうちにSB06、23、25等のこれとは方位乃至構造のことなる建物跡が造られたのであろう。

以上のほかに、２次調査で検出されていた２個の土壙を連結した形態の遺構が今回の調査でも特徴的な並びかたで検出され、しかも、その内の２基から時期をある程度推定しうる土器片が出土したことや、わずかとはいえ新しく先土器時代の資料が追加された事などは注目されるべきであろう。また、ＳＢ35竪穴住居跡のカマド前面から検出された土製品は、通常の模造鏡とは形態が異なるが、カマドの祭祀に関連するものとして注目される。

なお、過去の３次にわたる本遺跡の調査成果については３次調査の報告の際にまとめてあり、また、調査区も直接には接しないので敢えてまとめではふれない。ただし、北北東約250m の２次調査区と北側約400m の３次調査区で今回の住居跡群と時期的に重複する７世紀代の竪穴住居跡がそれぞれ１軒と３軒検出されたことは確認しておきたい。[註2]

註

１．木下之治　木下　巧　天本洋一「本川原遺跡　＝第２次調査＝」　佐賀県文化財調査報告書第32集　1975年　建設省佐賀国道工事事務所　佐賀県教育委員会

２．杠　一義　藤瀬禎博　石橋新次　「本川原遺跡　第３次発掘調査報告書」　1979年　佐賀県教育委員会

第4章　各　　論

1．都谷遺跡における古墳群形成過程について

本遺跡は4つの調査区からなるが、その中でもB地区は幅約90mのやせ尾根という立地条件にもかかわらず古墳18基と不明遺構1基と他の支群に比べ密集して古墳が築造される。調査区外で尾根上方にも17基＋αの古墳が現存し、調査区のものとあわせると30数基にもなる古墳群を形成する。そして、これらは古墳と古墳との間に割け入って築造されるものもあり、規制をうけた墓域のなかでの群集墳の形成過程を推察することができる。本来ならば調査区外の古墳も含めて形成過程を論ずるべきなのであろうが資料不足ということもあってここではB区内古墳の形成過程について考えてみたい。なお、B区の東西両側は斜面となり、南下方にも古墳は築造されておらずB区は本支群の約南半分を占めると考えて良い。

(1)　各古墳出土土器からみた造墓・追葬過程

古墳出土の須恵器、なかでも編年研究が進んでいる杯蓋・身によって古墳相互の築造、追葬期間を考えてみた。客観的な資料を提示するため杯蓋・身をA～E類の5つに分類してみた。

杯蓋・身はその法量差が時期差となってあらわれることは一般的傾向として看取できる。そこで、この分類基準の第一の属性に法量、その他に杯蓋は稜、沈線、宝珠つまみ、かえりの有無など杯身ではたちあがりの傾き、高台の有無といった形態の特徴の他、底部・天井部に施される回転ヘラケズリ、不定方向ヘラケズリ、ヘラ切り未調整といった調整の特徴などにより分類してみた。この分類はある程度の時期差を表しており、小田編年に対応させるとA・B類はIIIB期、C類はIV期、D類はV期、E類はVI期と考えた。実年代比定は機械的ではあるがA類が6C第3四半期、B類が6C第4四半期、C類が7C第1四半期、D類が7C第2四半期、E類古段階が7C第3四半期、E類新段階が7C第4四半期とする。この分類がそのまま時期差になるわけではなく、C類とD類は部分的に併行関係になることなどの問題点はあるが、本遺跡内古墳相互の築造、追葬などの時期を客観的に検証するための分類である。詳細はP27参照。

各古墳出土の土器をA～E類にわけた表がTab.44である。A類を出土しているのはST014のみで、B区内では最も早い築造で6C第3四半期と考える。B類はST008、011、012、014、015、017で出土。ST014でB類が出土しているがこれは追葬を示す。一方ST008、011、012、015、017は築造を示すと考えてよかろう。C類はST001、002、003、004、007、008、SX009、011、012、016で出土している。ST001、002、003、004、007、SX009はA，B類がなくC類から入っているのでこの時期の築造と考えられる。ST008はC類までででそれ以降の土器は入っていない。ST011、012、016のC類は追葬を示す。一方ST014、015、016はそれぞれB、D類はあるがC類はないためこの時期の追葬がなかったことが伺える。これは後述する調査区中央にはしる地山整形斜面と関係すると考えられる。D類はST001、002、014、015、017で出土。すべて最終追葬、追葬を示す。最終追葬はST001,014,015,017で、追葬はST002で

Tab.44　古墳別土器分類表

		6C第3四半期	6C第4四半期	7C第1四半期	7C第2四半期	7C第3四半期	7C第4四半期
		A類(ⅢB古)	B類(ⅢB新)	C類(Ⅳ)	D類(Ⅴ)	E類(Ⅵ古)	(Ⅵ新)
MKD-B ST001	蓋			39,40	41		
	身			44,45,46,47,48	49		
ST002	蓋			74,75	76,77,78	80,81,83,84,85,86,87,88,89	90
	身			91,92,93	94,95,96,97	98,99,100,101,102,103,104,105	
ST003	蓋					138,139,141	140
	身			142			
ST004	蓋			155,156,157,158,159,160,161,162			
	身			163,164,165,166,167,168		169	
ST007	蓋			240			
	身			241			
ST008	蓋		266,267,268	269,270,271			
	身		273,274,275	276			
ST009	蓋			349			
	身			350,351			
ST010	身					356	

		6C第3四半期	6C第4四半期	7C第1四半期	7C第2四半期	7C第3四半期	7C第4四半期
		A類(ⅢB古)	B類(ⅢB新)	C類(Ⅳ)	D類(Ⅴ)	E類(Ⅵ古)	(Ⅵ新)
MKD-B ST011	蓋			357,358		360,361,362,364	363
	身		365,366,367			368,370,371,372	
ST012	蓋		387,388			389	390,391
	身		392,393,394,395	396		397,398,399	
ST013	蓋						
	身						417
ST014	蓋	421,422	423		424,425,426,427,428,429		
	身	430,431	432		433,434,435,436,437,438,439		
ST015	蓋		506,507,508,509,510		512		
	身		515,516,517		514		
ST016	蓋			590			591,592
	身			593,594		595,596	
ST017	蓋		621,622,623,624,625,626,627,628,629,630		633,634,635,636,637,638,639		
	身		640,641,642,643,644,645,646,647,648,649,650,651,652,653,654,655				
ST019	蓋						786

ある。C類の時期に追葬をしない3基の古墳があったが、同様ＳＴ003、004、011、012、016はD類は出土していなくこの時期に追葬がなかったことが考えられる。E類は古段階と新段階にわかれるが、E類古はＳＴ002、003、004、010、011、012、016で出土。すべて最終追葬、追葬を示す。ＳＴ002、003、011、012、016は追葬でＳＴ004、010は最終追葬である。D類、E類の時期に新たに築造を始めることはなく古墳築造の休止期間で、追葬のみなされたことを伺わせる。この築造休止期間をおいてE類新がＳＴ002、003、011、012、013、016、019で出土。ＳＴ013、019が築造を示し、ＳＴ002、003、011、012、016が最終追葬である。

以上、出土土器からみた古墳築造、追葬について考えてみた。しかしこのA～E類は明確に時期差を表すものではなく器種も須恵器の杯蓋・身に限っている。また、古墳の遺存状態によって土器の出土量も違うであろう。築造時期は墳丘盛土内出土土器をもって決定することが確実であろうがこのような例は少ない。これらのことからこの分類はあくまでも形成過程を検証するための一つの方法であると考えたい。

以下、石室主軸、石室形式、立地、とくに調査区中央の地山整形斜面の上段、下段のどちらに占地するかなどの点を加味し古墳群の形成過程について考えてみたい。

(2)　石室主軸方向からみた群構成

石室主軸方向（開口方向）を表した図がFig.325である。石室開口方向は大きく2つに別れ、南西開口をA群、南東開口をB群とした。A群にＳＴ001、005、007、008、014、016がB群にＳＴ002、003、004、006、ＳＸ009、010、011、012、013、015、017、018、019がある。このA群とB群の開口方向の違いは地形の制約上おきた偶然の一致ではなく、墓道を共有する大きい単位群を想定できる。

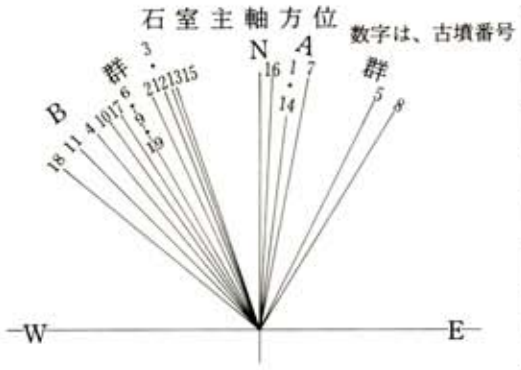
A、B群の古墳配置を示したのがFig.325である。調査区中央の地山整形斜面については後述するがこの斜面の上方を上段、下方を下段とするならば、A群上段にＳＴ014、016が、A群下段にＳＴ001、005、007、008がある。また、B群上段にＳＴ013、015、017、018、019がB群下段にＳＴ002、004、006、ＳＸ009、010、011、012がある。このA，B群という2つの単位群にわけてそれぞれの群のなかでの築造過程をFig.325に示す。

石室主軸によって析出した2つの単位群にはA群にＳＴ014、B群にＳＴ015という階層差を思わせる中心的古墳があり、この単位群が何らかの集団につながるのではなかろうか。

(3)　古墳群の形成過程について

古墳群の形成過程を考えるにあたって古墳出土の土器の分類、石室主軸方位による単位群の析出などを試みた。これらをもとに形成過程を総合的に考えたい。

B区内古墳群は6Ｃ第3四半期に造墓が始まり7Ｃ第4四半期までの1世紀半存続しており、この期間を7段階にわけ築造過程を示したのがFig.326である。



群別古墳築造段階

段階	土器分類	A群	B群
1	A類	ST014	
2	B類	ST016	ST015→ST017
3		ST008	ST011→ST012
4	C類	ST001, ST007	ST002, ST003, ST004 SX009, ST010
5	D類		
6	E類		
7		ST005	ST006, ST013 ST018, ST019

地山整形

Fig.325　石室主軸方位、築造段階図

ところで、本古墳群において調査区を南北に二分する地山整形斜面がみられる。これは標高差が東端で4.5m、西側で2 mを測るもので地山整形としては大規模なものである。この斜面の上段で傾斜角度は約17度あり、当時の地形ではその傾斜角度で斜面が尾根裾部までのびていたのであろう。古墳は尾根上方から築造を開始し、尾根下方へと墓域を広げていく。尾根上方では斜面の傾斜角度はきつく、そのような地形で古墳を築造するにはST016古墳にみられるように奥壁背後の地山を大きく馬蹄形に掘削したり、ST015古墳のように馬蹄形周溝、あるいはST014、017古墳のように墳丘列石を巡らすことなどが必要となる。そこで、大きく尾根の斜面

を東西方向にカットすることでより平坦な地形を得ることができる。この地山整形斜面下段の斜面傾斜角度は約10度と上段よりも平坦になっており古墳築造が容易になっている。

このような地山整形は相当の労力を必要としたであろうし、この整形斜面の上段と下段で追葬の空白期間があることなどを考えれば政治的な墓域の再編なども予想される。この地山整形斜面がいつ、どの段階でなされたのかが問題になろう。以下、これらのことについて段階をおって説明していく。

第一段階　（ⅢＢ古段階　Ａ類）

尾根のほぼ中央にＳＴ014古墳がつくられる。本墳からは切子玉、耳環、管玉ほか多くの装身具が出土しておりその量は卓越している。被葬者の階層差が伺われＡ群の中心的古墳と考えられる。また、この段階でＢ区内にはＳＴ014古墳のみ築造され、他にはつくられない。しかし尾根上方にはすでに築造される古墳群はある。地山整形斜面の掘削もなされない。

第二段階　（ⅢＢ新段階　Ｂ類）

第二、第三段階は土器形式からは同一時期となる。この時期において調査区を二分する整形斜面を掘削したと考え同一時期を二段階にわけた。第二段階は地山整形斜面上段にＳＴ015、016、017古墳が築造される。

Ａ群ではＳＴ014古墳の北西24m で約4.5m 高位置にＳＴ016古墳が築造される。ＳＴ016古墳からはこの時期を示す土器は出土していないが、ＳＴ014古墳と石室形態、玄室規模が類似することなどから第二段階とした。

Ｂ群ではＳＴ015、017古墳がつくられる。ＳＴ015古墳はＳＴ014古墳の東にならんでおり、尾根の中央に占地する。石室は玄室方形の複室両袖型横穴式石室で、玄室規模３×３ｍと他の同形式石室に比べ大形である。副葬品では鞘尻金具、鐙、ガラス玉が出土している。これらのことからＳＴ015古墳はＢ群の中心的古墳と考えられる。ＳＴ015古墳とＳＴ014古墳は墳丘で切り合っているがＳＴ015古墳周溝はＳＴ014古墳までのびていないことなどから、ＳＴ015古墳を築造する段階にはすでにＳＴ014古墳はあったと考えられる。Ａ群でＳＴ014古墳（中心的古墳）→ＳＴ016古墳のようにＢ群ではＳＴ015古墳（中心的古墳）→ＳＴ017古墳がいえよう。

第三段階　（ⅢＢ新段階　Ｂ類）

地山整形斜面下段にＡ群ＳＴ008、Ｂ群ＳＴ011、012古墳が築造される。ＳＴ008、011古墳は等高線をみてもわかるようにそれぞれ南西、南東に突出した地形に占地している。地山整形斜面下段に古墳を築造する際、このような優位な地形から築造を始めていったのであろう。従ってＳＴ011古墳とＳＴ012古墳はＳＴ011→ＳＴ012の築造順が想定できる。

ＳＴ012古墳は調査区東端で地山を逆Ｌ字状に大きく掘削している。そのため墳丘基底面がＳＴ011古墳よりも約１ｍちかく低くなる。同様の地山整形が調査区西端のＳＴ002古墳にもみられる。

1段階（A類・ⅢB古期）

2段階（B類・ⅢB新期）

3段階（B類・ⅢB新期）

4段階（C類・Ⅳ期）

5段階（D類・Ⅴ期）

6段階（E類・Ⅵ古期）

7段階（E類・Ⅵ新期）

Fig.326　古墳群形成過程図

Tab.45　古墳群築造・追葬過程表

群	遺　構	A類(ⅢB古)	B類(ⅢB新)	C類 (Ⅳ)	D類 (Ⅴ)	E類(Ⅵ古)	E類(Ⅵ新)
A群	ST014						
	ST016						
	ST008						
	ST001						
	ST007						
	ST005						
B群	ST015						
	ST017						
	ST011						
	ST012						
	ST002						
	ST003						
	ST004						
	SX009						
	ST010						
	ST013						
	ST018						
	ST019						
	ST006						

↑ 地山整形　　古墳築造なし

第四段階　(Ⅳ期　C類)

この段階において最も古墳の築造が盛んになり7基がつくられる。A群にはST001、007古墳が築造されるが、ST008古墳の両側につくられる。B群にはST002、003、004、SX009、010古墳がある。SX009、ST010古墳は地山整形斜面の下端際に並んでつくられる。SX009の性格は不明であるがST010古墳とほぼ同時期のものであろう。ST002古墳は調査区西端に地山整形斜面を切ってさらに逆L字状に地山整形をする。ST013古墳の墳丘基底面より約2m低くなる。ST002古墳は立地からすればA群であるが石室主軸の結果、B群とした。

ST003、004古墳はSX009、ST010古墳の下方に並ぶ。ST001古墳とST003古墳は切り合っており、古墳占地からST001→ST003であろう。また、ST003古墳の墓道はST001古墳周溝と共有していたと考えられる。

地山整形斜面の上段のST014、015、017古墳はこの段階において追葬はされない。

第五段階　(Ⅴ期　D類)

この段階で新たに築造される古墳はなくA群ST001、014古墳、B群002、015、017古墳が追

葬される。第四段階で追葬されなかった地山整形斜面上段のＳＴ014、015、017古墳のうちＳＴ014、015古墳は最終追葬となる。第３、第４段階で築造された下段のＳＴ003、004、010、011、012古墳は追葬されない。

第六段階　（Ⅵ古段階期　Ｅ類）

前段階同様、新たに築造される古墳はない。追葬はＡ群ＳＴ016、Ｂ群ＳＴ002、003、004、010、011、012、017古墳でなされる。このうちＳＴ004、010、017古墳が最終追葬となる。

第七段階　（Ⅵ新段階期　Ｅ類）

Ａ群はＳＴ005、Ｂ群はＳＴ006、013、018、019古墳が築造される。ＳＴ005、006古墳は小石室で地山整形斜面下段につくられる。ＳＴ013、018、019古墳は地山整形斜面上段につくられる。玄室方形の単室両袖型・無袖型で前庭側壁は連接しなく石室形態からすれば新時期になる。遺物出土量も少ないが、元来副葬品は少なかったと思われる。ＳＴ016古墳はこの段階まで追葬される。

この第七段階をもって本古墳群は全く造墓、追葬活動を停止する。

以上、Ｂ区内古墳群の形成過程について各段階をおって述べてきた。本古墳群は２つの単位群からなり、それぞれにＳＴ014、015古墳といった中心的古墳をもつ。また、副葬品からみると鐙、轡、杏葉といった馬具が18基中５基から、鉄鏃、剣などの武器類が11基の古墳から出土しており、これは、被葬者が「等質」ではなく「隔差」があることを物語っていよう。そして本古墳群全体の被葬者集団が武装集団であることもいえるのではなかろうか。

調査区中央に東西にはしる地山整形斜面は本古墳群形成過程において画期となる。これは尾根を東西に中断するように２～４ｍ程も掘削するものであるが、Ａ、Ｂ両群の造墓集団がこの作業に従事したのであろう。この地山整形は本古墳群中における墓域の再編成であるが問題はこの掘削が外的要因により強いられたのかそれとも造墓集団内において自発的におこなったものなのかである。どちらであるかそれを実証するすべもないが、このような大がかりな地山整形が古墳群内でなされたという事実は見逃せないし、古墳群形成過程における墓域の再編成というひとつの事実を提示できた。

本遺跡の調査は、このように古墳群とりわけ密集型群集墳のひとつの事例として多くの情報を提供してくれるものとなった。

〈参考文献〉

１．緒方泉「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告書２」1990

２．辰巳和弘「密集型群集墳の特質とその背景」『古代学研究』100　1983

2．調査区外の古墳群について

本古墳群は幅50～90m を測るやせ尾根上に立地している。東西は急斜面となり限定された墓域に30数基もの古墳を築造し密集型群集墳を形成する。古墳群の形成過程を述べるには前述したように調査区外のものも含めて考えなければならない。

そこで調査区外を踏査した結果17基の古墳を確認し本調査区遺構番号から連番号をつけた。その図を Fig.327に示す。この17基のうち３基は天井部まで完存しておりその石室計測値を下記に示す。他の古墳は盛土が若干残り、天井石が抜き取られ墳丘頂部が窪むものがほとんどであった。石室開口方向はＳＴ034が西方開口で、ほかはすべて南方開口である。ＳＴ020から032まで尾根上に２列に並ぶのはそれぞれがＡ、Ｂ群に相当するのかもしれない。ＳＴ031、32古墳上方に段状地形がみられるが、調査区中央の地山整形と同じものの可能性がある。ＳＴ033～036は尾根上に並び034上方から傾斜角度がきつくなる。またこのＳＴ034のみ西方開口で、尾根幅は10m を測る。035、036になるとさらに尾根幅が狭くなり斜面傾斜角度はきつくなる。

遺構名	石室形式	玄室中央長×中央幅	前室中央長×中央幅	玄門幅	前門幅	玄室天井高	前室天井高cm	玄室比
ＳＴ020	複室片袖型	275×252	180×170	70	85	280	150	1.09
ＳＴ027	複室両袖型	260×226	155×180	95	84	240	180	1.15
ＳＴ029	複室両袖型	275×210	170×180	90	80	273	180	1.30

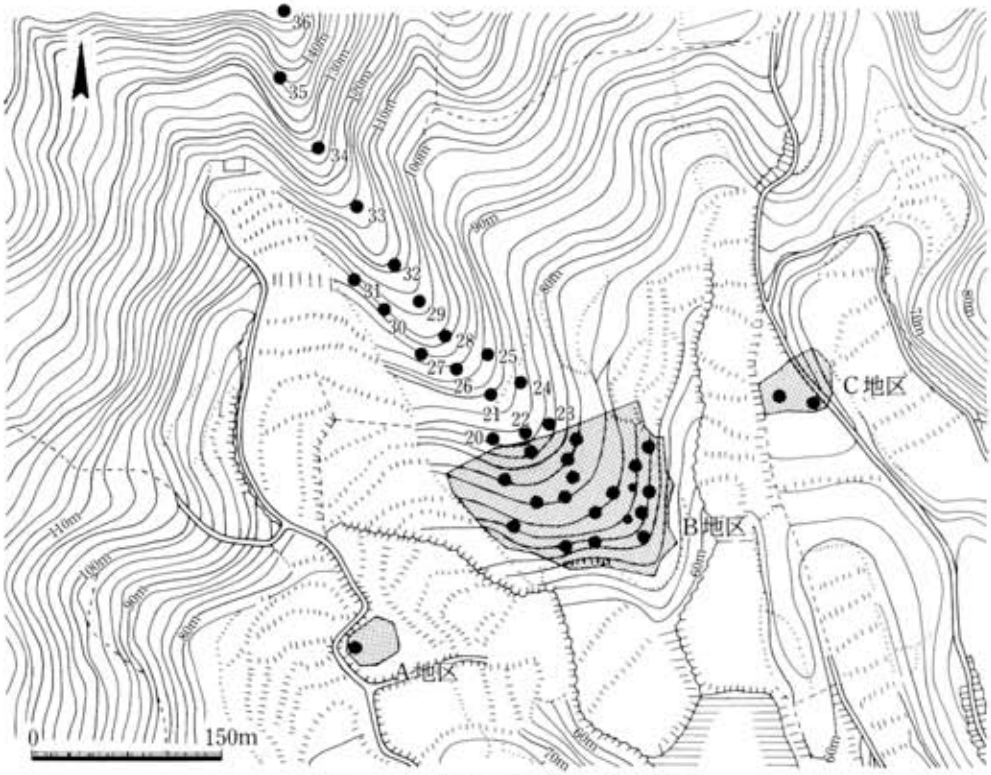


Fig.327　都谷古墳群分布図（１/3000）

3．石室形態について

横穴式石室が出現して古墳群が形成される過程でさまざまな形態の石室が構築される。それは時間、空間軸で変化していく。そこで、石室形態分類をおこない、本遺跡群で特徴的な玄室平面形と複室両袖型石室の前室平面形について考えてみたい。佐賀平野の石室形態分類は蒲原氏の業績がありこれとの対比とする。

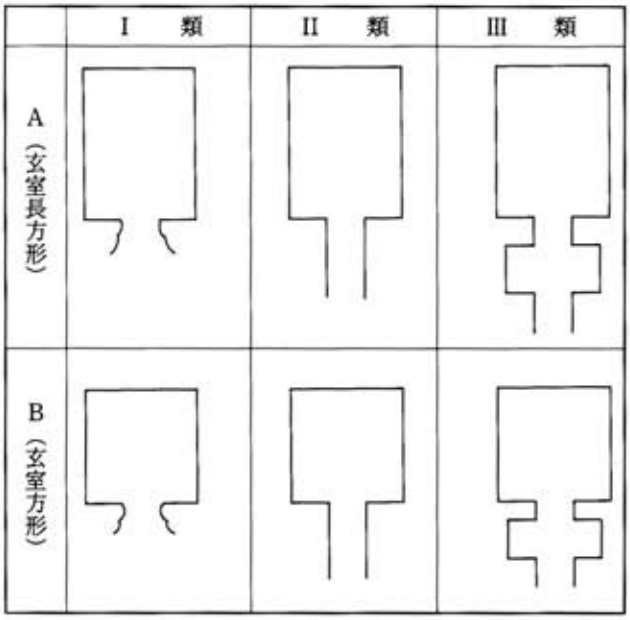
(1) 石室形態分類

石室平面形態からⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類の3分類ができる。(Fig.328)

Ⅰ類は羨道を連接することはなく、平面ハの字状、あるいは平行する前庭側壁をつくる。北九州型[(1)]の系譜上にあろう。蒲原ＢⅠ・Ⅱ類に対応できると思われる。蒲原はＡ類[(2)]を玄室比1.4～1.7でやや狭長な羽子板形として、Ａ類の系譜上に幅広になったＢ類を設定した。基本的にⅠ類は平面形長方形か方形で短い前庭側壁を連接する石室とする。

Ⅱ類は羨道部を連接した石室である。玄室平面形、羨道幅、天井高などで細分できるが羨道部を連接したものをⅡ類とする。蒲原Ｃ類に対応し、柳沢氏のいう「両袖型石室[(3)]」に相当する。佐賀平野では伊勢塚古墳石室に代表される。

Ⅲ類は複室両袖型である。玄室、前室平面形、石室断面形などにより細分可能である。蒲原Ｄ類に相当するがそれは玄室方形であり、この種の石室としては後出的なものとしている。Ⅲ類には玄室長方形も含める。



Ⅲ類（複室）の平面形式

○玄室中央幅より前室中央幅が狭い。前室方形気味。

○玄室中央幅と前室中央幅が同じ。前室平面横長方形。

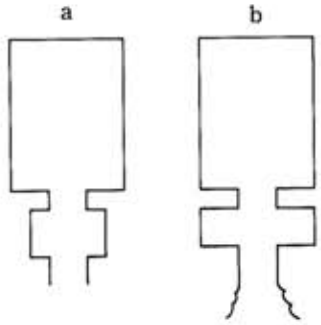


Fig.328　石室形態分類図

このⅠ、II、Ⅲ類は時期的に並行して築造されるし、同じ古墳群の中でも同時存在する。従ってこの分類で時期差を求めることはできないがその出現時期は異なると思われる。Ⅰ類は北九州型の系譜上にあり、すでに５Ｃ代には成立していたのだろう。石室平面形、上部構造などに変化がみられ７Ｃ代までつくられる。II類は柳沢氏のいう[4]「島田塚・日拝塚の出現」と関係あるのだろうが佐賀平野においてはその出現は不明である。Ⅲ類の出現は佐賀平野における複室出現時期でもある。鳥栖市田代太田古墳[5]がその出現期にあたるものであろう。

横穴式石室を大きく３分類してみたが、この３分類に共通しての石室の各属性の型式変化が見られる。この変化はそれぞれの属性がからみあって時期差となって現れる。その変化には

１．玄室平面形の変化　長方形→方形

２．石室規模の縮小化

３．無袖化　羨道幅が広くなり、袖石が退化する。

４．玄室天井高の漸次低減化　玄室天井高と羨道部天井高、前室天井高が同じ高さに近づく。

５．腰石配置の変化　　横位→縦位

６．使用石材の大形化

などがある。これらがⅠ、II、Ⅲ類それぞれにおいて変化していき、各形式のなかでの型式をつくると考える。

(2)　玄室平面形について

石室の各属性変化のうち本報告書で取り扱った古墳で玄室平面形が長方形のものと方形のものの２群がある。玄室長方形をＡ、方形をＢとして各類との組み合わせをみると

Ⅰ－Ａ類　都谷ＣＳＴ002、東田ＳＴ001

Ⅰ－Ｂ類　宮西ＳＴ001、都谷ＢＳＴ010、014、016、017、013、018、019

II－Ａ類　山浦西北方ＳＴ001

II－Ｂ類　なし

Ⅲ－Ａ類　都谷ＢＳＴ001、002、008、011、Ａ001、Ｃ 001、Ｄ 001

Ⅲ－Ｂ類　山浦新田ＳＴ001、宮西ＳＴ001、都谷Ｂ　ＳＴ003、004、012、015

となる。II類は１基のみでこれも閉塞施設が羨道中位にあり典型的なII類とはいえない。Ⅰ類、Ⅲ類でＡ、Ｂともみられ玄室方形プランへの移行時期を推定できる。

玄室方形プランについて蒲原Ｄ類（玄室方形・複室）は７Ｃ以降と位置づけられている。また柳沢氏は北部九州の大型石室についてＶ期（隼上りⅠ～隼上りⅢ）に「方形プランの玄室・広大な前室・前室幅同様の羨道、玄室高のさらなる低下に特徴づけられる石室群が出現する[6]」としている。その例として福岡県勝山町綾塚古墳、浮羽町楠名古墳、長崎県勝本町鬼の岩屋古墳、福岡県八女市岩戸山４号墳、夜須町砥上観音塚古墳石室をあげている。蒲原、柳沢氏とも玄室方形プランの出現を７Ｃ代ととらえているが、佐賀平野では伊勢塚、田代太田古墳石室は

玄室長方形であり、玄室方形プランを有する大型石室はみられなくその移行時期を明確に特定することはできない。

都谷遺跡B地区では、I類でBのみ、III類でA、Bともみられ同一古墳群内において玄室長方形と方形プランが混在して築造されることが看取できた。そこで、石室型式と築造時期をあわせてみたが長方形から方形プランへの移行時期を見いだすことはできなく、むしろ長方形、方形プランとも同時期に築造されるという結果がでた。しかし、その築造時期についてI－B類であるST014は6C第3四半期の築造で、同様に宮西遺跡のST001はI－B類、ST002はIII－B類でともに6C第3四半期の築造であり、方形プランの出現を6C後半までさかのぼらせる可能性がでてきた。

都谷遺跡B地区ではII－B類がみられないが、周辺古墳では西原遺跡[7]ST012、016古墳、六本黒木遺跡[8]ST043、神埼町山崎古墳[9]などがII-B類としてあげられる。いずれも玄室長とほぼ同じ長さの羨道を有し、築造時期は小田編年III B期である。西原遺跡、山崎遺跡の各報告者はこの方形プランについて「肥後型」[10]との関係を示唆しているのは興味深い。

「肥後型」の影響のもとにこれら方形プランが成立したとするには検討不足であるが、佐賀平野において規格をもった玄室平面方形石室が6C後半には築造されているという事実は認めざる得ないであろう。玄室平面形が長方形から方形へと同一系譜上で変化していくのか、方形プランが例えば「肥後型」のような別系譜として出現するのか今後の課題である。

(3) 複室平面形について

複室の出現時期については本遺跡群の中では明確にできなかった。しかし、都谷遺跡B地区において調査区外の尾根上方にも複室石室をもつ古墳が3基あり、尾根上方から古墳がつくられることを考えるならば調査区内でもっとも早く築造されたST014と同時期かそれより早く築造されたことがいえる。すなわち複室出現期について小田III B期以前を推定できる。

また、III類（複室）にもA（玄室長方形）とB（方形）がみられることは、I、II、III類石室に共通して玄室平面形の変化がみられることを物語るのだろう。

とくに、ここでは前室平面形に2つのタイプがあることに注目したい。都谷遺跡B、ST002に代表されるような玄室中央幅と前室中央幅が同じで、前室平面長方形のもの(b)と前室平面方形気味で玄室中央幅より前室中央幅が狭いもの(a)の2つである。これらによりIII類を細分してみると

III－A－a類 都谷BST008、A 001、D 001

III－A－b類 都谷BST001 002 011、C 001

III－B－a類 都谷BST003 004 015、宮西 ST002

III－B－b類 都谷BST012、山浦新田 ST001

となる。前室を平面横長形かあるいは方形気味につくるかは石室設計段階ですでに思考してい

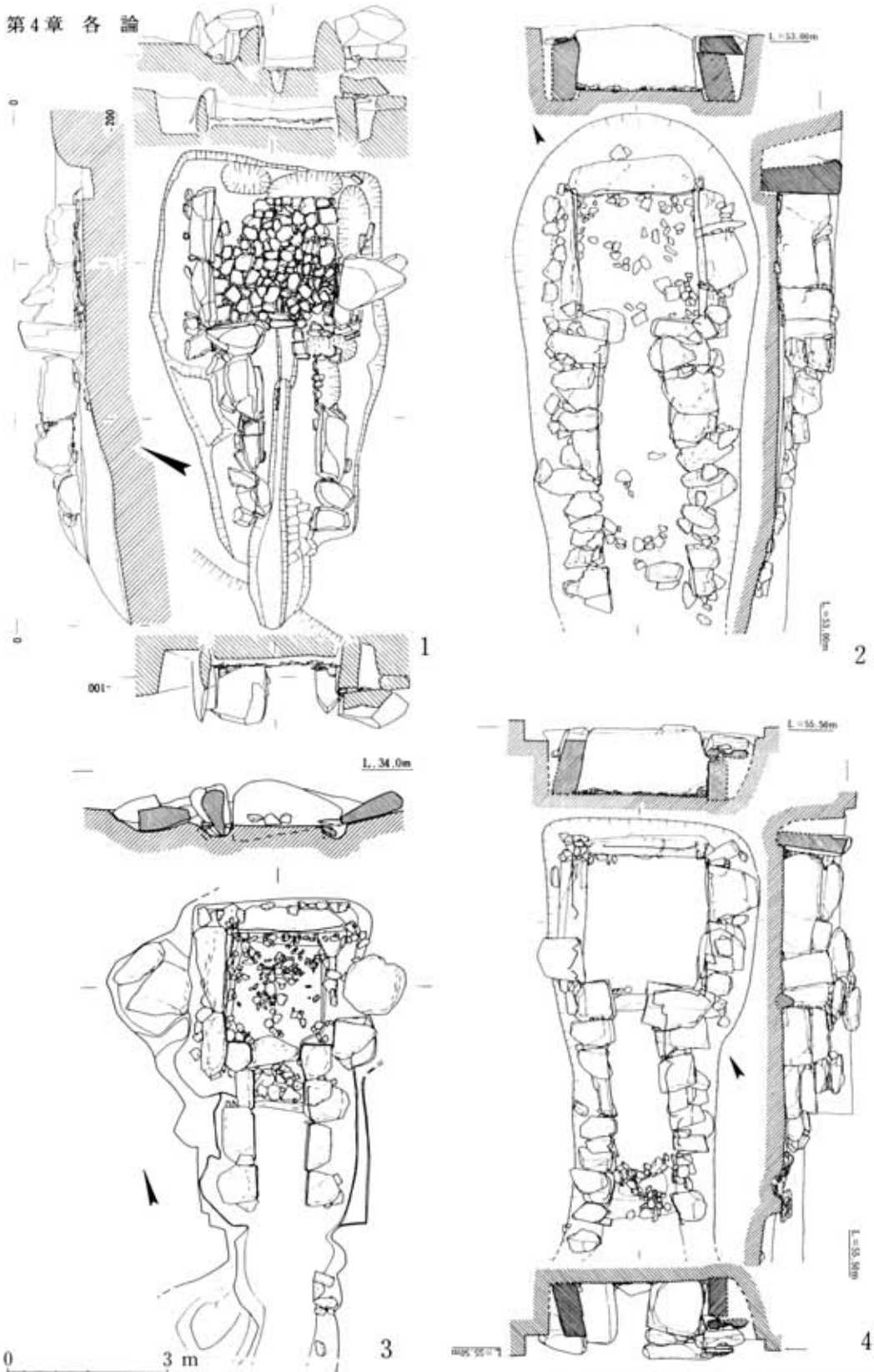


Fig.329　II－B類石室（1/120）

1．神崎町山崎古墳　　2．西原遺跡ＳＴ012
3．六本黒木遺跡ＳＴ043　4．西原遺跡ＳＴ016

たことであり、石材選別、取得、石室構築という工程をえて築造に至ったのであろう。ならばこの前室平面形による2タイプの型式設定は可能であり、系譜、地域差、時期差をもつのであろう。

周辺遺跡にこれらの類例を探してみるとaタイプは西一本杉[11]ＳＴ012、上三津栗原[12]ＳＴ001、鷹取山[13]1号墳、山浦8号墳[14]、黒土原[15]ＳＴ003、005、的小渕古墳[16]など地域を問わず一般的に見られる。それに対してbタイプは深底1、2号墳[17]、東十郎第4区4号[18]、9号、第7区3号墳など佐賀平野東部地域にみられる傾向がある。

九州における複室の出現について山崎[19]（1984）は熊本県玉名市伝佐山・塚坊主古墳を初現期の例としてあげた。さらに筑前では6Ｃ中葉頃、羨道部が未発達な複室構造を有する横穴式石室が現れるとして、その例として福岡市東光寺剣塚古墳、那珂川町観音山古墳群中原支群1号墳をあげている。柳沢[20]（1990）も初期の複室墳を伝佐山・塚坊主古墳にもとめその時期をIII期後半とした。小田[21]（1968）は肥前・肥後では6世紀前半代に比定される須恵器第II様式の段階に複室の形成が現れ、筑前、筑後地域では第II様式あるいはおそくとも第III様式の出現までには形成されはじめたとしている。また、安承周[22]（1988）は複室構造を扶余陵山里（百済）の東下塚に起源をもとめ九州の初期複室墳として福岡県王塚古墳、福岡県庄屋塚古墳、熊本県大坊古墳をあげている。佐賀平野の初期複室墳については明確に位置づけられるものはなく6Ｃ中葉築造とされる鳥栖市田代太田古墳が古いものと考えられている。

こういった複室墳の出現過程をみると出現期の複室構造をもつ石室の前室は未発達であることが看取できる。そこで前述したａ・ｂタイプに時期差をもとめるならば、ａタイプが先出ということができる。ｂタイプは佐賀平野でも東部地域を中心としてみられるところから、ｂタイプ石室の成立には他地方からの影響が十分考えられるのである。

(4) おわりに

横穴式石室をＩ・II・III類に分類し、各類に共通した石室変化のうち玄室平面形と複室墳前室平面形について考えてみた。

玄室方形プランは佐賀平野において6Ｃ後半には出現しており、それぞれの古墳群において規格をもって築造されているようである。Fig.149で玄室法量図を示したが都谷遺跡の場合、玄室規模2×2ｍがその目安となるであろう。

複室墳については前室平面形が横長形で玄室中央幅と前室中央幅が同じであるものが佐賀平野東部地域を中心として築造されている。これはａタイプからｂタイプへの型式変化でなく、ｂタイプそのものが地域性をもつものであろう。

古墳時代後期は律令制萌芽期である。都谷遺跡にみられるように極めて限定された墓域のなかに古墳を築造しているという事実は、外からの規制によるものであろう。その中に築造され

る古墳石室をみても規格性を見いだすことができる。その規格は時間、地域、系譜をあらわすものでさらにいえば石室築造にかかわる工人集団まで想定できるものであろう。各類の細分など今後の石室形態研究の課題としたい。

註

1．森下浩行「日本における横穴式石室の出現とその系譜」『古代学研究111』1986
　森下浩行「九州型横穴式石室考」『古代学研究115』1987
2．蒲原宏行編『金立開拓遺跡』佐賀県教育委員会　1984
3．柳沢一男「北部九州における初期横穴式石室の展開」『九州考古学の諸問題』1975
4．註3文献
5．保存科学研究会編『田代太田古墳調査及び保存工事報告書』1976
6．柳沢一男「横穴式石室からみた地域間動向・近畿と九州」『横穴式石室を考える』
　帝塚山考古学研究所　1990
7．田平徳栄「西原遺跡」『西原遺跡』佐賀県教育委員会　1983
8．西田和巳他「六本黒木遺跡」『大門西遺跡』佐賀県教育委員会　1980
9．中島直幸編『山崎古墳』神崎町教育委員会　1979
10．柳沢一男「肥後型横穴式石室考」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攻』1980
11．松尾吉高「西一本杉遺跡」『西原遺跡』佐賀県教育委員会　1983
12．種浦修「上三津栗原遺跡」『西原遺跡』佐賀県教育委員会　1983
13．田平徳栄『鷹取山山麓遺跡』中原町教育委員会1978
14．佐賀県教育委員会『鳥栖市山浦古墳群』　1973
15．福田良彦編『黒土原遺跡』佐賀市教育委員会　1987
16．緒方裕次郎『本告牟田遺跡・的小渕遺跡』神埼町遺跡　1986
17．藤瀬禎博『新農業構造改善事業関係埋蔵文化財調査報告書II』鳥栖市教育委員会　1984
18．木下之治『東十郎古墳群』佐賀県教育委員会　1966
19．山崎信二「横穴式石室構造の地域別比較研究―中国・四国編―」
　文部省科学研究費奨励研究A　1984
20．註6文献
21．小田富士雄「横穴式石室古墳における複室構造の形成」『史淵』　1968
22．安承周「百済石室墳とその墓制の日本伝播に関する研究」『古文化談叢20』　1988

〈付論〉　鳥栖市都谷遺跡出土の耳環成分分析について

佐賀県工業試験場機械金属部
臼井一郎

資料一覧表

試料No.	遺構名	Fig.-図番号	県遺物登録番号	成分分析結果	試料No.	遺構名	Fig.-図番号	県遺物登録番号	成分分析結果
1	MKD-B ST004	46-237	86-465	金主体に銀混入	6	MKD-C ST002	136-859	86-4803	銀
2	MKD-B ST001	23-990	86-462	銅	7	MKD-B ST004	46-236	86-464-1	銀
3	MKD-B ST016	110-620	86-4044	銀	8	〃	46-236	86-464-2	銅
4	MKD-B ST004	46-238	86-466	銀	9	MKD-A ST001	13-38	86-459	金と銀が混合
5	MKD-C ST002	136-860	86-4802	銀	10	MKD-B ST017	122-717	86-4918	金と銀が混合

成分分析結果

古墳出土の耳環等を、ＥＰＭＡ（電子線マイクロアナライザー）を用いて、成分分析した結果を述べる。

最初に、ＥＰＭＡの測定原理を簡単に説明すると、ＥＰＭＡは分析しようとする金属、セラミックス、鉱物、木材、ガラス等の試料に電子線の束を照射し、発生する二次電子、反射電子、吸収電子、特性Ｘ線等を測定・解析することにより、試料の電子顕微鏡像（40倍～36万倍）の観察・撮影、原子番号５番のＢ（ボロン）から92番のＵ（ウラン）までの定性・定量分析（成分分析）等を、分析試料を壊さずに、行える装置である。

分析結果のチャートをNo.１～10に示す。ここで、チャート中のＥＬの列は元素記号及び特性Ｘ線の種類を表し、例えば左上のＹ－１はイットリウム－１線である。COUNT（カウント）の例は、１秒あたりの特性Ｘ線の数を表し、INTENSITY の列は、それを識別しやすいように記号を用いて図式化したものである。★の印はバックグラウンドと呼ばれるもので、試料中の成分として意味があるのは、＋の印で表された部分である。

No.１を見ると、ＡＵ（金）及びＡＧ（銀）のカウント数及び＋の印が多く、この試料は金主体のものに銀が混じったものと考えられる。なおＡＬ（アルミニウム）、ＴＩ（チタン）、Ｋ（カリ）等にも＋の印が出ているが、これらは出土物に付着している土・砂の成分と考えられる。

No.２を見ると、ＣＵ（銅）のカウント数及び＋の印が多く、この試料はほとんど銅からなると考えられる。なお、ＯＳ（オスニウム）もカウント数及び＋の印が多いが、これは銅の特性Ｘ線の副次線によるものでオスニウムは実際には存在しないと考えられる。他の成分はNo.１と同様に土・砂の成分もしくは微量成分である。

№3を見ると、ＡＧ（銀）のカウント数及び＋の印が多く、この試料の主成分は銀と考えられる。また、ＣＬ（塩素）のカウント数及び＋の印も多いが、塩素分が銀と化合して塩化第１水銀あるいは塩化第２水銀の形で存在していると考えられる。

№4を見ると、ＡＧ（銀）のカウント数及び＋の印が多く、この試料の主成分は銀と考えられる。また、Ｓ（イオウ）のカウント数及び＋の印も多いが、イオウ分が単体で混入もしくは付着、あるいは銀と化合して硫化第２水銀の形で存在していると考えられる。

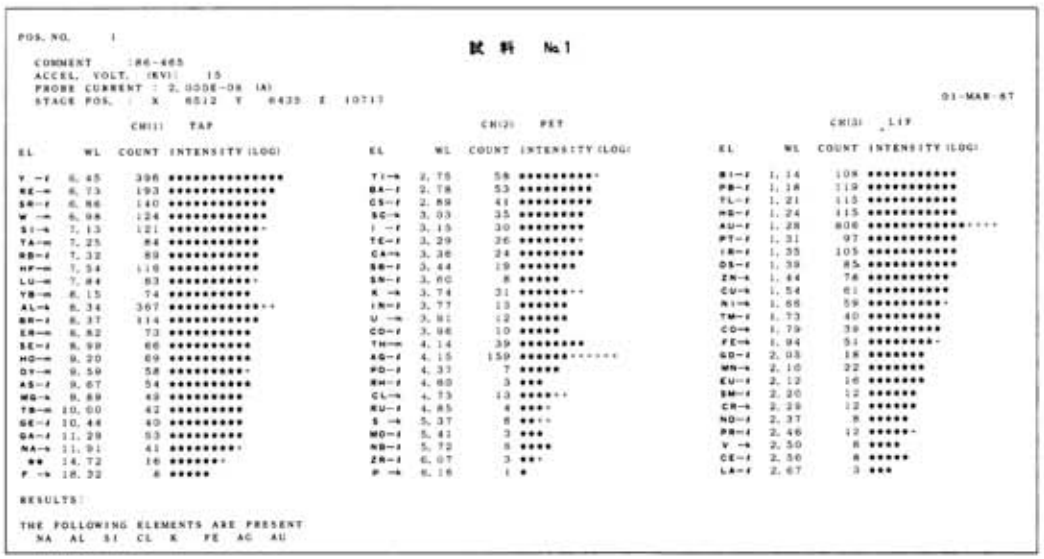
№5、6、7を見ると、内容はほとんど№4と同様である。

№8を見ると、ＣＵ（銅）のカウント数及び＋の印が多く、この試料の主成分は銅と考えられる。また、ＦＥ（鉄）もある程度入っている。なおＡＬ（アルミニウム）、ＳＩ（ケイ素）、ＭＧ（マグネシウム）等の成分は土・砂の成分である。

№9を見ると、ＡＵ（金）およびＡＧ（銀）のカウント数及び＋の印が多く、この試料は金と銀が混じったものと考えられる。

№10を見ると、№9と同様な分析結果で、この試料も金と銀が混じったものと考えられる。

なお、ＥＰＭＡの分析領域は、試料表面の数十ミクロン（ミクロンは千分の１ミリ）程度の限られた範囲なので、分析結果を検討する際には、この点を留意しなければならない。出土物の試料内部全体を分析するには、切断等により内部の断面を出す必要がある。



POS. NO.　1

試 料　№1

COMMENT　:86-465
ACCEL. VOLT.　(KV):　15
PROBE CURRENT : 2.000E-08 (A)
STAGE POS.　: X　6512　Y　6435　Z　10717

01-MAR-87

CH(1)　TAP

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
V →I	6.45	396	**********
RE→	6.73	193	**********
SR→I	6.86	140	**********
W →I	6.96	124	**********
SI→	7.13	121	**********·
YA→I	7.25	84	**********
RB→I	7.32	89	**********
HF→I	7.54	116	**********
LU→I	7.84	83	**********·
YB→I	8.15	74	**********
AL→	8.34	367	**********··
BR→I	8.37	114	**********
ER→I	8.62	73	**********
SE→I	8.99	66	**********
HG→I	9.20	69	**********
DY→I	9.59	58	**********·
AS→I	9.67	54	**********
MG→	9.89	49	**********
TB→I	10.00	42	**********
GE→I	10.44	40	**********
GA→I	11.28	53	**********
NA→	11.91	41	**********·
**	14.72	16	*******·
F →I	16.32	6	*****

CH(2)　PET

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
TI→	2.75	58	**********·
BA→I	2.78	53	**********
CS→I	2.89	41	**********
SC→	3.03	35	*********
I →I	3.15	30	*********
TE→I	3.29	26	********·
CA→	3.36	24	*********
SB→I	3.44	19	********
SN→I	3.60	8	*****
K →I	3.74	31	********··
IN→I	3.77	13	******
U →I	3.91	12	******
CO→I	3.96	10	*****
TH→	4.14	39	*********
AG→I	4.15	159	********·····*
PD→I	4.33	7	*****
RH→I	4.60	3	***
CL→	4.73	13	******··
RU→I	4.85	4	***·
S →I	5.37	8	****·
MO→I	5.41	3	***
NB→I	5.72	8	****
ZR→I	6.07	3	**·
P →I	6.16	1	*

CH(3)　LIF

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
BI→I	1.14	108	**********
PB→I	1.18	119	**********
TL→I	1.21	115	**********
HG→I	1.24	115	**********
AU→I	1.28	806	**********·····
PT→I	1.31	97	**********
IR→I	1.35	105	**********
OS→I	1.39	85	**********·
ZN→	1.44	74	**********
CU→	1.54	61	**********·
NI→	1.66	59	**********·
TM→I	1.73	40	**********
CO→	1.79	39	**********
FE→	1.94	51	*********·
GD→I	2.03	18	********
MN→	2.10	22	********
EU→I	2.12	16	********
SM→I	2.20	12	*******
CR→	2.29	12	*******
ND→I	2.37	9	*****
PR→I	2.46	12	******·
V →I	2.50	8	*****
CE→I	2.50	8	*****
LA→I	2.67	3	***

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
NA　AL　SI　CL　K　FE　AG　AU

POS. NO. 2

試 料 No.2

COMMENT :86-462
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 2.000E-08 (A)
STAGE POS. : X 5126 Y 35059 Z 11233

01-MAR-87

CH(1) TAP

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
Y →I	6.45	92	**********
RE→	6.73	49	*********
SR→I	6.86	34	********
W →	6.98	30	********
SI→	7.13	25	********
TA→	7.25	33	*******
RB→I	7.32	23	*******
HF→	7.54	19	*******
LU→	7.84	17	*******
YB→	8.15	22	*******
AL→	8.34	75	*******···
BR→I	8.37	36	*********·
ER→	8.82	13	******
SE→I	8.99	10	*******
HO→	9.20	20	*******·
DY→	9.59	16	*******
AS→I	9.67	16	******··
MG→	9.88	11	*****·
TB→	10.00	11	*****·
GE→I	10.44	10	*****
GA→I	11.29	9	*****
NA→	11.91	12	*****·
**	14.72	4	***·
F →	18.32	2	**

CH(2) PET

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
TI→	2.75	18	*******
BA→I	2.78	22	*******·
CS→I	2.89	14	*******
SC→	3.03	7	******
I →I	3.15	11	******·
TE→I	3.29	9	*****
CA→	3.36	9	****·
SB→I	3.44	7	****·
SN→I	3.60	3	***
K →	3.74	7	****·
IN→I	3.77	3	***
U →	3.91	3	***
CD→I	3.96	2	**
TH→	4.14	4	****·
AG→I	4.15	6	**···
PD→I	4.37	1	*
RH→I	4.60	1	*
CL→	4.73	3	*···
RU→I	4.85	0	
S →	5.37	2	··
MO→I	5.41	2	··
NB→I	5.73	1	*
ZR→I	6.07	1	·
P →	6.16	4	····

CH(3) LIF

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
BI→I	1.14	18	*******
PB→I	1.18	17	*******
TL→I	1.21	18	*******
HG→I	1.24	16	*******
AU→I	1.28	16	******·
PT→I	1.31	12	******
IR→I	1.35	14	******
OS→I	1.39	237	*******·····
ZN→	1.44	14	******
CU→	1.54	1567	**********·····
NI→	1.66	8	*****
TM→I	1.73	12	*****+
CO→	1.79	10	*****
FE→	1.94	11	*****··
GD→I	2.05	4	****
MN→	2.10	4	****·
EU→I	2.12	4	****
SM→I	2.20	3	***
CR→	2.29	3	***
ND→I	2.37	2	**
PR→I	2.46	1	*
V →	2.50	0	
CE→I	2.56	3	*··
LA→I	2.67	1	·

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
AL P CU OS

POS. NO. 3

試 料 No.3

COMMENT :86-4044
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 2.000E-08 (A)
STAGE POS. : X, 428383 Y 42080 Z 10976

01-MAR-87

CH(1) TAP

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
Y →I	6.45	207	**********
RE→	6.73	113	**********
SR→I	6.86	92	**********
W →	6.98	72	**********
SI→	7.13	60	**********
TA→	7.25	46	**********
RB→I	7.32	45	**********
HF→	7.54	55	**********·
LU→	7.84	83	**********··
YB→	8.15	22	**********·
AL→	8.34	105	**********
BR→I	8.37	94	**********
ER→	8.82	39	**********
SE→I	8.99	34	*********
HO→	9.20	36	**********
DY→	9.59	31	*********
AS→I	9.67	25	*********
MG→	9.88	24	*********
TB→	10.00	23	*********
GE→I	10.44	23	********
GA→I	11.29	22	********
NA→	11.91	13	*******
**	14.72	11	******·
F →	18.32	4	****

CH(2) PET

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
TI→	2.75	42	**********
BA→I	2.78	33	*********
CS→I	2.89	36	*********·
SC→	3.03	29	*********
I →I	3.15	23	********
TE→I	3.29	19	********
CA→	3.36	12	*******
SB→I	3.44	14	*******
SN→I	3.60	16	********·
K →	3.74	20	********
IN→I	3.77	17	********
U →	3.91	43	**********
CD→I	3.96	25	*********
TH→	4.14	281	**********
AG→I	4.15	2558	**********·····
PD→I	4.37	7	******
RH→I	4.60	8	*****·
CL→	4.73	316	********·····
RU→I	4.85	5	*****
S →	5.37	12	*****··
MO→I	5.41	2	··
NB→I	5.73	3	···
ZR→I	6.07	2	*·
P →	6.16	1	·

CH(3) LIF

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
BI→I	1.14	78	**********
PB→I	1.18	76	**********
TL→I	1.21	68	**********
HG→I	1.24	71	**********
AU→I	1.28	67	**********
PT→I	1.31	65	**********·
IR→I	1.35	54	**********
OS→I	1.39	60	**********·
ZN→	1.44	57	**********
CU→	1.54	51	**********
NI→	1.66	32	*********
TM→I	1.73	30	*********
CO→	1.79	21	********
FE→	1.94	17	*******·
GD→I	2.05	13	*******
MN→	2.10	10	******
EU→I	2.12	11	*******
SM→I	2.20	8	******
CR→	2.29	8	******
ND→I	2.37	5	*****
PR→I	2.46	7	******
V →	2.50	5	*****
CE→I	2.56	5	*****
LA→I	2.67	3	****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
CL NB AG LU

POS. NO. 4

試 料 No.4

COMMENT :86-486
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 2.000E-08 (A)
STAGE POS. : X 40486 Y 18572 Z 10948

01-MAR-87

CH(1) TAP

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
Y →I	6.45	134	**********
RE→	6.73	101	**********
SR→I	6.86	75	**********
W →	6.98	63	**********
SI→	7.13	49	*********
TA→	7.25	42	*********
RB→I	7.32	38	*********
HF→	7.54	42	*********
LU→	7.84	78	**********·
YB→	8.15	58	**********·
AL→	8.34	158	**********+
BR→I	8.37	103	**********
ER→	8.82	40	*********·
SE→I	8.99	37	*********
HO→	9.20	31	*********
DY→	9.59	29	********·
AS→I	9.67	27	********
MG→	9.89	34	********
TB→	10.00	31	********
GE→I	10.44	28	********
GA→I	11.29	19	*******
NA→	11.91	29	*******··
**	14.72	8	****·
F →	18.32	3	**·

CH(2) PET

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
TI→	2.75	44	*********
BA→I	2.78	28	*********
CS→I	2.89	31	*********
SC→	3.03	26	*********
I →I	3.15	40	*********··
TE→I	3.29	17	********
CA→	3.36	24	********··
SB→I	3.44	14	*******
SN→I	3.60	12	*******
K →	3.74	45	*********··
IN→I	3.77	15	*******
U →	3.91	33	*********
CD→I	3.96	23	********
TH→	4.14	235	**********
AG→I	4.15	1969	**********·····
PD→I	4.37	6	*****
RH→I	4.60	7	*****·
CL→	4.73	34	********·
RU→I	4.85	3	***
S →	5.37	431	***********·····
MO→I	5.41	5	*****
NB→I	5.73	3	***
ZR→I	6.07	1	·
P →	6.16	2	*·

CH(3) LIF

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
BI→I	1.14	63	**********
PB→I	1.18	59	**********
TL→I	1.21	56	**********·
HG→I	1.24	58	**********·
AU→I	1.28	63	**********·
PT→I	1.31	64	**********
IR→I	1.35	54	**********
OS→I	1.39	50	*********
ZN→	1.44	43	*********
CU→	1.54	40	*********
NI→	1.66	34	*********
TM→I	1.73	22	********
CO→	1.79	20	********
FE→	1.94	18	********
GD→I	2.05	12	*******
MN→	2.10	12	*******
EU→I	2.12	11	*******·
SM→I	2.20	7	******
CR→	2.29	7	******
ND→I	2.37	5	*****
PR→I	2.46	6	*****
V →	2.50	3	***
CE→I	2.56	5	*··
LA→I	2.67	4	****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
NA AL S CL K CA AG I LU

POS. NO. 5

試 料 №5

COMMENT : (86-4802
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 2.000E-08 (A)
STAGE POS. : X 64639 Y 12168 Z 11480

01-MAR-87

CH(1) TAP

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
Y -ℓ	6.45	149	*************
RE-m	6.73	95	************
SR-ℓ	6.86	71	***********
W -m	6.98	58	***********
SI-k	7.13	50	**********+
TA-m	7.25	45	**********
RB-ℓ	7.32	51	**********
HF-m	7.54	48	**********
LU-m	7.84	76	**********+
YB-m	8.15	41	**********
AL-k	8.34	142	************+
BR-ℓ	8.37	74	***********
ER-m	8.82	37	*********+
SE-ℓ	8.99	40	**********
HO-m	9.20	27	*********
DY-m	9.59	28	*********
AS-ℓ	9.67	24	*********
MG-k	9.89	28	*********
TB-m	10.00	23	********
GE-ℓ	10.44	24	********+
GA-ℓ	11.29	16	******+
NA-k	11.91	14	******
**	14.72	5	****
P -k	18.32	3	***

CH(2) PET

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
TI-k	2.75	51	**********
BA-ℓ	2.78	40	**********
CS-ℓ	2.89	36	**********
SC-k	3.03	31	*********
I -ℓ	3.15	43	********++
TE-ℓ	3.29	22	********
CA-k	3.36	23	********
SB-ℓ	3.44	14	*******
SN-ℓ	3.60	22	********
K -k	3.74	31	*********
IN-ℓ	3.77	19	********
U -m	3.91	37	**********
CD-ℓ	3.96	30	*********
TH-m	4.14	286	****************
AG-ℓ	4.15	2638	*************+++++++++
PD-ℓ	4.37	6	****
RH-ℓ	4.60	4	**++
CL-k	4.73	22	********
RU-ℓ	4.85	4	****
S -k	5.37	86	****+++++++
MO-ℓ	5.41	6	****
NB-ℓ	5.72	3	*++
ZR-ℓ	6.07	1	*
P -k	6.16	3	***

CH(3) LIF

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
BI-ℓ	1.14	76	***********
PB-ℓ	1.18	75	***********
TL-ℓ	1.21	73	***********
HG-ℓ	1.24	76	***********
AU-ℓ	1.28	67	***********
PT-ℓ	1.31	59	***********
IR-ℓ	1.35	61	**********+
OS-ℓ	1.39	53	**********
ZN-k	1.44	51	**********
CU-k	1.54	43	**********
NI-k	1.66	37	********++
TM-ℓ	1.73	30	*********
CO-k	1.79	21	********
FE-k	1.94	28	********+
GD-ℓ	2.05	9	*****
MN-k	2.10	12	*****+
EU-ℓ	2.12	10	*****
SM-ℓ	2.20	10	*****
CR-k	2.29	10	*****
ND-ℓ	2.37	5	****
PR-ℓ	2.46	4	****
V -k	2.50	5	****
CE-ℓ	2.56	6	**++
LA-ℓ	2.67	2	**

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
AL S NI AG I LU

POS. NO. 6

試 料 №6

COMMENT : (86-4803
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 2.001E-08 (A)
STAGE POS. : X 67094 Y 15583 Z 11089

01-MAR-87

CH(1) TAP

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
Y -ℓ	6.45	205	**************
RE-m	6.73	119	************
SR-ℓ	6.86	86	************
W -m	6.98	70	***********
SI-k	7.13	66	**********+
TA-m	7.25	53	**********
RB-ℓ	7.32	49	**********
HF-m	7.54	45	**********
LU-m	7.84	97	***********+
YB-m	8.15	63	***********
AL-k	8.34	220	*************+
BR-ℓ	8.37	116	************
ER-m	8.82	45	**********
SE-ℓ	8.99	47	**********
HO-m	9.20	35	*********
DY-m	9.59	34	*********
AS-ℓ	9.67	32	*********
MG-k	9.89	42	*********+
TB-m	10.00	28	*********
GE-ℓ	10.44	25	*********
GA-ℓ	11.29	21	********
NA-k	11.91	23	********
**	14.72	7	*****
P -k	18.32	4	****

CH(2) PET

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
TI-k	2.75	46	**********
BA-ℓ	2.78	42	**********
CS-ℓ	2.89	35	*********
SC-k	3.03	28	*********
I -ℓ	3.15	25	*********
TE-ℓ	3.29	20	********
CA-k	3.36	31	*******++
SB-ℓ	3.44	16	*******+
SN-ℓ	3.60	15	*******
K -k	3.74	38	********++
IN-ℓ	3.77	18	********
U -m	3.91	46	**********
CD-ℓ	3.96	29	*********
TH-m	4.14	296	****************
AG-ℓ	4.15	2158	*************++++++++
PD-ℓ	4.37	8	*****
RH-ℓ	4.60	5	****
CL-k	4.73	22	********
RU-ℓ	4.85	4	****
S -k	5.37	61	*+++++++++
MO-ℓ	5.41	1	*
NB-ℓ	5.72	2	*+
ZR-ℓ	6.07	2	*+
P -k	6.16	1	+

CH(3) LIF

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
BI-ℓ	1.14	66	***********
PB-ℓ	1.18	73	***********
TL-ℓ	1.21	65	***********
HG-ℓ	1.24	61	***********
AU-ℓ	1.28	69	***********
PT-ℓ	1.31	60	***********
IR-ℓ	1.35	59	***********
OS-ℓ	1.39	60	***********
ZN-k	1.44	51	**********
CU-k	1.54	46	**********
NI-k	1.66	31	*********
TM-ℓ	1.73	30	*********
CO-k	1.79	25	*********
FE-k	1.94	31	********+
GD-ℓ	2.05	12	******
MN-k	2.10	14	*****+
EU-ℓ	2.12	17	********
SM-ℓ	2.20	11	*****+
CR-k	2.29	8	*****
ND-ℓ	2.37	7	*****
PR-ℓ	2.46	7	****+
V -k	2.50	5	***+
CE-ℓ	2.56	3	***
LA-ℓ	2.67	4	****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
AL S K CA AG LU

POS. NO. 7

試 料 №7

COMMENT : (86-461)
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 2.010E-08 (A)
STAGE POS. : X 19494 Y 5894 Z 10960

01-MAR-87

CH(1) TAP

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
Y -ℓ	6.45	133	*************
RE-m	6.73	92	************
SR-ℓ	6.86	88	***********
W -m	6.98	83	***********
SI-k	7.13	147	***********++
TA-m	7.25	52	**********
RB-ℓ	7.32	51	**********
HF-m	7.54	61	**********+
LU-m	7.84	85	**********++
YB-m	8.15	49	**********
AL-k	8.34	264	*************+
BR-ℓ	8.37	88	************
ER-m	8.82	44	*********+
SE-ℓ	8.99	29	*********
HO-m	9.20	35	*********
DY-m	9.59	30	*********
AS-ℓ	9.67	21	********
MG-k	9.89	35	*********
TB-m	10.00	21	********
GE-ℓ	10.44	24	********+
GA-ℓ	11.29	21	********
NA-k	11.91	31	********+
**	14.72	7	****+
P -k	18.32	3	***

CH(2) PET

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
TI-k	2.75	48	**********
BA-ℓ	2.78	37	**********
CS-ℓ	2.89	29	*********
SC-k	3.03	24	*********
I -ℓ	3.15	26	*********
TE-ℓ	3.29	25	*********
CA-k	3.36	23	********
SB-ℓ	3.44	13	*******
SN-ℓ	3.60	14	*******
K -k	3.74	49	*******+++
IN-ℓ	3.77	18	*******+
U -m	3.91	40	**********
CD-ℓ	3.96	41	**********
TH-m	4.14	301	****************
AG-ℓ	4.15	1938	**************++++++
PD-ℓ	4.37	9	*****
RH-ℓ	4.60	6	***+
CL-k	4.73	20	********
RU-ℓ	4.85	5	****
S -k	5.37	31	****+++
MO-ℓ	5.41	1	*
NB-ℓ	5.72	3	**+
ZR-ℓ	6.07	1	*
P -k	6.16	2	++

CH(3) LIF

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
BI-ℓ	1.14	63	***********
PB-ℓ	1.18	60	***********
TL-ℓ	1.21	70	***********
HG-ℓ	1.24	66	***********
AU-ℓ	1.28	60	***********
PT-ℓ	1.31	57	**********+
IR-ℓ	1.35	59	**********+
OS-ℓ	1.39	64	***********
ZN-k	1.44	59	**********+
CU-k	1.54	77	**********+
NI-k	1.66	35	*********
TM-ℓ	1.73	26	*********
CO-k	1.79	27	*********
FE-k	1.94	44	********++
GD-ℓ	2.05	10	*****
MN-k	2.10	12	******
EU-ℓ	2.12	11	******
SM-ℓ	2.20	12	******
CR-k	2.29	7	*****
ND-ℓ	2.37	5	****
PR-ℓ	2.46	5	****
V -k	2.50	8	*****
CE-ℓ	2.56	6	****
LA-ℓ	2.67	4	****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
AL SI S K FE CU AG LU

POS. NO. 8

試 料 No.8

COMMENT :86-464-2
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 2.010E-08 (A)
STAGE POS. : X 14980 Y 29502 Z 11317

01-MAR-87

CH(1) TAP

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
Y -I	6.45	40	*********
RE-M	6.73	33	********
SR-I	6.86	22	********
W -M	6.98	28	********
SI-M	7.13	362	**************
TA-M	7.25	14	******
RB-I	7.32	16	*******
HF-M	7.54	17	*******
LU-M	7.84	18	*******
YB-M	8.15	17	*******
AL-M	8.34	792	*************
BR-I	8.37	222	************
ER-M	8.82	17	*******
SE-I	8.99	13	******
HO-M	9.20	13	******
DY-M	9.59	10	*****
AS-I	9.67	16	*******
MG-M	9.89	38	******
TB-M	10.00	9	*****
GE-I	10.44	8	****
GA-I	11.29	8	*****
NA-M	11.91	7	*****
**	14.72	3	***
F -M	18.32	1	*

CH(2) PET

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
TI-M	2.75	50	********
BA-I	2.78	26	********
CS-I	2.89	18	*******
SC-M	3.03	13	******
I -I	3.15	10	*****
TE-I	3.29	8	*****
CA-M	3.36	19	*******
SB-I	3.44	8	****
SN-I	3.60	5	****
K -M	3.74	31	******
IN-I	3.77	8	****
U -M	3.91	3	***
CD-I	3.96	4	****
TH-M	4.14	2	**
AG-I	4.15	4	****
PD-I	4.37	3	***
RH-I	4.60	1	*
CL-M	4.73	5	*****
RU-I	4.85	1	*
S -M	5.37	3	***
MO-I	5.41	1	*
NB-I	5.72	1	*
ZR-I	6.07	0	
P -M	6.16	4	****

CH(3) LIF

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
BI-I	1.14	18	*******
PB-I	1.18	18	*******
TL-I	1.21	14	******
HG-I	1.24	14	******
AU-I	1.28	15	******
PT-I	1.31	15	******
IR-I	1.35	13	******
OS-I	1.39	171	********
ZN-M	1.44	18	*******
CU-M	1.54	840	**********
NI-M	1.66	8	*****
TM-I	1.73	9	*****
CO-M	1.79	8	*****
FE-M	1.94	65	********
GD-I	2.05	2	**
MN-M	2.10	4	****
EU-I	2.12	5	*****
SM-I	2.20	2	**
CR-M	2.29	3	***
ND-I	2.37	2	**
PR-I	2.46	0	
V -M	2.50	2	**
CE-I	2.56	2	**
LA-I	2.67	0	

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
MG AL SI CL K TI FE CU BR OS

POS. NO. 9

試 料 No.9

COMMENT :86-459
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 2.010E-08 (A)
STAGE POS. : X 21237 Y 48373 Z 10302

01-MAR-87

CH(1) TAP

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
Y -I	6.45	265	**************
RE-M	6.73	157	*************
SR-I	6.86	114	************
W -M	6.98	113	************
SI-M	7.13	89	************
TA-M	7.25	35	**********
RB-I	7.32	77	**********
HF-M	7.54	88	**********
LU-M	7.84	76	**********
YB-M	8.15	85	**********
AL-M	8.34	145	**********
BR-I	8.37	77	**********
ER-M	8.82	56	**********
SE-I	8.99	52	*********
HO-M	9.20	53	*********
DY-M	9.59	48	*********
AS-I	9.67	47	*********
MG-M	9.89	39	*********
TB-M	10.00	33	********
GE-I	10.44	36	*********
GA-I	11.29	62	**********
NA-M	11.91	23	*******
**	14.72	9	*****
F -M	18.32	8	*****

CH(2) PET

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
TI-M	2.75	69	**********
BA-I	2.78	55	**********
CS-I	2.89	46	*********
SC-M	3.03	34	********
I -I	3.15	33	********
TE-I	3.29	22	********
CA-M	3.36	23	********
SB-I	3.44	21	********
SN-I	3.60	18	********
K -M	3.74	19	********
IN-I	3.77	13	******
U -M	3.91	24	******
CD-I	3.96	16	*******
TH-M	4.14	124	************
AG-I	4.15	670	**************
PD-I	4.37	3	***
RH-I	4.60	6	****
CL-M	4.73	12	******
RU-I	4.85	6	****
S -M	5.37	13	*****
MO-I	5.41	4	****
NB-I	5.72	3	***
ZR-I	6.07	2	**
P -M	6.16	2	**

CH(3) LIF

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
BI-I	1.14	106	**********
PB-I	1.18	98	**********
TL-I	1.21	88	**********
HG-I	1.24	153	**********
AU-I	1.28	459	**********
PT-I	1.31	93	**********
IR-I	1.35	79	**********
OS-I	1.39	81	**********
ZN-M	1.44	88	**********
CU-M	1.54	75	**********
NI-M	1.66	42	*********
TM-I	1.73	41	*********
CO-M	1.79	33	********
FE-M	1.94	22	********
GD-I	2.05	22	********
MN-M	2.10	21	********
EU-I	2.12	18	********
SM-I	2.20	16	*******
CR-M	2.29	13	******
ND-I	2.37	8	*****
PR-I	2.46	10	*****
V -M	2.50	8	*****
CE-I	2.56	8	****
LA-I	2.67	4	****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
AU AG SU HG

POS. NO. 10

試 料 No.10

COMMENT :86-4918
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 2.000E-08 (A)
STAGE POS. : X 45920 Y 23700 Z 11022

01-MAR-87

CH(1) TAP

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
Y -I	6.45	221	**************
RE-M	6.73	135	*************
SR-I	6.86	97	************
W -M	6.98	87	************
SI-M	7.13	95	**********
TA-M	7.25	62	**********
RB-I	7.32	62	**********
HF-M	7.54	89	**********
LU-M	7.84	89	**********
YB-M	8.15	57	**********
AL-M	8.34	200	**********
BR-I	8.37	93	**********
ER-M	8.82	49	*********
SE-I	8.99	49	*********
HO-M	9.20	47	*********
DY-M	9.59	43	*********
AS-I	9.67	43	*********
MG-M	9.89	34	********
TB-M	10.00	34	********
GE-I	10.44	28	********
GA-I	11.29	71	**********
NA-M	11.91	22	*******
**	14.72	5	****
F -M	18.32	2	**

CH(2) PET

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
TI-M	2.75	66	*********
BA-I	2.78	54	*********
CS-I	2.89	44	*********
SC-M	3.03	39	********
I -I	3.15	32	********
TE-I	3.29	28	********
CA-M	3.36	26	********
SB-I	3.44	21	********
SN-I	3.60	16	********
K -M	3.74	26	********
IN-I	3.77	14	******
U -M	3.91	26	********
CD-I	3.96	16	********
TH-M	4.14	107	**********
AG-I	4.15	560	************
PD-I	4.37	44	**********
RH-I	4.60	5	****
CL-M	4.73	11	******
RU-I	4.85	6	****
S -M	5.37	9	*****
MO-I	5.41	7	*****
NB-I	5.72	5	****
ZR-I	6.07	3	***
P -M	6.16	3	***

CH(3) LIF

EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
BI-I	1.14	101	**********
PB-I	1.18	98	**********
TL-I	1.21	101	**********
HG-I	1.24	148	**********
AU-I	1.28	537	**********
PT-I	1.31	92	**********
IR-I	1.35	90	**********
OS-I	1.39	80	**********
ZN-M	1.44	73	**********
CU-M	1.54	58	**********
NI-M	1.66	47	*********
TM-I	1.73	39	*********
CO-M	1.79	34	*********
FE-M	1.94	35	*********
GD-I	2.05	22	********
MN-M	2.10	21	********
EU-I	2.12	16	********
SM-I	2.20	12	*******
CR-M	2.29	12	*******
ND-I	2.37	10	*****
PR-I	2.46	9	*****
V -M	2.50	6	****
CE-I	2.56	5	****
LA-I	2.67	5	****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
AL PD AG AU HG

本川原遺跡出土試料分析結果

(電子線マイクロアナライザー高速定性分析)

本川原遺跡から出土した金属と思われる塊状試料を、ＥＰＭＡ（電子線マイクロアナライザー）を用いて、成分分析（２ヶ所測定）した結果を述べる。

最初に、ＥＰＭＡの測定原理を簡単に説明すると、ＥＰＭＡは分析しようとする金属、セラミックス、鉱物、木材、ガラス等の試料に電子線の束を照射し、発生する二次電子、反射電子、吸収電子、特性Ｘ線等を測定・解析することにより、試料の電子顕微鏡像（40倍～36万倍）の観察・撮影、電子番号５番のＢ（ボロン）から92番のＵ（ウラン）までの定性・定量分析（成分分析）等を、分析試料を壊さずに、行える装置である。

分析結果のチャートを№１及び№２に示す。ここで、チャート中のＥＬの列は元素記号及び特性Ｘ線の種類を表し、例えば左上のＹ－１はイットリウム－１線である。COUNT（カウント）の列は、１秒あたりの特性Ｘ線の数を表し、INTENSITY の列は、それを識別しやすいように記号を用いて図式化したものである。★の印はバックグラウンドと呼ばれるもので、試料中の成分として意味があるのは、＋の印で表された部分である。

№１を見ると、ＰＢ（鉛）のカウント数が多く、鉛以外の成分はカウント数が少なく、微量もしくは存在しないと考えられる。№２も同様で、これらの結果から、この試料は鉛塊と考えられる。

POS. NO. 1

COMMENT : 90003390
ACCEL. VOLT. (KV) : 15
PROBE CURRENT : 1.003E-08 (A)
STAGE POS. : X 42551 Y 1056 Z 12138

20-FEB-91

CH(1) TAP				CH(2) PET				CH(3) LIF			
EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
Y -l	6.45	204	*************	TI-k	2.75	89	***********	BI-l	1.14	122	************
RE-m	6.73	143	************	BA-l	2.78	88	**********+	PB-l	1.18	522	*************++
SR-l	6.88	112	***********	CS-l	2.89	71	**********	TL-l	1.21	110	***********
W -m	6.98	98	***********	SC-k	3.03	65	**********	HG-l	1.24	124	***********+
SI-k	7.13	81	**********+	I -l	3.15	55	*********+	AU-l	1.28	121	***********+
TA-m	7.25	72	**********	TE-l	3.29	39	*********	PT-l	1.31	109	***********
RB-l	7.32	67	**********	CA-k	3.36	38	*********	IR-l	1.35	109	***********
HF-m	7.54	76	**********	SB-l	3.44	33	********	OS-l	1.39	88	***********
LU-m	7.84	73	**********	SN-l	3.60	27	********	ZN-k	1.44	81	***********
YB-m	8.15	67	**********	K -k	3.74	21	*******	CU-k	1.54	69	**********
AL-k	8.34	76	**********	IN-l	3.77	23	*******	NI-k	1.66	46	*********
BR-l	8.37	63	**********	U -m	3.91	19	*******	TM-l	1.73	43	*********
ER-m	8.82	63	**********	CD-l	3.96	21	*******	CO-k	1.79	41	*********
SE-l	8.99	63	**********	TH-m	4.14	16	******+	FE-k	1.94	23	*******
HO-m	9.20	81	**********	AG-l	4.15	11	******	GD-l	2.05	25	********
DY-m	9.59	45	*********	PD-l	4.37	11	******	MN-k	2.10	20	*******
AS-l	9.67	53	*********	RH-l	4.60	10	*****	EU-l	2.12	17	*******
MG-k	9.89	45	*********	CL-k	4.73	15	******	SM-l	2.20	14	******
TB-m	10.00	48	*********	RU-l	4.85	11	*****+	CR-k	2.29	11	******
GE-l	10.44	44	*********	S -k	5.37	11	****++	ND-l	2.37	12	******
GA-l	11.29	33	********	MO-l	5.41	10	****+	PR-l	2.46	11	****++
NA-k	11.91	29	********	NB-l	5.72	6	***+	V -k	2.50	8	*****
**	14.72	21	*******	ZR-l	6.07	2	**	CE-l	2.56	8	*****
F -k	18.32	14	******	P -k	6.16	3	***	LA-l	2.67	6	****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
PB

POS. NO. 2

COMMENT : 90003390
ACCEL. VOLT. (KV) : 15
PROBE CURRENT : 1.970E-08 (A)
STAGE POS. : X 42939 Y 1001 Z 12132

20-FEB-91

CH(1) TAP				CH(2) PET				CH(3) LIF			
EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY (LOG)
Y -l	6.45	245	*************	TI-k	2.75	95	***********	BI-l	1.14	128	***********+
RE-m	6.73	135	************	BA-l	2.78	103	***********	PB-l	1.18	536	************+++
SR-l	6.88	97	***********	CS-l	2.89	74	**********	TL-l	1.21	123	***********+
W -m	6.98	60	**********	SC-k	3.03	72	**********	HG-l	1.24	116	***********
SI-k	7.13	58	**********	I -l	3.15	48	*********	AU-l	1.28	105	*****.******
TA-m	7.25	59	**********	TE-l	3.29	46	*********	PT-l	1.31	125	************
RB-l	7.32	58	**********	CA-k	3.36	33	********	IR-l	1.35	114	***********
HF-m	7.54	64	**********	SB-l	3.44	37	*********	OS-l	1.39	93	***********
LU-m	7.84	67	**********	SN-l	3.60	27	********	ZN-k	1.44	82	***********
YB-m	8.15	55	**********	K -k	3.74	22	*******	CU-k	1.54	72	**********
AL-k	8.34	60	**********	IN-l	3.77	21	*******	NI-k	1.66	55	*********+
BR-l	8.37	58	**********	U -m	3.91	25	********	TM-l	1.73	46	*********
ER-m	8.82	55	**********	CD-l	3.96	24	*******+	CO-k	1.79	38	*********
SE-l	8.99	56	**********	TH-m	4.14	20	******+	FE-k	1.94	27	********
HO-m	9.20	50	*********	AG-l	4.15	13	******	GD-l	2.05	18	*******
DY-m	9.59	48	*********	PD-l	4.37	11	*****+	MN-k	2.10	7	*******
AS-l	9.67	40	*********	RH-l	4.60	11	*****+	EU-l	2.12	22	*******
MG-k	9.89	47	*********	CL-k	4.73	15	******	SM-l	2.20	13	******
TB-m	10.00	40	*********	RU-l	4.85	8	*****	CR-k	2.29	16	******+
GE-l	10.44	33	********	S -k	5.37	13	*****+	ND-l	2.37	11	*****+
GA-l	11.29	27	********	MO-l	5.41	5	****	PR-l	2.46	8	*****
NA-k	11.91	23	*******	NB-l	5.72	8	*****	V -k	2.50	7	*****
**	14.72	10	*****	ZR-l	6.07	1	*	CE-l	2.56	10	****+
F -k	18.32	6	****	P -k	6.16	5	**++	LA-l	2.67	6	****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
PB

図　　版

鳥栖地区航空写真

大木川以西

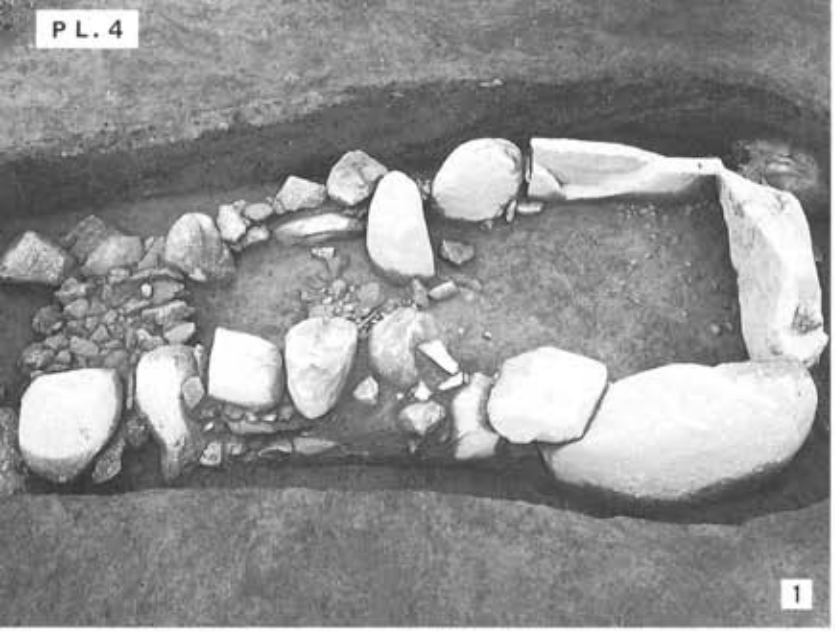
PL.2

烏栖地区航空写真

大木川以東

都谷遺跡　1．遺跡全景〈東から〉

2．A地区全景〈北東から〉



都谷遺跡A地区

1．ST001古墳全景〈東から〉

2．ST001古墳閉塞状況〈東から〉

3．同古墳遺物出土状況〈西から〉

都谷遺跡B地区

1．B地区原景〈南から〉

2．ST001～006古墳遠景〈北から〉

3．　　同　　遠景〈西から〉

都谷遺跡B地区

1．ST001古墳原景

2．　同　古墳土層〈南から〉

3．　同　古墳羨門〈南から〉

都谷遺跡B地区

1．ST001古墳奥壁

2．　同　古墳羨道部

3．　同　古墳閉石

4．　同　古墳墓道遺物出土状況

都谷遺跡B地区

1．ＳＴ002古墳原景〈南から〉

2．　同　古墳墳丘列石〈北から〉

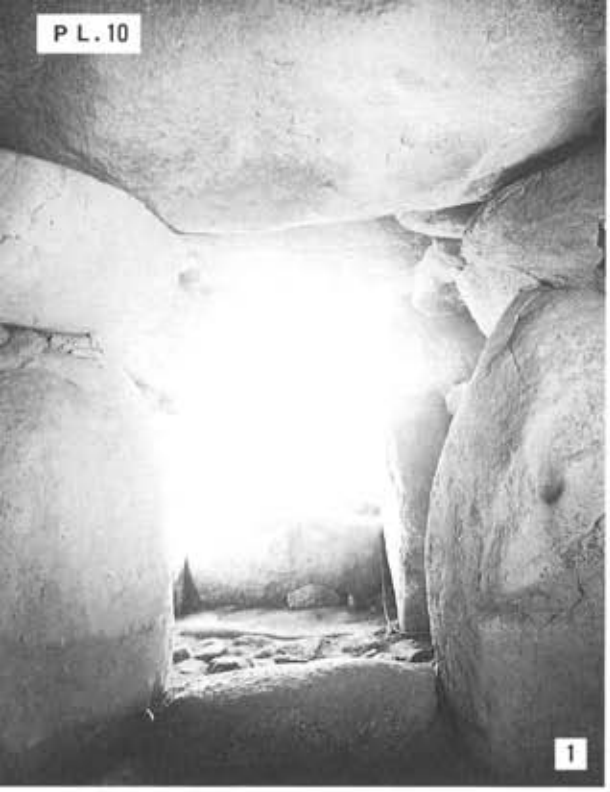
3．　同　古墳墳丘列石〈西から〉

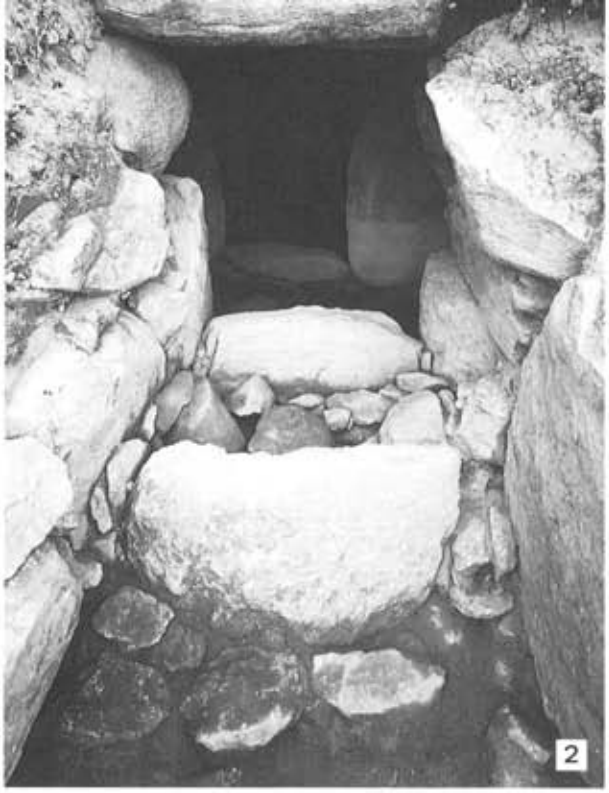
都谷遺跡B地区

1．ＳＴ002古墳土層〈南から〉

2．　同　古墳周溝〈東から〉

3．　同　古墳墳丘列石〈北から〉





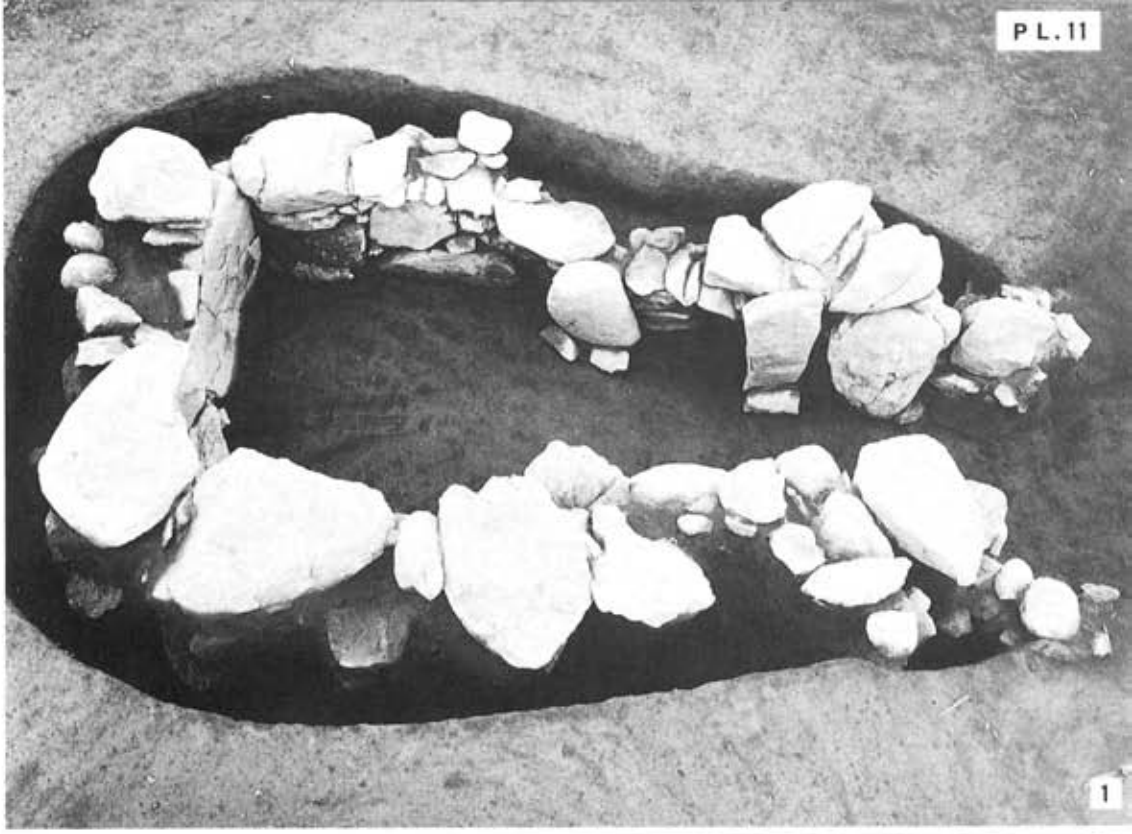
都谷遺跡B地区

1．ST002古墳羨道部

2．　同　古墳羨道部

3．　同　古墳奥壁

4．前庭側壁内遺物出土状況〈南から〉



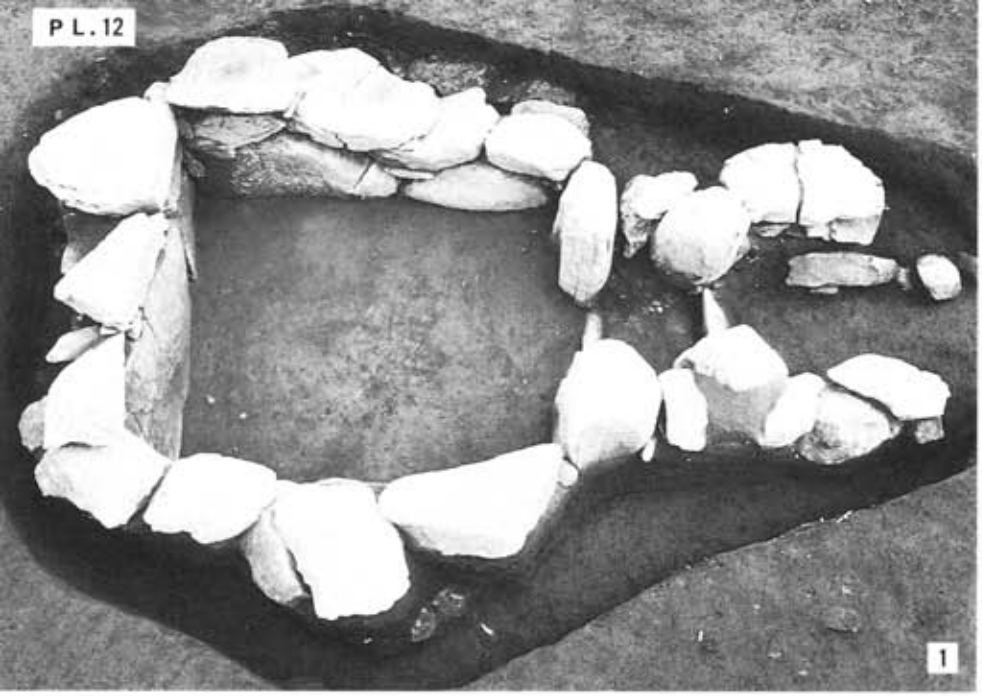
1

2

都谷遺跡B地区

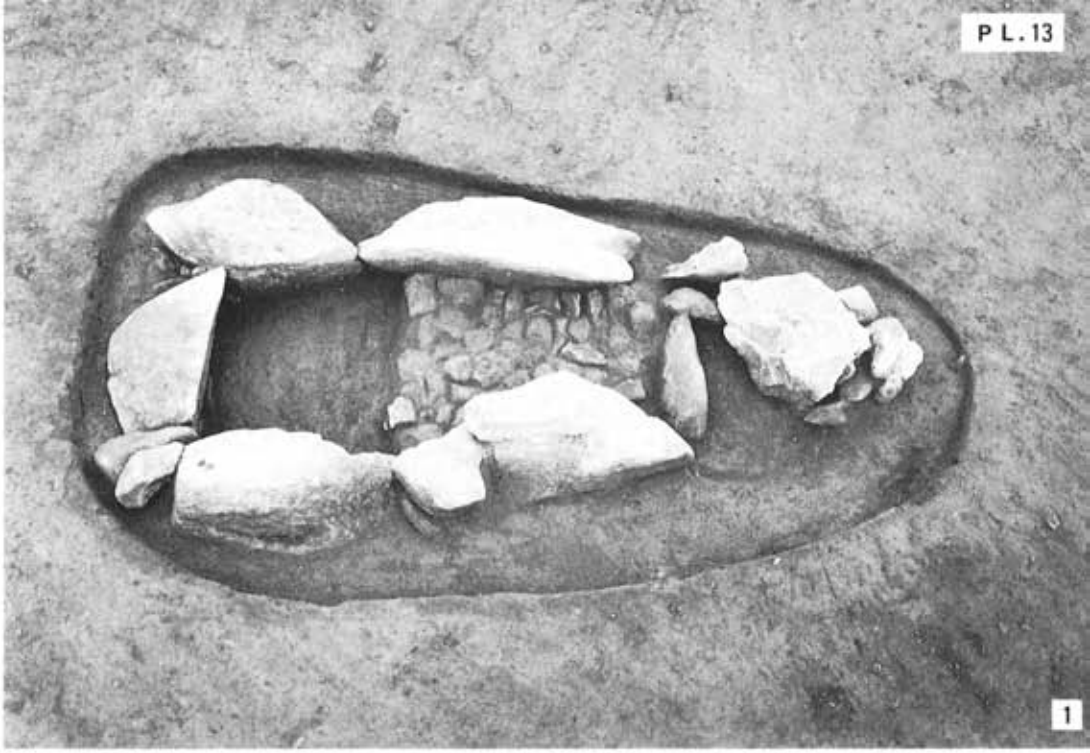
1．ＳＴ003古墳石室〈西から〉

2．　同　古墳石室〈南から〉

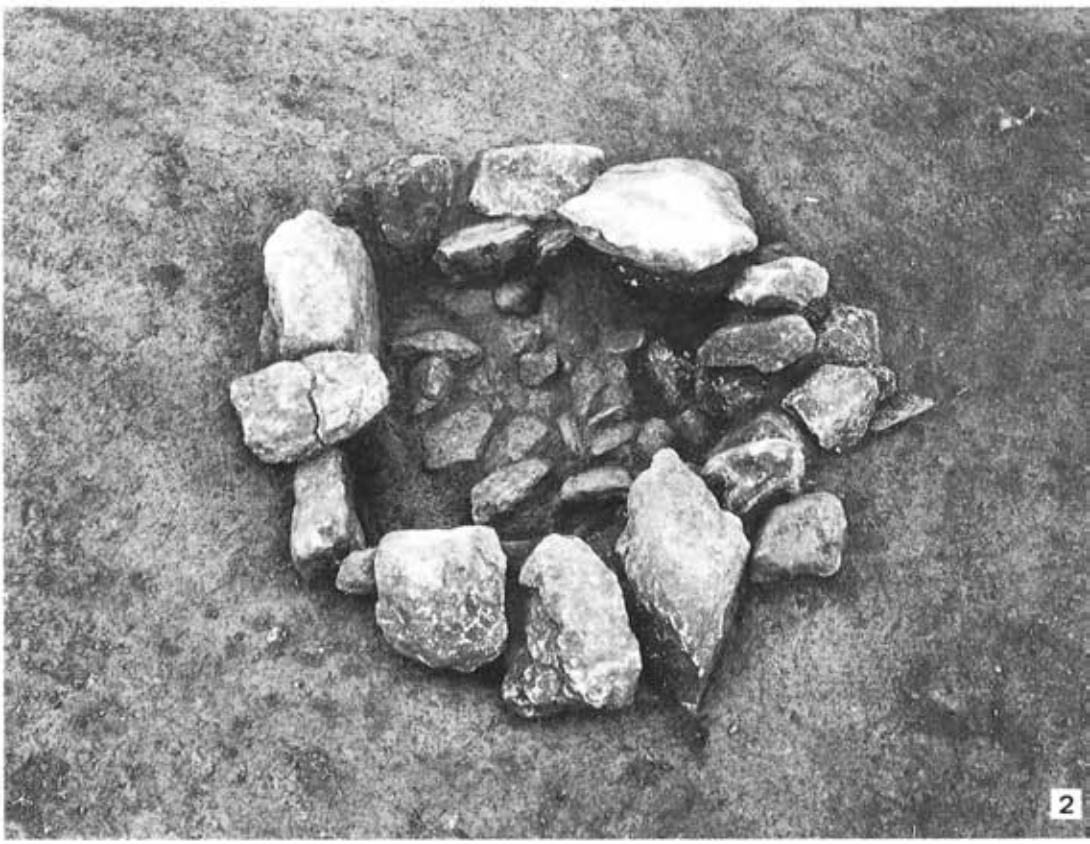


都谷遺跡B地区　1．ST004古墳石室〈南西から〉　3．同　古墳奥壁

2．同　古墳遺物出土状況〈南西から〉　4．同　古墳羨道遺物出土状況



1



2

都谷遺跡B地区

1．ST005古墳石室〈南西から〉

2．ST006古墳石室〈南西から〉

都谷遺跡B地区

1．ST002・007・008古墳遠景〈西から〉

2．ST007古墳石室〈西から〉

3．　同　古墳羨道〈北から〉

4．　同　古墳羨道〈北から〉

都谷遺跡B地区

1．ST007古墳土層〈西から〉

2．同　古墳玄室内
遺物出土状況〈北から〉

3．同　上

1

2

都谷遺跡B地区

1．ST008古墳石室〈西から〉　2．　同　古墳石室〈西から〉

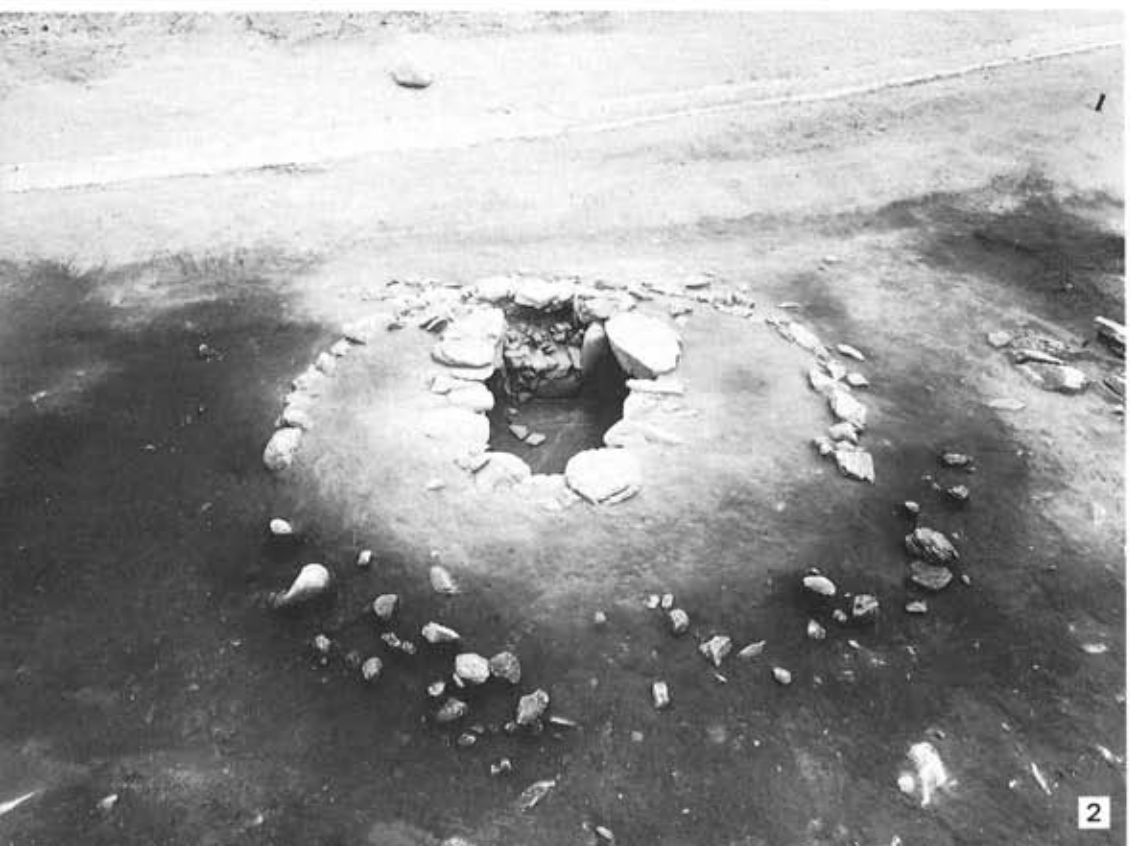
1

2

都谷遺跡B地区

1．ST008古墳前門左袖石付近
遺物出土状況〈北から〉

2．　同　古墳墓道遺物出土状況
〈南から〉



都谷遺跡B地区

1．SX009配石

2．ST010古墳全景
〈北西から〉

1

2

都谷遺跡B地区

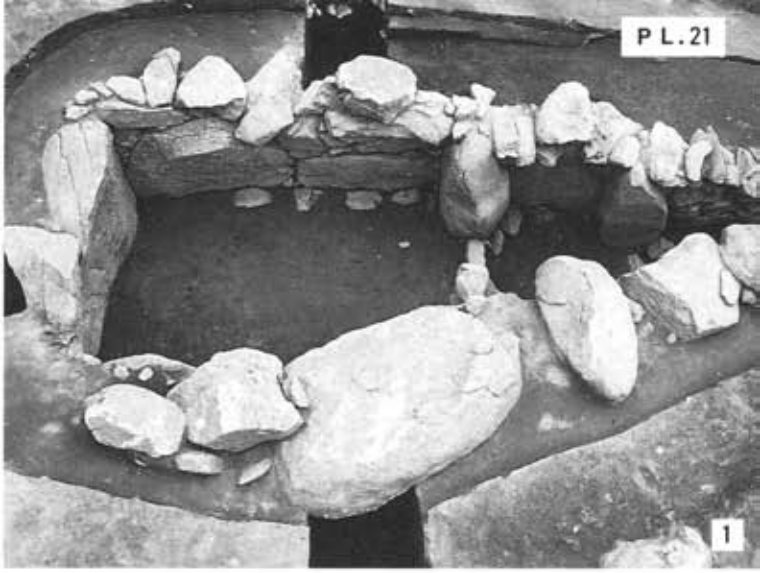
1．ST010・011・012古墳遠景〈南東から〉　2．ST010・011・012古墳遠景〈北東から〉

都谷遺跡B地区

1．ST010古墳閉塞状況
〈南東から〉

2．　同　古墳閉塞石除去後
〈南東から〉

3．　同　古墳奥壁〈南東から〉



都谷遺跡B地区

1．ＳＴ011古墳石室〈東から〉

2．　同　古墳石室〈南東から〉

3．　同　古墳閉塞状況〈南東から〉

4．　　同　　上　　〈北西から〉

都谷遺跡B地区

1．ST012古墳石室閉塞状況〈南から〉

2．　同　古墳石室羨道入口〈南から〉

3．　同　古墳天井石〈真上から〉

都谷遺跡B地区

1．ST012古墳土層〈南から〉

2．　同　古墳前室遺物出土状況〈北から〉

3．　同　古墳前室遺物出土状況〈東から〉

都谷遺跡B地区

1．ST013～019古墳遠景〈東から〉

2．　同　上　〈南から〉

都谷遺跡B地区

1．ST013～019古墳遠景〈南上空から〉

2．ST013古墳全景〈南上空から〉

1

2

都谷遺跡B地区

1．ST013古墳全景〈西から〉

2．　同　古墳遺物出土状況〈北から〉

1

2

都谷遺跡B地区

1．ST014古墳全景〈南から〉

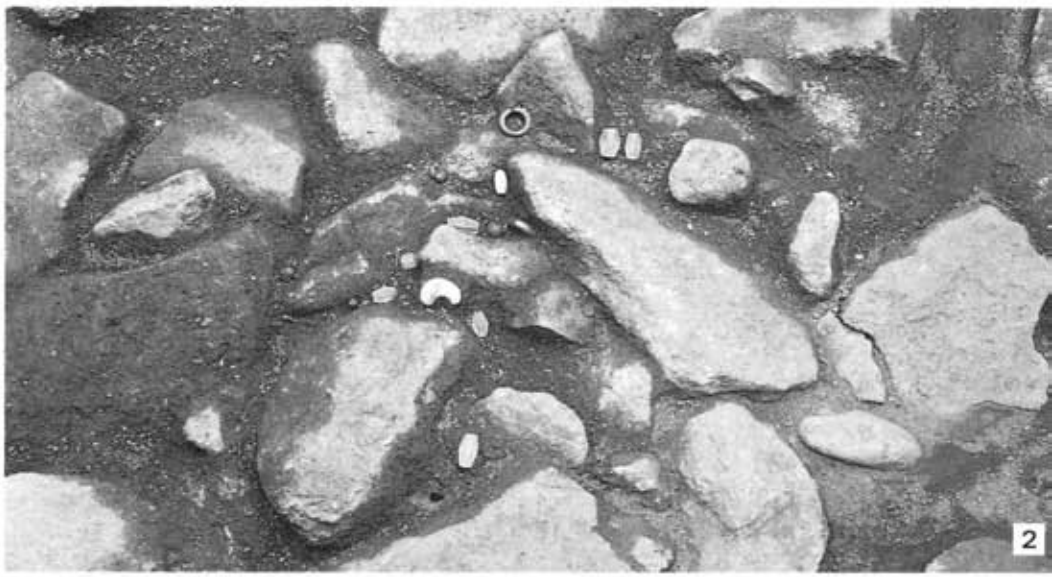
2．　　同　　上

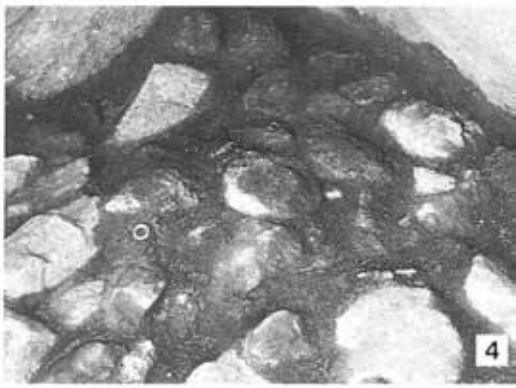
都谷遺跡B地区

1．ST014古墳全景〈北から〉

2．　同　古墳盛土内遺物出土状況〈北から〉

3．　同　古墳前室遺物出土状況〈東から〉





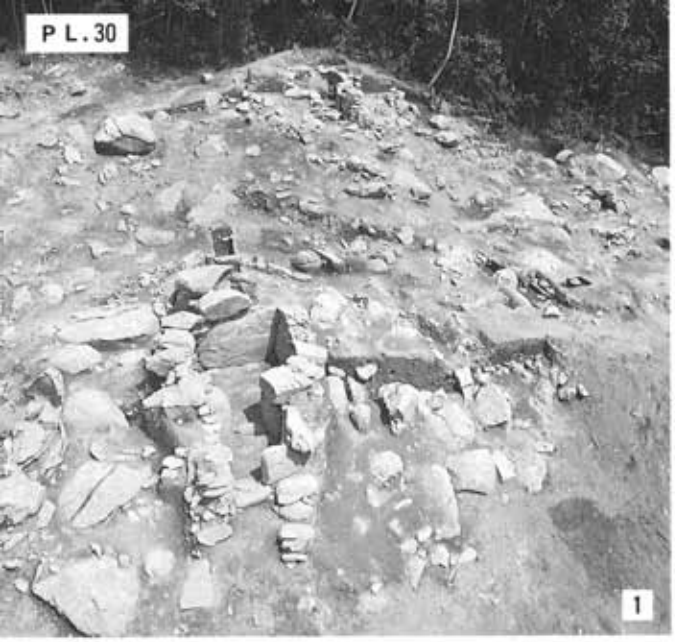
都谷遺跡B地区

1．ST014古墳玄室内遺物出土状況〈東から〉

2．同　上〈西から〉

3．ST014古墳玄室内遺物出土状況〈南から〉

4．同　上〈南東から〉



都谷遺跡B地区

1．ST015・017古墳遠景〈南から〉

2．ST015・014古墳遠景〈東から〉

3．ST015古墳全景〈南から〉

都谷遺跡B地区

1．ST015古墳石室〈南から〉

2．　同　古墳墳丘列石〈北から〉

3．　同　古墳周溝内出土遺物
〈南から〉

都谷遺跡B地区

1．ST016古墳全景〈南から〉

2．　同　古墳石室〈南から〉

3．　同　古墳全景〈東から〉

都谷遺跡B地区

1．ST016古墳閉塞状況〈北から〉

2．同　上　〈東から〉

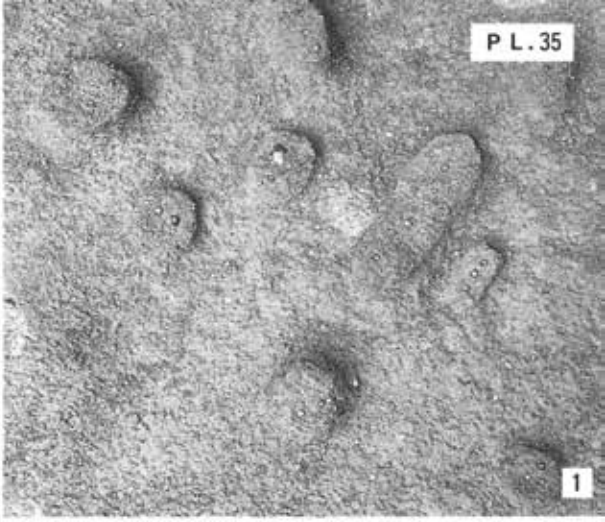
3．同　古墳奥壁〈南から〉

都谷遺跡B地区

1．ST017古墳原景〈南東から〉

2．　同　古墳全景〈南東から〉

3．　同　　上　〈東から〉



都谷遺跡B地区

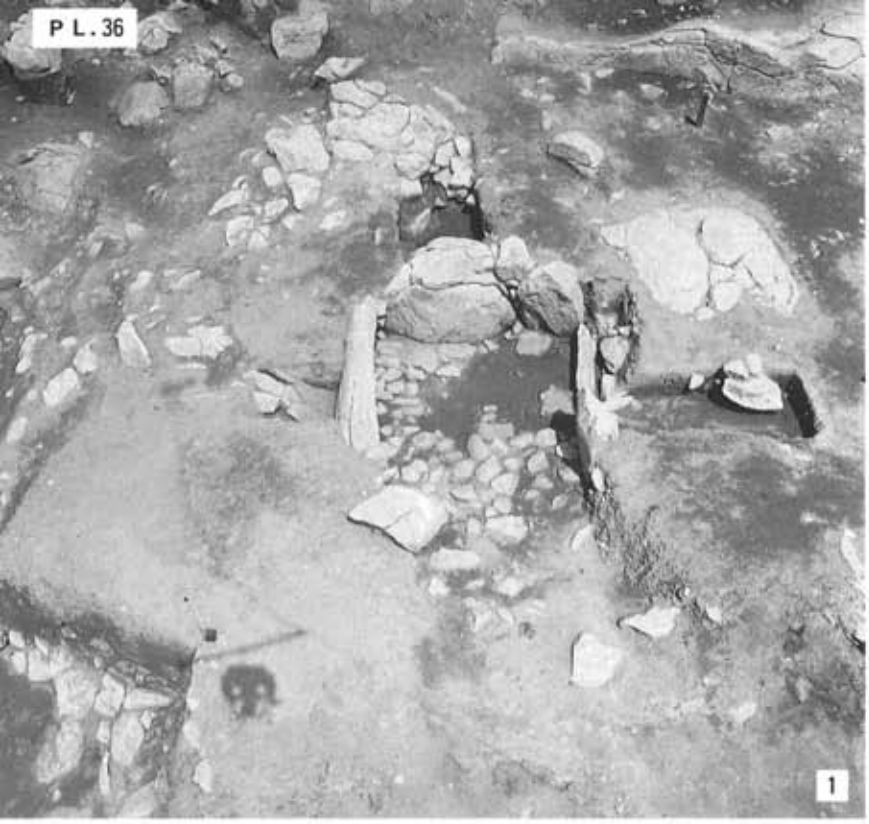
1．ST017古墳玄室出土装身具類〈南から〉

2．　同　古墳羨道外側出土土器群〈南東から〉

3．　同　古墳墳丘列石出土土器群〈南西から〉

4．　同　古墳石室閉塞状況〈北西から〉

5．　同　　上　〈南東から〉



都谷遺跡B地区

1．ST018古墳全景〈南東から〉　　2．ST018古墳石室〈北東から〉

1

2

3

都谷遺跡B地区

1．ST019古墳全景〈南から〉

2．　同　古墳石室〈南から〉

3．　同　古墳土器出土状況
〈北から〉

都谷遺跡C地区

1．C地区遠景〈東から〉

2．ST001古墳石室〈南から〉

3．　同　古墳前室遺物出土状況〈東から〉

4．　同　古墳墓道遺物出土状況〈東から〉

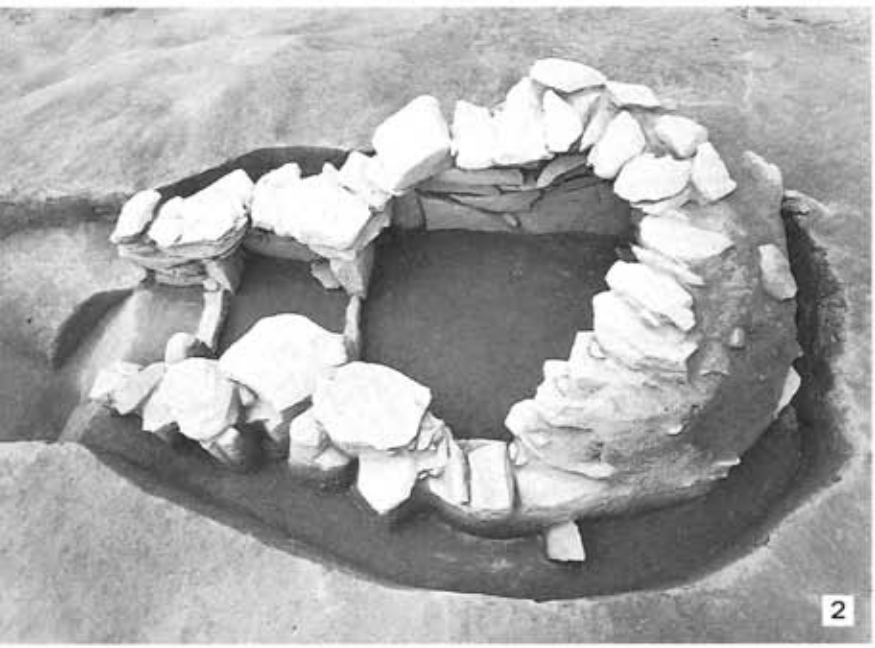
都谷遺跡C地区

1．C地区遠景〈北から〉

2．SK003土壙〈南から〉

3．ST002古墳全景〈南から〉

4．　同　古墳石室〈南から〉



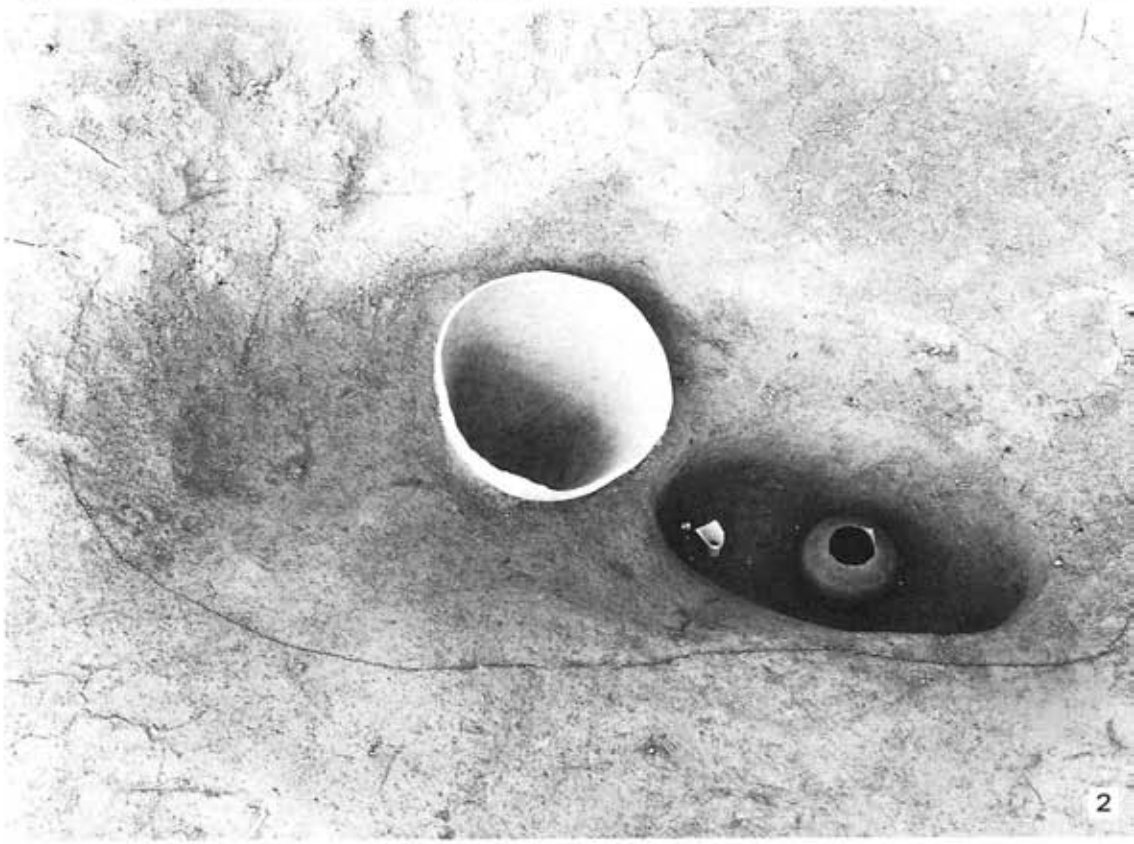
都谷遺跡D地区

1．ST001古墳全景〈南から〉

2．　同　古墳石室〈東から〉

3．　同　古墳前室左壁〈東から〉

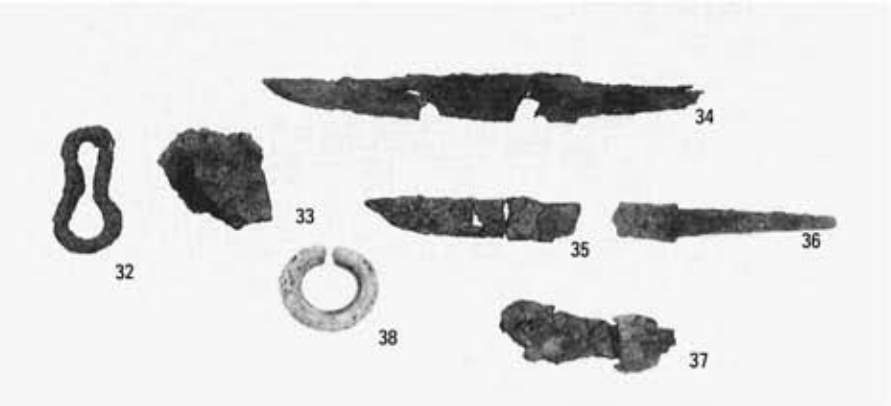
1

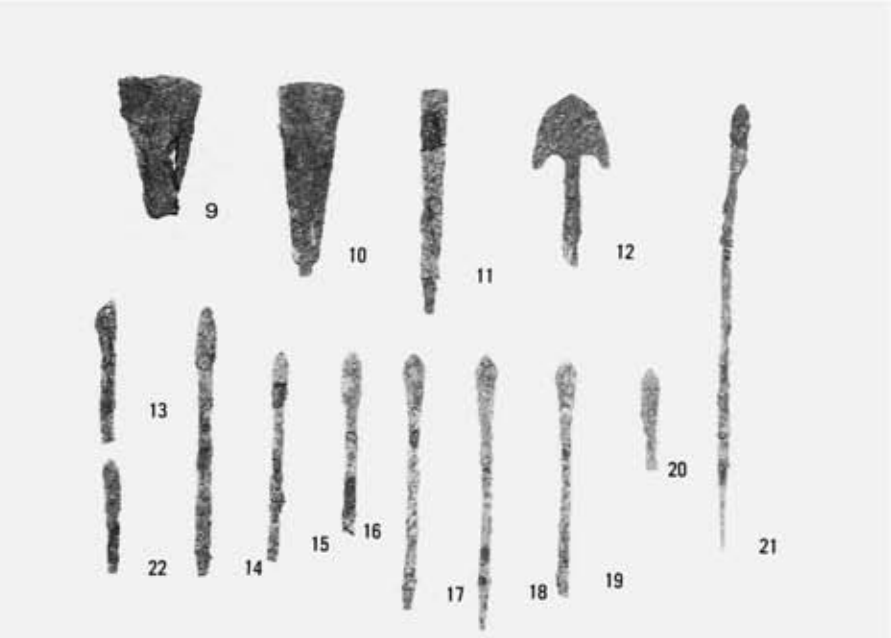


2

都谷遺跡D地区

1．ST001古墳西側土層〈南から〉　2．ST002土壙〈南から〉





都谷遺跡A地区
ST001古墳出土須恵器
鉄器、装身具

39

41

42

44

45

46

52

53

54

55

58

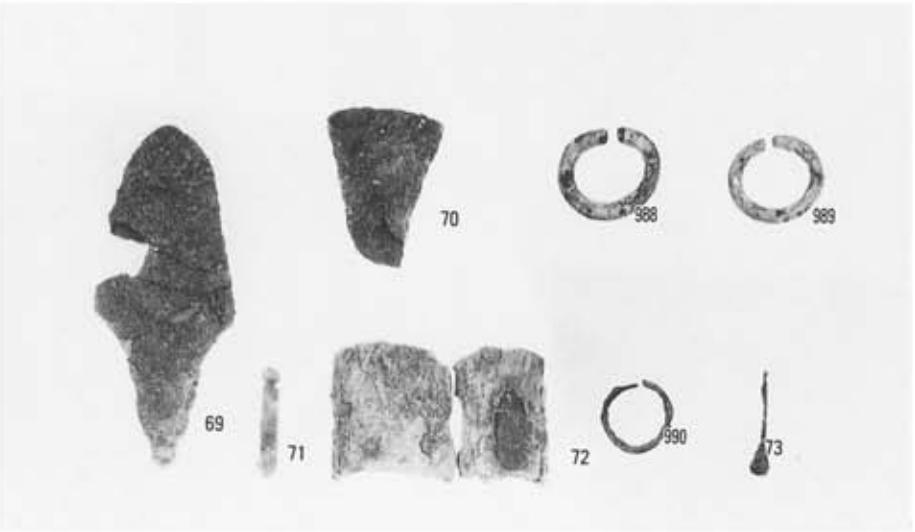
61

都谷遺跡B地区

ST001古墳出土須恵器

都谷遺跡B地区

ST001古墳出土土器、鉄器、装身具



74

76

77

80

86

87

88

89

92

93

96

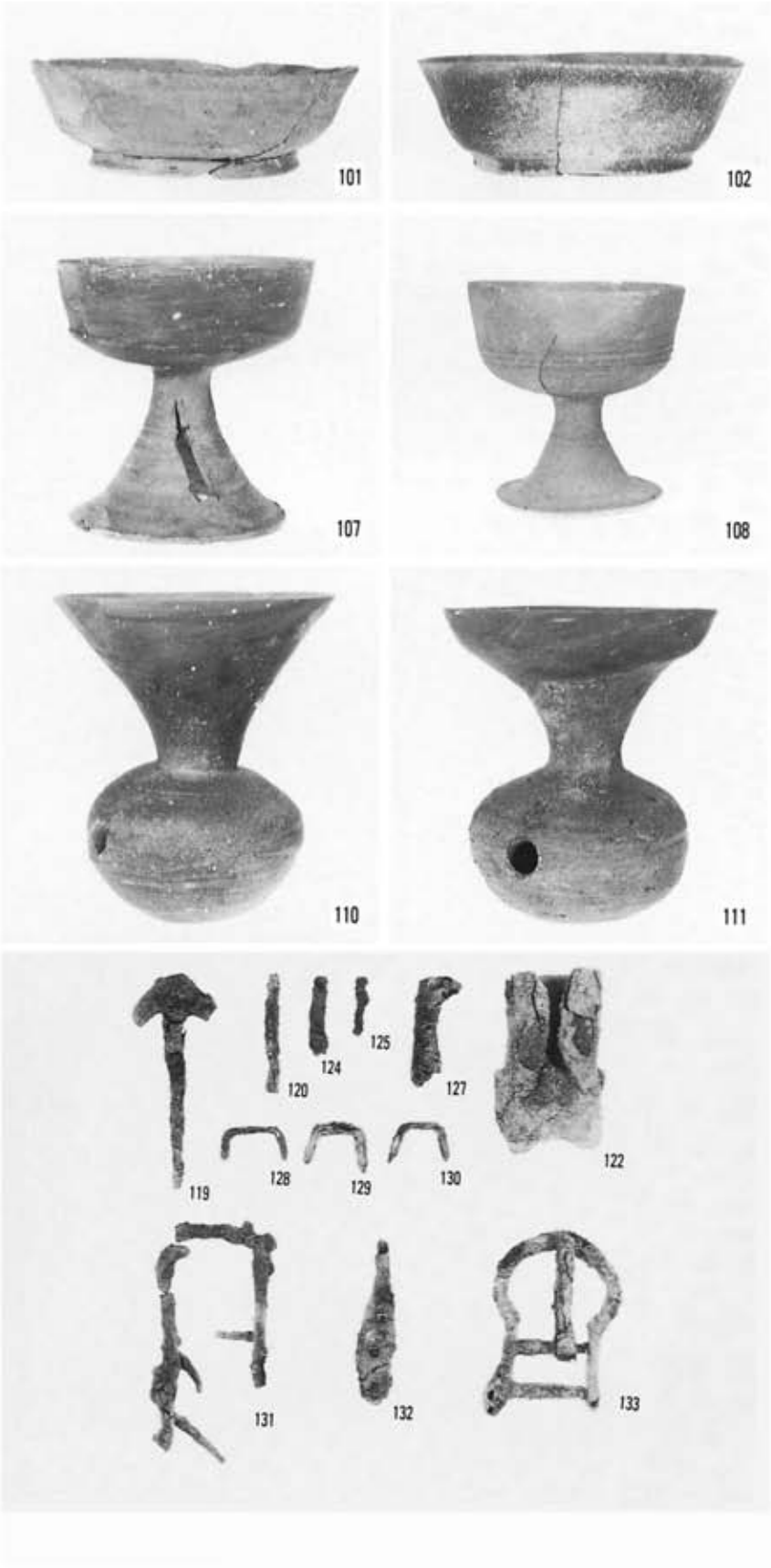
97

98

100

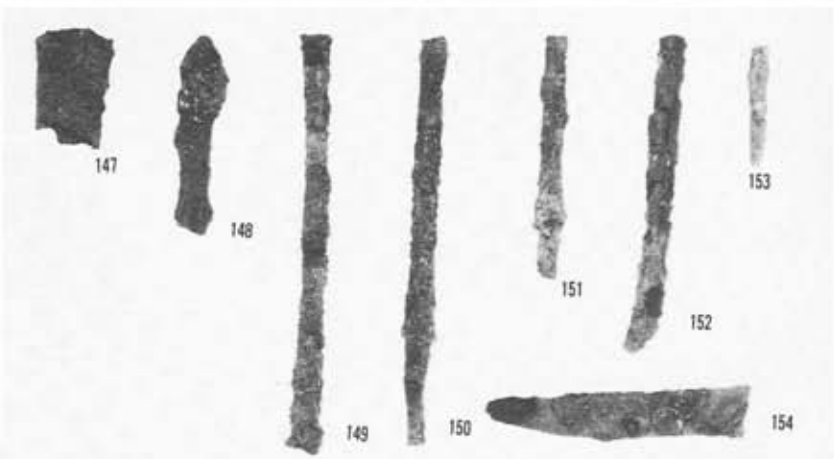
都谷遺跡B地区

ST002古墳出土
須恵器



都谷遺跡B地区

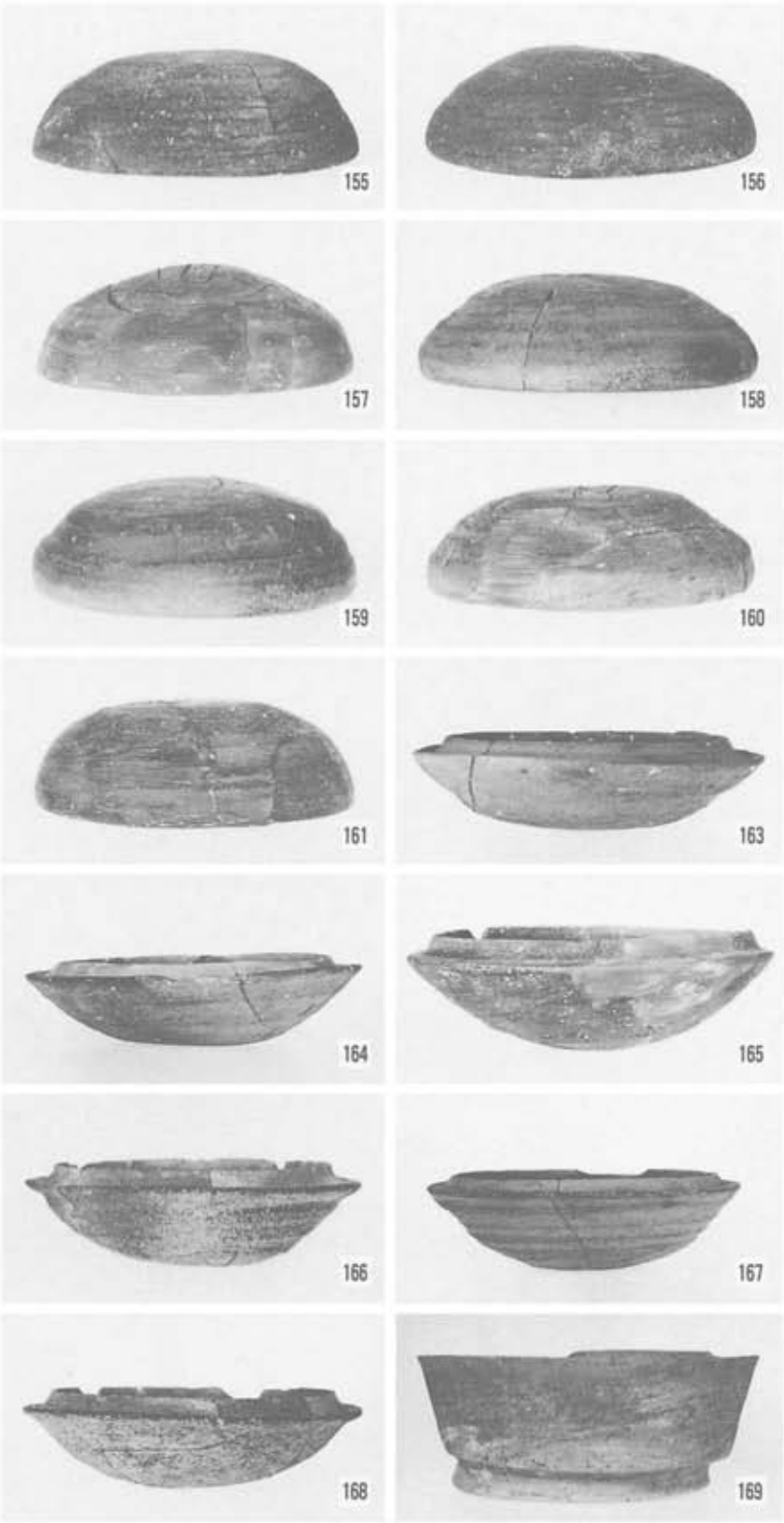
ST002古墳出土須恵器、鉄器



都谷遺跡B地区

112・113・114・117
ST012古墳出土須恵器

138～154
ST003古墳出土土器
鉄器



都谷遺跡B地区

ST004古墳出土須恵器

170

171

177

178

180, 181

184

185

186

190

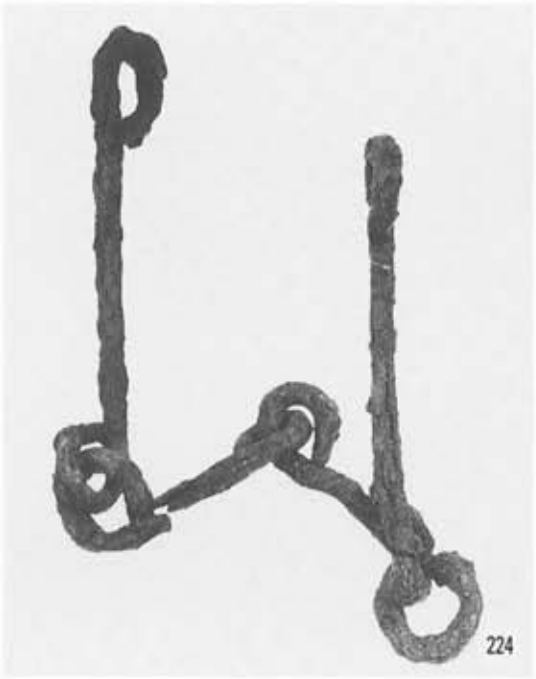
187

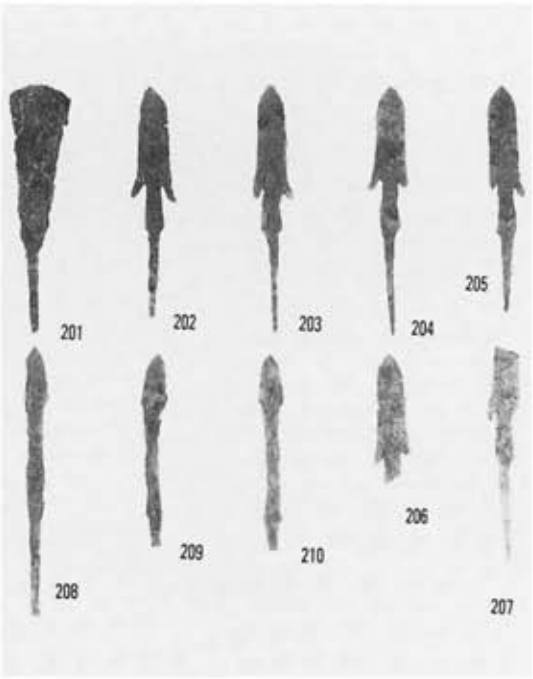
188

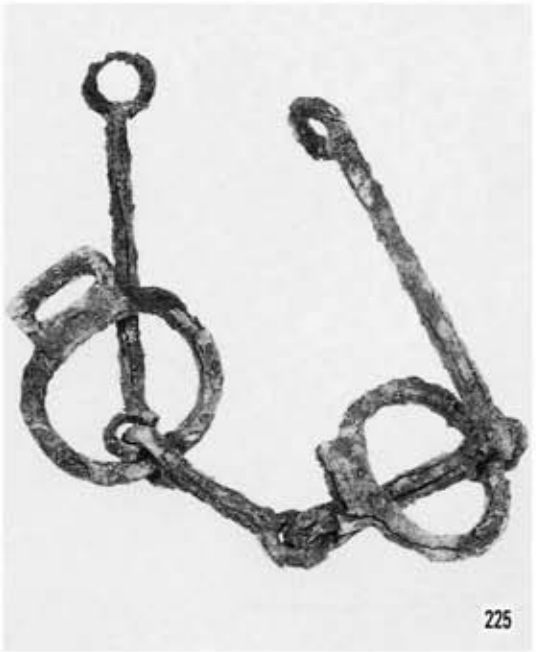
189

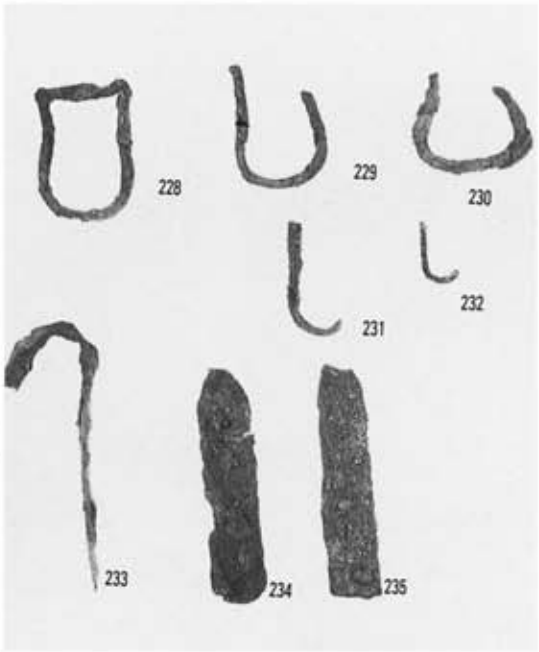
都谷遺跡B地区

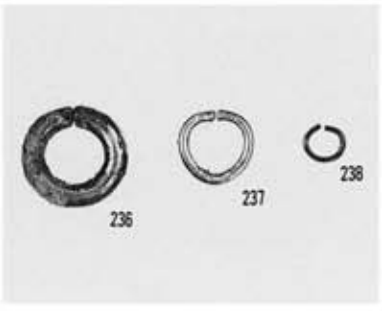
ST004古墳出土須恵器





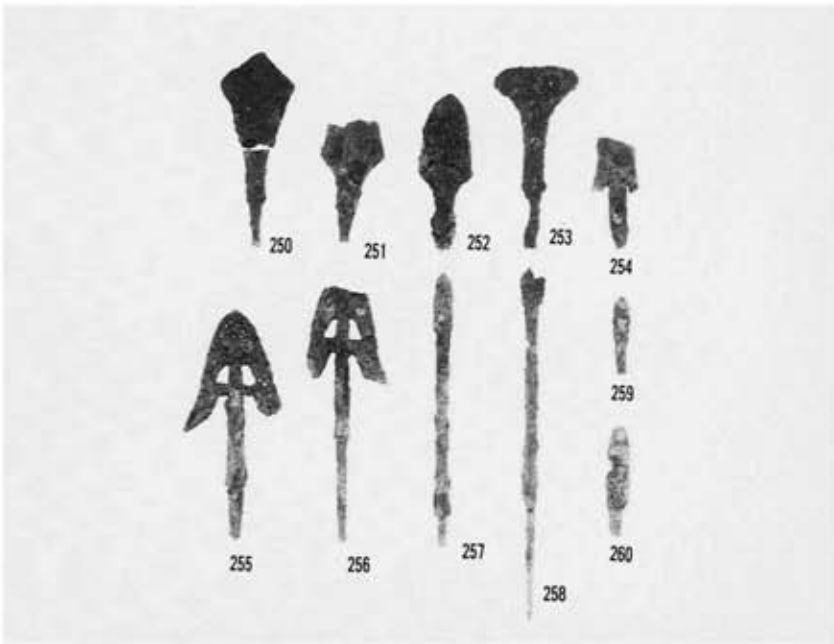


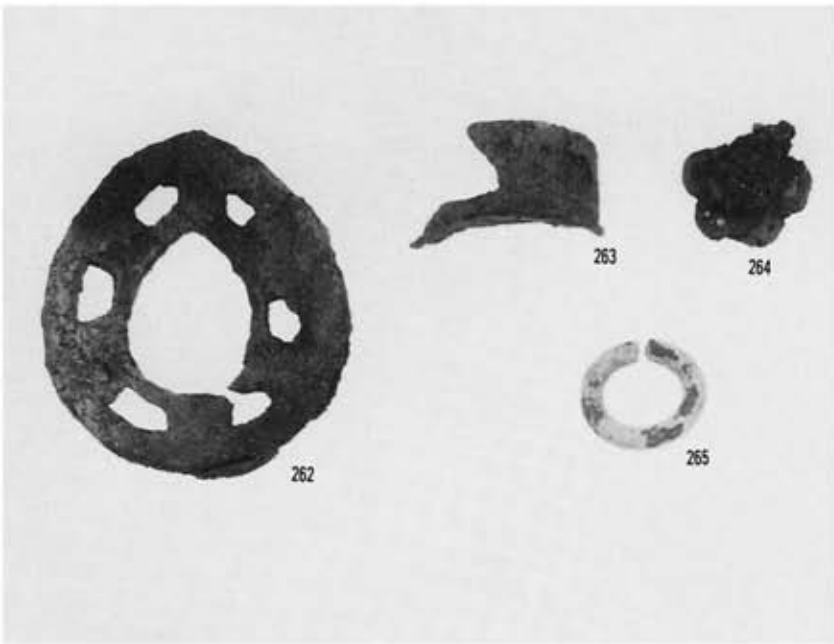




都谷遺跡B地区

ST004古墳出土鉄器、装身具

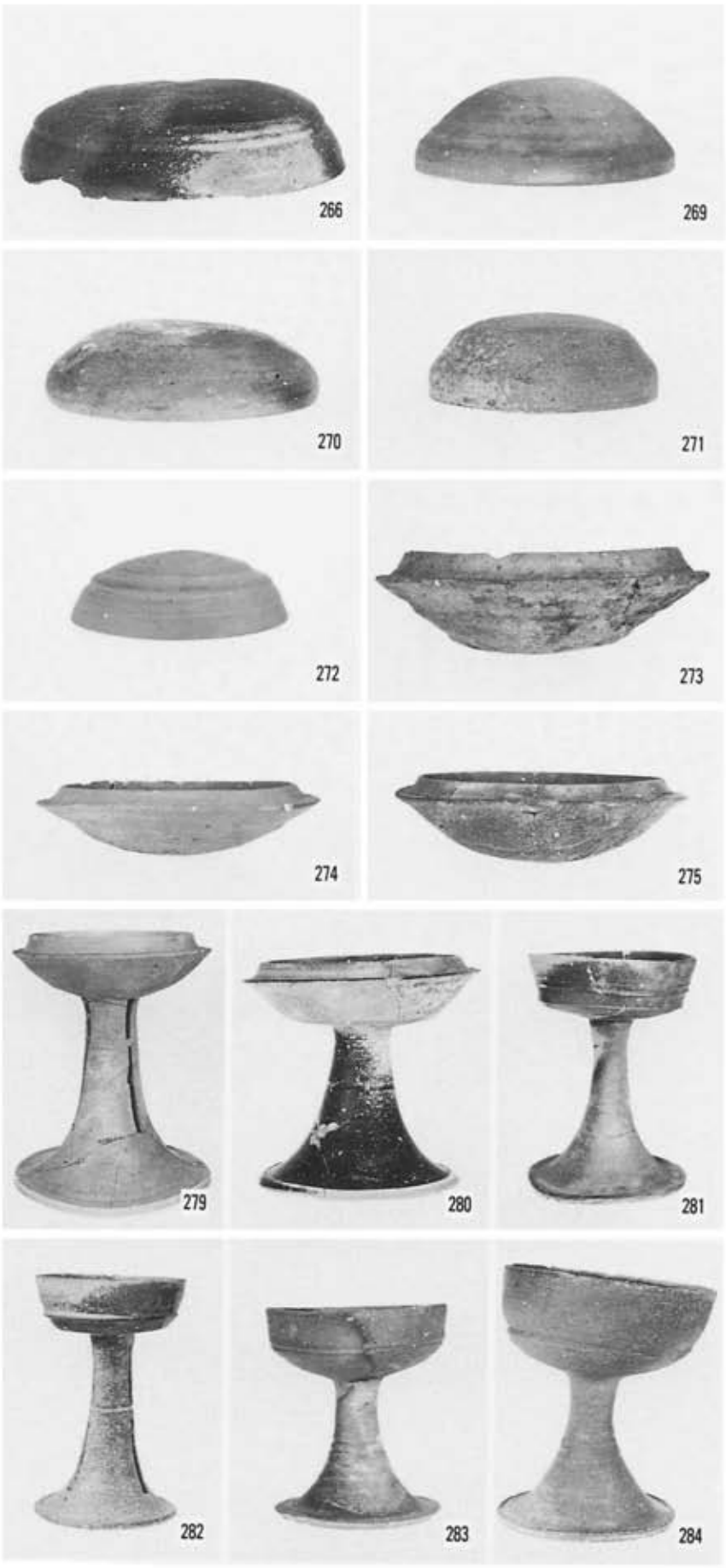




都谷遺跡B地区

239
ST006古墳出土
土師器

249～265
ST007古墳出土土器
鉄器、装身具



都谷遺跡B地区

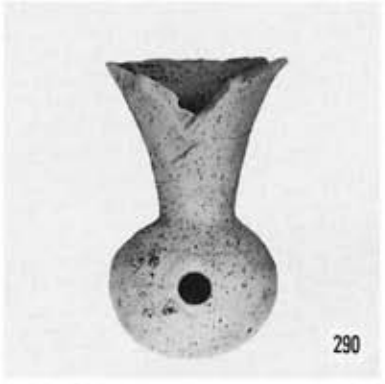
ST008古墳出土
須恵器

285

286

287

288


290

291

293

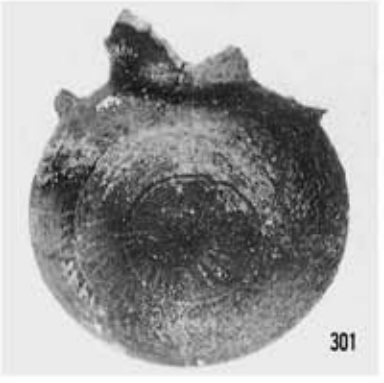
294

295

297

299

298


301

303

302

都谷遺跡B地区　ST008古墳出土須恵器

306

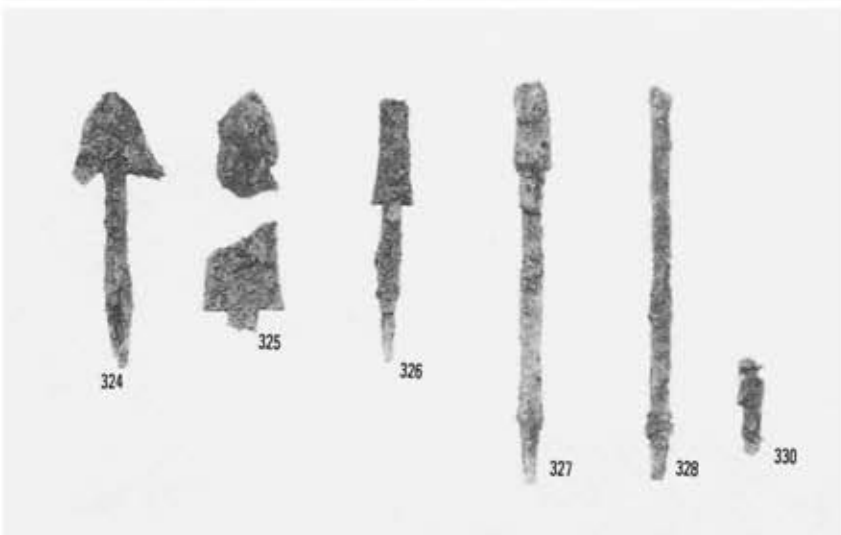
315

305

310

312

311

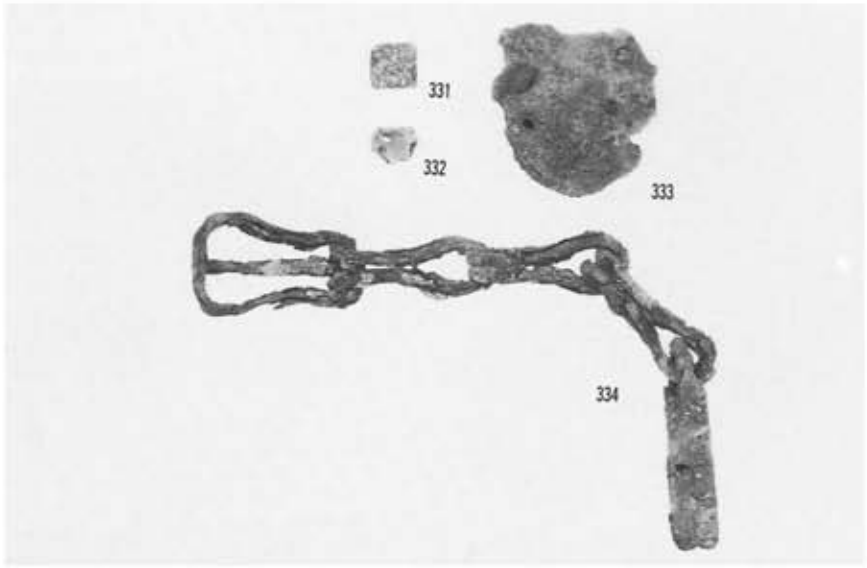

324 325 326 327 328 330

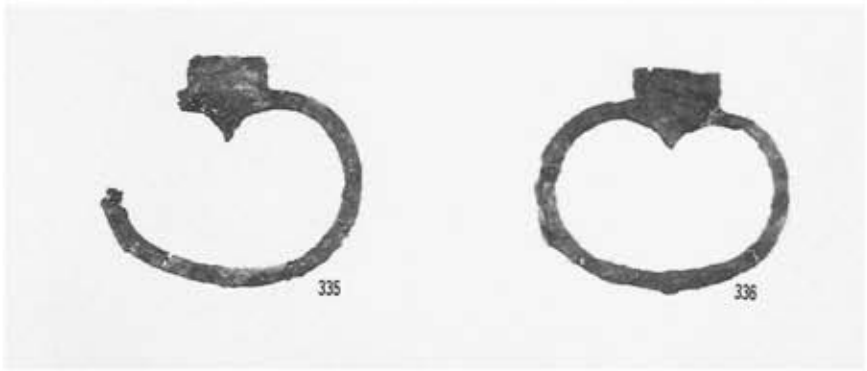
都谷遺跡B地区

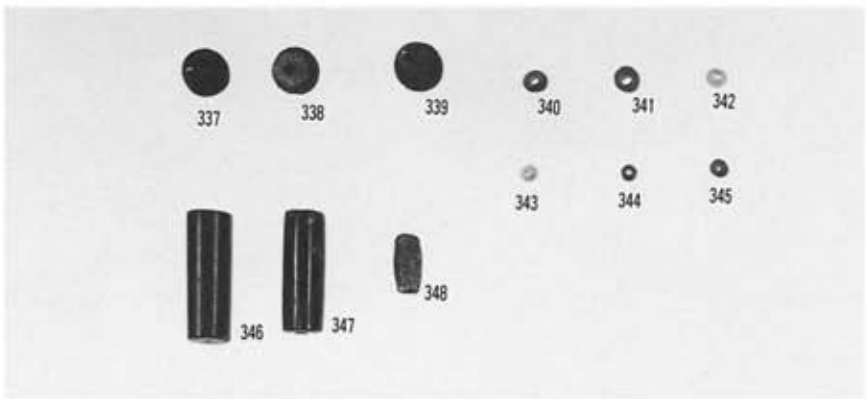
306～330

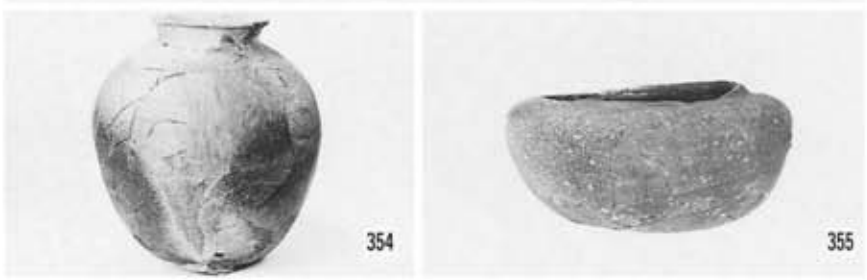
ST008古墳出土

土師器・鉄器









都谷遺跡B地区

331～336
ST008古墳出土
鉄器、装身具

354
SX009配石出土土器

355
ST010古墳出土土器

357

359

361

362

365

368

383

386

387

389

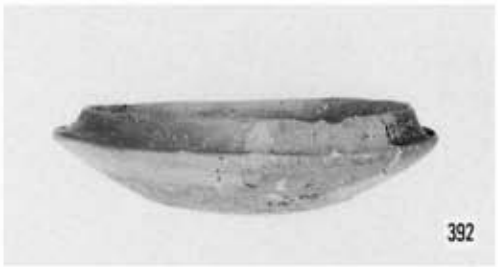
390

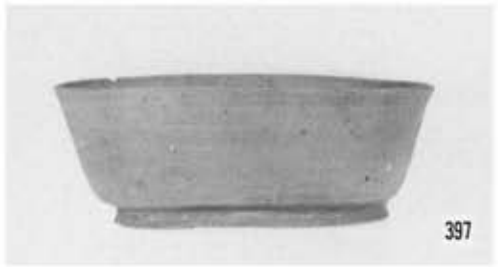
391

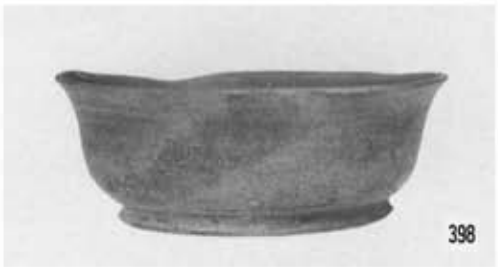
都谷遺跡B地区

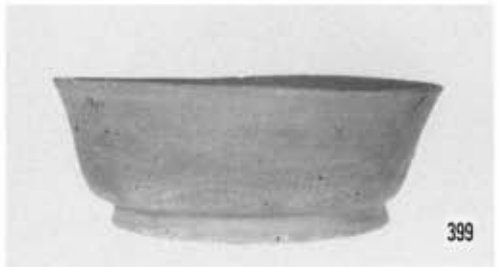
357～368　ST011古墳出土須恵器

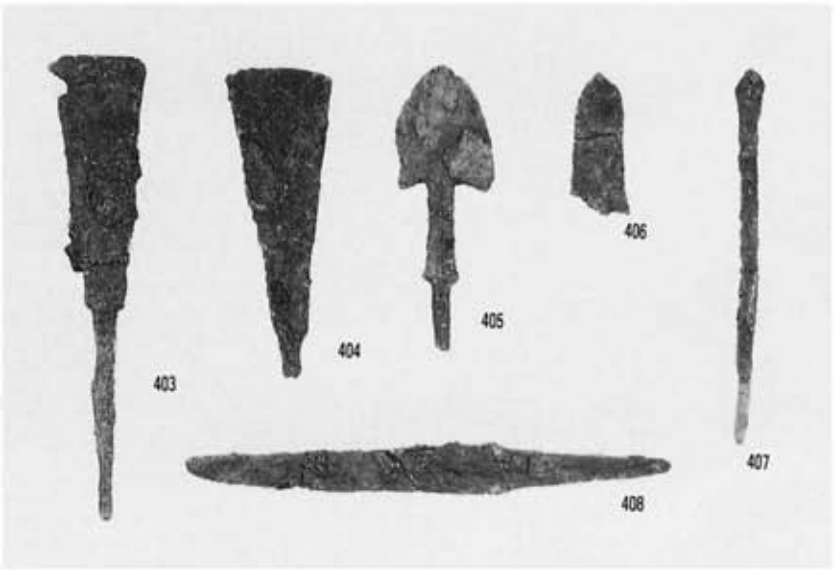
387～391　ST012古墳出土須恵器

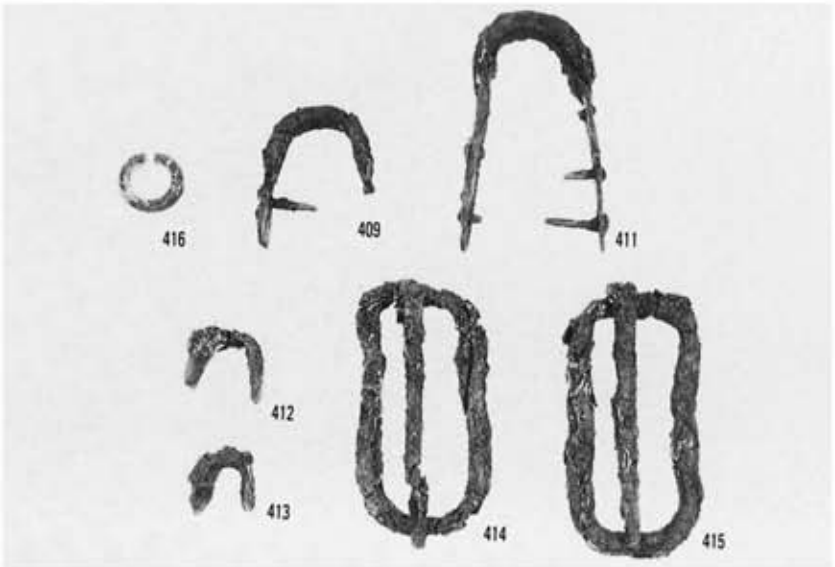

392


397


398

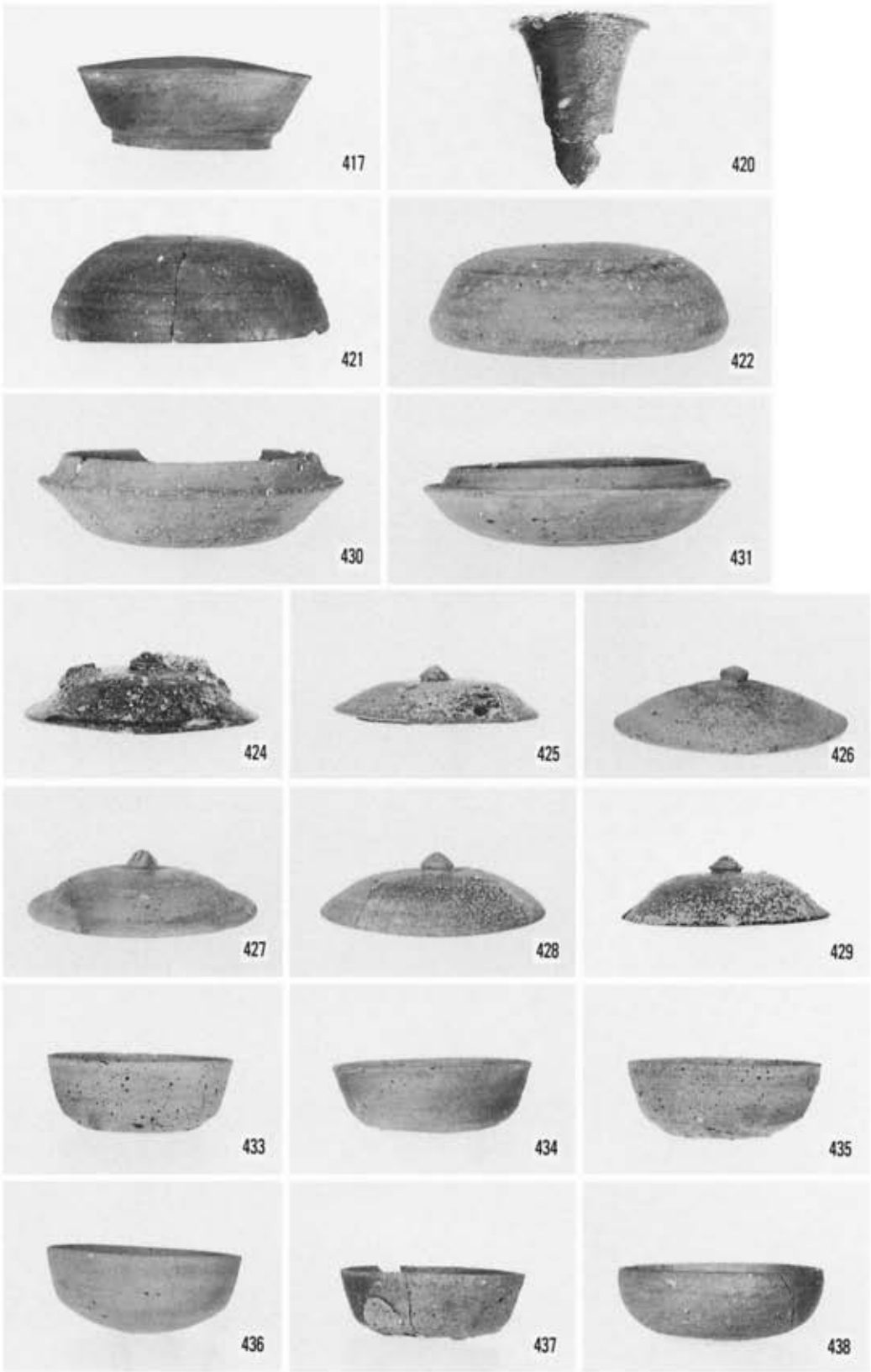

399


403 404 405 406 407 408


416 409 411 412 413 414 415

都谷遺跡B地区　392～399　ST012古墳出土須恵器

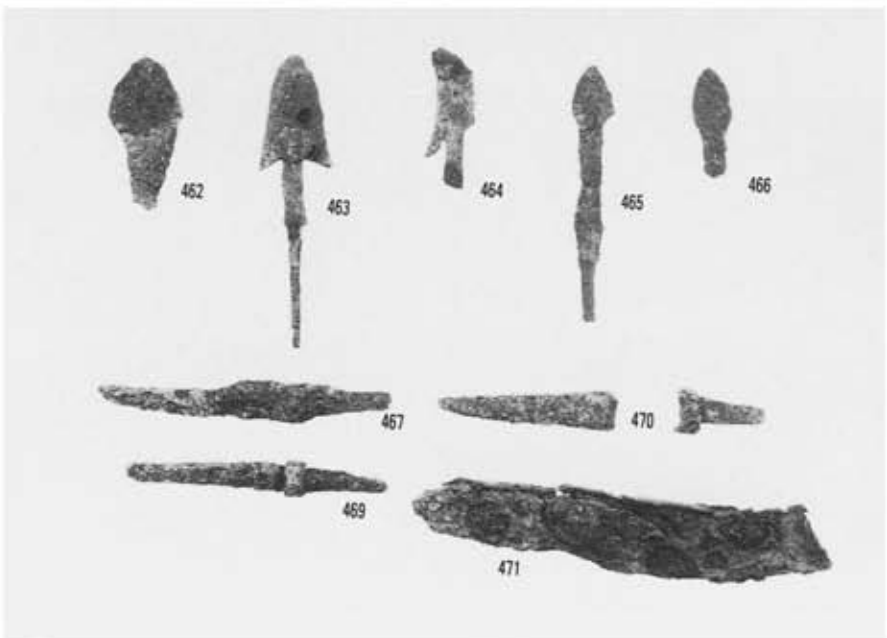
403～416　ST012古墳出土鉄器、装身具



都谷遺跡B地区

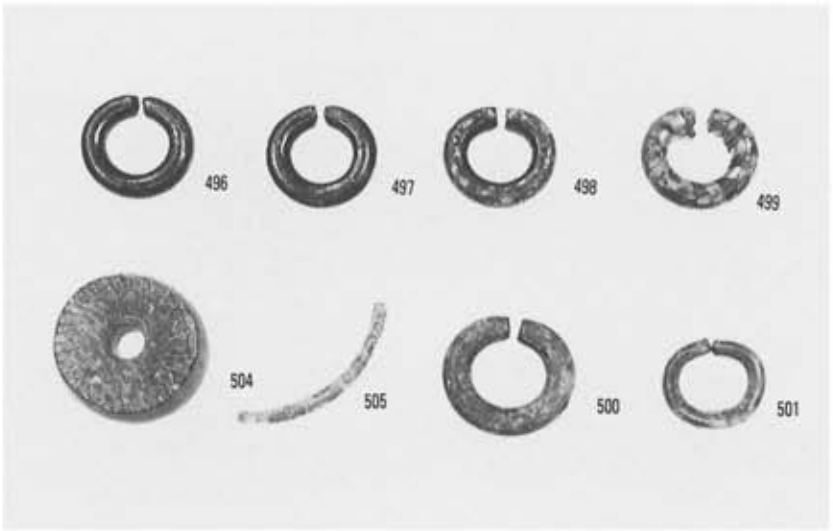
417・420　ST013古墳出土須恵器

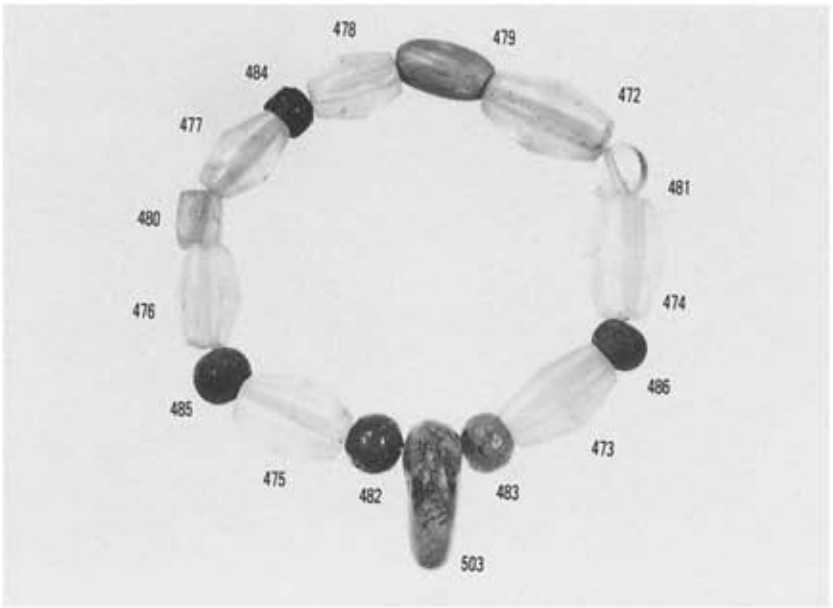
421～438　ST014古墳出土須恵器

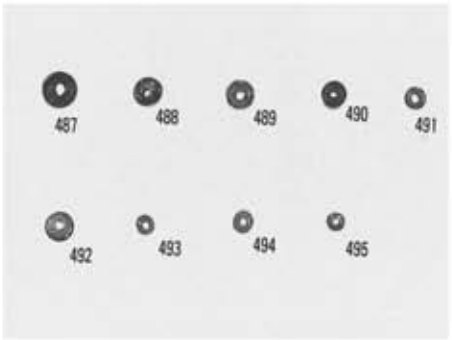


都谷遺跡B地区

442～456　ST014古墳出土須恵器、462～471　ST014古墳出土鉄器







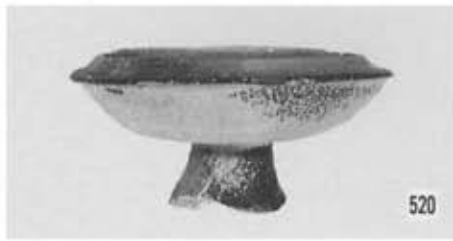
都谷遺跡B地区

ST014古墳出土装身具、石製品

506

515

516

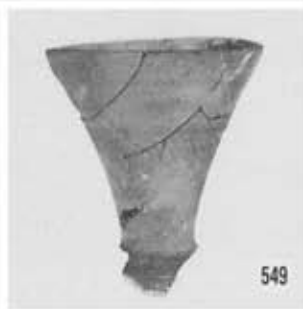

520

521

522

546

548

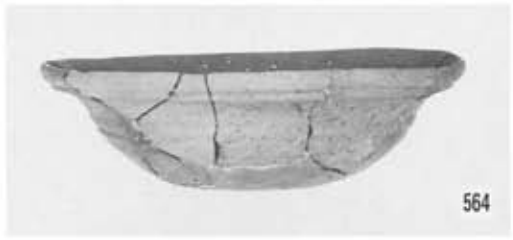

549

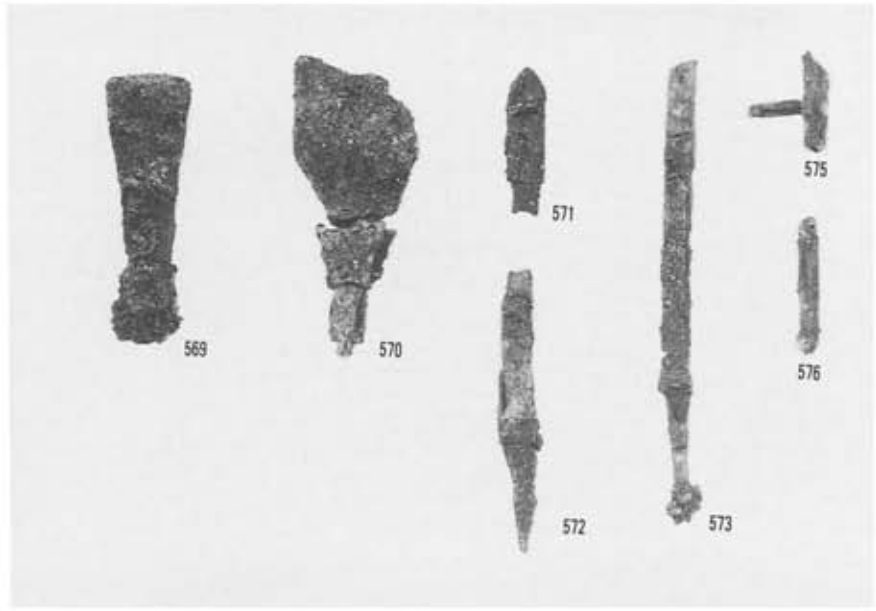
553

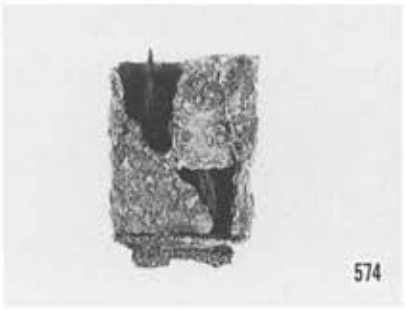
555

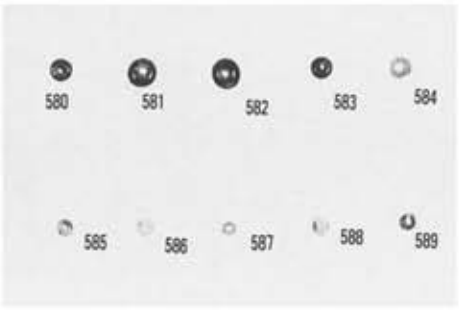
都谷遺跡B地区

ST015古墳出土須恵器









都谷遺跡B地区

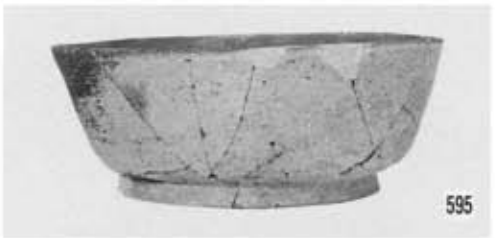
ST015古墳出土土器、鉄器、装身具

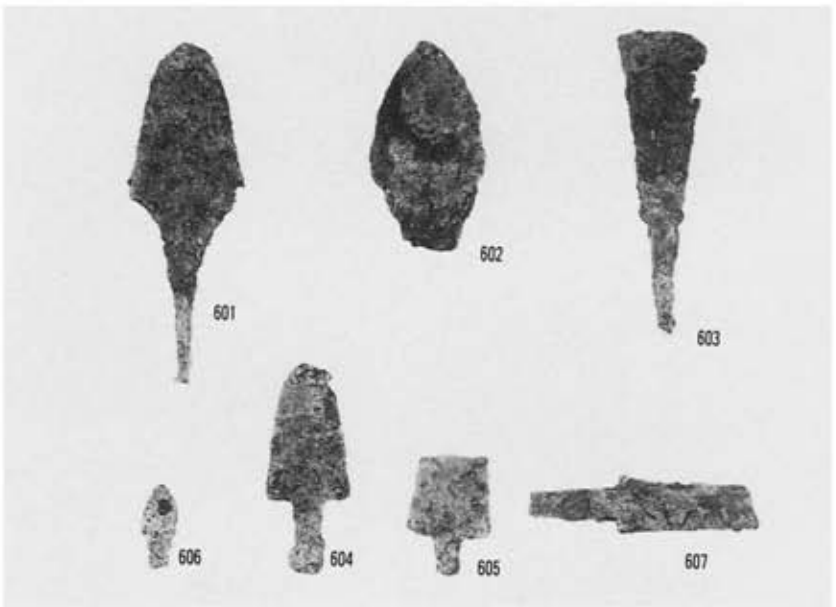
591

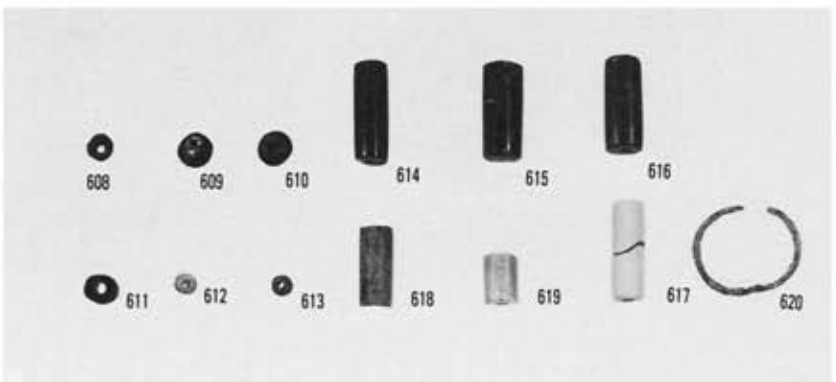
592

593

594


595

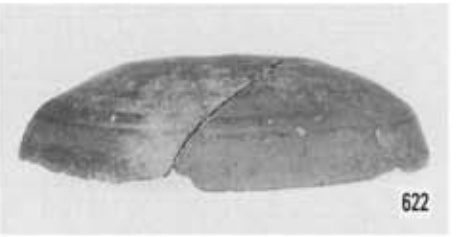

601 602 603 606 604 605 607


608 609 610 614 615 616 611 612 613 618 619 617 620

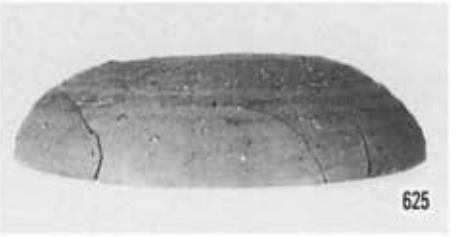
都谷遺跡B地区

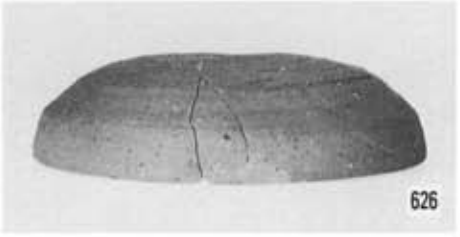
ST016古墳出土須恵器
鉄器、装身具

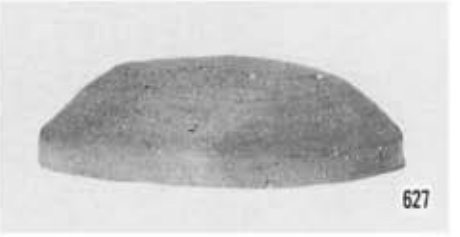
621


622

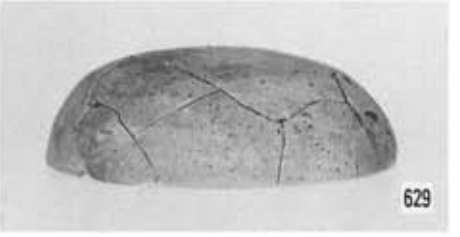
623


625


626


627

628


629

630

632

633

634

635

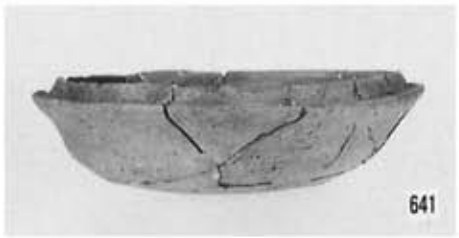
636

都谷遺跡B地区　ST017古墳出土須恵器

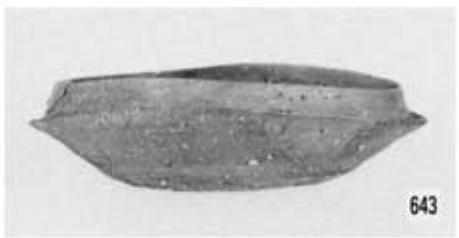
637

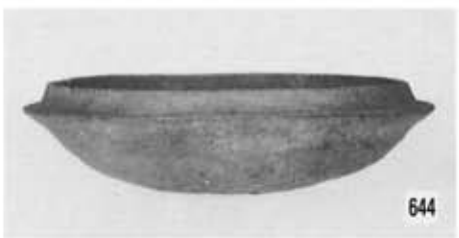
638

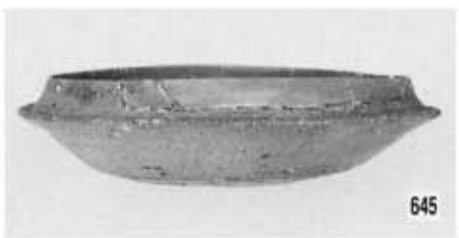
639


641

642


643


644

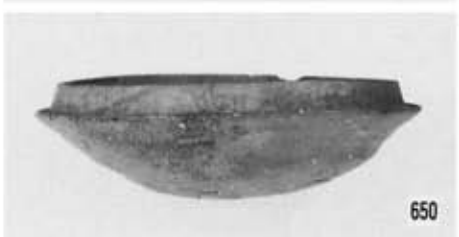

645

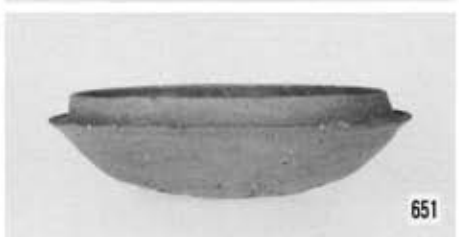
646

647

648

649


650

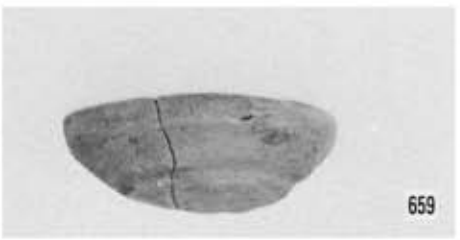

651

都谷遺跡B地区　ST017古墳出土須恵器

652

653

657


659

660

661

662

664

665

666

671

672

都谷遺跡B地区　ST017古墳出土須恵器

673

674

679

676

677

681

680

683

684

686

685

都谷遺跡B地区

ST017古墳出土須恵器

688

689

690

693

691

692

696

695

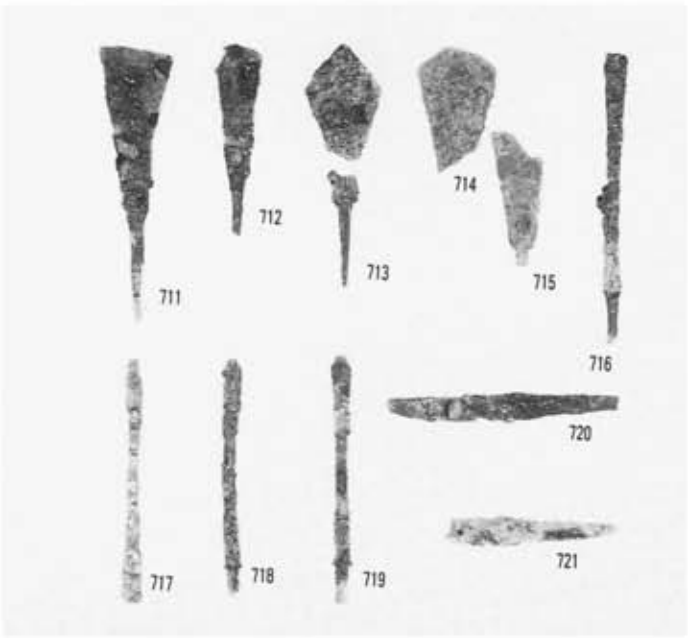
698

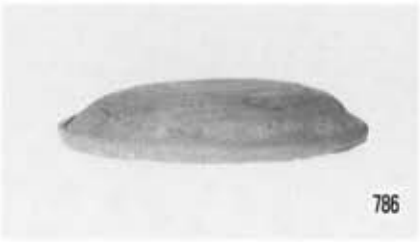
都谷遺跡B地区

ST017古墳出土須恵器

都谷遺跡B地区

ST017古墳出土土器



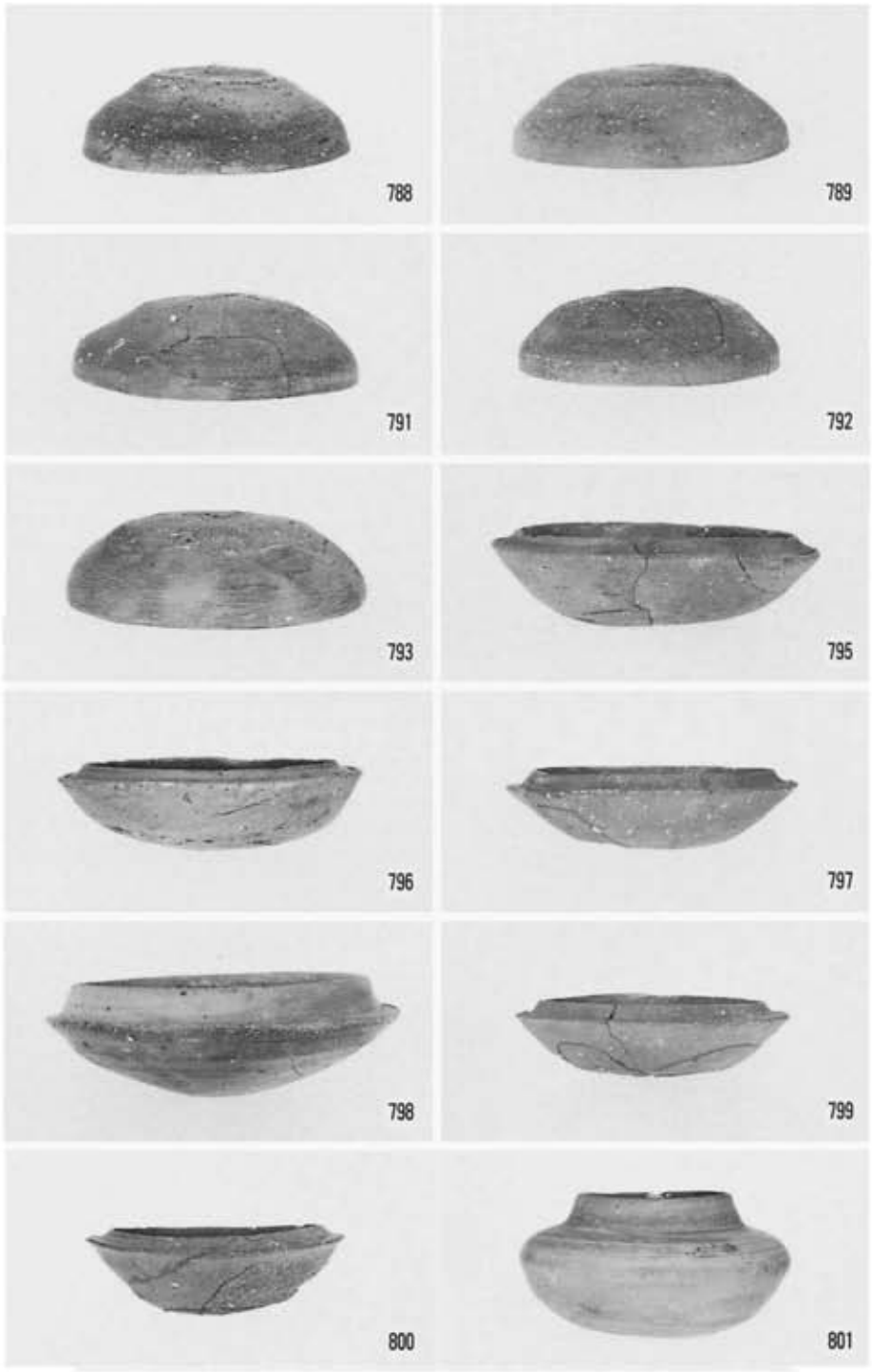


都谷遺跡B地区

711～721，783　ST017古墳出土鉄器、石製品

784，785　ST018古墳出土土器、鉄器

786，787　ST019古墳出土土器



都谷遺跡C地区

ST001古墳出土須恵器

804

803

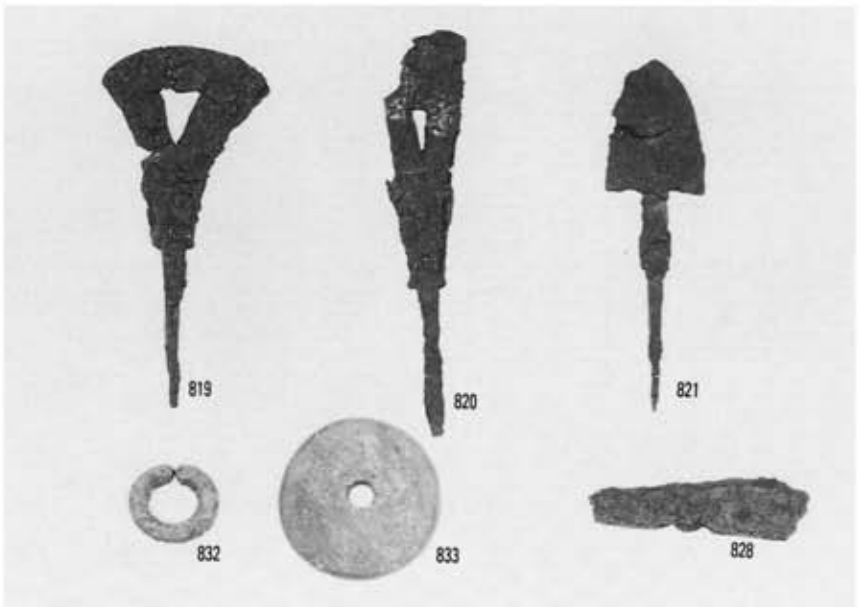
815

813

818

都谷遺跡C地区

ST001古墳出土土器、鉄器、装身具他


819

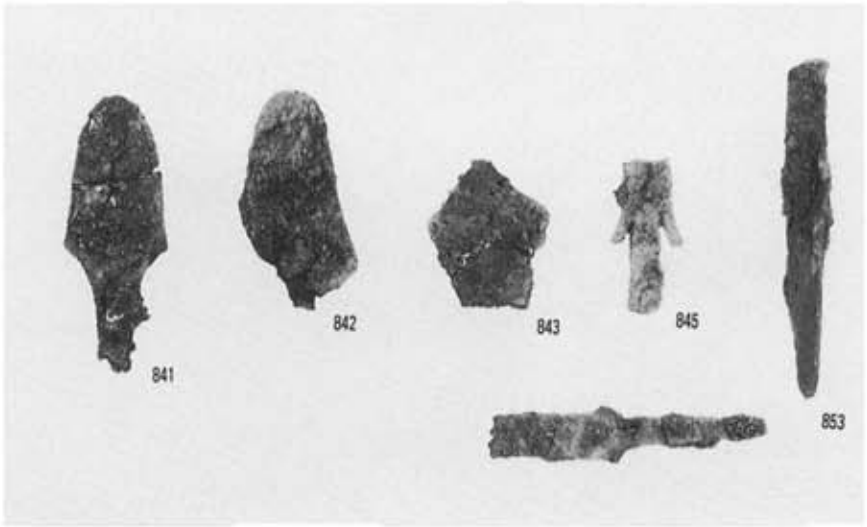
820

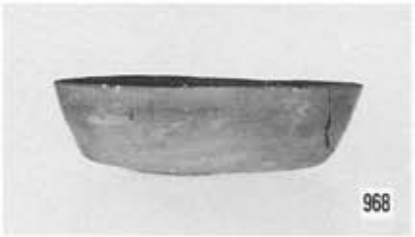
821

832

833

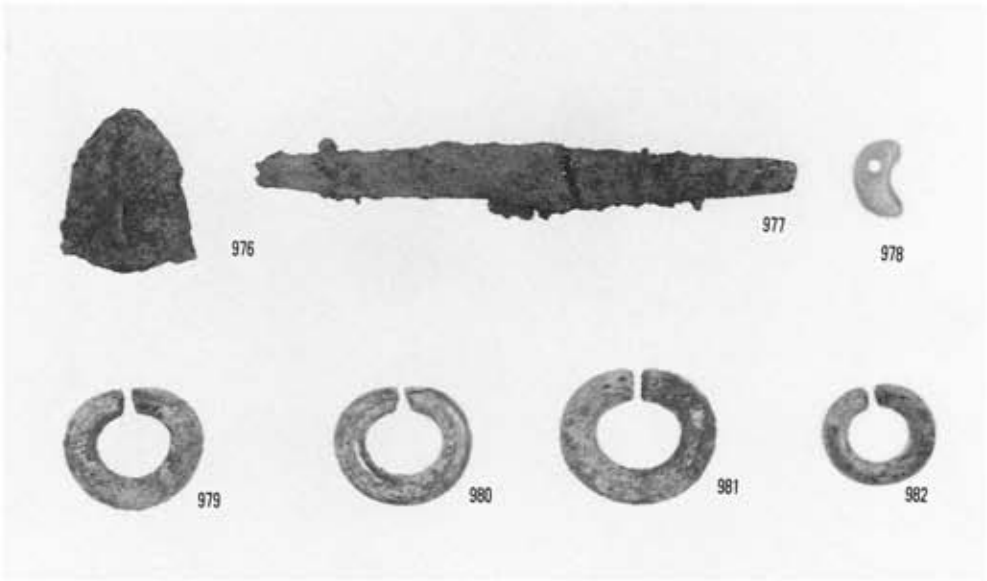
828





都谷遺跡D地区

ST001古墳出土須恵器



都谷遺跡D地区

976～982　ST001古墳出土鉄器、装身具

985・986　SK002古墳出土須恵器

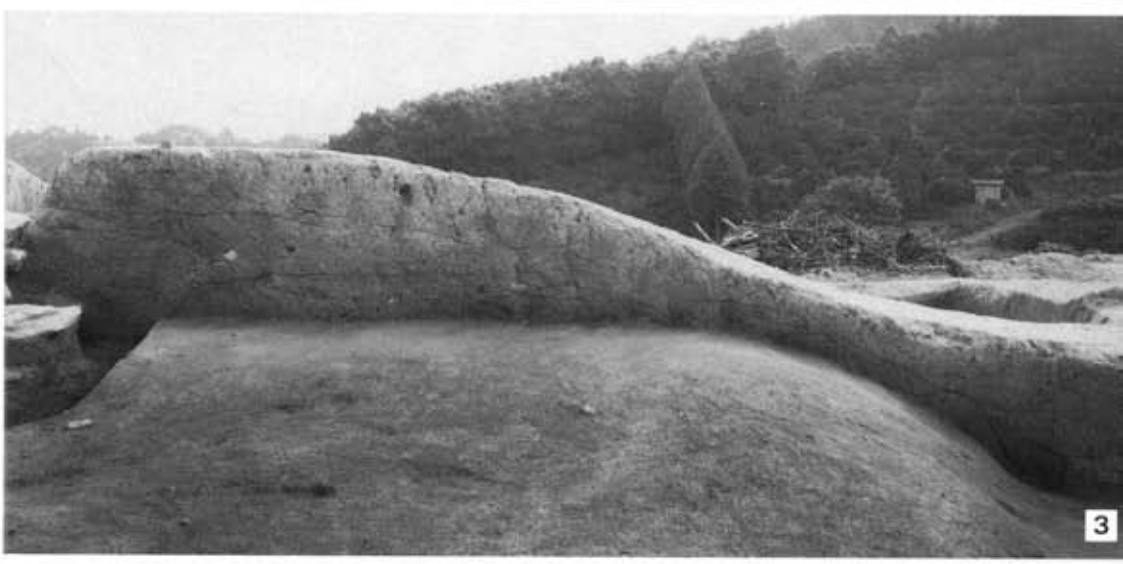
宮西遺跡　1．遺跡遠景〈北西から〉
2．同　　上〈南から〉

1

2

宮西遺跡　1．ST01古墳原景〈西から〉

2．　同　古墳墳丘〈西から〉



宮西遺跡　1．ＳＴ01古墳墳丘西側土層〈南から〉

2．　同　古墳墳丘東側土層〈南から〉

3．　同　古墳墳丘北側土層〈東から〉

宮西遺跡　1．ST01古墳石室〈南から〉

2．　同　古墳閉塞状況〈南から〉

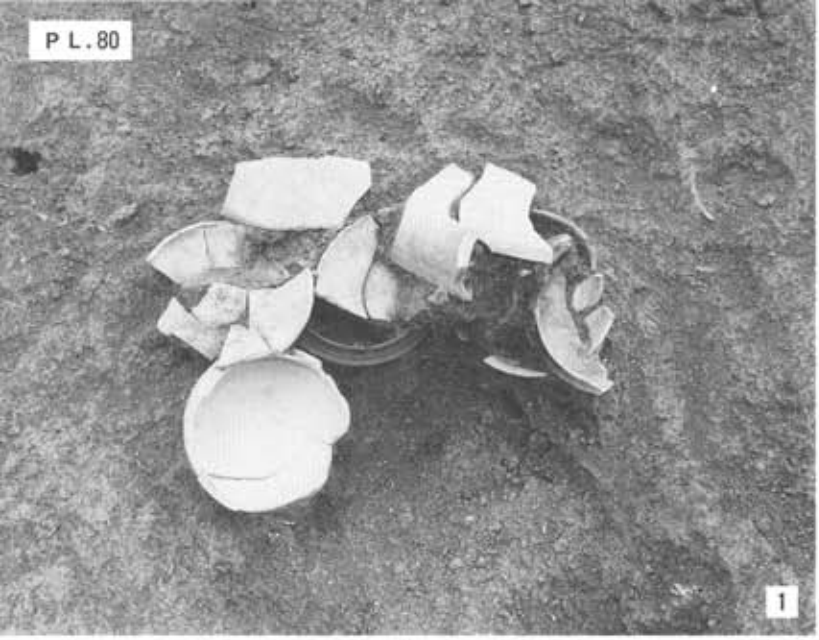
3．　　同　　上　　〈北から〉

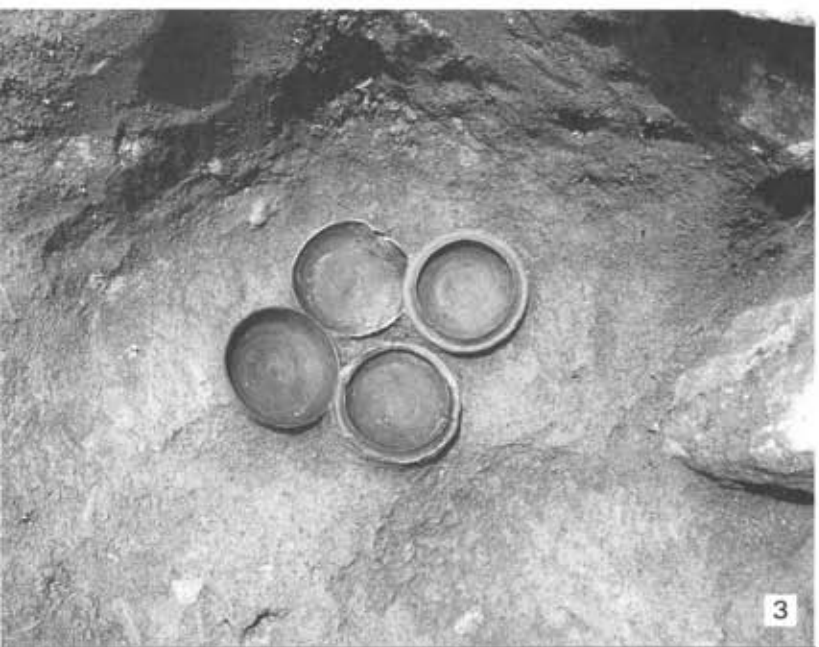
宮西遺跡

1．ＳＴ01古墳奥壁〈南から〉

2．　同　古墳右壁〈西から〉

3．　同　古墳左壁〈東から〉





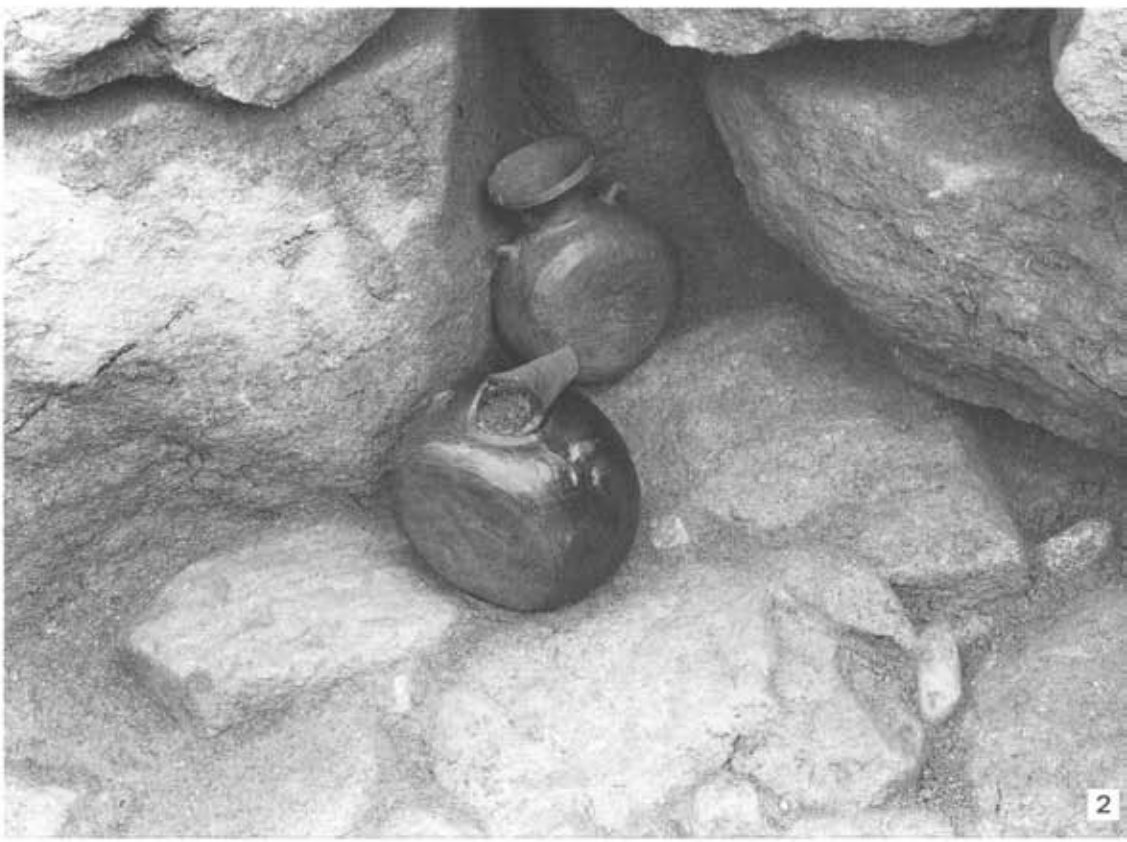
宮西遺跡

1．ＳＴ01古墳墳丘盛土内
　　遺物出土状況〈南西から〉

2．　同　上　〈南から〉

3．　同　古墳羨道西側
　　遺物出土状況〈南から〉

1

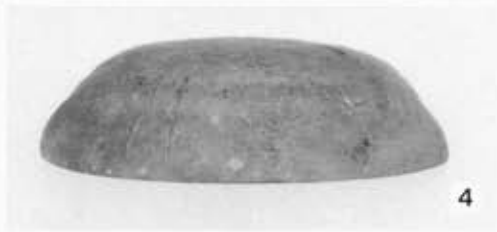


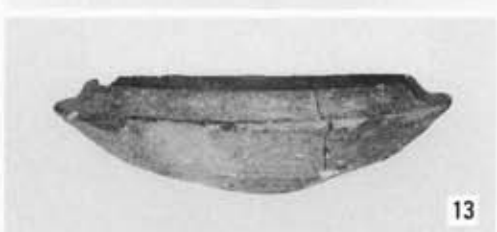
2

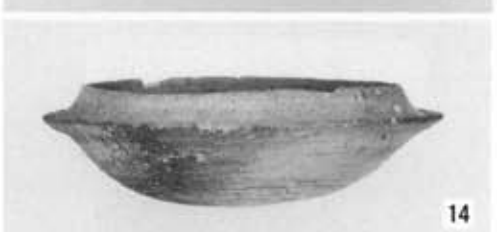
宮西遺跡

1．ST01古墳玄室前壁右隅
遺物出土状況〈西から〉

2．同　古墳玄室前壁左隅
遺物出土状況〈東から〉







宮西遺跡

ＳＴ01古墳出土須恵器

16

18

17

19

21

20

22

28

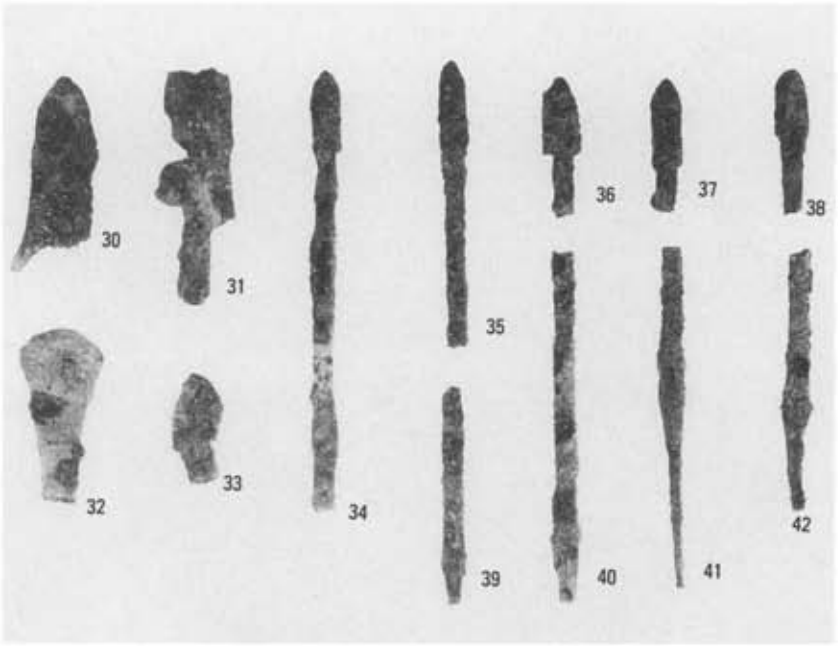
24

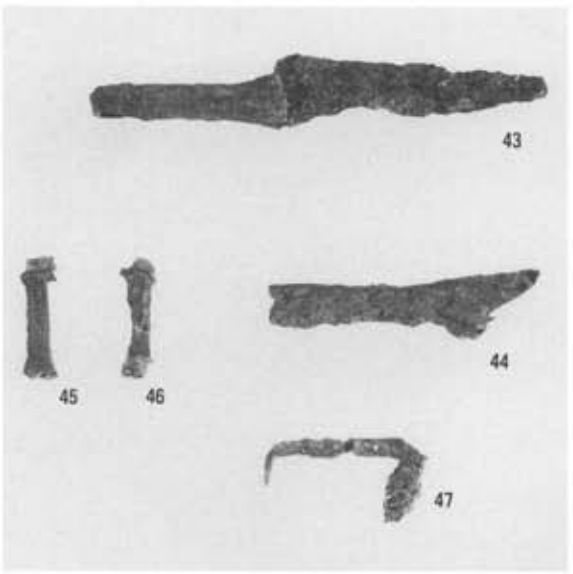
25

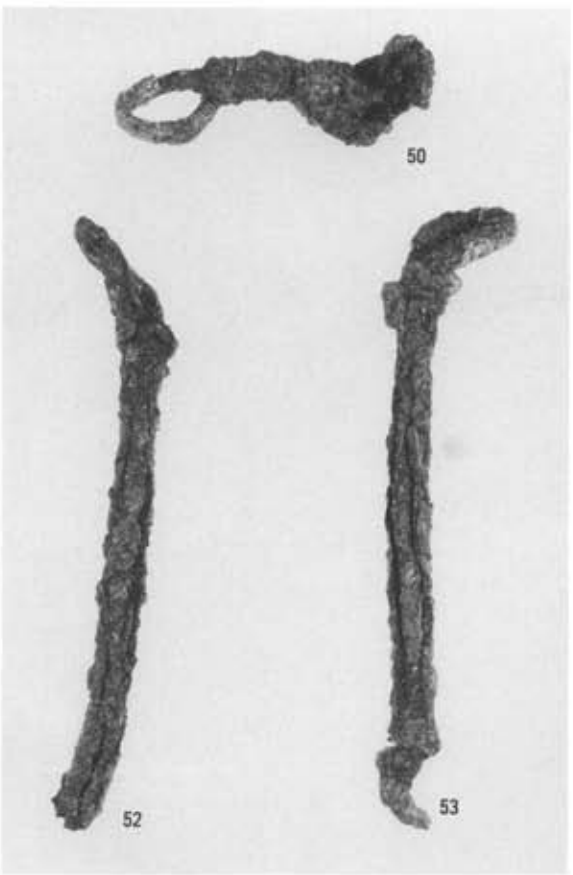
26

宮西遺跡

ＳＴ01古墳出土土器

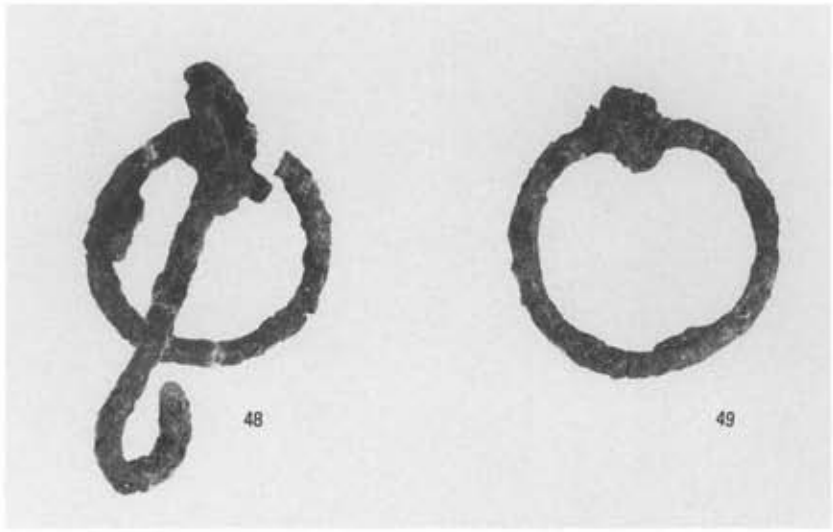


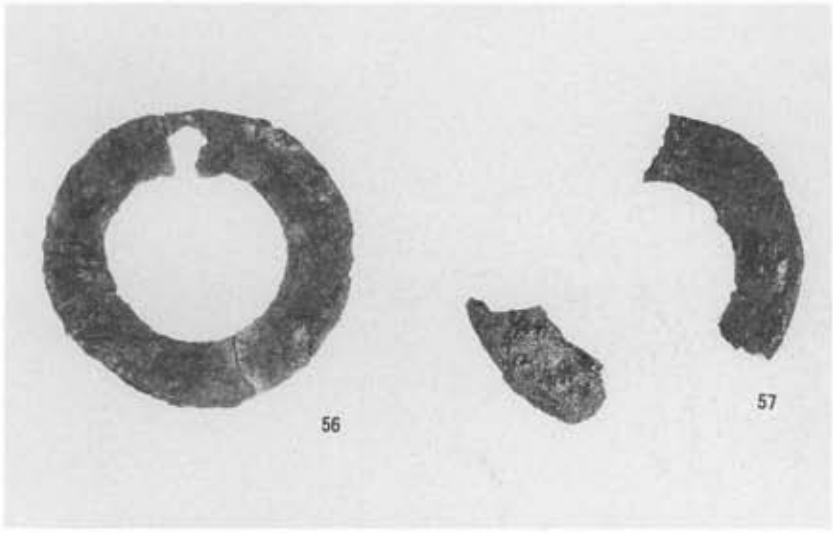


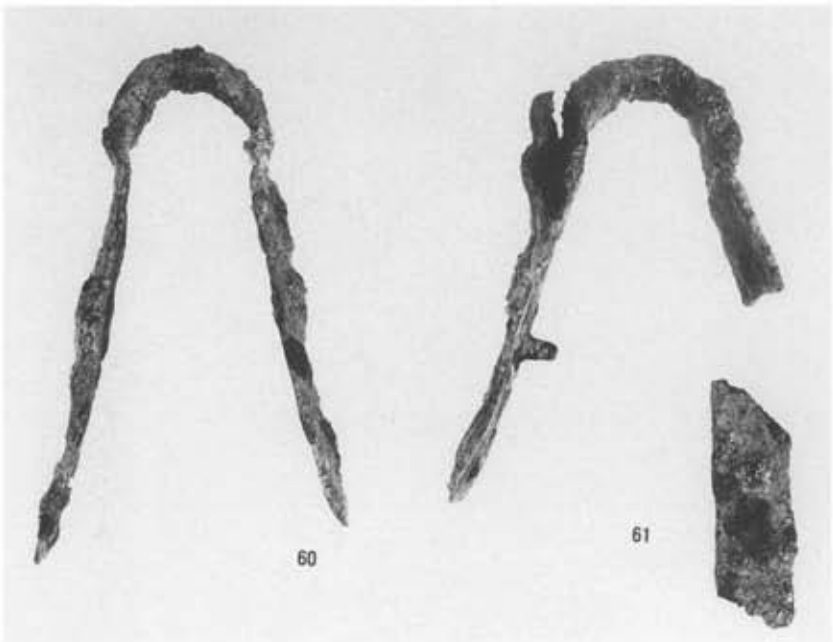


宮西遺跡

ST01古墳出土鉄器

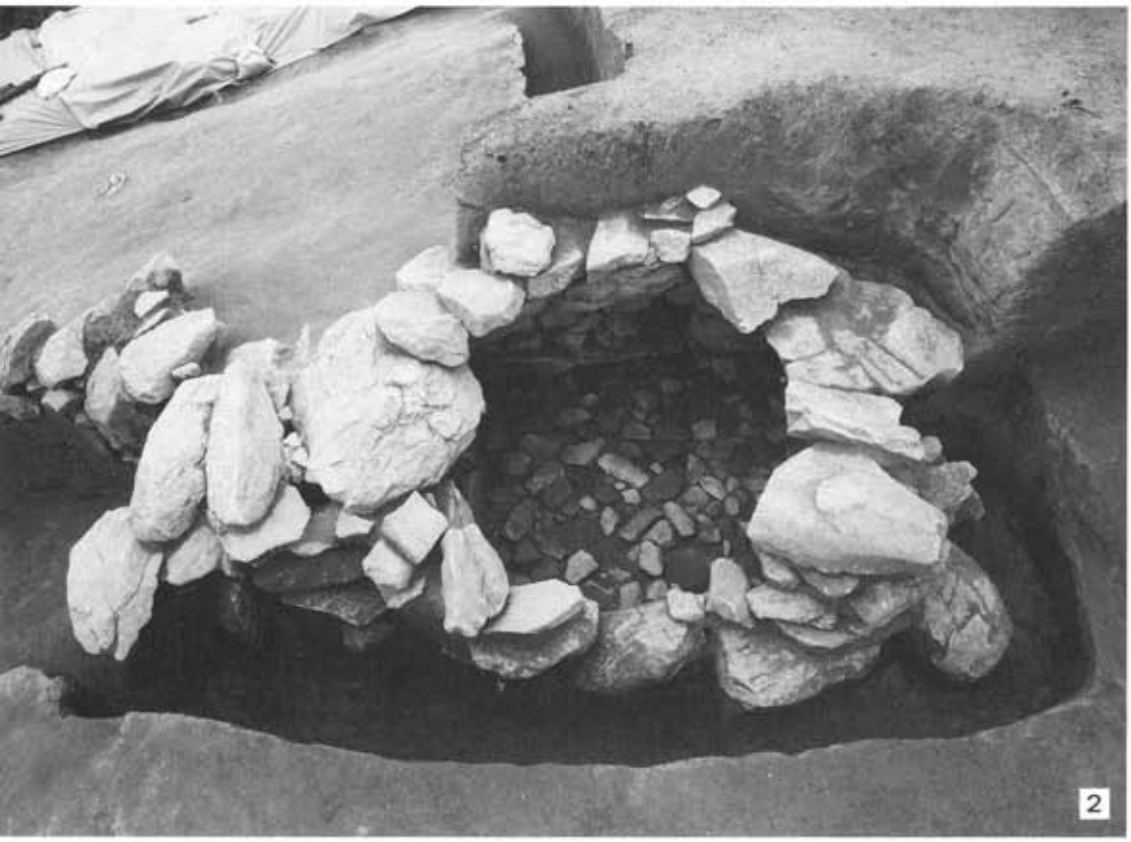




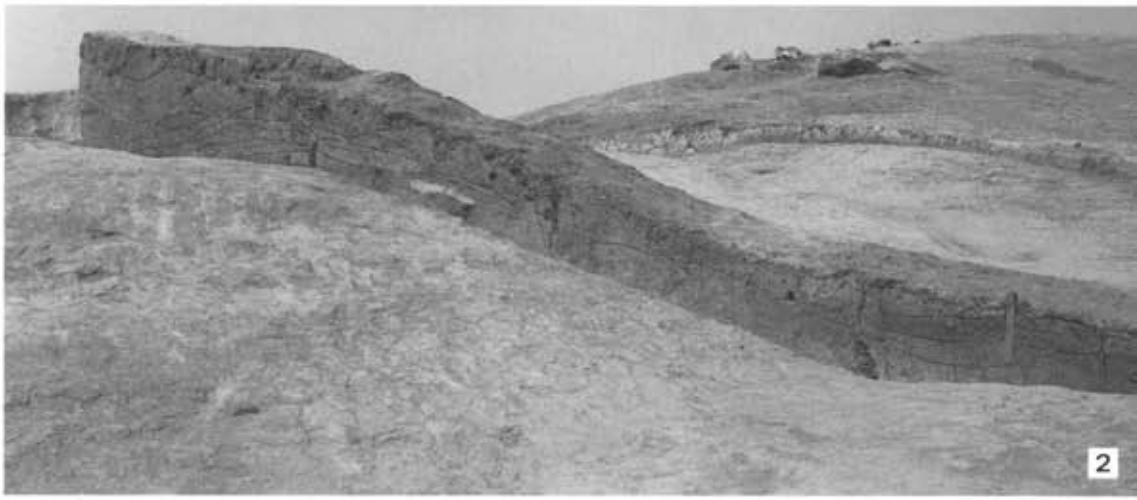


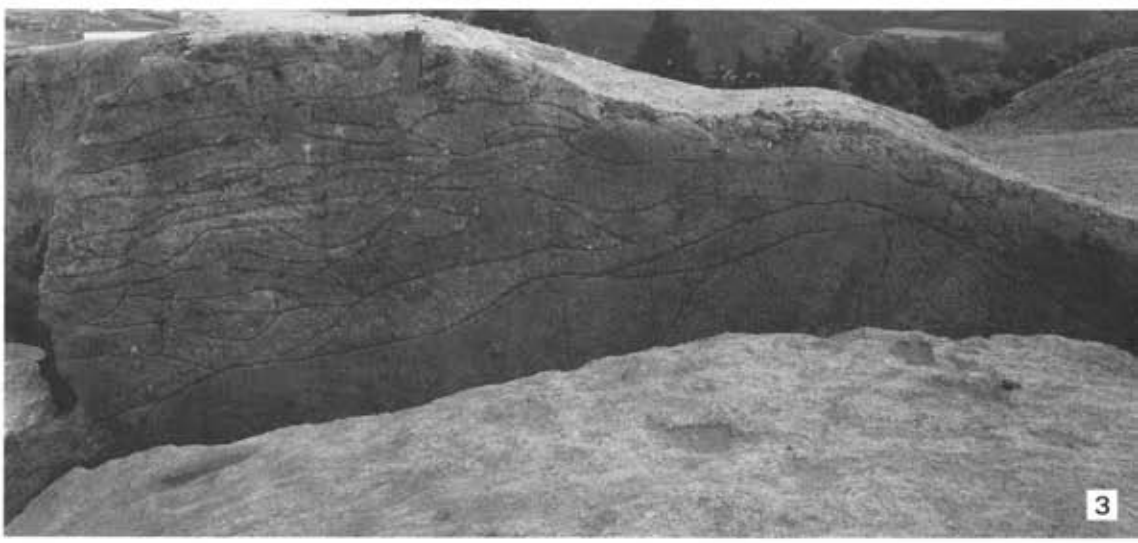
宮西遺跡

ＳＴ01古墳出土鉄器



宮西遺跡　1．ST02古墳原景〈西から〉
　　2．　同　古墳石室〈北から〉





宮西遺跡　1．ＳＴ02古墳墳丘南側土層〈東から〉　2．　同　古墳墳丘北側土層〈東から〉

3．　同　古墳墳丘西側土層〈北から〉

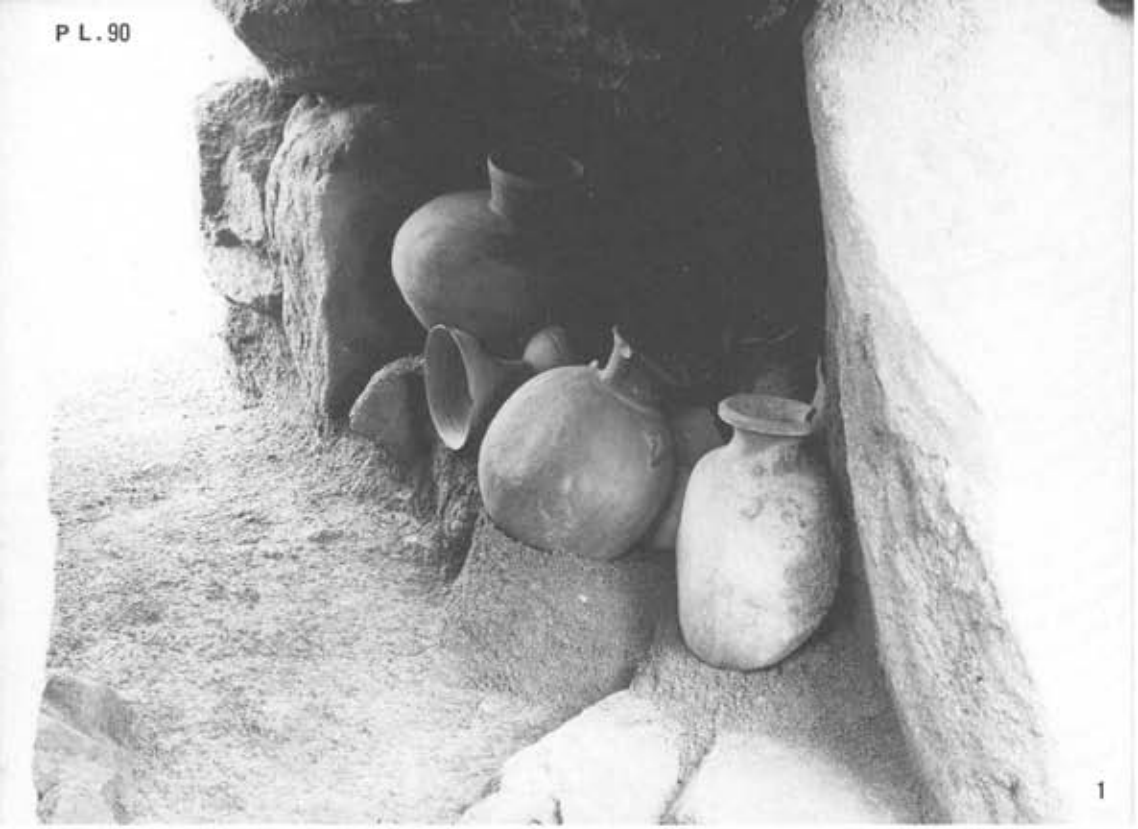
宮西遺跡　1．ＳＴ02古墳石室〈南東から〉　2．　同　古墳閉塞状況〈南東から〉
3．　同　古墳奥壁〈南東から〉　4．　同　古墳玄室右壁〈南から〉

1

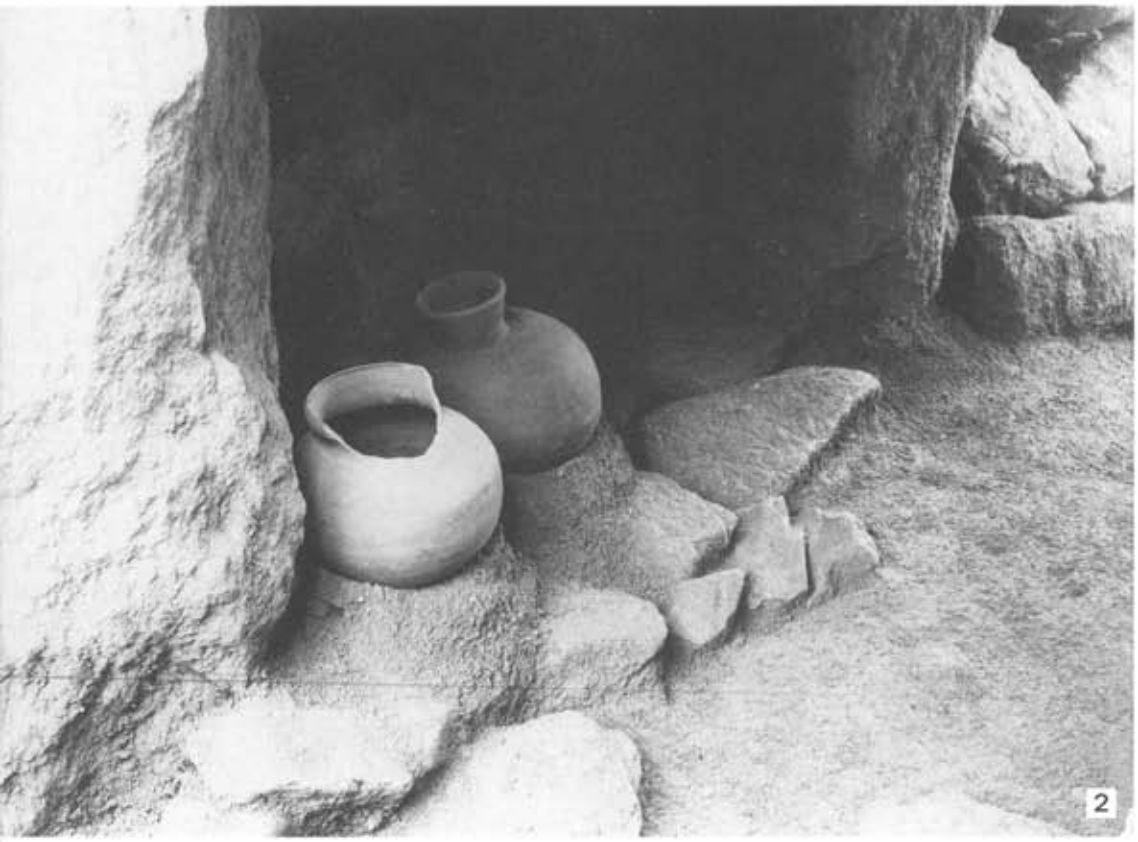
2

宮西遺跡　1．ST02古墳石室〈南東から〉

2．　同　古墳羨道部〈南東から〉



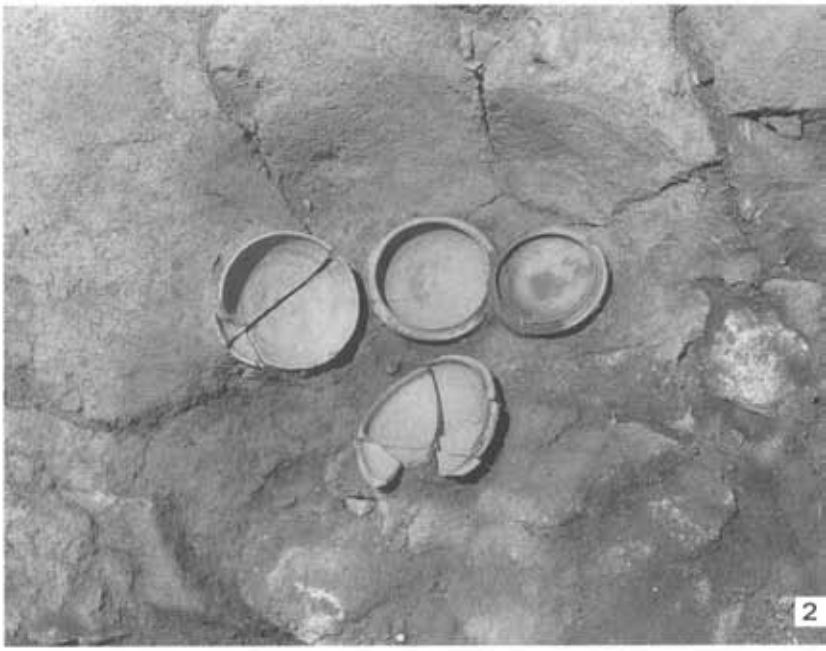
1



2

宮西遺跡　1．ST02古墳前室左壁遺物出土状況〈北西から〉

2．　同　古墳前室右壁遺物出土状況〈北西から〉



宮西遺跡　1．ＳＴ02古墳墳丘盛土内遺物出土状況〈南から〉　2．　同　古墳前庭部遺物出土状況〈東から〉
3．　同　古墳玄室内遺物出土状況〈東から〉　4．　同　古墳玄室内遺物出土状況〈東から〉

63

64

65

66

68

69

70

71

73

79

89

90

91

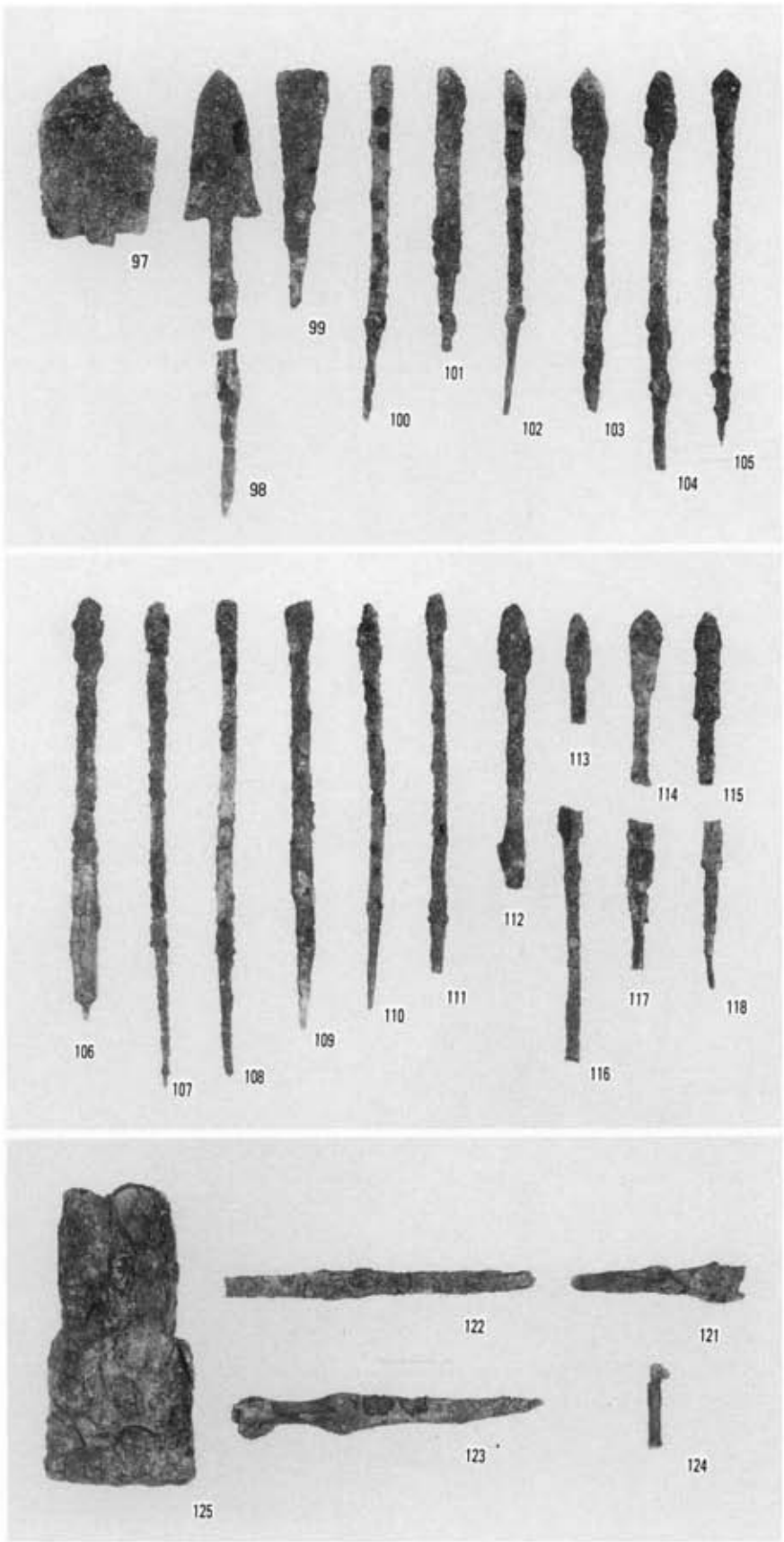
92

宮西遺跡

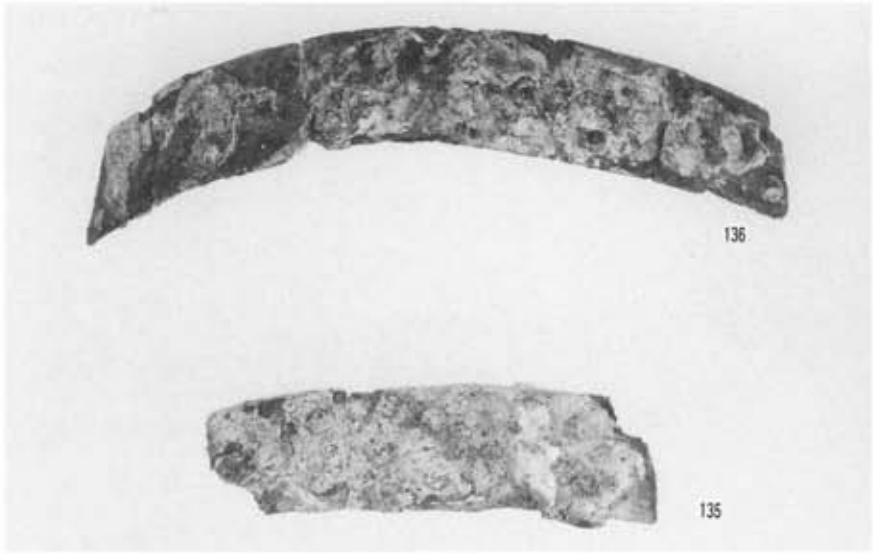
ＳＴ02古墳出土須恵器

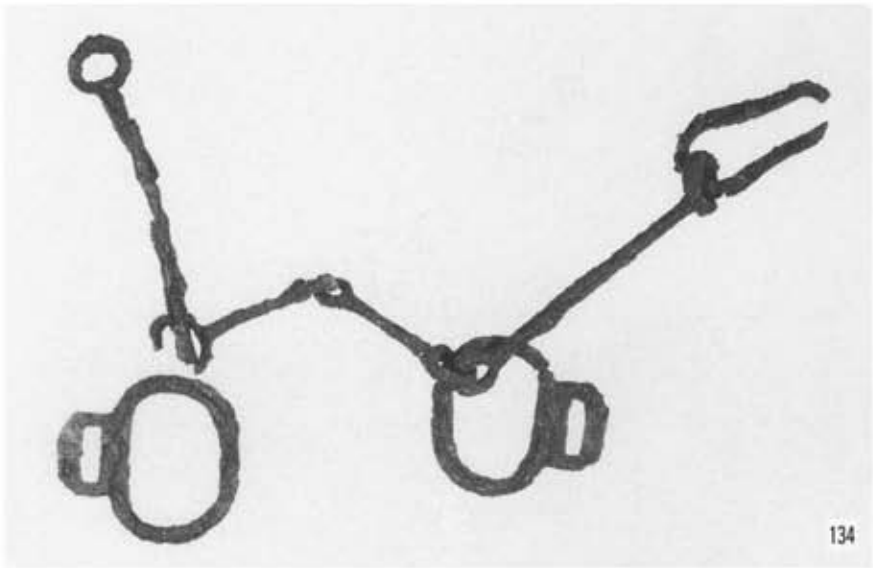
宮西遺跡

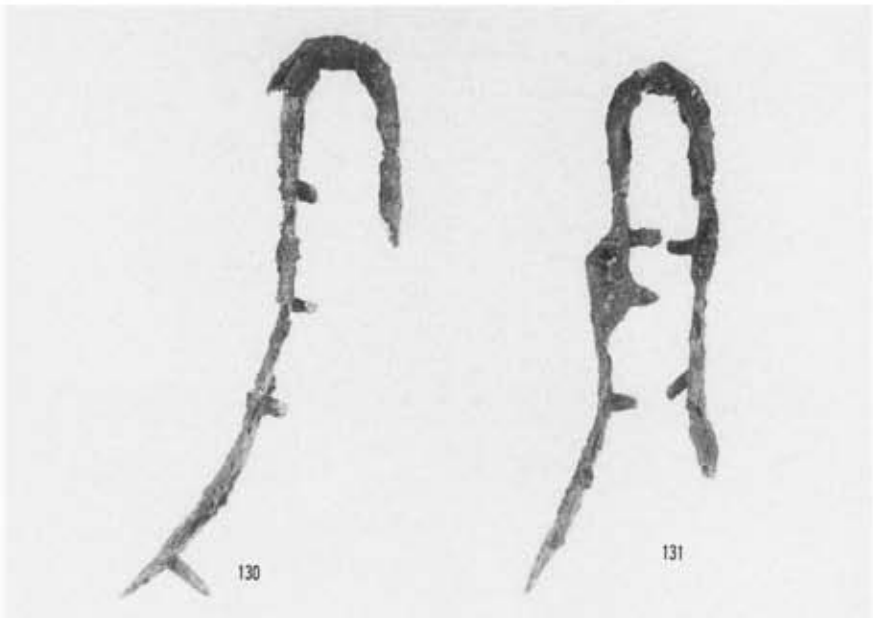
ST02古墳出土須恵器



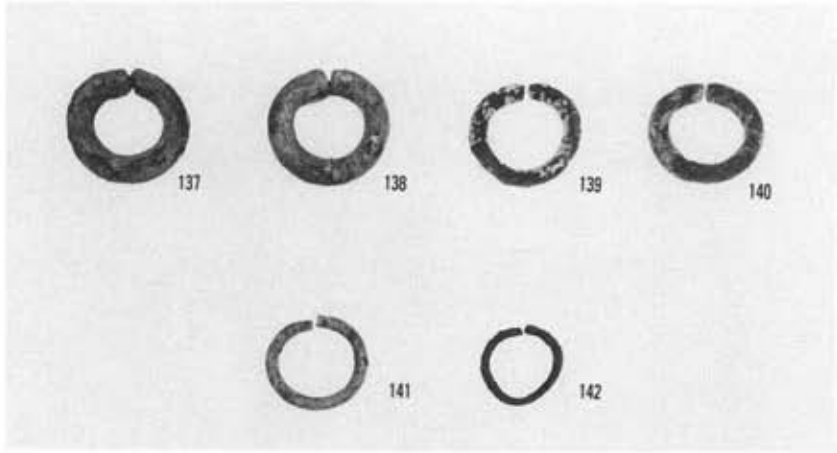
宮西遺跡　ＳＴ02古墳出土鉄器

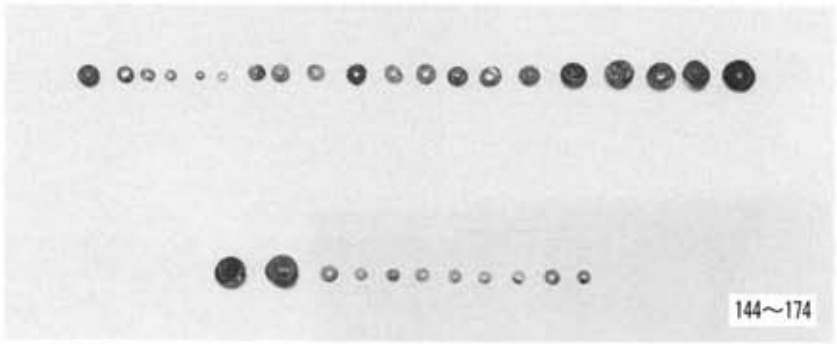


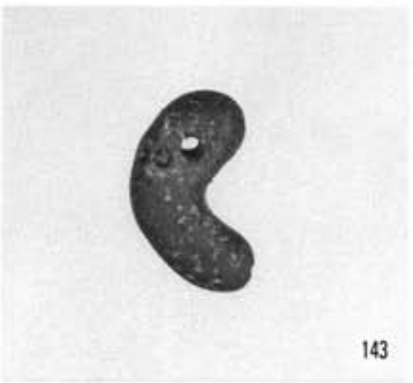




宮西遺跡　ＳＴ02古墳出土鉄器







宮西遺跡　　ＳＴ02古墳出土装身具、石製品

宮西遺跡

1．2　ＳＸ04火葬墓
〈北東から〉

宮西遺跡

176，ＳＸ04火葬墓出土

175，177　表土

山浦西北方遺跡

1．遺跡遠景〈東から〉

2．ST01古墳原景
〈西から〉

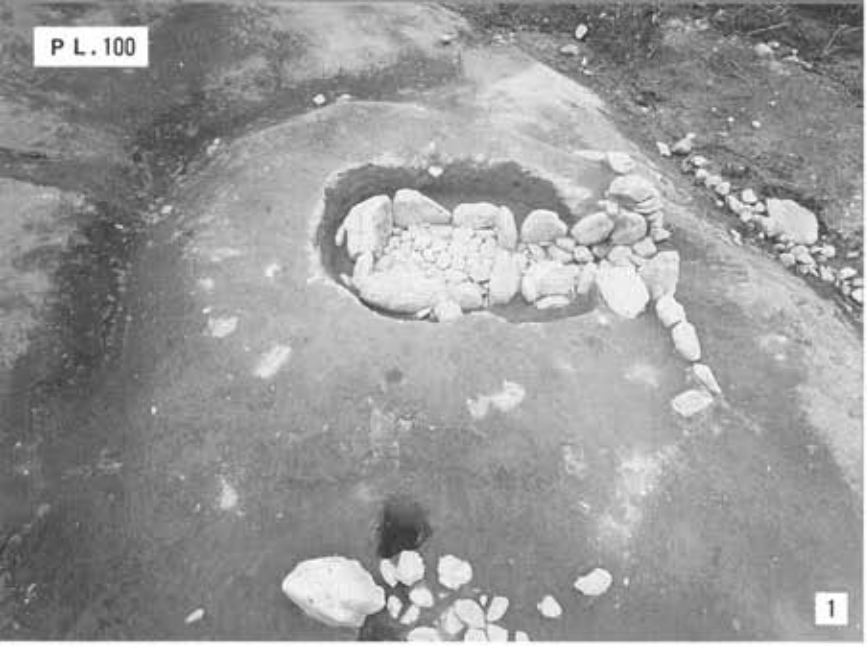
3．　同　古墳全景
〈南西から〉

山浦西北方遺跡

1．ＳＴ01古墳全景〈南から〉

2．　同　古墳閉塞石〈南から〉

3．　同　古墳周溝〈北東から〉

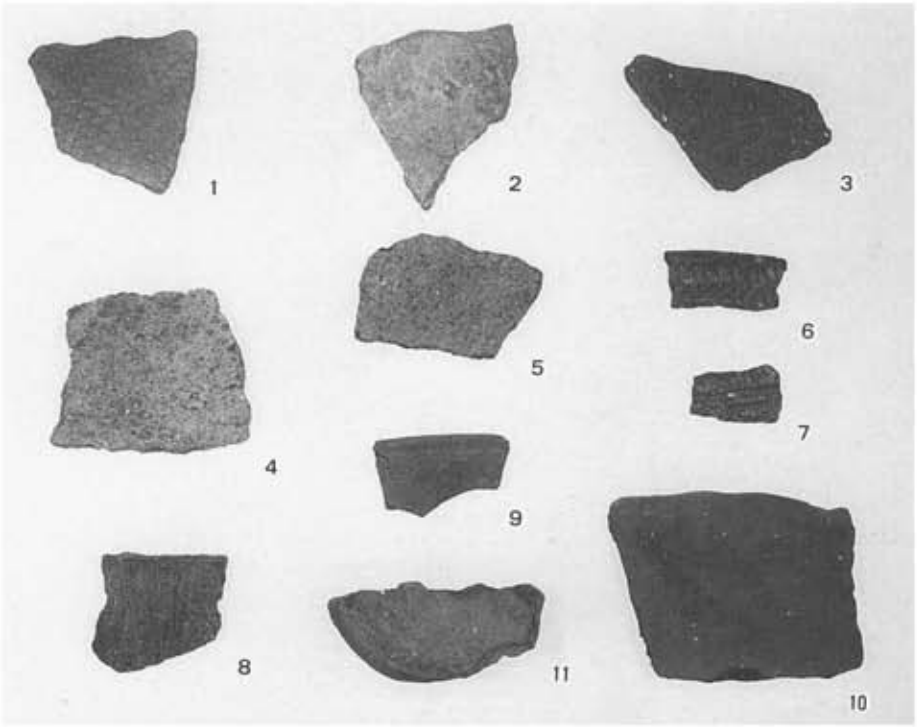


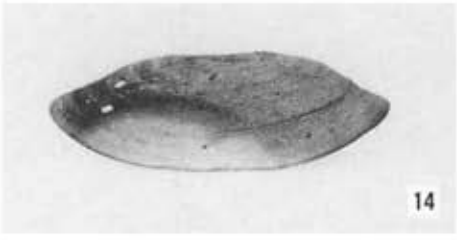
山浦西北方遺跡

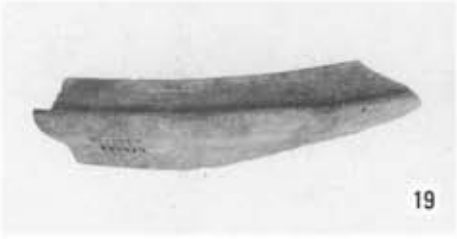
1．ＳＴ01古墳全景〈南から〉

2．ＳＸ03列石、ＳＤ04溝〈東から〉

3．ＳＸ03列石〈南から〉







山浦西北方遺跡

1～11. 縄文土器

12～20.
ST01古墳出土須恵器

21

22

23

35

36

37

38

39

33

34

40

25

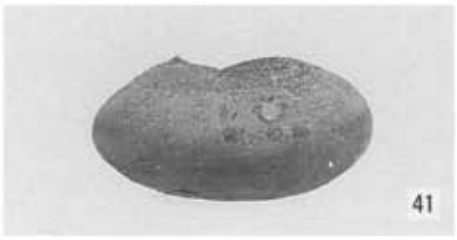
29

26

山浦西北方遺跡

21～29.
ＳＴ01古墳出土土器

33～40.
ＳＴ02古墳墓道出土須恵器


41

42

43

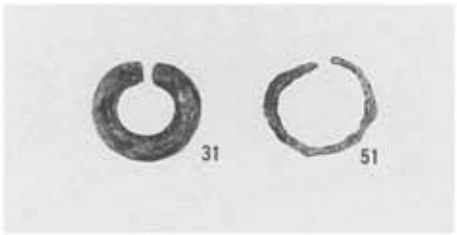
44

46

49

50

45


31

51

山浦西北方遺跡

41～50．ＳＴ02古墳墓道出土須恵器

31．ＳＴ01古墳出土耳環

51．ＳＴ02古墳墓道出土耳環

1

2

3

山浦新田遺跡

1．遺跡全景〈南から〉

2．ＳＴ01古墳原景
〈南から〉

3．ＳＴ01古墳原景
〈東から〉

1

2

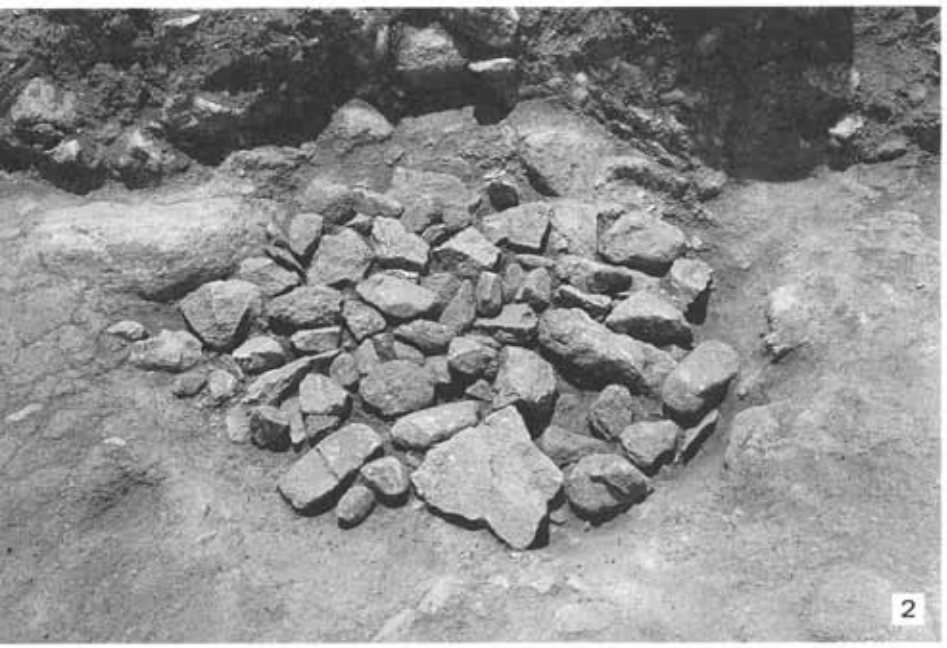
3

山浦新田遺跡

1．ＳＴ01古墳全景〈東から〉

2．　同　古墳全景〈南から〉

3．　同　古墳奥壁裏込め石
〈北から〉



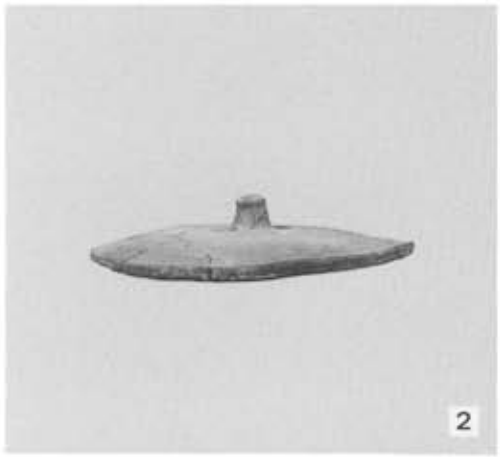
山浦新田遺跡

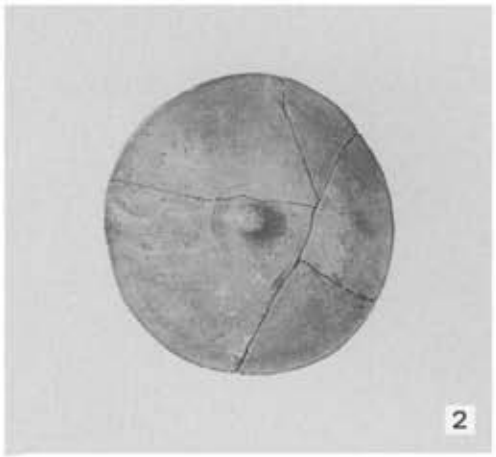
1．ＳＸ02集石土壙、
ＳＰ03土壙墓遠景〈南から〉

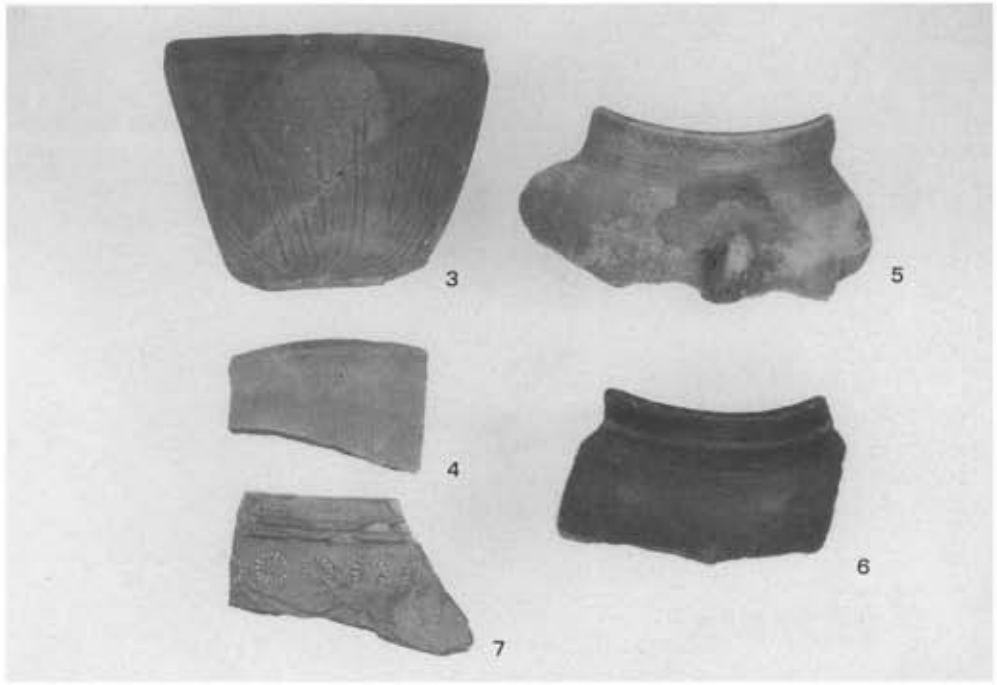
2．ＳＸ02集石土壙〈東から〉

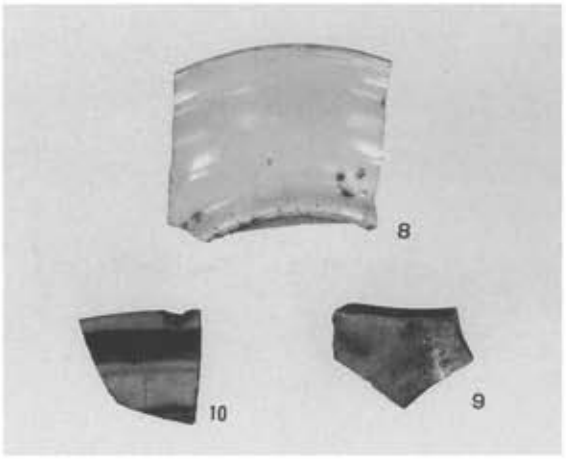
3．ＳＸ02集石土壙掘り方〈東から〉

4．ＳＰ03土壙墓〈南西から〉









山浦新田遺跡

2．ＳＴ01古墳出土須恵器

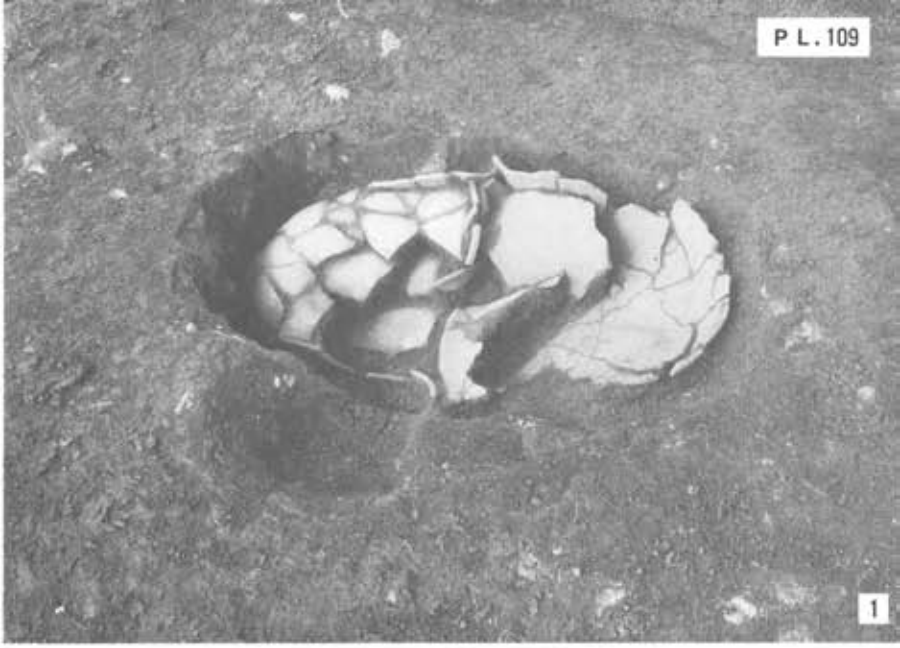
3～10．歴史時代の土器

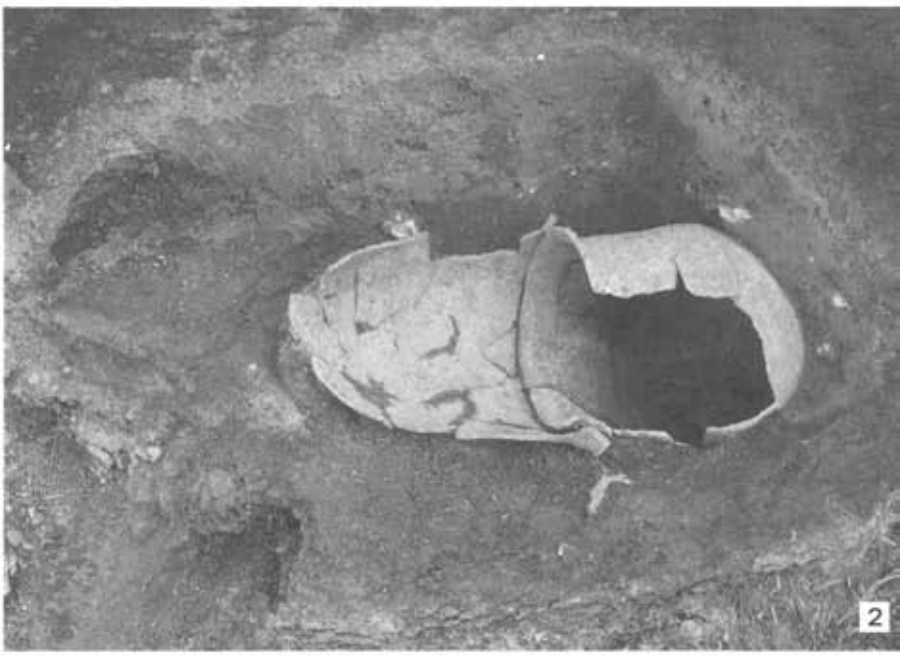
荻野遺跡

1．A－II区全景
〈西から〉

2．B－I区全景
〈西から〉

3．B－IV区全景
〈西から〉



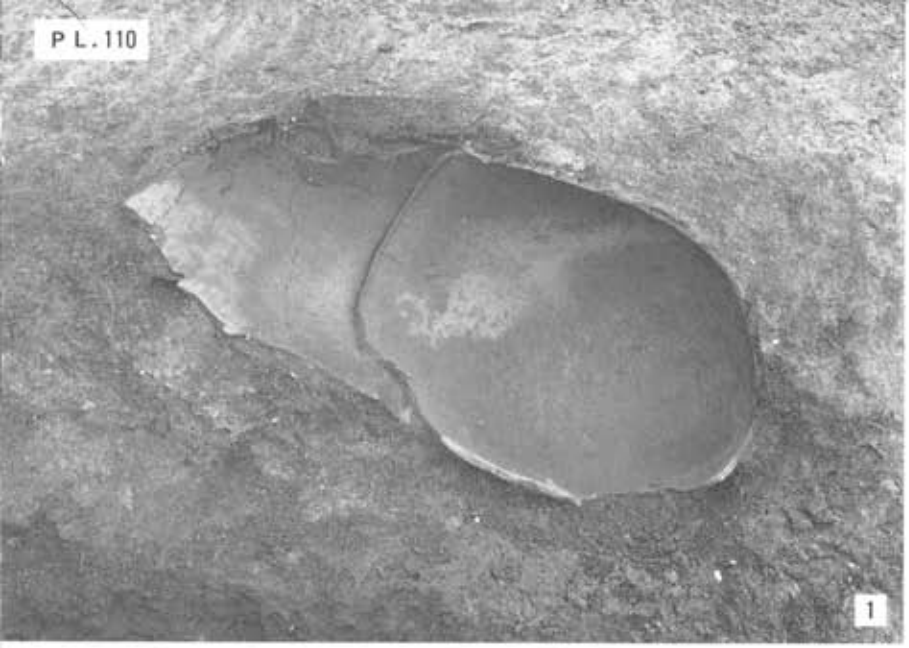


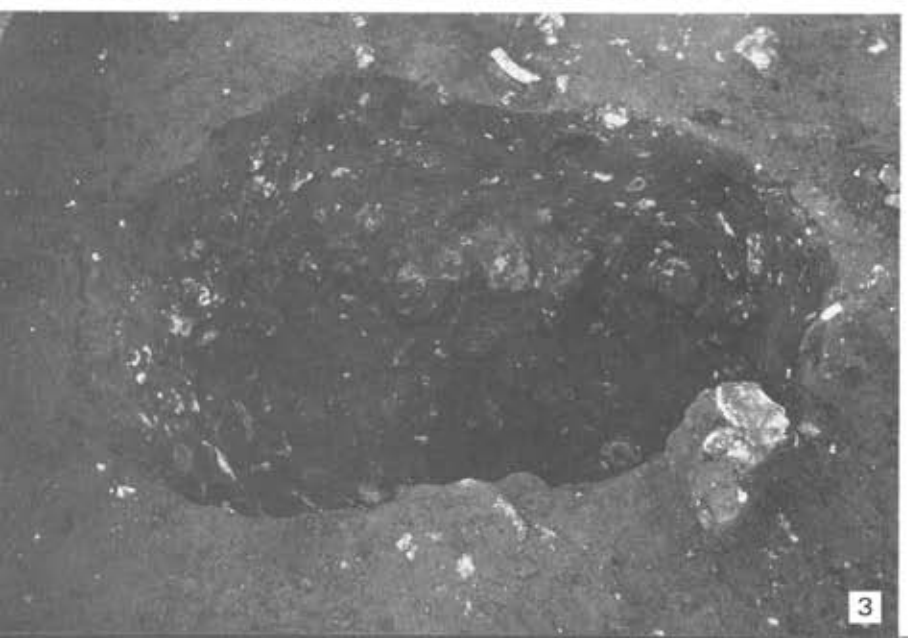
荻野遺跡

1．ＳＪ006甕棺墓〈南から〉

2．ＳＪ007甕棺墓〈北西から〉

3．ＳＪ010甕棺墓〈北西から〉



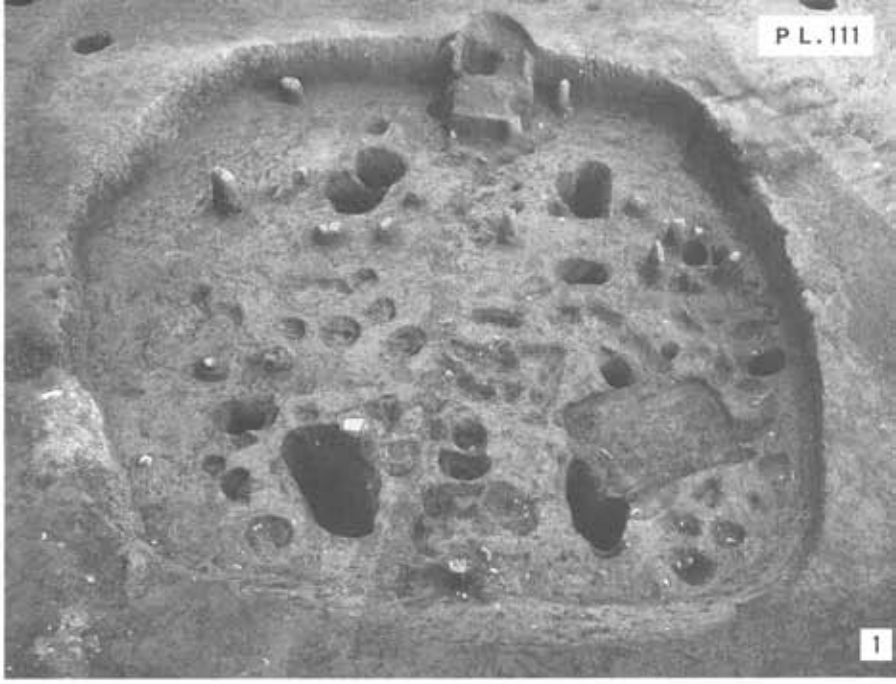


荻野遺跡

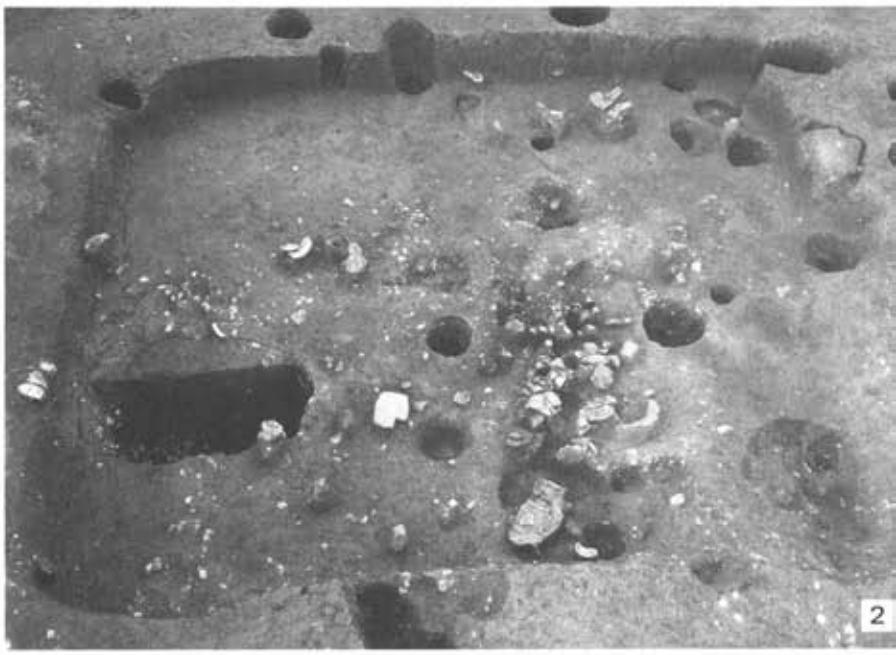
1．ＳＪ011甕棺墓〈北西から〉

2．ＳＢ002住居跡
遺物出土状況〈南から〉

3．ＳＢ002住居跡内土壙
〈南から〉



1



2

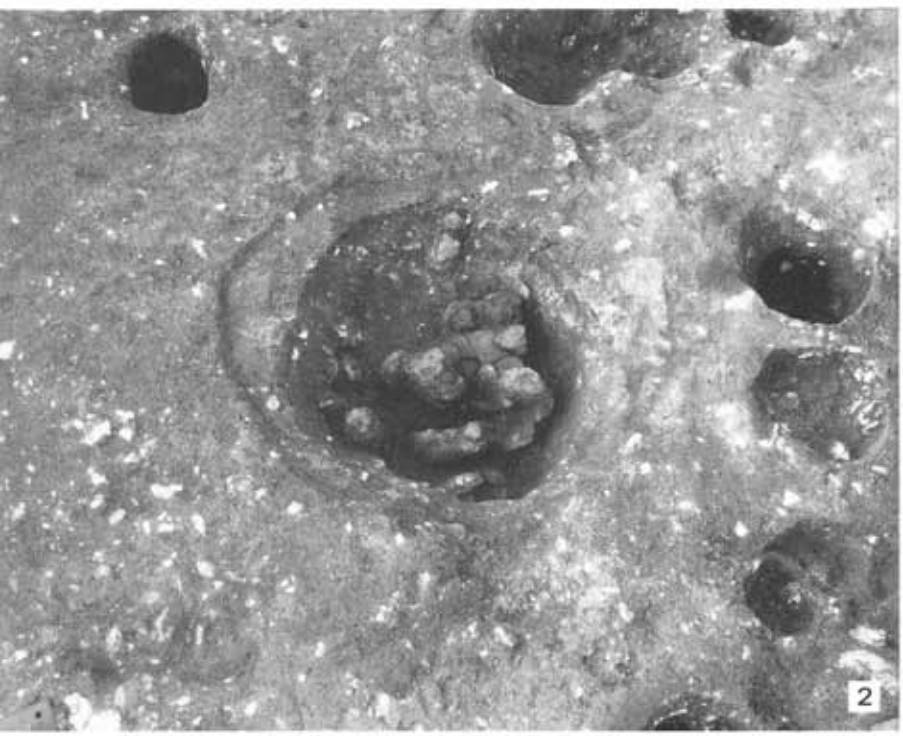
3

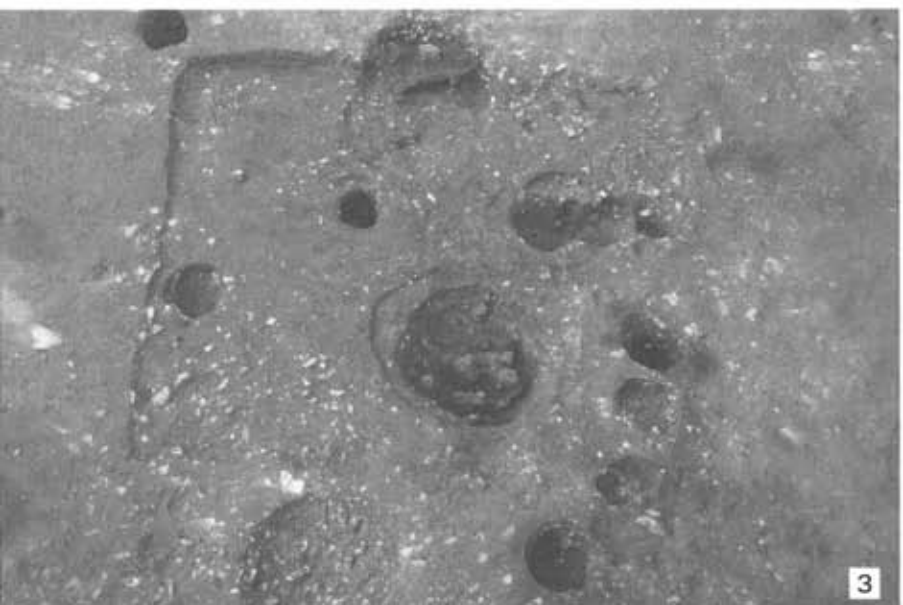
荻野遺跡

1．ＳＢ001住居跡〈西から〉

2．ＳＢ002住居跡〈南から〉

3．ＳＢ003住居跡〈南から〉



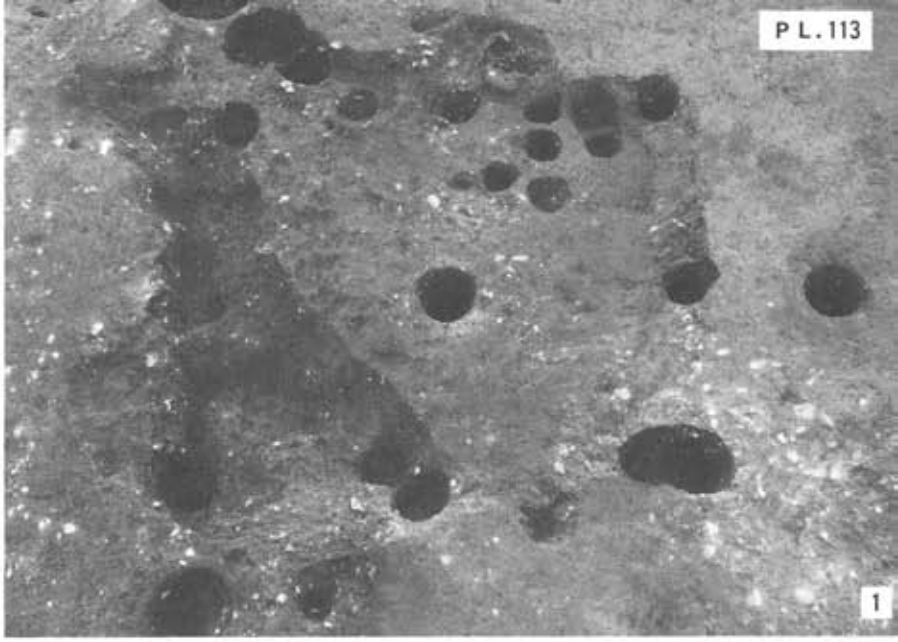


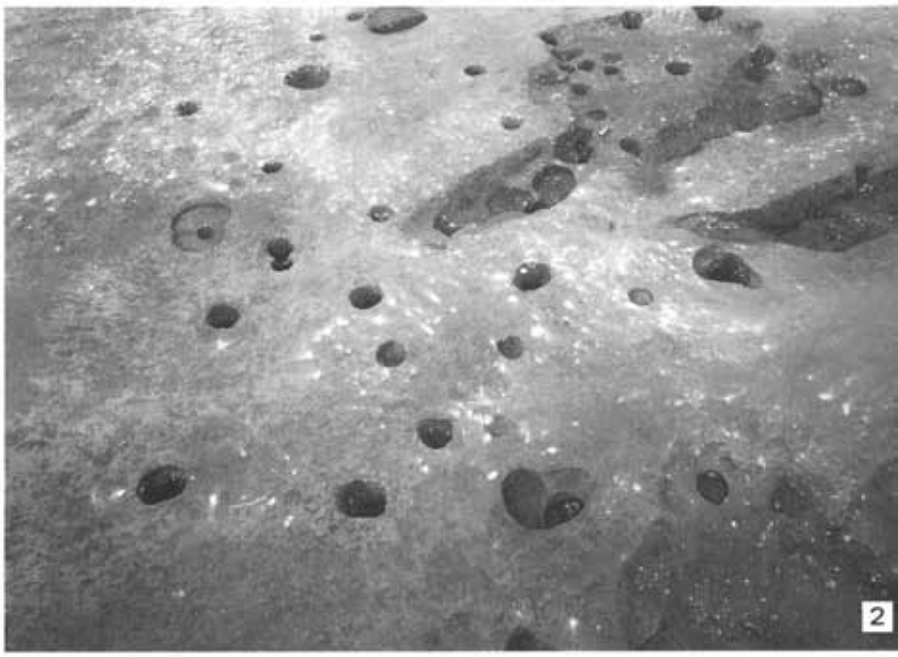
荻野遺跡

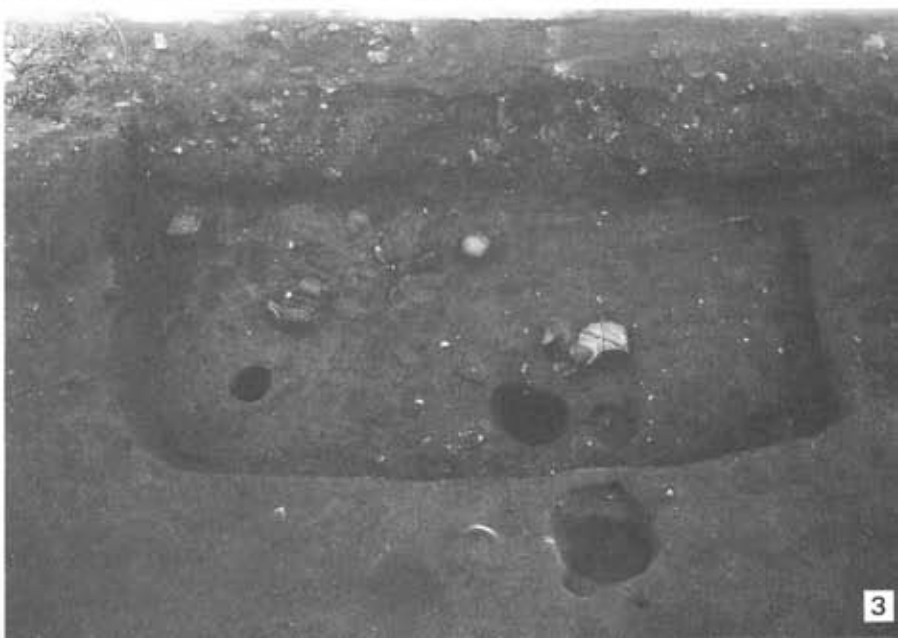
1．SB004住居跡〈南西から〉

2．SB005住居跡〈南東から〉

3．SB005住居跡内土壙
〈南東から〉







荻野遺跡

1．SB006住居跡〈北東から〉

2．SB008掘立柱建物跡
〈南東から〉

3．SB010住居跡〈西から〉

荻野遺跡

1．SP001土壙墓
〈南西から〉

2．ST016古墳
耳環出土状況

3．ST016古墳
石室（奥壁）
裏込め〈東から〉

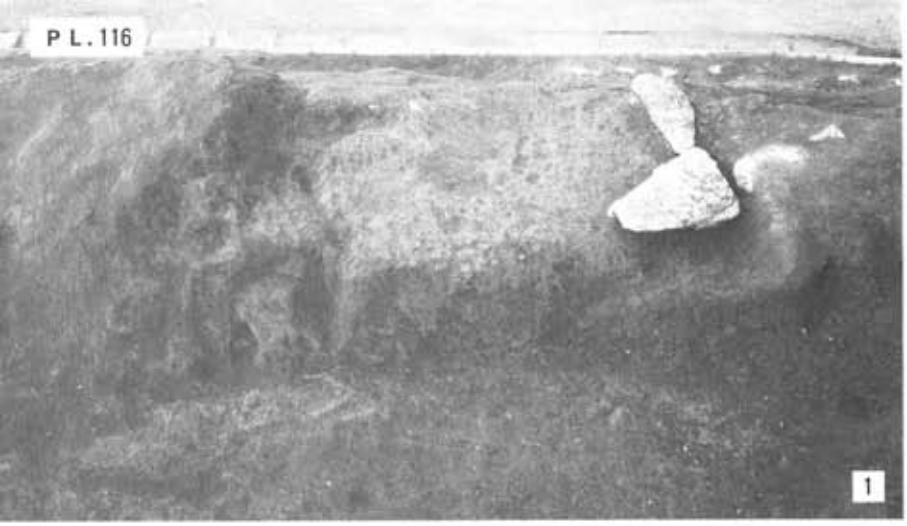
1

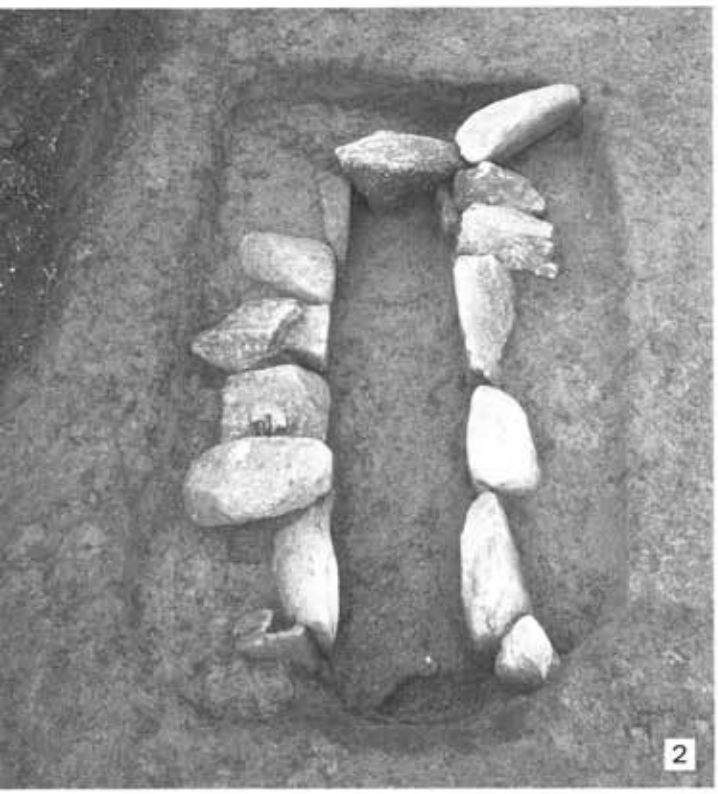
2

荻野遺跡

1．ST016古墳
〈南から〉

2．ST016古墳
〈西から〉





荻野遺跡

1．ＳＴ017古墳〈東から〉

2．ＳＣ020石棺墓〈東から〉

3．ＳＴ017古墳
管玉出土状況

4．ＳＰ009土壙墓
ＳＸ011(上半)〈西から〉

1

2

3

荻野遺跡

1．ＳＰ009土壙墓（右）
ＳＸ011（左）〈北から〉

2．ＳＫ004土壙〈東から〉

3．ＳＫ004土壙（完掘後）
〈東から〉

荻野遺跡

1．SK021土壙〈南東から〉

2．SD003・B溝〈南から〉

3．SX016〈北から〉

4．SD015溝〈南から〉

1

22

25

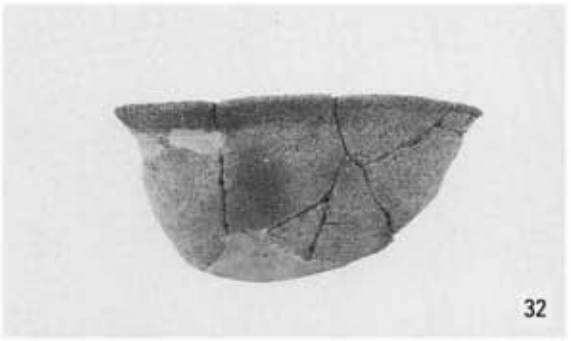
26

30

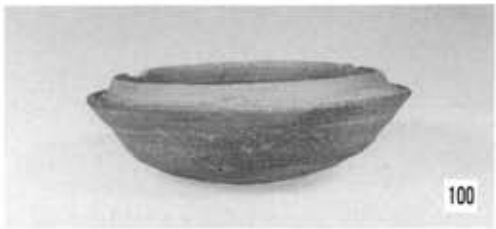
31

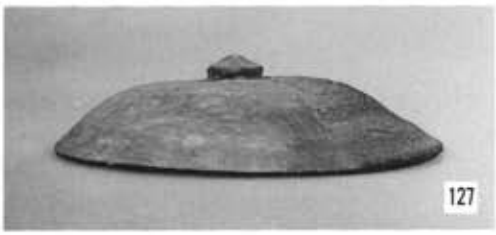
弥生土器　1－SB002(1/3)・22－SB010(1/3)

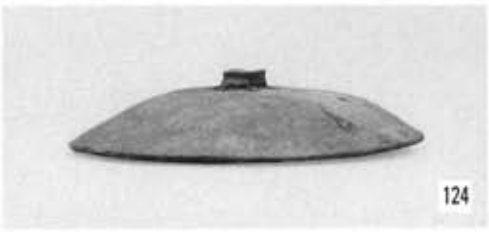
甕　棺　25(上)・26(下)－SJ006(1/10)、30(上)・31(下)－SJ007(1/10)



甕棺　28(上)・29(下)－SJ011(1/10)
32(上)・33(下)－SJ010(1/5)
44－SB003(1/10)

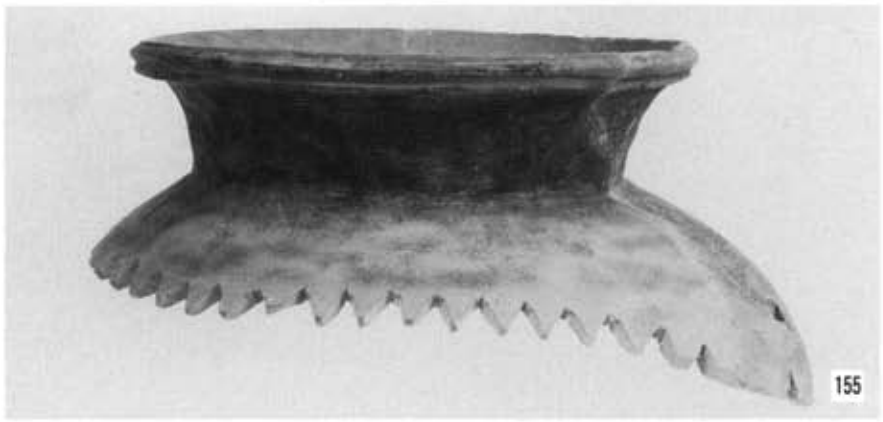






45－S B001(1/3)
60－S B014(1/3)
64－S T016(1/3)
99～102
－S P009(1/3)
111・112・114
－S K012(1/3)
124・125・127
－S K021(1/3)
144－遺構外
(B－Ⅲ区)出土(1/3)

住居跡、土壙墓他出土須恵器・土師器



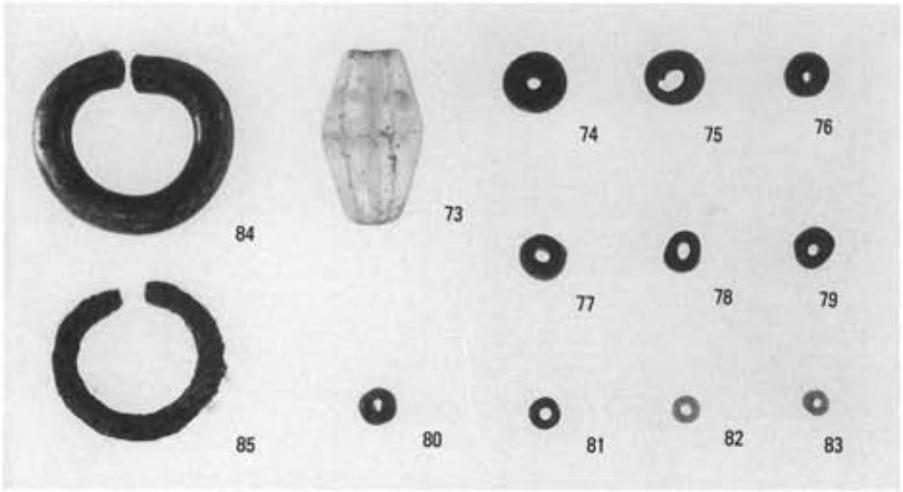
住居跡他出土須恵器・土師器

61－S B014（1/3）

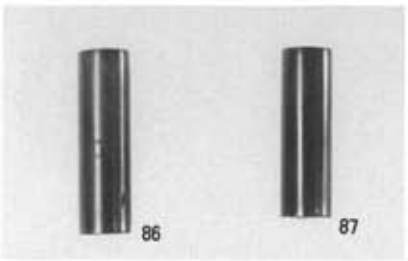
136－S D005（1/3）

141・142－S X016（1/3）

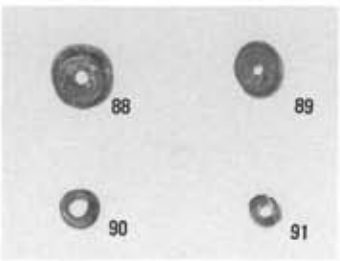
155－遺構外（A－I区）出土（1/3）



73～85－S T016

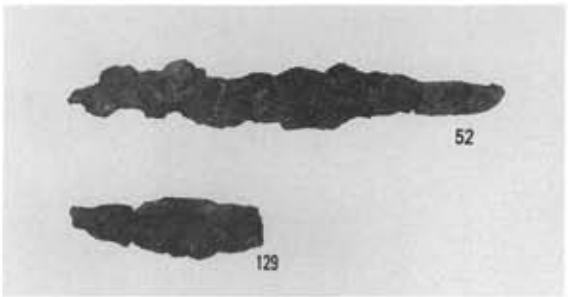


86・87－S T017



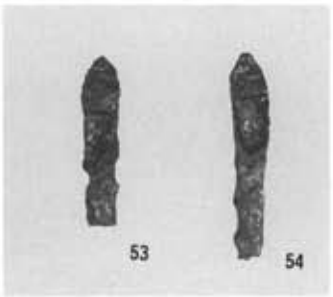
88～91－S C020

55－S B005(2倍)

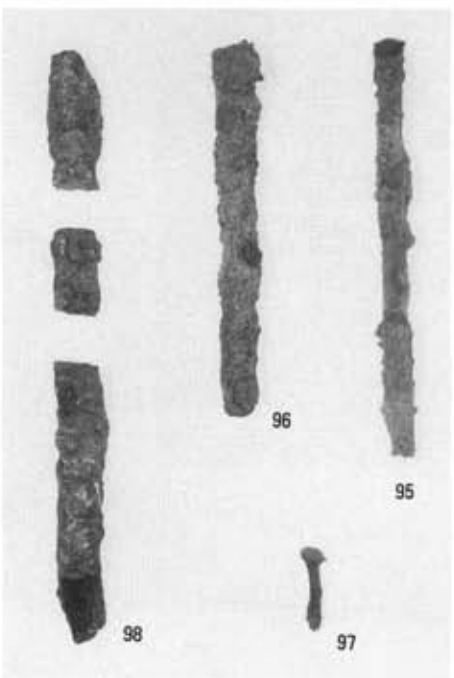


52－S B004(1/2)

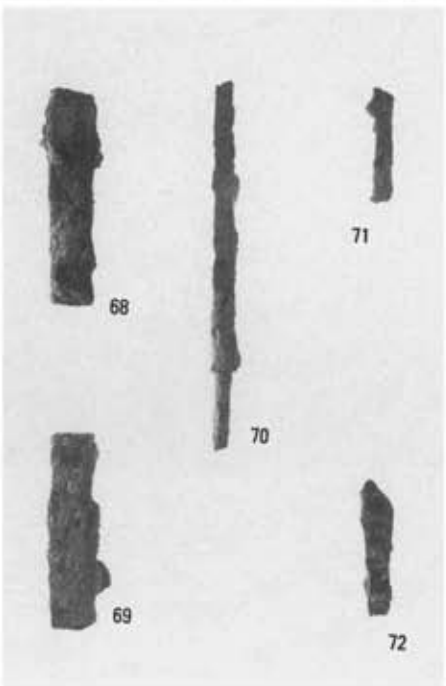
129－S K021(1/2)



53・54－S B005(1/2)

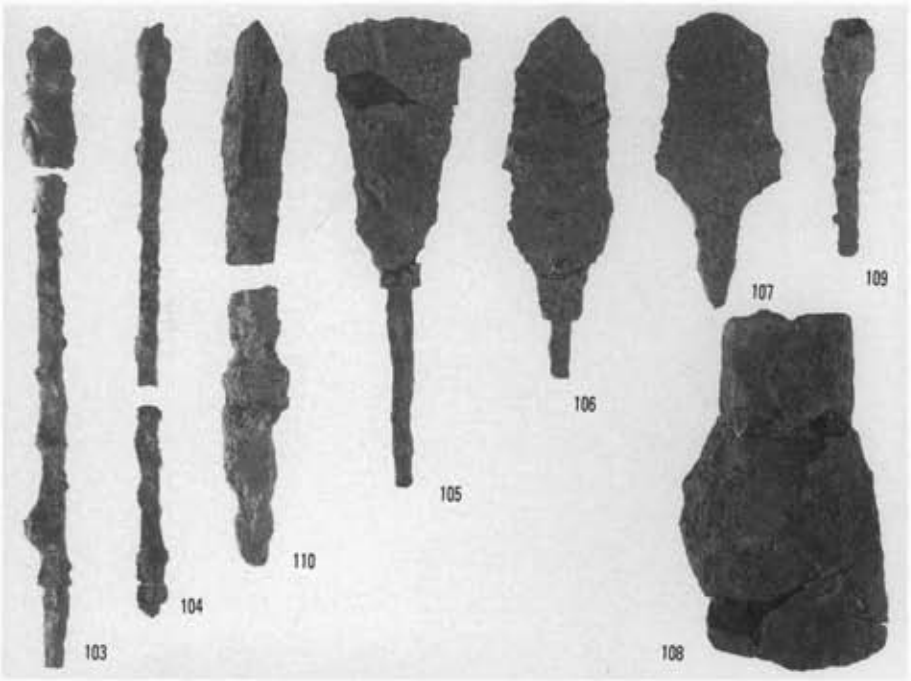


95～98－S P001(1/2)

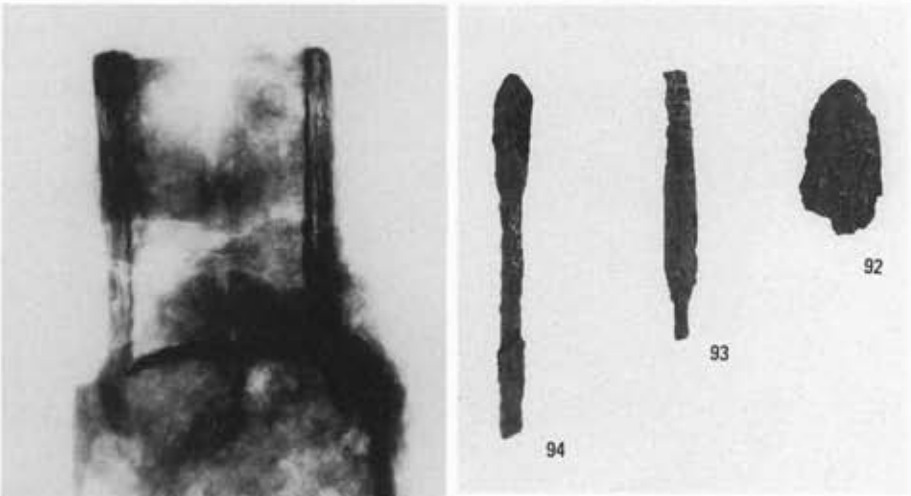


68～72－S T016(1/2)

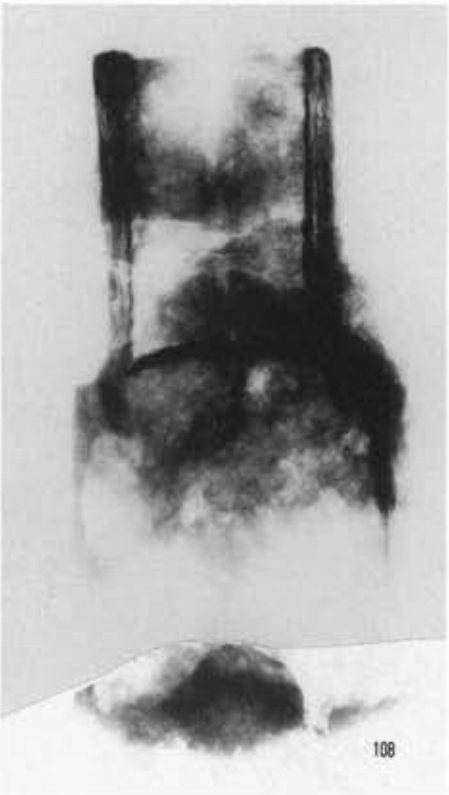
古墳他出土鉄器および装身具



103～110－SP009
(1/2)



92～94－SC020
(1/2)



108　鉄斧X線写真

古墳他出土鉄器

1

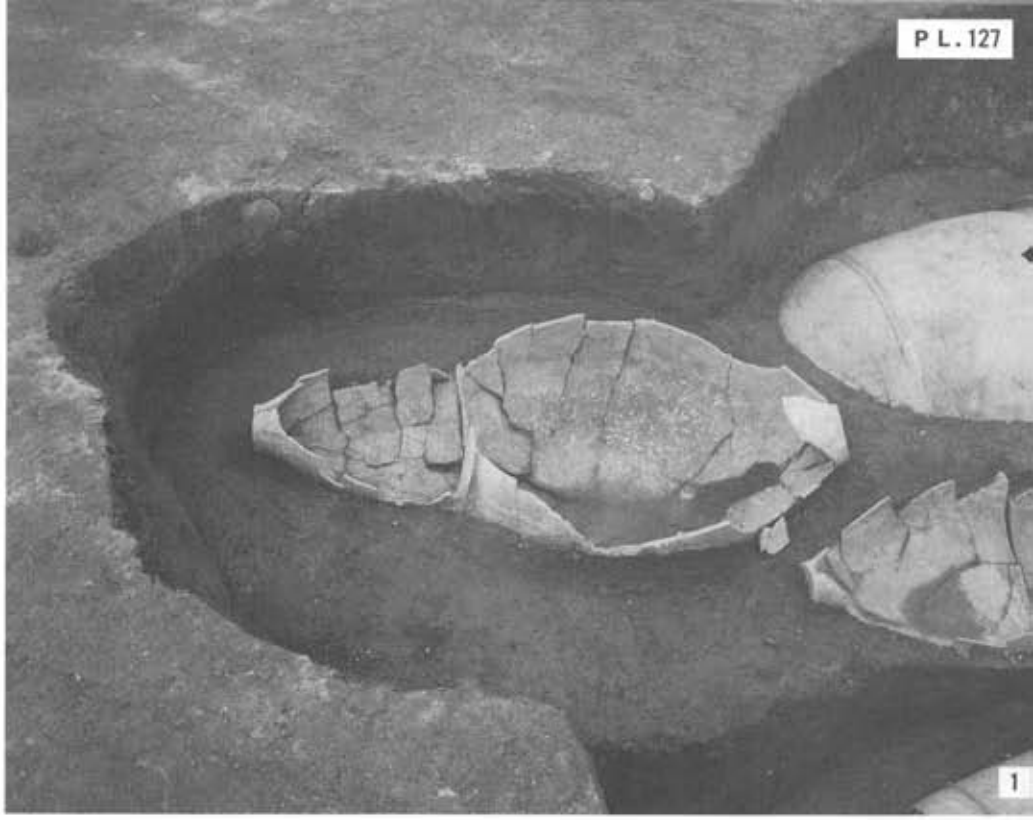
2

日岸田遺跡　1．III区全景〈西から〉

2．I区〈東から〉

日岸田遺跡　1．Ⅰ区甕棺墓群〈東から〉

2．Ⅰ区ＳＪ067～071甕棺墓〈南から〉



1

2

日岸田遺跡　1．I区SJ067甕棺墓〈南から〉

2．I区SJ069甕棺墓〈南から〉

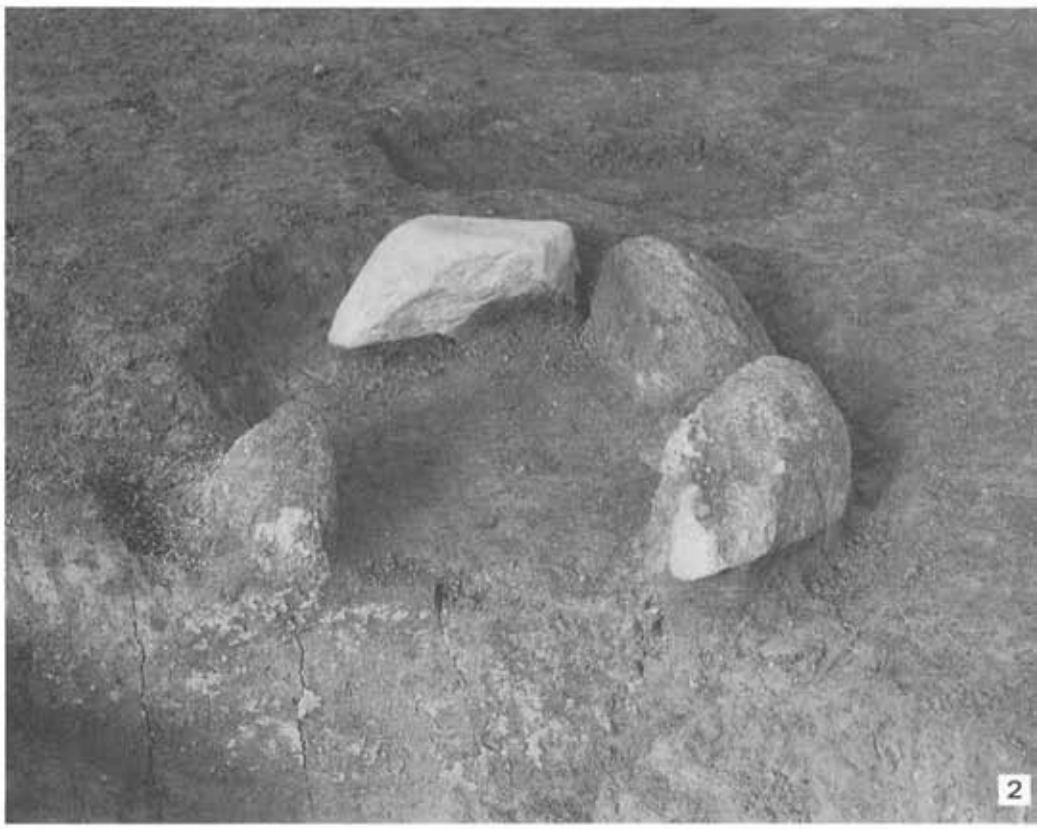
日岸田遺跡

1．I区SJ066甕棺墓〈北から〉

2．I区SJ072甕棺墓〈東から〉

3．I区SJ070甕棺墓〈南から〉

1



2

H岸田遺跡　1．I区SJ071甕棺墓〈北から〉

2．III区SC033石棺墓〈南から〉

1

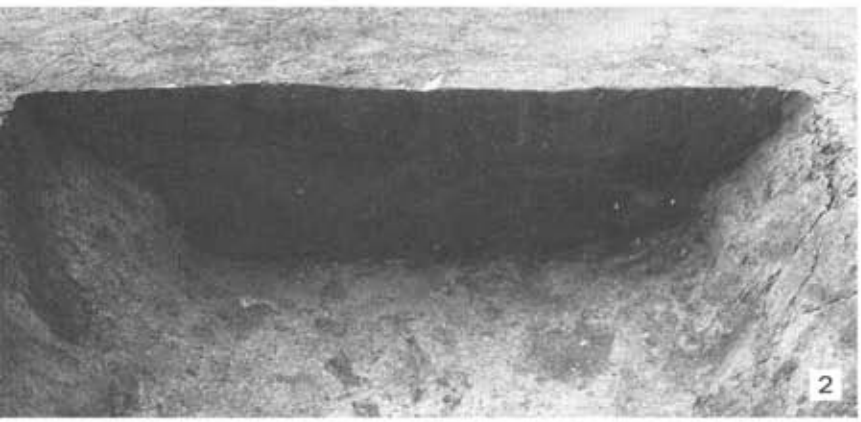
2

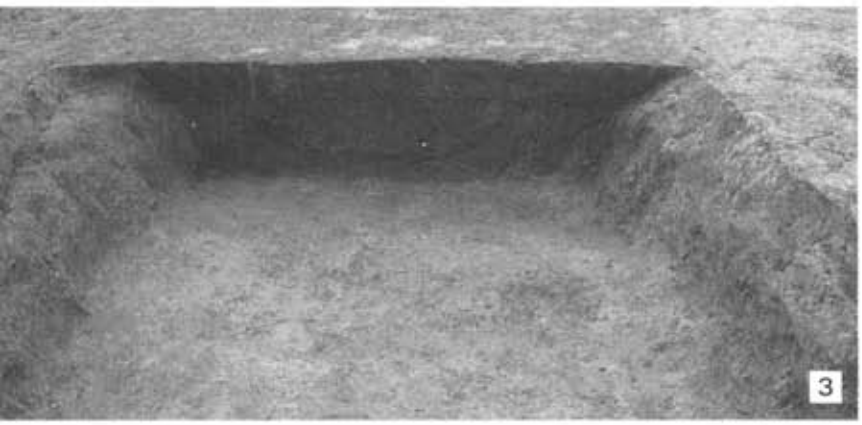
日岸田遺跡　1．II区ＳＴ002方形周溝墓全景〈東から〉

2．II区　　同　　南東隅〈南から〉

日岸田遺跡　1．II区ＳＴ002方形周溝墓北隅〈東から〉

2．II区　同　南西隅〈西から〉





H岸田遺跡

1．II区ＳＴ002方形周溝墓
　　北西溝断面〈西北から〉

2．同　北東溝断面〈北西から〉

3．同　南東溝断面〈西南から〉

4．同　東南隅土器出土状況〈南から〉

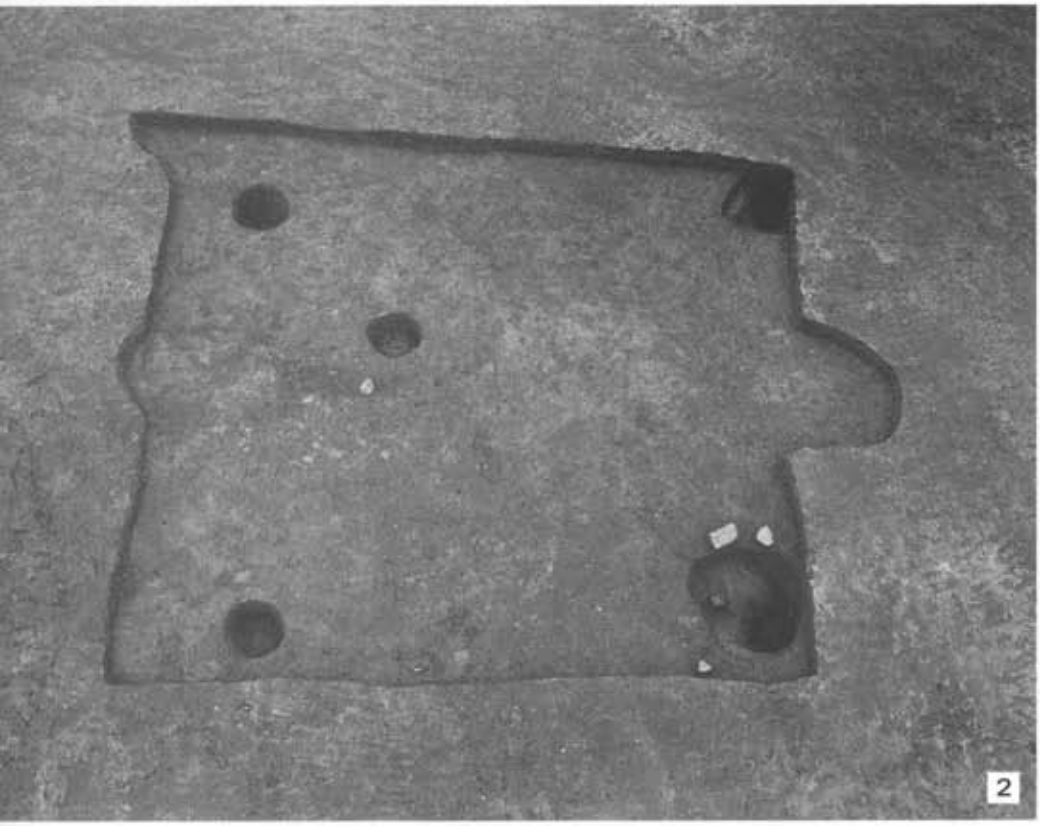
日岸田遺跡

1．II区SD001溝
北辺中央断面〈西から〉

2．　同
東辺南側断面〈北から〉

3．　同
東辺北側断面〈北から〉

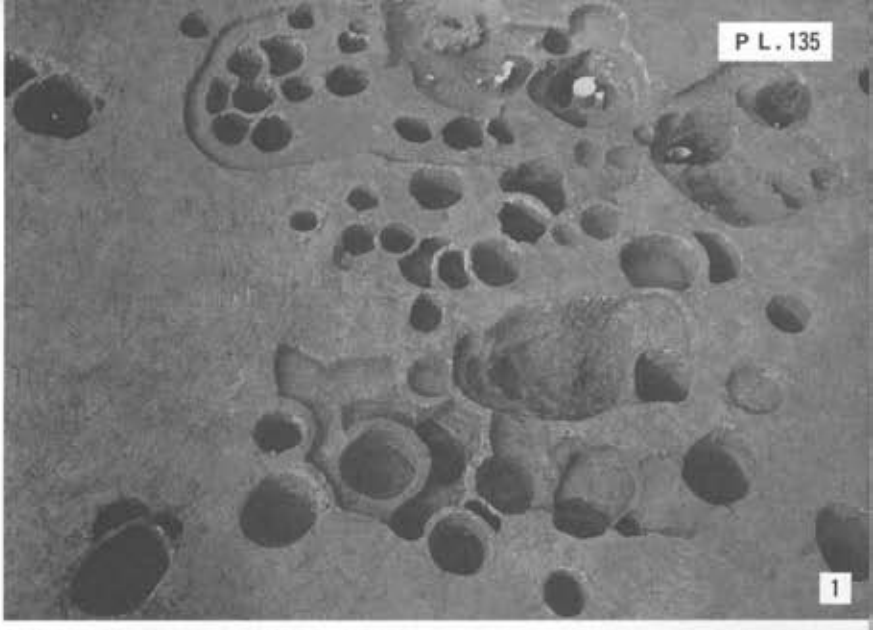
1

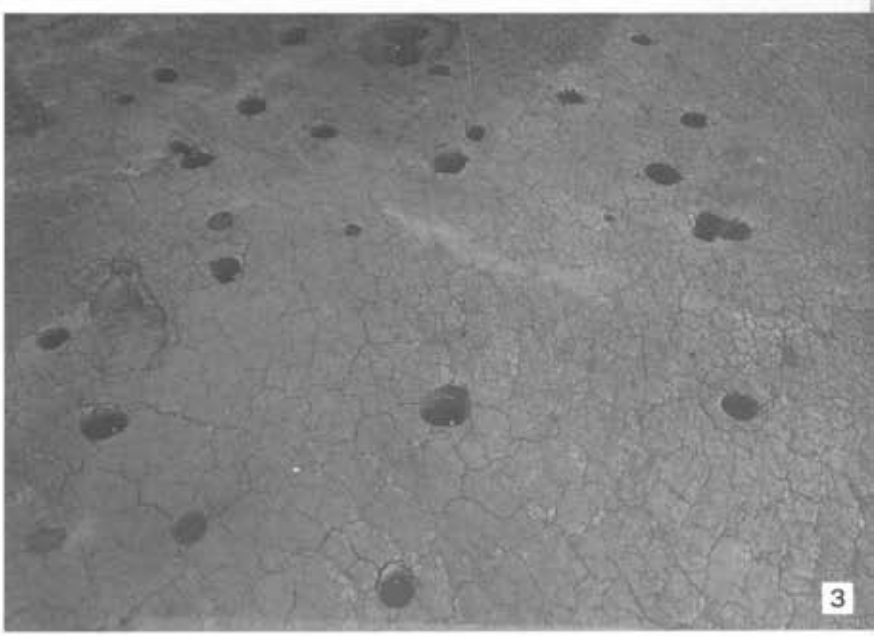


2

日岸田遺跡　1．Ⅰ区北側〈北から〉

2．Ⅰ区ＳＢ002竪穴住居跡〈西から〉



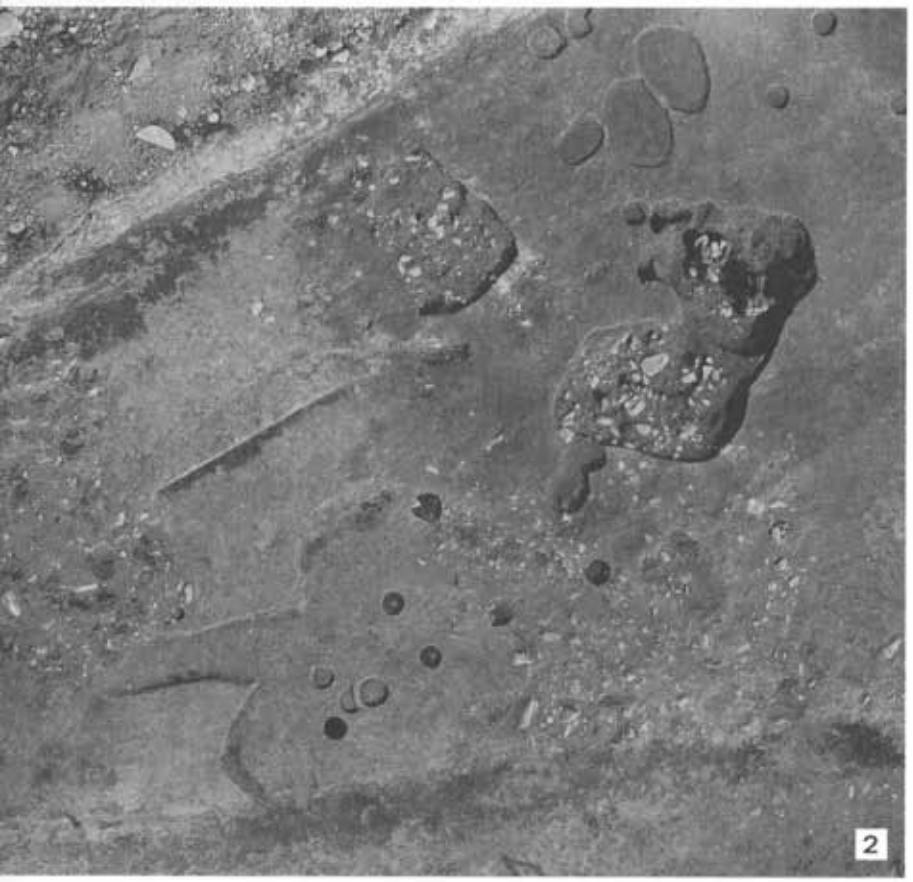


H岸田遺跡

1．II区ＳＢ003竪穴
住居跡〈南から〉

2．　同　ＳＢ008掘立柱
建物跡〈東から〉

3．　同　ＳＢ007掘立柱
建物跡〈南西から〉



日岸田遺跡　1．III区北東部〈上北〉

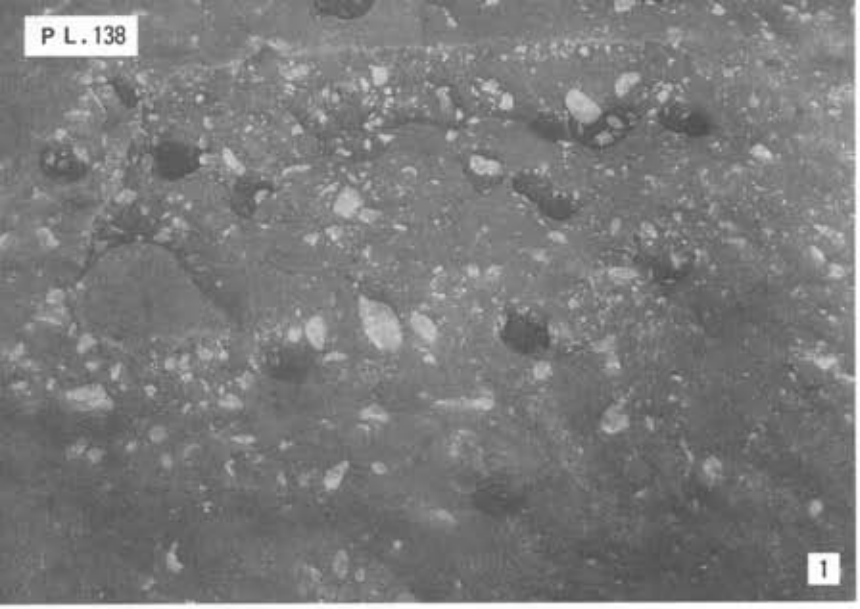
2．III区北西部〈上北〉

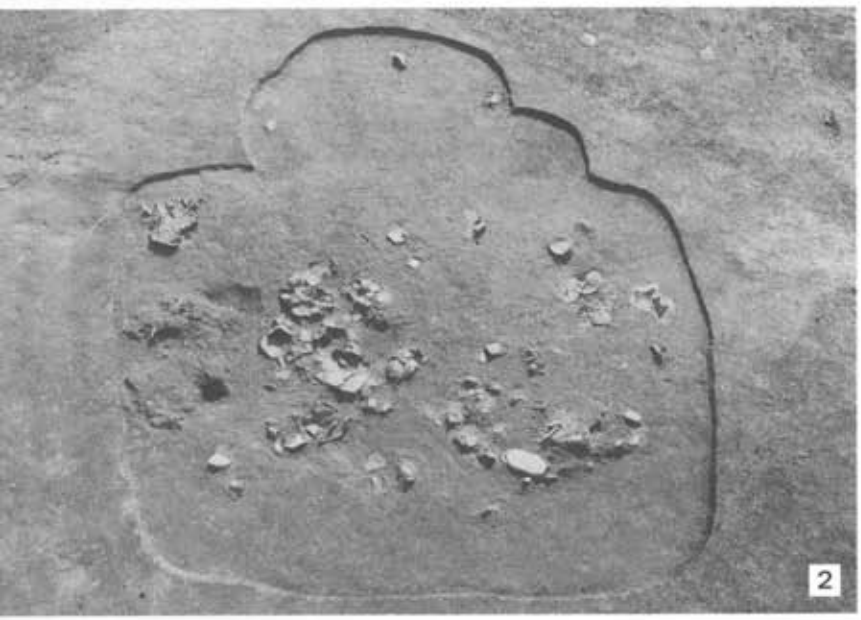
日岸田遺跡

1．III区SB044竪穴
住居跡〈東南から〉

2．III区SB047竪穴
住居跡〈西から〉

3．III区SB040竪穴
住居跡〈南から〉





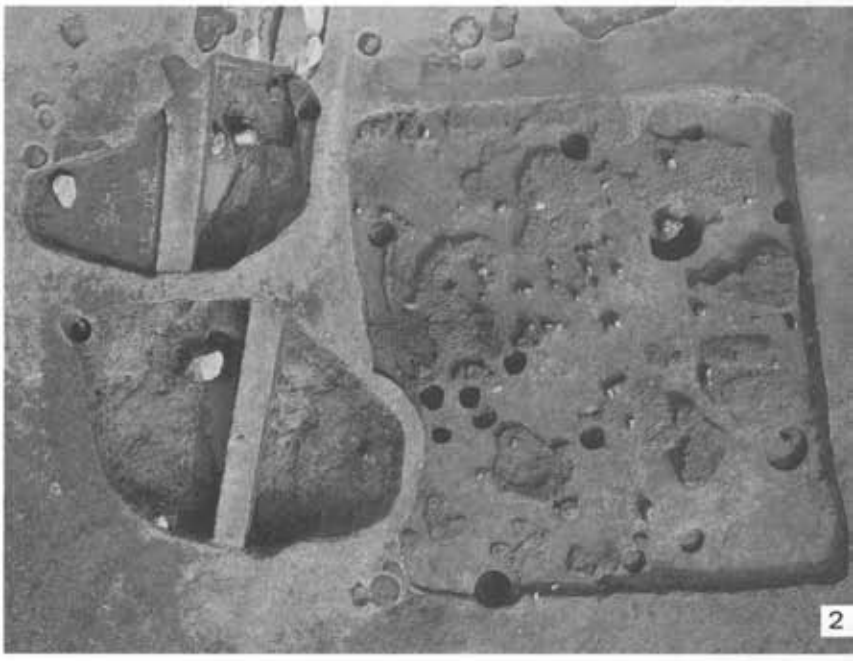
日岸田遺跡

1．Ⅲ区ＳＢ043竪穴
　　住居跡〈東から〉

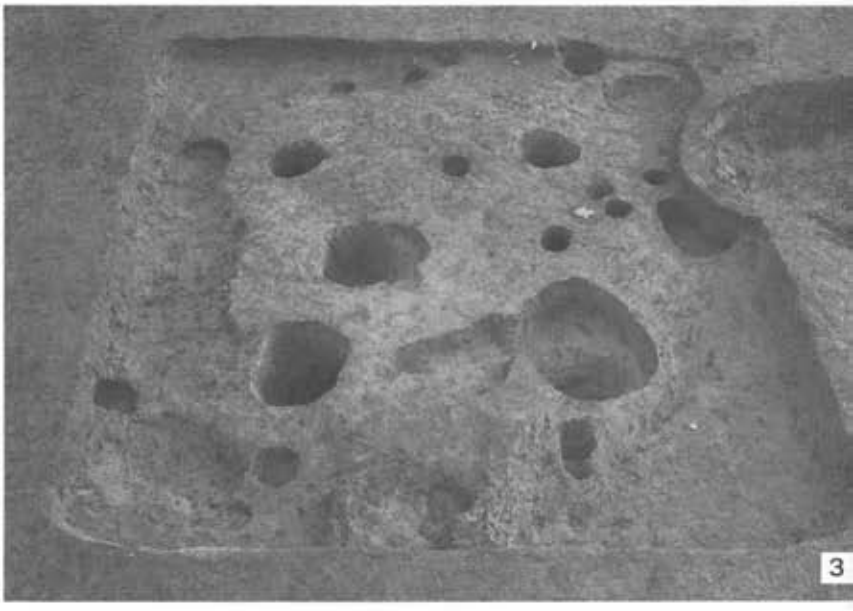
2．Ⅲ区ＳＢ037竪穴
　　住居跡〈西北から〉

3．Ⅲ区ＳＫ050土壙
　　〈南から〉

1



2



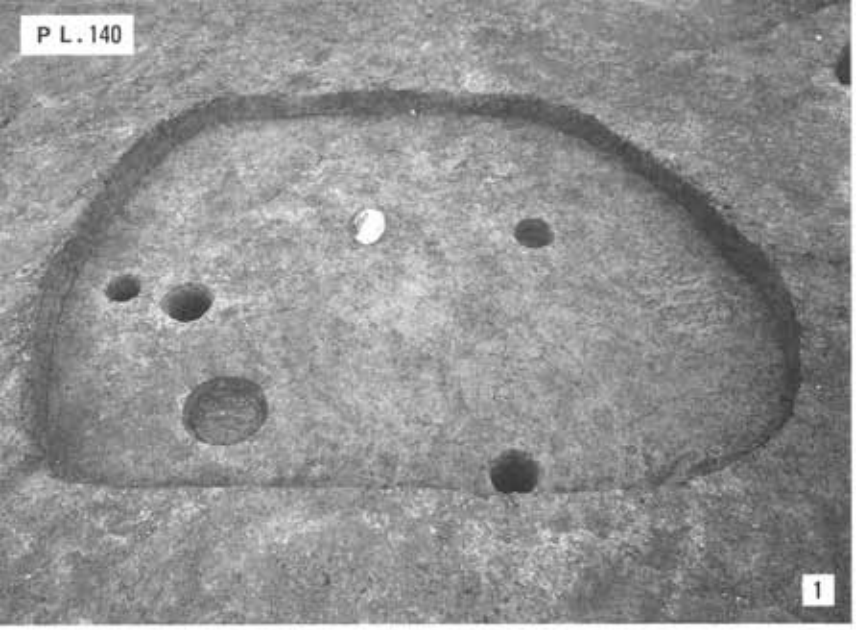
3

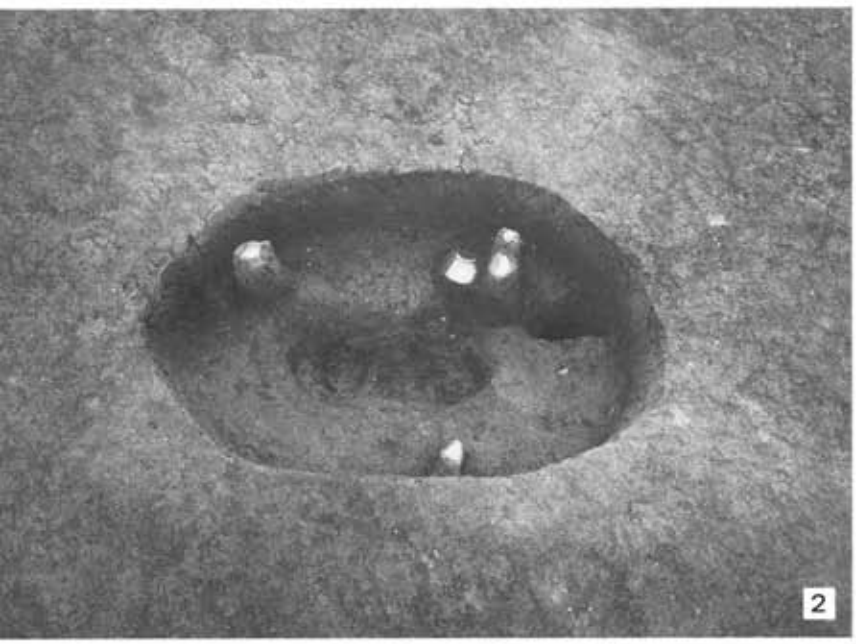
日岸田遺跡

1．Ⅲ区ＳＢ031竪穴
　　住居跡〈東から〉

2．Ⅲ区ＳＢ032竪穴
　　住居跡焼土〈上西〉

3．Ⅲ区ＳＢ032竪穴
　　住居跡〈北から〉





日岸田遺跡

1．Ⅰ区ＳＫ001土壙〈西から〉

2．Ⅱ区ＳＫ005土壙〈北から〉

3．Ⅰ区ＳＫ014土壙〈南から〉

1

2

日岸田遺跡

1．III区ＳＸ039〈北から〉

2．　　同　　〈北から〉

SJ066

SJ068

SJ070

日岸田遺跡　SJ066・SJ068・SJ070甕棺（1/10）

SJ067

SJ069

日岸田遺跡　SJ067・SJ069甕棺（1/10）

SJ071

SJ072

H岸田遺跡　SJ071・SJ072甕棺（1/10）

S T002

15

17

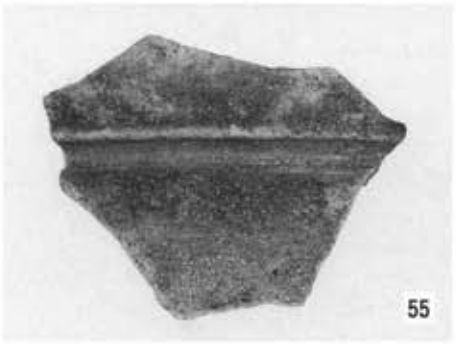
16

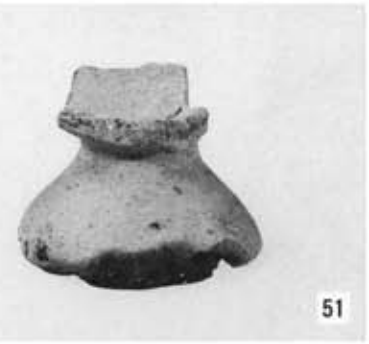
26

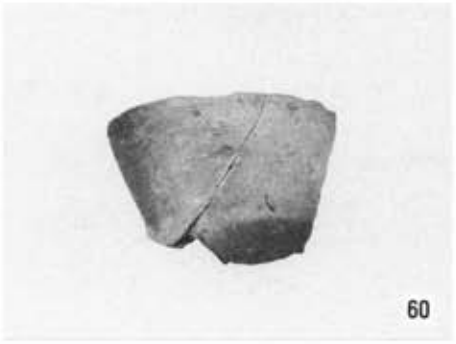
S D041

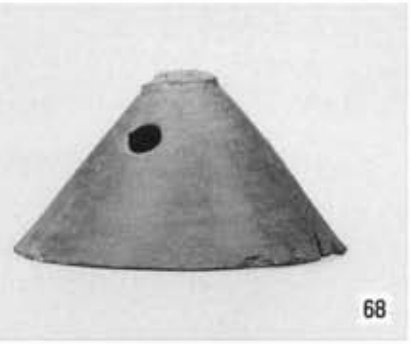
54

42

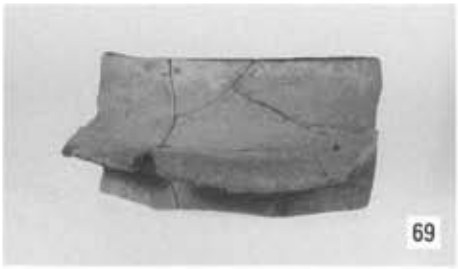

55


51

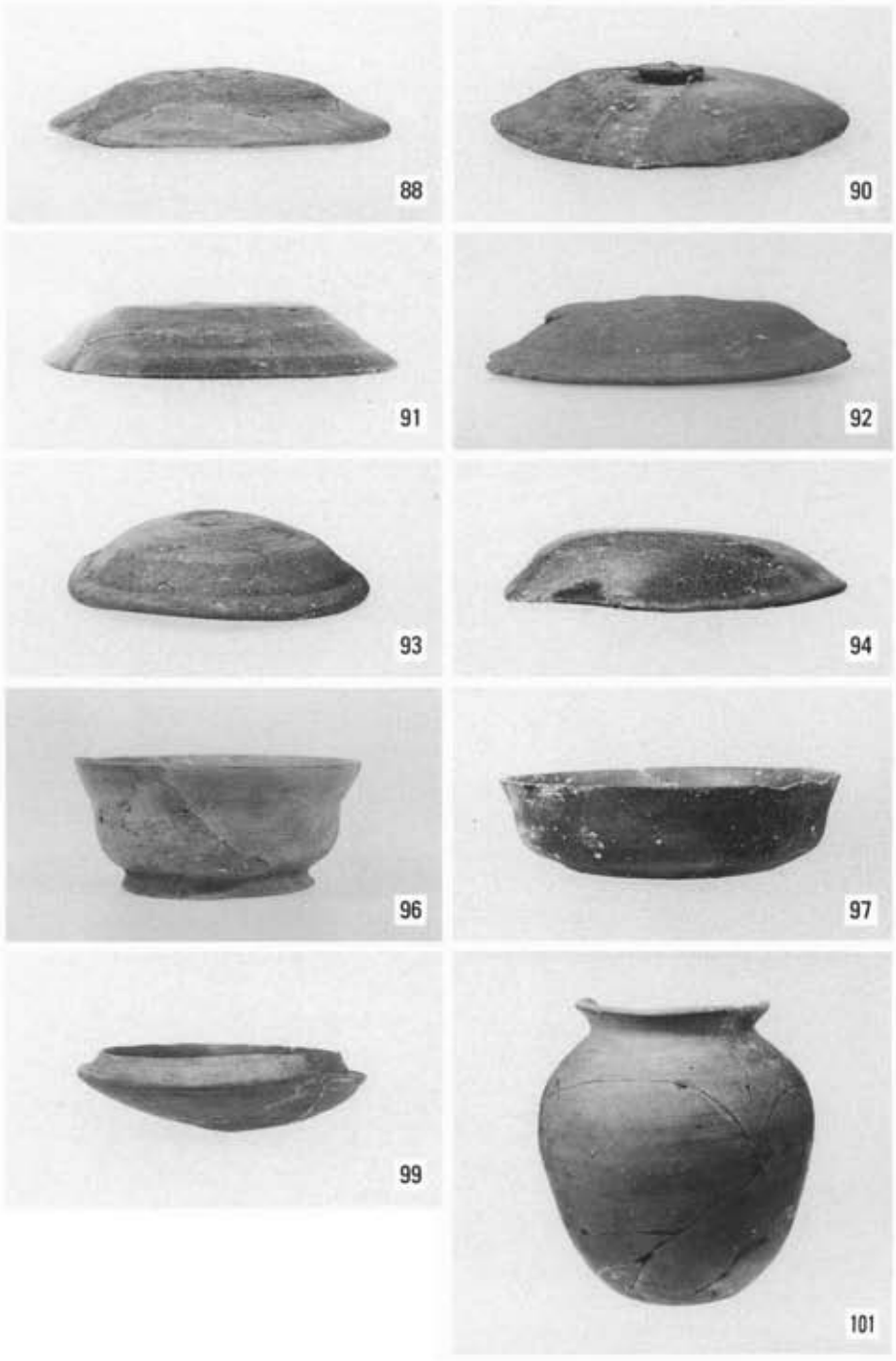

60


68

日岸田遺跡　S D041溝・S T002方形周溝墓出土土師器



日岸田遺跡　ＳＢ037竪穴住居跡出土土師器



日岸田遺跡　ＳＢ037竪穴住居跡出土須恵器

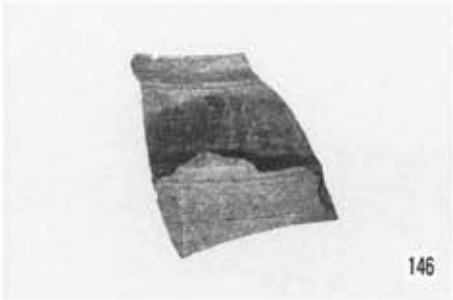
S B047

S B054

S D X39

S B032

日岸田遺跡
その他の竪穴住居跡
・土壙出土土師器


146

151

147

151

154

139

142

日岸田遺跡　ＳＤ001溝出土陶磁器・土師器

東田遺跡　1．東田遺跡遠景〈北西から〉

2．東田遺跡全景〈北西から〉

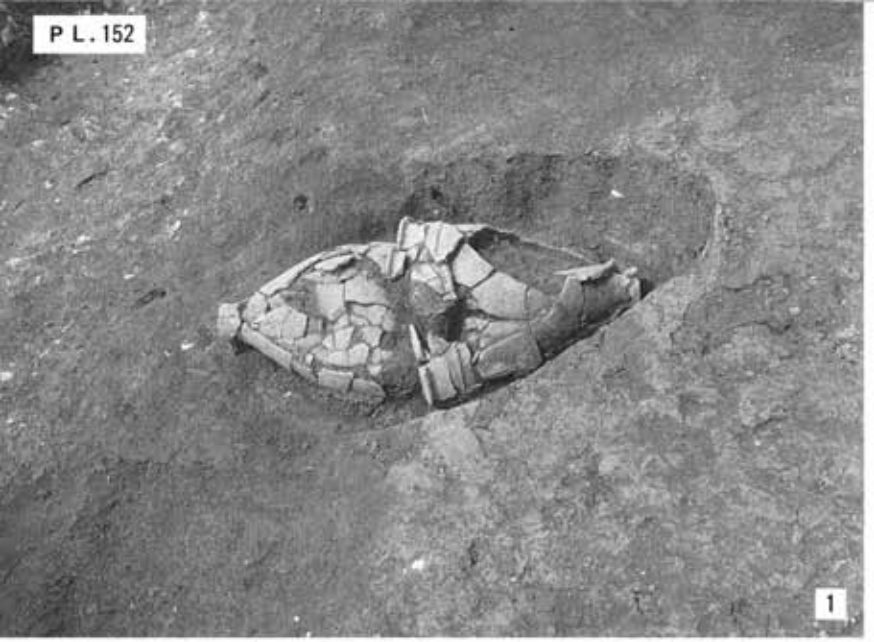
東田遺跡

1．ＳＤ01溝跡・ＳＪ01～04甕棺墓群全景〈南西から〉

2．ＳＪ01～04甕棺墓群全景〈南東から〉

1

2



東田遺跡

1．ＳＪ01甕棺墓〈北東から〉

2．ＳＪ03甕棺墓〈南東から〉

3．ＳＪ04甕棺墓〈東から〉

1

2

東田遺跡　1．ST01古墳全景〈西から〉

2．ST01古墳全景〈南から〉

東田遺跡

1．ST01古墳石室全景〈西から〉

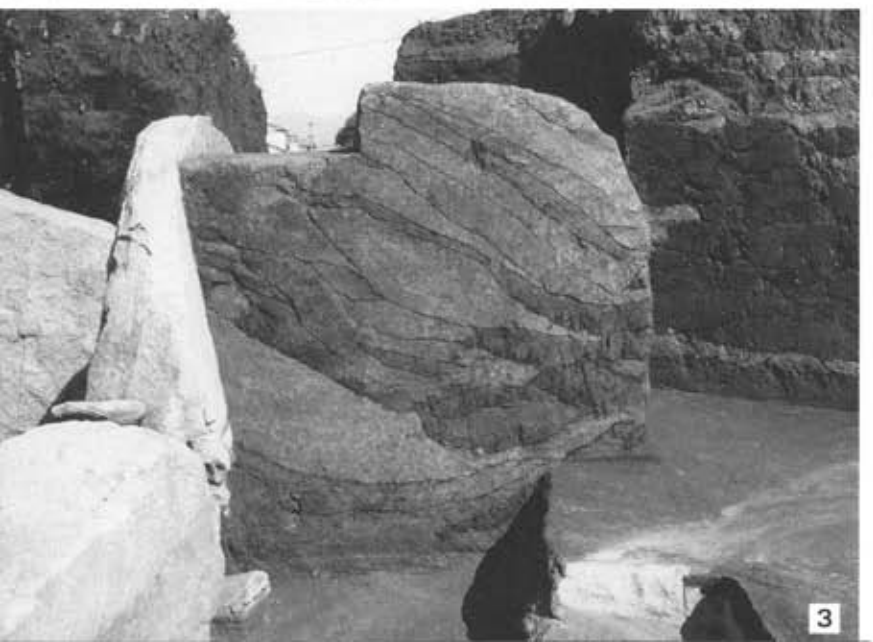
2．ST01古墳石室全景〈南から〉

東田遺跡

1．ＳＴ01古墳玄門〈東から〉

2．ＳＴ01古墳南側壁〈北から〉

3．ＳＴ01古墳北側壁〈南から〉



東田遺跡

1．ST01古墳墳丘盛土状況
〈西から〉

2．ST01古墳南側墳丘
盛土状況〈西から〉

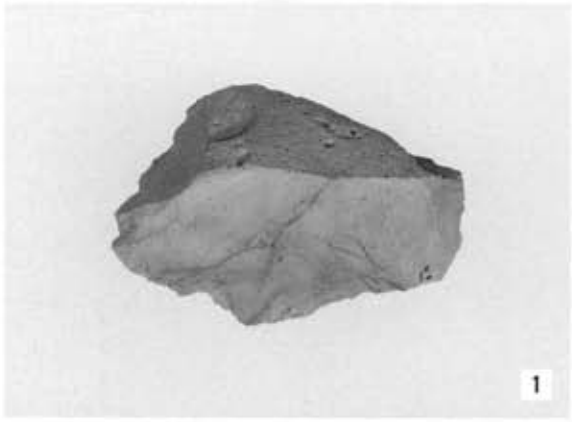
3．ST01古墳石室裏込め状況
〈西から〉

東田遺跡

1．ＳＴ01古墳北側墳丘
　　盛土状況〈東から〉

2．ＳＴ01古墳東側墳丘
　　盛土状況〈南から〉

3．ＳＤ01溝跡〈北東から〉



東田遺跡

1．石器（表採）

2．土師器
（ＳＴ01古墳北側削平区域出土）

3．須恵器（ＳＴ01古墳玄室出土）

4．〃（〃　撹乱土）

5．〃（〃　〃）

1

2

本川原遺跡　1．遺跡遠景〈東から〉

2．遺跡遠景〈東から〉

本川原遺跡

1．遺跡全景〈南から〉

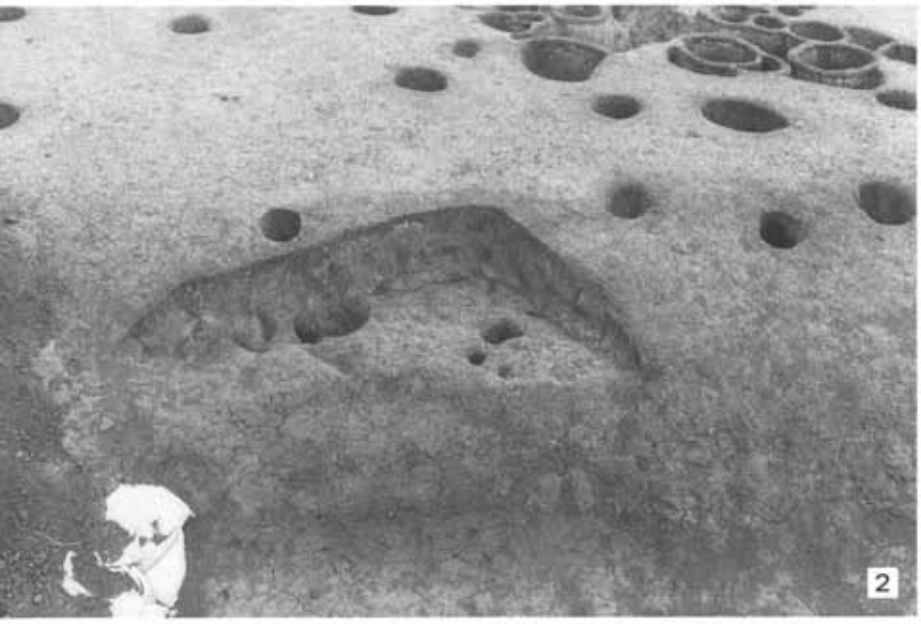
2．A・B地区遠景〈西から〉

本川原遺跡

1．A地区全景〈南から〉

2．B地区全景〈西から〉

3．C地区全景〈南から〉

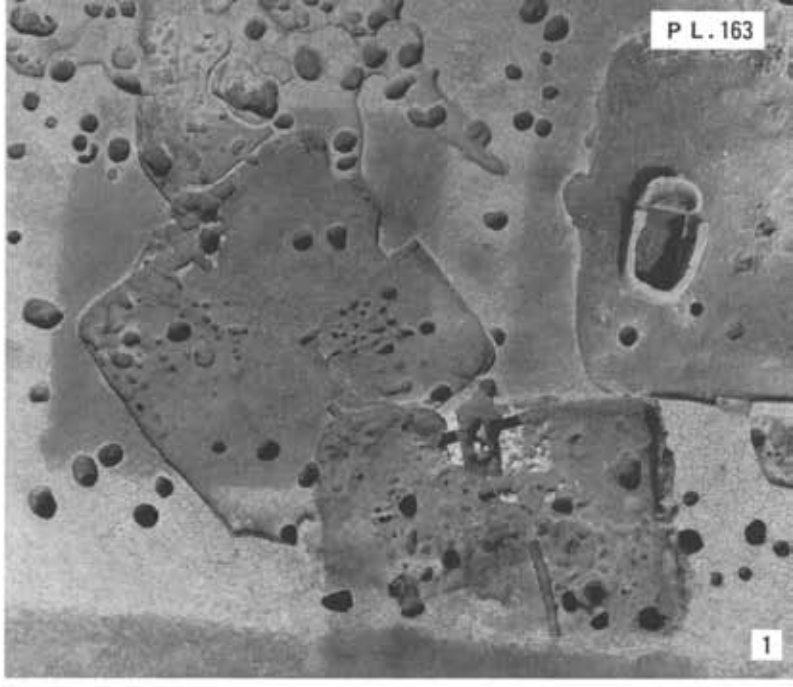


本川原遺跡

1．C地区竪穴住居跡群〈南から〉

2．SB72住居跡〈南から〉

3．SB35住居跡〈南から〉

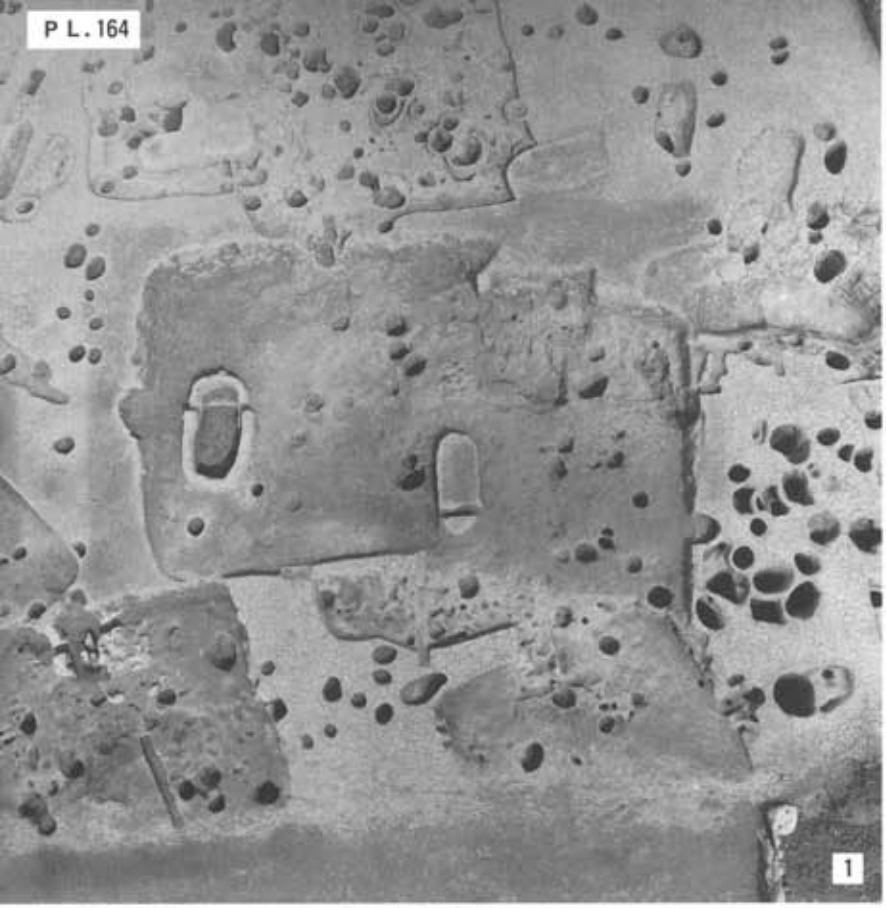


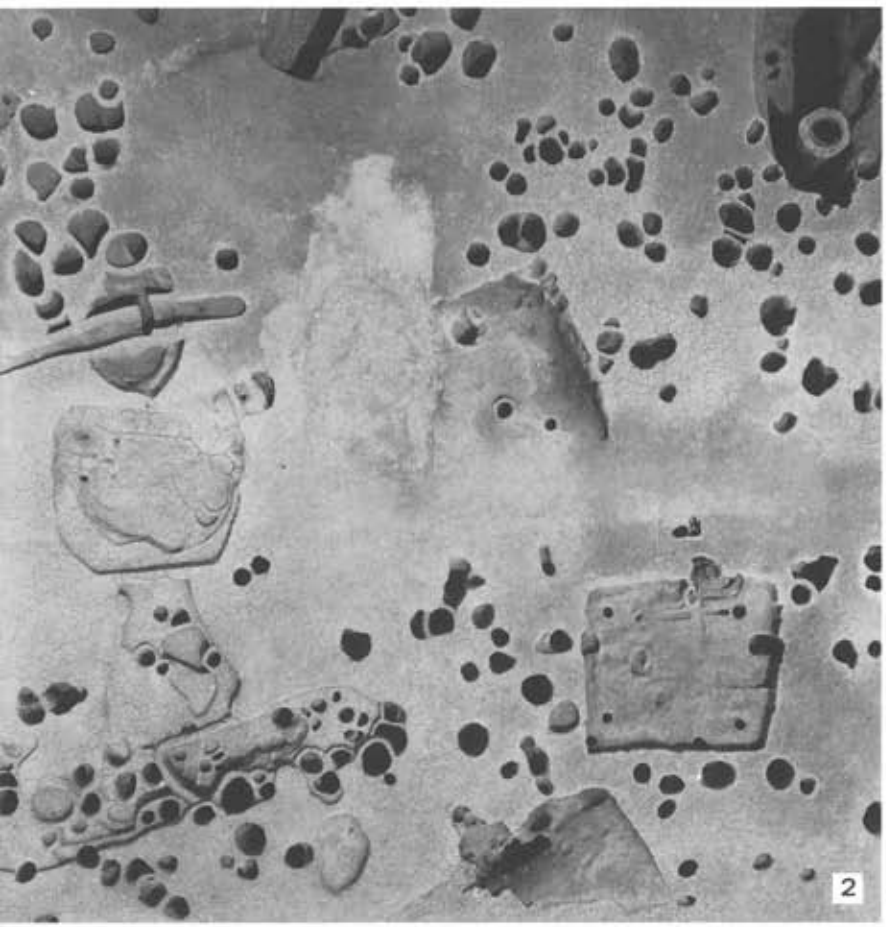
本川原遺跡

1．SB26，27，49住居跡〈南から〉

2．SB27住居カマド〈南から〉

3．SB28，29，35住居跡〈南から〉





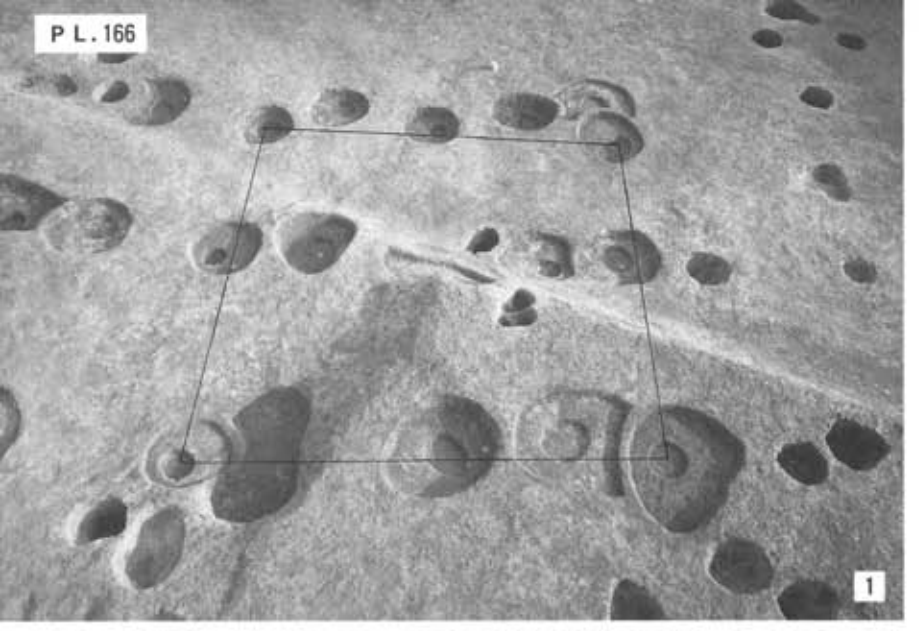
本川原遺跡

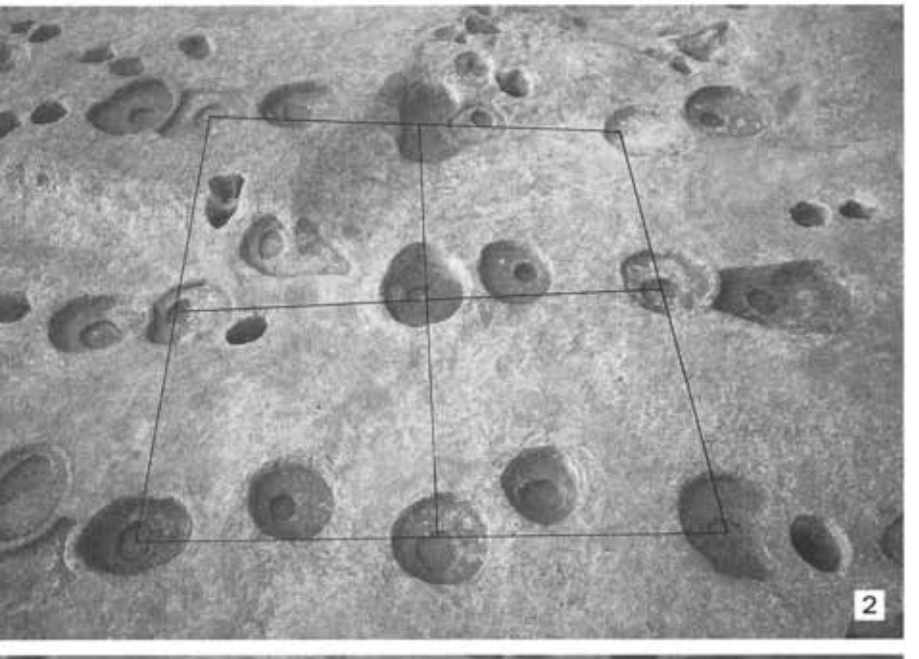
1．SB28，29，35住居跡〈南から〉

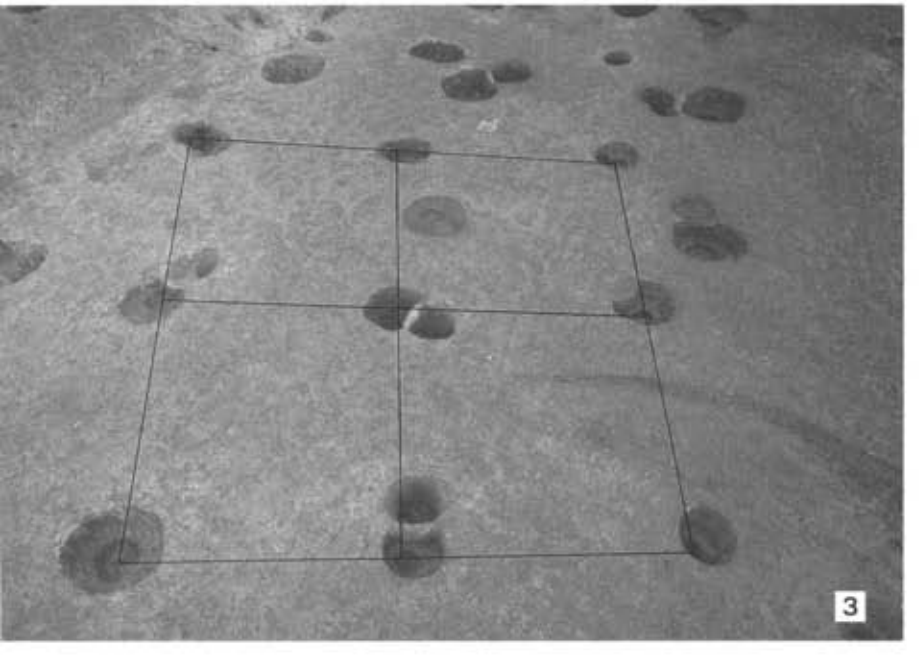
2．SB39，40，42住居跡
SX41不明遺構〈南から〉

本川原遺跡　1．C地区南部掘立柱建物跡群〈南から〉

2．SB07建物跡〈北から〉





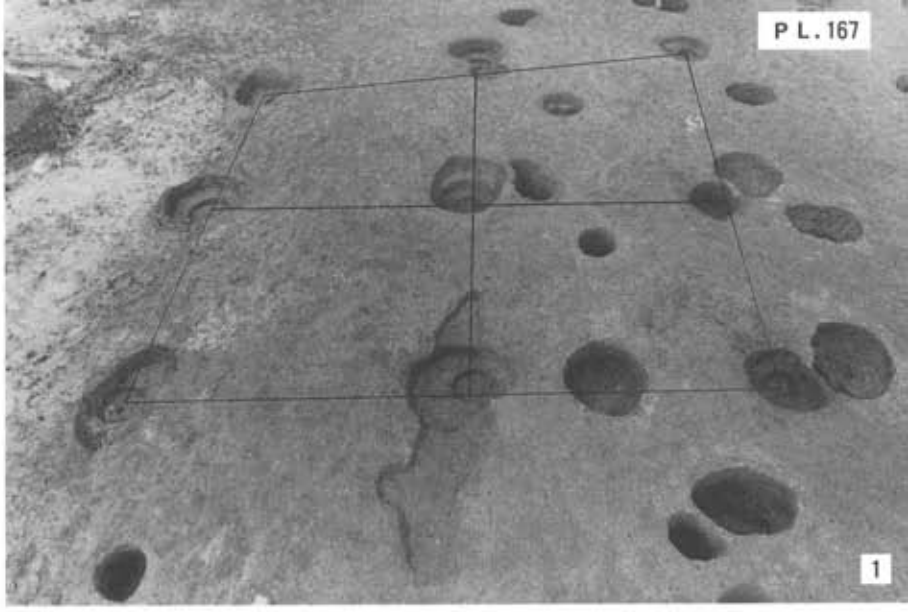


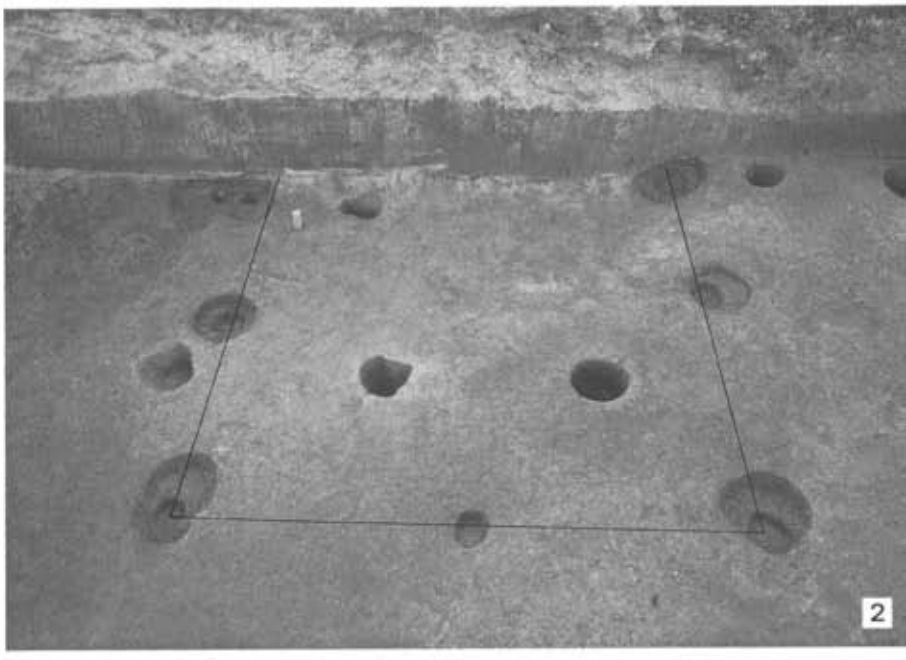
本川原遺跡

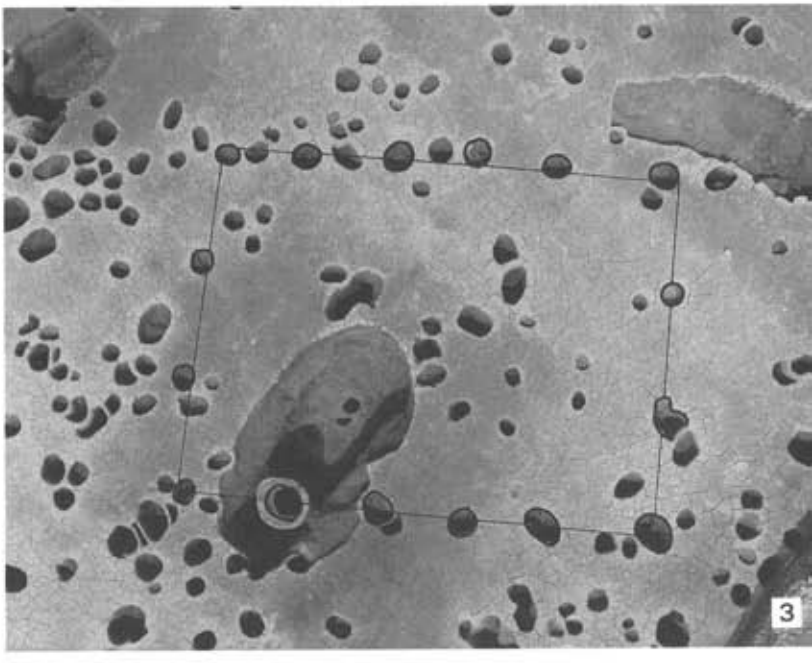
1．SB20建物跡〈北から〉

2．SB21建物跡〈南から〉

3．SB22建物跡〈西から〉





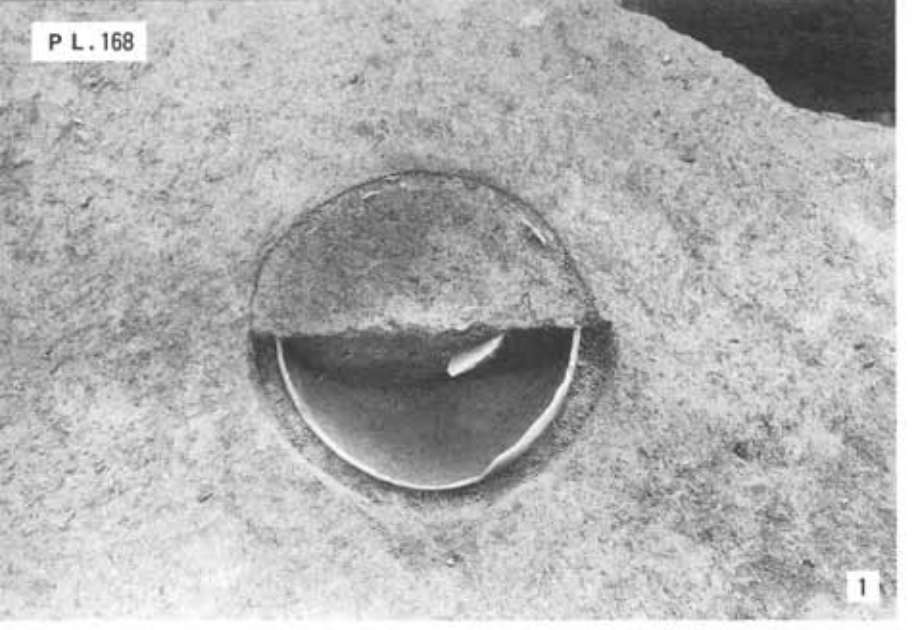


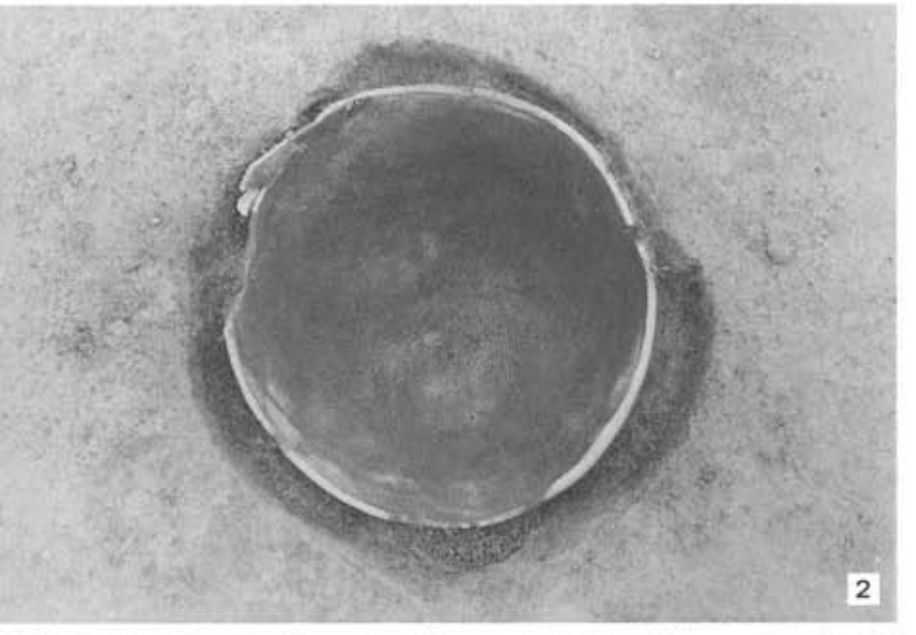
本川原遺跡

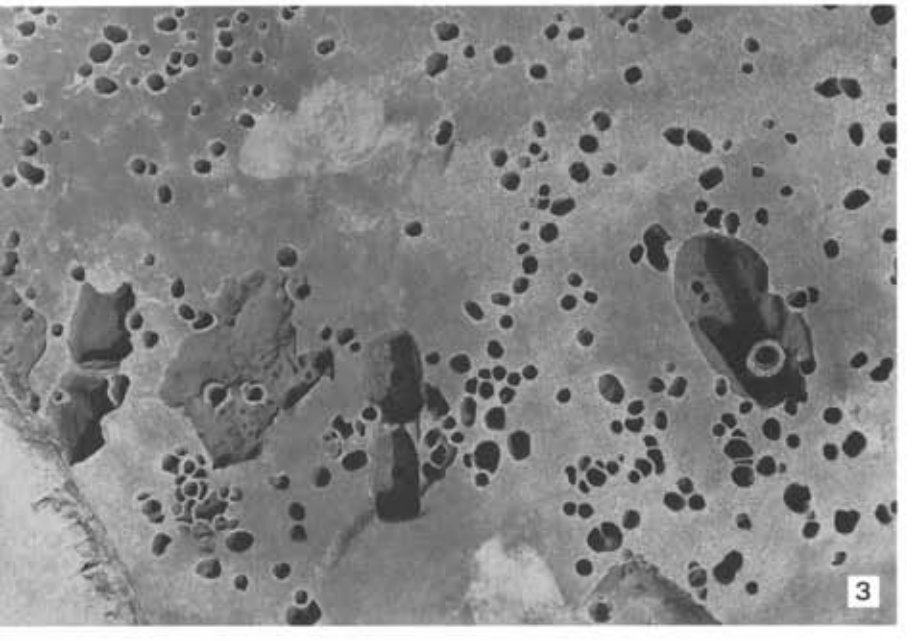
1．ＳＢ23建物跡〈東から〉

2．ＳＢ25建物跡〈東から〉

3．ＳＢ44建物跡〈南から〉





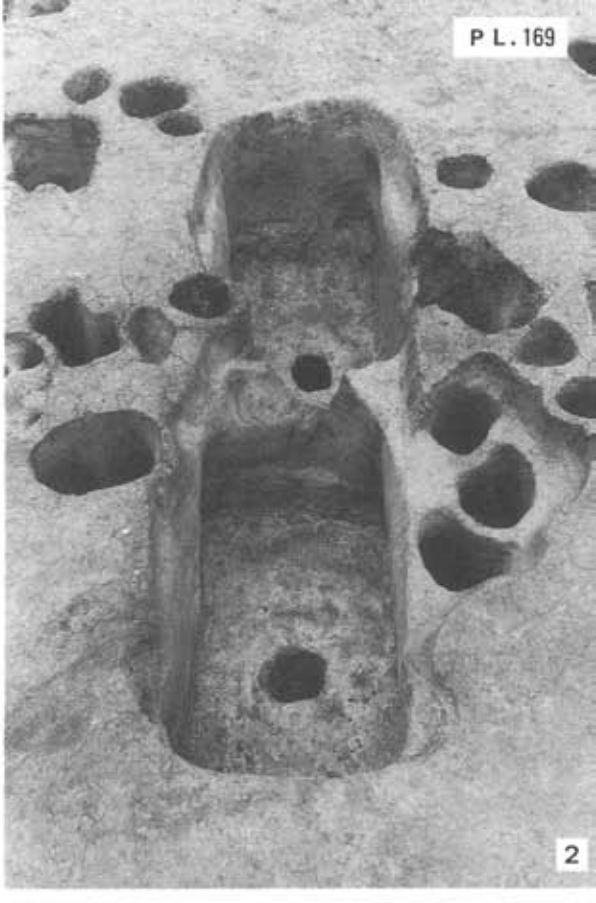


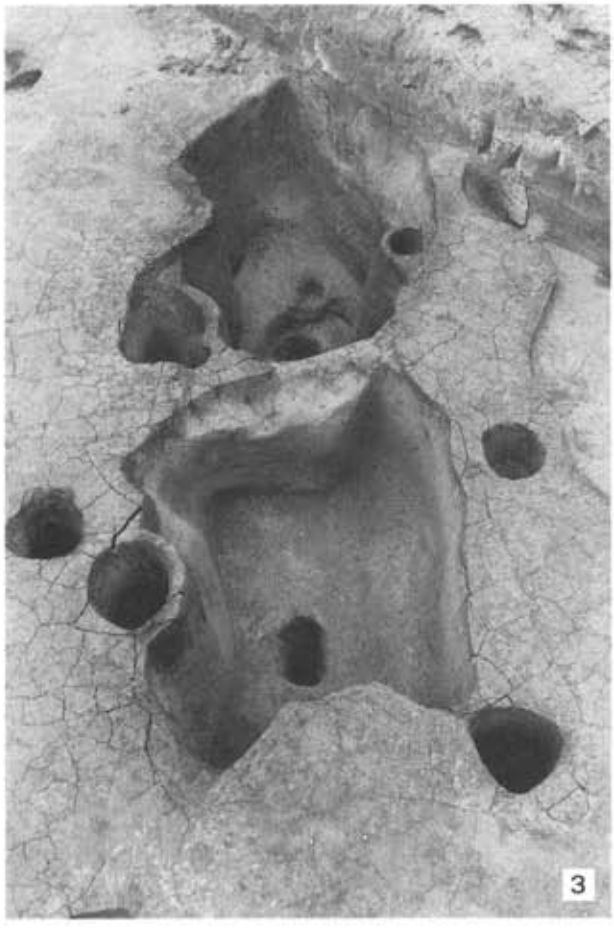
本川原遺跡

1．埋置土器（土層半裁状況）

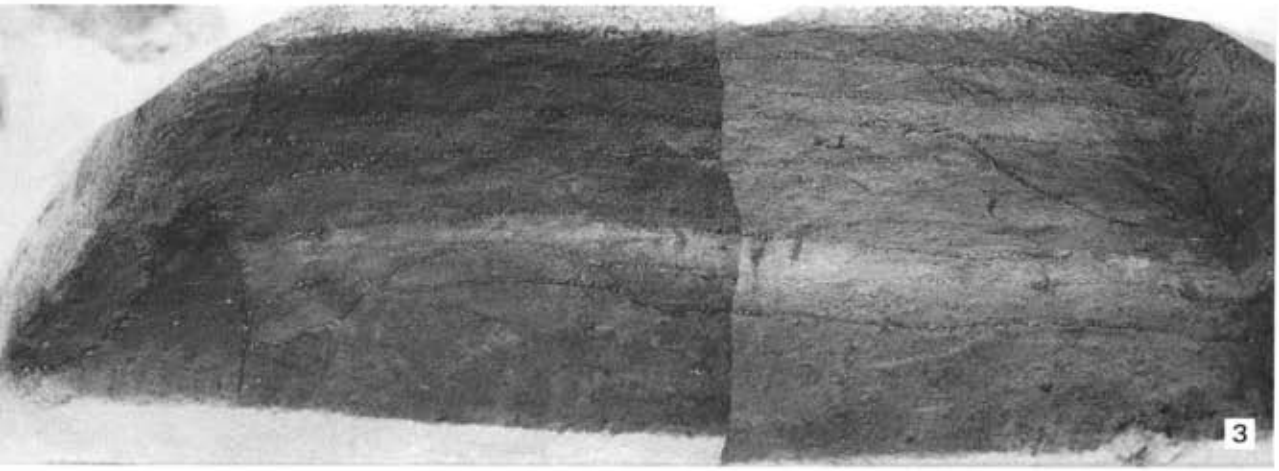
2．埋置土器（完掘後）

3．SK45，46・47・52・53土壙
〈南から〉





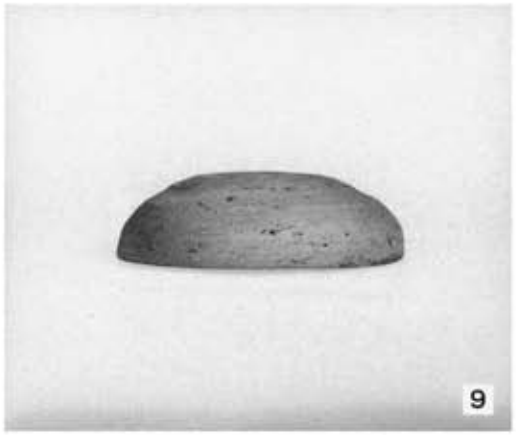
本川原遺跡　1．ＳＫ45土壙〈南から〉　3．ＳＫ52・53土壙〈北から〉
2．ＳＫ46・47土壙〈南から〉　4．ＳＫ77土壙〈東から〉



本川原遺跡　1．SK78土壙〈西から〉

2．SK77土壙土層断面〈西から〉

3．SK45土壙土層断面〈東から〉


9

13

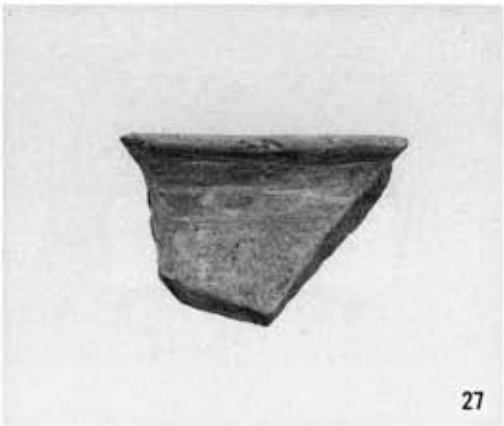
14

19

20

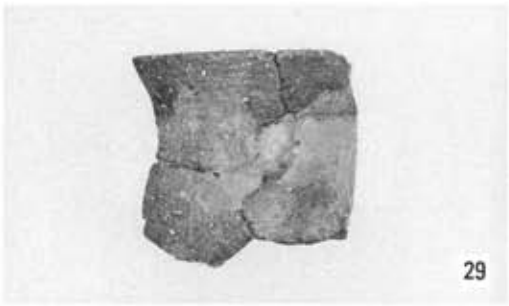
22

23


27

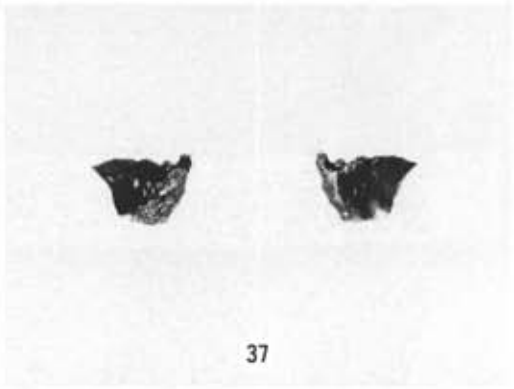
本川原遺跡　ＳＢ27,49,26住居跡出土遺物（19,20,27は１/３,22は１/５,他は１/４）

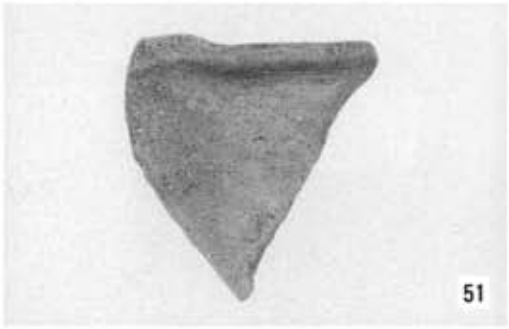
（９～20－ＳＢ27，22・23－ＳＢ49，27－ＳＢ26出土）

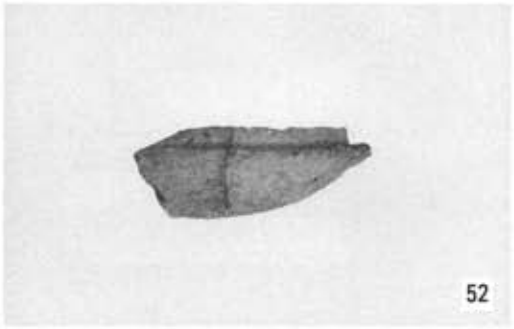

29

30

33


37


51


52

54

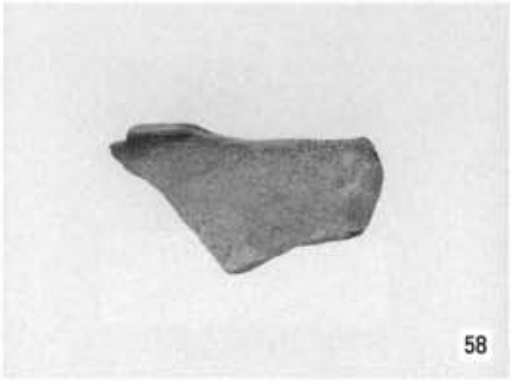
55

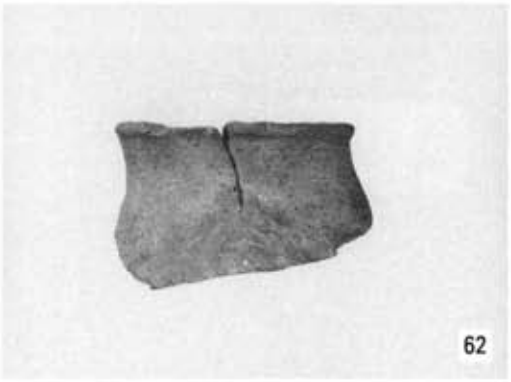
56

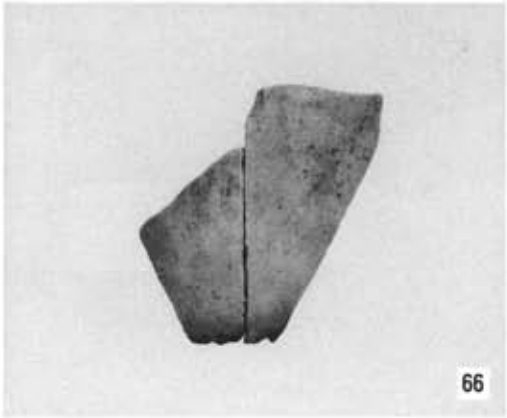
57

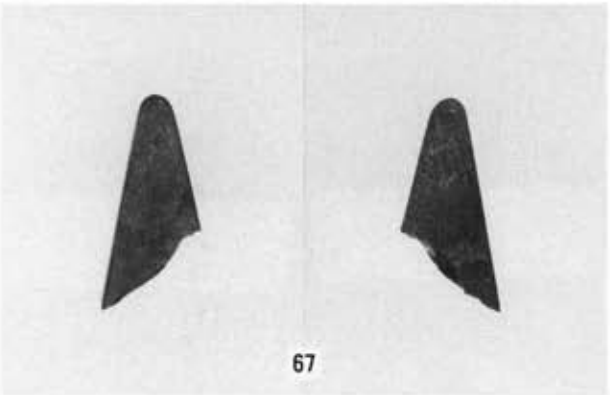
本川原遺跡　ＳＢ26,29住居跡出土遺物（37は１/1.5，52は１/２，56は１/3.5，他は１/４）

（29～37－ＳＢ26，51～57－ＳＢ29出土）

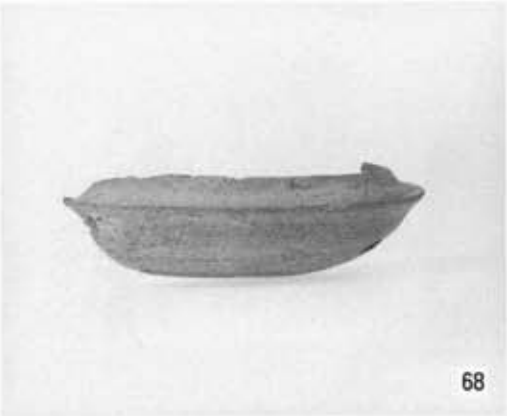


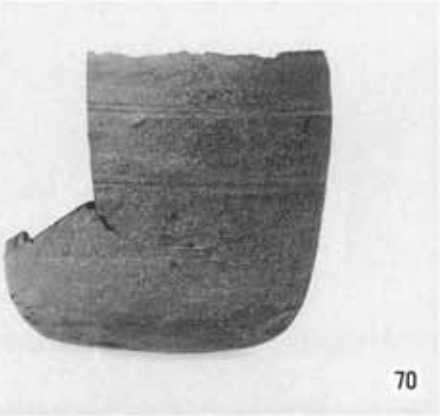






本川原遺跡　ＳＢ29住居跡出土遺物（59，62は１/３，58は１/４，66は１/4.5，他は１/２）


68


70

71

72

73

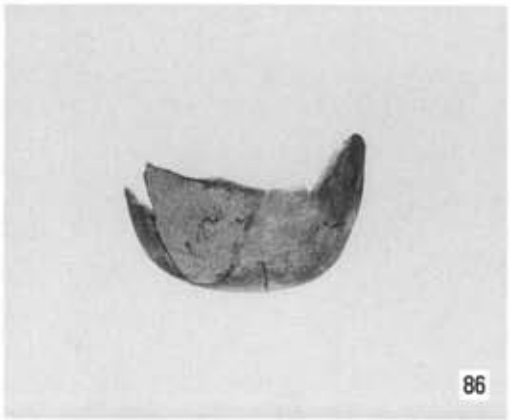
74

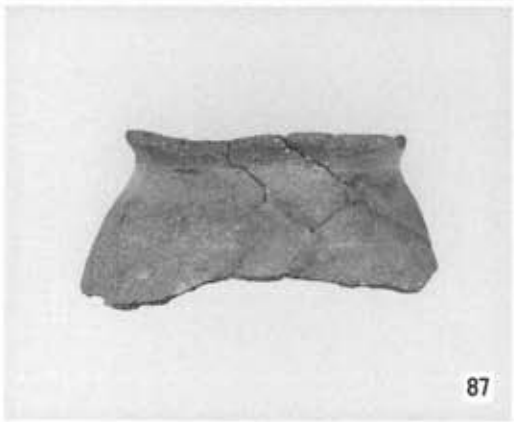
75

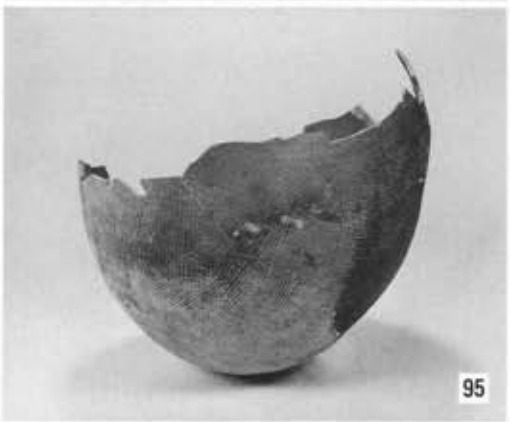
76

本川原遺跡　ＳＢ35住居跡出土遺物（68は１/３，73は１/４，他は１/２）

79


86


87

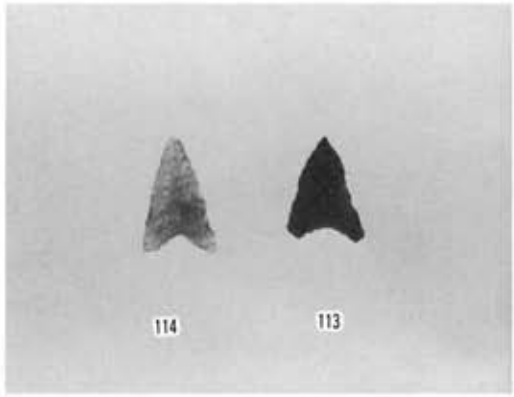

95

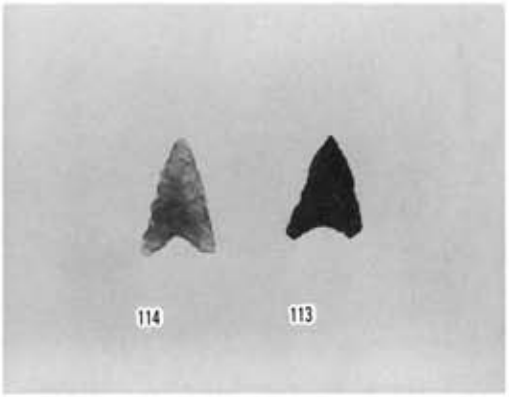
104

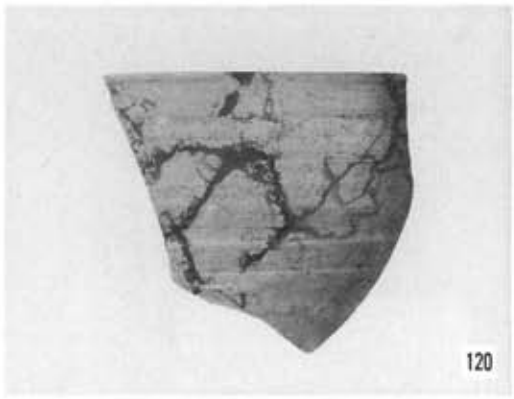
111

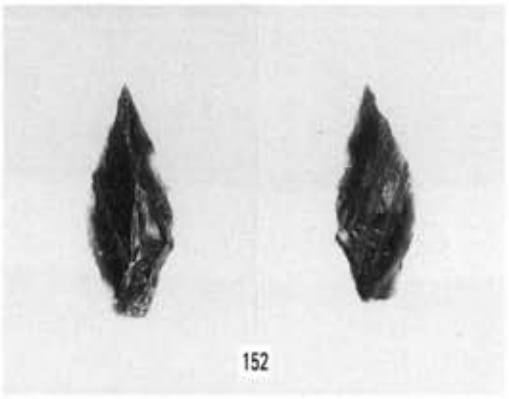
本川原遺跡
S B39,40,42住居跡、埋置土器遺構
S K09, 50土壙出土遺物

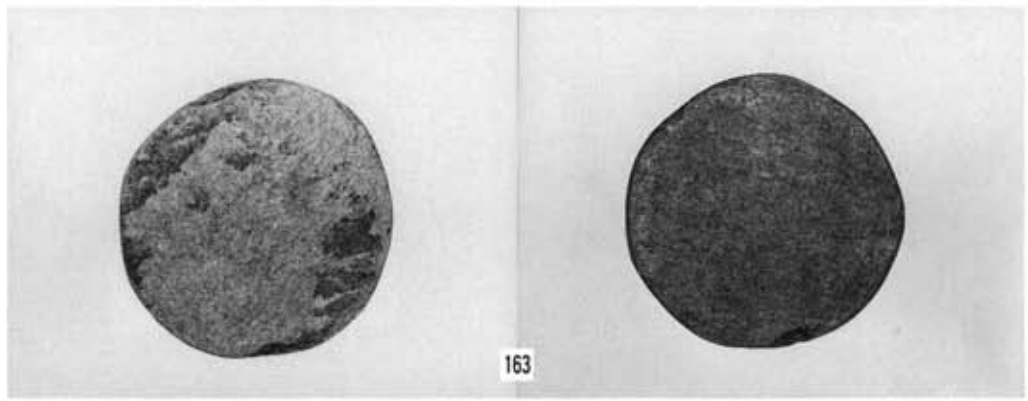
(104は1/1.5,111は1/6,95は1/8,他は1/4)
(79-S B39,86-S B40,87-S B42,
95-埋置土器遺構、104-S K09,
111-S K50出土)











本川原遺跡

ＳＫ50,67土壙 ＳＸ02不明遺構、小穴出土および表面採集遺物（162は1/2，153は１/2.5，120は1/4,他は１/1.5）

（113-ＳＫ50，114-ＳＫ67，120-ＳＸ02，152-Ｐ15，163-Ｃ地区北西部表採、154-Ｐ162出土）

佐賀県文化財調査報告書　第104集

都　谷　遺　跡

九州横断自動車道関係(14)
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成３年３月28日　印刷
平成３年３月30日　発行

編集　佐賀県教育庁文化財課
発行　佐賀市城内１丁目－42

印刷　有限会社　大　同　印　刷
佐賀市天神１丁目１番32号